遊戯王AltererChord/AzygousCircle

桐型枠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王Ａｌｔｅｒｅｒ Ｃｈｏｒｄ／Ａｚｙｇｏｕｓ Ｃｉｒｃｌｅ

【Ｎコード】
Ｎ６４４５Ｒ

【作者名】
桐型枠

【あらすじ】
シスコン厨二。ガチヲタ。無口幽霊少女。腹黒亡霊。など、異質な不穏分子多数確認。どこか原作と違う要素を含んだ遊戯王の世界で、彼らはいかにして生きていくのか？　３分の１シリアス、３分の１ギャグ、３分の１にカオスを含んでお送りします。

1束目：次世

人生というものは唐突なものである――。

誰が言い出したことか知れないが、その言葉はおおよそ正しいものであろうと思われる。

そもそも、生物にとって最も唐突な事象は、「誕生」だ。

生まれてくること自体が何よりも唐突で――予期せぬ出来事だ。

曰く、今在る自身がこの世にいる確率は、おおよそ２５０兆分の１。

奇跡的な確率の上に成り立っているそれは、唐突な出来事だと言えないだろうか。

そしてまた、人間は死ぬときですら唐突なものだ。

どうにも信じがたいことではあるが――俺は、どうも死ぬらしい。

どくどくと、到底信じられないような量の血が流れ出ている。

頭からだろうか？　腹からだろうか？

いずれにせよ、そのうち死ぬだろうということは、何となく分かる。

大丈夫か、と問いかける声。

泣き喚く子供の声。

怯える女の声――子供の母親だろうか。

徐々に薄れゆく視界の中には、赤い塗料（血液）を塗りたくられたトラックの姿がある。

あれは俺の血、と解釈するのが自然だろう。

しかし。
――まさか厨二病をこじらせた結果、子供を助けて死ぬことになるなんて、思いもしなかった。

いや、ね。
別に本当にこじらせたわけじゃない。
確かに、英雄願望、みたいなものはあった。
しかし、それは人並み程度のもので、決してこんな風に、
――自らの命を犠牲にしてまで、ということは考えたことはなかった。

勝手に体が動いてしまった結果、というところか。

間抜けだなあ、と思う。

昔――それこそ、「カッコイイ自分」を気取ってたときは、
「他人なんて関係ないね」なんて態度を取ってた。
他人からの干渉を嫌い、他人への干渉をも自ら遮断していた。
斜に構えることが、当時は格好良いと考えていたんだろうな。

で、高校に入って、結局周りとあまり反りが合わなくて――。
大学に入ってもそれは同じだった。
で、結局、周りの目を気にして。仲を良くしよう、良くしようと必死になって。

……結局、友情や愛情を求めていた、という結果は変わらないと思うけど。
だからって、死ぬか。

他人からの好意を求めて、結果、死ぬ。

注目を集めたかったのだろうか？
それとも、本当に英雄にでもなりたかったのだろうか？
子供を助けて、誰かに格好良かった、と言ってもらいたかったのだろうか？
今となっては、何も分からない。
自分自身――何を考えていたのか、分からない。

何にしてもお笑い種（ぐさ）だ。
子供は後の世の宝だ。それを殺されなくて良かった、と安堵したい。
――けど、俺はそんなにできた聖人君子じゃない。
むしろ、子供は苦手で。うるさいだの、煩（わずら）わしいだの。
我ながら酷いことを考えていた。今でも、あまり好きじゃない。
……だけど、子供は「可能性」だ。
子供には未来がある。中途半端に育ってしまった俺とは違って、まだ未来がある。

進化の可能性。

――そういや、こないだ見たアニメのテーマ、みたいなものだっけ。
昔っから好きだったよな、俺。
初期からずっと見てたっけ。
……今でもずっと、観続けてるけど。

俺が助けて。
それで……繋がった、と考えて、いいのかな。

ああ、もう眠くなってきた。

眠い。

――そろそろ、寝るか。

そうして、俺の意識は、いとも簡単に、何処かへと落ちていった。

次に目が覚めるときは、きっと。

いつか――もっと、人生を楽しく過ごせたら。

いいんだけど。な。

……――――――……

……――――……
……

はい、どうも■■です。
あれ？　自分の名前がうまく思い出せないというか喉につっかえてんだけど。
ま、いいや。

結論から言おう。
俺は名も知らぬ子供をかばって死んだ。
――端的にコトの顛末を話せば、そういうことになるのだろうと思う。
はっはは。どこのタ○ガだろうね。
や、別に俺は大切に思った人間全てを殺して英雄になろうなんて思ってないけど。

はてさて、あれから二年間という年月が経過したことを、ここで述べておこう。
二年。７３０日。１７５２０時間。まあどうでもいい。

で、曰く。

どうも俺、転生というものを行ってしまったようでございます。
いわゆるトリップ、というやつだろうか。

はい。すごく厨二病の発展系です。本当に（ｒｙ

だってねえ。
転生って。
お約束じゃないか。
特にこういうのだと、転生して俺ＴＵＥＥＥＥＥＥが基本でしょう？

やだってそういうの。

俺は基本的に、適度に苦労したいというか。
じゃないと、どうにも生きている気がしないというか。

で、まあ。そんなことを考えていたからかは知らないけど――なぜか俺。

……どうも、遊戯王の世界に来てしまったようなんです。

ええ。まああくまでも、そんな気がする、というか。
実際には、カードが作られるまでにまだ間はあると思うんだけど。
――それにしても、娯楽の発展が凄まじい。
そして何より、あの「海馬コーポレーション」の存在。
……気付かないほうがおかしいだろう、ということで。

とかく俺のように、原作からアニメまでほぼ全てを網羅……してないけど。
所々うろ覚えの部分は無きにしもあらず、というべきか。
ともかくそういう部分がある以上は、気付かないほうがおかしい。
まあ細かな相違点はあるみたいだけど、それなりには同じと考えるべきなんだろう。
で。

自慢ではないが、俺はかなり長いことＯＣＧで遊んできた人間だ。
あの頃は初期の頃のものからずっと持っていた。遊ぶ友達は少なかったけど。
そのせいでルールには詳しい。まあ、連戦連敗の男だったけど。
構築が下手、というよりも、ファンデッキのような構築だったから、だろう。

俺は好きなカードで勝てれば万々歳、という程度の気持ちだったんだけど。

だから、というわけじゃないが、ともかく俺は、こちらの世界において相応に順応できそうではある。
弱いと言っても、それは現実での話だ。こちらでは、それなりに戦えるものだと信じたい。

まあ、それはともかく。

俺は精神をこちらに持ってきただけ。
肉体的にはまだ立って歩く事もおぼつかない程度の赤ん坊だ。
だが、精神的には２２歳の青年だ。
――というより、こちらでの年数も合わせれば２４歳か。まあどっちでもいい。
状況の把握と整理には長けているつもりだ。
ともあれ、これからの俺の方針を決めるべきだ、ということは分かる。
これでも一人暮らしは長かったほうだ。
……決断には、それほど時間はかかるまい。

男の仕事の八割は決断。あとはおまけ……なんて台詞もあるくらいだし。

……――――……
……――……
……
はい。どうも■■です。
あれから八年経ちました。いやあ、時が過ぎるのは早いね！？
ちょっと俺もびっくりしています。

あれからしばらく経って、結果としてデュエルモンスターズは生まれましたよ。
いやあ、しかしそれだけ経っても自分の進退が決められないっていうのは、少しどうなのかなーと。

しかし、あれ。
やはり、この世界は原作とは違うようだ。
というより、いくつかの相違点がある、とすべきなのだろうか。

デュエリストキングダムの時点である程度は精緻なルールが決まっている。
流石に、あの時点で何一つ決まったルールが無い、というのは危険だったのだろうか。

また、この時代において、既にペガサス・Ｊ・クロフォードは、シンクロの概念の基礎を築いている。
より正確には、去年あたりにそれを発表した、と言うべきか。
あの事件――デュエリストキングダムの終焉後。
何が切欠になったのかは分からないが、以来、開発が進められているとかなんとか。

モーメントはこの時代には無いから、ライディングデュエルはしないと思うけど。
Ｄ－ホイールはまだ開発されない……と思う。

加えて言えば、もうこの時代でも、後に出てくるはずのカードが現れていた。
例えば、《伝説の白石（ホワイト・オブ・レジェンド）》。あるいは、《正義の味方　カイバーマン》。
あれを社長が召喚していたときは、本気で腹を抱えて笑ったほどだ。

あ、今はバトルシティ途中です。
テレビで見てて凄く楽しい。
デュエリストキングダム時代のそれも含め、いざという時のために全て録画している。
まあ、これで少なくとも、ＤＭ勢――武藤遊戯などとぶつかる可能性は無くなったわけだ。

原作じゃあ明確な言及は為されてなかったけど、ＤＭからＧＸまでの間はおおよそ数年間。
もしかしたら、ＧＸ勢とカチ当たることになるのだろうか。

それはそれで楽しそうではある。
しかし、本当にいいのだろうか？
俺はまだ、何かしたいことがあるかもしれない。

ただ、この世界におけるカードの重要度は凄まじい。
最悪の場合、それこそ「デュエルで決着をつけよう！」などということになることもある。
裁判ですらそうなるんじゃないかなんて、そんなことがまことしやかに噂されている。
……５Ｄ'ｓの時代のセキュリティを見る限り、大丈夫……かな？

ところでまったく関係ないことなんだけど、お隣の早乙女さんちに五年前に子供が生まれたみたいで。

いやあ、かわいいのなんのって、よく遊んでやってるんだけど。
こうして考えるとやっぱり子供って宝だと思う。いや、今は自分が子供だからなんだけどね？
お兄ちゃんのお嫁さんになる、とか言ったりなんだり。

子供ってこういうこと純粋だから。
いや、嬉しくないことはないけど、将来はきっとウザがられるんだろうなーと思う。
だって、現状ですら娘みたいなものだし。俺の年齢知ってる？　中身だけは３２歳だよ？
いや、まあかの有名な山月記（さんげつき）に、見た目に精神が引っ張られていく、という旨（むね）の記述はあったけど。

ま、そんなことがあろうとなかろうと関係ない。

昔はこれでも結構いい大学まで通ってた。
こっちに来てからも勉強は欠かしてないし、人にものを教えることくらいはできるはず。
……というか、教えちゃってるんだけど。
いや、だって飲み込み早いんだもの。子供だし。
勉強はしてて悪いことはない。
特に、こんな世界だ。大学レベルの勉強でもしていたら、企業からは引く手数多だろう。

ロリコンじゃないぞ俺は。
光源氏とか言うな！

それにしても、そろそろ決めてしまわないとな、進路。

あ、全然関係ないけど、カードは持ってます。
なぜか元の世界のまんまで。

こないだ海馬コーポレーション名義で届いてきました。
わけわからん。

曰く、俺は試作品のカードのモニターらしい。
アタッシュケース一つ分。おおよそ２００～３００ほどのカードが贈られてきた。
どうも、コレを使って会社――海馬コーポレーションに使い勝手を報告すればいいらしい。
元々持ってなかったカードまで勝手に追加されているのには閉口したが。

ただ、やっぱり今後の世界情勢に影響しそうなものは無かった。
例えば――俺は金銭的な面から一枚しか持っていなかったのだが、《Ｅ・ＨＥＲＯ　アナザー・ネオス》。
この時期にはネオスが存在しないことがその要因と思われる。
また、例えば《Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース》。
プラネットシリーズはこちらでも一枚しか存在しないと考えるべきか。
元々金銭的な事情から持ち合わせていないカードもいくつかあるが、それも同様だろうと思う。
辻褄あわせ、ということだろう。まあそれでも、使い勝手が分かるデッキの方がいいんだけど。

え？　当時から回しにくい？

それがいいんじゃないか。
適度に回しにくくらいで丁度良い。

何か三枚だけとんでもないのはあるけど、まあ、これは封印ということで。

……――――――……

……――――……

……

五年。

あれから五年が経過した。

どうも。■■です。もとい、こちらでは御堂和真（ミドウカズマ）と申します。

やったね！　遊の字が入ってないから主人公じゃないよ！

少なくとも主人公ポジションじゃないよ！　これでモブキャラ人生を謳歌できるひゃっほう！

あ、この際なんで、この間受験届けを出してきました。

それもデュエルアカデミアに。

高校からの編入組、ということになるのかな。

結局、決めるのに十年近くを要する結果になったわけだが、それからの行動は迅速だった。

社会人の基本。事は迅速に、だ。

あ、早乙女さんちの娘さんは今もすくすく成長中です。

なんか、アカデミア三年……いや、今は二年か。カイザーにお熱だとか。

はっはっは。やっぱりＧＸ勢と被っちゃったね！

というわけで、もう一度社会人の基本。拙速。

正確には、兵は拙速を尊ぶ。……まあ、どちらでもいいんだけど。

というわけで、本日はいわゆる受験です。

十代はきっと原作どおりに遅れて来るんだろう。

で、クロノス教諭相手に劇的な勝利を収めて入学……と言ったところか。

まあ俺はそんなことは無くていい。ごく当たり前に勝って進んで、それでいい。

では、イテキマース。

＊　＊　＊

さて、結論から言おう。

筆記試験――これは、三沢でなくとも主席は取れる。

少なくとも、これまでの俺の知識のうちででも、だ。

問題数は３０問。

１問目から１５問目まではカードの名前、あるいは属性や種別を答える問題だった。

いずれも絵柄を基礎としてある問題だ。

絶版モノが多かったが、これは恐らく引っ掛け問題を作るためだろうと思われる。

《ハングリーバーガー》や《マタンゴ》なんて、初見で戦士族だと分かるような人間は少ないだろう。

少なくとも、《ハングリーバーガー》のあの外見で戦士族などと答えたくはない。

精々が悪魔族、良くて獣だろう。

それ以降はカードの知識を問われる問題だった。

１６問目は、カードの名前。テキストで用いられているもの１０挙げよ、とのこと。

１７問目は、リクルーターと俗的に呼ばれているものを５枚。

１８問目は、サクリファイスエスケープとなるものを１枚。

１９問目は、妥協召喚が可能なモンスターを３枚。

２０問目は、チェーンカードを３枚。

２１問目は、単体の弱体化となりうるカードを３枚。

２２問目は、融合関連のカードを３枚。

２３問目は、カウンタートラップを５枚。

２４問目は、俗にロックカードと呼ばれているものを３枚。

２５問目は、デッキデスの中核となりうるカードを３枚。

２６問目は、戦闘の巻き戻しが起こりうるカードを５枚。

２７問目は、バーンカードを５枚。

２８問目は、ライフ回復系統のカードを３枚。

２９問目は、シンクロモンスターを３枚。

そして３０問目は、《モウヤンのカレー》についての特徴を述べること。

基本的に３や５という数字が多いのは、やはりキリが良いからだろ

う。
まさか《モウヤンのカレー》についての問題が出るとは思いもしなかったが。
一般的な受験の時間は一時間前後。
それを意識してか、この問題には二時間、という時間制限が設けられている。

問題数はともかく、やはり、挙げるべきカードの枚数が多いことが原因だろう。
ちなみにここからは俺の回等の一例。
知識だけだから、やはり楽だった。

16：シンクロン、ジャンク、電池メン、ニトロハーピィ、ガスタ、カラクリ、ワーム、忍者、代行者。

17：《巨大ネズミ》《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》《コーリング・ノヴァ》《キラー・トマト》《ガスタの巫女ウィンダ》

18：《ディメンション・マジック》

19：《可変機獣　ガンナードラゴン》《光神機（ライトニングギア）一桜火》《地獄からの使い》

20：《ライトニングパニッシャー》《奇跡の蘇生（ミラクル・リボーン）》《一陣の風》

21：《収縮》《弱体化の仮面》《闇の呪縛》

２２：《融合破棄》《フュージョン・ゲート》《チェーン・マテリアル》

２３：《神の宣告》《盗賊の七つ道具》《魔宮の賄賂》《天罰》《畳返し》

２４：《平和の使者》《レベル制限Ｂ地区》《光の護封剣》

２５：《ニードルワーム》《メタモルポット》《カオスポッド》

２６：《亜空間物質転送装置》《スケープ・ゴート》《バスター・モード》《異次元からの帰還》《終焉の焔》

２７：《火の粉》《雷鳴》《ファイヤー・ボール》《昼夜の大火事》《残骸爆破》

２８：《非常食》《ダグラの剣》《体力増強剤スーパーＺ》

２９：《ジャンク・デストロイヤー》《アーカナイト・マジシャン》《大地の騎士ガイアナイト》

３０：ライフポイントを２００回復。

しかし、対象の指定はなされていないため、自分でも相手でも回復は可能。

である。

何枚かは趣味の領域になるが、まあ、この場では置いておく。

ともかく、これでほぼ完璧の成績になるはずだ。

でも黄色は少し好きになれない色だ。服にするにしても明るすぎて落ち着かない。
しかし、中等部からの成り上がりでない以上、青は望めない。

赤にしたいなー。少しくらい原作メンバーと関わりたいし。

だからって手を抜くのは俺の主義に反する。
ということで、答えはこのまま。

チャイムが鳴ってしばらく経つと、実技の受験会場に呼ばれる運びとなった。
で、受験番号は2番。
らしい。曰く、受験番号の基準は筆記試験の結果で若い番号から決まっていくとかなんとか。

さて、流石にメインキャラクターが相手になるということは無いだろうが……どんな人が相手かな。

「お待たせしましたねぇ」

そうして現れたのは、線の細い、
……ともすれば、つつけば倒れるんじゃないかというほどに細い男だった。
慇懃な――しかしながら、どこかこちらのことを小馬鹿にしたよう

な喋り方。
久しぶりにこういう人間と出会ったような気がする。

「私が実技監督員の龍牙（りゅうが）です。
これより実技試験を行いますが……受験番号2番。何か質問は？」

「――僕のデッキは五つほどあるのですが、どれを使用しても構いませんか？」

「構いません。いかようにでも」

どんなデッキだろうと叩き潰す――そんな感情がありありと見て取れる。
どうにも、この男は他人を見下すことで愉悦を感じる人間のようだ。
Sか。まあ、「ド」が付かないだけマシだと思う。

俺が取り出すのは、以前もあちらで頻繁に使用していた【シンクロ召喚】を軸としたデッキ。
まあ……当然、他にも色々と仕込みはしてるけど。
ただのシンクロデッキじゃない、ということだけは事実だ。

「それでは、試験を始めます」

デュエルディスクを展開し、デッキを収める。
……ここからは、少し本気でいかないと。

「「――決闘（デュエル）！」」

「先攻は私が貰う。私のターン、ドロー！」

……いつも思うけど、何この理不尽さ。
５Ｄ'ｓのときはそれなりに（Ｄ－ホイールでの競走とか）先攻後攻を決めるのに理由付けしてあったけどさ、こんな理不尽なものだったのか？

うわあ。せめてやりとりをしてからにしてくれよ。

「私は手札からモンスターを一枚、そしてカードを二枚セットし、ターンを終了する」

堅実な。こっちが動きにくいじゃないか。
相手の手札は残り３枚。……まあ、初手としてはありきたりか。

「俺のターン、ドロー。手札から《ワン・フォー・ワン》を発動。
この効果により、手札からモンスターカードを墓地に送り、
デッキ、または手札から、レベル1のモンスターを特殊召喚する。
《チューニング・サポーター》を守備表示で特殊召喚！」

【《チューニング・サポーター》　攻　１００　／　守　３００】

「おやおやぁ？　そんな弱小モンスターを召喚して、一体何をするつもりですか？」

無視。

「更に手札から、《ジャンク・シンクロン》を召喚！」

【《ジャンク・シンクロン》　攻　１３００　／　守　５００】

「ジャンク・シンクロンの召喚成功時、
墓地からレベル2以下のモンスターの効果を無効化し、
守備表示で特殊召喚できる。蘇れ、《ボルト・ヘッジホッグ》！」

【《ボルト・ヘッジホッグ》　攻　８００　／　守　８００】

ジャンク・シンクロンの召喚と同時、
背中からボルトを生やしたハリネズミ――ボルト・ヘッジホッグが蘇る。
これで準備は大体整った。

「……あんまり低レベルモンスターをバカにすると、痛い目を見ますよ？
　レベル１、《チューニング・サポーター》と、レベル２、《ボルト・ヘッジホッグ》に、
　レベル３の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！
　シンクロ召喚！　駆け抜けろ、《大地の騎士　ガイアナイト》！」

【《大地の騎士ガイアナイト》　攻　２６００　／　守　８００】

次の瞬間、人馬が一体化したかのような騎士が、俺の前に姿を現す。
大地の騎士ガイアナイト――以前から、俺にとっては主力となっていたモンスターだ。
様子見としても切り込みとしてもうってつけだし、何より……言ってはあれだが、安価で手に入る。

「い、1ターン目からシンクロ召喚……！？」

何を驚いているのだか。
1ターン目からかの氷結界の龍を五連打された俺に比べたら随分良心的だ。

……しかし、ガイアナイトの召喚に対して何も発動してこなかったということは、
あれは召喚反応系じゃない、か。
となれば、ミラーフォースのような攻撃反応系と見るべき、か？

いずれにせよ、やることは変わらない。

「《チューニング・サポーター》の効果により、シンクロ素材とされたことで1ドロー。
――バトル！　ガイアナイトで裏守備モンスターを攻撃！」

ガイアナイトの槍が、裏向きになっているカードの背を抉る。
――と同時、そのモンスターが姿を現した。

「《スネークポット》の効果を発動――自分のフィールド上に『毒蛇トークン』を特殊召喚」

【《毒蛇トークン》　攻　１２００　／　守　１２００

「……これが戦闘で破壊された場合、相手に５００ポイントのダメージを与えますよ」

――スネークポット。
と、いうことは、爬虫類デッキだろうか。
なるほど、見た目陰険なこの人には合ってるかもしれない。

「では、俺はカードを二枚セットし、ターンエンド」

「私のターン、ドロー！」

何か良いカードを引いたのだろうか。龍牙の表情が一変。
苦々しいものから、楽しげなものへと変わる。

「くくく、く……私は手札から、《超進化薬》を発動！
場の毒蛇トークンを生贄に、手札の恐竜族モンスターを特殊召喚する！
現れろ、《究極恐獣（アルティメットティラノ）》！！」

【《究極恐獣（アルティメットティラノ）》　攻　３０００　／　守　２２００】

究極恐獣――全ての相手に一度ずつ攻撃しなければならないという、メリットとデメリットを同時に兼ね備え、３０００の攻撃力を持つモンスター。
対処さえ間違えなければ、相応の強力さを有すモンスターだ。
先攻２ターン目で出すか。
……狙ってたな。多分。

「そして、《暗黒（ブラック）ステゴ》を通常召喚」

【《暗黒（ブラック）ステゴ》　攻　１２００　／　守　２０００】

「バトルだ！　究極恐獣で、ガイアナイトに攻撃！　アルティメットバイト！」

技名!?
恥ずかしくねえの!?

「《くず鉄のかかし》を発動。攻撃を無効にする!」

まあ、あまり意味は無かったんだが。

「そしてくず鉄のかかしをセットし直す……他に何か?」

「……暗黒ステゴではガイアナイトには勝てない。ターンを終了する」

流石くず鉄先生。今日も絶好調だ。

昔は「くず鉄とかwバロスwwww次元幽閉でwwむしろ聖バリwww俺TUEEEwwwww」とか言ってる奴に使ってドヤ顔するためだけに入れてたものだが。
基本的にこういう場面で使った時の表情はまさにこれ↓（　。Д。）だったな。

ゴヨウとスターダストなんか並べてガイアナイト先生に歯向かおうとするからそうなる。
当然、直後に二体とも破壊してやったわけだが。

「俺のターン、ドロー」

これで手札は三枚。
さて、どう動くか。
相手の場には攻撃力３０００の究極恐獣。
暗黒ステゴは、ある程度はどうとでもなる。あの守備力と効果を除けば――だが。
除去系のカードはあまり投入していない関係上、手札にもまだ来ていない。
となれば、まずはあの究極恐獣を破壊することが急務。

「俺は手札から、魔法（マジック）カード、《戦士の生還》を発動。
墓地に存在するジャンク・シンクロンを手札に戻す」

カタストルという手もあるが、今は手元に無い。

――というよりも、効果が凶悪すぎて、封印されてしまっている、とすべきか。

こちらへの持込が不可能になってしまっているということだ。
いずれ開発されれば、もしかすると俺の手元に届く事もありうるのだが……。

現状、俺の場には伏せカードが二枚と、モンスターはガイナナイトのみ。
打破――できないこともないが、この状況で見せるのは気が引ける。
というか、究極恐獣の召喚が早すぎる。
出てきても精々《暗黒(ダーク)ドリケラトプス》くらいと思っていたんだが……。

今は考えても仕方が無い。
ともかく、やるだけのことはやろう。究極恐獣はすぐに破壊できるし。

「俺は手札からジャンク・シンクロンを召喚」

【《ジャンク・シンクロン》　攻　１３００　／　守　５００】

「更に、効果により、墓地のチューニング・サポーターを特殊召喚する！」

【《チューニング・サポーター》　攻　１００　／　守　３００】

「レベル1の《チューニング・サポーター》にレベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！
シンクロ召喚、現れろ、《アームズ・エイド》！」

【《アームズ・エイド》　攻　１８００　／　守　１２００】

「またシンクロ……いや、アームズエイドだと？　まさか！？」

教師というくらいなのだから、このくらいは知っていて当然か。

「チューニング・サポーターの効果で一枚ドロー。
そして、俺はガイアナイトに、アームズ・エイドを装備させる。
この効果によって装備されたモンスターの攻撃力は、１０００ポイント上昇！
――バトル！　ガイアナイトで究極恐獣を攻撃！」

「む、うおおぉぉ！？」

頑強な篭手を装備した騎士が怪物へと突っ込み――その肉体を破壊する。
なぜか巻き起こる爆発は、いつもどおりのエフェクトだろう。

「更に、アームズエイドを装備したモンスターが戦闘でモンスターを破壊して墓地に送った際、
その攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「何っ……どわぁぁぁあ！？」

爆煙の中からガイアナイトが姿を現し――龍牙の体を穿つ。
合計３６００のダメージ。
残りライフは４００……よほどのことが無い限りは、逆転される事もないだろう。

「俺はこのままターンエンドします」

「わ、私のターン、ドロー！」

ライフポイントが減ったことに対する焦りが見て取れる。
――が、逆転の１手でもあるのか、龍牙の表情は崩れない。

「私は手札から、《サイクロン》を発動！　装備カード扱いのアー

ムズ・エイドを破壊する！」

一陣の風が吹きぬけ、ガイアナイトに装備されていた篭手が破壊される。

……まずいな、今引いた、ってところか。

これでガイアナイトの攻撃力は、３６００から２６００に下がる。

「更に、リバースカードオープン！　《連鎖旋風》！

フィールド上のカードが破壊された時、魔法・罠カードを2枚選択して破壊！

私はお前のその二枚のカードを破壊する！」

「っ……」

くず鉄先せェェェい！？

畜生この野郎、現状リビングデッドは正直そんなに使い道無いからともかくくず鉄先生をよくも！？

「そして手札から、《俊足のギラザウルス》を特殊召喚扱いとして召喚！」

【　《俊足のギラザウルス》　攻　１４００　／　守　４００　】

「このとき、相手は自身の墓地からモンスター一体を特殊召喚できる」

「……アームズ・エイドを守備表示で特殊召喚します」

【《アームズ・エイド》　攻　１８００　／　守　１２００】

――何を狙っている？

恐竜族において、最強と目されるモンスターは、恐らく《超伝導恐竜（スーパーコンダクターテイラノ）獣》だ。

しかし、今の今までそれを出さない、ということがありうるのだろうか？

いや、無い。だとしたら、狙いはもっと別の部分――。

「リバースカード、オープン！　《狩猟本能》！

相手フィールドにモンスターが特殊召喚されたとき、手札から恐竜族モンスターを特殊召喚できる！

私が特殊召喚するのは……運が良いですねぇ。《ジュラック・プティラ》を攻撃表示で特殊召喚！」

【《ジュラック・プティラ》　攻　８００　／　守　１５００】

そして現れるのは、火炎を纏う翼竜――。
……まさか、ジュラックとの混合だったのか!?
訳がわからん！　普通はもっとこう……単一にしない!?
というか、何でプティラなんだ!?　ハイパーハンマーヘッドの方がよっぽどいいだろ！

「そして、リバースカードオープン！
《リビングデッドの呼び声》！　この効果により、究極恐獣（アルティメットティラノ）を蘇生する！」

【《究極恐獣（アルティメットティラノ）》　攻　３０００　／　守　２２００】

折角破壊した究極恐獣が、フィールドに蘇る。
まずい。くず鉄のかかしは今は手札にある。
このまま総攻撃を喰らうと――ライフポイントが厳しい。
いや、むしろ絶望的だ。

――危険。

それを感じるより先に、龍牙が攻撃の宣言を行う。

「究極恐獣（アルティメットティラノ）で二体のモンスターに攻撃！」

ガイアナイトと、加えて蘇生したアームズ・エイドが噛み砕かれ、破壊される。

そして――。

「ジュラック・プティラ、俊足のギラザウルス、暗黒ステゴ、この三体でダイレクトアタック！」

三体の恐竜の突進が俺を襲う。

いくら立体映像（ソリッドビジョン）と知っていようと、本能的な恐怖は抑えがたい。

歯を食いしばってそれに耐えていると、ライフポイントがどんどん減少していくことに気付く。

ガイアナイトの端数分＋ダイレクトアタック分。

４００＋１４００＋１２００＋８００＝３８００。

残りＬＰは２００――　一撃どころか、火の粉を発動しただけで終わってしまうほどのライフポイントだ。

危険域。それは間違いない。

だが、俺にはまだ――まだ、もう一つ手はある。

「私はターンエンドだ。さぁて、君の番だぞ？」

耳障りな声――まあ、どうでもいい。

「俺のターン、ドロー！」

このターンで勝てる。

「む？」

俺の表情が気に食わなかったのか、龍牙の表情が歪む。
どっちにしたって結末は変わらない。今のうちに、精々イラついておくといい。

「俺は手札から、《融合呪印生物－地》を召喚！」

【《融合呪印生物－地》　攻　１０００　／　守　１６００】

岩。
……としか形容のしようがないモンスターだった。
禍々しいオーラを放つ、岩の化身。
――その攻撃力は、１０００である。

「何かと思えば……融合呪印生物ですかねぇ？　そんなモンスターでこの布陣に挑みますか？」

「当然、違います。俺は更に――手札から、《ミラクルシンクロフュージョン》、発動！」

「な、に……？」

この反応を見るに、ミラクルシンクロフュージョンの効果は知らないのだろうと思う。

……あっちでも使う人は少なかったしな。

でも、効果はかなり強力だ。

「俺はミラクルシンクロフュージョンの効果により、フィールドの融合呪印生物と墓地のガイアナイトを除外し、融合召喚する！

――現れろ、《地天の騎士ガイアドレイク》！！」

【《地天の騎士ガイアドレイク》　攻　３５００　／　守　２８００】

ガイアナイトと融合呪印生物の姿が、次元の彼方へと消えていく。

次の瞬間、姿を現したのは――より鋭利で、より頑強な鎧を纏った

戦士。
――ガイアドレイク。

「こ、攻撃力、３５００――！？」
「――ガイアドレイクで究極恐獣に攻撃！　ドラグーンランサー！」

ガイアドレイクの槍が、唸りを上げて高速で回転していく。
そうして叩き込まれる、強烈な一撃。
――攻撃力で劣る究極恐獣が、それを防ぐ術はない。

そうして、究極恐獣のビジョンが地に伏したその瞬間、
ビィ――ッ！！　という、ライフポイントの尽きる音が周囲に響いた。

「俺の勝ち、ですね」
「……し、試験デュエル終了。受験番号２番、君の勝利、だ……」

拍手が周囲から沸き起こる。

劇的な逆転勝利――とでも思われてるんだろうか。
だけど、これ以上の逆転勝利をやらかす男が、この先現れるわけだからな。
はっきり言って、俺はただの前座。それ以上の価値は無い。

適当に周囲に手を振りながら、観覧席に戻って行った。

こうして、俺の遊戯王世界においての本格的な生活が幕をあけた。

あ、ちなみに筆記試験は三沢と同率一位だったらしい。
大会の成績かな、やっぱり。
でも実技成績は三沢に劣るらしいですよ？
特にダメージの面で。

まあ、俺ずっとビートしてただけだし、そんなもんでしょ。

……って、俺もついつい技名叫んじゃったよ！？
うわあああああ恥ずかしいぃぃ！？　厨二病抜けきれてねぇ！？

1束目：次世（後書き）

どうも、枠です。
ちょっとライダーの方でスランプに陥ったので、
つい☆つい　遊戯王に走ってしまいました。
しかも転生モノ。やっぱり俺、厨二病さ！！
反省しているが後悔はしていない。そもそもするつもりもないのだ
フゥーハハハー（

とりあえず、遊戯王ＧＸです。
本当は５Ｄ’ｓの方を書こうかとも考えたんですが、
ちょっと難しいかなーと思いまして。

個人的に一人称が好きです……得意かどうかはおいといて。
ライダーがスランプに陥るたびにこっちに走るので、
最悪こっちの方が更新ペース速まりそうな。

まあいいですよね！↑

主人公ですが、五つのデッキを使用します。
いずれもほぼ現代風。内容に関しては、その時々にあとがきで公開していきます。

今回使用したデッキ風のデッキ、
私もＴＦ５で何度か回してみたんですけど、意外と回りますねこれ。
コンセプトは「シンクロであり融合」。
エースカードはガイアドレイクですね。他にも二枚ほどありますが。
除去の手段はあまりありません。
基本的にシンクロモンスターの強力さで押し切っていく仕様になっ

ています。
で、押されかけたらミラクルシンクロフュージョン。
逆転の一手とするには（物語的に）丁度良いカードです。
私も好きなカードですが、友人に使われて負けました。
ちなみに、御堂はもともとの世界では苦学生でした。
なので、ＯＣＧは下手の横好き……
というか、カードソースが他人と比べて圧倒的に少なかったんですね。
例えば、トリシューラは高額すぎて持っていません。
が、ブリューナクは友人に譲ってもらいました。
ゴールドシリーズも毎度購入していますが、ノーマルレアは当たりません。
欲しいものは他人に譲ってもらう方で、ダブったものを安価で売ってもらっています。
また、買い時を過たず、安価なときに購入しているので、あくまでも「それなりに」充実しています。
逆に、必須と呼ばれるカードを購入できなくて泣きを見るとか、そんな感覚ですね。

元の世界での成績はそれなりですが、結構偏差値の高い大学に通っていたようです。
で、頭の回転は速いですね。
しかし、残念ながら厨二病が治りきってません。
そういう青年であり少年であり、また、精神的にオッサンという主人公でした。

あ、ちなみにＡＣの意味は、決してＡｒｍｏｒｄＣｏｒｅでもＡｃｅＣｏｍｂａｔでもなく、ＡＣａｄｅｍｉａのことですのであしからず。
ちなみにタッグフォース関係のキャラもいずれ出演します。

……大体アニメに添ってますけどね。
御堂の見た目に関しても、もうタッグフォースの主人公みたいな雰囲気ってことで。

2束目：入寮（前書き）

タイトルの法則が分かればあなたは多分平成ライダーの視聴者。
でなかったらごめんなさい。

2束目：入寮

秋。

近所の早乙女さんちの娘さんとのしばしの別れをした後、俺たちは絶海の孤島――デュエルアカデミアにやってくる運びとなった。

今まで一度も大会などの行事に参加してなかったせいか、とりあえずの措置ということで、俺はオシリスレッド所属ということになった。

公式戦の記録が無いということで、あの戦績がまぐれのものだと思われたかもしれない。

まあどちらでもいいのだけど。

これまでに一度でもジュニアチャンプにでもなっていれば、もしかするとラーイエローだったのかもしれない。まあ、本当に今更というやつではあるんだけど。

その辺、漫画版準拠なのかもな。

あ、どうも。遅くなりましたが御堂です。

セロリは苦手です。
ゲロも踏んでません。

「や、一番二番」

挨拶が終わって外に出ると、そこには、十代と三沢と翔がいた。
原作最初の挨拶、ってところか。まあ、こんなところでも絡まないよりマシか。
最初の時点で対面は済ませているし。

「ああ、三番……御堂和真、だったっけ」

「よう三番。逆転勝利、見事だったぜ」

「そっちもな、一番二番。……遊城十代、三沢大地」

「あ、俺たちのこと知ってるのか？」

原作見てるし。

とは言わんが。

「色々と有名だしさ。……それぞれ、名前で呼んでもいいよな？　三沢に関しては学力試験主席、十代はアレ、クロノス教諭相手に逆転勝利だ。有名にならない方がおかしいと思わないか？」

「そういう意味では君も有名だな。あの試験成績でオシリスレッドとは。確か、筆記に関しては俺と同率一位、だったな？」

「ん？　レッド？　イエロー？」

と、まあここから先は原作通りの説明。

……ま、いつものことか。計二十年以上経ってることもあって、記憶は薄れかけてるけど。そういう理由もあって、復習にはうってつけの内容だった。

「……とまあ、そういうことだ。君たちレッドは、あっちだ」

と、三沢は海の方面を指差す。

「御堂、君に関しては少しばかり同情するがな」

「気にしないでくれ。俺はあんまり気にしてない。
社会と同じ、成り上がればいいだけだ」

「そういう言葉が聞きたかった。じゃあな、十代、翔、御堂」

「おう！　三沢もまたな！」

告げあい、俺たちはレッド寮に向かって歩いていった。

……それから、数分経っただろうか。

やはり、原作通りボロボロの寮。
いや、これはこれで風情があっていいかもな。

こういう古式建築好きだし。

「こんな所なのかぁ……やだなあ、僕」

「えぇ？　いいじゃんか。
少なくとも俺は好きだぜ？　だってほら、海が見えるし」

理由それだけかよ。

「住めば都、と言う。いいじゃないか。
オンボロでもなんでも、まずは住んでみることだ」

「そんなものかなぁ……」

そういうものだ。
不安そうな翔に呼びかけて、俺は俺であてがわれた自室に向かう。

「知り合いが隣同士っていうのは、結構嬉しいもんだし。
俺は少なくとも、楽しい生活になると思うよ」

「おう、そうだな。後でデュエルでもしようぜ、和真！」

「ああ、受けて立つよ」

互いに笑いあい、俺たちは自分の部屋に入った。

……だがしかし、俺はこんなところでも衝撃を受けたのであった。

部屋の汚さが尋常じゃない。凄まじいレベルだ。

部屋の四隅には、ほぼ例外なく蜘蛛の巣が張られている。
床はほぼ埃塗れだし、三段ベッドにも布団は敷かれていない。
箪笥の中身も、外見からすればろくなものは無さそうだし。

――いいのか、これは。

寮としての体裁を保てているのか！？

「……。
ああ。やっぱり、そうだな」

大学生の頃、一人暮らしの時代から培われてきたアホな根性が発動してしまったようだ。

――こんなに汚い部屋を見れば、思う。

「掃除、だな」

1時間もあれば充分だろう。

……隣の部屋から『デス・コアラ!?』なんて悲鳴が聞こえるが、まあ気のせいだろ。

＊　＊　＊

そうして3時間。気付けば、
俺は本来ありえたであろう部屋の状況より、
更に良好な状態に戻して……綺麗にしてしまっていた。

はっはっは。綺麗好きってことは無いんだが、
やっぱり俺、そういうアホ根性が身に沁みてるのかな。

死ぬほど綺麗になってるぜ。窓なんか素晴らしいぞ。顔が映るほどだ。

デッキでもかざしてみればベルトが出現するかもな。
そんでもって「変身ッ！！」とか言ってみたりして。

ねーわ。

あ、俺どっちかって言うと龍より騎士の変身ポーズが好きです。

原作通りの展開からすると、このまま行けば……そろそろ、十代が騒ぎ出す頃じゃないかな。

「おーい、和真ー！」

やっぱり来た。

「どうした、十代？」

「聞いた話なんだけど、校舎の中にデュエル場があるらしいんだ。行ってみないか？」

あれ？　電波な発言じゃない？

結構まともだ。

あ、そうか。それなりに辻褄も合うことになるんだ。

普通に考えたら、現実にあんな簡単にデュエル場に辿り着くなんてことはありえない。

漫画版とアニメ版の融合十代ってところかな。

足して二分の一。そんなところだろう。

「さっきパンフレット見てたら気付いたんスけどね。御堂君も行く？」

「そうだな。……何が起きるかちょっと心配だし、ついていくよ」

「はは、何だよそれ。
とにかく行こうぜ。もしかすると、デュエルが見れるかもしれないし」

ともあれ、十代とデュエルの約束をしてたことは確かだ。

一応、ということもあり、持って来たデッキを三つほどホルダーに差し込んだ。
ああ、でも試験のときに使ったデッキは基本封印だ。
あれはこっちじゃ一軍並みの力がある。
そうじゃなくても、こっち「では」それなりに力があるデッキばかりだが。

「そういえば、翔も和真も、どんなデッキ使うんだ？」

「俺は、シンクロと融合、かな。
まったく違うタイプのデッキをいくつか使うけど」

「僕は……シンクロは使いづらいし、融合が主っすね。
そういうアニキは、ＨＥＲＯデッキみたいだけど」

「おう！　カッコイイし、使いやすいし……俺にはＨＥＲＯ以外はありえないな！」

どうやら、アニメ版がベースの十代らしい。
ＨＥＲＯに見せる執着……いや、思い入れが強いのは、どっちかと言えば漫画版だ。アニメの十代は、特に理由なくＨＥＲＯを用いている。それでも、相当に愛着があるほうだろうが。
あ、でもハネクリボーには両方とも執着あったな。

「てことは、俺が二人とデュエルしたりしたら、融合合戦になる、ってことか？」

「かもな。でも、簡単には負けてやらないぞ？」

「アニキだって簡単には負けないよ！　ね、アニキ？」

「ああ！　なんてったって俺は、デュエリストキングになる男だからな！」

あ、そういう夢見がちなところ変わってないんですね。
でもまあ頑張れ十代。オッサンは応援してるぞ。

そうこうしているうちに、校舎まで辿り着いた。

既に翔がデュエル場の場所はリサーチしてくれていた。アニメの頼りなさとは違って、こういうところで翔は有能なんだな。いや、やっぱり漫画とプラスして2で割ってるってことか。

ともかく、ありとあらゆる人物はアニメと同一人物とは思わない方がいい。
何かしらの相違点があるものだと見ておこう。

「……おい、お前ら！」

と、早速青い制服を着用した少年たちが、目ざとく俺たちを発見してきた。

「オシリスレッドがこんなところに何をしに来てんだ？」

「何、って。ちょっとデュエル場を見に来ただけだぜ。そっちこそ何なんだ？」

「あぁ？　見て分かんねーのかよ。そ・こ」

と、ブルーの名も無き男子が指差すのは、入り口付近の彫刻――恐らくは、《オベリスクの巨神兵》……の、顔面。

素晴らしく悪趣味だ。

「ここはオベリスクブルー専用だ。てめーらはお呼びじゃねえんだよ！」

えらく態度がデカいな。

「って、ああ！？　お前、クロノス教諭を倒した……遊城十代！
ま、万丈目さん！」

叫んだ少年が、上方を仰ぎ見る。
そこにいたのは、もう一人、青い制服を着用した男子生徒。
状況から鑑みるに、あれが万丈目だと見るべきだろう。
万丈目は気だるそうに立ち上がり、俺たちを見下ろしながら告げた。

「貴様が、遊城十代か。
……実技最高監督のクロノス教諭を倒したのは見ていた」

……ま、漫画万丈目！？
いや、違う！　どこかアニメの雰囲気を残しながら、
それでいて強者の風格を漂わせている。

――これは、間違いない。「漫画がベースの」アニメ万丈目だ！！

「いずれは俺とデュエルしてもらう。
だが、俺は負ける気は無い。――負ける事は、許されないからだ」

「ああ、いいぜ。……だけど、勝つのは俺だ！　俺だって、絶対に負けねえ！」

「それと、そっちの逆転男」

と、万丈目はこちらを指差す。
その指先に差されているのは――俺？

「御堂、だったか。お前とも、いずれ戦うことになるだろう」

「……それは、どうかな」

意味ありげに軽く笑って、俺は話を止めた。

だって、漫画の万丈目強いんですもの。できれば戦いたくないのが本音だ。
戦わずに済めばそれが一番だ。

「遊城十代、明日の授業の際、俺と戦え。アンティなど必要ない。
――これは、俺自身がこの学校に留まるために定めた誓約だ」

本当に漫画版だなぁ。
この誇り高さは、間違いなく漫画版の万丈目だ。
少なくとも、クラスの差、
――レッドやイエロー、ブルーといった、階級について何一つ頓着が無い。
いや、あると言えばあるのか。
自分が最強（中等部主席）であるという誇り――それがあるからこそ、戦う。

そして、同時に覇権争いが嫌い、ってことか。
強い者が強くあることが当然だ――そういう精神を持っているからこそ、
他の、レッドやイエローを見下すブルー生徒とと軋轢を生みかねない。

……先手は打っておくか。

「乗ったぜ。そのデュエル、受けてやる！」

「明日だ。――それまで、デッキ調整でもしておくことだ」

それだけを告げて、万丈目はデュエル場から出て行った。

待ってくださいよ！　と言いながら慌ててついていく青服たちが、少し滑稽だったが。

「で、十代。どうするんだ？　対策は考えていないのか？」

「いや、必要ない。俺はこのまま万丈目とデュエルする気だぜ」

「えぇ？　なんでさ。少しくらい、構築を変えたほうがうまくいくよ、多分」

「でも、俺はこのままの方がいいんだ。……ていうか、変えちゃいけない気がする。
で、勝つ。それが俺にできること全てをぶつけるってことだと思う」

……まあ、そこは各々の信念、ということか。
相手に対し、できうる限りの対策を施した上で勝利する者もいるだろう。
そうではなく、十代のように今ある「全力」を出し切ることで勝利する者もいるだろう。
俺はどちらとも言えないか。

「あら、あなたたち」

……と、唐突に聞こえる女の声。
振り向くと、そこには一人の女生徒――恐らくは、天上院明日香――が、立っていた。

「ここはオベリスクブルー専用のデュエル場よ。
難癖を付けられないうちに帰った方がいいわ。
そろそろ、新入生歓迎会もあるみたいだし」

「そうッスね。アニキ、御堂君、そろそろ帰りましょう」

「ああ。ありがとな、心配してくれて！」

と、十代が手を振ると、明日香も同様に手を振り返した。

ともかく、今は帰宅するだけ、か。

＊　＊　＊

新入生歓迎会の食事は実に粗末なものだった。
素晴らしい。節約しすぎだ。
一食あたり２００円もかからないんじゃないだろうか。
経済面で手が掛けられない、ということだろうか。最高だな。勿論皮肉の意味で。

噂によれば、どうもイエローやブルーの食卓は非常に豪勢なものだったらしい。
今ではそれを知ることはできないが。

そうしてしばらく経って、今。
俺はイエロー寮の前にやってきていた。
理由はごく単純――ＰＤＡ、と呼ばれる携帯端末で三沢を呼び出したためだ。

「どうした、御堂。こんな時間に呼び出すとは？」

「いや、一つ、頼みごとをだな」

「頼みごと？　君が、俺にか？」

「ああ。会ってまだ日も浅いうちから、
こういうことを頼むのも気が引けるんだが――明日のことだ」

俺は今日の出来事の顛末を話して聞かせる。
明日、十代が万丈目とデュエルすることになったこと、くらいしかないのだが、そこはそれ。

「で――ここからが本題だ。万丈目は十代とデュエルをするだろう。しかし、可能性として――十代に敗北しかけるとする。いや、敗北はしなくていい。つまりは、敗北する――その可能性が表出しかけるとしたら」

「成程。　ブルーのプライドから、そのデュエルを邪魔しに入る可能性がある、ということか」

そういうことだ。で、俺と三沢の目的は――。

「相当に腕の立つ人間が近くにいるんだ。できれば力を借りたい。戦いの邪魔なんてされて嬉しい奴はいないだろう。万丈目だってそうだ。……それに、あるいは十代との対戦が、万丈目にとって成長する契機になるかもしれない」

「ふむ。……確かに、俺もデュエリストの端くれだ。……よし、俺も力を貸そう。一般的なブルー生徒には負けないつもりだ」

「ああ、頼む。ちなみに当日は四人以上来る可能性があるが」

「え？」

知らなかったのだろうか。万丈目の取り巻きは妙に人数が多いんだが……。

「い、いや、それでも俺は引き受けよう。
試験主席と次席のタッグだ。そうそう負ける要素なんて無いはずだ！」

それでもどうにか感情を奮い立たせ、三沢はグッ、と軽く握りこぶしを作った。
……じゃあ、俺も相応に強力なデッキで挑むとするかな。

＊　＊　＊

――翌日。

特にこれと言った障害も無いままに行われることとなった万丈目と十代のデュエル。
その実行のため、俺たちは島内の森林までやってきていた。

俺と翔と三沢は、丁度二人のデュエル――だけでなく、周囲の状況をも観覧できる位置に立っている。高台に当たる位置だ。周囲は基本的に二人のデュエルに集中していることだろうし、こちらに意識を向けることも無いだろう。

ソリッドビジョンには、それなりの大きさがある。外見だけで完璧にモンスターの特徴を把握している三沢がいるから、状況の把握は容易いだろう。

「「デュエル！！」」

互いに宣言しあい、デュエルディスクを展開。
４０００のライフポイントが設定され、二人のデュエルが始まった。

「先攻は俺が貰う。俺のターン、ドロー！」

万丈目の先攻でデュエルは始まる。

あ、全然関係ないけど、あの先攻後攻って、
デュエルディスクが決めてくれてるらしいですね。

ライフポイントの全自動計算機能とかソリッドビジョンシステムとか、
全自動チートドローシステム……もとい全自動シャッフルシステムとか、
「ランダムにデッキから選択する」機構とか。

ソリッドビジョンシステムに関しても、あまりに緻密すぎる。
何かと無駄に機能的で凄まじい機械だ。
海馬社長はデュエルディスクの特許だけで一生食っていけるんじゃないか。
いや、まあだからこそ、あんなに海馬コーポレーションが発展してるんだけど。

それどころか、まだ発展させて世界一の企業にしようとしているんだから、凄まじいの一言だ。

「俺は手札から、《ドル・ドラ》を守備表示で召喚」

【《ドル・ドラ》　攻　１５００　／　守　１２００】

「カードを一枚セットし、ターンエンドだ」

「まずは様子見というところか。……やはり堅実だな、万丈目は」

堅実……と言えばそうなのだろう。
万丈目の狙いはむしろ――生贄の対象の確保。

エンドフェイズにドル・ドラは蘇生する。上級モンスターに優秀なカードの多いドラゴン族使いならば、一枚はデッキに差し込んでいて損は無いカードだ。

「俺のターン、ドロー！」

十代のターン。
何か良いカードでも引いたのか、口元が持ち上がった。

「俺は手札から、《E・HERO（エレメンタルヒーロー） スパークマン》を召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） スパークマン》 攻 1600 ／ 守 1400】

「このまま、スパークマンでドル・ドラに攻撃！　スパークフラッシュ！」

涼しげな表情で、万丈目はドル・ドラの破壊を受け入れる。
ドル・ドラの効果は戦闘、効果を含む「破壊」でしか発動しない。
相手の場にスパークマンしか存在しない以上、この場で罠カードを使用するのも得策とは言えない、か。

「俺はカードを二枚セットし、ターンエンドだ」

「このエンドフェイズ、ドル・ドラは、
その能力を下げて復活する」

【《ドル・ドラ》　攻　１５００　／　守　１２００】
↓【《ドル・ドラ》　攻　１０００　／　守　１０００】

「そして俺のターンだ。ドロー！」

恐らく、ほぼ間違いなく、何かしらの上級モンスターを召喚してくるだろうが……さて。

「俺はドル・ドラを生贄に、《タイガー・ドラゴン》を召喚する！」

【《タイガードラゴン》　攻　２４００　／　守　１８００】

「このモンスターがドラゴン族モンスターを使用して生贄召喚に成功したとき、
相手フィールドにセットされた魔法・罠カードを2枚まで破壊できる！」

「な……いや、まだだ！　その瞬間、リバースカードオープン！
《ヒーローバリア》！　俺の場にＥ・ＨＥＲＯがいる場合、
相手の攻撃を一度だけ無効にできる！」

フリーチェーンの罠……タイガー・ドラゴンの攻撃を防いだか。
いや、まあ普通に考えたら、《和睦の使者》の方が強いんだろうけど。

しかし、もう一枚の罠は《聖なるバリア－ミラーフォース－》。優秀な制限カードが破壊されたか。無論、万丈目はそれを狙っていたはずだが。

「……更にカードを1枚セットし、ターンエンド。十代、貴様のターンだ」

「よし、俺のターン、ドロー！」

スパークマンを残しておいたことは、万丈目にとって失敗となりうる、か？
いや、フィールドにモンスターがいてもいなくても際限なく出てくるのがＨＥＲＯデッキの強みだ。どちらにせよ、モンスターが残るのは万丈目にとっては厳しい状況だろう。

「俺は手札から、《Ｅ－エマージェンシーコール》を発動！
デッキから《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エッジマン》を手札に加える！
更に、手札から《融合》の魔法カードを発動！
手札のエッジマンと場のスパークマンを融合！
現れろ、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　プラズマヴァイスマン》！」

【　《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　プラズマヴァイスマン》　攻　２６００　／　守　２３００　】

自由にデッキからＥ・ＨＥＲＯのカードを持ってくることができるサーチカードと融合との併用か。
あの場面なら、サンダー・ジャイアントやダーク・ブライトマンだと力不足、ということだろう。
テンペスターの召喚条件も整っていなかったと見える。
となれば、プラズマヴァイスマンの融合召喚が最適ということか。

「更に、プラズマヴァイスマンの効果を発動！
手札を一枚捨て、相手フィールドに存在する表側攻撃表示のモンスターを破壊する！
俺が選択するのは、タイガー・ドラゴン！」

「この瞬間、俺は罠カード、《デストラクション・ジャマー》を発動！
手札を一枚墓地に送り、相手の破壊効果を無効、そのカードを破壊する！」

「な……プラズマヴァイスマン！？」

より強い攻撃を行おうとしたことが仇になったか？
確かに、破壊効果に弱いドラゴン族デッキにとって、破壊効果無効化カードはあって損は無いカード。手札コストがかさむことを考えなければ、充分に優秀だ。
こらそこ、次元幽閉とか言うな。

「く……俺は《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　クレイマン》を守備表示で召喚する」

【　《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　クレイマン》　攻　８００　／　守　２００　】

「これで、ターンエンドだ」

「十代の手札が尽きた……どうするんだ。手札は可能性、手札が無ければ、今は何もできないぞ」

三沢の言う通りだ。
現状、相手がモンスターを召喚しさえしなければ、あるいはなんとかなる可能性も……ある、か？

「俺のターン、ドロー！
……リバースカードオープン、《リビングデッドの呼び声》！
この効果により、墓地の《ミンゲイドラゴン》を特殊召喚する！」

【《ミンゲイドラゴン》　攻　４００／守　２００】

「ミンゲイ……？　な、何であんなに攻撃力の低いモンスターを？」

「ミンゲイドラゴンには、最上級ドラゴン族モンスターを召喚する際、
２体分の生贄とすることができる効果がある。
自分のフィールドにモンスターがいなければ自己再生できる効果を有しているが、
タイガードラゴンが存在する今、それも不可能。

ああして再生したということは、つまり――最上級モンスターを召喚する布石だろう」

三沢の補足を言えば、
さっきのデストラクション・ジャマーのコストでで墓地に送っていたんだろう、
という予測もできる。いや、というよりも、タイミングはそれしかなかった、とすべきか。

「そして俺は、ミンゲイドラゴンを2体分の生贄として扱う。
――《ダーク・ホルス・ドラゴン》を召喚！」

【《ダーク・ホルス・ドラゴン》　攻　３０００　／　守　１８００】

「攻撃力、３０００……！」

「バトルだ！　タイガー・ドラゴンでクレイマンを攻撃する！」

タイガー・ドラゴンの吐く火炎が、クレイマンを焼き尽くす。

「更に、このままで攻撃だ！」

「く、うわあぁぁぁ！」

火炎――というよりも、ビームとでも言うべき熱線が、ダーク・ホルス・ドラゴンの口から発せられ、十代のライフポイントを焼き尽くす。

十代の残りのライフポイントは、３０００が引かれて１０００。この場合、貫通効果を持つカードが出てこなかっただけマシだとも考えられるか。

「俺はターンを終了する。……どうした十代、お前の実力はそんなものか！？」

「いいや、まだだ。俺のターン、ドロー！　……来た！手札がこいつ一枚だけのとき、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バブルマン》を特殊召喚できる！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バブルマン》　攻　８００／守　１２００】

「更に、手札とフィールドにこいつ以外のカードが無いとき、俺はカードを二枚ドロー！」

さすが強欲なバブルマン。この土壇場で引くとは、やはり十代は引きがいい。
これで十代の手札は二枚。……何を引いた？

「俺は《戦士の生還》を発動！　墓地のエッジマンを手札に戻す。
そして魔法カード発動！　《バブル・シャッフル》！
この効果により、相手のモンスター1体と俺のバブルマンを守備表示に変更する！」

十代が選択するのは――当然、ダーク・ホルス・ドラゴン。

「そして更にバブル・シャッフルの効果は続く！
俺はバブルマンを生贄に捧げ――手札のエッジマンを、攻撃表示で特殊召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　エッジマン》　攻　２６００／守　１８００】

「バトルだ！　エッジマンでダーク・ホルス・ドラゴンに攻撃！
パワー・エッジ・アタック！」

「ぬ、ぐううう！！」

貫通の効果を持つエッジマンがダーク・ホルスを破壊したことでダメージは加わる。
これで万丈目のライフは８００ポイント減少して３２００。
……それほど強力な攻撃じゃないとはいえ、牽制としては充分か。

「これで俺はターンエンド。お前のターンだ、万丈目！」

「俺のターン、ドロー！
……カードとモンスターを１枚ずつセットし、ターンを終了する」

「あれ、セットモンスター？
エッジマンって、貫通効果があるんでしょ？
だったら、普通は攻撃表示なんじゃないの？」

「……それは、確かにその通りだが、俺の予想が正しければ、もしかすると……」

さっきの伏せカード……ではなく、理由は、むしろ今伏せたカード。
予測ではあるが、あのカードは……。

「俺のターン、ドロー！
バトルだ！　エッジマンで裏守備モンスターを攻撃！
パワー・エッジ・アタック！」

「この瞬間、俺はリバースカードを発動！　《バーストブレス》！
タイガードラゴンを生贄に捧げることで、その攻撃力以下の守備力を持つ、
表側表示のモンスターを全て破壊する！」

やっぱりこういう罠か。
タイガー・ドラゴンの攻撃力は２４００。エッジマンは１８００の守備力を持つ。
……破壊か。

「くっそぉ……俺は《Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン》を守備表示で召喚！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ワイルドマン》　攻　１５００／守　１６００】

「ターンエンドだ！」

「……十代は選択を誤ったな」

「え？　何でさ、三沢君」

「ワイルドマンは罠カードの効果を受けない。
あのセットモンスターは、十中八九タイガー・ドラゴンの攻撃力より、
低い守備力を持ったモンスターだろう。
加えて、ドラゴン族の得意分野は力押し。守備力は低いものが多いはず。
となれば、ワイルドマンを先に召喚しておいても良かったはずなんだ。
そうなれば、追撃もできたはず」

「あ……そうか。で、でも、アニキー！　頑張れー！！」

万丈目の手札は残り1枚。次のドローで二枚になるが……、
これで高攻撃力のレベル4以下のモンスターを召喚されると、十代のライフは0になる。
……どうなる？

「俺のターン……ドロー！」

万丈目が軽く舌を打つ。

どうやら、思ったようなカードが引けなかったらしい。

「俺は《仮面竜（マスクドドラゴン）》を反転召喚！」

【《仮面竜（マスクドドラゴン）》　攻　１４００　／　守　１１００】

「更に手札から、《火竜の火炎弾》を発動！
守備力８００以下のモンスターを破壊する効果を持つが……今は使わない。
十代！　俺は貴様に８００ポイントのダメージを与える！」

「何！？　うわあぁぁぁあ！？」

仮面竜がその口から吐き出した火炎が、十代の体に直撃する。
……魂を削る死霊やマシュマロンの対策か。
ついでにバーンダメージを与えられることができればいい、という考えだろう。

「更に、仮面竜を生贄に、手札から《創世竜（ジェネシックドラゴン）》を召喚！」

【《創世竜（ジェネシックドラゴン）》　攻　２２００　／　守　１８００】

「バトルだ！　創世竜（ジェネシックドラゴン）でワイルドマンに攻撃！　剛炎弾！！」

「くっ……ワイルドマン！」

上級モンスターが手札に来てしまったということか。
……仮面竜では、ワイルドマンに勝てないことを鑑みて……と言ったところか。
しかし、ともあれ十代の場にモンスターを残しておくと危険だという、その思考は理解できた。

「ターンエンド」

「く……っ、俺のターン！　ドロー！」

何を引いた、十代！？

2束目：入寮（後書き）

どうも、枠です。
いやあ、引きますね。これで3話に続きます。

とりあえず、現状は漫画＋アニメということになっていますが、
なんか漫画の比重が大きいですね、これだと。
まあ一種のリメイクのようなものと思っていただけると幸いです。
というか、まずもってアホ小説なので、そこまで気になさる方はそれほどいらっしゃられないかと思いますが。

余談は次回、解決編（じゃねえ
に掲載するつもりです。
十代は毎度毎度絶体絶命です。

3束目：臨戦

「……よし。魔法カード発動！　《ホープ・オブ・フィフス》！
墓地に存在するE・HERO……ワイルドマン、エッジマン、
バブルマン、プラズマヴァイスマン、スパークマン、
これら5枚のカードを全てデッキに戻し、二枚ドローする！
更に、フィールド・手札に他のカードが存在しない場合、
もう一枚……3枚ドローだ！」

「やった！　さすがアニキ！」

さすがだ。
ホープ・オブ・フィフスをここで手札に引き入れるとは思わなかった。
3枚のドロー……そうそうありうるものではない。

そもそも、基本的に手札増強のカードは、
何かしらの制限が設けられるのが通例だ。

例えば、悪夢の蜃気楼と強欲な壺。
こちらの世界でも既に禁止カードとなっている。

サイバーポッドや苦渋の選択、生還の宝札なども同様だ。
かろうじて、メタモルポットなどはそれを免れている。
……が、しかし、凄まじいな。三枚ドロー。

「俺は、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェザーマン》を守備表示で召喚！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェザーマン》　攻　１０００／守　１０００】

「更にカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！
……創世竜（ジェネシックドラゴン）でクレイマンを攻撃！　剛炎弾！」

紅の竜の放つ火球が、フェザーマンに向かってゆく。

どうやら、万丈目はモンスターをドローできなかったらしい。
このまま引いていれば、あるいは勝っていた可能性も……ある、か？

いや、それよりも。
十代の表情は、まだ死んでいない。

「だが、この瞬間！　俺は《ヒーロー・シグナル》を発動！
この効果により、戦闘でモンスターが破壊された瞬間、
デッキからＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）を特殊召喚できる！
現れろ、スパークマン！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）スパークマン》攻1600／守1400】

「むっ……」

守備体勢のスパークマンが、十代のフィールドに召喚される。

……十代の狙いは、何だ？
スパークマンを召喚……それはいい。
だが、それ以降は？
何を目指している？

……まさか。

「俺はこのままターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

そのカードを確認した瞬間、十代は笑った。

――逆転の一手を引いたのか！？

「俺は手札から、《ライトイレイザー》を発動する！」

「何……！？　血迷ったか、十代！」

「ど、どういうこと？」

「ああ……三沢、頼んだ」

「俺か！？　まあ、構わないが……
ライトイレイザーの効果は、戦闘後に戦闘を行った相手モンスターの除外。
だが……戦闘ダメージは受けるし、自分のモンスターも破壊される。
十代の残りライフは２００……あのままじゃ、耐え切れないんだ」

「そんな！？」

いや、十代なら、先に何かしらの手を打っているはずだ。
でなければ、あのカード使うなんてことはありえない。

「……スパークマンを守備表示に変更して、ターンエンドだ」

「アニキィィィ――――――！？」

「十代！？」

まさか、十代の負けか！？
……いや、どうなる？
伏せカードの内容次第、か？

「俺のターン、ドロー！
手札から、《炎龍（マグナ・ドラゴ）》を召喚！」

【《炎龍（マグナ・ドラゴ）》　攻　１４００　／　守　６００】

「バトル！　創世竜でスパークマンを攻撃する！」

「まずい！　この攻撃が通っては……」

「まだだ！　リバースカード、オープン！　《和睦の使者》！
っこの効果により、戦闘ダメージは０。
戦闘によるモンスターの破壊も無効とする！」

何でお前そんなカード突っ込んでんの！？
速効性が売りなのに、突っ込んでてもあんまり意味無いよな！？
いや、まあライトイレイザーとのコンボにはなるかもしれんが……。

「そして、ライトイレイザーを装備したスパークマンと戦闘を行った創世竜は除外される！」

「ちっ……構わん！　ターンエンド！」

なんとか凌いだか。

だけど、この状況下で凌いだとしても、状況が悪いことはあまり変わらない。特に、既に手札が無い十代には、厳しい……というよりも、最悪の状況だと言わざるを得ない。

「俺のターン、ドロー！

スパークマンを攻撃表示に変更。

バトル！　スパークマンで炎龍を攻撃！

スパークフラッシュ！」

「くっ……」

万丈目に２００のダメージが加えられる。これで、残りライフは３０００。

「そして《フレンドッグ》を守備表示で召喚！」

【　《フレンドッグ》　攻　８００　／　守　１２００　】

「これで、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！
――く、《ゴーレム・ドラゴン》を守備表示で召喚する」

【《ゴーレム・ドラゴン》　攻　２００　／　守　２０００】

「カードをセット。ターンエンドだ」

……流れが変わった。
頃合か。

「翔、俺、ちょっとトイレに行ってくる」

「え？　御堂君、デュエルの結果、見逃しちゃうよ？」

「あー……いや、大丈夫じゃないか？
十代なら、きっと勝てるって」

そう告げて、三沢と目配せする。

ま、俺たちが勝つ必要は無いんだ。
そもそも、俺たちに必要なのは、

十代と万丈目がデュエルを続けるための時間稼ぎ。
それ以上のことは必要ない。

＊　＊　＊

しばらく歩いていくと、青服たちが走ってくるのが見えた。
その進路上、十代と万丈目のデュエル場へ向かう道の真ん中に、俺は躍り出た。

「な、なんだお前!?　レッド生徒が何の用だ!?」

「何だよお前、どけよ!　テメェ、何様の……」

「おい」

「あぁ!?」

「デュエルしろよ」

「「「「はぁ!?」」」」

おお、驚いてる驚いてる。
四人揃ってこんな↓（ ゜Д ゜）顔なのは壮観だ。

「おま……レッド生徒がブルーに勝負を挑むだと!?
それも、俺たち４人に!?」

「うん。別にいいだろ？　答えは聞いてないけど。
どうせ４対１だ。時間もかからないだろうし」

「俺もいるぞ!
だから、正確には４対２だ」

と、木から降りてくる三沢。
……なんでお前、そんなところに登ってるんだ？
いや、別にいいけど。

「そっちが向かう先は、十代と万丈目のデュエル場……その上だろう。
お前たち四人とも、さっき、会場にいるのを見たぞ。
見たところ、邪魔をしに行くんだろう？
だったらその前に、俺たちと遊んでくれよ。時間はかけない。
だが、俺たちが勝てば、さっさと観覧に戻ってもらう」

「邪魔ねぇ。証拠はどこだよ？　証拠」

「ま、本当だけどよ。
ブルーがレッドに負けるなんて、それだけは許されねえの。
俺たちゃ万丈目なんかどうでもいい。
ただ、ブルー生徒が負けることはできねえ」

「ひゃっは、それに、レッドとイエローが一人ずつ、
それだけでブルー生徒４人に勝てるかよ！
いいぜ、やってやるよ！」

はっはっは。素晴らしく見下してくれるねこん畜生。
ぶん殴ってやろうか。

「「「「「「デュエル！！」」」」」」

対戦形式は、かなり複雑なものだ。
先攻はブルー生徒。後攻は俺たち。
ちなみに、やはり最後のターンプレイヤーは攻撃が可能。
……まあ、俺、だが。

「俺のターン、ドロー！
手札から《クリッター》を召喚！」

【《クリッター》　攻　１０００　／　守　６００】

「ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！
手札から《ジェイドナイト》を守備表示で召喚！」

【《ジェイドナイト》　攻　１０００　／　守　１８００】

「ターンエンドだァ！」

「俺のターン、ドロー！
手札から、《海皇の長槍兵》を召喚！」

【《海皇の長槍兵》　攻　１４００　／　守　０】

「カードを一枚セットしてターンエンド……！」

「俺のターン、ドロー！
手札から、《重装武者－ベン・ケイ》を召喚！」

【《重装武者－ベン・ケイ》　攻　５００　／　守　８００】

「ベン・ケイに《デーモンの斧》と《魔導師の力》を装備！
ヒャッハァ！　ターンエンドだ！」

……なんか、どいつもこいつも似たようなフィールドの状況だな。
セットカードが一枚しか無い上、攻撃力１０００クラスのモンスターを攻撃表示。
何事だよ、本当に。

俺の想像で言えば、始めの生徒のデッキは【悪魔族】。
二番目は【超時空戦闘機】。三番目は【ローレベル】で、
最後の生徒が【装備ビート】か。

いずれも、回りさえすれば相当の威力を発揮するデッキだが、
それができていないということは……つまり、
構築が悪いのか、あるいは手札が悪いか、ということだ。

どちらにせよありがたい。

特に、俺みたいに、本来は弱小と呼ばれるはずの人間にとっては。

「俺のターン！」

そして、三沢に手番が移る。
さて、どうするかな、主席の男は。

「俺は手札から、《ハリケーン》を発動！
全てのフィールドの魔法・罠カードを手札に戻してもらおう」

「ああっ！？」

……大嵐からのスタートじゃなかっただけマシと思うんだな！
まあ、既に色々と準備は出来てるわけだけど。
これで、多分三人は脱落だ。

「そして、手札から《ピラミッド・タートル》を守備表示で召喚！」

【《ピラミッド・タートル》　攻　１２００　／　守　１４００】

「更にカードを二枚セットし、ターンエンド！」

これは……アンデット、ということは、まさか、三沢が空気化しないフラグか！？
いや、今はどうでもいい。

次は俺のターンだ。
必要なカードは揃っている。
あとは、これをどう使うか、ということだけだ。

「俺のターン、ドロー。
手札から、《《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　エアーマン》を召喚する！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　エアーマン》　攻　1800　／　守　300】

「E・HERO（エレメンタルヒーロー）……十代と同じ！？」

いや、少し違う。
十代はアニメ版。俺のは漫画番だ。

「エアーマンの効果発動。デッキからHEROを一枚手札に加える。
俺は《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　クノスペ》を選択。
更に、手札から《融合》の魔法カードを発動！
手札のクノスペ、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　アイスエッジ》、
《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　オーシャン》の三体を融合する！」

「「「「三体の融合だと！？」」」」

「何だ、その特殊な召喚条件は……！？」

見ていれば分かる。

「現れろ、《Ｖ・ＨＥＲＯ（ヴィジョンヒーロー）　トリニティー》！！」

【《Ｖ・ＨＥＲＯ（ヴィジョンヒーロー）　トリニティー》　攻　２５００／守　２０００】

「更に、こいつは融合召喚に成功したとき、攻撃力は倍、５０００になる！」

「Ｖ・ＨＥＲＯ（ヴィジョンヒーロー）……」

「「「「５０００！？」」」」

見事におそろいの反応をありがとう。

さて、更に驚きの事実を述べるとするか。

「そして、トリニティーはプレイヤーへのダイレクトアタックはできない。

が、こいつは一度のバトルフェイズ中に三度の攻撃を可能とする！」

「三回の攻撃……ということは！」

「そうだ。トリニティーでベン・ケイに攻撃を行う！
トリニティー・クラッシュ、第一打ァ！！」

「ぐわあぁぁあ！？」

まず、これで一人。

「次だ！　トリニティーでクリッターに攻撃！
トリニティー・クラッシュ、第二打ァァ！！」

「ぬううわぁぁあぁ！？」

二人目！

「そして俺は、ジェイドナイトに攻撃を加える！」

「だ、だが、俺のジェイドナイトは守備表示！
ライフポイントが０になることは……」

「ここで速攻魔法を発動！　《エネミーコントローラー》！
相手のモンスターの表示形式を変更できる！」

「なぬ！？」

三沢が宣言したその瞬間、ゲームのコントローラーが、鋭角的な機体に突き刺さる。
そして、その表示形式は変更――俺に向かって、攻撃態勢を取った。

「ナイス、三沢！
――トリニティーでジェイドナイトに攻撃だ！
トリニティー・クラッシュ、第三打ァァァ！！」

「ぎぃぃやあああぁぁ！？」

これで三人！

そして、俺の予測が正しければ……これで終わりだ！

「俺は手札から、速攻魔法、《融合解除》を発動！
この効果により、トリニティーの融合を解除！
墓地からアイスエッジ、クノスペ、オーシャンの三体を特殊召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）アイスエッジ》攻８００／守９００】
【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）クノスペ》攻６００／守１０００】

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　オーシャン》　攻　１５００　／　守　１２００】

「な……！？」

「エアーマンで長槍兵に攻撃！」

「ぬぐぅ……！！」

これで、壁はいなくなった。

――終わりだ。

「行けっ！！　アイスエッジでダイレクトアタック！

クノスペでダイレクトアタック！

オーシャンでもダイレクトアタック！

ビッグウェーブクラッシュで第七打ァァァァ！！」

「ぐおおおお！？　だ、だが、まだ、ま……」

「速攻魔法発動。《突進》。モンスターの攻撃力を７００ポイント上昇させる」

「何じゃそりゃあぁぁあ！？」

簡単に説明しよう。

１８００－１４００＋６００＋８００＋１５００＋７００＝４０００

……素晴らしい。
俺はこの一瞬に限り、遊星を超えたぞ。

「……わ、ワンターンカルテットキル……」

その手伝いをした三沢自身がびっくりしている。
……うん、まあ俺も、ありえないとは思ったけど。

というか、これでブルーの実力だと。
アホじゃなかろうか。
普通あの場面なら、警戒して何枚か伏せるだろうに。

ともあれ、これは俺たちの作戦勝ちだな。

「……ま、まあ、いいか。お前たち、早く観覧席に戻れ。
これに懲りたら、他人のデュエルの邪魔なんてしないことだ」

「く……ラーイエローが、オベリスクブルーに口答えしてんじゃねえよ！」

「でも、約束は約束。違うかな？
あ、俺、さっきの言葉録音してたけど、聞く？

もしも仮にデュエルの邪魔なんてしたら、
『邪魔ねぇ。証拠はどこだよ？　証拠』これを査問委員会に送りつけるけど。
『ま、本当だけどよ』ＰＤＡって本当に便利だな」

「ぐ、ぬぅ……」

付随の機能だけじゃ不満だったから、少し手も加えてあるけど。
いやあ、元の世界の知識があるっていいな。こういうとき、何かと便利だ。

「お、覚えてやがれぇえ！！」

と、青服の生徒は捨て台詞を残して去っていった。
見事な負け犬っぷりだな。ちょっと面白いぞ。

……というか全然関係ないけど、また俺技名叫んでた！
うわぁぁぁあ恥ずかしいィィ！！

「……って、そうだ。ありがとう、三沢。
お前がいなかったら、リンチ状態だったかもしれない」

「……いや、少なくとも、
トリニティーが融合召喚された時点で二人は倒せていただろう？」

「……伏せ、あったし？」

「……。

まあ、それはともかく。御堂。残り一枚の手札は何だったんだ？」

「え？　《激流葬》だけど」

三沢が黙り込んだ。

……黙り込むほどのものだろうか？

元の世界だと、そもそも《融合解除》を投入するデュエリストは殆どいない。

それどころか1ターン目から4枚セットターンエンド。

俺のターンドローあ、ダッシューマイクラ。召喚？　奈落。

攻撃？　幽閉。……そんな感覚だったしなぁ。

あんまり鬼畜と思えねえや。どころかむしろ、俺良心的じゃないかとも思う。

うん、それは流石に自意識過剰だね☆

「ともかく、そろそろ戻ろう。

もしかすると、もうデュエルが終わってるかもしれない」

「うん。そうだな。俺も……結果も気になるし」

何かしらの改変が無い限りは、十代が勝利する――と思うが。
生憎、この世界はアニメと同一ではない。
一緒にすんな、ってとこだ。

＊　＊　＊

「俺のターン、ドロー！」

十代は、己の手札にもたらされたカードを見る。
――《摩天楼　－スカイスクレイパー－》。
駄目だ。今、このカードが来ても仕方が無い。
加え、ライフポイントは残り２００。
スパークマンの攻撃でゴーレム・ドラゴンを除外する事もままならない。

「俺はスパークマンを守備表示に変更！
ターンエンドだ」

「俺のターン！」

そして、ターンは万丈目に移る。

ゴーレム・ドラゴンは、生贄要員としては最適のカードだとも言える。

それを処理できていない現状が、それを物語っている。

ライフポイントが残っていれば、あるいはゴーレム・ドラゴンを除外できただろう。

しかし、ライフポイントが不足している現状、処理は不可能。

先程引いたカードも、攻撃力の低いゴーレム・ドラゴンに対しては不利。

さあ、どう来る――！！

「俺は手札から、《ボマー・ドラゴン》を召喚する！

更に、手札から魔法（マジック）カード、《ドラゴニック・タクティクス》、発動！」

「ドラゴニック・タクティクス……？」

「俺はこの効果により、自分フィールドのドラゴン族2体を生贄に捧げる。

そして、デッキからレベル8のドラゴンを一体、特殊召喚する！

来い、《タイラント・ドラゴン》！！」

【《タイラント・ドラゴン》　攻　２９００　／　守　２５００】

タイラント・ドラゴン。
レベル８、２９００の攻撃力を持つ、ドラゴン族の最上級モンスター。
罠カードに対する耐性を持ち、更に、限定条件下によっては連続攻撃も可能――。

「だが、スパークマンに攻撃を行えば、タイラント・ドラゴンも除外されちまうぜ」

「……分かってるじゃないか。
だが、一方は防ぐ事ができまい。
タイラント・ドラゴンでフレンドッグに攻撃！」

タイラント・ドラゴンの口腔から吐き出される強烈なブレスが、フレンドッグを焼き尽くす。
だが、それは想定内。いや、むしろ十代にとっては望んだことだ。

「この瞬間、俺はフレンドッグの効果を発動！
墓地に存在するフェザーマンと、融合のカードを手札に加える！」

「……俺はこれでターンエンド。さあ、貴様のターンだ！」

「おう！」

威勢良く返事をしてはみたものの、劣勢に変わりは無い。
スカイスクレイパーでスパークマンを強化したとしても、上昇値は１０００ポイント。
２９００の攻撃力を持つタイラント・ドラゴンに敵うはずもない。
加え、その場合に与えられるダメージは致死量。ダメだ。
そして、スパークマンとフェザーマンでの融合体は存在しない。
いや、今現在の十代は所有していない、とするべきか。
少なくとも、あと一枚。バブルマンが手元に来ることになれば、
あるいは《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　テンペスター》を融合できるのだが……。

（まだ足りない！）

万丈目のライフには届かない。
スカイスクレイパーを使用したとしても、与えられるダメージは９００。
次のターン、万丈目がこの状況に対処できるカード。
――それも、テンペスターを超える攻撃力のモンスターをドローすれば、十代の敗北は決定的だ。

万丈目の墓地には、ミンゲイドラゴンが眠っている。
ドラゴン族モンスターを召喚するに際し、
２体分の生贄として用いることの出来るあのカードならば、

……そもそも自己再生を行ってくるという時点で、生贄の確保は容易い。

例えば、万丈目が次のターン、《トライホーン・ドラゴン》をドローしたら。

例えば、もう一枚のタイラント・ドラゴンをドローされたら。

例えば、《龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）》をドローされたら。

勝機は――無い。

――奇跡は――起きる！

だが。勝機は作ることができる。

「俺のターン、ドロー！！」

デッキに指を乗せ、思い切り引く（ドロー）。

一筋の光条が奔る。

何が来た？

モンスター？

魔法？

罠？

カードが手に納まる。

外観は、モンスターカード。

名称――《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バーストレディ》。

「来たぁぁ――――！！　俺は手札から、《融合》を発動！
手札のフェザーマンと、バーストレディを融合する！
現れろ、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ウィングマン》！！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）フレイム・ウイングマン》　攻　２１００／守　１２００】

緑と赤のヒーローが、その力を融合させて新たな力を走らせる。
そうして現れるのは、屈強な肉体を持つＨＥＲＯ――フレイム・ウィングマン。

「……――――――ッ！！」

当初は、大した脅威ではないと踏んでいたのだろう。
だが、その認識は過ちだ。
このモンスターは、万丈目の――タイラント・ドラゴンへの、絶対的な脅威となりうる。
故に、それに気がついた。
攻撃力、２「１００」。
この事実が、どれだけ重要かということに。

「ヒーローには、それに相応しい舞台がある！
俺は手札から、《摩天楼　―スカイスクレイパー―》を発動するぜ！」

十代が、デュエルディスクの先端――フィールド魔法を設置すべき部分へと、ソレを打ち込む。
瞬間、摩天楼が周囲の風景を消し去り、瞬く間に周囲にビルを投影する。

ビルの先端。
そこに、フレイム・ウィングマンは佇んでいた。
まさに、「ヒーロー（HERO）」らしく。

――さあ、これで準備は整った。

「さあ、行くぜ万丈目！　フレイム・ウィングマンでタイラント・ドラゴンに攻撃！
スカイスクレイパー・シュートォォ！！」

「く、ううう！！」

ビルから飛び立ったフレイム・ウィングマンが、
その右腕に火炎を宿し、タイラント・ドラゴンへと突撃する。
タイラント・ドラゴンも負けじと応戦。
――しかし、攻撃能力で劣る今、その攻撃がフレイム・ウィングマンへ届くことは無い。

そして――交錯。

数瞬の間があって後、倒れたのはタイラント・ドラゴンだった。

「そして効果はまだ続く！
フレイム・ウィングマンは、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！
行けぇぇぇ！！」

その右腕に溜め込んだ火炎が、万丈目を包み込む。

――直後、ビーッ！！　という音と共に、デュエルの終了が告げられた。

「よっしゃああ――！！」

遊城十代の咆哮が、アカデミアに轟いた。

＊　＊　＊

終わってたよ。
もう俺たちが辿り着いたころには、十代の「よっしゃー！！」が聞こえていた。

あ、ていうかこの部分漫画版みたいだな。漫画版の十代の決め台詞はアレなんだぜ。

で、高台に上がってきた、というわけだ。

「ガッチャ！　楽しいデュエルだったぜ、万丈目！」

と、十代は周囲のざわめきに対し、我関せず、と言った風体で万丈目に決めポーズを披露した。

「……俺は、負けたのか」

「え？　あ、ああ、今回は俺の勝ちだ。だけど、次はどうなるか分からねえ。
またデュエルしようぜ、万丈目！」

「……くっ！！」

差し出された手を払い除け、万丈目は会場を後にする。

向かう先は――どこだろう？

流石に、敗北に際して自殺するようなことはありえないと思うが。

「うーん、そんなに悔しかったのか？
……ま、いいか」

いいのか！？　放っておくのかよ！？

「三沢君、御堂君、僕たちも行こう！」

歓声――具体的に言えば、レッド生徒とイエロー生徒による歓声の巻き起こる中、
俺たちは十代のところへ向かって、勝利を讃えるべく歩いていった。

3束目：臨戦（後書き）

枠です。
今話のコンセプトは、簡単にいえば「決め手」を見せること。
それに尽きます。

十代の当初の切り札はフレイム・ウィングマンです。
それとスカイスクレイパーを併せて用いることが、現在の十代の必勝パターンだ、ということで。他のカードも色々出ちゃいましたけど、ミラクル・フュージョンをまだ出してませんから、いいです…よね？↑

しばらくはミラフュは出ません。御堂もＨＥＲＯを使いますが出しません。
あれはアムナエル戦があってこそ輝くものだと思うんです。
なので、そこは原作準拠。エッジマンやワイルドマンは気にするな。

で、ですが、まず各人のデッキのコンセプト。
万丈目が【ドラゴン族】。
十代は【アニメＥ・ＨＥＲＯ】。
御堂は【漫画混成ＨＥＲＯ】。
ついでに三沢は【アンデット族】です。

万丈目と三沢の二人は漫画版のイメージから付与されたデッキですね。
万丈目のデッキはパワータイプ。力押しが主要素となっています。
本当ならそこにアレとかアレとかが入る予定なんですが……そうなっても主役格ですから、多分チートドローで頑張ってくれるでしょう。

三沢はトリッキーさを鑑みてアンデット族ということにしています。
本編で語られなかった残り４つのデッキのうちの一つ……という解釈でしょうか。
闇属性ですね。今回はピラミッド・タートルしか登場していませんが。
闇・機械……もありうるかと思ったんですが、まあそれは保留ということで。

十代はいつもどおりです。
何故なら主人公だから。

御堂のＨＥＲＯデッキは複雑です。
まず、漫画出身のＨＥＲＯは全て投入されています。
また、オリジナルの属性ＨＥＲＯやＭ・ＨＥＲＯ、果てはＶ・ＨＥＲＯまでもが投入されており、非常にカオスです。
まあ簡単に言えばロマンデッキですね。私も似たようなものを作ってみたいとは考えていますが……ＴＦ６出ないかなぁ（
で、これで御堂のデッキは二つが出たことになりますが、
あとの三つはまだ秘密です。
まあ、想像以上に頭おかしい浪漫デッキと化していますが、そこは大目に見ていただけると助かります。

ヒントだけ言うと、残り二つはほぼシンクロ中心です。
一つは融合体使うこともありますが……まあ、ほぼシンクロと考えていただければその通りでしょう。
シンクロ嫌いな方申し訳ありません。

やっぱりこういう小説は浪漫を求めるべきですね。
まあ、はっきり言って御堂のそれはほぼ浪漫デッキなんですが。

とりあえず、今回はこのあたりで。

4束目：過渡（前書き）

初めて日常部分だけを書いたような気がします。
ということで、今回はデュエルはありません。
そのくせに妙に長いという……。

今回から記述方式の変更を行いました。
これでもう少し見やすくなればいいんですが。

では、以下より本編です。

4束目：過渡

あ、どうも。
アニメも特撮も、挿入歌ってのは無駄に格好良いものだよね。
うん、この物語とは全く関係ないんだ。すまない。

どうも。俺ゾンb……もとい転生者っす。
あと、決闘者（デュエリスト）っす。あ、聞いてない？　失礼。

十代と万丈目のデュエルから三日ほど。
特にこれといったイベントも起きないままに、俺たちは漫然と日々を過ごしていた。
時には十代の部屋に来訪してデュエルをしたり、
逆に翔や十代が俺の部屋に来訪してデュエルをしたりと、
たまにはそういったこともあったわけだが、特にこれと言った事件も無かった。

ところで、まったく話は変わるが、ちょっとした質問だ。

俺は今、どこにいると思う？

答えはごく単純。運動場、正確に言えば、アカデミア内、校舎にほど近い場所に位置する――ドーム、だ。

……なんでだよ！？

……なんでデュエリスト養成学校なのに、こんな設備が整ってんだよ！？　おかしいだろ！？

……とまあ、心の声は置いておこう。どうでもいいことだが、さっきから女性教師……鮎川（あゆかわ）先生、だったろうか。

あの人のメロン具合が半端じゃない。

――大玉である。

――いや、むしろスイカだ！

――スイカ。萃香？　東方じゃない！

――こういう場合はマシュマロだろうがボケナス。

――ええい、準備運動などしていられるか、俺は帰るぞ！

――ぷるんぷるん。

――議長！　私は幼女の方が良いであります！

――あ、俺ロリ巨乳の方がぐへへ。

――デュエルアカデミアの女教師は化物か！

――以上、俺の脳内会議場議事録。

議員は全滅。人間の煩悩って限りがありませんね。
というか、いくつか不穏な単語が見え隠れしてるぞ。大丈夫か、俺の灰色の脳細胞。

あと一応主張させてもらうが、俺はロリコンじゃない。

……ロリコンじゃないぞ！？
上は４０下は１０と微妙にストライクゾーンが幅広い俺だが、俺はロリコンじゃない。
単に対象が幅広いだけだ。

「そういえば十代。翔はどこへ行ったんだ？」

「翔のやつ、今朝のめざしに当たったのかは知らねえけど、
今ちょっとトイレに篭ってるんだよ……一応先生に連絡はしたから、大丈夫だろうけど」

「……めざしに当たるって何だよ」

焼いてあるじゃないか。
それどころか干し物だろう。当たる要素は無いだろう、普通は。
普通は！

……と、そんなことを話している折に、翔が妙な表情で走ってきた。
……何か、妙に恍惚とした表情だが。

「……って、言ってる間に来たな。遅いぞ、翔。何をしていたんだ？」

「あ、そのー、えーっとその、うへへへ……
い、色々あって！」

色々って何だ。
というか、その奇妙な笑い方も何だ。

「それはともかく授業に入れよ。十代のおかげで、お情けはもらえてるみたいだからさ」

うん、と軽く返答し、翔は体育の輪の中に入っていった。
やれやれ。普段はそれなりに頭が切れると思ってたんだが、こういうときに限っては世話が焼けるやつだな。

……それにしても、ちっとばかし様子がおかしいが、何があったんだろうな？
その辺、十代に問いかけたとしても答えは分からないんだろうが。

ふむ？

＊　＊　＊

授業を終えてしばらく経った頃、俺たちはレッド寮まで戻ってきていた。

俺は特にすべき事も無いため、自室で調整を。
十代たちも、どうせやるべきことは無いはずだ。
恐らく、俺と同様に自室で調整を行っていることだろう。

「……しかし、やっぱり、あちらを立てればこちらが立たず、か。
やっぱり難しいな、このデッキは」

俺の組んでいるデッキのうち、最難関と言っても過言ではない。
だからこそ、同時に、相手からの攻略難度も相応に高いと言えるのだが。

「ギミックの組み立てが悪いな。……主要素は除外だし」

元々、ある一枚のカードを活かすためだけに組んだデッキだ。
構築難度が上がっても仕方が無いとは常々考えていたが、ここまでのものだとは。

他のデッキのコンセプトがそれなりに固まっている事も相まって、余計に難度が高く感じてしまう。

……ちょっと、購買部にでも追加のカードを買いに行くか。

……とか言って五分ほど。

校舎内の購買部に辿り着いた俺は、いくつかのパックを購入していた。
５パック。計２５枚。
何かあればいいんじゃないかなー、とは思うが……。

とりあえず１パック目。
なーにっかな、なーにっかな、っと。

「――《レオ・ウィザード》５枚だとぅ！？」

上級モンスターのくせに攻撃力も守備力も平均に及ばない。
それどころか、通常モンスターである。
一切の効果が無いというのに、何故このステータスなのか。
攻撃力１３５０。守備力は１２００。
いらねェ――――――！？

「……エラーだろ、これ」

……次。２パック目。
《モリンフェン》が混じってはいるが、それなりに普通の構成だ。
他は《ニードル・ギルマン》《カーム・マジック》《ブラックポーター》《ジャンク・サーバント》。

……まあ、普通じゃないかな。

モリンフェンさえ混じってなけりゃあな！

次、３パック目。

「……」

《ダーク・ダイブ・ボンバー》と《ヴィクトリー・ドラゴン》と《王宮の勅命》、

それに加えて《八汰烏》と《混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）―終焉の使者―》だと！？

全部禁止カードじゃねえか！？

ふざけてんのか！？

「馬鹿野郎ォォォ――――――――！！？」

俺が大声を出したことに驚いたのか、周囲がざわめいた。

いや、何だよこの構成！？

「ギギギギギ……！！」

次！　４パック目！

……ああ、今度はそれなりにまともだ。

《メンタルシーカー》、《バイオファルコン》、
《サイコ・フィール・ゾーン》、《キーマウス》に《ジャンク・ディフェンダー》か。

うまい具合にいいカードが当たったな。
これなら、もしかすると……。

じゃあ５パック目だ。
外部包装を破り、中身を取り出す。

……おお。これなら案外使えるかも。
あれだ。原作風に言えば「いいカードだ」ってとこか。

汎用性の面はともかく、今の俺にとっては充分に優秀なカードだ。
攻撃面に関しても申し分無いし、効果も優秀。
結構なものだな。

他にも存外に優秀なカードが多くて助かった。

現状の俺のカードプール、そんなに優秀じゃないしな。

「……さっきからうるさいけど、アンタ、何してんの？
パックのカード見ては一喜一憂してるみたいだけど」

……と、唐突に、背後から声が掛けられる。
女の声――女子生徒だろうか？
そう考えて背後を振り向くと、そこには一人、不思議そうな表情をした少女が佇んでいた。

年齢は見た目、現在の俺と同じくらい。
……というか、アカデミアに在籍している生徒は、全員俺と同じような年代なんだが。
それを差し引いたとしても、おおよそ年上とは思えない、
幼さの抜け切らない雰囲気を鑑みれば、一年生や二年生だと考えるのが自然だ。

特徴と言える特徴は見受けられないが、肩まで伸びる多少色素の薄い若葉色の髪と、
気の強そうな目付きがそれと言えるだろうか。

「……あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！
『俺は普通にカードパックを購入したと思ったら、
何故か5枚が5枚ともレオ・ウィザードだったり禁止カードだっ

たりする事態が起きた』！
な、何を言ってるのか分からねーと思うが、俺も何をされたのか分からなかった。
頭がどうにかなりそうだった……。
エラーとか中身の入れ間違いだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……！」

「……何だかよく分からないけど、その勢いだけでとにかく不幸だってことは分かったわ」

……ジョジョネタは通じないか。
いや、別にいいんだけどさ、こういうことは俺の自己満足だし。

「まあいいさ。何はともあれ、必要なものは手に入ったしさ。
そういうキミにしても、何かカードを買いに来たんじゃないのか？」

「そうね……でも一つだけ訂正させてもらうけど、
ボクの名前はキミじゃなくて青葉（あおば）あげは。そこだけは言わせてもらうわ」

「あ、ああ、うん。分かった……」

……つーか、一人称ボク！？

ボクっ娘だと……！　珍しいってレベルじゃねーぞ！？

……いや、知り合いにもう一人ボクっ娘いるけど。タイプの違うボクっ娘か。これはこれで新鮮だな。

「俺からも自己紹介はした方がいいかな、青葉さん？
御堂和真。見ての通り……まあ、しがない一年のオシリスレッドの生徒なんだけどね」

「ふーん……アンタ、弱いの？」

何をう。

「それはどうかな。少なくとも、増長したオベリスクブルーの生徒をワンターンキルする程度の能力はあるつもりだけど」

「……それは誰のことを言ってるわけ？」

「……？」

あ、成程。この娘、勘違いしてるな、多分。

「青葉さんのことじゃないよ。この前、ちょっかいをかけてきた生徒に対してやっただけの話」

「ふーん……ってことは、強いってこと？」

「それは分からない。ただ、相手が弱かっただけじゃないかとも言える。

それに俺自身、自分の実力なんて理解しきれていない。

近頃の戦績なんて、いいところ五分五分……まあ、相手が悪いだけとも言えるけど」

十代とか十代とか。

俺はどういう訳か、現在の時点で十代への勝率は2割。

何なンですかァあのチートドロー能力。

俺がガイアナイトを出したと思ったら、次の瞬間にスカイスクレイパーでフレイム・ウィングマンとか。

高攻撃力の《ジャンク・ウォリアー》を召喚したと思ったら、次の瞬間バブルマン＋バブル・シャッフル＋エッジマン＋エッジハンマーのコンボとか。

たまらんよ。

対して翔への勝率は9割をキープしているわけだが、

……現状、翔の能力はあまり高くない。その辺は仕方が無い部分かな。

本当、十代は超能力者か何かなんじゃなかろうか。
いや、だったとしても何も驚かないけど。

「……まあ、いいけどね。で、アンタ……御堂、だっけ。
購買にカードを買いに来たってことは、デッキの調整してるんでしょ？
ボクも少しデッキの具合が確認したいの。手合わせ願えない？」

「ん……そうしたいのは山々だけど、今は少し勘弁してくれるかな。
まだ、使うべきデッキの調整が済んでないんだ。そんな状態でデュエルしても、青葉さんに失礼だろう？」

「そうかしらね……ま、いいわ。じゃあ、またの機会にデュエルしましょ」

……結構、さっぱりとした女の子だな。

それにどことなく強気だ。
実力が未知数の相手と戦おうっていうのに、全く躊躇が無い。

どんなデッキを使うのかという部分でも、かなり気になる。
俺みたいに複数のデッキを使い分けるなんて、そうはありえないだろうが……。

まあ、何はともあれ、デッキの調整用のカードは入手したんだ。

そろそろ寮に帰って作り直すか。

＊　＊　＊

「和真！　大変だ！」

ドバン！　という強烈な音と共に、唐突に自室の扉が開かれた。
思わず、口に含んでいた茶が鼻から噴き出す。痛ぇ。

「……な、何だ、十代。どうした、そんなに慌てて」

「何か……大変なんだ。翔が――」

「翔がどうしたんだ？」

手近な場所に置いていた羊羹を一つまみして口に含む。

「翔が攫われた……らしいんだけど。何でか、俺が女子寮の裏手に

呼び出されたんだ。
でなきゃ、翔がどうなるか分かんねえ、って……。
隼人は起きてくれないし、どうしたらいいと思う、和真？」

「へえ、翔が攫われた、ねぇ。

……攫われたァ！？」

……おいおい、事件じゃねえか。
誰か名探偵呼んでー！
あ、見た目が小学生の高校生は勘弁な。誰か死ぬ。

「……ブルー女子寮の裏に呼び出された……か」

何度も言うようだが、既に２０年近くも経っているんだ。
原作の展開は既にうろ覚え。特に、初期の話は記憶が薄れている。
この展開はどうだったか……翔が攫われた？
そんな展開が、初期にあったものか？

……気になるな。

「十代。確か、お前は寮の裏手に呼び出されたんだったよな。

……そうだな。俺は呼び出しの対象には入っていない。
だからこそ、俺が十代と同時に女子寮の裏手に回るのはマズいだろう。
しかし同時に、俺の介入は予定されていないことだ。そこに付け込む隙がある」

「……ええと……どういう、ことだ？」

「まず一つに、俺はこの話を聞かなかったこととする」

はぁ？　と、十代は首をかしげる。
……少し、話が難しいか？

「まず一つに、相手は俺の介入を予想していない。これは分かるよな？」

「あ、ああ。誰にも話すなとは言われてないし、
だったらとりあえず和真に話しておこうと思って」

「でも、十代が俺にその事実を話したことを、相手に知られてはまずい。
翔がどうなってもいいというのなら、話は別だけど……」

「そんなわけあるか！　翔は俺の仲間だぞ！？」

「分かってる！　だからこそ、考えてるんだ。

……重要なのは、俺が十代から話を聞いたという事実を漏らさないことだ」

そもそも相手の目的が知れない以上、俺が介入して翔が無事だという保障が無い。
営利目的なのか非営利目的なのかは知れないが、とかく重要なのは、俺がいる事実を知られないこと。
そして仮に知られたとしても、十代が情報を漏らした事実を悟られないこと。
……となれば、俺のすべきことは確定している。

「俺は、翔がいなくなったこと『だけ』を知った、とする。
そして、翔を捜すべくイエロー、ブルー男女各寮に訪問する。
最後にブルー女子寮に訪問し、可能なら十代と合流する。
……それで情報は収集できるし、あわよくば翔の所在も知れる。
こんな時間に女子寮にお邪魔するのは気が引けるけどな」

「そっか……よく分かんねえけど、じゃあ和真、頼んでもいいのか？」

「ああ。時間がもったいない。俺は先に行こう」

どうなっていることか分からない以上、行動は迅速に起こさなければならない。

俺はベルト状のデッキホルダーを手に取り、腰に巻きつけて部屋の外に出た。

――夜の冷たい風が心地よい。

人間の心境は自然現象に影響を及ぼさない。が、心境は人間の感覚に影響を及ぼす。

要はは心の持ちようだ。

現状、不安ばかりを抱いていても、仕方が無い。

問題なのは結果だ。

より良い結果を勝ち取るためには、異常な心境であってはならない。

感情をあまり揺り動かすと、それが行動に影響するからだ。

イエロー寮。三沢が応対してくれたが、翔はいないとのこと。

それは当然か。いや、俺もさして期待はしていなかったが。

そしてブルー男子寮。

こちらでは万丈目が出てきたが、やはり情報は得られない。

いや、「いない」ことが分かっただけいいか。

万丈目以外の生徒が出てくることになれば、無下に扱われる可能性も高い。

特に、俺のようなレッド生徒が相手ともなると、見下されたような態度を取られるだろう。

で、走ってブルー女子寮までやってきたわけだが。

……ああ、それにしても気が引ける。

なんせ女の子相手だ。それもこんな……十時前とはいえ、夜も更けて訪問するというのは、萎縮してしまう。

とにかく、インターフォンを鳴らして誰か適当に呼び出してみよう。

「……夜分遅くに申し訳ありません、レッド寮の御堂と申します。ええっと……いくつかお尋ねしたいことがあってこちらに出向いたのですが……」

『御堂君ですか？』

「あぁ……委員長？」

『はい、原です。どうなさいました？』

原麗華（はられいか）。通称、委員長。

生真面目で几帳面。物腰も丁寧で、常に他人に対して敬語を用いる。気難しい部分もあり、何かと堅物と思われがちだが、面倒見の良い部分もあって他の生徒からは慕われている。

……それで俺たちと同じ一年生なのだから、不思議なものだ。

きっと精神年齢は突き抜けて高いのだろう。

いや、俺が言える話ではないのだが。

「鮎川先生はどうしたんだ？」

『既に就寝中です』

まだ十時前なのに寝た……だと……！？

いや、恐らく、自分が見回りに行くからって委員長が寝かせたんだろう。

そのあたり、どこか無駄に責任感が強いからなぁ、委員長は。

「ええと……うちの寮の丸藤（まるふじ）……翔、って分かるかな？」

『ええ。丸藤先輩の弟さんですよね。翔君がどうしたんですか？』

「ああ、この時間になっても寮に帰ってこないから、心配になってさ。

イエロー寮とブルー寮（男子）と回ってみたんだけど、どこにもいないみたいでさ。

ＰＤＡでの呼び出しにも反応なし。もしかすると入れ違いになってるだけかもしれないけど、

もしかすると、ってことがあっても怖いからさ。とりあえずこっち寮（女子）に来てみたんだけど」

『……と言われましても、そういう事実はありませんが……』

……どうなんだろうな？
委員長が嘘をつくとは思えない。となれば、本当に知らないのだろう。

……だが、そうなると、翔はどこに行った？
十代は女子寮の裏手に行った。
そうなると、そちらにいるものだと考えるのが順当だが……。

……順当、だが。

頼むわけにはいかないだろうな。
ただでさえ几帳面で規律に厳しい委員長なんだ。
こんな時間に訪問すること、それ自体が非常識なことだ。
しかも、女子寮の中に入れろ……などと、ただの変態じゃないか。

馬鹿な。
俺はそこまで非常識な人間じゃないぞ。

行動力だけなら少しはあるんだが、いくらなんでもそこまでのレベルじゃない。
つーか何だよ。いきなり女子寮に入れろなんて頼むって。
漫画やアニメの世界……だけど。

それにしても倫理観は同じだろうに。
精神的にそこまで退廃してたら、流石にもう人間としちゃ終わりだな。割とゲスいぞ。

仕方が無い。一旦帰るか。
この後ＰＤＡで十代を呼び出せば、今、あいつがしていることも分

かるだろう。

「すまない委員長。

女子寮の中に入れてもらっても構わないだろうか？」

『……はぁ！？』

……アルェー！？

何で俺こんなこと口走ってんだ！？

馬鹿じゃねえのか。

馬鹿じゃねえのか！？

社会的に抹殺されるぞ俺！？　ぎゃー！！

「ち、違うんだ！
俺は単に気になるだけで……」

『何が気になるんですか！？』

主語を忘れてた！？

「違う！　俺は決して女子寮の内部が気になってるわけじゃない！」

『じゃあ気になってるのは女子の寝顔と寝間着（ねまき）ですか、この変態！？』

「変態呼ばわりするんじゃねえ！？　というか何だよその勘違い！
俺が気になってるのはあくまで翔の行方だ！！」

ラノベみたいな勘違いだな！？

つーかお前（委員長）、そういう口調じゃねえだろ！？

ちょっと元の世界で見たアニメのキャラ思い出したわ！！
こっちで俺妹とか言ったって分かるような人いねえけどな！

『って、それなら女子寮の中に入る必要は無いじゃないですか』

「……ああ、その通りだな。だからこれは俺の我儘（わがまま）だ。
頼む委員長、俺に付き合ってくれ！
委員長の付き添いがあれば、ある程度の行動は可能だ！」

『は、はぁ……そこまで言うのでしたら、中庭くらいなら見せてあげても構いませんが……
って、青葉さんに宮田（みやた）さん、この時間帯の寮外の外出は厳禁ですよ！』

「……」

委員長も大変だな。
青葉……って言うと、あの青葉さんか。
宮田さんについては知らんが、風呂にでも行くつもりなのだろうか。

レッド寮は文字通り「天然」の露天風呂だしなぁ……。
野生の猿とか猪とかいるんだぜ。こないだ十代が熊の背中を流してたし。
非現実的な光景だが。

『はい？　ええ、今少し訪問者が……って宮田さん！

野次馬根性丸出しで見に行かない！　青葉さんも聞き耳を立てない！

はぁ？　相手？　ああもう！　なーにーもーあーりーまーせーんー！』

何か台詞（せりふ）が可愛いな。

どこかムキになってるからだろうか。

……同性の友人と一緒にいるからだろう。

俺にも経験があるから分かる。

気を許せる人間が近くにいると、どうしても思考が年齢の退行を起こしてしまうものだ。

というか、それが普通なんだ。委員長とて、俺とて変わらない。

大人にしても、恐らくは同様だ。

『はぁ？　確かめに行く……ってあぁ！？　ちょっと、二人とも！』

「どうしたんだ、委員長？」

『ああもう……青葉さんと宮田さんがそっちに向かったんです。

御堂君、どうにかして押し戻してください。じゃないと家捜（やさが）しなんてさせませんよ』

「家捜しなんてするつもりはないけど……」

いや、結果的には家捜しってことになるのか？
……まあいいか。

そうしてその場に佇んでいると、しばらく経って、女子寮から二人、……いや、三人の女子生徒がこちらに駆けて来るのが見えた。
後ろから二人の生徒を追いかけている一人は、眼鏡を掛けた濃緑の髪の女生徒――恐らくは委員長だろう。
対して、追いかけられている二人の生徒のうち、片方は青葉さん。
もう片方は……恐らく、先程委員長が言っていた宮田さん……だろう。
実際のところはよく分からんが。

「あれ、御堂じゃない。何してるの、こんな所で」

――と、ようやく俺がいることに気がついたのか、青葉さんは俺を指差す。

「いや、翔を捜しに来たんだけど……」

「ふーん……カイザーの弟ね。悪いけどボクは見てないわ。
というか、見てたら目立つはずだもの」

「はい、そうですね……あうあう」

は、羽入!?

いや、ここはあくまで遊戯王の世界のはずだ。

単なるあうあう娘と考えた方が簡単だ。

うん、あうあう娘って俺の考えた定義なんだけどさ。

困惑したりするとあうあう言い始める女の子のこと。庇護欲を掻き立てる女の子、とも言う。

子供っぽい、とも思われがちだ。

人気は高いんだが。

そんなやりとりをしているうちに、委員長がこちらに走ってきた。

肩で息をするほど急いで来たのか。

「ぜぇっ、はっ……ふ、二人とも、何で、そんなに、楽しそう、に、走って、るんで、げほっ」

「だってほら。委員長がそんなに語気を荒げて話すなんてそうそう無いことじゃない？」

「はいっ、麗華さんが怒るときって、なんだか冷静なままっていうか……あう。

なんだか静かに叱ってることが多いから、相手の人がどんな人かな、って思ったんですっ」

冴えない人です。

あれは単に委員長が俺の言葉を曲解しただけで特に意味は無い。
本当はそれほど大した意味も無い言葉だったのに……なんであんな勘違いをするんだろうか。

「で、それが御堂だった、ってこと。それで、どうするのかしら。さすがに丸藤はウチの寮にはいないと思うけど」

「……うーむ」

そんなことを考えていた折、腰元に据え付けていたＰＤＡが鳴り始めた。
着信音から考えると、メールが届いたらしいことが分かる。

ＰＤＡを見てそれを確かめると、十代からのメールだった。
そこに記されているのは一文。

『翔見つかった（＾ｏ＾）／』

……。

……。

……。

……骨折り損のくたびれ儲けかッ！！

「すまん、見つかったらしい。お邪魔した。
申し訳ない、委員長。無茶なこと頼もうとして」

「はぁっ、……はい。わか、分かり……ました。
見つかって……ぜぇ、良かった、ですね」

いや、本当に骨折り損なのは委員長だろう。
……ここまで疲労させて、本当に申し訳ない。

「ま、それならいいわ。それで……御堂。改めてボクとデュエルしない？
　ブルー生徒をワンターンキルしたっていうその実力、確かめてみたいの」

「こんな時間にか？　いや、俺は別に構わないけど……」

「御堂君、あまり調子付かせないでください。
デュエルだけなら明日でもできるでしょう？」

「あう、それなら私もデュエルしてみたいですっ」

「宮田さんまでそんなこと……」

委員長が頭を抱えるような仕草を取る。
いや、実際に頭を抱えたいくらいなのだろう。
法と規律の番人のような委員長にとって、こういう状況は望ましくないに違いない。
というか大嫌いだろう。ストレスを溜めるに違いない。

「委員長の言うとおりだ、二人とも。
こんな時間だし、せめて明日に持ち越そう。
どうせ俺みたいなしがないレッド生徒はいつでも暇だしさ」

「むぅ……なら仕方がないわね。御堂、逃げないでよ」

「逃げないよ」

つーか逃げられないよ。
アカデミア内にいて、どういう風に逃げろと言うんだ。

「というわけで、委員長。後は任せるけど……大丈夫か？」

「ええ……それは、流石に、もう、体力も、回復、してきましたから、ぜぇ」

どれだけもやしっ子だ。いや、どっちかと言えばもやしっ娘だが。

ともかく、俺はそれだけを告げてレッド寮へと帰宅していった。

ところでまったくの余談になるが、どうやら十代は天上院――明日香と戦わされるハメになったらしい。
曰く、翔のあの誘拐騒動は狂言誘拐とか。
あるいは本当に覗きをしてしまったとか。

――どっちだか分からんが、ともかく無事で良かった。

あ、十代はどうも当たり前のように勝利したようです。
決め手は《Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント》。
あれだ。ＧＸ第３話のあの話だったってことだ。
これでようやく胸のつかえが取れた。
納得。

さて、これで明日に向けて調整を行うだけだな。

4束目：過渡（後書き）

はい、そういうことで本編の横道でした。

今回からタッグフォースのキャラが登場です。
口調や人選など、色々と違和感バリバリかもしれませんが、話のつなぎとしてともかく出してみました。
基本的にＯＣＧに準拠したカード効果と禁止制限リストを用いていますので、ＴＦキャラが使いやすいのなんの……↑

ところで一つ。
うちの主人公は人間としての欲望がバリバリにあります。
性欲も睡眠欲も、食欲も何もかもが人並みかそれ以上です。
それとムッツリです。場合によっては変態にもなります。
そして、微妙な部分で不幸です。まあ本編見てたら大体分かるかと思われますが、あのくらいには不運です。
とはいえ、物語の都合上、チートドロー能力は保持しているんですが。

十代のチートドロー能力はＬｖ１２とすれば、翔はＬｖ８。御堂はＬｖ６くらいでしょうか。一般生徒がＬｖ２～４くらいで言えば。

そういうわけで次回に続きます。
書いてはいますので、翌日にでもすぐに投稿するつもりではありますが……。

あ、今回から3連チャンでオリジナルの話になりますのでその辺少

しご注意を。
しばらくしたら本筋に戻ります。

5束目：学友

あ、どうも。七連打です。

間違えました。御堂です。

はい、すみません。先日のあの事実を思い返して悦に入っていました。

ただし反省はしていても後悔はしていません。公開処刑されそうなほど調子には乗っていましたが。

ははは。死ぬほど恥ずかしい人間ですね俺は。

すみません。自己嫌悪してきます。

……。

はい、ということで改めまして御堂です。

少なくともこちらではこんにちは。現在、俺は校舎で授業を受けています。

授業……何故か錬金術という空想上の学問なわけですが。

ところで、十代と万丈目の対決イベントが終わった以上、特にこれと言ったイベントもそうは無いだろうし、今は気楽なものだ。

元の世界では存在しなかった興味深い学問ということもあるし、かなり楽しんで学生生活を謳歌（おうか）している。

まあ、デュエルの実技や学問については知っていることも多いため、特にこれと言って何か注意しているわけじゃないが……。

まあそれはそれとして。

基礎教養に関してもデュエルアカデミアでは実施されている。

高等教育機関だから、その辺は厳格なのだろう。

……いや、まあそれにしても、普通の高校などと比べれば、かなりレベルは低いのだが。

俺は元の世界の記憶を持ち越しているため、勉学にそれほど苦労は無い。

むしろ、復習になっていい、とすら思っているほどだ。

まあそれはそれだ。

ところで、十代は俺の二つ隣……翔の隣の席で眠りこけている。

成績不良なのに、どうしてこうも不真面目なのだろうか。

……ああ、ほら。委員長がちょっとこっちを睨みつけている。

……仕方が無い。取ったノートを見せるくらいはするか。隣室のよしみだ。

「翔、十代を起こしたらどうだ」

「昨日、夜通しデッキ調整だったんスよ……僕は寝てたっすけど、どうも十代のアニキは明け方までずっとデッキを回したり調整したりしてたらしいっす」

本当にデュエル馬鹿だな……それで翌日体調を崩しても仕方が無いだろう。

「……ノートは取っておくから、後で見に来るといい。十代にも伝えておいてくれ」

「あ、あはは……ありがとっス。
毎度思うけど、御堂君って妙に面倒見いいよね。何で？」

「ん……そうか？」

面倒見は……いいのか？
というか、理由と言えるようなものなんて……。

「しいて言えば、昔やんちゃしてた頃の反動と思うよ。

当時は必要以上に気取ってたし……気障（キザ）っていうか」

「……想像できるようなできないような……」

エターナルフォースブリザード
一瞬で相手の周囲の大気ごと氷結させる
相手は死ぬ

……みたいなことを割とマジでやってた時期もあったもんなぁ……
あれ、なんだか涙が。
まあ、黒いものとか闇みたいなものとか、そういうのに憧れる時期は皆あると思う。
俺はそうだった。そうじゃないと良かった。

しかも俺、単なる中二病じゃなくて本当に厨二病だったからなぁ……。
選ばれし者の能力（ちから）ー、とかマジにやってたっけ。おお、恥ずかしい。
今じゃ昔のこと思い出しては自己嫌悪だ。

「そんなこんなで今の俺が完成しましたとさ」

「早っ！？」

「……いや、ねえ。だって俺、薄い人間だし」

薄くて軽い御堂さん。

……まあ、間違ってはないけど。

前世の人生軽薄だったけど。別に性格は軽薄じゃないはずだ。

……はずだ！

ここに至るまでに紆余曲折はあったが。

死んだり。

生き返ったり。

また、人生を歩みなおしたり。

デュエルしたり。

……言葉にすると素晴らしく薄いな、俺の人生の道程。

「では、これで今日の授業は終了ですにゃー。

当番の人、号令をお願いするにゃー」

「起立、礼」

どうでもいいが、何故大徳寺先生はあの口調を貫き通すのだろうか。

……ファラオの飼い主だから？

いや、まあ少し気になっただけなんだが。
にゃーにゃー鳴く１８０センチオーバーの大男が、複数作品にそう何人もいてたまるか。

「十代、終わったぞ」

「んが……？　あ、もう終わったのか……うぃ、ありがとよ、和真」

「……礼はいいから、次からはもう少し真面目に授業を受けてくれ。毎回俺がノートを貸すハメになるのは、少し遠慮願いたい」

「ああ……うん、努力はするぜ」

とか言いつつ次の授業も寝て過ごすんだろうに。
まあ、別にいいんだけど。錬金術の授業は面白いし。
授業の合間を縫って二冊分、隣室用のノートを一冊分書き上げているのだが、これがまた楽しい。

何せ、錬金術は元の世界なら眉唾物として、完全にこの世から抹消された学問だ。

魔法や何やと違い、そこには科学的な根拠が少なからず含まれている。
原子や分子構造、クォークや電子などの細部に至るまでに学ぶことが出来る。
……言うなれば、科学の授業の発展系みたいなものだろうか。

その上浪漫溢れているのだからたまらない。
だって金だぞ金。金（キン）で金（カネ）で金だ。大金持ち
最高じゃないか。

それに元々、俺はフィクションの住人じゃない。
元いた世界にあったアニメの題材として錬金術が取り入れられていることも多々あった。
だからこそ、こうして実際に学べていることが嬉しい。
嬉しいし楽しい。最高だ。

あ、でも腕とか足とか弟とか持っていかれるのは勘弁な！
弟なんていないけど。
両親健在だけど。

ま、何だかんだと考える前に昼飯だな。
そう考えて、机の上に弁当箱を取り出す。

「あれ？　御堂君、お弁当なんだ？」

「え？　弁当だって！？」

弁当という単語に反応してやってくる野獣・十代。
……こいつ、大人しくドローパンを買いに行けばいいものを……！

「何だと？　弁当。御堂がか？」

「へぇ、おいしそうじゃない」

続々と集まってくる人・人・人。
十代や翔は、席が近いからまだいい。
だが、三沢も明日香も何故ここに来る！？　お前ら購買行けよ！？

「……じ、自炊は、できるほうだから。実家から仕送りも貰ってるし」

「成程。結果的に、購買部で購入するよりも安上がりで済むということか」

「へぇ。ボクも今度やってみようかな」

「私もやってみようかなっ」

青葉さんや宮田さんまで来てんじゃねえ！？
デュエルアカデミアには弁当を持ってきた人間の周囲に集まるような風習でもあるのか！？

「な、何してんだ、青葉さんも、宮田さんも……」

「何って、丁度昼休みだから暇があると思って呼びに来ただけだけど。

アンタが美味しそうなお弁当持ってきてるから、見物に来ただけ」

「あう。同じくですっ」

野次馬根性丸出しだな宮田さん。昨日に引き続き。

「卵焼きに唐揚げ、適度な野菜……ご飯の中央には梅干。漬物と焼き魚……。

なかなかにバランスを考えてある食事だな。御堂、これは君が一人で作ったのか？」

「それは、まあ。というか、レッド寮で他に作るような人間はいないだろ、三沢」

「ほら、女の子に作ってもらったとか、そういうこともあるような気がするなー僕」

「自分で言うのも悲しくなるが、そういうことはまずありえないぞ、翔。

それに、俺は知り合ってまだ日も浅いような女の子に弁当を作ら

せるなんて、
そんな真似は男として絶対に許さん」

「……御堂君、なんか考え方がオッサンみたいっすよ」

……いや、ねえ。
だって中身オッサンだし。仕方ないんじゃないかな、考え方が古臭いっていうのは。

……やっぱり、こういう考え方って古臭いのか？

「そうなると、やはり御堂の恋愛観も気になるところだが」

「恋愛……ねぇ」

三沢後で屋上な。

性格だけを言えば、俺は大人しめの娘の方が好みだ。
献身的な女の子にも惹かれる。顔はあまり気にしない。
……というよりも、俺自身、そこまで他人に誇れる顔じゃないし。
ただ、やっぱり一目ぼれというあの感覚だけは好きになれんな。

要するに、容姿だけを見て判断したということだろう？　だとしたら、どんな軽薄さだ。
他に容姿の良い人間がいたら、すぐにそちらになびくってことじゃないか。

賢い娘は嫌いじゃないが、ちょっと計算ずくということが多そうで苦手だな。

俺の性格や容姿、あらゆる部分を見て、それでもいい、って言ってくれるような女の子がいるとしたら、案外俺はそういう女の子とくっつくかもしれん。

……ってまあ、その程度の薄っぺらい男なんだがな。

実際のところは、そういうことを考えられるほど、気持ちに余裕が無い、とすべきか。

「今はあまり興味が無い……かな。そのうち考えるよ」

「……なんか色々と逡巡があったみたい」

青葉さん、それ正解。途中で色々言いかけた。危ねぇ。

……しかし、学生らしい会話だねぇ。オッサンちょっと苦笑いしちまうよ。
甘ったる。

恋の話題なんて、この時期にしかできないことだ。
大人になるにつれてそんなことも言えなくなってくる。
まあ、こうして青春のやり直しをしてるような立場にある俺としては、微笑ましい光景に思えるんだが。

「もういいから皆散れ散れ。恨めしげに見てもやらんぞ」
「えー。俺その唐揚げ食いてぇんだけど」
「鶏肉を買って来たら作ってやるから我慢してくれ」
「……発言が親みたいだわ」

……言うな明日香。自覚はあるんだから。

そもそも弁当を持ってくる生徒自体が相当に少ない。
気付けば、教室に残る人間は極端に少なくなっていた。
5、6人……もう少しはいる程度だろうか。実際のところはよく分からないが、
一年生の総数を考えれば、おおよそ、そのくらいの人数だろう。
……ま、それで特にこれと言って何かあるわけでもなし。

ともかく、俺は俺で自分の用事がある。
必要なものを必要なだけ持ち出し、何はともあれ俺は外に向かった。

＊　＊　＊

で、しばらく経って外庭。
昼休み、それも一般生徒同士のデュエルということもあり、観客はまばらだ。
いても精々、十代とその周囲の人間……翔や三沢、あとは明日香などくらいだ。

あと、何故か委員長までこの場にいるが、あれは気にしないほうがいいのだろうか。
いや、単に、デュエルにかまけて時間を忘れることが無いようという配慮だろうが。

「準備はいいか？」

「ボクは大丈夫よ。じゃ、始めましょうか」

デュエルディスクにデッキを挿し込み、展開。

互いに向きあい――そして、宣言。

「「決闘（デュエル）！」」

先攻は青葉さん。……さて、どんなデッキが来るかな。

「ボクのターン、ドロー。
手札から、《ダーク・リゾネーター》を守備表示で召喚」

【《ダーク・リゾネーター》　攻　１３００　／　守　３００】

「カードをセットし、ターンエンド」

始（ハナ）めっからチューナーモンスター……。
手札事故か？

ダーク・リゾネーターは、一度の先頭破壊耐性を持つモンスターだ。
それ故に場持ちはいい。１ターン目から召喚していれば、次のターンに持ち越す事も容易だ。

だが、それ故に守備力は３００と低い。
容易（たやす）く特殊召喚できるモンスターがいれば、処理もできる。

「俺のターン、ドロー。
……手札から、《おろかな埋葬》を発動。
デッキから《ボルト・ヘッジホッグ》を墓地に送る」

「ボルト・ヘッジホッグ……って。チューナーが場にいたら、
場に特殊召喚できるモンスターだよね？」

「ああ。レベル調整に有用なカードだな。
確か、御堂はあのカードを試験のときも用いていた。
あれが墓地に送られたとなると、御堂はシンクロ召喚を狙う気か
……？」

……解説はいいんだが、もしもそれが正解だとしたら、
俺の手の内をバラすことになるんだぞ。
三沢、もう一回後で屋上な。

ちなみに、今回の俺のデッキタイプは【ジャンク】デッキ。
そこに【シンクロン】の要素をプラスした、まるでアニメの遊星の
ようなデッキだ。
まあ、《スターダスト・ドラゴン》は出せそうに無いんだが。
というか出したら出したでいずれ時空の法則が乱れそうな気がする。

「更に、俺は手札から《ジャンク・ブレーダー》を召喚」

【《ジャンク・ブレーダー》　攻　１８００　／　守　１０００】

「そして、場に『ジャンク』と名の付いたモンスターが存在するとき、
手札からこいつを特殊召喚できる。現れろ、《ジャンク・サーバント》！」

【《ジャンク・サーバント》　攻　１５００　／　守　１０００】

「いきなり2体のモンスター……！？」

「バトル！　ブレーダーとサーバントでダーク・リゾネーターを攻撃！」

始めの攻撃は、その効果によって防がれる……が、
二度目の、ジャンク・サーバントの攻撃によって、ダーク・リゾネーターが砕け散る。

「カードを1枚セットして、ターンエンド」

これでもう残り手札は2枚。
場の状況はともかく……ちっとばかし、厳しいかもな。

俺はこのターン、確かに2体のモンスターを召喚した。
召喚は――した。しかし、所詮はそれだけだ。
優位性（アドバンテージ）を稼いだかどうかと言われれば微妙だし、強力なモンスターを残したわけでもない。
微妙、と表現せざるを得ない。

「ボクのターン、ドロー。
ボクは手札から、《精神操作》を発動！
アンタのジャンク・ブレーダーのコントロールを得る！」

「なっ……」

コントロール奪取のカード！？
1ターン目からダーク・リゾネーターを守備表示で召喚したことといい、いまのこれといい、
この特徴は……まさか、【チューナー】デッキか！？

チューナーデッキの特徴は、簡単に以下のものが挙げられる。
・　場持ちの良いチューナーで戦線を維持。
・　相手のモンスターを奪い、シンクロ召喚。
・　チューナーのサポートカードによるモンスターの強化。
・　魔法・罠カードによってモンスターの特殊召喚を行い、シンクロ召喚。
その特徴ゆえに初見での対処は難しい。
攻撃力１５００以上のモンスターを破壊、除外する《奈落の落とし穴》など、
一般的なメタカードが通用しづらいということもある。対処は厳しいかもしれん。

「そして手札から、《デルタフライ》を召喚！」

【《デルタフライ》　攻　１５００　／　守　９００】

「そして、デルタフライの効果を発動！
場のデルタフライ以外のモンスターのレベルを１つ上昇させる。
ボクは、ジャンク・ブレーダーのレベルを一つ上昇する！」

これで、合計のレベルは８。……くそ。早い！？

「レベル5となったジャンク・ブレーダーに、レベル3のデルタフライをチューニング！
シンクロ召喚！　現れて、《ギガンテック・ファイター》！」

【《ギガンテック・ファイター》　攻　２８００　／　守　１０００】

「ギっ……」

先攻2ターン目からギガンテックファイター！？
戦闘での破壊が実質的に無効になる反則的な効果と、
墓地の戦士族モンスターの数によって攻撃力が変動する効果を持つ、
レベル8のシンクロモンスター……。
元の世界でも充分に採用率は高かったが、こっちでも同じか！？

「ギガンテック・ファイターでジャンク・サーバントに攻撃！
ギガ・クラッシュナックル！」

「チッ……くそ！」

ギガンテック・ファイターの攻撃によって砕け散る、ジャンク・サーバント。

同時に俺のライフポイントに１４００のダメージが加えられる。
そして、戦士族のジャンク・サーバントが墓地に送られたことで、
ギガンテック・ファイターの攻撃力は３０００にアップ。
……状況は悪いな。

「これでボクはターンエンドよ」

「俺のターン、ドロー！
……自分の場にモンスターが存在しないとき、こいつを特殊召喚できる！
現れろ、《ジャンク・フォアード》！」

【《ジャンク・フォアード》　攻　９００　／　守　１５００】

容易に達成できる召喚条件。
少なくとも、自分の場にモンスターがいない、というような状況は、それなりに多い。

「そして更に、手札から《ニトロ・シンクロン》を召喚！」

【《ニトロ・シンクロン》　攻　３００　／　守　１００】

「そして、フィールド上にチューナーが存在するとき、
墓地に存在するボルト・ヘッジホッグを特殊召喚できる！
現れろ、ボルト・ヘッジホッグ！」

【《ボルト・ヘッジホッグ》　攻　８００　／　守　８００】

これで、レベル合計は7だ！

「レベル2のボルト・ヘッジホッグと、レベル3のジャンク・フォアードに、
レベル2のニトロ・シンクロンをチューニング！
集いし思いが、ここに新たな力となる――光さす道となれ！
シンクロ召喚！　燃え上がれ、《ニトロ・ウォリアー》！」

【《ニトロ・ウォリアー》　攻　２８００　／　守　１８００】

淡い緑に光輝く円環（わ）が、５つの星を包み込む。
そして現れるのは――まるで、悪魔のようなフォルムの戦士。
緑を基調としたその屈強な肉体からは、ひっきりなしに煙が吹き上げていた。

うん。この口上は一回、是非とも言ってみたかった！
何故か覚えてたから言ってはみたが……うん。少し恥ずかしいな。

「ニトロ・ウォリアー……攻撃力は２８００ね。
まだ、ギガンテック・ファイターには届かないよ！
それに、戦士族のジャンク・フォアードが墓地に送られたことで、
ギガンテック・ファイターの攻撃力が３１００にアップ！」

その通りだ。だからこそ、俺はいくつか計略を巡らせている。

「ニトロ・シンクロンの効果を発動。
こいつを素材にニトロと名の付くモンスターをシンクロ召喚に成功したとき、
カードを一枚ドローする」

ドローしたカードは別にいい。問題は、既に手札にあったカードだ。

「そして手札から、魔法（マジック）カード《調律》を発動！
デッキから『シンクロン』と名の付くチューナー……、

《クイック・シンクロン》を手札に加える！
そしてその後、デッキの上から一枚を墓地に送る……！？」

ちょ……何で戦士族墓地に行ってんだよ！？
ジャンク・シンクロン墓地に行くなよ！？

「……ギガンテック・ファイターの攻撃力が上昇したけど。
もしかしてアンタ、戦士族墓地に落ちたんじゃないでしょうね」

「……もしかしてもクソも、その通りだよ」

うんざりとした調子で告げる。

これで、ギガンテック・ファイターの攻撃力は３２００。
……《調律》使ってマズいと思ったのは初めてだわあたい。

「――バトル！　ニトロ・ウォリアーでギガンテック・ファイターを攻撃！」

「何だぁ！？　和真のやつ、自滅する気かよ！？」

「いや、違う！　見ろ十代！」

ニトロ・ウォリアーの両腕から噴き出す蒸気が、更に勢いを増す。
こいつの効果は、ごく単純。

「――ニトロ・ウォリアーの効果。
俺が自分のターンに魔法カードを使ったとき、その戦闘のダメージ計算時のみ、
一度だけ、攻撃力を１０００ポイントアップできる！」

「……ってことは、攻撃力３８００！？」

「そうだ。ニトロ・ウォリアーで攻撃！
ダイナマイト・ナックル！」

「くっ……」

飛び上がるニトロ・ウォリアーが、その両腕をギガンテック・ファイターへと向ける。
その直後に、ギガンテック・ファイターのソリッドビジョンが砕け散った。

攻撃力の差は６００。よって、６００のダメージが、青葉さんへと向かう。

「だけど、ギガンテック・ファイターが戦闘破壊されたとき、
墓地から戦士族モンスターを特殊召喚できる！
僕は、再度ギガンテック・ファイターを特殊召喚！」

【《ギガンテック・ファイター》　攻　２８００　／　守　１０００】

「俺はカードをセットし、ターンエンドだ」

「ボクのターン、ドロー！
手札から魔法（マジック）カード、おろかな埋葬を発動！
この効果により、デッキから《地獄からの使い》を墓地に送る！」

地獄からの使い……最大の攻撃力を持つチューナー、だったか。
それを墓地に送るということは、準備が整ったということか？

「そして１０００のライフポイントを支払い、《簡易融合（インスタント・フュージョン）》を発動！
この効果で、ボクはエキストラデッキから、《レア・フィッシュ》を融合召喚！」

【《レア・フィッシュ》攻１５００／守１２００】

「そして手札から、チューナーモンスター、《カオスエンドマスター》を召喚！」

【《カオスエンドマスター》攻１５００／守１０００】

レベル４のモンスターとレベル３のチューナー……って、マズい！
しかも、カオスエンドマスターは戦士族……！
ギガンテック・ファイターの攻撃力が、また上昇してしまう！

「水属性、レベル４のレア・フィッシュに、
レベル３のカオスエンドマスターをチューニング！
シンクロ召喚！　現れて、《氷結界の龍　グングニール》！」

【《氷結界の龍　グングニール》攻２５００／守１７００】

グングニール……なんつーモンスターを召喚しやがる！？

氷のように冷たい青……いや、透明味のある蒼色とでも表現すべき色を基調とし、
随所に血液を思わせる紅が差し込んだドラゴンが、俺の眼前に現れる。

２５００の攻撃力……それはいい。いくらでも、処理だけは可能だ。
だが、こいつの強さは、そんなところには無い。

「グングニールの効果発動！　手札を一枚捨てるごとに相手フィールドのカードを破壊する！
この効果で捨てることができるのは二枚までだけど、
……ボクの手札は今、残り一枚。この一枚、《シンクロ・マテリアル》を捨て、
御堂のフィールドのニトロ・ウォリアーを破壊する！」

「くっ……！！」

グングニールから発せられる強烈な冷気が、ニトロ・ウォリアーを凍て付かせる。
それが砕けた、その瞬間。ギガンテック・ファイターの攻撃力が上昇――。
つまり、それはニトロ・ウォリアーの破壊を意味していた。

「行くよ！　ギガンテック・ファイターでダイレクトアタック！

ギガ・クラッシュナックル！」

「この瞬間、俺は伏せカード（リバース）を発動！　《ガード・ブロック》！
俺の戦闘ダメージを０にし、カードを一枚ドロー！」

「くっ……でも、この攻撃は防げないでしょ！
グングニールで直接攻撃（ダイレクトアタック）！　更に、伏せカード（リバース）オープン！
《イージーチューニング》！　墓地のチューナーを除外して、
その攻撃力分、モンスターの攻撃力を上昇させる！
ボクが除外させるのは……地獄からの使い！
これで、グングニールの攻撃力を２６００ポイントアップ！」

「攻撃力、５１００……！？
青葉さん、なんてモンスターを出すの！？」

「……くっ！！」

確かに、この攻撃を受ければ、俺のライフポイントは０。
――だが！

「手札から、《ジャンク・ディフェンダー》の効果発動！！」

「ジャンク・ディフェンダー！？」

「こいつは、相手の直接攻撃の宣言時、手札から特殊召喚できる効果を持っている。
俺は、ジャンク・ディフェンダーを守備表示で特殊召喚する！」

【《ジャンク・ディフェンダー》　攻　５００　／　守　１８００】

「くっ……グングニールで、ジャンク・ディフェンダーを攻撃する！」

グングニールの作り出す氷柱が、俺のジャンク・ディフェンダーを貫き破壊する。

……だが、これで首の皮は繋がった。
次のドローが、俺の勝敗を分けるか。

アニメみたいだな。
……こんな、日常的なデュエルなのに。

「ボクは、これでターンエンドするわ」

「俺のターン――ドロー！」

――よし、引いた！

「俺は手札から、《貪欲な壺》を発動！
墓地のニトロ・シンクロン、ジャンク・シンクロン、ニトロ・ウォリアー、
ジャンク・ディフェンダー、ジャンク・ブレーダーの五枚をデッキに戻す。
そして、２枚のカードをドロー！！」

「……」

「……よし！　俺は手札から、魔法（マジック）カード、《戦士の生還》を発動！
この効果により、墓地のジャンク・フォアードを手札に加える。
そして、手札からジャンク・フォアードを特殊召喚！」

【《ジャンク・フォアード》　攻　９００　／　守　１５００】

これなら……いける、か？

いや、ここからは運任せだ。
ドロー勝負、とでも言うか。
――ともあれ、勝つためにすべきことは変わらない。

「俺は手札の《クイック・シンクロン》の効果を発動！
手札のモンスターカードを墓地に送ることで、こいつを特殊召喚できる！
現れろ、クイック・シンクロン！」

【《クイック・シンクロン》　攻　７００　／　守　１４００】

「クイック・シンクロン……」

「そして俺は手札から、《チューニング・サポーター》を召喚」

【《チューニング・サポーター》　攻　１００　／　守　３００】

「更に、墓地に送った《グローアップ・バルブ》の効果を発動！
デッキの上から一枚を墓地に送り、こいつを特殊召喚する！
現れろ、グローアップ・バルブ！」

【《グローアップ・バルブ》　攻　１００　／　守　１００】

俺のフィールドに現れるのは、奇怪な一つ眼の付随した植物のようなモンスター。
そして、この状況でできることは――。

「レベル1のチューニング・サポーターに、レベル1の、グローアップバルブをチューニング！
集いし願いが、新たな速度の地平へ誘う――光さす道となれ！
シンクロ召喚！　《フォーミュラ・シンクロン》！」

【《フォーミュラ・シンクロン》　攻　２００／守　１５００】

「え？　何、あのモンスター……三沢君、あんなカードってあったっけ？
それに、シンクロモンスターなのにチューナーって……」

「ああ……昔、Ｉ２社と海馬コーポレーションの合同企画があったんだ、
フォーミュラ・シンクロンはその際に製作されたカードで、
抽選で何枚かが配布されたカードだ。まさか、それを御堂が持っているとは……」

……フォーミュラ・シンクロンって、そんな貴重なカードだったのかよ！？
いや、まあ辻褄は合ってるが。
俺の持っていたカードは、全てＩ２社や海馬コーポレーションの試供品ということになっている。

曰く、俺はモニターであり、その使い勝手を報告することで、今後の製品開発の参考にするとか。

「ま、まあいい……俺は、フォーミュラ・シンクロン自身の効果により、
シンクロ召喚に成功した際にドロー。更に、チューニング・サポーターの効果で、
もう1枚ドローを行う。カードを2枚ドローする！」

――来た！

「俺は手札から、《二重召喚（デュアルサモン）》、発動！
この効果により、俺は更なる召喚権を得る。
俺は手札から、《スピード・ウォリアー》を召喚する！」

【《スピード・ウォリアー》　攻　９００　／　守　４００】

「おいおい、今のままじゃ、どうにもなんねえぞ！？」

そう。今のままでは。
だがあくまでも、今のままなら――だ。

「クイック・シンクロンの効果。こいつは、シンクロンと名の付くチューナーの代用とできる！
そして、俺はクイック・シンクロンを、ジャンク・シンクロンの代用とする！
レベル5、クイック・シンクロンに、レベル2、スピード・ウォリアーをチューニング！
集いし怒りが、忘我の戦士に鬼神を宿す！　――光さす道となれ！
シンクロ召喚！　吠えろ、《ジャンク・バーサーカー》！」

【《ジャンク・バーサーカー》　攻　２７００／守　１８００】

降臨するのは、深紅の鎧を纏う狂戦士（バーサーカー）。
凶悪な力を有す、鬼神。

「ジャンク・バーサーカー……墓地のジャンクモンスターを除外して、
その攻撃力分の攻撃力を相手モンスターから引くモンスター……
だが御堂、それじゃ足りないぞ！？」

分かってるから言わなくていい。

三沢、後で屋上な。

「そして、レベル3、ジャンク・フォアードに、
レベル2、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロンをチューニング！
シンクロ召喚！　現れろ、《カタパルト・ウォリアー》！！」

【《カタパルト・ウォリアー》　攻　１０００／守　１５００】

「カタパルト……？」

「そう。こいつが逆転の一手だ。
――カタパルト・ウォリアーの効果発動！
フィールド上に存在する『ジャンク』と名の付いたモンスターを生贄に捧げることで、
相手のライフポイントに、その元々の攻撃力分のダメージを与える！」

「あ……ボクのライフポイント」

「そう。これでとどめだ。
カタパルト・ウォリアーの効果！　急降下射出（ダイブ・カタパルト）！！」

「くっ……！！」

カタパルト・ウォリアーの背の射出台（カタパルト）に乗せられた、
ジャンク・バーサーカーが、その身を撃ち出し青葉さんへと突撃する。

そうして与えられる、２７００のダメージ。

――そうして、俺と青葉さんとのデュエルは、終わりを迎えた。

「……ってあれっ？
今のデュエルを見てて考えてなかったんですけど、
私とのデュエルはどうしたんですかっ？」

「……あ、ごめん。普通に忘れてた。

「あうぅ！？」

「い、いや、まだ時間あるし、ちゃんとやるよ！？」

ちゃんと……やる、はず。

……できるよな？

5束目：学友（後書き）

どうも。枠です。
今回は青葉ＶＳ御堂でした。
ちなみに御堂が言及していたデッキは今回のこれではありません。
次回出すデッキがそれです、とだけ。

ところでデッキのコンセプトなんですけど、
御堂の【ジャンク】は、むしろ【遊星デッキ】と、表現したほうがより分かりやすいかと思います。というか、間違いなくそれです。
特殊召喚が容易なジャンク系モンスターで場を繋ぎ、
その時々に応じた「ウォリアー」系統のモンスターをシンクロ召喚する……っていうのが基本戦術でしょうか。
相手のＬＰを削ってギリギリまで持っていけば、
あとはカタパルト・ウォリアーの引導火力――が御堂の勝ち筋のようです。

青葉さんのデッキは、作中でも言及があったように【チューナー】です。
コントロール奪取系のカードをフル投入しつつ、
場持ちの良いチューナーで場を繋ぎ、シンクロモンスターで勝負を決める。
また、簡易融合も投入されていますので、想像以上に厄介なものが飛んできます。
作中ではグングが出てきましたけど、あれが《カオス・ウィザード》なら《アーカナイト・マジシャン》が飛んできました。
また、イージーチューニングはダメ押しの一撃としても機能します。
迎撃にも優秀な効果を発揮します。
《地獄からの使い》を除外すれば２７００……まあ事故要因にはな

りますけど。
ＴＦ５では再現できないんですけど、《シンクロ・マテリアル》が遊星編３で収録されましたので、現実では組みやすくなったデッキです。
とはいえ、相手の場に依存することには変わらないんですけど……まあ、元々チューナー自体能力は優秀なものが多いので、あまり気にならないかと。

それでは今回はこのあたりで。
次回はＶＳ宮田ゆまです。
……デッキはＴＦ３のものですが（

地獄からの使いの攻撃力を訂正しました。

6束目：戦術

あ、どうも。御堂です。
デュエリストですが、流石に連戦はキツいです。

青葉さんとのデュエルが終了してたった数分。
俺はデッキを入れ替え、その上で宮田さんと対峙していた。

「あう。宮田ゆまですっ。よろしくお願いしますね、御堂さんっ！」

「御堂和真だ。よろしくな、宮田さん」

互いに簡潔な挨拶と自己紹介を済ませ、デュエルディスクを展開する。
昨日のうちに対面は済ませている以上、特にこれと言って言うことは無い。

俺とのデュエルを終えた青葉さんは、どこか悔しそうな表情で、少し離れた位置から遠巻きに観覧している。

さて、ディスクによる抽選も終わったようだ。
今回は……俺が先攻か。

「じゃあ、俺の先攻からだ。俺のターン、ドロー！
俺は手札から、《静寂のサイコウィッチ》を守備表示で召喚！」

【《静寂のサイコウィッチ》　攻　１４００　／　守　１２００】

「カードを1枚セットし、ターンエンドだ」

見れば分かるかと思うが、今回の俺のデッキは【サイキック族】のデッキだ。
特に、サイキック族の中でも、除外のギミックを用いるものを使用している。

まあ、あとは見てのお楽しみ、と言うべきか。
当然ながら、シンクロギミックも搭載している。

「私のターンですっ。ドロー！
手札から《ダーク・グレファー》を召喚！」

【《ダーク・グレファー》　攻　１７００　／　守　１６００】

「ダーク・グレファーの効果により、
手札の闇属性モンスター、《ゼータ・レティキュラント》を墓地に送ることで、
デッキの闇属性モンスター、《ゾンビキャリア》を墓地に送りますっ！」

「墓地にゾンビキャリアを送った……ってことは、シンクロかしら？」

呟く明日香の言葉も、ある意味ではもっともらしいと思えるのだが、……しかし、除去される可能性も高いこの場面で、シンクロをするものだろうか？

それに、むしろ気になるのは、墓地に送られた、ゼータ・レティキュラント。

あのカードの効果は……何だったか？

「バトルですっ！　ダーク・グレファーで、サイコウィッチを攻撃しますっ！」

「サイコウィッチが破壊されて墓地へ送られたとき、
デッキから攻撃力２０００以下のサイキック族モンスターを１体、
ゲームから除外することができる！　俺はこの効果により、《メ

ンタルシーカー》を除外！」

「私はカードを2枚セットし、ターンエンドですっ！」

二枚のセットカード……くそ、攻撃し辛いな。

だが、まあ現状は仕方がない……か？

「俺のターン、ドロー。

このスタンバイフェイズ、サイコウィッチの効果を発動！

この効果で除外したモンスターを特殊召喚できる！

来い、《メンタルシーカー》！」

【《メンタルシーカー》　攻　８００／守　６００】

異次元から姿を現すのは、三頭身ほどの小さな人間だ。

おおよそ、力強さの感じられないそのモンスターには、しかし、

その見た目に見合わないだけの能力を有している。

「そして、メンタルシーカーの効果を発動！

除外したこのカードの特殊召喚したとき、相手のデッキの上から

3枚を確認！」

「ええっ！？」

《冥界の宝札》、《カオス・ソーサラー》、《異次元の女戦士》か。
……この中で特に面倒なのは――。

「俺は《カオス・ソーサラー》を除外する！」

「あっ、カオス・ソーサラーが……」

異次元の女戦士も相当に厄介だが、召喚権を一切使わず、
容易な召喚条件で現れるカオス・ソーサラーの方が、恐らくはより
厄介だ。
あいつを場に残してしまえば、複数回の除外が可能だ。
破壊は可能だろうが、それに至るまでにどれだけの損害が出るか…
…。

「そして俺は手札から、《テレキアタッカー》を召喚」

【《テレキアタッカー》　攻　１７００　／　守　７００】

「レベル４のテレキアタッカーに、レベル３のメンタルシーカーをチューニング！
シンクロ召喚！　現れろ、《サイコ・ヘルストランサー》！」

【《サイコ・ヘルストランサー》　攻　２４００／守　２０００】

こちらの世界では特に貴重な、素材指定無しのレベル７シンクロモンスターだ。
特に現状、《エンシェント・フェアリー・ドラゴン》や《ブラック・ローズ・ドラゴン》など、
シグナー５竜を露出できず、また、そもそも持ってないという状況にある以上、
素材指定が無い、こういったモンスターは有用だ。

「そして、サイコ・ヘルストランサーの効果を発動！
墓地に存在するサイキック族モンスターを１枚除外することで、
１２００のライフポイントを回復する。俺はメンタルシーカーを除外！」

サイコ・ヘルストランサーの左手側に存在する黒い球体が蠢（うごめ）き、

右手の光球が輝きを増す。――直後に、俺のライフに１２００のポイントが加算。

「そして俺は手札から、《最古式念導（さいこしきねんどう）》、発動！
サイキック族モンスターが俺の場に存在するとき、相手のカード１枚を破壊する。
……ま、代償として１０００のダメージは食うけどな。
俺は右側の伏せカードを破壊する！」

「あうっ！？　私の《次元幽閉》がっ！」

「ちょ……！？」

次元幽閉だと！？
なんつーカード持ってんだよ！？　元の世界でもやたら採用率が高かったカードだぞ！？
しかも、相手モンスターを除外するとかいう、シンプルながらも凶悪な効果……次元系のデッキか！？

……ともあれ、俺は１０００のライフを失い、これで残りは４２００。

「バトル！　サイコ・ヘルストランサーで、ダーク・グレファーを攻撃！」

「あうっ！　この瞬間に罠カード、《シンクロ・イジェクション》を発動！
相手フィールド上のシンクロモンスターを除外しますっ！」

「何ィ！？　ってああ、サイコ・ヘルストランサーが！？」

排除（イジェクション）の名の如く、サイコ・ヘルストランサーが、次元の渦に飲み込まれて、その姿を消していく。

「そして、この効果を発動したとき、相手プレイヤーはカードを１枚ドローしますっ」

「うん……まあ、それじゃあ、１枚ドローするよ」

「そして、私の墓地の《ゼータ・レティキュラント》の効果を発動しますっ。
相手の場のモンスターが除外されるたびに、自分の場に、『イーバトークン』を特殊召喚しますっ！　あう」

【《イーバトークン》　攻　５００　／　守　５００】

その瞬間に姿を現すのは、ゼータ・レティキュラントをいくらかダ

ウンサイジングしたかのような、
奇妙な姿の――宇宙人、だろうか？

攻撃力・守備力は共に５００。効果は無い、か。
だが、それはつまり、ありとあらゆる用途に用いることができるということでもある。

――成程、それを主軸としたデッキということか。
そして、《冥界の宝札》が投入されているということは、
つまり、それらの生贄を用いて最上級モンスターを際限無く召喚する――。
そういうデッキと考えるのが自然、だろう。

「むぅ……俺はカードを二枚セットし、ターンを終了する」

「あう。私のターンですっ、ドロー！
ダーク・グレファーの効果により、手札の《ダメージ・イーター》を墓地に送りますっ。
そして、デッキに存在する、もう1枚のゼータ・レティキュラントを墓地へ送りますっ！」

……これで、俺のモンスターを除外するごとに2体の生贄を確保することが可能になった、ということか。
マズいぞ。……ああ、かなりマズい。

「そして私は手札から、《冥界の宝札》を発動！
モンスター2体以上の生贄を必要とする召喚を行えば、私は2枚のカードをドローできますっ！
更に、私は場のイーバトークン、ダーク・グレファーを生贄に、《光神機(ライトニングギア)一轟龍》を召喚しますっ！

【《光神機(ライトニングギア)一轟龍》　攻　２９００　／　守　１８００】

「そして2枚のカードをドロー！」

くそ、アドバンテージだらけだな！
場に２９００のモンスターと2枚のドロー……。

冥界の宝札は、基本的に敬遠されがちなカードだ。
そもそも、最上級モンスターを召喚するには、生贄召喚よりも、特殊召喚した方がカードの効率も速攻性も良い。
しかし、生贄を容易に確保できるデッキであれば、それもあるいは有用だということか。

「轟龍で、御堂さんにダイレクトアタックします！」

「ぬ、くっ……」

轟龍の胸元、光の球体から放たれたビームが、俺のライフポイントを削り取っていく。
２９００のダメージ――これで、俺の残りライフは１３００か。

「私は１枚カードを伏せ、ターンエンドですっ」

「俺のターン、ドロー！　手札から、《緊急テレポート》を発動！
この効果により、俺はデッキから直接、《サイコ・コマンダー》を特殊召喚！」

【《サイコ・コマンダー》攻１４００／守８００】

「そしてこいつは、場にサイキック族モンスターが表側表示で存在するとき、
生贄無しで通常召喚できる！　《アーマード・サイキッカー》を召喚！」

【《アーマード・サイキッカー》攻２２００／守１８００】

「合計レベル９……と、いうことは！」

「レベル6、アーマード・サイキッカーに、レベル3、サイコ・コマンダーをチューニング！
来い、《ハイパーサイコガンナー》！！」

【《ハイパーサイコガンナー》　攻　３０００　／　守　２５００】

よし、これで……。

「あ、あうっ！　この瞬間、私は《因果切断》、発動ですっ！
手札の《異次元の女戦士》を墓地に送り、
御堂さんの場のハイパーサイコガンナーを除外します！」

「ぐあっ！？」

「そして、御堂さんの場のモンスターが除外されたことによって、
私のフィールドに2体のイーバトークンが特殊召喚されますっ！」

【《イーバトークン》　攻　５００　／　守　５００】
【《イーバトークン》　攻　５００　／　守　５００】

……またかよ。
またかよ！？　宮田さん、どんだけ俺のカードを除外したら気が済むんだ！？

「くっ……伏せ（リバース）カード、オープン！　《サイコ・トリガー》！
相手よりも俺のライフポイントが低い場合、
墓地のサイキック族モンスターを二枚除外して発動！
俺はサイコ・コマンダーとテレキアタッカーの2枚を除外！　カードを2枚ドローする！
そして更にカードを2枚セットし、ターンエンドだ！」

「私のターンですっ、ドロー！
私は場のイーバトークン2体を生贄に、《テュアラティン》を召喚しますっ！

【《テュアラティン》　攻　２８００／守　２５００】

「そして2枚のカードをドロー！」

更に、二つの異形を生贄に現れるのは――透明な鎧を身に纏う、純白の機械天使。
攻撃力は２８００――轟龍には劣るが、それでも充分に優秀な効果を持つカードだ。
トークンが主軸である以上、入れる必要性はあまり感じられないが、

それでも強いことに変わりはない。

「バトルですっ！　轟龍で御堂さんにダイレクトアタック！」

「伏せカード、オープン！　永続罠、《ブレインハザード》！
この効果により、俺は除外されたハイパーサイコガンナーにこのカードを装備！
そして攻撃表示で特殊召喚する！」

【《ハイパーサイコガンナー》　攻　３０００／守　２５００】

「あう……でしたら、この攻撃は終了です。
カードをセットして、ターンを終了しますっ」

なんとか防ぎきったか……しかし、これで終わるとは到底思えない。
何か、事前に策を打たなければ――。

「俺のターン、ドロー！　……よし、手札から《ディストラクター》を守備表示で召喚！
こいつは、１０００のライフポイントと引き換えに、相手の場の魔法・罠カードを破壊できる！」

これで、だいたいの準備は整ったと言えるだろう。

「そして俺は手札から、《念動増幅装置》を発動する。
こいつを装備したサイキック族モンスターは、
効果を使用する際にライフコストを必要としなくなる。
そして、ディストラクターの効果を発動する！
相手の場の、セットされた魔法・罠カードを一枚破壊する！」

そうして破壊されたのは――《異次元からの帰還》。
恐らく、《異次元の女戦士》や《D．D．アサイラント》、《異次元の戦士》などを、
諸共に相手モンスターと除外させて一斉攻撃を狙うという算段だったんだろう。

……態度や口調の割にえげつないな。

「――バトル！　ハイパーサイコガンナーで轟龍に攻撃！」

宣言を行うと同時に、ハイパーサイコガンナーの両腕と一体化して

いる銃器から、
複数の弾丸が一斉に飛び出す。そしてそれらの弾丸は、変幻自在な動きで轟龍へと向かい――。

って、こんな動き、俺はどこかで見たぞ。
具体的に言えば死ぬ前。仮面ｒ……いや、宇宙の法則が乱れるからやめとこう。なんか怖い。

と、そんなこんなで気付いた頃には、轟龍は既にその身を破壊されていた。
これでようやく１００のダメージ……残りは３９００。まだまだ道は険しいな。

「ターンエンドだ」

「わ、私のターンですっ、ドロー！
手札から魔法（マジック）カード、《ブラック・コア》を発動っ！
この効果で、私は手札の《異次元隔離マシーン》をコストにし、御堂さんの場のハイパーサイコガンナーを除外しますっ！」

「させん！　伏せ（リバース）カードオープン！
カウンター罠（トラップ）、《ブローニング・パワー》！
サイキック族モンスターであるディストラクターを生贄に捧げることにより、
魔法（マジック）、罠（トラップ）の発動、及びモンスターの召喚・特殊召喚を無効にする！
そのブラック・コアの発動を無効にさせてもらう！」

「えっ！？」

「このとき、効果の処理を挟むため、念動増幅装置の効果は発動しない。
……さて宮田さん、次はどうする？」
「あう……」

「……あのー、三沢君、あれってどういうこと？
確か念動増幅装置って、墓地に送られたら発動する効果だよね？」
「ふむ。そのあたりのルールは、実のところ俺も正確には覚えていないが……。
まず、宮田さんがブラック・コアの効果を発動した。
そして、チェーンに乗るようにして御堂がブローニング・パワーを発動した。
この際にディストラクターを生贄に捧げたわけだが、ここからが問題だ。
『ブラック・コアの発動、及び効果を無効にする』というのが、ブローニング・パワーの効果となる。そして、
ディストラクター……ひいては念動増幅装置は、その発動の『コスト』として墓地に送られた。
これは『発動するために必要なもの』だ。そして、コストが墓地に送られた『後で』、
ブローニング・パワーの本来の効果が発揮され、相手のカード効果を無効にする。
カード効果の処理……この場合、ブローニング・パワーの効果処理を挟んでしまうことで、
念動増幅装置の効果の発動の『タイミングを逃す』という事態に

陥る。

……簡単に言えば、任意効果――墓地に送られたとき、
何かが『できる』効果を持つモンスターを生贄に捧げてモンスターを召喚しても、
生贄に捧げられた方のモンスターの効果を発動することはできないということだ」

……今度からあいつ（三沢）のこと、歩く遊戯王ｗｉｋｉとでも呼ぼうか。
どれだけ喋ってるんだあいつは。知識があるのは認めるけど……。

まあ、「タイミングを逃す」とは、途中で効果処理挟んだら任意効果が発動できませんよ、
という制約のことだ。元の世界でも議論の的になったことがある。
しかも複雑すぎて子供が理解できないという……子供向けの内容なのに。

「あうー……カードを一枚セットしてターンエンドですっ……」

どことなく気落ちしたような宮田さんの声。
……なんとなく罪悪感に苛まれるのは、気のせいだろうか。

「俺のターン、ドロー！　……ええい、くそ、手が悪いな。

伏せ(リバース)カードオープン！　《サイコ・チャージ》！
俺は墓地に存在する、サイコウィッチとアーマード・サイキッカー、
ディストラクターの3枚をデッキに戻し、2枚ドローする！」

手札に来た二枚のカード。
――これがあれば、あるいはこのターンで決着がつく……かもしれない。

「俺は魔法(マジック)カード、《サイコパス》を発動。
８００のライフポイントを支払い、除外されているサイキック族モンスターを2枚選ぶ。
その後、その2枚を手札に加える。俺はサイコ・ヘルストランサーとサイコ・コマンダーを選択。
サイコ・ヘルストランサーはエクストラデッキに戻り、サイコ・コマンダーは俺の手札に戻る」

「……サイコ・ヘルストランサーは1枚しか持ってないのかしら？
だから、エクストラデッキに戻した……？」

その通りです。
ええ、以前の俺は素晴らしく金欠でしたから。
パックを買って初めて当たったシンクロモンスターだったんだよ。

いいじゃないか使いまわしても！

「俺は手札から、《サイコ・フィール・ゾーン》を発動！
除外されているチューナーとチューナー以外のサイキック族モンスターを、
それぞれ1体ずつ墓地に戻し、レベル合計分のレベルを持つシンクロモンスターを、
エクストラデッキから表側守備表示で特殊召喚する！
俺はレベル3、チューナーモンスターのメンタルシーカーと、
レベル4のテレキアタッカーを墓地に戻し、
レベル7のサイコ・ヘルストランサーを特殊召喚！」

【《サイコ・ヘルストランサー》　攻　２４００　／　守　２０００】

「そして、サイコ・ヘルス――」

「あ、あああうっ、《奈落の落とし穴》を発動しますっ！！」

「なっ……」

このタイミングで！？
このタイミングで奈落の落とし穴だと！？
優先権という言葉の消えたこの世界で！？

いや、だがまだ俺のハイパーサイコガンナーは生き残っている！

「御堂さんの場のモンスターが除外されたことで、
私の場にイーバトークン2体が特殊召喚されます！
……両方とも守備表示ですっ」

「……ほう？」

そうか。守備表示か。
……守備表示か。
それはそれはいいことを聞いた。だったらこの状況を利用しない手はあるまい？　うふふふー。

「俺は手札からサイコ・コマンダーを召喚！
――バトル！　サイコ・コマンダーでイーバトークンを、
ハイパーサイコガンナーでテュアラティンを攻撃！」

「あうっ……」

再度、ハイパーサイコガンナーの手によって行われる砲撃――。
……うん、やっぱりル○ト○ガーだ。

あ、分からないならスルーで構いませんのでこれ。

「……ターンエンド」

「あ、あう……私のターン、ドロー！
あ……わ、私は墓地に存在する、光属性、異次元の女戦士と、
闇属性、ダーク・グレファーを除外しますっ！」

……ゐ？

「そして手札から、《カオス・ソーサラー》を特殊召喚しますっ！」

【《カオス・ソーサラー》　攻　２３００　／　守　２０００】

な――――――!?

二枚目だとぅ!?
さっき除外したやつだけじゃなかったのかよ！
くそ、これはマズいぞ――――!!

「カオス・ソーサラーの効果発動ですっ！
ハイパーサイコガンナーを除外します！」

ハイパーサイコガンナーが、カオス・ソーサラーの作り出す次元の歪みに吸い込まれ、消えていく。
……さらば、俺のハイパーサイコガンナー。
お前が破壊されずに除外されたせいで、残って場を圧迫し続けるブレインハザードをどうにかしてくれ。

「カオス・ソーサラーは効果を使ったターンは攻撃できませんっ。
そしてイーバトークンが2体発生。両方とも守備表示で召喚し、ターンエンドですっ」

「く……俺のターン、ドロー！　……サイコ・コマンダーを守備表示に変更。
《カバリスト》を守備表示で召喚」

【《カバリスト》　攻　１００　／　守　１００】

「更に、カードを1枚セットし、ターンエンドだ」

何もできない。
くそっ……奈落の落とし穴を使われ、カオス・ソーサラーを召喚され……。
一瞬でも気の緩みを見せた瞬間にこれかよ！　なんてえげつないデッキだ……！

「私のターンですっ、ドロー！
私はドローしたこのカードをデッキに戻して、《ゾンビキャリア》を墓地から特殊召喚！」

【《ゾンビキャリア》　攻　４００　／　守　２００】

――来る！！

「レベル2のイーバトークン3体に、レベル2のゾンビキャリアをチューニング！
合計レベルは8、これで私はギガンテック・ファイターを特殊召喚しますっ！！」

【《ギガンテック・ファイター》　攻　２８００　／　守　１０００】

「……アッー」

またか。
また貴様か。
またお前は俺の前に立ち塞がるのか。
――あえて言わせてもらおう。

「ま　た　お　前　か　ッ！！」

「ギガンテック・ファイターとカオス・ソーサラーで、
カバリストとサイコ・コマンダーを攻撃しますっ！」

「カバリストの効果を発動！　こいつが戦闘で破壊されたとき、
ライフポイントを８００支払うことでデッキからサイキック族モンスターを手札に加える！
俺が選択するのは――《サイ・ガール》！！」

「な」

「さ……サイ・ガール？」

……わーい何か皆驚いてるよー。

まあ俺もびっくりだけどさ。基本的にサイ・ガールを手札に加えるようなことはしないし。

普段なら間違いなく、壁にもなりうる優秀な《クレボンス》を選ぶ。

衝動的につい☆ついやっちまった、というところかな。

だって可愛いんだぜ。サイキック族と思えねえよ。

……まあカームとかウィンダとかも可愛いサイキック族だけどさ。

「え。あ、あう……ターンエンドですっ」

「……このエンドフェイズ、俺は伏せ（リバース）カード、サイコ・トリガーを発動。

墓地のメンタルシーカーと、テレキアタッカーを除外して2枚ドロー。

そして、俺のターン、ドロー……」

「な、なんか和真のやつ、目に見えて元気が無くなってねえか？」

……そりゃ元気だってなくなりもするさ。

何でギガンテック・ファイターが出てくるのぜ。

2回のデュエルで2回ともだぜ？　これ、どういう仕打ちだよ。

さっきはカタパルト・ウォリアーの引導火力でごり押しできたけど、

このデッキじゃそれも厳しいものだと言わざるを得ない。

「……あ」

――と。

そんなことを考えた折に浮かぶ妙案。

現在の手札枚数は４枚。そのうち一枚はサイ・ガール。

そして伏せカードには……。

……充分に、やってみる価値はある。

それに何よりも、面白そうだ。

そう考えると自然、俺の口元に笑みが浮かんでくる。

……ついでに言えば、喉の奥から気持ち悪い笑いが漏れた。

「くっくっく……」

「な、なんか和真のやつ、さっきからちょっとおかしくねえか？」

「……思ったようなカードが引けなかったのかしら……」

「だとしてもああはならないでしょ」

……うん。今後、あの気持ち悪い笑い方は封印で。

「俺は手札から、《サイ・ガール》を召喚！」

【《サイ・ガール》　攻　５００　／　守　３００】

「と、とうとうヤケになっちゃった！？」

「更に俺は手札から、速攻魔法、《イージーチューニング》を発動！
墓地のサイコ・コマンダーを除外することで、その攻撃力分、サイ・ガールの攻撃力を上昇！」

サイキック族のチューナーには、１０００を超える攻撃力を持つものが二枚も存在している。
特にサイコ・コマンダーによる上昇幅は相応に高く、《地獄からの使い》とまではいかずとも、
かなりの爆発力を得ることが可能だ。……よって、俺は1枚ながらもこのデッキに挿し込んでいる。
元々、除外を利用する型のデッキだ。サイコ・フィール・ゾーンとの相性もそれなりに良い。

「俺は更に、手札から《サイコ・ソード》を発動！
俺のライフポイントが相手より低い場合、その差の分、
２０００ポイントまでモンスターの攻撃力を上昇させるカードだ。
これにより、サイ・ガールの攻撃力が更に２０００ポイントアップ！」

「こ、攻撃力３９００……？　サイ・ガールの本来の攻撃力は確か……」

「……５００、だったはずよ」

爆発的に上昇していく攻撃力。
流石に驚きが隠せないのだろう、周囲がざわめき始める。

臨戦態勢を取るサイ・ガール。
……サイコ・ソードが妙に大きく見えるのは、その背丈のせいだろうことは間違いない。

「で、ですけど、サイ・ガールの攻撃力じゃ、私のライフポイントは０には……」

「――バトル！」

「無視ですかっ！？」

「俺は伏せカード（リバース）を発動――《バトル・テレポーテション》。
これは、自分フィールド上にサイキック族モンスターが1体のみ存在するときに発動できるカードだ。
……その1体だけのモンスターは、直接攻撃（ダイレクトアタック）を可能とする」

「あうっ！？」

そう。俺は先程、たった３００とはいえ……きっちりと、ダメージを与えた。
３００。残りライフポイントは、３７００。
サイ・ガールの攻撃力は――３９００。

「これで終わりだ！　サイ・ガールで直接攻撃（ダイレクトアタック）！！」

……えーっと。何か丁度いい技の名前とか無かったっけか。
光ってる剣を持ってて、女の子で――。ふむ？
超能力というかサイキック族で？　まあ見た目は魔法少女だが……。

――サイキック・斬？

――スターライ○ブレイカー？

――マスターズ〇ーク？

――次元斬（ディメンションスラッシャー）？

――超電磁砲（レールガン）？

――最強の魔法（にくたいげんご）？

――アサルトキャノン（コジマ粒子砲）？

……。

……。

「――直接攻撃（ダイレクトアタック）ウゥウゥウ！！」

「何で2回言ったの！？」

その必要性を感じたからだ！！

このままでは俺の気分の赴くままにとんでもない厨二センスの技名が付いて――否、憑いてしまう！

それどころか一部のネーミングに危険を感じた！

高速で飛び立つサイ・ガールの体が、ギガンテック・ファイターやカオス・ソーサラーに近づくにつれ、

徐々にその速度を増して――更には、徐々にブレていく。

瞬間――消えた。

アクセルシンクロかッ！？

いや、違うけど。

次の瞬間、サイ・ガールは宮田さんの眼前に出現していた。

サイコ・ソードを振り上げ――打ち下ろす。

「きゃあっ！」

そして、デュエルの終了を告げるブザーが鳴り響く。

――これで、ようやく、この日消化すべきデュエルは全て終了した。

右手を胸の前に持っていき、軽く振る（スナップ）。

――なんともやり遂げた感のある、この清々しい気分。

そんな良い気分に浸っていられたのは、委員長が始業のチャイムが鳴ったことを俺たちに告げる、その瞬間までだった。

6束目：戦術（後書き）

はい。どうも枠です。相変わらず頭沸いてます。
というわけで今回は宮田ＶＳ御堂でした。
今回の御堂の使用デッキは除外ギミック入りの【サイキック族】。
対して宮田さんのデッキは【レティキュラント】。次元斬入ってます。
どっちも割合好きなデッキなので楽しく書いてました。
最後？　あれは単にやりたかっただけです（

で、御堂のデッキ内容は、とにかく最新パックのＥＸＴＲＥＭＥＶＩＣＴＯＲＹで登場したサイキック族を使ってます。
サイ・ガールは当然のこと、静寂沈黙寡黙の三種もきっちり入ってます。
それでなおかつこれまでのサイキックサポートも投入。
……事故らないほうが不思議ですが。
サイコ・トリガーは使いやすいですね。このデッキならドローソースとして3積みとまではいかずとも、活躍はしてくれます。
逆に除外されないサイコ・チャージが少し使いづらく……まあそれはともかく。

宮田さんのはえげつない感じの【レティキュラント】です。
基本的な動きは小説の通り。現実ではあれに更に色々なものが絡みます。
【カオス】のような構築でもありますね。次元天斬のギミックを取り入れたら更にそうなってしまうとも言う……。
ＴＦで組んでみたんですけど、上級過多で事故が多いのなんの！
手札で腐る上級モンスター。
レティキュラントが墓地に落ちてないのに来る除外カード。

来ないダーク・グレファーｏｒ終末の騎士。
まんま動きが次元斬。

……ええい、宮田ゆまは化物か！？

まあうまい具合に動けば相応に強いんですが。
それこそ、この愚作の通りにぽんぽん上級が飛んできて、
更にドロードロードロー。ファンデッキとしては強い部類かと。
結構なお値段になりそうですけど。

なにはともあれ、今後どんな伏線が出ることやら……我ながらちょっと展開が予測不能になってきました。

それではまた。

7束目：廃寮

彼は、毎夜の悪夢に悩まされていた。

悪夢――非常に性質（タチ）の悪い悪夢だ。

自分が見ず知らずの女――いや、男だろうか。
とにもかくにも、何者とも知れぬ、「誰か」に、抵抗すら許されず、
ただ殺される悪夢。

あるときは斧で首を叩き切られ。

あるときは紐で絞め殺され。

あるときは拳銃によって撃ち殺され。

あるときはダルマのように四肢をもぎとられ。

あるときは体中の血液を抜かれ。

あるときは配電盤の誤作動で感電死。

またあるときは、風呂の中に沈められて溺死させられた。

耐えられない、と思う。
それが一週間にも続く頃――彼は、有名な霊能力者に相談を持ちかけた。
自身が殺される悪夢を詳細に語った。

そこで提案されたのが、まずは家――マンションの部屋の中を洗いざらい調べてみること。
霊能力者の付き添いの下、彼は自室の探索を始めた。

そうして出てきたのは――髪。

髪。髪。髪。髪。髪。

排水溝。配電管。床下やクローゼットの隙間に至るまでに敷き詰められた――髪。

悪霊。

霊能力者が、戦慄（おのの）いたようにして呟く。
霊がいる、と。

そしてこれは、その証拠だ、と。
そして――また、祓わなければならん。とも。

彼は快諾した。そうしなければ、彼はまた、いつまでも悪夢にうなされることとなるだろうから――。

そうして、霊能力者に部屋を祓ってもらっていて――数十分。
彼は、部屋の外で終わるのを待っていた。でなければ、精神的に参ってしまいそうだったからだ。

そうしているうちに。

ゴトッ、と。

音が聞こえた。

何だ。

分からない。

見てみなければ。

彼は、そうして扉を開いた。

そうして、そこにいたのは――死体。

これまで自身が見せ付けられ体験させられた、
ありとあらゆる方法で死に至らしめられた――霊能力者だったもの。

悲鳴すら上がらない。

悲鳴を上げてはならない。

何故なら、そこには――。

「……って、何でお前たちは皆隠れているんだ」

「「「「ひぃぃぃぃ……！！」」」」

この日。

俺たちは何の気無しに怪談話をしよう、という話に行き当たり、隣室の十代、翔、隼人、そこに俺を含めた４人で、レッド寮の食堂

を使って怪談を話していた。

ちなみに、ルールはごく単純。
適当に引いたカード、そのモンスターに記述されたレベルの恐ろしい話をする、というもの。

俺の引いたカードは《地天の騎士ガイアドレイク》。レベル１０。

……つまり、レベル１０の怖い話をしろ、ということだったのだが……。

「御堂君、その話はヤバいよ！　絶対ムリ！」

「そ、そそそ、そうなんだな和真。どこで聞いた話だか知らないけど、
それはちょっと、迂闊に話すべきものじゃないような気がするんだな」

「そ、そうだぜ和真……かなりビビったじゃねえかよ」

……そんなに驚くような話だろうか？
委員長や青葉さんにこういうことを話したら笑われたんだが……。

「おやおや、なんだか楽しそうなことをしてるようですにゃー？」

と、気付けば大徳寺先生が俺たちの背後に立っていた。

どうやら一部始終見られていたらしい。時間外の食堂の使用、――厳禁と言うほど厳しくはないんだが、まあそれなりに注意を受けるだろうことは間違いない。

……でもないか。この人は基本、何かと寛容なひとだ。

「どれどれー？　っと……これはどういうルールなんですかにゃー？」

「えっと、山の中から一枚引いて、そのモンスターカードのレベルに応じた怪談をするんです。

さっきの御堂君の話は、ガイアドレイクでレベル１０の怪談でしたよ」

「じゃあ私も――にゃ？」

「「「「おおっ！？」」」」

大徳寺先生が引いたカードは――レベル１２、《Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）》。

最高レベルのカード……そんなレベルの話が、果たしてこの世に存

在するのか？

そんなことを考えつつ、大徳寺先生の話を聞いていく。

――曰く、この島には昔使われていたはずの廃寮があるとか。

――曰く、そこで幽霊が出るとか、行方不明者が出たとか。

――曰く、実際に行こうにも、既に立ち入り禁止の札が出されているとか。

――曰く、それは噂が真実だから――とか。

実際のところはよく分からないが、ともかく「実際にあった話」としての語り口は巧妙で、

俺も少しばかり恐怖を感じるほど――ではあるものの、

終わった後の大徳寺先生の「にゃー」で気抜けしてしまった。

まあ、いつものことではあるんだけど。

そしてここで伏せカードオープン！　《十代の悪癖（リバース）》！

何ぃ！？

これは、十代が面白そうな話を聞いたときに強制的に発動されるのさ！

この効果により、十代は確実に件（くだん）の廃寮に向かうこととなるだろう！
そしてこの場にいる俺や翔、隼人は、この効果に半強制的に巻き込まれる！

／（＾ｏ＾）＼ナンテコッタイ

＊　＊　＊

……そして十分と経たない内に、俺たち４人は廃寮の前にやってきていた。

オッサン思うんだけど、いくら行動が早い方がいいって言っても、これは流石に早すぎやしませんかね。
や、別に連れてこられたことに対して文句は言わないけどさ……。

「うおおおぉぉ、すっげえ……」

「ひぃ……アニキぃ、やめとこうよ探検なんて……。
もし呪われちゃったりしたらどうするのさ！」

「そ、そうなんだな十代。や、やめておいたほうが、い、いいと、思うんだな」

隼人には一度でいいから「おにぎりが食べたいんだな」と言わせてみたい。
……なんて小ネタはともかく。

妙に爛々とした目付きで廃寮を眺める十代。
対照的に、怯えた様子で十代を引きとめようとする翔と隼人。

俺は中立の立場のようなものだ。別に引きとめはしないが、そこまで積極的にはなれない。
……ただでさえ、立ち入り禁止の廃寮だ。素行不良で退学なんてことになったら目も当てられない。

かと言って、肝試しが嫌いというわけでもない。……中途半端な人間だなぁ、俺は。

「あれ？　明日香じゃねえか」

「あら、十代。それに翔くんに隼人くんに御堂くんも……あなたたちこそ何してるのかしら。
　この廃寮は立ち入り禁止よ？」

「あ、アニキ、立ち入り禁止だって。じゃあ本当にやめといたほうがいいよ～……」

……それで折れるようなやつじゃないからなぁ……。
翔、悪いが諦めろ。十代の性格は良く言えば自由奔放。悪く言えば自分勝手だ。
いざという時のための備えはしてあるにせよ、何が起きるというわけでもない。

「じゃあ明日香は、そんな立ち入り禁止の寮の前で何してたんだよ」

「私は……」

明日香は俯くようにして足元に目を向ける。
そこに落とされて――いや、手向けられているのは、一輪の花。

「兄が、ここで行方不明になったの。
いつか帰ってくるんじゃないかって……だから、こうして花を飾ってるの」

「行方不明だって……！？」

雲行きが怪しくなってきたな。
それどころか、犯罪の匂いがプンプンするぞ。

これ、遊戯王の世界のはずだよな？

「それなら、こうしよう。俺たちは、その手がかりを探すために、あの廃寮へ行く。
遊びじゃなく、捜索なら立ち入り禁止の場所に入ったって、そうそう文句も出てこないと思うけど……？」

「ダメよ。クロノス先生がこのことを知ったら、目の仇にされてる十代は、
きっと何らかの処分を喰らうことになるわ」

「……よく言うじゃないか。『バレなきゃ犯罪は成立しない』って」

「外道！？」

……いや、まあ冗談なんだけどね？
冗談として受け取ってくれるかどうかはともかく。

「ま、大丈夫だって！　そんな長いことといるわけじゃねえし、
何より明日香のためにもなることなんだから、咎められる筋合いもないしな！」

「そういうことだな。俺はお目付け役として付き添ってくる」

「……もう、勝手にするといいわ」

ふてくされたようにそっぽを向く明日香。

……どことなく嬉しそうにも見えるのは、自身の兄のことを本気で考えてくれている、と思ったからだろうか。

＊　＊　＊

そうして数分。俺たちは廃寮の中を散策していた。

びくびくしながらもついてくる翔や隼人の姿が痛々しい。

が、そこはやはり友情ということだろうか。十代の叱咤激励で気力を復活させるのは大したものだ。

仕方ない。ここは少し助け舟を出してやるか。

「翔、隼人。基本的に、幽霊というのは迷信だ」

「「え？」」

「昔から言われてきたことだが、そもそも科学的に『幽霊』の存在

は実証されていない。
その殆どは、カーテンが揺れた、だの、影が映りこんだ、だの、隣室から光が差し込んだ、だの。
そういった『見間違い』が殆どだ。幽霊の声がした、なんて報告にしても、
風が吹き込んだことによる聞き間違いということが多い。ほかの可能性にしても、
どうせ誰かが何か告げたことに対する過剰な反応だろう」

「で、でも、それにしても怖いッスよ……！？」

「人間としては正常な反応だろう。そもそも、何故暗闇が恐ろしいのか、
そういう部分から話す必要があるが――理由は、五感の内最も重要、
かつ、人間が外界の情報を得るために、最も多く用いるのが『視覚』だからだ。
それが利かない暗闇を恐れるのは当然……必然とも言えるな」

「じゃ、ああ何で御堂は、そんなに落ち着いてるんだな？」

「慣れてるし」

「「慣れっ……！？」」

……死ぬより怖いものがあるものか。

最近は忘れていた。

常識では計り知れないことだが、俺は一度死んだ人間だ。

一度だけ。――少なくとも「死」というものを経験している。

それに比べれば、この程度の暗所に恐怖は感じない。

――というよりも、既に恐怖という感覚が麻痺しているとすべきか。

あんな鮮烈な経験をしたんだから、ある意味では仕方の無いことだが。

少々の出来事に対しては冷静でいることができる、とも考えられる。

……って、それだと俺も幽霊みたいなものか？

そういえば、ＧＸにもＤＭにも５Ｄ’ｓにも精霊の存在は言及されてたし……。

ってことは、非常識な出来事もありうるのか？

「……」

まあいいや。訂正はしない。

これは以前から語り継がれてきた常識なんだから。

ところで、この寮では「闇のゲーム」を研究テーマとすることで存続していた寮であるらしい。

寮の各所に見える壁画や資料。それらを総合して考え、そういった

結論に至ったのだが――。
しかし、何故こんなものを放置しているのだろう？
この内容が、これから先の世のために秘匿すべきものであることは間違いない。
……だというのに、何故？
――いや、あるいは――。

そうしているうちに、十代が何かを見つけたようだ。
壁に近づき、俺たちを呼んでいる。

「あ、おい、翔、隼人、和真！
これ、見てみろよ！」

「どうした？」

「これ……誰だろうな。１０ＪＯＩＮなんて書いてあるけど」

それとなしに写真を覗き込む。
……と同時に、寮の前で出会った人物のことを想起する。

天上院明日香。

目元や髪型、顔型など、どことなく面影を残す容姿。

――これだけで判断はできないものの、この写真に写る青年が、明日香の兄だと判断することは可能だ。
少なくとも、俺はそう感じている。

……つーかＧＸの前半の展開忘れかけるんですけど。
当事者になったからそういうことを思い出す余裕が無い、とすべきなのかもしれんが。

「証拠品として持ち帰ろう。明日香に見せて何も無ければそれでもよし。
――もしもこの写真の男が明日香の兄なら、何かしらの手がかりになるかもしれない」

「そうッスね。他にも何かあるか探してみた方が良さそうッス」

「……あれ。カードが落ちてるんだな？」

――と、隼人が床に落ちているカードを拾い上げ、その絵柄を確認する――。

「《エトワール・サイバー》、なんだな……？」

「エトワール・サイバー？　って、明日香のカードじゃねえか！？」

「こっちには《ブレード・スケーター》もあるッス！」

「ってことは、これ……明日香のデッキかよ！？
まさか明日香、ここに来たのか？」

……この状況を鑑みるに、そう考えるのが自然だろう。
いや、だとしても、何故デッキが散らばっている？

廃寮に入って数十分。そろそろ目が暗闇に慣れてきた頃だ。
周囲を見渡し、何か手がかりがないか探していると――あった。

周囲には埃が山のように溜まっているが、廊下の一部分には溜まっていない。
それどころか、埃の一部は崩され、何かが引き摺られていったような跡がある。

「……三人とも、カードを全部回収しておいてくれ。
廊下の方に、誰かが引き摺られていったような形跡がある。
これを追っていけば明日香がいるかもしれん」

「ほ、本当だ！　アニキ！　隼人君！」

「おう、分かってるぜ……！」

無事でいろよ、明日香――とでも考えているのだろう。
十代の目に闘志の火が灯る。

……そうしてしばらく。「足跡」を辿って廃寮の中を歩いていくと、唐突に開けた空間に出た。

開けた――闘技場とも実験場ともつかぬ、暗い空間。
おおよそ、人間の佇むに不適格なそこに――　一人、男が立っていた。

2メートルは超えようかという長身に、全身を筋肉で武装したかのような、頑強で横幅のある肉体。
帽子で隠しているのは禿頭か。
黒衣を羽織るその姿は、最早禍々しいとすら感じられる。

「ふっふっふ……よく来たなァ、遊城十代ィィィ……」

「何っ！？」

そうして放たれる、地の底から響くかのような低い声――。
……ＣＶ．強力若本。

……。

俺が胸中で巨大な衝撃を受けている中、男は話を続ける。

「貴様たちの探している女は、あそこで眠っているゥ」

「な……明日香ッ！！」

「返してほしくば……この私、タイタンと、互いの命を懸けた闇のゲームをしてもらおうぅ！」

「闇の……ゲーム？　何だそりゃ？」

「……アニキ、さっき読んだ資料の中にあったでしょ」

「いっけね。忘れてたぜ」

曰く、闇のゲームとは――。

まず第一に、互いの生死、あるいは体力や精神力。そうでなくともそれに準じた「何か」を賭すもの。

それは便宜的に「ゲーム」と呼称されはするものの、本質的には「戦争」「闘争」にほぼ準じる。

起源は古代エジプト。その時代では魂そのものを賭けており、命そのものを「バー」と呼称した。

今で言うライフポイントのようなものか。
当時の戦士はそれらを用いることで「闇のゲーム」を行っていた。
これを、デュエルモンスターズを用いて再現しようとした試み――らしい。
だが。

「……不可能だろう？」

「何ぃ……！？」

「少なくとも、それは『不可能』だと結論付けられた。
はっきり言ってやろうか。『闇のゲームは存在しない』」

「ぐ、ぬううぅぅ……！？」

「アカデミアの優秀な教師が、十年単位で研究しても一切手がかりを見つけることができないのに、
何であんたみたいな人間が『できる』って言えるんだ？　普通は不可能だ。
……それに何より、仮にそんなことができるんだとしたら、
それを学会に発表でもした方が儲かるだろ。こんな場所には来ねーわな」

悔しそうな顔でうめくタイタン。
そうして、胸元から取り出すのは――。

「貴様ら、コレを見ろぉぉう！！」

「それは！？」

タイタンの取り出したもの――それは、黄金の三角錐。
――かつて、千年パズルと呼ばれたもの。

「メッキ剥がれかけてるぞ」

「何ィ！？　どこだぁ！？」

「おい十代、偽物らしいぞ」

「貴様、騙したなぁ！？」

カマかけてみるもんだな。一発で露呈しやがった。
実はアホだろう、こいつ。

「貴様ァ……それならば貴様からまず闇に葬っ――」

「1、1、0……あ、警察ですかー？」

「貴様ァ――――――――！！？」

俺の握っていた携帯電話をひったくられそうになる――も、寸前で避ける。

これでも身体能力は人並み以上だ。ガキの頃からの鍛錬が役に立ったな。

「ええ。あ、はい。詐欺と誘拐と暴行未遂と――」

「ちょ、まっ、やめてくれぇぇぃ！？」

「通報しました」

電話を閉じ、タイタンに向き直る。

……どこか泣きそうになってるのは気のせいだろうか。

「……御堂君、怖いッス」

「はっはっは。何を言うかね翔クン。世の中ありとあらゆることがデュエルで片付くわけが無いのだよ。
それこそこんな犯罪じみたこと、国家権力の介入によって締めくくられるのが普通だろ」

「最近御堂君が怖くなりつつあるッス！？」

怖いとは何だ怖いとは。至極簡単に事を収めるにはこうすべきじゃないのかね。

「まあ、さっき俺が通報してたのは嘘なんだが」

「ぬぅ……ならば闇のゲームを」

「本当に通報するぞ」

「すみません」

土下座。
大の大人が土下座か。しかもこんな場所で。
笑っちゃうぜ。フフーハハハー。

「……で、何でこんなことをした？　明日香には何もしてないんだな？」

「ああ、それは無論……元々、私はただ遊城十代と闇のゲームをしてほしいと言われただけなのだ。気絶はさせたが外傷は無い」

「充分だ」

頼まれたということは、誰か裏で糸を引く人物がいるということだな。

クロノス教諭か誰か……って、消去法で考えれば、間違いなくクロノス教諭だが。

教育委員会に訴えれば勝てそうだな。話の筋としてそれはできないが。

「どうせ催眠術か薬かで『闇のゲーム』を詐称してただけだろう。それを別の方面――催眠療法や医学に役立てることもできるんじゃないのか？」

「……むう……」

まあ、これはあくまで俺の知りうる常識の範囲での話なんだが。
もしかすると、それ以外にも何かできるかもしれない。

……まあ、こんなゴツい医者にかかりたくはない。

「そこでだ。今から十代とデュエルしてもらおう。
あんたが勝てば見逃してやる。当然、通報もしない。
……が、負ければこれまでの罪を償って、別の道を歩んでもらう。
これでどうだ？」

「なるほど。折衷（せっちゅう）ぅ案ということか……」

受けるなら、別にいい。受けなくとも俺はただ通報するだけだ。
命の懸かっていないデュエルだし、十代なら嬉々として受けるだろう。

それに、タイタンも人間だ。
いつまでも、「もどき」の闇のゲームを続けて、それが露呈したときのリスクは考えたことはあるだろう。
畏怖されている今ならば、まだいい。そのうち都市伝説にでもなって自然消滅するだろう。

が、仮にバレたとしたら？

詐欺師の悪名はみるみる間に広がり、いつしか表舞台にも顔を出すことができなくなるかもしれない。

そうでなくとも、被害者からは袋叩きに遭うだろうし、依頼も消える。
金は稼げなくなるだろうし、それ故に生活も成り立たなくなる。
――そうして待っているのは、死、以外にはありえない。

「面白ぇ、やろうぜタイタン！」

「ふむぅ……いや待て。遊城十代ぃ。私は――そこの少年。
君とデュエルをしてみたいのだが――どぉうかね」

「――俺？」

と。タイタンが指差すのは――俺？

「「「和真（君）？」」」

「そう、お前だ。――名ぁ前は、何と言ったか……」

「……御堂和真だけど」

「そぉうか。それでは御ぃ堂。私はお前にデュエルをぉ申し込む！」

……。

……。

ゑー。

ゑー何この展開。

普通そこは十代とデュエルするでしょうよ。
そこで俺に向かいますかタイタンさん。

何コレ。誰か状況説明を希望したい。

「いいじゃねえか、和真。やってやれよ。俺たちが見といてやるからさ！」

「……。いや、別に悪くはないんだが……俺でいいのか？　十代はデュエルしたかったんじゃ……」

「相手さんの指名なんだぜ？　だったら仕方ねえよ」

謙虚な十代。……ちょっと吐き気が。

いやいや、ちょっと待てよ。俺がやれと？
はっはっは、そんな馬鹿な。

「ンな馬鹿なッ！？」

「いや、馬鹿も何も、相手から直接指名してきたんだし……いいじゃねえか」

「いやいやいやいやいやいやいや」

ここは普段勝率８割はある十代が行って華麗に勝利を収めるべき場面だろ！？

何でモブキャラ街道まっしぐらの俺が挑まれなきゃなんねえの！？

なんなの馬鹿なの死ぬの！？

俺が提案したことだからか！？

タイタンに現実を見せ付けたからか！？

もしかして俺が標的！？

やっべーやっべー！？

とりあえず深呼吸。

周囲を軽く一瞥しながら――とにもかくにも、一言。

「……とりあえず、外に出てからにしよう。
なんとなく――ここは居心地が悪い」

これは紛れも無い本音だ。
闇のゲームなんてオカルトの部門を研究していた場所だからか、この場所は異様に居心地が悪い。
暗い――黒く塗り潰されているようなこの景色が、俺にそんな錯覚を与えているのだろう。

でなくとも、原作では、確かこの場所は重要な場所だったはずだ。
そのときどきに応じたターニングポイントになりうる……そんな場所だったような。

……いや、今は気にしても仕方がないか。
何はともあれ、タイタンとのデュエルに集中すべきだ。

ここで俺が勝ってタイタンを闇から引きずり出せば――憂いが一つ消える。

――セブンスターズ。

それだけは、俺の記憶に残っていた。
徐々に薄れてくる記憶の中でも、やはり、重要な部分だけは覚えているらしい。
誰がどんな人間か――そういった詳細な事実は記憶していないが、

構成員は覚えている。

当然、二期も、鮮烈な記憶を刻む三期も。

四期も……おぼろげにというレベルじゃない。しっかりと記憶している。

俺のこの行動が、もしかすると原作を破壊する結果になってしまうのかもしれん。

……いや、そもそも俺がいること自体、この世界にとっては異常なのだろう。そこは間違いない。

俺はまず間違いなく「異物」だ。俺が存在すること、恐らくはそれを経ることによって、

この世界は「ｉｆ（もしも）」の可能性のままに突き進んでしまったのだろう。

その証拠がまず万丈目だ。

俺の知る万丈目という男は、お調子者だが決めるときは決めるという男だった。

が、この万丈目は少し違う。

冷静で地位に頓着はなく、あらゆる場面において強さと孤高を追い求める者。

――そんな違いだ。

そして今も、俺は本筋から外れたことをしでかそうとしている。

具体的には、十代が消化するはずだったタイタンとのデュエル。
……何故、俺はこんなことをしたのか？
強制的にでも、十代にやらせるべきじゃなかったのか？
そうでなくとも、あの場所でやるべきじゃないのか。

よくは分からない。が、なんとなく――。
なんとなく、こうすることも必要なことだったのではないかという思考がある。
少しくらいは、俺の自由にしてもいいんじゃないか。

――それで、もしかすると他人の人生を犠牲にすることになりかねないのに？

……分からない。
もしかすると、俺が介入してしまったことにより、十代が成長することなく終わってしまうかもしれない。
誰かが「いなかったこと」になってしまうかもしれない。
俺のせいで死ぬような人間がいるかもしれない。

……だったら。
もしかすると、俺の判断は間違っていたのだろうか？
原作に関わってみたい、と思ったことは間違っていたのだろうか？
デュエルアカデミアを受験しようと思った事実が、そもそも間違っていた？
――であれば、俺の転生そのものが間違っていた？

何も分からない。

……何も、分からない。
分かりたくとも、理解できると思えない。

何故？　何故？　何故？

疑問が脳内を埋め尽くしていく。
いや、そもそもそれは疑問なのだろうか。

何も分からないままに、俺はこのまま「オリジナル」と呼ぶべきものを破壊してしまってもいいのか？

俺は問いかける。

……本当に俺は――御堂和真という人間であっても、いいのだろうか。
以前の俺のままでいいのではないだろうか。
以前の――■■■■という人間のままで。

……いや。

こうして名前すら思い出せないのが、何よりの証左か。

今、ようやく、なんとなく理解した。

……今の俺と昔の俺は、別の人間だと言うことを。

結局、違う人間だ。
元の世界の自分が、「死」を経験したことによって切り離されてしまったからこそ、
俺はあの頃の「自分」を忘れていってる。

名前はもう思い出せそうにない。

――いや、記憶として、記号としてのその名を告げることができない、とするべきなのか。
一人の人間としての「■■■■」という名前は消えた。

――多分、そういうことなんだろう。

16年。
よく保った方だ。
顔はなんとなく思い出せる。年齢も、経歴も、それ以外のあらゆるデータもが。
記憶も、経験も、自分が何をしてきたかも覚えている。記憶がある。
ただ、名前は消えて無くなった。

多分、これが世界に順応するってことなんだろう。

これから先、ゆっくりと時間をかけて以前の「■■■■」という人間は完全に消えてなくなる。

それは、きっと俺が――。

いや、今からそんなに先のことを考えても仕方がないだろう。
いずれ分かることだ。
考察は後回しにしておく。

――今は、奴とのデュエルに全力を注ごう。

7束目：廃寮（後書き）

枠です。
今回は特にこれといってデュエルもなく、
漫然と突き進んでいってしまいました。

やあ、ギャグなのかシリアスなのか分かりゃしませんね（
前半は若干ギャグのつもりで書いてたんですけど、後半になるにつれて徐々にシリアスに。
アルェー？
しかも妙な伏線を張ってしまいましたよと。
どうやって回収するべきだろう（
まあ既に回収位置は定めてあるんですけど。

というか、ここまでの間にどれだけ伏線張りましたっけ。
……もう5つ6つあるんじゃねえのか、って勢いですね。

とはいえまだまだ続きます。
若輩者です故、改善点などありましたらどしどし指摘お願いいたします。
……ルールミスとかね！↑
勘違い多いんですよ俺。

それでは今回はこのあたりで。

8束目：生成（前書き）

お久しぶりです。
今回のデュエル内容に関してですが、
ルールや効果を勘違いしていた部分を手直ししたため、
色々とおかしな部分が見受けられます。
その点、ご了承いただけると助かります。

それでは本編をお楽しみください。

8束目：生成

「準備はいいな？」

「ああ。始めようではぁ、ないか」

相変わらずの渋い声で告げるタイタン。
デッキをデュエルディスクに収め、展開。
そのまま宣言を行う。

「「決闘（デュエル）！！」」

「私の先攻だ……ドロー！
私は手札から、《インフェルノクインデーモン》を召喚するぅ！」

【《インフェルノクインデーモン》　攻　９００／守　１５００】

タイタンがディスクにカードを叩き付けると共に、
闇色のマントを纏う、女性型の高位悪魔（デーモン）が姿を現す。

――こいつ、【デーモン】デッキか。

ライフコストを要求する代わりに、確率に応じて、対象を取る効果を無効にするカード群。
となると、対象を取る効果は可能な限り使わない方が良い――ってことだが。

「でも、ライフコストがかかるんだな？」

「そうだ。だからこそ私は更に、フィールド魔法、《万魔殿（パンディモニウム）―悪魔の巣窟―》を発動ぅ！
この効果によって、デーモンたちのライフコストを払わずに済むのだよ。
更に、戦闘ぅ以外でデーモンが破壊されたとき、そのレベルよりも低いモンスターを、
デッキから手ぇ札に加える能力も持つ……これこそが高位悪魔（デーモン）のホームグラウンドだ」

俺たちの周囲が、まさに「悪魔の巣窟」とでも表現すべき禍々しい様相に変貌する。
明るくはあるものの、そこに昼間のような清々しさは無い。
言うなれば――地獄の業火によって照らされているような気持ちの悪さ、とすべきか。

ライフコストの踏み倒しを行える――。似たような効果を持つ《血の刻印》と違い、
フィールドの全域に効果が及び、ライフコストも必要なくなるこち

らの方が便利なのだろう。

「私はカードを2枚セットし――ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

「このスタンバイフェイズ！　私のインフェルノクインデーモンの効果が発動ぅ！
　自分の場の『デーモン』と名のつくモンスター1体の攻撃力を1000ポイントアップゥ！
　私はインフェルノクインデーモンを選択する」

……成程、相手のターンでも発動する効果か。
そして、今のインフェルノクインデーモンの攻撃力は1900……下級のアタッカーに匹敵するな。

「メインフェイズに入る。俺は手札から、《ジェネクス・サーチャー》を守備表示で召喚」

【《ジェネクス・サーチャー》　攻　1600　／　守　400】

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

「ほぉう……では私のターンだ、ドローぅ！
そしてインフェルノクインデーモンの効果が発動ぅ！
再度、インフェルノクインデーモンを選択！　これで1900の攻撃力だ……。
そして更に、私は手札から、《ジェノサイドキングデーモン》を召ぅ喚！！」

【《ジェノサイドキングデーモン》　攻　2000　／　守　1500】

「っ……」

「ジェノサイドキングデーモンは、戦闘で破壊したモンスターの効果を無効にするぅ！
行け、ジェノサイドキングデーモン！　炸裂！五臓六腑ぅぅ！！」

攻撃宣言と同時、ジェノサイドキングデーモンは自らの腹を突き破り、
内臓を蟲に変えて向かってくる――ってなんじゃそりゃぁ！？

「く、《くず鉄のかかし》を発動！　相手のモンスターの攻撃を無効にする！

そして発動後、このカードをセットし直す……」

「対象を取る効ぅ果のようだな。では、ダイスを回そう。
2・5が出ればその効果は無効……破壊だ！」

出るな出るな出るな出るな出るな出るな出るな出るな……

「出た目は――運が良いなぁ、3だ。よって攻ぅ撃は無効となるぞ」

見てて気持ちの良い絵面じゃねえ。あれで直接攻撃（ダイレクトアタック）されたらと思うと……ぞっとしないな。

「ではインフェルノクインデーモンで攻ぅ撃！」

インフェルノクインデーモンの爪により、守備体勢を取っていたジェネクス・サーチャーが砕け散る。
――だが。

「ジェネクス・サーチャーが戦闘によって破壊されたとき、デッキから1500以下の攻撃力を持つ『ジェネクス』を特殊召喚できる！
俺は、《ジェネクス・ワーカー》を特殊召喚！」

【《ジェネクス・ワーカー》　攻　1200　／　守　1200】

「成程ぅ……それを成功させたいがために、私のジェノサイドキングデーモンの攻撃を防いだか……
では、ターンエンドとしようではないか」

「俺のターン、ドロー！」

この瞬間、インフェルノクインデーモンの効果が発動し、同じように攻撃力が上昇――。
タイタンはインフェルノクインデーモンの保全を狙ったのだろう。
同モンスターの攻撃力が上がった。

「俺はジェネクス・ワーカーの効果を発動。このモンスターを生贄に捧げ、
手札から『ジェネクス』を特殊召喚する！　来い、《ジェネクス・ブラスト》！」

【《ジェネクス・ブラスト》　攻　１６００　／　守　１３００】

ワーカーを踏み台にするようにして姿を現すのは、扇風機のような形状のモンスター。

……この姿で機械族じゃなくて魔法使い族だと言うのだから、おかしな話だ。

「こいつの特殊召喚に成功した時、デッキから闇属性の『ジェネクス』を手札に加える。

俺が選択するのは、《ジェネクス・コントローラー》だ。そして、そのままこいつを通常召喚！」

【《ジェネクス・コントローラー》　攻　１４００　／　守　１２００】

「ぬっ……まさか貴様ぁ……！？」

「そうだ。レベル４のジェネクス・ブラストに、

レベル３のジェネクス・コントローラーをチューニング！

吹き荒れろ、《ウィンドファーム・ジェネクス》！！」

【《ウィンドファーム・ジェネクス》　攻　２０００　／　守

１６００】

そこに現れるのは、ジェネクス・ブラストをいくらか巨大にしたかのような、
――恐らくは「風車」を模した形状のモンスター。

「ウィンドファーム・ジェネクスの効果を発動！
手札を1枚墓地に送るごとに、フィールド上にセットされたカードを1枚破壊できる。
俺は手札の《スペア・ジェネクス》、及び《ジェネクス・ガイア》を墓地に送り、
あんたの場の2枚のセットカードを破壊する！」

「ぬぅあ……！？　私の《冥王の咆哮》と《ヘイト・バスター》がぁ！？」

両方とも戦闘を媒介に発動するカード――厄介だがこれで封殺できた。

「そして、ウィンドファーム・ジェネクスは場にセットされたカード1枚につき、
３００ポイント攻撃力を上昇させる！　俺の場にセットカードが

2枚。
これで攻撃力は――2600！
――バトルだ！　ウィンドファーム・ジェネクスでインフェルノクインデーモンを攻撃！」

「ぬううぅぅん！？」

これで700のダメージ。……そして、厄介なインフェルノクインデーモンは消えた。

「ターンエンド」

「私のターン、ドローゥ！
ふむ……手札から魔法（マジック）カード発動だ。《トレード・イン》。
この効果により、私は《プリズンクインデーモン》を墓地に送り、カードを二枚ドローゥ！！」

手札交換――いや、恐らくは、プリズンクインデーモンを墓地に送るためにやったな、あいつ。
他にレベル8のモンスターがいなけりゃ大事故起こすだろ。

「そして私は、魔法（マジック）カード《死者転生》を発動ぅ……この効果により、
手札の《マッド・デーモン》を墓地へ送り、《インフェルノクインデーモン》を手札に加える……」

チッ……強化の布石か。
いや、インフェルノクインデーモンもプリズンプインデーモンも、両方とも強化に至るまでにはタイムラグがある。
そこを衝（つ）くことができれば、どうにかなるかもしれん。

「私はインフェルノクインデーモンを再度召喚……守備表ぅ示だ」

【《インフェルノクインデーモン》　攻　９００　／　守　１５００】

「そしてカードをセットし、ターンエンドぅ」

「俺のターン、ドロー！」

「インフェルノクインデーモンの効果により……私はジェノサイドキングデーモンを強化するぅ！」

……つまり、戦闘破壊を防ぐことを狙ってきやがった、ってことか。
厄介なことこの上ないな。インフェルノクインデーモンを破壊できても、
次のターンのプリズンクインデーモンに繋ぐ――くそっ、厄介だ。

「俺は手札から、《ジェネクス・パワー・プランナー》を守備表示で召喚」

【《ジェネクス・パワー・プランナー》　攻　３００／守　２００】

「こいつの召喚に成功したとき、デッキからレベル３の『ジェネクス』を手札に加えることができる。
俺はもう一枚の《ジェネクス・コントローラー》を手札に加える」

だが、この程度じゃ攻撃に転ずることはできない。
くそっ、まさかこんなところでパワー不足という弱点を露呈するとは……。

「チッ……バトル！　ウィンドファーム・ジェネクスでインフェルノクインデーモンを攻撃！」

「この瞬間、私は罠発動ぅ！」

「な……罠！？」

「《ヘイト・バスター》！　これにより、貴様のウィンドファーム・ジェネクス、
私のインフェルノクインデーモンは破壊されてしまうが――貴様には、
ウィンドファーム・ジェネクスの元々の攻撃力分のダメージを受うけてもらう！」

「二枚目だと！？　くっ……」

強化されているとはいえ、ウィンドファーム・ジェネクスの攻撃力は２０００。
まだ半分――相手を打倒するには充分だ。

「カードをセットし、ターンエンドだ」

「私のターン、ドローぅ！　そしてこの瞬間、プリズンクインデーモンの効果が発動ぅ！
《万魔殿－悪魔の巣窟－》が存在するとき、
私の場のレベル４以下の悪魔族ぅモンスターの攻撃力がエンドフェイズまで１０００アップする！

ジェノサイドキングデーモンを選択！」

「こ、攻撃力……３０００なんだな……」

「だがまだ足りぬぅ！　私は５００のライフポイントを払い、伏せ（リバース）カード、

《デーモンの雄叫び》を発動ぅ！　この効果により、インフェルノクインデーモンを特殊ぅ召喚する！」

しかも今はスタンバイフェイズ――ということはつまり！

「そしてまた、インフェルノクインデーモンの効果により、同カードが攻撃力をアップだ……」

これで、１９００と３０００の下級モンスターが2体並んだ……ってことか。

畜生、普通に回ってるじゃねえかこいつのデッキ！

「インフェルノクインデーモンでジェネクス・パワー・プランナーを攻ぅ撃！」

「ち……くず鉄のかかしを発動する！」

「もう一度――今度は４。運が良いなぁ貴様……効果は不発だ」

……俺は普段の運気を全てデュエルに使い潰してるのかね。

いや、だとしたらものすごくやるせない気分なんだが。

「では行け、ジェノサイドキングデーモン！　炸裂！五臓六腑ぅ！！」

またも向かう、元・内臓の蟲。

そして粉々になるまでに砕かれる、俺のレアル・ジェネクス・クラッシャー。

……やべえ、気持ち悪くなってきた。

「これで私はターンエンドぅ。インフェルノクインデーモンは、エンドフェイズに破壊されるぅ。

……貴様のターンだ」

「俺のターン……ドロー！

く……魔法（マジック）カード発動！　《貪欲な壺》！

この効果により、俺は墓地のジェネクス・ワーカー、ジェネクス・コントローラー、
サーチャー、パワー・プランナー、スペア・ジェネクスの5枚をデッキに戻す！
そして2枚のカードをドロー！」

幸いにも、タイタンの場に伏せカードは無い。
俺に関しても、手札は十全に整っている。
ならば、やるだけのことはすべき――。

「伏せ（リバース）カード、オープン！　《ロスト・スター・ディセント》！
自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択し、守備表示で特殊召喚する！
そしてこの効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となり、レベルも1つ下がり、
守備力も0となるがな。――故に、ウィンドファーム・ジェネクスのレベルは6だ」

【《ウィンドファーム・ジェネクス》　攻　2000　／　守　1600】
↓【《ウィンドファーム・ジェネクス》　攻　2000　／　守　0】

「当ぅ然、それだけではあるまい？」

「ああ、その通りだ。俺は《レアル・ジェネクス・コーディネイター》を召喚！」

【《レアル・ジェネクス・コーディネイター》　攻　２００／守　１００】

「こいつが召喚、特殊召喚に成功したとき、手札から、レベル３以下の『ジェネクス』を特殊召喚できる！　現れろ、《ジェネクス・ドクター》！」

【《ジェネクス・ドクター》　攻　１５００／守　１０００】

……守備表示だが。

ま、その辺に関しちゃ割とどうでもいい。重要なのは、コーディネイターを場に出すことだ。

「レベル６となったウィンドファーム・ジェネクスに、レベル２のレアル・ジェネクス・コーディネイターをチューニング！

現れろ、《レアル・ジェネクス・ヴィンディカイト》！！」

【《レアル・ジェネクス・ヴィンディカイト》　攻　２４００

／守　１０００】

そうして姿を現すのは、鳥とも凧ともつかぬ、奇妙な形状をした機械のモンスター。
まるでロケットのようなその形状には、どんな意味合いが込められているのやら。

「バトルだ！　ヴィンディカイトでジェノサイドキングデーモンに攻撃！」

「ぬうううっ！」

たった２４００の攻撃力でも、ジェノサイドキングデーモンを倒すには充分だ。
――加え、こいつには追加効果がある。

「ヴィンディカイトが戦闘によってモンスターを破壊したとき、デッキから『ジェネクス』モンスターを手札に加える！
俺は《ジェネクス・ヒート》を手札に加える！」

「ぬうううっ、だが私は手ぇ札から《デスルークデーモン》の効果を発動！
ジェノサイドキングデーモンが破壊されたとき、手札からデスル

ークデーモンを墓地に送り、
ジェノサイドキングデーモンを墓地から特殊召喚できるぅ！」

【《ジェノサイドキングデーモン》　攻　２０００　／　守　１５００】

「――ターンエンド！」

「私のターン、ドロォー！
ふっふっふ……私は場のジェノサイドキングデーモンを生贄に、
現れよ、
《迅雷の魔王－スカル・デーモン》！！」

【《迅雷の魔王－スカル・デーモン》　攻　２５００　／　守　１２００】

――瞬間、周囲に雷が走る。
空間を割り、現れるその姿は――最上位の悪魔。

――否。魔王。

禍々しいその姿からは、強大な力が迸る。

――攻撃力の高いジェノサイドキングデーモンを生贄に捧げた。

それが意味しているのは、恐らく――こいつがタイタンのエースカードだから。
エースとエースのぶつかりあい――それを選択した、ということ、なのだろう。

気付けば、タイタンの口元には楽しそうな笑みが浮かんでいる。
本気でデュエルを楽しんでいるかのような――そんな笑みが。

「ヴィンディカイトは、バトルの対象に選択されない効果を持つ！
そして、俺はくず鉄のかかしの効果を発動する！」

「それでもバトルだッ！！　スカルデーモンよ、その機械を粉ン砕せよぉ！
怒髪天昇撃！！」

サイコロ代わりの炎が灯り、回転を始める。
そうして、それが止まったのは――１の目。

「これでくず鉄のかかしは破壊された……行けィスカル・デーモン！」

振り下ろされるのは、魔王の怒りの鉄槌。

――それにより、ジェネクス・ドクターの姿は跡形も無く消滅した。

「私はターンを終了……さあ御堂和真。貴様のターンだ」

「ああ。俺のターン――ドロー！」

引いた。

この状況に対して――引導を渡すことのできるカード！

「俺は手札から、魔法（マジック）カード、《二重召喚（デュアルサモン）》、発動！

この効果により、俺は2度の召喚権を得る。

そして手札から、《ジェネクス・コントローラー》を召喚！」

【《ジェネクス・コントローラー》　攻　１４００　／　守　１２００】

「《ジェネクス・ヒート》を通常召喚！」

【《ジェネクス・ヒート》　攻　２０００　／　守　１３００】

場に現れるのは、中央に火炎を湛えた、一つの機械。
熱（ヒート）の名のごとく、その身は多大な熱をも発していた。

「レベル５のジェネクス・ヒートに、レベル３のジェネクス・コントローラーをチューニング！
シンクロ召喚！　燃え盛れ、《サーマル・ジェネクス》！！」

【《サーマル・ジェネクス》　攻　２４００／守　１２００】

火炎。
立ち上る火炎が、風景を焼き尽くしていく。
そうして俺たちの前に姿を現すその異様は――「火」。
火力発電所をモチーフとした、蒼炎を纏うモンスター……サーマル・ジェネクス。

「こいつは墓地に存在する炎属性のモンスターの数に応じ、その攻撃力を上昇させる。
今墓地にあるのは、ジェネクス・ヒートのみ。よって２００ポイント上昇！
これで攻撃力は２６００だ。

「２６００……スカル・デーモンを超える……攻撃力――！！」

「――バトル！　サーマル・ジェネクスでスカル・デーモンを攻撃！　リジェネレイトブレイザー！」

燃え盛る火炎が、スカル・デーモンを焼き尽くし焼滅（しょうめつ）させてゆく。

「ぐおおおぉぉっ！？」

「更に、サーマル・ジェネクスが戦闘で相手モンスターを破壊したとき、
墓地の『ジェネクス』モンスター×２００のダメージを、相手に与える！
俺の墓地の『ジェネクス』は８枚！　よって１６００のダメージだ！！」

「――――ッ！！」

スカル・デーモンを破壊した、その勢いのまま――サーマル・ジェネクスは、
タイタンの体を、その蒼い炎で包み込んだ。

「とどめだ！　レアル・ジェネクス・ヴィンディカイトで直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「ぬうううあああああぁぁっ！！」

駆け抜ける、一陣の風。
巨大な質量がタイタンにぶつかり、僅かに残ったライフをも削り取っていく。

そうして、デュエルの終了を告げるブザーが鳴り響く。

終わった――。

軽く胸の前で一度右腕を振る（スナップ）。
そうして、改めて握りこぶしを掲げ――　一言。

「俺の勝ちだ」

――それだけを告げた。

＊　＊　＊

……そうして、数分。
ソリッドビジョンも消え失せた廃寮の前、俺たちは、各々の思う通りにそこにいた。

俺はまたカッコつけしてしまったことに対する後悔にうなだれ。
十代はタイタンの健闘を讃えに。
翔や隼人は遠巻きに俺たちを眺めている。

明日香はというと、未だ目を覚まさないので適当なところで寝かせている。
常春の気候を持つこのデュエルアカデミアにおいて、「寒い」と感じるほど寒いことはそうそうない。
……が、あのまま放置してたら風邪引くんじゃねぇか？

「そうか……私の負ぁけか……」

「おう、だけどオッサン、良いデュエルだったぜ！」

「ありがとうよぅ、遊城十代……そして御堂和真」

「……俺？」

また俺に振るか。頼むから勘弁してくれ。今は先程の過ち（カッコつけすぎてサムいこと）を反省してるんだから。

「私は迷っていた――悩んでいた。このまま、闇の決闘者（デュエリスト）を騙（かた）っていてもよいものか、と。

だが――やはり、それは間違っていたようだ。いつしかそれにも限界は来る。

そうして、自分自身の首を絞める結果にすら繋がることになっただろう。

敗北ですら同様だ。勝っているうちはともかく――負ければ、ことの全てが露呈する。

御堂。先のお前の言葉――身に沁みぃたぞ」

「……いや、俺はただ、言いたいことを言ってやりたいことをやってただけで……。

何も、誰かに褒められるようなことはしてない」

あの時の俺は、どこか楽しんでたフシがあるし。

……何より、あのときの俺の行動は、タイタンにとっては屈辱的なことだった思うんだが。

警察に連絡しようと考えてたのは割とマジだったし。

……廃寮に入る前に明日香も言ってたけど、俺って性格悪いのかな？

「単にデュエルしただけで礼を言われるなんて、俺はそんな人間じゃないよ。
うん。俺はそんな真人間じゃない。欲望だらだら垂れ流しで適当に好き勝手やってる、
……単なるロクデナシだ」

「だが、それだけであれば、他人に道を説くなどしまい？
そもそも私にチャンスなど与えずぅ、そのまま警察に突き出すこともできたはずだ」

……参ったな。何でかは分からないが、どうも俺がタイタンを更生させたかのような雰囲気になってるぞ。
俺のこれまでの行動は、間違いなく打算と経験、これからの先見に基づいたものだ。
もしもこうなったらこうすべき。あるいは、こうなればこうした方がいい。
そんな――くだらない考えから出た行動だ。
褒められる理由も筋合いも、ましてや、そんなことをされるような価値も、俺には無い。

「……そろそろ、その娘も目を覚ますはずだ。そのときに私がいても、邪魔にぃ、なるだけだろう。

これで失礼させてもらうとする」

タイタンは身を翻し、俺たちの元から去るべく、歩き始める。
――と。

「タイタン！」

「むぅ……？」

十代がそれを引きとめ、一声言い放った。

「また会おうぜ！」

じゃあな、でもさよなら、でもなく、「またな」。
……あいつらしい台詞だ。十代のことだから、きっと、次会った時はデュエルだ、
なんて考えてるんだろうな。

俺は片手を軽く上げ、タイタンを見送る。

――これから先、あいつがどうなるかは知らないけど。

……目の前で人が死ぬなんて、見たくない。

だからこそ、これで良かったんじゃないか――俺はそう考える。

「さよならッスー！」

「じゃあ、なんだなー！」

月夜の闇に紛れて消えていく黒衣（タイタン）の男。

――当たり前に見れば、なんだか奇妙な光景ではあるものの。

今の俺たちにとって、その姿は妙に清々しいものに思えた。

そうしてしばらく。数分と経たない内に、明日香が目を覚ました。

「あれ、私は……」

「よお、やっと目、覚ましたか」

「十代……？　それに、皆も……」

寝ぼけているのかもしれない。
焦点の合ってない目を擦りつつ、明日香は周囲を見渡した。

「――あの男は!?」

「そいつなら、もう島にはいねえ。罪を償うって言って、本土に帰ったぜ」

「そ、そう……」

十代の言葉に、どことなく安心したように胸を撫で下ろす明日香。
……ま、正確には、改心したって言うべきだけどな。あれは。

「それと、この写真なんだけどよ……もしかしたら、何かのてがかりになるかと思って」

「え?」

そう言って十代が取り出したのは、廃寮の中で見つけた一枚の写真。
それを受け取った明日香は――恐らくは驚いたのだろう――目を見

開いて、
震える声で十代に問いかける。

「こ、この写真をどこで……？」

「ん？　この寮の中で見つけたぜ。
……でも、ってことは明日香、それ、もしかして……」

「え、ええ。これは……この写真に写ってるのは、私の兄――吹雪兄さんよ！」

歓喜の表情でそれを告げる明日香――。
つまり、これは間違いなく一つの「手がかり」であるということだ。
行方不明者を探す手がかり。
――まずは、その第一歩、ということか。

「……よし、翔、隼人。俺たちは先に寮に戻ろう。
十代は明日香を女子寮にまで送るといい。こんな時間だ。暴漢の類が出ないとも限らないしな。
明日香も十代も、それでいいな？」

「ええ。大丈夫よ」

「おう、任せとけ！」

……よし、これで少なくとも、原作の十代と明日香の関係は保たれるだろう。

俺たちはこのまま帰るとして――そうだな。

「カードの名前でしりとりでもしないか？　しりとりの「り」。《リバースダイ『ス』》だ」

「あ、面白そう。じゃあ僕は……す、《スチームロイ『ド』》」

「俺かぁ。『ド』……《ドル・ド『ラ』》なんだな」

「《ラッコア『ラ』》」

「え、ラでそのままスか！？

えーっと、だったら、えー……《ライトイレイザー》」

そうして、暢気（のんき）に夜は更けてゆく。

闇のゲームの存在も、その資料のことも、今はただ忘れて。

8束目：生成（後書き）

どうも、枠です。
えー……このタイタンはタイタンというよりもヌイヌソです。
つまるところ別人です。大して運はよくありませんのでご注意。

そして私はくず鉄のかかしの効果を対象をとる効果だと覚えてませんでした。
なので、何度かダイス効果が失敗してます。その点ご注意を。

で、なんですが。
今回の御堂のデッキは【ジェネクス】です。
ええ。ジェネクスです。
私が現実で使ってるデッキでもあります。
しかし弱いです。現実ではこんなにうまく回りません。

そもそもジェネクス自体、そんなに強力なカテゴリじゃありません。
魔轟神やフレムベル、ヴァイロンなどと比べると、どうしても見劣りします。
効果の特徴は、「サーチ」の一言でしょうか。
デッキからジェネクスモンスターを引っ張ってきて、隙あらばシンクロ――が基本戦術です。
ガジェットとどこかしら似てる部分はありますね。
そういった点を利用して【ジェネクス帝】というデッキタイプが何度か成績を残してますが……まあそれは別な話。

タイタンのデッキは【チェスデーモン】のまま、プリズンクインデーモンを投入しました。

レベル８のモンスターがいさえすれば、トレードインを使ってプリズンを落としたりできるから意外と強かったりするんですよね。
まあ、やはり現環境、力不足な感は否めませんが。

とりあえずこんなところで。
活動報告の欄に一つアンケートを設置しておりますので、よければ目を通していっていただけると幸いです。

それでは。

9束目：迷宮

ところで見てくれ。こいつの攻撃力をどう思う？

すごく……８０００（サイバー・エンド・ドラゴン）です……。

……じゃねえ！！

じゃねえよ！？

確かに十代がカイザーとデュエルしたし、
その上攻撃力８０００の《サイバー・エンド・ドラゴン》出されたけどこんな展開じゃないぞ！？

むしろ「俺が勝つ」「いや俺が」「俺が俺が」って感覚の融合合戦だったわ！

上級モンスターの打ち合いとか正直もう見たくないっす。
攻撃力８０００がポンポン出てきて、しかもライフダメージほぼ無しとか。

どういう人外の領域にいるんだこれ。チートにも程があるぞ。

そういう訳である日のこと。

まあ前述の話はほぼ関係ない。
いや、あるが、前半部分はほぼ関係ない。
単なる日常を描いただけのゆるーい日のことだ。

珍しく……もないが、十代と翔が校長室に呼ばれた後。
俺はレッド寮に残って、再度のデッキ調整を行っていた。

「そこはやっぱり《イージーチューニング》を入れるべき！
だってチューナーの比率高いでしょ？
だったら、強化のためには投入しても損は無いじゃない」

「あう……《次元幽閉》なら、あらゆる場面において使える万能カードですっ。
迷ったらこういったカードの方が、相手の動きも封じることができて便利ですよっ！」

「《マシュマロン》などは優秀な壁、兼火力として用いることのできるカードです。
そうでなくとも、御堂くんのデッキはより早くチェーンを組むことができます。
《連鎖爆撃（チェーン・ストライク）》も相性は良いと思いませんか？」

……どうしてこうなった。

俺の部屋は元々二人用の部屋である。
当然、一人で暮らすに不便はなく、むしろ広いくらいだと感じているのだが、
今日、この日に限っては、どうにも俺は閉塞感を覚えざるを得なかった。

……なんでって。そりゃ、許容量ギリギリいっぱいの人数まで、
おｐｐ……もとい、俺の知り合いの女子が勢揃いしているからだ。

何度でも言おう。どうしてこうなった。

元々、俺は「あちら側」の世界では、社交能力に乏しいモテない人間だった。
こちらでもそれは同様だ。ただ、コミュニケーション能力はそれなりに改善されてきており、
ようやく、それなりに他人とも何気ない話を交わすことができるようにはなった。

――が、この状況はいかなることぞ。

……まあまずは整理しよう。

俺は今日も、パックを買いに購買まで行った。

そこで青葉さんと偶然出会い、じゃあついでに、ということで一緒にパックを買った。

俺のパックには青葉さんの望むカードがあった。俺は特に必要としていなかったから、

青葉さんにそのカードを渡した。

で、貰うだけじゃあ悪いから、と、青葉さんが俺の部屋に来てデッキの調整を手伝ってくれることになった。

そしてしばらく経って委員長がやって来る。

どうも、委員長もカードを購入にきたようで、

日頃、買い物などがなかなかできないせいか、妙に浮き足立っていた。

で……まあ委員長にしては珍しく、少しばかり周りが見えていなかったせいか、

段差に躓いて転びそうになる。で、そこで俺が割り込みに向かった。

カードパックも買い終わったらしい委員長が、助けてもらってばかりでは癪なので、

ということで、俺の部屋に来てデッキの調整を手伝ってくれることになった。

で、また五分くらい経過。

それなら、ということで寮に帰ろうとしたところで、宮田さんがブルー生徒にからまれていた。

どうにも階級を重んじる生徒らしく、高校からの編入組でも、女子ならオベリスク・ブルーというのが気に入らなかったらしい。

で、ぶつかってしまった宮田さんをカモにして絡んでいた……というのがことの真相とのこと。

まあ見かけたからには助けるべきだろう。
それが人情というものだ。そもそも、男が女に向かって暴力を振るっていいはずもない。

で、「おい、デュエルしろよ」と言いながら向かって行ったら、どうも万丈目と十代がデュエルしていたとき、
邪魔に向かう生徒を後攻1ショットキルしたことが広まっていたらしく、
特に暴力を振るうことも振るわれる事もなく退散。

で、ありがたいけど気持ちだけではいけないとおばあちゃんが言っていた、とのこと。
そうして宮田さんも俺の部屋に来てデッキの調整を手伝ってくれることになった。

……うん。別にギャルゲ的な展開は無いぞ。
フラグも立ってない。というか立つわけがない。俺にどこぞの幻想（1級フラグ建）築士の

殺しの能力があるものか。

ともあれ、部屋が狭いです。
まあ、カードを床に広げてたらそうもなるだろうけどさ。
全員分のカードがあるとか聞いてねえよ、俺。

「……そ、そのデッキ、一応【ジェネクス】デッキだってこと分かってるよ、な……？」

「「「分かってるわ（ます）！！」」」

立場の低い部屋主である。勿論俺のことだが。

ちなみに今回、何故【ジェネクス】を診てもらっているかと言えば――先日のあれ。
タイタンとのデュエルの際、俺の【ジェネクス】デッキは、深刻なパワー不足という欠点を露呈した。
であるなら、それを補うにはどうするか――？
そんな話から出てきたのが、この議論だ。

いや、何となくは分かるよ？
例えば青葉さんの言い分も分かる。打点が足りないなら補えばいい。
そして、チューナーも多い。イージーチューニングを入れても構わないのでは――とも思う。
まあチューナー自体の打点は大して高くないんだけどさ。

そして宮田さん。
攻撃に対する耐性が無いジェネクスにとって、基本的にそういったカードは重用される。
俺がくず鉄のかかしを投入しているのはそういう訳だ。なんてったって先生だし。

委員長。
ジェネクスモンスターは、基本として召喚を前提として効果を発揮するものが殆どだが、
結果的にチェーンを組むようになるような効果も多い。
どういう訳か、俺がフリーチェーンのカードを多めに入れていることを考えても、
１チェーンあたり４００のダメージは、ライフ４０００ルールのこちらの世界では非常に有用だ。

……のだが。

「どれも……何か違うよなぁ……」

イージーチューニングを使っての最大上昇幅は、俺にとっては１４００――つまり、
ジェネクス・コントローラーのそれだ。
しかし、ジェネクス・コントローラーの回収手段もあり、
また、使いまわしてシンクロモンスターを展開することを前提とし

て考えているこのデッキにとって、
除外を強要されるイージーチューニングは少々都合が悪い。

そして、このデッキにおける俺の切り札は、現状全てが「戦闘で破壊して墓地に送った場合」
をトリガーに効果を発動するものばかりだ。
だというのに、除去してしまってはその効果を発揮することもできない。
だからこそ、俺は攻撃を防ぎつつ、相手のモンスターを破壊せずに済むくず鉄のかかしを投入している。
でなければ《炸裂装甲（リアクティブアーマー）》でも投入しているだろう。

直接的にダメージを与えるようなカードも欲しいといえば欲しいんだが、
しかし、2つや3つ程度のチェーン数程度では、
《連鎖爆撃（チェーン・ストライク）》を有効には活かせまい。
であるとしても、
《魔法の筒（マジック・シリンダー）》などを入れたほうが、ダメージソースとしてはより機能する。
攻撃が無効になるというのも大きい。先程の俺の思想にもうまく合致する。

……まあ、こうして意見を出してくれれば、それだけ、俺もその条件に沿ったカードを挙げることができる。
そういう意味合いで言えば、ある意味助かっている――と、言えるだろうか。

ほむ。まあそれはともかく。

先日のタイタン戦、あの時は俺が一人で戦うことになったわけだが、少し状況が違っていれば、あるいは十代や翔、隼人などと共闘していたという可能性もあった。
ほかの生徒と相対するときにしたって同様だ。
もしかすると、これから先に青葉さんや宮田さん、あるいは委員長などとも、
タッグを組む可能性は否定できない。三沢や万丈目、明日香にしたって同じだ。

俺だって使うようなＨＥＲＯデッキは、十代のそれと相性はいい。
……が、他はどうだろう？

例えば、翔と俺のタッグとする。そうした際に使えるデッキは――
多分、ジェネクスくらい。
あいつは機械族を中心に据えている。俺のデッキにそれらしいものは、
このデッキくらいしか無いのだから、それ以外に選択肢は少ない。

隼人や万丈目に至っては、獣族とドラゴン族だ。俺は持ってない。
三沢に関してはなんとかなりそうだが……明日香のデッキ内容がわからないというのがなあ。

青葉さんに関しては、シンクロ中心のサイキックで組めばいいし、
宮田さんとであればとりあえずどんなデッキとでも組める。
委員長なんか、モンスターの少なさを補うように展開力のあるデッキで組めばいいし……。

ふむ。やはり、どういう状況であっても十全に戦うことができるよ

う準備しておくことは重要か。

となれば、ある程度カードが集まっていることが望ましい……か。
少なくとも、今以上にカードが必要そうだ。現状のものではなにかと不足が多い。

……そうなると、今以上に金がいるな。
貧乏学生だった前の世界のことを考えれば、今は十分に裕福な暮らしができてるんだが……。

それなりに、バイトでも始める必要があるかもしれん。

ま、以前の経験はまだ残ってるんだ。その辺利用すれば、ある程度のことは何でもできそうだ。
多分ではあるけど、まあ大丈夫だろう。

「ふむ」

そうと決まれば善は急げ。

俺は、手近な場所にあったノートＰＣを立ち上げ、インターネットに接続。

某検索エンジンに適当な言葉を打ち込み――よし、発見。

「……あんた、さっきから話の輪から外れて何してんの？」

と、俺の行動が目に付いたのか、青葉さんが問いかけてくる。

「ん……ちょっと小遣い稼ぎでもしようかと思って」

「お小遣い稼ぎ？　なんでそんなことする必要があるの？」

「いや……仕送りだけじゃどうにも不足があるし、自分で金を稼いだ方が、
もっと自由に使うことができると思ったから、ちょっとさ。カードを買うって意味合いでもね」

「まあ、アルバイトはそもそも原則禁止されていませんが……どんな仕事です？」

「翻訳」

あまり納得のいっていないような表情で、三人が俺の方を見据える。
……はて、どう説明すべきか。

「んー……例えば、そうだな……日本でしか出版されていない『満足のススメ』という書籍があったとする」

「何その題名……」

「例えだ。

……で、それを別の国の言葉に翻訳して、他国で出版する。

その際に、売れれば当然、作者には印税が発生する。その分け前の一部を、翻訳家が受け取る。

逆も然り。外国でしか売られていない本を翻訳して、こちらで出版するということもできるな。

当然ながら、分け前はそれなり。……まあ、売れる売れないによって給料は変動するし、

即座に金は受け取れないし、税金もかかるしで、割はというと微妙なんだが……。

まあ、長期的な視野で見れば、かなり稼ぎは良い。とりあえず、今一つほど仕事を取り次いだ」

「どこの国の言葉なんですかっ？」

「ドイツ語とフランス語と中国語と韓国語」

「「「……」」」

全員が閉口した。

……まあ、考えてもみれば、それだけの数仕事をこなすこと自体、普通じゃないか。

それに、それだけの国の言葉を覚えてるということにもなる。

加えて言うなら、俺はまだあと英語とロシア語も習得しているが……まあ、それは以前の経験だ。
そもそも、国際交流を主観に置いていた大学に所属していたのだから仕方がない。

「一冊だけじゃないし、それなりに小遣いは稼げるだろ。
ま、ちゃんと納税もするし、波風は立てないようにするさ」

「……無茶苦茶なことをしてますね」

「自覚はある」

オーバーワークと言っても過言じゃないだろう。
とはいえ、普段暇な時間を用いて行っているのだから、それほど苦痛じゃないが。

「ほどほどにしときなさいよ。それで普段の授業なんかに支障が出たら、
それこそ本末転倒だからね」

「ん……まあ、理解はしてるつもりだよ」

親なんかからすれば、「つもり」じゃだめだと言うんだろうけど。
……俺としては、こういう曖昧な表現が通常なんだが。

で、まあそんなことを話していたときのことだ。

唐突に扉が開き、どこか慌てたような表情の翔が姿を現した。

「ん……よう、翔。どうしたんだ、そんなに急いで。
まさかまた女湯を覗いたなんて嫌疑をかけられたわけじゃあるまいな？」

「御堂君は僕をなんだと思ってるんスか！？
違うんスよ、それが僕たち……僕も、アニキも……
もしかすると、アカデミアを退学になっちゃうかもしれないんス！！」

どこか動揺したような雰囲気が周囲に広がっていく。
……確かに、穏やかじゃないが……。

「理由を話してみてくれないか。何か言えることがあるかもしれない」

「そ、それが……」

曰く。
先日、俺たちがあの廃寮に入ったことがクロノス教諭に知られてしまったらしい。
その際、退学になるかならないかという瀬戸際のところ、デュエルで決着をつけよう、という結論に至ったとか。

で、俺や明日香、あるいは隼人がそこに出てきていない理由を簡潔に述べると――曰く。

まず、明日香はそもそも素行優良で、成績もいい。今回のことは、本来であれば厳重注意で様子を見るべきだが、大目に見てくれるらしい。
兄が行方不明になっている事実が大きいのだろう。同情を惹いたとのこと。

隼人は最近は授業に出ていて、問題もそれほど起こしていないことから保留。
ただし、元々危うかったイエロー寮への昇級は、まず消えたと見ていいだろう。

俺に関してだが、まずそもそもの理由は明日香とほぼ同様であるとのこと。
ただし、最近になって持ち上がっていたイエロー寮への昇級は見送られたらしい。
……まあ、俺個人としては何ら問題は無いのだが。

翔や十代は、成績が少々――とは言えないほどに悪く赤点ギリギリ。

そもそも、進級自体も危うい状況にあるのだから、この場合は仕方がないと校長は言う。

そしてその際に、翔と十代がタッグを組み、戦うことになるらしいが――。

「ぼ、僕なんかには無理だよ！　だって、アニキは万丈目君に勝てるくらい強くて、

……でも僕は、同じレッド寮の生徒にも勝てなくて……どうしたらいいのかって」

「……そんなことか」

「そ、そんなことか、って、僕は――！！」

「いいか、翔。自信を持て。お前は十分に戦える」

「え？」

「だからと驕るな。そして、何より勝利に執着しろ。諦めるな。

――そうやって、勝てない勝てないと嘆くだけなのか、お前は。

自分の作ったデッキを貶め続けるな。自分で自分の価値を下げるような真似をするな。

カイザーでも十代でもない俺が言うのは筋違いだがな、お前は、勝てる。

自分自身の全力を相手にぶつけることさえできれば、な」

逆に言えば、それができなければ勝つことはできない。
そして、勝利に執着しすぎても、何一つ得るものは無い。
自分自身を――その立ち位置を見据えてことにあたらなければ、
いつまで経っても勝利は掴めない。

「わ、分かった。アニキとも、相談してみるよ」

「それがいい。実際にデュエルするのは翔と十代なんだから、
俺のところに来るのはそもそも筋違いだしな」

うん、と返答し、翔はさっさと俺の部屋から出て行った。
一瞬か訝しげな視線を送ってきて「女の子連れ込んでる」なんて呟いてたのを、
はたして俺は聞き逃すべきだったのかどうか。
弁解すべきだと思った頃には、既に翔は自室へと帰ってしまっていた。

「……で、それはいいんだけど、何かおかしいと思わなかったワケ？」

と、唐突に問いかける青葉さん。

おかしいとは、何がだろうか？

「そうですね。あれだけオシリスレッドの生徒を毛嫌いしているクロノス教諭のことです。
どんな対戦相手が呼ばれることか……まして、元々レッド生徒である、
御堂君や前田君が呼ばれず仕舞いだということに違和感を覚えましたが」

「そっちはそっちで何か考えてるかもしれないわよ。どうするのよ御堂。
放っておいても大丈夫なのかしら？」

どうだろうな？

クロノス教諭のことだ。たびたび目に入って鬱陶しい二人から、順番に潰していくことを考えたのだろうが――そうなると、俺や隼人は眼中に無いとも考えられる。

だが、ここで十代と翔の補助に回るべく、裏方作業に入ったら入ったで、
またクロノス教諭に難癖を付けられる可能性も、ありうると言えばありうる。

今回の場合、十代と翔の対戦相手が誰なのか、ということも考えて

おくべきか。
いや、それよりもまず、十代と翔のデッキを、崩さずにある程度シナジーを見込める型に整形すべきか。

いや、だがしかし、そもそも十代と翔のデッキの共通点は何だ？
融合――抽象的すぎていまいち分かりにくい。
融合モンスターの召喚？
どうしてもメタ的な考えが浮かんでしまう。

機械族のデッキにも難なく入り、さりとてタッグパートナーのデッキを圧迫しないもの。

……うーむ。難しいな。

さすがに、十代に「俺のＨＥＲＯを使え」なんて言えないし、かと言って翔のデッキを組み替えるのは忍びない。

……あー、俺は一体どうすりゃいいんだ！？

＊　＊　＊

無理でした（´・ω・`）

うん。この麻婆豆腐はサービスだ。まずはこいつを食べて落ち着いて聞いてほしい。
そもそも俺にあの二人のデッキをいじるなんてことは無理だったのさ。

つまり「無駄な努力」ということだね。すまない。

まあ、あれだ。仕方ないね。

そうして、俺たちはデュエル場に来訪しているんだが……。

「迷宮兄弟か……」

十代たちの対戦相手は――何を隠そう、
決闘者の王国（デュエリスト・キングダム）で、かの決闘王（デュエルキング）、武藤遊戯と一戦を交えた、
双子の決闘者（デュエリスト）――迷宮兄弟なのだった。

俺の記憶の限りでは、奴らは《ゲート・ガーディアン》の使い手。
最上級モンスター3体を生贄に召喚する、実質的には一切の効果を持たないモンスター。
強烈なディスアドバンテージをどのようにして回避するのか――そういった点では、
ある意味見ごたえのある決闘（デュエル）だろうと思うが……。

「対戦方式はタッグフォースルール。互い違いプレイヤーが設定され、
ターンを交代していく方式――か。ライフポイントが倍の８００というのも大きいな」

「ああ、それだけ戦略の幅が広がるだろうな……って三沢。
お前いつからそこにいたんだ？」

「最初からいたァ！！」

「お、おお……」

いつになく熱い三沢に驚きつつも、俺はとりあえずデュエル場に視線を向ける。

……額の文字で見分けられるんだろうけど、あれが無きゃごく普通の中国雑技団だよな……。

いや、今はそんなことはどうでもいい。
これから行われる４人のデュエルに注視しなくては。

「「「「　決闘（デュエル）！！　」」」」

「私のターンだ、ドロー！」

迷、と額に記された――つまりは迷宮兄弟の兄の先攻で始まる。

途中でどちらかの見分けがつかなくなりそうだが――まあ、それはともかく。

「私は手札から、《地雷蜘蛛》を召喚」

【《地雷蜘蛛》　攻　２２００　／　守　１００】

「カードをセットし、ターンエンドだ」

高攻撃力の地雷蜘蛛を壁にしてきたか。

……となれば、やはり狙いは三魔神の召喚。

あるいは、あれを壁にしたままに召喚を行ってくる可能性も否定できないが――。

「ぼ、僕のターン、ドロー！」

お、十代じゃなくて翔のターンなのか。
さて、あいつはどういう戦法を見せてくれるかな……？

「僕は手札から、《スチームロイド》を召喚！」

【《スチームロイド》　攻　１８００　／　守　１８００】

「そしてバトルフェイズに移行！
スチームロイドで地雷蜘蛛を攻撃する！
スチームロイドは自ら相手モンスターに攻撃するとき、
その攻撃力を５００ポイント上昇させる！」

「ぬううっ！」

蒸気機関車の形状の「ロイド」が、奇怪な見かけの蜘蛛を轢き倒していく。

――あのソリッドビジョン、子供の教育上、いいのだろうか？
いや、別にとやかく言うつもりは無いが……普段、
教育委員会やＰＴＡなんかの組織は、あれだけ教育がどうのこうのと騒いでいるくせに、

こういうことには目を向けないんだな。

で、迷宮兄弟の残りライフは７９００。

スチームロイドには、攻撃時に５００攻撃力を上げる効果がある。

――が、同時に、被攻撃時には５００攻撃力が下がる。

さて、翔はスチームロイドのデメリットをどう回避……あるいは利用するかな？

「僕はカードを2枚セットして、ターンエンドするよ」

「私のターン、ドロー。私は手札から、魔法（マジック）カード《死者蘇生》を発動。

墓地の地雷蜘蛛を特殊召喚する」

【《地雷蜘蛛》　攻　２２００　／　守　１００】

「更に私は《生け贄人形（ドール）》を発動！

これにより、場の地雷蜘蛛を生贄に――《水魔神ースーガ》を特殊召喚！」

【《水魔神ースーガ》　攻　２５００　／　守　２４００】

早い。破壊されたモンスターすらも逆手に取って、いきなり三魔神の一つを出してきた。
その効果は、相手ターンの戦闘ダメージ計算時のみ、魔神を攻撃するモンスターの攻撃力が、
まったくの無――ゼロになるというもの。

ただし、場に留まる限り一度しか使うことのできない効果故に、
一度だけでも効果を使わせれば、あとは攻撃し放題。その上、他のモンスターには、
その効果を適用することはできない、という弱点はあるが。

「そして、手札から《カイザー・シーホース》を召喚」

【《カイザー・シーホース》　攻　１７００／守　１６５０】

「バトル！　水魔神ースーガでスチームロイドに攻撃！　流水波ぁ！」

「やらせるもんか！　伏せカード（リバース）、オープン！
《魔法の筒（マジック・シリンダー）》！　これにより、攻撃は無効になり、
モンスターの攻撃力分のダメージを――」

「させぬ！　私は兄者の伏せた《トラップ・スタン》を発動！
これにより、場の全ての罠の効果を無効にする！」

「だ、だったら、僕はそれにチェーンして《スーパーチャージ》を発動！
フィールドに『ロイド』モンスターのみが存在し、それが攻撃されるとき、
僕はカードを二枚ドローできる！
これはトラップ・スタンの発動以前に発動したものだから、効果は無効にされない！」

「だが、ダメージは受けてもらおう！」

「くううううっ！！」

これで翔たちの残りライフは６８００……カイザー・シーホースの攻撃を受ければ、
また削られて５１００。厳しい展開になるぞ？

「そして、カイザー・シーホースで直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「うわあああああっ！！」

マズいな、と三沢が呟く。
……だが。

「トラップ・スタンを使わせたんだ。それに、スーパーチャージも無駄にせずに済んだ。
後半にあの戦法を使われていれば、ライフポイントが0にされていた可能性も否めない。
仮にトラップ・スタンを3枚フルに積んでいたとしても、これで残りは2枚。
確実に攻撃を通すためのカードを序盤に1枚を消費させた――と考えれば、
これは逆に好機。……それに迷宮兄弟の弟の手札は、残り2枚。行動は制限されるはずだ」

だが逆に、迷宮兄弟の兄の手札は残り4枚。
何をするにも自在――か。

いや、それを考えれば、十代の手札は次のターンで6枚目。
これだけあれば、この状況から逆転することも容易なはず……だと思う。

「私はこれでターンを終了する」

「俺のターン、ドロー！
俺は手札から、魔法（マジック）カード、《未来融合－フューチャー・フュージョン》を発動！
この効果で、俺はエクストラデッキの《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ダーク・ブライトマン》を、

その素材を墓地に送ることで、２ターン後の俺のスタンバイフェイズに特殊召喚する！」

その効果によって墓地に送られたのは、《Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン》と、
《Ｅ・ＨＥＲＯ　ネクロダークマン》の二枚。……未来融合が手元にあって、
なおそれを選択するということはつまり――。

「そして、墓地に送られたネクロダークマンの効果を発動！
一度だけ、俺はレベル５以上のＥ・ＨＥＲＯを生贄なしで召喚できる！
来い、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エッジマン》！！」

【《《Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン》　エッジマン》　攻　２６００／守　１８００】

「やっぱり、手札にエッジマンがあったか……」

「ああ……でなければ、より多くの融合素材を要求する、
《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　テンペスター》や、より『重い』、
《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ワイルドジャギーマン》を選択するはずだからな……。

やはり、十代の強さはその『引き』にあると見える」

「だけじゃない。選択肢なら他に、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ネクロイド・シャーマン》もある。
なのにダーク・ブライトマンを選択したのは、
スパークマンが通常モンスター故に回収が容易だということもあるだろうな。
特殊召喚の手段も豊富にある。……センスも、目を見張るべきものがあると思うな、俺は」

手札に《Ｏ－オーバーソウル》でも抱え込んでいるのだろうか。
だとすれば、なんて引きだ。これで更に《融合》でもあれば、
あいつは常時デスティニードローをしているようなものだろう。

……つーか、ここまでの手札消費は2枚なわけだが。

「バトルだ！　俺はエッジマンでカイザー・シーホースを攻撃！
パワー・エッジ・アタック！」

「ぬおおおおおっ！」

よし、その選択でいい。
このままカイザー・シーホースを残してしまえば、次のターン、
別な三魔神の召喚を許してしまう。でなくとも、水魔神の効果により、

エッジマンが破壊されていただろう。

「俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！
私は手札から、魔法（マジック）カード《浅すぎた墓穴》を発動。
これにより、互いのプレイヤーは墓地からモンスターを裏守備表示で特殊召喚する」

「……なら、俺はネクロダークマンを選択するぜ」

【《E・HERO ネクロダークマン》 攻 1600 ／ 守 1800】

「私は当然、カイザー・シーホースだ」

【《カイザー・シーホース》 攻 1700 ／ 守 1650】

「そして、このカイザー・シーホースを2体分の生贄に捧げる。
――いでよ、《雷魔神－サンガ》！！」

【《雷魔神－サンガ》 攻 2600 ／ 守 2200】

その言葉とともに、雷を纏う魔神が場に降臨する。
……額？　に書かれている「雷」という文字が、果てしなく間抜けだが。

「雷魔神－サンガで裏守備表示のモンスターを攻撃！　雷衝弾！」

「くっ……！」

雷の魔神から放たれる一撃が、ネクロダークマンを吹き飛ばし、消し飛ばす。
だが、守備表示であることが功を奏し、ダメージは０。
……状況は、未だ悪いが。

「カードを１枚セットし、ターンを終了」

「僕のターン、ドロー！
僕は、《サブマリンロイド》を召喚！」

【《サブマリンロイド》　攻　８００　／　守　１８００】

「サブマリンロイドは、相手プレイヤーに直接攻撃（ダイレクトアタック）できる能力がある！
　これにより、迷宮兄弟に直接攻撃（ダイレクトアタック）！　ディープ・デス・インパクト！」

「ぬう……だが、たかだか８００の攻撃ごとき、どうということはない！」

「そしてダメージステップ終了時、このカードを守備表示にできる。僕はカードを1枚セットし、ターンを終了するよ」

「私のターン、ドロー！
　そして兄者の伏せ（リバース）カード、《リビングデッドの呼び声》を発動する！
　これにより、私は墓地の地雷蜘蛛を特殊召喚！」

【《地雷蜘蛛》　攻　２２００　／　守　１００】

……そんな馬鹿なことがあるとは思えないが――まさか、な。

「そして手札から《コストダウン》発動！　手札の《ダンジョン・ワーム》を墓地に捨て、
　手札の全てのモンスターのレベルを2つ下げる。そして、地雷蜘蛛を生贄に――」

お、おいおいおいおい、まさか、ンな阿呆な！？

「出でよ、《風魔神－ヒューガ》！」

【《風魔神－ヒューガ》　攻　２４００　／　守　２２００】

風を纏う、まさに「風神」の風貌のモンスターが、十代たちの目の前に現れる――。

風。雷。水。

三魔神を本当に、これだけのターンで召喚しやがっただと……！？

「まずはその目障りなモンスターから破壊させてもらおう。
風魔神－ヒューガでサブマリンロイドを攻撃！　魔風波！」

「くっ……」

風に吹き飛ばされ、破壊されていく潜水艦。
……いつになくシュールな絵面だ。

「これでターンを終了しよう」

当然か。今現在、エッジマンを倒す手立ては無い。
……である以上、無駄に攻撃を行うよりは、倒せるモンスターから倒す、
というつもりなのだろうと思うのだが……。

「俺のターン、ドロー！　そしてこのスタンバイフェイズ、
未来に融合を決定されていた、ダーク・ブライトマンが特殊召喚される！
現れろ、ダーク・ブライトマン！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ダーク・ブライトマン》　攻　２０００／守　１０００】

現れるのは、まるで金色の鎧を身に纏ったかのような、
それでいて、明らかに「ヒーロー」であるとは形容しづらい者――。
だが、その態勢は、見るからに守備の構え。
まあ、その効果や攻撃力を鑑みれば当然だろうが。

「……カードをセットし、ターン、エンドだ」

珍しく、うまく動けないとでも言いたげに十代が呻く。
それも当然だろう。相手は、攻撃力を全くの０へと変換してくる、三体の魔神。
いくら強いモンスターを出そうとも、自ら攻撃を行えば、そのモンスターが破壊されてしまう。

そんなのが3体もいるのだ。――仕方がないといえば、その通りだろう。

除去しさえすればいいんだろうが、相手がそれを許すかと言われれば疑問だ。
……どうするんだ、十代、翔。

「私のターン、ドロー！
……おお、クックック……弟よ、お前の2体の魔神、貰い受けるぞ」

「おうよ兄者。好きなように使うといい」

「では。出でよ、我が究極の魔神――《ゲート・ガーディアン》！！」

【《ゲート・ガーディアン》　攻　３７５０　／　守　３４００】

生贄に捧げられた――というよりも、むしろ、積み重なって合体していく三体の魔神。
――そうして現れる、異様。

「攻撃力、３７５０――！？」

「私はゲート・ガーディアンに《ミスト・ボディ》を装備！
これにより、ゲート・ガーディアンは戦闘で破壊されない。
それでは、ゲート・ガーディアンでエッジマンを攻撃！　魔神衝撃波！」

「く……伏せ（リバース）カード、《聖なるバリア－ミラーフォース－》！！」

「無駄だ！　私は手札から、速攻魔法《我が身を盾に》、発動！
１５００のライフコストにより、効果破壊は無効となる！」

「な……っぐわあああっ！？」

これで十代たちの残りライフは３９５０……！

なんて中途半端な数値だ。いや、そんなことよりも、エッジマンが破壊された！
それに、この状態じゃ、十代お得意のスカイスクレイパーが意味を為さない。
……戦闘破壊できない状況じゃ、戦闘ダメージを与える以外に方法は――……ッ！？

戦闘ダメージ……！
い、いや、待て。そもそも、それに翔は気付くのか？
いや、あいつは存外に優秀だ。きっと……多分、気付くだろう。

「ぼ、僕のターン、ドロー！
僕は《ジャイロイド》を守備表示で召喚し、ターンエンド……」

【《ジャイロイド》　攻　１０００　／　守　１０００】

意気消沈しているようだが、判断としては間違っていない。
ジャイロイドは1ターンに一度の戦闘破壊耐性を持つモンスターだ。
こいつがいれば、少なくともあと1ターンは持ちこたえられる。

「私のターン、ドロー！
……私は手札から――《ビッグバン・シュート》を発動！
ゲート・ガーディアンに４００ポイントの攻撃力上昇と、貫通能

力を付与させる！
そしてジャイロイドを攻撃！　魔神衝撃波！！」

「う、うわあああっ！？」

――まずい！
戦闘破壊耐性を持つってことは、つまり「サンドバッグにされやすい」という意味でもある。
それを上手いこと付かれた！　しかも、ゲートガーディアンは攻撃力が上昇しているから、
そのダメージは――３１５０！
つまり、十代と翔の残りライフはたったの８００……これは間違いなく、危険だ。

「ターンを終了しよう」

「くっ……俺のターン、ドロー！
――手札からカードをセットし、《Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン》を守備表示で召喚」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　クレイマン》　攻　８００　／　守　２０００】

「ターンエンドだ」

「くっく……万策尽きたようだな。私のターン、ドロー！
私はこのまま、ゲート・ガーディアンでジャイロイドを攻撃する！」

「マズい、このまま攻撃が通れば、十代と翔は――！！」

「……いや」

十代は今、1枚のカードを伏せた。
それが、あるいは逆転の一手になりうる可能性も、十分にある。

「すまん、翔！
俺は伏せ（リバース）カードを2枚発動！
《エレメンタル・チャージ》！《神秘の中華なべ》！
これにより、俺は場のＥ・ＨＥＲＯの数だけライフポイントを１０００回復し、
神秘の中華なべの効果により、ジャイロイドを生贄に捧げることで、
さらに１０００のライフポイントを回復！　これで俺たちのライフは３８００！」

「ならば、私はダーク・ブライトマンを攻撃する！」

魔神から放たれる、絶対的なまでの力の奔流。
それがダーク・ブライトマンを焼きつくし――しかし、
死の直前にダーク・ブライトマンが一筋の閃光を撃ち放った。

「ダーク・ブライトマンが破壊されたとき、相手のフィールド上のモンスターを破壊できる！
俺が選択するのは――当然、ゲート・ガーディアン！！」

パシィ――と、暗い色の光がゲート・ガーディアンを包み込み、
その存在を消滅させていく。
だが。

「甘い！　私は《死者蘇生》を発動！
破壊されたゲート・ガーディアンを、墓地から特殊召喚する！」

――これで、ある意味振り出し。
ただ、装備カードはすべて剥がれた。
攻撃のチャンスは――おそらく、今しかない。

十代が翔を見据える。
恐らくは、これからすべきことがお互いに分かっているんだろう。

さて、何をしてくれる――？

「僕のターン、ドロー！
手札から、《エクスプレスロイド》を守備表示で召喚！」

【《エクスプレスロイド》　攻　４００　／　守　１６００】

「エクスプレスロイドの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功したとき、
僕は墓地の『ロイド』を2枚回収できる！
僕は、スチームロイドとジャイロイドを回収する！」

「ふん、壁を補充するか。悪あがきに過ぎんな」

「そうだな兄者。時間稼ぎなど、我々兄弟には――」

「違うよ」

「「何？」」

「僕は――僕とアニキは、このターンであなたたちを倒す！」

普段の翔からは想像もできないほど、迫力のある咆哮――。

一瞬、迷宮兄弟がたじろいだように後ずさる。

……あそこまで吼えたからには、あいつ、きっとやるな。

「僕は魔法（マジック）カード発動！　《融合》！！

場のエクスプレス・ロイド、手札のジャイロイドとスチームロイド、

《ネイビィロイド》、《シャトルロイド》の5枚の『ロイド』を融合！

融合召喚！　現れろ、《極戦機王ヴァルバロイド》！！」

【《極戦機王ヴァルバロイド》　攻　４０００／守　４０００】

「「なっ……！？」」

攻撃力――４０００。

翔の持つ、最強のロイドが、その姿を現した。

その深紅の機体には、ゲート・ガーディアンの姿が映り込んでいる。

――まるで、ターゲットを定めたかのように。

「そして、クレイマンを攻撃表示に変更！
――バトル！　ヴァルバロイドでゲート・ガーディアンを攻撃！
そしてこの瞬間、伏せカード（リバース）、《リミッター解除》を発動！
これにより、ヴァルバロイドの攻撃力は――８０００！！」

「「ぐおおおおおっ！！？」」

「これであなたたちの残りライフは４５０……。
これで終わりだ！　クレイマンで直接攻撃（ダイレクトアタック）！　クレイ・ナックル！！」

「「ぬうおおおおおっ！！」」

ビィ――――――――！！

デュエルの終了を告げるサイレンが、周囲に鳴り響く。

勝者となった二人が、握り拳を上空へと付き上げる。

割れんばかりの拍手と歓声が轟音のように鳴り響き、スタジアムを揺らす。

――これで、十代と翔を襲った一連の「退学騒動」は、一応の終結を見た。

あ、俺？
とくにお咎めありませんでした。
ただ、やっぱり昇級は無しとのことです。

……ま、仕方無いね。
これはこれ、ということで。
オッサンとしては、子供たちが無事ならそれでいいんです。

9束目：迷宮（後書き）

どうも、枠です。

……いやあ、なんだかデュエルがあっさり風味な気がしますね。
しかも、何だか翔がいろいろ違う。

自分で書いてて思いましたが、なんだか迷宮兄弟がディスアドバンテージだらけ（
あれだけできるなら、間違いなく他のモンスター使ったほうが強いと思います。

ミスト・ボディは、アニメオリジナルの《闇の守護神－ダーク・ガーディアン》の戦闘破壊耐性の再現です。……けど、まったく意味ありませんでしたね。
ヴァルバロイドは元々直接攻撃できませんので、クレイマン以外で攻撃はできませんでした。ほかにモンスター出せば別ですが。

うん。というか翔のキャラが最早後期か漫画の翔ですね。
そして今回、十代の影がむちゃくちゃ薄い。
どうしてこうなった。

……まあ、ともかく今回はこの辺りで。
それでは。

１０束目：模造

「あのデュエルキング、武藤遊戯のデッキの展示？」

その日。

いつものようにレッド寮……の、俺の部屋に集合していた、俺たち４人は（内訳：俺、青葉さん、宮田さん、委員長）、そんな話題ですっかり盛り上がっていた。

「……だ、そうだ。レプリカだけどな。ちなみに先着１００名までに整理券が配られる。
あとは当日行かなきゃ無いし、何より混雑するだろうから、可能な限り早めに購入すべき、なんて話があるんだが……」

「……って、それじゃあここで話してる暇はないじゃない！？急いで買いに行かなきゃ売り切れる！！」

「あー、ちょっと待ってくれ青葉さん！
そう言うと思って、一応人数分は買ってきたんだ！」

ピタッ、と、走りかけていた動作のままで動きが止まる宮田さん。

……器用なことをするもんだなぁ。

「って、ボクたちの分も？」

「ええ。既に私は貰っています」

「なんだか申し訳ないですけど、こういうときばっかりは少し甘えちゃいますっ」

ひらひらと見せつけるようにして宮田さんと委員長がチケットを取り出す。

……あれ。なんで青葉さんは俺を睨み付けてるんでせう。

「……なんでボクには先にくれなかったワケ」

「え。いやほら、委員長には教室でも会う機会があるし、宮田さんはちょっと前に偶然ブルー寮の前で会って、そのときに渡したんだよ

青葉さんは今日の今日に至るまで会話もしてなかったんだから、仕方ないだろ？」

「……むぅ」

「……ああもう、そんなにむくれるなって。利子（カード）付けるから。

《チューナーズ・バリア》あげるから」

「本当に？」

「身代わり早っ！？　い、いやチケットもチューナーズ・バリアもあげるけど、
最近あなたゲンキンすぎやしませんか！？」

「現実的って言ってよね！」

「御堂さん、この娘反省する気なさそうですけど」

もういいよ、委員長。話しかけられるまで話そうとしなかった俺も悪かったんだし。

……とまあ、そういうのはともかく、
この整理券を手に入れた経緯はこうだ。

先日の進退を賭けたデュエルが終わって数日。

デュエル猿とかいう非現実的な動物が現れ、十代がそれに勝利して山に返したり、

突然サイコ・ショッカーが実体化してデュエルを十代に挑んで来たり、

何故か十代が明日香のフィアンセの座を賭けてテニス部の部長とデュエルしたり、

カードの強盗事件が起きてそれをデュエルで解決したり、

野人がドローパンを強奪していってデュエルで解決したり、

……そんな、もう明らかにデュエル脳全開の日々を過ごしていたわけだが（主に十代が）。

そんな日々も過ぎて今日この頃。

翔が武藤遊戯のレプリカデッキの展示についての話を持ってきたのだ。

まだ時間はあるからと、あいつは十代を待ってそのまま寮に残った。

俺は、いつも世話になってることもあり、3人のためにも整理券を4枚分購入してきた。

……できれば、いつもデュエルアカデミアまで来たいと言っていたあの子のためにも、

もう少し尽力したかったが――流石に、学外の人間をどうにかすることはできなかった。

「……ま、まあ、ボクのこと、話さないでいても忘れてなかった、ってことだし。

一応、許してあげる。感謝しなさいよね」

「あ、うん。ありがとう」

「……あっさりしすぎ」

「へぁ？」

……じゃあ俺は何て返せば良かったんだ？
はいはいツンデレ乙とでも返せば……って、ンな殴られそうなこと言えるか。
こんなに可愛い娘が俺に好意なんて抱いてるわけねーっつーの。
幻想抱くのも大概にしろよ俺。
そのうちその幻想をブチ殺されるぞ。

と、そんなことを考えていると、宮田さんが指をピン！と立て、提案を口にした。

「実は夜になったら、もうデッキの展示はあるみたいなんですっ。なので、みんなで見に行きませんかっ？　整理券は持っているんですから、
きっと大丈夫なはずですっ」

「そうですね……明日は混み合うでしょうから、それも良策と言えそうです」

「……？　委員長、こういうルール違反ギリギリの行為って嫌いじ

ゃなかったっけ？」

「こ、こればかりはその……仕方ないんです。仕方ないんです！」

大事なことなので二度言いましたってか。

まあ、気持ちは分からんでもないけどな。

なんせ、現人神（あらひとかみ）とすら噂される男の持つ武器（デッキ）を、

レプリカとはいえ自らそれを見学できるんだ。

羨望。畏怖。尊敬。

ありとあらゆる感情を一身に受けるそのデッキを見たい――。

それは、ありとあらゆる人間が考えるだろう。

つーか元の世界のストラクチャーデッキなんか、

ただの「再現」というだけで、決して「そのもの」じゃなかったんだ。

実際のものを見てみたいと思うのが普通じゃないか？

まあ、現行環境じゃ禁止級のモンばっかだろうが。

とまあ、そんなこんなで、午後十時前までしばらく待機することにした俺たちは、

そのまま、各々の好きなように過ごし、暇を潰していた。

聞いたところによると、翔がとあるイエロー生徒とデュエルして、

十代の分のチケットを勝ち取ってきたそうだ。
隼人の分も含めて合計3枚。
……俺たちだけで7枚も消費しているんだな、などとは、考えても言えなかった。

＊　＊　＊

そうして午後十時。校舎前。
俺たち――十代、翔、隼人を含めた7人は、既にこの場に集まっていた。
皆、やはり焦れに焦らされたせいか、奇妙なほどの興奮状態に陥っている。
……さすがキング。ここまで熱狂させるとは。
キングのデュエルは、エンターテインメントでなければ――ってこれ未来だったな。自重。

「うおおおぉっ、ワクワクしてきたぜ……！！
まさか、遊戯さんのデッキをこの目で見ることができる日が来るなんて！」

「そ、そうなんだな。あの武藤遊戯のデッキ、どんなものなのか……。

俺も楽しみなんだな」

珍しく、隼人が興奮気味に言う。

そりゃそうだろう。元の俺の世界で言えば、
――少しニュアンスは違うものの、例えば、シモ・ヘイヘ本人に会うことができたり、
もしくはキリスト、織田信長に、直(じか)に出会うようなものだと思う。
俺なら、是非ルーデルに会ってみたいものだが――以上余談。

「アニキ、早く行こうよ！」

「おう！　和真、悪いけど、俺たち先に行ってくるぜ！」

「ああ。あんまり急ぎすぎてコケるなよ」

「分かってるって！　行こうぜ、翔、隼人！」

そうして、十代たちは大急ぎで校舎に入っていく。

……俺たちは、特に急ぐこともないと断じて、歩いて行くことにした。
委員長はかなり焦れているようだが、あまり急ぎすぎても、

また以前のようにコケるという可能性も否定はできない。

特に、委員長はああ見えてどこか抜けた部分がある。

急いで行きましょう→段差→ズザー　のコンボもありうる。赤っ恥ってレベルじゃねーぞ。

「どんなデッキなんでしょうっ。もうずっと気になってて……！」

「……バトルシティのＤＶＤは何度か見たけど、流石に神のカードは入ってないわよね」

「今も武藤遊戯は健在です。もしかすると、こうしている今にも、デッキの内容は変わっているかもしれませんが……一見の、いえ、何度でも見る価値はありますね」

胸の高鳴りが抑えられない、とでも言いたげに、三人が口々に自身の思いを述べる。

……ちなみに。俺の予想を述べるとするなら……だが。

まず、元々のデッキコンセプトが崩れることはないだろう。

《ブラック・マジシャン》然り、《ブラック・マジシャン・ガール》然り、

あれら魔術師（マジシャン）がデッキから外れることはありえない。

切り込み役に《幻獣王ガゼル》、及び《有翼幻獣キマイラ》が入っていることは、
おおよそ疑いようはないだろう。《融合》が投入されていることを考慮すれば、
《バスター・ブレイダー》も同様。

《冥王竜ヴァンダルギオン》《冥府の使者ゴーズ》の存在も考慮できるか。
また、前述の2枚のカードの存在から、《熟練の白魔導師》《熟練の黒魔術師》も、
投入されている確率は大いにある。《クリボー》なんかは当然あると見ていいだろう。

だが、思うに上級モンスターが多すぎる。

《ＴＨＥ　トリッキー》は、手札コストのみで特殊召喚される優秀なモンスターだが、
それだけでデッキが上手く回転するはずもない。

まして、儀式モンスターである《マジシャン・オブ・ブラックカオス》や、
《カオス・ソルジャー》までもがデッキに入っていることを考えれば、
その使用難易度はもはや至難。

これを上手く回すとなると、腕だけでなく、運も大いに絡んでくるだろう。

まあ、今回展示されるデッキがいつのものかは不明だが、だからこ

そ、
知る楽しみがある――と解釈するのが正解だろう。

そうしてぺちゃくちゃと喋りながら歩いゆき、校舎を進むこと数分。
唐突に――その声が響いてきた。

『マァンマミィヤァァ――――――!!』

……悲鳴。
既にこの時点で何者か、ということは特定できているが――それはともかく。

「何、今の声……!?」

「急ごう。何かあるかもしれない」

俺たちは声のしたほうに向かって走り出す。
……まさか、という予感を胸に抱き。

そうしてしばらく行くと、十代たちが部屋から出てくるのが見えた。
その部屋は――丁度、デッキの展示場。

「十代！　何が起きたんだ！」

「た、大変なんだ！　遊戯さんのデッキが盗まれて……！！」

「盗まれた……！？　だったら、さっきの悲鳴は！」

「ああ……多分、クロノス先生が背後から殴られたことにどうにか反応したということの証明だろう」

「そうか……まったく関係ないが、いたのか三沢」

「いましたよ！？」

多分、こいつも同じような腹づもりだったんだろう。
俺たちと鉢合わせることがなかったということは、反対側から来たんだろうが……まあいいか。
ともかく、この男（三沢）の影が薄くなりつつあるのはよくわかった。

「なにはともあれ、今は泥棒……というか、強盗を捜すしかなさそうだな。
十代、隼人と翔はどうした？」

「外に捜しにいってもらってる。俺たちは、校舎の中を捜してるんだけど……」

「いない、か。島の外に出るなんてことはまずないだろう。……この周辺にいるとは思うが、しかしそれでも範囲が広すぎて特定は不可。

なら、分担も効果的か。ただ、大人を一撃で昏倒させる程度には腕力のある相手だ。

女子だけで行動させるのはマズいだろうし……」

「でしたら、とりあえずは現状を維持しましょう。

私たちは今から外に出てきます。遊城君と三沢君は、

このまま校舎を捜してください。

見つけたら、その時点で連絡――ということでどうでしょう」

否定する理由はない。俺たちは誰ともなく頷きあい、各自の向かうべき場所へと向かって走り出す。

ともかく、今は学校の周囲を回ってみることだ。探索範囲はそこから広げていけばいい。

――そうして、十分ほど。

「――うわあぁぁぁっ！！」

突如聞こえた悲鳴に、俺たち４人が立ち止まる。
今の声は――まさか。

「今の声はっ！？」

「あっちの岩場のようです！」

俺の予測が正しければ――あの声は、翔の声ではなかろうか？
悲鳴。ということはつまり、何かしらの被害を受けている――？

地面を踏みしめ、蹴り、その地点を目指す。
そうして、そこで目にしたのは――。

「ハァーッハッハッハッハァ！
すごい……凄いぞ！　俺が！　この俺が、こんなにも強い！
ふ、ふふふ……フハハハハハハ！！」

頭を下げ、落ち込んだように項垂れる翔と、
その直線状――黄色い服に身を包んだ、奇抜な髪形の、高笑い男。

「おい、翔！　大丈夫か！」

崖を滑り降り、翔に駆け寄る。
デュエルディスクを嵌めているところを見るに、
翔があの男とデュエルをしていたようだが……何があった？

「み、御堂君……！」

「よう、数十分ぶり。随分ボロクソにやられたようだな。
……で、お前をボロクソにしたんだろうと思われるあの男は誰だ？」

「む、武藤遊戯のデッキを盗んだ犯人だよ！
デッキを返してもらおうと思って挑んだんだけど、負けちゃって……」

おおよその事情は理解した。
……成程、あいつが泥棒――もとい、強盗か。

とりあえず、ポケットの中のＰＤＡを操作し、十代たちにメールを送る。
これで、あいつらには、犯人が見つかったことが知れるはずだ。

「おい、強盗野郎！」

そう呼びかけると、男は不快そうに高笑いを止め、俺のほうへと向き直った。
……その派手な頭は、ギャグか何かなのだろうか。

「……なんだお前は。」

「通りすがりの仮め……もとい、通りすがりの一般生徒だ。覚えなくていい。
……それはともかく、武藤遊戯の再現デッキを持ち出したのはお前か？」

「ああ、その通りだ」

悪びれもしやがらねえのか。図々しい野郎だな。

「だったら話は早い。とっととそれを返せ」

「そんなに返してほしければ、デュエルで勝負するんだな。
この、伝説の決闘者（デュエリスト）、武藤遊戯の戦術や思考の全てを、
完璧に複写（トレース）したこの俺に勝てるなどと幻想を抱くのなら！」

「……なあ翔、こいつデンパなのか？」

「何ィ！？」

「……そんなでも、神楽坂君の実力は本物ッス。
実際、さっきは僕、手も足も出なかったし……」

とりあえず、これである程度情報は出そろったか。
この男の名前は神楽坂。そして、武藤遊戯の戦術や思考をトレースしたと謳（うた）っている。

そして、この男の持つデッキは、武藤遊戯のレプリカデッキ。
――そして、翔はそのデッキにやられた、と。

なんだか、少しイライラする。
……なんでだろうな？　さっきの高笑いがうっとうしいと感じたからか？
いや、それだけとは思えない。――であるなら、なんだろうか。

……まあ、いいか。

「……いいだろう。やってやる」

「ほう、臆せず向かってくるか。ならば、相手になってやる！」

神楽坂が、自身のデュエルディスクを展開する。

……って、よく考えたら、今俺デュエルディスクなんて持ってないぞ。

どうすりゃいいんだ？

「受け取りなさいよ、御堂！」

――などと考えていたら、崖の上の青葉さんが、ディスクを投げ渡して……。

「どわあああぁぁぁ！？」

勢いよく投げられたそれは、寸分の違いなく俺の顔面に直撃するコ

ースをとっていた。
あと少し反応が遅れていれば、もしかすると直撃していたかもしれない。ぞっとしない話だ。

「……まあ、なんにせよ、これで準備は整ったか」

俺は空のディスクに、一つのデッキを挿し込んだ。
それと同時にディスクが展開、神楽坂の対面に立ち――。

「「決闘（デュエル）！！」」

宣言と同時に、決闘（デュエル）が始まった。
先攻は――俺か。

「俺のターン。ドロー！
俺は手札から、《増援》の魔法（マジック）カードを発動。
これにより、デッキから《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　エアーマン》を手札に加える」

「E・HEROデッキ……アニキと同じ……！？」

そういえば、ＨＥＲＯデッキに関しては、三沢以外には見せたことはなかったか。
ただ、あいつが人に言いふらすことはないだろうし、この反応は当然だろう。

「そして俺は、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エアーマン》を召喚！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン》　攻　１８００／守　３００】

「エアーマンの召喚成功時、デッキから『ＨＥＲＯ』一枚を手札に加えるか、
あるいは俺の場のＨＥＲＯの数だけ、魔法（マジック）、罠（トラップ）を破壊できる。
俺はサーチ効果を使用し、デッキから《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ザ・ヒート》を手札に加える。
カードを２枚セットし、ターンエンドだ」

「ふん、その程度か……俺のターン、ドロー！
俺は魔法（マジック）カード、《融合》を発動！
《幻獣王ガゼル》、《バフォメット》を融合することにより、
現れろ、《有翼幻獣キマイラ》！！」

【《有翼幻獣キマイラ》　攻　２１００／守　１８００】

……早速キマイラを召喚してきたか。

二頭の獣が、射抜くような視線を俺に送る。

存外に早いな。いや、現状、俺が少しばかりもたもたしているだけか？

ま、どちらでもいい。

俺のすべきことは変わらないのだから。

「キマイラでエアーマンを攻撃！　幻獣衝撃粉砕（キマイラ・インパクト・ダッシュ）！！」

３００のライフダメージ……。

しかし、それほどの痛手ではない。必要経費のようなものと解釈すればいいだろう。

これで俺の残りは３７００。

「……エアーマンが戦闘によって破壊されたこの瞬間、伏せカード（リバース）、《ヒーロー・シグナル》を発動！

デッキか手札から、『Ｅ・ＨＥＲＯ』を特殊召喚できる。

《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フォレストマン》を守備表示で召喚！」

【《E・HERO フォレストマン》 攻 1000 / 守 2000】

「ふん……カードを1枚セットし、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！
そしてこのスタンバイフェイズ、フォレストマンの効果を発動！
デッキ、または墓地から、《融合》のカードを手札に加えることができる。
俺はデッキから《融合》を手札に加える」

それにしても、キマイラの効果は厄介だ。
あらゆる破壊に対応し、自身の融合素材の片割れを場に残す。
二回の攻撃ができれば、問題は無いといえるが……。

「魔法（マジック）カードを発動。《戦士の生還》。
これにより、俺はエアーマンを手札に加える。そして再度、エアーマンを召喚」

【《E・HERO エアーマン》 攻 1800 / 守 300】

「効果により、お前の場の伏せカードを破壊する」
「な……俺のミラーフォースが！」

やはりそういう罠か。
というか、魂胆が見え見えで分かり易すぎる。
もう少しポーカーフェイスを身につけろよ。

「そして《融合》を発動！　場のエアーマンと手札の炎属性モンスター、ザ・ヒートを融合！
現れろ、火炎のＨＥＲＯ、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ノヴァマスター》！」

その瞬間に、立体映像として現れるのは――火。
火炎を模した、紅のＨＥＲＯ――ノヴァマスター。

【《Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァマスター》　攻　２６００／守　２１００】

「――バトル！　ノヴァマスターでキマイラを攻撃する！」

「くっ……だが、キマイラが破壊されたとき、
墓地からガゼルかバフォメットを特殊召喚できる！

甦れ、《バフォメット》！」

【《バフォメット》　攻　１４００　／　守　１８００】

同時、キマイラの片割れ――バフォメットが、場に守備表示で特殊召喚される。
ダメージは５００。残りライフは３５００。
……まずは一撃、といったところか。

「ノヴァマスターが戦闘でモンスターを破壊したとき、俺はカードを１枚ドローできる。
――更に、伏せカード（リバース）オープン！　《奇跡の軌跡（ミラクルルーカス）》！
表側攻撃表示のモンスターの攻撃力を１０００ポイントアップ！
そして再度の攻撃を可能とする！
このとき、相手はカードを１枚ドローし、戦闘ダメージは与えられない。」

「……」

無言でドローする神楽坂。
その一方で、落ち着いていたノヴァマスターの炎が、再び勢いを増す。
先程と同等――いや、それ以上に至るほどに。

「ノヴァマスターでバフォメットを攻撃する！」

「くっ……！！」

「そして、バフォメットを戦闘破壊したことにより、もう1枚カードをドロー。

……カードを2枚セットし、ターンエン――」

――と、そうしてターンの終了を宣言しようとしたときだった。

「和真！」

「御堂！」

十代と三沢が、息を切らして走り来る。

俺は「見つかった」ということだけを連絡していたのだが――。

……まあ、今のデュエルの最中に、女子3人のうちの誰かが、この場所のことを連絡してくれていたのだろう。

でなければ、ここに来るはずもない。

「相手は――神楽坂か！？」

「知ってるのか、三沢？」

訊ねる十代。

……いや、同じラー・イエローなんだから、知っててもおかしくはないだろ。

というかそれが普通じゃないか。

「あ、ああ……あいつは、一度見たデッキの全てを記憶してしまうほどの天才なんだ。

ありとあらゆるデュエリストのことを研究する努力家でもあるが――。

だが、それ故に、組むデッキがことごとく誰かのデッキと似て『しまう』」

「そんなやつが、何で遊戯さんのデッキを――って、まさか！？」

「そうだ。あいつは、あらゆるデュエリストを研究し尽くした男――。

武藤遊戯になりきることなんて、きっと造作もないはずだ。

そして、そのプレイングも――」

あの武藤遊戯にも比肩するほどだろう――。

三沢の断言が、静かに周囲に響き渡る。

――だとすれば。

だとすれば、こいつは、高度なプレイングができるというのに、
わざわざ他人のデッキを使ってそれを発揮しているということか？
いや、あるいは――他人のものを使ってでしか、実力を発揮できない？

工夫の術がない？
あるいは――「自分」というものが薄い？

他人になりきらなければ、実力を出し切れない。

――「他人」という殻に籠(こも)らなければ、自分を出すことができない。

いや、だとしても。

こいつの行っていることは、虎の威を借る狐のようなものだ。
他人の権威を借りてでしか、自分の力を誇示できない。

いざ「虎の威」を手に入れれば、それがまるで自身の力であるかのように振る舞う。

本当の自分では、他人に勝つことはできないからと嘯いて。

自分は自分を表面に出すことができないのだとのたまって。

そうして、所詮はただの模造品だというのに、自らがソレだと主張して。

――まがい物。

――偽物。

――フェイク。

――劣化コピー。

ああ、きっとそんな言葉を浴びせかけられたことなのだろう。

だからこそ、「伝説」になりきろうと思った。

だからこそ、「伝説」の威を借りた。――否、奪い取った。

こうしなければ勝てない、と。

これがあれば勝てる、と吠えるのは構わない。

――だが。

だからと、その人物を騙ること――それは、正すべき間違いだ。

ああ、なんとなく理解した。
なんとなく、こいつを見ていて感じた苛立ち。
――それは、俺が未だ、以前の■■■■という人間であろうとしているかのようで――。

つまりは、同族嫌悪。

俺は今も、ずっと■■■■という人間であると感じている。
いや、「勘違い」している。

俺は間違いなくここにいる人間だ。
この場所――この世界の存在だ。

昔の自分が捨てきれず、今も■■■■という人間を気取っている俺と、
今の自分が否定したくて、武藤遊戯という人間を騙っているこいつは――どこか。
どこか、似ているんだ。

だからイラ立つ。
だから嫌悪する。
だから、打倒しなければならないと、本能が告げる。

打ち倒せ、と。

「そうだな」

俺は軽く息をつく。

そして、ゆっくりと神楽坂を見据え――睨み付け、一言を告げた。

「……この勝負、俺が勝つ」

俺とこいつは似ている。

――だからこそ、勝たなきゃならない。

偽物（ニセモノ）は、似非（マガイモノ）で打倒する必要がある。

下手に本物の力で勝っても、こいつは「本物に近づく」努力をすることになるだろう。

それではだめだ。

自分を確立させなければ、いつまでも懲りない。

自分というものを見据えさせなければ、いつまでも「他」であろうとする。

そうなれば――本来の精神は、いつまでも成長しないままに終わっ

てしまう。
子供のまま、歪んだ偽物のまま、確立されてしまう。

「ほざけ！　その言葉、武藤遊戯に勝つことができて初めていうんだな！」

まだ言うのか。
だったら、余計に勝たなきゃならないだろうな。
完膚なきまでに叩き潰し、粉砕し、
もう一度組み立てなおす――でなければ、こいつの認識の矯正はできない。

この男を確実に打倒することを胸に誓い、
俺は先程中断された、ターンの終了宣言を言い放った。

「――ターンエンド！」

１０束目：模造（後書き）

どうも、枠です。
なんだか御堂のキャラクターが安定しない件。
こういうキャラじゃないはずなのになぁ……？；

本当はもう少し厨二病爆発のイタいキャラだったはずなのに、どうしてこうなった。
というかなんだかカミジョー属性が付与されているような。
天然ジゴロで性格浄化能力持ちで……って、もうモロですね。
まあ結構にはっちゃけてますけど。

さて、今回のＨＥＲＯデッキの最大のツッコミ所はといえば、やはり《奇跡の軌跡》でしょう。とはいえ、結構に使い勝手は良いんですけどね。
今回のノヴァマスターとのコンボもそうですし、コンバットトリックにも用いることができます。相手にドローさせるデメリットは致命的ですが、複数のモンスターを戦闘破壊できれば、１：１交換ですし。
で、ノヴァマスターとのコンボができさえすれば、実質的には４：２交換（自分は2ドローと2体戦闘破壊：相手はカード消費1つと1ドロー）です。御堂はそういうロマンカードをよく投入しています。

というわけで次回に続くということで、今回はこの辺で。

11束目：個人

「俺のターン、ドロー！」

神楽坂のターンからデュエルが再開する。
俺の残り手札は3。伏せカードは2枚。
俺の場にはノヴァマスターが存在しているものの、神楽坂の場はガラ空きだ。
一方、あいつの手札はこれで4枚。なにをしてくるか――気になるところではあるが。

「俺は手札から、《マンジュ・ゴッド》を守備表示で召喚！」

【《マンジュ・ゴッド》　攻　１４００　／　守　１０００】

「このモンスターの召喚・反転召喚に成功したとき、
デッキから儀式モンスター、もしくは儀式魔法を1枚デッキから手札に加えられる！
俺は《高等儀式術》を手札に加える！」

高等儀式術――儀式モンスターを召喚する際に用いられるカードの中でも、
最高峰の性能を持つ制限カードだ。それを手札に加えたということは――。

「そして《高等儀式術》を発動！
デッキからレベルが8になるよう、通常モンスターを墓地に送る。
レベル7の《ブラック・マジシャン》と、レベル1の《異次元トレーナー》を、
それぞれ墓地に送り――出でよ、最強の騎士、《カオス・ソルジャー》！！」

【《カオス・ソルジャー》　攻　３０００　／　守　２５００】

「カオス・ソルジャー……！　たった2枚の手札消費で召喚してみせるだと……!?
神楽坂のやつ、あのデッキをああまで使いこなすとは……！」

「ついでだ。その目障りな伏せ（リバース）カードを排除させてもらおう。
速攻魔法発動！　《サイクロン》！　これにより、左側の伏せ（リバース）カードを破壊する！」

「っ……」

破壊されたのは、《自由解放》。
自分のモンスターの戦闘破壊をトリガーに発動し、
相手の表側表示のモンスターを2枚デッキに戻す強力なカードだが、
戦闘で破壊されるより前に破壊されてしまっては意味がない。

「ふ、やはりそういった姑息なカードか……だが俺には通用しない！
カオス・ソルジャーでノヴァマスターを攻撃！　カオス・ブレード！」

「くっ……！」

カオス・ソルジャーとノヴァマスターとの攻撃力の差分、
４００ポイントが俺のライフから引かれていく。
残りは３３００。……まだまだこれからだ。

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！
スタンバイフェイズにフォレストマンの効果を発動！
デッキか墓地から《融合》カードを手札に加えることができる。

俺はデッキから2枚目の《融合》を手札に加える！」

だが、これだけじゃ不足だ。

可能な限り早く、カオス・ソルジャーを処理しなければ……！

「魔法（マジック）カード、《Ｅ－エマージェンシーコール》を発動。

デッキから、Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）を1枚手札に加えることができる。

俺はデッキから、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　オーシャン》を手札に加える。

そして魔法（マジック）カード発動！　《融合》！

場のフォレストマンと、手札に存在する水属性のオーシャンを融合！

現れろ、氷のＨＥＲＯ！　《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　アブソルートＺｅｒｏ》！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ》　攻　２５００／守　２０００】

現れるのは、全身に鋭利な氷柱を装備した、鋭角的なフォルムを持つ氷のＨＥＲＯ。

――絶対零度（アブソルートＺｅｒｏ）。

「Ｚｅｒｏでマンジュ・ゴッドを攻撃！　瞬間氷結（Ｆｒｅｅｚｅ　Ｍａｎａｇｍｅｎｔ）！」

「ちっ……だが、カオス・ソルジャーはまだ健在だぜ！」

「ごちゃごちゃうるさいな。このターン、俺はまだ通常召喚を行っていない。

俺は《Ｅ・ＨＥＲＯ　フラッシュ》を守備表示で召喚し、カードをセット。

……これでターンエンドだ」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ　フラッシュ》　攻　１１００　／　守　１６００】

Ｚｅｒｏの攻撃力は、カオス・ソルジャーには及ばない。

……だが、その方が都合がいい、というのもまた事実だ。

Ｚｅｒｏには、場を離れたときに相手のモンスターを全て破壊する能力がある。

カオス・ソルジャーの攻撃によってＺｅｒｏが破壊されれば、強制的に発動するその効果によって、神楽坂のフィールドは全滅だ。

その効果を知らないわけじゃないだろう。……が。

あらゆる戦術を知り尽くしたと豪語する以上は――それを打ち崩す術を持つはずだ。

「俺のターン、ドロー！

……フッ。バトルだ！　カオス・ソルジャーでアブソルートＺｅ

ｒｏを攻撃！
カオス・ブレード！」
「っ……！？」
カオス・ソルジャーの剣によって貫かれ、アブソルートＺｅｒｏの像が砕け散る。
５００のダメージ。これで俺の残りライフは２８００だ。
――その一方で、アブソルートＺｅｒｏの破片は神楽坂のフィールドに散らばり――。
「Ｚｅｒｏの効果を発動！　こいつがフィールドから離れたとき、相手の場のモンスターを全て破壊する！」
これで、カオス・ソルジャーは破壊された。優位性も、こちらに移る――。
「そんなことくらいは予測済みだ！　俺は伏せ（リバース）カードを発動！
《正統なる血統》！　これにより、墓地の通常モンスターを特殊召喚できる！
さあ甦れ、《ブラック・マジシャン》！」

【《ブラック・マジシャン》　攻　２５００　／　守　２１００】

「ブラック・マジシャン……！　遊戯さんの相棒……！？」

……やはり、蘇生カードを用意してきたか。
いや、それも当然だろう。元々、ブラック・マジシャンはサポートカードが多く、
また、通常モンスター故に、特殊召喚の手段も多岐に渡る。
投入されていない理由がそもそも無いんだ。畜生め。

「ブラック・マジシャンで攻撃する！
――が、その前にこのカードを発動させてもらおうか。
罠（トラップ）カード、《マジシャンズ・サークル》！
魔法使い族のモンスターの攻撃宣言時、互いのデッキから、
攻撃力２０００以下の魔法使い族モンスターを攻撃表示で特殊召喚する！
俺が選択するのは――《ブラック・マジシャン・ガール》！」

【《ブラック・マジシャン・ガール》　攻　２０００　／　守　１７００】

「ぶ、ぶぶ、ブラック・マジシャン・ガールだ！」

……狂喜乱舞する翔。

いや、まあ俺だって、デュエルの最中じゃなければ、ちょっとは喜んだかもしれないけどさ。

……この大ピンチの状況でそう簡単に喜べるか！！

「俺は《幻影の魔術士》を特殊召喚する」

【《幻影の魔術士》　攻　６００／守　７００】

見た目と能力の脆弱さはともかく、その効果は頼もしい限りだ。

……本来は、こうやって出すようなモンスターじゃないんだけどな。

「バトルを続行する！　行け、ブラック・マジシャン！

幻影の魔術士を攻撃！　《黒（ブラック）・魔（マジック）・導》！」

「ぐっ……！！」

これで１９００のダメージ……！
マズいな。とうとう残りライフが９００にまで落ち込んでしまった。
３ケタか。……まあ、まだ残ってるだけいいさ。

「だが、幻影の魔術士が戦闘で破壊された場合、
デッキから攻撃力１０００以下の『ＨＥＲＯ』を守備表示で特殊召喚できる！
俺は《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　アイスエッジ》を特殊召喚する！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ　アイスエッジ》　攻　８００／守　９００】

「ならばアイスエッジから倒させてもらおう！
ブラック・マジシャン・ガールでアイスエッジを攻げ――」

「させん！　速攻魔法発動！　《マスク・チェンジ》！
水属性のＨＥＲＯであるアイスエッジを墓地に送ることにより、
同じ属性のＭ・ＨＥＲＯ（マスクドヒーロー）を特殊召喚する！」

「Ｍ・ＨＥＲＯ（マスクドヒーロー）だと……！？」

こちらの世界では知名度がそう高くないのだろうか。
Ｍ・ＨＥＲＯ言葉に対し、神楽坂が驚きを示す。

十代は――新しいＨＥＲＯだ！　とか言って子供のようにはしゃいでいる。

……知ってる人間と知らない人間がいると見ていいだろうな。

この世界に存在するであろう「ＨＥＲＯ」のカテゴリに当て嵌まるものは、

Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）とＤ―ＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）、Ｅ―ＨＥＲＯ（イービルヒーロー）、

Ｍ・ＨＥＲＯ（マスクドヒーロー）とＶ・ＨＥＲＯ（ヴィジョンヒーロー）の５種類だ。

そのうち、俺が用いるものはＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）と、後者二つ。

……曰く、混成の漫画Ｅ（エ）セＨＥＲＯ、だとか。

ま、どっちでもいいんだけど。使い勝手はいいしな。

「変身（特殊召喚）ッ！　現れろ、《Ｍ（マスクド）・ＨＥＲＯ　ヴェイパー》！！」

【《Ｍ・ＨＥＲＯ　ヴェイパー》　攻　２４００／守　２０００】

「く……攻撃力２４００か。ならば、モンスターが変更されたことにより対象を変更！

ブラック・マジシャン・ガールでフラッシュを攻撃！　黒（ブラック）・魔導（バーニング）・爆・裂・破！！」

「くっ……フラッシュの効果発動！

戦闘によって破壊され墓地に送られたとき、このカードと、

『Ｅ・ＨＥＲＯ』３種類を除外することで、墓地の通常魔法１枚

を手札に加える！
　俺は、アイスエッジとザ・ヒート、Ｚｅｒｏを除外し、《融合》を手札に加える……！」

エアーマンを手札に加えるために戦士の生還を手札に加えるということも、策としては間違っていない。
……が、実際にそれをして、《融合》が手札に来なければ、意味がないどころか窮地に陥るだけだ。
それに、神楽坂の手札はあと１枚。

仮にあれが《クリボー》だとしたら、俺はあいつに勝てない。
……どころか、逆転の一手を許してしまう可能性だってある。
一切の伏せカードの無いこの状況が、言うなればもっとも攻撃に適しているんだ。
――であるなら、攻撃を行わない手は無い。

「ターンエンド。
　……さあ、伝説の前にひれ伏すんだな！」

「……さっきから、伝説だの最強だのと鬱陶しいな……。
　悪いが、少し黙れ」

「何……？」

「伝説だって言うのは、お前の使ってるデッキだろ。お前自身じゃない」

少し使いこなしてると思ったら、すぐにこれかよ。

……調子に乗りやがって。

「お前は武藤遊戯じゃない。……そもそも、誰だって人間は『誰か』にはなれない。

『自分』にしかなれないのが人間なんだよ。仮にお前が武藤遊戯の思考を、

寸分違わずコピーしていたとしても、お前自信の思考が介在しないと言い切れるのか？」

「……！？」

「でなければ、そのデカいことをペラペラと吐き続ける口を閉じろ。

……正直言って不愉快だ。俺は、同じデッキとデュエルするにしても、

『神楽坂』という人間とデュエルしたいんだ。……『武藤遊戯』本人ならいざ知らず。

劣化コピーなんかと戦いたいわけじゃない。それでもまだ吐くなら――」

「――お、お前に、俺の何がわかる！？」

突然発せられる大声に、翔や三沢、女子の身がすくむ。

「どんなに考えても、どれだけ試行錯誤しても、どれだけ悩んでも、他人のデッキの劣化コピーにしかならない俺の気持ちが分かって言ってるのか!?
天才などと謳われ、その一方でコピー野郎と蔑まれる俺の気持ちが分かって言ってるのかよ!?」

「知るかよ。仮に知ってても、俺は同じことを言うぞ」

「貴様……!!」

怨嗟の声が、神楽坂の口から発せられた。

俺の言葉に対する怒りなのか、それとも俺の態度に対する怒りなのかは分からない。

――が、俺はそれにひるむような必要はない。

そもそも、ひるんではいけない。
そんなことをすれば、神楽坂の発言が正当だと言っているようにしか見えないからだ。

俺は、こいつの発言の全てを否定しなければならない。
否定し、打ち崩したその上で――こいつに勝利する。
でなければ、こいつはいつまで経っても、「劣化コピー」以上には

なれない。

「そこで諦めて思考を止めるんじゃねえ！　デッキがどうしても他人のコピーになるだと？
だったら、その上で何ができるかを考えろよ！
その上で更にコピーを重ねて別物にするなんて手もあるだろうが！
劣化じゃなく、より性能を向上させることもできるはずだろうが！
コピーで満足して『自分自身』を捨てるな！
でなければ、いつまで経っても、お前は劣化コピーのままだ！」

「っ……！！」

「俺のターン！」

何か反論したげに目を見開く神楽坂を無視したその上で、俺は自身のターンへと移行する。
元々、あいつはターンの終了を宣言していたんだ。
この程度で、非難される謂(いわ)れも理由もない。
何より、俺はこれで勝つ。

泥臭い根性論の理屈も、精神的な作用も何でもない。
俺は、一つの確信を抱いている。

――これで終わりだ、という確信を。

ドローを宣言し、カードを抜き取る。
そこに描かれているのは――橙の色彩のカード。

――モンスターカード。それも、「ＨＥＲＯ」の名を持つそれ――。

行くぞ、と軽く言い放った。

そうして、俺は１枚のカードをディスクに挿し込む。

「魔法（マジック）カード発動！　《融合》！

場のヴェイパー、手札の《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　クノスペ》、

《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　レディ・オブ・ファイア》の３体のＨＥＲＯを融合する！

現れろ、《Ｖ・ＨＥＲＯ（ヴィジョンヒーロー）　トリニティー》！！」

【《Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー》　攻　２５００／守　２０００】

「トリニティーの融合召喚に成功したとき、攻撃力は倍になる。

よってトリニティーの攻撃力は――５０００！！」

「な、あ……！！」

「トリニティーは３回まで戦闘を行える。

……ただし、相手プレイヤーへの直接攻撃（ダイレクトアタック）はできない」

どこか安心したような表情を見せる神楽坂。

……完全に倒されるということがないからという慢心からか？

――だが。

「これでそのデメリットは帳消しにさせてもらう。
伏せカードオープン！　速攻魔法、《ハーフ・シャット》！
選択したモンスターの攻撃力を、現在の攻撃力の半分にする。
そして、そのモンスターは、戦闘では破壊されない！
俺が選択するのは、ブラック・マジシャン！」

「っ……！！」

「トリニティーでブラック・マジシャンを攻撃！　トリニティー・クラッシュ！」

「く、《クリボー》の効果を発動！　手札からこのカードを捨てることにより、
戦闘ダメージを０にする！」

無数に分裂したクリボーが、神楽坂に向かう光弾を防ぐ。
――だが。

「――さっきも言ったな。攻撃は、３回行えると。
トリニティーでブラック・マジシャンを再度攻撃！
トリニティー・クラッシュ・第二打ァ！！」

「ぐわあああああっ！？」

半分になったことにより、ブラック・マジシャンの攻撃力は１２５０。

……そして、トリニティーの攻撃力は――５０００。

よってその差分――３７５０のライフが神楽坂のライフポイントから削られ、消失。

――０になると同時に、デュエルの終了を告げるブザーが周囲に鳴り響いた。

もう一度、俺は、デュエルが始まる前と同じように、右手を軽く振(スナ)った(ップレ)。

＊　＊　＊

「俺は、間違っていたのか……？」

敗北のショックからか、神楽坂は項垂れたままに俺に問いかけてきた。

――何が、とは問うてこない。

どこからどこまでが間違っていたのか。

その言葉には、そんな問いかけも含まれているからだ。

「ああ。そもそも今回の件については、まず手段が間違っていた。
そして、自分自身ですらない誰かになりきったことにより、結果、
本来のプレイングをしない。もしくはできていないということが
間違っている。
……正直に言って、胸糞悪い。目の前にいる人間とデュエルして
いるように感じない」

「……」

「確かにお前は弱いわけじゃないだろうな。だからこそ、余計にそ
う感じる。
もしもお前が馬鹿みたいに弱かったら、そもそもアカデミアには
いないだろうし、
何より呆れて何も言ってないだろうさ」

本当に弱いなら、そもそも今の翔にも勝てないだろう。
……ま、俺だって、そんなに強いわけでもないけどな。

「自分で考えられないなら、他人の力を借りればよかったんだ。
三沢だけじゃない。ラー・イエローの生徒の誰かにでも、
相談に乗ってもらえば、こんな事件は起きなかっただろうな。
……そうしていれば、きっともっと別な方法も見つかっただろう

し」

少し考えるだけでも、いくつも見つかるものだ。
例えば、デュエルの最中に、その都度最適な思考パターンを再現する。
例えば、先ほども言ったように、デッキ内容を多重にコピーし、相手に悟らせないように、
あるいはそうして自分自身のオリジナルを確立していくこともできただろう。

それができなかったのか、あるいはしなかったのか。

できなかったのだとすれば、する努力をしろ、という結論に至る。
しなかったのだとすれば、単なる怠慢だという結論に至る。

……ま、俺としてはどっちでもいいけどさ。

――と。

そんな折に、拍手が響いた。
そうして岩場の影から現れるのは――カイザーこと、丸藤亮と、天上院明日香。

……いつから見ていたのだろうか。
異様に恥ずかしい姿を目撃されたような気がする。

「か、カイザー……！？」

「盗んだデッキによるものというのは感心しないが――いいデュエルだった。

御堂も、ああまで戦うことができたのは驚いたぞ。

……ただ、説教をするにしても、少し熱が入りすぎていたようだな」

「……すみません」

怒ってた……というか、俺にしては珍しく妙にイライラしてたし、個人的にも暴言のようで、少々反省すべきとは思った。

「そして神楽坂」

「……はい」

「今回の件に関しては、後々アカデミアの方から正式に処分が下されるだろう。

理由はどうあれ、窃盗は犯罪だ。処分は避けられないだろうが……」

「ま、待ってくれよカイザー！！」

と。
唐突に、十代が横から話に割り込んでくる。
――何だろうか？

「こいつ、本当はきっと強ぇはずなんだよ！
今のデュエル見てても、俺はすっげえワクワクした！
だから、退学なんてことには――」

「……分かっている。だから、俺も――いや、俺だけじゃない。
皆で校長に掛け合ってみよう」

「皆？」

そうして俺や十代、神楽坂が周囲を確認する――と。
わあっ、という歓声と共に、数十人もの生徒が、
岩陰や崖の上、様々な場所から姿を現した――って。

ちょっと待てや。いつからそこにいた！？
なんでこいつらはスネーク顔負けの隠密（スニーキング）スキル発揮してんだよ！？
おかしいだろ、普通！？

『凄かったぞー、お前らぁー！！』

『今度は神楽坂本人のデッキともデュエルしたいぞー！！』

『お前らサイコー！　御堂は爆発しろー！！』

ぴぃぴぃと指笛を鳴らしてみたり、腕を振り上げてみたり……。

一部不穏当な発言が聞こえたが、まあ気のせいとしておこう。

混沌とした様相を呈（てい）している、この異様に賑やかな空間の中で、

――ただ、神楽坂は、自身の行動を顧みるように、中空を仰いでいた。

「……これだけの人数、皆抜け駆けしようとして来たのかしら」

青葉さん現実的なセリフを吐かなーい。

「……本、当に……本当に、いいんですか……！？」

「ああ。それは俺ではなく、この歓声が証明している」

「く、う……ぅ……」

本来ならば、一つの「事件」として、
神楽坂が警察に突き出されていてもおかしくはないことだった。
だが……しかし、この雰囲気。
仮にそういった気持ちを抱いていたとしても、何も言えはしまい。
仮に言ったとしても、封殺されることは間違いない。
その事実を感じ取ったのだろうか。
――神楽坂の目から、涙があふれていた。
そうして、しばし。
何を思い立ったのか、神楽坂は涙を拭って立ち上がり、
冷えた夜の空気を思い切り吸い込んだ。
「……皆……本当にすまなかった!!
俺はいつか、研究を重ねて、本当の『俺』のデッキ、
そして、『俺』自信としてあるべき姿勢を見つけ出す!
そのときはきっと、デュエルしよう!」
おおおおおおおおっ!!　と湧き上がる岩場。
――これで、一件落着、といったところか。

「御堂！」

「……ん？」

突然に声をかけられ、そちらを――神楽坂の方へと向き直る。

「その時は、また相手をしてくれ！
きっと、俺は今よりも強くなる！　そしてお前に勝ってみせる！
！」

「ああ、そうだな。
お前が自分自身を見つけることができた、そのときはきっとまた戦おう。
……俺も負けないさ」

――そうして、この日の事件は幕を閉じた。

＊　＊　＊

そしてまあ、いわゆる後日談。

あの後、自らデッキを盗んだことを告白し、
謝罪を行った神楽坂に対するアカデミアの処置は、
３日の停学と１週間の自己謹慎、という程度のもので終わった。

神楽坂は、少々形は違えど、「天才」の一種だ。
その停学期間中、一切の問題行動も起こさず、勉学にも励んでいたため、
オシリス・レッドへの降格も免れたとのこと。

そしてあれ以来、誰かに頼ってみる、意見を出してもらうことも覚え、
友人も着々と増えつつあるとか。自分のスタイルも徐々に変わっているらしい。

コピー戦法は継続。
しかし、その中でも特に相手の意表を突くことを思いついた。
メタが意味をなさなかったり、突然のカウンターを食らったりと、
相手からすれば相当に面倒な対戦相手になったことだろう。

例えば、十代をコピーしてみたとき、
単純に融合ＨＥＲＯというだけでなく、
そこから思いつく派生を試してみることとした。

例示すれば、【フェザーパーミッション】の型にするなど、だ。

勝率も徐々に上がっているらしい。

元々聡明だったことも手伝い、今や三沢に迫るほどの、イエロー寮屈指の実力者――とか。

ま、これで良かった、ってことかね。

「《クリッター》で《E・HERO（エレメンタルヒーロー） フェザーマン》を攻撃！

そして同士討ちしたことによって、デッキから攻撃力1500以下の、

《ハードアームドラゴン》を手札に加える！」

「甘いぜ神楽坂！　伏せ（リバース）カード、オープン！

《ヒーロー・シグナル》！　これにより、俺はデッキから、

レベル4以下の《E・HERO（エレメンタルヒーロー） クレイマン》を特殊召喚するぜ！」

「くっ……《アックス・ドラゴニュート》では勝てない！

ターンエンドだ！」

ちなみに現在、十代と神楽坂が楽しくデュエルしている最中です。

まあ……アレだな。

「終わり良ければ全て良し」ってやつ。

ま、結果的には神楽坂は成長することができたようだし、万々歳…
…かねえ。

「……けど」

偽物（ニセモノ）は本物になることができた。

じゃあ――ここにいる、記憶の残滓（ノコリカス）の似非（マガイモノ）は？

今も変わらずマガイモノだし、何も変わらず俺はこの世界に順応しきれてない。
そして一つの疑問。

――そもそも、順応できることは「良いこと」なのだろうか。

この世界に馴染んでいくごとに、今までの俺という存在は、薄れ消えていく。

今の俺があの俺とは別人であるとは結論付けたものの――それは、本当に良いことなのか。

忘れられればその人間はいなかったことになったのと同じだ。
俺が今、覚えているからこそ――■■■■という人間は、未だ生きている。

逆に、それも良いことなのだろうか？

今の俺に悪影響を及ぼす可能性も否定はできないし、
何よりこの世界にとっては害となる存在であるかもしれない。

そして何より、元より死人である者を覚えていたとして――何があるのか。

何もわからない。

分かる気はしない。

そもそもこんなことが、通常ありうるはずはない。

――はっきり言えば。

俺は神の存在など信じない。信じないし認めない。

そんなものはどこにも存在しない。
心の中にだけいる、役に立たない幻の全能者でしかない。

でも、仮に。

――仮に、俺をこの場所へ送った存在があるとして。
それが神と呼ばれるものであるとするなら――俺は、まずこう言うことにしようか。

「本当の『俺』はどっちだ？」

と。

１１束目：個人（後書き）

定義って曖昧ですよね。
モノマネをしていても、決して本人に「なる」ことはできません。
が、その域が本人のそれに達すれば、本人の役職の代わりとしては務まります。

少し小難しいことを言ったところで枠です。

ということで、前回から今回にかけてＶＳ神楽坂でした。

私個人としては、コピーデッカーはあまり好きではありません。
レシピ通りに作ってみても、そこに技術が追い付いていなければ、結局は宝の持ち腐れですし。

ちなみに私はかなり特殊な……と言っても所詮はビートダウンなんですが。
周囲からすればかなり異質なデッキを使っています。
詳細はまあ言及しませんが、周りの人間がいくらドラグニティを組もうと、
あるいはデブリダンディクイックダンディＢＦ六武でブン回していようとも、
私だけはいつまでも中速デッキを使い続けています。

……勝率は当然微妙なんですけどね。

まあそんなお話でした。
少々個人的な事情も交じっていて申し訳ありません。
それでは今回はこれで。

12束目：乙女

人生とは何事も唐突なものだ――って、これ随分前に言ったな。
どうも、御堂です。爆発しませんしできません。むしろ俺はそれを言う側です。

さて、神楽坂のデッキ強奪事件から幾ばくかの日が過ぎていった。
特にこれといったイベントも何もなく、十代や翔が呼び出されるようなこともなく、
とにかく平和な日々である。

まあ、それでも毎日デュエルをしているのはちょっとしたスペクタクルだが。

……で、まあ話は戻るが、何事にしても、物事は唐突に起こるものだ。
例えば、編入生が突然入ってくる――なんてこととか。

「――というわけで、今日からレッド寮に入ることになったんだにゃー。
皆、仲よくするんだにゃー。ほら、自己紹介」
「……」
大徳寺先生に促されつつ、恥ずかしそうに口元をもごもごさせる少年。
……少年？
いや待て待て。俺はあの顔をどこかで見たぞ。
そう。具体的には半年前とかそのあたり。家を出る前のことだ。
……その日は、そう。お隣の女の子としばしの別れをした日のことだ。
丁度入学式の前。
つーか船に乗る前。
……そう、その名前は――。
「さ、早乙女レイ……で、す」
そうそう。早乙女さんちのレイちゃ――。

「ぬおおぉあああぁぁあぁぁぁあああっ！？」

「うわぁっ！？」

「ど、どうしたんだにゃー御堂君！？
早乙女君びっくりしてるにゃー！？」

「い、いえぇ！？
お、俺にも色々とあるのでごわすですのことよ！？」

「それどこの言葉なのさ！？」

そ、そうなのかにゃー？　などと疑問を口に浮かべつつ、
大徳寺先生はどんどんと話を進めていく。

……ちょっと待て。なんでレイがここにいる！？
いや、百歩譲ってそれはいいことにしてみよう。
仮にこの場にいても、船に乗ってきたとなれば不思議なことはない。
……だが、何故編入生と身分を偽ってまでこの場所にいる！
しかも男装してまで！？　男装してまでえぇ！？
あの子今１０歳……つか小５だよ！？
勉強とかデュエルに関しては、ずっと俺が教えてきたし、なんら不思議なことはない、
つーか今の時点でもかなり勉強はできる方、
アカデミアに混ざっても何ら問題ないレベルだけど！

「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：」

「な、何なんだにゃー！？」

「すみません大徳寺先生！　ちょっとレイ借りていきます！」

「え、ちょ……どういうことだにゃー！？」

「えええぇっ！？」

呆けたままその場に立っているレイを脇に抱え込み、
そのまま寮の外へ。そして誰も見ていないであろう岩場の海岸の方へと降りていく。

そして、その場にレイを立たせ――。

「……何でここにいる！？」

まず真っ先にその疑問をぶつけてやった。

しばし、ぱちくりとまばたき。

そして俺を指さし――。

「か……カズ兄ぃ！？」

「ああそうだ俺だ！
アカデミアに進学するって言っただろうが不思議なこともないだろう！
それより何でお前こんなところにいるんだよ！
しかも男装なんかして……！」

「え、えっとその……実はボク、その……どうしても亮サマに会いたくて……」

「亮？　……そういえば家を出る前も言ってたな。
まあいい。理由は分かった。じゃあどうやってここに来た？
書類手続きも実技試験も、筆記試験もあるだろ？」

「書類は、前にカズ兄ぃに教えてもらった通りに捏造（ねつぞう）したよ。
そしたらすんなりいったし……カズ兄ぃも知ってるでしょ。
ボク、カズ兄ぃに教えてもらったからそれなりに頭もいいし、
実技試験だって、亮サマのためにも突破してきたよ」

「……で、この状況か……？
おじさんやおばさんは、このことを……」

う、と言葉を詰まらせるレイ。

……こいつ、絶対言わないまま来たな。
小学生は地味に時間有り余ってるからなぁ……。

いや、それにしたって、実際にそれを考えて実行するという、
レイのこの異様な行動力も少々おかしいわけだが。

……さて、どうするかなぁ……。

「……カズ兄ぃなら、きっともうラー・イエローとか、
オベリスク・ブルーにいると思って、男装までしてオシリス・レッドに来たのに……。
ううう、これじゃあ計画が破綻だよ……」

俺が教えたからかは知らんが、どうもこの子は妙に難しい言葉を使う傾向にあるようだ。
……しかし、参ったな。

レイは聡明な娘だ。そして何より頑固者でもある。
今はしょげているものの、こうなったらテコでも動かないだろうし、
何より、この場で解消しなければ何が起きるか分からない。
また来るとかなったら、正直に言って面倒は……見るが、
ちょっと困るのは間違いないぞ？

「あ、あの……カズ兄ぃ？」

「……はぁ……お前のことだから、きっと言っても聞かないんだろうな。
だったら、好きなようにやるといい」

「え……！？」

パッ、とレイの表情が満面の笑みに変わる。
……畜生それ色々と反則だろ俺ロリコンじゃないけど。

「どうせ、このまま送り返したとしても、また帰ってくるつもりだろ？
だったら、早く要件を終わらせて帰った方がいい。
おじさん達には俺から連絡を入れておくよ」

「うん……」

「そこが最大限の妥協だ。
……ま、お前のためにも、おじさんたちのためにも、
一応俺も最大限手を貸すさ。……無いよりマシ、って程度だけどな」

「う、ううん。ありがとう、カズ兄ぃ。
実はボクも、何をするかなんて、あんまり決めてなかったし……」

どうせブルー男子寮に忍び込むとか、そういう無茶をやらかすだろうし。
手の届くところで見張っておくほうが、よっぽどいい。

「……悪かったな、レイ。わざわざ外にまで連れ出して……」

「ボクも驚いたよ。何でカズ兄ぃがいるの、って。
それに、ボクに向かってくる視線、いくつかちょっと怖かったし……」

「レイ、その視線を向けた奴の特徴を言ってみろ」

「何する気なの!?」

「やだなあ、そんな物騒なことしないって。
……ちょっと屋上で16ビートのリズムをを刻んでもらうだけさ」

「やめてぇー!?」

……ハッ!?　い、今俺は何を口走っていた!?
まあ落ち着け。何はともあれ、今は食堂に戻るべきだろう。

……まあ、後で16ビートはほぼ確定なんだが……ってちょっと待て?
今のレイに対して怖い視線を送っていたんだろ?

……ってことは、アレか？
男……と思ってるはずの人間に対し、少なからず情欲を抱いた、と。

……よし、スルーの方向で。
あと寮内では可能な限り鍵を閉めよう。
そして何よりも背後に気を付けよう。

とりあえず、そんな話をして数分後。
ようやく食堂に戻ってきた俺たちは、再度大徳寺先生の話を聞いていた。

「えーっと……そういうことですので、
早乙女君は、少なくともラー・イエロー並みの実力はあるんだにゃー。
そんなわけで、アカデミアに慣れたらすぐにあっちの寮に移るはずだにゃー」

「へぇー……ってことは強いのか？」

「実技試験でも相当の成績だったんだにゃー。
慣例が無かったら、オベリスク・ブルーだったかも……」

それはともかく、と。大徳寺先生は、軽く咳払いした。

「早乙女君には、御堂君と一緒の部屋で過ごしてもらうにゃー。
どうも二人は知り合いみたいですし、元々御堂君の部屋は二人部屋ですしにゃー」

「了解しました。それじゃあ、一旦解散ということで？」

「そうですにゃー。じゃあ、今日はこれで解散！
皆、あんまり遅くまで起きてるんじゃないんだにゃー」

……実にアバウトな寮である。
いや、まあこんなものだろうけどな。普通は。

自室が十代たちの隣ということもあってか、俺とレイが部屋に戻る間も、
十代や翔、隼人は、しきりにレイに話しかけていた。

「なあ、レイ。相当強いって聞いたけど、どんなデッキ使うんだ？」

「え、え……っと」

「楽しみは後に取っておいた方がいいんじゃないか。
今聞いて分かっても、デッキ内容が知れる楽しみが無いだろう」

「それもそうだな……くぅー！
でもやっぱ気になるぜ！」

相変わらずデュエルのことしか頭にない十代。
いや、まあこれはこれで助かるんだが。

「御堂君と知り合いって言ってたけど、どういう関係なの？」

「そ、それは……」

「いも……弟のようなものだ。
俺の方が早く生まれた関係で、勉強やデュエルも教えてた」

「へぇー。そういう偶然なんてあるんスね」

一瞬、バレる危険のあるような言葉を言いかけたが、挽回はできた。
……まあ、翔や十代にバレると思ってはいないが。

「じゃあ、俺たちは自分の部屋に戻ってるから」

「分かったんだな。それじゃあ、また後で」

レイと共に部屋に入り、後ろ手で扉を閉める。
……ともかく、これで大体の危機は去ったか。

「ともあれ、方針を決めるか。
レイ、お前は――カイザーに告白したいんだったな？」

「うん」

「……となると、真っ向から向かうのが、現状は最適だろうな。
遠慮も何もなく、真正面から向かっていくことだ」

……まあ、相手はあのカイザーだし、玉砕する可能性も否めないわけだが……。
そこはその場その場の裁量によって決まるな。

とはいえ、俺は他人の感情の――特に、恋愛に関係する感情の機微に疎い。
疎い、というか……うん。はっきり言って「分からない」んだ。
どこからどこまでの感情のことを恋心というのかも、
どういう理屈でそういった感情を抱くのかも、
あるいは、単なる好意との境界線も、

……うん。何一つとして分からない。
俯瞰として説明されれば、なんとなくは分かる、という程度のものだ。

今現在、俺の主観から見て、
誰が誰に恋愛感情を抱いているのかなんて、毛先ほどもわからない。
いや、レイのこれはもう見ればわかるけど。

「ま、どうしようもなくなったら、いつものごとくデュエルだろうけど。
レイ、デッキは当然持ってきているな？」

「うん。……でも、亮サマに勝てるかなぁ？」

「いや、勝たなくていい。重要なのは、レイ、お前の気持ちを伝えることだ。
不格好でも、不器用にでも、どんな形でもいい。
とにかく、お前の気持ちをカイザーにぶつけるんだ。
……言葉で言って聞かせて分かるような相手じゃないしな」

常に冷静沈着な印象の付きまとうカイザーだが、その実、
女性からの積極的なアプローチには滅法弱いという弱点がある。
特に言葉。

行動であればその動きを封じればどうとでもなるが、
言葉――特に音となると、空気の振動であることに起因し、
「耳をふさいでも聞こえてくる」ということが多々ある。

……が、だからこそその計画は実行には移せない。

聴覚から無理矢理に聞かせて嫌がらせるのではなく、
楽しい――かどうかは不明にせよ、ともかくカイザーの得意、
かつ好きな種目、つまりはデュエルを通じてその気持ちを伝えれば
どうだろう。

――まあ、そういうことだ。

「でもねカズ兄ぃ、亮サマがボクなんかの挑戦を受けてくれるかな
？」

「……どうだろうな。十代の挑戦はすんなりと受けてくれたが……。
だったら、俺がカイザーに挑戦することにしよう。
で、実はレイでしたー、というオチ」

「ちょっと軽いけど……でも、現実問題そういう方法くらいしかな
いよね」

というより、他の方法だと、きっとあのカイザーは振り向くことは
ないだろう。
デュエルに懸想しているかのような男だ。
それ以外の方法では、かなりの確率で……いや、ほぼ無理だろう。
本気で行くなら、本当にカイザーに勝つことすら必要になる。
……が、レイがカイザーに勝てるとは思えないし……。

「……ま、とりあえず、デッキを調整しよう。
ボロボロに負けたりしたら、それこそ目も当てられないしな」

「でもカズ兄ぃ、ボクのデッキの中身知ってたっけ？
あれから、少しは変えてはいるけど……」

そう言いつつ、レイは俺に自身のデッキを手渡してくる。
軽く、その内容に目を通す――も、俺がこちらに来る直前に見たそれと、
あまりデッキの内容に変わりはない。
むしろ、レイにとっては使いやすいであろうカードがいくらか投入されており、
一見すれば良いバランスを保っているようにも見える。

……とはいえ、このデッキにとって重要なのは、バランスというよりも、
むしろ、速攻と殲滅能力、キーカードを手札に揃えるための手腕だ。

レイの腕は相当に立つ。故に、デッキの回転に際しての心配はそれほどしていないが、
この構成では、回そうにも回らない可能性だってある。

……前にレイのデッキを組んでやったときは、周囲との兼ね合いも考えたからな。
あまり強くしすぎても問題だと思ったのだが――。

「よし、ざっくりとデッキの中身を変更するぞ」

「ええっ……!?　そ、それだとボク、回せないかもしれないよ！？」

「大丈夫だ。何回でも調整の相手にはなってやるし、アドバイスもしてやる。
それでどうしようもなかったら元に戻そう。レシピは九割がた覚えてるしな」

「う、うん……じゃあ、魔法（マジック）・罠（トラップ）とモンスターの割合は？」

「モンスターが6。魔法（マジック）3で罠（トラップ）が1だな。
必須カード以外の罠はそう必要ない。むしろ、邪魔になる可能性もある。
……とりあえず、部屋に広げてみてくれ。それから考えよう」

「うん、わかったよ」

……こうして見ると、レイのデッキの構築能力は、同年代の子供と比べればズバ抜けて高いことが窺い知れる。

いや、それは当然だろう。高校の問題を当たり前のように解き、あらゆる知識を、見、経験しただけ吸収する。それだけの下地があれば、
これだけのものは当然――とも言えるか。

俺にしても、以前の世界の知識があった分、こちらで目を覚ました

とき、
子供のころから天才だの神童だのともてはやされたものだが、
この娘は本物の「天才」だ。自らの努力を努力と思わないこの姿勢こそが、
真に天才と呼ぶことのできる由縁ではなかろうか。
……ま、兄バカと言われれば、それも否定はできないが。

今はとにかく、カイザーのそれに匹敵できるようにデッキを組むだけだ。

＊　＊　＊

そして翌日。俺は、カイザーをレッド寮の裏の岩場に呼び出していた。
理由はごくごく単純――レイとカイザーをデュエルさせるためだ。

カイザーを呼び出す際には、俺の名前を使い、
ただ一言「デュエルを受けてくれないか？」という文面のメールを送った。
返信が無い以上、それを見ているのか見ていないのかはいまいち分からないが、
デュエルに関しては人一倍真面目、かつ真剣なカイザーのことだ。
この場に来る、ということに関しては間違いないだろう。

……とはいえ、「俺と」デュエルしてくれ、と書いていないことを見れば、
あるいは拒否すると考えることはできるが……まあ、気づいていないことを祈ろう。

岩場でしばらく待っていると、カイザーが歩いてくるのが見えた。
軽く手を振り、こちらに招きよせる。

「や、どうも、カイザー。メールを見てくれたようで」

「ああ……デュエルの申し出とは。珍しいな、御堂。
お前はあまり積極的にデュエルをする方ではないと思っていたが……」

「……ああ、いや、それが――カイザー。あなたの対戦相手は俺じゃないんだ」

「……ん？」

どういうことだ？　と問うカイザー。
……まあ、その反応は当然だろうな。
俺だって、こんなことが無ければ普通にデュエルだってしてみたかった。

とりあえず、岩陰に隠れてるレイをこちらに手招きする。
……と、どこか恥ずかしそうにしながら、こちらにそろそろと近づ

いてきた。

「……早乙女レイ。編入生で……お前をおっかけてここに来たんだ」

「……俺を、だと？　どういうことだ？
レッド寮の制服ということは、男子生徒だろう？」

「……こう見えても、女子生徒なんだよな、これが」

言いつつ、俺はレイが被っている帽子を脱がし、
本来は腰元まではあるはずの長い髪を、周囲に晒させた。

「う、うわぁっ！？　か、カズ兄ぃ、何するの！？」

「実際に見せた方が早いだろ？　それに、カイザー驚いてるし」

実際、カイザーは俺の行動に呆気に取られているのか、
ぽかんと口を開けたまま、唖然として俺たちを見ている。

「……つ、つまり、その娘とデュエルをしろ、ということか？」

「……ああ、まあ、そういうこと。結構危ない手段でここに来てるから、
明日明後日にはもう島から出なきゃいけない。……ただ、できれば、デュエルの最中でも、
終わってからでもいい。この娘の話を聞いてくれないか？
俺はレイのデュエルを見届けたいし、ここに残るけど……」

「……そうか。分かった。なら、やろう」

あれ？　俺の想像だと、もう少しごねるかと思ったんだが……。
ま、これはこれで好都合……かね。よく分からんが。

「ほら、ちゃんとやってくるんだぞ」

「あ、あんまり子ども扱いしないでよ……」

と言われても、俺にとってはある意味子供のようなものなんだが。
というか、１０歳って子供でしょうが。

――とか考えている間に、デュエルは開始した。

「「決闘（デュエル）！！」」

「ボクの先攻だよ！　ドロー！
ボクはモンスターをセットし、カードをセット。
……これでターンエンド」

「動きが無いな。ならば、俺のターンだ。ドロー。
……相手の場にのみモンスターが存在するとき、
このモンスターは手札から特殊召喚できる！　現れろ、《サイバー・ドラゴン》！」

【《サイバー・ドラゴン》　攻　２１００　／　守　１６００】

……早速サイバー・ドラゴンが召喚されたか。
相変わらず汎用性の高いカードだ。まあ、そこからどうするか……ってのも問題だが。

「更に、手札から《サイバー・フェニックス》を攻撃表示で召喚する」

【《サイバー・フェニックス》　攻　１２００　／　守　１６００】

「バトル！　サイバー・ドラゴンで裏守備モンスターを攻撃！
エヴォリューション・バースト！」

「この瞬間、表側表示になった《ライトロード・ハンター　ライコウ》の効果発動！
デッキから3枚のカードを墓地に送り、場のカードを1枚破壊する！
ボクが選択するのは、サイバー・ドラゴン！」

「むっ……！？」

ライコウの一咬みにより、サイバー・ドラゴンの機体が砕け散る。

……このとき、デッキから落ちたカードはそれぞれ、
《ライトロード・ドルイド　オルクス》、《ライトロード・プリースト　ジェニス》、
《ライトロード・バリア》、か。

この時点でもう分かるだろうが、レイのデッキは【ライトロード】だ。
速攻性が何よりのウリであり、……加えて、強い。
以前の世界でも環境のトップを行っていたこともある。

攻撃を受けるとはいえ、ここでサイバー・ドラゴンを破壊したのは正解だ。
あのカイザーなら、次のターンにはもう《パワー・ボンド》を引いたりしかねない。
手札に《アタック・リフレクター・ユニット》があれば、攻撃を防

ぐ盾ともされる。
……今は１２００のライフポイントなんて、くれてやれ！

「ならば、サイバー・フェニックスで直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「くっ……！」

レイの残りライフポイントは２８００。場合によっては１撃で奪い去られかねないが……。
いや、そんなマイナス思考はいらない。今はとにかく見守れ。

「カードを２枚セットし、ターンエンド」

「ボクのターン、ドロー！
ボクは手札から、《ソーラー・エクスチェンジ》を発動！
手札の《ライトロード・シーフ　ライニャン》を墓地に送り、
デッキからカードを２枚ドロー！
そして、デッキから２枚のカードを墓地に送るよ！」

デッキから墓地に送られたカードは、それぞれ《ライトロード・ビースト　ウォルフ》と、
《閃光のイリュージョン》か……。

「《ライトロード・ビースト　ウォルフ》は、デッキから墓地に送られたとき、
自分の場に特殊召喚できる！　来て、《ライトロード・ビースト　ウォルフ》！」

【《ライトロード・ビースト　ウォルフ》　攻　２１００／守　３００】

白銀の体毛の獣人が、呼びかけに応じてその姿を現す。
その攻撃力の高さを象徴するように、両腕には鋭い鍵爪装備されていた。

「更に、魔法（マジック）カード、《光の援軍》を発動！
デッキからカードを3枚墓地へ送る！」

更にデッキがガリガリと削られていく。
そのときに落ちて行ったのは、《グローアップ・バルブ》、《ガーディアン・オブ・オーダー》、《サイクロン》。

……我ながら、少しやりすぎたかな？

「そしてデッキから、『ライトロード』モンスターを手札に加える！
ボクが手札に加えるのは、《ライトロード・パラディン　ジェイン》！
そしてジェインを攻撃表示で召喚！」

【《ライトロード・パラディン　ジェイン》　攻　１８００／守　１２００】

精悍な印象を受ける、純白の鎧の騎士――。
俗的な話になるが、女性ファン多そうだな、こいつ。

「ジェインでサイバー・フェニックスに攻撃！
ジェインは相手モンスターに攻撃するとき、
攻撃力が３００ポイントアップする！」

「……サイパー・フェニックスが戦闘で破壊されたとき、
俺はデッキからカードを1枚ドローできる。
更に、伏せ（リバース）カード、オープン！　《ダメージ・コンデンサー》！
手札の、《サイバー・レーザー・ドラゴン》を墓地に送る。
この戦闘で受けたダメージ以下の攻撃力――攻撃力、
９００以下のモンスターをデッキから特殊召喚できる！
現れろ、《サイバー・ラーバァ》！」

現れるのは、機械で構成された――芋虫、
あるいは「繭」とも取れる外見をした、「サイバー」モンスター。
守備体制を取っていないのは――その効果故か。

「だったら、ウォルフでサイバー・ラーバァに攻撃！」

「サイバー・ラーバァが攻撃対象に選択されたその戦闘では、
俺への戦闘ダメージは0となる。そして、ラーバァが戦闘で破壊
されたとき、
デッキからサイバー・ラーバァを特殊召喚できる。
もう1体のサイバー・ラーバァを特殊召喚！」

戦闘ダメージの回避とデッキ圧縮を兼ねた策か。
……とはいえ、他に方法がないわけでもあるまい。
事実、カイザーの伏せカードはもう1枚残っているのだから。

「く……だったら、ボクはターンエンド！
エンドフェイズ、ジェインの効果でデッキからカードを2枚墓地
へ！」

送られたのは、《ソーラー・エクスチェンジ》、
そして《ライトロード・モンク　エイリン》の二枚、と。
えーり……いや、なんでもない。

「俺のターン、ドロー！
……レイ、か。お前は、確か俺に会いに来たんだと言っていたな」

「え……あ、はい！　ぼ、ボクは亮サマに会いに来たんです！」

「……カイザー、などと祭り上げられていると、
そういった話はたまに聞く。……御堂の様子を見る限り、
レイ、お前はただ俺とデュエルをしに来たわけではないのだろう？」

「は……はい！」

「……そういう意味合いでは、御堂の策は正解だったようだな。
話は、このデュエルの中でしよう。……続けるぞ。
俺は手札から、《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》を召喚！」

【《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》　攻　１５００　／　守　１０００】

姿を現すのは、いくらか鋭角的に、そして小型化したかのような、機械の竜――サイバー・ドラゴン・ツヴァイ。

ツヴァイ――Ｚｗｅｉとは、ドイツ語で「２」を意味する。直訳すれば、「サイバー・ドラゴン２」。

……実際、こいつの持つ効果は、その名に相応しいソレだ。

「――バトル！　ツヴァイでジェインを攻撃！
エヴォリューション・バースト・ツヴァイ！」

「え……！？」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイの攻撃力は、現在１５００。

……だが、その攻撃力は、その効果によって更に上昇する。

「ツヴァイは相手モンスターに攻撃する際、攻撃力が３００アップする。
……よって、ジェインとは相討ちだ」

パキィ、と崩れ去るソリッドビジョン。

……まさか、このタイミングで相討ちを狙ってくるとはな。

いや、ダメージを減退させるラーバァがいるからこそ、か。

「このまま、俺はターンエンドだ」

「ぼ、ボクのターン、ドロー！
ボクは魔法（マジック）カード、《おろかな埋葬》を発動！
デッキから、《裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）》を墓地に送る！
そして更に、伏せ（リバース）カード、オープン！　《光の召集》！
手札４枚を全て墓地に送り、墓地の裁き（ジャッジメント・ドラグーン）の龍、ライコウ、
今墓地に送った、《創世の預言者》、ガーディアン・オブ・オーダーの４枚を、
全て手札に加える！」

……ドが付くほど、マズいな。
あいつ、もしかして……なんて思うまでもなく、かなり熱くなってる。
その２枚があれば、もう少し……というか、かなり良い動きができるだろうに。

そもそも、創世の預言者があれば、裁き（ジャッジメント・ドラグーン）の龍を回収することはできた。
それでもなお、裁き（ジャッジメント・ドラグーン）の龍に頼るということは――。

つまり、このターン内で決着を付ける気満々、ということか。

だが、それで倒せるほど、カイザーは甘くない。
……どころか、これでは……マズい。

「墓地に『ライトロード』モンスターが４枚以上あるとき、
裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）は手札から特殊召喚できる！
来て、裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）！！」

【《裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）》　攻　３０００　／　守　２６００】

天から挿し込む旭光が、純白の龍の姿を照らし出す。
――《裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）》。
ライトロード最強のモンスターにして、現在のレイの切り札だ。

「裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）の効果を発動！　１０００のライフポイントを支払い、
フィールド上の裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）以外の全てのカードを破壊する！」

「……伏せ（リバース）カード、オープン！　《和睦の使者》！
このターン、俺への全ての戦闘ダメージは０となる！」

「くっ……！」

確かに全てのカードは墓地へと葬られた。
……だが、ダメージが与えられないとなると意味はない。

――間違いなく、マズいな。

「モンスターをセットし、ターンエンド……」

当然、それしかあるまい。

そもそも、レイの手札にはモンスターカードしか存在していないのだ。

となると、今伏せたのは十中八九ライコウ。

普通であればそれでもいいのだが――しかし。

相手は、カイザーの名を冠するデュエリストだ。

……一筋縄じゃいかないし、セオリー通りにもいかないのは承知の上だろう？

「俺のターン、ドロー！」

「りょ……亮サマ！」

「……ん？」

と、カイザーがスタンバイフェイズに入る直前、レイが口を開いた。

「も、もう分かってるかもしれないけど……。
でも、言っておきます！　ボクは亮サマが好きです！
前から……アカデミアのことがテレビで放送されたときから、
亮サマの姿を見てから、ずっと好きでした！
だから、このデュエル、ボクが勝ったら……！！」

「……付き合ってくれ、か？」

自身の台詞の先を言われてしまい、レイは目を見開いて驚いた。
……つーか、元々丸わかりだったし、仕方ないような気もする。

それでも、レイは力いっぱいに頷いた。
首が壊れるんじゃないかというほどに。

――対して、カイザーは溜息を吐く。
……おや。これは……まさか。

「……デュエルを続行しよう。俺は手札から、
魔法（マジック）カード、《死者蘇生》を発動！　これにより、
墓地のツヴァイを特殊召喚する！」

「ツヴァイを……？」

【《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》　攻　１５００　／　守　１０００】

……確かに、セオリー通りならば、
ここでサイバー・ドラゴンを蘇生させるはずだ。

……が、カイザーは、それが通じるような男じゃない。

「そして、ツヴァイの特殊召喚成功時、速攻魔法発動！
《地獄の暴走召喚》！　攻撃力１５００以下のモンスターの特殊召喚成功時、
そのモンスター１体を選択して発動。
同名カードを、デッキ・手札・墓地から、可能な限り特殊召喚する！」

フィールドに姿を現す、３機のサイバー・ドラゴン・ツヴァイ。
――まさか！？

「このとき、相手は相手の場の表側表示のモンスターを選択。
デッキ・手札・墓地から可能な限り特殊召喚する」

「けど、裁き（ジャッジメント）の龍（ドラグーン）は特殊召喚できない……！？」

「……そういうことだ。
そして、サイバー・ドラゴン・ツヴァイ3体のの特殊効果発動！
手札の魔法（マジック）カードを見せることで、
エンドフェイズまで《サイバー・ドラゴン》として扱う……！！」

そして、カイザーがその手札から公開するのは――1枚の魔法カード。
――《パワー・ボンド》。

「あっ……！！」

「魔法（マジック）カード発動！　《パワー・ボンド》！
場のサイバー・ドラゴン扱いのツヴァイ3枚を融合！
出でよ――《サイバー・エンド・ドラゴン》！！」

【《サイバー・エンド・ドラゴン》　攻　４０００　／　守　２８００】

降臨するのは、三つ又の頭部を持つ機龍。
カイザー最強のしもべ――サイバ・エンド・ドラゴン――！！

「パワー・ボンドの効果により、
エンドフェイズに元々の攻撃力分のダメージを受けることを代償に、
サイバー・エンドの攻撃力は2倍となる。」
「ってことは……攻撃力８０００！？」
「……そして、すまない、レイ」
「えっ……？」
「今の俺は、お前の言葉には応えられない。
今の俺は――決闘（デュエル）こそが全てだと考えている。
そんな状態では、きっと特定の誰かと特別な関係になったとしても、
その相手を不幸にしてしまうだけだろう。だからすまない。
お前の告白は嬉しかった。だが――俺はそれに応えられない」
「……そんな……」
……失敗、か。
……あー、畜生め。原作みたいに自分のことばっかり言うようなら、間違いなく俺はカイザーに説教してただろうけど、
なまじ奴はレイのことまでも考えてから発言してやがる。
説教しようにも何を言えばいいのやら。
今の俺では相手を不幸にしてしまうだけ。

……本当にそうなのかは置いといて。だが。

畜生あのイケメンめ。女性の扱いに手馴れてやがる。

……いや、手馴れざるを得なかったんだろうな。

今までこういう手合いの人間はいくらでもいたはずだし。

「……これで終わらせよう。

サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃！

エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

「――――――」

ビィ――――――！！　と。

無慈悲にも、無感情にも、デュエルの終わりを告げる音が、この海岸に鳴り響いた。

＊　＊　＊

サイバー・エンドの攻撃による光が途切れたとき、

既にレイの姿はそこには無かった。

――きっと、寮にでも帰ったんだろう。
何せ初恋が失恋だ。……ショックも大きいだろうな。
ああは言っても10歳の女の子だ。
ショックに思わない方が問題だし、ありえない。

「……御堂」

「お疲れだな、カイザー」

「ああ……正直に言って、これまでで最も精神的に疲れたかもしれない」

「この告白を受けたとしても、相手を不幸にする――か。
本当にそう言えるのかは、いまいち分からないところではあるけど」

「……不幸にしてしまうさ。
デュエルのことしか頭にないような人間と付き合ったとして、
それで何になる？　相手にされないと感じて、結局破局するだけだろう。
仮に受けたとしても、そうなってしまう可能性は高い」

「……想像以上に恋愛下手というか……いや、
ここまでの実力者ともなると、そんなものか」

「悪いことをしたとは思うがな。

……それより御堂、いいのか、放っておいて」

その言葉がさす意味を図るのに時間は必要ない。

……レイを放っておいていいのか、という意味だろう。

「気にもなっていたが、レイと御堂はどういう関係だ？」

「……兄代わりと妹代わり、みたいなものかな。

幼馴染とも言える。兄妹とでも思っておいてもらえればそれでいい。

放っておいていいかどうか、って言われると、そんなわけはない。

すぐにでも行くよ」

「そうか……。

フッておいてこんなことを言えた義理は無いかもしれんが、

……元気を出してくれればいいんだが」

「……ま、どうにかするよ。そういうのは、兄貴としての俺の役割だし」

それだけを告げて、俺も岩場を後にした。

その際、カイザーが少しばかり苦々しげな表情をしているのが見えた。

――やっぱり、心苦しいのは変わらないんだろうな。

それだけがわかればそれでいい。ともかく、俺は自室へと急ぐ。

自室のドアを軽くノックすると、弱弱しげな声が部屋の中から漏れてきた。

「なに……？」

「俺だ、レイ。入っても大丈夫か？
大丈夫じゃなければこのまま聞いてもらっても構わない」

「……」

この沈黙は、多分、入ったらマズい類の沈黙だな。
扉の前に座り込み、中にいるであろうレイに語りかける。

「……長い人生だ。こういうこともあるさ。
とはいえ、気にするな、とは言わない。
存分に気にして、後悔して、反省もして。
……そこから、何かを学べばいいと、俺は思うよ」

「……」

あんなハイスペックイケメンはそうそういないんだが。
……そこを基準に据えてしまうっていうのが、マズいことかな。

「お前は悪くない。問題もない。
ただ、今回はちょっとタイミングが悪かった。
……それだけの話だ」

「……うん」

ようやく気持ちがほぐれてきたのか、
少しだけとはいえ、声が上がり調子になってきた。
そのことに幾ばくかの安心を覚え、俺は再度語りかける。

「今朝から緊張しすぎて、朝飯何も食べてないだろ。
失恋したからって、食べないのは良くないし……。
昼くらいなら作ってくるけど、何がいい？」

「……はんばーぐ」

……そういえば昔、アカデミアに来るより前は、
よくハンバーグを作っては振る舞っていたことを思い出す。
元々、一人暮らしで培った家事スキルのおかげで、俺の料理は好評だった。
レイも頻繁に、俺に家事を教えて、と言ってきたものだったっけ。
特にハンバーグは好物――というか、野菜が抵抗なく食べることができる、
ということで、多方から支持を受けていたか。
多分、そういうことも原因だろうな。今回の要求は。

「ん。……じゃあ、また後でな。
ちゃんと食べろよ？」

「……うん」

よし、と軽く頷き、俺は寮の食堂へと向かった。

＊　＊　＊

そうして、あれから三日ほど。

この日、レイは本土の方に帰る手はずとなっている。
……あれから、アカデミアの方には本人から理由を話した。
子供だから、ということで大目に見てはもらったものの、
本来ならば、事件にも発展していたかもしれない大事だ。

俺は逐次おじさんやおばさんへ連絡を取っていたから、
特に問題と呼べる問題は無かった。――そして、今日。

スーツケースにいくつかの荷物を詰め、重そうに引きずるレイを見送るべく、
俺や十代たちは、港にやってきていた。

「じゃあ、またな、レイ。
本土の方に戻ったら、ちゃんと帰ったことを報告しろよ？」

「うん。けど、あんまり子供扱いしないでよ。
ボクだって、ここに一人で来れたんだから」

「心配なんだよ。途中で誰かに襲われたりしないか、
それとも攫われたりしないか、カラまれたりしないか……。
畜生そんなことしてみろ皆コンクリ詰めにして海の底に沈めて」

「カズ兄ぃ落ち着いて！？」

……おっと。少しばかり焦ってしまっていたようだ。

「それにしても見たかったなー、カイザーとのデュエル！」

「……アニキ、レイ君がレイちゃんだったってのに、
気になるところはそこッスか」

「でもまあ、十代らしいんだな」

「十代たちも、わざわざ見送りありがとうな。
俺だけでも少々は良かったんだけど、やっぱり、準備は手間取ったし……」

「構わねえよ、俺たち友達だろ？」

違いない。
俺は十代と拳を突き合わせた。

「それじゃあ、レイ。改めてまたな」

「うん。また来るね。機会があればきっと」

「そのときは、おじさんやおばさんにも言ってから来るんだぞ？
一番心配してるのは、多分おじさんたちだろうからな」

「……御堂君のほうがしてる気がするッス」

そうだろうか。

いや、俺は単に不穏な輩を粛正したいというだけでだな……。

ま、いいか。

ともあれ、俺たちは船で本土へ向かうレイを見送った。

こうして、一時の編入騒動は幕を下ろした。

校長曰く、「あれほど優秀な人材なら、いまからすぐにでもウチにほしい」とのこと。

……まあ、随分昔から英才教育を施してるわけだし、そうも言うだろうな。

……そういえば送られてきたメール、

やけに「アカデミアに行く」ということが強調されてたわけだが、

あれはいったいどういう意味だろうか。

……ああ、学園祭ね。

理解したし納得。

１２束目：乙女（後書き）

そういうわけで、１話から言及され続けてきたレイの登場です。
いやあ長かった……。

ということで今回の考察。
レイと御堂は、言うなれば幼馴染です。
兄妹のようなものでしょうか。とにかく、昔から仲が良かったようです。
そもそもレイが本編に登場するに際して、まず疑問に思ったのは、
「筆記試験どうした？」でした。
１０歳でそんな試験をクリアしてくるとなると、相当に頭は良いはずです。
しかし、それ相応の講師がいなければ、成長も普通はありえないでしょう。
というわけでなし崩し的に、御堂がレイの先生役という設定が出来上がったわけです。
話の中でも言及されている通り、天才故にできたことと言えますが。

さて、まずもって、レイのデッキは【ライトロード】です。
それも全種類積み込んだやつ。正直重いと思いますが。
それ以外には特筆すべきことは無いかと。

そういうわけで今回はこれで。

一応、２つほど活動報告の欄にアンケートが設けてありますので、可能でしたらお答えいただけると助かります。

13束目：進退

「あーテステスなノーネ。
えーそれではこれから、シニョール御堂のイエロー寮への昇格と、
……シニョール万丈目のイエロー寮への降格を、
それぞれ賭けたデュエルを行うノーネ」

……人間、「どうしてこうなった」と思うようなことが、
数日のうちに一度のペースであるとかないとか言う。

まあ、俺の場合はあったんだが。
……かなり、おかしなことが。

「……本当にやる気か、万丈目」

「当たり前だ。俺は貴様に勝つ。
……そして、十代にも勝つ。でなければ、俺は――」

どこか切羽詰まったようなその表情には、
いつもの覇気は見受けられない。むしろ、弱々しくとすら感じられる。

それも仕方がないのかもしれない。

何故なら、この勝負には――万丈目の進退がかかっているのだ。

進退――それも、ラー・イエローへの降格だとか、そういった騒ぎではない。

――退学。

万丈目は、この勝負に負けてしまえば――退学の道を選択せざるを得なくなる。

さて、この話のことを説明するには、

先日のとある事件のことから説明しなければならないだろう。

以前、十代が万丈目に勝利したのは知っての通りだろう。

そしてその後、あいつは何処へか消えて行った。

結局、ただ敗因を悩んでいただけだとも言えるのだが――それはともかく。

以来、万丈目はスランプに陥った。

十代との対戦、そしてその敗戦が原因だろう。

万丈目は自身のスタイルを見失い、負け越す日々が続いた。

しかし、その対戦相手はいずれも強者――それこそ、ほぼ同レベルの実力を持つ三沢、そして、この学校の頂点に位置するカイザー、天才である明日香と、アカデミア内でも指折りの実力者ばかりだった。

狙いとしては、恐らくは「荒療治」。強者と対戦することで、自身の戦闘スタイルを確立しようと考えていたのだろう。

……が、それはうまくいかなかった。

絶対的なまでに相手が悪い。もう少し弱い相手――あるいは俺であれば、いくらかマシだっただろうに。俺の方が万丈目よりも弱いし。

ある意味で言えば、負けてしまうのも仕方がないとも言える。

そしてその結果、万丈目の実力を疑問視する声が高まった。

元々、周囲との軋轢があったことも起因してか、ならば、誰か丁度いい人材とデュエルをさせてみよう、という話に至った。

そして白羽の矢が立ったのが――俺、ということだ。

元々、以前から何かと事件の解決にあたったりしていたことも手伝ってか、俺をラー・イエローに昇格させても良いのではないか、という話は上がっていたとのこと。

確かに一度は潰れた話だが、また持ち上がってきた――ということだ。

対して、万丈目は実家から――万丈目財閥から、ある一つの条件を受けている。

つまり、オベリスク・ブルーからの降格は、イコール退学、という条件を。

むちゃくちゃな話だとも思う。

しかし、それは万丈目の家の話だ。

俺たちがどうこう言っていい問題じゃない。

しかし、まさか原作の三沢の役割が、俺に回ってくるとは。

現在、俺たちはいつものデュエル場に来訪している。

見学者は最低限に抑えてくれとの万丈目の要望もあり、

客席にいるのは十代や翔、三沢、明日香など、5～6人程度のものだ。

俺は少しばかり「本気の」デッキをデュエルディスクに挿し込んだ。

同じように、万丈目も自身のデッキを差し込む。

「……だったら俺は何も言わない。全力で戦おう」

「当然だ。本気で来い」

「「――決闘（デュエル）！！」」

先攻は万丈目のようだ。

……少しばかり先攻は欲しかったが、泣き言も言ってられないか。

それに、あの表情を見るに、良いカードを引いたようだし……。

くそ、本当、先攻が欲しい！

「俺のターン、ドロー！

手札から魔法（マジック）カード、《未来融合－フューチャー・フュージョン》を発動！

互いにエクストラデッキの融合モンスター1体を確認し、その融合素材モンスターをデッキから墓地に送ることで、2ターン後の俺のスタンバイフェイズ、そのモンスターを特殊召喚する！

俺が選択するのは、《F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）》だ」

……やっぱり、そういった類のカードが手札にあったか。

F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）――最大の攻撃力を持つモンスター。

ドラゴン族デッキには必須のカードとも目されており、

実際にその評価に違わぬ活躍を遂げる優秀なカードだ。

未来融合が出てきてからは、墓地送り・デッキ圧縮にも、
優秀なカードとして扱われている。

「俺は《ミンゲイドラゴン》2枚と《タイラント・ドラゴン》、
《ダークブレイズドラゴン》、《ドル・ドラ》を墓地に送る。
そして手札から、《ラヴァ・ドラゴン》を守備表示で召喚！」

【《ラヴァ・ドラゴン》　攻　１６００　／　守　１２００】

「ラヴァ・ドラゴンが守備表示で場に存在するとき、
このカードを生贄に捧げることで、墓地と手札のレベル3ドラゴンを、
それぞれ1体ずつ特殊召喚できる。俺は墓地のドル・ドラと、
手札の《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》を、それぞれ守備表示で特殊召喚する！」

【《ドル・ドラ》　攻　１５００　／　守　１２００】
【《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》　攻　１４００　／　守　１１００】

……1ターン目から2体のモンスターの展開。
流石に、ここまでやるとは思わなかった。

加え、仮面竜（マスクド・ドラゴン）はリクルーター。ドル・ドラは自己再生が可能。
……つまり、確実に生贄を残すことができるということでもある。

ただ、このターンから動くことはできないだろう。
既に通常召喚権は失っている。

とはいえ、ここまでやれば十分だと、言えないこともないが。

「カードをセットし、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！
俺は手札から、魔法（マジック）カード、《増援》を発動！
デッキからレベル４以下の戦士族モンスターを手札に加える。
俺が手札に加えるのは、《カオスエンドマスター》だ」

互いに１枚のモンスターカードを確認し、１枚のカードを手札に加える。

「そして、《トライデント・ウォリアー》を攻撃表示で召喚」

【《トライデント・ウォリアー》　攻　１８００　／　守　１２００】

「トライデント・ウォリアーの通常召喚に成功したとき、
手札からレベル３のモンスターを特殊召喚できる。
レベル３の《カオスエンドマスター》を特殊召喚！」

【《カオスエンドマスター》　攻　１５００／守　１０００】

俺の場に召喚される２体の戦士。
いずれも、攻撃力は万丈目の場のモンスターのそれを上回る。

「――バトル！　トライデント・ウォリアーで仮面竜（マスクド・ドラゴン）を攻撃！」

「仮面竜（マスクド・ドラゴン）が戦闘破壊されたとき、
デッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚できる！
俺はもう１体の仮面竜（マスクド・ドラゴン）を、守備表示で特殊召喚する！」

【《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》　攻　１４００／守　１１００】

やはりカオスエンドマスターの能力は知っていたか。
このまま攻撃の手を休めることなく――と考えていたが、

やはり、万丈目の場には2体のモンスターが残ることになってしまう。

……ならば、このタイミングで効果を使わせておく！

「カオスエンドマスターでドル・ドラに攻撃！」

「チッ……！」

「そして、カオスエンドマスターが戦闘でモンスターを破壊し、墓地に送ったとき、デッキからレベル5以上、攻撃力1600以下のモンスターを特殊召喚できる！レベル5の《混沌球体（スフィア・オブ・カオス）》を攻撃表示で特殊召喚！」

【《混沌球体（スフィア・オブ・カオス）》　攻　1600／守　0】

俺の場に現れるのは、どこか不自然な形状をした、漆黒の球体。全身から吹き出す光は、その効果を――光属性としても扱うそれを表現しているのだろう。

「混沌球体（スフィア・オブ・カオス）で仮面竜（マスクド・ドラゴン）を攻撃！」

「仮面竜（マスクド・ドラゴン）の効果により、俺はデッキから《炎龍（マグナ・ドラゴ）》を特殊召喚する！」

万丈目の場に現れる、火炎を纏うドラゴン。
厄介なのは、このモンスターがチューナーであるということだ。
戦闘ダメージを与えるたびに攻撃力を２００上昇させるというその効果は、
さしたる問題ではない。むしろ、チューナーであることを考慮して、召喚された直後にシンクロ素材にされることを鑑(かんが)みれば、
その効果はむしろ邪魔なものとも言えるだろう。

「バトルフェイズはこれで終了だ。
レベル５の混沌球体(スフィア・オブ・カオス)に、
レベル３の《カオスエンドマスター》をチューニング！
来い、《ギガンテック・ファイター》！！」

【《ギガンテック・ファイター》　攻　２８００　／　守　１０００】

「ギガンテック・ファイターの攻撃力は、
互いの墓地に存在する戦士族の数×１００アップする。
現在はカオスエンドマスターのみ。よって攻撃力は２９００。
……カードを２枚セットし、ターンエンドだ」

「このエンドフェイズ、ドル・ドラはその能力を下げ、俺の場に復活する」

【《ドル・ドラ》　攻　１５００　／　守　１２００】
↓
【《ドル・ドラ》　攻　１０００　／　守　１０００】

ただし、この効果はデュエル中に１度しか発動はできない。
――故に、ここで使わせてしまえば、
後々蘇生したドル・ドラを破壊しても、復活はしないということだ。

「俺のターン、ドロー！
……さっき、貴様は言ったな。全力で行くと」

「……ああ。そのつもりだ。
第一、お前は情けをかけられて勝って、
それで満足するような男じゃないだろう」

「当然だ。――だからこそ、俺も全力で行く。
それを宣言したかっただけだ」

……冷静（クール）なようですぐに熱くなる。
それが今の万丈目の性格なのだろうか。

……まあ、どちらでもいい。
全力で、と始めに言ったのは俺だ。

それに応えてくれたのは、喜ぶべきことだろうしな。

「ドル・ドラを生贄に捧げ、《ホワイト・ホーンズ・ドラゴン》を召喚！」

【《ホワイト・ホーンズ・ドラゴン》　攻　２２００／守　１４００】

「ホワイト・ホーンズの召喚・特殊召喚に成功したとき、相手の墓地の魔法（マジック）カードを５枚まで除外できる。まずは、その《増援》を除外させてもらう！」

俺の墓地から消え失せていく《増援》のカード。

……ソリッドビジョンだとわかっていても、不安になってしまうな。

「ホワイト・ホーンズの攻撃力は、その効果で除外したカードの数×３００アップする。よって、攻撃力は２５００だ」

「……だが、お前の狙いはもっと別な部分だろう？」

「その通りだ。

レベル６、闇属性のホワイト・ホーンズに、
レベル２の炎龍（マグナ・ドラゴ）をチューニング！
――深き闇より現れろ！　《ダークエンド・ドラゴン》！！」

【《ダークエンド・ドラゴン》　攻　２６００／守　２１００】

暗い闇――その内から這い出るかのように現れる、
まるで、深淵という概念そのものを抽出したかのような、
禍々しい外見の黒竜――。

「行くぞ御堂！　バトル！
ダークエンドでトライデント・ウォリアーを攻撃！
ダーク・フォッグ！」

「くっ……」

トライデント・ウォリアーがダークエンドの吐き出した闇に飲み込まれ、
その肉体を霧散させていく。
これで、俺に与えられたダメージは８００。
――まだまだ、これからだ。

「そしてダークエンドの効果を発動！
攻守を５００ポイント下げ、相手モンスターを墓地へ送る！
ダーク・イヴァポレイション！」

そして、ギガンテック・ファイターまでもが、
ダークエンドの作り出した闇に飲まれ、消えていった。

これで俺の場はガラ空き。
しかし、ダークエンドの攻守は５００下がり、
現在の攻撃力は２１００。対処の方法は、探せばいくらでも見つかるだろう。

「ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！
……とにかく、まずはF・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）の召喚を阻止させてもらう。
速攻魔法発動。《サイクロン》！
この効果で、未来融合を破壊する！」

「甘い！　カウンター罠（トラップ）発動！　《マジック・ジャマー》！
手札を1枚――《マテリアルドラゴン》を墓地に送り、
魔法（マジック）カードの発動を無効にする！」

「く……！　カードをセットし、ターンエンド！」

「ふん……通常召喚可能なモンスターがいなかったというわけか。
俺のターン、ドロー！　そしてこのスタンバイフェイズ、
俺の場にF・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）が降臨する！！」

万丈目の場に現れる、五頭の龍。
それぞれの頭部が様々な属性の波動を放ち、威嚇する。

……確か、この「属性」のおかげで、光属性と神属性以外のカードには、
一切戦闘破壊されないんだったっけ。

「貴様に策が無ければ、これで終わりだ！
F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）で直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

迫りくる、５つの攻撃（ブレス）。
一切の対策を講じなければ、当然、この場でやられるだけだが――。

「伏せ（リバース）カード、オープン！
《トゥルース・リインフォース》！　デッキから、
レベル２以下の戦士族モンスターを特殊召喚できる！
《マッシブ・ウォリアー》を、守備表示で特殊召喚！」

【《マッシブ・ウォリアー》　攻　６００　／　守　１２００】

「チッ……このまま攻撃を行う！」

「だが、マッシブ・ウォリアーは１ターンに１度戦闘では破壊されず、
また、俺はこいつの戦闘でダメージを受けない！」

「ダークエンドで攻撃！　ダーク・フォッグ！」

そしてまた、ダークエンドの吐き出した闇に飲まれ、
マッシブ・ウォリアーが消えていく。

……今の俺にとっては、最大の敵だな、こいつ。

「カードをセットし、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！
《召喚僧サモンプリースト》を召喚！」

【《召喚僧サモンプリースト》　攻　８００　／　守　１６００】

「サモンプリーストの召喚に成功したとき、こいつは守備表示となる。
そして、サモンプリーストの効果を発動。
手札の魔法カードを墓地に送ることで、
デッキからレベル４のモンスターを特殊召喚できる。
手札の《戦士の生還》を墓地に送り、
デッキから《ロード・シンクロン》を特殊召喚する！」

【《ロード・シンクロン》　攻　１６００　／　守　８００】

そうして俺の前に現れる、老獪な印象を受ける僧侶と、
ロードローラーを擬人化、またはロボットのように改造したかのようなモンスター。

……本当はもっと別なこともできるが、今はこっちだ！

「《ロード・ウォリアー》以外のシンクロ素材となるとき、
ロード・シンクロンのレベルは２つ下がった状態として扱う。
レベル４の召喚僧サモンプリーストに、
レベル２となったロード・シンクロンをチューニング！
シンクロ召喚！　貫け、《大地の騎士ガイアナイト》！」

【《大地の騎士ガイアナイト》　攻　２６００　／　守　８００

】

召喚されるのは、人馬一体の騎士。
現状、俺の考える展開において最も重要なカードであり、
シンクロ召喚のギミックが現れて以来の相棒でもあるカードだ。
――まず、１枚！

「バトルだ！　ガイアナイトでダークエンドを攻撃！」

「ぐっ……！」

刺し貫かれ、その姿を霧散、消滅させるダークエンド・ドラゴン。
差分は５００。よって、万丈目には５００のダメージ……残りは３５００。

「ターンエンド」

「チッ……俺のターン、ドロー！
このターンでケリを付けさせてもらう！
伏せ（リバース）カード、オープン！　《竜の逆鱗》！
この効果により、俺の場のドラゴン族は貫通能力を得る！
更に速攻魔法発動！　《エネミーコントローラー》！
貴様のガイアナイトの表示形式を守備表示に変更する！

――バトル！　F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）でガイアナイトを攻撃！」

「この攻撃が通ったら、御堂の負けだ！」

三沢の言葉ももっともだ。

ガイアナイトの守備力は、わずか８００。

対して、F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）の攻撃力は５０００。

その差は４２００。つまり、俺がこの攻撃を通してしまえば、間違いなく敗北。

――だが。

「伏せ（リバース）カード、オープン！　《ガード・ブロック》！

この戦闘で発生したダメージをゼロにする！」

「まだ防ぐか……！」」

「その後、デッキからカードを1枚ドローする」

「く……ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！

魔法（マジック）カード、《貪欲な壺》を発動！

墓地のサモンプリースト、ギガンテック・ファイター、

トライデント・ウォリアー、混沌球体（スフィア・オブ・カオス）、ロード・シンクロンの5枚のカードをデッキに戻し、2枚ドロー！」

よし、これなら……！

「伏せ（リバース）カード、オープン！　《リミット・リバース》！　俺の墓地に存在する、攻撃力1000以下のモンスターを特殊召喚できる！　蘇れ、サモンプリースト！」

【《召喚僧サモンプリースト》　攻　800　／　守　1600】

「そして手札から、《クレボンス》を召喚！」

【《クレボンス》　攻　1200　／　守　400】

「レベル4、魔法使い族のサモンプリーストに、レベル2のクレボンスをチューニング！　シンクロ召喚！　現れろ、《エクスプローシブ・マジシャン》！」

【《エクスプローシブ・マジシャン》　攻　２５００　／　守　１８００】

「……だが、そのモンスターでは、俺には勝てんぞ」

「分かってる。だから――魔法（マジック）カード発動！　《ミラクルシンクロフュージョン》！」

「来た！　ミラクルシンクロフュージョン！」

まるで、俺がこのカードを使うことを待ち望んでいたかのように、翔が歓声を上げ、十代が目を爛々と輝かせる。

「融合召喚！　来い――《覇魔導士アーカナイト・マジシャン》！」

【《覇魔導士アーカナイト・マジシャン》　攻　１４００　／　守　２８００】

俺の眼前に現れるのは、紺碧の鎧を身に纏う、細身の魔術師（マジシャン）。

一見すれば、弱々しいとも感じられるその能力値――しかし、

それらは見かけだけのものに過ぎない。

「覇魔導士の融合召喚に成功したとき、
こいつに2つの魔力カウンターを置く。
更に、覇魔導士は、自身に乗っているカウンターの数×１０００、
攻撃力を上昇させる。よって、覇魔導士の攻撃力は――３４００」

当然、それだけを狙っているなら、そもそもこのモンスターは召喚されていない。

「覇魔導士の効果を発動！　場の魔力カウンターを1つ取り除き、
ドロー効果か破壊効果を発動することができる！
覇魔導士自身に乗せられている魔力カウンターを取り除き、
破壊効果を発動！　Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）を破壊する！」

「何っ！？」

直後、覇魔導士の手に握られる杖から、眩い光が発せられる。
一本の光条と化したそれは、寸分の狂いなくＦ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）の胴体を貫き、
撃破――破壊した。

「バトルだ！　覇魔導士で直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「ぐあああああっ！！」

放たれる、黒い球体。
まるで、ブラックホールのようにも思えるその攻撃が万丈目を覆った、
その瞬間、万丈目のライフポイントは１１００まで減少していた。

「カードをセットし、ターンエンドだ」

「くっ……！」

苦々しげな表情で、万丈目は自身のデッキを見据える。
勝てない。そんなわけはない。
――そんな感情が渦巻いてでもいるのだろうか。

わずかばかりの逡巡。
それが開けたとき――万丈目は、自身のデッキから1枚のカードを引いた。

「俺のターン――ドロー！」

引き抜いたカードの軌跡が、光の筋となって万丈目の手に収まった。

――そう見まごうばかりに、決意の込められた引き。

「俺は手札から、《死者蘇生》を発動する！

これにより、墓地から《マテリアルドラゴン》を蘇生！」

【《マテリアルドラゴン》　攻　２４００　／　守　２０００】

「ダークエンドじゃない！？」

十代の疑問の声。

確かに、ダークエンドも、この場においては非常に効果的な手だ。

俺の場には覇魔導士しか存在していない。

つまり、効果で覇魔導士を墓地に送りさえしてしまえば、

容易に直接攻撃（ダイレクトアタック）を決めることができる。

――が。

「そして、《ドレッド・ドラゴン》を召喚！
……御堂。どういうことだ、と思っているだろうな」

「……ああ。ダークエンドの効果で覇魔導士を破壊すれば、
あとは２１００の攻撃力のダークエンドと、
１１００の攻撃力のドレッド・ドラゴンで、
丁度俺のライフポイントは０だしな」

「だが――」

と、万丈目は、俺の足元――正確には、
伏せカード（リバース）の存在するであろう位置を指さした。

「そのカード。恐らくは、起死回生の一手だろう。
ダークエンドの効果は、１ターンに１度しか使えない。
もしもそれがモンスターを呼び出す効果を持つカードなら、
ダークエンドの２度目の効果は使えず、
処理ができない可能性もあるからだ」

……さすが、こういうところでは頭が回る。

恐らく、万丈目の考えていることはこうだろう。

そもそも、こちらの世界において、汎用除去カードは敬遠されがちだ。
俺もあまり投入されていない。

だからこそ、奇襲的に高い攻撃力のモンスターを召喚できるよう、デッキの調整が施されている。

だからこそ、確実に戦闘で勝つことのできるカードがあれば、それはこの世界においてはほぼ最強のカードと言ってもいい。

「行くぞ！　レベル6、光属性のマテリアルドラゴンに、レベル2のドレッド・ドラゴンをチューニング！
闇の内より輝きを放て！　――《ライトエンド・ドラゴン》！！」

その瞬間。
天空から光が降り注ぐような感覚が、場を支配した。

直後に光臨するのは、純白の竜。

――ライトエンド・ドラゴン。

【《ライトエンド・ドラゴン》　攻　２６００／守　２１００】

「行くぞ！　ライトエンドで覇魔導士を攻撃！
シャイニングサプリメイション！！」

「くっ……！！」

「更に、ライトエンドの攻守を５００下げ、
覇魔導士の攻守を１５００ダウンさせる！
ライト・イクスパンション！！」

ライトエンドの放つ光に包まれ、消滅する覇魔導士。
――それと同時、俺のライフが１２００削られる。

「まずいな」

――ふと、三沢がつぶやいた。

「ど、どうしたんだよ、三沢」

「ライトエンドの効果は、　攻守を５００下げることで、
相手モンスターの攻守をそれぞれ１５００下げる効果。

つまり、実質的にライトエンドは攻撃力３０００のモンスターを、
２度まで戦闘破壊することが可能だ。
御堂がどれだけのモンスターを持っているかは分からないが、
生半可なモンスターじゃ、逆に戦闘破壊されるだけだぞ……！？」

……つまりは、そういうことだ。
俺のデッキに眠るモンスターの殆どは、
効果と召喚の容易さを軸にしたものばかり。
ライトエンドに届く攻撃力のモンスターは、
エクストラデッキ以外の場所には存在しないと見てもいい。

――だが。

「ターンエンド……！！」

「俺のターン――ドロー！」

デッキには無くとも、エクストラデッキには存在している――！！

「伏せ（リバース）カード、オープン！　《ウィキッド・リボーン》！
８００のライフポイントを支払うことにより、
墓地に存在するシンクロモンスターを、

その効果を無効にして蘇生させる！
俺が蘇生させるのは、当然、ガイアナイト！」

【《大地の騎士ガイアナイト》　攻　２６００　／　守　８００】

「……ッ！！」

「そして手札から、《融合呪印生物－地》を召喚！」

【《融合呪印生物－地》　攻　１０００　／　守　１６００】

「まさか……っ！？」

「その通りだ。融合呪印生物－地の効果により、
融合素材モンスターとこのカードを生贄に捧げることで、
エクストラデッキから地属性の融合モンスターを特殊召喚する！
――来い！　《地天の騎士ガイアドレイク》！」

【《地天の騎士ガイアドレイク》　攻　３５００　／　守　２８００】

「――ガイアドレイクの攻撃力は３５００。
ライトエンドの効果を用いたとしても、その攻撃力の差は４００

だ。
……少なくとも、負けることはない」
「……」
「ガイアドレイクでライトエンドに攻撃！」
「く……迎撃しろライトエンド！
ライト・イクスパンション！」

両腕にそれぞれ装備された螺旋槍が唸りを上げる。
回転。――それが極まったそのとき、ガイアドレイクは、
眼前の「敵」にむかって走りだした。
ライトエンドの腹部に槍が突き刺さり、
その肉体が光の中へと消えていく。

「――ターンエンド」
「俺のターン――ドロー！！」
万丈目のデッキから、1枚のカードが引き抜かれる。
――その、カードは。
「……ターン、エンド」

そのカードは、果たして何だったのだろうか。
万丈目のターンは終了した。

想像しうる限りでは、《ライトニング・ボルテックス》など、
手札コストを要求するカード。
あるいは、上級モンスターのどちらか、だろうか。

いずれにせよ、結果は変わらない。

「俺のターン、ドロー。
――バトル！　ガイアドレイクで直接攻撃（ダイレクトアタック）だ！」

――この瞬間、万丈目のライフがゼロになり。

ビィ――ッ！！

と。無機質な音が、俺たちのデュエルの終わりを告げた。

＊　＊　＊

「……本当に行くのか？」

「最初からそういう約束だ。
敗者はただ、去るのみ。――俺は最初から、そのつもりだった」

あのデュエルから数時間。
俺たちは、島から去るという万丈目を見送るべく、
それぞれが埠頭に集まっていた。

今から引き払うという割に荷物は少ない。
……どうも、重い荷物は既に飛行機にでも乗せたらしい。

「そもそも、引導を渡したのは貴様だろう」

「……。俺だって、別に好きでやったわけじゃないんだが」

「どちらでもいいさ。
……元々、修行に出るつもりではいたからな。
何度でも戻ってくる。そして貴様にも十代にも勝利する。
……今度は、相棒と一緒に」

どこか吹っ切れたような表情。
……万丈目の右手に握られている、あのカードが原因だろう。

《光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）》。

これまで、どこに隠していたのだろうか。

そのカードの表面が――正確には、その目の付近が、
少しだけ、輝いたように見えた。

「……ところで、万丈目。
お前が最後にドローしたカードは……？」

「……」

万丈目が見せるカード。
それは――《竜の騎士（ドラゴン・ナイト）》だった。
攻撃力は２８００。モンスターを対象に取る破壊効果が発動されたとき、
そのモンスターを墓地に送ることで特殊召喚される、
優秀なモンスター……しかし、そのレベルは７。
通常召喚は、できない。

「それとだ」

ヒュッ、と、万丈目が俺に２枚のカードを投げ渡す。
これは――。

「……ダークエンドに、ライトエンド？」

「いずれ返してもらう。
……だが、今の俺は、そいつらに相応しくない。
いずれ光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）を使いこなし、
真に相応しい決闘者（デュエリスト）になったときに」

「きちんと返してもらう……か」

分かった、と返し、俺は丁寧に鞄の中にしまい込んだ。

「十代！」

「おう！」

「――次は、俺が勝つ」

「へへ……俺だって負けねえ。待ってるぜ、万丈目！」

ごつ、と拳を突き合わせる。

――それから、万丈目は、誰とも言葉を交わすことなく、
船に乗って島を出て行った。

それから俺たちがあいつに再開したのは二か月後――。
存外に早い再開だった。

――それと同時に、俺たちは、
あいつの強さを、この目に焼き付けることになったのだが――その話はまたいずれ。

１３束目：進退（後書き）

物語というものは唐突なものです。
私の物語は常に唐突です。
今まで登場してこなかった万丈目が突然登場するくらい唐突です。

というわけで、御堂ＶＳ万丈目の回でした。
いやあ、ドラゴン族デッキ書くの楽しいですね。
いや、とは言ってもかなり制限はあるんですけど。

まず今回の縛り。
とにかくダークエンドとライトエンドを出すこと。
次に二つ目。御堂の切り札を出すこと。
特に、それで勝負を決める、という点が難しかったように感じます。

ともかく、これから話がガンガン進んでいきます。
これから交流戦。どうなることやら……無機物の枠は何も考えてません（

↓　何も考えていない結果、まさかの勘違い。
……ライトエンドって対象取らないんですね。
修正しました。

１４束目：再興

――洋上　座礁クルーザー

それは、言うなれば不運な事故だった。

その日は、偶然にも海流が安定しておらず、
船舶での航行の一切が困難だった。

しかし、一度出港してしまった以上は、どこかしらに停泊して待機していなければ、、
どうあがいても、潮流が変わることはそうそうありえない。

まずは近場の港に停泊しよう――船長がそう提案した。

しかし、港らしい場所は見当たらなかった。
……どころか、その進路はまったくの別の場所へと向かっている。

そもそも、本来であればこの時点で何かがおかしいことには気付くべきだった。
船員が慌て始めた頃、万丈目はようやく異常に気付いた。

気付けなかったのは、万丈目にとっては災難だった。
そもそも、素人が気付けないのは当然――とも言える。
しかし、気づくことができなかった自分が悪いとも、言えないでもないが――。

「チッ……」

万丈目は軽く舌打ちした。

クルーザーが座礁して数時間。未だ、救援は無い。

水はつい先ほど尽きた。
それほど長い航海になると思っていなかったからか、
浄水はそれほど積んでいなかったのだ。

船員は意気消沈している。
当然だろう。

末っ子とはいえ、巨大財閥の息子の乗る船を危険に晒したのだ。
特にプロ意識の強い彼らにとって、
ある意味その反応は当然とも言えた。

「……ふん」

とはいえ、それを気にする万丈目ではない。
軽く溜息をつき、今後の計画を立てようと立ち上がった――その瞬間。

ぐらりと、船が揺れた。

「――？」

何故？　そんな思考が、この場にいる人間に流れる。
――と、そこで万丈目は見た。
海面下からこちらを覗き込む――　一対の目を。

ぞくり、と寒気がした。

――なんだ、コイツは――？

気持ちが悪い。
深淵を覗くとき、また自身も覗かれている。
――そんな至言があったことをふと思い出した。

逃げることはできない。
なぜならここは船の上。
――それも、せり上がった岩に乗り上げて座礁し、
一切動きを取ることのできない、だ。

「くっ！！」

海に身を投げ出すか？
いや、ダメだ。
そうしたところで狙われるのは目に見えている。
懐にはデッキ。それも、最強の相棒が入っている――！
水に漬けてしまえば、文字通りの水の泡。
これまでの出来事までもが――！！
周囲を見渡し、とにかく耐水、防水となるものを探す。
ビニル袋。あるいは鉄の箱。なんでもいい。

「くっ！！」

近場にあった金庫にデッキを投げ込み、厳重に鍵を閉める。
これで、いざという時にでも、無事に戻ってくる可能性がある――！！
と、そんな折だった。

「……！！」

莫大な量の水が船に押し寄せる。
マズい――と思った時には、もう遅かった。

万丈目が水に飲まれ、その姿が海上から消えた。

＊　＊　＊

「ん……」

ふと、鼻先に当たる水の冷たさに、万丈目は目を覚ました。

体が重い。――いや、それも当然か。
服が水に濡れている。元々、かなりの厚着をしていたのだ。
それなりの重さになっていても仕方がない――が。

それだけじゃなく、腹部に妙な圧迫感がある。
何だ？　と考え、目を開く――と。

そこに、黄色い人型のナメクジがいた。

「……！！？」

一気に飛び上がり、後ずさる。
そうすると――ナメクジが、口を開いた。

『ああん、ようやく目を覚ましたのね、アニキぃん』

「な、な――――！？」

なんだこいつは……！？

思わず口から飛び出しそうになった言葉。
それを、どうにか理性で押さえつける。

待てよ、と。

確か、こんなものをどこかで見た気がする。
そう、それはどこだったか。

確か、それは――。

（……カード？）

以前、どこかで見たはずだ。

確か、名前は《おジャマ・イエロー》。

妙に趣味の悪い恰好だったから、なんとなく覚えている。

そう考えると、それほど不気味な存在ではない――ような、気もする。

「……何だ貴様は」

『うっふん！　オイラ、カードの精霊よん。

名前は《おジャマ・イエロー》……』

「……精霊だと？」

精霊――確か、アカデミアにいた頃、

遊城十代がそんなことを言っていたような――？

いや、それだけじゃない。

確か、以前にも。

――何を見た？

少しばかりの疑問。
それに意識を向けていると、
おジャマ・イエローが次々と自身の身の上を語り始める。

『オイラ、兄弟がいるんだけど、
どうしてもその兄弟が見つからなくて……。
だから今、ここにいるんだけどぉ』

「……」

割とどうでもいいことだ。
しかし、ここはどこなのだろうか？

周囲を見渡すと、そこかしこに人工的な構造物が見られる。
そうなると、どこかの建物だろうか？

いや、海の中に引きずり込まれたんだぞ？
ありうると思えない。

いや、ここまで非常識な存在が目の前にいるのだ。
そもそも、そんなことを言えることはないのかもしれないが……。

「おお～!?　何だこのレアカード!!」

「!?」

大声。

知っている人間のものではない。

……誰だ?

そう考え、そちらに目を向ける――と。

「……ワ……」

ワカメ。

まるで、ワカメの化身のような、ヒトガタの何かが、そこに存在していた。

その足元にあるそれは――間違いなく、

万丈目のデッキを入れた金庫。

「な……!」

「お……《光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）》？
とんでもないモンもあるもんだなぁおい」

「おい、貴様ァ！！
そのカードに触れるな！！」

「ん……お。なんだ、起きたのか少年。
つーかこれ、お前のデッキか？
あーそう。悪い悪い。でもしばらく預からせてくれ。な？」

「黙れワカメ野郎！！
そのデッキを――《光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）》を返せ！」

「あー、いや別に盗（と）ろうってわけじゃねーんだけど……。
まいいや」

「何！？」

――と。
激情に任せ、掴み掛ろうとしたその瞬間だった。

「――……な」

水。

水が――押し寄せてくる。
最悪だ、と感じる。

そうだ、自分のデッキは――！？

万丈目がそう思考した瞬間には、ワカメ男は既に、
万丈目のデッキを元の金庫に戻していた。

……とりあえずは、これで大丈夫――。

ではなかった。

まずは、命の心配をしなければならないのだった。

「くっ！！」

押し寄せる水に立ち向かうべく身構え、軽く息を止める。

――そして万丈目は、またも水に流されることとなった。

＊　＊　＊

そうして、どれだけの時間が経っただろうか。
一日――かどうかは不明ではあるが、
何度こんな経験をすればいいのだろうか。
そんなことを考えながら、万丈目は目を覚ました。

「……ん？」

手元に妙な重さを感じた。
決して不快な重さではない。
いや、むしろ慣れ親しんだ――。

「デュエルディスクだと？」

そう。
万丈目の手元にあるのは――彼がよく慣れ親しんだ、
アカデミアデザインのものと同様のデュエルディスクだった。
そこにあるカードは1枚。
試しに引き抜く――と。

『あ、どーもー』

おジャマ・イエローだった。

……一瞬握りつぶしたくなったのは、気のせいだろうか。

「……また貴様か」

『イヤん、アニキのい・け・ずぅ！
オイラがいて、少しは助かるでしょ？』

「単体ではそれほど役に立たんくせに何を言っている。
……それより貴様、ここがどこか分かるか？」

『さ、流石にオイラもそんなことは分かんないわよぅ』

多少は申し訳なさそうに、おジャマ・イエローが苦笑いする。
確かに、分からずとも仕方がないだろう。
少なくとも、何かしら行動を起こさなければ、何も分からない。

「仕方ない。……動くぞ」

『え、ちょ、ちょっとアニキぃ、
いいのかしらんそれで？』

「ふん……構わんさ。
じっとしているよりも、動いた方が自然と情報も集まる」

そうかしらん、と不安そうに返すおジャマ・イエローに、
一切の返答を返すことなく、万丈目は歩き出した。

しばらく歩いていると、そこかしこにカードが落ちていることに気
が付いた。

「……。《ハウンド・ドラゴン》か」

レベル３のモンスターの中では、
それなりに高い攻撃力を持つ通常モンスターだ。

【ローレベル】にとっては有用なモンスターだが、
普通のデッキに投入するには、少々力不足のモンスター。

これでも、無いよりはマシということか。

万丈目は《ハウンド・ドラゴン》を拾い上げ、
デュエルディスクにセットした。

『あらン？　アニキ、そういうカード嫌いそうなのに』

「……使い方次第でどうとでも使える。その気になれば、
この世に使えないカードなど、存在しないのだからな」

雑魚、と呼びはしても。
クズ、とは絶対に呼ばなかった。

確かに能力値が低ければ、それはある意味、
「ザコモンスター」とも言えるだろう。
だが、使い道はいくらでもある。

例えば、レベル１、攻守０の通常モンスター、《千眼の邪教神》。

このカードのメリットを挙げるとすれば、
まず闇属性、という点が挙げられるだろう。
そして、レベル1という低レベル。
使い方次第では、魔法使い族という種族だって、メリットになる。
《高等儀式術》を用いることもできるだろう。
通常モンスターということを用いて、何度だって蘇生できるし、
何かしらの発動トリガーにも用いることができる。

この世に不必要なカードなど存在しない。
それは――いつか。
……あのとき、あいつに言った言葉でもあった。

――あいつ？

万丈目は軽く目を閉じた。
……が、思い出せない。

まあいい。そう考え、万丈目は再度歩き始めた。

「……あれは？」

『あれは……何かしら？』

巨大な建造物――のようにも見える。
４～５０メートルはあるだろうか？
島――アカデミアよりは小さいものの、
それでも十分に巨大だ。

足元に気をつけながら走っていくと、
そこには門があった。

門――それも相当に巨大な。
その基部付近には、電子ロックにも似たようなものが見える。
恐らくは、あれを突破しなければならないのだろうが――。

「無理だ」

「……何？」

唐突に聞こえてくる声。
そちらを振り向く――と、一人の男が、火に当たっていた。

どう見ても中年にしか見えない。
額は少々禿げかかっており、無精髭がぼうぼうに生えている。

その左手にはデュエルディスク装着されており――その目には、生気がない。

「誰だ、貴様は」

「……ずっとこの門に挑んできたモンだ。
……この門は、あの電子ロックを解かない限りは入れない。
そしてあの電子ロックは、カードを４０枚集めなければならない……」

「ふん……つまり、デッキを読み込ませろ、ということか」

「私は３９枚まで集まった。
だが……見つけられなかった。
だから、ここでずっと待っていたのだよ」

「追剥（おいはぎ）のチャンスをか」

そう問うと、男は軽くうなずいた。

「……だが、もう疲れたよ。
他人から奪うなんて、考えたくもない」

「……脱落者か」

「そう呼んでくれても構わない」

どこか諦観したような表情で、男は語り始める。

「……この周辺には、様々なカードが落ちている。
険しい場所であればあるほど、強いカードがある。
だが、私にはそんな体力は無かった……。
だが、若いキミなら、なんとか……！！」

「ふん。……まあ、確かに、カードは落ちているようだな」

つい先程拾った《ハウンド・ドラゴン》のカードのことを思い出す。

……つまり、あんなカードがこの周辺に、
いくつか落ちている、ということだ。

万丈目は男の話を聞くが早いか、
身を翻して氷土へ――そして、外見からして、
最も険しいであろう場所へと歩き出した。

男は何も言わず、万丈目を見送った。

……まるで、それこそ生気が抜け落ちているかのように。

＊　＊　＊

――そして、数時間が経過した。

「ダメだったか……」

男は嘆息した。

また一人、脱落者が現れた。その事実に対して――だ。

「……ん？」

と、そんな折、足音が聞こえた。

一人分の足音――それは、恐らく。

「お、おお……！！」

――傷だらけになってでも。
全身を冷水に晒してでも――戻ってきた。

――その少年は。

「……まさか、カードを集めて戻ってきたというのかね！？」

「ああ……これで、４１枚だ」

「な……？」

ふん、と軽く鼻を鳴らし、万丈目はカードを1枚投げ渡した。

「餞別（せんべつ）にくれてやる。
……どうせ、ついでに手に入れたカードだからな」

と、万丈目が投げ渡すのは――《救援光》のカード。

洒落が効いていると感じたのは、男の気のせいだろうか。

「あ……ありがとう！　ありがとう……！」

「礼ならいらん。先に行け。
……俺は、少し疲れた」

そう告げて、万丈目は壁にもたれかかった。

男が走り去っていったあと、万丈目は少しばかり考えていた。
……本当に渡してもよかったのか、と。

別段、問題があったわけじゃない。
確かに万丈目は、４１枚のカードを手に入れていた。

だが、そのいずれもがシナジーの薄い、
――俗的な言葉で言えば、「紙束」と呼ばれるようなものだ。

デッキとしての完成度は異様なまでに低い。
それは、あの男に渡したカードが示しているとも、言えなくもない。

デッキを用意させるということはつまり、
間違いなくデュエルをさせられるということであろう。
この場所の詳細については聞いていなかったが、

話の流れとしてそれくらいのことは推察できる。
この施設のことについては分からないが――ともかく、今はやるべきことをするだけだ。
そして、あのワカメ怪人に会い、デッキを返してもらう。

さて、と万丈目はようやく温まってきた体を起こし、門に向かって歩き始めた。

＊　＊　＊

万丈目を待っていたのは、
どこか西部劇のような雰囲気の漂う街並みだった。
凍えるような外気の外とは違い、むしろ暑さすらも感じるほどに、この場所の気温は異様に高い。

「おうおうテメェ、この場所に何の用だ？」

そんな折、唐突に声がかけられる。

どこかいがらっぽい、聞いていて不快になるような声――。

どころか、そのセリフでさえ、どこか小物っぽい。

歩いてくる人影は二つ。

いずれも、揃いの黒いジャケットに身を包んでいる。

「……」

「おい、無視してんじゃねーよ。

それとも、ビビってんのか？

ひゃっはっは！　それならそうと言――」

「失せろ。小者に用は無い」

「ンなっ……」

みるみるうちに、二人の男の顔が真っ赤に染まっていく。

馬鹿にされたと感じて憤慨しているのだろうか。

どちらでもいい。

いずれにせよ、それを想定していて、この言葉を放ったのだ。

憤慨するならすればいい。

「テメェ……この場所が、
デュエルアカデミアノース校だと知っててそんな口を叩くか！？」

「……ほう？」

デュエルアカデミア。

――今、この男はデュエルアカデミア、と言ったのか。

確かに、この場所に漂う空気は、
「あの頃」とほぼ同質の――しかし、
どこか荒廃したかのような、それだ。

と、そうして考えに耽っている万丈目が、
「デュエルアカデミア」という単語に対して萎縮していると、
そう勘違いしたのか――どこか気分よさげに、男は言葉を紡ぐ。

「こいつを見ろ！」

――と、そうして男が指さすのは、

どこかで見たような、髪の薄い男――。

「……オッサン？」

「ほう、知り合いだったのか。
あの入学試験を突破した人間は、
この場所で改めて『入学試験』を受けさせられる。
そして自らの格が決まる――が、あの男は、
この学校で最も弱いやつにすら負けた！
だからあいつは、この学校で最も弱い人間だと格付けされたわけだ！」

ひゃはははは！　と、耳障りな笑いを続ける男。
対し――万丈目は、静かに「オッサン」を見据えていた。

つい先ほどまでは、嬉々としてこの門の中へと入っていった。
そうした結果が――これか。

虚しい――と、万丈目は考える。

弱いことに対してではない。
万丈目が虚しいと感じるのは、
体力も何もかもを消耗した「オッサン」に対し、
当然であるかのように洗礼を浴びせ、「お前が最下位だ」と、
冷たい現実を突きつける、この学校の体質に――だ。

「――この学校で一番強いやつを出せ。
そいつに勝てば――俺が、ナンバーワンということだな？」

「あ？　ひゃははは。分かってねえなあ。
この学校は完全なランク制だ。
下の人間から倒していかなきゃ、
江戸川さんとは永遠に戦えねえっての」

間抜けな奴だ、と、万丈目は思う。

挑発に軽々しく乗ることもそうだし、
最初から無茶な条件を持ち出せば、
そこに至るまでの経緯をわざわざ説明してくれる。

更には、わざわざトップの名前までをも漏らしてくれた。
ここまで楽なことは、そうそう無いだろう。

「じゃあ、さっさと構えろ。
……悪いが、俺は気が短いんだ。
その江戸川とやらを倒し、俺が頂点に立つ」

「野郎ォ……言いやがったな！？
おい、お前ら出てこい！」

男のその声と共に姿を現す、人、人、人――。

余談ではあるものの、そこに女子生徒の姿は無い。
デュエルアカデミア本校では頻繁に見かけるものであるが、
こういった僻地にわざわざ来るような、
物好きの女の子はそうそういない――ということだろう。

「ふん……いいだろう。まとめてかかってこい。
貴様ら全員、一網打尽にしてくれる」

万丈目のその言葉が引き金となり、地獄の連戦が開始した。

＊　＊　＊

「馬鹿なっ……！？」

そうして、何時間経っただろう？

気付けばとっぷりと夜も更け、
数十人はいたノース校のデュエリストも、
その殆どが万丈目の戦術の前に下った。

残るは、一人。

「貴様で最後だ。
……確か、江戸川とか言ったか」

「はん、デカい口を叩くだけのことはあるようだな。
さっさと構えな。相手になってやるぜ。
……まあ、どうせ相手にはならんだろうがな！」

デカい口を叩いているのはどっちだ……と軽く嘆息しつつ、
万丈目はデュエルディスクを再度展開した。

「「決闘（デュエル）！！」」

万丈目のターンからデュエルは開始される。

「俺のターン、ドロー。
カードを3枚セットし、モンスターをセット。
……ターンエンドだ」

「は、手札事故かぁ！？
俺のターン、ドロー！
手札から、《マッド・デーモン》を召喚！」

【《マッド・デーモン》　攻　１８００　／　守　０】

「こいつは貫通効果を持っている。
さあて、マッド・デーモンで攻撃だぁ。
ボーン・スプラッシュ！！」

宣言と共に、マッド・デーモンの腹部の口が蠢き、
そこに収められていた骨が吐き出される。

「くっ……！」

万丈目の伏せていたモンスターがあらわになる。
そのカード名は、《メタモルポット》。
守備力は６００。

故に、貫通効果を持つマッド・デーモンの攻撃を受けた万丈目のライフは、
１２００ポイントが削られ、残り２８００。

「メタモルポットの効果を発動！
互いに手札を全て捨て、５枚のカードをドローする！」

「何っ……くそっ！」

万丈目の捨てたカードは２枚。
《千眼の邪教神》。そして、《ハウンド・ドラゴン》。

対して、江戸川は５枚のカードを捨てる。
《ダーク・キメラ》、《闇魔界の覇王》、《カードを狩る死神》、
《黙する死者》、《馬の骨の対価》の五枚だ。

その後、互いに５枚のカードを引く。

「チッ……カードを２枚セットし、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー。
……モンスターをセット、
カードをセットし、ターンエンドだ」

「テメェ……やる気あんのか！？
ちったぁ真面目にやりやがれ！」

「馬鹿か貴様は。俺は真面目だ。
……確かに、これまでと戦術を変えているがな」

ここに至るまでに経験させられた、数十回ものデュエル。
当然ながら、江戸川にはそのデッキの内容は殆ど知れてしまっている。

これまではほぼ単調にデュエルをしてきただけだが、
今回は違う戦術を用いて挑んでいる。

そのようにできるよう、調整を施したのだ。
――知れた戦術をいつまでも使っているほど、
万丈目の底は浅くは無い。

「クソがっ……俺のターン、ドロー！
手札から魔法（マジック）カード発動！　《二重召喚（デュアルサモン）》！
このターンの通常召喚権が2度になる！
手札から、《デーモン・ソルジャー》を召喚！」

【《デーモン・ソルジャー》　攻　１９００　／　守　１５００】

「そして、２体のモンスターを生贄に！
現れよ、《デビルゾア》！！」

【《デビルゾア》　攻　２６００　／　守　１９００】

召喚される、いかにも「悪魔」といった容貌のモンスター。

「……」

強大な威圧感を放つその双眸。
――しかしながら、その攻撃力は２６００。

最上級モンスターとして見れば、少々力不足、と言わざるを得ない。
３枚ものカードを消費してまで出すモンスターだろうか？

「これだけと思ったか？
残念だったな！　伏せ（リバース）カード発動！
《メタル化・魔法反射装甲》！　これを《デビルゾア》に装備！
さらに、このデビルゾアを生贄に――《メタル・デビルゾア》を特殊召喚！」

【《メタル・デビルゾア》　攻　３０００　／　守　２３００】

「ふはははははっ！　まだまだ！
伏せカード発動！　《正統なる血統》！
墓地の通常モンスター、《デビルゾア》を特殊召喚！」

【《デビルゾア》　攻　２６００　／　守　１９００】

江戸川の場に召喚される、二体の悪魔。
周囲が沸き立ち、場のボルテージが上がる。

――その一方で、万丈目は冷静だった。

自分にできることを模索する。
そうして導き出した答えが、このセットモンスターだ。

江戸川のような男は、大口を叩いて自らを鼓舞させる傾向にある。
それはつまり、本当は、それほど自身に自信がないということの表れだ。

であるとするなら、攻撃をするのは、間違いなく――。

「行け！　メタル・デビルゾアで攻撃！
メタル・エックス・シザース！！」

「ふん……墓地に送られた《冥界の使者》の効果を発動。
フィールドから墓地に送られたとき、
互いにデッキから、レベル３以下の通常モンスターを手札に加える。
俺が手札に加えるのは、《海皇の長槍兵》だ」

「ほう……ならば、俺は《ヘルバウンド》を手札に加えよう。
……ふはは！　そしてデビルゾアで攻撃！
デビル・エックス・シザース！！」

「ぐっ……！！」

万丈目のライフから、２６００が引かれる。
残りはこれで２００――風前の灯火（ともしび）とは、このことか。

「ターンエンド。ふっはははは！！
このノース校トップのこの俺に勝とうなど、
千年は早かったようだな！」

ははははは……と、耳障りな声が聞こえる。
ふん、と万丈目は軽く鼻を鳴らした。

気にする必要はない。
――倒すことができるのには、変わりはないのだから。

「俺のターン、ドロー！
手札から、《海皇の長槍兵》を攻撃表示で召喚！」

【《海皇の長槍兵》　攻　１４００　／　守　０】

「ヤケにでもなったか？　そんなザコを召喚するなんてな！」

「言っていろ。、《暗黒界の取引》を発動。
互いにデッキから1枚をドローし、1枚を捨てる。
それにチェーンし、《正統なる血統》を発動。
俺が選択するのは――《千眼の邪教神》だ」

「馬鹿なっ！？
そのモンスターは、デュエルモンスターの中で最弱のカードだぞ！？」

知っている、と言わんばかりに、万丈目は舌打ちした。
――だが、この行程は必要なことだ。
この男を倒すためには。

「更にチェーン発動。伏せ(リバース)カードオープン！　《サモンチェーン》！
3回目以降のチェーンの際に発動が可能となる。
このカードを発動したターン、俺は3回の通常召喚が可能となる」

「何……？」

「これにより、俺はあと2回の通常召喚が可能だ。
そして逆順に効果が処理される。
墓地の《千眼の邪教神》を特殊召喚！」

【《千眼の邪教神》　攻　０　／　守　０】

「そして、互いに1枚ずつドロー。
その後、1枚ずつを捨てる」

互いに、1枚ずつカードを捨てる。
万丈目は《プチリュウ》を、江戸川は《ヘルバウンド》を。

「これですべての効果処理は終了した。
俺の残りの召喚権全てを用い、
現れろ、《おジャマ・イエロー》、《王家の守護者》！」

【《おジャマ・イエロー》　攻　０　／　守　１０００】

【《王家の守護者》　攻　９００　／　守　０】

『え？　オイラ……ってギャァァァ！？
なんか怖いのがいるよアニキイィ！？』

「狼狽（うろた）えるな。
更に伏せカード（リバース）、オープン！　《エンジェル・リフト》！
墓地のレベル2以下のモンスターを、攻撃表示で蘇生！
《プチリュウ》を特殊召喚する！」

【《プチリュウ》　攻　６００　／　守　７００】

「はん、ザコモンスターをいくら並べたって、
俺のデビルゾアたちには勝てねえぞ。無駄なあがきだな」

「ふん、そう感じるならそうなんだろう。
……貴様の中では、な」

「何ィ……！？」

「手札から魔法（マジック）カード、《サウザンドエナジー》を発動！
場の全てのレベル2、通常モンスターの攻撃力を、
１０００ポイント上昇させる！」

万丈目の場の、千眼の邪教神以外の全てのモンスターの攻撃力が上昇する。
合計上昇値は４０００。

本来であるなら、これだけでも十分ではある。
しかし、相手は攻撃力３０００。
迂闊には手を出せないというのが本音だ。

――が。

「このターンで終わらせる。伏せ魔法（リバースマジック）発動！　《弱肉一色》！
俺の場にレベル２以下の通常モンスターが５体存在するとき、
互いのプレイヤーは場のレベル２以下の通常モンスター以外の、
手札・場の全てのカードを墓地へ送る！」

「何っ！？」

「これで終わりだ。……ザコにも、使い道はいくらでもある。
――総員、一斉攻撃！！」

『いくのよ皆！　万丈目のアニキを勝たせるために！』

「ぐあああぁぁぁっ！？」

江戸川に向かいくる、槍、拳、火炎。
――そうして気付いてみれば、４０００あった江戸川のライフは０となり、
デュエルの終了を告げるブザーが、周囲に鳴り響いていた。

＊　＊　＊

「いやあ、見事なデュエルだったよ」

――と。

デュエルを終え、一息つく万丈目に、「オッサン」が話しかける。

「アンタか。……ふん、だがこの学校で1番になってみても、あまり意味は無い。俺の目標は、もっと遠く――」

そう、あまりにも遠い。

ある1人はその天性のスキルにより、その場で最も最適なカードを引いてくる。

ある1人は皇帝（カイザー）などと呼ばれる、本校最強のデュエリスト。

ある1人はあまりに知識が深く、天才などと例えられる。

ある1人は底が知れない。何を考えているのか――あるいは、何を知っているのか。

そんな人間にことごとく打ち勝たなければならないのだ。

この程度――どうということはない。

「ならば、戦ってみるかね？」

「……何？」

「本校との交流戦。……その代表者として出てみないかね、と、私はそう言っているのだよ」

先程までとは打って変わって、
どうにも強気な――奇妙な雰囲気を醸し出す「オッサン」。

「……何者だ、あんたは」

「おお、自己紹介が遅れたな。
私は――ノース校校長、市ノ瀬（いちのせ）だ」

「な……っ！？」

ノース校校長。
それはつまり――。

「……騙していたのか、俺を」

「そんなつもりはない。
……だが、君のデュエルのセンスを見たくなった、
とでも言えばいいかね。
……そして、これを返却しよう」

と、市ノ瀬が手渡すのは――紛れもない、
万丈目の本来のデッキ――。

「まさか!?」

「……ある時は謎のオッサン、
あるときは謎のワカメ男。しかしてその実態は――そう。
この私！　ノース校校長、市ノ瀬だ！」

「……」

「ごほん。……まあ、そういうことだよ万丈目君。
君さえよければ、本校との対抗戦に、君を出場させてあげよう。
無論、我々ノース校一同、君に力を貸す。
……どうかね?」

迷う必要は無い。
――あの面子のうちの誰かと、戦うことができる可能性がある。
天秤は傾いた。
頷かない理由が、無い。

「いいだろう。その誘いに乗ってやる」

「ああ……よろしく頼む」

――こうして。
交流戦、ノース校代表――史上初の1年生の参加が決定された。

１４束目：再興（後書き）

懲りない無機物です。
今回は万丈目の復活回を書かせてただきました。

……はい、実はライトエンドのあの件を未だに引きずってます。
豆腐メンタルです、私は（

今回の万丈目のデッキは、拾ったカードによる【ローレベル】です。
文字通りのローレベル。しかもあんなカードやこんなカードまで…。
常識的に考えれば、使うことが無いようなカードまで投入されています。
まあ、拾ったカードですので。

……しかし、本当なら相当短いはずの回だったのに、
なぜこんなに長くなってしまったのでしょうか。

例によって例のごとく、何か間違いがありましたら、ご指摘お願いします。

↓あったぁぁぁぁぁぁあ！？
どうしてこうなった。
ルールは――確認し忘れた。というよりも、この回にデュエルを挿入しようと思ってはいなかったからだ。
いや、それは甘えだろう。

だったらどうする？

修正しろ。――当然の解答だ。
出来るか――。応(YES)。
前後の行程(プロセス)を確認。修正できるものから修正を施す。
幸いにも修正個所はそう多くない。
一つ二つの行程(プロセス)の入れ替えによって、
修正はいくらでも可能――。
修正開始(リビジョン・オン)。
過去を無かったことにするッッ！！

そういうわけで型月風に修正を加えました。
……元々の効果処理はいろいろおかしいですが。
チェーンの関係でサモンチェーンから処理されていくはずなんですけど、どうしてこうなった。

15束目：他校（前書き）

今回は前後編に分かれています。
ところで主人公って誰でしたっけ……？（

15束目：他校

俺が万丈目を下し、あいつを学校から退学させ、早数か月。

――世の中、取り立てて意味のないような、
言うなれば、ほぼ常に変わらない、一定の日常を過ごしている間は、
時間が早く過ぎ去り、その経過にあったことすらも忘却してしまう
ものだ。

この日、鮫島校長から、ノース校との交流戦の詳細が発表された。

相手校の代表は、1年生だということが発表され、
アカデミア内がにわかに活気づいた。

――誰が代表になるんだろうな。

――カイザーだろう。相手が1年だからと1年を出す必要はない。

――いや、遊城十代だ。

――1年相手には1年だろう。あいつの実力は知っての通りだ。

――いや、三沢じゃないのか？

――確かにあいつも実力者だが、遊城に敵うのだろうか？

――そういう意味では、御堂も候補に食い込まないか？

――ないない。ない。ありえん（笑）。

――だよなぁ。まだイエロー寮にも慣れてないし。

――でも実は三沢と実力的には拮抗してるらしいぜ？

――マジか。でも、天上院もありうるんじゃないか？

――同意。見た目（ビジュアル）も映えるしな。

――でも遊城っぽいよなぁ。

――だよなー。

……まあそんな風に、１年の中から代表者が選出される、という雰囲気になっている。

候補者は、俺を含めて５名。

十代、三沢、明日香、カイザー。

内、校長の方針で、１年生に対しては１年生をぶつける、といった通達を受けた。よって、カイザーが交流戦に参加することは無い、

とみても間違いではないだろう。

と、そんな訳で。

俺たちは今、十代の部屋に集まり、
交流戦の代表を誰にするか？　という議論を交わしていた。

「――俺はパスだな」

「「「何で！？」」」

全員がいきなりツッコミを決めてきた。
……何で、と聞きたいのはこっちだよ！

「よく考えてもみてくれ。学校対抗の交流戦――。
恐らくは、何かしら重要な意味があるはずだ。
そんな戦いに、俺みたいな一般ピーポゥが出てみろ。
……間違いなく、袋叩きだ」

「み、御堂。お前、突然悲観的になったな……」

「違うぞ三沢。俺は冷静に戦況を分析し、その上で判断を下しているんだ。
……交流戦だぞ？　相手の学校のナンバーワンだぞ？
間違いなく瞬殺されるだろうがてめェふふふあははははっ！！」

「帰ってこい御堂!?
れ、れれれ冷静になれ!」

「冷静に？　ひゃははははァ！　俺は冷静だ。
冷静で冷静で――今すぐにでもそこン崖から飛び降りてェよ!!」

「お、落ち着けよ和真っ!?」

これが落ち着いていられるものか。
俺は主人公（ヒーロー）じゃない。
ただの紛い物だ。

ここが遊戯王の世界か……なんて言いながら、
あらゆる事件を解決して説教する破壊者でも、

かと言って「その幻想をぶち殺す!」なんて言いながら、
出会った敵を全て殴り倒す旗立て男（イマジンブレイカー）でも、

「少し頭冷やそうか……」なんて言うはずもなし、

……つまりは、俺はちょっとばかし、
一般生徒よりもチートドロー能力の高いただの一般人だってことだよ!!

「まあそれはそれとして」

「突然元に戻ったわね！？」

「勝率を考えれば、俺よりも三沢や明日香、十代の方が適任だろうし。そもそも、俺はあんまり目立ちたくない。

こないだの万丈目とのデュエルにしても、偶然に偶然が重なって勝てただけだ。

次があるとは思えないしな」

「そうでもないんじゃないかしら……。

デッキの構築能力に関しては、一線級の腕と思うわ」

「結局俺はそれだけなンですよ明日香さァン」

「ちょっと口調が変わってないかしら！？」

……何はともあれ、俺の武器は、ある程度はある、と保障されている、デッキの構築能力と、それから、幾ばくかのチートドローだけだ。

はっきり言おう。俺は、この中で最も弱い。

俺が「１」の行動を行うべくターンを消費しているうちに、十代は「１０」の行動を行うことができる。

俺が３つの戦術を組み立てているうちにも、三沢は２０の戦術を組み立てることができる。

俺が２度、相手の行動を制限していれば、
明日香は１０回は相手の行動を封殺している。

……つまりは、中途半端なのだ。

その一方で、仮に十代が俺の行動を１度制限しようと試み、
戦術を１から組み立てるとする。
しかし、俺はその一方で、３度は十代の行動を殺し、
５つは戦術を組み立てることができるだろう。

三沢が５つほど行動を行おうとすれば、
俺は１０の行動を行うことができるかもしれない。

明日香が３つの戦術を組み立てるころには、
俺は８つの予測を組み立てられる。

……一応は、他の３人に対して優位性（アドバンテージ）はあるにせよ、
それはあくまでも微々たるものだ。
あまり当てにはできない。

器用貧乏、ってところか。

「能力がいくら平均的に高くても、
一つの事柄に突出した人間の方が、より良い結果を得ることができる。
……ある意味、この世の真理だよ」

「どこの賢者だお前は……。
……とすれば、まず御堂はパス、か。
俺も今回は遠慮させてもらおう」

「え？　なんでだ？」

「デッキの調整がまだ終わってないんだ。
神楽坂や御堂の力も借りて、どうにか終わらせようと、
努力はしてるんだが……交流戦には間に合いそうにない」

……確かに、三沢は今でもデッキの調整を行っている。
その理由は、十代に敗北したことにあるだろう。
融合をいくら封じようとも、十代はその裏をかいて三沢を下した。
ならば、更にその裏をかくことはできないだろうか。
――あらゆる戦術に対応できるデッキ。
それが、三沢のデッキの理想形だった。

「じゃあ、明日香はどうするんだ？」

「私は……丁度ノース校の人たちが来ることになるわけだし、
可能な限り兄さんの情報を探ってみたいの。
……正直に言えば、そちらに気が向きすぎて、
交流戦に集中できると思えないわ。

だから、私もパス」

「ってことは、俺か？」

3人で一斉に頷いてやる。

「っしゃあ！　じゃあ、やってやるぜ！
目指すは勝利ただ一つ！」

「ああ！　俺たちも、可能な限り助力するぞ」

「ええ。……それじゃあ、とにかくデッキの調整からね。
相手の出方が分からない以上、どうにもしがたいけど……」

あーだこうだと談話を続ける3人。
……その一方で、俺はそれを遠巻きに眺めるように、
部屋の隅で胡坐（あぐら）をかいていた。

何せ、三沢と明日香がこの場にいるんだ。
俺ができることなんて、あるものか？

デッキ構築が上手いとか言われてみても実感は湧かない。

事実、これまでは上手いことごまかしごまかし回してはきたが、

これ以降、どうなるかは分からない。

……そういう意味では、引きの強い十代が羨ましい。
だけじゃなく、意思もかなり強い。少々の揺さぶりには応じないだろう。
そして、何よりも強い。
アカデミアナンバー1のカイザーには劣るにせよ、
現行、1年の中では最強とも目されている。

実際のところ、三沢にしても、実質的にオベリスク・ブルーと、
ほぼ同等かそれ以上のの実力を持っている。
天才、と評されるその頭脳は伊達ではない。
ラー・イエローのリーダーのような存在だ。
……十代に勝たなきゃ昇格はしない、と言ってしまったが、
その点、大丈夫なのだろうかと心配になってくる。

明日香は見た目通りにオベリスク・ブルー相当の実力はある。
見た目も映えるし、それだけではなく、頭も冴える。
相手の行動を逆手に取ったり、あるいはその行動を制限し、
禁止し、封殺するという技能にかけては1番と評してもいい。
そうでなくとも、基本的にデッキが奇襲に特化した型ということもある。
初見ではまず間違いなく苦戦を余儀なくされる。

……この中で最も一般生徒に近いのって俺だよね、間違いなく。

取り立てて突出した能力なんてないし。

精霊なんて見えないし。

頭がいい、なんて周囲の評価にしても、
実質的にあちら側の知識を持ち越して用いているんだから、
ある意味では当然だ。

俺の持ちうる優位性（アドバンテージ）は、原作の知識のみ。
――ついでに言えば、皆の知らないカードのことも知っている、
ということも言えるが――総合して「知識」とすべきだろう。

逆に言えばそれだけ。

転生したことで何か付加されたわけじゃない。
いや、逆だ。あちら側での記憶を失っていくのだから、
実質的に、俺が得たものは何もないということになる。

……いや。
レイが近くにいたこと、それ自体は、俺にとっては得たことの一つだろう。
それだけは否定ができない。できないし、しない。

やめだ、やめ。

そんな風に、無駄にコンプレックスを抱いていても仕方がない。
ドツボにはまり込んでしまうだけだ。仲間に対して嫉妬してどうするんだ。

……まあ、羨ましいとは思うけどさ。

「じゃ、俺にできるようなことは無いし、
ゲン担ぎにカツ丼でも作ってくるよ」

「え？　和真は調整に加わらないのか？」

「あー……うん、まあ。
あーだこーだ口出しできるほど卓越したスキルは無いし……。
……俺はデュエルより飯作る方が得意だし」

「だったら何故アカデミアに来たんだ！？」

原作を見たいがため？
……まあ、あながち間違ってないけどさ。

確かに、俺のＨＥＲＯデッキの一部でも十代に譲れば、
それだけでも十二分に強化には繋がるだろう。そこは間違いない。

だが、仮にそうしたとして――二年目。十代がエドに敗北し、
ネオスペーシアンとネオスを得るという重要な過程を飛ばしてしまいかねない。

Ｚｅｒｏなんて渡した日にはもう凄まじいことになるだろう。
最悪、手札も場も何も無いような状況からバブルマンをドロー、
↓融合とＨＥＲＯドロー↓Ｚｅｒｏ降臨……なんて。

冗談じゃねーぞ。
何でそんな悪夢のような光景を拝まなければならないんだ。

それだけじゃない。

仮にネオスを手に入れたと仮定しよう。
当然ながら、ネオスは通常モンスターだ。
召喚方法も豊富で、蘇生も容易。
故に過労死させられかねないのだが――ここで一つ。

そもそも、ネオスはコンタクト融合を目的としてデザインされた。
本来、ネオスの役割はそれ一辺倒だったわけだ。
故に、《融合》カードとの共存が難しく、
原作では、途中から《融合》の使用頻度が激減した。

が、そこで仮に、俺が属性ＨＥＲＯを差し出すとしよう。
……とすると、十代は持前のチートドロー能力と、
豊富な属性を有する十代のデッキにより、
ネオスを素材として融合ＨＥＲＯ召喚→ネオス復活、
更には通常召喚権残ってますけど何か――などという悪夢のような光景が。
しかもそれがエアーマンだったような日には、泣き寝入りしても仕方がない。

だが、十代の場合、マジにやりかねない。

その場合、カイザーを倒してしまったりなんだりと、
物語の整合性が取れなくなる可能性だってある。

十代自身が考え抜いた先に、偶然そういった考えにたどり着くなら、
俺は何も言わない。俺から提案してはならないというだけだ。

と、まあそんな風に考えながら扉を開けると、

そこにはどういうわけか青葉さんがいた。

「あ、御堂、丁度良かった。
垂れ幕作るから人手を探してきて、って言われたんだけど」

「任せろ。デュエルよりは絵を描く方が得意だ」

「なら何でアカデミアに入ったのよ！？」

……以下略。

＊　＊　＊

そんなこんなで数日後。
毎度毎度の如くのデュエル場。
他にやるような場所は無いのか――と問う者もいるだろう。
無いんです。

とはいえ、このデュエル場、無駄に高性能だから侮れない。

例えば、ダメージフィードバックシステム。
実はデュエルディスクにも搭載されているのだが、
完全に体感できているかどうかと言われれば微妙だ。

例えば、ソリッドビジョンのモンスターが、
相手のプレイヤーの腕に向かって攻撃してきたとする。
しかし、その際に受ける衝撃――というよりも刺激は、
攻撃を受けた側の腕ではなく、全身に行きわたる。

だが、この場所では、よりリアルな体感ができるよう設定されている。
腕を切り付けられればそこに衝撃が加わるし、
ドラゴンのブレスが直撃すれば、
全身に電流が流れたような刺激が加わる。
ドM御用達のシステムだと思ったのは内緒だ。

「……ところで御堂君は一体何をしているんですか」

――と、そんな折に委員長に話しかけられる。

「……何って？」

「……背中のビールサーバーのような機械とか、

肩から提げているクーラーボックスが一体何なのか、という意味です」

「あの……それって、いわゆる売り子さんですかっ……？」

「うん。バイト」

「金持ちのくせにバイト？　何の冗談？」

「……翻訳のバイトしてることが親にバレてさ、
それ以来仕送りが止められてるんだよ……」

「「「……」」」

卒業まで金は可能な限り貯めるつもりだったのに。
何せこのご時世、何かと金は入用だ。
大学に行くにしても、相応の学費は必要だし、
仮に会社を興すとすれば、まずは立ち上げるための元手がいる。

そうでなくとも、レッドアイズ一枚ウン十万はするんだ。
他の有用なカードが何百万しようとも、
おかしくはない――と思う。

「ま、どちらにせよ、若いうちにバイトするのはいいことだ。
社会勉強みたいなものだからな。些細なことでも、
やらないよりやる方がよっぽどマシだよ」

「随分説教くさいけど、いつの間に年取ったの？」
「何だか老けて見えますっ」
「俗的に言えばおじん臭いですね」
「酷ぇ」
確かに中身はオッサンだけど、
面と向かって言われるとキツいもんがあるんだけど。
「……しかし、始まらんな。
どうしたんだ？　トラブルがあったわけでもなかろうに」
「そうね。でも、なんだかさっきから様子がおかしいと思うんだけど……」
「何が？」
「ほら、そこ。見えない？
テレビカメラが何台もあるんだけど」
青葉さんの指さす方向を見ると――確かに、

そこには、普段見慣れない、数台のカメラが設置されていた。
周囲にいる男たちはスタッフだろうか？
どうにもあわただしく動き回っている。

「……あの上着の背面、万丈目グループ、とありますが……」

「あう、その……確か、万丈目さんって……」

ちら、と宮田さんが俺の表情を窺う。

「万丈目も覚悟の上だ、って言ってたし、
俺もあいつを退学させてしまうことを覚悟してた。
……だから多分、互いに何か恨みがある――なんてことは無いと思うよ」

「そ、そうですか？」

「大丈夫だって」

そう言って、俺は宮田さんの頭に軽く触れた。

「あ、あうあうあうあう！？」

「……うおっ！？　ご、ごめん！
無意識の内にやってた！」

いかん。最近、レイとの接触があまり無かったせいか、
妙に精神的に不安定になってしまっている。
最近頭撫でてやったりしてなかったからなぁ……。

特に、こういう庇護欲（ひごよく）を掻き立てるような女の子ほど、
どうにも暴走しがちになってしまう……！！

自重自重。
軽々しく女の子に触れるのは色々とマズい。

……落ち着くんだけどさー。

って、この発言が色々まずいんじゃねーか！？

「と、ともかく――こうして交流戦に出場したってことは、
万丈目はノース校のトップに立った、ってことだ。
一人で――何の後ろ盾も無いままに、だ」

吹っ切れた、と解釈してもいいのだろうか。
いや、そうでなければ、一つの学校のトップに立つなど、
到底できようはずもない。

元々、あいつには相応の下地があった。
ただ、自分の力に固執しすぎていただけの話だ。

多分、もう一度あいつとデュエルをしたら、
俺は間違いなく負けるだろう。

「そ、そそそそそれではなノーネネネネネ。
ここここれより、アカデミアほほほ本校と、
ののの、ノース校の代表者同士のデュエルををを、
おおお行うノーネ！」

クロノス教諭、緊張しすぎ。
確かに、こんなに多くのカメラの前に出るなんて、
そうは無いと思うが……。

「わ、我がアカデミア本校の代表は、
ドロップアウトボー……シニョール遊城十ダーイ」

「へへっ……！」

見るからにやる気が漲（みなぎ）っている十代とは対照的に、
やる気なさげに十代を登壇させるクロノス教諭。
あんたそれでも教師か。

「対するノース校の代表は――シニョール万丈目！」

「ふん……」

わあっ、と、特大の歓声が、ノース校側の観覧席から上がる。
壇上に上がる万丈目の服装は、これまでの青い服ではない。
黒い――ノース校の制服。

俺のような人間からすれば、
やっと見慣れた姿の万丈目が来た――と思うところだ。
口に出すことはしないが。

「――やっと戻ってきたな、万丈目！」

「ああ、ようやくだ――ようやく、俺は戻ってきた。
そしてまた、俺は貴様と戦うことができる！
行くぞ十代！　デュエルだ！」

いつになく熱の入った、万丈目の言葉。
そして、その直後に――。

「「決闘（デュエル）！！」」

この決闘（デュエル）の開始が、二人の口から宣言された。

「俺のターン、ドロー！」

先攻は万丈目だ。

原作では、単にアームド・ドラゴンの投入された、
基本的――とも言い難いドラゴンデッキに変わっていた。
が、こちらでは分からない。元がドラゴンデッキだったんだ。
予想外の変貌を遂げている可能性だって、十分にありうる。

――さて、どんなデッキに変わっていることかな。

「俺は手札から魔法（マジック）カード、《魔の試着部屋》を発動する！」

「ま……《魔の試着部屋》ァ！？」

「ど、どうした三沢！？」

「ど、どうした……って、御堂！
あの万丈目があの《魔の試着部屋》を使っているんだぞ！？
通常モンスターサポートの！
パワーデッキが売りの万丈目が、《魔の試着部屋》をだぞ！？」

「少し落ち着け！」

多分、万丈目のことだから、新しい戦術を見出したんだろう。
低レベルの通常モンスターを用いた、新しい戦術……。

原作だと、おジャマ三兄弟の召喚にしか使われてこなかったカードだ。
この場で使って、どういったカードを特殊召喚するのか。

かなり気になる。

「８００のライフポイントを支払い、
その後、デッキから４枚のカードをめくる。

その中にレベル3以下の通常モンスターがいれば、
その全てを特殊召喚できる――！」

ガイドのためか、万丈目のめくったカードが、
立体映像として中空に映し出される。

《ハウンド・ドラゴン》、《海皇の長槍兵》、
《悪魔への貢物（みつぎもの）》、《馬の骨の対価》の４枚。

――つまり、万丈目は2体のモンスターを特殊召喚できる。

「現れろ、《ハウンド・ドラゴン》、《海皇の長槍兵》！」

【《ハウンド・ドラゴン》　攻　１７００　／　守　１００】

【《海皇の長槍兵》　攻　１４００　／　守　０】

「更に俺は、この2体のモンスターを生贄に捧げる！
来い、《フェルグラントドラゴン》！」

【《フェルグラントドラゴン》　攻　２８００　／　守　２８００】

フィールドに降り立つ、金色の竜。
――先攻1ターン目から、これか。
三沢の顔が、驚愕に凍り付いている。

他の生徒も同様だ。
きっと、《魔の試着部屋》の効果をみくびっていたのだろう。
所詮は低レベルのモンスターだから、と。

しかし、結果はこうだ。

万丈目は1ターン目からレベル8のモンスターを召喚することに成功。
しかし、手札消費はたったの2枚。
ライフポイントの減少も微々たるものだ。

さぞや驚いたことだろう。
俺だって少なからず驚いた。

「ターンを終了する」

「ははっ……すっげえぜ、万丈目！
今度は俺の番だ！　ドロー！
手札から、《E・HERO　キャプテン・ゴールド》の効果を発動！
キャプテン・ゴールドを手札から捨てることで、

デッキから、《摩天楼　－スカイスクレイパー－》を手札に加える！」

摩天楼専用のサーチカードか。
全体的に攻撃力の低いモンスターの多い十代のデッキにとって、
ああいったカードは必要……かもな。

「そして、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ワイルドマン》を召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ワイルドマン》　攻　１５００／守　１６００】

「だが、ワイルドマンの攻撃力では、
摩天楼で強化しようともフェルグラント・ドラゴンには届くまい」

「ああ。だけど、それ以上に強化したら？」

にや、と十代が唇の端を持ち上げる。
こういうとき、あいつは妙に考えが冴えている。

……ワイルドマンを召喚したことにしても、
万丈目の場に２枚も伏せカードがあることを計算してのことだろう

しな。

「俺は手札から、《Ｈ－ヒートハート》を発動！
俺はワイルドマンを選択し、攻撃力を５００ポイントアップする！」

「攻撃力２０００……くっ！」

「よっしゃあ！　フィールド魔法発動！
《摩天楼　－スカイスクレイパー－》！！」

十代がフィールド魔法を発動するとともに、床からせり出す無数のビル。

――これが、Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）の活躍の舞台だ。

「行くぜ！　ワイルドマンでフェルグラント・ドラゴンを攻撃！
ワイルド・スラッシュ！」

ビルから飛び降り、竜の肉体を裂く野人――。

えらくシュールな光景だった。
いや、本人たちは大真面目なんだけど。
……なんだけど。

万丈目のライフは２００失われ、これで残りは３０００となる。

「カードをセットし、ターンエンドだ」

軽く拳を握る十代。

――だが、本当の勝負はここからだ。
今の時点では、まだ前座に過ぎないのだから。

これから――万丈目が、本領を発揮する。

１５束目：他校（後書き）

主人公は誰でしょう。
いや、真面目に。途中で誰が主人公だかわからなくなりました。

お久しぶりです。枠です。

とりあえず、今回は交流戦ということで、十代ＶＳ万丈目のデュエルとしました。

……よく考えたら、この二人のデュエルの時、二回ともに前編後編に分かれてるような……。

そんなわけでまだまだ続きます。
次回はおそらく明日になるかと。

……ミスがありませんように。

16束目：復帰

「くっ……俺のターン、ドロー！
俺は魔法（マジック）カード、《調和の宝札》を発動！
手札の攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナーを捨て、
デッキからカードを2枚ドローする！」

万丈目が手放したのは、攻撃力１００の《ガード・オブ・フレムベル》。
場持ちの良いレベル1チューナーだ。
『フレムベル』と名前がついておきながら、実際にその実力を発揮するのは、
【通常モンスター】や【ドラゴン族】に投入したときくらいのもの。
【フレムベル】のサポートに対応していないことが、何よりも大きいだろうか。

……よく見れば、委員長が苦々しげな表情をしているが、
フレムベルに何か思い入れでもあるのか？

「手札から、《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》を守備表示で召喚！」

【《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》　攻　１４００　／　守　１１００】

「ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！
……うっし！　《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン》を召喚するぜ！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン》　攻　１６００　／　守　１４００】

「ワイルドマンで仮面竜（マスクド・ドラゴン）に攻撃だ！」

「仮面竜（マスクド・ドラゴン）が戦闘で破壊されたとき、
デッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族を特殊召喚できる！
もう１体の仮面竜（マスクド・ドラゴン）を守備表示で特殊召喚！」

【《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》　攻　１４００　／　守　１１００】

「くっ……もう一度だ！　スパークマンで攻撃！」

「仮面竜（マスクド・ドラゴン）の効果を発動！

デッキからドラゴン――《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》を特殊召喚する！」

現れるのは、これまでに召喚されたドラゴンと比べ、わずかに小さなドラゴン。

このカードは――。

「レベルアップモンスター……！」

「知っているのか、三沢？」

「ああ、伝説とも言われるほどに希少度の高い、強力なモンスターだ。俺も詳しいことは分からないが、まさか、ノース校にあんなものがあったとは……！！」

伝説――か。

その伝説のカード、かの伝説のデュエリスト、武藤遊戯が当たり前のように所持してたような記憶があるんだが。

……細かいことはツッコむまい。

「ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！
このスタンバイフェイズ、アームド・ドラゴンはその姿を変える！
《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》にレベルアップ！」

【《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》　攻　２４００　／　守　１７００】

「姿が変わった……！！」

「まだだ。俺は手札から魔法（マジック）カード、《レベルアップ！》を発動！
『ＬＶ』モンスターを、そのカードに記されているモンスターに成長させる！
来い、《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》！！」

【《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》　攻　２８００　／　守　１０００】

アームド・ドラゴンの肉体が膨張し、その姿を変容させていく。
より屈強に。より精強に。
――その砲身が、鋭さを増していく。

「アームド・ドラゴン　ＬＶ７の効果を発動。
手札のモンスターを墓地に送り、そのモンスターの攻撃力以下の、
相手の場のモンスターを全て破壊する！」

「何っ！？」

「俺は攻撃力２４００の《マテリアルドラゴン》を墓地へ送り、
貴様の場のモンスター全てを破壊する！　ジェノサイド・カッター！」

アームド・ドラゴンの腹部の刃が回転し、
十代の場のモンスターを完膚なきまでに破壊していく。

そうして残るのは、ＨＥＲＯのいない摩天楼。
――万丈目のドラゴン、ただそれだけ。

「行くぞ！　アームド・ドラゴンで直接攻撃（ダイレクトアタック）！
アームド・ヴァニッシャー！」

右腕を振り回し、十代に近づいていくアームド・ドラゴン。

……って、素手で攻撃かよ！？
武装（アームド）の名前はどうした！？

ともかく、十代のライフポイントは削られ、
これで残りは１２００。
まずいな、間違いなく。

「ぐあああっ！！」

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

ふと、万丈目がデュエル場の外を……、
正確には、外へと向かう廊下を見据える。

そこにいるのは、二人の男。
状況から察するに、万丈目の兄弟なのだろうが――。

「少し席外すよ」

「え？　何で？」

「……ちょーっと、用事ができたんだよ。
トイレに行ったとでも思ってくれ。すぐに戻る」

原作では。
あの兄たちは、敗北の瞬間になると、
その場で撮影を止めるといったような卑劣な真似に走った。

確かに、社名を賭けたものならば、それも一つの手だろう。
案外、俺でもするかもしれん。その方が合理的だからだ。

……だが。

今この場において、社名はほとんど関係ない。
どころか、万丈目グループの末っ子は、
こんなデュエルをするんだぞ、という宣伝にも――ひいては、
アカデミア自体の宣伝にもなりうる。

撮影を止めさせはしない。

別に、俺は万丈目は嫌いじゃない。
――嫌いなのは、あの兄たちだ。

奴らに一泡吹かせることができるなら、俺は裏方にでも徹しよう。

幸い、カメラの操作方法は知っている。
あとは、どうやって止めさせないか、だが――。

「俺のターン、ドロー！」

とか考えている間にも、十代のターンに入ってしまう。

……しばらくは様子見か。こればかりは仕方がない。

無用に騒ぎを起こすわけにはいかないし、

妨害しようとしてスタッフを殴りでもすれば、ただの犯罪だ。

どうにか、婉曲に、かつ犯罪に当たらないような方法を思いつかなければ。

「魔法（マジック）カード発動！　《ヒーローアライブ》！

ライフを半分支払うことにより、

デッキからレベル４以下の『Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）』を特殊召喚できる！

《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　プリズマー》を守備表示で特殊召喚！」

【　《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　プリズマー》　攻　１７００　／　守　１１００　】

「プリズマーは、１ターンに１度、

エクストラデッキの融合モンスターを相手に見せることで、

そのモンスターの融合素材をデッキから墓地に送り、

このターンの間だけ、その素材モンスターの名前を得る！

俺が公開するのは、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ダーク・ブライトマン》！

これにより、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ネクロダークマン》を墓地に送り、

プリズマーを《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ネクロダークマン》として扱う！

リフレクト・チェンジ！」

偏光器（プリズマー）の名の如く、水晶にも近いプリズマーの全身から光が発せられる。

――次の瞬間には、プリズマーの姿は、

おおよそヒーローらしくない、赤を基調とした姿に変貌していた。

「更に魔法（マジック）カード、《Ｅ－エマージェンシーコール》を発動！

デッキから、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エッジマン》を手札に加える！

そして、墓地のネクロダークマンの効果を発動！

Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）を生贄無しで召喚できる！

来い、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エッジマン》！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エッジマン》　攻　２６００／守　１８００】

「行くぞ万丈目！エッジマンでアームド・ドラゴンを攻撃！

パワー・エッジ・アタック！！」

「甘いぞ十代！　伏せ（リバース）カード、オープン！

《サイクロン》！　これにより、摩天楼を破壊する！」

「な……しまった！」

「ふん……警戒を怠ったな。
これでエッジマンの攻撃力は上昇しない。
迎撃しろ、アームド・ドラゴン！」

アームド・ドラゴンの腹部の刃が速度を増し、
エッジマンをその回転の中へと飲み込んでいく。

……想像以上にグロい攻撃だな。
もしあれが人間だったら、挽肉より酷いぞ。

しかし、これで十代の残りライフは４００。
プリズマーに攻撃を食らえば――そうでなくとも、
プリズマーを破壊され、直接攻撃（ダイレクトアタック）を受ければ、十代の負けだ。

「くっ……！　カードをセットし、ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！
……十代。どうせ貴様のことだ。
その伏せ（リバース）カード、回復を目的とした、
《エレメンタル・チャージ》か、あるいは、
迎撃用の《異次元トンネル－ミラーゲート－》といったところだろうな」

「……！」

……万丈目の奴、そこまで読んでいたか。
確かに、《エレメンタル・チャージ》を使えば、プリズマーはともかく、ライフポイントは守られる。
ミラーゲートも同様だ。
アームド・ドラゴンを倒すことはできないが、万丈目にダメージを与えることはできる。
あるいは、併用――も考えられるか。
ともすれば、逆転も可能だろう。――が。

「それはあくまでもモンスターが存在しての話だ。
アームド・ドラゴンの効果を発動！
手札の攻撃力２２００の《創世竜（ジェネシックドラゴン）》を墓地に送り、貴様の場のプリズマーを破壊する！」

万丈目はそれすらも読んでいた。
読んでいたからこそ――。

十代は、……あのカードを引いた。

「伏せ（リバース）カード、オープン！

《クリボーを呼ぶ笛》！」

「なっ……！！」

「アームド・ドラゴンの効果処理前に、
俺は場に《ハネクリボー》を特殊召喚する！」

放たれる砲撃の前に果敢にも現れるハネクリボー。
……瞬間、その姿は直撃するより前に霧散する。

「ハネクリボーが破壊されたとき、
このターンの俺への戦闘ダメージはゼロになるぜ」

これだ。
相手の予測の全てを覆す、強運とも悪運ともつきがたい、
絶対的なまでのデスティニードロー。

デッキパワーがどうのとかいうものじゃない。

仮にデッキとしての地力が上回っていたとしても、
あいつは常にその先に行くことができるんだ。

……反則なんてものじゃない。
それは、もはや相手の希望を叩き折ることにも等しいのだから。

「チッ……ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！

……万丈目！　確かにアームド・ドラゴンの効果は強力だ。

攻撃力も高い。だけど――」

「……守備力か」

アームド・ドラゴンは、強力な破壊効果と高い攻撃力を持っている。

しかし、その一方で――特にＬＶ７に関しては――比較的守備力が低い。

《月読命（ツクヨミ）》の存在があった頃などは、

レベルアップしない方が強いとまで言われていた始末だ。

「俺は手札から、《Ｏ－オーバーソウル》を発動！

墓地のスパークマンを攻撃表示で蘇生する！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン》　攻　１６００／守　１４００】

「そして手札から装備魔法、《スパークガン》を発動！

スパークガンは、３度までモンスターの表示形式を変更できる！
アームド・ドラゴンの表示形式を変更する！」

スパークガンから放たれる雷撃を浴び、
守備の態勢を取るアームド・ドラゴン。

ＬＶ７の守備力は１０００。
……スパークマンでも、十分に戦闘破壊できる数値だ。

「バトルだ！　スパークマンでアームド・ドラゴンに攻撃！
スパークフラッシュ！」

「チッ……！　伏せ（リバース）カード、《レベルダウン！？》を発動！
場の『ＬＶ』モンスターをデッキに戻し、
そのモンスターよりも『ＬＶ』の低いモンスターを、
墓地から特殊召喚する！　《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》を攻撃表示で蘇生！」

【《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》　攻　２４００　／　守　１７００】

「く……攻撃を中止する！
スパークガンの効果により、スパークマンを守備表示に変更。
これでターンエンドだ」

「くっ……！　俺のターン――ドロー！」

万丈目の渋面が、ドローしたカードを確認した途端に和らぐ。

――わかりやすいな。

何を引いたのか、こうして俯瞰的（ふかんてき）に見ているとよく分かる。

間違いない。あいつは――あのカードを引いたはずだ。

「俺は手札から、《魔の試着部屋》を発動。

８００のライフを支払い、デッキの上から４枚をめくる」

再度、映し出される立体映像。

そこに映し出されるカードは、《バーストブレス》、

《龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）》、《火竜の火炎弾》。

そして――《おジャマ・イエロー》。

「俺は、《おジャマ・イエロー》を守備表示で特殊召喚する！」

【《おジャマ・イエロー》　攻　０　／　守　１０００】

周囲――正確には、アカデミア本校の生徒から起きる嘲笑。
しかし、万丈目はそれを意に介さない。
その必要がないからだ。

「そして、場のアームド・ドラゴンとおジャマ・イエロー、
２体のモンスターを生贄に捧げる！
十代！　俺の最強の相棒の姿を見せてやる！
今こそ、俺と共に戦ってくれ――《光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）》！！！」

【《光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）》　攻　２８００　／　守　２４００】

場に現れるのは、白と黒、二つの色――そして、
二つの魂を有す、万丈目の相棒――《光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）》。

その右半身は《ライトエンド・ドラゴン》に酷似し、
その左半身は《ダークエンド・ドラゴン》に酷似している。

光と闇、という名の由来はそこだろう。

「光と闇の竜でスパークマンを攻撃！
ダークバプティズム！」

スパークマンへと向かいゆく、闇の吐息。
圧倒的なまでのその威力は、瞬時にスパークマンを包み込み――。

「くっ……伏せカード、《ヒーローバリア》を……！
何っ！？」

伏せられていた《ヒーローバリア》が、表側になったその瞬間、
光と闇の竜から放たれた波動が、カードの効果を封殺する。

――光と闇の竜の強力さの一つは、これにある。

攻撃力、守備力の５００ポイントを犠牲にした、完全効果無効効果。

……当然、カウンター罠を無効にすることはできず、
また、同一チェーン上では、１度しか発動しないという欠点はあるが。

……だが、実質的に、光と闇の竜は、
あらゆる効果を強制的に、４度まで無効化する。

魔法（マジック）、罠（トラップ）、モンスター効果に頼りがちな十代のデッキにとっては、ある意味では天敵とは言えないだろうか。

「無駄だ。光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の効果により、カウンター罠（トラップ）以外のカードの発動は無効となる。ただし、攻守は５００下がるが……スパークマンを倒すのに支障はない。行け、光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）！！」

「くそぉ！！」

「これで俺はターンエンドだ」

「やるな、万丈目……！　俺のターン！」

こういう場合、大抵、十代はドローカードを引いてくる。だが、今回に限っては、それも厳しいか。

「効果を無効にするって言っても、決して召喚条件は無効にはならない、だよな万丈目！」

「……何？」

「手札がこいつ1枚だけのとき、場に特殊召喚できる！
《E・HERO（エレメンタルヒーロー） バブルマン》を守備表示で特殊召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） バブルマン》 攻 800 ／ 守 1200】

「バブルマンの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功したとき、
場と手札に他のカードが無ければ、2枚ドローできる」

「だが、その効果は光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）が無効にする……」

「これで光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の攻撃力は1800だぜ。
あと2回までしか、効果は無効にできないな！」

「ふん……だが、次のターンにモンスターを引けば、
それだけで終わりだ。危険な賭けだな」

間違いない。

例えば、召喚時に強制発動する効果を持ったモンスターを引いたとしても、
光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の攻撃力は1300。
バブルマンの守備力は1200。攻撃力400以上のモンスターを引けば、
それだけでも終わりだ。

「俺のターン、ドロー……！」

場に静寂が満ちる。
皆の視線が万丈目の手札に向かう。
何を引いたのか――それを確かめたいがために。

「チッ……光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）でバブルマンを攻撃！
ダークバプティズム！」

闇に飲まれ消えるバブルマン。
しかし、その役割は果たされた。

「カードをセットし、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！
……《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　クレイマン》を守備表示で召喚！
ターンエンドだ」

「チッ……また壁か！　俺のターン、ドロー！
……現在の光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）では、クレイマンは倒せない。
ターンエンドだ」

なんとかしのぎ切ったか。

これで《ストロング・ウィンド・ドラゴン》でも引かれていれば、
その時点でデュエルは終了だったが。

「俺のターン、ドロー！
《カードガンナー》を守備表示で召喚！」

【《カードガンナー》　攻　４００　／　守　４００】

「カードガンナーは１ターンに１度、
自分のデッキの上から３枚を墓地に送り、
その枚数分攻撃力を上げる効果がある！」

「……その効果は無効だ」

「ああ、わかってるぜ。
だが、これで光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の無効化効果は、
あと１度しか使えない」

「……チッ」

「ターンエンドだ」

更に、カードガンナーには、
破壊されたときにカードを1枚ドローする効果がある。
それを無効にしてしまえば、光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の効果はもう使えない。

……だが、光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）は、無効効果以外に、
もう一つ――強力な効果を持っている。

「俺のターン、ドロー！
……《アックス・ドラゴニュート》を召喚！」

【《アックス・ドラゴニュート》 攻 2000 ／ 守 1200】

「バトル！ 光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）でカードガンナーを攻撃！
シャイニングブレス！」

「カードガンナーが破壊されたとき、俺はデッキからカードをドローする！」

「その効果は無効だ！」

「ああ……だが、これで光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の効果は使えない！」

「チッ……まあいい。ターンエンドだ」

恐らく、ではあるが。

万丈目のあの伏せカード（リバース）は、《禁じられた聖杯》だろう。

でなければ、恐らくは光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）を守備表示に変更している。

アックス・ドラゴニュートの効果は永続効果であり、

チェーンに乗ることは無い。

そうしておけば、カードガンナーの効果のみを無効化することができ、

攻撃力の低いモンスターを晒すこともなくなるだろう。

その通りだったとしても、光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）に《禁じられた聖杯》を使い、

能力値をリセットした上で、２体のモンスターを破壊すればいい。

そうすれば、十代は次のターンに何もできない。

攻撃力２８００の光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）が残っているんだ。

――敗北は、確実なはずだ。

それをしないということは、きっと、万丈目は狙っている。

十代が攻撃してくることを。

光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）でそれを迎撃することを。

――確実に、光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）で勝利することを。

俺でさえも分かる、明らかなプレイングミス。

こだわりがそうさせてしまったのだろうか。

遊城十代に勝利するのは、光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）でなければならない、と。

「――行くか」

俺はカメラの設置してある方へと向かう。

――この勝負、十代の勝ちだ。

「俺のターン、ドロー！

魔法（マジック）カード、《ホープ・オブ・フィフス》を発動！

墓地のワイルドマン、バブルマン、スパークマン、プリズマー、ネクロダークマンをデッキに戻し、２枚カードをドローする！

そして魔法（マジック）カード、《Ｒ－ライトジャスティス》を発動！

俺の場の『Ｅ・ＨＥＲＯ』の数だけ、場の魔法（マジック）・罠（トラップ）を破壊する！」

「くっ……伏せ（リバース）カード、オープン！　《禁じられた聖杯》！

光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の効果を無効！　攻守をリセットし、

エンドフェイズまで攻撃力を４００上げる！」

「やっぱりそうきたか……更に、俺は魔法（マジック）カードを発動！
《ヒーローフラッシュ！！》！　墓地の《Ｈ－ヒートハート》、《Ｅ－エマージェンシーコール》、《Ｒ－ライトジャスティス》《Ｏ－オーバーソウル》を除外し、発動！
デッキから通常モンスターの『Ｅ・ＨＥＲＯ』、スパークマンを特殊召喚する！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン》　攻　１６００／守　１４００】

「そして全ての通常モンスターの『Ｅ・ＨＥＲＯ』は、このターン、相手プレイヤーに直接攻撃できる！」

「なっ……！！」

瞬間、本校側の席から歓声が上がる。
俺たちの勝利だ――と。

「か、カメラを止めろー！！」

プロデューサーと思しき人物が声を張り上げる。
だが、もう遅い。

「だが断るッ！！」

「なぁっ！？」

「この俺の最も好きなことの一つは、
自分で『偉い』と思い込んでいるやつに『ＮＯ』と断ってやることだ」

「ちょ……カメラマンだろうがお前！？
って違う！？　スタッフはどこへ行った！？
何なんだお前は！？」

「通りすがりのデュエリストだ。忘れていい。
あと、そちらのスタッフは、頬を2、3度叩いてご退出してもらった」

「なんてことをしてるんだお前は！？」

「安心しろ。札束でだ」

「買収じゃないか！？」

「広義ではそうだが、貴様らのようなマスゴミに対しては『防衛線』だ。
公正なテレビ番組を作れという『勧告』だ。

……そういうわけでこのカメラはいただいていく！　アデュー！」

「言っていることが支離滅裂だぞ！？　ってああ！
勝手にわが社のカメラを持っていくなぁあああ！！」

「さァ、てめェらの罪（マスゴミ）を数えながら指をくわえて見ているんだな！
ふふふふふぅははははァァァ！」

「待てぇぇぇぇ！？」

「……あう。あれは……」

「他人よ。ボクたちはあんなの知らないってことにしましょう」

「……人間、暴走すると何をしでかすのか分かりませんね」

何か妙なこと言われてる気がするけど、気にしない方向で。

「クレイマンを攻撃表示に変更！
これで合計の攻撃力は２４００！
クレイマンとスパークマンで、万丈目に直接攻撃（ダイレクトアタック）だ！」

「ぐ、っあああああああっ！！」

宣言通りに。
ビィ――――――！！　と、デュエルの終了を告げる音が、周囲に鳴り響いた。

＊　＊　＊

「「準！！」」

鬼のような形相の男が二人、万丈目のもとへ駆け寄っていく。
あれは――万丈目の兄、だろうか。

あの様子を見るに、万丈目を心配して来た――なんてことは無さそうだが。

「準！　貴様、私たちがやったカードはどうした！？」

「あれだけのカードがあれば、
負けるなどということはありえないはずだ！
何故使わなかった！？」

「俺は、自分で選んだ、自分だけのカードで戦いたかった。

……それの何が悪いんだ！？」

「勝たなければ意味がない！
貴様、まさかわざと負けたのではあるまいな！？」

「誰が――！！」

「言い訳はいらん！
万丈目グループに敗者は必要ない――常々言っているだろう！」

結果至上主義――。
別段、問題とは言えない。

だが、それも度が過ぎれば、単なる選民思想と変わらない。
いや、事実、奴らの思想はそれと同等なのだろう。

結果が伴わなければ、過程を一切認めない。
それが――あの男たちのやり方か。

「ふざけんな！　万丈目は本気でデュエルしてた！
それに――お前らは、万丈目がノース校で一番になったことも認めないってのかよ！」

「知らん。負ければその時点で終わりだ！」

テメェ、と、憤慨したように十代が歯噛みする。
さっきまで「楽しいデュエル」をしているからこその落差。
……このままじゃ十代のやつ、キレるかもな。

ま、汚れ役くらい引き受けてやるか。

俺は奪い取ったカメラを、４人の元へと近づける。

「やァどうもどうも。皆さーん。生放送中デスヨー」

「「っ！！」」

「くははは。自ら社名を貶めるなんて、
なかなかに愉快な真似をしてらっしゃいますねェ。
ま、俺は構いませんが」

「き、貴様……！！」

「結果だけを見て物事を判断するのも重要ですけど、
たまにはその過程も見なきゃ、正当な評価を得られないって、
社員の方から顰蹙買うと思うんですがねェ。
あァ、だから海馬コーポレーションやＩ２社に経営業績で勝てないのか」

「ぐ、ぬぅぅぅ……」

「ぬうううう……帰るぞ、正司！
これ以上こんな場所にいても仕方がない！」

「あ、ああ！　待ってくれ兄さん！」

捨て台詞を吐いて去っていく万丈目兄弟。
二度と来てほしくないな。
また来たら俺の貯金を全額使ってでも株価を操作してやる。

「とてもじゃないが、企業家に思えないな」

「――だが、それでも俺の兄だ。
あまり馬鹿にしたようなことを言われると困る」

「それはすまない。
……しかし万丈目、これから、お前はどうするんだ？
ノース校に戻るのか？」

「ふん、そのことか。
考えていなかった訳ではないが……。
近くに校長はいるか？」

「呼びましたかな？」

「うおっ!?　校長、いつの間に!?」

神出鬼没なオッサンめ。

「……正直に言えば、俺は本校に戻りたい。
だが、校長。俺は確か、あなたに退学届を渡したはずだ。
……どうしたらいい」

「ああ、それですか。
私の一存で、万丈目君は休学扱いにしておきましたので、大丈夫ですよ」

「軽っ!?」

「……つまり、戻ってきてもいい、ということか?」

「そういうことですねぇ。
とはいえ、出席日数の問題もありまして、
実はオベリスク・ブルーでは進級できないんですよ」

だったらどうするんだ――と考えていたところで、
図ったようなタイミングで、大徳寺先生が話に割り込んでくる。

「だったら、オシリス・レッドに来るといいにゃー。
ウチは出席日数なんて関係なく進級はできるんだにゃー」

「だ、そうですが……」

オリシス・レッドなどと、
万丈目のプライドが許さないのではないか――そう思考しているのだろうか。
校長が俯き加減に尋ねる。

「……構わん。
改めて鍛えなおすのにも、上を目指すのにも丁度いい。
頼む、校長。俺をアカデミアに復学させてくれ」

「はっはっは。いいでしょう。
それでは万丈目君。――よく戻ってきてくれました」

「ふん」

こうして、今回の交流戦は終わりを迎えた。
万丈目はアカデミア本校に帰ってきて、
ノース校チャンプの名は、元々のチャンプに戻っていった。

――さて、以下は余談だ。

毎年行われるというこの交流戦、
勝者の学校に贈られる「賞品」――。
それは、ミス・デュエルアカデミアこと、購買部のトメさんのキスであった。

まあ当然ながら、それを賜るのは校長の役割である。
俺たちには関係ない。

――というか、毎年毎年、生徒を使ってそんなことやってんじゃねえ。

まあ、ツッコミはそれくらいにして。

あのアームド・ドラゴン、原作通りにノース校のものだったらしく、ノース校の校長が忘れて行った結果、万丈目の手元に残ることとなった。

……まあ、別段、問題ではないと思うんだけど。

あ、あと、相変わらず万丈目は無茶苦茶強いです。

これまでの戦績は３２戦３勝２９敗。

……だから、俺は交流戦に出たくなかったんだよ！！

１６束目：復帰（後書き）

という訳で交流戦後編です。
主人公？（という名の脇役）は暴走しました。反省はしているが後悔は（

とりあえず今回はプレイングミスがいくつか散見されますので、見つけた方はご一報入れずに心の奥にしまっておいて私を嘲笑するといいと思います（
とはいえ、当然ながら作中で言及しているものもありますが。
ライダーのあれとか。

とりあえずデッキ総評です。

十代のデッキにはほとんど変わりありません。
しいて言えばミラフュを使わせないように頑張ったことくらいでしょうか（

万丈目のデッキは、【ローレベル】と【上級ドラゴン】の混ざったデッキです。
基本的に【ローレベル】は展開力が高いです。
ので、そこに上級モンスターを組み込み、殴る――というのが基本コンセプトですね。

実は今回、ライダー破壊→フェルグラント蘇生→ライダーのレベル参照
→光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）は死してなお俺と共にある！
をやりたかったんですが、尺と十代の場と万丈目の伏せのおかげで不可能でした。

あと、実はライダーとの兼ね合いもあって、万丈目のデッキを【ドラグニティ】にしようかとも画策していたんですが、
それだとダークエンドもライトエンドも出せないし、おジャマが本当に邪魔になってしまうということもありまして、こういう形にさせていただきました。

ということで以下次回。

次回以降セブンスターズ編ですよー（

１７束目：群体（前書き）

今回はほぼオリジナル話です。
また、今回は後半から凄まじく読み辛い部分があります。
具体的なことはネタバレになるので言えませんが、
作者の私ですら無茶苦茶読みづらいです。
正直申し訳ありません。

それ以外の部分もかなり厨二病的なノリで進行しますので、
いつもの遊戯王ＡＣをご期待の方はご注意を。

期待……されてるかなぁ；

17束目：群体

「で？　課外授業に行ったと思ったら、
十代も隼人も翔も明日香も、ついでに大徳寺先生も、
皆行方不明になった、と……そういうことか？」

「そういうことになる。
……二時間ほど前から連絡が取れん」

課長、事件です。

……いや、課長なんてこの場にはいないけど。
ともかく、事件なのは間違いない。

それは、大徳寺先生の授業が行われた日の放課後、
取り立ててやることもなく、自室でのんびりしているときのことだった。

俺の部屋への来客は、さして珍しくない。
青葉さんや宮田さん、委員長や十代、三沢など、
それなりに仲の良い人間も多いからだ。

だが、この日の訪問客は少しばかり珍しかった。

「……で、万丈目。その情報を俺に寄越してどうするんだ？
というか、どうしたいんだ？　俺は探偵じゃないんだが……」

まあ、口調でなんとなくは分かるだろう。
……要するに、万丈目が来訪しているということだ。

「さあな。俺はただ、貴様に情報を持ってきただけだ。
使い道は貴様が決めろ。俺は帰る」

「了解。……って言っても、お前、そういうこと話したら、
俺が動くって分かってたろ？」

「ふん……さあ、どっちだろうな」

「……どっちでもいいさ。その情報だけで十分だ。
やることは変わらない」

誘拐された……ってことは無さそうだが。
それでも別な可能性を考えておく必要がある。

……時期的なものも考慮しなきゃな。

部屋を出ていく万丈目を見送りながら、可能性を次々と浮かべていく。

誘拐。これはまああありえないだろう。
こう言うのもなんだが、明日香以外にはそれだけの価値は無い。

じゃあ、どこかの崖にでも足を滑らせて落ちたか？
これも無いだろう。ＰＤＡでの呼び出しに答えないことはともかく、島内にいて『圏外』ということはそうそうありえない。
先程から何度も連絡を行おうとしてはいるが、
いずれも接続できないという機械的な音声が流れ、終わった。

となれば、もっと別な厄介ごとに巻き込まれているのだろうか？

原作で起きたことを回想する。

この時期、何があった？

セブンスターズの襲撃。
オベリスク・ブルーの生徒の襲撃事件。
レイの来訪。
万丈目の帰還。
もけもけ。
三沢と十代のデュエル。

――万丈目？

「――あれか」

思い出した。

俺の記憶が確かならば、万丈目の帰還の直後、
十代たちは墓守の世界に行ったはずだ。

そこで、今後のキーアイテムとなりうる、
闇のアイテムとやらを入手する。

確か、あれのおかげで闇のデュエルの対抗策が見出されたんだったか……？

邪魔はできないにしても、
あまり長いこと放置しておくわけにはいくまい。

何より、これを放置しておくとなると――寝覚めも悪いし。

手近な場所に置いておいた上着を羽織る。

黄色は派手派手しくて苦手だ。

上着の前を開いておいて、中身の黒いＴシャツを露見しているから、それなりには、着こなしとして黙認できる程度にはなったが……。

やっぱり、慣れないな。

できるかどうかはともかく、早く昇格したい。

外見はできるだけ地味な方がいい。

……などと謳いつつも、俺の外見はその対極に位置する。

髪は、レイと比べても遜色ないほどに長い。

基本的に俺は髪は染めない主義なのだが、

髪も目も、ごく普通の日本人らしく、両方とも黒だ。

邪魔になるからと思って髪は後ろ結びにしている。

……のだが、どうもそれが妙に「ハマって」いるらしい。

青葉さんや宮田さんに言わせてみれば、

「少し雰囲気の柔らかい《リチュア・ヴァニティ》」だとか。

かと言って、顔がいいかと言われればそういうことでもないとのこと。

点数で表現すれば、６５点が関の山――らしい。

実質的には、いいとこ５５点だとさ。

雰囲気はともかく、顔は少し怖いらしい。

会って話すと違うとは言っていたが、そんなものだろうか？

少し、試しに鏡を見てみる。

目つきが鋭い。
口元に笑みがない。
というか全体的に暗い。

……うん、成程。これは確かに怖い。
初対面で話しかけられたら逃げ出しそうだ。

笑ってみた。

何か企んでるんじゃないかというような邪悪な笑みだった。

睨んでみた。

「ヒィッ！？」

自分ですら恐ろしいと思うような睨み方だった。
というか、不良の一人や二人なら、視線だけで殺せそうだ。

成程、叱りつけていたレイが大泣きするだけのことはある。
立場が逆なら俺だって泣く。

つーか逃げる。

うん、まあ俺の容姿についての考察はどうでもいいんだ。
重要なことじゃあない。

「行くか」

原作通りなら、十代たちは遺跡にいるはずだ。
遺跡までの道のりを考えると憂鬱になってくるが――まあ、あいつらのためでもある。

武器は持っていないが、これでも肉体的には強靭な方だ。
昇竜拳空中キャンセル→小パンチ2連打→回し蹴りくらいならできる。
次代の主人公だってできるんだ。俺だってやってできないことはないだろう。

……まあ、こんな物騒な世の中だ。
リアルファイトができて困ることはそうそうないだろうし。

そんな訳で、俺はこれでも体力はある方だ。

それなりに身軽な格好で来たわけだし、山登り程度は訳もない。

＊　＊　＊

そうして、二時間ほど経っただろうか。

森を抜け、山を登り――そうして、ようやく遺跡を見つけた。

「ここか……」

入口――だろうか。

円環（リング）にも似た構造物が視界に入る。

人間が作ったものだろうということは、何とはなしに理解できる。

だが、それ以上に、そこから感じるのは――神秘性。

遺跡という場所故のものだろうか。

個人的には、この場所の調査をしてみたいものだが……。

「ま、そうも言ってられんか」

どうせ捜索ついでに探索もできる。
そう切り捨て、遺跡の探索を始めた。

「しかし……」

見れば見るほどに、この遺跡の異質さがわかる。

そもそも、建築様式が日本で言う遺跡と、根本的に違うのだ。

例えば、有名なものを言えば、佐賀県の吉野ケ里遺跡。
静岡の登呂遺跡や青山の三内丸山遺跡などだろうか。

果たしてそれらの遺跡は、
この場所にあるものと同様、石造りの建築が主だろうか？

そんなわけがない。

この遺跡の外観は、俺の知る限りではエジプトなどのそれに近い。
西洋のそれとも、あるいは似通っている部分があると言えるだろう

か。
二つの地域――それも、日本ではない地域の遺跡のデザインの折衷……か。
いずれにせよ、これは本来、日本で発見されるようなものとは違う。
――明らかな異質。
俺でなくとも、少し考えれば分かることだ。
こんな「遺跡」は、日本中のどこを探しても存在しない。
だからと言って、ごく最近建造されたものであるとは、到底思えない。
であるならば、この風化具合は生み出せない。
何年――いや、何十年と野ざらしになっていなければ、ここまで朽ち果てるなどということは無い。
いつからこの遺跡はこの場所にあったのか。
どうやってこの場所に建てたのか。
あくまでも日本の中にあるはずの、この島。
……不可能なはず、なんだがな。
「ふむ……」

原作通りなら、十代たちは墓守の世界にいる。
……つまり、俺がこうしてあいつらを探しているのは無駄なことだが……。

どうしても、この遺跡が気になる。

時代背景的にありうるはずのないもの。
好奇心――だけではない。
むしろ、疑問。

それを解消しなければ、どうにも落ち着かない。

入口付近の円環（リング）も気になる。
確かあれは、原作では転送装置のようなものとして作用したはずだ。

今現在、あれはその役割を果たしてはいない。
どんなタイミングで、あの構造物が転送装置になるのかも、
あるいは、どうすればそうなるのかも、現状では分からない。

科学的な事象ならばそれなりには分かるのだが、
オカルトとなると専門外だ。

というか、大多数の人間が理解できないだろうと思うが。

理解できる方が困る。

「……推察は、できないこともない、が……」

それだって、所詮は「推察」であり、事実は何も掴めない。

それでも考えるとするなら――この場所は、
別の世界を迎え、別の世界に赴くための場所なのではないだろうか。

何らかの理由で、この場所は、以前に墓守の世界へと繋がった。
以前――それも、数十年という単位ではない。
それこそ、数百、数千――それほど前に、だ。

その際に、偶然にも街並みだけが取り残され、結果、
この「遺跡」が完成した。

昔から、この島は無人島だと言われてきた。
こんな山中に入り込むような人間も、そうはいない。
……それこそ、俺みたいな物好きでもない限りは。

であったからこそ、この遺跡は隠匿されてきたのだろう。
大徳寺先生はあえて知らないフリをしていたのだろうし、
他の教師がわざわざこんな場所にくるようなことは、まずありえない。

所詮は推察であり、結局は推論でしかない。
俺としても、そんなことが真相だとは思えない。
くだらないとは言わないが、それ「だけ」が真相と思いたくはない。

「……」

５Ｄ’ｓの時代で言及された組織――イリアステル。
あの組織は、俺の記憶する限りでは、
個々人で――でなくとも、一つの「街」すらをも、
時間を遡り、転移させることができたはずだ。

その技術を用いれば、この遺跡の真実をたどることもできるかもしれない。

あるいは、この遺跡を転移させたのは、イリアステルという可能性もある。

全ては俺の推論だ。
当て付けにも似てる。
……言いがかり、という風に解釈しても構わない。

「……ま、それはそれ、か。
考えてるだけじゃどうにもならん」

いつまでも同じ思考に拘泥していては、
目新しいものなど何も得られない。

そして――周囲に目を向けなければ、同様に。
何も分からない。

「……そうは思わないか？」

俺は、そう――円環（リング）に向かって呼びかける。

直後。

「成程、想像以上」「に勘ガ鋭い」「と見エる」

どこか、不自然に途切れたような声が響いた。
抑揚のない、平坦な――であるからこそ、不気味と感じる声。

一人なのか？　複数なのか？
眼前に「いる」というのに、それを判断することはできない。

言うなれば――単体の群体（レギオン）。

俺の記憶には、こんな声を出すような人間はいない。
……当然、原作のキャラクターにも。

吐き気を催すほどの違和感。

こいつは――何だ？

「……少し理由（ワケ）ありでな、
周囲の警戒だけは怠らないようにしてるんだ」

また死にたくはないから。

一度でも、極限まで死に近づいて――そして、
死に触れた俺だからこそ、それとなく、危険なものが分かる。

ただ、恐怖心は薄れてしまっている。
――それ故に、平気で「危険」に近づける。

「そうか。だガそ」「のようなコトはどウでモい」
「い。重要ナの」「は、オ前が我ラに近づキ」「すぎタコとだ」
「……？」

近づきすぎた？

――何を言ってるんだ、こいつらは？

「オ前は我」「ラガ同胞に」「ナりウ」
「る。お前ハ」「人を捨てルこト」「がデキる。我らに」
「近ヅいタ故に。個」「体を捨テルことガできル」

「……何を言ってるんだか分からないな。
もっと明瞭に喋れよ。それとも、それもできないのか？」

「明瞭に。そ」「ノ概念は不明。個」
「ヲ捨テよ。個を」「捨テよ。個を捨てヨ。個ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ」

狂ったように言葉を放つ――何か。

ダークネス？　いや、アレとは違う。

ダークネスの外見は――ぼろ布を身に纏う悪魔のような姿、とでも形容できる、禍々しい姿だった。

しかし、こいつはそれとは違う。

黒い仮面。黒い装束。

触れただけでも崩れてしまうのではないのかと思わせるほどに、その外見はあやふやで「薄い」。

幽霊――という一言で済ますには、あまりに異質な存在。

群体（レギオン）、と。

冗談めかして考えてもみたが――あながち、間違っていないのかもしれない。

「還れ、一つ」「に。ゼろニ」「虚無ｎｉ」「虚空ニ――死に還れレＲｅ」

死。

――死。

その言葉が発せられた瞬間、俺の頭にフッ、と、

記憶の断片が流れ込む。

轢かれかける子供。

飛び出す青年。

吹き出す血流。

そして――薄れゆく視界。

「――嫌だ」

「何だ」「ト？」

「嫌だ、って言ったんだよ。
クソックソ、クソッ……！
折角忘れかけてたのにまた思い出させやがって……！！
最悪だ。ああ、最悪だ……！　畜生、畜生畜生……！！」

死の感触さえもが、追体験（フラッシュバック）される。

最悪の感触だ。
まるで厨二病だ。いや、そのものか。

最悪だ。こんなところでまで、厨二病っぽくなるなんて。

それもあるけど――こいつら。

俺にあの時の感覚を思い出させやがった。

「分かったよ」

「何ｇａ」「ダ？」

「――そんなに俺を引き込みたいなら、
まずは打ち負かしてみろよ。
何でもいい。逆にブッ潰してやる。必ずだ」

――絶対に潰す、と呟き、俺は群体（レギオン）を睨み付ける。

ああ、もういいや。

普段の暢気（のんき）な人間の「御堂和真」は、今はいない。

ただ、今は「■■■■■」という人間として、目の前の敵を叩き潰そう。

――おや。

どうやら、群体（レギオン）との接触によって、多少ならず記憶が戻ってきたようだ。

ははは、と乾いた笑いが漏れだす。

いいじゃないか。

いい。

ああ――これで、遠慮はいらない。

「デは、コ、コ」「ここｎｏ世界にオイオイ」「オイて最モ」

「重要な、デュえ」「るｔｏいウ形態」「で勝負をサせテ」

「もラオ」「う。オ前ｇａガガががガガ敗北ス」「レレレば、ソのとキハ」

「体だろうが魂だろうがくれてやるよ。

ごちゃごちゃ言ってないでさっさとかかってこい群体（レギオン）……！！」

群体（レギオン）の前面に、黒い霧状の物体が集まっていく。

それは、いつしか「盤面」のような形に変化した。

――デュエルディスク代わりか。

どうでもいい。

――倒す。

「決闘（デュエル）！！」

「デ」「ゅＥル」

「俺のターン、ドロー！

《静寂のサイコウィッチ》を守備表示で召喚する！」

【《静寂のサイコウィッチ》　攻　１４００／守　１２００】

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

「我ラの手番。引」「コウ。我」

「らはハ《太」「陽ノ神」「官》を特殊召喚すル」

【《太陽の神官》　攻　１０００／守　２０００】

太陽の神官――相手の場にのみモンスターが存在するとき、手札から特殊召喚できる半上級モンスター。

くそ、こいつのデッキは――！！

「我ラ」「ハ《赤蟻あ」「すカとル》を召喚ス」「るルルるる」

【《赤蟻アスカトル》　攻　７００　／　守　１３００】

「太陽の神」「官ニ赤蟻あｓｕ」「カとルるるるるｒｕをチュー」
「にんグ。太陽昇」「りｓｉ時、全」「ｔｅの闇ヲ照らし」
「出す。降リ注げ光」「ヨ。シｎクろ召」「喚。いデよ、」

「《太陽龍いンテぃ》」

【《太陽龍インティ》　攻　３０００　／　守　２８００】

「――ッ！！」

「太陽龍い」「ｎてぃデ静」
「寂ノさいコ」「ｗｉっチを攻撃」

「チッ……！　だが、サイコウィッチが破壊されて墓地へ送られたとき、
デッキから攻撃力２０００以下のサイキック族を除外できる。
そしてそのモンスターは、次のスタンバイフェイズで、
俺の場に特殊召喚される！　《サイ・ガール》を除外！」

「我ラは札」「ｗｏ1枚伏セ終」「了ｓｕル」

間違いない。こいつのデッキは【インティ&クイラ】だ。

その特性上、大量展開には向かないデッキではあるものの、
場の制圧能力は非常に高い。

だが――そのカード群は。

（未来のカードじゃないのか？）

いや、そういう意味合いで言うなら、
そもそもシンクロモンスター自体が未来のカテゴリだ。

俺が言いたいのはつまり、
インティとクイラという2枚のモンスター自体、
この場に存在することがおかしいのではないか――ということだ。

そもそも、あれは超――もとい、長官の作り出した、
その場において最も都合が良く、
「神」としての威厳を発揮するためだけのモンスターのはずだ。

この場において、ありえるはずのないカード。

――詮索している間は無いか。

「俺のターン、ドロー！
このスタンバイフェイス、
サイコウィッチの効果で除外した《サイ・ガール》を特殊召喚！」

【《サイ・ガール》　攻　５００　／　守　３００】

「除外されたサイ・ガールの特殊召喚に成功したとき、
俺はデッキの上から1枚を裏向きのままに除外する。
そして、サイ・ガールを生贄に、《マックス・テレポーター》を召喚！」

【《マックス・テレポーター》　攻　２１００　／　守　１２００】

「サイ・ガールが墓地に送られたこの瞬間、
裏向きに除外されていたカードを手札に加える。
そして手札から装備魔法、《念動増幅装置》を発動し、
マックス・テレポーターに装備する！」

マックス・テレポーターの周囲に、金色のリングが現れる。

《念動増幅装置》の効果は、シンプルながらも強力だ。
ライフコストが必要になる効果を、
ライフポイントを支払わずに効果を使用できる。

特に、マックス・テレポーターのように、
莫大（ばくだい）な量のライフコストが必要になるサイキック族には必須とも言えるカードだ。

「マックス・テレポーターの効果を発動！
２０００のライフコストにより、
デッキからレベル３のサイキック族を２体特殊召喚できる！
ただし、《念動増幅装置》の効果によって、コストは必要ない……！

俺はデッキから《寡黙なるサイコプリースト》、
《サイコ・コマンダー》をそれぞれ守備表示で特殊召喚する！」

【《寡黙なるサイコプリースト》　攻　０　／　守　２１００】

【《サイコ・コマンダー》　攻　１４００　／　守　８００】

「レベル６のマックス・テレポーターに、
レベル３のサイコ・コマンダーをチューニング！
シンクロ召喚！　来い、《ハイパーサイコガンナー》！！」

【《ハイパーサイコガンナー》　攻　３０００　／　守　２５００】

「相討ちならインティの効果は発動しない……！
バトルだ！　ハイパーサイコガンナーで太陽竜インティを攻撃！」

インティへと迫る光線。
とにかく、まずはこれで――！！

「伏ｓｅ札」「ヲ発」「動。《月ノ書》。太陽龍」
「ｉンｔｅぃを裏」「側守備表示ニ変更」

「なっ……！！」

インティの守備力は２８００……つまり、
ハイパーサイコガンナーの攻撃によって破壊してしまう――！

光がインティを貫き、
その向こう側にいるはずの群体（レギオン）にもダメージを与える。
ただし、その数値はわずか２００。
ハイパーサイコガンナーには、貫通ダメージを与えたときに、
その数値分だけ回復する効果もあるが――これでは、意味がない！

「太陽竜いん」「てぃｎｏ」「効果発動」
「戦闘ニよ」「ッｔｅ破壊さレれレて」「墓地へ送られたとき」
「破壊したもン」「すターを破」「壊し死死死死死ｓｈｉ」
「ソの攻撃力ノの」「半分ノ傷害」「を与ｅる」

ハイパーサイコガンナーの肉体が爆散する。
それと同時に、俺に１５００のダメージが――。

「っ……！？」

与えられると同時。体中から力が抜ける。

何だ。

分からない。

ダメージを食らったから？

だとして――これが、群体（レギオン）に取り込まれるということか？

笑えない。

ともかく、これで俺の残りライフは２７００。
群体（レギオン）は３８００――想像以上に、開きが出たな。

「チッ……サイコプリーストの効果を発動！
手札の《強化人類サイコ》を墓地に送り、
墓地のハイパーサイコガンナーを除外する……！
これで俺はターンエンドだ」

「我ラの手番」「だ。引ク」
「我ら」「ハ《ａぽカてくイル》」「ヲ召喚する」

【《アポカテクイル》　攻　１８００　／　守　１２００】

「手札か」「ラ、《わン・フぉ」「ー・ｗａん》を発」
「動。手札の《戯画」「スとーｎ・オ」「メが》を」「墓地に」
「送ル。山札から」「《すーパ・ｉ》を」「特殊召喚」

【《スーパイ》　攻　３００　／　守　１００】

「――！？」

アポカテクイルの効果は、
チューナーモンスターがいるときにレベルを5にする効果……。
つまり、現在のレベルは5。

――準備が、整ってしまった。

「星五ツとナ」「っタあポカてクい」「ルに」
「すーｐａイを」「チゅーニｎぐグぐぐぐ」
「闇に月満ちルるｒｕ」「時、魔の囁きガ」「聞ココこえ出す」
「死へト誘(いざな)」「エ。シんｋｕロ召喚。ｉｄｅヨ」

「《月影龍クｉら》」

【《月影龍クイラ》　攻　２５００　／　守　２０００】

現れるのは、インティと対をなすかのような青い竜。

――最悪だ。

インティとクイラが、
それぞれ場と墓地に揃ってしまった。

いや、2体ともが場に揃うよりはまだいい。
だが――しかし。

「月影龍くイ」「らデ寡黙ナ」「るサiこプりー」「ストを攻撃」

「くっ……！　サイコプリーストの効果を発動！
サイコプリーストが場から墓地に送られたとき、
効果で除外されたモンスター1体を特殊召喚する！
帰ってこい、ハイパーサイコガンナー！」

【《ハイパーサイコガンナー》　攻　３０００／守　２５００】

俺の場に帰還するハイパーサイコガンナー。
……だが、このままでは何の意味もない。

クイラは、破壊されたその瞬間にインティを呼び出す。
また、攻撃対象にされたそのとき、
相手のモンスターの攻撃力の半分、ライフを回復する。
そうなれば、群体（レギオン）のライフは５３００まで回復する。

更に、場にはインティが残ることになる。

これがあのデッキの恐ろしいところだ。
倒しても倒してもモンスターが湧いて出てくる。

何らかの理由によって途切れることはあるにせよ、
ほぼ無制限に湧き出てくると表現しても過言ではない。

「1枚」「伏セ。終」「了」

「っ……俺のターン、ドロー！」

何としてでもあの2枚を突破しなければ――勝機は見えない。

どちらにせよ、まずはクイラを潰す。

「伏せ（リバース）カード、《サイコ・トリガー》を発動。
相手よりもライフポイントが低い場合に発動できる。
俺は、墓地のサイコウィッチとサイ・ガールを除外し、
更に2枚のカードをドローする」

――来た！

「魔法（マジック）カード、《最古式念導》を発動！
俺の場にサイキック族モンスターがいるとき、

相手の場のカードを1枚破壊できる！　俺はクイラを破壊する！」

「伏セ」「札。《デスｔｏらクと」「・ぽーシょン》」

「月影龍く」「ｉｒａヲ破壊。ソ」「の攻撃能力ト同等ｎｏ生命ヲ得る」

「くっ……！？」

目論見が外れたわけじゃない。

だが、やつはクイラの攻撃力分――２５００のライフを得た。

これで群体（レギオン）の残りライフは６３００。

……相当に厳しい戦況だな。

「月影龍クい」「ｒａガ破壊さ」「レたとキ墓」

「地かラ」「太陽龍」「ｉんティを蘇」「生スる」

【《太陽龍インティ》　攻　３０００　／　守　２８００】

「《最古式念導》の効果によってカードを破壊できなかった場合、俺はデメリットによるダメージを受けない」

だが状況は変わらない。
俺は破壊用のカードを無駄撃ちさせられたし、
奴の場には相変わらずインティが陣取っている。

ライフポイントの差は歴然だし、
場の状況も芳しくない。
仮に同士討ちしたとしても、次のターンにはクイラが復活する。

……待て。

――次のターン、だと？

そうだ。

弱点はある。

インティの効果にはタイムラグが存在する。

そのターンに破壊されたとしても、
次のターンのスタンバイフェイズにならなければ、
クイラを蘇生することは不可能。

だが、どうやって奴のライフを削る？

俺のこの伏せ（リバース）カードは、連撃にも迎撃にも効果を発揮するカードだ。
だが、これを使ったとしても、どれだけ奴のライフポイントを削れるだろう？
６３００。
ハイパーサイコガンナーの攻撃力は３０００。
だが、インティを倒すことは可能だ。
そのあたりは伏せ（リバース）カードのおかげ……とするべきか。
だが、それにしたって届かない。
強化。
蘇生。
召喚。
あらゆる可能性を頭の中で構築し、
そのいくつかの可能性のことごとくを潰していく。
場も手札もないこの状況こそが、
千載一遇のチャンスなんだ。
だから――答えを、導き出す。

「このターンで終わらせる！
俺は手札から、《サイコ・フィール・ゾーン》を発動！
除外されているレベル２チューナーのサイ・ガールと、
レベル３のサイコウィッチを墓地に戻すことにより、
合計レベル分のサイキック族モンスターを守備表示で特殊召喚する！
来い、《マジカル・アンドロイド》！」

【《マジカル・アンドロイド》　攻　２４００／守　１７００】

「魔法（マジック）カード発動！　《ワン・フォー・ワン》！
手札のモンスターカードを墓地に送り、
デッキ、または手札から、レベル１のモンスターを特殊召喚する！
俺は手札の《マスター・ジーグ》を墓地に送ることで、
デッキから《メンタルマスター》を特殊召喚！」

【《メンタルマスター》　攻　１００／守　２００】

これだけじゃ足りない。
……まったく足りない！

「手札から、《カバリスト》を召喚する！」

【《カバリスト》　攻　１００　／　守　１００】

「メンタルマスターの効果を発動！
場のサイキック族モンスター１体を生贄に捧げ、
さらにライフポイントを８００支払うことにより、
デッキからレベル４以下のサイキック族を特殊召喚できる！
俺はカバリストを生贄に、レベル３の《メンタルプロテクター》
を特殊召喚！」

【《メンタルプロテクター》　攻　０　／　守　２２００】

これで俺の残りライフは１９００。
――これだけでもあれば、それで十分だ。

「レベル５のマジカル・アンドロイドと、
レベル３のメンタルプロテクターに、
レベル１のメンタルマスターをチューニング！
シンクロ召喚！　現れろ、《メンタルオーバー・デーモン》！！」

【《メンタルオーバー・デーモン》　攻　３３００／守　３０００】

「メンタルオーバー・デーモンは、１ターンに１度、
墓地のサイキック族を除外する効果がある。
……だが、今はその効果は使わずともいい。
使わなくても勝てるからな……！！」

結果は変わらない。

この勝負、俺の勝ちだ――！！

「伏せ（リバース）カードオープン！　《バスター・モード》！
場の適正なモンスターを生贄に、
デッキから『／バスター（スラッシュ）』を特殊召喚する！
ハイパーサイコガンナーを生贄に捧げる！
――来い、《ハイパーサイコガンナー／バスター（スラッシュ）》！！」

【《ハイパーサイコガンナー／バスター（スラッシュ）》　攻　３５００／守　３０００】

「――バトル！！
ハイパーサイコガンナー／バスター（スラッシュ）で、太陽竜インティを攻撃！」

「太陽竜いｎ」「テぃが戦闘ｄｅ」「破壊された」
「とき、破壊」「しタ対象を」「破壊シ、そ」
「の攻撃能力ノ」「半分の傷害ｗｏ与エる」

「くっ……あ、グっ……！！」

ハイパーサイコガンナー／バスター（スラッシュ）の攻撃力の半分――つまり、
１７５０のダメージ分、俺の体から力が抜けていく。

――いや、魂そのものまでもガ。

……クそッ、引き込まれるな！！

「まだ、だッ！！
ハイパーサイコガンナー／バスター（スラッシュ）ガ戦闘を行ったとき、
ダメージステップ終了時、強制的に相手モンスターの守備力分の
ダメージを相手ライフに与え、
その攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する！」

奴に加えられる２８００のダメージと、
回復していく俺のライフポイント。

……残り、３０００！！

「ハイパーサイコガンナー／バスター（スラッシュ）が破壊サれたとき、
墓地からハイパーサイコガンナーを特殊召喚でキる！
甦れ、ハイパーサイコガンナー！！」

【《ハイパーサイコガンナー》　攻　３０００　／　守　２５００】

「こいつで終わりだッ！！　メンタルオーバーデーモンで直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

メンタルオーバー・デーモンの両腕に、
緑色の火炎が灯る。

そして、その矛先は――群体（レギオン）。

その腕が振り下ろされ、群体（レギオン）の身そのものを焼き尽くした。

＊　＊　＊

何秒。何分。何時間？

どれほどの時間が経っただろう。

気付けば、ソリッドビジョンは消え失せてしまっていた。

――だが、だというのに、俺の目には未だに緑色の炎が映り込む。

気付けば、そこに群体（レギオン）はいなかった。

焼き尽くされたのか、と思った。

だが、所詮はソリッドビジョン――の、はずだ。

相手が消えるなど、あるものだろうか。

……いや。

奴は人知を超えた存在だ。

デュエルで生死を賭けていたんだ。

別段、おかしなことじゃ――多分、ない。

「……ん？」

見れば、群体（レギオン）がいたはずの場所に、2枚のカードが落ちていた。

――《太陽龍インティ》。

――《月影龍クイラ》。

その、2枚のカードが。

「……忘れ形見、ってとこか」

その2枚のカードを拾い上げ、ポケットに仕舞う。

思わぬ収穫だとは思うが――しかし、こんなものを持っていてもいいものか。

見れば、周囲にはカードが散らばってしまっていた。

群体（レギオン）の所有していたものだろう。

その中には、《太陽の神官》や、《赤蟻アスカトル》、《スーパイ》などのカードの姿が見える。

……十代たちに見つかってもマズいな。

とりあえず、これは保管しておくとしよう。

元々の目的は果たせなかったが――まあ、それは置いとく。

それ以上に、問題になるような相手が現れたのだから。

――群体（レギオン）。

目的は分からない。

ただ、なんとはなしに――俺を狙っていることだけは理解できた。

だが、その本義的な目的はなんなのだろう？

「御堂和真」を狙っているのか。

あるいは――「■■■■■」を狙っているのか。

今更考えても仕方がない、か。

「……ア、りゃ？」

足元がおぼつかない。
目の前が霞む。
――何だろう。この感覚は。
ああ、群体（レギオン）とデュエルしたせいか。
しかも、残りライフは１５０。
……想像以上に、精神を摩耗しすぎたってことか。
「あァ、成程ね」
ぐらりと視界が揺れて。
――そのまま、俺の意識は闇に落ちた。
＊　＊　＊

気付けば、俺の視線の先には、見慣れた天井があった。

「――――……」

「お、目を覚ましたか」

声が聞こえる。

……三沢の声か。

「目覚めの直後に男の声とかマジ夢壊れたわ」

「ギャルゲーの類のやりすぎじゃないのかお前は」

まともにツッコミされた。

「どうやって俺はここまで帰ってきたんだ？」

「十代たちが引っ張って帰ってきた。
……ミイラ取りがミイラになってしまったな」

「そうだな。……とはいえ、結果オーライってことで」

結果として、「俺」は今ここにいる。
……勝てた。

今はそれだけで十分だ。

「すまないな、三沢。
……俺のデッキは？」

「棚に置いてある。何なら確認してみるか？」

「いや、必要ない。
ここでお前が嘘をついても得は無いからな」

特に、カードなんて盗もうものなら、
俺は間違いなく地獄の果てまで追っかけていくだろう。

「落ち着いたら、十代たちのところにでも顔を出してくるといい。あとは、いつもの面子もだな」

「……いつもの、って。青葉さんや宮田さんや委員長のことか？」

ああ、と、三沢は頷く。

「あの三人も、交互に見舞いに来ていたぞ」

「……あー。なんか、心配かけたみたいだな。悪い、じゃあ、しばらくしたら行ってくる」

「そうするといい。
じゃあ、俺は部屋に戻ろう」

「分かった。
すまないな、三沢。わざわざ来てくれて」

「いや、構うな」

互いにそう言い合うと、三沢は俺の部屋から出て行った。

しばらくたって、部屋に静寂が満ちる。

枕元の携帯を手に取り、時間を確認してみた。
……と、そこに映されていた時間――というよりも、日付は、俺の記憶よりも2日ほど進んでしまっていた。
……2日間も眠ってしまっていた、ということか。

相当のダメージだった、ってことかね。
まあいいか、と、俺はもう一度ベッドに寝転んだ。
けだるさが身を包む。
疲労は変わらず残ってしまっている、ということか。
もうしばらく眠っていよう。
で、明日にでも、皆のところに顔を出そう。

十代がキーアイテムを入手しているかどうかも確かめなきゃいけないし。

目を閉じる。

……とにかく、今は寝よう。

明日だ、明日。

――そうして。

しばし、俺たちは特別な事件を経験することもなく、
数日、安穏とした日々を過ごした。

そしてそれはある日。

校長に呼び出されたことから、
安穏とした日々は終わりを告げた――。

17束目：群体（後書き）

そういうわけで枠です。

はい、今回は厨二病満載の内容でした。
完全にオリジナルの話です。とはいえ、本編のことにも一応触れてはいますが。
御堂とか御堂とか御堂とか私とかが強烈な厨二病発症してます（

さて、これでようやく御堂以外のオリキャラが出現です。
デッキは何故か超官デッキこと【インティ&クイラ】。

そしてまた御堂のデッキが魔改造されていく……（

ちなみに作中に出てきた群体（レギオン）はわざと誤変換しています。
英語においてのレギオンの本義は、
基本的に「軍隊」です。

多数という意味もありますが、有名なのはそちら。
「古代ローマの軍勢」からの派生ということです。

ちなみに今回は「多数」の側の意味を用いらせていただきました。
多数、無数。その意味の元で思い浮かぶ謎の存在、
というコンセプトで作られたのが、あの群体（レギオン）です。

書くの無茶苦茶面倒臭かったです。

台詞を書く→おかしな風に誤変換する→
異様な場所で台詞を切る　という一連の作業が必要でしたので。

二度と出さない訳じゃありませんが、
こいつにはもう絶対デュエルさせたくない（

まあ、いずれにせよそのうち群体（レギオン）の設定は出します。
御堂の詳細な設定も露出しておりませんでしたので、
丁度いい具合のときには書きます。

外見はもう皆様にお任せいたします。

とはいえ、私の方からその外見を言うとすれば、
……知っている方は知っている、
「るいは智を呼ぶ」のノロイが一番近いかと。

あるいはアザトース。ナイアルラトホテップ。
ともあれ、そういったトンデモな感覚の、
「概念的な存在」とでも言うのでしょうか。

丁度、ピクシブ百科事典の「アザトース」の記事に掲載されている
トップ絵がそれっぽいです。
興味がある方はどうぞ。

さて、ここから本筋に戻します。
次回はついにあの方が登場です。

相変わらず無生物の枠は何も考えてませんが（

ところでアンケートは現在、

藤原女史2票
うさみん1票
さちこさん2票
紬紫1票
レイン恵1票

といった具合です。

同率1票が三名いるということで、
私の中で誰を出すべきかが決めかねますといいますか。
ともあれ、可能でありましたら、どなたでも投票お願いします；

↓追記
ハイパーサイコバスターの効果を勘違いしていたのを気づいたので修正。
はい、完全なオーバーキルです（

18束目：七星（前書き）

序章終了。
これからようやく第一章のセブンスターズ編と言ったところでしょうか。

しかし今回はデュエルがありません。
次回は間違いなくデュエルがありますので、お楽しみにお願いいたします。

18束目：七星

絶体絶命のピンチ、などとはよく言ったもので。

絶対的に絶命する、なんて。

そんな状況に陥った場合、
人間というものは基本的に、状況に対して絶望するものだ。

自分の命が失われるその瞬間まで希望を抱いていられる人間は少ない。

人生に悔いの無い人間はいないからだ。
故に、人生において重要なのは「妥協」だ。

どれだけのことができた。
だから、もういい。

そういう風に思うことができなければ、
おおよそ、人間が人生を終えるとき、後悔以外の感情は湧かないだろう。

で、だ。

絶体絶命の状況とは――つまり、こういうことを言うのだろうか。

「――……熱い」

暑い、なんてものじゃない。
熱い、だ。

言うなれば――灼熱地獄。

いや、それも当然だろう。
なぜなら――俺は今、火山の内部にいるからだ。

眼前には、灼熱で形作られたかのような竜。

目を下に向ければ、溶岩流。

……がりがりと、熱で体力が削られていくのが分かる。
こないだのアレに続いて二度目か。

「くっ……！！」

隣に立つ十代の額から汗が噴き出る。
いや、それは俺だってそうだ。

常人よりも幾分か体温が低い……というか、
以前の事件以来、どうにも感覚が薄いというか。

「アニキ……！」

「十代……！！」

俺の視線の先には、翔と隼人もいる。

巻き込まれ体質というものは辛いものだ。
俺みたいに自ら巻き込まれていくならともかく、
こいつらは偶然にも「十代と同室だ」という、

それだけの理由でこの場に連れてこられた。

……いや、まあ俺だって、十代たちの部屋に行ったら、
偶然連れてこられた、ってだけなんだけど。

普段の経験が経験だけに、どうにもそのあたりの感覚がマヒしてるらしい。

毎度のことだが、恐怖は特に感じない。

これも経験だと思うと悲しくなってくるが、
この状況においては優位なことだと割り切ろう。

どうでもいいが、俺に対しての呼びかけは無いのな。

別にいいけど。別にいいけど。死ぬほど惨めだけど。

……さて、何故このような事態に陥ったのか。

それを説明するには、まず、今日この日、
最初に起こった出来事から説明しなければならないだろう――。

＊　＊　＊

『あー、あー。ドロップアウトボーイ、シニョール三沢、
シニョール万丈目、シニョール御堂、シニョーラ天上院、
シニョール丸藤亮、以上の六名は、至急校長室に集合なノーネ』

その放送が流れたのは、いつもの基礎学術の授業の最中だった。

何故、俺たちが呼ばれているのか……正直に言って、
このときばかりは、何が何だか分からなかった。

面子に心当たりはあるにせよ、
その中に俺が加わっている理由には、一切の心当たりがない。

……はて、何だろう。

そう考えていると、教員から「早く行ってきなさい」と急かされる。

仕方ない、と考えつつ、
俺は委員長に校長室へ向かう旨を話し、
教室から出て行った。

アカデミアの授業は、言うなれば大学の講義にも似ている。
教室の形態がそうなのだから、
自動的に、授業もそれに似た形式になった、
というのが事実的なところだろうが……。

ともあれ、特別編成の授業の多いアカデミアにおいて、
基本教養の授業を取っているのは、
俺や委員長など、ごく一部の物好き……というより、
少なからず、デュエル以外の物事も考えている人間だ。

俺の場合は、基礎教養以外は特に履修する気が無かったという変わり者だが。

……と、そうこうしている間にも、
校長室の札が見えてきた。

「失礼します」

軽くドアをノックして入室すると、
そこには、十代以外全員の生徒――ついでに、
クロノス教諭や大徳寺先生の姿があった。

「あとはドロップアウトボーイだけなノーネ」

呟くクロノス教諭。
……また寝てる気がするのは、俺だけだろうか。

そうしてしばらく。

十分ほど経っただろうか。

ノックも無しに、勢いよく扉が開かれる。

「悪い！　遅れた！」

「遅いのーネドロップアウトボーイ！
いったい今まで何をしていたのーネ！」

「ご、ごめんってクロノス先生……。
それより鮫島校長、何で俺たちを呼び出したりなんかしたんだ？」

「そうですね……まずは皆さん、これを見てください」

と、校長が机の下から取り出すのは――　一つの木箱。

……まさか。

まさかあんなことを言い出すまいな。

まさか、この場にいる人間にアレを渡すなんて言い出すまいな！？

「これは――七星門の鍵といいます」

「七星門の……鍵？」

やっぱりでスかァァァ！？

やべ、ちょっと後遺症が。

「デュエルアカデミア――いえ、この島には、
古くから伝わる三幻魔のカードというものが存在しています」

「三幻魔？」

「そう……手にすれば世界すらも変えてしまえるほどの力を持つ、
究極のカード。かの三幻神には及ばないまでも、
それらが地上に放たれることになれば、世界は闇に包まれるであろう――。
とまで言われているカードです」

「……となれば、その鍵はその三幻魔とやらを封印する、
あるいは、封印を解くための鍵、ということか」

万丈目の問いに、校長が頷く。

「七星門の鍵は、その名の通りに七つ存在します。
それを――君たちに守ってもらいたいのです」

「だが師は……いえ、校長。
守るのであれば、もっと厳重に保管するべきではないでしょうか。
俺たちを呼んだのは、恐らくは『デュエルによって』、
鍵を守らせようと言うのでしょうが……物理的な手法で守った方が、
より安全で確実ではないのでしょうか」

ごもっともだ。

厳重な金庫に保管する。
それを海の底に沈める。
鍵を完膚なきまでに破壊し、修繕不可能にする。

それだけのことができさえすれば、
少なくとも、鍵を奪われるなどということはなくなる。

「……そうしたのは山々ではありますが……。
まず一つに、この鍵を狙う者たちにとって、
物理的な防壁は意味をなしません」

「どういうことなんです？」

「彼ら刺客は、それぞれが超常的な能力を有しています。
仮に金庫に保管していたとしても、
それを突き破るか、あるいはプロテクトを無効化することでしょう」

「では、鍵を破壊するというのは」

「それも不可能です。
……製作者が何を考えたのか、
この鍵が破壊されると同時、
封印が解けるといった仕様になっています。
……苦肉の策ではありますが、
君たち優秀なデュエリストに任せる以外の方法が無いのですよ」

渋面を浮かべる校長。
……それほどまでに、苦しいのか。

まあ、事件の影に校長アリなどと噂されてはいるが、
これでも人格者であり、生徒のことは考えている人だ。
……と、思う。

まあ、そんなに頻繁に疑いの目を向けていても仕方がないというのも本音だ。

「だったら、俺はやるぜ！
相手だってデュエルを仕掛けてくるんだろ？
勝てないわけじゃないんだしな！」

「ふん……愚直すぎるのは好かんが、
その言葉には間違いはないな」

と、十代と万丈目が、それぞれ校長から鍵を受け取る。

……流石、原作の主人公と漫画版のほぼ主人公。
決断が早い。

「でしたら、俺もやりましょう。
俺の知識が役に立つことがあるはずだ」

「私も。……きっと、何かできることがあるはずですから」

「……後輩たちが奮起しているに、
俺が取らない理由もないな」

二人の行動に触発されたのか、他の生徒も次々と鍵を受け取っていく。

「要するに、アカデミアへの道場破りってことなのーネ。
だったら、私が受けない理由も無いのーネ！」

そして、クロノス教諭までもが。

……結果として、俺一人が残ることとなる。

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

無言の圧力が俺に襲い掛かる。

皆の視線が「早よ取れ」と語りかけている。

ところで話は変わるが、
期待というものは、適度でなければ重圧以外になりえない。
過度な期待は、もはや押しつけにも近しい。

この期待から――いや、重圧から逃れるため、俺はまず一礼する。

直後、俺は身を翻し、扉を開いて走り出した。

え、という呆けたような声が聞こえてくる。

まあ当然だろうな。今の今まで、
間違いなく「やる」と思っていた人間が、突然逃げ出したのだから。

「「ちょっと待ったぁぁぁぁぁぁあああ!?」」

「待たない待つか待ってたまるかァ!!
待ったら待ったで無茶苦茶重圧かかンだよォォ!!」

追いかけて来る十代。
その後ろから駆けてくる三沢。

……だが、俺の方が身体能力は高いぞ!
だから空だって飛べる!

飛ぶぞオラァァ!　と叫びながら窓を開け放ち、

「アイキャンフラァァァァイ!!」

――と、気づけば、俺は中空に身を躍らせていた。

「和真ぁぁぁあ！？」

「御堂ぉぉぉお！？」

狙うは――ここから見て最も近い場所の屋根！

ダァン！　という轟音が周囲に響いた。

足が痺れる。着地に用いた掌に痛みが広がる。

――だが、生きてる。

俺は生きている！

こんな馬鹿なことで死んでたまるかという思いもあるが、しかし、死んでないというのも驚きだ。

４、５メートルは落ちたのではなかろうか。

……改めて、俺の身体能力の向上が実感できた。

必要なのかどうかはともかくとして。

「じゃあなお前ら！　鍵は俺以外の人間に預けてくれ！
では、アデュー！！」

「おーい！！　和真ぁぁ――――――！！」

かずまー、かずまー、かずまー。
と、十代の声が徐々に遠ざかっていく。

……今日はもう、校舎には戻れないな。

仕方がない、と断じて、俺は寮へと戻った。

＊　＊　＊

改めて考えるまでもないことだが、
俺はあの連中の中で最も弱い。

十代や三沢が、俺に対して「強い」などとのたまうのは、
ただの錯覚であり、誤解であり過大評価だ。
それ以上でもそれ以下でもない。

万丈目に勝てたのは偶然だ。

今デュエルをしても、勝率は2割よりも低い。

セブンスターズなんかと戦おうものなら、

……一部を除き、まず間違いなく負けることだろう。

でなくとも、関わっていける者と、関わることができない者がいる。

フラグを立てていない以上、ダークネスと戦うことはまず無い。

顔の問題もあるし、カミューラの対戦相手に指名されるようなことも無いだろう。

タイタンは改心した。

首領（ドン）ザルーグとは、話の展開上、万丈目が戦うだろう。

タニヤと戦うことになるのは三沢だ。

そしてその後の展開を思えば、十代と戦うのは当然。

アビドス3世とは――誰が戦うことになっても同様だろうが。

アムナエルは、十代との対戦を望んでいる。

俺なんかは眼中に無いだろうな。

変えようと思えば、いくらでも原作の展開は変えることはできる。

だが、原作のイベントを経ることなく、

まるで素通りしてしまえば――どうなる？

あるいは、強制力のようなものが発動し、
事なきを得るかもしれない。
だが、その保証はどこにもない。

変えることができる部分とできない部分を、
少なくとも俺の中で明確にしなければ――これから先、
生きていくことそのものが難しい。

一番楽なのは、こうしてただ黙ったまま、
事態を傍観していることだ。

そうすれば、いつの間にか事件は収束に向かうだろう。
……ベターな終わり方で。

だったら、俺が進んで関わっていく必要は無い。

鍵なんて受け取る必要も――無い。はずだ。

どうせ、俺の元に違和感が残るだけで、他に大した弊害も無いのだ。

「……チッ」

何であいつらが俺をこんなに過大評価するのかが理解できない。

目立った実力も無い。

目立った戦績も、それこそ「運」で得たものだ。

決して俺の実力じゃない。

――力ヲ求めｒｕなラ――。

頭の中に響く声。

鬱陶しいというよりも、むしろ粘っこく、

いつまでも心の奥に纏わりつくかのような――。

……お前は黙ってろ。

吐き捨てるようにして呼びかけると、その声は止んだ。

どうせ置いて行ったものだ。

インティとクイラは好きなだけ使わせてもらう。

元々、俺のエクストラデッキにはドラゴン族のモンスターが少ない。

どころか、アレとダークエンドとライトエンド以外は1枚たりとも持ってないんだ。
入れたって別に構わんだろう。

だが、力を借りるのはだめだ。
そうすれば、恐らくは一時は力を得ることはできるだろう。
案外、高レアリティのカードが手に入ることだってあるかもしれない。

だが、そうすると、あとはずるずると奴の方へと引き込まれてしまう。
それだけは却下だ。絶対に許されない。

「……くそ」

我ながら中途半端なことだ。
どちらにも傾くことはなく、どこまでも中庸な位置に留まっている。

それが良いことなのか悪いことなのかは判然としないが。

などと考えていると、ＰＤＡの着信音が鳴り響く。
誰からの着信か――などと考えつつＰＤＡを取ると、
画面には「遊城十代」の文字が浮かんでいた。

「この番号は現在使われておりません」
『はぁ!?』
「もしもしタートル。用事が無いなら切っていいよな。
答えは聞かない」
『いや、聞いてくれよ!?
別に鍵の話じゃないから!』
「ならいいんだ。どうしたんだ?」
『な、なんか調子狂うな……。
いや、HERO同士でタッグ組んだときとか、
HERO同士で対戦するときのシミュレーションしたいと思ってさ』
「……対戦は勘弁願いたいが」
『えぇ? いつもそれだよな、和真。
デュエルするの嫌い……なんてことは無いと思うけど』
「別にデュエルするのは嫌いじゃないんだが、
勝率の低い相手とデュエルするのが嫌なんだよ。
負けると分かっててデュエルしたくなんてないだろ」
『逆に言うけど、絶対に負けるなんてことも無いと思うぜ?』

「強者が言える台詞だな。
世の中にはゼロパーセントってのが存在するモンなんだよ」

『……』

「……悪い。不快にさせたなら謝る。
だけど、俺は今のお前たちには、到底勝てそうには思えない」

『そんなことはないと思うぜ？
だって和真、なんだかんだで強いじゃないか』

強い。

何でそんな幻想を抱く？
何でそんな期待をする？

あいつらの言う「強い」は、
デッキとしての地力があるというだけで、
決して「俺が」強いというわけじゃない。

あいつらはそれに気づいていない。
だからこそ――気付かぬうちに、俺の神経が逆撫でされる。

「……分かったよ。じゃあ、十分後に向かう」

『おう、待ってるぜ！』

俺は、十代たちが嫌いじゃない。

そう――嫌いじゃないんだ。

だからこそ、あいつらの持っている力に対して嫉妬してしまう。

近しい場所にいるからこそ、

あいつらは俺の嫉妬の対象となってしまう。

本当、嫌な性格してるよ。我ながら。

それを改善できないんだから、余計に最悪だよ、俺は。

＊　＊　＊

「だから負けるって言ったじゃないか……！！」

何なんだろう、このフィールドの状況は。

俺の場には、守備表示の《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　フォレストマン》が1枚のみ。

他に伏せカード（リバース）は1枚も存在しない。

対して、十代の場にはモンスターが3体。

《E・HERO（エレメンタルヒーロー） フレイム・ウィングマン》。

《E・HERO（エレメンタルヒーロー） サンダー・ジャイアント》。

《E・HERO（エレメンタルヒーロー） エッジマン》。

……これは、アレだな。

どうあがいても、絶望。

更には潤沢に手札も存在してるし、

フォレストマンは表側表示だからサンダー・ジャイアントの効果で破壊できるし、

伏せカード（リバース）は2枚もあるし。

勝てるわけねーよっていう。

「――十代よ、これが絶望だ」

「な、何か分かんねえけど悪い……」

くそう。こうなったらもうガチなデッキに改造するしかないのか。
いや、別にそんなことする気は……半々だけど、

各属性の優秀なモンスターを組み込んでも回りそうではある。
……とはいえ、ンなことしたら、そのことごとくが逆手に取られそうだが。

だってそういう世界ですもの。
ガチカード使ったら、そのほとんどが相手に逆手に取られるという。

世知辛い世の中だなどと考えつつ、デッキをケースに戻す。

「で……何で和真はそんなに嫌がってるんだよ？」

何を嫌がってるのか。
聞くまでもない。七星門の鍵のことだろう。

「もっと優秀な人間がいるだろうと思ったからだ。
それに、一人だけ実力が追い付いてないんだ。
そんなの、鍵を奪ってくれと言っているようなものだろう」

「返り討ちにすればいいじゃないか。
和真にはそれだけの実力はあると思うぜ？」

「それはお前の思い込みだ。
はっきり言っておくが、俺はあの場にいた7人の中で一番弱い。
そんな俺が鍵を受け取ってみろ。まず間違いなく狙われるだろう。
集中砲火だ。まず間違いなく鍵は奪われる。
逆に聞くが、お前は大事な鍵を一つ無駄にしたいのか？」

「そんなわけ無いだろ！
でも、何でそんなに自信無さげな発言ばっかりなんだ？
俺は、和真は十分強いと思うんだけど」

「あのな。周囲に天賦の才能を持つような人間がごまんといて、
それで自信を失わないような人間がいるかよ」

知っての通り、十代には神域に至るほどの豪運を持っている。
三沢の頭脳も驚異的だ。それこそ、教師すらも凌駕するほどに。
明日香は、一年にして既に女子筆頭の実力を持っている。
万丈目は知っての通り、一人でノース校のトップを奪い取った。
カイザーは、アカデミア屈指の――いや、頂点の実力がある。
クロノス教諭はアカデミアの実技主任だ。当然、それに見合うだけの能力がある。

俺だけが――何もない。

セオリー通りの戦術は組める。
セオリー通りの構築はできる。
知識と経験を活かせば、プレイングもどうにか取り繕うことはできる。

だが、それを超えることはできない。

所詮、それは単に「セオリー通り」、
「取り繕っている」というだけなのであり、
それ以上のモノを持っている人間は超えられない。

確かに、その場その場に応じたプレイングを取ることはできる。
ただ、それは誰だってできることだ。
瞬時の戦術の組み立て、即時対応ができるかどうかと言えば微妙。
引きも、それほど良いわけではない。

「噂が先行してるだけだ。
天才と呼ばれる神楽坂を倒し、
かつて1年最強とまで言われた万丈目を降(くだ)した。
そういった先入観のせいで、俺が強いなんて幻想を抱いているだけだ」

「でも、だったらそもそもあいつらにも勝てな――」

そう十代が言いかけた、その直後、
窓から強烈な光が降り注ぐ。

「「!?」」

思わず目を瞑り、光が止むのを待つ。

――と。

「な、何だこれ！？」

十代の叫び声が聞こえてくる。

疑問を抱き、目を開く。

「――！？」

その瞬間に、俺の目に飛び込んできた光景は――溶岩。

辺り一面の、目が眩むような赤、赤、赤。

――火口、という言葉がまず始めに頭に浮かんだ。
火口？　どこの？
アカデミアの中央部のアレに決まっているだろう。
だとして、何故こんな場所に――？

「まずは二人か」

聞こえてくるのは、男の声。
誰だ、と声を上げる十代。それに続いて、声のした方を見据える。
そこにいたのは、黒衣の男だった。
全体的に、どこかアカデミアの制服にも似たデザインの服。
顔に張り付いたように、目元と鼻筋を隠す黒い仮面。
――こいつは。

「我が名はダークネス。――セブンスターズが一人」
「ダークネス……！？
セブンスターズ……七星門……！？」

「察しが良いようで何よりだ。
私は貴様たちの持つ七星門の鍵を奪いに来た。
お前たちは、私の最初の相手ということだ」

「……お前……たち？」

「持っているのだろう、七星門の鍵を。
確かに反応は二つあったはずだがな」

驚いたように鍵を二つ取り出す十代。

「……って、二つ！？

「十ウウウ代くウウウウウウウウウン！！」

「だ、黙ってたのは悪かったって！
でも、絶対和真は戦力になると思ったんだよ！」

「畜生！！　敵の目の前で唐突にカミングアウトしてンじゃねェよ！？
お前が負けたら二つを一度に奪われるだろォがァァァ！？」

「だ、だから悪かったって！！」

「……お前たち、あれが見えないのか？」

横から割り込むダークネス。
その指さす方向には透明な球体がある。
その中に閉じ込められているのは――翔と隼人か！？

「お前たちの仲間だろう。
今は光の監獄に守られてはいるが――時間が経つごとに、
あの光は消失していく。そうなれば、どうなるかな？」

「くっ……汚いぞ！」

「ならば決闘（デュエル）だ。　貴様たち二人を同時に屠（ほふ）ろう。
敗者はカードに魂を封印される……！」

「考えてるような時間はねえか……！！
くそっ、行くぜ和真！」

「こんなはずじゃなかったのに……！
畜生、なるようになれだ！！」

「「「決闘（デュエル）！！」」」

18束目：七星（後書き）

そういうわけで今回はダークネスお目見えの回でした。

デュエル無しでうじうじした御堂を書いてただけなのにこの分量。

前向きに後ろ向きな人間は恐ろしいですねという話でした。

さて、次回はようやくデュエルです。

セブンスターズ編まで来るのに長かったなぁ……；

それでは、全体的に短いですが、今回はこれで。

１９束目：黒竜

「俺のターンだ！　ドロー！」

十代のターンからデュエルは始まる。

今回のデュエルの方式はかなり特殊だ。

１対２という形式である以上、ダークネスの不利は避けられない。

故に、俺たちのライフポイントの合計分、
つまり８０００のライフポイントを、ダークネスは有している。

そして、俺たちは１つのフィールドを共有することになっている。

だが、実質的に召喚権は１ターンに２度。
加え、１ターンに俺と十代のターンが回ってくるわけだから、
実質的に２枚のドローができるのと変わらない。

更に、こちらの合計の手札は１０枚だ。

……ハンデにしては大きすぎるハンデだろう。

バトルフェイズも2度ある。

ただし、十代は十代のモンスターでのみ。

俺も俺のモンスターでのみ、攻撃が可能。

……まあ、それにしても十分すぎるが。

「俺は手札から、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　クレイマン》を守備表示で召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　クレイマン》　攻　８００　／　守　２０００】

「カードをセットし、ターンエンドだ！」

相変わらずの堅実な手だ。

少なくとも、アニメのようにフェザーマンを攻撃表示で出すようなことが無くて良かった。

「俺のターン、ドロー。
《E・HERO（エレメンタルヒーロー） ザ・ヒート》を召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） ザ・ヒート》 攻 1600 ／ 守 1200】

「ザ・ヒートの攻撃力は、場の『E・HERO（エレメンタルヒーロー）』1体につき200上昇する。
よって現在の攻撃力は2000だ。
……カードを2枚セットし、ターンエンド」

1ターンに2度の召喚権と考えると、
相当に恐ろしいものだということがよく分かる。

特にこの現状、普通なら1ターンで構築できるものとは思えない。
伏せ（リバース）カードは3枚あるし、壁モンスターは2体。

……イジメか何かか。

「私のターン、ドロー！
……フ。私は手札から、《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》を守備表示で召喚！」

【《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》　攻　１４００　／　守　１１００】

「カードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

「何だよ、デカいこと言った割に大したこと無いな！
俺のターン！　ドロー！
《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン》を召喚するぜ！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン》　攻　１６００　／　守　１４００】

「バトルだ！　スパークマンで仮面竜（マスクド・ドラゴン）を攻撃！
スパークフラッシュ！！」

「仮面竜（マスクド・ドラゴン）が戦闘で破壊されたとき、
デッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚できる。
私は更に仮面竜（マスクド・ドラゴン）を特殊召喚する！」

【《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》　攻　１４００　／　守　１１００】

「ターンエンド！」

「……俺のターン、ドロー」

十代は無邪気に喜んでいるが――しかし、ダークネスの意図は、恐らくはモンスターを、特にドラゴン族を墓地に送ることだ。

ここで攻撃すれば、奴は――。

いや、迷うな。迷えばそれだけ判断が鈍くなる。

「くっ……！　俺は手札から、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　オーシャン》を召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　オーシャン》　攻　1500　／　守　1200】

「場の『E・HERO（エレメンタルヒーロー）』はこれで4体。よってザ・ヒートの攻撃力は2400まで上昇する！――バトル！　ザ・ヒートで仮面竜（マスクド・ドラゴン）を攻撃！」

「仮面竜（マスクド・ドラゴン）が破壊されたことにより、私はデッキから更に仮面竜（マスクド・ドラゴン）を特殊召喚する！」

【《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》　攻　１４００　／　守　１１００】

「まだ攻撃は残っている！　オーシャンで仮面竜（マスクド・ドラゴン）を攻撃する！　ビッグウェーブクラッシュ！」

「フ……仮面竜（マスクド・ドラゴン）の効果発動！　――デッキから《黒竜の雛》を特殊召喚する！」

【《黒竜の雛》　攻　８００　／　守　５００】

「《黒竜の雛》！？」

墓地へ送ることで、レッドアイズを特殊召喚するモンスター……。見た目は愛くるしいし、レベルも低い。

攻撃力もたったの８００だ。

だが、成長すれば、一気にその攻撃力は3倍になる。

……だが！

「伏せ（リバース）カード発動！　速攻魔法、《マスク・チェンジ》！

場のオーシャンを生贄に、《M・HERO（マスクドヒーロー） ヴェイパー》を特殊召喚する！」

【《M・HERO（マスクドヒーロー） ヴェイパー》 攻 2400 ／ 守 2000】

「バトルフェイズに特殊召喚された以上、ヴェイパーにはまだ攻撃権がある！
ヴェイパーで黒竜の雛を攻撃！ フリアティクエクスプロージョン！」

「くっ……！？」

ダメージは与えられないまでも、これで黒竜の雛は封じた。

《古のルール》やそれに類するカードが無ければ、レッドアイズを召喚するのには苦労するだろう。

「ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！
……フ、この程度で私のモンスターの召喚を封じたと思わないことだな。
伏せ（リバース）カード、オープン！ 《リビングデッドの呼び声》！

この効果により、黒竜の雛は甦る！」

【《黒竜の雛》　攻　８００　／　守　５００】

「そして、黒竜の雛を墓地に送る！
我が手札より現れよ――《真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）》！！」

【《真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）》　攻　２４００　／　守　２０００】

「手札より、魔法（マジック）カード、《黒炎弾》を発動……！
真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）の元々の攻撃力分、相手にダメージを与える。
私が選択するのは――遊城十だ……」

「ちょっと待てダークネス。
……考え直さないか？」

「……何だと？」

原作では――確か、この攻撃を何度も受けて、
十代はしばらく保健室で療養することを余儀なくされたはず。

だが、現実的に考えるとそれはマズい。
ダメージが残っていれば思考能力は、相応に低下する。

ドローにそれは関係ないかもしれないが、
戦術に影響するのはマズい。
であれば――あまり、戦力にはなりそうにない俺に矛先を向けるのが得策。
痛みは――我慢すればいい。

「まずは邪魔者を倒した方が、お前としては楽なんじゃないか？
こうやって言うのもなんだが、俺はお前の予想以上に妨害するぞ」

「ふ……確かにその通りではある。
貴様のモンスターの能力は、いささか厄介そうだ。
ならば食らうがいい、我が真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）の灼熱を――！！」

レッドアイズの口腔から放たれる、球状の火炎。
どうにか痛みに耐えるべく、身構えたその瞬間には、既に俺の身を火炎が包んでいた。

「ぐあああああぁぁぁぁぁあああぁっ！！？」

刺激、なんてものじゃない。

本当に火炎弾を食らったかのような、痛みと熱。
それが――俺の体を包み込んだ。
痛い。
熱い。
苦しい。
漏れ出す声が止められない。

「ぐ、あぁぁっ……！！」

「和真っ！！」

「言い忘れていたが――この闇の決闘（デュエル）においては、
ライフポイントにダメージを負えば、
その分だけダメージがフィードバックする。
２４００ものダメージを負ったのだ。
相応に、肉体へダメージを受けていることだろうな」

「ダメージが……実際のものになる！？」

「そういうことだ。
……が、喜べ。
貴様のお友達は、どうやら耐えきったようだぞ」

「！？」

確かに痛い。
だけど、この程度なら。
この程度なら――まだ、戦っていられる。

「……そういうことだ。
心配無用、ってな」

軽く手をスナップし、自身の体の調子を確かめる。
……大丈夫だ、やれる。

俺の残りのライフポイントは１６００。
……十分だ。

「ならばこれで引導を渡そう！
私は真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を生贄に捧げる！
さあ、来るがいい我が最強のドラゴン！

《真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）》！！」

【《真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）》攻２４００／守２０００】

真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を炎が包み込む。
黒い――闇色の炎が。

火炎が消える。

そして、その跡に姿を現すのは――黒い炎を具現化したかのような、禍々しい姿をした黒竜。

――真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）。

「真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）の攻撃力は、
私の墓地に存在するドラゴン族モンスターの数×３００ポイント上昇する。
私の墓地のドラゴン族は５枚。
よって現在の攻撃力は――３９００！」

「！！」

「これで貴様の命そのものをも奪い尽くす！
真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）で、
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ザ・ヒートを攻撃！
ダークネス・ギガ・フレイム！！」

向かいくるのは、ただ一つ。黒い火炎の弾丸。
この攻撃を受ければ、俺のライフポイントはゼロ。
敗北――つまり、死だ。

「伏せ(リバース)カード、オープン！　《ガード・ブロック》！
戦闘ダメージをゼロにし、カードを1枚ドローする！」

「ほう……なんとか防いだか。
いいだろう。ターンエンドだ」

そう、このターンだけはなんとかなったんだ。
だが、これ以降のターン、どうなるかは分からない。

次、攻撃を食らえばマズいことは確かだし、
十代のモンスターも俺のモンスターも、
真紅眼の闇竜(レッドアイズ・ダークネスドラゴン)に届く攻撃力のものはない。

であれば、どうするべきなのか？

奴を超える攻撃力のモンスターを召喚すること。
あるいは、何かしらのカードを用いて、モンスターの攻撃力を上げる。
相手のモンスターの攻撃力を下げる。

直接的に破壊する。

……どれがいい。

要はやり方だ。

Ｚｅｒｏの効果を用いて召喚しても、破壊される必要がある。

だが、融合を用いて召喚しても、破壊される必要がある。

であれば、必然的にタイムラグも発生してしまう。

手札消費も激しいし、実質的な俺の損失は４つ。

Ｚｅｒｏ。融合素材のモンスターが２体。融合のカード。

……奴の闇竜を倒すにそれだけの損失を被るのは割に合わない。

だとするなら、まず俺たちの場にモンスターが残ることが第一条件だ。

とにかく、どちらかの攻撃力を変動させる。

それだけだ。

「くっ……俺のターン！　ドロー！

俺はスパークマンを守備表示に変更！

そして《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェザーマン》を守備表示で召喚！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェザーマン》　攻　１０００　／　守　１

０００】

「カードをセットし、ターンエンドだ……！」

意気消沈したように俯く十代。
――だが、現状の選択はそれがベターだ。
いや、先に繋ぐという意味では、これこそがベスト。

――さて、今度は俺の番だ。

「俺のターン、ドロー！
……行くぞ。魔法（マジック）カード、《融合》を発動！
手札の《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　レディ・オブ・ファイア》と、
十代のフェザーマン、２体のＨＥＲＯを融合！
現れろ、《Ｖ・ＨＥＲＯ（ヴィジョンヒーロー）　アドレイション》！！」

【《Ｖ・ＨＥＲＯ（ヴィジョンヒーロー）　アドレイション》　攻　２８００／守　２１００】

「アドレイションの効果を発動！
場のアドレイション以外のＨＥＲＯを選択し、
その攻撃力分、相手のモンスターの攻撃力を下げることができる！

俺は俺の場のヴェイパーを選択し、
お前の真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）の攻撃力を２４００下げる！」

「何っ……！？」

「これで、真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）の攻撃力は１５００！
戦闘破壊も十分に可能だ……！
今度はお前が痛みを味わえ！
アドレイションで真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）を攻撃！
アンビション・サンクションズ！！」

「ぬうっ、ぐ、あああああっ！！」

「まだだ！　ヴェイパーで直接攻撃（ダイレクトアタック）！
フリアティクエクスプロージョン！」

「ぐうううううっ！！
くっ……だが、この瞬間、私は伏せ（リバース）カードを発動！
《ダメージ・ゲート》！　戦闘ダメージを受けたとき、
その戦闘ダメージ以下の攻撃力を持つモンスターを、
墓地から特殊召喚できる！
私は墓地の真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を特殊召喚する！」

【　《真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）》　攻　２４００　／　守　２０００　】

炎の内より甦る黒竜。
あれだけのダメージを受けてなお、そこから持ち直すとは。

……こいつ、化け物か？

ダメージというのは、単なるライフダメージだけではない。
肉体的なダメージだってそうだ。

合計ダメージは３７００。

……残り４３００。それをどうやって削り取るか。

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

「私のターンだ、ドロー！
私は手札から、《死者転生》を発動！
手札の《軍隊竜（アーミー・ドラゴン）》を墓地に送り、
墓地の真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）を再度手札に加える！
そして、場の真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を生贄に！
再び現れろ、真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）！！」

【《真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）》　攻　２４００　／　守　２０００】

「もう1体のドラゴンを墓地に送ったことにより、
真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）の攻撃力は更に上昇する。
……これで、４２００。さあ、これで終わりだ！
真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）で、
Ｍ・ＨＥＲＯ（マスクドヒーロー）　ヴェイパーに攻撃！

ダークネス・ギガ・フレイム！！」

「やらせねえぞ、ダークネス！
伏せ（リバース）カード、オープン！　《ヒーローバリア》！
『Ｅ・ＨＥＲＯ』が場にいるとき、相手の攻撃を１度だけ無効にする！」

「くっ……ここで防いできたか。
まあいい。私はカードを１枚セットし、ターンを終了する」

十代のおかげで、どうにか生き延びることはできた。
……これなら、あとはアドレイションの効果を使えば、
闇竜を破壊することができる。

だが――あの伏せ（リバース）カード。

手札を逐一確認していたわけではないが、
あれは恐らく、このターンで手札に加わったカードだ。
でなければ、何故以前のターンに伏せていなかったのか、ということにもなる。

攻撃反応系の罠（トラップ）――だろうか。
あるいは他の何か、という可能性も、十分にありうるが。

「俺のターンだ！　ドロー！
俺は手札から、装備魔法、《スパークガン》を発動！

スパークマンにこれを装備する。そしてダークネス！
お前の真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）の表示形式を変更するぜ！」

スパークガンの光に射（い）られ、守備体勢に移行する闇竜。
真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）の効果によって上昇するのは、唯一、攻撃力のみ。
であるなら、攻撃力２１００以上のモンスターが召喚されれば、
真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）を破壊することはできる。

「更に手札から、《融合》を発動！
場のクレイマンとスパークマンを融合する！
現れろ、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　サンダー・ジャイアント》！」

手札に素材モンスターがいなかったのだろうか？
いや、どちらにせよ、これで、闇竜を――。

「バトルだ！　サンダー・ジャイアントで真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）を攻撃！
ボルティック・サンダー！」

「ふ……この瞬間、私は伏（リバース）せカードを発動する。
《聖なるバリア －ミラーフォース－》。攻撃表示モンスターは全て破壊だ！」

「なっ！！」

このタイミングで聖バリだと！？
なんて引きしてるんだよ！？

「これで貴様らのモンスターは……ん？」

「……悪いが、ヴェイパーはカード効果では破壊されない。
戦闘となると、また別だがな」

「ふ……なるほど。
だが、既にアドレイションは存在しない。
……万策尽きたな」

「だが、このターンで真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）は破壊できる」

俺の場には攻撃力２４００のヴェイパーが残っている。
であれば、俺のターンには、間違いなく闇竜は破壊できる。

「わ、悪い、和真……」

「気にするな。むしろ、貴重なカードを無駄撃ちさせたと思えばい

い。
　立て直しならいくらでもできる」
ヴァイパーが存在しているうちに使わせておいて良かった。
でなければ、少しばかり焦っているところだ。
「よし、なら俺は《フレンドッグ》を守備表示で召喚！」
【《フレンドッグ》　攻　８００　／　守　１２００】
「これでターンエンドだ」
「俺のターン、ドロー……！」
「――――和真！」
十代に続くようにしてドローすると、直後、十代がこちらに呼びかける。
何だろうか？　そう考え、十代の方へ向き直る。

「やっぱ、和真は頼りになるじゃねえか！
だってそうだろ？　あそこでミラーフォースが刺されば、
普通のやつなら、さっきみたいに落ち着いちゃいられねえ。
俺に声をかけて励ますなんてことも、きっとできない！」

「お前、まだそんなことを……。
言っただろ、俺はお前らよりもずっと弱いって」

「だけど、心は俺たちよりもずっと強いだろ！
いつだってものごとをよく考えてるし、
俺たちにも、何かと良くしてくれてる！」

「強いとか弱いとかの問題じゃないだろうが、それ」

「強くないと、他人のことだって考えられない！
違うかよ、和真！」

「……」

弱くても、他人のことを考えて生きていくことはできる。
そう反論しようと考えていたのに、言葉が出てこない。

とうよりも――十代の目が、それを許さない。

何で、こいつは――こんなに、他人のことを信じることができるんだ？

「他人のことに迷わないなら、何で自分のことで迷ってるんだよ！？
強いだの弱いだの、そうやって迷ってるから、
そうやって自分が弱いなんて思い込んでたら、
勝てないなんて思い込んでたら、本当は勝てる勝負にだって負ける！
違うかよ、和真！」

プラシーボ効果、という言葉がある。

簡単に言えば、思い込みが肉体に作用する、という類の概念だ。

これは酒だ、と思い込ませて水を飲ませれば酔うこともあるし、
これは薬だ、と思い込んで固形のブドウ糖でも頬張れば、
薬用は無いにしても、体が勝手に薬と判断して病を治す。

……いや、十代がそんな理屈を知っているわけはない、か。

ただ、漠然とは理解しているんだ。
心が及ぼす効果を。精神が肉体に作用することを。

心が、世界に影響を及ぼすことを。

ああ、そうだ。

迷う必要なんて無かった。
以前決めたじゃないか。
俺はこの世界に関わっていくと。
関わって関わって、関わりぬく。思う通りにすると。

ああ、ならば迷う必要は無い。

俺は――俺の思うとおりに、思うように。
考えたことをやり抜いて、やり遂げるだけだ。

迷う必要は無い。

――もう、何も迷わない。

「行くぞ、ダークネス。このターンで決着を付ける！
俺は手札から、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エアーマン》を召喚！」

【　《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エアーマン》　攻　１８００　／　守　３０００　】

「エアーマンの効果により、デッキから『ＨＥＲＯ』を手札に加え

ることができる。
《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　クノスペ》を手札に加える！
そして手札から、《沼地の魔神王》の効果を発動！
デッキから《融合》カードを手札に加える！」

――俺のHEROデッキの最大の特徴、
そして、持ち味は、奇襲と制圧能力だ。

相手の攻撃力がいくら勝っていようとも、それを上回る攻撃力のものを出せる。
あるいは、その攻撃力そのものをも利用する。

その最たる例を――今、この場で見せる。

「《融合》を発動する！　場の『E・HERO』のエアーマンと、
手札の地属性、クノスペを融合！
現れろ、大地のHERO！　《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ガイア》！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ガイア》　攻　２２００／守　２６００】

「ガイアの融合召喚成功時、相手モンスターの攻撃力を半分にし、
その数値分だけ、ガイアの攻撃力を上昇させる！
真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）の攻撃力を奪い、

ガイアの攻撃力を２１００ポイント上昇させる！」

「攻撃力、４３００だと……！？」

「そう。丁度、お前のライフポイントと同値だ」

「――！！」

「行くぞダークネス！　――バトルだ！
Ｍ・ＨＥＲＯ（マスクドヒーロー）　ヴェイパーで、
真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）を攻撃！
フリアティクエクスプロージョン！」

ヴェイパーの持つ矛によって切り刻まれる闇の竜。

守備態勢を取っている現状、その攻撃力は意味をなさない。

そして――場には、何も残らない。

「とどめだ！　Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ガイアで直接攻撃（ダイレクトアタック）！！
コンティネンタルハンマー！！」

鎚。

その拳は、まさしく「鎚」のそれと同様だった。
「大地」の名を持つＨＥＲＯの鉄槌。
勢いのままに――それが、ダークネスを襲う。

「ぐあああぁぁあっ――――――！！」

ただの一撃。
その一撃こそが――この勝負の決め手となった。

「俺たちの――勝ちだ」

突き出した拳が、中空で。

この瞬間――セブンスターズ最初の刺客は、俺たちの前に敗れ去った。

＊　＊　＊

――気付けば、俺たちは火山の外にいた。

デュエルが終わったからだろうか。
それとも、あるいは俺たちが勝利したから？
そもそも殺す気など無かった、とも解釈はできるが。

「ぐっ……」

全身が熱い。
直火で焼かれてるんじゃないかと錯覚するような痛みの中、
俺は近くに倒れているダークネスの下へと向かう。

「やっぱり、な……」

ダークネスの仮面の下に見える顔――それは、
行方不明になったはずの明日香の兄、吹雪さんのものだった。

原作通りの展開で助かった、とすべきなのか。

ともあれ、お膳立てはしておいてやろう。

俺はＰＤＡを取り出し、明日香に連絡を入れる。

ともかく、この場に吹雪さんがいることを伝えないと。

十代は今もまだ気絶している。

翔と隼人も同様だ。

俺の場合、強烈な痛みのせいで目を覚ましたのだ。

１ポイントもダメージを受けていない十代が目を覚まさないのも仕方がない。

それよりも、だ。

闇のゲームにおける「現実のダメージ」は、どちらかと言えば、幻痛（げんつう）に近い。

幻――そう、あれはあくまで幻のようなものなんだ。

実際に傷を与えられたわけではない。

だとしても、痛みはある。

神経系にダメージを受けている、と言えるだろうか。

力が抜ける、といった類のものは経験したが、
ここまで直接的にダメージを被るのは初めてだ。

ともあれ、十代や翔、隼人はこの場に置いていて大丈夫だろう。
しばらくすれば目を覚ますだろうし、そのうち明日香もやってくる。

俺がここに残ってお荷物になる理由もない。

さっさと下山してしまおう。

そう考えると、あとは行動は早かった。

十代の首にかかる七星門の鍵の一方を手に取る。

……鍵は分散して持っていた方がいい。

ゆっくりと、一歩ずつ学校の方へと向かって歩き続ける。

亀より遅いのではなかろうか。
というより、足が重い。

視界が霞む。体が重い。

これは――要するに、体力を消耗しきった、ということだろうか？
ともあれ、少なくとも校舎まではたどり着かなくては。

一歩、また一歩と歩を進める。

ある程度、道が整備されていて助かった。
これで、森の中を通って行くようなことになれば、
恐らく、俺は迷い果ててしまっていただろう。

月の光も届かないような暗闇の中だ。
……想像も、したくないな。

一歩。また一歩、と。
そんな風に歩き続けて、どれだけ時間が経っただろう？

気付けば月は直上にあり、携帯も、既に１２時を回ったと告げている。

――ああ、疲れたな。

気を抜けばその場に倒れ込んでしまいそうだ。

その前に、どうにか。

どうにか――辿り着かないと。

格好つけたようなことやったんだ。

あの場に倒れていては、それも台無しだ。

……まあ、そんな子供みたいな理由は、正確とは言えない。

十代たちのお荷物になりたくないのは事実だ。

以前、遺跡でブッ倒れていたことを思い出す。

あのとき、一度引っ張って連れて帰ってもらったんだ。

もう一度同じような状況に陥るか？

そんなの――格好悪いじゃないか。

格好悪いし、迷惑だ。

友人だったら頼れ？

ああ、その通りだ。

だが、友人だからこそ、頼りたくないときもある。

弱みを見せたくないこともある。

ああ、やっぱり俺はまだ格好つけたがりだ。

まあ、それでもいいんだけどな。

校舎に辿り着くと同時、その外壁にもたれかかって倒れ込む。

ひどく疲れた。

精神的にだけじゃない。肉体的にもだ。

だが――その一方で、爽快感を感じている自分もいる。

迷いを、断ち切ることができたからだろうか。

であるなら万々歳だ。

……と。

「いい夜ねぇ、人間」

そんな声が――俺の耳に届く。

胡乱な視界のままにそちらに首を傾ける。

そこにいたのは、一人の女。
髪は蛍光色の緑。全体的に血の気に乏しい顔色であり、
身に纏うドレスの赤がよりよく映える。

こいつ、まさか――！

「セブン……スターズか……！！」

「あぁらよく分かってるじゃない。
疲労困憊の状態でよく思考できたこと」

「……！」

「自己紹介させてもらうわ。
私の名はカミューラ。――吸血鬼（ヴァンパイア）、カミューラよ」

「くそっ……！」

こんなときに、一番出会っちゃいけない奴に出会うとは。
つくづく不運だな、俺は！

――いや。
こいつの能力は、確か……眷属の蝙蝠との視界の共有。
まさかこいつ、俺が消耗していることを知って――。

「チッ――！！」

デュエルディスクに挿し込んでいたデッキを入れ替える。
……いざという時のために用意しておいたのが功を奏したか。
できれば役に立たなかった方がいいんだが。

「意外と良い感じの顔じゃない。
もっとも、今のままじゃまだまだでしょうけど」

「言ってろ……！　くそ、目的は七星門の鍵か……！？」

「その通り。……だけど、今少しだけ変わったわ」

「何……！？」

「七星門の鍵もいただく。そして、アナタを人形にして、
私好みに作り変える。――良い趣向と思わない？」

「思わねえよ。悪趣味だ。

くそ、勝負するなら今すぐにでも受けてやる……！
構えろ、カミューラ……！」

「ふ……威勢のいいこと。
では始めましょうか、闇の決闘（デュエル）を！」

「「――決闘（デュエル）！！」」

こうして――本日2度目の。

セブンスターズ第二の刺客、
吸血鬼（ヴァンパイア）のカミューラとの闇の決闘（デュエル）の幕が、切って落とされた。

１９束目：黒竜（後書き）

イジメいくない。

はい、そういう訳で今回は壮絶なイジメ回でした。
ダークネスが可哀そうでした。
結局与えたダメージは御堂への一撃のみ。
しかも最終的に２４００以上のトンデモダメージ。

ダークソス。

急転直下の第二章セブンスターズ編。
次回はＶＳカミューラです。

……クロノス教諭もカイザーもやられてないけどいいよね！

疲労困憊状態の御堂はカミューラを倒すことはできるのか？

……あれ。なんだかセブンスターズ編は序章より短くなりそうな予感がする（

余談ですが、投稿後に枠は一時原産地に返品されます。
というか里帰りです。
GWなので。

ですので、しばらくはコメントに対して返信ができないかもしれません。
そのあたりご了承ください。

五日には帰宅している算段ですので、返信や訂正はそこでまとめておこなわせていただきますが、ご容赦願います；

20束目：夜鬼

「俺のターン、ドロー……！」

本来ならばここで経るはずではなかった戦いの火蓋が、
今切って落とされた。

先手は俺。
普段なら、先手を取れたことに対して喜ぶべきだろう。
しかし、今はどうにもそんな気持ちになれない。

体力を消耗しているからだろう。
どうにも体が重く、思考が定まらない。

だが――それでも、勝たなくては。

四の五の言っている場合ではない。

「俺は《シンクロ・フュージョニスト》を守備表示で召喚する」

【《シンクロ・フュージョニスト》　攻　８００　／　守　６０

０　】

「カードを２枚セットし、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！
私は永続魔法、《ミイラの呼び声》を発動するわ。
これにより、自分の場にモンスターが存在しない場合、
私は手札からアンデット族モンスターを特殊召喚できる。
この効果により、《ブラッド・サッカー》を特殊召喚！」

【　《ブラッド・サッカー》　攻　１３００　／　守　１５００　】

「更に、《ヴァンパイア・レディ》を通常召喚」

【　《ヴァンパイア・レディ》　攻　１５５０　／　守　１５５０　】

「バトル！　ブラッド・サッカーで、
シンクロ・フュージョニストを攻撃！」

深紅の爪によって引き裂かれる幻像。
……まだまだ、これからだ。

「さぁて、ヴァンパイア・レディで直接攻撃（ダイレクトアタック）よ！」

「ぐあっ……！」

首筋に噛みつかれると同時、力が抜けるのを感じた。

……吸血、を意識しているのだろうか。

悪趣味極まりない。

「ヴァンパイア・レディの効果を発動。

相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えたとき、

魔法（マジック）・罠（トラップ）・モンスターのいずれかを宣言。

そのうち1枚をデッキから墓地に送りなさい。

私が宣言するのは――魔法（マジック）カード」

「……《戦士の生還》を墓地に送る」

流石に、モンスターを墓地に送ってくれるようなことは無いか。

まあ、仕方がない。

ともあれ、これで俺の残りライフは２４５０。

中途半端に少なくなってきたが、まだまだ大丈夫だ。

「カードをセットし、ターンエンドよ」

「俺のターン、ドロー！
相手の場にのみモンスターが存在する場合、
手札から、その元々の攻守を半分にし、
《バイス・ドラゴン》を特殊召喚できる！」

【《バイス・ドラゴン》　攻　２０００　／　守　２４００】
↓
【《バイス・ドラゴン》　攻　１０００　／　守　１２００】

「更に、俺は手札から、《幻影王　ハイド・ライド》を召喚！」

【《幻影王　ハイド・ライド》　攻　１５００　／　守　３００】

必要なパーツはあと1枚。
俺の記憶を辿れば、カミューラのデッキの最強のカードは、
あくまで《ヴァンパイアジェネシス》のはず。

攻撃力は３０００。
であれば、それ以上の攻撃力を持つモンスターさえ召喚できれば、
場の制圧は容易。

ならば迷うことは無い。
本来ならば、ギガンテック・ファイターを選択している場面だが、
次の一手の布石のためには、これもある意味では必須。

力を借りるぞ、万丈目――！！

「レベル５、闇属性のバイス・ドラゴンに、
レベル３の幻影王　ハイド・ライドをチューニング！
シンクロ召喚！　現れろ、《ダークエンド・ドラゴン》！！」

地面にぽっかりと空いた暗闇の孔（あな）。
そこから姿を現すのは、一匹の黒竜。
闇を具現化したかのような存在。

――ダークエンド・ドラゴン。

【《ダークエンド・ドラゴン》　攻　２６００／守　２１００】

「――バトル！　ダークエンド・ドラゴンで、
ブラッド・サッカーを攻撃！　ダーク・フォッグ！」
「くっ……！？」

吐き出される闇が、深紅の不死者（イモータル）を飲み込んでいく。
その攻撃力の差は１３００。
……これで、カミューラのライフは２７００。
まずはこれだけだ。

「メインフェイズ２に移行し、
ダークエンド・ドラゴンの効果を発動！
攻撃力・守備力を５００下げ、相手の場のモンスターを墓地に送る。
ヴァンパイア・レディを墓地へ送らせてもらう！
ダーク・イヴァポレイション！！」

深い闇に落とされていく吸血鬼。
これでカミューラの場には何も残らない。

――が、ミイラの呼び声の発動トリガーとなる、
「自分の場にモンスターが存在しないこと」の条件が整ってしまっ

た。

いや、かと言っても、レベル7以上のモンスターが手札に来ることなど、
普通に考えれば、そうは無いだろう。

だとしても、打点は低い。
そう恐れることはない、はずだ。

「……ターンエンドだ」

「よくもやってくれたわねぇ……！
私のターン、ドロー！
ミイラの呼び声の効果を発動！　自分の場にモンスターが存在しないことで、
手札から、《地獄の門番イル・ブラッド》を特殊召喚！」

【《地獄の門番イル・ブラッド》　攻　２１００　／　守　８００】

「更に、地獄の門番イル・ブラッドをデュアル召喚！
これにより、私の手札、墓地。そしてアナタの墓地から、
アンデット族モンスターの特殊召喚が可能！
私は墓地から、ヴァンパイア・レディを特殊召喚する！」

【《ヴァンパイア・レディ》　攻　１５５０　／　守　１５５０】

再度、場に2体のモンスターが揃ってしまった。

……いや、イル・ブラッドが場から離れれば、
その効果で特殊召喚されたヴァンパイア・レディも破壊される。

つまり、イル・ブラッドを破壊しさえすれば、
このターンは凌ぐことができる――ということだが。

ダークエンドとイル・ブラッドの攻撃力は同等。
つまり、奴の手札には、攻撃力を上昇させるカードが眠っている――？

「永続魔法、《一族の結束》を発動！
墓地のモンスターの元々の種族が1種類だけのとき、
その種族のモンスターの攻撃力を８００ポイント上昇させる！」

――やはりか！

アンデット、ということで警戒はしていた。
しかし、こうも予測通りに使ってくるとは。

……これで、イル・ブラッドの攻撃力は２９００。
また、ヴァンパイア・レディの攻撃力は２３５０。
圧倒的不利――か。

「バトルよ！　ヴァンパイア・レディで、
ダークエンド・ドラゴンを攻撃！」

「いいようにやられてたまるか！　伏せカード（リバース）、《波動障壁》を発動！
相手の攻撃宣言時、俺の場のシンクロモンスターを生贄に、
相手の場のモンスター全てを守備表示にする！」

闇に消えていくダークエンド・ドラゴン。
それに呼応するように、闇の余波がヴァンパイア・レディとイル・ブラッドを捉え、
その態勢を変更させていく。

「更に、攻撃宣言を行ったモンスターの守備力分のダメージを、
相手プレイヤーに与える……！」

「何っ……！？　くあああぁぁぁっ！！」

これでカミューラに与えたダメージの総数は２８５０。
……ようやく、優位に立ったぞ。

「生意気な……！
これでターンエンドよ！」

文字通りの、「鬼のような」形相。
唇は裂け、目は血走り、瞳も焦点が合っていない。

……化け物、か。
間違いなく、嘘偽り無く、こいつは怪物だ。
――正直、それがデュエルにどう影響するのか、と言いたくはなるが。

「俺のターン、ドロー！
俺は手札から、《カオスエンドマスター》を召喚！」

【《カオスエンドマスター》　攻　１５００　／　守　１０００

】

これが成功すれば、奴の場にモンスターは残らない。
立て直しも――恐らくは、厳しいものになるだろう。
どころか、何一つ対策が無ければ――俺の勝ちだ。

「バトル！　カオスエンドマスターで、イル・ブラッドを攻撃！」

「くっ……！？」

「カオスエンドマスターがモンスターを破壊したとき、
デッキから、レベル５以上、攻撃力１６００以下のモンスターを
特殊召喚できる！
俺は、《混沌球体（スフィア・オブ・カオス）》を、攻撃表示で特殊召喚する！」

【　《混沌球体（スフィア・オブ・カオス）》　攻　１６００　／　守　０　】

そして、イル・ブラッドの効果によって特殊召喚されたモンスターは、
イル・ブラッド自身がフィールドを離れた時点で破壊される。
よって、カミューラのフィールドはガラ空き。

……うまくいけば、これで終わりになるが――。

いや、余計なことは考えるな。
今は自分のできる最大限をしろ。

「混沌球体（スフィア・オブ・カオス）で直接攻撃（ダイレクトアタック）だ！」

「チィッ……伏せ（リバース）カード、《リビングデッドの呼び声》を発動！
地獄の門番イル・ブラッドを攻撃表示で蘇生するわ！」

「……モンスターの数が増減したことにより、バトルを巻き戻す。
混沌球体（スフィア・オブ・カオス）の攻撃を取りやめる。
そしてメインフェイズ2へ移行」

奴の場に存在する一族の結束。
あれをどうにかしなければ危険だ。

かと言って、そう都合の良いカードが手札に眠っているわけじゃない。
サイクロンもハリケーンも手札には無く、
伏せ（リバース）カードも。現状においてはあまり役に立たない。

――ならば、確実に戦闘で相手に打ち勝つモンスターを出すまでだ。

「混沌球体（スフィア・オブ・カオス）の本来の属性は闇だが、
その永続効果によって光属性としても扱われる。
俺は光属性とした扱った、レベル５の混沌球体（スフィア・オブ・カオス）に、
レベル３のカオスエンドマスターをチューニング！
降臨せよ、《ライトエンド・ドラゴン》！！」

【《ライトエンド・ドラゴン》　攻　２６００／守　２１００】

「……カードを１枚セットし、ターンエンドだ」

ギガンテック・ファイターをシンクロ召喚し、
その上で攻撃をかわす……という選択肢も、あることはあるものの、
墓地に戦士族が溜まっていない関係上、攻勢に転じることは難しい。
であれば、攻防一体の効果を持つ、
ライトエンド・ドラゴンを特殊召喚するのが、現状では最良……のはずだ。

「生意気な……私のターン、ドロー！
私は地獄の門番イル・ブラッドを再度召喚する！
そしてイル・ブラッドの効果を発動！　手札からモンスターを特

殊召喚する！
さあ、現れなさい、《ヴァンパイア・ロード》！！」

【《ヴァンパイア・ロード》　攻　２０００　／　守　１５００】

ヴァンパイア・ロード――。
その名の通り、「君主（Lord）」の名に相応しい風体の、
いかにも紳士然としたモンスターが、カミューラの場に召喚される。

あれは――間違いない。

……次につなぐための布石だ。
攻撃なんぞ絶対にさせてもらえない。
多分一瞬で除外されるはずだ。

「そして、ヴァンパイア・ロードを除外する！」

やっぱりな！
ソリッドビジョンのヴァンパイア・ロードの表情が、

出てきた瞬間、妙に虚しげで悲しげだったんだよ！

……なんて言ってる場合じゃねえ！！

「さあ、姿を現しなさい、不死者（イモータル）の始祖にして吸血鬼（ヴァンパイア）の真祖！
《ヴァンパイアジェネシス》！！」

【《ヴァンパイアジェネシス》　攻　３０００　／　守　２１００】

攻撃力３０００――。

いや、より正確には、一族の結束で強化されていることにより、
攻撃力は３８００。イル・ブラッドの攻撃力は、
現在の数値で言えば２９００。

ライトエンド・ドラゴンを破壊するには――十分だということか？

「ヴァンパイア・ジェネシスでライトエンド・ドラゴンを攻撃！
ヘルビシャス・ブラァァ――ッド！！」

迫りくる真祖の拳。

このままでは、迎撃効果を使っても使わなくても、
ライトエンド・ドラゴンが破壊されてしまうことには変わりない。

……だが、それはあくまでも「このままでは」だ。

――何のためにカードを伏せたんだ、という話だ。

「伏せ（リバース）カード、オープン！
《くず鉄のかかし》！　相手の攻撃を一度だけ無効にする！」

「何っ……！？」

「そして、くず鉄のかかしをセットしなおす。
……目論見が外れて残念だったな」

ライトエンドの効果が持続するのは、
あくまで発動ターンのエンドフェイズまでだ。

次のターンまで数値の減少を持ち越すことはできない。
……だが、俺のターン内であれば、攻撃力の減少効果を用いることはできる。
そして、その効果を使えば――間違いなく、ヴァンパイア・ジェネシスは破壊できる。

「くっ……！！　ターンエンドよ！」

「俺のターン、ドロー！
俺は手札から、《ジャンク・シンクロン》を召喚！」

【《ジャンク・シンクロン》　攻　１３００　／　守　５００】

「ジャンク・シンクロンの召喚成功時、
俺の墓地に存在するレベル２以下のモンスターを、
その効果を無効にし、守備表示で特殊召喚できる！
俺は《シンクロ・フュージョニスト》を特殊召喚する！」

【《シンクロ・フュージョニスト》　攻　８００　／　守　６００】

――これで決まりだ！

「レベル２のシンクロ・フュージョニストに、
レベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！
シンクロ召喚！　現れろ、《スカー・ウォリアー》！」

【《スカー・ウォリアー》　攻　２１００　／　守　１０００】

「シンクロ・フュージョニストがシンクロ素材となったとき、
デッキから『融合』または『フュージョン』と名のつく魔法（マジック）カードを１枚、
手札に加えることができる……！」

「シンクロ・フュージョニストの効果は無効化されてるはずじゃあ……！？」

「無効にされるのは『場に存在するとき』だ。
墓地に送られれば、効果は復帰する。
そして、シンクロ・フュージョニストの効果は墓地で発動する効果だ。
……悪いが、無効になることはない」

チューニング・サポーターを用いても似たようなことはできる。
この場合、レベル変更の効果を使えないこともあって、

単体ではレベル４のシンクロモンスターしか出せないが。

「俺はデッキから、《ミラクルシンクロフュージョン》を手札に加える。

そして、《ミラクルシンクロフュージョン》を発動！

墓地のドラゴン族シンクロモンスター、ダークエンド・ドラゴンと、

戦士族モンスター、カオスエンドマスターを融合！

現れろ――《波動竜騎士　ドラゴエクィテス》！！」

【《波動竜騎士　ドラゴエクィテス》　攻　３２００／守　２０００】

場に降り立つのは、竜の面影を随所に残す、

一人の――いや、一つの騎士。

――竜騎士（ドラゴエクィテス）。

「攻撃力……３２００……！？」

「そう。引導を渡すには十分な攻撃力だ。

――バトル！　ライトエンド・ドラゴンでヴァンパイア・ジェネ

シスを攻撃！
　まずはその攻撃力を奪わせてもらう！　ライト・イクスパンション！」

「げ……迎撃よ、ヴァンパイア・ジェネシス！
　ヘルビシャス・ブラッド！！」

ヴァンパイア・ジェネシスの攻撃によってその身を散らす、ライトエンド・ドラゴン。

……だが、その役目は果たされた。

ヴァンパイア・ジェネシスの攻撃力は、既に２３００。
ドラゴエクィテスの攻撃力は３２００。

――このまま、押し切る！

「行くぞ！　波動竜騎士　ドラゴエクィテスで、
ヴァンパイア・ジェネシスを攻撃！
スパイラル――！！」

「待つのよ、御堂和真！！」

直前に、呼び止められる。

――何だ、と思考する。

いや、待て。

考えてもみろ。

――何故、奴は俺の名前を知っている？

奴の前で俺は自分の名前を出したことは無い。

なのに、何故？

「……驚いているようねぇ。

ま、無理もないわよねぇ、名乗った覚えも無いのに、

その名前を相手から突然告げられたんだから」

……こいつは、何を言いたいんだ？

「ついでに言わせてもらうけど。

知ってるのよ、アナタの弱点。最も大事に想っている対象」

やめろ、と、口から声が漏れだす。

それ以上言葉を発するな。

いや、大声を出せばいい。こいつの声が掻き消えるくらいの声量で、思い切り、大きな声を出せば。

――だけど、出てこない。

何故だ、と思うと同時に、カミューラは――その名を、告げた。

「早乙女レイ」

ぞわりと、全身に震えが走った。

喉が渇く。

焦点が合わない。

頭が熱い。

「何故知っているんだと思う?」

「……偶然だ。それ以外にありえないだろう」

「ではないとしたら？」

カミューラの目が、赤く光る。

――今更、思い出した。

こいつの目は、自らの分身とも言える蝙蝠と同期している。

つまり、そこから情報を受け取ることも可能。

――それと同時に、いくつかの仮説も生まれる。

目、だけなのか。

手や足、耳。

そういった器官と同期することができるのではないか、と。

「察しが良いわねぇ。

つまりは、そういうことよ。

……早乙女レイの命は、今、私の『手』が握っている」

「貴……様……！！」

「ほら、どうしたのかしら？
攻撃するんじゃなかったのかしらぁ？
もっとも、そんなことをすれば――」

レイの命は、無い――？

考えるまでもない。
こいつは――やる。
躊躇なく。一切のためらいもなく。

「……知っているか。人質がいなくなれば、
その時点で、俺に対する制約は解ける。
……人質を失うことは、お前にとっても利にはなりえないはずだ」

「だからと言って、身体能力で勝てるとでも思っているのかしらぁ？」

無理だ。

女とはいえ、相手は吸血鬼。
正真正銘の――化け物だ。

幻魔の扉を使用していない以上、奴を倒したとしても、
安全が確保できるとは限らない。

レイを殺させる？

馬鹿な。
そんなことがあってたまるか。

俺はあいつの兄代わりだ。
その俺が、自らレイを危険に晒す。

――そんなことが、あってたまるものか。

であれば、俺は。

「……ターン、エンド、だ」

「あはははははははははっ！！
私のターン、ドロー！」

にやりと、カミューラの口元に笑みが浮かぶ。

狂笑……とでもいうべきなのか。
そこから感じるのは、狂気と狂喜。

「魔法（マジック）カード、《幻魔の扉》を発動！」

カミューラの背後に扉が現れる。

――扉。

冥府への、扉が。

「《幻魔の扉》が発動したデュエルにおいて、
敗北者は扉に魂を奪われる。
さらに、エンドフェイズにライフポイントが１０分の１になるデメリットがある。
……だけど関係ないわねぇ、このターンで終わるのだから！
幻魔の扉の効果により、相手の場のモンスターを全て破壊する！」

俺の場が、扉から溢れる瘴気（しょうき）によって蹂躙される。

……何も残らない。

後に残るのは――ただ、俺の伏せカードのみ。

1枚はくず鉄のかかし。もう1枚は、《ロスト・スター・ディセント》。

……だが、発動すれば、レイは――。

「そして、相手の墓地のモンスター1体を、
召喚条件を無視して特殊召喚する……。
《波動竜騎士　ドラゴエクィテス》を選択し、特殊召喚！」

【《波動竜騎士　ドラゴエクィテス》　攻　３２００／守　２０００】

「さあ、とどめよ！　波動竜騎士　ドラゴエクィテスで直接攻撃（ダイレクトアタック）！
スパイラル・ジャベリン――！！」

放たれる、波動を纏った一本の槍。

それが体を貫いた、その瞬間――俺の意識は、闇に落ちて行った。

＊　＊　＊

「……はん、馬鹿な子だよ」

校舎に続く道に、ぽつりと人形が落ちている。

つい先ほどまで戦っていた少年の面影を残した人形だ。

カミューラはそれを拾い上げ、くっく、と喉を鳴らした。

デュエルの直前は、あれでも冷徹な人間なのではないかと考えた。

ダークネスとのデュエルで迷いが断ち切れたことも、その一因と言えるだろう。

だが、結局この少年は、人としての情を捨てきることができなかった。

家族としての親愛の情は否定しない。

だが、それも大きすぎれば、いずれ正常な判断を失う。

この少年はまさしくそれだった。

「あはははははははははは！！」

チョロいものだ、とカミューラは思う。

だから人間は弱いのだ。

だから人間は愚かなのだ。

「……チッ」

唐突に、カミューラは舌打ちを始めた。

「分かってるわよ。今終わったわ」

まるで、その場にいる「誰か」と会話しているかのような口調。

いや、確かに、彼女は「誰か」と会話をしている。

ただし、その表情は優れない。
喜悦を感じるべき時を邪魔されたからだろう。

「……なんですって？　イヤよ。これは私のオモチャなのよ」

疎ましげに中空を睨み付ける。

だが、声は止まらない。

「渡さないと言っている。そんなことも……。
何？　……チッ！　その話を出されると弱いと知っていて……！
！」

カミューラの顔が怒りに歪む。

元々、「あの男」とは仲間でもなんでもない。
利害が一致したからこそ「協定」を結んでいるだけだ。
それが無ければ、助力など請わないし、請われない。

「何？　頭を弄るな？
それはアンタの得意分野でしょう。

私が知ったことじゃあないわね」

逆に言えば、それ以外は一切関与しない、ということでもある。

了解した、と男が告げた。

それと同時、不愉快な声がカミューラの頭から消え失せる。

腹が立つ。

何故あの男のいいようにされなければならないのだろう？

それもこれも、全ては自らの一族を復興するためだ。

だというのに、あの男は――。

「チッ」

もう一度だけ舌打ちし、カミューラはその場から姿を消した。

――その場に一つ。デッキが落ちていることに気付かずに。

＊　＊　＊

その一方。

主人公（遊城十代）は、明日香や翔、隼人たちと共に山を降りていた。

友人の姿が見えないことに気が付いたのだ。

捜さないはずがあるまい。

そうして見つけたのは――彼の用いていた、デッキ。

何故？

そんな疑問が四人に浮かぶ。

その理由は――翌日。

正確には、翌晩。

その理由を、四人は理解することと相成った。

２０束目：夜鬼（後書き）

多分誰か予想してたと思います。こういう結果。

はい、そういう訳で枠です。

今回は敗北回です。
とはいえ、完全な敗北というよりは、無念の敗北、という感覚ですが。

ええ、人質ですね。
すごくわかりやすい人質です。

特に御堂には効果テキメンでしょう。外道や非道になりきれない人間ですので。

ちなみにカミューラの「手」の設定は完全に捏造です。
遠く離れた場所にいるはずのレイに危害を及ぼす方法はこのくらいしか思い浮かびませんでした。申し訳ありません。

ですけど、吸血鬼って設定的には体の一部を蝙蝠に変えたりすることも可能だそうですので、これはこれで苦肉の策でした。

はい、そういうことで、次回からしばらく御堂不在（わきやく）ということでお願いします。

それでは。

21束目：光炎

――御堂和真が行方不明となって、既に４５時間が経過した。

クロノス教諭は、突如現れたセブンスターズの刺客、カミューラの前に敗れ去った。

そして、カイザーは、その卑劣な手の前に――。

翔を人質にされるという、おおよそ考えうる中で、最悪の手を用いられ、カミューラに敗れた。

御堂がカミューラに敗れたのだと仮定するならば。

――実際に敗れてはいるのだが――。

これで、既に三つの鍵が奪われたということになる。

ここから先は、本当に「負けられない戦い」だ。

だからこそ――。

「十代君」

と、唐突に呼びかけられる。

そちらを振り返ると、そこにいたのは一人の青年。

ブルーの制服を着用した、明日香の兄――天上院吹雪だ。

「どうかしたんですか、吹雪さん？」

「……これを、君に渡しておく」

「これは……」

いつか、ダークネスに囚われた吹雪と戦うことになった要因。

墓守の暗殺者（アサシン）――サラから預かったペンダントの片割れだ。

これを持つ者を探してくれ、というのが、彼女の願いだったはずだ。

そして、それは結局のところ、この場にいる吹雪だったわけだが。

「それは――言うなれば、闇のアイテム、と呼ぶべきものなんだ」

「闇のアイテム？」

「そう。闇のデュエルに対抗するための唯一の手段と言ってもいい。……今の君たちには必要だろう？」

確かにその通りだ。

だが、これは――。

「安心してくれ。闇に染まってしまうようなことはない。……要は、使う人間の心次第なのだからね」

「心……」

悪事に使おうと思えば、いくらでも悪事に使うことはできる。しかし、それを善行に使うこともできる。

ダイナマイトのようなものだ、と十代は考えるようにした。

使い方を誤ってはならないものだ。

であるなら、大事に――そして、使いどころを見極め、正しい対象にのみ用いらなくてはならない。

「これがあれば、闇を中和することができる。
恐らく、相手からの妨害も及ぶことは無いはずさ。
……さっきまで眠っていて、偉そうなことは言えないけどね」

「こうして対抗手段を持ってきてくれたんだから、
別に問題ないと思うぜ、吹雪さん」

「……いや、もっと早くに目を覚ますべきだったよ。
でそうすれば、亮は……」

そう。それは間違いない。

吹雪がもっと早くに目を覚ましていれば、
あるいは、闇のアイテムの力でカミューラの妨害を阻止できた可能性はあるのだ。

だが、それも終わってしまったことだ。

加え、そもそも吹雪を昏睡に追い込んだのは、
元々十代と御堂だ。あまり強いことは言えない。

文句は言えないし、言うこともはばかられる。

「だったら、俺がカミューラを倒すぜ。

そんでもって、カイザーも、クロノス先生も、
絶対にみんなを取り戻す！」

「ああ……頼むよ、十代君」

必ず倒す。
その誓いを胸に、十代は保健室を後にした。

＊　＊　＊

とは言ってみたものの。

実際にできる対策はと言えば、それこそ、特殊召喚を封じたり、
あるいは、そもそも打点の高いモンスターを並べることが思い浮かぶ。

だがしかし、それだけで足りるのだろうか？

カミューラのデッキのコンセプトは、ほぼ間違いなく「蘇生」だ。
延々と墓地からモンスターが湧き出し、展開が途切れることが無い。
一度途切れたら――という仮定が通用しないのだ。

「――待てよ？」

墓地、という言葉を思い出し、考えを改める。

そう、墓地だ。

カミューラは墓地を利用した戦法をとる。
それを逆手に取るのだ。

墓地を利用するということは、つまり「除外」にめっぽう弱いということ。

だが、全体の……無差別な除外は逆効果だ。
十代自身の首を絞めかねない。

であれば、どういったカードを投入するべきなのか？

と、そんな折に、あるカードが目に留まる。

魔法カード。

除外効果を兼ね備えており、その対象は広い。
汎用性も高く、何よりも――。

「よし」

十代は御堂のデッキを手に取った。

基本は同じＨＥＲＯだ。
戦法もあまり変わらない。いつも通り、融合から強力なＨＥＲＯを召喚するだけ。
これなら、自らのデッキに組み込むことも可能だろう。

「悪いな、和真。戻ってきたら、絶対に返すから――」

今は、力を貸してくれ。

そう呟いて、十代は何枚かのカードを自身のデッキに投入した。

＊　＊　＊

いつになく、カミューラはいら立っていた。
理由は推察するまでもない。「おもちゃ」を奪われたからだ。
それも、相手は可能な限り近づきたくない男。

……いくら観賞用の人形が一つ増えたとしても、
娯楽に勝るものではない、とカミューラは考える。

完成されたものも美しいが、
未完成なものを完成に近づけるのは、楽しい。
その楽しみを奪われたのだ。
感情が昂(たか)ぶっていても、おかしくはないだろう。

「……おや」

そんな中、彼女の目に一人の少年の様子が映り込む。

――遊城十代。

ダークネスを降した間接的要因にして、
奪われた「おもちゃ」……御堂和真の友人。
その手に持つのは、御堂のカード。
それを自身のデッキに投入する光景。

――本当に、楽で仕方がない！

デッキの内容を把握するだけで、その戦略を読んだこともある。
精神的な揺さぶりをかけ、敗北に導いたこともある。
今回は前者だ。……ああ、迷うこともない。
さっさと対策となるものを投入してしまえば、勝つことができる。

「あっーはっはっはっはっはっはっはははは！！」

夜の闇に、吸血鬼の哄笑が響く。
自身の相手の、本質を見誤ったままに。

＊　＊　＊

「っと、悪いな、明日香。こんなところまで付きあわせちまって」

「構わないわ。それより十代。
……勝機はあるの？」

「あるぜ。……いや、デュエルである以上、
勝機が無いなんてことはありえない。
俺はカミューラに勝って、カイザーたちを取り戻す！」

いつもの十代だ、と、明日香は胸を撫で下ろす。

これまで続いてきた陰鬱なデュエルに辟易（へきえき）しているものと思っていたが、
そんなことは無かったようだ。

いや、少なからず辟易（へきえき）はしているのだろう。

それを今、この場で表出させない点は、間違いなく見習うべき部分だ。
明日香はそう考えた。

「あぁら、本当にそんなことができるのかしら？」

――途端、二人に対し、投げかけられる疑問。

この声は、間違いなく――。

「カミューラか！　どこだ、出てこい！」

「言われずとも、こちらから出て行ってやるわよ」

そう告げ、霧の中から姿を現す貴婦人（カミューラ）。

――その表情は、相も変わらず不敵だ。

「……ふん、無駄に元気が有り余ってるようねぇ。ま、いいわ。これで４人目、４つ目の鍵が手に入るんだからね……！！」

「４人……！？」

これまでの犠牲者は、公式にはカイザーとクロノス教諭の二名だ。
……計算がおかしい。

「ってことは、お前、和真を……！！」

「カズマ？　……ああ、あの子ねぇ。
ちょこっと脅してやったら、さっさと負けてくれたよ。
あはははははは！！　人間ってやつはどうしてこうも、情に弱いんだか！」

オドシ――脅し。

それが意味するところは、つまり。

「和真にも、カイザーの時に使った手と似たようなことを……！？」

「ふん、当然じゃない。勝つために手段を選ぶものかねぇ？」

「……！！」

その言葉は、十代にとっての「防波堤」を、一瞬で決壊させた。

決闘（デュエル）は、ルールがあるからこそここまで発展できたのだ。
それを冒涜し――かつ、友人までも、その毒牙にかけた。
――許せるものじゃない。

「俺とデュエルしろカミューラ！
取り戻してやる、皆を！！」

「あはははははは！！　できるのかしらねぇ！
さあ、闇のゲームの始まりよ！」

「「決闘（デュエル）！！」」

そうして、吸血鬼との決闘（デュエル）が始まる。

先攻はカミューラだ。
よって、彼女がまずデッキからドローする。

「私のターン、ドロー！
手札から魔法（マジック）カード《手札抹殺》を発動！」

「なっ……！？」

「これにより、互いに手札を全て墓地に送り、
デッキからその枚数分ドローする」

どういうことだ、と思考する。

カミューラの墓地に送られたのは、全てモンスターカードだ。
《ブラッド・サッカー》、《ヴァンパイア・ベビー》、
《ノーブル・ド・ノワール》、《カース・オブ・ヴァンパイア》、
《ピラミッド・タートル》の5枚。

対し、十代の墓地に送られたのは、まだらな5枚。
《E・HERO（エレメンタルヒーロー） バーストレディ》、《融合》、《ヒーロー逆襲》、
《E・HERO（エレメンタルヒーロー） ネクロダークマン》、《ヒーロー・キッズ》。

――まさか、と、十代はその理由に行き当たった。

「手札から、魔法（マジック）カード、《生者の書－禁断の呪術－》を発動！
私の墓地のアンデット族モンスターを蘇生し、
相手の墓地のモンスターを1枚除外する！
《カース・オブ・ヴァンパイア》を蘇生！」

【《カース・オブ・ヴァンパイア》 攻 2000 ／ 守 800】

「そしてアナタの墓地のネクロダークマンを除外するわ」

「なっ……ネクロダークマン！」

墓地に存在するときにのみ効果を発揮するモンスター。
それを理解していたのだろう。

――が。

（俺の手を知ってる！？）

十代の用いるモンスターの中で、最も用いられているのは、
ネクロダークマンを融合素材として扱い、
その後にエッジマンを生贄無しで召喚する、といった方法だ。

反面、生贄召喚したことはあまりなく、
結果的には融合素材として使われることの方が多い。

ともかく、カミューラは十代の手を一つ潰した、ということになるのだ。

また、一手目から強力なモンスターが現れたのだ。
考えるまでもなく、状況は不利だろう。

「《再生ミイラ》を、攻撃表示で通常召喚」

【《再生ミイラ》　攻　１８００　／　守　１５００】

「あはははは！　圧倒的ねぇ！
カードをセットし、ターンエンドよ！」

「俺のターン！　ドロー！」

だが、十代は戦意を失わない。
怒りが、それを繋ぎとめているからか。

「魔法（マジック）カード、《戦士の生還》を発動！
墓地のバーストレディを手札に戻すぜ。
更に、《融合》を発動！」

「馬鹿な！　融合のカードは墓地へ……！？」

――引いたのでしょうね。

明日香は思考する。

カミューラの手札抹殺によって、
十代の手札の《融合》カードは墓地へ送られた。

だが、その直後に5枚のドローを行う。
この時にドローしたのだろう。
ほぼ、間違いなく。

「手札のバーストレディと、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　フェザーマン》を融合！
行くぜ、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ウィングマン》！！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ウィングマン》　攻　２１００／守　１２００】

天空より降り立つＨＥＲＯ。

対峙するは、吸血鬼（ヴァンパイア）とミイラ。

「おあつらえ向きの状況ね……」

まさに、ヒーローらしい状況。

冗談めかして言いつつも、その言葉に嘘は無い。
状況次第では、次の十代のターンでカミューラのライフポイントをゼロにできるのだから。

「よし……！　フレイム・ウイングマンで再生ミイラを攻撃！
フレイム・シュートォ！！」

「チッ……やらせないよ！
伏せカード、《地縛霊の誘い》！
相手の攻撃宣言時、その攻撃対象を私の自由に指定できる！
フレイム・ウイングマンの攻撃対象を、カース・オブ・ヴァンパイアに変更！」

「何っ！？」

地面から突き出る腕が、フレイム・ウイングマンの全身を縛り、
その動きを強制的に変更させる。

矛先は――カース・オブ・ヴァンパイア。

「くあああっ！」

カース・オブ・ヴァンパイアを焼き尽くした火炎が、
カミューラの肉体までもを覆っていく。

フレイム・ウイングマンの効果――相手モンスターを戦闘で破壊し、
墓地に送ったとき、その攻撃力分のダメージを与える効果だ。

「ふんっ……！！
カース・オブ・ヴァンパイアが戦闘で破壊されたこのとき、
私は５００のライフを支払う！　これにより、
次のスタンバイフェイズ、攻撃力を５００上昇させ、
カース・オブ・ヴァンパイアが復活する！」

合計、２６００ものダメージを受けたというのに、
カミューラは未だ、平然としている。

不気味だ、と十代は考えた。

同じ状況、同じ立場にあるというのに、
カミューラはこの状況を「楽しんで」いる。

だが、その一方で十代は、楽しむことができない。
このように陰鬱な状況では、それも無理はないだろうか。

それ以上に、同じ立場ということは、
つまり、カミューラもダメージを――。
正確には、実際のダメージを受けているはずなのだ。

それを表出させない、その精神力が――何よりも、不気味だ。

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー！
くく……このスタンバイフェイズ、カース・オブ・ヴァンパイアは復活する！」

【《カース・オブ・ヴァンパイア》　攻　２０００　／　守　８００】

「攻撃力は５００上昇し、２５００……。
あはははは っ！　更に私は、再生ミイラを生贄に、
《ヴァンパイア・ロード》を召喚！」

【《ヴァンパイア・ロード》　攻　２０００　／　守　１５００】

「さあバトルよ！　カース・オブ・ヴァンパイアで、フレイム・ウイングマンを攻撃！　シャープスネイルブレード！」

鋭利な爪が、フレイム・ウイングマンの肉体を切り裂く。
たった４００の差とはいえ、その差は存外に大きい。

切り裂かれるような痛みが、十代を襲った。

「くっ……！　伏せ（リバース）カード、オープン！
《ヒーロー・シグナル》！　モンスターが戦闘で破壊されたとき、デッキからＥ・ＨＥＲＯを特殊召喚する！
来い――《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フォレストマン》！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フォレストマン》　攻　１０００　／　守　２０００】

「フォレストマン――！？
十代、それってまさか！？」

十代は元々、フォレストマンはデッキには投入していなかった。
であれば、その周囲の人間――特に、
ＨＥＲＯデッキを用いる人間のものだろうということは想像できる。
そしてそれは、間違いなく――。

「どっちにしても、これでお前の攻撃は封じたぜ！」

「はん、おめでたい子……。
いいわ。カードをセットしてターンエンドよ」

「よし、俺のターンだ！　ドロー！
そしてこのスタバイフェイズ、フォレストマンの効果により、
デッキか墓地から《融合》のカードを手札に加えることができる！
俺は墓地から《融合》を手札に加えるぜ！」

「また融合――！！」

だが、とカミューラは心の奥底でほくそ笑む。

状況が状況だ。
奥の手をいつまでも隠していて勝てる相手ではないのは承知の上。

であれば、今すぐにでも使うべき――！

「俺は《融合》を発動――」

「チェーンをさせてもらうわ！
伏せ（リバース）カード、《融合禁止エリア》を発動！
これが存在するとき、融合召喚は行えない！
よってその《融合》は、不発よ！」

「なっ――！！」

「十代へのメタカード！？」

予想――していなかったわけではない。

以前も、カミューラは相手のデッキを盗み見て、
その対策を立てていた。今回のこれは、
その矛先が十代に向いただけ――だが。

「露骨すぎるわ……！！」

「はん、何と言われようと、勝てばいいのよ。

そんなことも分からないなんて、これだから人間は……」

この吸血鬼に矜持を説いても仕方がない。
そう断じ、明日香はデュエルの動向に目を向ける。

……どうするのだろう、と。

「くっ……カードを1枚セットし、ターンエンド、だ」

「ざまぁないねえ！　私のターン、ドロー！
くくく……私はヴァンパイア・ロードを除外する！
そして現れよ、吸血鬼（ヴァンパイア）が真祖にして、最強の不死者（イモータル）！
出でよ、《ヴァンパイアジェネシス》！！」

【《ヴァンパイアジェネシス》　攻　３０００／守　２１００】

貴族然とした男を飲み込み、
現れるのは、筋肉で身を固めたかのような、
巨大な――怪物。

ヴァンパイアジェネシス。

「創世」「始祖」の名を持つ、カミューラの切り札だ。

「さあ、まずはその壁モンスターにご退場願うとするかねぇ。
カース・オブ・ヴァンパイアで、フォレストマンを攻撃！
シャープスネイルブレード！」

「くっそぉ……！！」

「あはははは！！　それじゃあ、まずは苦痛を味わうがいい！
ヴァンパイアジェネシスで直接攻撃（ダイレクトアタック）！！
ヘルビシャス・ブラッァ――ド！！」

「ぐあああああああああああっ！！」

強烈な痛みと、凶悪なまでの衝撃が十代を襲う。

ただのパンチ。

されど、その攻撃力は３０００の大台に乗る。

それだけのものをまともに喰らえば――恐らくは、
叫び、怖れ、恐懼し、いずれは戦意を失う。

そうでなくとも、精神的に脆ければ、この一撃で気絶していることだろう。

――だが。

「くっ……！！」

耐えきった。

明日香は安堵に胸を撫で下ろす。

だが――安心はできない。

互いのライフ差は１３００。

十代が６００。カミューラが１９００だ。

場合によっては一撃で勝負が決するほどの差。

十代は思考する。あの場であのカードを使わずに良かったのか、と。

いや、良いはずだ。十代の考察が間違っていなければ、

カミューラの場の唯一の伏せ（リバース）カードは――。

「これでターンエンドよ」

「俺のターン――ドロー！！」

引いた。

少なくとも、この状況において最適のカードを。

「俺は魔法（マジック）カード、《融合回収（フュージョン・リカバリー）》を発動！

墓地のバーストレディと、融合のカードを手札に加える。

そして手札から、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン》を召喚！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン》　攻　１６００／守　１４００】

「今更そんな弱小モンスターで……」

「それはどうかな？

俺は手札から、《Ｒ－ライトジャスティス》を発動！

俺の場の『Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）』の数だけ、

場の魔法（マジック）・罠（トラップ）を破壊できる！」

「なっ……《融合禁止エリア》を！？」

「そういうことだぜ！

これで融合が可能に――」

「許すと思わないことね！
カウンター罠（トラップ）、《魔宮の賄賂》！
この効果により、魔法（マジック）・罠（トラップ）の発動を無効にし――！！」

「それはこっちの台詞だぜ！
伏せ（リバース）カード、オープン！　《神の宣告》！
ライフポイントを半分支払い、魔法（マジック）・罠（トラップ）の発動、
モンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚のいずれかを無効にし、
破壊する！」

「なっ……！？」

目論見は当たっていた。

カミューラのことだ。用意周到に策を仕掛けていたのだろう。
《融合禁止エリア》の破壊を防ぐカードを何枚か投入しているはずだ。

であれば、まず間違いなく魔法（マジック）・罠（トラップ）の効果を無効にするカード。

それも――カウンター罠（トラップ）の可能性が高い。

であれば、《神の宣告》を温存する意味もある。
ダメージを受けてでも、確実にカウンターすべきものにカウンターする、
という、明確な目的があれば。

「行くぜ、カミューラ！
俺は手札の《融合》を発動！
手札の炎属性のバーストレディと、Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）であるスパークマンを融合！」

「属性融合……！？
ということは十代、あなたは――！！」

「現れろ、炎のＨＥＲＯ！
《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ノヴァマスター》！！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ノヴァマスター》　攻　２６００／守　２１００】

燃え盛る火炎が周囲を包み込み、
その中央から、火炎を模したＨＥＲＯが現れる。

「バトルだ！　ノヴァマスターで、カース・オブ・ヴァンパイアに攻撃！」

「くっ……！！
だけど、カース・オブ・ヴァンパイアは、

５００ライフポイントを払えば次のスタンバイフェイズに復活する！
結局は意味がない！　アナタの負けよ！」

事実、十代は相当な苦境に置かれている。

ノヴァマスターで、カース・オブ・ヴァンパイアに勝つことはできる。
だが、ヴァンパイアジェネシスに勝つことはできない。

絶対的なまでの能力の差があるのだ。

ヴァンパイアジェネシスの攻撃が通ればそれだけでも終わる。

――どうするというの、手札も無いこの状況で。

明日香は考える。

だが、それほどまでに良い考えは――。

「ノヴァマスターが戦闘でモンスターを破壊したとき、
デッキからカードを1枚ドローできるぜ」

そう告げ、十代はデッキからカードを引く。
そのドローカードは、果たして何なのか。

「……俺はカードをセットし、ターンエンドだ」

「ふんっ、どっちにしても、これで終わりよ！
私のターン、ドロー！このスタンバイフェイズに、
カース・オブ・ヴァンパイアを攻撃力を上げて蘇生！」

【《カース・オブ・ヴァンパイア》攻２０００／守８００】

「……バトルよ！　ヴァンパイアジェネシスでノヴァマスターに攻撃！
　ヘルビシャス・ブラッァ――ド！！」

ノヴァマスターとヴァンパイアジェネシスの攻撃力の差は４００。
しかし、十代の残りライフは３００。

この攻撃を受けた時点で、十代の敗北は決定する。

十代は歯を食いしばる。

――この程度で、負けてたまるか！

そう自らを鼓舞し、奮い立たせる。

「伏せ（リバース）カードオープン！　《ホーリージャベリン》！
相手の攻撃宣言時、そのモンスターの攻撃力分、ライフを回復するぜ！」

ヴァンパイア・ジェネシスの攻撃の直前、
十代ライフが３０００回復していく。

これで残るは３３００。
この攻撃だけは――間違いなく、防ぐことができる。

「ぐっ……！」

ヴァンパイア・ジェネシスの攻撃の余波が十代を襲う。
これにより、ライフポイントは残り２９００となる。

「しぶとい……っ！
チッ……まあいいわ。カース・オブ・ヴァンパイアで直接攻撃（ダイレクトアタック）！
シャープスネイルブレード！」

「ぐあああああっ！！」

身を切り裂くような痛みが十代を襲う。
いや、実際に切り裂かれているのと同様なのだ。
――痛くないはずがない。

「ふん……これでターンエンドよ」

「くっ……俺のターン！　ドロー！
俺の手札は、この1枚のみ！　よって、
《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　バブルマン》を守備表示で特殊召喚するぜ！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　バブルマン》　攻　８００　／　守　１２００】

「俺の場と手札に他のカードは存在しない！
よって、バブルマンの効果で2枚ドローだ！」

十代の手に加わる2枚のカード。
それらを確認し、十代は軽く頷く。

「更に手札から、《貪欲な壺》を発動！」

「あれは……まさか、また御堂君のカード！？」

十代が《貪欲な壺》を使う光景を、明日香は見たことが無い。
少なくとも、こういった場合においては、
ほぼ九割の確率で《ホープ・オブ・フィフス》を引くのが十代だ。
同じ3枚ドローであれば、あちらの方がより速く引くことができる。

「俺は墓地の《ヒーロー・キッズ》、フォレストマン、フェザーマン、
ノヴァマスター、バーストレディの5枚をデッキに戻し、
2枚のカードをドローするぜ！」

成程、と明日香は頷く。

考えてもみれば、あのカードはE・HERO（エレメンタルヒーロー）限定のカード。
同じバブルマンから引くのであれば、《貪欲な壺》の方が、
カードの名前を指定しないだけ良い――ということだろう。

「魔法（マジック）カード、《融合回収（フュージョン・リカバリー）》を発動！」

「これも2枚目!?」

E・HEROの融合は、同じ2体の融合でも様々なパターンが存在する。

ただし、十代の本来のデッキであれば、それはある意味絵空事だった。

――が、御堂のカードを用いることで、その言葉は真実となる。

属性を参照するHEROの存在により、
融合素材と共に《融合》を回収する《融合回収（フュージョン・リカバリー）》は、
より凶悪な効果を発揮することとなる。

例えば、まず水属性のHERO、オーシャンとフォレストマンを用い、
《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ガイア》を融合召喚したとする。

そして手札にはまだ1枚のＨＥＲＯが存在する。
ここで《融合回収（フュージョン・リカバリー）》を用いてオーシャンを回収すれば、
今度は《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　アブソルートＺｅｒｏ》が召喚できるのだ。
御堂のカードを組み込んだ今、その手を使わない理由があるだろうか？
いや――あろうはずもない。
「墓地の《融合》、そしてスパークマンを俺の手札に加える！
そして回収した《融合》を発動！
場のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）であるバブルマンと、
手札の光属性のスパークマンを融合！
現れろ、光のＨＥＲＯ！　《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　Ｔｈｅ　シャイニング》！！！」
【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　Ｔｈｅ　シャイニング》　攻　２６００／守　２１００】
「陽光」の名を冠する、光り輝くＨＥＲＯ。
その姿があらわになったそのとき、
旭光とも言うべき光が、周囲を照らし出す。

「は……はん！　喜び勇んで召喚した割には、大したことないじゃないか！
所詮は攻撃力２６００……！！」

「確かに今は２６００しかない。だけど、
シャイニングの攻撃力は、除外されたＥ・ＨＥＲＯの数だけ上昇する！
その上昇幅はたった３００だけど……これを使わせてもらうぜ！
魔法（マジック）カード、《魂の解放》！！
互いの墓地のカードを、合計５枚まで除外できる！
俺が選択するのは、スパークマン、フレイム・ウイングマン、
そしてお前の墓地のブラッド・サッカー、ノーブル・ド・ノワール、
ピラミッド・タートルの合計５枚だ！」

「馬鹿な！　つまり、それは――」

除外されたカードは合計３枚。

序盤にカミューラが除外したネクロダークマン、
そして、今この場で十代が除外した、
フレイム・ウイングマン、スパークマンだ。

故に、その上昇幅は９００。

――攻撃力、３５００。

「バトル！　シャイニングでヴァンパイアジェネシスを攻撃！
オプティカル・ストーム！！」

シャイニングの背面の光輪が輝きを増す。

そして、その輝きが限界に達した、その瞬間、
無数の光の槍がヴァンパイア・ジェネシスの肉体を貫いた。

「くあああああっ！！」

「カードをセットし、ターンエンドだ！」

「この……ガキがァァァあああァァァ！！」

狂ったような叫びと共に、カミューラの唇が裂け、
その本性を表面に顕(あらわ)す。

化け物――。

ごく自然に、明日香の胸に溢れる感情。

恐ろしい。あんなモノがこの世に存在していたなんて。

カミューラの目が明日香へと向いた。

まるで――獲物を見定めるかのように。

「くっくっく……だったら、次の生贄はそこの子にしようかしらねぇ……！！

手札から魔法（マジック）カード、《幻魔の扉》、発動！！」

カミューラがデュエルディスクにカードを差し込んだその瞬間、

彼女の背後に巨大な扉が現れる。

暗い――黒い。

まるで、暗鬱とした感情の全てをしまい込んだかのような、

そんな印象さえ受ける、一枚の扉。

「相手の場のモンスターを全て破壊し、

その後、召喚条件を無視して、墓地のカード1枚を、

私の場に特殊召喚する……あはははは！！

だったら、シャイニングを特殊召喚させてもらおうか！！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） The シャイニング》 攻 2600 ／守 2100】

「くっ……！？」

「さぁて……次は魂を生贄に捧げないとねぇ！！
そこのお嬢ちゃんの魂をいただく……！？」

伸ばされたカミューラの腕。
ひいては、それに続くようにして、
扉から吐き出された瘴気が、明日香の前に立つ十代の目前で留まる。

「な……何が……！？
――まさか！？」

カミューラは十代の胸元に視線を向ける。

そこにぶらさがっているのは、七星門の鍵。

そして――完成された、一つのペンダント。

闇のアイテムの一つだ。

吹雪の言う「保険」とは、すなわちこういうことなのだろう。
それを感じ取った十代は、軽く拳を握った。

「チッ……！！　だが、勝てば問題は無い！
私は私自身の魂を！　ヴァンパイア一族の魂を生贄に捧げる！！」

「ヴァンパイア……一族？」

言葉の一節ではあるが、
明日香はどうしてか、その部分がいやに気になった。

カミューラは今一人なのではないか。

だというのに、一族。

矛盾していないだろうか、と。

「私こそが最後のヴァンパイア――。
セブンスターズなんて、七星門の鍵なんて、

正直どうでもいいのよ！　我が一族すら復興できればね！」

「でも、そのやり方は間違ってる！」

「くっ……貴様に何がわかるというのよ、この若造が！
自分だけが現代に遺(のこ)されて、それでもなお生きて……！！」

その結果が、手段を択ばないデュエルだとでも言うのか。

十代は目を伏せる。

これ以上何を言っても、恐らくは無駄だ、と。

御堂であれば、あるいは反論できるのかもしれない。

だが、自分には――。

十代は歯噛みする。

何故、こんなにも冷たい――こんなにも楽しくない、
陰鬱なデュエルが続いているのだろう、と。

結局、カミューラにも理由があっただけなのだ。

だけど、その方針は間違っていた。

なのに、それを指摘するだけの語彙は、思考能力は十代は持ちえていない。

悲しかった。

悔しかった。

あらゆる物事に翻弄されなくてはならないカミューラが、異様に悲しく見えてきた。

「貴様などに分かるはずもない……！！

さあ、これで終わりよ！　貴様自身のモンスターで死になさい！

Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　Ｔｈｅ　シャイニングで直接攻撃（ダイレクトアタック）！！

オプティカル・ストォォォ――――ム！！」

攻撃力上昇効果は、カミューラ自身は使うことができない。

だが、その攻撃力は致命傷となりうるほどのものだ。

一撃で、十代の残りのライフポイントを奪い尽くせる。

だが、その目は未だに光を湛（たた）える。

負けることが、できないから。

「伏せ（リバース）カード、オープン！
《クリボーを呼ぶ笛》！　デッキから《ハネクリボー》を、
守備表示で特殊召喚する！」

【《ハネクリボー》　攻　３００　／　守　２００】

「キィィィ！！　このまま攻撃を続行して……！！」

「ああ、その攻撃でハネクリボーは破壊される……！
だけど、ハネクリボーが破壊されたターン、
俺は戦闘ダメージを一切受け付けない！」

またも繋いだ。

これが、遊城十代の、凶悪なまでの引きの強さか。

改めて、明日香はその事実を認識した。
こんな男を敵に回したくはないのは当然だ。
少なくとも、ここまで徹底的にやられれば、誰だってそう思う。

「アアアアッ！！　このガキめ！
ターンエンドよ！」

吸い出されるようにして、カミューラのライフポイントが失われていく。

１４００あったライフポイントは、その１０分の１――１４０にまで減少する。

本来なら、ここで勝負を決めるはずだったのだ。
それが邪魔されたからだろう。
狂気すらも感じるような表情で、呻く。

「俺のターン――ドロー！！」

一瞬、明日香の目には、十代のドローの軌跡が輝いて見えた。

運命（デスティニー）のドロー、と。

誰かがそのように表現していたことを思い出す。

「これで最後だ、カミューラ！
俺は魔法（マジック）カード、《平行世界融合（パラレル・ワールド・フュージョン）》を発動！
除外されたモンスターをデッキに戻し、Ｅ・ＨＥＲＯを融合召喚する！
俺はフレイム・ウイングマンとスパークマンを融合！
現れろ――《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フレア・ウィングマン》！！！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フレア・ウィングマン》　攻２５００／守２１００】

「シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力は、
墓地にあるＥ・ＨＥＲＯの数×３００ポイント上昇する！
よって現在の攻撃力は２８００！！」

いずれにも、その攻撃力は勝る。
シャイニングを砕いても、カース・オブ・ヴァンパイアを叩いても、
その結果は変わらない。

――だが。

「そいつ（シャイニング）は和真のカードなんだ！
俺にだって、お前にだって使いこなせない！
だから――返してもらうぜ！！」

十代の感情に呼応するように、
シャイニング・フレア・ウィングマンの輝きが増し、
周囲を徐々に照らしていく。

その輝きが極限に達した瞬間、十代は宣言する。

「シャイニング・フレア・ウィングマンで、
Ｔｈｅ　シャイニングを攻撃！
シャイニング・シュートォォォォ！！」

遥か上空へと飛び立ち、その輝きを爆発させるシャイニング・フレア・ウィングマン。

そして、その輝きが地上へと舞い降りた、その瞬間。

――巨大な爆発が、周囲を襲った。

「十代っ……！！」

粉塵が周囲を包む。

勝負には、間違いなく十代が勝利した。

だが、無事なのかどうかが分からない。

「十代！！」

叫ぶようにして呼びかける。

……と。

「よっしゃあああああ！！」

粉塵が消え去った、その瞬間。
十代は右手を天高く掲げ、自らの勝利を叫んだ。

＊　＊　＊

カミューラとの戦いが終わった、その夜。
亮もクロノスも帰還し、校長室は喜びと安堵に満ちていた。
これで2人の刺客を退けたのだ。
それも、その二つともに、遊城十代が関わって――だ。
相手も迂闊に手を出せないだろう。
そう判断しての、安堵と安穏。
――だが。
「……御堂はどうした？」

疑問提起。

――それは、ある意味で当然の疑問だった。

カミューラに敗れ、クロノスたちと同様に人形にされたはずの御堂は、

未だに帰還を果たさず、行方不明のまま。

万丈目のその一言は、この緩んだ空気を締め直すのに効果的ではあった。

「そうなのーネ。シニョール御堂がまだ帰ってきてないのーネ……」

教育者として一皮剥ける前の彼であれば、

あるいは憎まれ口を叩いていたかもしれない。

だが、クロノスは単純に、一生徒を心配していた。

それが分かるからこそ、周囲に不安が伝播する。

――どうすればいいんだろう？

それが、この場にいる人間の総意だった。

……そして、結局。

――その後、三日、四日と経過しても、御堂和真の痕跡は、アカデミアの島内には発見できない、ということだけが、彼らの不安を煽ることとなった。

21束目：光炎（後書き）

ということで枠です。

私の小説のカミューラは悪役全開でした。
何？　何で最期を記述してないのかだって？

いやぶっちゃけ面倒臭（

はい、デッキ総評です。

十代のデッキは御堂のものと合わせた、言うなれば本来の【E・HERO】とでも言えばいいのでしょうか。
より現実に近くなったというか……ともあれ、しばらくは漫画のものも混ぜて進行していく予定ですので、こういった形式を取りました。

カミューラのデッキはヴァンパイアデッキ……というか、作中で使ってる「っぽい」デッキをコンセプトにさせていただきました。
ああやって内容盗み見してるなら、こんな露骨なの入れてもいいんじゃね？
ってことで、あのカードも入ってました。

ちなみに、アンデット族に関しては……というか、他のカードもですが、
私自身色々と制約を設けています。
例えば、作中で使うことになるだろうカードは、可能な限り使わない。
これは、簡単に言えば、御堂と十代のＨＥＲＯデッキが被らないようにしているのと似たようなものです。
なので、種類の少なめなアンデット族を使うに際しては、特に細心の注意を払いました。

……だからああいうマイナーカードが出てきたんですけどね。

ともあれ、今回は脇役不在の１話でした。

次回も継続してセブンスターズ編です。

どうか気長にお待ちください。

というか個人的に今回説明不足な点が多すぎて少し「やっちまった

かなー」って感覚です。

とはいえ、それを説明するともっと長くなるし、
何より今回はそれほど長くしないで早めに次の話に行きたいというか。
いや、書きたかったのは本音ですが……うん、ちょっと失敗ですね。
今回。
実は計算ミス……というか飛ばしてる部分があって、
その修正に手間取ってたんですよね……；
もしかすると手直しが行き届いてないかもしれない部分もあるかと思いますので、
可能でしたらご一報ください。

場所は見ればわかるかと思います。
明らかに場違いなカードを十代が使用しておりますので。
……あれが別のカードだと、こその先の展開の整合性が取れないんですよね。
かと言って《ヒーロ・スピリッツ》とかだと負けてますし……。

ああっ、許してください時間が無いんです殴らないで蹴らないでカードを投げてこないでリアルファイトはらめえええだってラノベの新人賞に応募する方の小説がアッー

枠は作り直しておりますので少々お待ちください。
具体的には三日～五日ほどお待ちください。

22束目：正義

御堂和真が行方不明となって、二週間が経過した。

時間に換算して、３４８時間と４８分。

仮に、単に失踪しただけであれば、既に死亡していてもおかしくはない。

その間に受けた襲撃は3度。

いずれもセブンスターズの刺客によるものだ。

女系戦士（アマゾネス）のタニヤ。

黒蠍盗賊団の首領（ドン）・ザルーグ。

「無敗の王」、アビドス三世。

タニヤは三沢が降した。

首領（ドン）・ザルーグは万丈目が撃破、カードを回収した。

アビドス三世の伝説は虚構。故に、十代に敗北した。
そのいずれもが姿を現さず、現在に至る。

残るセブンスターズは2人。

「『どこに』行ったのか、と言うよりは、
むしろ――『何故』いなくなったのか、という感覚だな」

ふとした拍子に、三沢が呟く。

部屋にいる人間――翔と十代、隼人がそれに耳を傾けた。

ここまで発見できないとなると、「場所」という問題ではなく、
むしろその「原因」こそが問題であるのではないかと考えられる。
であれば、まずはその原因を特定するのが先決とも考えられるが……。

「最初は、カミューラに負けたんだよな……」

「ああ、だが、そこからだ。
……何故、カミューラを倒しても、御堂は戻ってこないのか。
その原因は何だ？」

「流石に、顔を合わせづらい……ってわけじゃないッスよね？」

「それなら、元に戻ったことだけでも報告するんじゃないのか？
イエロー寮にも戻ってくるだろうし……」

「戻ってきたらきたで何気なく調理場にでも立ってそうだな」

普段の御堂の姿を見ていると、
どうしてもそのように考えてしまう４人だった。

はぁ、と溜息を吐く。

無駄なことを話していても、
御堂が戻ってこないことに変わりはないのだ。

「仕方がない。散々探しはしたが……もう一度、
ちゃんと歩いて探してみよう」

「そうだな……島中探してみて、
それでもいないなんてことになったらどうしようもないけど、
まだまだ探してない場所はいくらでもあるんだ。

行ってみようぜ」

そう言い、十代は立ち上がって他の3人を鼓舞する。

動いてみなければ始まらない。
それは間違いなく物事の真理であり、
状況を打開するための最善の策だ。

かくして、彼らは各々の思う場所へと、御堂を捜しに向かうこととなった。

＊　＊　＊

失踪した人間を捜し当てるのは難しい。

まして、二週間も経過している現在、
目当ての人間を見つけることは、最早至難と言っても過言ではない。

本来であれば、行方を眩ましたような人間を捜すのは、
その大抵が警察、あるいは探偵の仕事だ。

まして、全力を挙げて捜しても見つからないのだ。
一学生に捜し当てられるとは、到底考えられない。

そう考えつつも、三沢は御堂の姿を捜していた。

友人のため。自分のため。御堂のため。

大義名分は思い浮かぶが、どれもしっくりとは来ない。

結局のところ、それら全てを当て嵌めたものが、本来的な理由なのだろう。

三沢は、破天荒な者が多いアカデミア生徒の中でも、特別に落ち着きを持った人間であると自負している。

であるからこそ、事の矢面に立つことも多いし、リーダーシップを取ることも多い。

今回の件に関しても、三沢は、積極的に事の解決に当たろうとした。

だが――結果は出ない。

ダメだ、と考えつつ、これまでの行動を振り返る。

果たして、何が悪かったのだろうか。

捜す対象。これは別に問題ない。

捜す位置。あるいは、問題となるかもしれない。

捜す理由。友人だから。それに他ならない。

であれば、場所を変えて再度探すか――と、そう考えたとき、背後の藪（やぶ）ががさりと音を立てた。

「――ん？」

それに反応し、背後を振り向く。

そこにいたのは、人間と思しき「何か」だった。

そもそも人間であるのかどうかすらも定かではない。

いや、そもそも特定はできない。

全身を黒い装束で覆い、髪の一束すらもそこからは見えてこない。

頭をすっぽりと覆うフードから覗くのは、

左目だけが露出した格好になっている奇妙な仮面。
そこから見える真紅の瞳が、三沢の目を射抜いた。

「誰だ、お前は」

男――と表現できるのだろうか。
影はその問いに答えずに、三沢のいる方へと近づいていく。

その姿が近づくとともに、三沢の中に一筋の緊張が走る。
――と同時に、安堵も心に芽生えた。

男の、血を凝り固めたかのような真紅の瞳は、
少なくとも彼の知り合いには誰一人として存在しない。

御堂だってそうだ。彼の瞳は一般的な黒であり、
眼前の影の瞳とは、欠片も一致しない。

裏切り、という線が消えたことに対する安堵。
それは、少なくともこの場では不必要な感情だった。

軽く首を振って切り捨てる。

――さて、この影は何者だ？

「誰だと聞いている！」

「……誰でもいいだろう、三沢大地」

声が漏れ出た瞬間、三沢は言葉を失った。

何故、この男が自分の名を知っているのか――それもあるが、
その声からは、自分に対する怒り――いや、憎しみとも取れるような、
暗い感情が滲み出ていたからだ。

「ただ、それでも何か呼称すべきと言うなら、
セブンスターズが一人、ファントムとでも呼んでもらおう」

「亡霊（ファントム）……か。セブンスターズということは、
俺の持つ鍵を奪いに来たということか？」

「それ以外の目的が必要か？
まあ、実際あるのだがな。
それにしても、デュエルが終わってからで十分だ」

三沢は睨み付けるようにして、ファントムを見据える。

この男が何者かは知らないにせよ、今はただ戦うのみ。

そう断じ、デュエルディスクを展開する。

同様に、ファントムもデュエルディスクを展開。

直後に、二人は宣言を行う。

「「――決闘（デュエル）！！」」

今ここに、亡霊と天才の決闘（デュエル）の幕が切って落とされた。

先攻が三沢だ。

よし、と頷き、カードを引く。

「俺のターン、ドロー！

俺は、《ピラミッド・タートル》を守備表示で召喚する」

【《ピラミッド・タートル》　攻　１２００　／　守　１４００

】

「カードを2枚セットし、ターンを終了だ」

「私のターン、ドロー。
私は手札から、《A・O・J（アーリー・オブジャスティス）ブラインド・サッカー》を召喚する」

【《A・O・J（アーリー・オブジャスティス）ブラインド・サッカー》　攻　1600／守　1200】

ふと、ファントムの言葉が鼻についたのか、
いつになく乱暴な語調で、三沢は呼びかける。

「……正義（Justice）だと？
セブンスターズが正義を騙（かた）るのか」

「私は正義を騙ったような覚えはない。
偶然にもモンスターの名前がそうだっただけだ。
違うか？」

言い返すことはできない。

鼻で笑い、ファントムはターンを続ける。

「私はブラインド・サッカーでピラミッド・タートルを攻撃する」

「だが、ピラミッド・タートルが戦闘で破壊されたとき、デッキから守備力２０００以下のアンデット族モンスターを特殊召喚できる！
俺は、《馬頭鬼（めずき）》を特殊召喚する！」

【《馬頭鬼（めずき）》　攻　１７００　／　守　８００】

「……自身を除外することで、
アンデット族を特殊召喚するモンスターか。
厄介だな」

「お前が何度モンスターを倒そうとも、
俺のモンスターたちは何度だって甦る。
そうして、気づいた頃には……」

「私は力尽きている、ということか」

くっく、とファントムは喉を鳴らして笑う、

「流石だよ天才（ジーニアス）。貴様の腕は称賛に値する」

「敵に褒められても嬉しくはないな」

「おや、そうかい？
まあいい。ならば私はカードを2枚伏せ、ターンを終了する」

「ならば俺のターンだ。ドロー！
俺は手札から、《魂を削る死霊》を攻撃表示で召喚！」

【《魂を削る死霊》　攻　３００　／　守　２００】

三沢の持つ、このデッキ――地属性のデッキのテーマは、
言うなれば「蘇生」と「不死」。

その両極のコンセプトがある以上、
三沢の場にモンスターが尽きることは、そうそうありえない。

「そして死者たちは、お前の手を一つずつ奪っていく。
まずは馬頭鬼でブラインド・サッカーを攻撃する！」

「……」

馬面の鬼に破壊されていく機械。
これでファントムのライフポイントは１００失われる――が、
彼は何一つ慌てるような素振りを見せない。

「更に、魂を削る死霊で直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

鎌を携えた死霊が、黒衣の男の腕を切り裂く。
――と同時に、彼の手から一枚のカードが零れ落ちた。

「ダメージを与えると同時、手札を捨て去せる効果か。
良い効果だな」

三沢の目に映るカードは、《Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オヴ・ジャスティス）　ルドラ》。
この場においてはあまり意味のないカードのようにも感じられる。

いや、実際にその通りなのだろう。
ファントムからは焦りは感じられない。
むしろ、墓地が肥えて良い――という余裕すら滲（にじ）む。

なめているのか、と三沢は憤る。

「さあ、貴様のターンだろう？
攻撃は終了したはずだ。まだ何か続けるのか？」

「いや……俺はもう1枚カードをセットして、ターンを終了する」

「そうか。では私のターンだ。ドロー。
私は手札から、《トレード・イン》を発動。
手札のレベル8、《A・O・J（アーリー・オブ・ジャスティス）サンダー・アーマー》を捨て、
カードを2枚ドローする」

またも墓地へ送る。
手札交換用のカードを消費する――ということはつまり、
手札が悪い、あるいは手札を交換する、何かしらの意味があるということだ。

「更にもう一枚、《トレード・イン》を発動。
手札のレベル8、《A・O・J（アーリー・オブ・ジャスティス）コズミック・クローザー》を捨て、
カードを2枚ドロー」

まただ。

ファントムにやる気はあるのだろうか？
先程からの言動を鑑（かんが）みるに、どうしてもそのように考えてしまう。
――こいつの目的は何だ？

「《闇の誘惑》を発動。デッキからカードを2枚ドローし、手札から闇属性モンスターを除外する。
私は《Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブジャスティス）　サイクルリーダー》を除外する。
そして手札から、《Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブジャスティス）　コアデストロイ》を召喚」

【《Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブジャスティス）　コアデストロイ》　攻　１２００／守　２００】

「バトル。コアデストロイで魂を削る死霊を攻撃する」

「くっ……ダメージ覚悟で狙いに来たか！？
だが、伏せカード、オープン！
《立ちはだかる強敵（リバース）》！　これで攻撃対象を馬頭鬼に移す！」

少なくとも、これでファントムの目論見は外れたはずだ。
何故なら、彼の目的は、恐らくは三沢にダメージを与えること。
であるからこそ、魂を削る死霊を狙ったはずなのだ。

「《ＤＮＡ移植手術》をチェーン発動。
場のモンスターを全て光属性に変化させる」

「なっ……！！」

「コアデストロイの効果は、光属性のモンスターと戦闘するとき、
戦闘・ダメージ計算を介さず、問答無用で相手を破壊する効果だ。
当然、その結果は知っているだろう？」

「馬頭鬼は、破壊される……！？」

それだけではない。
ここから先、コアデストロイと戦闘を行う全てのモンスターが、
ことごとく破壊されていくのだ。

最悪のコンボだ。

三沢は歯噛みする。
この場で《サイクロン》などをドローできれば、戦局は変わる。
だが、それができないとなると、また別の方法を考えるしかない。

あるいは、モンスターをまず破壊・処理する方法も考えられる。

どちらにせよ、今の状況では難しいことに変わりは無い。

どうにかしなければ。
焦りが三沢の心をむしばんでゆく。

「カードを1枚伏せ、ターンを終了する」

「お、俺のターン、ドロー！
手札から、《おろかな埋葬》を発動！
デッキから、《怨念の魂　業火》を墓地に送る。
そして手札から、《酒呑童子》を守備表示で召喚！」

【《酒呑童子》　攻　１５００　／　守　８００】

「酒呑童子の効果を発動！　墓地のアンデット族モンスター2枚を除外し、
デッキからカードを1枚ドローする。
俺は業火とピラミッド・タートルを除外してドロー！」

ドローカードを確認するも、そのカードはこの状況に対し、さして意味を及ぼさない。

くっ、と歯噛みし、三沢は悔しげにつぶやく。

「魂を削る死霊を守備表示に変更し、
……ターンエンドだ……！」

「私のターンだ。ドロー。
……ふむ。条件はクリア。
であれば、あとは壁を処理するだけか。
私は、《Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オヴジャスティス）　ガラドホルグ》を召喚」

【《Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オヴジャスティス）　ガラドホルグ》　攻　１６００／守　４００】

「では、バトルといこう。
まずはコアデストロイで魂を削る死霊を攻撃する」

「くっ……！！」

戦闘では破壊されないという破格の効果までも、
その耐性は、あくまでも「戦闘」にしか及ばない。
よって、魂を削る死霊は破壊される。

「次だ。ガラドホルグで酒呑童子を攻撃する」

続いて、二つ目の壁――酒呑童子までもが、破壊される。

このままではジリ貧だ。

どうする？

どうすれば奴に勝てる？

どうすれば――！？

「無様だな、三沢大地」

「な……何？」

「無様だ、と言ったんだ。

ぬるい。ぬるすぎるんだよ、今の貴様は。

天才、博士、神童とまで呼ばれたその実力はどこへ行った？

他の人間から嫉妬を呼び起こしたその頭脳は？

意図的に手を抜いているのか？　私がその程度の人間だとでも？」

「そんなわけがない！

何を言っているんだ、お前は！」

「私は、少なからず君を妬んでいるのだよ。

疎んでいるのだよ。嫉んでいるのだよ。

だというのに――これでは、その価値すら君には見出せない。

全力だ。全力で私と相対しろ。

でなければ、闇のゲームすらも始まらないぞ？」

この男は、自分をなめている。
それを理解したと同時、三沢は眉間に皺を寄せた。

――そして、次の瞬間には、それが緩む。
いつも通りの表情だ。何も変わらない。

「ファントム、お前は少し思い違いをしている」

「ほう？」

「俺がその程度で怒りを露(あら)わにすると思ったら、大間違いだ。
俺たちには純然たる目的がある。それを為し得るためには、
まずはお前を倒すしか道は無い。であれば、頭は冷静に。
その程度のことは分かっているのさ」

「……ほう」

今度は、感心した風に呟く。

「素晴らしい。やはり君は逸材と呼ぶに相応しい人間だ。
本当に――苛立(いらだ)たしいほどに」

そして、その感情の方向性(ベクトル)は、怒りの方向へと。

この男の精神構造はどうなっているんだ？
三沢は自問自答する。

先程までこちらをけなしていたと思えば、
今度は称賛し、苛立たしいほどと形容し……。

分からない。結論が出た時点で、考えるのはあきらめた。

これから重要になるのは戦術だ。それ以上は求むまい。

いずれにせよ、ファントムはある意味、三沢の焦りを鎮めるのに、
一役買ってくれたようなものだ。

あの挑発が無ければ、今頃、戦術も何も捨てたままに、
無様に敗北していたことだろう。

「礼を言おう、ファントム。冷静になれた」

「おや、どうやら私は『いらぬ世話』をしていたらしいな」

「その通りだ。さあ、どうする？
これでターンを終了するのか？」

「いや」

「？」

唐突に、ファントムが頭を下げる。
演技がかったような口調も合わせ、
どこか貴族然とした振る舞いだが――それは、この場においてはどうでもいい。

「先程は無礼な真似をした。
……よって、私も、今持てる最大の攻撃力を持つモンスターを見せよう。
伏せカード、《闇次元の解放》を発動。
除外されたサイクルリーダーを特殊召喚する」

【《Ａ・Ｏ・Ｊ サイクルリーダー》 攻 １０００ ／ 守 １０００】

「サイクルリーダーで直接攻撃する」

「くっ……！　少し待ってもらおうか！
伏せカード、オープン！　《リビングデッドの呼び声》！
墓地に存在する酒呑童子を、攻撃表示で特殊召喚する！」

【《酒呑童子》　攻　１５００　／　守　８００】

「成程。では私は攻撃をやめよう。
そしてメインフェイズ２に移行する」

これ以上何かやることがあるのか――？

そうも思うが、この男は、
確かに「今持てる最大の攻撃力を持つモンスターを見せる」と宣言したのだ。

何かが来る、と考えるのが自然だろう。

「レベル３のコアデストロイとレベル４のガラドホルグに、
レベル３のサイクルリーダーをチューニングする」

「――！？」

「合計レベルは１０。

――さて、これが私が今出せる、最高の攻撃力を持ったモンスターだ。
現れろ、《Ａ・Ｏ・Ｊ　ディサイシブ・アームズ（アーリー・オブジャスティス）》」

【《Ａ・Ｏ・Ｊ　ディサイシブ・アームズ（アーリー・オブジャスティス）》　攻　３３００／守　３３００】

そこに現れるのは、文字通りの決戦兵器（ディサイシブアームズ）。

巨大な火器と、巨大な機体を兼ね備える、
言うなれば――要塞とも言うべき、異様なモンスター。

「さて、ディサイシブ・アームズの効果の一つを紹介しよう。
まず一つ――相手の場に光属性モンスターが存在するとき、
セットされたカードを１枚破壊できる」

「何っ……！？」

気付いた時には、ディサイシブ・アームズの巨体から、
一筋の光が伸びていた。

それが突き刺すのは、三沢の伏せた１枚のカード、《ツタン仮面》だ。

アンデット1体を対象に取る効果、という制約では、
このデュエル中では発動しなかったようだ。

「これで私は本当にターンを終了しよう。
では、三沢大地。君のターンだ」

敵は、攻撃力３３００の化け物だ。

――だというのに、三沢の闘志は、未だに萎えていなかった。

むしろ、逆。

強大な敵だからこそ――熱く、燃え上がる。

「俺のターン、ドロー！
俺は墓地の馬頭鬼の効果を発動し、
魂を削る死霊を蘇生する！」

【《魂を削る死霊》　攻　３００　／　守　２００】

「更に手札から、《デス・ラクーダ》を召喚！」

【《デス・ラクーダ》　攻　５００　／　守　６００】

デス・ラクーダは、本来このような使い方をするべきモンスターではない。

だが、この勝負に勝つためには、少々は強引な手も必要なのだ。

眼前の敵の絶大さを考えれば、それもやむなし。

であれば、迷う必要は無い。

切り札を出す。それだけを考えるべきだ。

「行くぞ、ファントム！
俺の場にアンデット族モンスターが２体以上存在するときのみ、手札から《火車（かしゃ）》を特殊召喚できる！」

【《火車（かしゃ）》　攻　？　／　守　１０００】

「《火車（かしゃ）》が特殊召喚されたこの瞬間、

場の全てのモンスターはデッキに戻される！　『冥界入口』！！」

火車の各所――扉となっている部分が次々と開き、
その内にアンデット族モンスターを取り込んでいく。

そして、自らに適さないであろうと思われる、
巨大な機械――ディサイシブ・アームズは、文字通りの「冥界」へ。

「この効果でデッキに戻したアンデット族モンスターの数だけ、
火車はその攻撃力を上げる！　つまり、これで攻撃力は３０００
となる！
ファントムに直接攻撃（ダイレクトアタック）！　火炎車！！」

火炎を纏う、古風な「車」が、ファントムを轢き、
そのライフポイントを奪い去っていく。

これにより、ファントムの残りライフは６００。

言うなれば、風前の灯火とも形容できるだろうか。

三沢は勝利を確信した。

――間違いなく、勝てる。

「俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー。
……流石だな、三沢大地。流石に、
ここまで削られることとなるとは予想外だったよ」

「それはどうも。
……だが、ああだこうだと言っている暇は無いんじゃないのか？」

「かもしれないな。
そういえば、三沢大地。貴様、最初に言ったな？
セブンスターズが、正義を騙るのか、と」

それがどうした、と言いたげに、三沢は首をひねる。

「ならば問おう。『正義』とは何だ？」

「正義とは……？」

えらく抽象的な疑問だ。

正義――これ、と信ずる正義を述べろ、ということだろうか？

「俺にとっての正義とは、
道徳や秩序に基づいたことを行うことだ。
規範に基づき、ルールに従い、是（ぜ）とされることを行うことだ」

「成程。模範的でいい台詞だ。感動的だな。
――だが、無意味だ」

くくっ、と、特徴的な笑い声が聞こえてくる。
どこか、相手を馬鹿にしたかのような、
あるいは、怒りの極致に達したかのような。

「規範。模範。ああ、良い言葉だな。
だがそれは違うな。間違っているぞ、三沢大地。
それは模範、規範であっても正義ではない」

「……ならば、お前の正義とは何なんだ!?」

「移ろいゆくもの。変わりゆくもの。
正義とは、その立場、人間、思想、信念によって変わるものだ。
私にとっての正義が君にとって受け入れられないように、
君にとっての正義もまた、私には受け入れがたいのだよ。

つまり、正義を為すということは、『違うもの』を否定することに他ならない。
――否定こそが、正義というものの本質だよ」

否定。

そんなものが――本質であってなるものか。

三沢は歯噛みする。

以前、クロノス教諭が言っていたことがある。
「闇は光に勝てない」と。

この男の思想は、間違いなく「闇」のそれだ。

否定し、本質を騙り、心を惑わし。

であればこそ、光が負ける道理は無い。

毅然と立ち向かい、自らの信ずる道理を述べる。
それこそが――今、自分の取るべき道だ。

「だとしても、世界を滅ぼすことは正義には繋がらない。
俺の正義は言っている。お前は悪だと！」

「そうか。ならば――私は、更に否定しよう。
貴様のその信念を。その信条を。
私は魔法（マジック）カード、《終わりの始まり》を発動。
墓地に闇属性モンスターが7種類以上存在するとき、
5枚を除外し、3枚のカードをドローする」

「な……1枚の消費で3枚のドローだと!?」

故に、7種類のモンスターが墓地にいることが、
条件として指定されているのだろう。

ファントムが頻繁にモンスターを墓地に送っていたのは、
このカードを発動するためだった。

――つまりは、そういうことか。

「私は、ブラインド・サッカー、ルドラ、コズミック・クローザー、
コアデストロイ、ガラドホルグの5枚を除外し、3枚のカードを
ドロー。
……そして、《マジック・プランター》を発動。
《闇次元の解放》を墓地へ送り、更に2枚ドロー」

それにしても、この男は何枚のドローカードを投入しているのか。
そんな風に怪訝な表情で見ていると、
ファントムの赤い目が三沢を睨み付けた。

「三沢大地。お前たちのように、
望むカードが適宜ドローできるならば、それでもいい。
だが、私はそれほど引きは良くない。
ドローカードを使うのは当然ではないかね？」

「……」

「まあいい。準備は整った。
さて、まず私は《二重召喚（デュアルサモン）》を発動。召喚回数を１度増やす。
そして、私は《Ａ（アーリー）・ボム》を召喚する」

【《Ａ（アーリー）・ボム》　攻　４００／守　３００】

弱小モンスターではないのか――そう感じる三沢だが、
ファントムの手札は、未だに残っている。

「更に、《機械複製術》を発動。攻撃力５００以下の、
同名カードをデッキから２体まで特殊召喚できる。

《A・ボム（アーリー）》2枚を、守備表示で特殊召喚する」

【《A・ボム（アーリー）》　攻　４００　／　守　３００】
【《A・ボム（アーリー）》　攻　４００　／　守　３００】

これで3体のA・ボム（アーリー）が揃ったということになる。
――これだけの数をそろえるとなると、まさか？

生贄要員ということだろうか。
だとしたら、得心はいくが――この状況で、
果たして奴は何を召喚するのだろうか？

「貴様に見せてやろう。私の切り札を」

「……！？　ディサイシブ・アームズが切り札じゃないのか！？」

「私は、『最高の攻撃力を持ったモンスター』と言っただけだ。
切り札というわけではない」

くく、と笑うファントム。

となれば、今の時点では召喚できるということだ。

と、なれば――間違いなく、状況としては最悪だ。

「さあ、見るがいい。2体のA（アーリー）・ボムを生贄に捧げ、
現れよ、《The big SATURN（サ・ビッグ・サターン）》！！」

【《The big SATURN（サ・ビッグ・サターン）》 攻 2800／守 2200】

「ぷ……プラネットシリーズだと！？」

――プラネットシリーズ。
世界で1枚しか存在しないとされ、
幻とも目される、凶悪な効果を有したカード。

そう――たった1枚しか存在しないのだ。

「何故お前がそのカードを持っている！？」

「おや。私がプラネットシリーズを持っているのが不満かね？」

「当たり前だ！　世界に1枚しか存在していないカードだぞ！？　もう一度聞く！　『何故』セブンスターズがそれを……」

「何故――ね。上から降ってきたとでも言えばいいかな？」

「ふざけるな！！」

くっく、と、さも楽しげに笑うファントム。

その真紅の瞳が映す感情は――紛れもない、喜悦。

嫉妬を抱くような対象を叩き潰すことができると、そう感じているかのような――悪意。

「私は永続魔法、《一族の結束》を発動。場の機械族モンスターの攻撃力は、全て８００ポイントアップする。

――さて、三沢大地。貴様に引導を渡してやろう。《Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）》で火車に攻撃。ＡｎｇｅｒＨＡＭＭＥＲ（ハンマー）！」

「くっ……！！」

どうする。
いや、迷う必要もない。
――この場で使う！
三沢が場に伏せていたのは、《聖なるバリアー ミラーフォース ー》だ。
相手の攻撃モンスターを全て破壊する凶悪なカード。
故に、使いどころを誤れば、自らの首を絞めかねない。
The big SATURN（サ・ビッグ・サターン）は、相手から破壊されたとき、互いのプレイヤーに、その攻撃力分のダメージを与える効果を持つ。
故に、この場で使えば、問題なく勝てる――。
「伏せカード（リバース）、オープン！！
《聖なるバリアー ミラーフォース ー》！
相手の攻撃モンスターは、全て破壊される！」
「何っ……？」
向かいくる拳が、バリアに阻まれ動きを止める。

そして、勢いのままに突き出された拳から、
徐々に崩壊が始まり――。

「これでＴｈｅ（サ・ビッグ）　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）の効果が発動する……！！
つまり、お前のライフポイントはゼロ、俺の勝ちだ！」

崩れ去った腕から、小爆発が巻き起こる。

徐々に、徐々に、その爆発は範囲を広げ――。

「伏せ（リバース）カードを発動。カウンター罠（トラップ）、《地獄の扉越し銃》。
ダメージを与える効果が発動したとき、
そのダメージを相手に移し替える」

「なっ――――――！！？」

「外見的な勝利ならくれてやる。
私の場のモンスター、私の手札、伏せカード。
その全てを破壊しつくすがいい。
だが、私は本当の意味での勝利を手にする。
――助かったよ、貴様がＴｈｅ（サ・ビッグ）　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）を破壊してくれて」

「……！！」

これすらも、ファントムにとっては予測通りであったのか。

三沢がミラーフォースを使うことすらも戦術に織り込み、
それを逆手に取ることすらも、彼はやってのけた。

何よりも楽しそうに、誰よりも愉(たの)しそうに、
ファントムは笑い声を上げる。

「天才。だからこそ、その思考は読みやすい。
　完全を求めるなら、まずは自分のライフポイントを守るべきだなぁ？」

ここまで、三沢のライフポイントは1たりとも減ってはいない。

だからこそ、それを守ろうと、
完璧であろうとしていた節も、無かったわけではない。

それすらも――ファントムは、予測していたということか。

「まず貴様は《立ちはだかる強敵》を使うべきではなかった。

私のデッキがA・O・J（アーリー・オヴジャスティス）を中心としたものであると、
そう理解したのなら、《DNA移植手術》があることを警戒すべきだったのだよ。
それ以外にも、いくらか指摘できる部分はあるが――。
まあ、塩を送る必要もあるまい」

仮面に隠れた表情ながらも、
どういう訳か、三沢は、ファントムの表情が理解できた。

――笑っている。

この男は、笑っている。
愉快そうに、爽快そうに、馬鹿馬鹿しそうに。

「貴様はこれで終わりだ。
――あとは、瓦礫の中にでも埋まっていろ」

強烈なまでの爆風。

それが晴れた頃には、亡霊（ファントム）の姿は消え失せていた。

同時に、三沢が首にかけていた七星門の鍵までもが。

――圧倒的なまでの、敗北。

それを認識すると同時に、三沢はその場に崩れ落ちた。

＊　＊　＊

「三沢が負けた!?」

「……すまない。七星門の鍵も奪われた」

「そりゃいいけど……よく無事だったな、三沢。
闇のゲームだったんだろ?」

「いや……闇のゲームじゃなかった。
途中までは『その資格も無いから』と、
最終的には、そうする必要が無いと言わんばかりに」

そうして、男――ファントムは去って行った。

どこに行ったのかも分からない。

次に、いつ襲撃してくるのかも分からない。

「ところで――天上院君はどこへ行ったんだ？」

「明日香のことか？　あいつなら、
今は寮の方だと思うけど……」

「そうか。だったらいいんだが……」

ファントムは、三沢との勝負の直後に、
何処（いづこ）ともしれぬ場所へと消えて行った。

となれば、その標的は明日香や万丈目、十代ではないのかとも勘ぐったが――。

「万丈目は？」

「食堂に行ったよ。なんか、昼飯食ってないんだってさ」

万丈目のことだ。仮に敗北していれば、
プライドのことを抜きにしても報告だけはしてくるだろう。

「亡霊（ファントム）――か」

プラネットシリーズを持つ男。

実力自体は未知数、というわけではない。

Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オヴジャスティス）を所有していることは理解しているのだ。

……が、逆に言えば、それだけだとも言える。

属性を操作し、自身に有利な状況を作り出す。

自らのドローが悪いと言い、何枚ものドローカードを投入する。

切り札はＴｈｅ　ｂｉｇ（サ・ビッグ）　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）。

最も攻撃力が高いのは、Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オヴジャスティス）　ディサイシブ・アームズ。

だが、それ以外に露呈した情報は少ない。

――どうやって対策を練る？

――――三沢大地、敗北（リタイア）。

七星門の鍵は、残り３つ――――。

22束目：正義（後書き）

なんかギアスのゼロっぽい人出てきました。
というわけでこんにちは。枠です。

ようやく書きたい話まで書けた……。
最初の方から構想はあったんですが、結局ここまで伸びに伸びてしまいました。

さて、ファントムなどという厨二病かつ安直な名前の男が出てきましたが、
その名前の由来はファントムクォーツ（幽霊水晶）です。
意味を検索すれば、もう正体なんてモロバレです。

というか話の流れを考えれば完全に丸わかりです。
ええ、よくある展開ですね（

正体わかったよ！　という方は、神妙な顔で
「いったいなにものなんだ……（棒」とでも言ってやってください。
それも計算のうちです。

サプライズだと言うならもっと先にトンデモサプライズ用意してますので、
意外性という面ではそちらを見ていただけると楽しめるかと思いま

す。

そしてやっと十代の切り札を解禁できる……。

これでいろいろと楽になります。

それでは、今回はこの辺で。

23束目：嫉妬

「何故天上院明日香を襲撃した？」

何処（いづこ）とも知れぬ、深い闇の中。
ふとした拍子に、男が訪ねる。

「それが必要だと判断したまでだ。
遊城十代をおびき寄せるには、都合がいいだろう？」

「奴らを叩くのは私の役目だ。
わざわざ貴様が出向くような必要もない」

「だが、お前が行って危険を冒す必要は無い。
あくまで、お前は対遊城十代の切り札なのだから」

「違うな。間違っているぞ錬金術師。
確かに遊城十代は私にとっては宿敵――否、宿願とも言える相手だ。
だが、だからと言って他の者が標的にならないわけがない。

彼らは皆私よりも勝る相手だ。だからこそ、打ち倒す意義と意味があるのだよ」

仮面の奥で、二人の男が睨み合う。

白い男と黒い男。

彼らは、言うなれば同士であり、利害関係にあり、それでいて敵同士でもあった。

「それは貴様も同様だ。いずれ――遊城十代を倒したのち、貴様を叩き、私が上だと認めさせる」

「できるのかな？」

「やるのだよ。そういうふうに仕向けたのは貴様だろう？私の造反くらいは予測できた事象ではないのか？」

ふ、と、白い側から笑いが漏れた。

どこか、相手を嘲り笑うような――それでいて、出来の良い生徒を褒め称えるかのような。

「それよりも、理解しているだろうね？」

「……それはデュエリストとしての話のことか？
それとも、錬金術師としての話のことか？」

「両方だ」

「であれば問題は無い。いずれにせよ、私の役目は終わる。
貴様を葬る者が変わるだけだという話だろう」

白い男は苦笑する。

確かにその理屈は間違ってはいないが――しかし、
短絡的すぎるし、なによりも普段の「彼」らしくない。

互いに時間が無いことを悟っているためだろう。
だからこそ、強硬な手段を取る。

そして、「彼」の場合は、その感情を発散させる相手がいなければ、
何一つ、充足感など得られない。

「ならば、これを最後の戦いとしよう。
我らセブンスターズとアカデミアの、最後の戦いだ」

闇の底に棲む者たちは、脈動を続ける。

＊　＊　＊

「今度は大徳寺先生が行方不明だって！？」

その報せを持ってきたのは、
レッド寮へとその所属を変えた万丈目だった。

「昨日の晩から姿が見えない。
……御堂のように何かしらの理由があるというわけでもなく、
失踪し――行方不明になったようだ」

「理由が無い……って、それもそれでおかしいんじゃねえのか？」

「当然だ。人間の行動には何かしらの理由がある。
何の因果関係も無く、突発的に失踪するようなこともありえない」

「確かに、大徳寺先生が突然いなくなるなんて、
普通に考えたらおかしいんだな」

「う、うん……」

何かを知っているのか、不自然に言葉を途切れさせる翔。
それに気付くことなく、３人は話を続ける。

「御堂が行方不明になったこともあり、
意気消沈している者もいる」

本土にいるはずのレイには定期的に連絡を入れていただろうし、
こちらで関わりの多い三人も心配している。

「あの馬鹿を捜すことと同様に、大徳寺先生の所在も探る。
全員、異論は無いな？」

「おう！　……で、実際のとこどうするんだ？」

「三沢が単独行動をしている際に襲撃を受け、敗北した。
その反省も踏まえ、今回に限っては複数人数……４人で行動する」

「それは確かにその方が良さそうなんだな」
「一人でいるのが危ないって言うなら、
明日香も一緒に行った方がいいかもな」
「ああ。連絡しておけ」

万丈目に促され、十代はＰＤＡを取り出し、
明日香へと連絡を行う。
待機音が鳴り響く。
一度、二度、三度。
――おかしいな？
普段であれば、このくらいで受けてくれるはずなのに。
どうしたのだろう、と十代が考えていると――唐突に、繋がった。
「お、やっと繋がった。
明日――」
『その声は遊城十代か』

「っ！？」

聞き覚えのない――機械で加工されたかのような平坦な声。

少なくとも、明日香ではない。

「誰だお前！？」

『おや、三沢大地からは話を聞かなかったのか？
そうだな。一応――ファントム、と名乗らせてもらおうか』

ファントム。

――聞き覚えがある。

三沢が敗北した日、彼から伝えられた名だ。

「明日香をどこへやった！？」

『どこへ？　くく、抽象的な疑問だな。
今、我々がその身柄を預かっているとでも言えばいいか？』

「お前がさらったのか！？」

『さあ、どうだろう。私が実行したのかもしれないし、
そうではないのかもしれない。まあ、それは些事だ。
本題に入らせてもらおう』

本題。
そう切り出された瞬間、十代に緊張が走った。
こいつが望むことは、恐らく――。

『我々と決闘（デュエル）してもらおう。
形式は問わない。二人でかかってくるもよし、
一人ずつが挑んでくるもよし。勝っても負けても、
天上院明日香はそちらに返却しよう。だが――』

「行かなきゃ、明日香は返さないってことか」

『おや、察しがいいじゃないか。
場所は――ブルー寮の奥の森、
一本道の最奥から右に外れた場所にある洞窟だ。
ああ、ついでに、お前たちの捜している者の情報もやろう』

言いたいことだけを告げ、ファントムは通話を打ち切った。

「……敵か」

「ああ、洞窟で待ってるって」

「ど、どうするんだな？」

「行く。行って明日香を助け出す。
そんでもって、和真と大徳寺先生の居場所を聞き出す！」

「……そうやって息巻くのはいいが、勝算はあるのか？」

挑発とも取れる、万丈目の発言。

だが、それはさして気にならない。
いつものパターンで言うなら、
これはあくまでも冷静さを取り戻させるための行動だ。
別段、悪意があってやっているわけではない。

――故に、十代はいつものように返答する。

「勝てない決闘（デュエル）なんて無いぜ！」

そう。
勝算の無い勝負などありえない。
だからこそ――いつでも、十代は希望を抱いていられるのだ。

＊　＊　＊

それから十数分後、万丈目と十代は洞窟の前に来訪していた。
来訪――とはいえ、二人の雰囲気はそういった類のものではない。
むしろ、戦争をしに来たとでも言うような雰囲気だ。
ゆっくりと、一歩ずつ歩みを進めていく。

「手順の再確認だ」

十代に言い聞かせるように、万丈目が呟く。

「相手が二人以上いるようなら、貴様は敵のボスに当たれ。
俺はそれ以外を叩く」

「一人なら？」

「俺が先に行く。負ければ貴様の番だ。
二人であれば各個撃破にあたる」

「……オッケー、分かった」

それから先、二人に会話は無かった。

一歩ずつ、一歩ずつ地面を踏みしめ、奥へ奥へと向かっていく。

そうして、五分は歩いただろうか。
目の前に開けた空間があるのを確認し、二人はそこで立ち止まった。

「ここは……」

「――戦場へ、ようこそ」

――途端、バシバシバシッ！！　と、周囲に灯りがともる。
あまりの眩しさに目が眩み、思わず目を閉じてしまう。

そうして、数秒の後に目を開く。

「待ちくたびれたぞ、遊城十代、万丈目準。
歓迎しよう、盛大にな」

大仰な仕草で迎え入れるのは、黒衣の男。
――亡霊（ファントム）。

「お前……ファントムか！？」

「そうだ。……まあ、自己紹介の必要もないだろう。
……しかし、本当に二人で来てくれるとはな。
面倒が省けたよ。ありがとう」

「ふざけんな！！　明日香はどこだ！
大徳寺先生も、和真も！　お前が知ってるんじゃないのかよ！」

「落ち着け十代！　奴はこちらの動揺を誘っているだけだ！」

万丈目からの一喝が飛ぶ。

――そうだ、怒っていても仕方がない。

「切り替えの早さは、流石と言ったところか。
まあいい。まずは情報だが――」

「そこから先は私が言おう」

唐突に、他の声がこの空間に響いた。

カッ、カッ、という靴音と共に洞窟の奥から、
――おおよそ、人間が住むには適さないであろう闇の底から、
白衣を着た男が現れる。

「……誰だ、貴様は」

「我が名はアムナエル。セブンスターズの一人。
……まずは、これを見てもらうのが早いだろう」

と、アムナエルが指し示す先にあるのは――棺桶。

パチン、と指を鳴らすと同時、その蓋が開き――。

「なっ……！？」

「大徳寺先生の……ミイラ……！？」

そこに安置してあったのは、一体のミイラ。

顔。メガネ。服装。髪。

干からびていようとも、ありとあらゆる部分に、見覚えがある。

――間違いない。

そう、本能が告げている。

これは、大徳寺教諭だと。

「てめえ、大徳寺先生を殺したのか！？」

「殺したわけではない。

アレは、最初からそうなる運命だったのだよ」

「うるさい！　そんなこと信じられるか！

勝負だ！　俺と決闘（デュエル）しろアムナエル！

俺が勝ったら、本物の大徳寺先生の居場所を話してもらう！」

「本物の……か。

フ、いいだろう。決闘（デュエル）だ、遊城十代。

お前が勝てば、真実を教えてやろう……！」

感情に任せて、デュエルディスクを構える十代。
その目には、怒りが燃え滾（たぎ）っている。

その一方で、万丈目はファントムと向き合っていた。
この男は危険だ。
ともすれば、あの男――アムナエルよりも。
そう判断してのことだが、一向に戦意を見せるような気配は無い。
それどころか、アムナエルの行動に嘆息しているほどだ。

「見ているだけでいいのか、貴様は」

「私のことか？」

「決まっているだろう、他に誰がいる」

「ふむ、これは失敬。
では、こちらも始めようか？」

決闘（デュエル）を始めるのは構わない。
だが、その前に――。

「その前に、一つ聞かせろ。
十代が大徳寺教諭のことで手いっぱいになっている現状、
奴があの馬鹿のことまで聞き出せるとは思えん。
――聞かせろ。御堂はどこにいる」

「御堂――か。ふむ、まあ、多くは語るまい。
その答えはこれで十分だ」

と、ファントムは万丈目に向かって2枚のカードを投げ渡す。

2枚の白いカード。
2枚の――シンクロモンスター。

《ダークエンド・ドラゴン》。
そして、《ライトエンド・ドラゴン》だ。

「『返却』しよう。それは貴様のものだろう？」

「正確には、奴に預けたものだ。
……そうか、奴の身柄は貴様らが握っているということか」

「解釈は如何様(いかよう)にでも。
さて、我々も始めるとするか」

その瞬間、闇が周囲を包み込む。

――闇のゲーム。

万丈目の頭に、ふと、不安がよぎる。

この男の闇のゲームは未だ未確認だ。
三沢が敗北したのも通常のデュエル。であれば、その方式は分からない。

魂を賭ける？　あるいは、肉体の損耗か？

いや、いずれにせよ、やってみなければ始まらない。

デュエルディスクを構え、宣言する。

「「――決闘(デュエル)！！」」

表示を確認。先攻は――ファントムだ。

「私のターン、ドロー。
《A・O・J（アーリー・オブジャスティス） D・D・D・チェッカー》を召喚」

【《A・O・J（アーリー・オブジャスティス） D・D・D・チェッカー》 攻 1700 ／ 守 1200 】

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

ファントムのデッキは【A・O・J（アーリー・オブジャスティス）】。
その中でも属性操作を主としたものだ。

一見すれば安定性に乏しいデッキという印象はあるが、
しかし、実際にはかなり厄介なデッキであることは間違いない。
属性を変化しさえすれば、その本領が遺憾（いかん）無く発揮される。
また、光属性のモンスターには優秀な効果を持つものが多い。

属性統一デッキでなければ、光属性のモンスターは、
大抵の場合で投入されていることだろう。

その実、万丈目も複数枚投入している。

こういったデッキは、苦手だとかなんとかいう問題と超越し、単に
厄介なのだ。

そして、あのカードが存在していれば、その厄介さは輪をかけて増大し、
もはや脅威と呼べるレベルにまで至る。

「俺のターン、ドロー！」

だが――その基本的なステータスは、他のモンスターに比べて低い。
そこが、付け入る隙となる。

「俺は手札から、《ランス・リンドブルム》を召喚する！」

【《ランス・リンドブルム》　攻　１８００／守　１２００】

「バトル――」

「バトルフェイズに入るなら少し待ってもらおう。
私は伏せカード（リバース）、《ＤＮＡ移植手術》を発動。
光属性を選択し、場のモンスター全てを光属性に変更する」

「くっ……」

だが、D・D・チェッカーには、
光属性モンスターとの戦闘の際に生じる効果は無い。
このまま攻撃を――。

「そして更に伏せ(リバース)カードを発動。《エレメンタル・アブソーバー》。
手札のモンスターを除外することで、
そのモンスターと同じ属性を持つ相手モンスターの攻撃宣言を封じる。
私は光属性の《バイオファルコン》を除外する」

これで、万丈目の攻撃は封じ込められたことになる。
対して、相手は攻撃し放題――どころか、
場のモンスター全てが光属性になったことで、
優位に立たれてしまったとも言える。

「チッ……カードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー。
私は手札から、《闇の誘惑》を発動。

カードを2枚ドローし、手札から闇属性のモンスターを除外する。
私は《A・O・J（アーリー・オブジャスティス）　クラウソラス》を除外しよう」

三沢から聞き及んでいた戦術。

手札交換を頻繁に行い、キーカードを手札に呼び込む。
墓地に複数枚の闇属性モンスターが置かれれば、
その時点で《終わりの始まり》を用いて3枚のドロー。

これはその一歩目と判断すべきか、せざるべきか。

「ふむ……では、《A・O・J（アーリー・オブジャスティス）　コアデストロイ》を召喚」

【《A・O・J（アーリー・オブジャスティス）　コアデストロイ》　攻　1200／守　200】

「バトル。コアデストロイで、ランス・リンドブルムを攻撃する。
そして相手モンスターが光属性であるとき、
コアデストロイはダメージ計算を行わずに相手を破壊する」

ランス・リンドブルムに対し、レーザーを放つコア・デストロイ。

ランス・リンドブルムはそれを防ごうと試みるも――無駄だった。
光線によって貫かれ、その身を光の中へと散らしてゆく。

「では、Ｄ．Ｄ．チェッカーで直接攻撃（ダイレクトアタック）しよう」

ひし形を形作っていたそれぞれの機械がその動作を止め、
直後に円形の方陣を作り出す。

そして、放たれるのは六つの光。
それぞれが放つレーザーが、万丈目の体を焼いた。

「ぐうあああああっ！！」

これで、残りのライフは２３００。

中途半端な数値だ。
上級モンスターのラッシュを受ければ、すぐにでもゼロになりかねない。
かと言って、そこまで慌てるような数値でもない。

とはいえ、結局はダメージを受けたのだから、笑っていられるような余裕は無いのだが。

「ターンエンド。
どうした、万丈目準。貴様の実力はその程度か？」

「く……せ、精々、ほざいていろ。俺のターン、ドロー！
手札から、《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》を召喚！」

【《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》　攻　１４００　／　守　１１００】

「仮面竜（マスクド・ドラゴン）か。だが、コアデストロイが存在する以上、
戦闘で破壊されて効果を発揮するモンスターは意味をなさないが？」

「ふん……その程度のことは理解している！
伏せカード（リバース）オープン！　《トラップ・スタン》！
このターン、場の全ての罠（トラップ）カードの効果を無効化する！」

場の全てのカードの効果が停止する。
エレメンタル・アブゾーバーの効果も――ＤＮＡ移植手術の効果も。

「これで攻撃ができる！　《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》で、
Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブジャスティス）　コアデストロイを攻撃！」

「っ……」

仮面竜（マスクド・ドラゴン）の口腔から吐き出される火炎が、
コアデストロイを焼き尽くし、消滅させる。

ファントムへは２００のダメージが与えられ、
その残りライフは３８００。

ダメージ量は小さいながらも、これで次に繋ぐことはできた。

――まずは、上々か。

「カードをセットし、ターンを終了する」

「ふむ……まあ、こんなものか。私のターン、ドロー。
手札から、《トレード・イン》を発動。
《Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブジャスティス）　サンダー・アーマー》を捨て、カードを2枚ドロー」

またも、手札交換。
複数枚投入されているであろう手札交換のカード。

無尽蔵というわけではないだろうが――はたして、どれだけ行うの

か。

「ふむ……まあ、こういうこともあるか。
私はこのままバトルフェイズに入る。
D．D．チェッカーで仮面竜（マスクド・ドラゴン）を攻撃」

「くっ……！　この瞬間、仮面竜（マスクド・ドラゴン）の効果が発動！
戦闘によって墓地へ送られたとき、
デッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族を特殊召喚できる！
来い、《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》！」

【《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》　攻　１２００／守　９００】

仮面竜（マスクド・ドラゴン）に導かれるようにして現れる一匹の竜。
万丈目にとっては切り込み隊長的な役割を果たすモンスターであり、
彼の「相棒」に次ぎ、信頼するカードだ。

「ほう……そうなると、狙いはレベルアップか」

「それ以外に何があると思っている。
それで、ターンを終了するのかしないのか、
どっちなんだ？」

「そう急くな。私はカードを伏せ、ターンを終了する」

「ならば俺のターンだ。ドロー！
このスタンバイフェイズ、アームド・ドラゴンは成長する！
来い、《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》！」

【《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》　攻　２４００／守　１７００】

見る間に、アームド・ドラゴンの体躯が盛り上がり、筋肉が増加し、その体積を変えていく。

薄黄色だった腹部は赤く染まり、腕も太く、大きくなる。

「破壊効果だけでは攻撃はできないが、さて、どうする？」

「理解はしている。
――《スタンピング・クラッシュ》を発動。
相手の場の魔法・罠を１枚破壊する！」

「ほう――」

「当然、俺は貴様の場のＤＮＡ移植手術を破壊する！」

飛び上がったアームド・ドラゴンに踏みつぶされ、
破壊されるＤＮＡ移植手術。

ほう、と、ファントムは感心したように呟いた。

この場において、最も影響力があるカードは、
紛れもなくＤＮＡ移植手術だ。

確かに伏せカードも警戒すべきだろう。
もしかすると、２枚目のＤＮＡ移植手術だという可能性だってありうる。

しかし、攻撃も封じられた今、
相手に優位に立たせるだけでしかないあのカードを放置することはありえない。

仮に２枚目の移植手術を伏せていたとしても、
これで１枚は潰した。

万丈目は、トラップ・スタンやスタンピング・クラッシュのみならず、
何枚かの罠対策ののカードを投入している。

サイクロン、ハリケーンを含めれば、その合計枚数はおおよそ９枚。
残りのデッキ枚数を考えれば、手札に来るまではそう遠くないはず

だ。

いずれにせよ、この場で移植手術を破壊しなければどうしようもないことは確かなのだ。
であれば、迷う必要は無いはずだ。

「更に、この効果でカードを破壊したとき、
相手プレイヤーに５００のダメージを与える！」

「な――ぐっ！」

そのままの勢いで、ファントムに殴り掛かるアームド・ドラゴン。
――その一撃で、仮面が欠ける。

「……ふん」

「よし……！　バトル！
アームド・ドラゴンでＤ．Ｄ．チェッカーを攻撃！
アームド・バスター！！」

「く、あっ！」

D．D．チェッカーを殴り飛ばし、
すかさずファントムへと一撃を叩き込む。

これで、合計のダメージは１４００となった。
ファントムの残りライフは２６００。
未だに万丈目のライフを上回ってはいるが――それも些細な差だ。

勝てる。
そう確信した――その直後のことだった。

「く、は、ははははは、あはははははは！！」

唐突に、ファントムが笑い始めた。

「あ、は、あははは、く、くき、くはははははは！！」

何がおかしいのか。

怒りとか疑問とか、そういったものは、既に万丈目の内には無かった。

むしろ――奇怪だと。

そう感じざるをえないような、高笑いだった。

「くはははははは！！　ああ、最高だよ貴様は！
やはり貴様は優秀だ！　卓越している。冠絶する人材だ！！」

それは、間違いなくファントムにとっては不利になるであろう条件のはずだ。

この上無く、人材としては優秀だと言いたいのだろうが――。

しかし、万丈目にとっては不気味だとしか思えない。

――何故、笑うのだろう。

「ああ――だからこそ、打倒するだけの価値がある。
打ち倒すべき意味が、意義がある。
――その精霊を含めてな」

「……！？」

――精霊。

カードの精霊。

ごく一部の人間だけが見ることができる、超常的な存在。

当然ながら、万丈目はその存在を感知することができる。

そしてまた、幼い頃より共にあった「相棒」も、精霊だ。

《光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）》

今も彼の背後に付き添う、一匹の竜だ。

それが見えるなどと――遊城十代でもなければ、ありえない。

「既に手札にあるのか、それともデッキに眠っているのか……。

いずれにせよ、今は召喚できないだろうし――」

「待て。何故貴様に精霊が見える。

普通の人間には見えるはずがない」

「ああ、普通であればな。

あいにくと私は『普通』ではない。

少し――おかしいのさ」

そのくらいは分かっている。
というか最初から色々とおかしかった。

「まあ、おかしいとは言っても方向性（ベクトル）は少し違うがね。
おかしいのはこの左目だよ」

そう言って、ファントムは自らの左目を指し示した。
血のように赤い瞳。
――確かに、普通ではないが。

「アムナエルの作でね。気付けばこいつが埋め込まれていたのさ。
正直、最初はどうしたものかと思ったものだ。
――が、存外便利だよ。貴様のような精霊持ちを捜すにはな」

「……狂っている」

「おや、そうかい？
くくく……はははははは！！」

ありがとう、とでも続きそうな、狂気に満ちた言葉。

この男はどこか狂っている。
最早――寒気を感じるほどに。

「……そうまでして貴様を駆り立てるのは、何だ？」

「嫉妬だよ。強者への妬み。才能を持つ者への嫉み。
――そして、周りと『違う』ことに対する焦燥。
そして、他を超えることへの欲望。それだけだよ、私の行動の要因は」

「だとしても、その理屈はおかしい。
俺は貴様などと面識は――！」

「ほう。これでもか？」

欠けた仮面に手を掛け――握り潰す。

パラパラと、破片が床に落ちていく。
黒い砂粒のような、ガラスのような、暗い感情を押し込めたような黒い破片。

そうして、そこから覗く顔は――。

「――御堂」

彼らが捜す人物の一人――御堂和真のものだった。

23束目：嫉妬（後書き）

……フフ……その、なんと言いますか……。
最初から、バレバレだったんですよねェ～……。
皆さんの感想を見る度にゲラゲラ笑ってたもののォ～？
よくよく考えりゃー、作者側からすりャあ相当な誤算ですよォー……。

しかしッ！！　俺は書いたッ！！
書ききったッ！！　そこに嘘偽りはねェ～んですよォー！！

ＷＲＹＹＹＹＹＹ（ｒｙ

そういうわけで枠です。ジョジョ風に失礼します。

とりあえず正体まで書ききりました。
ここから詳細を煮詰めていく段階に入りますので、
実は云々かんぬんなんてことがありうるかもしれません。

……一応言っておきますが、双子とかはありえませんからね？

いや、それにしたって相当に陳腐なこと書きそうだなーとは思うん

ですが。

とりあえず、ＶＳファントム（御堂）戦は次回まで続きます。
総評などは次回……というより、２話後に行う予定です。

一応ユーザーページの方に、一つだけ質問を設けさせていただきました。
時間がありましたら、回答していただけると助かります；

それでは！

２４束目：表裏

――その顔は、万丈目が記憶する限りでは、
間違いなく……御堂和真のものだった、とすべきなのだろう。

しかし、それにしては何かがおかしい。

元々、彼の目つきは異様なまでに悪い。

視線で人を一人殺せるとまで表現されるほどだったその目つきは、
幾分か和らいでいるようにも見受けられる。

そして、元々の彼の左目は、あのような色、
――血を固めたような色合いではなかった。

それは、彼自身が言う通り、アムナエルに埋め込まれたものと解釈
ができる。

時間が無く、移植が間に合わなかったためか、

右目に限っては元と変わらない色味を保っていた。

全体的に、こわばっていた部分が和らいでいる。
どこか中性的に整ってしまった、とでも表現すべきなのだろうか。

いずれにせよ、以前の御堂と比べて、
かなりの部分相違点があることは確かだ。

声に限っては、以前とそれほど変化しているようには思えないが――しかし、
それでも、どこか異質な感は否めない。
それは、そこに抱く感情の違いゆえのものか。

「貴様が御堂であるはずがない。
……洗脳されているのか、あるいは、
ダークネスのように闇に囚われているとしか思えんな」

本来の御堂は、今この場にいる男のように、
どこか芝居がかったような口調ではない。

それどころか、あの男であれば、あんな口調で喋っていたことを後悔し、

しばらくは部屋から出ず、悶え苦しんでいることだろう。

性格も随分と違う。

知識に関してはともかく、
ここまで、誰かの才能に関して嫉妬を抱くような人間ではなかった。
仮に抱いていたとしても、それを表出させないよう、
必死になって隠して自分で消化していくような人間だったはずだ。

あるいは、それを持ちえていない自分に対して焦燥感を抱くか。
いずれにせよ、他人にその矛先は向かわなかった。

「違うな。間違っているぞ、万丈目。
私は紛れもなく『御堂和真』だよ。
洗脳などされていないし、ましてや闇になど囚われてはいない。
ま、相違点が無いわけではないがね」

「その気取った喋り方のことか？」

「――まずは訊こうか、平行世界という言葉を知っているか？」

無視された。

「……そのくらいは知っている。貴様は俺を馬鹿にしているのか？」

「それは失礼。だが、この話の大前提はそこだ。
その理屈を知っていなければ、説明が説明としての意味を為さないのでね」

ふう、と軽く息をつき、男は大げさにかぶりを振る。

「あのときああなっていれば。
あのときにこうしていれば。
そういった可能性を突き詰めていった先にあるのが平行世界だ。
そして私は――」

「平行世界の御堂だ、とでも言うのか？」

「浅はか――だと言いたいところだが、おおむねそんなところだ。
細かい部分で言えば、かなり違いはするが――ふむ」

では、と男は周囲に指を走らせる。

同時に、万丈目の視界に映し出される図。

これは――。

「一口に同じ人間と言っても、そこには何かしらの相違がある。
例えば、超能力者の『御堂和真』がどこかに存在しているとしよう。
別の世界にはロボット乗りの『御堂和真』が存在している可能性もある。
人々の笑顔のために戦う『御堂和真』もいるかもしれない。」

次々と生み出されていく可能性。
男が語れば語るほど、万丈目の脳に浮かぶ情報は多くなっていく。

「そしてこの世界に存在する『御堂和真』。
アレは決闘者（デュエリスト）であり、落ち着いた人間だ。
だが、それはあくまでも、心の中に感情を押し殺しているのであって、
羨望（せんぼう）や疑問、疑惑、困惑といった感情が無いというわけではないのだよ」

「人間である以上は当たり前だろうが」

「その通りだ。だが、奴は基本的に凡人だ。
特別な――貴様らのような能力も持っていない。
そこで、望んだ。そういった能力があれば、と」

特別な人間になりたいと願うのは、別段珍しいことではない。
いずれその願望は萎え、薄れ、消えていくものだ。
しかし――もしも、仮に自分の周囲の人間の、
その殆どが「特別」であったとしたらどうだろう。
御堂であらずとも、その力を望む者がいたとて不思議ではない。

「その時点ではまだ良かったのだよ。
羨望（せんぼう）とは、つまり羨（うらや）み望むことだ。
その感情は、まだ歯止めが効く。心の奥底に隠すこともできるだろう。
だが――アムナエルは、そこに目を付けた」

「何？」

「暴走させたのだよ、その感情を。
ただの望みを、ごくごく当たり前の『羨ましい』という感情を、
妬みへと。嫉みへと。――つまりは嫉妬へと向かうように差し向けた。
だが、それでも上手くはいかなかったようでなぁ？
――そこで、平行世界の話が持ち出される」

ここでようやく平行世界の話に移るようだ。
男はくっく、と喉を鳴らしながら語る。

「平行世界には無数の『私』が存在している。
当然ながら、そこには悪辣（あくらつ）な御堂和真だって存在しているだろう。
邪（よこしま）な感情を抱き、欲望のままに行動する者もいるだろう」

「つまり？」

「『私』はな、そういった者たちの情報を集め、その感情を解析し、
この男の内部で変成した嫉妬と混ぜ合わせ、
その上で生成された――『御堂和真』という人間の、裏側（ダークサイド）なのだよ」

つまりは――今、この場に存在するはずがない人間だと。
――そう、言っているのだ。

「ならば聞くが、その肉体は『貴様の』ものなのか？
それとも、御堂自身のものなのか？」

「『こちら側の』御堂和真のものだ。
……ま、馴染ませるには丁度良かったのだろうな。
別世界の同一人物の情報を寄せ集めた霊体を馴染ませるには。
蛇足だが、あの男の意識は眠っているものと見てくれて構わない。
所詮はたった一人の人間の意識だ。『我々』には敵うはずもない」

要するに、この男は御堂の体を用いた、
限りなく本人に近しい別人――ということだ。

だが、同時に疑問も噴出する。

どうやって、あのアムナエルという男は、別世界に干渉する技術を手に入れたのか？

そして、そういった技術を用いていながらも、
何故わざわざ七星門の鍵など狙うのか？

訊かねばならないだろう。早急に。

「最後に聞かせろ。何故あのアムナエルという男は、
貴様を――御堂の裏面と呼べるようなモノを作り出すことができるような、
異様なまでの技術を持っていてなお、七星門の鍵を狙う？」

「簡単に言えば、天は多大なまでの才覚を与えようとも、
時間だけは奴に与えてくれなかった。
その改善のため、という想像はできるがな」

男の言葉を言い換えるなら、
既にあのアムナエルという男は、寿命が尽きかけているのだとも言

える。

「だが、異世界に干渉するような技術があれば、
普通は寿命など心配する必要も無いだろうが」

「……私は知らないが、どうにもそういうことではないらしいな。
聞き及んだ範囲で言えば、奴が干渉できるのは、
あくまでも『情報』までとのことだ。肉体に干渉し、
別世界へと魂を移し、生きながらえることはできない、らしい。
だが、まあこちらの事物であれば、少々はなんとかなると言っていたな。
私のこの左目にしても、奴が貴様らの目の情報を複製して作ったものと聞いた」

それにしても十分ではないのだろうか？

――いずれにしても、これで十分に情報は揃った。
あとはこのデュエルに勝利するだけだ。

「……デュエルを続けるぞ」

「ああ、そうだ。その方がいい。
野暮な話はこれで終えよう」

「ならば、これで俺はターンを終了する。そしてこのエンドフェイズ、
アームド・ドラゴンがモンスターを戦闘で破壊したことにより、
《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》にレベルアップする！」

【《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》　攻　２８００　／　守　１０００】

更に力強く、頑強に変化するアームド・ドラゴン。
これだけのことをすれば、少々のことで倒されることはありえないはずだ。
――と。

「私はこのエンドフェイズに速攻魔法、《終焉の焔》を発動する。
私の場に2体の《黒焔トークン》を、守備表示で特殊召喚する」

【《黒焔トークン》　攻　０　／　守　０】
【《黒焔トークン》　攻　０　／　守　０】

「――！！」

「そして、私のターンだな。ドロー。

……まずは魔法（マジック）カード、《マジック・プランター》を発動。
永続罠（トラップ）、《エレメンタル・アブソーバー》を墓地に送り、
カードを2枚ドローする」

役目を終えたエレメンタル・アブソーバーが崩れ去り、
ファントム――いや、亡霊の手に2枚のカードが受け渡される。

「ふ……まずはそのカードを破壊させてもらおうか。
私は場の黒焔トークン2体を生贄に捧げる！
そして現れろ、《Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（ザ・ビッグ・サターン）》！」

【《Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（ザ・ビッグ・サターン）》　攻　２８００　／　守　２２００】

場に巨大な機械が現れる。

「土星」を模した、世界で1枚のカードの立体映像（ソリッドビジョン）。
しかし、虚像であるはずのその姿から、威圧感が放たれているのは、
気のせいではない。

――それこそが、闇のゲームの特性だからだ。

「手札の《Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブジャスティス）　リーサル・ウェポン》を捨て、
ライフを１０００ポイント払う。これにより、
Ｔｈｅ（ザ・ビッグ・）　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）の攻撃力は、
エンドフェイズまで１０００ポイント上昇する。
――ＳＡＴＵＲＮ（サターン）　ＦＩＮＡＬ（ファイナル）　ＭＯＤＥ（モード）」

ゴッ！！　と、Ｔｈｅ（ザ・ビッグ・）　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）の全身から、
勢いよくエネルギーが噴き出していく。

「――潰れろ、アームド・ドラゴン。
私はＴｈｅ（ザ・ビッグ・）　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）でアームド・ドラゴンを攻撃！
ｅｎｄ（エンド）　ｏｆ（オブ）　ＣＯＳＭＯＳ（コスモス）！」

「ぐあああああぁっ！！」

莫大な衝撃が、万丈目を襲う。

たった１０００のライフダメージでこの威力。

――ライフがゼロになれば、どうなる？

そんなことを考えてしまうのも仕方がない。

こうして考えてもみると、一人で８０００ものダメージを負った、あの天上院吹雪の精神力は異常だ。

恐らくは、今も痛みに苦しんでいるはずだろう。

「カードをセットし、ターンエンド。
……さあ、万丈目準。貴様のターンだ」

「く……俺のターン！」

とはいえ、この状況で可能なことなど、そう多くはない。

それどころか、完全な不利。

守備表示で相手の攻撃をかわすくらいのことしか、できようはずもないのだ。

――どうする！？

――――。

「！！」

聞こえた。

あのカードの声が。

「ドロー！！」

思い切り、ディスクからカードを引き抜く。

万丈目の手に握られているカードは、

紛れもなく――彼の、相棒。

「俺は《魔の試着部屋》を発動！
デッキの上から４枚をめくり、
その中のレベル３以下の通常モンスターを、
全て、俺の場に特殊召喚できる！」

１枚目、《地獄の暴走召喚》。

２枚目、《おジャマ・イエロー》。

3枚目、《タイラント・ドラゴン》。
4枚目、《下克上の首飾り》

「俺は、《おジャマ・イエロー》を特殊召喚する！」

【《おジャマ・イエロー》　攻　０　／　守　１０００】

『あらぁン？　アニキぃ、あれって御堂のアニ……。
ってぎゃあああああ！！　何あのモンスター！？』

「うろたえるな、見苦しい！
……くそっ！　更に俺は魔法（マジック）カード、
《レベル調整》を発動し、墓地の《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》を特殊召喚！」

【《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》　攻　２４００　／　守　１７００】

「その代償として貴様はカードを2枚ドローする……」

苦虫を噛み潰したような表情で、万丈目は亡霊に告げる。
亡霊はそれに応じるようにして、ほう、と呟きながらカードをドロ

ーする。

「――そして俺はこの2体を生贄に捧げる！」

『えええええェ――――――！！　ちょっと万丈目のアニキ！
いきなりそれはヒドいんじゃない！？』

「黙れ！　今の貴様であのカードに勝てるわけがないだろうが！！
――行くぞ、相棒！　《光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）》を召喚！」

【《光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）》　攻　２８００　／　守　２４００】

闇を引き裂いて現れる、一つにして一対の肉体を持つ竜。
万丈目の切り札にして、最強の相棒――光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）だ。

「ほう……つまりは、相討ちに持ち込み、
光と闇の竜の効果（ライトアンドダークネス・ドラゴン）により、墓地からモンスターを特殊召喚。
……そうして、私に直接攻撃（ダイレクトアタック）を決めるつもりか」

「……」

「私は光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の召喚に対し、
《奈落の落とし穴》を発動する。――当然、これは強制的に無効

になるが」

光と闇の竜の体から発せられる波動が、
亡霊のカードの効果を無効とする。

――同時に、その攻撃力も下がる――。

「甘い！　俺は光と闇の竜の効果の発動にチェーンし、
伏せカード、《収縮》を発動！
これにより、Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮの攻撃力を、
元々の攻撃力の半分だけ下げる！」

「っ！！」

光と闇の竜の特性――それは、
無差別にあらゆるカードの効果を無効にすることもそうだが、
もう一つ、効果を無効にするために光と闇の竜の効果が発動した、
その同一チェーン上では、カードの効果を無効にできない、というものがある。

亡霊が光と闇の竜の効果を逆手に取り、
その攻撃力を下げてくることを、更に逆手に取った。

よし、と万丈目は心の中で喝采を挙げる。

――勝てる！

「バトルだ！　光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）で、
Ｔｈｅ（ザ・）　ｂｉｇ（ビッグ・）　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）を攻撃！
ダークバプティズム！！」

「ぐあっ……！！」

闇に飲み込まれ、その身を散らすＴｈｅ（ザ・）　ｂｉｇ（ビッグ・）　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）。

――当然ながら、戦闘破壊であるが故に、その効果は発動しない。

爆発はいずれ消え去り、
そうして――亡霊のライフポイントから、９００が引かれる。

これで亡霊の残りライフは７００となる。

「……自分のカードのことくらいは熟知している、
ということか。感服したよ」

でなくては、一つの学校のトップなど勤まるはずもない。

「まあ、いい。それで、既に手札はゼロだが、
それで終わりか？」

「ああ、これでターンエンドだ」

やるべきことは全てやった。

あとは、天運に全てを任せるのみだ。

「そうか。では私のターンだ。ドロー……。
――光と闇の竜の無効化効果は、残り3度。
ありがとう、万丈目準。2枚のドローを与えてくれて」

「っ……！？」

「私は、まずは永続魔法、《漆黒のトバリ》を発動する。
――当然ながら、無効となるな。そしてもう一枚、
手札から《A・O・J サイクルリーダー》を捨てて効果発動。
相手の墓地の光属性モンスターを2体まで除外する。これも無効」

これで攻撃力と守備力が１０００ポイント奪われた。
――あと1度だけ、無効効果が使える算段だが。

「ラストだ。《Ｄ．Ｄ．クロウ》の効果を発動。
このカードを墓地に捨て、相手の墓地のカード1枚を除外する……。
これで、最早光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）は、効果を無効化できない……！！」

「くっ……！！」

「さて、そろそろ行動させてもらおうか。
私は魔法（マジック）カード、《終わりの始まり》を発動！
墓地に7種類以上の闇属性モンスターが存在するとき、
そのうち5枚を除外してカードを3枚ドローする……！」

言うや、亡霊は自身の墓地のカードから数枚を抜き取っていく。

Ｄ．Ｄ．チェッカー。コアデストロイ。
サンダー・アーマー。リーサル・ウエポン。
そしてＴｈｅ（ザ・）ｂｉｇ（ビッグ・）ＳＡＴＵＲＮ（サターン）の５枚だ。

「……ほう。これはこれは。
成程、最高のお膳立てだ。

どうにも、気色が悪いような気がせんでもないが……。
まあ、私の思念のなせる業とでも言うべきか……」

ニィ、と亡霊の口角が持ち上がる。

嫌な笑い方だ。ああいった笑い方をする人間を、
万丈目は前にも何度か見たことがある。

――あれは、勝ちを確信し、なお相手を痛めつけようと画策している表情だ。

「私は《A・ボム（アーリー）》を守備表示で召喚する」

【《A・ボム（アーリー）》　攻　４００　／　守　３００】

「カードを1枚セットし、これでターンエンドだ」

「……お膳立て、と言った割には、
さして良い状況だとは思えないが？」

「さあ、どうだろうな？
それよりも貴様のターンだ。
ドローしたらどうだ？」

確かに、これから万丈目のターンに移りはする。
だが、果たして奴のあの自身が嘘（ブラフ）なのかどうか。
――分からない。
三沢は言っていた。奴の精神構造が理解できない、と。
巧妙に嘘と真実を織り交ぜ、相手の精神に揺さぶりをかけているのだろう、
と、そのとき、万丈目は推察した。
だが、実際に目の前に立ってデュエルをしてみると――確かに、分からない。
この男が何を考えているのか、何を思ってあんな態度でいるのか。
「チッ……俺のターン、ドロー！」
モンスターは――引かない。
現状、光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）でＡ・ボムを攻撃するのは厳しい。

確かに、光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の蘇生効果を用いれば、
A（アーリー）・ボムの効果を使われたとしても、そのまま直接攻撃（ダイレクトアタック）を行える。
だが――自信満々に伏せた、あのカード。
果たして、何が隠されているのやら、だ。

「だが、攻撃してみなければ始まらん！
光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）でA・ボムを攻撃！
シャイニングブレス！！」

光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の吐き出す光線が、
A（アーリー）・ボムへと激突する――その瞬間。

「伏せ（リバース）カード、オープン。《攻撃の無力化》。
攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる」

「くっ……防御用のカードか！」

しかも、ご丁寧にカウンター罠（トラップ）。
現在の光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）でも無効化はできないし、

そもそもスペルスピードの違いもあり、万全の状態でも無効にできないカードだ。

あれがるからこそ、亡霊は余裕の表情を保てていたのだろう。

「くっ……ターンエンド！」

「私のターン、ドロー。

……魔法（マジック）カード、《機械複製術》を発動。

場の攻撃力５００以下の機械族モンスターの同名カードを、デッキから２枚まで特殊召喚できる。

Ａ（アーリー）・ボムを、更に２体特殊召喚」

【《Ａ（アーリー）・ボム》　攻　４００　／　守　３００】

【《Ａ（アーリー）・ボム》　攻　４００　／　守　３００】

「この戦法は――二枚目のプラネットカードでも召喚する気か！？」

「違うな。間違っているぞ、万丈目。

――その程度のものと一緒にしてもらっては困る」

「な、に……！？」

プラネットシリーズを「その程度」呼ばわりするとは、

果たして奴の召喚するモンスターは何なのか――？

「私は場の3体のA（アーリー）・ボムを生贄に捧げる！」

「さ……3体だと！？」

3つの生贄――それだけのコストを要求するようなモンスターなどは、
数えるほどしか存在しない。

それこそ、有名なものでは、かつての三幻神だろうか。

それ以外にもいくつか存在してはいるが、
いずれも優秀な効果を持っているカードばかりだ。

それが召喚されるとでも言うのか――？

そう考えていた、その直後だった。

「さあ現れろ、全てを超越する神――《邪神アバター》！！」

【《邪神アバター》　攻　？　／　守　？】

――その瞬間、周囲に広がる闇が、何らかの形状を形作る。
まず、万丈目の目に映ったのは球体。
おおよそ、モンスターとは思えないような異様な外見。
だが、それは――紛れもなく怪物（モンスター）である。

「何だ、こいつは……！？」

「『神』だよ。三幻神と対を為す――な」

「馬鹿な！？　そんなことがあってなるものか！」

「あるんだよ。貴様の目の前に現れたソレがそうだ。
――ま、どちらにしても、これで様々な意図が理解できた」

「意図、だと？」

「そう。このカードを封印していた、
本来の御堂和真の意図が――だ」

御堂。その名を出され、万丈目は僅かに困惑する。

――亡霊が所持しているものではなく、御堂のものだと？

「その前に、アバターの能力を教えてやろう。
このモンスターの召喚に成功したとき、
相手は相手ターンで数えて２ターンの間、
魔法・罠（マジック・トラップ）を発動できない」

「何っ――！？　くっ！　ならばそれにチェーン発動させてもらう！
速攻魔法発動！　《突進》！
これにより、光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の攻撃力を７００ポイント上昇させる！」

「ぬるいな！　邪神（アバター）の効果――それは、場に存在するモンスターの中で、
最も高い攻撃力を持つモンスターの攻撃力をコピーし、
そこに１００ポイントを足した数値となること！
つまり、貴様の光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の攻撃力がいくら上昇しようと、
邪神（アバター）には絶対に勝てんのだよ！」

暗黒の球体の姿が変わっていく。

まず、見えるのは翼。
次に腕。足。尾。

――最後に姿を現すのは、その顎。

黒く塗りつぶされたその色彩こそ違えど、
紛れもなく、その姿は光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）だった。

「馬鹿、な……！！」

「アバター（Avatar）の本義は、他国の言語で言う『神の化身』だ。
だが、いつしかその意味は『分身』に取って代わられた。
――両者の意味を有すこのカードは、常に、
最も攻撃力の高いモンスターの『分身』となり、
同時に『神』であるからこそ、基となったモノを超越する。
……言うなれば、嫉妬の化身か」

恐ろしい――と、万丈目は改めて感じた。

威圧感、というだけの言葉では括りきれないほどに感じる、
強烈な「悪意」。

当然ながら、それを放つのは――邪神（アバター）。

「この邪神は――いや、私も含め、
我々は、言うなれば御堂和真の心の闇の象徴のようなものだ。
邪心故の邪神――と言ったところかね。
ま、言葉遊びの範疇ではあるが」

くっくっ、と笑い、亡霊は再度万丈目を見据える。

「いずれにせよ、これで貴様の精神を砕く。
――バトル。邪神アバターで光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）を攻撃。
ダークネス・ブレス！」

「ぐあぁっ！！」

その口から吐き出されるのは、
本来とは真逆の――闇。

力の奔流が万丈目の体を叩き、痛みが体中を駆け抜ける。

――たった１００のダメージでこれか！

「く、はっ……！！」

「曲がりなりにも『神』の一撃だ。
たった１００だろうが……されども、１００だ。
強烈だろう？」

強烈、などというレベルのものではない。
最早、その威力は「凶悪」とすら呼べるほどに凄まじい。

「ま――まだだ……！
光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）が破壊されたとき、
俺の場のカードを全て破壊し、墓地からモンスターを特殊召喚する！
もう一度力を貸してくれ、《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》！」

【《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》　攻　２４００／守　１７００】

「――忘れてはいないだろうな。
邪神（アバター）の姿は、戦うべき相手によって変化する。
つまり、現在の邪神（アバター）の攻撃力は――２５００だ」

「忘れてはないがな……！
くそっ、やはり貴様は厄介だ！」

目の前の亡霊や邪神だけではなく、
その奥に存在するであろう御堂も含めて。

「ターンエンド。……さあ貴様のターンだ」

「くっ――俺の、ターン！　ドロー！！」

――引いた。

逆転の一手となるべきカードを。

「貴様は言ったな。魔法（マジック）・罠（トラップ）の発動を封じると。

だが、モンスター効果までは封印することはできまい！

俺はアームド・ドラゴン　ＬＶ５の効果を発動する！

手札のモンスターを墓地に送ることで、

そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つモンスターを１体破壊する！

手札の《アームド・ドラゴン　ＬＶ１０》を墓地に送り、

攻撃力３０００以下――つまり、今の貴様のアバターを破壊する！！」

モンスター効果は無効にはなりえない。

そして、神の名を冠するとは言えど――破壊効果は、適用される。

「――やはり、そこで引くか」

「引かなければ、負けは確定的だ」

「ああ、理解している。――だからこそ、貴様らはそこで『引く』。
私は――それが、たまらなく妬ましい」

「……そうか」

――だが、と、亡霊は笑う。

「だからこそ、『御堂和真』は、貴様らに対し、
嫉妬ではなく羨望を抱いているのだろう。
妬(ねた)むのでも、嫉(そね)むのでもなく――ただ、羨んでいる。
手が届かないからこそ、身の丈に合った能力で妥協する。
でもなければ、貴様らのことなど、仲間だなどと考えてはいないさ」

相変わらずの不敵な表情のまま、くっく、と笑う。

「……、そうか」

「――さて、伝えるべきことは全て伝えた。
最早、私がすべきことは何もない。邪神（心の闇）を乗り越えるのは、奴の仕事だからな」

「ああ……理解している。
――だからこそ、これで終わらせる！
アームド・ドラゴン　ＬＶ５で直接（ダイレクトアタック）攻撃！
アームド・バスター！！」

振りかぶる拳が、亡霊へと向かっていく。

そして、それが突き刺さった瞬間――デュエルは、終わりを告げた。

２４束目：表裏（後書き）

そういうわけでガチ厨二病退場です。

やー、なんでこんな時間かけてるんでしょうか。
こいつ一発キャラのはずだったんですけどね。アルェー？

さて、とりあえずチート臭い設定明かしましたよっと。
平行世界ネタとかもうやりつくしてますよね。私もそう思う。

まあそういうわけで、ファントムは御堂のようで御堂じゃない何かでした。
話の中では「亡霊」と表現しています。

この根拠はまず一つに、「この場に存在しえないものだから」。
まあ御堂も厳密にはそうなんですけど。ツッコミ禁止。

そして、別世界の御堂の「悪い部分」全部抽出してるわけですから、
そりゃドギツい厨二病にもなります。

はい、そういう訳であいった部分も一応伏線でした。
今の御堂は反省する男ですよ！　あんまり活かしてないけど。

そんなわけで次回、アムナエル戦です。
タイトルだけでもうバレバレな罠を仕掛けておきます。

それではっ！

以下雑記

そういえば以前にデッキを晒してくださいということを言われて活動報告の欄で晒してみたのですが、他にも要望あれば、ある程度は答えます。

……まあ、たまには専門外もあるかもしれませんが。

改めまして、それでは。

25束目：奇跡（前書き）

今回はかなりgdgdですので注意です。
本当にどうしてこうなったんでしょう（

25束目：奇跡

――背後に闇が広がり、万丈目とファントムの姿が消えていく。

そうしている今にも、十代の頭は徐々に冷静さを取り戻しつつあった。

……そうだ、冷静にならなきゃならねえ。

明日香が敗北したということは、目の前にいる男――アムナエルは、相当に強いデュエリストでもあるのだろう。

であればこそ、一瞬の判断ミスが命取りになりかねない。

勝たなければならない勝負だからこそ、

少しでも冷静さを取り戻さなくてはならないのだ。

バシン、と十代は自らの頬を叩く。

――準備完了だ！

「――うし！　勝負だ、アムナエル！」

「決闘（デュエル）の直前になって冷静さを取り戻すか……。

いいだろう」

「「決闘（デュエル）！！」」

先攻は十代からだ。

よし、と聞こえない程度の声で呟き、デッキに手をかける。

「俺のターン、ドロー！

俺は手札から、《未来融合－フューチャー・フュージョン》を発動！

《E・HERO（エレメンタルヒーロー） ランパートガンナー》を選択し、

その融合素材をデッキから墓地へ送るぜ！」

墓地に送られるのは、《E・HERO（エレメンタルヒーロー） クレイマン》と、

《E・HERO（エレメンタルヒーロー） バーストレディ》の2枚だ。

「更に俺は手札から、《E・HERO（エレメンタルヒーロー） エアーマン》を召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） エアーマン》 攻 1800 ／ 守 300】

「御堂和真のカードか……」

「エアーマンの召喚に成功したとき、
場の魔法・罠（マジック・トラップ）を、エアーマン以外のＥ・ＨＥＲＯの数だけ破壊するか、
デッキから『ＨＥＲＯ』を手札に加えられる！
手札に加える効果で、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン》を手札に加えるぜ！」

風に乗って手札に加わる、スパークマンのカード。
やっぱり使いやすいな、と考えつつ、十代は次の一手を打つ。

「カードをセットして、ターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー！
私は手札から永続魔法、《次元の裂け目》を発動！」

「《次元の裂け目》――無差別除外カードか！」

つまり、アムナエルのデッキは除外に特化したデッキだということになる。

除外ギミックは、十代も稀に用いることがある。
ただ、その用途は相手のモンスターを封じることがほとんどだ。

――が、アムナエルのデッキは、恐らくは除外を積極的に行うデッキだ。

十代のデッキは、基本的に墓地を肥やしてからが本番となる。

である以上、ああいったカードは言うなれば天敵。

それも、最悪の部類の敵だ。

「私は《異次元の生還者》を召喚する」

【《異次元の生還者》　攻　１８００／守　２００】

「――バトルだ。異次元の生還者でエアーマンに攻撃」

「何っ！？」

攻撃力は同等。

つまり――相討ちを狙ってきたということだ。

だが、その行動にも、当然ながら意味はある。

それどころか、アムナエルにとっては重要なことだ。

「破壊され、墓地へ送られるはずの互いのモンスターは除外される。
そして、異次元の生還者が場から除外されたとき、
そのエンドフェイズに異次元の生還者は帰還する」

【《異次元の生還者》　攻　１８００　／　守　２００】

「くそっ……！」

同様の効果を持ったカードに、《異次元の偵察機》がある。
ただし、こちらはデッキや手札、墓地からの除外にも対応しているが。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

スタンバイフェイズに入ったことにより、
未来融合のカウントが一つ進む。

手札の消費はほぼ無いも同然だ。

であれば、まずは攻勢に移るべきだと十代は理解している。

しかし、この場で《融合》を用いれば、
その効果によって素材にしたモンスターは除外される。

そうなれば、簡単には回収もできない。

Ｔｈｅ　シャイニングには回収効果も備わっているが、
あのカードは、墓地へ送られなければその効果を発動できない。

そうでなくとも、まず十代の持つ融合モンスターは、
ああいった無差別除外カードを苦手とするものが多いのだ。

フレイム・ウイングマンも、墓地へ送らなければ効果は発揮できない。
ネクロダークマンも、除外されていては効果を使えない。
キャプテン・ゴールドの効果も、墓地に送ることができなければ無意味だ。

守備能力に優れたクレイマンは、墓地に送ってしまった。

（和真のアブソルートＺｅｒｏを選択しておけば良かったかもしれねえ……）

……と、十代は軽くボヤキを漏らす。

――と。

御堂、と考え、ようやく気が付く。
墓地に送る必要のないモンスターがいる、ということに。

「俺は手札から《融合》を発動するぜ！
手札の《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　キャプテン・ゴールド》と、
炎属性の《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ザ・ヒート》を属性融合！
行くぜ、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ノヴァマスター》！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ノヴァマスター》　攻　２６００　／　守　２１００】

「バトルだ！　ノヴァマスターで、異次元の生還者を攻撃！」

ノヴァマスターの撃ち出す火炎に焼き尽くされ、
その身を次元のはざまに躍らす異次元の生還者。

そして、炎の中からカードが１枚、十代の手札に加わる。

「ノヴァマスターが戦闘で相手モンスターを破壊したとき、
俺はデッキからカードを１枚ドローできるぜ」

この場合で重要なのは、「破壊した場合」という文言だ。

ノヴァマスターの持つ効果は、「破壊して墓地に送った場合」ではない。

あくまでも「破壊」である以上、除外されようがどうなろうが、ドロー効果は発揮される。

ピシィ、と、アムナエルの仮面にヒビが入った。

８００のダメージ――たったそれだけでも、彼の装飾品は耐えきれなかったということだろう。

「どうだ、アムナエル！
これで俺はターンエンドだぜ！」

「エンドフェイズ、異次元の生還者は再度帰還する」

【《異次元の生還者》　攻　１８００／守　２００】

しかし、その表示形式は守備表示。

恐らくは、これ以上のダメージを避けるための処置だろう。

「私のターン、ドロー！
私は手札から、魔法（マジック）カード、《封印の黄金櫃》を発動！
デッキのカードを1枚除外し、私の2回目のスタンバイフェイズに、
手札に加える。私は《ネクロフェイス》を除外する」

「ネクロ……？　何だそりゃ？」

「《ネクロフェイス》が除外されたとき、
互いのプレイヤーはデッキの上から5枚を除外するという効果を持つ。
――さて、遊城十代。キミのデッキの上から5枚を除外しろ」

「くそっ……！？」

次元のはざまから複数本の触手が伸び、
十代のデッキの上から五枚を取り除いていく。

それはアムナエルのデッキも同様だ。

互いに除外されたカードはそれぞれ以下の通りだ。

十代は、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ネクロダークマン》、《フレンドッグ》、

《ＨＥＲＯ（ヒーローズ）’Ｓ　ボンド》、《ヒーロー・マスク》、
そして、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エッジマン》。

アムナエルは、《魔宮の賄賂》、《錬金生物　ホムンクルス》、
《合成魔獣　ガーゼット》、《Ｄ．Ｄ．ダイナマイト》、
《光の追放者》の、それぞれ５枚。

「私は場の異次元の生還者を生贄に捧げることで、
《黄金のホムンクルス》を召喚！」

【《黄金のホムンクルス》　攻　１５００　／　守　１５００】

場の異次元の生還者が、異次元へと消え去っていく。

そうして、代わりに現れたのは――黄金に輝く、土人形。

それはホムンクルスと表現するよりも、
ゴーレム、とした方がより正確であるのかもしれない。

だが、重要なのはそこではない。

「攻撃力、たった１５００だって？」

「黄金のホムンクルスには、ゲームから除外されている私のカードの枚数だけ、
攻撃力と守備力を上昇させる効果を持っている。
その上昇値は３００だが、現在、私の除外カードは、
合計６枚。――つまり、攻撃力は３３００ポイントにアップする！」

「なっ……！？」

――これを狙ってたのかよ！？

膨れ上がった攻撃力。
それは、ノヴァマスターをはるかに超え、
最上級モンスターの基準をも超越する。

「黄金のホムンクルスで、ノヴァマスターを攻撃！
ゴールデン・ハーヴェスト！」

「うわあああああっ！！」

黄金のホムンクルスとノヴァマスターとの攻撃力の差は、
現状では７００。

残りライフポイントは３３００。

まだ余裕はあるにしても、この幻痛は消えてくれはしない。

「く、そっ……！」

「私はカードを1枚セットする。
そしてエンドフェイズ時、異次元の生還者は帰還を果たす」

【《異次元の生還者》　攻　１８００　／　守　２００】

「これで、ターンエンドだ」

「お……俺のターン、ドロー！
このスタンバイフェイズ、未来に融合を控えていた、
《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ランパートガンナー》が特殊召喚されるぜ！
来い、ランパートガンナー！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ランパートガンナー》　攻　２０００　／　守　２５００】

守備体制で現れる、女性型のＨＥＲＯ。
その右腕に装備された巨大な銃も含め、多大なまでの重厚感が、相手を威圧する。

――だが、それ以上に敵は強大だ。

融合モンスターを出したとはいえ、状況は悪い。
黄金のホムンクルスを処理しなくては、
守備モンスターを出そうとも、異次元の生還者の直接攻撃（ダイレクトアタック）が決まる。
更に、伏せ（リバース）カードは、
ほぼブラフも同然の、《キッズ・ガード》。
《ヒーロー・キッズ》が無い現状では、どうしようもない。

（……いや？）

いや、ある。
「あのカード」が、手札に存在する現状なら。
そして、その方法を取るのであれば、
まずは、アムナエルのターンに移行する必要がある。
――だが、だからと言って、何もせずにいられるものか！

「俺は手札から、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　フォレストマン》を守備表示で召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　フォレストマン》　攻　１０００　／　守

2000】

「そして手札から、《R－ライトジャスティス》を発動！
場の『E・HERO』の数だけ、場の魔法（マジック）・罠（トラップ）を破壊する！
俺は《次元の裂け目》と、その伏せ（リバース）カードを破壊するぜ！」

バシィッ！　と、雷に撃たれ、焼き焦げていく2枚のカード。
《次元の裂け目》――そしてもう1枚は、《ゼロ・フォース》だ。
よし、と呟きつつ、十代は続ける。

「俺はカードをセットし、ターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー！
私は手札から、《サイクロン》を発動。
遊城十代の場の、今伏せたそのカードを破壊する！」

吹き抜ける疾風が、十代の場に襲いくる。
――だが。

「くそっ……仕方ねえ！　チェーン発動だ！　伏せカード（リバース）、オープン！
《トゥルース・リインフォース》　！
デッキから、レベル2以下の戦士族モンスターを特殊召喚できる！
《ヒーロー・キッズ》を守備表示で特殊召喚！」

【《ヒーロー・キッズ》　攻　３００　／　守　６００】

「……タイミングを逃した、ということか」

本来、ヒーロー・キッズには、
自身が特殊召喚されたときに、デッキから任意の枚数、
ヒーロー・キッズを特殊召喚する効果が備わっている。

だが、アムナエルの《サイクロン》にチェーンする形になったことで、
その効果は十全には発揮されない。

「バトル……！　黄金のホムンクルスで、ランパートガンナーを攻撃！
ゴールデン・ハーヴェスト！」

「へっ……そいつを待ってたぜ！

伏せカード（リバース）、《キッズ・ガード》を発動！
ヒーロー・キッズ1体を生贄に捧げることで、相手の攻撃を無効にする！」

「むっ……？」

「そして更に、デッキから『E・HERO』を手札に加えるぜ！
俺が選択するのは、《E・HERO（エレメンタルヒーロー） ワイルドマン》だ！」

ヒーロー・キッズの遺した光の中から現れる1枚のカードを手に取る。

「……ならば、私はカードをセット。
異次元の生還者を守備表示に変更し、ターンエンドだ」

「よし……俺のターン、ドロー！
このスタンバイフェイズ、フォレストマンの効果が発動！
デッキから《融合》を手札に加えるぜ！」

地面から幾多の根が生え、
《融合》のカードを十代の元へと届ける。

そして。

「行くぜアムナエル！　手札から《融合》を発動！
手札のワイルドマンと、場の地属性のフォレストマンを融合――」

「私はこの瞬間に、《マクロコスモス》を発動！
墓地に送られるべきカードは、その全てがゲームから除外される！
さらにこのカードの発動時、デッキ、もしくは手札から、《原始太陽ヘリオス》を特殊召喚できる！
私はデッキから《原始太陽ヘリオス》を、守備表示で特殊召喚！」

【《原始太陽ヘリオス》攻？／守？】

「ヘリオスの攻撃力・守備力は、
ゲームから除外されている互いのモンスターの数×１００ポイントとなる。
――現在の枚数は２１枚。よって、その攻守は２１００！」

どこか女性的な面影を残す、白い影――。
その頭部は、まるで、それそのものを太陽に置換されたかのような形状をしていた。

「くっ……また除外カードかよ！　でも、それでも構わねえ！
現れろ、大地のＨＥＲＯ！　《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ガイア》！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） ガイア》 攻 2200 ／ 守 2600】

「ガイアの融合召喚の成功時、
黄金のホムンクルスの攻撃力の半分を、エンドフェイズまで吸収できる！
そして、バトルだ！　ガイアで黄金のホムンクルスを攻撃！
コンチネンタルハンマー！！」

勢いのままに叩きつけられる一撃。
それは、黄金のホムンクルスだけではなく、
――アムナエル自身にすらも、強烈なダメージが及ぶ。

瞬間、その仮面が剥がれ落ち――。

「なっ……」

その顔が、晒される。

「何でだよ……！？」

「……」

「何でアンタがセブンスターズなんだよ、大徳寺先生……！！」

その顔は――紛れもなく、彼にとっての恩師。

――大徳寺のものだった。

「何でも何も、私はもともとセブンスターズだったということだよ、十代君」

「だったら何であんなに……」

「職務を全うしていたのか、かな？
残念ながら、私は何事にも本気で取り組まなければ気が済まないんだ。
それに……何より、君の成長をこの目で見たかった」

「俺の成長……！？」

「だからこそ、天上院明日香を誘拐したり、
御堂和真をファントムに仕立て上げたりもした」

「！？」

あの男が御堂であったことも驚きだが、
それ以上に――何よりも。

大徳寺が、そんな力を持っていることに、ただただ十代は驚愕した。

「だからこそ彼にプラネットシリーズのカードを与えた。
……それもこれも、君の才能を開花させるためだよ。
――だが、私にはもう時間が無い。だから、
この場で君の力を試させてもらうことにした」

「何なんだよそれ……ワケわかんねえよ!!
何で先生が俺の実力なんて計る必要があるんだよ!?」

「……それに答える必要は無いよ。
だが、一応――、先ほど、君が私に向けた質問には、答えよう。
あの肉体は、私が錬金術によって作り出した肉体だ。
そして、アレはもはや使い物にはならなくなった。
だから、棄てたまでだ」

簡単に、自分の体ですらも――捨てる、
と言ってのけたこの男に、十代は改めて戦慄した。

「明日香は……！？」

「明日香君は、私に勝たねば取り戻せない」

そうか、と、十代は、苦虫を噛み潰したような表情で呟く。

覚悟はしていた。

いつかこんなこともあるんじゃないかとも思えた。

だが――こうして現実に直面すると、

その決意も萎えてしまいそうだ。

……だが。

「だったら、やってやる……！

お前のことは大徳寺先生だなんて思わない！

明日香を助ける……それだけだ！」

「そうだ……戦え、遊城十代。

そして私を――！！」

「俺はカードを2枚セットし、ターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー！

このスタンバイフェイズ、封印の黄金櫃に封印されていた、

《ネクロフェイス》のカードが私の手に加わる！

そして私は魔法（マジック）カード、《闇の誘惑》を発動！
デッキからカードを2枚ドローし、手札から闇属性モンスターを除外する！
私が除外するのは、当然、ネクロフェイス！」

互いのデッキから、更に5枚のカードが削られていく。
十代は《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　オーシャン》、《Ｏ－オーバーソウル》、《カードガンナー》、《カードブロッカー》、
そして、《ダーク・カタパルター》だ。
アムナエルは《ならず者傭兵部隊》、《ディメンション・ポッド》、《カオスポッド》、《異次元の指名者》、
《カオス・エンド》の5枚だ。

――まずい、と十代は思考する。
もう一度、あの《黄金のホムンクルス》級のモンスターを出されれば、
ほぼ確実に敗北する。
そうでなくとも、既にガイアは使ったし、
他のカードでも対処は難しいのだ。
――どうする！？

「私は更に原始太陽ヘリオスを生贄に捧げ、
《ヘリオス・デュオ・メギストス》を特殊召喚する！」

【《ヘリオス・デュオ・メギストス》　攻　？　／　守　？】

「……！？」

ヘリオスの姿が変容し、その肉体が膨れ上がる。
一見すれば間抜けな光景ではあるが――しかし、
その実、その光景を間近で見ている十代にとって、
おおよそ冗談とは思えない光景でもあった。

「ヘリオス・デュオ・メギストスの攻撃力の上昇値は、
原始太陽ヘリオスの倍の２００……。
ヘリオスが除外されたことも併せれば、攻撃力は４４００！
そして私は、《異次元の生還者》を攻撃表示に変更する！
終わりだよ十代君……！　ヘリオス・デュオ・メギストスで、
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ガイアに攻撃！　ウルカヌスの炎！！」

「くっ……まだ倒れるわけにはいかねえ！
伏せ（リバース）カード、オープン！　《エレメンタル・チャージ》！
場のＥ・ＨＥＲＯの数×１０００ポイントのライフを回復する！」

ガイアへと襲いくる火炎球。
その勢いは徐々に増し――直撃する。

ガイアの黒い体が火炎に焼き尽くされ、
その余波が十代にも及ぶ。

ライフポイントが削られ、５３００に及んでいたライフポイントは、
３１００に減ずる。

また、ガイアが除外されたことにより、更にヘリオスの攻撃力は上昇する。
４４００だったものが、４６００へと。

「そして、異次元の生還者で直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「うわあああああぁぁっ！！」

そうして、３１００のライフポイントは、１３００へと。

「私はターンを終了する」

「つぅ……くそっ、俺のターン、ドロー！」

中途半端なモンスターよりは、余程高いであろう、その異常な攻撃力。

今の十代のモンスターでは勝てないのは明白だ。

何より、モンスターを破壊されれば、それだけで相手の攻撃力も上がる。

――防御に専念するしかねえ！

「く……《E・HERO（エレメンタルヒーロー） スパークマン》を守備表示で召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） スパークマン》 攻 1600 ／ 守 1400】

「くっ……カードを2枚セットして、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！

……まずは魔法（マジック）カード、《魂の解放》を発動。

これにより、私の墓地の封印の黄金櫃、サイクロン、時空の裂け目、ゼロ・フォースの4枚のカード。

そしてお前の墓地の《融合》カードを除外する」

「くっ……！！」

これで、融合を回収する戦術は封じられてしまったことになる。

「更に、《カオス・グリード》を発動。
私のカードが４枚以上除外されており、かつ、
墓地にカードが存在していないときに発動できる。
カードを２枚ドローする！」

まずい、と十代は思った。
このドローで、キーカードを引かれてしまえば……！！

「……この際だ。これで終わりにしてやろう。
私は手札から速攻魔法、《グランドクロス》を発動！
相手ライフに３００のダメージを与え、
場のモンスターを全て破壊する！」

惑星直列の発する重力により、
その全てを破壊されつくす十代の場。

――当然ではあるものの、その影響もあって、
ランパート・ガンナーに装備されていた未来融合は、
その効力を無くし、墓地へ――いや、除外される。

更には、１３００あった十代のライフは１０００へと落ち込む。

「そして、魔法（マジック）カード、《次元の歪（ひず）み》を発動！
私の墓地にカードが存在していないとき、
除外されているモンスターを特殊召喚できる！
再び現れよ、《ヘリオス・デュオ・メギストス》！」

【《ヘリオス・デュオ・メギストス》　攻　？　／　守　？】

その攻撃力は５０００――。
デュエルモンスターズ中最高の攻撃力を持つモンスターにすら、並んだ。

「くっ……！！」

「さあ、とどめだ。ヘリオス・デュオ・メギストスで直接攻撃（ダイレクトアタック）！
ウルカヌスの炎！」

「まだっ……！　伏（リバース）せカード、《クリボーを呼ぶ笛》、発動！
デッキから《ハネクリボー》を守備表示で特殊召喚する！」

【《ハネクリボー》　攻　３００　／　守　２００】

「む……！？」

ヘリオス・デュオ・メギストスの攻撃によって、
その身を散らすハネクリボー。

「……だが、ハネクリボーの効果は、
墓地に送られなければ発動しない」

「でも、あんただって、そいつ１体じゃあ、
これ以上攻撃することはできないぜ」

「その通りだ。私はこれでターンエンドとしよう」

この場面で異次元の生還者を帰還させなかった。
その理由はなんだろうか――と、ふと、十代は考える。

十代は、自他ともに認めるほどに引きが良い。

アムナエルの残りライフは１０００だ。

守備表示の壁として生還者を立てておいたとして、

仮に十代が、貫通効果を付与する《Ｈ－ヒートハート》をドローしたらどうだろうか。

そうなった場合、ほぼ間違いなくアムナエルの敗北は確定する。

恐らくは、それを防ぐための処置であろう。

あるいは、その必要すらもなくなった、ということなのだろうか。

「俺のターン……ドロー！」

よし、と十代は口角を上げる。

「魔法（マジック）カードを発動！　《サイクロン》！

これにより、お前の張った《マクロコスモス》を破壊するぜ！

これで、これ以上モンスターが除外されることは無い……！」

「それで、それからどうするつもりだい、十代君？」

「俺は《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ボルテック》を守備表示で召喚するぜ！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ボルテック》　攻　１０００　／　守　１５００】

「カードをセットして、ターンエンドだ」

「何かと思えば、脆弱な壁モンスターを召喚しただけ……。
それで私に勝つつもりか？　私のターン、ドロー！
私は、ヘリオス・デュオ・メギストスを生贄に捧げる！」

「またかよ！？」

二度の成長を遂げるヘリオス。
その膨れ上がった肉体は、徐々に徐々にその姿を変える。
一つだったものが、三つへと。

「さあ、現れよ。《ヘリオス・トリス・メギストス》！」

【《ヘリオス・トリス・メギストス》　攻　？　／　守　？】

「今度は、３体に増えた……！？」

「そう。そして、その上昇値も３００に上昇する。
２６枚ものモンスターが除外されている今、
その攻撃力は――７８００！！」

「――！！！？」

「ヘリオス・トリス・メギストスで、E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ボルテックを攻撃！
　フェニックス・プロミネンス！！」

3つの肉体が、それぞれに中央、右、左と、まるで「鳥」のような陣形を作り出す。

そして、その身に火炎を纏い――ボルテックを、跡形も無く燃やし尽くした。

「くっ……《ヒーロー・シグナル》を発動！
　戦闘でモンスターが破壊されたとき、デッキからE・HEROを特殊召喚できる！
《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　レディ・オブ・ファイア》を守備表示で特殊召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　レディ・オブ・ファイア》　攻　1300／守　1000】

「だが、ヘリオス・トリス・メギストスの攻撃後、モンスターが存在していれば、もう一度攻撃できる！

フェニックス・プロミネンス！！」

「な……！？」

またも、その身を燃やして突撃を敢行するヘリオス。
十代の場に、それを防ぐカードは――無い。

「――ターンエンド。
さあ、十代君。君のターンだ」

「お、俺のターン……」

眼前に立ちふさがるのは、７０００を超える攻撃力を持つ、
強大な――そして、大きな壁だ。

手札も無い。
場にカードも無い。

こんな状況で――何ができるというのだろう？

「諦めるのか？」

「違う！　諦め、なんか……」

一瞬、それを否定できずにいる自分がいる。

勝機はあるのか？

あるとしても、万に一つの可能性に過ぎない。

「君は、自分が積み重ねてきたものも裏切るつもりか？」

「積み重ねてきたもの……なんて、

俺にはもう手札はないし、伏せカード（リバース）も無い。

墓地のカードだって、除外されたし……」

「ならば――未来を信じることも、諦めるのかな？

自分の可能性を信じることもやめると？」

「未来――可能性……」

未来。可能性。

――それは、あくまでも喩（たと）えだ。

いずれ訪れるであろうただ一つの機会。

たった一度のチャンス。

それは。

「分かったよ、大徳寺先生。
……――ドロー！！」

一筋の光が放たれたような――。
そんな錯覚が、アムナエルを襲う。

そして。

「手札がこのカード1枚だけのとき、
《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　バブルマン》は手札から特殊召喚できる！
来い、バブルマン！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　バブルマン》　攻　８００　／　守　１２００】

「そして、場と手札に他のカードが存在しない場合、
俺は更に2枚のカードをドローする！
これが本当に最後のドローだ！！」

勢いよく、カードを引き抜く。
――そのカードは。

「俺は手札から、《E・HERO（エレメンタルヒーロー） フェザーマン》を召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） フェザーマン》 攻 1000 ／ 守 1000】

――そうだ。

たとえそれが、その時その時では意味を為さずとも、
積み重ねというものには必ず意味がある。

どんな行動だって無駄ではない。
そこに――意志さえ込められていれば。

「魔法（マジック）カード、《ミラクル・フュージョン》を発動！
今フィールドと墓地（過去）のモンスターで融合する！」

その瞬間。
――どことなく、アムナエルの表情が、和らいだ。

「俺が融合素材として選択するのは、
クレイマン、バーストレディ、バブルマン、
そしてフェザーマンの４属性のＨＥＲＯ！
現れろ――《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エリクシーラー》！！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エリクシーラー》　攻　２９００／守　２６００】

「おお……！！」

それは――紛れも無く、錬金術の集大成。

――賢者の石（エリクシール）の化身、と呼ぶべき姿だった。

故に、アムナエルの目が、喜びに満ちているのは、
ある意味では必然だと言えるだろう。

「エリクシーラーの融合召喚成功時、
ゲームから除外されたすべてのカードをデッキに戻す！」

「――……」

除外されたカード、その全てが、
エリクシーラーの放つ波動によってデッキに戻される。

――つまり。

「これで、ヘリオス・トリス・メギストスの攻撃力はゼロ！
――バトルだ！　Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エリクシーラーで、
ヘリオス・トリス・メギストスを攻撃！
フュージョニスト・マジスタリー！！」

地。水。炎。風。
四つの元素がエリクシーラーの腕に集約され、
その腕に刃を形作る。

――そして、一刀の下に、
眼前の敵を――ヘリオス・トリス・メギストスを両断した。

ビィ――――――――！！

と、デュエルの終了を告げるブザーが周囲に鳴り響く。

「よっ、しゃあああああああああ！！」

その音と同時か、少し早くか。

十代は自らの腕を天高く突き上げ、自らの勝利に雄叫びを上げた。

＊　＊　＊

「……見事だったよ、十代君」

崩れかけの顔で、アムナエルは笑いながら、

十代へ、彼を称える言葉を告げる。

「……大徳寺先生」

「おや……こんな状態になっても、まだ私を先生などと……」

「先生は先生だろ？　……それに、
先生の目的って……」

「……野暮なことは言いっこなし、
ということにしようじゃないか。それよりも」

アムナエルは、自らが抱えていた本を開いた。

――と。

「明日香！」

「明日香君は、この通り無事だよ。
連れて帰ってあげなさい」

「それはいいけど……」

「十代！」

唐突に聞こえてくる、聞きなれた声。

――万丈目の声だ。

声のした方を振り向けば、万丈目が御堂を背負っているのが見えた。

……ただし、その格好は、アムナエルから聞き及んでいた通り、ファントムのそれと同様のものだったが。

「御堂君も一緒にね」

「……大徳寺教諭、なのか？」

「君もそう言ってくれるのか……」

ふふ、と笑いつつ、アムナエルは崩れかけた体をゆっくりと持ち上げる。

右足、左足、と順番に、ゆっくりと床を踏みしめ――立ち上がる。

「十代君。君に、これを託そう」

そう言って、アムナエルは十代へ本を手渡した。

「これは……」

「エメラルド・タブレット。
……私が長年取り組み、積み重ねてきた成果だよ」

何も言わずに、十代はそれを受け取った。

ここで受け取らないことも、あるいは選択肢としてはありうるかもしれない。
だが、それはできなかった。
やろうとすらも思わなかった。

そうしなければならないような気がした。

「ああ――これで、思い残すことは何もない。
……十代君。万丈目君。皆に、よろしくと言っておいてくれるかな？」

「うん……分かった」

「……」

万丈目が無言でうなずくのを確認し――直後、
アムナエルの肉体は、砂のように崩れ去った。

――こうして。

セブンスターズと、七星門の鍵を賭けた戦いに、幕が下りた。

アムナエルの崩れた砂粒の中から発光体が飛び立ち、
それを、少しばかり太り気味の猫が胃に収めたことは、
恐らくは誰も知らない事実だろう。

25束目：奇跡（後書き）

あ…ありのまま　今　起こったことを話すぜ！

「おれは　アムナエル戦を書き終わった　と
思ったら　いつのまにか内容が支離滅裂になっていた」

な…　何を言っているのか　わからねーと思うが

おれも　何をされたのか　わからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…　手抜きだとか「いつもの枠」だとか

そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を　味わったぜ…

どうしてこうなった。（挨拶）

枠です。いや真面目にどうしてこうなった。

確かに1話に収めようと努力はしていた。

しかし……しかし、ここまで内容が薄まるとは。

こんなんアムナエル戦じゃねえ！　という方もいそうですよ！

チョー→ビックリだよ！（

というか除外枚数が多すぎて何がなんやら分からなくなってきましたよ！；

ミス等ありましたら、ご指摘お願いします。

そういうことで、これでセブンスターズ編は終了。
次回以降は2年目準備編となります。

ちゃんと1年目のラスボス戦もやりますので、あと5話くらい続くかと思います。
まあ、あくまでも目算でしかありませんが。

2年目……やっと書きたかった場所が書ける……！；

ところで、次回ゲストキャラ扱いでＴＦの追加キャラ出演させようと考えているんですが、
投票の方、打ち切ることになるかもしれませんがよろしいでしょうか？

キャラ被りが無いように選択するようになりますが、
皆様の投票結果を無視することにもなりかねません；

ともかく、現状を言えばうさみんとゆきのんがトップです。
あとは以前の投票の通りでしょうか。

既に原稿は完成しつつありますので、かなり短いですが、
明日～明後日をめどに打ち切るつもりです。

ともかく、今回はこれで。

それでは。

追記　マクロコスモスの効果の部分、
　　および、黄金のホムンクルスの部分の記述の修正完了しました。

26束目：祭日

――突然だが、これは質問だ。

まあ、適当に聞き流してくれていい。

ただ、自分の状況に当て嵌めて考えてくれると、
俺としては気持ちを共有できるだろうから助かるんだけど。

朝。

目が覚めて、さて今日も頑張ろう、
と考えて動き出したその直後、人間は、何かしらの行動を起こすものだ。

例えば、朝食を作る人もいるだろう。

朝起きて、なにはともかく歯を磨く人もいるかもしれない。

パソコンの電源を入れるという人も、当然ながらいるだろう。

あるいは、二度寝してしまう人もいそうだ。

音楽を聴き始める。それもいい。

映画鑑賞。朝から贅沢だ。

まあ――そんな風に、いろいろと選択肢はあるだろう。
俺の場合は朝起きたら、とりあえず顔を洗うところから始める。

元々低血圧気味な身だ。
朝……というか、寝起きに弱い俺は、
冷水で顔を洗わないと、どうにも目が覚めたような気がしない。

さて、まあそんな調子でいたわけだ。

寝ぼけ眼のままに洗面所へ向かい、冷たい水で顔を洗う。
柔らかいタオルで軽く拭き、とりあえず鏡を見て身だしなみを整える。

――さて、ここからが質問だ。

もしも。
もしも朝、目が覚めて自分の顔を見たとき。

――なんかもう見るからに厨二臭い人間がそこにいたら、どうする？

さて、改めて。
なにはともあれ、自己紹介をさせてもらおう。

御堂和真。
デュエルアカデミア本校に在籍している。

それ以外は……特に無し。
しいて言えば、暴走しがちだという程度の――まあ、
出自はともかく、肉体的にはごく普通の人間だ。

そう。そのはずだったのだ。

とある事情があり、俺はしばらくの間、自分で自分を認識できないような状況にあった。
というより、意識が無かった。

一か月間程度、昏倒していたようなものと認識していただければ結構だ。
そんなことがあって、ようやく目を覚ましたそのとき、
俺は普段の習慣通りの行動をとろうとして――そこで、気づいた。

俺、何でこんな左目だけ赤いんだ？　と。

ところどころ顔の各所も少し形が変わってるけど、
まあそこはコンプレックスが克服できたとしてよしとする。

ただ、問題は――この目。

左目。赤。

右目。黒。

創作でならありうる話だ。
というより、ありふれた話だ――が。

虹彩異色症。
いわゆる、オッドアイのことだ。

左右の目の瞳の色が違うこと。
これは、人間社会においては簡単にありうるようなことではなく、
数万人に一人とか、そういった低確率でしか遺伝しえない症状だ。

後天的にも、病気を患ったり、
事故などに遭ったりして瞳の色が変わるようなことはあるようだが、
実際にはそんなことはそうそうありえない。

で――俺は、少なくともこれまで普通の生活を続けてきたわけで。

こんなことになるような原因など、まったく知らないわけで。

まあ、一言で言えば――。

「どうしてこうなった……!?」

いかん。
危険だ。

このままでは、「厨二病患ってるイタいやつ」の烙印を押されかねん。

いきなりオッドアイだぞ？
そう考えなくて他になんと考える。

現実にオッドアイなんてそうそういねえっての。
昨日まで普通だったやつがいきなりそんなんなってみろ。
「ああ、こいつはイタいことになったんだな」と思われることは確実。

――どうする？

どうやって、隠す。
カラーコンタクト。無い。そんな必要が無かったんだから当然だ。
眼帯。無い。余計イタいし怪我してるわけじゃない。
目を閉じて過ごすか？　いや、今度こそただの馬鹿と思われてしまう。
だったら――どうする！？
「――！！」
俺の脳裏に一瞬、閃きが走る。
伊達正宗。夏候惇。ハンニバル・バルカ。
――これらの人物の特徴は？
そう、隻眼だ。
つまり――！！

「この厨二的な目さえくり抜けばいいんだな……！？」

「何を言ってるんだお前は！？」

――と、キレのいいツッコミと共に、三沢が俺の部屋に入ってきた。

ただ、今の俺には、三沢が来たことに対する感慨は何も湧かない。

むしろ――見られた、という思いだけが、沸々と湧いてくる。

「ヒィィィ！？　と、止めてくれるな三沢ァ！

俺は早急にこんな黒歴史を体現したような眼をブチ抜かなきゃいけないんだァァ！！」

「落ち着け御堂！？

お前が何だかそういうことを嫌ってるのは分かるが、

それにはいろいろと理由があるんだぞ！」

「……理由？」

試しに聞いてみると、三沢は俺がいない間の一か月のことを話し始めた。

まず、俺がカミューラに敗北して行方不明になったこと。

なんだかんだと色々なことがあって、結局セブンスターズは全員倒したこと。

あと俺がその中にいたこと。

しかも「ファントム」とか名乗るカッコつけ野郎だったこと。

俺の了承なしに勝手に「精霊が見える目」とやらを移植されたこと。

しかもそれが赤かったこと。

「成程、よく分かった」

「わ……分かってくれたか」

「つまりそれって俺の与り知らぬところで、勝手に黒歴史が量産されてるってことじゃないですかァァァァァ！！」

「うおおおおおそうだった！？」

フォローになってねえ！

結局厨二病だってことじゃねえか！

「死にたい……」

「だ、大丈夫だ御堂！　たいして目立たない！
……はず」

「テメェ最後に『はず』って付けたなコラ確信無いじゃねえか」

実際目立つだろう。

どうせ色変えるなら、両目とも赤にしてくれればよかったのに。
究極の闇的な意味で。

「はぁ……もういいよ。
仕方ない。しばらくはカラーコンタクトでなんとかする。
コンタクトが届くまでは……そういう病気なんだとでも言い訳しておくか」

あまりにも苦しい言い訳だ……が……。

……本当にある意味病気だったな。
じゃあ、もっと別な言い訳をしておこう。
万が一の場合、逃げるか誰かに説明してもらうかすればいい。

もっとも、前者の場合は余計に誤解が広まるだけのような気もする

が。

「それにしても――えらく長いこと眠っていたものだな」

「そういえば、最後に見た日付と、かなり食い違ってるけど……。俺はどこくらい眠っていたんだ？」

「だいたい三日間か。万丈目の見立てでは、肉体的な疲れと闇のゲームによるダメージ、それから精神的な疲労によるものだろう、ということだったが」

三日間――想像以上に長く眠っていたものだ。

もっとも、俺の感覚では数日と経過してはいないのだが。数時間前にはカミューラとデュエルしていたようなものなのだから。

だいたい、経過した日にちは一か月近く。

となれば、三週間近く、俺は体を乗っ取られていたわけだ。

そのときのことを覚えていないのは、唯一の僥倖（ぎょうこう）だろう。

三沢の言うとおりのことを――いや、それ以上のことをしているのだとすれば、

俺は多分立ち直れないし、数日後に水死体になって発見されているかもしれない。

「ああ、そういえば御堂、知っているか？」

「何なんだ、思わせぶりに。さっさと『何を』知っているのかを言え」

「う、む……それはそうなんだが……。
ほら、お前はずっと休学の扱いだったし、
あんなことがあったから、きっと知らないだろうが……。
……今日、文化祭なんだ」

文化祭。
ぶんかさい。

――文化祭、だと？

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁあ！？」

唖然。あるいは、驚愕。

――そんな叫びが、俺の口から洩れた。

＊　＊　＊

三沢の話によると、だが。

この文化祭において行う行事は、それぞれの寮によって変わる。
オベリスク・ブルーであれば喫茶店。
ラー・イエローならば屋台を経営し、それによって利益を上げる。
して一方、オシリス・レッドではコスプレデュエル大会なるものが行われているらしい。

まあそれはそれとして、今日の今日までずっと休学していた俺は、どこかしらの屋台に配属されているということは無い。

休学――というより、単に行方不明になっていただけなのだが。
俺の場合、2～3週間の休学だったので、取り立ててペナルティは無かった。
というより、状況が状況だけに、学園側も強気には出られないのだろう。

言うなれば、自分たちの依頼のせいで行方不明になったようなものだ。
そういった部分を突かれると厳しいのだろう。

――で、午前7時現在、まだ文化祭は始まっていない。

来賓や外来の客が大勢来るのだから当然だ。
俺の場合、その間のテント設営や準備、
料理のアドバイザーとして動き回る必要があるのだが……。

「上杉！　タコ焼きのタネを作るときは、
粉は標準よりも少なめにしろ！
パサパサのタコ焼きじゃあ客は満足しないぞ！
常に一定以上の水準のものを提供するよう心掛けろ！
具体的なレシピは紙に書いたからそれを見ながらやればいい！」

とか。

「山中！　リンゴ飴用のリンゴは、
少しでも痛んでれば取り換えるものだろうが！
客にクレーム付けられたらどうする気だ！
ただ、もったいないから後で俺のところに持って来い！
全部調理して後で配るから！」

とか。

「神楽坂！　作り置きするなって言っただろ！
お前は微妙にでも冷めた焼きソバを食いたいと思うのか！
それから、ソースは目分量で入れるな！
可能な限り一定の量に抑えるよう努力するんだ！
具体的な量は容器横の目盛を見ればわかるから！」

とか。

「大原！　それに小原も！　串焼きは、
それぞれの肉ごとに分けて焼いてくれって言ったじゃないか！
牛はそっちから見て左、豚は真ん中、鶏肉は右！
油が混ざって味も混ざる可能性がある以上、
そういったところには細心の注意を払ってくれ！
あ、豚は染み出る油が多いから、火傷には十分気を付けるように！」

とか。

「三沢！　フランクフルト用のソーセージ、
それからトウモロコシと、皆のための支援物資の購入頼む！
それからお好み焼きは、パックに詰めることができる大きさに抑

えること！
　ただし、値段に見合った大きさに整えることも忘れずに！」
とか。

……まあ、いろいろなことがありましたとさ。

我ながら、本当に世話焼きというか、
手持無沙汰であるような時間を作りたくないというか……。

まあ、こういう場合に自分の能力が活かせるというのは、
存外に気分もいいし、何よりも「周囲の役に立っている」という気がして、
精神的にも良好だ。

どことなく、俺の左目に注目している人間がいないでもなかったが、
それも「仕事に集中する」という名目で、
俺の頭にとどめないように心掛けた。

まあ、そこはそれ。聞いてくる人間もいるにはいたが、
基本的には「触れられたくない部分だ」と悟ってくれたのか、
諦めてくれる人も多かった。

まあ、そうじゃない人からは逃げたのだが。

『それでは、これよりデュエルアカデミア本校、
第８回文化祭を開催いたします！』

――と、そんな風に感慨に耽っていると、
遠方、後者の方から、島内全域に響き渡るほどの音声で、
この文化祭の開催が告げられた。

「お仕事終了……っと」

どうせ、俺のすべきことは、もう何もない。
であれば、あとは適当に巡ってみるだけだが――。

「っと？」

唐突に、着信音が鳴った。
ＰＤＡではなく、俺の携帯だ。
発信元は――レイか。

「もしもし。久しぶり」

『あっ……も、もしもし、カズ兄ぃ！？
ずっと連絡取れなかったけど、大丈夫なの！？』

「あー……そっか。そうだよな。
ごめんな。ちょっと、色々なことに巻き込まれてた。
でも、解決したから、もう大丈夫だよ」

『そうなんだ……うん、安心した』

俺も、安心した。
カミューラが、レイに手を出すことを言及したあの瞬間、
正直に言って、かなり肝を冷やしたのだ。
心配どころか、あの数分で胃に穴が開きそうだったレベルだった。

「それで、どうしたんだ？」

『あ、うん。今日、アカデミアで文化祭やってるでしょ？』

「ああ」

『一般入場者券、カズ兄ぃのお父さんたちがくれたんだよ！
ボクもこっちに来てるから、できたら合流しないかなって思って』

「へぇ。いいじゃないか。
それで、今どこにいるんだ？」

『ええっと……今は、コスプレデュエル……？
うん、レッド寮の前』

レッド寮か。
……そういえば、三沢から聞いた話では、
十代が俺のＨＥＲＯデッキの一部を預かってるって話だったな。
ついでに取りに行くのもいいか。

「分かった。なら、今から迎えに行くから」

『うん。待ってるよ！』

その言葉を聞き、俺は携帯電話での通話を打ち切った。

レッド寮には不穏分子がいないこともないが、
まあ、大丈夫だろう……と思う。
あそこには十代や万丈目もいるし、危険ということは無いだろう。

「……そういえば」

俺の記憶が確かならば、文化祭のコスプレデュエルで、
十代とブラック・マジシャン・ガールがデュエルを行うはずだ。

そこに関わりに行くのもいいが……そもそも俺が出る幕なんて無いし、
すべきことも無いし、コスプレにもあまり興味は無いし。

まあ、さっさとカードを回収して、
皆で文化祭を見て回って、それで終わりでいいか。

「平和だ……」

今日のデュエルアカデミアは、久しぶりに平和だ。

＊　＊　＊

さて、それから五、六分は経っただろうか。

俺はレッド寮の前までやってきていた。

見れば、コスプレデュエルの会場は盛況の様子だ。

……どうやら、ブラック・マジシャン・ガールが来たみたいだな。

この様子だと、十代に「カード返してくれ」なんて言えそうには無いな。

まあいいか。

それより、レイは――。

「……お」

いた。

５０メートルは離れているだろうか。

俺のことには気付いていない様子で、

何やらブルーの制服を着用した男に話しかけられているようだ。

……アレって、確か入学当初に俺と三沢が倒した相手じゃなかったっけ？

一人だけだけど、あの顔は見たことがある。

名前は覚えてないが。

……っと。雲行きが怪しくなってきたか？

少しだけとはいえ、レイの顔が険しくなる。
何を言われたのかは知らないが……ふむ。
俺が出て行ってもいい問題なら、すぐにでも走り寄って解決に向かうんだが……。
こういう場合は、少しは様子を見ていた方がいいだろう。
そうやってしばらく待っていると、唐突に、
男がレイの腕を取って――。
「凶(まが)れえええぇぇぇぇ――――ッッ！！」
「まそっぷ！！？」
次の瞬間には、５０メートルの距離すらも一瞬でブチ抜いて、
その張本人の顔面をブッ飛ばしていましたとさ。
はっはっは。まさか生身で生体時間加速(クロックアップ)ができるとは思いませんでしたよ僕は。
「あ、あれ、カズ兄ぃ！？」

「うぎ、げぇっ！？　御堂！？
おま、お前……ずっと行方不明だったんじゃなかったのかよ！？」

「ああ、そして、昨日まで昏倒してたさ。
だが――ンなこたァどうでもいい。
貴様は嫌がるレイの手を強引に取り、連れて行こうとした。
俺にとってはそれだけで十分だ」

「なん……ななな、な、なぁーにを言ってるのやら、
俺たちは分かんねぇなあ！　俺たちはただ、
ちょっとこの子をお茶に誘っ――」

「絶望がお前のゴールだッ！」

「あぷぁぁぁぁああ！？」

綺麗なアッパーカットが決まり、
男の顎が叩き上げられる。

直後、某カブト並みの後ろ回し蹴りが、男の頭に突き刺さった。
威力だけでなく、速度も極まった最高の一撃。
……直撃し、瞬間、男は卒倒した。

「大丈夫か、レイ！」

「その人の方が大丈夫なの！？」

「大丈夫だよ。基本的に、アカデミアの連中は体が丈夫だし」

「で、でもそれにしたってすごい吹き飛んで行ったよ！？」

「気にするな！」

「気にするよ！？」

ふむ。

さっきから妙に痙攣してるようにも見えるが、

まあ、そのくらいなら大丈夫だろう。

俺くらいになると、死ぬ直前のことまで分かるからなー。

……主に、経験のおかげで。

「やりすぎだよカズ兄ぃ。昔も、何回かこういうことあったけど……。

それにしても、こんな格闘ゲームみたいなコンボ決めたのって、

どれくらいぶりなの？」

「ん……４年ぶりかな」

確か、あのときは、俺の両親が働きに出てたときだった。

当時の俺は小学校６年。レイは１年か。

俺はレイの家で、俺の両親の帰りを待っていて――。

そのとき、レイが友達を二、三人連れてきたんだったか。

ちょうどそのとき、一人だけ男の子がいて、

そいつが、何を血迷ったのかは知らんが、突然レイの体を触り始めて――。

……気付いたら、空中コンボ決めてたなぁ。

あのときは本当に無意識だった。

頭の中で［Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ］なんて音が聞こえたような気もした。

「――その戯事（ざれごと）に付き合ってやる。十秒間だけな」

なんて言ってたっけ。

そのマセガキは、どうやら巨大なトラウマを植え付けられたようだが。

今考えると大人げなかったかな、と思う。

「それより、よく来たな、レイ。

一人で来たのか？」

「うん。……前みたいにはならないように、
今回は許可取ってあるからね？」

「そりゃそうだろう。というか、
ウチの父親に招待券貰ったんなら大丈夫だろ。
おじさんたちも了承済みだろうし」

でもなければ、今頃俺はレイを問い詰めてるだろう。

「金はあるか？」

「うん。事前にお父さんたちに少し貰ってきたから」

「そっか。なら大丈夫だな」

一年に一度の祭りだ。
今日くらいはお小遣いでもやろうかと思ったが……。
まあ、いらん心配だったようだ。

こらそこ、普段から甘やかしすぎじゃねえのとか言うな。

「どこに行きたい？」

「んー……屋台に行きたいかな。
カズ兄ぃたちのスペースでしょ？」

「まあ、そうだけど……」

あいつらがちゃんとやれてるか確認するのもいいか。

「なら、行くか」

「うん！」

そうして、俺とレイはイエロー寮の方面へと向かって行った。

……あ。あのナンパ男忘れてた。

ま、いいか。

＊　＊　＊

「カズ兄ぃ、ボク、ちょっと思ったんだけど」

「ん？」

休憩所で焼きそばを頬張っている最中、
唐突に、レイがそんなことを言い始める。

「何で左目だけそんなに赤いの？」

「……！！」

マズい。
再開した直後は、前髪が影になってて隠れてたから、
レイには目の錯覚だと言って誤魔化していたのだが、
――それもこれで限界か！？

高速で思考しろ。最速で導き出せ。
どうにかして考えろ、都合のいい言い訳を！

――これだ！

「……実は、ちょっと事故しちゃってさ。
視力は戻ったんだけど、どうもそれ以来色が抜けたみたいで」

「え？　何で色が抜けたら赤くなるの？」

「色素が抜けたんだよ。血液の色が直接出てるんだって話だった」

「ふーん……大変だね、カズ兄ぃ」

やった！　誤魔化せた！！

いや、喜ぶべきポイントが若干ズレてるような気もするが、今はこれでいい。

決して俺の厨二病が暴走したわけじゃな……。
いや、暴走してるな。三沢の話では。

うん、俺じゃないんだよ。
やろうと思ってやったんじゃないんだよ……。

「ところでさ、カズ兄ぃ」

「今度はどうした？」

「最近カズ兄ぃ忙しいみたいだから、少し気になったんだけど。
……昔のことって、覚えてる？」

「昔のこと？」

昔のこと……覚えてないこともない。

いや、当時もはっきりと自意識が確立していたのだ。
覚えてないことは少ないだろう。

「だいたいな。覚えてないことは少ないと思うぞ？」

「じゃ、じゃあ……ほら、ボクがいじめられてた頃のこと、覚えてる？
確か……三年生のとき」

リアルに中学校二年の頃……つまり、二年前のことか。

「ちょっと前のことじゃないか」

「うー……ボクにとっては、二年でも昔なのっ！」

ああ、そりゃそうか。

他と比べて聡明な子だけど、まだレイは11歳なんだ。

人生の5分の1――。

そう考えると、納得はいくか。

ああいった年頃の子供は、どうにも自分たちと違う者を排斥（はいせき）する傾向にある。

レイは、普通の女の子と違って、「ボク」という一人称を用いる。

本来それは、男が使うべき言葉遣いのはずだ。

だからこそ――「違う」からこそ、

レイは、どうにもいじめの標的にされていたらしい。

それに気付いた俺が黙っていられるだろうか。

正直――そのときは、本気でブチ切れた。

らしい。

先程のナンパ男のときの比じゃない。
アレは、まだ手加減している方だ。

らしい、と表現したのは、そのときのことをおぼろげにしか覚えていないからだ。

一説には、そのときのいじめの首謀者を転校に追いやったとか。
あるいは、見て見ぬふりを続けていた教師を半殺しにしたとか。
いやいや、全殺しで少年院に送還されたんだとか。
悪鬼羅刹のようにクラスを壊滅に追い込んだとか。

……なんだか、ただのうわさに尾びれと背びれがくっついて、
勝手に泳ぎだした挙句に超進化してるわけだが、
その大筋は間違っていない。

確かに、あの事件の首謀者は転校した。

ただ、一応弁解はしておこう。
俺はあくまでも、穏便にコトを終息させようと、
相手方に話をつけにいっただけだ。

確かに、そこでちょっとばかし小汚い手段は使った。
とはいえ、危害は加えていない。精神的にもだ。

あの家族は、自発的に転校した。

真実はそれだけだ。

見て見ぬふりを続けてきた教師に関しては……。
どうだろう。そこまで怒りが湧いたわけじゃない。
ただ、俺としてはそんな人間がいることに悲しくなっただけだ。

だから、ちょっと奴の給与明細に手を加えて、
向こう二月分の給料を8割減らしただけだ。

給料を元に戻してほしくば、もっとまともに生徒と向き合うこと、
と念押しはしたんだが。……夜中に延々と電話をかけて。

そしたらノイローゼになったらしく、
計らずとも、半死半生の状態になってしまった、と。
それだけの話なのだ。

「あの事件が終わったとき、カズ兄ぃが言ってたこと、覚えてる？」

「ああ。『俺はずっと、お前の味方でいてやる。
そばで守っていてやる。だから泣くな』……だっけ」

我ながらキザでカッコつけすぎだが、
実際、あのセリフでレイは落ち着いたらしい。

翌日から元気に学校に登校するようになり、
いつも通りの俺たちの関係に戻った……というところか。

「あれって、プロポ――」

「あれ？　御堂!?」

と、レイの言葉を遮るようにして、大きな声が休憩所に響く。
これは――。

「お、三人娘」

ブルー寮の三人娘――青葉さん、宮田さん、委員長の三人だ。

「『お、三人娘』――じゃないでしょ！
目を覚ましたんなら、何で顔の一つも見せにこないの!?」

「あう、そうですよぉ！
私たちだって心配したんですよ！」

「あー、これはそのー……いや、
別に悪気があったわけじゃなくて、ほら。
……目が覚めたの、今日なんだが」

これは正直なところだ。
しかし――。

「それにしたって連絡の一つくらい入れるものです！
私たちは、と、友達じゃないんですか！？」

「うぐぅ……」

それを言われると弱い。

俺がこの三人のことを友達と思ってないなんてことはありえない。
ただ――連絡するにも、やっぱり手順や、
あるいは俺の忙しさというものもあって……。

いや、言い訳にしかならないな。

「悪かったよ、ごめん。

……ただいま」

「「「よし！」」」

三人から同時に許しをもらってしまった。

……ま、これはこれで。

「……ってレイ、どうしたんだ？」

「……なんでもないよ」

そう言って、ぷくりと頬を膨らませるレイ。

何でこんなに不貞腐れてるんだろうか。

……俺、何かしたか？

「で――その子、誰？」

「レイのことか？」

「そういえば、見たことが無い顔ですね。
御堂君の妹さんですか？」

「んー……似たようなものかな。
家族ぐるみの付き合いでさ、昔から面倒見てるんだ」

「へぇー……やっぱり、御堂さんは面倒見いいんですねっ」

「面倒見がいいと言うか……」

俺はただ、やらなきゃいけないことをやってるだけというか。

「ね、ねぇ、カズ兄ぃ、この人たちは？」

「ああ、俺の同級生。右から……」

「それには及ばないわ。というか、
この場合はボクたちが自己紹介すべきじゃないの？」

そりゃそうだ。
じゃ、任せた、とだけ告げて、俺は食事に取りかかった。

とは言っても、どうせ食いかけだったわけで。
五分とかからずに終わるわけで。

……そのくせ女性陣はガールズトークに花咲かせちゃってるわけで
エェェェ！！

どうしようこれ。

アレ？　実は俺ってすごいアウェー？
なぁにこれぇ。

彼女いない歴＝年齢（実年齢）は帰ってクソして寝ろってこと？

べ、別に虚しくなんてないんだからねっ！！

……嘘です。
超虚しいです。はい。

俺も話に加わりたいです。
でもなきゃ帰りたいです。
でもレイがいるから帰れません。

あれ、すごいジレンマだわ。

解消できそうにねえ。

そんなことを考えながら、ぼーっと中空を見つめていると、
唐突に、背後から小突かれた。

「何ボーっとしてんの？」

見れば、不思議そうな表情をした青葉さんがいた。
……いや、キミらのせいだろ！？

「……話に加われないからボーっとしてた」

「加わればいいのに」

「女の子だけで話してる最中に無理矢理加わるほど野暮じゃない。
……それより、終わったのか？」

「あうっ、今からデュエル場にでも行って、
皆のデュエルの光景を見せてあげよう、って話になりましたっ」

確かに、いい考えかもしれない。

基本、エンターテインメントに関しては、
レッド寮が一任しているようなものだ。

今は大盛り上がりだろうし、相当に人も多いだろう。

正直、人ごみは嫌いだし、あまりあっちには近づきたくない。

文化祭期間中は、校内のデュエル場が解放されている。
……とはいえ、今はレッド寮のパフォーマンスの方に回ってる人の方が多いだろう。

それに、丁度12時に差し掛かった現状、昼食を取るために、
そういった場所からは退出する者が多い。

となれば、使える可能性は大いにあるわけだ。

「レイさんはいずれ、デュエルアカデミアに入学すると聞きました。
でしたら、参考ばかりに私たちのデュエルでも見学してみたらどう、
と聞いてみたら……」

「なるほどね。いいと思うけど……誰と誰がデュエルするんだ？」

「私と御堂君なんてどうです？」

「《レインボー・ライフ》と《ハネワタ》と、
《ライフ・コーディネイター》と《ピケルの魔法陣》積んでくる」

「何でそうメタに走ろうとするんです！？」

フルバーンって。
ライフポイント４０００だとすぐに消えてなくなるじゃねえか。
いや、今の委員長の場合はロックバーンだろうけど。
……十分イヤだよ！！
実は委員長ってＳなんじゃねーのか。
動けない相手をじわじわと削り取る――。

「とんだ女王様だよ！！」

「何の話ですか！？」

いかん。口に出していたようだ。
いや、でも委員長が悪いんだからな？
そんな、こっちの世界の環境下では無茶苦茶強いデッキ使うなんて。

そんなやり取りを続けながら、
俺たちは校舎の中、デュエル場へと向かっていった。

２６束目：祭日（後書き）

枠です。
そんなわけで脇役復活です。

あそこから持ち直しました。
我ながらこじつけすごい（

そして、御堂視点だとすごく書きやすいということに気づきました。
うわ何これ。ちょっとすごい。

暴走させてるだけなのに気づいたら１００００字超えてますよ。

……まあ、そんなわけで、今回の文化祭編は続きます。

次回、ＴＦゲストキャラ出演です。
まだ本格参戦じゃありませんけどね！

27束目：邂逅（前書き）

……なんつーか、いろいろすみません。

暴走しすぎました。

というか、今回は多分、皆様の思うような展開にはならないかと思います。

そのあたり注意して閲覧してください。

27束目：邂逅

「ありゃ」

デュエル場にたどり着いてみると、そこには既に先客がいた。

女の子が3人。いずれも、制服らしき衣類を着用している。

デザインは、どうもアカデミアの制服と似ているようだが……。

「アレ、中等部の子じゃない？」

「中学生？　……ああ、成程」

仮にも、これから進学するかもしれない学校なのだ。

下見ついでに来訪していてもおかしくはないだろう。

「どうする？　邪魔するのも野暮だろうし……」

「あう……待つべきかもしれませんねぇ……」

「今から使いたいんだけど、って言えばいいんじゃないの？」

「下手に気を遣わせてもまずいだろ。
……ま、しばらくは様子見だろうが……」

どうもデュエルをしているらしい。
先程から場に何もモンスターが出てこないのは、
互いの状況が膠着（こうちゃく）しているからか。

『……！』

お、何か出た。
火炎を纏った――竜、じゃないな。
どちらかと言えば恐竜か。

となると、【ジュラック】か？
あのデッキを使う女の子がいるものとは。珍しいこともあるもんだ。

直接攻撃（ダイレクトアタック）――は、決まらないな。
ソリッドビジョンのエフェクトを見るに、《ポセイドン・ウェーブ》でも使ったのだろう。
となれば、相手は水属性か種族統一デッキを使っていると解釈できるが。

「あの二人に見覚えはあるか？」

それとなく、三人に向かって聞いてみる。
……が、誰も頷かない。
まあ、そういうこともあるのだろうが。

『……！』

などと考えているうちに、今度は別なモンスターが場に現れる。
見た感じは……魚、か？
いや、鮫か。《メタボ・シャーク》だろうな。確証は無いが。
アトランティスがあるならまだしも、《サイバー・シャーク》は出せないだろうし。

ジュラック系統のモンスターは、基本的に攻撃力が１７００のものが多い。
１８００のラインを越えられたら、対処は難しいだろう。

「……とはいえ、【ジュラック】の子の方が優勢か」

「何故です？　攻撃力に勝るモンスターが出たみたいですけど」

「確かに、攻撃力に関してはあっちの……。
【魚族】使いの子の方が高いだろうけど、《ジュラック・ヘレラ》は、
『ジュラック』の戦闘破壊をトリガーに現れるモンスターだ。
手札か、あるいは墓地にいれば特殊召喚が可能という簡単な条件。
しかも攻撃力は２３００。もしも仮に今場に出てるカードが、
《ジュラック・ヴェロー》なら、後続の『ジュラック』が。
《ジュラック・スタウリコ》なら、トークンが生成される。
案外、簡単に形成は逆転するだろうな」

まあ、あるとは明言できないわけだが。
あったらあったで、状況は変わるだろう。

「あ、本当だ」

「なんか、かわいいトークンが二つ出てきましたっ」

しかし、その考えは甘い。

あのトークン、俺の想像の通りなら――化けるぞ。

『――！』

次の瞬間、２体のトークンの姿が消え失せる。

そうして現れるのは、巨大な「恐竜」。

あの形状を考えると――《ジュラック・タイタン》か。

「ちょ、ちょっと御堂、何アレ！？」

「《ジュラック・タイタン》。攻撃力は３０００。

効果モンスター、及び罠（トラップ）への耐性と、自己強化能力を備えてる。

……言うなれば、【ジュラック】の切り札だな」

冷静に解説なんてしてるが、

実際にあの現場にいたらそれどころじゃないだろう。

こりゃ決まりかなー、などと考えていると、
確かに、タイタンが火炎を吐き出したその直後、
そのソリッドビジョンは消え去った。

ちょっと前からでもデュエルしていたのだろうか。
呆気ない幕引きだが……。

あ、魚族使いの子が怒り始めた。

負けが認められない、とか。
認めたくない、とか。
そんな声が聞こえてくる。

「キリもついたみたいだし、仲裁しにいくか」

「そうですね」

と、俺は率先して、現場にいる二人の女の子の下へと向かっていった。

「だーかーらー！　再戦を要求しますわ！」

「そ、そんなこと言われても……六条さんも待ってますし……」

「んにゃー？　私はいいですよ。もう少し二人でやったらいいんじゃね？」

「だそうですわ。さあ、ワンモア！！」

階段を下りてみると、彼女たちの話がよく聞こえるようになった。

この、ちょっとばかしお嬢様口調なのが……魚族使いの子だろう。

で、弱気な口調が、【ジュラック】の子だと思う。

もう一つは――見学してた子だろうか。

六条、と呼ばれていたようだが。

文字通り、三者三様ってところか。

さて、まずはどうやって切り出すべきか……。

「にゃ？」

と、そんなことを考えながらこの喧騒を眺めていると、
先程までデュエルをしていた二人から、
少し離れた場所で待機している少女――六条？
が、俺に視線を向けていることに気が付いた。

――のだが。

正直に言う。俺としては、そんなことよりも重要なことがあった。

ぶっちゃけて言おう。

この子、髪の毛水色。

え、なにこれ。どこの？（バカ）だよ。
それともイカちゃんか？　綾波さんか？
いや、どれでもいいんだけど。
なにこれ。

「あやや。お邪魔でしたか？
えーっと……先輩？　でいいんですよね？」

「邪魔ってわけじゃないんだけどね。

ちょっとモメてるみたいだから、どうしたんだろうと思ってさ」

「あー、お気遣いなくです。ああいうの、結構頻繁にやってるんで」

じゃれあってる、という解釈でいいのだろうか。

まあ、それなら納得できないこともないが……。

「ろ、六条さーん、助けてぇぇぇ……！」

「宇佐美さん！　逃がしませんわよ……って、あら。
そちらの方たちは……？」

ようやく、俺たちの存在に気が付いたのだろうか。
お嬢様口調の少女が、俺の方に目を向ける。
それと同時に、弱気な口調の……宇佐美さん？　も。

「先輩方みたいっすねー。なんか二人の騒ぎが目についたみたいですが」

「あ、その……すみません」

「あら、でも今は使用中ですわ。申し訳ありませんわね」

「いや、別にいいよ。暇を潰しに来ただけだし……。
それより君たち、中等部の子？」

突然こんなことを聞くのも不自然かもしれんが……。
まあ、ナンパ目的じゃないんだし、大丈夫だろう。

「そです。高校の下見に来たって感じですねー」

「ああ、やっぱりそうなのか。
……君たち3人だけ？」

「そうですよ。
ま、この時期まで見学に来てないような人はそうそういませんからね。
私はサボってサボって、結局、中学の卒業式直前になって来たクチです」

「私は六条さんとは違いますわよ。もうずいぶん前に済ませてきましたわ」

「……実は、私は六条さんと同じで……」

成程、この二人はともかくとして、
一人は友達づきあいで来た、という感覚か。
悪態をつきつつも、結局こうして来てるのは、やはり友情の現れか。

しかし……どうにも、俺の行動はただのお節介だったらしい。
これなら、わざわざ介入する必要も無かったかな。

「で、どうするのよ御堂」

このままだとデュエル場が使えないことを察したのか、
そんな風に問う青葉さん。

……確かに、どうするべきかなぁ。

「ま、いいや。しばらく見せてもらおう。
今の中学生の実力も見たいし、レイの見学にはうってつけでもあるだろ」

「そうかな？」

「……ま、実際のところはともかく、
レイにとってもいい経験だろうと思うよ、俺は」

「ん。なら見てみる」

そんな俺たちの様子を、僅かばかり不思議に思ったのか、遠巻きに見てる子――六条さん？　が、俺に聞く。

「……お二人は、兄妹ですか？」

「ん……血縁関係は無いけど、まあ。似たようなもん……かな」

「ヨスガれない設定ですか。チッ。どっちにしても都知事ブチギレですが」

「出会って数分でこんなツッコミ入れるのもアレだが、お前、その発言はどうなんだ！？」

ヨスガれないって。

というか設定って。

というか、ヨスガ云々って、元々俺の世界の言葉じゃないのか。

……あれぇ？

つーか仮に血縁関係があったとしても、

ヨスガる気なんかサラサラ無ぇよ！！

「へぇ……」

何を怪訝に思ったのだろうか。
六条さんは、俺の表情を窺いながら、
ニヤニヤと笑っている。

「何か……問題でも？」

「くく。いえ、別に問題はありません。何一つ。
ところで――先輩。お名前の方、伺っても構いませんか？」

「名前？」

構わないと言えば構わない、が――。

はっきり言おう。
この少女――胡散臭い。

それも、かなり、だ。

いや、本来なら、こんなにシリアスにはなりえないんだが……。
それでも、だ。

問題は、この子がふざけたことを言ってることではない。
問題なのは、この子が、俺しか知りえないことを知っていることだ。

――カマをかけられたか？

俺とレイの関係は、確かに兄妹のそれに近い。
というより、外見から判断すれば、兄妹と思われても仕方がないかもしれない。

俺もレイも、黒髪で長髪。
今の俺はともかく、ちょっと前までの俺はそれに加え、両目も黒かった。
背丈や体格は似ようがないにしても、少なからず、似ていると言えるだろう。

だからこそ、そうやって……兄妹か、と問う。
仮に兄妹であれば、「ヨスガるんですか？」と聞く。
逆に、そうでなくとも、先ほどのような聞き方をする。
というか、都知事の名前が出た時点で、色々おかしいとは思うだろう。

――そこで、ツッコミを入れるか入れないか。

この子の判断材料は、多分、そこだ。

……とはいえ、俺みたいにツッコミを入れることができる人間は少ないだろうが。
それどころか、普通は気付かずにスルーすると思うが。
そうでない場合は、もっと別な手段で探りを入れる……か。

「御堂和真だ」

「六条有珠（ろくじょうアリス）です。
れ……妹さんの見学が目的なら、どうでしょう。
私とデュエルしませんか？」

「自信ありげだな。……ま、構わんが」

どんな相手にも対応可能なデッキ――。
よし、ＨＥＲＯを……！

って、アレ今無ぇじゃん！！

ど、どうする！？　じゃあ、もっと別なデッキ――。
安定性のあるデッキで行くしかない！？

よ、よし。
こっちで行こう。

安定した成績が狙えるし、何より使ってて面白いし。

「そういうことだ。悪いけど、しばらく上の方で待っててくれ」

「仕方ないわね……御堂、中学生に見せてあげるといいわ、高校生の底力」

「努力はするよ」

というか、それってただのいじめじゃないのか。

……などと心の中でツッコミを入れつつ、デュエル場の上部、観覧席へと移動する皆を見送る。

「上手い人払いのやりかたですね。今なら、叫んだりしない限りは皆に話を聞かれることも少ない」

「……どういうつもりだ？流石に、文化祭に来たことについては偶然だろうが……」

「偶然ですよ。偶然、先輩みたいな人を見かけた。この際だからと思って、接触を図った。……これ以上の理由が必要ですか？」

立場が逆なら――あんな台詞は使わずとも、
確かに、少しカマかけてみるくらいのことはするだろう。

「それだけなら構わない。だが……お前、何者だ？」

「何者も何も――多分、同じですよ？」

同じ。
その意味が示すところは、つまり――。

……転生。

おおよそ、現実にはありうるはずのない現象。
しかし――実際に、俺が体験している現象。

二人目、だと？

「にゃはは。というか、そんな目してたら、
普通は声かけると思いますよ？
だって、ほら。モロに邪気眼……」

「俺だって分かってるから言うなや！？

というか、好きでなったわけじゃねーよッ！！」

「えっ……？」

「心底不思議とでも言いたげにこっち見んな！
というかお前だって似たようなモンだろうが！
水色の髪とか、普通いねェよ！　？（マルキュー）かてめェは！」

「ぬぁっ！？　自覚してるんですから、そこ指摘しないでくださいよ！？
私だってなりたくてなったわけじゃねーですよ！！
生まれたときからこれなんですよ！！」

「お前が先に言ってきたんじゃねェか！
というかソレ地毛かよ！？」

「えーえー地毛ですよっ！！　というか先輩こそ、
それカラーコンタクトとかじゃないんですか！？」

「カラーコンタクトなら今は黒いのが欲しいンだよ俺は！」

いかん、ただの痴話喧嘩になりつつある。

さっきまでは欠片ほどはシリアスな雰囲気が漂っていたはずなのに、
どうしてこうなってしまったんだろう。

落ち着け、俺。何を話すべきかってことくらいは理解しているはずだろう。

ごほん、と咳払いをして、改めて六条へと向き直る。

「……改めて、だ。六条、お前は何なんだ？」

「言ったでしょう？　きっと、先輩と同じですよ。
……詳細な部分での違いはあるかもしれませんが。
というかさりげなく敬称消しましたねあなた」

「ま、経験と年齢に関しては、相違点と言えるだろうが……。
あとお前に『さん』なんて付ける必要性が見当たらない」

「ま、うだうだ言ってても仕方ないですね。
――では」

「「――決闘（デュエル）！！」」

こうして。

二人の異邦人同士の決闘（デュエル）の幕が、切って落とされた。

「私のターンですね。ドロー！
私は手札から、《カラクリ商人　壱七七（イナシチ）》を召喚します！」

【《カラクリ商人　壱七七（イナシチ）》　攻　５００　／　守　１５００】

姿を見せるのは、人を模した形状のカラクリ。

木製のその機体は、ともすれば、
つつけば崩れてしまうのではないかと思わせるほどに危うい。

……しかし、【カラクリ】か。

展開力も高いし、一線級のデッキの要素として扱われることもある、
その外見とは裏腹に、かなり優秀なカテゴリだ。

そもそも、優遇されてる機械族というだけで、実力は申し分ないが。

「カラクリ商人　壱七七（イナシチ）の通常召喚成功時、
デッキから『カラクリ』と名のついたカードを1枚手札に加えられます。
私は《カラクリ兵　弐参六（ニサム）》を手札に加えます」

確か――カラクリ専用のリクルーターだったっけ。
サーチャーでリクルーターを呼び込むか。
当たり前ではあるけど、堅実な手だ。

「永続魔法、《カラクリ解体新書》を発動します。
『カラクリ』が表示形式を変更するたびに、
カラクリカウンターを乗せます。カードをセットして、ターンエンドです！」

「カラクリ」が存在するだけで機能するドローソース……。
考えるまでもなく厄介だ。

同系統のカードには、《六武衆の結束》がある。
あちらは召喚するだけで機能したが……そういう意味では、
調整版と言ったところか。

「俺のターン、ドロー！」

いずれにせよ、攻撃しなければ始まらないし終わらない。
対処方法は、今は考えずともいい。

「手札から、《パンダボーグ》を召喚する！」

【《パンダボーグ》　攻　１７００　／　守　１４００】

「――バトル！　パンダボーグでカラクリ商人　壱七七（イナシチ）を攻撃！」

「攻撃表示のカラクリ商人　壱七七（イナシチ）は、攻撃対象に選択されたとき、表示形式は変更され、守備表示になります！」

更に、解体新書にカウンターが乗る。
ダメージを与えられない上に、追加ドローの権利……。
まだまだ始まったばかりとはいえ、俺の方が不利なのが、目に見えて理解できる。

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

「私のターンです。ドロー！
私は手札から、《カラクリ兵　弐参六（ニサム）》を召喚します！」

【《カラクリ兵　弐参六（ニサム）》　攻　１４００　／　守　２００】

「更に永続魔法、《マシン・デベロッパー》を発動！
この効果により、場の全ての機械族モンスターは、攻撃力が２００ポイント上昇しますよ！」

更に、機械族モンスターが破壊されるたび、カウンターが蓄積される。
そのカウンターごと、《マシン・デベロッパー》を墓地へ送れば、
カウンターの数以下のレベルの機械族が特殊召喚される。

……面倒な効果だ。
全体強化という時点で、既に厳しい点が多い。

――しかも。

「さぁて、カラクリ兵　弐参六で、パンダボーグを攻撃です！」

「チッ……！」

自爆特攻のダメージを減らすにも都合がいい。
この効果で何を呼び出してくるのかも問題だが、
これでマシン・デベロッパーにカウンターが乗ってしまう。

自らパンダボーグの目前に現れ、
叩き伏せられるカラクリ兵　弐参六。

部品がバラバラと場に散らばり――。

「ここで、カラクリ兵　弐参六（ニサム）の効果を発動しますよ！
カラクリ兵　弐参六（ニサム）が戦闘で破壊されたとき、
デッキからレベル４以下の『カラクリ』を特殊召喚できます！
《カラクリ武者　六参壱八（ムザンイチハ）》を特殊召喚！」

【《カラクリ武者　六参壱八（ムザンイチハ）》　攻　１８００　／　守　６００】

残骸から形成されていく、一機の「侍」。
その攻撃力は、背後にそびえる機械群によって、
２０００にまで高められている。

「バトルフェイズ中に特殊召喚されたので、まだ攻撃は可能です！
カラクリ武者　六参壱八（ムザンイチハ）で、パンダボーグに攻撃！」

「くっ……パンダボーグが戦闘で破壊されたとき、
８００のライフを払うことで、デッキから、
レベル４のサイキック族モンスターを特殊召喚できる！
俺は《テレキアタッカー》を特殊召喚する！」

【《テレキアタッカー》　攻　１７００　／　守　７００】

あのモンスターへの対処法はいくらでもある。
ただ――問題なのは、その次、後続だ。
たとえ俺がここで高攻撃力のモンスターを出したとしても、
その守備力に問題があれば、あのカードで対策されることは間違いない。
八方ふさがりとは言わんが、正直に言えば厳しい。
ライフポイントは、俺が残り２９００。
六条は――３９００。
俺が支払ったことが原因とはいえ、よくもまあこんなに減ったものだ。
「ふふん。これでターンエンドですよ」
「……俺のターン、ドロー！
俺は手札から速攻魔法、《緊急テレポート》を発動！
デッキ、手札からレベル３以下のサイキック族を特殊召喚できる！
デッキから《サイ・ガール》を特殊召喚！」
【《サイ・ガール》　攻　５００　／　守　３００】

緊急テレポートの効果で現れる――見た目、ちんまい女の子。
頭頂には、中華服で言うシニヨンキャップ――いわゆる、お団子にも近い装飾物。
全体的にアニメタッチな印象の風貌も合わせ、
「萌え」方面に「かわいい」カードだ。

「さ……幼女（サイ・ガール）ですと!?
先輩、アンタ幼女嗜好（ロリコン）だったんですか!?」

「人聞きの悪いことを言うんじゃねえ!?」

というか、何にサイ・ガールとルビを振った!?

「ええい、面倒くさいな……俺は更に、《メンタルプロテクター》を通常召喚!」

【《メンタルプロテクター》　攻　０／守　２２００】

今なら、ハイパーサイコガンナーをシンクロ召喚できる。

……しかし、あのカードの守備力は２５００。
次の返しのターンで対処される確率は高い。
――なら、こっちだ！
「レベル４、サイキック族のテレキアタッカーと、
レベル３のメンタルプロテクターに、
レベル２、サイキック族のサイ・ガールをチューニング！
現れろ、《メンタルオーバー・デーモン》！」
【《メンタルオーバー・デーモン》　攻　３３００／守　３０００】
「げげっ……！？」
「メンタルオーバー・デーモンの効果を発動。
墓地のサイキック族を除外することができる。
俺はこの効果により、サイ・ガールを除外する。
――バトル！　メンタルオーバー・デーモンで、
カラクリ武者　六参壱八（ムザンイチハ）を攻撃する！」
「くっ、六参壱八（ムザンイチハ）は守備表示になりますよ！」
だが、それで構わない。

緑色の火炎を纏った拳が六参壱八（ムザンイチハ）を砕く。
同時、二枚の永続魔法にカウンターが累積されるが――それは、
今のところ気にすべきことではない。
どうせ、いずれ溜まってしまうものなのだから。

「これで、ターンエンドだ」

「くっ……私のターンです。ドロー！
私はカラクリ解体新書を墓地に送り、２枚のカードをドローします！
更に、マシン・デベロッパーの効果を発動し、
レベル４以下の機械族を墓地から特殊召喚します！
《カラクリ武者　六参壱八（ムザンイチハ）》を特殊召喚！」

【《カラクリ武者　六参壱八（ムザンイチハ）》　攻　１８００／守　６００】

……あれ、おかしいな。
さっきまで手札そんなに多くなかったはずなのに、
何であんなに増えてるんだろう。

というか、場の状況が半分近く元に戻ってるんだけど。
なぁにこれぇ。

「更に手札から、《カラクリ小町　弐弐四（ニニシ）》を、守備表示で召喚します！」

【《カラクリ小町　弐弐四（ニニシ）》　攻　０　／　守　１９００】

「カラクリ小町　弐弐四（ニニシ）が場に存在するとき、もう1度だけ『カラクリ』を通常召喚する権利が与えられます。《カラクリ守衛　参壱参（サイザン）》を召喚！」

【《カラクリ守衛　参壱参（サイザン）》　攻　６００　／　守　１８００】

「――！」

俺の予測が正しければ……まさか。

「レベル４、機械族のカラクリ武者　六参壱八（ムザンイチハ）に、レベル３のカラクリ小町　弐弐四（ニニシ）をチューニング！出でよ、《カラクリ将軍　無零（ブレイ）》！」

【《カラクリ将軍　無零（ブレイ）》　攻　２６００／守　１９００】

眼前に姿を現す、機械の「将軍」。
おおよそ、これまでのものとは違いすぎるほどに違う造形。

そこから感じる気迫は、余りあるほどに凄まじい。

「カラクリ将軍　無零（ブレイ）のシンクロ召喚成功時、
デッキから『カラクリ』を特殊召喚できます！
《カラクリ忍者　九壱九（クイック）》を特殊召喚！」

【《カラクリ忍者　九壱九（クイック）》　攻　１７００／守　１５００】

「更に！　レベル４の機械族、カラクリ忍者　九壱九（クイック）に、
レベル４のカラクリ守衛　参壱参（サイザン）をチューニング！
さあ、現れなさい！　《カラクリ大将軍　無零怒（ブレイド）》！」

【《カラクリ大将軍　無零怒（ブレイド）》　攻　２８００／守　１７００】

「っ……！」

ウゾダドンドコドーン！！

なんてブレイド繋がりでふざけてる場合じゃねえ！
本当にヤバいぞこれは。カラクリ将軍が2体一気に並ぶなんて、
普通に考えてあり得るものか！？

いや、現実的にあの展開力を鑑みれば、
普通にありえることだろうけど……それにしても、マズい！

「カラクリ大将軍　無零怒（ブレイド）のシンクロ召喚成功時にも、
カラクリ将軍　無零（ブレイ）と同様に『カラクリ』を特殊召喚できます！
《カラクリ忍者　七七四九（ナナシック）》を特殊召喚！」

【《カラクリ忍者　七七四九（ナナシック）》　攻　２２００　／　守　１８００】

このターンで3体の上級モンスターが揃った。
いずれも攻撃力は２０００を超える大型。

――狙いはワンショットキルか！？

「これで終わらせましょうか！　カラクリ大将軍　無零怒（ブレイド）で、
メンタルオーバー・デーモンを攻撃！」

攻撃補助も行わずに攻撃――！？
いや、間違いなく――何か、ある。

「手札から速攻魔法、《カラクリ大暴走》を発動します！
無零怒（ブレイド）の効果を無効にし、攻撃力を１０００ポイント上昇させます！
よって、攻撃力は――３８００！」

「チッ――！」

無零怒（ブレイド）の攻撃によってその身を散らす、メンタルオーバー・デーモン。

その残骸から緑色の火炎が立ち上り――。

「メンタルオーバー・デーモンの効果を発動！
メンタルオーバー・デーモンの効果で除外したモンスターを、

可能な限り特殊召喚する！　《サイ・ガール》を守備表示で特殊召喚！」

【《サイ・ガール》　攻　５００　／　守　３００】

火炎の内より、サイ・ガールが帰還する。

「サイ・ガールが除外されている状態から特殊召喚されたとき、デッキの上から1枚を裏向きに除外する」

「ですが、もう無意味ですね！
カラクリ忍者　七七四九（ナナシック）でサイ・ガールを攻撃！」

「伏せ（リバース）カード、オープン！　《チューナーズ・バリア》！
これにより、チューナーであるサイ・ガールの破壊を、次のターンのエンドフェイズまで防ぐ！」

「んなぁっ！？　なんつー微妙なカード入れてるんですか！？」

後で青葉さんから折檻だな。

確かにこれは微妙なカードだが、
カードの効果自体が微妙なのではなく、
正確には「使いどころ」があまり無いだけだ。

実際、チューナーは場に出れば、すぐにシンクロ素材とされることが殆どだ。
俺だって、滅多なことがなければ、チューナーを場に残したりはしない。
チューナーのステータスは、その大半が一般的なモンスターよりも低いからだ。

だが、サイキック族のデッキは、
どうにもチューナーが場にでずっぱりという場面が多い。
サイコ・コマンダー然り、クレボンス然り。

そこで、何気なしに入れてみたが――こんな場面で役に立つとは。

「カードを伏せ、ターンエンドです！」

「俺のターン、ドロー！」

サイ・ガールを残したはいいものの、
結局のところ、劣勢に変わりは無い。

メンタルオーバー・デーモンは破壊されてしまった。

――だが、あれだけが俺の切り札か、と問われれば、当然ながら違う。

1手が駄目なら2手目。
2手目も駄目なら3手目。
それが、俺のデッキの基本的なコンセプトだ。

「俺は《サイ・ガール》を生贄に捧げ、
《サイコ・エンペラー》を召喚する！」

【《サイコ・エンペラー》　攻　２４００　／　守　１０００】

「サイコ・エンペラーの召喚成功時、
墓地のサイキック族モンスター1体につき５００、
自分のライフポイントを回復する。
俺の墓地に存在するサイキック族モンスターは5枚。
よって、２５００のライフを回復する」

「２５００ぅ！？
初期ライフの半分より多いじゃないですか！？」

「そして更に、サイ・ガールが墓地へ送られたことで、
効果によって除外されたカードを手札に加える。
……そして伏せカード、《サイコ・チューン》を発動！
墓地のサイキック族モンスターを、チューナー扱いとして特殊召喚する。
《メンタルプロテクター》を特殊召喚！」

【《メンタルプロテクター》　攻　０　／　守　２２００】

現状、これが最良――とは言えないにせよ、
ある程度、良策とは言えるだろう。

「レベル６、サイキック族のサイコ・エンペラーに、
レベル３、チューナーとなったメンタルプロテクターをチューニング！
現れろ、《ハイパーサイコガンナー》！」

【《ハイパーサイコガンナー》　攻　３０００　／　守　２５００】

「サイコ・チューンの効果を受けたモンスターが場から離れたとき、
サイコ・チューンは破壊され、蘇生したモンスターのレベル、
×４００のダメージを受ける」

合計で１２００。だが、それも大幅に回復した今なら些細なことだ。
ライフポイントの残りは、３７００。
たった２００の差なら、この場で逆転できる！

「バトル！　ハイパーサイコガンナーでカラクリ将軍　無零（ブレイ）を攻撃！」

「あうっ……！」

撃ち放たれる一撃により、爆砕する無零（ブレイ）。

４００のダメージが六条を襲う。

残り３５００。

表示形式の変更効果を持つのは、現状では無零（ブレイ）のみ。

ハイパーサイコガンナーの攻撃力は３０００。

このままうまくいけば、押し切れそうだが――。

「カードをセットし、ターンエンドだ」

「私のターンです。ドロー！

……まさかここまでやるとは思いませんでしたよ、先輩。

流石、１年間のキャリアは違いますね」

「お世辞はいい。……つまり、何が言いたい？」

「いやね、つまり――私に『ここまで』させるのは、

先輩が初めてだってことですよ」

「……」

いや、何を言ってるか理解できないんだが。

「私は手札から、《カラクリ参謀　弐四八（ニシハチ）》を召喚します！」

【《カラクリ参謀　弐四八（ニシハチ）》　攻　５００／守　１６００】

「カラクリ参謀　弐四八（ニシハチ）の召喚に成功したので、
私はカラクリ参謀　弐四八（ニシハチ）自身の表示形式を変更します。
そして、カラクリ大将軍　無零怒（ブレイド）の効果により、
『カラクリ』の表示形式が変更されたので、１枚ドローします」

――それから、何をするつもりなのだろう？

レベル５のモンスターと、レベル３のチューナーが揃った。
《ギガンテック・ファイター》を召喚するには十分な用意だし、
現状を考えれば、ハイパーサイコガンナーへの対処としてもはたらく。

だが、それで「本気」と言えるものか？

本気だと、本当に言うのなら――何か。
何か、ある。

「初めてですよ、このモンスターを見せるのは」

――初めて？

「レベル５のカラクリ忍者　七七四九（ナナシック）に、
レベル３のカラクリ参謀　弐四八（ニシハチ）をチューニング！」

レベル８のシンクロモンスターの数は、それなりに多い。
選択肢も、当然ながらそれに応じたものがあるが――。

「――王者の鼓動！」

「……――！！？」

待て。

――待て。

その口上は――。

……

――その前口上は！！

「今ここにに鳴り響く！　一騎当千の英姿（えいし）、心根（こころね）に刻め！
――シンクロ召喚！」

その、姿は――！！

「燃え盛れ、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！！」

【《レッド・デーモンズ・ドラゴン》　攻　３０００／守　２０００】

それは、紛れも無く。

――シグナーの６竜の、一つ。

レッド・デーモンズ・ドラゴン、だった。

27束目：邂逅（後書き）

そんなわけで、なんか出ました。

や、我ながらちょっとやりすぎたと思います。色々と。

というかデュエルが進まないよ！　へるぷ！（

……ええ、もう一人の転生者の登場です。
一年後輩です。なんかかなりヲタっぽいです。

とはいえ、やはりただのヲタではありませんでした。
実のところ、他にも色々と設定やらなんやらが用意してあります。
が、まあそのあたりは次回以降、ということで。

まあ、正直、人気次第では降板も仕方ないかと思っているんですが。
不人気出して不評を買っても仕方がないと思っていますし。
……ただ、ストーリーに絡むので出したいと言えば出したいですね；

ちなみに名前の方は、実は元ネタがあります。
知ってる方は知ってるんじゃないでしょうか。
名前のアリスを1文字変えるだけでそのキャラの名前です。
なんせ、名字の六条だって直接の引用ですし（

ちなみに口上ですけど、あれはあくまでも本筋のジャックとの「区別」ということで、別段厨二病というわけではありません。

……はい、厨二病なのは間違いなく私でしょう。
だってあれ考えたの俺ですもの。いや、ｗｉｋｉの力も借りましたけど。

とりあえず、物語としては初めの分岐点に入りました。

毎度のごとく、何かしら修正点などありましたら、ご報告していただけると助かります。

28束目：特典（前書き）

毎度毎度全力全壊でグダグダ展開です。
その辺ご注意を。

28束目：特典

「馬鹿、な――――！？」

その姿は紛れも無く、
俺が知りうる限りでは、世界に存在しえないカード――。
悪魔にも似た、精強な姿の竜（ドラゴン）。
レッド・デーモンズ・ドラゴンだった。

「何故、お前がそのカードを――――！？」

「何故……って、おかしいことでもあるんですか？」

「当たり前だ！　存在するはずがない。
いや、そんなものがあっていいはずがないだろうが！」

語気を荒げて告げると、六条ははぁ、と嘆息する。

「だったら、そもそも何で私はこんなカードを持ってるんでしょう。仮にこのカードが存在してはいけないものであるとすれば、この時点で世界の防衛機制なんかで消滅させられていてもおかしくないでしょうし」

反論は――できない。
確かにその通りだ。

もし、仮にあのカードが存在すら許されないものであるとすれば、それを召喚した六条も、同様に存在が許されない。
いや、所持している時点で危険だ。

だとすれば、俺だって――。

「その様子を見る限りでは、先輩も持ってるみたいですね。黒薔薇ですか？　黒羽ですか？　ま、どれでもいいんですけど」

「……っ」

「どちらにせよ、私が言うべきことは変わりません。
――それは」

バッ、と天を指差し――六条は、声高に宣言する。

「――私こそが、この世界の主人公なんです！！」

「……」

……空気が凍り付いた。

え。何この娘（コ）。何言っちゃってんの？

さっきから頭のネジ1本どころか何十本も外れてるような言動してると思ったが、

まさか、ここまでブッ飛んでるとは思わなんだ。

これは……俺、反応していいのか？

というか、反応した方がいいのか？

分からん。カブト乙とでも言えばいいのだろうか。

というか、あんなポーズまでしちゃって。恥ずかしくないのか。

俺も大概頭のネジ1本くらい外れてるけど、

六条のそれは常軌を逸している。

「……伏せカード（リバース）、《バスター・モード》を発動。
ハイパーサイコガンナーを生贄に、
《ハイパーサイコガンナー／バスター（スラッシュ）》を特殊召喚する」

【《ハイパーサイコガンナー／バスター（スラッシュ）》　攻　３５００／守　３０００】

「ちょ……いきなり無視ですか！？」

なんだか、こいつの妄言を聞いてると徐々に冷静になってきた。

途中までシリアスな雰囲気になりつつあったのに、
本当、何でこうなるかな。

正直、うぜぇ……。

空気クラッシャーの素質でもあるんじゃないのか。

「憎たらしいくらい冷静ですね、先輩」

「いや……だって、主人公なんて興味無いから。
そっちでどうぞご勝手にーというか」

「めちゃくちゃドライですねアンタ！？
こういうチャンスに対して積極的な思考を抱けないんですか！？」
「俺は普通より少しだけ裕福な生活が送りたいだけだから」
「枯れてる厨二病……！？」

いや、枯れてるって。
否定ができないのは恐ろしいけど、そこに厨二病を足すな。
ある意味事実だから嫌なんだが。

というか、何でこいつは人の神経を逆撫でするようなことばっかり言うんだ。

「どちらにせよ、これで破壊は無意味だ。
……次のターンで、レッド・デーモンズ・ドラゴンは破壊する」
「大きく出ましたね。ですが――カラクリ大将軍　無零怒（ブレイド）を守備表示に変更！
カラクリ大将軍　無零怒（ブレイド）の効果でカードを1枚ドローします！」

何故守備表示に変更したのだろうか。

そんなことをする理由が、今は無いはず――。

「魔法（マジック）カード、《借カラクリ蔵》を発動します。
私の場の『カラクリ』モンスターを選択し、
デッキからレベル4以下の『カラクリ』を手札に加える。
私は《カラクリ兵　弐参六（ニサム）》を手札に加え、
《借カラクリ蔵》の効果で、カラクリ大将軍　無零怒（ブレイド）の表示形式
を変更します」

もう一度、攻撃表示に戻った。――が。

「そして伏せ（リバース）カード、オープン！　《カラクリ屋敷》！
『カラクリ』の表示形式が変更したときに発動します。
フィールド上のカードを1枚破壊します！
ハイパーサイコガンナー／バスター（スラッシュ）を破壊！」

「チッ……！！」

そういう隠し玉があったのかよ！
だが、それだけなら――！

「ハイパーサイコガンナー／バスター（スラッシュ）が破壊されたとき、
墓地から《ハイパーサイコガンナー》を特殊召喚できる！」

【《ハイパーサイコガンナー》　攻　３０００　／　守　２５００】

攻撃力はレッド・デーモンズ・ドラゴンと互角だ。
相討ちを狙ってくるという可能性も否めないが、
それだと、何故出したのか、という話になってくる。

「フィールド魔法、《風雲カラクリ城》を発動します！
『カラクリ』が相手モンスターとバトルを行う際、
そのモンスターの表示形式を変更できます！」

「……！」

場の状況がガラリと変化していく。

無機質で機械的だった情景。

しかし、それが塗り替わっていく。
六条の背後には――巨大な城が。

「バトル！　カラクリ大将軍　無零怒（ブレイド）で、ハイパーサイコガンナーを攻撃！
そして、その表示形式を守備表示に変更します！」

「チッ……！！」

突如降り注ぐ歯車の雨に、身を縮めて防御態勢を取るハイパーサイコガンナー。
――そこに、カラクリ大将軍　無零怒（ブレイド）の一撃が突き刺さる。
俺にライフの変動は無いが、ハイパーサイコガンナーが破壊されるとなると――マズい。

「そして、レッド・デーモンズ・ドラゴンで直接攻撃（ダイレクトアタック）！
アブソリュート・パワーフォース！」

「くっ……！」

火炎を纏う拳による一撃。
いくらソリッドビジョンだと理解していても、
目に映る映像から受ける恐怖は一向に揺るがない。

――３０００ものライフが削られ、
これで俺の残りライフは７００。大幅に減ってしまった。

「カードを2枚セットして、ターンエンドです！」

「俺のターン、ドロー！」

こちらからの攻撃であれば、《風雲カラクリ城》の効果は発動しない。
だが――どうする？

レッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃力は３０００。
それに対抗できるカードは、ほとんど破壊された。

――どうする？

その気になれば、また召喚できるカードはある。
ただ、タイミングが難しい。それに加え、相手は2体。

――厳しいな。

ただ、このデュエルは闇のゲームではない。
負けたところで何の犠牲も無い。

唯一失われるとすれば、それは俺の尊厳だけだ。
何もせずに負ける、という選択肢も、無いではないが――。

（いや）

それだけは無い。
この新入生の鼻っ柱を折ってやらないことには、
いつまでも、自分の行為に反省を持ち込もうとしないだろう。
……何より、俺はこいつがなんとなく気に入らない。
後先考えずにレッド・デーモンズ・ドラゴンなんかを召喚しやがって。
もしもこれで難儀なことになったらどうしてくれる。
ああ、もう。青葉さんからの制裁なん待っていられない。

――俺が、直々に叩こう。

「俺は手札から、《ディストラクター》を守備表示で召喚する」

【《ディストラクター》攻１６００／守４００】

「おやおや、その程度ですか？」

「……更に装備魔法、《念動増幅装置》を発動する。
ディストラクターに装備することで、ライフコストの支払いを踏み倒す。
そして、ディストラクターの効果により、
お前の３枚の伏せ（リバース）カードを、１枚ずつ破壊する」

「うげっ！」

破壊したカードは――《聖なるバリアー ミラーフォース ー》に、《王宮の弾圧》、《トラップ・スタン》……。

どれもこれも制限級のガチカードだらけじゃねえか！？
ふざけてんのかこいつは！？

「俺は魔法（マジック）カード、《ミラクルシンクロフュージョン》を発動！
墓地に存在するハイパーサイコガンナーと、
メンタルオーバー・デーモンを除外し、融合！
現れろ、《アルティメットサイキッカー》！」

【《アルティメットサイキッカー》　攻　２９００　／　守　１７００】

黒く濁った渦の中から現れる、髑髏を模したかのような顔。
全身から突き出す鋭利なトゲ。大蛇のように伸びる下半身。
禍々しい外見の怪物（モンスター）――アルティメットサイキッカー。

こいつの属性が光なのは皮肉か何かか。

「バトル！　アルティメットサイキッカーで、
カラクリ大将軍　無零怒（ブレイド）に攻撃！」

「くっ……！」

吐き出される黒い炎が、無零怒（ブレイド）を焼き尽くしていく。

六条には１００のダメージが与えられ、
これで残りライフは３４００……か。

「アルティメットサイキッカーが戦闘で相手モンスターを破壊したとき、
その攻撃力分のライフを回復する……！」

２８００のライフポイントが加算。
――これで、俺のライフは３５００となった。
ただ、攻撃力で勝るレッド・デーモンズがいる時点で、かなりの部分、行動に制約がかけられる。
アルティメットサイキッカーは次のターンで破壊されるだろうし、それ以外にも問題は山積みだ。

「カードをセットし、ターンエンド」

「私のターン、ドローします！
……まさか、ここまで粘るとは思いませんでしたが、それもこ」

「御託はいいからさっさとターンを進めろ」

「ひっ……！？」

「俺は面倒が嫌いなんだ。
そうやっていちいち無駄な言葉を挟むの、イライラするんだよ……」

「ひっ、す、すみません！　ターンを進行します！
魔法（マジック）カード、《二重召喚（デュエルサモン）》を発動します！
そして《カラクリ兵　弐参六（ニサム）》を召喚します！」

【《カラクリ兵　弐参六（ニサム）》　攻　１４００　／　守　２００】

「さ、更に、二重召喚（デュエルサモン）によって与えられた召喚権で、
《カラクリ忍者　参参九（サザンク）》を召喚します！」

【《カラクリ忍者　参参九（サザンク）》　攻　１２００　／　守　１２００】

場に姿を現す2体のカラクリ。

……だけど、参参九（サザンク）を攻撃表示で召喚したのは、
いくら俺にダメージを与えるためとは言ってもやりすぎだろう。
アレが力を発揮するのは、リバース効果を発動したときだ。
そうじゃないのに召喚……って、明らかにプレイングミスだろ。

久しぶりに本気で睨んだからか？

六条がどうにも萎縮しているようにしか見えないわけだが。

「レッド・デーモンズ・ドラゴンで、アルティメットサイキッカーを攻撃します！
　アブソリュート・パワーフォース！」

「……」

アルティメットサイキッカーに叩きつけられる火炎の拳。
同時、俺に１００のダメージが加算される。

「か、カラクリ忍者　参参九（サザンク）で、ディストラクターを攻撃です！」

更に、短刀によって破壊されるディストラクター。
当然ながら、ダメージは無い。

「……か、カラクリ兵　弐参六（ニサム）で直接攻撃（ダイレクトアタック）します……。
この時、速攻魔法、《リミッター解除》を発動し、攻撃力を倍に……」

「ほう」

「ひっ」

ただちょっと独り言呟いただけなんだが、
どこにそんなに怯えるようなポイントがあったのだろう。
まあいい。

これで俺のライフポイントは残り６００。
残り３ケタ――とはいえ、
残っているんだから意味は無い。
いずれにしても次のターンで終わる。

――あとは、オーバーキルになるかならないか、という程度の話だ。

「た、ターンエンドです」
「俺のターン、ドロー……」

――よし。今日だけはハメを外そう。
思い切り――こいつを叩き潰す。

「俺は永続魔法、《フューチャー・グロウ》を発動！
墓地に存在するサイキック族モンスターを１体除外し、
そのレベル×２００ポイント、場のサイキック族の攻撃力を上昇させる。
俺は、レベル１０のアルティメットサイキッカーを除外する！」

これで上昇値は２０００。
当然、ハイパーサイコガンナー／バスター（スラッシュ）を除外した方が、上昇値は高かったのだが――それはそれ。

「伏せ（リバース）カード、《異次元からの帰還》を発動！」

「……へ？」

「除外されたモンスターを可能な限り、場に特殊召喚できる。
――場に戻ってこい、アルティメットサイキッカー！
ハイパーサイコガンナー！　メンタルオーバー・デーモン！」

【《アルティメットサイキッカー》　攻　２９００　／　守　１７００】

【《ハイパーサイコガンナー》　攻　３０００　／　守　２５００】

【《メンタルオーバー・デーモン》　攻　３３００　／　守　３０００】

サイキック族の中で言えば、少なくとも、
これ以上の布陣は築けないであろう、凶悪な場の状況。

貫通効果を持ち、更には回復効果を兼ね備えた、
両腕に拳銃の機構を持つ狙撃手。

除外と帰還の効果を併せ持つ、
鎧を身に纏った、凶悪な悪魔。

破壊無効効果、更には回復効果を持つ、
凶悪な外見をした超能力の化身。

心臓が弱い人が見たら泣くんじゃないかと思う。

「フューチャー・グロウの効果により、
俺の場の全てのサイキック族の攻撃力は２０００上昇する」

よって、アルティメットサイキッカーは４９００。
ハイパーサイコガンナーは５０００。
メンタルオーバー・デーモンは５３００。
その合計攻撃力は――１５２００。

「アルティメットサイキッカーで、レッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃する！」

「ひっ！」

借りを返す、とでも言うかのような一撃。
黒い炎を纏った拳による一撃が、レッド・デーモンズ・ドラゴンに叩き込まれる。

「終わりだ……！
ハイパーサイコガンナーとメンタルオーバー・デーモンで直接攻撃（ダイレクトアタック）！！」

「うあっ――――――！！」

――そうして、放たれるのは、二種類の閃光。

それが途切れた頃には――もう、このデュエルは終わっていた。

＊　＊　＊

それから、十分ほど経った頃だろうか。
皆の追及を振り切り、説明を後回しにし――その後。

俺は、六条を連れてデュエル場の外、
校舎内、普通教室に訪れていた。

「……散々だ」

「ひっ……す、すみません」

くそっ、と、悪態をつきながら、六条の様子をうかがう。
先程までの、どうにも調子に乗ったような様子とは違い、
今はなんだかおどおどとした……俺に恐れでも抱いているのだろうか？
そんな様子が垣間見える。

「百歩譲って、持っていることに関しては何も言わない。
だが――何故、公共の場、それも衆人環視の場で、
レッド・デーモンズ・ドラゴンを使った？」

「え、そりゃ、その……そうしないと、勝てないと思ったんですけ――」

「……あ？」

「ひっ」

勝てないと思ったから。
こんな野良デュエル程度で、勝てないと思ったから、
レッド・デーモンズ・ドラゴンを使っただと？

「――ふざけるな。ただ勝ちたかっただけだと？
それが後々悪影響を及ぼす可能性があると、理解していてか！？」

「ひっ……い、いや、それは！」

ＧＸの時代はまだいい。
だが、その次―５Ｄ’ｓの時代になると、どうなる？

量産されたシグナー竜。
本物が存在しえない状況。

本物の見分けもつかず、シグナーが赤き竜の力を用いれず――。

「お前は、未来を危険に晒したんだ……！！」

敵を打ち破ることも、できない。
――そんな未来が待っているかもしれないのに。

「そ、んなこと……」

「ありえないと言い切れるか？　間違っていると言い切れるか？
……少なくとも、レッド・デーモンズ・ドラゴンは人目に晒された。
最悪の場合、情報がリークされて量産されかねん。
そうじゃないという可能性も高いが――」

まあ、そもそも「世界に1枚しか存在しないカード」なんてものがあるんだ。
量産されないことの方が多いのかもしれんが。

例えば、いずれ手に入れるであろう、十代のネオス。
あれは情報が漏れても、一切量産はされなかった。

あるいは、プラネットシリーズだってそうだ。
別に量産したって構わんだろう、あれ。

プラネットシリーズは、最初からそういうカードとして開発されたものだ。

世界で1枚のみのカード。そんな枕詞（まくらことば）を受けるためだけに作られたカード。

確かに希少性は高いが、強いかどうかと言われると、少々微妙だ。

切り札として運用することはできるものの、他に良いカードはいくらでもある。

まあ、だからと言って、無理に量産しろと言うわけではないが。

……ただ。

シグナーのカードだけは、そうあってはならない。

あれは、今現在はさして特別なカードというわけではない。

だが、いずれ。

いずれ、世界を賭けた戦いにおいて、重要な意味を持つことになる。

世界で1枚しか存在してはいけない、というわけではない。

だが――偶像に神が宿る、という話がある。

赤き竜が、それに則った形式で現れるとすれば？

――偶像に宿る神の力そのものすらも、拡散する。

そうなれば、使うことのできないカードが現れるのではないだろうか。

直接的に神の力を行使することになるセイヴァーが代表例だろうが……。

「必要以上に自分の力を誇示しようとするな。
今ここで生きていると言っても、結局は、
俺は――俺たちは異邦人なんだ。俺たちの行動ひとつで、
元々あった流れが変わることを考えて行動しろ」

……そのせいで、俺はこんなことに……くっ。
いや、あれはあれで、人道的には間違ったことはしてないと思うけど。

ああしなかったら、結局タイタンは死ぬんだろう。
そうやって見て見ぬふりをするのは、やっぱり気分が悪い。

「……まあ、とはいえ、決して『行動するな』と言ってるんじゃないけどな。
何か行動を起こすにしても、気を付けて行動しろ、という程度の忠告だが……」

「じゃあ、やらかしちゃってもいいんですね！！」

「調子に乗るな」

ゴッ！！　と、左拳で六条の頭頂を小突く。

小突く、というほど優しくはないが。

「ひぅ」

「いいか？　今後一切とは言わんが、重要な局面以外でレッド・デーモンズ・ドラゴンを出すことは許さん。
それこそ、ストーリーの節目で強敵と戦うとき以外は、だ」

「わ、分かりました……」

本当に分かったのならいいんだが……。

さて、まあ追及はここまでだ。
あとは、もう少し重要な部分に踏み込む必要がある。

「ここから先は情報交換だ。まずは……そうだな、レッド・デーモンズ・ドラゴン以外に、何かしら危険なカードは持っていないか？」

「うー……危険なカードって、どんなカードですか……？」

思いつく限りで言えば、いくらでもある。
神のカード、シグナー竜、邪神、幻魔、
それから、俺たちが持つはずのないサイバー流のカード、
プラネットシリーズ、地縛神、ネオスにブルーアイズ……。

「世界に1枚しかないカードなんかだ。
例えば――これか」

そう告げて、俺は1枚のカードを取り出して見せる。

《The big（ザ・ビッグ・） SATURN（サターン）》。

俺が意識を失っている間に、いつの間にか手に入れていたカードであり、
世界で1枚しか存在しないはずのプラネットシリーズ。

「……俺は……少なくとも、6枚は持っている。
今のところ、これ以外はすべて厳重に保管してあるがな」

サターンにアバター。インティとクイラ。
そして――あの2枚のカード。

特に、最後の2枚は俺が持つべきではないカードだ。
あれは――俺には分不相応だ。

「このうち3枚は、元々所持していたもの。
――3枚は、こちらで手に入れたものだ」

「……そういう意味で言えば、私が持ってるのは4枚です。
4枚とも、私がこちらに転生したときから所有しているものですが、
2枚は……怖くて、外に持ち出せませんでした」

「それだけ自制心が働けばいいんだがな。
……レッド・デーモンズ・ドラゴンにも」

「う……で、でも、1枚は先輩と同じようなものですよ！
ほら！」

と、言って俺に突きつけるのは、1枚のカード。
それも、その辺に転がっているような有象無象ではない。

――天使。

《The splendid VENUS》――。

「……プラネットシリーズ、か」

「ヴィーナスです。天使です！　――そう！　まるで私のよ」

「調子に乗るな」

「……すみません」

お前は天使じゃなくて？（バカ）だろうが。

「で、でも、仮説を2つも立てはしたんですよ！」

「仮説？　……ふざけた内容なら承知しないぞ」

「ひっ……い、いや、それなりに真面目な内容です！
だから、その……こういったカードって、もしかして、『特典』なんじゃないかって」

「特典？」

「は、はい。よく二次創作であるじゃないですか、転生モノ。
あれって天性特典で最初から特別な力を持ってたりしますけど、私たちのこれも、そういったものと似たようなものなんじゃないかって。
俗にいう、『強くてニューゲーム』です！」

「ふむ」

確かに、それも一理ある。

強くてニューゲーム。その言葉が一番しっくりとあてはまるだろう。

こちらで言うデュエルモンスターズは、知識があればあるほど、デュエルでは優位に立つことができる。

カードプールに関しても同様だ。

より多く、強いカードを持つ人間が勝つ。

そういう意味合いでは、強くてニューゲームが妥当、か。

「あと、このレッド・デーモンズ・ドラゴンですけど、……もしかして、私たちが持っているからこそ、未来に伝わったんじゃないでしょうか」

「……成程な」

「製造された、なんて描写はありませんでしたし、そうやって考えるのが妥当だと思うんですけど」

どうでしょう？

そう尋ねる六条の言葉に、俺は僅かばかり感心していた。

三幻神なんかは、最も顕著な例だ。

基本的にエジプトから出土した石版によってデザインされる。

デュエルモンスターズのカードは、

ナスカの地上絵も、南米ペルーに存在する。

インカ文明の滅亡の跡。

赤き竜の伝承が残る地域は、

そもそも、デュエルの原型である……あれ、何て言ったっけ。

その場所から石版を発掘した、なんて話は聞かない。

エジプトからは随分と距離が離れているし、

ディアハ？　が行われていたのは、あくまでエジプトだ。

当然、千年アイテムの存在しない地域でそういったことが行われるとは思えない。

石版が存在していたとしても、それは赤き竜（ケツァルコアトル）のものだろう。

あるいは、ソリッドビジョンが反応するものだろうか。

イメージだけで、あそこまで詳細なイラストが描けるものだろうか。

彼らが介入するより以前から、あれらのカードは存在していた。

イリアステルが情報をリークしたという可能性も否定はできないが、

である以上、そういった可能性を用いることはできない。

確かに、赤き竜はその時代の変遷に応じて姿を変えるとされている。

だが、それはあくまでも、
自身の力を発揮するための依代（よりしろ）を変える、という話だったはず。

加え、シグナーの一人の見る夢。
そこに現れた全てのドラゴンの姿が、カードのイラストと同一というのはどういうことか。

通常であれば、ありえない現象だ。

となれば、何かしらの外部要因が必要だ、ということだろう。

それが――「転生特典」か。

成程、外部――俺たちの世界からの由来だとすれば、それにも納得はいく。
そもそも、イメージ映像にしてもドラゴンのイラストにしても、全てが俺たちの世界から脈々と受け継がれたものだ。

……ま、そんな話を続けても、
卵が先か鶏が先か、という議論になるわけだが。

――と、延々と語っていると、六条の表情がどこかぎこちなくなっていく。

まるで――何も考えずにデタラメを言っていると、

ボロが出た子供のような。

貼り付けたような笑みが浮かんでいると同時に、
その額には脂汗が滲(にじ)んでいる。

俺はにこ、と笑いながら――尋ねる。

「――六条」

「い、いやあ、まさかそこまで考えていらっしゃるとは思わなかっ」

がしっ、と六条の左腕を掴む。

さて、一切の根拠も論証もなく、
あんなことを言ったこのお?(バカ)さんには、何と言ってやればいいでしょう?
どうやって折檻してやればいいでしょう?

――さあ、お前の罪を数えろ。

そうやって考えた結果――俺の口からこぼれた言葉は、これだった。
そう告げた俺の体は、どこまでも、そして誰よりも速く動き始める。

Ｓｔａｒｔ　ｕｐ――Ｒｅａｄｙ.

「え、ちょ、やめ、流石にいや、無理ですって！！？
ダメ、無理！！　死ぬー！！　殺されるー！！！
目蓋（まぶた）に無理矢理紙を挟み込まないでー！！！
『シュッ』って横に引こうとしないでー！！！
えっ、何でそんな大量のシャーペンの芯を……って、
いやあああぁぁぁぁあ！！　耳に押し当てないでぇぇ！！
平手で押し入れようとしないでぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

＊　＊　＊

閑話休題。

六条に２８通りの恐怖を与え、数秒の間失神させて早数時間。

あれだけ賑わっていた祭りも、
今は湿っぽく――終わりを迎えようとしていた。

アカデミア中央のキャンプファイヤー。
そこでは、生徒と多くの来校者によるフォークダンスが執り行われていた。

相手は自由。
飛び入りも自由。

例えば、相手をとっかえひっかえ、ということもできる。
例えば、固定のパートナーとだけ、ということもできる。

要するに――そんな、自由な時間。

ダンスはできないわけではない。
ただ、それを切り出すような相手もいない以上、
俺のような人間は、それを遠巻きにみていることしかできずにいた。

手を取り、寄り合い、右へ、左へ――。

誰だって、作法を気にするような人間はいない。

そもそも、それを指摘できる人間がいないのだから当然だ。

俺だって、専門じゃない。

だけど――いちいち、それを気にするのは野暮というものだろう。

とはいえ、踊る相手がいないというのも事実。

周囲を見れば、ちらほらと俺と同じような人間はいる。

十代だって――ってあの野郎ちゃっかり明日香と踊ってやがる。

ちくしょう。

「ぱーるーぱーるりぱーるりらー……」

「か、カズ兄ぃ、何でそんな暗い表情で、
かつ爪を噛み締めながら濁った眼で皆を見てるの……？」

「みんな―し……ん、何だ、レイか。どうしたんだ？」

「あ、その、ほら、隣いいかな、って思って」

「ん……別に了承を取る必要は無いぞ。
知らない間柄じゃないだろ？」

「それもそっか……」

そう言いつつ、レイは俺の隣の芝生に腰かけた。

これはあくまでも自分自身の発言に対するツッコミだが、
「知らない間柄じゃない」と言うと、
どうにも卑猥な意味に聞こえてしまうのは気のせいだろうか。

……はい、そうですね。俺の心が汚れてますね。

「ねえ、カズ兄ぃ。少し聞いてもいいかな」

「どうした？」

「えっと……アカデミアの勉強って、どう？」

どう、か。
何がどう楽しいのか、とか。
あるいは、難しさはどうか、という話だろうか。

「一般的な高校と比べれば、さほど難しいものは無いな。
楽しさは……人それぞれだろう。得意な教科は楽しいとか、
苦手だとしても、芸術系の教科は楽しい、とか思いもするだろうな」

「カズ兄ぃは？」

「どうだろう。とにかく、得たことを吸収することだけを考えてるから、
特に楽しいとも辛いとも感じない」

「へぇ……」

「へぇ……って。参考にはするなよ。
十代は面倒に感じてるだろうし、多分委員長は楽しく思ってる。
俺は惰性で続けてるから特に何も感じないけど、
勉強に対する感情って、本当に人それぞれだからな？」

「うん」

本当に分かっているのだろうか？
他人の意見に流されやすいような子じゃないのは分かってるんだが……。

「じゃ、じゃあ……飛び級って、どう思う？」

「飛び級？」

飛び級……というと、やはりアレか。
学年を飛び越えるアレ。

よく外国で取沙汰（とりざた）される、

9歳の子が大学に入学した、とか、そんな話か。

「俺は……肯定も否定もしないな。
いくら学力があっても、精神的に未熟なら意味が無い。
分不相応だ――というのは、あくまで俺の持論だけどな」

「そうなんだ……」

ただ、それは逆に、大人としての見方ができれば、
飛び級をしてもいい、ということでもある。

……ま、結局は俺の考えでしかないか。

「で、どうするんだ？」

「え？　ど、どうする……って、何が？」

「踊りにいかないのか？
……俺と話してても仕方ないだろ。
もうちょっと、祭りを楽しんできたらどうだ？」

「うん、それじゃあ」

と、レイは俺に向かって、右手を差し出してくる。

……何だこれ？

「踊ろっ、カズ兄ぃ。
だって、楽しんでくるべきなんでしょ？」

にまっ、と。

朗らかに笑いながら、レイはそんな提案を、俺に告げた。

俺は――。

「ダンスは苦手なんだけどな……」

軽く嘆息して、差し出された手を受け取った。

――兄なんだから、妹をリードしろってことかね。

などと考えながら、俺は促されるままに、
キャンプファイヤーに照らされた中央へと足を運んでいた。

28束目：特典（後書き）

御堂なんて爆発すればいいんや！

枠です。このキャラ作ったの俺なのに何言ってんですかね。

そういうことで、学園祭編終了です。
本当は1話で終わらせるつもりだったのにどうしてこうなった（

六条への苦情フラグビンビンですね。
でもいいんです。そういうふうに作り上げましたから（…
あらゆるウザキャラを掻き集めた結果がこれだよ！！

はい、すみません。普通に鬱陶しいキャラに仕上がりました。
でもいいんです。それでいいんです。重要なことじゃない（

ちなみに、作中で言及した紙シュッは真面目に危険です。真似をし

ないでください。
当然ながら、シャーペンの芯も論外です。真似をしないでください。
前者に関しては、本当にやって流血したという話も聞きますので…
…。

ちなみに、作中のあれはあくまで未遂です。
挟み込む寸前で止めたり挟み込んでみたりして口で「シュッ」と言
ってるだけですのでご理解のほどお願いします（

次回はようやく第一期最終決戦です。
対戦相手は――うふふふー（

第二期に入ったら今回の最強カードみたいなコーナーでも作ってみ
ようかなーなどと愚考する枠でした。

それでは！

29束目：熾烈（前書き）

今回は何枚もゲームオリジナルカードが登場します。
一応は効果に調整を加えたうえで登場させますが……。

なんというか、チート臭い。

や、使うのあの人ですけども。

毎度のことですが、色々と破綻注意です。
今回は流石にねーわと思いました。ええ。

毎度のことではありますが、燃えるような描写は無いので、適当に脳内保管しつつＢＧＭでも流してお楽しみください。

29束目：熾烈

楽しかった学園祭も終わり、早数日。

片付けも当日の内に終了し、
特にすべきことも無くなり、授業も通常通りのそれに戻った。

当然ながら、俺も通常授業に戻ろうとしていたのだが……。

「お呼びでしょうか、校長先生」

「おお、よく来てくれたね、御堂君」

――どういうことか、俺は校長室に呼び出されていた。

理由の推察も、いまいちできずにいる。

いや、その時間を与えられなかった、というのが正しいか。

ともあれ、どういうことか、俺は校長室に呼び出されたわけだが――。

「どういったご用件でしょうか。
……少々、意図が理解できずにいるのですが」

「いえ、大した用事ではありません……。
ああいや、ある意味、大した用事と言えるでしょうか。
二、三お尋ねしたいことがあるのですが」

「別に、罪を追及したりといったことではないのーデ、
安心して答えればいいのーネ」

俺と校長、それからクロノス教諭の3人。
校長室にいる顔ぶれを確認すれば、それだけの人間が存在していた。

……正直、むさ苦しい。

「セブンスターズ在籍時の記憶はありません。
……申し訳ありませんが、そちらに関して力になれることは無いかと」

「いえいえいえ、そちらではなく！」

「はぁ……？」

訝しみながらも、二人の様子をうかがう。

とすれば、何を聞きたいのだろうか？

「御堂君。君の普段の授業態度や成績、

……今回の事件の功労、迷惑をかけたことに対する礼、

そういった部分を含め、君をオベリスク・ブルーに昇格させることが、

先日の職員会議で決定しました」

「は……？」

オベリスク・ブルーへの昇格。

現実味の薄い言葉が、俺の脳を駆け巡る。

今回の事件の功労。

迷惑をかけたことに対する礼。

……加え、校長の目が、俺の左目を注視していたことを鑑みれば――。

「口止め料、ということでしょうか」

「それは違うのーネ！　……でも、迷惑代と言うのなら合ってるのーネ」

「……いずれにせよ、俺……いえ、自分は、意識が無かったとはいえ、アカデミアに対する敵対行動を取りました。

その点は紛れもない事実です。その申し出を受けることはできません。

仮に口止め料だとしても、受け取りません。

……重要な事実を黙秘する程度には、常識をわきまえているつもりです」

「……いや、その……クロノス先生？」

「のーネ。こうなったら無理ですのーネ。

シニョール御堂の頑固さは有名なのーネ」

「むぅ……」

と、唸り始める鮫島校長。

いくら考えても、俺がオベリスク・ブルーに昇格することは無いんだが。

僅かでも罪の意識は残っているんだ。

である以上は、俺はこの考えを曲げる気は無い。
この場で昇格することは、まず無いと見ていいだろう。

「……分かりました。では、そちらは見送る、ということにしましょう。
とはいえ、ほぼそちらが本題でしたので、こちらは蛇足ですが……。
御堂君、可能であれば、ですが、十代君や万丈目君に、
七星門の鍵の返却をお願いしにいってもらえませんか？」

「それは構いませんが……放送などで呼び出せば済むのでは？」

「シニョール万丈目はともかく、ドロップアウトボーイは、
たまに学校そのものをサボってる時があるのーネ。
そこで、シニョール御堂に頼みたいのーネ」

「連絡員ですか……いえ、大丈夫です。
いずれにせよ、本日中に十代……遊城の部屋に向かう予定ではありました」

「お願いしますよ。……このくらいでしょうか。
これ以上は特に連絡も無いので、退出しても構いませんよ」

「了解です。
……失礼しま……」

した。

そうやって言おうとしたところで、
俺の目は、不審な物体を捉えた。

何処かへと飛び立つ……人影。

赤い服を身に纏い、明らかに不自然な姿勢で飛行を行っている人間。
その速度は、徒歩よりも少し早い、という程度だろうか。

あれは――。

「……すみません。自分の見間違いならいいのですが、
あの未確認飛行物体は、件（くだん）の遊城十代ではないのでしょうか……」

「「は？」」

何を馬鹿なことを。
そう言いたげに、二人の教師が窓の外を見据えて――。

「ぬおおおぉぉぉぉぉ！？
十代君、どこへ行くのですかぁぁぁぁぁ！！」

「マンマミィヤ――！！
ドロップアウトボーイ、何で空を飛んでるのーネ！？」

うろたえすぎだ。
窓の外に向かって声を張り上げる二人。

……とはいえ、俺も焦りが無いわけではない。
ともかく、あいつが飛んでるのは置いといて、皆に連絡を入れないと。

「校長先生、クロノス教諭、二人は十代を追ってください！
俺……自分は皆にこのことを通達し次第、十代が飛び去った先へ向かいます！」

「わ、分かったのーネ！
シニョール御堂も急ぐのーネ！」

「了解しました。……先に向かいます！」

そう告げると同時、俺は他のメンバーに報告するべく、
ＰＤＡを取り出しながら、外に向かって走り出した。

＊　＊　＊

「くそっ……こんなことなら、早めに鍵を回収しにいくべきだった！」

愚痴をこぼしながら、俺は走り続ける。

連絡相手は三沢だ。何だかんだ言って、あいつは皆の連絡先を知っている。

作業を分担すれば、時間も短縮できるだろうと踏んでいるのだが……。

『どちらにしても、今更嘆いていても仕方がないだろうな。俺たちも向かおう。場所はどこだ？』

「方向としては遺跡の方面、場所としては……すまん、こっちに関しては分かりそうにない」

『いや、遺跡の方面と言うことがわかれば十分だ。すぐに向かう』

「それならありがたい！」

告げ、俺はＰＤＡによる通話を打ち切った。
三沢のことだ。あの様子なら、俺が追跡を続けていることを悟って、皆に連絡をしてくれることだろう。
ただ。

「どこまで行くつもりだ……！？」

先程から、５分近く追跡しているものの、
十代（というよりも七星門の鍵）の勢いは緩まない。
そろそろ十代も危ないのではなかろうか？
これだけの時間吊り下げられてるわけだし……。

というか、これだけの長時間吊り下げられてたら、普通は窒息死するんじゃないか。

……あれ？　ってことは、主人公不在で（世界も）終わりじゃないですか！
やだ――――！！

「冗談じゃねえ！！」

くそっ！　と悪態をつきながら、俺は速度を速める。

じたばたともがいているところを見る限り、
死ぬなんて事態には、まだ陥ることはないようだが……。

いずれにせよ、早めに対処する必要はあるだろう――。
そんなことを考えていた折だった。

ゾッ、と。

背中に悪寒が走り抜けた。

「――！？」

何だ、と疑問が沸くと同時、俺は、本能的に足を止める。

直後、巨大な影が、俺の眼前を駆け抜ける。

木はなぎ倒され、藪（やぶ）は押しつぶされ、
暴力的とも言うべき力によって、眼前の光景が変貌していく。

通り抜けていく一つの影――。

そのシルエットを見た瞬間、俺の脳裏に稲妻が走る。

……大型バイク。

それは、俺の記憶が正しければ――。

「T（テリブル）・６６６（オーメン）……！？」

銀色を基調とした、シンプルな外見の大型バイク。

マフラー部が少々長いことを鑑（かんが）みても、普通のバイクに見えないこともない、

――が。

その車体は、やはり、通常のバイクと比べれば巨大だ。

当然、それが人間にぶつかれば、大惨事では済まされない。

そして、その搭乗者――。

右目に金属で構成されているかのような眼帯を身に着けている。

全体的な色味は白。潔癖の気でもあるのか、と疑ってしまうほど、

全てを白色で統一している。

腰元に佩(は)いている刀剣は、果たして必要なものなのかどうか……。

俺の記憶をたどっても、こんなに異様な格好をしている者は――たった三人。

そして、このバイクを見れば、その正体は自然と知れる。

「ちっ……俺の攻撃をかわしたか」

明らかに、俺を轢き殺す気だったであろう台詞が漏れる。

二度も轢き殺されてたまるか――と言い返そうと思ったが、よく考えれば、立ち止まることができたから轢かれずに済んだのであり、

このまま進んでいれば、間違いなく殺されていたことは明白だ。

本当なら、勘に任せて立ち止まって良かった、とすべきなのだろう。

「……人を轢き殺そうとしといて、よくそんなふざけたことが言えるな、オイ」

「はっ、下等な人類が、よくもまあ吠えたものだな」

「下等な人類なら轢き殺していいという理屈にはならないだろうが」

そもそも、下等であるかどうかなんて、こいつの主観でしかない。

人類見下し系、上半身吹っ飛び型の小者。

――俺の記憶からその人物の名を挙げるとしたら、

プラシド、という名が当て嵌まった。

「ふん……それよりも貴様、何故俺のＤ－ホイールの名を知っている。

それを知っている人間など、存在するはずがない。

……いや、そもそも、Ｄ－ホイールのことを知っていること自体がありえん。

何者だ、貴様は」

そう言いつつ、緩やかに剣を構えるプラシド。

その前に――。

「さあな。ただっ！」

「！？」

瞬間、高速で撃ち出される俺の右足が、
奴の左手の剣を叩き落とす。

「凶器を振り回すな。……今時、中学生でも理解してるぞ」

「貴様……！」

「お前がその気なら、俺はいくらでも相手になってやる。
喧嘩でも、レースでも……何だって構わない。
ただ、そうやって下等だ下等だと貶(おとし)めて……。
自分が負けたときのことを考えていないのか？」

「馬鹿な！　俺が負けるなどありえん！」

「ああ、そうかい。だけど、よく考えてもみてくれ。
お前、負けたら『下等以下』だぞ？」

「……っ！！」

「それとも、負けるのが怖いか？」

ははっ、と、軽く笑う。

気付けば、プラシドは俺を睨み付けていた。
そこから窺える感情は――激怒。

――かかった。

煽ってやったぞ。これ以上ないまでに。

俺の知りうる限りでは、これだけやればプラシドは激昂する。
そうして――勝負を仕掛けてくる。
俺と同じ土俵に上がってくる。

「いいだろう、下等生物め……！！
この俺が直々にその存在を抹消してくれる！
決闘（デュエル）だ！！」

「下等生物以下に引きずり下ろしてやるよ。
――さて」

「「――決闘（デュエル）！！」」

宣言の瞬間、眼下に映る地面に、
∞（インフィニティ）の形状をした光が放たれた。

先攻は――プラシドのようだ。
ふん、と嘲るように鼻で笑い、カードを引く。

「俺のターン、ドロー！
俺は手札から、《ワイズ・コア》を守備表示で召喚！」

【《ワイズ・コア》　攻　０　／　守　０】

「カードを2枚セットし、ターンを終了する」

「……俺のターン、ドロー！
俺は手札から、《ジェネクス・ウンディーネ》を召喚！」

【《ジェネクス・ウンディーネ》　攻　１２００　／　守　６００】

「ジェネクス・ウンディーネの召喚成功時、
デッキに存在する水属性モンスターを1枚墓地に送り、
デッキから《ジェネクス・コントローラー》を手札に加えることができる。
俺はデッキの水属性モンスター、《スノーマンイーター》を墓地に送り、
ジェネクス・コントローラーを手札に加える」

とりあえず、このターンは様子見に徹するべき――か？
いや、《ワイズ・コア》の特性を考えれば、このターンで処理するべきだ。

あのカードは、効果によって破壊された場合に、
除外ゾーン以外のあらゆる場所から機皇帝を特殊召喚できる。
そして更に厄介なのは、奴の持つ1ターンに1度の戦闘破壊耐性だ。
だが、それさえ切り抜ければなんとかなる。

――つまり。

「俺は手札から、魔法（マジック）カード、《二重召喚（デュアルサモン）》を発動！
このターンでの再度の召喚権を得る。
そして手札から、《レアル・ジェネクス・ターボ》を召喚！」

【《レアル・ジェネクス・ターボ》　攻　１５００　／　守　１３００】

「レアル・ジェネクス・ターボの召喚成功時、
デッキからレベル1の『ジェネクス』を手札に加えることができる。
俺は《ジェネクス・パワー・プランナー》を手札に加える」

これで大体の準備は整ったか。
とにかく、奴の目論見――というか、
効果破壊をさせないうちに、可能な限り叩く！

「――バトル！　ジェネクス・ウンディーネでワイズ・コアを攻撃！」

「チッ……」

一度の攻撃に耐え、卵のようなその機体を削らせるワイズ・コア。
このまま叩く！

「レアル・ジェネクス・ターボで、ワイズ・コアを攻撃する！」

ひび割れ、崩れていくワイズ・コア。
こうして、ともかく第一の関門は突破した――のだが。

……おかしい。

ここまで対策ができていないなどということはありえない。

となれば、何か。

何か――してくるはずだ。

「やはり下等だな！　伏せ（リバース）カード、《リミット・リバース》を発動！

攻撃力１０００以下のモンスターを、攻撃表示で特殊召喚する！」

【《ワイズ・コア》　攻　０　／　守　０】

「チッ――カードを2枚セットして、ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！

ワイズ・コアを守備表示に変更することで、

リミット・リバースの効果が発動し、ワイズ・コアは破壊される。

そしてこの瞬間、ワイズ・コアの効果を発動！

効果で破壊され、墓地へ送られたとき、

デッキ・墓地・手札から、《機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）》、

《ワイゼルＴ（トップ）》、《ワイゼルＡ（アタック）》、《ワイゼルＧ（ガード）》、

そして《ワイゼルＣ（キャリア）》を、それぞれ1枚ずつ特殊召喚する！」

【《機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）》　攻　０　／　守　０】

【《ワイゼルＴ（トップ）》　攻　５００　／　守　０】

【《ワイゼルA（アタック）》　攻　１２００　／　守　０】
【《ワイゼルG（ガード）》　攻　０　／　守　１２００】
【《ワイゼルC（キャリア）》　攻　８００　／　守　６００】

鋼の殻が割れ、５つのパーツが姿を現す。
一瞬のうちに、それらは各々形状を変え――。
俺の知る、《機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）》の姿へと変貌を遂げた。
各々のカードは、全てプラシドのデッキから現れたものだ。
《機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）》、《ワイゼルT（トップ）》、
そして《ワイゼルA（アタック）》の３枚のカードは攻撃表示を。
《ワイゼルG（ガード）》、《ワイゼルC（キャリア）》は守備表示の形式を取っている。

「機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）が場に存在する限り、
他のパーツは攻撃を行えない。が、その能力は全てワイゼルに加算される。
よって、攻撃力は２５００！
フハハハハハハ！！　どうだ、これが俺の機皇帝だ！
貴様ごときが敵うはずもない！」

マズい――と、俺は思う。
ジェネクスデッキは、基本的にシンクロを中心としたギミックを用

いる。
故に、ああいったモンスターが現れると、
最悪の場合は戦線が瓦解し、敗北する可能性が高い――！

「更に俺は、《ワイゼルA（アタック）》をリリースし、
《ワイゼルA３（アタック）》を特殊召喚！」

【《ワイゼルA３（アタック）》　攻　１６００　／　守　０】

ワイゼルA（アタック）の姿が更に鋭利なものへと変貌する。
パーツの攻撃力が上昇したことで、攻撃力は２９００……。

「ワイゼルA３（アタック）は、場の機皇帝に貫通効果を付与させる！
フハハハハハ！　さあ、苦しむがいい……！
機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）でジェネクス・ウンディーネに攻撃！」

「ぐっ――！！」

左腕の刃により、ジェネクス・ウンディーネが破壊される。

――と同時、肉体の各部に激痛を感じた。
現実のダメージ。確か――原作でもあったような。
ただ、痛みとしては最近の闇のゲームの方がより強かった。

いや、暢気なことを言ってる場合じゃない。
この攻撃によって削られたライフポイントは１７００。
ほぼ、半分が失われた計算になる。

「カードを１枚セットし、ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！
……いくつか聞かせてもらうが、何故俺を狙った？
目的はなんだ？　俺の命か？」

「ふん。俺が狙ったのは貴様ではない。
正確には――この場所で検知した、シグナーのシンクロモンスター……。
レッド・デーモンズ・ドラゴンの反応を辿っただけだ」

六条ォォォォオオ！！

あいつがレッド・デーモンズを出したことが、こんな伏線に繋がってたのかよ！？
俺も驚きだよ！　というか、被害受けてるの俺だけかよ！？

自分の意思じゃないとはいえ、セブンスターズに在籍していた時期以外は、
精一杯に自重してこういうこと（ターミネーター的な）が起きないよう頑張ってたっていうのに！

散々ってレベルじゃねーぞ！！

「そして俺の目的は、貴様の殺害にある。
貴様のようなイレギュラー……見過ごすわけにはいかん」

「言ってることはもっともらしいが、
要するに、自分たちにとって都合の悪い人間が現れたから殺す、
って意味合いでもあるだろうが。それに、ここは――」

いや。
こういった固まりきった考えを持った奴に、何を言ったところで通用するはずもない。

自分が、あるいはその思想が正しいと、盲目的に信じ込んでいる人間には――。

「まあいい。俺は手札から、
《ジェネクス・パワー・プランナー》を守備表示で召喚する！」

【《ジェネクス・パワー・プランナー》　攻　３００　／　守　２００】

「《ジェネクス・パワー・プランナー》の召喚成功時、
デッキからレベル３の効果モンスターの『ジェネクス』を手札に加えることができる。
俺は《レアル・ジェネクス・マグナ》を手札に加える」

さて、ここからはもっと慎重になる必要がある。
奴の伏せ（リバース）カードもそうだが、この場において最も危険なのは、ワイゼルの持つ貫通効果と、シンクロモンスターの吸収効果。

迂闊にシンクロができないのは痛手だ。

それだけじゃない、この後でそれぞれのパーツの上位互換を召喚され、
更に攻撃力や効果が強化される恐れもある。

その前にどうにかしていずれかのカードを破壊する。
そうすれば、機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）の能力も落ちるのだから。

この状況下ならば、ワイゼルA(アタック)3以外のカードは、すべて標的となる。
だが、その一方で、攻撃対象をワイゼルG(ガード)に変更される可能性は高い。
いずれにせよ、状況は深刻――か。

「……バトル！　レアル・ジェネクス・ターボで、ワイゼルT(トップ)を攻撃！」

「馬鹿め！　ワイゼルG(ガード)の効果を発動！
貴様の攻撃対象をワイゼルG(ガード)に変更する！」

そうだ。こいつはそれしかできない。
俺だって同じだ。これ以外の選択肢を取ることは――できない。

ワイゼルの右腕が、レアル・ジェネクス・ターボの攻撃を防ぐとともに爆砕する。

「カードをセットし、ターンエンドだ」

「ふん……俺のターン、ドロー！
俺は手札から、《ワイゼルG(ガード)3》を守備表示で召喚する！」

【《ワイゼルG3》攻　0　／　守　2000】

「更に俺は、ワイゼルTをリリースし、《ワイゼルT3》を特殊召喚！」

【《ワイゼルT3》攻　600　／　守　0】

「……っ！！」

まずい。

これでワイゼルの攻撃力は3000――。

それだけじゃない。ワイゼルG3は、自身を攻撃対象に変更できる効果を持ち、

更には、1度だけとはいえ、戦闘破壊に対する耐性を持つ。

ワイゼルT3の効果も強力だ。

相手――つまり、俺の魔法・罠の発動を、1ターンに1度無効にする。

現状で、既に貫通効果を兼ね備えている。

ワイゼルCは効果破壊に対する耐性を持っているし――。

「バトル！　機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）で、ジェネクス・パワー・プランナーを攻撃！」

「チッ……伏せ（リバース）カード、オープン！　《くず鉄のかかし》！
相手の攻撃を1度だけ無効にする！」

「無駄だ！　その効果は、ワイゼルT（トップ）3の効果で無効となる！」

勢いを増し、近づいてくるワイゼル。
その攻撃が、ジェネクス・パワー・プランナーを捉えた、その瞬間――。

「伏せ（リバース）カード、オープン！　《ガード・ブロック》！
戦闘ダメージを1度だけゼロにし、カードを1枚ドローする！」

「チッ……この攻撃をかわしたか。
まあいい。俺はこれでターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

魔法（マジック）・罠（トラップ）が使えないというのは、
よく考えなくともわかる程度にはピンチだ。
まずはワイゼルT（トップ）3を破壊する必要がある……！

「俺は手札から、《レアル・ジェネクス・マグナ》を召喚する！」

【《レアル・ジェネクス・マグナ》　攻　１０００　／　守　２００】

「《レアル・ジェネクス・マグナ》の召喚時、デッキからレベル２の『ジェネクス』を手札に加えることができる。

俺は《レアル・ジェネクス・クラッシャー》を手札に加える。

――そして伏せカード、オープン！　《血の代償》！

５００のライフポイントを払うことで、通常召喚を可能とする！」

「甘い！　ワイゼルＴ３の効果で無効だ！」

――かかった！

「これでもう、ワイゼルＴ３の効果は使えないな……！

俺は手札から、《融合》の魔法カードを発動！」

「何……！？　融合だと！？」

おおよそ、思いつく人は少ないであろう作戦。
ただ、その「予想外」の作戦は、こういった場合においては、非常に有効で――。

「場の炎族、レアル・ジェネクス・マグナと、
手札の機械族、レアル・ジェネクス・クラッシャーを融合！
現れろ、《起爆獣ヴァルカノン》！」

【《起爆獣ヴァルカノン》　攻　２３００　／　守　１６００】

「ヴァルカノンの融合召喚成功時、相手の場のモンスター１体と、ヴァルカノン自身を破壊する。――俺は、ワイゼルＴ３（トップ）を破壊する！」

「なっ、うおあっ！！」

「そして、ワイゼルＴ３（トップ）の攻撃力分――６００のダメージをお前に与える」

ワイゼルＧ３（ガード）を破壊したとしても、その驚異的な攻撃力は揺るがない。
ワイゼルＡ３（アタック）を破壊したとしても、ワイゼルＧ３（ガード）の効果で攻撃が止

められる。
そして、そもそもワイゼルC（キャリア）は破壊できない。
本体である機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）に至っては、効果の対象にできない。
であれば、まずは自由に魔法（マジック）・罠（トラップ）を使えるようにしたい――というのが、
現状の俺の思考だ。

プレイングミスかもしれない。
だが、思い浮かばなかったのが本音である以上、あとは野となれ山となれ――だ。

「カードをセットし、ターンエンドだ」

「くっ……許さんぞ、人間風情が！
俺のターン、ドロー！　俺は手札から、ワイゼルT（トップ）を召喚！」

【《ワイゼルT（トップ）》　攻　５００　／　守　０】

流石に、強化パーツは打ち止めか。

いや、２枚目を予測していなかったわけじゃない。
ワイズ・コアを主軸として動かす以上、
強化系のパーツは、状況次第では事故要因にしかなりえない。

逆に、通常のパーツであれば、２枚以上入っていても納得はいく。
そういうデッキだ、あれは。
ワイゼルの攻撃力は２９００。
たった１００落ちただけだが、それでも、３０００よりはマシか。

「貴様のその弱小モンスター、破壊してくれる！
機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）で、レアル・ジェネクス・ターボを攻撃！」

左手の刃を振り下ろす。
パキィ、という音と共に、破壊されていくレアル・ジェネクス・ターボ。
同時、１４００のダメージが加算されていく。
血の代償の効果は使わなかった。
コストを支払うよりも先に、プラシドが無効にして破壊したからだ。
よって、残りライフは９００。
安い支払いではないが、この程度であれば――いける。

「ハハハハハ！　ターンエンドだ！」

「――このエンドフェイズ、俺は速攻魔法、《終焉の焔》を発動！

場に2体の《黒焔トークン》を、守備表示で特殊召喚する！」

【《黒焔トークン》攻　0／守　0】
【《黒焔トークン》攻　0／守　0】

「フン……何をするかは知らんが、今の機皇帝に敵うはずもない！」

「そうか」

御託は必要ない。

「俺のターン――ドロー！」

ここからは――俺の独壇場に入らせてもらう。

「俺は手札から、《闇の誘惑》を発動！　カードを2枚ドローし、闇属性のモンスター、《ジェネクス・コントローラー》を除外する！」

「馬鹿な……キーカードを除外するだと！？」

そのくらいの認識はあったのか。

《ジェネクス・コントローラー》はあくまでも「中核」のカードだ。
確かに、このカードを起点とすることで、様々なことができる。

だが――「なければならない」ということではない。
あれば良い。なくても回る。それが、俺のデッキコンセプトだから。

「手札から、《A（アーリー）・ジェネクス・ソリッド》を召喚！」

【《A（アーリー）・ジェネクス・ソリッド》　攻　５００　／　守　１２００】

「A（アーリー）・ジェネクスだと……！？」

「俺は手札から、《機械複製術》を発動！
自分の場の攻撃力５００以下の機械族を選択し、
同名カードを2枚までデッキから特殊召喚できる！」

「弱小モンスターを並べるだけだと！？
貴様、俺をナメて――」

「この効果にチェーンし、《ＤＮＡ移植手術》を発動！

水属性を選択することで、場の全てのモンスターを水属性にする！」

さあ、これで準備はほぼ整ったも同然だ。

「更に手札から、速攻魔法、《サモンチェーン》を発動！
チェーン3以降に発動を可能とする。このターン、
俺は合計3度の通常召喚を可能とする……！
そして、《機械複製術》の効果を処理する！
2枚の《A（アーリー）・ジェネクス・ソリッド》を特殊召喚！」

【《A（アーリー）・ジェネクス・ソリッド》　攻　５００　／　守　１２００】
【《A（アーリー）・ジェネクス・ソリッド》　攻　５００　／　守　１２００】

「A（アーリー）・ジェネクス・ソリッドの効果を発動！
俺の場の『ジェネクス』と名のついた水属性モンスターを生贄に捧げることで、
デッキからカードを2枚ドローできる！
俺は3枚のA（アーリー）・ジェネクス・ソリッド、全ての効果を発動し、
デッキからカードを6枚ドローする！」

「ば……馬鹿な！？」

決まることは滅多と無いが、決まりさえすれば強力なコンボだ。

言うなれば、生きる《強欲な壺》。

手札の枚数関係なしに発動するバブルマンのようなものか。

とりあえず、懸案事項としては、山札の枚数が既に半分を切った、という程度か。

「悪いが、このターンで機皇帝は破壊させてもらう！

場の２体の黒焔トークンを生贄に捧げ、

――現れろ、《Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（ザ・ビッグ・サターン）》！！」

【《Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（ザ・ビッグ・サターン）》　攻　２８００／守　２２００】

二つの黒い火炎を食い尽くすようにして現れるのは、

巨大な――「土星」の形状を模した、機械。

この世界にたった１枚だけ存在する――プラネットカードの一枚だ。

「反撃、させてもらうぞ」

まっすぐ。

奴の目を見据えた俺は――そう、宣言した。

29束目：熾烈（後書き）

下っ端登場。

……いや、なんかすみません。
何だか性格が違うような気もしますが、
とりあえず「ウチのプラシド」ということにしといてください（

そういうわけで、第一期最終戦始まりました。
これで29話。次で30話。
このままのペースで進むとすれば、最終回は120話超え……あれ？；

そういうわけで、御堂覚醒です。
ジェネクスにA・ジェネクスが加わり、
プラネットシリーズも使うようになりました。

やっとまともなジェネクスデッキが書けるよ！（

色々ツッコミどころ満載かとは思いますが、
ルールミスやら指摘していただけると助かります。

六条の置き土産は、
御堂の生命をも脅かすものでしたということで、
それでは次回までー（

３０束目：超絶（前書き）

毎度のごとく、燃えません。
というわけで、途中で何らかの挿入歌でもかけていただけると、案外挿入歌の効果で燃えることができるかもしれません。

……はい、駄文です。申し訳ありません。

それでは本編をお楽しみください。

３０束目：超絶

「それが貴様の切り札か……だが、俺の機皇帝には通じんぞ。
攻撃力の差は１００……だが、その１００ポイントは、絶対的な差だ！」

ああ、その通りだろう。
その点に関しては、全面的に同意だ。

だが、それは現時点ではあまり関係ない。
サターンを破壊されれば俺は負ける。
だが――それを防ぎさえすれば。
あるいは、奴を「同じ土俵」に上げさえすればいい。

「魔法（マジック）カード、《融合回収（フュージョン・リカバリー）》を発動。
この効果により、墓地の《融合》と、その素材として使用した、《レアル・ジェネクス・マグナ》を手札に加える。
……そして、ここにチェーン発動だ。《非常食》。
《融合回収（フュージョン・リカバリー）》と《ＤＮＡ移植手術》を墓地に送り、２０００ポイント、ライフを回復する」

これで、おおよその準備は整った。
あとは――攻撃を加えるだけだ。

「手札から、《A（アーリー）・ジェネクス・ドゥルダーク》を召喚！」

【《A（アーリー）・ジェネクス・ドゥルダーク》　攻　１８００／守　２００】

「A（アーリー）・ジェネクス・ドゥルダークは、１ターンに１度、相手の場に存在する、同じ属性を持つモンスターを破壊できる。俺はお前の場の《ワイゼルG（ガード）３》を破壊する！」

A（アーリー）・ジェネクス・ドゥルダークから放たれる光線が、ワイゼルの右腕――ワイゼルG（ガード）３を破壊する。

この効果を発動したターン、A（アーリー）・ジェネクス・ドゥルダークは戦闘を行えない。
――だが、何のために《融合》を回収した？

「魔法（マジック）カード、《融合》を発動！
炎族のレアル・ジェネクス・マグナ、そして、

機械族のA（アーリー）・ジェネクス・ドゥルダークを融合する！
現れろ、《重爆撃禽　ボム・フェネクス》！！」

【《重爆撃禽　ボム・フェネクス》　攻　２８００　／　守　２３００】

場に現れるのは、鎧を身に纏った火炎の不死鳥（フェネクス）。
「機械」と「炎」の融合だけはある、か。

「ボム・フェネクスは、１ターンに１度、
場に存在するカード１枚につき、３００のダメージを相手に与えることができる。
俺の場には２枚のモンスターが、そしてお前の場には、
機皇帝のカードが４枚と、２枚の伏せ（リバース）カードが存在する。
合計枚数は８枚！　よって、２４００のダメージを与える！」

「馬鹿な！　ぐうあああああぁぁっ！！」

ボム・フェネクスの肉体から放たれる、８つの火炎。
それら一つ一つが、プラシドの肉体を貫いていく。

「更に、手札を1枚――《A（アーリー）・ジェネクス・ケミストリ》を墓地へ送り、
１０００のライフポイントを支払って、
《Ｔｈｅ（ザ・ビッグ・）　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）》の効果を発動！
攻撃力を１０００ポイント上昇させる！」

同時、サターンの全身から、多量のエネルギーが噴き出す。

――ＳＡＴＵＲＮ（サターン）　ＦＩＮＡＬ（ファイナル）　ＭＯＤＥ（モード）。

その姿は、本来そう呼ばれるべきものだった。
禍々しい、とは思わない。

味方である今は――頼もしい、とすら思う。

「さあ、振り切るぞ！　Ｔｈｅ（ザ・ビッグ・）　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）で、
《ワイゼルＴ（トップ）》に攻撃！
ｅｎｄ（エンド）　ｏｆ（オブ）　ＣＯＳＭＯＳ（コスモス）！！」

腹部、そして脚部に穿たれた穴から、強烈な光が放たれる。

「くっ……まだ、まだ負けん！
伏せカード（リバース）、オープン！
罠カード（トラップ）、《立ちはだかる強敵》！
相手の攻撃宣言時、その攻撃対象を変更できる！
俺は貴様の攻撃を、機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）への攻撃に変更する！！」

「なっ……！？」

宙に浮かぶ腕が振り回され、機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）に直撃した。

「ぐううおおおぁああっ！！」

「くっ……！？　カードを2枚セットし、ターンエンドだ！」

機皇帝は、パーツが無ければその本来の力を発揮するには至らない。
だが、パーツにしても、∞（インフィニティ）と名のついたカードが存在しない限り、破壊されてしまうデメリットがある。

……つまり、奴の場の全てのモンスターは、消えてなくなったわけだ。

これで、奴の残りライフは１００――。

しかし、何故機皇帝を破壊させた？
《ワイゼルC（キャリア）》は守備表示だからダメージも入らないし、
何より、機皇帝が場に残る。
選択の余地は無いと思うのだが――？

「許さんぞ、人間風情が……！！
俺のターン、ドロー！」

プレイングミス――ということもありうるか？
いや、あるいは、もっと別な理由があるのだろうか。

俺は二つのパーツを破壊した。
同じだけのカードを出すには、それ相応の労力が必要だからということか？

いずれにせよ、目的は分からない。
何故、自分を追い詰めるような真似をしているのか――。

なんやかんやでダメージ受ける俺じゃ無理だ。
3ターン以内に死ぬ自信がある。

「俺は手札から《死者蘇生》を発動！
《ワイズ・コア》を墓地から特殊召喚する！」

【《ワイズ・コア》　攻　０　／　守　０】

「そして伏せ（リバース）カード発動！　《ツイン・ボルテックス》！
相手の場のモンスターと自分の場の機械族モンスターを破壊する！
俺は貴様の場の重爆撃禽　ボム・フェネクスを破壊ィ！！」

「な……くっ！！」

貴重なダメージソースが破壊された！
だが、まだこの程度なら、なんとか――。

「そして《ワイズ・コア》が効果で破壊されたことにより、
デッキ、手札、墓地のいずれかから、《機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）》、
《ワイゼルＴ（トップ）》、《ワイゼルＡ（アタック）》、《ワイゼルＧ（ガード）》、
そして《ワイゼルＣ（キャリア）》を、それぞれ１枚ずつ特殊召喚する！
甦れ、機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）！！」

【《機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）》　攻　０　／　守　０】
【《ワイゼルＴ（トップ）》　攻　５００　／　守　０】
【《ワイゼルＡ（アタック）》　攻　１２００　／　守　０】
【《ワイゼルＧ（ガード）》　攻　０　／　守　１２００】
【《ワイゼルＣ（キャリア）》　攻　８００　／　守　６００】

再度、場に現れるワイゼル。

先程までであれば、あるいは俺も絶望感を抱いていただろう。

だが、その攻撃力はあくまで２５００。サターンには及ばない。

潤沢とは言い難いが、ライフもあり、手札もそれなり。

対処法はないでもない。

しかし、何故サターンを破壊しなかったのだろう。

いや――破壊できなかった、か？

奴は異様なまでにプライドが高い。

俺たちのことを下等な人類、と呼ぶほどに。

つまり、引き分けは許されなかった。

引き分け――つまり、自分がそれと同等だとはしたくなかった、ということか。

「貴様には、機皇帝の本当の力を見せてやる……！

永続魔法、《一族の結束》を発動！　場の全ての機械族の攻撃力を、

それぞれ８００ポイントずつ上昇させる！」

「なっ……！」

それはつまり――ワイゼルの攻撃力を、４０００ポイント上昇させるのと同義、だ。

機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）は、場のモンスター……。

ワイゼル、スキエル、グランエルのパーツの攻撃力を集約する。

ここで重要となるのは、「元々の攻撃力」ではないという点だ。

変化した攻撃力であっても、そのまま自身の攻撃能力に転化する。

場のワイゼルパーツは４枚。《一族の結束》による上昇幅は、合計すれば３２００――。

これだけでも攻撃力は５７００に達するが、ワイゼル自身もその恩恵を受ける。

つまり、更に８００上昇し、その攻撃力は――６５００。

戦闘ダメージは――マズい！

「この一撃で貴様に引導を渡してくれる！　バトル！

機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）で、Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）に攻撃！」

迫りくる、ワイゼルの刃。

その一撃は、間違いなく――俺の命を狩ろうとするためのもので。

背筋が冷える。

負けたら――死ぬ。

それだけは――嫌だ。絶対に。

エゴでもいい。

俺の勝手で未来が危険だと言うのならば、

――俺自身が、責任を取ればいい。

だけど、今だけは。

今だけは――勝ちたい。

生きて、先に進みたい。

奴を越えなければ、奴を倒さなければ、先に進めないというのなら

――！！

「永続罠（トラップ）、《スピリットバリア》を発動！
俺の場にモンスターが存在する限り、戦闘ダメージは加わらない！」

「くっ……これも防ぐのか！？
まあいい、ターンエンドだ！」

「俺のターン――ドロー！！」

このターン内に、奴を倒す。

そのためには、あの６５００の攻撃力を持つワイゼルを破壊するしかない。

汎用除去カード――入ってはいるが、
《激流葬》では効果が薄い。そもそも、機皇帝が存在する状況では、相手の場にモンスターが召喚されることも無い。

どうする？

決まっている。
あの攻撃力を超えるモンスターを出すだけだ。

「ん？」

ふとした拍子に、空が陰(かげ)っていくことに気が付いた。

次の瞬間、予想だにしない事態が起きる。

火山が火を噴き、その内より、東洋の竜にも似た、赤い影が姿を現す。

天が割れ、雷が大地を焼き――金色の悪魔が、地に降り立つ。

あの姿は――!?

「幻魔……!?」

「何っ……!?」

その姿は、俺の知る三幻神によく似ていた。

三幻魔――その内の2枚。

《降雷皇ハモン》。
《神炎皇ウリア》。
となれば、この空の陰りは、《失楽園》を用いたことによる弊害か――？

いや、だとしても、何故俺たちのカードの絵柄に変化が無い？
精霊の力を吸収しているのだとすれば、すべてのカードに変化があってもいいはずだ。

「チッ……やはり、このタイミングか。
デュエルを続けろ。俺たちには何の影響もない」

……そういうことか。

デュエル開始時に刻印された∞（インフィニティ）のマークは、
リアルダメージを与えるとともに、ああいったものを防ぐ効果があるようだ。

この状況を見越してのことだろう。
そう考えれば、やはりこの男は準備がいい。
毎度のことだが、その良い準備を活かせていないだけだ。

「なら、ターンを継続させてもらう」

しかし――だ。

サターンは破壊され、《リミッター解除》も手札には無い。
仮にサターンを復活できるカードがあったとしても、
その攻撃力を上昇させなければ、何の意味も無い。
壁以外にはなりえないだろう。

そして何より、奴の場に存在するワイゼルG（ガード）。
合計2度の攻撃を加えなければ、ワイゼル本体には達しない。

2度の攻撃を行えるカード――。

無いわけじゃない。
だが、安定性の問題もあって、ほとんど使えないカードだ。
これだけの攻撃力を持つ相手は想定していない。

どうする？

考えろ、奴を倒す方法を。
導き出せ、ワイゼルを超えるための方策を。

こんなところで死にたくないのなら――全てを絞り出せ。

――「自分」の全てを。

「魔法（マジック）カード、《貪欲な壺》を発動！
墓地の5枚のカード――《起爆獣ヴァルカノン》、《重爆撃禽　ボム・フェネクス》、《A（アーリー）・ジェネクス・ドゥルダーク》、《スノーマンイーター》、《レアル・ジェネクス・マグナ》をデッキに戻し、
カードを2枚ドローする！！」

――来た。

全てを塗り替える――1枚のカードが。

「伏（リバース）せカード、オープン！　《リミット・リバース》！
攻撃力1000以下のモンスターを、攻撃表示で特殊召喚できる！
俺は墓地に存在する《A（アーリー）・ジェネクス・ケミストリ》を特殊召喚！！」

【《A・ジェネクス・ケミストリ》　攻　２００　／　守　５００】

「更に《機械複製術》を発動！
機械族の攻撃力５００以下の同名カードを、デッキから2体まで特殊召喚できる！
俺は、A・ジェネクス・ケミストリを2体特殊召喚する！」

【《A・ジェネクス・ケミストリ》　攻　２００　／　守　５００】
【《A・ジェネクス・ケミストリ》　攻　２００　／　守　５００】

「俺はこの3体のモンスターを生贄に捧げる！！」

「なっ……3体の生贄だと！？」

暗雲が立ち込め、周囲が徐々に明るさを失っていく。

代わりに広がるのは――闇。

暗い霧が、周囲を包み込んだ。

「――っ、く、グ、ァあ、あアアあアああッ！！」

視界が黒く塗り潰される。

――最悪の気分だ。

黒い感情に、自らが塗り替えられていくような感覚。
おおよそ、考えたくもない暗い感情と、暗い思考。

普段の俺なら、自分自身の思考全てを潰していることだろう。
どうにかして、それらの感覚を消去しているはずだ。

だが、今は。それらの感情を消す必要性を感じない。
いや、消してはならない。

俺自身の暗い部分と向き合うためにも。
俺自身の黒い側面を――超えるためにも。

――できるのか？

できる。

いや、やるしかない。

やるんだ、絶対に。

俺の感情は俺のものだ。
俺の思考は俺のものだ。

捩じ伏せろ。叩き潰せ。統制しろ。

俺の感情だ。俺の思考だ。黒い部分でも、暗い部分でも――全てが俺なんだ。

自分自身を制御しなければ――あんなものは使えない。

欲望だろうと願いだろうと、何だろうと構わない。
俺の感情だ。

――方向性はただ一つ。

眼前の敵を超えること。

「――ッ！！
現れろ、《邪神アバター》――――――！！」

【《邪神アバター》　攻　？　／　守　？】

周囲に漂っていた闇がその形を変え、一つの球体を形作っていく。

俺の嫉妬と羨望。

そして――相手を「超える」ことへの渇望を形とした、

最悪にして最高位の「邪神」。

そして、その姿は――眼前の「敵」を、映し出す。

「なっ……！？　その姿は――――！？」

機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）――。

その全てを写し取った姿が、そこにはあった。

「邪神アバターの召喚成功時、相手ターンで数えて2ターン、
相手は魔法（マジック）・罠（トラップ）の発動を封じられる」

「だが、なぜ俺の機皇帝の姿をしている！？」

「邪神アバターの攻撃力、及び守備力は、

フィールド上で最も高い攻撃力を持つモンスターの攻撃力に１００プラスした数値を取る。
……つまり、お前の場の機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）――。
その姿を、能力を写し取った、ということだ」

ありとあらゆる状況において、常に相手のモンスターの上を行く能力。
それを――無敵、と評したのは、はて、どこの誰だったか。

「だが、ワイゼルＧ（ガード）は、自身を攻撃対象に変更する能力を持っている！
貴様のそのモンスターの攻撃は無駄に――！！」

「終わらせねえよ」

終わるのは――この決闘（デュエル）だ。

「俺は手札から、速攻魔法、《月の書》を発動！
お前の場の《ワイゼルＧ（ガード）》を裏守備表示に変更する！」

「しまっ――」

魔法（マジック）・罠（トラップ）が発動できないのは、あくまで相手だ。
俺はいくらでも発動できる。

そして――裏側表示であるということは、効果は発動できないということだ。

「最初に言ったな？
『１００ポイントは、絶対的な差』だ、と。
――ああ、確かにその通りだ」

絶対に覆すことのできない、１００――。
その能力は、確かに悪魔的でもあった。

「――バトル！　邪神アバターで、機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）を攻撃！」

暗い影が、機皇帝の中央部に刃を突き立てる。

その光景は、言うなれば、偽物が本物になり替わろうとするようで

――。

どことなく、「御堂和真」という人間の内面に、似ていた。

＊　＊　＊

「ば……馬鹿なっ！！　この俺が……機皇帝が、敗北するなど……！！

こんな馬鹿なことがあってたまるか！！」

デュエルが終わった直後、

プラシドはそんなことを吐き散らしながら俺に詰め寄ってくる。

「負けは負けだ。いい加減に認めろよ」

というか、途中で明らかなプレイングミスがあったろうに。

「黙れ……！　こうなれば、最早躊躇も必要ない、この場で――」

殺す。

そう言い放った瞬間、プラシドは俺に向かって拳を繰り出した。

中身（正体）が機械であるが故の、強力、かつ正確な一打。

俺はそれを受け止める――ことも回避することもできず、

当然のように、拳が顔面に叩きつけられる。

「がっ……！！」

「貴様のような下等な人間に、本来ならばッ！！　負けるはずはないのだァ！！」

「ッ！！　げ、あがっ！！」

腹。顎。後頭部。

次々と叩きつけられる拳に――しかし、反応が追い付かない。

ともすれば、一撃一撃の間に、意識が飛んでいるのかもしれない。

ただ――どうにか、どうにか、意識だけは失わないように、

その場にとどまるようにして、踏ん張り続ける。

「貴様などに――貴様などにィィ！！」

「ご、あ、が、がはっ！！」

腕がちぎれるとすら錯覚してしまうほどに痛い。
足が無いのではないかと錯覚する程度に、感覚が薄い。

俺はあくまでも、普通の人間だ。
治癒力なんて一般的な観点から見れば少しばかり鈍いほうだし、
視力は両目共に1．0。動体視力にしたって、スポーツ選手ほど良くはない。
喧嘩なんかは……慣れてるけど、相手が機械なんて想定したことはない。
――だけど。

このままやられっぱなしってのは――性に合わない。

「貴さ――」

「ぎィ、あああああァァァァあァァァァッ！！」

「ま〝っ！？！？」

振りかぶる動作に合わせ――思い切り。

思いきり、頭突きを叩き込んだ。

「あ、ぐ……！？」

「黙ってろよ、このデコ助野郎……！！
負けてンなら、さっさと帰りやがれェェェ！！」

右拳による一打が、プラシドの顔面を捉える。

即座に左拳が、奴の顎を跳ね上げた。

「ごあっ！！？」

「理不尽に殴られて黙ってられるほど大人しくはねェンだよ……！
！」

瞬間、プラシドの顎が下がってくる。

――同時、その横面にハイキックを叩き込んだ。

ゴギッ、と、おおよそ、人間の首からなってはならないような音が聞こえてくる。

誰が鳴らした音か、などと考えるまでも無い。

ゆっくりと、プラシドの体が、膝から崩れ落ちる。

そうして――気付けば、奴は完全に意識を失っていた。

頬が痛む。

視界が霞んでいる。

口の中に血の味が広がる。苦い。

体の内側がずきずきと痛む。

まるで、人間の腕に直接掻き回されているようだ。

だが――それだけだ。

「げほっ、……ぇ、はっ」

そういえば思い切り腹を殴られたような気もする。
あと、背中もだな。あれ？　結構深刻じゃね？

まあ――いいや。

そう考えて木の幹に体を預けた、そのとき。
プラシドのＤ－ホイールから、何者かの声が流れてきた。

『プラシド、何をしている。
応答せんか、プラシド！』

妙に渋い……というか、しゃがれた声。
これは――ホセ……、か。

「……プラシドじゃなくて悪いが、あいつは今、そこでぶっ倒れてる。
命に別状……は、知らんが、全体的には、無事ではある」

『む……お前は、プラシドではないな。何者だ？』

「……通りすがりの決闘者（デュエリスト）だ――なんてふざけてみたら面白いんだろうけどな。
あんたらのターゲットだよ」
『ほう……プラシドと対峙して勝利したのか』
成程、成程、と、感心したような口調で、ホセは笑う。
「残念だけど、イレギュラーはこうして生き残ってる。
……どうする？　もう一度、向かってくるか？」
『いや……私は、ただプラシドを呼び戻すために連絡しただけだ。
今のところ、私に君に対する敵意は無い』
「……ずいぶん、拍子抜けする話だけど。
何か裏があるのか？」
『そもそも、我々のターゲットは君ではない。
加え、ターゲットと呼ぶべき人物がこの時代にも存在しないのは明白だ。
今回のこれは、プラシドの独断専行にすぎない。
プラシドに代わって謝ろう。……すまなかった』
「……少し、行動が派手すぎると思ったんだけどな。
そういう裏があったのなら、まあ納得――か」

それにしても、プラシドはともかくとしてホセは相当に常識的だ。
……あのはっちゃけっぷりさえ無ければ、完璧超人だったろうに。

「まあ、そもそもモーメントの存在しない時代なんだ。
……あまり、興味も無いだろうな」

『ほう……そこまで知っているのか。
本当に、お前が何者なのかを知りたくなるな』

「行ったろ？　『通りすがり』って」

実際、今回は俺が十代を追跡していたところを、
唐突に襲われたのだから、文字通りに「通りすがり」だ。

「ま、あなた方には言っておいてもいいのかもしれんが。
……平行世界からの旅人、とでも思ってくれればいい」

……この表現、モロに世界の破壊者（ディケイド）じゃね？
まあいいけど。

『旅人か。……目的はなんだ？』

「第二の人生を謳歌すること。
と言っても、別段、おかしなことをしようとは思っていない。
当たり前の人間として、当たり前の人生を送りたいだけだ」

まあ、よく考えるまでもなく、
既に色々と事件に巻き込まれてて普通の範疇の外なんだが。

「まあ、いろいろと言いたい文句はある。
そっちも疑問に思うことはあうだろうけど――まず、争うことは無しにしよう。
今後の活動に――互いの活動に、支障が出ることもあるよな？」

『そうだな。私としても、争いは避けたいと思っている。
私たちの目的は、あくまでお前たちの時代よりも未来――。
《レッド・デーモンズ・ドラゴン》などのカードが伝わった時代にある』

「だろうな。だからこそ提案するんだが、
今後は、そちらと俺たち――つまり、この時代か。
この時代において、戦うということは無しにしないか？
最悪、そちらに伝わるべきものが伝わらない可能性がある」

『タイム・パラドックスの理論か……。いいだろう。
最低限の事物が無ければ、今の世界も存在しえない。
私は、その申し出を受けよう』

1を聞いて10を知る――ということわざがある。
別の言い回しをすれば、一を以て万を知る。一事を聞いては十事を知る。

有名な故事成語だ。

相手の話を聞くだけで、その本質まで理解するほどの才知を持つ――という意味合いだが、
ある意味、ホセに合っている言葉ではないだろうか。

でもそれもしばらく経ったらHA☆HA☆HA！
とか言っちゃって台無しになるんだよな。
本当に残念だ。あの件がきっかけで人気が出たフシはあるけど。
実は俺はあの事件の前までの落ち着いた雰囲気の方が、
ボスキャラとしての風格があってカッコいいと思っていたのに。

ただ、今。
俺と話しているこのホセに関しては、老獪（ろうかい）で才知溢れる知将、という印象しかない。

本当――なんというか、理解が速くて助かる。

とりあえず、この男は敵に回したくないな。
少なくとも、この時代においては。

「現状、そちらに不利益となりうるような状況は無いと見る」

『その通りだ。貴君がそこに存在し、今後起こりうる事件に関わったとしても、
我々にとって不利益となるような状況は存在しえない。
むしろ、少なからず活躍してくれた方が好都合だ』

「その言葉を聞いて安心したよ。……そちらのデータに、
『御堂和真』という人間のデータは存在するか？」

『ふむ……少し待っていろ』

そう言うや、通信機の向こう側から、なにやらカタカタと音が聞こえてきた。
あのデカい手でタイピングでもしているのだろうか。

確かに、大きい手の人ほど器用だという話は聞いたことがあるが……。
……気にしないでおこう。

『判明した。現在も健在だ』

「そうか……。その人物が使っていたであろうカードの名を6枚ほど挙げる。
あれば、順次、返答をくれれば助かる」

『了承した。では、そのカードは何だ？』

「ああ、まずは《Ｔｈｅ　ｂｉｇ（ザ・ビッグ・）　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）》だ」

これは、恐らくは外すことはないだろう。
少なくとも、今後使っていくことは確実だ。

『ふむ……使用記録がある』

「じゃあ、次だ。《邪神アバター》」

『それも同様だ』

次々と、インティ、クイラの名を挙げていく。
――も、やはり、ホセはそれらのデータに対し、肯定の意を示した。
と、なれば――やはり。

「最後だ。――――と、――――」

『……驚いたな。いずれも使用記録がある。
となれば、貴君は――』

「旅人だよ。そういうことにしてくれ」

さて。
これで、図らずとも未来のことが理解できたわけだ。
俺の持つ封印指定のカードは、いずれも、未来の俺が使用していた形跡があるとのこと。

となれば、俺はあれらのカードを使用することができる、という意味でもある。

ただ――やはり、使用には注意が必要だろう。

どれもこれも、効果は強力であっても、危険なカードであることには変わりないのだ。
流れを変えるほどに、安易に使用するのははばかられるな。

「悪いが、面倒ついでに聞きたいことがある。

今度は、『六条有珠』という人間に関してだ。
彼女の使用していたカードのデータを聞きたい」

『ふむ……造作もない』

再度、ホセの側からカタカタという音が聞こえてくる。

それが終了したとき、俺は2枚のカードの名前を告げた。

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》。

《The splendid（ザ・スプレンディッド） VENUS（ヴィーナス）》。

――やはり、いずれにも使用経歴がある、と。

『《レッド・デーモンズ・ドラゴン》に関しては、
彼女が用いたというデータが残っている。
旧モーメント開発の際に、不動博士に譲渡したようだな』

「感謝する。これで、色々と疑問が解消できた」

『こちらの不手際が巻き起こした事件だ。迷惑賃と思えば良い』

「いずれにせよ、感謝させてくれ。
……あなたとは、可能な限り敵にとして相対したくないな」

『私もだ。……では、可能な限り、友好な関係を築いていきたいものだ、

紅眼の決闘者よ』

「ああ――――」

って、紅眼？

いや、ちょっと待てよ？　俺の眼が赤いのは片方だけのはず――。

そう思った頃には、通信も途切れ、プラシドの姿も、Ｄ－ホイールの姿も消えていた。

まあ、片目が赤でも、紅眼なんて言うこともあるんだろうか――。

そんなことを考えつつ、俺は晴れ行く空を仰いだ。

＊　＊　＊

閑話休題。

やはり、俺がプラシドとデュエルしている際、
十代も影丸理事長とデュエルしていたとのこと。

で、やはりそこは原作通りの展開。
《賢者の石サバティエル》を利用し、
エリクシーラーの攻撃力を倍加させることで勝利した、と。

やっぱり、流石は主人公。華麗に世界の危機を救ってくれたよ。

ま、その一方で、俺は世界のためにはなりえない、
自分のためだけの戦いをずっと続けていたんだが――それは蛇足だ。

とはいえ、さすがに俺も顔面をボコボコにされてきたわけだ。
保健室に直行。曰く、本来なら即入院コースらしい。

具体的な状況を挙げていこう。

まず、肋骨の骨折。これに関しては合計5本。左4本、右1本だ。
こうして考えると、奴が執拗に俺の心臓を狙っていたかということ
が分かる。

左足大腿部にヒビ。左拳は半分イカれてる。
右腕の中ほどに亀裂があるとも。
顔面に関しては、奇跡的に無事だった。

……無事だった、というのは、あくまでも外から見た「形」だけだ
が。

実のところ、頬骨にはヒビが入っている。
痛みも酷く、割と辛い。

で、内臓器官にも少々異常が見られるとのこと。
胃は随分前から荒れてたらしい。が、とりあえず保留。

肺にも傷がついているらしい。
これは肋骨が折れたときに突き刺さったのだろう、という見立てだった。

ついでに、食道やら胃やらも「やっちゃった」らしい。
こういった理由もあり、しばらくは流動食や点滴生活だ。

誰にやられたのか、という質問もあったが、これに関しては黙秘した。
未来人にやられました。なんて言ってもデンパか何かと勘違いされるだろうし。

そんなわけで、全治3か月。

卒業式には間に合わないし、何よりもまずは帰省して入院しなきゃならないし、
本当に散々なことになってしまったようだ。

ともかく――これで、俺のデュエルアカデミアにおける、一年目の生活は終了となった。

次に学校に向かうのは、入学式。

――さて、どんなことが起きることやら、だ。

３０束目：超絶（後書き）

プレミスは気にするな！（

どうも、ＴＨＥ超展開の枠です。

いやあ、いろいろとやっちまったＺＥ☆　みたいな状況になってますね！（

とりあえず、これで１年目終了です。
次回から２年目、破滅の光編に移ります。

え？　デュエル部分が少ない？

実は後半に実質的なネタバレ要素やらなんやらを積み込んで水増ししたなんて死んでも言えない……↑

そういうわけで、次回以降の御堂の六条に対する態度にご注目ください（

さて、前置きことあとがきはこのへんにしておきまして。

ともかく謝辞を。

読者の皆様に支えられ、こうして３０話まで進めることができました。
さまざまなミス、おかしな点を指摘してくださり、デュエル部分の内容もそれなりには見られる（のか？）ものになってきた……かもしれないと考えています。

本当に、ありがとうございました。
これからも拙作、遊戯王ＡＣをよろしくおねがいします。

ということでして。

実はＰＶ４０万件オーバー＆ユニーク３万件オーバーという、私個人としては狂喜乱舞するような事態に陥っておりまして。

お気に入り件数も３００件突破し、もはや作者の私が厨二病を再発してます。

ここで一つ。

……コラボってどうなんでしょう、なんて言ってみたりして。

反対意見が多ければ取り消します。

というか、１年目が終わったばかりでこれって、流石にちょっと調子に乗り過ぎでしょうか；

とりあえず、現段階ではどうなんでしょう、とだけ。

やる、と決定はしていませんが、とりあえず、２年目が落ち着いてきたあたりで、結果の方は報告の方をしたいと考えてみます。

まあ、そもそも私のような駄文書きに付き合っていただける方がいたら、の話ではありますが。

夢物語ですね。申し訳ありません。

ともかく、今回はこれにて。

それでは。

31束目：二年

桜満開春爛漫。

――なんてことが、このデュエルアカデミアであるようなことは無く。

新学年――9月。

秋。

欧米式の日程を採用しているデュエルアカデミアにおいては、この時期から、全ての日程が開始する。

俺たちも、二年に進級した。

この、年度が切り替わるのを機に、昇格を果たす人間も多い。俺もその一人であり、二年生に進級すると同時、オベリスク・ブルーへ昇格と相成った。

その理由は多々あるものの、その大きな要因としては、ブルー寮に在籍していた人間が大勢卒業していったことが大きい。で、結果的に繰上げでブルーに入ることになった、ということだ。

それはともかく。

当然ながら、この日は新入生の入学式である。

俺たちの授業開始は明日以降。

今日は、新入生たちと交流をしなさい――という日だ。

「……なんだが」

ドギツい。

というか濃(こゆ)い。

見るからに1年生じゃねーだろお前みたいな風貌をしている、

某恐竜使いのティラノ君。

あるいは、俺と似たような経歴を持つ、

水色髪でお調子者の転生者――つまりは、六条。

見るからにお嬢様なキャラとか、その一方で大人しめな子やら、

様々なキャラがひしめき合っている。

すげぇ。

というか、これだけ妙な人間がいるなら、
俺の後天的なオッドアイとか目立たないんじゃねえのか。

というか目立たんだろうな。
俺、外見はともかく、性格に関しては多くの人間の中に埋没するタイプだし。

「……何なんだろうな、今年の新入生は」

というよりも、俺にとっての最大の懸案事項は――。

「……本当、何なんだろうな……」

早乙女レイ。

俺の幼馴染であり、妹役。
紛れもない「天才」であり、幼いころは俺が様々な物事の手ほどきをしたものだが、

……よりにもよって、本当に飛び級して入学してくるとは。
夢にも思わなかった、というレベルじゃない。

服装ブルーだし。

入学式は、基本的に1年生だけが参加する行事となる。
俺のように、準備手伝いをするよう頼まれた人間や、
あるいは相当な物好きでもない限りは、2年生以上の人間がここに来ることは稀だろう。

とはいえ、ずっと見下ろしているだけなんだが。

「……んぁ？」

と、そうやって退屈するかしないかという折になって、
ＰＤＡがぶるぶると震えだした。

普段なら着信の際には歌が流れるように設定してあるが、
こういった場だ。マナーモードにする程度の心構えはある。

少し下がってＰＤＡを取り出し、着信元を確認する……も、非通知。

誰だろう？
それを確かめたい誘惑に駆られ、通話のボタンを押して耳に押し当

て――。

『ハァ……ハァ……なぁ……スケベしようや……』

即座に電源を切った。

何だ今の。

誰だ今の。

再度、ＰＤＡが震えて俺に着信を報せる。

もう一度ＰＤＡの通話ボタンを押し、相手を確かめようと――。

『……なぁ……スケベしようや……』

想像を絶する気持ち悪さに背筋が震える。

震えるぞハート（恐怖で）！

……だが、今度は電源を切らず、よく相手を確かめようと考え――。

ＰＤＡに耳を押し当ててニヤニヤ笑っている六条の姿が見えた。

思わず、近場にあった文庫本
（境界線上のホラ●ゾン2巻・下）を、思い切りブン投げた。

『……なあ、スケ痛ぁ！？』

最後尾にいたから騒ぎにはなっていない。
精々、その前にいる大人しそうな女の子が、驚きで体を震わせただけだ。

なるたけ声を殺しつつ、相手に呼びかける。

「おいコラてめェ入学式の最中になんつー電話掛けてきやがる」

『あ、あはははのはー。バレました？』

「よくよく考えたらあっちの世界のネットで流行ったことがある言葉じゃねェか。
案の定だよド畜生」

『え、えーっと。あはははは』

カチカチカチ。

話している間にも、俺は携帯の操作を続ける。

『えー……っと、その、さっきからほら、
カチカチ音が鳴ってるのは、何でございませうか？』

「後、輩、が……ド、変、態、だった、ん、だ、が、……と」

『誰にメールしてるんですか！？
というか、その文面はあんまりです！！』

「馬鹿言え。スレ立てに決まってるだろうが」

『もっと酷くなったぁぁぁ！？』

「あ、お前の声録音しといたから」

『ひっ！？　何でそこであの声を録音するんですか！？』

「最初のちょっとヤバげな方な。あのハァハァ言ってるやつ」

『ちょ……本当に変態みたいじゃないですか！？』

「あんなおふざけしてるお前が悪い。
今アレ、アップローラーに上げたから」

『ちょっとおおおぉぉぉぉ！！　しまいにゃ泣きますよ！？』

「ちゃちゃと泣け。俺はお前のせいで胃に穴が開きそうなんだ」

主にレッド・デーモンズの件でな！

というか、実際胃に穴が開いただけで済まなかったわけだが。

三か月入院したわけだし。

『うう……何で先輩は私に対してだけそんなにドSなんですか……』

「いや、そりゃあんな経験したら誰でもSになるだろ。

主に仕返ししたいという意味で」

『何があったのか聞きたいんですけど……』

「ああ、後でいくらでも話してやるよ。

……ま、その前に説教だろうな。先生から」

『はい？』

「お前の目の前、ナポレオン教頭いるから」

『――へ？　むぎゅうううっ！？』

神聖な入学式に何をしているのでアール！！

そんな声が聞こえ、同時、六条の頭部が殴りつけられた。

＊　＊　＊

「うう……酷い目に遭いました」

入学式が終了してしばらく経った頃。
十代のところに向かってデッキを回収し終わったところで、
俺と六条の二人は、ブルー寮の俺の部屋に来訪していた。

寮と言っても、今まで通りの一人部屋だ。
特別、誰かに気兼ねするようなことも無い。

何より広いので、こういった場合に、皆で集まって話すには都合がいいかもしれない。

「自業自得だ。文字通りな。
お前が俺に連絡なんて寄越さなけりゃ、ああやって怒られることも無かっただろ」

「ひぅ……せっかくレイちゃんから聞き出したのに」

……どうしてここで我が義妹の名が出る。
というか、何あの子は俺の連絡先をホイホイ他人に教えてるんだ。
少しキツく言っておくか。

「変質者から何を聞かれても答えないようには教育したはずだが」

「もう私のことは変質者扱いですか！？」

「え？　それ以外に何かあるのか？」

「ちょ……私に対する印象って『変質者』オンリーですか！？」

間違いなく変質者だろう。

「ま、それはともかく……だ。
ここしばらく、こっちであったことを説明しておこうか」

「いや、私が変質者扱いなことは一切解決して……やっぱいいです
ごめんなさい」

一睨みして黙らせつつ、俺はここしばらくのうちにあったことを語

りはじめた。

まず、七星門の鍵が自立行動を見せたこと。
そうして、十代が飛んで行ったこと。ここまではいい。

その直後の――プラシドとの対決。

奴の言ったこと――つまり、レッド・デーモンズが召喚されたという反応によって、
奴だけがこちらに独断で踏み込み、俺を殺そうとしたこと。

デュエルが終わっても諦めず、
俺を殺そうとして幾度も殴打したこと。
それが原因で3か月入院したこと。

それを語り終わると、
六条がだらだらと汗を流しながらカタカタ震えていることに気が付いた。

「……」

「な、何か喋ってくださいよぅ！」

「このうっかりさんめ☆」

「その表情は『このうっかりさんめ☆』なんて言ってる表情じゃなくて、

むしろ今すぐにでも『てめェを殺す』って言うような表情ですよう！？」

「なら全文を表示してやろうか」

「いえ、いいです！　必要ないです！」

「このうっかりさんめ☆　ブチ殺してやろうか」

「結局全文表示してるじゃないですかぁ！？」

そうすることが既に俺の愉しみとなりつつある。

もとい、楽しみとなりつつある。

……この表現じゃまるで俺がドSじゃないか。

「……ま、冗談はこのくらいにしておこう。

これでやっと落ち着いて話ができるんだ。

そろそろ、互いの情報を提供し合う頃合いと思わないか？」

「そうですね。……で、どちらから？」

「俺から話そう。言いだしっぺだしな」

そう言って、俺は自分自身の過去を語りはじめた。

子供をかばって轢かれ、死んだこと。

気付いたら赤ん坊だったこと。

幼少のころに、俺が以前所持していたカードが、
ほぼ全て完全な状態で、我が家に届いたこと。

レイが幼馴染である理由。

デュエルアカデミアに入学したこと。

試験成績。

それからの、幾度かのデュエル。

群体（レギオン）。

セブンスターズ。

自分自身の――闇。

邪神。

それら全てを事細かに説明し終わった頃には、既に３０分近くが経過していた。

「ふむふむ……なんというか――テンプレ通りですね」

「自覚はあるんだがな……」

「まずそもそも、子供を助けて、車に轢かれて――って部分が、既にテンプレ臭いですよ。なんですか先輩。型にハマりきってますね」

「型破りすぎるお前にだけは言われたくないな。で、感想は？」

ふむ……と、普段の破天荒さは鳴りを潜め、六条は、多少なりとも理知的な面を覗かせた。

「その群体（レギオン）とやらが気になりますね。
転生者を襲ってくるとしたら、私のところにも……でなくとも、
先輩が幼いころに襲う、という手もあるはずですけど」

「どうやら、あいつらは俺と同じ土俵に立って、
その上で勝負をしたい、というような感覚だった。
そうしなければならないとか、なんとか」

「相応の意図があるのかもしれませんね。
……やっぱり、私も気を付けるべきですか？」

「当たり前だ。消えたいなら別だが」

「ぶ、物騒なこと言わないでくださいよ」

どこか怯えたような口調で語る六条。

いや、当たり前か。
あの場面に限っては、俺も多少肝を冷やした。

先程の話も、多少誇張して語った部分はある。
そのせいで、恐怖だけが助長された――といったところか。

「では、私の過去を話すべきですか？」

「……まあ、そうだな。言いたくない部分は、言わなくてもいいが」

「ですか。分かりました。
……じゃあ、どこから話したもんですかね」

少し、考え込むような表情をする六条。

いつもこうなら俺も文句は無いんだが……高望みか。

「元々私はヒッキーでしたね」

「は……？」

「対人恐怖症のヒッキーでした」

おい。

おいおいおいおいおいおいおいおい！？

ちょっと待て。このはっちゃけ娘がヒキコモリだと！？

確かに色々と言動はおかしいけど、ヒキコモリってことは無いだろ！？

「何ですか、そんなに驚いた表情で……。
これでも訓練したんですよ、他人との付き合い方とか」

「……」

え？　アレで学んだの？

「そんなわけで、昼夜問わずネトゲしてて、
ロクに食事も取らなかったら栄養失調で死にました」

「ンなしょうもねェ理由で死んだの！？
流石にそこまでいくと前代未聞だよ！？」

「失敬な！！　ネトゲ中毒で死ぬ人って結構いるんですよ！？」

「そこで熱弁するのかお前！？　やっぱり色々ズレてるだろ！？」

せめて、もっと自分が死んだことに対する心配をしてないことへ、
ツッコミを入れてほしかったよ、俺は。

「で、まあ気付いたらこの世界にいた――という具合ですね」

「カードに関しては？」

「んー……先輩とは違う形式ですね。
何か、無駄に大量にカードがありました」

「具体的な枚数や種類は分かるか？」

「そこに関してはちょっと……。
私、先輩みたいに器用じゃないんで、デッキをそう何個も持ってないので、
一部のカード以外は、記憶の外というか」

「……別に、俺は器用じゃないんだが」

器用、ではない。
ただ――少し、臆病なだけだ。

相手に合わせた戦術を取ることができないまでも、
自分の中で、可能な限り有用な戦術を模索する。

その途上で、「様々な相手に対応できるデッキ」というものを妄想する。
――当然ながら、そんなものは夢物語にすぎない。

だからこそ、状況に応じて使い分けることのできるデッキをいくつか持つ。

それだけだ。

「これまでに自分が持っていなかったカードなんかがあった、と見てもいいのか？」

「はい、相当数ありましたね。
特に目立ったのが、その……あのとき言ってた４枚のカードです」

「ＶＥＮＵＳ（ヴィーナス）、レッド・デーモンズを含めた４枚――か」

こいつが残りの２枚のことを言わないのは、まあよしとしよう。
俺にしたって、残りの２枚のことは言いたくないし、言えない。
似たような事情があるのだとすれば、詮索するのは野暮というものだ。

「とりあえず、話の続きに戻ります。
そんなこんなで、対人コミュニケーションの特訓をし、
デュエルアカデミアの中等部に入学し、今に至るわけです」

「……えらくあっさりしてるな。
いや、普通の人間として考えれば妥当だが」

「先輩の密度が濃すぎるだけだと思うんですけど」

「否定はしないけどな……」

ただ、これからもっと濃くなるのだろう――というような、
漠然とした予感はある。

主にテラ子安ＥＸのせいで。
あとイヤッッホォォオオォオウ！　とか。

胃薬買い足しておこう。

「そういえば先輩、精霊って見えます？」

「精霊……？」

そういえば、見えない……はずだった。
しかし、アムナエルに埋め込まれた左目のせいで、
左目側の視界にだけは、見えるようになった。

「……後天的に、見えるようになった……かな」

「あれ？　見えてたんじゃないんですか？」

「ああ。全く見えなかった。存在も感じないし声も聞こえなかった。ただ――この目だな」

俺は、六条に左目を晒す。

「アムナエルに移植された目だ。赤いのは、単に色素の問題であって、邪気眼やギ〇スじゃないから安心してくれ。……これには、精霊を見ることができる人間のデータが入力されている、らしい」

「へぇ……それで見えるようになったんですか」

「そう言うお前はどうなんだ？」

「私ですか？　元々見えてましたよ。ただ、精霊って、この世界じゃそもそも絶対数が少ないですから、見ることができるのは稀ですけどね」

「……成程な」

十代や万丈目のように、精霊を持っていつつも、それでいてなお精霊を見ることができる人間は稀有――ということだろうか。

「ちなみに、私には精霊はいません」

「奇遇だな。俺だってそうだ。
……というか、いたらいたで、持て余すだけだろ」

「そうですかね？　案外、面白いかもしれませんよ？」

その感情は理解しかねるが……まあ、もしも、の話だ。
今後持たないとも限らないが、持つとも限らないので、
この話にはあまり意味が感じられない。

「仮に精霊のカードが手に入るとしたら、何がいいですか？」

「《サイ・ガール》」

「うわぁ……」

何だ。何がおかしいんだ。
俺は率直な感想を言っただけだぞ。
どうしてそんな引きつった笑い方なんだ。

……ロリコンじゃねえぞ俺は！？

「何か勘違いしているだろうから言わせてもらうが、俺は別に性的対象としてそういったものを求めてるんじゃないぞ！？

どんな精霊がいいか、と言われたから答えただけだぞ！？」

「必死すぎて逆に疑いを強めてますよ。ぷくくくく」

「……」

「ひぅ」

こいつから聞いてきたというのに、なんて言い草だ。

……いや、俺の回答が悪かったのか？

流石にあそこで《サイ・ガール》は無かったのか？

それとも、もっと別なカードを選択すればよかったのか？

……だとして、何があるかと言われれば――正直、《ジェネクス・コントローラー》くらいしか思い浮かばないんだが。

だって、アレだぞ？

例えばの話、《邪神アバター》の精霊を思い浮かべてみよう。

朝起きたら、真っ黒な球体がそこにあった。

例えば、《Ｔｈｅ　ｂｉｇ（ザ・ビッグ・）　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）》の精霊だったら。

帰り道、常に背後に巨大な鉄塊がある。

しかも妙に兵器臭い。

……ほら、それに比べたら、非常に心安らぐじゃないか。

重ね重ね言うが、俺はロリコンじゃない。

シスコンは認めるが、ロリコンではない。

「……ま、雑談はここまでだ。

とりあえず、外に出るとしよう」

「うぃ、了解です。でも、どうするんです？」

「委員長たちと合流して今後のことを話し合う。

新入生の案内をしてくる、って言ってたから、その応援。

歓迎会のことも話し合わなきゃいけないし」

おお！　と言ってめを爛々と輝かせる六条。

……こういうことを、新入生の目の前で言うのもどうかと思うが、

まあ……仕方がないと思ってあきらめよう。

＊　＊　＊

それから十数分後、俺は六条を連れて、
案内を続ける委員長たちに合流した。

「それから、こっちが保健室です。
大抵の場合、保健体育担当の鮎川先生がいらっしゃるので、
怪我をした場合や調子が悪い場合には……」

と言っても、合流してみたところで、俺にできることはほとんど無い。
せいぜい、新入生が分からない部分を補足説明する程度だ。
それにしたって、委員長の的確な説明のおかげで、ほぼ有名無実化してしまっている。

俺がこの場にいる意味は、果たしてあるのだろうか。

……ま、無いなら無いで構わんが。

「こちらがデュエル場です。進級試験の際や、

「その他さまざまな場合で訪れることになりますので……」

委員長の説明を聞き流しつつ、適当に周囲を見渡す。

見れば、六条と一緒に学園祭にやって来た子たちもいるようだ。

いや、それにしたって、ある意味では当然なのだが。

興味の無い学校の見学になんか来ないだろうし。

ちなみに、レイは青葉さんと宮田さんの班にいる。

ちくしょう。

しかし、暇だ。

本当にやるべきことが無い。

いや、俺は俺で歓迎会のことを考えておくべきなのかね？

とすれば、まずは各々の寮に通達を出す必要があるな。

コックはブルー寮にもイエロー寮にも専属の人間がいるから、

可能であれば、料理に関しては彼らに依頼するとして……。

ああ、メニューは俺の方で考える必要があるな。

あまり豪華になりすぎてもいけない。材料費も高くつくだろうし。

場所はどこを借りることができるだろうか？

流石に購買という訳にもいくまい。

となれば、ブルー寮の食堂を借りるのが一番手っ取り早いが、果たしてそのためにどれだけの金がかかることやら。

いや、クロノス教諭にでも相談すれば、案外手は打ってくれるかもしれない。

あの人はあの人で、生徒のことはよく考えてくれている。

自分の担当するブルー寮のこととともなれば、その傾向も顕著だろう。

いざという場合には、俺のポケットマネーを使えばいい。

懐は寒くなるが。

となれば、料理と場所と言う条件に関してはクリア。

それ以外のものに関しても、策を練る必要はあるな。

例えば、全員分の景品を用意して、ビンゴ大会なんかはどうだろうか？

この場合は、俺の趣味を表出さるべきではない。

よって、景品を考えるにあたっては、他の人員の助力が必要不可欠だ。

カードパックは2つで景品として成り立つだろう。

それ以外にもいろいろと思い浮かびはするが、そちらはほぼ趣味の領域だ。

寮生活なのに生活用品配ってどうするんだ。元々あるっての。

あとは、挨拶か。

と言っても、長すぎる挨拶なんてもってのほかだ。

適度に短くし、その上で伝えるべきことは伝えなければならない。

さて、そのための挨拶は誰に言わせるべきだろうか？

やはり、委員長が適任か――いや、発案者なんだから俺が言うべきか？

いや、３年の先輩に言わせた方が――いや、３年生に知り合いはいなかったな。

やはり、吹雪さんにでも頼むべきだろうか？

今やあの人、結構な人気者だし。俺なんかが言うよりはよっぽど――。

「御堂君！」

「おわっ！？　って、委員長。どうしたんだ、そんなに声を荒げて」

「一向に反応を見せてくれないからです。
それより、話を聞いていましたか？」

「ごめん……少し、考え事してて」

「でしょうね。……確か御堂君、
この場所の使用許可を取ってきた、って言ってましたよね？」

「ああ。って言っても、精々が１時間かな。
学校自体が妙に広いから、次のグループが来るまで、ってことで。
恐らく、皆、こういう施設の体験はしてみたいだろうと思って相談したら、
クロノス教諭も、こういう時期だからってことで了承してくれた」

「そうですね。ということで、私たちの班の８人で、

トーナメント形式のデュエルを行ってもらうことにしました」

良案だ。
時間が限られている現状、総当たり戦などと悠長なことはやっていられない。
仮に運悪く負けたとしても、他の生徒のデュエルを見て勉強することもできる。
そして何より――俺たちは、新入生の実力を見極めることができる。

色はあくまでも「基準」だ。
三沢は既に、オベリスク・ブルー相当。
いや、場合によってはブルーを超える実力を発揮している。

十代などは、オシリス・レッドだというのに、
デュエルアカデミア屈指の実力者だ。

翔も、ラー・イエローでありながら、
ブルー生徒相手に良い成績を残している。

万丈目に至っては、十代と肩を並べるレベルだ。

まあ、こいつらがちっとばかし異常なだけ、とも取れるが。

……しかし、だ。

「で、優勝者には、御堂君とデュエルしてもらうことになりました」

「……え。俺？」

「ええ。オベリスク・ブルーの生徒とデュエルできる、と聞いたら、皆舞い上がったように喜んでましたよ」

「……それは、まあいいんだけどさ。何で六条はこっちにいるわけ？」

と、俺は、ベンチに腰掛ける六条を指さした。

「ヤですよ先輩とデュエルするの！　あんな怖い思いするくらいなら、最初っからやらねー方がマシです！」

「だそうですよ、御堂君。そういうことで、彼女の相手は不戦勝です」

マジかよ。

いや、六条の実力なら、普通に勝ちは拾えると思うんだが……。

アレか。

あのときの異常なワンショットキル&オーバーキル。
その後の折檻とか。
あのとき「注意」したから気を付けてくれるとは信じているが、
そうでなければ、俺もこういった場で説教を始めたりはしないんだが。

「うむむ……ゆっきーもうさみんも、
先輩の毒牙にかからないように注意してもらわなければ……」

オイコラ毒牙ってどういう意味だ。

「……その二人、お前の友達か？」

「ひっ……って、説教じゃないんですね。
あの時いた二人です。お嬢様の方が海野幸子（うみのゆきこ）。
少し気弱で健気な方が、宇佐美彰子（うさみしょうこ）。どっちも、良い友達ですよ」

「ふむ……まあ、見た感じ、二人とも結構腕は立つみたいだったし、
俺に勝つなんて、それこそ造作もないことじゃないか？」

「過ぎた謙遜は自慢みたいなもんだって言葉知ってます？」

質問に質問で返すな……なんて、言えるかどうかはともかく。
普段はふざけてるくせに、こういう場面では真剣なことも言うのな、こいつ。
普段からそうならいいのに。

しかし……過ぎた謙遜は自慢、か。

――……それは本当に実力がある人間が使うからこそ、そう思うのであって……俺は、あくまでも凡人の範疇にある。

そう思わなければ、やっていられない。

未だに――俺の頭には、「嫉妬」が渦巻いているのだから。

＊　＊　＊

それからしばらく時間が経過して、２０分ほど。
参加者も残り４人に減り、勝負の方も白熱していた。

「うさみんもゆっきーもがんばれー」

少々投げやりな応援をしている六条は置いといて。
俺と委員長の視線は、そこから少々別な場所。
――もう一つのグループのそれに向けられていた。

「ふふ……」

妖しげに笑む少女。
プラチナブロンドの髪をツーテールにまとめており、
その容貌は間違いなく人目を引くものと言えよう。

相手を見据える赤い瞳も合わせ、ある種、ウサギのような印象も受ける。
……が、まあその点に関しては割とどうでもいい。
対戦相手は、オベリスク・ブルーに入寮予定の男子生徒だが――。

「圧倒的だな」

圧倒的――。

そう、その状況を一言で表すとすれば、まさにその言葉がぴたりとあてはまった。

《終焉の王デミス》を背後に置き、
あらゆるものを圧倒してみせるその姿は――ある種、
「女王」という言葉が相応しい。

しかし……デミスか。

確かにあのカードは相当に強力だ。

場の全てのカードを破壊し、
一気にゲームエンドに持っていくことのできる制圧力を有している。

しかし、そのために用いるライフコストは２０００。
ライフの半分という――まさに、破格のコストだ。

それゆえ、使いこなせる人間はそういない。

――故に、強力。

「2年の、藤原雪乃さんです」

「……2年？」

「ええ、転入生……ですね。この春から、本校に入学した」

それで、デュエルの腕が頭一つ分抜きんでてる、ということか。

しかし――藤原、か。

「あのビッグカップルの娘か？」

「察しが良いですね、御堂君は。

……どうも、そうらしいです」

大物同士の夫婦。

藤原夫妻。彼らは、世界に名だたる俳優だ。

夫は日本映画のトップスター。妻はハリウッド女優。

その娘である、藤原さん――人目を引く、というのは、

あながち俺の評価だけではないようだ。

「目的の方は、判然としませんが」

「……無理に聞き出す必要も無いんじゃないか。

それを言いたくないような人間だっているさ」

俺なんて、ほとんど下心にも近いような理由で入学したわけだし。

「……というより、本人が言ってたんですよ。
『真の男と呼べる人間を捜す』――なんて。
正直、意図が読めません」

「……オーケー、俺も分かりそうにない」

真の男ってなんだ。
無理を通して道理を蹴っ飛ばす人か？
それともアッーな方か？

「……腕は、本物か」

儀式モンスターの扱いは、正直なところ、かなり難しい。
それに特化したデッキであっても、手札事故は避けられない事態だ。
サーチカードを何枚積んだとしても、その点は変わらない。
挽回するにも、相応のプレイングが必要だろう。

ただ、上手く回ったときの爽快感はハンパじゃない。
デミスなんて、その極致だろう。

「……あっちもあっちで、相当だけどな」

以前の光景を思い起こすと、
まず思い出されるのは《ジュラック・タイタン》。
そして今現在――目の前では、大怪獣超バトルさながらの光景が繰り広げられている。

まず、海野さんの場に存在する《超古深海王シーラカンス》。
これ1枚でも相当にド派手だが、その場には、まだまだ魚が存在する。

また、宇佐美さんの場には《ジュラック・ティラヌス》と、
《ジュラック・ギガノト》、《ジュラック・ヘレラ》が存在する。

正直、おなかいっぱいです

誰が勝ちあがるかも分からないような緊迫感。
――この時点で、俺なら間違いなく倒れてる。

倒れてなければ、胃を痛めてることだろう。
いや、あの場にいたらそれどころじゃないだろうけど。

――そうして、数分。
気付けば、決勝の舞台には海野さんと藤原さんが上がっていた。

宇佐美さんも健闘はしたが、惜しくも敗退。
今は六条に慰められている。
……が、まあ、彼女も普段から、
海野さんや六条とデュエルしていることもあってか、早々に復活していた。

――さて、俺がデュエルすることになるのは、この二人のどちらになるのだろうか。

……正直、今から考えても頭が痛い。
だってデミスだぜ？　シーラカンスだぜ？

ワンキル特化されたら、死ぬって。

……そんなチキンなことを考えつつ、俺は二人の勝負に目を向けた――。

３１束目：二年（後書き）

えーしーミニドラマ／「掲示板」

スレ抜粋←
「俺の後輩がド変態だったんだが」

１　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１０：２２：３９．１１　ＩＤ：ｏＤｄＥｙｅｃＨ０

後輩がド変態だったんだがどうすればいい？

２　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１０：２２：５３．３７　ＩＤ：ｄＥｃｋ６Ａｉｒ０

釣り乙

３　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１０：２３：１９．６１　ＩＤ：ａＮＩＫｉｒｏＩｄ０

＜＜1と後輩のスペック

4　名前：＜＜1　投稿日：2014／9／01（月）　10：24：39．96　ID：oDdEyecH0

すまん、今色々と立て込んでて長文書けぬ
携帯がスレ立てるべきじゃないな

＜＜3

俺
16歳　高校生
多分フツメン

後輩
15歳　女子高生
見た目はかわいいと思う

5　名前：名無し@乙　投稿日：2014／9／01（月）　10：24：48．33　ID：oJaMa／LaD0

もげろ

6　名前：名無し@乙　投稿日：2014／9／01（月）　10：24：59．40　ID：aNIKiroId0

根こそぎもげろ

７　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１０：２５：１２．３３　ＩＤ：ｄＥｃｋ６Ａｉｒ０

むごい有様でもげろ

８　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１０：２５：２９．３３　ＩＤ：ａＮｔｉＱ／ｕｅ０

爆発しながらもげちぎれろ
内容うｐ

９　名前：＜＜１　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１０：２６：２８．１２　ＩＤ：ｏＤｄＥｙｅｃＨ０

＜＜５－８　もげろ言うなｗｗ

＜＜８

なんか非通知で電話掛けてきて
いきなり「……なぁ……スケベしようや……」って言われた

１０　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１０：２６：５７．２３　ＩＤ：ａＮＩＫｉｒｏＩｄ０

ＫＩＭＥＥＥＥＥＥＥ！

11　名前：名無し@乙　投稿日：2014／9／01（月）　1
0：27：29．13　ID：dEck6Air0
ただの自慢スレかと思ったら予想の斜め上だったでござる

12　名前：名無し@乙　投稿日：2014／9／01（月）　1
0：27：29．33　ID：aNtiQ／ue0
痴女ktkrとか思ってたらご覧の有様だよ！

13　名前：名無し@乙　投稿日：2014／9／01（月）　1
0：28：16．34　ID：JoiN／yUSa0
おいついた
え　これ釣りじゃないの？

14　名前：名無し@乙　投稿日：2014／9／01（月）　1
0：29：32．45　ID：oJaMa／LaD0
まだ判断しづらい

15　名前：＜＜1　投稿日：2014／9／01（月）　10：
30：56．31　ID：oDdEyecH0

悲しいことに釣りじゃないんだよ
録音した声上げといた。２分で消す
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ａｆｘａｓ．１１００２９．ｚｉｐ

１６　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１
０：３１：１２．１８　ＩＤ：ｄＥｃｋ６Ａｉｒ０
釣りと思ったのにガチだったでござる

１７　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１
０：３１：４１．５１　ＩＤ：ａＮｔｉ／Ｑｕｅ０
うわぁ……

１８　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１
０：３２：１９．１２　ＩＤ：ＪｏｉＮ／ｙＵＳａ０
これは僕でも少し引くわ

１９　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１
０：３３：０１．３３　ＩＤ：ｏＪａＭａ／ＬａＤ０
いくらく＜１がリア充だったとしてもこれは同情する

２０　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１０：３３：２６．４１　ＩＤ：ａＮｔｉＱ／ｕｅ０

―ω・、）＜……なぁ……スケベしようや……

２１　名前：＜＜１　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１０：３４：１４．２０　ＩＤ：ｏＤｄＥｙｅｃＨ０

＜＜２０
残念ながらそんなにかわいいもんじゃない。
もっとドギツめ

２２　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１０：３４：５１．２８　ＩＤ：ａＮｔｉＱ／ｕｅ０

のД｀）＜……なぁ……スケベしようや……

２３　名前：名無し@乙　投稿日：２０１４／９／０１（月）　１０：３５：１９．３４　ＩＤ：ｄＥｃｋ６Ａｉｒ０

＜＜２２
顔文字の問題じゃねーよｗｗｗ

……ということで二年目開始、いかがでしたでしょうか。
とりあえず、暴走してます。私が。

実をいうと、本編の後半部分の展開、１度手直ししてます。
理由はごく単純……あまりにも、支離滅裂だったから。

いや、現状でも少々おかしいですけどね。特に前半部分。
まあこちらはこちらということで放置しました。

そしてなぜかミニドラマを上げてしまうという暴挙。

いや、違うんだ。これはもう一人の俺ｇ（ｒｙ

実はＩＤの部分を見れば誰が誰だかわかります（

途中に出てきた文庫本はググればわかります。

史上最厚のラノベと呼ばれる代物です。

とりあえず、これで３１話投稿完了……ではありますが、
正直なところ、私自身の近辺の状況が酷いというか。
朝起きたら真面目に遊星へアーだったというか。
まあそれは本当の話なんですが、それ以上に。

ぶっちゃけた話、レポートに手を付けてないというか（
この話が難産だったのが悪いんですよ！！↑

まあ、愚痴はこのくらいにして。

ともかく、今回はこのあたりで。
それでは。

32束目：完璧

――結論から言おう。
先程の勝負は、藤原さんが勝利した。

確かに、俺も途中までは海野さんが勝利するものだと考えていた。
《超古深海王シーラカンス》の召喚。
それに伴う、モンスターの大量展開。
《竜宮の白タウナギ》、《フィッシュボーグ－ガンナー》など、
魚族のチューナーの召喚、そこからのシンクロによる場の制圧。
また、《オイスターマイスター》の残した《オイスタートークン》
を利用し、
生贄召喚に応用する戦術も巧緻で、一見すれば隙は無かった。

――そう。本来であれば――だ。

その快進撃は、《終焉の王デミス》の来訪により、文字通りの終焉
を迎えた。

場のカードは一掃され、攻撃宣言時に用いるはずのカードも無く。
――気付けば、藤原さんの場にはもう1体のモンスターが存在し。

そうして、いつの間にやら――勝負は決していた。

《終焉の王デミス》の効果を発動してしまえば、
手札から発動するモンスター効果――《速攻のかかし》や、
《バトルフェーダー》といった、強制終了効果を持ったものや、
あるいは、フリーチェーンの《和睦の使者》などを発動しなければ、
１６００の攻撃力を持つモンスターが出てくるだけで、
ワンショットキルが達成されてしまう。

ただし、対策はそれだけではない。
効果を無効化する。破壊を無効にする。
そういった下準備さえあれば、対応は比較的容易だ。

逆に言えば、対策を怠っていれば、それだけ敗北に近づく――ということでもある。

「なんだかな……」

別に、デュエルすることに不満があるわけではない。
負けることにも、まあ目をつむろう。

ただ、ああも判然としない目的を掲げられると、

何が起きてもおかしくないような気がして落ち着かない。

「じゃあ、えっと……藤原さん、だっけ。
時間も押してるし、始めようか」

「ええ、構わないわ」

同意を得たところで、デュエルディスクを構える。
そして、一言。

「「――決闘（デュエル）！」」

先攻は――藤原さん、と。

最近、どうも俺が先攻を取ったような覚えが無いせいか、
自分の手番の前後がどうでもよくなりつつある。

「私のターン、ドロー。
私は手札から、《マンジュ・ゴッド》を召喚するわ」

【《マンジュ・ゴッド》　攻　１４００　／　守　１０００】

マンジュ・ゴッド――その名の通り、万の腕を持つ、
仁王像にも似た巨体が召喚される。

その効果は、儀式デッキにおける万能サーチ――。

儀式魔法だろうが儀式モンスターだろうが、
構わずデッキから手札に加えることができる効果だ。

「《マンジュ・ゴッド》の効果により、
デッキから《高等儀式術》を手札に加えるわ。
更に、カードを2枚セット。……これでターンエンドよ」

堅実なところだろうな。
恐らくは、俺も似たような手を取るだろう。

「俺のターン、ドロー。
俺は手札から、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　エアーマン》を召喚！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） エアーマン》 攻 1800 ／ 守 300】

あっちがサーチなら、こっちもサーチ……ってとこか。

「エアーマンの召喚、特殊召喚成功時、
デッキから『HERO』を手札に加えるか、
エアーマン以外の『HERO』の数だけ、魔法・罠（マジック・トラップ）を破壊できる。
俺は、《E・HERO（エレメンタルヒーロー） レディ・オブ・ファイア》を手札に加える」

ダメージソースは手札に加わった。まずはここからだ。

「――バトル！　エアーマンで、マンジュ・ゴッドを攻撃！」

「ふ――伏せ（リバース）カード、オープン。
《ドレインシールド》。相手モンスターの攻撃を無効にし、
その攻撃力分、ライフポイントを回復するわ」

やはり、ライフゲイン用のカードは用意していたか。

そうでなくては、あのカードを用いるには不足――というか、かなり問題があるだろう。

「カードを2枚セットして、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー。
手札から、《センジュ・ゴッド》を召喚するわ」

【《センジュ・ゴッド》　攻　１４００　／　守　１０００】

「センジュ・ゴッドの召喚に成功したとき、
デッキから儀式モンスターを手札に加えることができる。
《破滅の女神ルイン》を手札に加えるわ」

――デミスじゃない！？

何故だ？　デミスを出せば、場の制圧は容易なはずだ。
《高等儀式術》が手札にあるのなら、生贄用のカードを呼び込む必要も無いはず。
それとも、何か別な意図があるのか？
あるいは――このターンで、勝負を決める？

いや、それは無い。確かにルインは2回攻撃が可能だが、

それはあくまで「相手モンスターを戦闘で破壊した場合」だけ。
恒常的に2回攻撃ができるわけじゃない。

あるいは、《高等儀式術》を用いてルインを召喚。
そこから、マンジュ・センジュの二体の補助モンスターを用い、
ワンショットキルを行うつもりだろうか。

可能性が高いのは後者――か。

「手札から《高等儀式術》を発動するわ。
《破滅の女神ルイン》のレベル分の通常モンスターを墓地に送る。
《デュナミス・ヴァルキリア》、《デーモン・ソルジャー》を墓地に送り、
《破滅の女神ルイン》を儀式召喚！」

【《破滅の女神ルイン》　攻　２３００　／　守　２０００】

場に降臨する、赤を基調とした衣装に身を包んだ「女神」。

そこから感じられる神々しさの一方で――しかし、
その背後には暗い影が見受けられる。

「さあ、行くわよボウヤ。《破滅の女神ルイン》で、

E・HERO（エレメンタルヒーロー）　エアーマンに攻撃！」

ボウヤって。

そんなこと言われたの、初めてだぞ俺。

――なんてげんなりしてる場合じゃなかった！

「伏せ（リバース）カード、オープン！　《ヒーローバリア》！
『E・HERO』が場に存在しているとき、
相手の攻撃を1度無効にする！」

「あら……」

ルインの効果は、相手モンスターを破壊したときにのみ適用される。
つまり、こうして攻撃を無効にしてしまえば、ルインの2度目の攻撃は無い。
加え、センジュ・ゴッドも、マンジュ・ゴッドも、
エアーマンに攻撃力が劣る。

「ならいいわ。カードを伏せ、ターンエンドよ」

「俺のターン、ドロー」

まずは守りきったが、次の攻撃はどうなることやら知れない。
それに加え、まだデミスは召喚されていない。

……さて、そうなると、様子見は必要ない――かな。

「よし――俺は手札から《融合》を発動！
手札の、炎属性の《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　レディ・オブ・ファイア》と、
《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　クノスペ》を融合する！
現れろ、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ノヴァマスター》！」

【　《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ノヴァマスター》　攻　２６００　／　守　２１００　】

「――バトル！　ノヴァマスターでセンジュ・ゴッドを攻撃！」

「んっ……」

渦巻く火炎が、センジュ・ゴッドを焼き尽くす。

そして、燃え尽きた灰の内から現れるのは、１枚のカード。
ノヴァマスターの効果によって加えられるカードだ。

「ノヴァマスターが戦闘によってモンスターを破壊したとき、
俺はデッキからカードを１枚ドローする。更に、俺は伏せ(リバース)カード
を発動！
《奇跡の軌跡(ミラクルルーカス)》！　相手プレイヤーはカードを１枚ドローするが、
ノヴァマスターの攻撃力を１０００アップし、このターンの再度
の攻撃を可能とする！」

「……！」

「もう一度、バトルだ！　ノヴァマスターで破滅の女神ルインを攻
撃！」

再燃する火炎が場を焼き尽くし、ルインの姿が消える。
そして、燃え尽きたその場には、もう１枚のカードが。

「ノヴァマスターの効果により、１枚ドロー。
……そして、《奇跡の軌跡(ミラクルルーカス)》の効果を受けたモンスターは、
相手にダメージを与えることができない」

コンボとしては、上々……と思いたいが。
しかし、こればかりに頼りすぎるのも禁物だ。
いつか、どこかで対策を立てられるのは目に見えている。

「エアーマンでマンジュ・ゴッドを攻撃！」

「うっ……」

これで、合計ダメージは１６００――。
しかし、先程のドレイン・シールドのこともあり、
実質的にはプラス２００。

まずい――と、俺は軽く歯噛みした。

次のターン、仮にデミスが特殊召喚された場合。
そうした場合――敗北の確率は非常に高くなる。

「……カードをセットし、ターンエンドだ」

だが、それに対抗するようなカードは、今は手札に存在しない。
まだライフは残っている――が、どうなるのだろうか。

「私のターン、ドロー……」

ニヤ、と、藤原さんの口元が吊り上がる。

――まさか！

「儀式魔法を発動するわ。《エンド・オブ・ザ・ワールド》。
手札のレベル４モンスター、《儀式魔人プレサイダー》、
レベル３の《儀式魔人プレコグスター》、
レベル１の《儀式魔人ディザーズ》を生贄に捧げ、
――《終焉の王デミス》を、儀式召喚！」

一気に３枚ものカードを利用し、儀式召喚――!?
ディスアドバンテージも気にせずに、一気に手札を消費するだと!?

俺の驚きをよそに、場に、暗い影が差す。

その最奥――深淵とも呼ぶべき場所から、腕が這い出る。

そして、顔が。体が。足が。

その容貌は、まさに――終焉の王、と呼ぶにふさわしいいでたちだった。

「そして、儀式召喚の成功時、伏せカード（リバース）、オープン！
《リチュアルバスター》。この効果により、
ボウヤは次の私のターンのエンドフェイズまで、
魔法・罠（マジック・トラップ）を発動することはできなくなるわ」

「――！」

このチャンスを逃すのは危険だ。
いや、そもそも、リチュアルバスターを発動された以上、
このタイミングで使う以外にありえない！

「くっ――《亜空間物質転送装置》を発動！
ノヴァマスターを、このエンドフェイズまで除外する！」

「そう……なら、デミスの効果は使わないわ。
バトル。終焉の王デミスで、Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エアーマンに攻撃！」

「っ――」

闇に包まれ、破壊されるエアーマン。
そして――。

「《儀式魔人プレサイダー》と《儀式魔人プレコグスター》の効果は、
これらのカードを用いて儀式召喚を行ったモンスターに効果を付与すること。
どちらも、儀式モンスターが戦闘でモンスターを破壊したとき、発動するわ。
プレサイダーはドロー効果。プレコグスターは、
相手が自分の手札を1枚選択して捨てる効果よ」

言いつつ、藤原さんはカードを1枚ドローする。

確か、もう一つの儀式魔人の効果は、罠（トラップ）カードの効果を受けないようにする――だったか。

「《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ブルーメ》を墓地に送る」

実質的に、ハンドアドバンテージを2つも生み出す効果ということか。

……とはいえ、既に5枚も手札消費がある以上、かなり厳しいものがあると思うのだが。

「カードをセットして、ターンエンド」

「このエンドフェイズ、ノヴァマスターは場に帰還する」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ノヴァマスター》　攻　２６００／守　２１００】

「俺のターン、ドロー！」

ここは――臆さずに攻めるべきだろうか。

いや、普通に考えれば迷う必要は無いのかもしれない。

というよりも、魔法・罠（マジック・トラップ）の発動が封じられたおかげで、これ以上の対策が立てられない、というだけなのだが。

「よし――バトル！　ノヴァマスターでデミスを攻撃！」

「ダ・メ。伏せ（リバース）カード、オープン。

《エネミーコントローラー》。ノヴァマスターの表示形式を変更するわ」

「……」

エネミーコントローラー……。
恐らくは、相手のモンスターを奪って儀式召喚の素材にするための選択だろう。
表示形式も変更できるから、防御用として組み込んだ――というところか。

しかし――こうなると、非常にまずい。
デミスに付与された効果を考えれば、
次もモンスターへの攻撃を仕掛けてくると考えるべきだろう。

その上、藤原さんのターン内は、俺は魔法（マジック）・罠（トラップ）を使えない。
思う存分攻撃ができる――ということだ。
この場合、ノヴァマスターは諦めるしかない。
そうなると、壁が必要になってくる。

壁――戦闘破壊耐性を持ったモンスターを出せば、食い止められるのではないか。
そうでなくとも、モンスター効果は一切禁止されていない。
そこが、付け入る隙になれば――。

「モンスターをセットし、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー。

……ボウヤの考え、当ててみせましょうか？」

「何？」

唐突な問いかけ。
それは――まるで、俺の思考を見透かしているとでも言うかのような。

「デミスに付与された効果がある以上、モンスターを戦闘破壊してくるはず」

「……」

「だから、戦闘破壊の耐性があるモンスターを出そう。
あるいは――リバース効果を持ったモンスターでしのぐ。
……そんなところでしょう？」

ふふ、と笑いながら語りかける。

……確かに、その言葉は正解だ。間違ってはいない。

「恐らくは、そのセットモンスターは《スノーマンイーター》か、

あるいは《マシュマロン》といったカードでしょう？
でも――デミスの効果を忘れているんじゃないかしら。
２０００のライフポイントを支払い、
場のデミス以外の全てのカードを破壊するわ！」

瞬間、デミスから発せられる、破壊の奔流。

それは、俺の場の全てのカードを焼き尽くし――。

「この瞬間、《スナップドラゴン》の効果を発動！」

「なんですって！？」

「このカードが墓地に送られたとき、
相手の手札をランダムに１枚、エンドフェイズまで除外する！」

「……！！」

除外されたのは――《闇の支配者（ダーク・マスター）―ゾーク》……か。

状況を鑑（かんが）みるに、手札に《闇の支配者との契約》か、
《奈落との契約》でも握っていたのだろう。

墓地の儀式魔人を除外して召喚すれば、
驚異的な効果を持ったモンスターが2体現れることになる。

「確かに、戦闘破壊耐性を持ったモンスターを出すことも考えられる。
《スノーマンイーター》にしても、ありえない選択じゃない。
ただ――そうすると、デミスの効果が発動されるのは目に見えている」

「誘ったというの……！？」

「いいや、予測しただけ。きっとデミスを破壊されたくないだろうし、
《スノーマンイーター》なんかのモンスターを警戒すれば、
きっと効果を発動するだろう、ってさ」

そうして――見事に、読みは当たった、ということだ。
《スナップドラゴン》が手札にあったのは、ほとんど偶然と言っていい。
これで、もっと別なモンスターがあれば、あるいは話も変わったかもしれない。
まあ、結局は運なんだけど。

「……このままバトルを行わせてもらうわ。

終焉の王デミスで直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「くっ……！」

一気に２４００ものライフが削られる。

これで、俺の残りライフは１０００――微妙な数値だな。

「ターンエンド。これで、《スナップドラゴン》の効果で除外された、

《闇の支配者（ダーク・マスター）－ゾーク》は私の手札に戻る」

「――そして、俺が魔法（マジック）・罠（トラップ）を使うことに関しても、制限は無くなる」

はっとしたように、藤原さんが俺の顔を見据える。

ここまでどれだけ我慢したことやら。

ＨＥＲＯデッキにとって、《融合》が使えないことは死活問題に直結する。

確かに、強力なモンスターはいた。しかし、それだけで勝てるとは思っていない。

少なくとも、近いうちに破壊されることは予想していた。

であれば、他の手を用いるのは当然だろう。

「俺のターン……ドロー！」

このターンの内に、勝負を決める――！

「俺は手札から、《貪欲な壺》を発動！　ノヴァマスター、レディ・オブ・ファイア、クノスペ、ブルーメ、スナップドラゴンの5枚をデッキに戻し、デッキからカードを2枚ドローする！」

手札に呼び込まれたのは、この状況に決着を付けるであろうカード。そして、さっきまでは使うことができなかった手札のカードを併せて考えれば――。

「俺は手札から、《賢者の聖杯》を発動！
俺の場にモンスターが存在しないとき、
相手の墓地のモンスターを1体選択し、俺の場に特殊召喚する。
俺は《破滅の女神ルイン》を選択し、特殊召喚！」

【《破滅の女神ルイン》　攻　２３００　／　守　２０００】

「ルイン――!?　でも、ルインの攻撃力じゃあ、
デミスには勝てないわよ?」

「……この効果によって特殊召喚されたモンスターは、
生贄にもシンクロ素材にもできない。そして、
このエンドフェイズに相手の場に戻ることになる」

「だったら……!」

「だが――逆に言えば、それ以外の制約は無いということでもある」

除外。墓地送り。破壊。
色々と方法は模索できる。そして、これもその選択肢の一つ――。

「俺は《融合》を発動!　場の光属性の《破滅の女神ルイン》と、
手札の《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ボルテック》を融合する!
現れろ、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　Ｔｈｅ　シャイニング》!」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　Ｔｈｅ　シャイニング》　攻　２６００　／
守　２１００】

「そんな――!?」

「更に、俺は手札から《ミラクル・フュージョン》を発動！
墓地の《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ボルテック》と、
風属性の《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エアーマン》を除外して融合する！
現れろ、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　Ｇｒｅａｔ（グレイト）　ＴＯＲＮＡＤＯ（トルネード）》！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　Ｇｒｅａｔ（グレイト）　ＴＯＲＮＡＤＯ（トルネード）》　攻　２８００／守　２２００】

風が逆巻き、その中心から一体のＨＥＲＯが現れる。
緑を基調とし、「風」の属性を表出するＨＥＲＯ。
その効果は――。

「Ｇｒｅａｔ（グレイト）　ＴＯＲＮＡＤＯ（トルネード）の融合召喚の成功時、
相手の場の全てのモンスターの攻撃力、守備力を半減させる！」

タウン・バースト――。

吹き抜ける下降気流が、デミスの能力を奪い去っていく。

その攻撃力は、１２００――。

既に、脅威、と呼べる数値ではない。

「Ｔｈｅ　シャイニングの攻撃力は、除外されたＥ・ＨＥＲＯの数×３００ポイント上昇する。つまり、現在の攻撃力は３２００！――バトル！　Ｔｈｅ　シャイニングで、終焉の王デミスを攻撃！」

「くっ……！？」

光によって構成される嵐が、デミスの体を包み込む。ダメージ値は２０００。残りライフは２００。

――これで終わりだ！

「Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　Ｇｒｅａｔ（グレイト）　ＴＯＲＮＡＤＯ（トルネード）で直接攻撃（ダイレクトアタック）！！」

吹き抜ける風が、藤原さんのライフを削り取っていき――。

そして、デュエルの終了を告げる音声が、周囲に鳴り響いた。

＊　＊　＊

「相変わらず容赦無いですね！！　あ痛ぁ！？」

戻ってきた瞬間にそんなことをのたまう六条の頭に一撃を見舞い、
俺は、周囲を軽く見渡した。

今のデュエルを見て爛々と目を輝かせる者。
これからの生活に期待を馳せる者。
このデュエルを代わりたかった――どちらから、かは窺い知れないが――者。

様々な感情を見て取ることができたのは、
この企画がある意味で成功したことが理由だろうか。

「頭でっかちのボウヤかと思ったのに、そうでもなかったみたいね」

と、涼しげな表情のまま、藤原さんが俺に語りかけてくる。

……しかし、また「ボウヤ」か。しかも今度は頭でっかちときた。
俺、そんなに知的な人間に見えるのか？
いや、傍（はた）から見ればただの厨二病だろうけど。

「印象通りの人間なんて、なかなかいないって」
「そうかしら？」
「人間、誰だって隠したいことはあるだろ？
本音だって、性質だって同じ。
それに――ほら、詐欺師なんかはその典型じゃないか？
初対面の印象を良くしておいて、それを利用して騙す、って点では」

まあ、俺の場合はそうでもないわけだが。
第一印象＝厨二病。実際＝経過観察。
……死にたくなってきた。

「ええ、実際の先輩はかなりのおにちくですからね！」
「六条。今日の俺は紳士的だ。
精神的な苦痛か肉体的な苦痛か選ばせてやるから後でお前折檻な」

「ひっ!?　迂闊なこと言うんじゃなかった!?」

「……本当に分からなくなってきたわ」

出会って数十分程度しか経ってないはずなのに、「分からない人間」認定されてしまった。
どういうことだ。

「まあ……人間が誰しも本音を隠してる、と言うなら、確かにそうね」

「……そういえば、委員長から聞いたけど……。
あの『真の男というものを探す』というのは、どこまで本気なんだ?」

「全部よ」

「ぜんっ……」

即答したぞこの子!　無駄に男らしいな!?

ばっ、と髪を掻き上げ、藤原さんは続ける。

「真に男と言えるような人間に出会いたいの。
今時の人間は見栄えばかりを気にしてて、内面が伴っていない人が多いわ。
でも、そうじゃない。もっと――全てが完璧な人間を捜したいの」

「……それなら、デュエルアカデミアに来る必要性無いんじゃないか？」

もっと別な学校に入学すべきだと思う。
大体、この学校に入学してくる人間というのは、その殆どがデュエル脳な連中だ。

かくいう俺だって似たような位置づけにある。
いや、俺の場合は就職に有利でかつ原作と関われるという野次馬根性からなんだが。

「もっと、こう……一般的に見て偏差値の高い学校とか、そういった場所を捜すべきだと思うけど」

「それが、意味が無かったのよ」

……ってことはつまり？

そういった高校にわざわざ転校したりなんだりといったことを繰り返し、
その果てにこのデュエルアカデミアに到達した？
妙な目的の割に、なんてハイスペックなんだ。

「あー……その、何だ。一言いいかな？」

「構わないわ」

「……完璧な人間なんて、存在するはずはないと思うよ、俺は」

「……？」

まるで、俺が言っている意味が分からない、とでも言いたげに、首を傾げる。

「どんなに頭が良くて運動ができる人間で、運も良くて、
更に性格が良くても――必ず、どこかに欠陥があるはずなんだ。
仮に、一般的に見て『素晴らしい』と呼ぶべき人間でも、
全てが完璧な人間なんていない。それはつまり、
全てにおいて成長の余地が無いって意味でもあるし、

何より――他人なんて、必要としない」

人付き合いが良く、頭もよく、性格も良くて運動もできて、何より運が良く、何もかもを完璧にこなせる。

それは――もう、人とは呼べない。

それは、神とでも称すべき存在だ。

「何より、完璧という言葉には、少なからずそれを口にする人間の主観が含まれる。

たとえ、それが自分にとって完璧と言えても、他人にとっては完璧じゃないこともある。

人間に『完璧』という言葉はあてはまらない。それは、言うなれば――。

……『自分に都合がいい人間』だ」

少し――言い過ぎただろうか？

いや、あるいは説教臭いことを言いすぎて呆れられたか・

いずれにせよ、気分は害しているだろうな――。

そんなことを考えつつ、目を上げると。

「やっぱり、面白い子ね」

「……は？」

「いいわ。……アナタ、名前……なんて言ったかしら」

「俺？」

何故ここで名前を聞くのだろうか。
意味が分からない。

「……御堂、和真」

「そ。ならカズマ。またいずれデュエルしましょう。
今度は――本気で、ね」

と、ウィンクをし、藤原さんはデュエル場を後にした――。

……ちょっと考えたが、藤原さんって校舎の見取り図持ってるのか？

あのまま行けば、普通なら迷うだけだと思うが……。

あ、委員長が走って行った。

藤原さん捕まえてきた。

何か口論してる。

えっと？　……カッコつけて出て行ったはいいが、
結局出口も何も分からないことに気付いた？

……頭はいいのに、藤原さんはアホの子なのか？

いや、それはそれでいいんだけど……。

「まぁたこの先輩はフラグをブチ立てやがりましたね」

「……お前は何を言ってるんだ。
俺は駄フラグすら立てた覚えは無いぞ」

というより、立てられんというか、立たんというか。

いや、立てられんと言ったぞ。

何でこいつは苛立たしげに俺を見てるんだ？

「……成程。エロゲにおけるステレオタイプの追及ですか。もげればいいのにこの朴念仁」

「何を言いたいのかは分からんが……なんとなく、すまん」

というか、１５のくせにエロゲとか言うな。

と、まあ。

そんなこんなで、入学式直後のとあるイベントは、幕を閉じたのだった。

32束目：完璧（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「ツンデレ」

「しかし、先輩ってデレないんですかね？」

「お前は何を言ってるんだ」

「いや、常に私に対してツンじゃないですか。
どうやったらデレるのかを真剣に考えてるんですが」

「何があってもお前にだけはデレねえよ。
……それ以上に、まずそれを俺に相談しにくること自体間違ってるだろ」

「過程はどうだっていいんですよお！
先輩がデレる方法を聞き出せばそれでいいんです！」

「レイ」

「即答ですか……って、手段が限定的すぎませんか！？」

「あとは、方法は限定されるけどお前以外なら誰でも」

「まず私が対象外の時点で無理ってことですか！？　チクショー！！」

↓続く？

＊　＊　＊

は、そういうわけで久しぶりにあっさりしたデュエルでした。

最後の方はどうも投げやりになってしまいまして申し訳ありません。

……我ながら、あれは酷い；

我ながらいろいろやり過ぎとも思いますが、まあいいでしょう（

ちなみに藤原さんのデッキは儀式モンスター鬼積みです。

あれ以外にもガーランドルフやウェム子なんかも積んでます。

おかしいですね（

そして相変わらず嫉妬の化身ながら嫉妬の対象にしかならない御堂。

もうこいつ途中で悲惨な目に遭った方がいいんじゃないかなと思うようになってきました。

今回もどこかしらでミスがありそうな気配が……。
何かしらありましたら、報告をしていただけると非常に助かります。

とりあえず、今回はこれで。

次回は難産になりそうなので、しばらく間が空くかも……です。
それでは。

33束目：同郷（前書き）

今回はデュエルはありません。

完全に日常パートですので、その辺ご注意を。

あと、伏線は張ってますが、内容は薄いです；

33束目：同郷

さて、俺のように基本的に一般的な立ち位置にいる人間と言うものは、
まずもって悪の結社に狙われるようなこともありえないし、
悠々自適にごく当たり前の生活を送っているのが普通だろうと思う。
何？　一度悪の組織にいたじゃないか？　しかも普通じゃない？
知ったことじゃない。あれはあのときだけだ。
俺はいつだってごく「普通」という立ち位置から離れたくない。
……普通だって。普通だよ。普通と言ってくれよ。

とまあ、そんな無駄な前置きは置いといて。

入学式も終わって、数日。
いつものように自室に籠って、バイトの仕事を終わらせつつ、
近場に置いておいた水羊羹を口に運んだときのことだった。

ドバァン！　という豪快な音と共に扉が開き、
そこから六条――と、二名の女生徒が姿を現した。

「突撃！　隣の（寮の）おやつどき――」

「帰れ」

バダァン！　という轟音を発しながら、
六条だけを部屋の外においやって、俺の部屋の扉は閉ざされた。

「ちょっとおおおおおぉぉぉ！？
　一応美少女が来訪してるってのにその仕打ちはなんですか！？」

「俺の知り合いに自分のことを美少女なんて形容するイタい子はいませェん。
　という訳でさっさと帰れ。一人で」

「何で毎度毎度私に対する仕打ちがそうひどいんですか！？」

「あ、海野さんと宇佐美さん、プリン作ってあるけど食うかい？」

「完全に無視しやがりましたかこの先輩は！？」

無視じゃなくて正当な反応だと言っておこう。

「で、何の用事だ？」

「見るからにモチベーション下がりましたね……！？」

「え、えっと……新入生に、あのプロデュエリストのエド・フェニックスがいる、
って六条さんに言われて……」

「『先輩のところに行けばわかるんじゃない？』なんて言われまして、
来訪したということですわ。で、実際はどうですの？」

説明が面倒だからって、俺に丸投げしやがったな六条め。

しかし――エド、か。

「結論から言うと、いる――けど、
実際に、今アカデミア本校にいるかと言われれば、微妙かな」

「え？　っと、そ、そうなんですか？」

「プロデュエリストだしね。仕事の関係で、本土にいることの方が
多いんじゃないかな」

「入学式直後なのに、ですか？」

「シーズン始めだから、この時期は特に厳しいと思うよ。
……まあ、そんなプロとデュエルできた、幸運な生徒もいるらしいけど」

と、俺は十代の顔を思い浮かべる。

あのデュエルにおいては――確か、
その場で購入したカードだけを使って戦ったんだったっけ。

よくもまあ、あんな豪運があるものだと思う。
仮に俺が同じようなことをしたら、瞬殺だな。間違いなく。

「話を聞くなら、そっち……遊城十代って知ってる？
あいつに聞けば、だいたいのことは答えてくれると思うよ」

「あの……2年生、最強って言われてる……？」

「まあ、その遊城十代。何か琴線に触れるものがあったんだろうね。
エド・フェニックスとデュエルしたこともそうだけど、
その上勝った、って噂だよ」

へぇ、と新入生の二人が感心したように声を漏らす。

まあ、考えても見れば、アマチュアがプロを倒したということは、かなりの偉業――というか、実際にはほとんどありえないことだ。

とはいえ、今回はデッキがデッキだ。
ただパックを8つ購入して作っただけのデッキでは、あの十代に勝てないというのは道理だろう。
いや、それで善戦してみせるエドもエドだが……。

「興味があったら、レッド寮にでも訪問……ああ、いや、この時間帯なら購買かな」

普段の行動パターンから推察するに、
十代の所在は……恐らくは、購買だろう。

この時期なら、丁度小遣いが入ってパックを買いに走るはずだ。

「この際だ。案内ついでに、購買に行くかい？」

前回の案内では、何が売ってあるかとか、
どういった場合に使うとか、そんな話しかしてなかった。

今回、トメさん、セイコさんへの挨拶も済ませておいた方がいいかもしれない。
目の前で何か購入すれば、勝手もわかるだろう。

「いいんですか？」

「ああ。どうせ、俺もそろそろ十代に話を聞くつもりだったし、丁度いいと思ってさ」

そろそろ、追加のカードも欲しいと思っていたところだ。
……まあ、それで何が当たるか、なんて、
結局はギャンブルじみたことにしかならないわけだが。

「……まぁーた無意識にフラグおっ立てようとしやがってますねこの男は」

立てねーよ！！

＊　＊　＊

閑話休題。

まあ、そんなこんなで数分後。

俺たちは、校舎にある購買に来訪していた。

さて、まずは当の十代を捜さないと、話は始まらないわけだが……。

「……十代？」

何故か、大量のデュエルディスクを抱えている十代を見つけたとき、

「なにやってんだこいつ」といった怪訝な視線で見てしまったのは、

正直なところ、友人としては申し訳なく感じたが。

心配そうに、ハネクリボーが十代の隣に付き添っている……と言っても、

俺と十代、六条にしか見えていないわけだが。

「よ、よぅ、和真。ど……どうし、どうしたんだ……？」

「……まず、荷物を下ろした方がいいと思うぞ、俺は」

見てるだけで重みが伝わってくる。

……何で、こんなに大量にデュエルディスクを持ってるんだ、十代は。

ふう、と軽く息をつきながら、十代は抱えていたデュエルディスクを近くの机に置いた。

「で、どうしたんだ？」

「いや、俺としては、お前がどうしてそうなってるのかを聞きたいんだけど」

「ああ、これ？　なんか、デュエルディスクを無くした、って言ってるやつが多いらしくてさ、トメさんに言われて、皆に配ってるんだ」

「……大変だな、お前も」

伊達に2年のリーダーじゃないってとこか。

……本当、そういう部分は真面目だよな、こいつ。

デュエル以外の部分ではかなりいい加減なんだけど。

「しかし――デュエルディスクを紛失するなんて、そうそうあるもんかね？」

「ああ、その話なら聞いたことありますよ？」

と、割り込むようにして六条が口を開く。

「デュエルディスク狩りって言って、今一部の間で噂なんですよ。橋の上で待ち受けて、デュエルで勝ったらディスクを奪う。そんな行動からついたあだ名が――『武蔵坊弁慶』」

「よく知ってるな？」

「ええ、だってこのあだ名考えたの私ですもん」

「……」

情報の発信源はこいつかよ！！

道理でなんかちょっと詳しいはずだよ！

……って、待てよ？

「お前……そういうことを、知ってたなら何で言わなかった？」

びく、と六条の肩が揺れた。

視線が逸らされ、額に汗が浮かぶ。

――気付けば、俺の口元には笑みが浮かんでいた。

「ろォくじょォうちゃァァァァァン？」

「ひぅ！？　い、いやこれは、
別に私が解決して手柄にしようとか思ってたわけじゃ……。
しまった！！」

「自らネタバラシしてくれるとはご苦労だった。
これから貴様はなんの手助けも受けず、ただひたすら、死ぬだけだ。
どこまでもがき苦しむか、見せてもらおう。
とどのつまり――死ぬがよい」

「ひっ！？　殺される！！」

いやあああああああぁぁぁぁ……と、悲嘆の声を上げる六条の襟首をつかみ、
俺は購買の外へと向かって歩いて行った。

「え？　ちょ、何ですかその黒い……黒……G！？
やえ、ちょ、近づけないでくださいよそんなのって先輩、
アンタ直接持ってないのに嫌そうな顔しないで……にゃあああぁぁぁ！？
口の中にアルミホイル入れようとしないでお願い痛い痛い痛い痛い！！」

数分後。憔悴しきった表情の六条を連れ、俺たちは購買に戻ってきた。

「……な、なあ、和真。エラいすっきりした顔してるけど、いったい裏で何があったんだ？」

「聞きたい？」

「……遠慮しとくぜ」

賢明な判断だ。
俺だって、正直に言えばあまり思い出したくない。
というよりも、言ってて気持ちが悪い。

そんなやりとりをしている一方、一年生トリオは――。

「だ、大丈夫ですか、六条さん……？」

「にゃあ」

「目が死んでますわ！？　というか何で猫！？」

「みぃ」

「……ちょ、ちょっとかわいいかも」

「!?」

……何をしてるんだ、あの子たちは。

六条は六条で精神崩壊してるし。

いつもああなら……って、崩壊したままじゃダメか。

せめてもう少し大人しくなってくれれば、俺もあそこまではしないんだが。

というよりも、今回のアレは言動と思考の問題だが。

「しかし――弁慶、か」

「どうしたんだ?」

「いや、弁慶なら、源義経――牛若丸が返り討ちにするもんだ、って相場が決まってるじゃないか?」

「は?」

この場合、牛若丸は十代、か。

そして、弁慶――恐らくは剣山――は、十代のことを慕うようになる、と。
まあ、その件に関しては言うべきじゃない。
自然な成り行きに任せて、十代になんとかしてもらおう。

「ああ、そうだ。ここからが本題。
十代、お前、エド・フェニックスとデュエルして勝ったんだって？」

「ああ、勝ったぜ。……って、どこで聞いたんだ、その話？」

「翔が自慢げに語ってたよ。ただ……」

俺が言わんとしていることを感じ取ったのか、
十代は少しばかり苦い表情をして見せる。

それも当然か。様子見――手加減されていたようなものなのだから、
勝ってもあまり嬉しくはないのだろう。
勝ちを譲ってもらったと解釈しても、おかしくはない。

「そうなんだよなぁ……。けど、
まあいいぜ。次も俺が勝つんだからな！」

「その言葉を聞いて安心したよ」

相手が手を抜いているなら、本気を出すまでデュエルする。
……十代ならやりかねんが、その気概は評価すべきだろう。

「悪かったな、わざわざ嫌なことまで思い出させて」

「いや、いいぜ。次は、って思えば、そんなことどうってことないしな！」

「ああ、そうだな……っと、十代、
デュエルディスクはいいのか？」

「って、そういやそうだった！　わ、悪ィ和真！」

「いや。……手伝おうか？」

「いいっていいって！　俺は俺で翔に頼んでみたりするから！」

と、いつもなら見せないような遠慮を見せる十代。
何か悪いものでも食ったのか？

「熱でもあるのか？」

「失礼だな!?　いや、後輩の目の前でカッコ悪い姿、見せるわけにもいかないだろ？」

「あー……」

耳打ちする十代の言葉に、なんだか俺は奇妙な納得を感じた。

要するに、アレか。

先輩として、この場でだけはカッコつけたいと。

後輩の目の前では、少しくらいは意識して生活する、ということだろうか。

……その調子で普段の勉強も頑張れば、どれだけ良いことか。

「分かった。そういうことなら、頑張ってくれ。

……翔には、俺から連絡を入れとくよ」

「おう！　悪いな、和真」

『クリクリィ！』

ふらふらと、果たして目の前が見えているのか、

それとも完全に視界が遮られているのかは定かではないが――。

まあ、ハネクリボーのガイドがあれば、多少は大丈夫だろう。
そう信じたい。

ともかく、大量のデュエルディスクを抱えた十代は、購買から出て行った。

しかし――。

「にぃ」

「「……」」

六条はいつまで猫化しているのだろう。
いや、半分は俺のせいだけど。

そしてあの二人はいつまであしているのだろう。
確かに今の六条には少しばかりクるものがあるが……。

元は、アレだし。

それはそうと、俺は俺でやるべきことを終わらせておくか。

「トメさん、パック入荷してる？」

「ああ、和真ちゃん。当然、入荷してるよ。
いくつ買うんだい？」

「んー……」

エドにあやかって８パック！　と言いたいところだが、
俺の運勢を鑑みるに、そうしたところであまり意味はないだろう。

とりあえず――４つ、くらいにしておくか。

「４パック――」

と、言いかけたところで、俺は、何か――妙なものが、視界に映るのを感じた。
半透明な――どこか、ボヤけた影。

小さな、人間に似た形。

群体（レギオン）――ではないだろう。あそこまで暗い感情は見受けられない。

その手は開かれ、五本の指が、俺に主張していた。

５パック買え、と。

「――もとい、５、で」

「はいよ。７５０円ねー」

トメさんに数枚の硬化を手渡し、代わりに５つ、パックを受け取る。

あの影――何だったんだろうな？

直感的に、その指示に従ってみたわけだが……。

ま、いいか。

こんなところで開いて見るのも迷惑な話だろうし、

自室に帰るまでは保管しておこう。

あるいは、「良いカードだ！」なんてことになるかもしれないし。

……また《レオ・ウィザード》５枚とかイヤだなぁ……。

い、いや、さすがに、そんなことが二度も三度もあってたまるか。
いくら鬼――のように悪い――運であったとしても、
そんなエラーが2度もあるものか！

いや、あってたまるか！

ないよな？

……無いと言ってくれ。

「そういえば……御堂？　先輩？」

「ん？」

唐突に呼びかけられる声に振り向くと、
海野さんが俺の方を見ていた。

「御堂で合ってるよ。どうしたんだ？」

「いえ。あなたが有珠と仲が良い、とお聞きしたので、
その理由をお聞きしたいと思ったんですの」

「あー……」

仲が……いい、のか？

いや、確かに、出会って数週間にしては息は合ってるが……。

「同郷だから、かな。ちょっと話したら偶然分かった、ってだけだけど。

それに、仲がいい、ってわけじゃ――」

「十分ですわ」

「そ、その……六条さん、昔は、もっと人を寄せ付けない性格だった、っていうか」

「はい？」

あの六条がか？

……流石に、冗談だろう？

「事実ですのよ。……有珠は、昔はもっと人間嫌いで、

何より、自ら人に関わろうとするような子じゃありませんでしたわ。

それが、あなたと出会ってからは、無駄なくらい明るくなって。
昔は、もっと無気力だったんですのよ？」

「……」

「そ、そういえば、昔言ってたんですよ、六条さん。
『同郷の人がいれば、もうちょっとは明るくする』って。
多分、それって御堂先輩のことだったんじゃないでしょうか……？」

俺は、こちらの世界に来た時から、基本的に周囲との融和を選択していた。
その方が楽だし、何より、第二の人生くらいは、
もう少し「友人」と呼べる人間を作りたいと思ったからだ。

絆を紡ぐ――。

恐らく、いずれ主人公になるであろう人間は、そう称するのだろう。

だが、六条はそうではなかった。

自分が「一人」で、この世界にとっての「異質」で。
何の説明も無いままにこの世界に放り出されて――。

そうして、周囲との関わりを拒絶した。

一人でいたい、と。孤独を望むようになった。

デュエルアカデミアに入学したのは、単なる偶然だろう。
あるいは、転生者のような人間に出会えるかも――と、
淡い期待を抱いていたのかもしれない。

だが、中等部では見つからなかった。

そして――高校に上がる際に、俺を見つけた。

同類、とも呼ぶべき人間を。

「今でこそ、仲良く見えてるかもしれませんけど、
出会った当初は、私にも彰子にも辛辣な言葉を浴びせて……。
まあ、今ではいい思い出ですけど。素直じゃなかったんですのよ」

「今は……ちょっと、テンションがおかしくなってますけどね」

……どうしてだろう。
何故か、今の六条よりよっぽどいい気がしてきたぞ。
不謹慎ながら。

「その有珠が……方法と結果はともかく、心を開いている方ですもの。

どんな人柄なのか、少し気になりますわ」

「どんな……って、あぁ……えっと……。
……自分でも、あまり分かってない、かな？」

「も、元々、六条さんの言葉を聞く限りでは、
結構怖い人かと思ってたんですけど……。
実際に話をしてみると、そうでもないんですね」

あいつ、二人にどういう話をしたんだ。
俺の印象を最悪にでもしたいのか、あいつは。

「あの子、臆病の気がありますの。
昔、3人でお化け屋敷に行ったら、
ずっと彰子の影に隠れてましたのよ？」

「すごい震えてましたよね。
悪態つきながら、結局逃げ出せずに最後まで行きましたけど。
終わったときの台詞、なんでしたっけ？」

「『こ、怖くなんてなかったんだからなバカァー！！』でしたわ」

え、なにその萌えキャラ。本当に六条？

「……凄かったんだな、君らの中学時代……」

「そういう先輩はどうですの？
何か、奇妙な経験をしたりは？」

「中学時代は……まあ、無かった、かな。
元々、デュエルアカデミアに行くか行かないかで悩んでたから。
あまり、心に残るような経験が無い、って言うか」

友人はそれなりにいた。
と言っても、広く浅い付き合い、といったレベルであり、
どんなに深くとも、せいぜい家に遊びにいく程度。

そんな関係性の中で、奇妙な展開があろうはずもない。
元々、レイの家にいることが大半だったし。

「……こっちに来てからは、珍妙な出来事の連続だけどね」

「そんなに、ですか？」

「ああ……色々あったかな。この左目だって、
そのときの……事故で、こんな色になったんだし」

「怪我でもしたんですか？」

「いや……ああ、いや、似たようなもの、かな。
でも、心配はしなくていいよ。ちゃんと見えるし、
痛みも無いから」

心の病気です。
「もう一人の自分」がこんなことしてしまいました。
俺は何も知りません。
マジで。

「って言っても、そういった出来事があるからこそ、
楽しいと言えるんじゃないかな。
この学校にいるからできたこと、
この学校にいなければ経験できなかったことも、たくさんあるから」

これまでの経験は、全てがこれからの積み重ねになる。

どんなに無駄なことと思っていても、案外それは無駄でなかったりするものだ。
例えば――そう。厨二病こじらせた結果、
自分の感情を、容易にコントロールできるようになったり。

我ながら、完全に皮肉だけど。

「……なんとなくわかりましたわ、有珠があなたのことを気に入る理由」

得心したように、海野さんが呟く。

「えらいお人よしですのね。その上、妙に達観してますわ。高貴、とも言い難いですが……超然とした人間に見えますわ」

「……別に、俺はそんな人間じゃ……」

「逆に、人間に見えないとも言えますわよ？」

超然。

物事にこだわらず、平然としているさま。

あるいは、世俗に関与しないさま。

褒め言葉とも言えるが、けなす言葉としても用いることはできる。

……こだわりが無い、か。

周りとかけ離れているようにも見える。

成程、言いえて妙だ。
確かに、俺は周囲と大きな隔たりがある。
この先に起こりうることを、ある程度予測できている。
知識の量も、この年代にしては異常と言えるだろう。

「……今後の参考にさせてもらうよ。
ただ、俺だって人並みに感情はあるから、
その辺だけは言っておくよ」

「分かってますわ。有珠への態度を見れば、それもよく分かりますもの」

そりゃそうだ。

自慢じゃないが、俺は本音も感情も隠す方だ。
ただ、六条と接する場合には、それが必要でない。
というより、そんなことをしてたらツッコミが追い付かない。
あと、感情を隠してストレスを溜めるよりはいいだろうし。

ついでに、稀にブン殴りたくなる時があるが。

「……それにしては、行き過ぎた感情の表現方法だと思うんですけどね、私は」

「「「あ」」」

そういえば、こいつが精神崩壊してたこと忘れてた。
いつの間に復活したんだ、それにしても。

まあいいや。どっちにしても――。

「俺だって、お前が空気読めたり調子に乗らなかったりしたら、それこそ通常の応対をさせてもらうけどな」

「何ですか、人を空気読めないお調子者みたいに……」

さっ、と海野さんと宇佐美さんが目をそらした。

古い付き合いのはずのこの子たちからもそういう認定受けちゃってるぞ。
どうするんだこいつは。

「八割近く真実じゃないか」

「こ、これでも、そうじゃなかった時期は一応あるんですからね！？」

「ツンデレ期か。可能なら俺はその時期のお前と知り合いたかった」

「ちょ、今の私全否定！？　あとツンデレじゃないですよ！？」

「もう少し真面目ならいいのにな、ってことだ。
あと、台詞は完全にツンデレのそれだった。
むしろテンプレだな」

むしろその時期の方が可愛い気がする。

「なんというか……なんというか、さ」

「な、なんですか？」

「……いろいろと、残念なんだよ、六条」

「ざんっ……！？」

わなわなとおののく六条を尻目に、少しだけ考える。

下ネタ振らない『僕は友達○少ない』の理科。
あるいは、汚い八九寺。

……俺の頭の中では、既にそんなことになってきてるわけだが。

「……ほら、お前さ……なんていうか、その。
状況によっては、そのまま『はがない』に出演できるよ」

「はっ、どこがです……か……。
いや、その、ほら……ええと」

思い当たる部分が少なからずあったらしい。

「せ、先輩だってかなり残念じゃないですか！！
だってほら、厨二病を体現したような外見で――」

「なら、同じ体験をしてみるか？」

「え？」

「……同じ体験をしたらと想像してみ？
俺は――はは。こうなったけどさ」

首を傾げ、六条は目を瞑った。
恐らくは、俺と同じような経験をしたら、と想像しているのだろう。
――最終的に、厨二病（こんなこと）を体現になるということを。

「す、すみませんでしたァァァァ！！」

お前はアクセルシンクロでもするのかと言いたくなるほどの速度で、六条は、床に頭をこすり付けるようにして土下座を敢行した。

「……いや、正直侮ってました。
自分でやってないんなら気にすることもないかと思ってたんですが、
想像以上にキツいです、これ」

「いや、分かってくれたならいいから、頭を上げてくれないか？
俺もそこまでされるとは思わなかったんだが……」

即座に顔を上げる六条。
状況が理解できていないのか、

宇佐美さんと海野さんは首をかしげるばかりだ。

いや、理解できてない方がいいんだけど。

「に、人間って、生身で音速超えることができるんでしょうか……？」

「彰子、見る部分がズレてましてよ」

しかも何だかワクワクしてないか、宇佐美さん。

いや、人の趣味嗜好にケチ付ける気は無いが……。

「それにしても、先輩は私の昔話、聞いたんですね」

「……お前が言わなかった分を、な。

言いたくなかったんなら、仕方ないけど……」

「言いたくなくて見栄張ったのも確かですけど、

それ以上に、少し思うところがあったんですよ」

珍しいな、こいつが「思うところがある」なんて。
そう考えていると、六条はこっそりと俺に耳打ちする。

「先輩は、何で私が《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を所持していると思います？」

「……それは……」

分からない。

いや、最初から所持していた、と屁理屈を言うことはできる。
この場合、六条が問うのは「何故」。

「どういった理由があって」、
六条が《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を所持するに至ったのか、だ。

俺だって似たような疑問を抱いたことはある。
あのカード――あれらのカードを手に入れたときは、確かに疑問に思っていた。

だが、アバターを手にして以来、俺の中で疑問は消化されてしまった。

嫉妬の象徴。

それが、アバターに込められた意味だからだ。

では、他のカードはどうなのだろう？

そこまで考えが至らなかったのは――ある意味、俺の失態か。

「ちゅーか私女なんだから、
《ブラック・ローズ・ドラゴン》とか、
《エンシェント・フェアリー・ドラゴン》のが良かったですよ！」

「結局そっちに持っていくのかよ！？」

要するに女の子が使ってたカードの方が良かったって言いたいだけかよ！？

いや、まあ確かにレッド・デーモンズは男（ジャック）が使ってたけど、
それだけを理由にないがしろにすんじゃねえ！？
２５０円とか言われてるけど、優秀なんだぞ！

駄目だ。こいつはシリアスが長続きしない。
こいつがシリアスな場面にいちゃダメだ。
駄目と言うか危険だ。空気が殺される。
こいつ、空気用の直死の魔眼でも持ってるのか？

「……ま、理由なんて、いずれ分かることじゃないか？」

「そうですかねぇ。私、こういうの解決しないと、どうにもすっきりしないんですが」

「そんなもんだよ、人生って。
もやもやすることの方が多いもんさ」

政治とか、人間関係とか。

と、まあ、今日はこのようにして、時間は過ぎて行った。

精神的に疲れはしたが、それでも、
それなりに充実した1日だったように思う。

33束目：同郷（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「料理」

「という訳で、料理の話です」

「何がどういう訳なのか説明しろ。
……というか、いきなり料理ってどういうことだ？」

「いえ、最近、先輩のアイデンティティの方、
活かされた機会が少ないなーと思いまして」

「デュエルアカデミアにいるんだから、ある意味当然だろ……。
で、なんだ？」

「まあ簡単な質問なんですが、先輩の得意料理ってナンですか？」

「ナンじゃない。
……そうだな。煮物は全般的に得意だ。

肉じゃが、シチュー、そういったものはよく作るかな。
あとは、デザートなんかも」

「デザートも作るんですか？」

「ああ。というかこの話の初めに出たろ。
あれ、俺の自作だぞ」

「気づきませんでした……じゃあ、逆に苦手な料理は？」

「ピザ――だな」

「へえ、またそれはどうして？」

「窯だ」

「へ？」

「この島には、窯が無いんだ……。
美味いピザを作ろうと思えば、どうしても窯が必要になる。
自作しようにも、私有地だからできそうにない。
だから――どうしても、ピザだけは作れない……！！」

「こだわりすぎですよ！？」

「料理にこだわりすぎという言葉は無い！！」

「うおっ！？　なんでマジギレされたんですか私は！？」

「いいか？　味噌汁や肉じゃが一つにも手を抜かないのが本当の料

理人だ。それどころか、本物はおにぎりにすら絶対な労力をかける。それは単に材料というだけの問題じゃない。自身の手腕を神域にまで昇華させ、絶対的なまでに純粋な『美味いものを作る』という願いを米の一粒一粒にすら込める。誰かに美味い、と言ってもらいたいがため、あるいは自身の腕前を高めたいがため、本物は、『握る』という一動作をすら、長い時間をかけて修練する。そこに『こだわりすぎ』などという言葉を投げかけるんじゃない！　失礼だと思わないのか！？」

「あー……それは申し訳ありませんけど、
先輩が結婚したりしたら、すごいことになりそうですね。
主に食事が」

「手を抜かないと言ったぞ、俺は。そもそも料理というものは、ただ自らの舌を肥やすためにあるのではない。栄養の補給、体調管理、そういった要素がふんだんに盛り込まれているんだ。だとすれば、そこにこだわらない理由があるとでも思うのか？　思うのだったら今すぐにその考えを修正してやる。しかし、料理の起源というものは――」

↓続く？

＊　＊　＊

はい、そういうわけでして枠です。
今回は伏線を張りつつ、日常を展開してみました。

いやあ、それにしても、なんというか……アレですね。

この話、誰得？

いや、無論俺得なんですが、作者だけ満足してどうするの、と。

次回は恐らくデュエルします。
短くともデュエルします。じゃないと、そろそろ私のテンションがおかしな方向にねじ曲がりそうです。

それでは。

３４束目：挑発（前書き）

今回の話は少し短めです。
というか、デュエルがあっさりしすぎてます。
色々とすみません。

３４束目：挑発

アカデミアの『皇帝』、カイザー亮――。
プロリーグに入ってからというもの、
彼の名前を聞かない日は無いのではないかというほどに、
その人気は白熱している。

というのも、理由はごく簡単なものだ。
まずは容姿。端正で抜け目がない。
垢抜けた雰囲気であり、女性人気は非常に高い。

そして、その精神。
リスペクトデュエル、という、
一種、競技者としては模範的なものだ。

何よりも、その強さだ。
他を圧倒する、驚異的なまでの屈強さ。
デッキのパワーというだけの問題ではない。
プレイング、ドロー、あるいは観察眼。
そういった、あらゆる要素が一級品であるというのも、
一つ、人気の要因であることは間違いない。

当然ながら、アカデミア内におけるカイザーの人気も相応だ。

そして今日。
カイザーの試合が生中継される、という運びになった。
当然ながら、校長は全校生徒を集めて観覧しよう、と言い始めた。
別段、断るような理由も無い。
俺たちは、当然のように、特別教室に集合するのだが――。
そのとき、俺は偶然にも相手の名を聞いてしまった。
エド・フェニックス――。
驚異的なセンスと戦術により、
カイザーと人気を二分するほどの人物。
そして何より――俺が知りうる限りでは、カイザーの失墜の原因……。
だが、邪魔はできない。
これが必要な経緯だと推定するならば、
俺は――何も。
何も、できないのだから。

「……皆、カイザーのデュエルを楽しみにしてるみたいですよ」

『フ……重いな、それは』

「重いようには聞こえないんですけどね、俺には……」

俺の耳に当てられているのは、
いつものＰＤＡ――ではなく、携帯電話だ。

衛星通話もできる代物で、
アカデミアの外にも通話ができる。
職員室等の限られた施設以外では、俺以外に持っている人間はいない。

よって、俺が皆の言葉をカイザーに伝える、という役どころなのだが――。

「十代から。『カイザーが勝つの期待してるぜ！』……。
これは、翔か。『いつも通りに頑張って、お兄さん！』。
明日香――『十連勝を逃さないようにね、亮！』。
吹雪さんは……『アカデミアの双璧として、観戦させてもらうよ』
」

『負けられないな』

「いつものことです。そう気負わないでください」

そして、本当に気負わずに勝ってみせるのが、
カイザーの恐ろしいところだ。

だが、今回は――。

思考を頭にとどめないように、淡々と告げていく。

「珍しく、万丈目からも。『今後の戦術の参考にさせてもらう』。
三沢からも一つ。『研究し尽くします』……」

『後輩たちがこうまで言ってくれるとは、
俺としても感無量だな』

「常人ならプレッシャーで死ねますが」

『だが、こうして背負うものがあるからこそ、俺は勝てる。
すまないな、御堂。連絡員の真似事のようなことをさせて』

「いえ、構いません。プロと会話できるという、
金には換えられないことができますから」

いずれは、それもできなくなってしまう。

カイザーが表舞台から、姿を消すその瞬間に――。

「それでは。
アカデミア生徒一同、勝利を祈っています」

『ああ。ありがとう。
……それじゃあ』

簡素な応答の後、電話は切れた。

勝利を祈っている――。

今のこの状況において、これほど白々しい言葉があるだろうか？

この先の展開を少なからず理解している、元の世界の俺としては、
そのように思考してしまう。

この先、カイザーが地獄に落ちることは、
規定事項であり揺るいではならないことだ。
そうでなければ、この先起こりうる幾多の事項が、
解決できないままに終わったり、あるいは、
起こりうるはずの出来事がおきないという事態にも直面しかねない。

対し、この世界で生きる、「カイザー亮の後輩」としての俺は、
少なからず、カイザーに勝利してほしいという願いを持っている。

それは、たった1年とはいえ、
同じ学び舎で過ごした人間としての純粋な思いだ。
勝ってくれ。勝ってほしい。
明るい場所で、高みを目指してほしい。

矛盾した二つの思考。
それは、俺がまだこの世界の住人としては不完全な証のようで。

「……考えるな」

今は、ただ傍観者としての役割を果たせ。
目の前の現実をただ見据えるだけに留めろ。

そんな呟きは、教室から聞こえてくる大歓声に紛れ、消えた。

＊　＊　＊

「お、和真！　カイザー、どんな様子だった？」

自分の席に戻ると、隣に座る十代が声をかけてくる。
この先のことが分かっていないからこそできる、無邪気な笑み。
どうしようもなく、その笑みからは虚しさを覚えてしまう。

「大丈夫だったよ。気負ってることもなく、
いつも通りの調子だった。これなら、大丈夫じゃないかな」

よくもまあ、こんな大嘘をつけるものだ。
我ながら、本当に――最低だ。

「だったら安心だな。
……お、そろそろ始まるみたいだぜ！」

十代の言葉に促されて顔を上げると、
モニタに映る、エドとカイザーの姿が見えた。
対峙する二人。その腕のデュエルディスクは、既に展開されている。

「「決闘（デュエル）！！」」

その掛け声とともに、デュエルが開始した。

先攻はエド。

いつもであれば、先攻であるはずの相手に対し、同情するところだ。

カイザーのデッキに投入されているモンスターの内、
サイバー・ドラゴンは相手の場にのみモンスターが存在するとき、
特殊召喚できるという効果を持っている。
サイバー・エンド・ドラゴンに至っては、貫通効果を持っている。

守備表示でモンスターを召喚すれば、
まず間違いなく、サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃が決まる。

生半可な攻撃力のモンスターでは、サイバー・ドラゴンに破壊される。

さて、どうなることか。

「僕のターン、ドロー！
僕は手札から、《幻影の魔術士》を守備表示で召喚する！」

【《幻影の魔術士》　攻　６００　／　守　７００】

場に現れる、マントを身に纏った仮面の男――。
それは、俺が以前用いたモンスターだ。

「な、なあ、和真。あれって……」

「ああ……ＨＥＲＯ（ヒーロー）のサポートカードだ」

「ってことは、あのエドってやつも、
アニキと同じＨＥＲＯ（ヒーロー）使いザウルス！？」

……って、剣山もいたのか。

だろうな、と頷き、俺は続ける。

「この学校にも、既に二人のＨＥＲＯ（ヒーロー）デッキ使いがいるんだ。
……同じように、プロにＨＥＲＯ（ヒーロー）使いがいてもおかしくはないだろうな」

問題は、エドの場合は、その本領がE・HERO（エレメンタルヒーロー）ではないという点だ。

……が、今回に限っては、E・HERO（エレメンタルヒーロー）を使うのだろう。
E・HERO（エレメンタルヒーロー）使いだということを印象付けるために。

「ど、どうしたんだよ、和真。そんなに怖い顔して」

「いや……」

どうやら、無意識の内にモニタを睨み付けていたらしい。

この程度で感情を露わにするとは、
まだまだ、俺も精神的に未熟――ということか。

「カードを2枚セットして、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー。
……相手の場にのみモンスターが存在する場合、
手札から、《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚できる。
《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚！」

【《サイバー・ドラゴン》　攻　２１００　／　守　１６００】

場に召喚される、機械でその肉体を構成した竜（ドラゴン）。
カイザーにとっての相棒とも呼ぶべきカードであり、
相当な汎用性を持つカードだ。

「更に手札から、《サイバー・フェニックス》を召喚！」

【《サイバー・フェニックス》　攻　１２００　／　守　１６００】

次に現れるのは、火炎を纏う、機械の不死鳥（フェニックス）。

表側攻撃表示で存在する限り、
機械族を対象とする魔法（マジック）・罠（トラップ）を無効にする効果、
また、破壊されたときにドローを行う効果を持った優秀なカードだ。

「バトル！　サイバー・フェニックスで幻影の魔術士を攻撃！」

「ふっ……幻影の魔術士が戦闘（バトル）によって墓地（セメタリー）に置かれたとき、
幻影の魔術士の効果（エフェクト）を発動！

デッキから攻撃力１０００以下の『ＨＥＲＯ（ヒーロー）』を守備表示で特殊召喚できる！
《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェザーマン》を特殊召喚！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェザーマン》　攻　１０００／守　１０００】

十代のものと比べ、多少色が黒いフェザーマンが、エドの場に姿を現す。

攻撃力は１０００――幻影の魔術師の効果範囲ギリギリか。

「サイバー・ドラゴンでフェザーマンに攻撃！
エヴォリューション・バースト！」

「罠（トラップ）発動！　《ヒーローバリア》！
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）が存在するとき、相手の攻撃を１度無効にする！」

「……カードをセットし、ターンエンドだ」

互いにライフポイントの増減は無い。
この状況下においては、一見すればカイザーが優位に見えるが――。

「僕のターン、ドロー！
僕は手札から《融合》の魔法（マジック）カードを発動！
手札の《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バーストレディ》と、
フィールドの《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェザーマン》を融合！」

「お、フレイム・ウイングマンか！？」

「いや――」

違う。

この場で召喚されるのは、恐らくはあのカードだ。

「現れろ、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェニックスガイ》！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェニックスガイ》　攻　２１００／守　１２００】

「えっ！？」

やはり――。

場に召喚されるのは、フレイム・ウイングマンと対になるような外見を持つ、
その属性までもが対となったＨＥＲＯ（ヒーロー）。

フレイム・ウイングマンが風属性であるのに対し、
フェニックスガイは炎属性。

そして、その効果もまた、ある意味で対となるように設定されている。

「Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）は、同じ融合素材でも、
複数の融合先が存在するようにデザインされている」

三沢が、この様子を見ながら口を開く。
確かにその通りだ。そして――。

「俺の持つアドレイション、加え、　Ｇｒｅａｔ（グレイト）　ＴＯＲＮＡＤＯ（トルネード）、
ノヴァマスター、フレイム・ウイングマンにフェニックスガイ。
バーストレディとフェザーマンで《融合》を用いたとき、
それら5枚のカードを召喚することができる。
……今回は、アレを使ったということか」

「ああ。大抵の場合、御堂の使うE・HERO（エレメンタルヒーロー）が使われるが、十代の使うようなE・HERO（エレメンタルヒーロー）の効果も強力だ。エド・フェニックスは、十代と同タイプのHERO（ヒーロー）使いか――」

安易に融合できる属性HERO（ヒーロー）は、確かに相当に優秀だ。

しかし、この世界においては、何故だか、俺のように安定性を重視する者、あるいは万全の対策を期する者は、敗北することが多い。

というよりも、「万全の対策」という言葉自体が敗北フラグのようなものだ。

「バトル！　フェニックスガイでサイバー・ドラゴンに攻撃！　フェニックス・シュート！」

「攻撃力は同じ……相討ち狙いかよ！？」

「いや……違う！」

そうだ。フェニックスガイの効果は――。

「フェニックスガイは、その効果（エフェクト）により、戦闘（バトル）では破壊されない！」

「ってことは、一方的に――！」

「……サイバー・ドラゴンは、破壊される」

効果破壊は適用されるが、その一方で、戦闘においては無敵。
壁としては相当に優秀だし、その攻撃力も下級モンスターのラインを超える。

確かに、優先的に破壊すべきはサイバー・ドラゴンだ。
あのまま場に残していれば、まず間違いなく、次のターンあたりで融合されてしまうだろう。

ただ、サイバー・フェニックスの存在も厄介だ。
攻撃表示である限り、機械族を対象に取る魔法（マジック）・罠（トラップ）の効果は無効となる。
そして、カイザーの伏せ（リバース）カード――。

あれが何なのかを知る術は無いが、予測はできる。

「僕はカードを2枚セットし、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！
……！」

カイザーのこの反応は、まさか――！

「伏せ（リバース）カード、オープン！　《リビングデッドの呼び声》！
墓地に送られたサイバー・ドラゴンを特殊召喚する！」

【《サイバー・ドラゴン》　攻　２１００　／　守　１６００】

「……やっぱりか」

間違いない。《パワー・ボンド》か、あるいは《融合》のカードが、
カイザーの手札には存在している。
でなければ、この状況でサイバー・ドラゴンを蘇生したりはしない。

「手札から《融合》を発動！」

わあっ、と教室中が湧きかえる。
そのカードによって特殊召喚されるモンスター。
それは――。

「場、そして手札に存在する、合計3枚のサイバー・ドラゴンを融合する！
現れろ、《サイバー・エンド・ドラゴン》！！」

【《サイバー・エンド・ドラゴン》　攻　４０００／守　２８００】

「サイバー・エンド……！！」

来た、カイザーの切り札が。

三頭を持つ、強大な機竜。
迸る力が、画面を伝わってこちらにも流れてくる。

教室の空気が最高潮に達する。
勝った。勝てる。やった。そんな言葉が、周囲から聞こえてくる。

「やったぜ和真！」

「――……」

「和真？」

この先、何が起こるとも知れないこの状況。
勝った、と断言するのは、いささか早すぎる。

「バトル！　サイバー・エンド・ドラゴンで、フェニックスガイを攻撃！
エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

三つ又の首から発せられる、破壊の波動。

それが向かう先は――当然、フェニックスガイ。
一切の防御も何も無く、ダメージがエドへと向かっていく。

「ぐうっ！」

ダメージは１９００。これで、ようやくライフに変動が出たことになる。

だが――。

「カードをセットし、サイバー・フェニックスを守備表示に変更。俺はこれでターンエンドだ」

あの伏せカード（リバース）は、俺の予測では攻撃反応系のカードだ。

特に、《聖なるバリアー ミラーフォース ー》や、《炸裂装甲（リアクティブアーマー）》といった、

相手モンスターを破壊するカード。

いや――あくまでも、予測だ。

それが真実であるとは思わない。だが、違うとも思えない。

カイザーの場合、そのドローによって、大抵の場合で有用なカードを引き込むからだ。

「僕のターン、ドロー。

……まずは、伏せカード（リバース）、《無謀な欲張り》を発動！

この効果（エフェクト）により、により、僕はカードを2枚ドローし、

以降のドローフェイズを2度スキップする！」

無謀な欲張り――コンボ向けのカードだが、この状況で何を……？

「ふ……僕は、更に《融合》を発動！」

「ここで融合だって！？」

「手札の《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン》、場の《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェニックスガイ》を融合し、現れろ、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フェニックスガイ》！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フェニックスガイ》　攻　２５００／守　２１００】

光を携えて現れる、不屈のＨＥＲＯ（ヒーロー）。

その効果は――。

「シャイニング・フェニックスガイの効果（エフェクト）は、

墓地（セメタリー）のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）の数×３００ポイントアップすること！
墓地（セメタリー）のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）の数は４枚。
つまり、シャイニング・フェニックスガイの攻撃力は３７００！」

「あれって、俺のシャイニング・フレア・ウイングマンと同じ効果じゃないか！？」

元々、同質の融合素材を用いたモンスターなのだから、
その効果が、墓地のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）の数に左右されるのは、
ある意味で当然と言えるのかもしれない。
また、その姿も、どことなくシャイニング・フレア・ウイングマンと似ている。

「だが――サイバー・エンドには勝てない」

「その通りだ。だから、僕は魔法（マジック）カード、
《ミスフォーチュン》を発動する。この効果（エフェクト）は、
相手の場のモンスターを選択し、その攻撃力の半分のダメージを与えること。
僕はサイバー・エンド・ドラゴンを選択し、その攻撃力の半分、
２０００ポイントのダメージをお前に与える！」

「ぐあああっ！？」

だが、カイザーのライフは削りきれない。
半分を削ったとしても、それだけではどうにもならない。

「ターンエンド」

「くっ……俺のターン、ドロー！」

その瞬間、カメラがカイザーの手札を捉えた。
たった一瞬。それでも、俺の目は、そのカードを捉えていた。

《激流葬》。

普段の状況では有用なカードだ。
だが、この場においては、何の意味も無い。

「バトルだ！　サイバー・エンド・ドラゴンで、
シャイニング・フェニックスガイを攻撃！
エターナル・エヴォリューション・バーストォォ！！」

着実に一つずつダメージを与えるべく、放たれた1撃。

だが、それは――。

「僕はこの瞬間、《針虫の巣窟》を発動！」

「何……！？」

針虫の巣窟――！？

何であんなカードを使ってるんだ、あいつは！？

デッキの上から5枚を墓地に送るという、
一見すればデメリットとしか思えないような効果。
しかし、エドにとっては――あるいは、
デッキ圧縮と言う観念では、非常に肝要となる可能性のあるカード。

「デッキの上から5枚を墓地（セメタリー）に送る。
僕が墓地（セメタリー）に送ったカードは、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　クレイマン》、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　バブルマン》、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ワイルドマン》、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　エッジマン》、そして《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ネクロダークマン》の5枚！！」

「ご……5枚のE・HERO（エレメンタルヒーロー）だってぇ！？」

「馬鹿な……！？」

確率を考えれば、殆どありえないような異様な現象。
いや、それも、エドの驚異的な――いわゆる、運命力のなせる業、か。

「よって、シャイニング・フェニックスガイの攻撃力は１５００ポイントアップする！」

「な……！？」

「迎撃しろ、シャイニング・フェニックスガイ！
シャイニング・フィニッシュ！」

放たれるエネルギーを掻い潜るようにして、
その腕を輝かせるシャイニング・フェニックスガイが、
サイバー・エンドへと向かっていく。

そうして――激突。

サイバー・エンドが破壊され、カイザーへ１２００のダメージが向かう。

「ぐおああっ！！」

「伏せカード（リバース）、オープン！　《破壊指輪（リング）》！
自分の場のモンスターを破壊することで、
互いに１０００ポイントのダメージを受ける。
僕はシャイニング・フェニックスガイを破壊する！」

「な――！！」

通常であれば、考えられないような――呆気ない、幕引き。

シャイニング・フェニックスガイが爆散し、
互いのライフポイントが１０００削られていく。

そうして、唯一残るのは――エドの、ライフポイント。

このデュエルは――エドの勝利によって、決した。

＊　＊　＊

「ええ。僕の今回の目的は、本来のデッキを披露することにあります」

淡々としたインタビュー。
それが進むごとに、周囲のざわめきが大きくなっていく。

「ええ、現在、僕はデュエルアカデミアに在籍しています。
今回のこのデッキの披露は、
そこに在籍するＨＥＲＯ（ヒーロー）使い――彼に対する、宣戦布告とも言えます」

間違いなく、その対象は十代であろう。

おおよそ、考えうる中で最高級の挑発――。
十代が、唯一勝つことのできなかった相手に勝利して見せ、
自らの力を誇示し――十代に、再度挑む。

趣味は悪いが、これほど正確な方法も無いだろう。

「僕は明日、デュエルアカデミアに戻ります。
そこで彼と対戦し――」

言って、エドはカメラを――いや、
その先にいるであろう、十代を見据え、

「勝利します」

力強く、そう宣言した。

モニタの映像が途切れる。

そうしていつしか、生徒の姿も少なくなってきた頃、
十代が、俺に話しかけてきた。

「……なあ、和真。エドの言ってたＨＥＲＯ（ヒーロー）使いって、やっぱり――」

「……十中八九、お前だろうな」

俺はエドと対戦したことはないし、
ＨＥＲＯ（ヒーロー）デッキを使うと情報をリークされた覚えも無い。

オッドアイであることを除けば、
そこまで特異な人間じゃないと思うが……。

いや、思うという程度のモンなんだけど。
十分異質だろうし。

とはいえ、それでエドに……いや、
それ以上に、斎王に狙われるとも思えない。

「カイザーに勝った相手……か、
なんか、だんだんワクワクしてきたぜ！」

「ワクワク……ね。はは、お前らしいよ」

今もまだ、カイザーの敗北の件を気にしてる俺とは大違いだ。
うし、と言って十代は立ち上がる。

「そうと決まりゃ、デッキの調整だ！
悪ィ、和真！　俺、先に寮に戻るぜ！」

「分かった。ま、気を付けてな」

軽く手を振り、俺は十代を見送った。

この先、十代がエドと対戦し、
十代はカードの絵柄が見えなくなり――そして、
ネオス、ひいてはN（ネオスペーシアン）を手に入れる。

この展開だけは、変えることはできない。

……一種の、予定調和とでも言うのだろうか。

俺には、それを止めることはできない。

ただ、一つ。

一つだけ思うのは――俺は。

「先輩」

と、唐突に、背後から声がかけられる。

この声は――六条、か。

「どうしたんです、そんな辛気臭い表情で」

「どうしたもクソもあるか。
……分かってるんだろうが」

「……ええ、まあ。
とはいえ、いつまでも気にしてたって仕方ないでしょ」

「まあ、な」

こうしていつまでも気にしている俺の方が、
異様というか、異常というか。

「カイザーはいずれヘル化するのが規定事項なんですよ。
そうじゃないと、未来は変わる。
遊城十代だって、死ぬかもしれませんよ」

「分かってる。だから、何も言わなかったんだ」
「知ってますよ。だからそうやってイラ立ってるんでしょう？」
そうやって察してくれるのなら、願ったり叶ったりだ。
「……間違ってはない、けどな。
俺がイラ立ってるのは、未来を知っているのに、
それを変えることができない、無力な俺自身だ」
「まぁたそんなカッコつけて。
それ言うなら、私だってそうでしょうが」
「……」
互いに、か。
まあ、間違ってはいないんだろうけど……少なくとも、
一年前からこの島にいて、何もできない俺の方が、
余程無力で、かつ、死ぬほど情けない。
「それより、夜食食べさせてくださいよー。

女子寮（ウチ）の夕飯、カロリーと栄養にばっかり気使ってて、
全然ボリューム無いんですよぅ」

「……太るぞ」

「ぐぬっ……！　きょ、今日くらいはいいんですよ！」

「ははぁん。お前、実は内心かなり気にしてるな。
見たところ、ヤケ食いだろ」

「何で分かるんですか！？」

そりゃ、自分自身、かなり落ち込んでるからに決まってるだろう。

「ま、いいや。デザートの作り置きくらいならあるし、
少しならやるよ」

「おっ、マジですか！？　やった！」

そこまで喜んでくれるとは、俺としても感無量だ。

――そうしてその十分後。

俺はとある事情から、
この世のものとは思えないような叫びを上げることになった。

３４束目：挑発（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「モン○ン」

※　この話は実話を基にしたフィクションです。
以前に作者が経験したことを御堂と六条にさせています。
つまり、限りなく実話に近いフィクションです。

「先輩、モンスターハン○ーって知ってます？」

「モンス○ーハンター？　ああ、よくＣＭでやってるアレだろ？
って言っても、俺、流行りモノあんまり好きじゃないんだが」

「うーん……いや、実は二つほどソフトあるんですけど、
やってみません？」

「いいのか？」

「むしろ、私から手伝うくらいです。流石に一人でやるのはキツいんですよ」

「あー……基本的に複数人数を想定してるって聞いたしな。
一人プレイヤーのこと考えてないってことか」

「ま、それでもクリアする猛者もいますが。
というわけで、やりません？」

「まあ、この程度なら……」

～十日後～

「……やったぞ六条。ついにあの鬱陶しい鳥を倒した」

「はあ、おめでとうございます。
ていうか、随分遅いですね。普通なら、三日でそこまでいけますよ？」

「そういう奴らはきっとスキルが凄まじいんだ。
……しかし、あの呼び出し攻撃は本当に面倒だった」

「まさか、一匹一匹狩っていたなんてこたありませんよね？」

「いくら初心者とはいえ、それは無いっての。
まあ、倒すのに時間ギリギリだったんだけどな」

「私でも5分で狩れますが」

「……って言っても、俺の武器、
まだ成長してないからどうしようもないんだよ」

「ああ……アレ、弱点属性とかありますけど、
最初はあんまり気にしないでかかっていった方がいいですよ？
防具も、せめて統一して……」

「は？　いや、六条。装備って成長するもんじゃないの？」

「……すみません。先輩、少しＰＳ○貸してください」

「？　ああ、とりあえずこれ」

「……え、えええぇ……？
先輩、マジでこれであの鳥公倒したんですか？」

「普通じゃないのか？」

「いや、だっておかしいでしょ！？
全部初期装備って時点でいろいろ間違ってますよ！？」

「何！？　装備って替えられたのか！？」

「替えれますよ！？　何のために素材があると思ってるんですか！
？」

「……金？」

「違いますよ！！　もしかして、全部売ったんじゃないでしょうね
……！？」

「そういや売ったな」

「……よくそれで生き残りましたね」

「ああ。全部の行動の挙動やらパターンやらを見切って、その全てを回避して、合間合間に攻撃を叩き込んで、それでようやく倒せたんだ」

「その時点で色々超人的じゃないですか！？」

その後、御堂は装備を充実させて驚異的な速度で進めていったそうな。

↓　続かない。

＊　＊　＊

そういうわけで、エドＶＳカイザーでした。

この時点で、実はまだ、２期の５話なんですよね。
とはいえ、色々と過程をスッ飛ばしていますが、そこは大目に見てください（

とりあえず、今回はアッサリ風味でした。

実は一度データが飛んでるのをやり直したので、
正直なところ、今朝の時点でほぼ白紙でした。

よくここまで復旧したもんだ（

今回のミニドラマは、正直、分かる人にしか分からないような内容です。
が、アレ、実際にありました。某友人の証言ではありますが、
フ〇フルまで、すべて初期装備でクリアしたそうです。
ちなみに私は聞き役だったので、その場にはいませんでしたが。
実際に装備を変えたら凄まじい速さで進んだそうですよ？（

ということで、関係ない話を織り交ぜながら、今回はこれで。
それでは。

35束目：蠢動（前書き）

なにかがおかしい話。
最終的に色々矛盾してるような気がします。

あ、一応新キャラ登場です。

35束目：蠢動

埴輪（はにわ）。

まず、俺が部屋に戻ってきた瞬間に目に入って来たものはそれだった。

埴輪（はにわ）。

何故――埴輪（はにわ）？

あえてカードのステータスで表すとするなら、
攻撃力は５００、守備力は６００。
地属性でレベル２の岩石族通常モンスター……とすればいいのだろうか。
この場合、埴輪（はにわ）ではなく、《はにわ》なのだが。

ちなみに、土偶とはかなりの能力差がある。
その先に登場した土偶とは、なんだかよく分からんシナジーを起こす。

ちなみに、前者は《磨破羅魏（マハラギ）》。
後者は《オレイカルコス・シュノロス》だが。

後者に関しては、最早何も言うまい。
世界を危機に陥れるレベルのカードだ。

で――だ。

何故、俺の部屋に、ドが付くほどにデカい埴輪（はにわ）が、
それこそ、部屋を埋め尽くすほど大量に存在しているのだろう。

分からない。

というか、分かってたらこんなに悩んでいない。

何が起きてどうしてこうなった。
俺は何もしてないはずだ。

というより、こんな事態を引き起こすようなことが、
一般的な人間にできるものだろうか。
体力的な面でも、物質的な面でも。

「……なんじゃこりゃ」

「……これはひどい」

隣に立っていた六条までもが、そんな呟きを漏らした。
普段破天荒なことしかしないが、
こういう部分で常識はあるらしい。

「どう思うよ、これ」

「さ、さぁ……」

いくらカードの効果を熟知し、かつ、
様々な非常識な事態に対して耐性のある俺たちでも、
流石にここまで突飛なこととなると、対応しきれない。

「先輩、まさか《はにわ》の精霊なんて憑いてないでしょうね」

「……ありえない、と一口に否定できないのが恐ろしい……！」

何せ、一度に5枚の《レオ・ウィザード》が当たった俺だ。
《はにわ》が5枚当たり、その内1枚が精霊のカードだったとしても、

おかしくはない……のかもしれない。
それにしたって、あまり好ましいと思えないんだが。
いや、精霊に貴賤は無いけど……。

「触れるか？」

「ん……無理っぽいです」

「ってことは、少なくとも、現実の物質じゃないってことか……」

となれば、精霊関連か、あるいはソリッドビジョンの暴走か……。
どちらにしても、面倒であることには変わりないだろう。
とりあえず、冷蔵庫を開いて皿を六条に手渡す。

「寮に持って帰れ。あとはこっちでなんとかするから」

「はぁ。いいんですか？」

「……何やら分からないような事態には、
まずは一人で向かうと決めてるんだ。
他人に頼るのはそれから、ってね」

どうしようもないようなときは……うん、
まあ、それはそれで十代や万丈目でも呼ぼう。
あいつらは精霊も見えるし、上等だろう。

「んじゃあ、失礼しますが。
とりあえず、レイちゃんにもコレ、あげときますよ？」

「そうしてくれ」

むしろ、そうしてくれると助かる。
俺の返答を聞き、とりあえず、と言いつつ、
六条はそそくさと俺の部屋を後にした。

……うん、まあそうだろうな。
普通に考えれば、まず間違いなく、こんな状況に関わりたくはないはずだ。
俺だって関わりたくない。しかし、ここは俺の部屋だ。
関わらなければ寝泊りできないのだから、仕方がない。

場合によっては、レッド寮に行って寝泊まりさせてもらうことも視野に入れるべきだろうか。

こんな部屋で寝泊まりするのは、流石に心臓に悪い。

さて、それでは、どうやってこの状況を打開しよう？

この埴輪（はにわ）を破壊する。

触れないのだから無理だ。

かと言って、十代や万丈目を呼んで破壊してもらうというのも、かなりの無茶が伴うので却下。

というか、あいつらならできそうだと思える時点で色々おかしい。

とりあえず、原因を探る。

現状ではそれが最も有効だろう。

というか、それ以外の方法は思い浮かばない。

さて、まずは何をどうして原因を探ろう。

幸いなことに、左目を閉じていれば、精霊は見えない。

そうすれば、多少は支障が無い範囲で生活を送れるように思える。

とは言うものの、この現象が精霊のせいで起きていることは明白。

となれば、多少の気分の悪さは無視して、

この埴輪（はにわ）の中を突っ切っていくしか無いと思えるが……。

「ん？」

ふと、無数の埴輪（はにわ）の間――。
左目で覗く隙間の向こう、俺のベッドの上に、人影があるのを確認した。

人影。
そう表現するには、いささか小さいとも思えるが、
それは確かに人間の姿をしていた。

外見からその年齢を判断するとすれば、
おおよそ、１０歳前後。レイと同じか、あるいはそれより小さいか。
小柄で、１５０ｃｍにも満たない身長の六条よりも更に小さい。
レイが、確か１４０ｃｍ前後……。

見たところ、それよりも更に小さく、
実際には１２０ｃｍにも満たない程度だろうと思われる。

頭の上で二本にまとめた栗色の髪。
生物を模したかのような赤い頭巾を被っている。
また、水色のワンピースタイプの服の上には、朽葉色の上着を羽織っていた。

はて、こんな人間が、俺の近くにでもいただろうか。

左目を閉じてみる。

見えない。

左目を開けてみる。

見えた。

……うん、まあ、その……アレだ。

幻覚だ。
そうに違いない。

最近疲れてるから、こんな幻覚なんて見るんだ。

そうさ、最近六条に限らず様々な人間が、
俺の部屋の扉を勢いよく開けるせいで、金具やなんやがボロボロになってたり、
それを放置するのもいかんからと思って修繕してたら、
いつの間にか夜が明けていて、結果的に睡眠不足になったり、
それを引きずったまま翌日に持ち越して、
カイザーがヘル化するかしないかという瀬戸際に立ったせいで、
気になって気にかかってストレスが溜まりっぱなしだったり、
それが原因で不眠症になったりと、そんなことがあったせいで、
俺は見るはずもない幻覚を見ているんだ。

だって、アレだぜ？

俺、つい最近まで精霊なんて見えなかったんだぞ？
しかも、見えるのは左目だけという微妙仕様。
声が聞こえるのはまだしも、片側の目でしか見えないわけだ。
そんな俺が、精霊が宿ったカードを手に入れる。
ありえるわけないだろ常識的に考えて。

ふっふっふ。

ふっはははは。

「フハハハハハハハハハハハハァ！！」

後日、「隣の部屋から奇怪な声が聞こえてくる」として、
隣の部屋の生徒が震えながらクロノス教諭に相談しに行くのだが、
それはまた別な話。

うん。よし。
なら、決まりだ。

「寝よ」

こんなときは、寝るに限る。

どうせすることも無いんだ。
最近寝不足だったし、早めに寝ても何らおかしいことはあるまい。

左目を閉じれば見えないんだから、何の問題も無い。
という訳で、俺はベッド――ではなく、
唯一、何の幻覚も見えない部分。
つまり、ソファに寝転んだ。

目を閉じると同時に、睡魔が襲ってくる。
自然と増大する眠気に身を任せ、俺は意識を手放した。

＊　＊　＊

『はわ、はわわわわ……どうしよう……？』

窓から差し込む陽光に反応し、体が勝手に目覚める準備を始めている。

眠い。しかし――起きなければ。
体が重い。連日の寝不足が祟ったか。
とはいえ、時間的には十分な睡眠を取ったはずだ。
一般的な観点から言えば、十分であるどころか過剰とも言えるだろう。

なればこそ、つい今しがた聞こえてきた、
どこぞの天才ちみっこ軍師のようなセリフは、俺の幻聴に違いない。
それ以外にはありえないんだ。

ゆっくりと起き上り、左目を閉じたままに周囲を見渡す。
うん、何もない。至極当たり前の、普段の俺の部屋だ。

「……」

さて、そろそろ朝食を取りに行かなければ。
時間的には十二分に余裕はあるが、あまりのんびりもしていられない。

『あ、あれ……気付いてないです……？
はわ、い、今のうちに片付けないと』

幻聴だ、幻聴。
何を片付けるのかなんて知ったことか。
俺はなんにも聞いてない。

さて、着替えを――。

……いや、少し待とうか。

まあ、仮にだ。

仮に俺の見た幻覚が本物だとして、そこに――。

今、俺の近くにいる精霊は、女の子ということにはならないか。

女の子の前で、半裸になる。

……。

無理だ。いくらこちらから相手の姿を見ないとは言っても、

相手からこちらの姿が見える以上、

いくら半裸とはいえそれは無理だ。

チキンだと、笑わば笑え。

ああ、その通りさ。俺にそんな度胸は無い。

少なくとも、これまでの生活においてそんな度胸は必要なかった。

これから先の人生でも、おおよそ必要とは思えないようなものだ。

全裸になれば、確定的に変態と言えるだろう。

しかし、半裸となるとかなり微妙だ。

状況によっては言われる可能性も十分にありうる。

それこそ状況次第だが、妹（レイ）からすらも言われかねんぞ、俺。

あ、やべ、少し興奮してきた。

よし、考えを落ちつけよう。

幸いにして、俺の今の衣服は、通常通りの制服。
そのまま眠ってしまったからヨレヨレにはなっているものの、
かと言って、それ以外に何があるというわけでもない。
ならば、このまま学校に行くという選択肢も、アリと言えばアリだ。

とはいえ、気持ちが悪いというのも確かではある。

この際、上着だけを着替えてさっさと学校に向かうというのが、
最良の選択であるように思う。

『あ、あわっ、出てきちゃだめっ！』

上着を脱いで近くにソファに掛ける。
予備の制服をクローゼットに取りに向かい、適当に羽織った。

『あっ……頭に……』

俺はツッコまんぞ。
ツッコんだら負けだ。

さて、さっさと食堂に行って……。

『ま、待ってくださいです！
そのまま行ったらハゲちゃいます！』

「何だと！？」

『あ……』

「げ」

しまった。
ハゲるという言葉に反応して、思わず振り向いてしまった。
しかも、両目を開いたまま。

『は、はわわわ……あの、その……』

そこにいたのは、一人の少女。
昨日、俺のベッドで眠っていたものと同じ、
……ともすれば、幼女とも呼べるような女の子だった。

俺は、この――精霊の名を、知っている。

《召喚師セームベル》。

自身と同じレベルを持つモンスターを手札から特殊召喚する効果を持ったカード。
汎用性の面では他のカードに1歩劣るが、
コンボによってその真の力を発揮するカード、なのだが。

基本的にはそのビジュアル面によって、
霊使いなどには劣りはすれども、方々で人気のあるカード。

俺としても、自分の持つ精霊とするのであれば、
これ以上ないまでの好条件、なのだが――。

「……ドッキリ、か」

『はい？』

「……そりゃそうだ。俺が精霊持つなんて。
しかもそれがセームベルだと？　はっ。
リア充すぎて笑えねえよ」

『う、うわぁ……なんだか変な方向にネガティブになってるです』

リアルに考えてもみよう。
俺みたいに普段の引き運の無いような人間が、
こういう場面で最高の引き運を見せるだと？

ははははは、そんな都合のいいことがあってたまるか。
どうせ後で十代か六条あたりが「ドッキリでしたー」なんて言って、
俺の部屋に突入してくるオチだろ？　そのくらい分かってるって。

『で、でも、私はこうしてここにいるですよ』

「……だけど、俺のカードだって確証は無い」

……あれ？　なんだかこれ、フラグのような気が……。

ふと、思い出す。
先日購入し、そのままほったらかしにしている５パック。
そして、そのパックを購入するように教唆した、あの影。

――まさか！

「まさかとは思うが、あの影、お前か？」

『え？』

本当に、訳が分からないとでも言いたげに、
セームベルは軽く首を傾げた。

……これを鵜呑みにするわけじゃないが、
この反応を見る限りでは、セームベルはあの影じゃないということ
になる。

だとすれば、誰が――いや、「何」が？

あえてその点は無視しておくべきか？

いや――あるいは、いずれ、
それが重要な要素になる可能性も、十分にありうる。

「……そうじゃないなら、別にいい」

『はい？』

他にも無数に可能性はありうるんだ。

そこから、ありえない可能性を排除したうえで、
いくつかに絞り込めばいい。
群体（レギオン）という線は――なきにしもあらず、か。
俺に手を貸す＝精霊のカードを与えるという行為を、
果たして奴らが行うのかという疑問はあるが。

さて、何はともあれ、あのカードパックだ。
５つ購入したうちのいずれか、その中に、
《召喚師セームベル》のカードが紛れ込んでいる。
果たして、精霊というものは、パックに入っているような状態であっても、
このようにして霊体？　のようにして見えるものなのか。
少々気になるところだが――まずは、開いてみるが吉、か。
俺は、近くの壁にもたれかかってパックを開いて見た。

「……１つ」

開いてみるも、そこに目新しいカードは無い。
２つ、３つ、４つと開くも、セームベルのカードは見当たらなかった。
最後の１つ。

これに入っていれば、確かに、俺の持つカードに1枚、精霊のカードが紛れ込むことになる。

だが、そうなると、あの影は――。

「チッ」

まあいい、と断じて、俺は最後の1つを開いた。

そこには――。

「……」

『あ、ありました、ですよ……』

1枚目――《召喚師セームベル》のカード。

確かに、このセームベルの個体は、

俺の持つ精霊であるということが実証された。

「……分かった。さっきは、疑って悪かった」

『そ、そんなこと。驚かせちゃったのは、私なのですし』

「……まあ、驚いたけどさ」

帰ってきたら埴輪(はにわ)だぞ？

心臓が弱い人ならショック死してもおかしくはないな。

「ってそうだ。あの埴輪(はにわ)ってなんだったんだ？」

『あ、その……それは、その……。

実は、召喚失敗、して……』

「……」

『……』

「……何か、言うことは？」

『ご、ごめんなさい』

「ならよし。……これで悪びれもしないようなやつがいるんだから、

世の中どうなってることやら分からないよなぁ、本当……」

当然、それはあの水色髪のアホなのだが、
それはそれとして置いておこう。

「……で、さっきの『ハゲる』発言の真相は？」

『はわわ……その、実は、《ツルプルン》が頭の上にフォークを突き立てて』

ワケが分からない。
いや、確かに《ツルプルン》はレベル２モンスターだけど。
俺の頭にフォーク突き立てようとしたって、
そもそも実体が無いんだから当たらないだろう。

……当たらない、よな？

あれ、だんだん怖くなってきたぞ。
本当にハゲたりしないだろうな、これ。

「ところで――セームベル、でいいのか？」

『はい？』

「……いや、『セームベル』って、名前なのかな、って思ってさ」

セームベル。
噂によれば、ＳａｍｅとＬｅｖｅｌという単語を掛け合わせた造語だとか、
あるいは単純にＳａｍｅ＋Ｂｅｌｌでそうなんだとか、様々な憶測が飛び交っている。

しかし、それが名前とは思えない。
いずれかの意味があったとしても、役職の名前だとしか思えない。

『名前じゃないですよ。そういう種類の召喚師だ、
っていう、標識みたいなものなのです』

「だろうな。人の名前とは思えない」

『だったら丁度いいかもしれないですけど、
……名前とか、つけてもらったほうが、都合はいい気はするです』

名前、か。

「けど、セームベル――お前自身の名前があるんじゃないのか？」

『精霊になって日が浅いですから、
固有の名前は無いですよ』

そういうものなのだろうか？
いや、しかしながら、精霊に名前……か。
十代や万丈目はごく普通にカードとしての名前を呼んでるが、
俺だけ、こんな風に固有の名前をつけてもいいものだろうか？

……ま、深く考える必要もない、か。
このセームベル自身が望んでることでもあるし。
ともかく、思い浮かんだことをパッ、と告げるべきだろうか？
だとして、まず最初に思い浮かぶ名前――。

「……リオ」

『え？』

「ああ、いや、その。違う。
名前を考えてただけで、それが口に出ただけだから」

『そうです？』

ああ、と頷き、俺は軽く息をつく。
あの名前をこんなところで出すなんて。
少し、気が緩んでいた証拠だろうか。
それとも、俺が――。

いや。

俺は軽く頭を振り、考えを振りほどいた。
忘れろ。今の俺は、「御堂和真」だ。

「スズ、とか、リン、とか……どうだろう、安直だけど」

Ｂｅｌｌ＝鈴。となれば、二つほどまずは候補が挙がる。
昔からネーミングセンスは人一倍無いと言われてきた俺だが、
ここまで安直な名前をつけようとするとは、
自分でも予想外だったぞ。

『スズ、ですか……』

「ああ、いや、嫌なら考え直すけど」

『大丈夫ですよ。じゃあ、今日から私の名前は「スズ」ですね。
よろしくお願いしますです、えっと』

「マスターでもご主人様でもマイロードでも、
サージェントでも卿（けい）でもお兄ちゃんでも、
あるいは閣下でも師匠でも何とでも呼べばいいさ！」

『……』

「……はっ！？」

まずいことを言ってしまったような気がする。
というか、間違いなく奇妙なことを口走ってた。

マズい。セームベル――スズの表情が、
目に見えて嫌そうな表情に変化している。

ドン引きしていらっしゃる。
いや、１０割俺のせいだけど。

「……なんとでも、呼べばいいさ」

『……』

いかん。空気が凍り付いた。
俺も実は六条並みの空気殺しの才能があるのかもしれん。

この状況でどうやったら挽回できる？
何か、丁度いい手は――。

「すまない。俺は正気に戻った。
……名前を聞いてるんだよな。御堂和真だ」

『あ、はい……カズマさん』

うを。
先輩、とか御堂、とか呼ばれることはあっても、
和真さん、なんて呼ばれたことがないだけに新鮮だ。
うっひょう。

「大変ッスよ御堂君！！」

「ぐあああぁぁぁぁあ！？」

突然に聞こえてくる声と、勢いよく開く扉。

同時に、俺の左半身が扉に巻き込まれ、

洒落にならないくらいに地味な、しかし、
嫌な感覚の痛みが襲いかかってきた。

「ぐ、おおお……な、何だ、翔……！
まずは、ノック、くらい、してくれ……！？」

「うわあああこっちも大変なことになった！？
あ、いやでもそんなことより！」

こいつ今俺が負傷したのに「そんなこと」で済ませやがった！！

「たい、大変なんスよ御堂君！　あ、アニ、アニキが！！」

「……！！」

そうだ！
そういえば今日、エドが島に来る予定なんだ！

ここで十代の名前が出たということは、つまり――。

「十代になにかあったのか！？」

「え、エドに負けたと思ったら突然倒れて……！」

「！？」

もうそんな場面にまで進んでいたのか！？

いや、ありえない話じゃない。

朝一番に十代の下へ押しかけ、そのままデュエル。

そうして、こうして俺がスズと話している時間の間に、十代が敗北して――。

「デュエル場にいるのは誰だ？」

「え？　今は万丈目君と、明日香さんと、
それからクロノス先生、吹雪さん……４人だよ！
エドは、さっさと外に行っちゃったから分からないけど」

「……三沢を呼んで、先にデュエル場に向かってくれ。
もしかすると、デュエル場の機械の不具合の可能性も考慮できる。
俺はエドに会って話を聞く」

「でも、エドは――」

「まだ島からは出ていない。今から走って向かえば、十分間に合う。

――行ってくる！」

そう告げるが早いか、俺は「待ってよー！！」と叫ぶ翔を尻目に駆けだした。

＊　＊　＊

寮から走って数分の場所にある波止場。
そこで、エドは――恐らくは、船を待っていた。

用は終わった、とでも言わんばかりに憮然とした表情。
実際、今回はこれ以外に学校に用は無いのだろう。

不思議そうに俺を見据えるエド。
当然だろう、予定にない人間が、唐突に現れたのだから。

「エド・フェニックスだな？」

「その通りだが。……何の用だ？」

先日の記者会見の場では、一切使うことの無かった冷たい声音。
見知らぬ――誰とも知れぬ相手に対しては、
こうして拒絶の意を示すのだろう。
意に介さず、俺は続ける。

「お前のデュエルの直後、十代が倒れたと連絡が入った。
……少し、話を伺いたい」

「十代の仲間か。……そんなことを言われても、僕は知らない。
おおかた、敗北のショックか何かじゃないのか？」

「ただ負けたというだけで、人間は気絶するものじゃない。
……何があったのか、聞かせてもらいたい」

「ただデュエルをしただけさ。
……僕の真のデッキでな」

真の――Ｄ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）のことだろうか。
いや、それ以外にはありえないだろう。
少なくとも、Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）は、エドにとっての本気ではない。

「僕のＨＥＲＯデッキを超えるデッキなど、地球上には存在しない。

楽しいだけでデュエルをしているような人間にも、
僕が負けるはずはない。それを突きつけただけだ」

違う。
その程度の――精神的なショックで、
そう簡単に人間が倒れるわけがない。

原作の展開を見ればだいたい分かるが、
確か――あれは、斎王がエドのデッキに仕込みを入れて、
それが原因で、十代が、カードが白紙にしか見えない症状に陥ったはずだ。

これは、あくまでも仮定ではあるが、
あのデッキに、まだそういった力の残滓が残っているということは無いか。

仮にここで俺がデュエルしたとして、
斎王に洗脳される可能性――。

ゼロではない。

だが、その一方で、そうではないという可能性も捨てきれない。

ただ「残滓」というだけで、洗脳するだけの力は無いかもしれない。

あるいは、それを基にして洗脳を解く方法を見いだせる可能性もある。

本編ではデュエルで負かす以外に方法は無かったが、
あえて、こうして体感すれば、洗脳を解く手掛かりになるかもしれない。

俺の方でメインキャラクターたちの負担を肩代わりできるとも言えよう。
奴を倒せるとは思っていないが、
降りかかる火の粉を払うことはできる。

仮に俺が敗北したとしても、俺は、あくまで凡庸な人間だ。
十代や万丈目には勝利できないだろうし、
そもそも、俺が敵に回ったところで、あいつらの障害にはなりえない。

逆に、爆弾を抱え込むことになるだけだ。
負け(御堂和真)フラグという名の爆弾を。

だが――奴に、俺の存在を報せることになる。
少なからず俺を「脅威」と認識すれば、俺を狙う可能性は上がる。

俺の周囲の人間に対する処遇だ。

青葉さんや宮田さん、委員長は、一年前から一緒に過ごしてきた。
今年から入ってきた藤原さん、宇佐美さん、海野さんも、それなりに関係はある。
六条に関しては、そもそも異邦人同士という共通項がある以上、
切っても切り離せないような関係にあることは明白だ。
レイに関しては言うまでもない。

六条はともかく、他の7人が心配だ。
仮に斎王に狙われたとしたら、助け出すのは難しいかもしれない。

全員を監視下に置く？
無理だ。犯罪じみている。
それに、俺の体は一つしかない。
同時に二人以上が襲われては、手の打ちようがない。

どうする？

現段階で、最も重要視されているのは十代だ。

が、ここで斎王の事件に割り込んで行って、
俺が目をつけられることになれば、周囲に被害が及ぶ。
斎王のことだ。恐らくは、占いで俺の周辺の人間関係は洗い出すことだろう。
となれば、危険なのは、最も近しいレイ。

四六時中張り付いているわけにはいかないだろう。

いや、こうしてエドと会話している間にも、
斎王が俺のことを察知している可能性も――。

「……そうか」

結局、俺は何も言えずにエドから目をそらした。

あのデッキに込められた「力」を、
可能な限り解析すれば、洗脳を打ち破れる可能性を見いだせるのではないか。
そう考えたのだが――こうして、
エドの眼前に立って話をしながら考えてみると、
その「可能性」に反して、リスクがいささか大きすぎる。

ここで仮に斎王が俺に照準を当てたとき、
周囲に被害が及ぶことを考えれば、何もしないことが最適か。

俺は、妹（レイ）を――レイの周囲の世界を守るためなら、無様にもなろう。
プレッシャーに負けたと、そう言って逃げるのも、
……レイのためと思えば、どうということはない。

犠牲になるのは俺のプライドのみ。
そんなものは、犬にでも食わせてしまえ。

周りを危険に晒す方が、よっぽど嫌だ。

「……だったら、もしかするとそうなのかもしれない。
プロのプレッシャーにあてられたのかも、しれないな」

「お前もか？」

「……最初は挑んでみようと思ったけど、
流石に――そこまで聞くと、怖くなってきたよ」

僅かな可能性に賭けるより、元の流れに身を任せた方が、
俺たちの周囲に降りかかる火の粉は少ないだろう。

唯一、俺に関しては何かあるかもしれないが――。

それは、それ。
俺以外の人間に危害が加えられなかったら、それでいい。

俺はエドから背を向け、校舎の方へ向かって歩き出した。。

逃げ出すようなものだ。
エド自身も、軽蔑するような眼差しで俺のことを見ていることだろう。

だが、今はそれでも構わない。

俺には力が無い。
力が無い以上は、それに応じた選択肢を選ぶ必要がある。

そもそも、勝機の見込めない俺が、
こうしてエドの下へ出向くというのは無理があったか――。

そう考えつつ、俺は寮への帰路につき――。

「……ふん、面白くない」

俺が立ち向かってくることを、少なからず期待していたのだろうか。
そんなエドの呟きが聞こえたが――俺は、振り返らなかった。

＊　＊　＊

『いいのです？』

「んぁ？」

ふと、スズがそのようなことを尋ねる。
いい、とは――？

『カズマさん、あの人とデュエルするつもりだと思いました』

「……人間、先が読めるって恐ろしいもんでさ。

いろいろと考えてるうちに、考えが変わることもあるんだよ」

『そういうものです？』

「そういうものです。
……難儀なもんだが」

実際、俺も最初はデュエルする気満々だったんだ。
あそこで、これから先起こりうる事象に対する記憶が無ければ、恐らくは、エドとデュエルしていたことだろうと思う。
十代が倒されて、多少ならず頭に血が上っていた部分もあるだろう。
でもなければ、死地に自ら飛び込んでいくような真似はしない。

「――いずれにせよ、勝てない勝負に違いないんだ。
切り札を使ったとしても、少し難しいな」

アバター――だけでは、どうしようもないだろう。
いや、インティ、クイラを加えても厳しいかもしれない。
サターンを加えて……いや、ダメだ。それでも辛い。

アレを――使うには、いささか早い。
というよりも、こんな場面で使うべきではない。
必ずしも経る必要のあるデュエルではないからだ。

とはいえ、あのカード――……特別なカードを、
常に持ち歩くようになったのは、ある意味で六条のおかげか。
ホセに、アレを使っても大丈夫だと保障されたからというのもある。

『カズマさん、想像以上に自信無いみたいです』

「自信が無いのも確かだけど、
できればこういう場合、分をわきまえていると言ってほしいな」

それが、譲れない勝負ならまだしも、
勝てない勝負をするべきではない。

「おや」

そうして歩いているうちに――何故だか、声が聞こえてきた。

聞き覚えのある……特徴的な、低い声。
より具体的に言えば、「テラ子安」な感じの。

「……『月』の暗示――いや、『審判』？
ふふ、面白い。君は、奇妙な運命を持っているようだ」
「――――――」

……テラ子安ぅぅぅぅぅ！！？

マジかよ！？
いや、ちょっと待て！
何で今このタイミングで、斎王がここにいるんだよ！

「それに加えて、精霊を見ることのできる人間――。
さらには、遊城十代とも近しい関係のようだ。
エドを迎えに来たら、とんだ掘り出し物がいたものだ」

――！！

そうか！　エドが待っていた船に乗っていたということか！
それにしたって、マズい！

何でこのタイミングで奴が来るんだよ！

くそっ、憶測が外れた！
デュエルしてもしなくても、結局目をつけられるってことか！？

「……何の用だ？」

「いや、少し君の運命を、占ってあげようと思ってね。
――君たちの得意とする、デュエルで」

そうか、万丈目が今は不動のライバルキャラの位置にあるから、
同じように精霊が見える俺が狙われたということか！

ははは！　納得だ！

最悪だ！　どうしよう！！

「……くっ！」

「逃げるか？　立ち向かうか？　それは自由だ。
しかし、あなたはすでに捕らわれている。
運命の鎖に。運命そのものに！」

「――チッ！」

このまま逃げたとしても、結果は同じか――！！

だったら！

「やってやるよ、くそっ！
……スズ、しばらく隠れてろ！」

『は、はい！』

俺はデュエルディスクを展開し、そこにデッキを差し込んだ。
対し、斎王は――机？

「デュエルディスク――だったかな？
私は、それを持っていないのだよ。
悪いが、こういう形式でデュエルを行わせてもらおう」

そういえば、確かに万丈目戦でそんなことしてたっけ。

いや、それは割とどうでもいい。
こいつを相手にするのなら、最初から全力で向かわないと！

「「――決闘（デュエル）！！」」

始まってはならない決闘（デュエル）が、始まってしまった。

35束目：蠢動（後書き）

――今回のミニドラマはおやすみです（

そういうわけで、伏線を散らしながらフラグを立てていきました35話です。

正直、最初は最後のアレでエドとデュエルさせるつもりでした。
ですが……まあ、本文で言及されているような理由から、
周囲に被害が向かってはならないという理由で、今回は見送りました。
多分、いずれやります。

ちなみに、斎王が御堂を狙う理由をつけるために精霊を付けました。
いずれ活躍する予定ではありますが……なんというか、
現状ではいらない子扱いされそうで怖いです；
ちなみに精霊は増えません。この子だけです。

さて、次回はＶＳ斎王です。
この調子だと2話続きになってもおかしくはありませんが、

ともかく次回はデュエルデュエルデュエルにします。
最近日常ばかり書いてましたから、そろそろやらないと……；

というか、この調子だとさらにキャラが増えたときに収拾がつくかどうか；
一人増やすつもりなんですけど！（

３６束目：運命（前書き）

ＶＳ斎王です。
珍しく御堂が厨二っぽくない（

36束目：運命

先攻は斎王――。

相手が机の前に立ってる状態だっていうのに、
デュエルディスクは律儀に反応してくれるようだ。

若干の馬鹿馬鹿しさを覚えながら、俺は相手の動きを待つ。

「私のターン、ドロー。
私は手札から、《アルカナフォースⅢ－THE EMPRESS（スリー・ジ・エンプレス）》を召喚」

【《アルカナフォースⅢ－THE EMPRESS（スリー・ジ・エンプレス）》攻1300／守1300】

「THE EMPRESS（ジ・エンプレス）の召喚の成功時、
正位置か、逆位置か、いずれかの効果を得る。
正位置ならば、相手が通常召喚に成功したとき、

手札から『アルカナフォース』を特殊召喚する効果を。
逆位置ならば、相手の通常召喚時、手札を墓地へ送る効果を。
……運命は、選ぶことができる。さあ、回転を止めてください」

芝居じみた斎王の言葉。
斎王の頭上で回転を続けるＴＨＥ（ジ・）　ＥＭＰＲＥＳＳ（エンプレス）だが、
その回転を止めるのは、相手である俺――。

運か、それとも既に仕組まれた事象か。
いずれにしても、心してかかる必要があるか。

「――ストップ」

「正位置。……よって、ＴＨＥ（ジ・）　ＥＭＰＲＥＳＳ（エンプレス）は正位置の効果を得る」

チッ、と俺は軽く舌打ちした。

この状況では、通常召喚は厳しいか。
恐らくは、手札に上級モンスターでも握っているのだろう。
とすれば、特殊召喚を絡めて、どうにかエンプレスを破壊する必要がある。

「カードを2枚セットし、ターンエンド。
さあ、あなたのターンです」

「……俺のターン、ドロー！」

意気込んでみたはいいものの、
この手札ではどうしようもないというのが現状だ。

エンプレスを破壊できるカードは手札にあるが、
結局、通常召喚権を使わなければならないのがネックだ。

いや、その点を差し引いても、このままエンプレスを残すのはマズい。
この段階での奴の切り札が召喚される可能性が高いからだ。

いや、そういう意味では、そもそも通常召喚すること自体が危険じゃないか？

……ああ、くそ、ドツボにハマってきた。
このまま考えてても、仕方がないか。

「俺は《カオスエンドマスター》を召喚！」

【《カオスエンドマスター》攻１５００／守１０００】

「相手の場にモンスターが召喚されたことにより、ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ（エンプレス）の効果が発動。手札の『アルカナフォース』を特殊召喚できる。私は《アルカナフォースＸＶＩＩＩ－ＴＨＥ　ＭＯＯＮ（エイティーン・ザ・ムーン）》を特殊召喚」

【《アルカナフォースＸＶＩＩＩ－ＴＨＥ　ＭＯＯＮ（エイティーン・ザ・ムーン）》攻２８００／守２８００】

「……！」

本当にこれはモンスターなのだろうか――。

不定形、かつ、全体的にどこか異様な意匠の、奇妙なモンスターが、斎王の場に出現する。

「ＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）……『月』とは、正位置においては、不安定、幻惑、現実逃避、欺瞞を意味し、逆位置においては、過去からの脱却、未来への希望、優れた直感を意味します。さあ、選び取るのです、自分の運命を」

斎王の頭上で回転を始めるＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）のカード。

確か、正位置の効果はトークンの生成効果――。
逆位置は、相手にモンスターを与える効果、だったか？

全体的に見ても使いづらいであろうその効果を、
それでも難なく使って見せるのが、この男の恐ろしいところ――か。

「……ストップ！」

「逆位置。……おめでとうございます。
どうやら、あなたは過去から脱却することができるようです。
そして、その優れた直感により、未来も拓けるでしょう」

……正位置じゃない？

いや、何かある。
わざわざ、こうして斎王が逆位置で止める理由が。

「逆位置の効果は、私のエンドフェイズごとに、
あなたに私のモンスターを受け渡す効果です」

「……そうか。別にかまわんが――バトルフェイズに入る。
カオスエンドマスターで、エンプレスを攻撃！」

「むっ……！」

そのまま、カオスエンドマスターの攻撃を受けて破壊されるエンプレス――。

何も使わない？

２枚も伏せてあるというのに、何もない、なんてことがあるのか？

いや、今はこの際どうだっていい。
斎王には２００のダメージが与えられる。
そして、カオスエンドマスターの効果も、発動する。

「カオスエンドマスターの効果により、デッキから、
レベル５以上、攻撃力１６００以下のモンスターを特殊召喚できる！
俺は《混沌球体（スフィア・オブ・カオス）》を特殊召喚！」

【《混沌球体（スフィア・オブ・カオス）》　攻　１６００　／　守　０】

「バトルフェイズは終了する。そして、レベル５の混沌球体（スフィア・オブ・カオス）に、
レベル３のカオスエンドマスターをチューニング！
現れろ、《ギガンテック・ファイター》！」

【《ギガンテック・ファイター》　攻　２８００　／　守　１０００】

場に現れる、巨躯の戦士。
シンクロ素材に指定が無く、全体的に見ても汎用性が高いカード。
その効果は、自身を対象に含めた戦士族の蘇生と、
墓地の戦士族の数だけ攻撃力を上昇させること。

「墓地にカオスエンドマスターが存在することにより、
ギガンテック・ファイターの攻撃力は２９００となる。
……カードをセットし、ターンを終了する」

「私のターン、ドロー……。
このスタンバイフェイズ、あなたの運命は変転を遂げる。
伏せカード（リバース）、《逆転する運命》を発動。
私の場の『アルカナフォース』１枚の正位置、逆位置を入れ替える」

くそっ、やっぱりあったか、そういうカード！
そして今はスタンバイフェイズ――。
ということは、つまり！

「THE（ザ・） MOON（ムーン）の効果を正位置に変更。
これで、あなたは幻惑に囚われることとなった。
……幻惑は、場に幻影を産み落とす。
《ムーントークン》を守備表示で特殊召喚！」

【《ムーントークン》 攻 0 ／ 守 0】

場に産み落とされる、奇妙な影。

あれが、幻影――つまり、ムーントークンということなのだろうか。
あれ自体は大した脅威じゃない。
それよりも、問題なのは、そこから先。
あのトークンの用途だろう。
何をしてくるかは分からないが、注意するに越したことはない。

「そして私は手札からフィールド魔法、《シャインスパーク》を発

動」

その瞬間、周囲が強烈な光に包まれる。
邪推でしかないが、これは――破滅の光の体現、か？

「場の全ての光属性モンスターの攻撃力は５００上昇し、
守備力は４００減少する。よって、ＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）の攻撃力は、
５００上昇して３３００！」

だが、ギガンテック・ファイターは疑似的な戦闘破壊耐性を持つ。
戦士族が墓地に溜まれば、撃破も十分に可能なはず――。

「バトルフェイズ。ＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）で、
ギガンテック・ファイターを攻撃！」

「くっ――だが、ギガンテック・ファイターは、
戦闘で破壊されても、墓地の戦士族を特殊召喚できる！
甦れ、ギガンテック――」

「この瞬間、伏せ（リバース）カードを発動」

「なっ！？」

墓地から流れ出す力の奔流がせき止められる。
まさか、効果無効系のカウンター罠（トラップ）か！？

「ええ、その通りです」

「！？」

「未来を見通すことのできる私に、思考が読めないと思うかな？
カウンター罠（トラップ）、《威風堂々》を発動。
バトルフェイズ中に発動したモンスター効果を無効にし、破壊する」

「くっ……！！」

《天罰》あたりなら、手札コストの問題もあるし、
少々は大丈夫と踏んでいたが――《威風堂々》か。

一切のコストも必要なしに、１：１交換ができるカード。
最近では、汎用性の問題から《透破抜き》を使用する者が多いが、
それでも、それなりには強力なカードだ。

「カードをセットし、ターンエンド。さあ、あなたのターンです」
「俺のターン、ドロー！」

あのフィールド魔法は存外に厄介だ。
光属性のシンクロモンスターはそれなりに多いものの、その一方で、高攻撃力を叩き出すカードはあまりない。
汎用性には劣るものの、《ロード・ウォリアー》なら、その高い攻撃力も相まって、ＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）を破壊するのに役立つが。

――光属性？

そうだ、光属性のシンクロモンスター……１枚、あった。
使うか？　いや、そもそもそれを想定して組み直したんだ。
出さないほうがおかしいし、この状況ではそうせざるを得ない。

「相手の場にのみモンスターが存在する場合、
《太陽の神官》を手札から特殊召喚できる！
《太陽の神官》を守備表示で特殊召喚！」

【《太陽の神官》　攻　１０００　／　守　２０００】

「――む？」

「更に手札から、《赤蟻アスカトル》を召喚！」

【《赤蟻アスカトル》　攻　７００　／　守　１３００】

「行くぞ！　レベル５の太陽の神官に、
レベル３の赤蟻アスカトルをチューニング！
現れろ――《太陽龍インティ》！！」

【《太陽龍インティ》　攻　３０００　／　守　２８００】

「これは……！？」

場に降り立つ、太陽の意匠を持つ赤いドラゴン。
凶悪な効果を有すシンクロモンスターであり、何よりも――。

「インティの属性は光。シャインスパークの効果を受ける！
よって、攻撃力は３５００！」

ＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）を破壊できる能力を持ったモンスターだ。
更に、破壊耐性までも備えている。
これを処理するとなると、骨が折れるだろう。

「――バトルだ！　太陽龍インティで、ＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）を攻撃！」

「少々驚きましたが――無駄です。伏せカード（リバース）、《光子化（フォトナイズ）》を発動。
相手の攻撃を無効にし、その相手モンスターの攻撃力分、
ＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）の攻撃力は上昇します」

「チッ――！　カードをセットし、ターンエンド！」

インティの光を吸収したＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）が、
俺を見下ろすようにして視線――？　を、こちらへ向けてくる。

「――どうやら、これで終わるようですね。
それが、あなたの運命だったということでしょうか。
私のターン、ドロー。そしてこのスタンバイフェイズ、
幻影が場に現れる……」

【《ムーントークン》　攻　０　／　守　０】

斎王の場に、またも現れる影。
……この状況を考えれば、奴のすることは、おおよそとはいえ、予測できる。

恐らくは――最上級モンスターの召喚。

特に、奴の切り札とも言うべきアレが来る可能性――。
否定はできない。いや、むしろ、可能性としては高い。

「完成された『世界』を見せてあげましょう。
私は場の2体の《ムーントークン》を生贄に捧げ、
最後の大アルカナ、我が切り札にして、完全な『世界』――。
《アルカナフォースXXI－THE WORLD(トゥエンティーワンザ・ワールド)》を召喚!!」

【《アルカナフォースXXI－THE WORLD(トゥエンティーワンザ・ワールド)》 攻 3100 ／ 守 3100】

場に現れる、機械天使――。

その威容は、ただ攻撃力が高いと言うだけでは説明がつかないほど、威圧感と――そして何より、得体の知れない雰囲気を纏っている。

あれが、破滅の光の波動、ということだろうか。
いずれにしても、気にするに越したことはない。

「ＴＨＥ（ザ・）　ＷＯＲＬＤ（ワールド）――『世界』の暗示は、
完成と成就、未完成、終焉――死。さあ、自らの運命を選び取ってください」

回転を始めるＴＨＥ（ザ・）　ＷＯＲＬＤ（ワールド）のカード――。

その効果は、相手に墓地に存在する1番上のカードを、
相手のドローフェイズ時に、相手の手札に加える効果。
そしてもう一つが、相手のターンをスキップする凶悪な効果だ。

恐らくは、ここで俺がストップを宣言すれば――。

「……ストップだ」

「――正位置。よって、ＴＨＥ（ザ・）　ＷＯＲＬＤ（ワールド）は、
場のモンスターを2体墓地に送ることで、相手のターンをスキップする効果を得る。
完全な世界は、時をも自由にできる……」

その効果のためには重いコストが必要となるが、
逆に、コストさえ用意できれば、何度でも、
相手のターンを飛ばすことができる凶悪な効果――。

「シャインスパークの効果により、その攻撃力は５００ポイント上昇。
……残念ながら、これで終わりです。
攻撃力の上昇したＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）で、
太陽龍インティを攻撃！」

触手のように伸びるＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）の腕？　から放たれる光線が、
インティへと向かいくる。

この攻撃を受ければ、３３００のダメージを負い、
次のＴＨＥ（ザ・）　ＷＯＲＬＤ（ワールド）の攻撃により、敗北する。

――だが！

「《シンクロ・バリアー》を発動！
俺の場のシンクロモンスターを生贄に捧げることで、
次の俺のエンドフェイズまで、全てのダメージをゼロにする！」

「成程、どうしても運命に抗おうというのですか。

……私は手札から、《カップ・オブ・エース》を発動。
正位置であれば私が、逆位置ならばあなたがカードを2枚ドローできる。
聖杯の恩恵を受けるのは、私でしょうか。あなたでしょうか……」

これで、幾度目かの回転。

現状の奴の状況にもよるが、恐らくは、
これでストップをかけたとしても、正位置で止まる可能性が高い。
実質的に、この男にとっては《強欲な壺》をそのまま使っているようなものだ。

「……ストップ」

「正位置。つまり、私は2枚のドローが可能となりました。
よって2枚ドロー。」

やはり。
いや、そもそも、絶対的なまでの運命力を持つ斎王に、
正位置・逆位置をあらかじめ決めておくことなど造作も無いはずだ。
やはり、卑怯にもほどがある。

「カードをセットし、ターンエンドです」
「――俺のターン、ドロー！」

状況は悪い。

俺の場にモンスターは存在せず、斎王の場には2体の大型モンスター。
1枚伏せ（リバース）カードはあるものの、あくまでこれはコンボ用のカードだ。
使途は限られる。

さて、そうなると、あの布陣を切り崩すのに、何をするべきか――。

たった3枚の手札と、1枚の伏せ（リバース）カード。
だが、これだけあれば、斎王の「世界」は崩せる。

ターンスキップなど、させてなるものか。

「《霊魂の護送船（ソウル・コンヴォイ）》の効果！
墓地の光属性モンスターを1枚除外し、特殊召喚できる！
光属性の太陽の神官を除外し、特殊召喚！」

【《霊魂の護送船（ソウル・コンヴォイ）》　攻　１９００　／　守　１０００】

「更に、手札から《スーパイ》を召喚！」

【《スーパイ》　攻　３００　／　守　１００】

俺の場に現れるのは、牛面の悪魔のような――木彫りの人形。

首だけという、奇妙、かつ奇怪な姿をしているが、

このモンスターによってしかシンクロ召喚できないモンスターも存在する。

「『月』の暗示――！？」

「レベル５の霊魂の護送船（ソウル・コンヴォイ）に、

レベル１のスーパイをチューニング！

現れろ、《月影龍クイラ》！」

【《月影龍クイラ》　攻　２５００　／　守　２０００】

場に姿を現すのは、そのままインティの姿を反転したかのような、

――「月」を現す、青いドラゴン。

「だが、属性は闇――それに加え、その攻撃力では、
ＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）にもＴＨＥ（ザ・）　ＷＯＲＬＤ（ワールド）にも、
到底及びは――」

「バトル！　月影龍クイラでＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）に攻撃！」

「なっ……」

迎撃され、地に落ちるクイラ。
インティの加護――シンクロ・バリアーの効果により、
俺に対するダメージは、現状ではゼロ。

クイラが撃墜された、その背後――対極に位置する側から、光が漏れた。

「戦闘・効果に関わらず、クイラが破壊されたとき、
その瞬間に墓地から《太陽龍インティ》が特殊召喚される。
甦れ、《太陽龍インティ》！」

【《太陽龍インティ》　攻　３０００／守　２８００】

太陽はまた昇る――。

それを体現するかのように、再度降り立つ赤い竜。

「太陽龍インティでＴＨＥ（ザ・）　ＷＯＲＬＤ（ワールド）を攻撃！」

「何！？」

だが、そこまでは計算通りだ。

ＴＨＥ（ザ・）　ＷＯＲＬＤ（ワールド）の攻撃によって迎撃されるインティ。

――これで、奴の布陣は崩れる。

「太陽龍インティの効果を発動！
戦闘によって破壊されて墓地へ送られたとき、
インティを破壊したモンスターを破壊する！」

「ぬうっ！？」

内側からあふれてくる光によって、爆散するＴＨＥ（ザ・）　ＷＯＲＬＤ（ワールド）。

戦闘で破壊されようとも、ただ破壊されるだけではなく、相手をも道連れにして消えていく。

そして、太陽が沈んだとき――また、月も昇る。

「更に、相手は破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを受ける。

……これには、フィールドでの変動も含まれる。

よって、１８００のダメージだ！」

「くっ……！」

「カードをセットし、ターンエンド！」

一見すれば、ただ俺の場がガラ空きになっただけだろう。

しかし、ただＴＨＥ（ザ・）　ＷＯＲＬＤ（ワールド）を破壊するためだけに、こんな無謀なことを行ったわけではない。

「……私のターン、ドロー！

このスタンバイフェイズ、幻影が生成される……」

【《ムーントークン》　攻　０　／　守　０】

「だがこの瞬間に、インティの効果も発動する」

「何っ……！？」

「インティが破壊された次のターンのスタンバイフェイズ時、
墓地の《月影龍クイラ》が特殊召喚される。
《月影龍クイラ》を守備表示で蘇生する！」

【《月影龍クイラ》　攻　２５００　／　守　２０００】

これが、インティとクイラの能力。

どちらか一方が破壊された際に、もう一方が特殊召喚される。
インティからクイラへの繋ぎにはタイムラグがあるものの、
それでも強力な効果であることには変わりない。

「これは……困りましたね。想定外だ。
しかし、あなたの話を聞く限りでは、そのモンスターは、
墓地に存在するモンスターを特殊召喚するカード。
であれば、対策も可能です。私は手札から、《無欲な壺》を発動。
私かあなた、どちらかの墓地に存在するカードを2枚まで選択し、
デッキに戻します。私の墓地の《逆転する運命》、
そしてあなたの墓地の《太陽龍インティ》を、それぞれデッキに
戻します」

「くっ……」

インティはデッキに戻る代わりに、エクストラデッキに帰っていく。
そして――これでは、クイラの効果による蘇生が、できない。

「さて、厄介とはいえ、あとはそのモンスターのみ。
私は《アルカナフォースⅣ－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ（フォー・ジ・エンペラー）》を召喚！」

【《アルカナフォースⅣ－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ（フォー・ジ・エンペラー）》　攻　１４００／守　１４００】

「支配、安定を示す正位置。未熟、横暴、傲慢を示す逆位置。
――さあ、あなたの運命を見せてください」

皇帝――エンペラー、か。
チッ、と俺は軽く舌打ちした。

べらべらと胡散臭いことを並べたてやがって。
俺以上に厨二病のケがあるんじゃないのか、こいつ。

「ストップ」

「正位置。……よって、私の場の『アルカナフォース』は、
その攻撃力を５００ポイント上昇させます」

つまり、シャインスパークの効果も併せれば――常に、
全てのモンスターの攻撃力が１０００ポイント上昇、ということか？

マズい。
ＴＨＥ（ジ・）　ＥＭＰＥＲＯＲ（エンペラー）の攻撃力はこれで２４００。
加え、ＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）の攻撃力は――３８００。

耐えられるか、この１撃を――！？

「ＴＨＥ（ジ・）　ＥＭＰＥＲＯＲ（エンペラー）で、月影龍クイラを攻撃！」

「くっ……《アルケミー・サイクル》を発動！
俺の場のモンスターの攻撃力を、すべてゼロにする！」

「ん……？」

急速に、光――力の抜けていくクイラ。
そして、そんなクイラに突撃するＴＨＥ（ジ・）　ＥＭＰＥＲＯＲ（エンペラー）。
状況は状況だが――この際、仕方がない！

「クイラの効果を発動！
クイラが攻撃対象に選択されたとき、そのモンスターの攻撃力の半分の数値、
俺のライフポイントを回復する！」

「ですが、これで破壊です」

「分かってるっての……！！
アルケミー・サイクルの効果によって、
攻撃力をゼロにされたモンスターが戦闘で破壊されたとき、
俺はデッキからカードを１枚ドローする！」

１２００のライフゲイン。
よって、残りのライフは４８００――。

「ＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）で直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「ぐあああああっ！」

３８００――想定以上のダメージが、俺の身を襲う。
僅かなフィードバックながらも、
デュエルディスクは忠実に「痛み」を再現する。

それは、３８００ものダメージであれば――相応に、跳ね上がる。

――だが。

「……悪いな、耐えたぞ……！」

「ライフポイントは１０００――。ですが、
この状況ではどうしようもありません。では私はこれでターンエンドです」

「俺のターン――ドロー！！」

このカード……なら、まずは――！！

「俺は手札から、《ワン・フォー・ワン》を発動！
手札の《グローアップ・バルブ》を墓地に送り、

デッキから《チューニング・サポーター》を守備表示で特殊召喚する！」

【《チューニング・サポーター》　攻　１００　／　守　３００】

「更に、墓地に送られた《グローアップ・バルブ》の効果を発動！
デッキの１番上のカードを墓地に送り、
《グローアップ・バルブ》を墓地から特殊召喚できる！」

【《グローアップ・バルブ》　攻　１００　／　守　１００】

「むっ――？」

「レベル１のチューニング・サポーターに、
レベル１のグローアップ・バルブをチューニング！」

何の前触れも無く、理解した。
「あいつ」は、すぐ傍にいる。

このドローで、引き当てることができる。
予感ではなく、確信があった。

絶対に引ける、と。

「集いし願いが、希望の彼方の境地へ誘う(いざな)――　一陣の風となれ！
駆け抜けろ、《フォーミュラ・シンクロン》！」

【《フォーミュラ・シンクロン》　攻　２００／守　１５００】

火花を散らし、音速の調律師(シンクロン)がその姿を現す。
この状況下における、俺にできる唯一の手。
やるしかない。いや、やらなければ――負ける。

「フォーミュラ・シンクロンのシンクロ召喚に成功したとき、
デッキからカードを1枚ドローできる！
更に、チューニング・サポーターがシンクロ素材にされたとき、
デッキから1枚ドローできる！」

合計2枚のドロー。
目を瞑り、思い切り――引き抜く。

――来た！

だが、まだだ。

この手札では、どうしようもない！

「手札から魔法（マジック）カード、《シンクロキャンセル》を発動！

フォーミュラ・シンクロンのシンクロを解除し、

その素材であるチューニング・サポーター、

グローアップ・バルブの2体を特殊召喚する！」

【《チューニング・サポーター》　攻　１００　／　守　３００】

【《グローアップ・バルブ》　攻　１００　／　守　１００】

「そして再度、シンクロを行う！

今一度現れろ――《フォーミュラ・シンクロン》！」

【《フォーミュラ・シンクロン》　攻　２００　／　守　１５０】

そして、再度の2枚ドロー。

――これで、おおよその条件は整った。

「そして、俺は手札から《召喚師セームベル》を召喚する！
来い――スズ！」

【《召喚師セームベル》　攻　６００／守　４００】

「行くぞ、スズ！　伏せ（リバース）カード、
《スター・チェンジャー》を発動！　場のモンスターのレベルを、
１つだけ上下できる！　俺はセームベルのレベルを１つ上げる！」

『は、はいっ！』

これで、スズのレベルは３。
そして――スズの効果。

「召喚師セームベルの効果を発動する！
自身と同じレベルを持つモンスターを、手札から特殊召喚できる！
俺は、レベル３の《レベル・ウォリアー》を特殊召喚する！」

【《レベル・ウォリアー》　攻　３００／守　６００】

スズの前方に、奇怪な魔方陣が展開する。

まるで、ＣＧを描くような工程が展開されていく。

ワイヤーフレームが《レベル・ウォリアー》を形作り、

そこに着色され――完全な、《レベル・ウォリアー》が召喚された。

「何かと思えば、合計レベルは８。

……知っていますよ。あなたのそのデッキには、

レベル８のシンクロモンスターは、既に墓地へ送られた、

《ギガンテック・ファイター》以外には、先程の《太陽龍インティ》など、

厳しい制約が課せられたモンスターしか存在していない。

この布陣では、シンクロ召喚できても、レベル５が限度――。

……敗北ですよ、あなたのね」

「――それはどうだろうな？」

「……？」

俺は、皆のところに帰る。

いつもの日常を過ごす。

十代とデュエルして負けて、万丈目にも負けて、
あいつらの実力に嫉妬しながら、やっぱり自分には無理と笑い、
馬鹿してる六条に折檻を施し、レイに食事を作ってやって。

青葉さんや委員長、宮田さんたちと、デッキの調整して。
新入生の皆と、デュエルして。
そうして、また似たような明日を迎える。

この男に洗脳されては、そんな明日も来なくなる。

――1年。

短いようで、長い時間。
耐えられるわけがない。

だからこそ、俺は日常に帰るためなら、手段を選ばない。

――手段は選ばないし、選ぶような器用さは持ち合わせていない。

皆のところに帰るために――この男を、倒す。

そのためなら。

俺は――「あのカード」を使う。

自らに課した制約を掃(はら)う。

運命を――打ち破る。

「……！？
運命が――！？
何だこれは……！？」

運命をつかさどるなどと豪語する人間が、うろたえたように目を見開く。

「――！？　瞳が……！？」

「レベル３となった召喚師セームベルと、
レベル３のレベル・ウォリアーに、
レベル２のフォーミュラ・シンクロンをチューニング！！」

スズが、二重に重なる緑の環（わ）に囲まれる。

そうして――星が、集う。

集いし星――。

言いえて妙だ。表現としては、これ以上ないまでに巧緻と言える。

「集いし風が――」

ああ、「だからこそ」、俺は違うと証明しよう。

「――闇夜の雲を薙ぎ払う」

俺は、主人公たりえない。

主人公ではないからこそ――換える。

「破壊を包む星となれ――!!」

宣言を。

意思を。

そこに込めるべき――信念を。

言葉として、発する。

「シンクロ召喚！　――響け！」

その名を。

「――《スターダスト・ドラゴン》！！」

【《スターダスト・ドラゴン》　攻　２５００／守　２０００】

白銀の竜が降り立つ。

その姿は、まるでその名の示す通り、「星屑」のようで――。

くすんだ光。
その波動など、掻き消えてしまいそうなほどに、
ただただ、美しかった。

「さあ、反撃開始だ――！！」

３６束目：運命（後書き）

作業用ＢＧＭ：Ｐｈｉｌｏｓｏｐｈｙｚ

軽く2時間近くずっと聞いてました。

＜ヤベぇ

とりあえず、斎王戦前半までです。
今回は、「主人公らしく」というのがコンセプトです。
まあ、当然のように主人公だということ自体否定してますが（

シンクロ口上は、主に本来使っているキャラクターとの区別ということで、
オリジナルで考えたんですが……まぁひどいわ（
厨二全開という。

斎王は今回は本気ではないということで、テラ子安ＥＸ光闇は出てきません。
とはいえ、世界が何故かすぐに倒されているというこの空しさ。
月の方が目立ってませんか、これ。

御堂に投げかけられた暗示の「月」、および「審判」は、

主に「過去」にとらわれている御堂のことを暗示しました。
不安定だとか現実逃避だとか、あるいは欺瞞。

審判に関しては、もうそのまま復活という、転生者には似つかわしいものが存在しておりますので。逆位置の悔恨、とかもうまんまですね。実は御堂は、色々と後悔していることがあったりします。その辺は、いずれ本編で。

あと、なぜか後半の一部がラスボス戦っぽい雰囲気という。
アルェー？↑

とりあえず、今回何かしら問題点等ありましたら、
ご指摘いただけると助かります。

37束目：星屑（前書き）

急転直下。
起承転結の「承」の部分と言ったところでしょうか。

37束目：星屑

「ス――スターダスト・ドラゴン？
何だ、これは――！？
こんなものは、運命には……！」

呆気に取られたようにして、ただスターダストを見上げる斎王。
運命には無かった。それは当然だろう。
このカードは、本来存在するはずのないカードだ。

未来から来たというのならまだしも、
現代人――仮に未来を見通す能力を持っていたとしても、
今を生きる人間には感知できなくとも、仕方がないかもしれない。

いや、あえてスターダストの存在を認知していなかった、か。

自分にとって都合の良い風に、
運命を捻じ曲げていた、と解釈すべきか。

「それに、その瞳（め）は――何だ！？」

「眼？」

「何故、その右の瞳は赤く染まっている……！？」

瞳が、赤く染まっている――？

どういうことなのか、よく分からない。

そもそも、赤いのは俺の左目だ。

……いや。

あるいは、これがホセの言っていた「紅眼」の意味か？

原因の方はよく分からんが――まあ、いい。

「デュエルには関係ないだろう？

……スターダストの召喚に対してのカウンターは無いのか？」

「……っ、私としたことが……。

だが、そのようなモンスターを召喚したとて無意味！

伏せカード、《奈落の落とし穴》を発動！

相手モンスターを破壊し、除外する！」

スターダストの下方に突如開く、奈落への孔(あな)。
――だが。
「スターダスト・ドラゴンの効果を発動！
『破壊』効果が発動したとき、スターダストを生贄に捧げ、
発動した効果を無効にし、破壊する！
ヴィクティム・サンクチュアリ！！」
「なぁ――――！？」
スターダストが無数の燐光と化し、
「破壊」という現象そのものをも包み込み、
その二つ名の通り、「破壊を包む星」となる。
「だが、それだけであれば、あなたの場はガラ空き。
……勝ちに変わりはありません」
「カードをセットし、ターンエンド。
そしてこのエンドフェイズ、破壊効果を無効にした場合、
スターダスト・ドラゴンは場に舞い戻る！」
【《スターダスト・ドラゴン》　攻　２５００　／　守　２００

0 】

「な、ぁ……！？」

これが、以前の世界でも――そして、
未来でも、スターダストの場持ちが良いと言われる理由だ。
破壊効果の完全無効化。
そして――エンドフェイズの帰還。

当然、除外にも戦闘破壊にも弱く、
バウンスなどされれば、またシンクロ召喚する手間がかかる。

ところで、一つ。
先ほど《グローアップ・バルブ》の効果で墓地に送られたカードは、
《邪神アバター》。……まさか、切り札が落ちるとは思っていなかった。

だが、これでいい。
今は、あまり重いモンスターが手札に来ても困る。

それに、アバターは斎王も予測していたのではないか。
だとすれば、召喚すること自体が危険だ。

「くっ……私のターン、ドロー！
……ＴＨＥ（ザ・）　ＭＯＯＮ（ムーン）の効果は使用しない！」

使用しない――？

となると、何かしら、２体以上、モンスターを出す算段でもつけているのか？

「そして、《アルカナフォースＶＩＩ（セブン）－ＴＨＥ（ザ・）　ＣＨＡＲＩＯＴ（チャリオット）》を召喚！」

【《アルカナフォースＶＩＩ（セブン）－ＴＨＥ（ザ・）　ＣＨＡＲＩＯＴ（チャリオット）》　攻１７００／守　１７００】

「ＴＨＥ（ザ・）　ＣＨＡＲＩＯＴ（チャリオット）の暗示は『戦車』――。
勝利、征服を意味する正位置。暴走、好戦的を意味する逆位置。
……さあ、止めてみてください」

正位置であれば、相手モンスターを破壊したとき、
自分の場にそのコントロールを移す効果。
逆位置なら、そのまま相手にコントロールを渡す。

……どちらにせよ、関係ない。

無心のままに――俺は、宣言した。

「ストップ」

「正位置。よって、ＴＨＥ（ザ・）　ＣＨＡＲＩＯＴ（チャリオット）は、
戦闘でモンスターを破壊したとき、
自分の場に特殊召喚できる効果を得ます」

ＴＨＥ（ザ・）　ＣＨＡＲＩＯＴ（チャリオット）の攻撃力は、
フィールドとＴＨＥ（ジ・）　ＥＭＰＥＲＯＲ（エンペラー）により、２７００。

スターダストを超えた――か。

となれば、あの場面でムーントークンを生成しなかった理由は、
恐らくはスターダストを奪い取るため、か。

「あなたのそのドラゴンはいただきます。
ＴＨＥ（ザ・）　ＣＨＡＲＩＯＴ（チャリオット）で、スターダスト・ドラゴンを攻撃！」

迫りくる光線。
スターダストを奪わんと伸びる腕。

一撃。
ただの一撃で、俺は敗北する。

だけど。　／　――だが。

こんなところでスターダストを奪われてやる気など毛頭ない。

――こんなところで敗北する気は微塵も無い。

何度だって壁を乗り越える。

――何度だって壁は打ち砕く。

俺は、俺のままに皆のところに帰る。
それが、俺の決意だ。

――俺は、俺のままに皆を助けなければならない。
――それが、あいつと交わした約束だ。

……だから。

「退(ど)いてろ――俺の道だ」

ここから先は、「俺」の道だ。

一歩たりとも進ませない。

「伏せ(リバース)カード、オープン！　《イージーチューニング》！
俺の墓地のチューナー1体を除外し、その攻撃力分、
俺の場のモンスターの攻撃力をアップさせる！
《カオスエンドマスター》を除外し、１５００、
スターダストの攻撃力を上昇させる！！」

「ばっ……馬鹿な！？」

馬鹿なことなど、何一つとしてない。

「馬鹿な、と言うなら考えてみろ。
何故、俺は他のカードとの関連のある《太陽の神官》を除外した？
本来であれば、あのカードを除外する理由は何一つない。
《カオスエンドマスター》を除外すれば、それでよかったんだ」

太陽の神官は、《赤蟻アスカトル》、及び《スーパイ》と、

それぞれ絶妙なシナジーを発揮する。
墓地に存在する場合には《赤蟻アスカトル》が。
デッキに存在する場合には《スーパイ》が。
いずれ再利用することを考えるなら、《太陽の神官》は墓地にあるべきだ。

だが、俺は、インティとクイラのループが断ち切られることを、心のどこかである程度予測していた。
こいつ相手には、さほど長くはもたない。
だからこそ――《イージーチューニング》の存在に賭けた。

「俺は負けない……！　負けられないんだ！！
迎撃しろ、スターダスト！！」

４０００の攻撃力。
それを乗せ、スターダストの翼が風を巻き起こす。
光は屈折し、その矛先は自らに向かう。

「ぐおおおおっ！？」

ダメージは１３００――。

だが、これで終わる。

奴の手札はすでにゼロ。

フィールドに伏せ（リバース）カードは存在せず、

場のモンスターも今のスターダストには及ばない。

墓地で発動する効果のモンスターも存在しない。

破壊効果も、除外効果も使えない。

ならば、もはや、奴はターンを終了するしかない。

ギリ、と歯噛みする音が聞こえてくる。

未来なんて、見通せない。

斎王の未来予知。そんなものは、ただのまやかしだ。

そして――俺たちの、知識。

それは、ただの指針だ。予知ではなく、予測。

当てにはならないし、当てにしてはいけない。

「運命は変えられる……！
お前がどんな運命を見通したのかは知らないが、
そんなもの、何度だって打ち砕く！
さあ、エンド宣言しろ、占い師！！」

「……ッ……ターン、エンド……！！」

「俺のターン、ドロー！」

終わらせる。
勝って――終わらせる！

「――バトル！！　スターダスト・ドラゴンで、
ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ（ジ・エンペラー）を攻撃！
奔（はし）れ――シューティング・ソニック！！」

超高速の、凝縮された音波が、ＴＨＥ（ジ・）　ＥＭＰＥＲＯＲ（エンペラー）を消し飛ばす。

ただ、一撃――それで十分だった。

斎王のライフがゼロとなり、
デュエル終了の音声が鳴り響く。

「俺の――勝ちだ……！」

小難しい口上は必要ない。
ただ――単純（シンプル）な、勝利宣言。

それだけでも、俺にとっては――ある意味、大きな前進と言えた。

＊　＊　＊

「……いやあ、さすがデュエルアカデミアの生徒。
お強いことで」

デュエルが終了し、直後。
斎王は、「外行き」の仮面を被り、俺に語りかけてくる。

「……」

俺は返答しない。
あるいは、この会話で何か、
マズいことが起きる可能性だってあるからだ。

「ふむ……しかし、運命を打ち破る、ですか。
豪語したものです。であれば、こんなものはいかがでしょう？」

と、斎王は2枚のチケットを俺に手渡す。
1枚は、船のチケット。
アカデミアと本土の行き来を可能とするチケットだ。
もう1枚は――プロのデュエルの観戦チケット。
そこに記されている名前は――カイザー、亮。

「彼に出ている暗示は、正位置の『塔』。
崩壊、悲劇を現す最悪の1枚です。
……この運命をも、打ち破れますか？」

その暗示――俺は、少なからず理解している。

その先にある出来事を。
それ以前にあった出来事を。
そして――これから、カイザーに起こる出来事を。

「当たり前だ。……運命なんて、偶然という概念を、
聞こえが良いように言い換えただけだ。
予測は、外れることの方が多い。
打ち破るさ、そんなもの」

ああ――打ち破ってやるとも。

今までは、何もできずに……いや、
「何もせずに」、ただ手をこまねいていた。

だが、こうして選択肢を与えられた以上は、選ばなければならない。
動くか、動かないか。

動く、動かないにかかわらず、この先、様々な出来事があるだろう。
だが、俺は最善の方法を探りたい。

最善の――皆が笑って終われる、そんなエンディングの方が、いい。

だから、俺は選び取る。

カイザーを地上に引っ張り出す可能性を持つ選択肢を。

可能性が低い？

知ったことか。

俺はこれ以上、見て見ぬふりして関わり合いにならないことは選択しない。

手間も暇も惜しむものか。やってやる。

偽善だってかまわない。

ただ、これ以上、脇役だなんだと理由をつけて、物語に関わろうとしないことはやめた。

スターダストを召喚したのは、ある意味でその決意表明のためだ。

「ふ……その答えが嘘とならないよう、願っていますよ」

そう告げ、斎王は俺に背を向けて去って行った。

あとに残るのは、俺だけ。

デュエルディスクを展開したままに、道端にたたずむ男。

第二の武蔵坊弁慶と取られても、あるいはおかしくないかもしれん。

疲れた、と、自然に言葉がこぼれる。

疲れた。

何で斎王とこんなタイミングでエンカウントするんだよ。

イベント戦でもないだろうに。

いや、俺にとってはある意味イベント戦か。

勝ったからいいけど……これでもしも負けてたら、

俺、多分光の結社の尖兵にされてたよな？

勝ってよかった！！

負けないでよかった！！

しかし――そうなると、出てくるのが新たな疑問だ。

果たして、本当に光の結社の尖兵とされてしまうのは誰なのか――？

万丈目――。

いや、それはない。

あいつは、言うなれば主人公の一人だ。

光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）の存在もあるし、

そうそう負けることはありえないだろう。

斎王も、それは承知のはず。

となると、誰が――？

明日香か？
いや、順序としても、それはおかしい。
何か、明日香に関連のある人物――。

駄目だ。思い浮かばない。

仕方がない。
一旦考えるのをやめておこう。
これ以上考えても、目新しい考えは出てこない。

「スズ」

『あ、はい』

呼びかけると、背後からスズが顔を出した。
どこから出てくるんだお前は。

「……俺の目、どうなってる？」

『……？　出会った時と同じですよ？
でも、そういえばさっきは、右側も赤かった気がするです』

……錯覚、かもしれない。
ただ――二人も、同時に同じような錯覚に陥るものか？

いずれにしても、原因を究明する必要はある、か。

「……そうだ、スズ。とりあえず、六条――。
……女子寮にいる、水色の髪でサイドテールにしてるアホを、
ここに呼んできてくれないか？」

『え？　……な、何でです？』

「いや、だって俺、男だし。
……こんな朝っぱらから女子寮に行くわけにはいかないって」

また委員長に変態扱いされてしまう。

「ついでに言えば、そいつは女子の中では多分、
唯一精霊が見える人間だ。だから、行けば間違いなくわかる」

『場所が、分からないです……』

「アレ」

と、俺は、巨大な建造物を軽く指差した。

最近、どうにもアカデミアの内部に慣れてきたせいか、
ああいった巨大な建造物でさえ、当たり前のように思えてきたから
困ったもんだ。

「……悪いけど、行ってくれると助かる。
俺はしばらくこの場で待ってるから」

『分かったです』

そう言って、スズは女子寮の方へと飛び立って行った。

想像以上に溜まった疲れが、眠気を誘う。

連日の睡眠不足と、加えて、このデュエルによる精神的な疲れ、か。

眼を開けていること、それ自体が面倒だ。

億劫というか、面倒と言うか。

俺は、近くの木の幹に腰かけた。

負けてもいい勝負なんて無かったが、

こんなにも「負けたくない」勝負は、ある意味で初めてだったように思う。

それに加えて、斎王自身の能力――「未来を見通す」こともあるし、かなりキツかったという点についても、まず間違いないと思う。

六条を呼んでくるまで、しばらく眠らせてもらおう。

＊　＊　＊

六条有珠は頭が悪い。

頭が悪いというよりかは、「勉強ができない」とすべきだろうか。

とにかく、彼女にとって、学校の勉強と言うものは、

常に忌むべき宿敵であり、嫌悪の対象でもあった。

とはいえ、その思考能力は、転生前の経験も含めれば、

十分に成熟しているとも言えなくもない。

単に、「勉強」ができないだけなのだ。

できないからやらないのではなく、やらないからできない。

恐らくは、授業を真面目に受けていれば、
それなりに高得点が期待できるのだろう。
しかし、有珠にとっては「面倒」で、それ以上の理由は必要ない。
だから――やらない。

そもそも、この世界ではその必要が無い――と、
間違いなく、彼女はそう答えることだろう。

そして、それは普段の生活が原因とも言える。

授業中によく寝る。
これは、普段寝不足であるからだ。

では、何故寝不足なのか？

同室で過ごすレイにとってははた迷惑な話だが、
有珠の夜の過ごし方は、大雑把の一言だ。

決まった時間に睡眠を取るのではなく、
それこそ、適当に――遊びに飽きた頃に眠る。

彼女の部屋にはパソコンが1台設置してある。

ノートＰＣではなく、タワー型のデスクトップＰＣ。
それも、改良を施し、マシンパワーを著しく上昇させた逸品だ。

何に使うのか？
簡単だ。要するに――趣味、である。

ゲーム、漫画、動画、作業。あらゆる物事を行う。

１８禁、一般、百合、薔薇、被虐、加虐、
グロ、エロ、感動、恋愛、戦闘、ＳＦ、魔法少女ｅｔｃ。

そういった、いわゆる趣味の世界に没頭しすぎるためだ。

連日連夜、「フヒヒヒ！」なる奇抜な笑いや、
「キタ――――（・∀・）――――！！」なる奇声を発する。
まだ年齢的に若いレイは気にせず眠り続けるのだが、当然、
隣室の人間はそれを気にして眠ることができない。

そういった風に過ごすからか、就寝時間は、ほぼ3時を回った頃。
最も遅いときには、５時前に床に就くこともある。しかし、その頻度も多い。

故に、有珠は眠っていた。

すごくだらしなく。

普段、横にまとめた水色の髪は全て下ろしている。
それだけならまだいいと言えるだろう。

が、思い切り腹を出し、何事かを寝言で呟きつつ、
思い切り布団を横に蹴り飛ばしたその姿は、
どんなに顔が良くても「だらしない」というほか無い。

御堂が言うには、「残念な美少女」。
あながち間違ってはいない。

現在の時刻は１０時。人によってはまだ眠る者もいるだろうが、
一般的には既に「昼」に差し掛かっている時間帯だ。

たまの休みくらいは眠っていたい、という要望もあってか、
レイは基本的に、授業日以外で有珠を起こすことは無い。
というよりも、起こせば不機嫌になるので起こさない、というのが
妥当か。

『はわ……困ったです』

スズは、見下ろしながら呟く。

御堂に頼まれてやって来たはいいが、
対象が眠っているのではどうしようもない。
起きるまで待つ、というのは、流石に気が長い話だ。

どうしよう？

そう思っていた折に、何者かが部屋に入ってくるのを感じた。

レイは今、諸事情によって部屋にいない。
というのが、彼女の友人が、頻繁にレイにデュエルを仕掛けてくるからだ。
具体的には、海野幸子や宇佐美彰子なのだが――余談である。

レイのデッキには、他のデッキには無いような速攻性と、場を一気に制圧するような展開力がある。
故に、その実力は屈指。挑戦者も、後を絶たない――というわけだ。

つまり、彼女がこの場に戻ってくることはまず無い。
そのはずなのだが――。

『？』

少女と思しき人影が、スズの横を通り過ぎて行った。

スズにとっては、ほとんどあらゆる人間が初対面である。
しかし――なぜか、その人影からは、
他の人間とは違う、異質な雰囲気を感じ取った。

人ではない。

そんな、奇妙な思考に襲われる。

実際、その人影は、アカデミア本校の島内においては、
明らかに異質な格好をしていた。

まず、制服を着用していないこと。

これは、別段ありえない話ではない。
そもそも、万丈目に関しては、本校の制服ではなく、
ノース校の制服を着用しているし、教員にしても、
その服装は比較的自由だ。

しかし、ソレはそういったレベルの問題ではなかった。

ノースリーブ、ハイネックの黒いインナー。
白いショートパンツに、黒いニーソックス。

一般的に見れば、それはかなりマニアックで、
見る人が――というよりも、有珠が見れば、
間違いなく「うひょー！！」などと奇声を上げていることだろう。

ただ、あくまでそれは一般的な服装だとも言えた。
少しばかりマニアックなだけである。

しかし、その異様さはここからだ。

ロングコート。

雪でもなく、冬でもない。
寒いわけでもなく、むしろ暖かい気候だというのに――それは、丈の長い、黒いロングコートを羽織っていた。

そして、その髪は雪のように白く、長い。
かと言って整えられているような様子は無く、前髪も非常に長いため、容姿の判別はできない。

線が細く、華奢で小柄。
比較的、生徒の中でも小柄な有珠と比べても随分小さい。
とはいえ、スズと比べれば、流石に多少は年上という雰囲気も、ないわけではないが……。

誰だろう？
スズは思考する。
だが、答えは出ない。

『？』

ふと、少女の人影が、自分の方を向いたような錯覚にとらわれる。
しかし、見れば少女は有珠の方を向いていた。

「ふひひひ……おっぱいおっぱい」

何事か奇怪なことを呟きつつ、幸せな顔で眠る有珠。

少女は、そんな有珠の枕元に立ち――。

『あっ』

思い切り、頭を蹴り飛ばした。

「あだあああぁぁぁぁぁぁあ!?
な、ぬぁ、なぬな、な、何事!?」

ぶんぶんと頭を振って周囲を見渡すも、人影は――無い。

『――え?』

既に、少女の影は消え失せてしまっていた。

そのことに、少なからず衝撃を隠せなかったスズが、わずかに声を上げる。

「え？　……ゑ？」

誰もいないことに首を傾げ、有珠は眉根を寄せた。
そして――。

「……えっと？」

『ふあ』

スズの姿を捉え――にや、と唇の端を釣り上げた。

「犯人☆発見――――――！！」

『人違いなのですぅぅぅぅ！！』

そうして数分の間、彼女らは追いかけっこを続けていましたとさ――。

＊　＊　＊

「……で、先輩の精霊？
なぁ――――にふざけたこと言ってんですか。
あの先輩がセームベルの精霊なんて、
そんな羨まけしからんことあるわけないでしょ」

『でも、事実なのですけど……』

「日常生活ではかなりのスペックを発揮してても、
デュエルも、決して強者と肩を並べるほどじゃないし、
普段の運は限りなく低い先輩が？
うっは。冗談もいいとこですって」

あれから、十分近く。

延々と有珠は否定の言葉を吐き続けていた。
しかし、事実なのだからスズにはどうしようもない。

ともかく、早く御堂の頼みを終わらせなくては。

『と、ともかく、カズマさんが待ってるのです。
早めに来てくれると、ありがたいのですけど……』

「うぇーい？　でもなー。そんな緊急事態なんですかね？
でもなけりゃ、私は行きませんぜー」

いつになく不機嫌だ。
それを知らないスズとしては、こんなに不機嫌――というか、
どことなく投げやりな人もいるのだな、と考える。

『はわわわわ……でも、結構疲れてたから、
もしかすると眠っているのかもしれないのですよ。
あの占い師さんとデュエルして、眠そうだったし……』

「占い師ぃ？　占い師？　占い……うら、な……」

あ、と有珠は思い出したように口を開いた。
そして――額から、嫌な汗が流れ出す。

占い師――それは少なくとも、

彼女にとっても無関係なことではないからだ。

「それを早く言ってよぉぉぉぉぉ！？
ちょ、ヤベぇ！！　斎王じゃないですか！？
うわあああああ早く行かないと折檻食らう！！」

『え？　え？』

「え？　じゃないですよもおおおおお！
早く（ハリー）！　早く（ハリー）！　早く（ハリー）！！
さっさと案内しなさい！」

『は、はいいいいい！』

超高速の着替えの後に髪を括り、
有珠は部屋から飛び出した。

先導するスズを追い抜かんとするような速度のまま、
有珠は走り続ける。

恋情？　親愛？
そんなものではない。
――ただ、恐ろしいからだ。

御堂の折檻が。
軽率な発言をしてしまう自分自身が。

故に、御堂との約束は破れない。
破れば、恐ろしいことになるだろうことは間違い。

「……発見？」

発見はできた。
しかし、有珠の口から発せられたのは、疑問形の言葉。

それが確かに御堂であるのかどうか、何故か確証が持てないのだ。

普段以上にその存在感が薄い。
というよりも――存在が希薄だ。

感覚ではなく、実体。

その外見が、何故か――ブレたように見えた。

砂嵐（ノイズ）が混じったような、奇妙な錯覚。

眼を擦り、再度御堂を見据える。

しかし、既に、そこに存在の希薄さなど感じられなかった。

――何だったのだろう？

生じる疑問が頭を埋めても、その答えが出るような気はしない。

まあいいや、と軽く考え、

有珠は木の幹にもたれかかって眠っている御堂に近づいた。

「しかし、こうして見ると、
本当に年齢相応ですよねー」

実年齢はともかくとして、

外見的にも、肉体的にも、年齢はまだ十代中盤の少年だ。

髪が長くオッドアイであることを差し引けば、

ごく普通の少年のようにも見える。

『起こした方がいいと思うですけど……』

「別にいーんですよ。

はぁ。しかしこうして見ると、やっぱ女の子っぽいですよねー」

ともすれば、女性の明日香よりも長いのではないかと思うほどに長い髪や、
あるいは、カミューラに少し弄られたという顔型。

普段の無愛想な表情を見れば完全に男だが、
こうして無防備な姿を見ると、多少ならず錯覚してしまいそうな趣（おもむき）すらある。

「……よおしいたずらしてやれぇ」

『なんでなんです！？』

「はっ。これだから常識にとらわれてる者は。
……イジりがいのある人が寝てたら額に『肉』。
最高に愉しいじゃあありませんか？」

『思わないです！』

どこから取り出したのか、
有珠は一本のペンを握り、御堂へとにじり寄る。

そして。

「いい度胸だな、六条――」

ガシッ、と。寝ているはずの御堂に腕を掴まれた。

「――は、あは、あはははは!?」

「何をしようとしていた？　このペンは何だ？　いろいろと聞きたいことはあるが、まずは――」

ちょっとそっちで長いおはなししようか？

実質的な死刑宣告が、有珠の耳に聞こえてきた。

＊　＊　＊

「……ええと、つまり、斎王が襲撃しに来て、
それを先輩が撃退したって認識でいいんですね？」

「おおむね間違いない。
……と言っても、俺の場合は、
奴にとって予想外のことをしでかしたからこそ、
こうして生き残ってるわけなんだけどな」

「しでかしたって……まさか、ダッさんでも出したんですか？」

「……」

否定できねえ。
というか、否定する内容じゃない。
まったくの事実だ。

「はぁ……なんか、ありうるありうるとは思ってましたけど、
やっぱり先輩の持ってるカード、スターダストでしたか。
ケッ、主人公主人公」

「何でそんなにやさぐれてるんだお前は。
地獄にでも落ちる気か」

「先輩、私と一緒に地獄に落ちましょうよ」

「パーフェクトもハーモニーもあるんだよ。

奇跡も魔法も存在しないがな。
さて、そういうことで――だ」

俺は2枚のチケットを、それぞれ六条に見せる。
島から本土への往復チケット。
そしてもう1枚は、カイザーの試合の観戦チケットだ。

「明後日から数日間、本土に出向く。
目的は……言わずとも、理解できるな？」

「カイザー亮を引っ張り出す、ですか」

ああ、と肯定の意を示す。

生憎と、チケットは一人分しかない。
いや、ある意味、俺にとってそれは好都合だと言えよう。

「……事情が分かってるなら、話は早い。
さっきも言ったが、俺は数日間、島を留守にする。
その間に、斎王が来ないとも限らない」

「つまり、警告ってとこです？」

「それもあるが……唯一、この先の出来事を知っている以上、協力してもらいたい、っていうのがあってな」

「協力、ですか？」

普段の俺の行動からすれば、それは十分に異常と言えるかもしれない。

だから、これは一種の賭けだ。
俺が普段六条にしている仕打ちを考えれば、断られても仕方のないことでもある。
だけど、この状況で――斎王のことを知りうるのは、唯一、この先の出来事を知る俺と六条のみ。
だから、俺に頼れるのは六条しかいない。

カイザーのところに六条を仕向けるというのは、あまりに現実味が無く、何よりも無駄であることは言うまでもない。
カイザーと面識があるのは俺だ。
わずかでも、知っている人間が行った方が、カイザーを引きずり出すのには都合がよい。

「……俺がいない間、レイを……いや。
レイだけじゃない。あいつの周囲を、
俺の仲間たちを、守ってほしい」

「は……？」

予想だにしない言葉だったのだろうか。
眼を丸くして、六条が驚きに声を発する。

「い、いやいやいや、ちょ、先輩？
冗談、ですよね……？」

「真剣だ。お前と会話をする場合において、
初めてと言えるくらいには真剣だ」

「……マジですか……」

何をそんなに悩んでいるのだろう？
断るのなら、きっぱりと断ると言えばいいのに。

「頼む、六条。俺には今、頼れるのがお前しかいない。
……少なくとも、お前の実力は信用できるし、信頼してる。
だから――頼む」

「……」

頭を、下げた。

普段と決定的に違うのは、俺が頭を下げる理由。
謝罪でも、挨拶でもなんでもない。

純粋な――懇願。

「分かりました」

その声が聞こえた瞬間、俺は顔を上げた。
六条の表情に映る感情は――言うなれば、喜悦。

「えらく殊勝な姿が見れましたんで、正直グッと来ました。
うひひひひ。つーわけで、不肖六条有珠、
その任務、承りました！」

「……」

何でだろう。俺は今、この人選をすごく後悔してるんだが。

こいつだと無駄に死亡フラグおったてて、それを他人に被せそうで怖い。
主に、三沢とか。

大丈夫かな、あいつ。
そういえば万丈目に負けて白くなる予定だったけど、
こっちではどうなるんだろう。そもそも白くならないとか？
だとしたら、メインキャスト総生き残りで結社と決戦か。
めちゃくちゃ燃えてきたぞ。

「まあ、頼んだ。……それよりスズ、大丈夫だったのか？」

『あ、はい……ちょっと、追い掛け回されたですけど』

「……ちゅーかそものセームベル、
本当に先輩のカードの精霊だったんですね」

「お前も言うか」

一番驚いたのは俺だけど。

「……とりあえず、今日は一旦帰って準備をしてくる。
小旅行みたいなものだ。着替えやらも必要だろうしな」

「了解です。んじゃ、あとは任されましたぜ！
うひひひ！」

どことなく小悪党のようなことを吐きながら、
六条は女子寮の方へと走って行った。

「――さて」

明後日とはいえ、出立は早い。
可能な限り、今できるだけの準備をしよう。

そう考え、俺も自室へ戻るべく、足をブルー寮の方へと向けた。

＊　＊　＊

人生と言うものは唐突なものであるというのは俺の持論だが、
果たして、あまりに唐突に、連続して異常な出来事が起きる、
というのは、人間としてどうなのだろう？

「おかえり」

俺が部屋に戻ってきた瞬間に見たのは、
まるで、色あせたような色彩の――黒く、白い少女だった。

まるで、そう告げるのが当然であるかのように、
「おかえり」とそう告げて。

――少女は、まるで鏡合わせのように。
――左の黒い瞳と、右の赤い瞳で、俺を見据えた。

37束目：星屑（後書き）

「今回のキーカードは《スターダスト・ドラゴン》。
攻撃力は２５００。守備力は２０００。
レベル８のシンクロモンスターであり、
生贄に捧げることで相手の破壊効果を無効にする能力を持つ。
更に、この効果を使ったエンドフェイズには復活する。
能力値に関しては同じレベルのモンスターに一歩劣るが、
その優秀な効果と、容易な召喚条件を持っていることから、
シンクロモンスターの教科書のような存在ではある。
外見の美しさも相まって、現実にも人気のあるモンスターだ。
派生モンスターも多いし、それを活用するデッキを組んでも面白いと思う」

ということで、今回からキーカードを表示することにしました。
最初なのでスターダストです。ここでキモとなるのは、
「最強」カードではなく「キーカード」な点です。
「最強」となると制約も厳しいので、こういった形式を取らせていただきました。

ちなみに私の周囲では、一時期スタバの高速召喚に特化したデッキが流行ったこともあり、バスターモードを見ることが地味にトラウ

マと化しています。
ＨＥＲＯデッキを使い始めたあたりでめっきり見なくなったわけですが。
お触れ３積み超融合２積みが堪えたんでしょうか（

さて、本編についてですが、今回から急転直下な内容となってまいりました。
この「少女」についてですが、現在は色々と設定が込み合っていて、実は御堂にとっての重要人物になる予定です。
六条が重要人物じゃないわけじゃないんですけどね；

さて、そんなわけでカイザー救出作戦始動です。

次回は違う話をする予定ですが、
近いうちにＶＳカイザーをお届けできればと思っています。

それでは。

38束目：残滓（前書き）

あとがきミニドラマを含めて色々とやりすぎた。
反省も後悔もしているが、今後のためと思って見過ごしていただきたい。

え？　ダメ？

ギャアァァァァァァ（ｒｙ

38束目：残滓

「おかえり」と。

そいつは、俺に向かってそう呟いた。

あくまで、呟いた、という表現に留めておく。

俺に向かって言ったと思しき言葉でありながら、
その声からは、感情らしい感情が窺えない。

力なく発せられた一言。
その意味を理解しようにも――分かるはずはない。

何故、俺は初対面の少女に、こんなことを言われなければならないのか？

というより、何故この少女は、
あたかも俺の部屋にいることが当然のように、
ソファの上に体育座りをしているのか？

陰鬱な雰囲気を漂わせながら、再度、少女は口を開く。

「おか……えり？」

「何で疑問形だよ」

かくん、と首を傾けて、少女は俺を見つめる。

白髪の間から覗く目の色は、
俺とは正反対の――しかし、同種の赤と黒。
それだけでも十分に異様ではあるが、
それ以上に異様なのは、その風体。

まず、この島の中にいるというのに、制服ではないという点。
外見的には、かなり大人びているという点を除いたとしても、
レイと同じか、少し下という程度だろう。

当たり前に考えれば、恐らくは生徒本人。
この島自体、かなり閉塞的なこともあってか、
生徒と教員以外の人間がいることなど、そうはありえない。
となれば、生徒と考えるのが自然だろう。

しかし、この少女は制服を着用していない。
代わりに着用しているのは、色彩の感じられない、
どこかちぐはぐな着衣。

黒いハイネック、ノースリーブのインナーに、
同色のロングコート、ニーソックス。
唯一、彼女の穿いているショートパンツだけが白い。

寒いのか暑いのかすらも、よく分からない。

体温の調整ができないのだろうか……と言うと、変温動物のようで、流石にイヤだが。

「それとも。……久し、ぶり？」

「……はぁ？」

言うまでも無く、この少女と俺は初対面だ。
だというのに、何故「久しぶり」なのか。
その意味を図りかねていると――唐突に、背後からスズが声をかける。

『……カズマさん、何してるですか？』

「いや、何って、会話――」

『あの……相手、どこです？』

「え？」

いや、いやいやいやいや。

いるから。ソファに座ってるから。
というかスズの目の前にいるから。

何で気付かないんだ？

「無駄」

「……！？」

「精霊……。結局、この世界のもの。
隔絶、存在……以外。視認、不可能」

「……何を言って……」

「……。この、世界のものでない、なら。
見える――という、だけ。
つまり」

この世界の人間とは違う。

暗喩ではなく、直喩。
一切の躊躇も遠慮も無く、遠回しな言い方でもなんでもなく、
ただ、少女は――俺が、この世界のモノでないことを、告げた。

はっ、と。乾いた笑いが漏れた。

――そんなこと。

「とうの昔に気付いてる。
……今更、言われてもな」

『えっ？』

「こっちの話だ」

――そう。

もう、俺はとうの昔に気付いている。

俺は、この世界のモノではない。

まったく隔絶した存在という訳じゃないが、
この世界に馴染めば馴染むほど――以前の「俺」は消えていく。

だからこそ、俺の精神はこの世界に馴染みきれない。
馴染もうとするよりも先に、どこか、無理が生じてしまうのか――。
そのたびに、俺の脳みそはどこか壊れていく。

確かに俺は、この島に来るまでは、

これから起こるであろう事象の全容を、事細かに理解していたはずだ。

常に、これから起こりうることを反復して考えていた。
将来起こること。これから起こること。
あるいは、今現在起きていること。

そういったことを常に頭の中でめぐらせ、
忘れないよう努めてきて――実際に、忘れていなかったはずだ。

だが、今はその概要程度にしか思い出せなくなっている。

一か月後など、少し先に起こる出来事が思い出せなくなって来た、というのは、一年前の話だったか。

だとしたら、かなり症状が進行していると見てもいいだろう。

今年に入ってからというもの、どんなに頑張ってみても、これからの展開が――正確には、その詳細が分からない。

例えば、これから斎王がやろうとしていること。
光の結社を作り出すため、多くの生徒を洗脳する。
アニメでは、まずは万丈目から――だった。

では、その先は？

明日香が洗脳され、三沢も洗脳され、
その後、万丈目を最初に。次に明日香を十代が救い出す。
とある人物とのデュエルを機に、三沢も救い――。

確か、それだけじゃない。
それ以前にも、何かあったはずだ。
カイザーのヘル化。それ以外の出来事が、何か。

そういった「何か」を、思い出すことができない。
それは、俺がこの世界に馴染もうとすることの証明でもあり、
また、同時に――俺が、一切この世界に溶け込めていない証明でもあった。

「……」

「聞きたい、こと。……あ、る？」

ある。というよりも、多すぎる。

俺は、それとなく頷いて見せた。

とはいえ、スズがいたら、話もしづらい――か。

「悪い、スズ。少し席外してくれないか？
俺、少しばかり着替えるわ」

『はわわわ……わ、分かりました！
しばらく外に出てます！』

と、そう告げて、スズは赤面したままに、
恐ろしいまでの勢いで廊下に飛び出していった。

部屋に残るのは、俺と少女だけ。

……互いに、互いを認識し合うことのできる者だけ。

「……お前は、誰だ？」

「だれ……。わたし？　それとも――われ？
あるい、は、われわれ？」

駄目だ。要領を得ない。

一つ一つの言葉も、どことなくぎこちないし……。

いや、待てよ？

確か、俺はこんな会話を、どこかでしたはずだ――。

具体的には、去年。

俺が、十代たちを捜しに行った、そのとき。

「……あなた？　の、語彙（ボキャブラリー）から、その名前を、告げる……と、したら。……――群体（レギオン）？」

「……――っ」

やはり――か。

くそ、いつの間に侵入を許した？

いや、だとしても、俺に対して危害を加えない理由はなんだ？

こいつの目的は？

分からない。何もかもが、分からない。

「……」

「そんなに、見ても……敵意、は。無い」

「……信用できると思ってるのか、その言葉を」

「信用……して。もらう以外に、無い。
そも、そも……『御堂和真』という人間の死は、
……ここにいる、『わたし』？　という、個体の死を意味、する」

「――？」

それこそ意味が分からない。
何故、俺が死ねばこいつが死ぬと言うのか？

「……先程の、衝撃。……《スターダスト・ドラゴン》の、召喚。
あのせいで、『わたし』？　という個体の、本体との接続が途切れた」

「スターダストを召喚したことが……？」

こくん、と首を倒し、少女は語り続ける。

「歴史を、変えるだけ、の……力。歴史、を……刻む、だけの力。
……世界を、改変するだけの……力が存在すると、、
あなたの、言う――群体（レギオン）？　が、発生、する」

「……」

つまり、俺たちがこの世界に存在することで、
奴らは存在し続けるということ、か。

現段階で、転生者――世界の壁を破って来たのは、
俺と六条の二人しか確認されてはいない。
逆に言えば、その分だけの群体（レギオン）が存在しているということでもある。

「……だけど、４回、の……衝撃が、加わって……。
結果的に、端末……の、『わたし』？　が、本体、と、切り離された」

「一人称の後に疑問符は必要ない。
……しかし、４回だと？」

六条のレッド・デーモンズ・ドラゴンの召喚。
俺のスターダストの召喚。

それ以外に、何かあったか――？

「……『邪神』」

「……！」

あれも含まれる――か。

2度の邪神の召喚。

それも、世界に与える影響は、少なからずあったということか。

よく考えてみれば、それはあたりまえかもしれない。

邪神は、そもそもペガサスが死亡している「正史」――。

つまり、原作の側でのみ存在しているものだ。

その存在が語られてすらいないGXの世界に現れること、

それそのものが負担になっても、あるいは仕方のないことか。

「仕方なく、霊体のまま、で……飛び回って、たら。

都合いい、人間がいて。……そのまま、

『情報』をコピー、して、形を、作った」

「……その都合のいい人間ってのが――」

「……」

す、と指を動かし、少女は俺を示した。

……やっぱり、俺か。

そりゃそうだ。

常に、非常識なカードが召喚される場にいたんだ。

その場で適当な人間に――と思っても、

俺しかいないんじゃあ、どっちにしたって結果は変わらない。

「……情報、ってのはどういうことだ？」

「……身体情報。記憶。経歴。……あらゆる、情報を、

コピーして、反転、して。そのまま、張り付けた。

……言うなれば――反転？」

「……気持ち悪いな。同じ人間が二人もいるってことだろ？」

「違、う。……あくまで、『反転』。複写ではなく、『反転』。

読み取った、あらゆる情報を、そのまま裏返した。

性別も、体格も、特徴も。……存在、も」

――！

そうか。だから、こいつは俺以外の人間からは――いや、この世界の住人からは見えない。
いや、見えないだけじゃない。
存在そのものが、「無い」んだ。

「俺」が存在している以上、こいつは存在していない。

それ故の――「反転」。

言うなれば、俺が女で、この世界で過ごしていたら、という可能性の顕現、といったところか？

いや、だとしたら少々おかしい部分が多いが。

「……より、正確には。身長、体重。
……容姿も含め、あなたの記憶から、抽出した、もの、だけど」

……ああ、なるほど。

身長はイヤに低いし、体重だって、恐らくはそんなに無いだろう。

見た目も幼いし――。

――そして何より、「あいつ」に似てる。

……いや、忘れろ。
そんなことはありえないし、あるはずがないんだから。

いつまでも覚えているのは構わない。
ただ、拘泥しすぎるな。

罪はいつまでも消えない。
だからこそ、他人を償いの道具にしてはならない。
同一視は、何よりも忌むべきことだから。

顔が似てるのは当たり前だ。俺の記憶の中から作り出したんだから。
記憶の奥の奥に焼き付いたものを、そのまま使ってもおかしくはない。

こいつは、誰でもない。

誰でもないんだ。

「……って、ふと思ったんだが、お前はいつから俺に憑いてた？」

「……今年、入学式、あたり？」

「お前……もしかして、パックを買うとき、
5つ買えって指示してないか？」

「……した」

こいつか。
……なるほどね、こいつが、スズと俺を引き合わせたのか。

そういう点においては感謝すべきかもしれんが、
もう少し聞きたいことは残っている。

「あんなことをした理由はなんだ？」

「……精霊、を。望んで、いた？　から」

望んでなかったわけじゃないが……。
まあ、確かに、十代や万丈目を、少なからず羨んだことはある。
精霊を見ることはできるのに、精霊のカードを持っていない。
それが、多少のコンプレックスに、ならなかったわけじゃないし。

「質問を変えよう。お前は、俺以外の人間から見えないのか？」

「……多分」

実質的には、俺にしか見えない、ということか。
いや、俺と似た境遇にある六条なら、あるいは――というところだろうが。

「スズにも見えないってことか……。
くそ、不便なことこの上無いな」

「別に……見えない、わけじゃ……ない。
精霊、なら……少し、位相をズラせ、ば……」

「悪い、何言ってるのか全く分からない」

というか、位相がどうのと言われても、
お前はどこにワープするんだ、としか言えないわけだが。

「……精霊、と。われわれ、は……少し、
霊体、という、意味で……似てる、けど。
その、存在の次元には……隔たりが、ある。
けど……その、次元の隔たり、を、少し、いじれば」

「精霊にも、お前の姿が見えるってことか」

不都合――は、無いでもないが、
スズからは、俺が独り言を呟いているようにしか見えないわけだし、
それも、考えるべきだろうか。

「ただし、あなたの周辺、だけ。
それ以外、は――無理」

「別にいいさ。どうせ、スズ以上に精霊が増えるわけでもなし。
そもそも、他人から見えたって、それこそ仕方がないだろう」

幼女を二人も連れてる男。
犯罪チックで無敵だ。三秒で通報されるぜ。
５秒経ったら即職質だ。

いや、精霊見える一般人がどれだけいるかは知らんが。

「分かっ……た」

そう告げると、少女は目を閉じた。

数秒の間。

これといった妙な現象も起きず、
はて、どういうことだろうか……と考えていると、
少女はゆっくりと目を開く。

「……終わっ、た」

「速っ！？」

「……元々、情報……を、少し、いじれば。
それで……よかった、だけ、だから」

なるほど。分からん。
まあいいや、と考え、俺は外にいるであろうスズに、
入っても大丈夫だということを呼びかける。

『あ、はい、それじゃあ、失礼しま……ふ？』

「……はろー」

無表情なままに、そんなふざけたことを告げる少女。
いや、こいつこんなキャラじゃねえだろ。

『はわわわわっ!?　ど、どなたでしょう!?
どちらさまでしょう!?　お茶は出した方がよろしいですか!?』

「落ち着け！　あと最後意味不明だから！」

「かわいい」

「お前も何気なく率直な感想を述べてるんじゃない！」

あと、お前じゃお茶は出せんだろう!?

「ついで……に。自己、紹介?　しておいた、方が……いい、かも」

「……流しやがった!?　いや、まあそれは確かにその通りだけど！」

駄目だ。この子、めちゃくちゃマイペースだ。

「……わたしの……名前。――……」

言いつつ、少女は顎に手を当てる。

……まさか、自分の名前が分からないとでも言うのか？

「どうしよう」

「やっぱり分からないのかよ！！」

「という、より……無い、と、言える。かも」

そうか。元々、この子は人間じゃない。

精霊ですらない。ただの「端末」だったんだ。

となれば、名前が無いのは、ある意味で必然。

しかし、俺のボキャブラリーじゃあ、この子に付ける名前なんて……。

「思い、ついた」

「え？」

「――イレン・フェアシーデン。……で、どう……？」

イレン・フェアシーデン――。

ドイツ語か。

Ｉｒｒｅｎと、Ｖｅｒｓｃｈｉｅｄｅｎ。

後者は「異なった」、という意味合いの単語。

前者は「間違う」という意味合いの単語――。

併せて、「異なる間違い」とでも言いたいのだろうか。

俺が言うのもなんだが、すっげえ厨二。

しかも、その二つを掛け合わせても、決して文章にはならない。

……ある意味、敵である俺のところにいて、

しかも、存在の全てが一蓮托生などと、

全体的に矛盾した存在のこいつにとっては、

丁度いい名前なのかもしれないが。

『い、イレン、さん、です？』

「イレン。……で、いいん、だっけ」

「自分で考えて名乗った名前を直後に忘れんな！？
合ってるよ！」

わざとやってんのか、こいつは！？

「……精霊に近しい存在、らしい。俺もよくは分からない。
ともかく、仲良く――とまではいかなくても、
なるたけ衝突は避けてくれると助かる」

「……助かる」

「お前は頼む側じゃなくて気を付ける側だからな！？」

いや、スズの性格とこいつの性格を鑑みるに、
衝突するようなことはそうはありえないわけだが。

しかし、この惨状――。

どうしたもんかね、本当に。

＊　＊　＊

まあ、そんなわけで困ったときの他人（ヒト）頼み。

ともかく、つい先ほど別れたばかりだというのに、
俺はまたしても六条を呼び出すハメになったのであった。

場所は、ともかく誰もいないところ、ということで、
何をするにも便利な森の中の滝の前。

適度な広さがあるため、この場所ならデュエルをするにも、
あるいは、ハイキングや密会にも最適と言えよう。
人もそうは来ないし。

「……で、わざわざ十数分前に別れたばかりの人間を呼び出す用事ってなんですか」

「のっぴきならない事情だ。
それも相当タチが悪い」

相談相手がこいつしかいないというのも、相当タチが悪いが。

「斎王以上に厄介なことなんてあるんですかって。
それとも、厨二病こじらせでもしたんですか？」

冗談交じりに言う六条。

しかし、それもあながち間違ってはいないかもしれない。
というか、半分当たってる。

「……」

ふらふらと、六条の周囲を飛び回るイレン。
しかし、六条が気付くような様子は無い。
となると、六条には見えないと断ずるべきだが……。

「……俺は以前、お前に群体（レギオン）についての話をしたな？」

「え？　ああ、まあ。はい。覚えてますよ」

「どうも、あいつらは、俺たち――本来、
この世界に存在するはずのない人間の数に応じて、

その力を増し、増えるらしいということが分かった」

「そんな特性があるんですか？
なんかそれこそ厨二病の作った設定みたいですね」

「……まあ、それはそうなんだが。
で、ついさっき、俺は群体（レギオン）の個体の一つと、
自室で出会ってきた」

「はぁ。にしては無事みたいですが」

相手に敵対の意思が無かったから――と、言えるのかどうか。
ともかく。

「今お前に告げた『設定』は、すべてそいつから語られたものだ」

「所詮自己申告でしょう？
嘘の可能性だって否定できないじゃないですか」

その通りだ。間違ってないどころか大体あってる。

俺だってその可能性は考えた。
が、今のところ危害を加えられてるようなことは無いし、
とりあえずは大目に見ている。

そもそも俺、こいつに触れないし。
逆もまた然り、だろう。

「説明……面倒、臭い」

じれったそうにしながら、イレンが告げる。

分かってる。というか順序立てて説明しなけりゃ、
誰だって何も分からないだろうに。
というよりも、俺だってほとんどなにも理解してないんだが。

「仕方が、ない。から……代わる」

は？
と、疑問の声を上げたのも束の間、
イレンが、俺の方に向かって「飛んで」きた。

「――ッ！？」

声を上げる間もなく、
瞬間的に「吹き飛ばされ」る。

痛みは無い。

だが――。

「「んなっ――――――!?」」

二人――正確には、六条と俺の声が重なった。

驚愕。
当然だろう。
何故なら、そこには。

そこには――俺と入れ替わるようにして立つ、イレンの姿があったのだから。

「せ、先輩がおにゃのこになったあぁあああぁぁぁぁぁあ!!!?」

「俺とイレンが入れ替わったあああああぁぁぁぁぁあ!!?」

「うるさい」

一蹴されてしまった。

そりゃそうだ。両面から同時に大声を出されたんだし。

「どどっどっどっどどおどどどどおおおお！？」

どういうことですか、と言おうとしたのだろうか。

舌がもつれてうまいこと言えてないぞ。

しかし――成程、こういうことか。

反転した存在。

存在そのものが、俺の真逆。

俺が存在していれば、出てこれない。

ならば、その逆――俺を霊体の域にまで落とせば、あいつが存在できる。

俺とイレンは表裏一体。

一蓮托生――か。

全く関係ないが、こんなタイミングで人外になるとは思ってなかったぞ。

「にゃー」

「喋ったあああぁぁぁぁああ!?」

喋るのは当たり前だろうが!?

「……これで、真実――だって、分かっ、た?」

「わ、わか、分かりましたけど!!　せん、せん、先輩は!?」

ああ、そうか。

イレンが見えないということは、俺のことも見えない、ということか。

ここだ、と語りかけても、六条には聞こえない。

それに対し、何か――よからぬことを思いついたのか、

イレンの口角が僅かに持ち上がる。

「ふは、ははは！。御堂……かず、かず……。カズヤは、このわたしが、あずかったー」

「カズマだ！　というか何その棒読み！？演技のつもりか！？」

「……その、方が……多分。……面白い」

現状を楽しんでやがる、こいつ！？

「……」

と、そんなことを考えていると、六条の表情が、妙に曇ってきた。曇って――いや、というよりも、真剣に。

「その話、本当ですか？」

「……」

……え？　ちょ、何コレ。
六条って、こんな声出せたの？
ちょっと怖いんですけど。

「沈黙は肯定とみなします」

「……え、と」

予想外の六条の変貌に、少々戸惑ってしまっているようだ。
うん、俺も驚いた。

「……らちがあきませんね。面倒です。
デュエルで勝負といきましょう。私が勝てば、
先輩は返してもらいます」

返してもらうもクソも、俺はこの場にいるんだが。

「……わかった」

言いつつ、イレンはデュエルディスクを――。
俺が元々持っていたものを、左腕に装着する。
対抗するようにして、六条もデュエルディスクを装着する。
そして、互いにデッキをはめ込み――。

「「……決闘（デュエル）！」」

この上無いまでに間抜けなデュエルが、今始まった。

先攻はイレン、か。
俺のデッキを使うのではないだろう。
となれば、果たして何を使うのか――。

「……ドロー。《暗黒界の斥候　スカー》を、守備表示で、召喚」

【《暗黒界の斥候　スカー》　攻　５００　／　守　５００】

暗黒界――！！

いずれ出てくるであろうカードカテゴリ。
それも、十代にトラウマを植え付けた――。

「……こういう場ならともかく、普段は使うなよ」

「……分かってる。カード、セット。終了」

最低限の言葉を残し、イレンはターンを終えた。
そして、六条のターンとなる。

「私のターン、ドロー！　私は手札から、
《勝利の導き手フレイヤ》を守備表示で召喚します！」

【《勝利の導き手フレイヤ》　攻　１００　／　守　１００】

対する六条は天使族デッキ、か。

ＶＥＮＵＳ（ヴィーナス）を持っていることを考えると、
ある意味で当然と言えるか。

フレイヤの効果は、場に存在するときに、
場の天使族の攻守をそれぞれ４００上昇させること。
当然、これだけのために出したのではないだろう。

「更に私は永続魔法、《コート・オブ・ジャスティス》を発動！
場にレベル１の天使族が存在する場合、１ターンに１度、
手札から天使族モンスターを特殊召喚できます！
場にはレベル１のフレイヤが存在しているので、
手札から、《天空騎士（エンジェルナイト）パーシアス》を特殊召喚！」

【《天空騎士（エンジェルナイト）パーシアス》　攻　１９００　／　守　１４００】

「バトルです！　天空騎士（エンジェルナイト）パーシアスでスカーを攻撃！」

「……暗黒界の斥候　スカーが、戦闘で破壊、されたとき、
デッキから、『暗黒界』と名のつく、
レベル４以下のモンスターを、手札に加える……。
《暗黒界の術師　スノウ》を、手札に……」

「知ってますよ！　パーシアスには貫通効果が備わってます！
まずは、その貫通ダメージを食らってもらいましょうか！」

貫通する光がイレンの体を貫いていく。
ダメージ値は１８００。そして、それと同時に――。

「そしてパーシアスの効果を発動！
相手に戦闘ダメージを与えたとき、
デッキからカードを１枚ドローできます！　当然、ドロー！」

貫通とドローという、二つのメリット効果を併せ持つカード。
登場当初はそれなりに騒がれもしたものだ。

まあ、今は上級モンスターであるということで、
少しばかり敬遠されがちではあるが。

「カードを２枚セットし、ターンエンドです！」

「……ドロー。魔法（マジック）カード、《暗黒界の取引》を発動。
互いに、デッキからカードをドロー。その後、１枚を捨てる」

「《力の代行者　マーズ》を墓地へ送ります」

「……《暗黒界の術師　スノウ》を、捨てる。
そして、暗黒界の術師　スノウが捨てられた、とき。
デッキ、から……『暗黒界』を、手札に、加える……。
《暗黒界の武神　ゴルド》を手札、に……」

狙いは――恐らく、アレだろう。
イレンの手札は、これだけの行動を起こしてなお6枚。
となれば、あのカードも手札に存在するはずだ。

「……更に、《暗黒界の雷》を、発動。
場の、セットカードを、1枚破壊……」

「くっ！？」

六条の場の伏せ（リバース）カードが、突如突き刺さる落雷によって燃え尽きる。
あのカードは――《聖なるバリア －ミラーフォース－》か。

本当、成功しないことに定評があるな、あのカードは。

「……手札から、《暗黒界の導師　セルリ》を、墓地へ。

墓地へ送られ……た、暗黒界の導師　セルリの、効果……。
カード効果で、手札から……捨てられた、とき。
相手の場に、特殊召喚……」

【《暗黒界の導師　セルリ》　攻　１００　／　守　３００】

「!?」

場に特殊召喚される、暗黒の導師。

しかし、召喚されるのは――六条の場。

「私の場に……!?」

「更に……暗黒界の導師　セルリ、は、『暗黒界』の、
カードによって、特殊召喚、されたとき。
相手は……手札を、選択、して。捨てる」

この場合、捨てるのは、セルリのプレイヤーから見た「相手」だ。

つまり――。

「……わたし、が。手札を選択して。捨てる。
《暗黒界の武神　ゴルド》を、捨てる。
効果で、捨てられた、とき。墓地から特殊召喚、できる……」

【《暗黒界の武神　ゴルド》　攻　２３００　／　守　１４００】

「そして、相手のカードの……効果で、捨てられた、とき……。
相手の、場のカードを……２枚まで、選択し、
……破壊する」

「ンなっ！？」

「《コート・オブ・ジャスティス》、《天空騎士（エンジェルナイト）パーシアス》……。
破壊」

ゴルドから発せられる波動によって破壊される、
パーシアスと、光の裁判所（コート）。

実際には同時に処理される一連の効果と言う話だが、
こういった演出を取るということにしたのだろう。

あの１枚の伏せ（リバース）カードが気になるが、
恐らくは――六条のことだ。別の意図があるに違いない。

「更、に……《魔轟神ウルストス》を、召喚」

【《魔轟神ウルストス》　攻　１５００　／　守　２００】

「――！？」

ボロ布を纏った骸骨が現れ、六条の表情が驚愕に歪む。

ほとんど、決まりだ。

イレンのデッキは、【暗黒魔轟神】。

それも、相当にキワモノな……。

「魔轟神ウルストスは……わたしの手札、が、２枚以下のとき。

こちらの、場の……『魔轟神』の攻撃力、が……。

４００ポイント、上昇、する」

つまり、攻撃力は１９００――。

「……暗黒界の武神　ゴルドで、暗黒界の導師　セルリを……攻撃」

「っ……！！」

そして、この状況下では――。

「魔轟神ウルストス……勝利の導き手フレイヤを、攻撃」

大鎌が振り下ろされ、フレイヤが両断される。

血が出ないだけいいが、
傍から見ればかなりショッキングな映像だ。

「……終了」

相変わらずの無感情なまま、ターンの終了を告げるイレン。

えらく板についてるな、悪役。

いや、モンスターのせいもあるだろうけど。

「くっ……！！　私のターン、ドロー！」

一方、六条は――天使族を使っているせいか、
いつもと違って、少々頼りがいのある雰囲気になっている。
真剣だというのも、少なからずあるだろう。

「――！　よし……！
魔法（マジック）カード、《天空の宝札》を発動！
手札の光属性、天使族モンスターを除外し、
カードを2枚ドローできます！　私は――」

1枚のカードに、六条の視線が止まる。
それは。

「――《ザ・スプレンディッド・ヴィーナス》を除外し、
カードを2枚ドロー！」

VENUS（ヴィーナス）――。

あいつ、僅かに躊躇いながらでも、プラネットを除外したか。
いや、手札に特殊召喚を可能とするカードが無いのなら、
それも仕方がないのかもしれん。

「更に、《神秘の代行者　アース》を守備表示で召喚！」

【《神秘の代行者　アース》　攻　１０００　／　守　８００】

「アースの召喚成功時、デッキから『代行者』を1枚、
手札に加えられます！　私は《創造の代行者　ヴィーナス》を手札に！」

だが、それだけじゃ意味は無い。

「カードをセットし、ターンエンド！」

「……ドロー」

恐らく、あの伏せカード（リバース）は、十中八九――《奇跡の光臨》。
自分のターンに特殊召喚を行えないというデメリットの関係上、
相手、つまりイレンのターン中に特殊召喚を行う算段だろう。
俺の想像が正しければ――。

「……《手札抹殺》。互いの手札を、すべて捨てる。
その後……同じ枚数、ドロー」

「くっ……！？」

六条とイレンの残りの手札――互いに2枚の手札を墓地に送り、
それぞれ2枚ドローする。

六条は、先程手札に加えた《創造の代行者　ヴィーナス》、
そして《アテナ》の2枚が墓地に捨てられる。

「捨てた、《暗黒界の狩人　ブラウ》。
《魔轟神獣ケルベラル》の、効果……。
暗黒界の狩人　ブラウが、墓地に、捨てられたとき、
カードを1枚、ドロー」

イレンの手札はこれで3枚。
手札抹殺の効果では、実質的にはアドバンテージはマイナス1。
しかし、ブラウが手札にあれば、そのマイナスのアドバンテージも、とりあえずは補える……か。

「魔轟神獣ケルベラルの……効果。魔轟神獣ケルベラルが、墓地に……捨てられた、とき、場に、特殊召喚できる」

【《魔轟神獣ケルベラル》　攻　１０００　／　守　４００】

――揃った。

俺の予測を言うのであれば、という前提がまず入るのだが。

このターンで、イレンは勝負を付ける気だ。

場のカードの存在。そして、俺と――六条との共通点。
これからの未来のことを考えれば――何気なしには、分かってしまう。

「レベル5――の、暗黒界の武神　ゴルドに、
レベル2、の……魔轟神獣ケルベラルを、チューニング」

合計レベルは、7――。

「……狂い咲け」

ゴルドを包む緑色の円環（わ）。
それが消え去った、その瞬間。

「――《ブラック・ローズ・ドラゴン》――」

紅の薔薇の龍が、その姿を現した――。

38束目：残滓（後書き）

歌詞の無断転載の基準に抵触しかねませんので削除しました。

＊　＊　＊

「今回の、キーカード……は、《ブラック・ローズ・ドラゴン》。
攻撃力、は……２４００。守備力……１８００。レベル、７。
属性は炎……で、ドラゴン、族。素材の指定は、無し。
シンクロ、召喚……成功時に、場のカードを、一掃できる。
また、墓地の……植物族モンスターを、除外して……。
相手の、守備モンスター――強制的に、攻撃表示にできる。
その際には、攻撃力は……ゼロ。直接、攻撃しているのと、同じ。
強力な効果……二つも、あるから……採用率、高い。
……なのに、何で、後半の効果、目立たないの……？」

はい、そういうわけで奇妙奇天烈かつ混沌とした今回のＡＣです。
見ても見てもこの物語が見えてきません。
というか支離滅裂です。すげえ。

ともあれ、これでメインキャラ三人が出そろいました。
死ねます。主にメインキャラの性格やら容姿やら考えるだけでも。

しかも一発キャラだけじゃないってのがミソです。
どいつもこいつもメインに食い込んでしまうから困る。

さて、あまり関係ありませんが、
そろそろ遊戯王ＡＣの前日談を短編として投稿する予定です。
予想以上に長くなってしまったことと、
そもそも遊戯王とまったく関係ないことも鑑みて、
にじファン側ではなく、小説を読もう側に投稿する予定なんですが
……。

……いや、まあ。本編の雰囲気からは考えられないくらい、
鬱展開多すぎるんですよね。

しかも、前日談だからＢＡＤエンド確定。
それも想像以上にキッツいやつです。
人死にが出ます。あと、現御堂が病んでます。
一応、本編でもそのうち補足説明を行い、
影響がないようにはしますが……。

書いてる今ですら軽く鬱に入りかけてます。どうすんだこれ。

ともあれ、現在の御堂が形成された理由とか、
本気で厨二病だった時代の御堂とか、
あるいは御堂の本名とか、そういった部分を露出したりします。

まあ、ガチで憂鬱なんですけども私。

希望のある終わり方するように見せる気ではありますが。

……ツッコミなしですよ。

最終的に死んでまうやんとか無しですよ。

まあ、ともかくバッドなエンディングです。

しかも、（恐らくではありますが）御堂の評価がガタ落ちになります。

もうすでに最安値とか言わない。

状況によってはお蔵入りです。

既に半分蔵に入っているようなものですが。

それでは。

39束目：誤解（前書き）

今回は少々短めです。

39束目：誤解

場に降り立つ、火炎を纏った薔薇の竜。

俺と六条のものに続く、3体目のシグナー竜――。

ある意味、予測通りすぎて気持ちが悪いというか、
当たり前のように俺の持ってないカードを使ってるとか、
色々と言いたいことはあるものの、
それを言ったところで取り上げてくれないのは目に見えてわかる。

俺の立場はどこに行ったんだろう。

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》の、効果……。
場の、全てのカードを……破壊、する。
――ブラック・ローズ・ガイル――」

黒い花弁が舞い散り、場に存在する全てのカードを暴風がさらっていく。

「……ついでに、チェーン、発動……。
伏せ、《暗黒よりの軍勢》……で、墓地の。
『暗黒界』の、モンスターを、２枚まで……手札に、加える」

「ちっ……チェーンして《レインボー・ライフ》を発動します！
手札の《トラスト・ガーディアン》を墓地へ送り、
このターン、私が受けるダメージを全て回復に変換！」

本来、こんな場面で使うべきではない１枚。
状況次第であるにせよ、《裁きの代行者　サターン》や、
あるいは《力の代行者　マーズ》の補助として仕込んでいたのだろう。

風に飛ばされたもう１枚のカードは、
やはりと言うべきか、《奇跡の光臨》だった。

「《暗黒よりの軍勢》の効果、で……《暗黒界の術師　スノウ》、と、
《暗黒界の武神　ゴルド》の、２枚を……手札に、加える」

暗黒界にせよ魔轟神にせよ、かなり手札消費は激しいカテゴリだ。
だというのに、イレンの手札は現在５枚。

……本当、どうなってんだ、これ。

「フィールド……魔法。《暗黒界の門》を、発動」

瞬間、場に暗い雰囲気を放つ門が現れる。

暗黒界の門。

悪魔族モンスターの攻守を３００上昇させ、
墓地の悪魔族を除外することで、手札交換を可能とするカード――。

暗黒界の枢軸となるカードだ。
攻撃力の上昇、手札交換という二つのメリットを併せ持ち、
後者の効果を、相手は使うことができない――。

「……墓地、の《暗黒界の斥候　スカー》を、除外して……、
《暗黒界の術師　スノウ》を、捨てる……。
……ドロー。その後、暗黒界の術師　スノウの、効果……発動。
『暗黒界』のカード……《暗黒界の龍神　グラファ》を、手札、に」

……やっぱり、それを狙ってきたか。

グラファの効果は、暗黒界のカードの中でも相当に強力だ。

除去効果はレインに及ばないまでも、
ただ場の暗黒界モンスターを手札に戻すだけで、場に蘇生できる。

しかも通常召喚が可能。２種類のウィルスの媒体にもなり、
かつ、捨てられた場合には相手の場のカードを１枚破壊できて……。

痒いところに手が届く、至れり尽くせりの超性能。

弱点としては、無差別除外のカードが存在していると、
手も足も出せなくなる……という点だろうか。

それにしたって相当便利だが。

問題はここからだ。

まだ、イレンは通常召喚権を残している。
更に、手札は５枚。いくらでも行動が可能だ。

「モンスター……セット。カード、伏せ。
……終了」

――が、予想に反し、イレンの行動は消極的なものだった。

セットモンスターとセットカードを1枚ずつ……。
暗黒界を中心としたデッキなのを鑑みれば、
自ずとあのセットモンスターの正体は見えてくる。

「くっ……私のターンです。ドロー！
手札から《ヘカテリス》の効果を発動します！
デッキから《神の居城－ヴァルハラ》を手札に加えます。
そして永続魔法、《神の居城－ヴァルハラ》を発動！
私の場にモンスターが存在していない場合、
手札から天使族モンスターを特殊召喚できます！
《光神テテュス》を特殊召喚！」

【《光神テテュス》　攻　２４００　／　守　１８００】

光神テテュス――。

ドローしたカードが天使族モンスターだった場合に、
それを見せることで更なるドローを可能とするモンスター。

言うなれば、天使族用の生きる《凡骨の意地》か。

ただ、ここで重要となるのは、
ドローフェイズでのドロー以外でも、効果が適用されるという点だ。

しかし……。

「バトルです！　光神テテュスで裏守備モンスターを攻撃！
ホーリー・サルヴェイション！」

「……《メタモルポット》の、リバース効果……発動。
互いに手札を……全て捨て、５枚、カードを引く。
そして……《暗黒界の龍神　グラファ》、と……。
《暗黒界の武神　ゴルド》、《暗黒界の尖兵　ベージ》の、
効果を発動……」

「３枚同時……！？」

グラファはカード破壊。
ゴルドとベージは、それぞれ特殊召喚能力。

一般的に考えれば、相当に厳しい状況になることは間違いない。

「《暗黒界の龍神　グラファ》の、効果……。
墓地に、捨てられた……とき、相手の、場のカードを……１枚、
破壊できる。光神テテュスを、破壊」

「くっ！」

ドローできたとしても、発動元のテテュスがいなければどうしようもない。

「《暗黒界の武神　ゴルド》、《暗黒界の尖兵　ベージ》は、手札から、墓地に捨てられた……とき、特殊召喚、できる……。攻撃表示、で、特殊召喚」

【《暗黒界の武神　ゴルド》　攻　２３００　／　守　１４００】
【《暗黒界の尖兵　ベージ》　攻　１６００　／　守　１３００】

そして、その攻撃力も、暗黒界の門の効果によって強化される。

ゴルドは上級モンスターのラインを上回る２６００。
ベージに関しては、下級モンスターのライン、１９００へ。

この布陣、少なくとも暗黒界の門をどうにかしなければ、六条に勝機は無い。
あるいは、これを超える上昇値を持つカードを出すか、か。

「《コーリング・ノヴァ》を守備表示で召喚します！」

【《コーリング・ノヴァ》　攻　１４００　／　守　８００】

「カードをセットし、ターンエンドです……！」

「……ドロー。《暗黒界の門》の、効果を……発動。
墓地、の……《魔轟神ウルストス》を、除外、して……。
手札……の、《魔轟神ルリー》を、捨てて……ドロー。
《魔轟神ルリー》の、効果……で、手札から、
捨てられたときに、特殊、召喚……できる」

【《魔轟神ルリー》　攻　２００　／　守　４００】

「……魔轟神ルリーを、生贄……に。
《魔轟神ディアネイラ》を、召喚」

【《魔轟神ディアネイラ》　攻　２８００　／　守　１００】

場に現れるのは、強靭な肉体を有す高位の悪魔。

その攻撃力は、暗黒界の門の効果を受け――実質的には、３１００。

「1体の生贄で攻撃力3100……!?
何ですか、その軽くチートじみた性能!?」

「……魔轟神ディアネイラ……は、魔轟神を、生贄に……すれば、
1体の、生贄で……召喚、できる」

更に、その能力は他の魔轟神をサポートする能力。

相手の通常魔法の効果を一方的に変更させ、
自らの優位とする強制的な効果。

その攻撃力も含め、真正面からぶつかっていくとなると、
ディアネイラを破壊するのは容易ではない。

「どうする――?」

ふと、俺の口から呟きが漏れた。

俺なら、この状況でどうする――?

通常魔法は使えない。

となれば、用いるべきは罠（トラップ）。
あるいは速攻魔法、永続魔法。

モンスター効果を有効に使うと考えても、
この状況でどのように使う？

俺なら、インティとクイラのループに巻き込む。

あるいは、イージーチューニングを絡めた攻撃力の上昇を行う。

直接的にダメージを与えるのもアリかもしれない。

しかし、今デュエルを行っているのは俺ではない。
……が、六条の手札にあれ……を含む2枚のカードがあるのならば、
逆転も難しいことではないと思う。

そうじゃなくても、アレがあれば、ディアネイラの破壊は容易だ。
その直後に破壊される可能性は、相当高いだろうが……。

「《暗黒界の龍神　グラファ》の、効果……発動。
場の、『暗黒界』と、名のついたモンスター……。
《暗黒界の尖兵　ベージ》を、手札に、戻して……、
《暗黒界の龍神　グラファ》を、墓地から……特殊召喚、する」

【《暗黒界の龍神　グラファ》　攻　２７００　／　守　１８００】

地面に滞る闇から這い出すようにして現れる、
暗黒界モンスター中、最強の能力を有すモンスター。
その攻撃力は、更に強化されて３０００――。
最上級モンスターの基準に、並んだ。

「……《暗黒界の狂王　ブロン》を、召喚」

【《暗黒界の狂王　ブロン》　攻　１８００／守　４００】

これも、攻撃力が上昇して２１００。
……４体のモンスターを展開する、か。
場が埋まりきっていないだけ、いいとすべきか？

「……バト、ル。暗黒界の武神　ゴルド――で、
コーリング・ノヴァ……を、攻撃」

「くっ……コーリング・ノヴァの効果を発動します！

戦闘で破壊されたとき、デッキから光属性・天使族の、
攻撃力１５００以下のモンスターを特殊召喚できます！
もう１枚の《コーリング・ノヴァ》を、守備表示で特殊召喚します！」

【《コーリング・ノヴァ》　攻　１４００　／　守　８００】

「暗黒界の龍神　グラファ……で、コーリング・ノヴァ、を、攻撃」

「もう一度、コーリング・ノヴァの効果を発動します！
《コーリング・ノヴァ》を、守備表示で特殊召喚！」

【《コーリング・ノヴァ》　攻　１４００　／　守　８００】

「……暗黒界の狂王　ブロン、で……攻撃」

「まだまだぁ！　コーリング・ノヴァの効果により、
《シャインエンジェル》を特殊召喚します！」

【《シャインエンジェル》　攻　１４００　／　守　８００】

野暮なことだとは理解しているんだが……あいつ、
デッキに何枚リクルーターを仕込んでいるんだ？

仮にシャインエンジェルが3枚入っていたとすれば、合計6枚。
これまで手札に来なかったことも不思議だが、
こうしてうまい具合に回るのも不思議だ。

「魔轟神ディアネイラで、攻撃……」

「シャインエンジェルの効果発動！
シャインエンジェルが戦闘で破壊されたとき、
デッキから、光属性、攻撃力１５００以下のモンスターを、
攻撃表示で特殊召喚できます！
《ブーテン》を特殊召喚！」

【《ブーテン》　攻　２００　／　守　３００】

「……面倒。カード、3枚、伏せ。
終了」

この局面で一気に3枚もカードを伏せるか。
尋常じゃないな。

これで、イレンの伏せカード（リバース）は4枚。
ここまで来ると、大嵐が使いたくなってくるな。使えないけど。

さて、手札にベージが戻った以上、残り2枚のうち、1枚は間違いなくベージだ。

もう1枚――その正体は、未だ見えてこない。

何かしら、キーカードになりうるものか？

だとすれば――。

「私のターン――ドロー！！」

敗北がほぼ確定するような、この瞬間にさえ、一切の勝機を逃さないような声音で、六条は叫んだ。

「このターン、あなたを倒させてもらいます」

「……？」

「まずは――手札からフィールド魔法、《天空の聖域》を発動します！」

瞬間、場の情景が移り変わる。

暗く、深い場所につながっているような門から、
天空――その名を冠する雲海、そして、巨大な神殿へ。

恐らくは、これこそが六条の本領。
代行者たちのホームグラウンド――か。

「そして、《マスター・ヒュペリオン》の効果を発動！
墓地の『代行者』を除外し、場に特殊召喚できます！
墓地のを《創造の代行者　ヴィーナス》を除外し、特殊召喚！」

【《マスター・ヒュペリオン》　攻　２７００／守　２１００】

場に降り立つ、太陽の神の名を持つ天使――。

直後、火炎をかたどった翼が、場を薙いだ。

「マスター・ヒュペリオンは、墓地の光属性・天使族モンスターを除外し、
場のカードを1枚、選択して破壊できます。
そして、天空の聖域が場に存在する今、

その効果も2回発動できる！」

本来ならば、1ターンに1度と制約の設けられている効果。
しかし、天空の聖域が存在することにより、
その制約は緩くなる。

「《アテナ》、《光神テテュス》の2枚を除外することで、
あなたの場の伏せカードを2枚破壊します！」

「ん……」

破壊されたのは《闇次元の解放》、
それから《闇の幻影》――っと。

モンスターを対象に取ったわけじゃないから、
発動できなかった、ってオチか。

「更に、2度目の効果の発動時、《連鎖旋風》を発動！
場に存在するカードが効果で破壊されたとき、
魔法・罠（マジック・トラップ）カードを2枚選択し、破壊できます！
その2枚の伏せ（リバース）カードを破壊します！」

「……むぅ。チェーン。《マインドクラッシュ》。
宣言した、カード……相手の、手札……。
あったら、墓地へ」

しかし、六条がサーチ効果を使ったわけでもないのに、
この状況下で正当できるとは思えない。

となれば、本当にあてずっぽうか。

「……《オネスト》」

「残念ですが、オネストは手札にありません。
つーわけで、手札をランダムに1枚、捨ててもらいましょうか！」

「……」

イレンは残った2枚の内の1枚を墓地へと送る。

その1枚――絵柄がボヤけて見えて確信は持てないが、あれは、やはり――。

「……発動、できない」

もう1枚、イレンの伏せたカードは《冥王の咆哮》だった。
確かに、相手が攻撃してこなければ使うことはできないだろう。

「手札から《奇跡の代行者　ジュピター》を召喚します！」

【《奇跡の代行者　ジュピター》　攻　１８００　／　守　１０００】

「ジュピターの効果を発動！　墓地の『代行者』を除外することで、
場の光属性・天使族モンスター1体の攻撃力を、
８００ポイント上昇させます！　アースを除外し、
マスター・ヒュペリオンの攻撃力を８００上昇！」

この効果を適用し、マスター・ヒュペリオンの攻撃力は３５００。

だが、足りない。

ブロンを攻撃したとしても、１７００のダメージしか与えることはできない。
そして、攻撃力の上昇効果はエンドフェイズまでだ。
次のターンに移れば、まず間違いなく破壊される。

だが、六条は「このターンで倒す」を啖呵を切った。
なら――今は、見守っておくべきかな。

「そして、ジュピターのもう一つの効果を発動！
天空の聖域が場に存在するとき、手札の天使族を捨て、
除外された光属性・天使族モンスターを特殊召喚できます！
《英知の代行者　マーキュリー》を捨て、
《創造の代行者　ヴィーナス》を特殊召喚！」

【《創造の代行者　ヴィーナス》　攻　１６００　／　守　０】

「《創造の代行者　ヴィーナス》の効果を発動！
ライフを５００支払うことにより、デッキ、または手札から、
《神聖なる球体（ホーリーシャインボール）》を特殊召喚できます！」

【《神聖なる球体（ホーリーシャインボール）》　攻　５００　／　守　５００】

「レベル３の創造の代行者　ヴィーナスと、
レベル２の神聖なる球体（ホーリーシャインボール）に、
レベル１の《ブーテン》をチューニング！
現れなさい、《天狼王　ブルー・セイリオス》！」

【《天狼王　ブルー・セイリオス》　攻　２４００／守　１５００】

ブルー・セイリオス――。

両腕と本来のもの、合計3頭を持つ、屈強な狼が姿を現す。

その攻撃力は２４００。

グラファやディアネイラといった、

攻撃力の高いモンスターには及ばない。

「バトルです！　天狼王　ブルー・セイリオスで、

――暗黒界の龍神　グラファに、攻撃！」

「え……？」

さしものイレンも、この行動に対しては驚きを露わにした。

相手の攻撃力は明らかにグラファよりも低い。

また、その属性は闇――種族も違う。

だというのに攻撃する理由――それは、一つしかない。

「くっ……天狼王　ブルー・セイリオスが破壊されたとき、相手の場のモンスターを選択し、攻撃力を２４００ポイント下げます！」

「あ……」

瞬間、重力に押しつぶされるようにして、グラファの体が地面に落ちる。

特殊効果。

ブルー・セイリオスのそれは、破壊されたときに発動する単体弱体化。

その下降値は２４００――これだけ弱体化させれば、大抵のモンスターでの戦闘破壊が可能となる。

当然、それによって受けるダメージも、増える。

グラファの攻撃力は、３００となった。

マスター・ヒュペリオンの攻撃力は、既に３５００――。

これで、イレンのライフポイントを削りきることが可能となる。

「とどめです――《マスター・ヒュペリオン》で、
暗黒界の龍神　グラファを攻撃！！」

肥大化する紅の翼が、ヒュペリオンの腕に合わせ、振り上げられる。

そして、一本の光の線が――振り下ろされた。

デュエルの終了を告げる音が、周囲に響き渡る。

この瞬間、六条は群体（レギオン）に勝利した。

――当然、これは壮大な勘違いから始まったデュエルだったのだが、
この場ではあえて発言しないでおく。

＊　＊　＊

「……負けた」

どことなく不満そうな表情をしたまま、イレンは呟いた。

ああ、間違いなく完敗だ。

というか、最後のアレ、ヒュペリオン出さなくても負けてたんじゃないのか。

アテナを帰還させて、アテナの効果でヴィーナスを蘇生。

その後、ヴィーナスの効果を三度使えば、２４００のバーン。

プラネットの方のＶＥＮＵＳ（ヴィーナス）を帰還させるという手もあったか。

まあ、今となっては机上の空論――というか、

そういうこともできた、という話でしかないわけだが。

「三文芝居は終いだ。負けたんだから、
さっきの説明を、そのままこいつにしてやれ」

まあ、勝敗は関係なしに説明はしてもらうつもりだったが。

「……分かった、た」

「何ぶつぶつ呟いてるんですか。
さっさと説明してもらいますよ！」

少々ヒステリック気味にわめく六条。
その一方で、マイペースなままにイレンは説明を始める。

先程、俺にした説明とほぼ同一なもの。

というより、完全に同一と言っても過言ではないのではないだろうか。

こまごまとした補足説明、六条からの質問を含め、
多少の差異はあるものの、正直、先程聞いた話とほぼ変わりない。

「……つまり？　先輩が女の子化したみたいな存在があなたなわけで？
その上先輩と体を共有しているようなもので？
実は見えないだけでそこに先輩がいる？」

「……そう、いう……こと？」

「何で張本人が疑問形なんですか」

その疑問も既に通り過ぎた道だ。

「ちゅーわけでちゃっちゃか先輩を出しなさい。
私ゃこれでも気は短い方なんですよ」

「……分かっ、た」

言いつつ、イレンは俺を手招きする。
……もしや、また先程と同じようなことをしろ、というのだろうか。
やだなぁ、アレ心臓に悪いし。
面倒だとは言わないが、もう少し代替案は無いものなのだろうか。

「……触れれば、いい」

……ああ、だとするとアレ、演出だったのか。
必要なかったんなら、もう少しソフトなやり方の方が良かった。
促されるようにして、俺はイレンの手を取った。
同時、肉体の感覚が戻り、浮遊感が消えた。

へぇ、と、感嘆したように六条が呟いた。

「本当に一瞬で変わるんですね」

「……みたいだな」

自分のことであるが故に、
この事象を観測できないのは、少し残念だ。

「はー……しかし、本当に厄介ごとだったんですねぇ」

「それ以外の何があるんだよ。
……とはいえ、そういうことだ。
どうも、これから奇妙な共同生活をしていかなきゃいけないらしい」

「はあ。そりゃいいんですが、どんどん人間離れしていきますね。
そのうち十代に並ぶ人外になるんじゃないんですか」

否定できないのが怖い。
というか、この状況でどう否定しろというのか。

「……ま、いいですけどね。仮に人外でも、そうじゃなくても。
同郷であることに変わりはありませんし、
昔話ができて、適度に楽しめれば」

郷愁、あるいは、同族意識――か。

いずれしても、こいつはこれまで、他人との――特に、
元々自分がいた世界の人間とのふれあいを求めてた。

この世界での疎外感。それを埋めるには、俺という人間が必要――
か。

「……ババ臭いな、お前」

どことなく気恥ずかしくなり、わざと憎まれ口をたたく。

これまで、他人に必要とされた経験なんて――元の世界では、
一度たりとも無かったから。

「ンなっ！？　失礼な！
これでも私はまだまだ先輩より若いですよ！？」

「へーそーなんだー」

こちら合計年齢３９歳ですが何か。
それより年上だったら俺は笑うぞ。

「というか、転生者というだけでこの学校の大抵の生徒よりは年上なんですけど」

「……まあ、そうだな」

山月記のように、外見に精神が引っ張られてしまっているだけで。
さて、そんなことはともかく――だ。

「妙なハプニングはあったが、基本的な流れは変わらない。
明後日から本土に赴き、カイザーに会ってくる」

「私は、その間のアカデミアでの皆の警護……ですね」

「ああ。……改めて頼むぞ、六条」

「おけーです。ま、何事も無ければいいんですけどね」

そのセリフはフラグだと思うんだが……今回は、あえて何も言わずにおこう。
フラグなどと考えた時点で、既にフラグは壊されているようなものなんだ。

少なくとも、今日明日と言った早い時期に襲撃が来ることは、そう無いだろう。

どちらともなく別れ、自分の寮へと向かう。

明日、明後日。いずれ来るであろうそのときへの、用意をするために。

39束目：誤解（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「デレろ」

「先輩がデレないんですけどどうしたらいいんでしょう？」

「……アリスちゃん、なんでそれをボクに聞くの？」

「いや、だって先輩が一番デレてるのレイちゃんじゃないですか。
というかアレは既にヤンの域に達してます」

「ヤン……って、そこまで行く？
確かに、ボクに対しては特別優しい気もするけど……」

「いや、まああありゃ特別優しいですけど、
私に対しては非常に厳しいですからね？」

「そうかなぁ……アリスちゃんの場合、自業自得だと思うけど」

「ぐぬっ……！？　言いやがりますね、この妹は……！？
流石はあの簡単にデレるくせに私にはデレない男の妹的存在……

！」

「それ、褒めてるの？　けなしてるの？」

「どっちでもいいじゃないですか。それより、どうやったらあの男はデレるんですか」

「んー……妹キャラ？」

「それだっ！！」

＊　＊　＊

「つーわけでデレてください。お兄ちゃんっ♪」

「誰がお兄ちゃんだブチ殺すぞこのマルキューが」

「酷っ！？」

「お前に妹キャラが似合うとでも思ってるのか。だとしたら滑稽だな。爆笑だよ。むしろサムくて笑えねえ」

「もっと辛辣になりつつある！？　私が何をしたんですか！？」

「お前は『妹』というものを愚弄した。よってジャッジメントですの」

「何で最後だけ黒●！？　みぎゃー！！」

↓続く？

そんなわけで３９話です。今回は少し短めです。

イレンのデッキは【暗黒魔轟神】でした。
ただし、今後暗黒界の要素は少々薄れます。
この点に関しては原作再現と言いますか、
原作で暗黒界が悪役だからと言いますか。
ともかく、３期が終わるまでは、状況次第で解禁しつつも基本封印です。

六条のデッキは【代行天使】です。
まあ、いろいろ混じってますが。
むしろ【上級天使】ですね。なんというか。
六条のものも、いずれ強化されます。
今回出てないカードも、恐らくはいずれ出します。
主に強力なやつ。

以下完全な余談←

まったく関係ないんですけど、
私としては想像の中で一応のＣＶを決めてたりします。

例えば御堂は中村悠一さん。
六条は喜多村英梨さんとか。

まあ、そんなこんなで、結局はイメージだけなんですが。

できれば皆さんのイメージＣＶとかお聞きしても構いませんか？
ということでして。

ともあれ、今回はこれで。
それでは。

４０束目：寄道（前書き）

今回からカイザー編……と銘打ってはいましたが、
すまん、ありゃ嘘だった。正確には「本土編」ですはい。

そういうわけで、これから数話の間本土で進行します。

４０束目：寄道

アカデミアからおおよそ3時間。

それだけの道程を辿り、ようやく辿り着いた、本土。

俺にとっては、1か月前に訪れたばかりの場所――。

それでも、あのときは療養のために帰って来ただけだ。

今回のように、明確な目的があるわけではない。

「……あー……」

俺は、歩きながら軽く伸びをした。

想像以上に長い航海だったためか、多少ならず疲れが出ている。

バキバキと関節が鳴る。おじん臭い。

「さて、と……」

島外に出るということで、俺の格好は至極当たり前のものになっていた。
流石に、あの制服のままでは悪目立ちしすぎる。

何せ青一色だ。
好んで着るようなものとは思えない。

よって、俺は普段着――ワイシャツ、
その下に黒いTシャツ、ジーンズにダウンジャケット、
といういでたちで来訪していた。

こちらに来る直前、六条に「どこの中尉ですか」と言われたが、俺は気にしない。

皆を頼んだ、と言ったら了解（ヤー）！　と元気よく言われたが、
気にしたら負けな気がする。あとそのセリフを言うのは副官だ。
灰色のクリスマスなんぞ経験してないぞ。
毎年のクリスマスは黒いけど。

「……はぁ」

そんなことより、今日の宿だ。

カイザーの試合は明日。

よって、今日はどこかに泊まって時間を過ごすしかない。

事前に安宿に予約を入れてはおいたが、チェックインも夕方。

それまで、どうにか時間を潰さなければならないわけで……。

「……ひま」

娯楽の少ない状況に辟易したのか、イレンがボヤいた。

確かに、船に揺られている間は非常に暇だったが、

こうして辿り着いてしまえば、別段そういうことも無いと思うが。

『ホテルのチェックインまで、その……何をするんです？』

スズの疑問ももっともだ。

何をするのか、と問われても、これをしよう、とは言えない。

せいぜいどこかで買い物を楽しむ程度で終わりそうだ。

旅行――は、嫌いではないが、俺は一人旅の方が好きだ。

計画を練りに練ってプラン通りの旅行をするよりも、
行き当たりばったりで適当な旅をするのも好きだ。

ただ、他人と一緒に旅行――などという経験は、
あちらでもこちらでも、ほとんど無いわけであって。

ましてや周囲の人間から見えないような存在が憑いてて、
その上で旅行に来たことなんて一度も無い。

普通の人間ならまず無いだろうが。

さて、ここで一つ重要なことがある。

それは――不可視のモノ。
つまり、スズとイレンの存在だ。

普通に話そうとすれば、
俺は間違いなく「何もない場所で喋ってるイタい人」となってしまう。

ここは、無駄にこういうことを想定している六条後輩にでも聞いて、
妙案でも聞き出すか……と思うが、あいつのことだ。
調子に乗ってろくでもないことを言い出しかねない。

かと言って、他に何か妙案があるわけでもなし。

「どうするかねぇ……」

これぱかりは偽らざる本音だ。

どうしようもないというほどではないが、流石に少し、考えざるを得ない。

船の中であれば、少々は大丈夫だった。
というのも、船に乗っているような人間は、
俺を除けば船員しかおらず、他人と顔を合わせるようなことも無かったからだ。

しかし、現状は真逆。

周囲に人間は腐るほどいるし、
……うん、この場で話そうとすれば、
間違いなく変な目で見られることだろう。

俺としても、こんなところで人生を棒に振る気は無い。
なんとかして、丁度いい手を見つけなければならないわけだが……。

『何か、通信機器を使ってみるです？

携帯電話なら、あまり違和感は無いと思うですけど……』

俺は軽く首をかしげた。

それだと、長時間の会話には適さない。
また、決して通話しているわけではないのだから、
画面を見られればすぐにバレる。一発でアウトだ。

「……インカム」

却下だ。街中でそんなものを付けていてみろ。
即刻職質で逮捕だ。

ただのイタい人として見逃してくれる可能性も、無いではないが。
正確には、「見て見ぬふりする」可能性だが。
社会不適合者にしか見えねえよ。

どっちにしても黄色い救急車が来て鉄格子付きの病院に連れて行かれそうだ。
都市伝説だけど。

となると、一番まともなのは携帯か。
画面を見られないよう、細心の注意を払うことにしよう。

「……？」

と、そうして携帯を取り出そうとした折、
ふと、イレンがどこか別な場所を見据えた。

何だろう？

そう考えて周囲を見渡すも、
何一つとしてイレンの興味を惹くようなものは見当たらない。

はてさて、となるとどうしたものか――と、
考えを巡らせた瞬間、スズが口を開いた。

『カズマさん、人が追われてるですよ！？』

「……！？」

スズが指し示す方向を見れば、確かに、
そこには一人の人間を、複数の人間が追いかけている光景が見られた。

ここから離れていることから、容姿や風貌までは判別できないもの

の、
必死になって逃げているのではないかと想像できる。

これは改めて言うまでもないことだが、
この場所は正真正銘紛れも無く日本であり、
誰かが人に追われているなどと、常識で考えれば、
そのようなことはまず起きない。

というより、そんなことをしている人を見たことは無い。
子供の鬼ごっこでもなければ——という前提は入るが。

いい年こいた大人の鬼ごっこなんて、
テレビの企画でもなければサムいだけだ。

つまり——それ以外の意図があって、追いかけっこをしている……か？

いや、追いかけっこというよりは、追走劇と言うべきか。

いずれにしても、現代日本で起こるような事態ではない。

これが十数年前のアメリカや、あるいは映画の中ならともかくとしても。

「……穏やかじゃないな」

『ど、ど、どうするです！？』

「……追う？」

「理由の方は知らんが、まずは状況の把握に努めるべきだな。
後をつけてって、少しでも様子を見る」

仮に追いかけられている側が犯罪者だったりした場合、
流石に、あの場から助け出すようなことはしたくない。

――逆に、何らかの理由があって追いかけられている普通の人間だったとき、
俺はあの人を助け出さなければならない。

――それが、俺にとっての正義で。
――それが、俺が交わした約束だから。

＊　＊　＊

あれから数分。
俺は、これまで来た道を逆走する形で走り続けていた。
先程も言った通り、俺は今、状況把握に努めている段階だ。

付かず離れず。そんな距離を維持したまま、
この集団のことをよく観察する。

黒服。
そう形容するしかないような集団だった。

言うなれば、エージェント。
あるいはＳＰか。どちらにせよ、日本にいるとは思えないが。

さて、その集団の目指す先――つまり、標的となっている人間についても、
ある程度は情報を集めることができた。

この連中――とりあえず、ＳＰと呼称しておくか。
ＳＰの連中がしきりにさけんでいる「お嬢様」という言葉。

こうして連呼しているのを聞けば、
自然、追われている人間が女だと分かる。

とはいえ、容姿については見えないので分からないのだが。

「……しかし」

どういうテンプレなんだろう。

SPと思しき人たちから逃げ続けるお嬢様。
その上、「家に帰りたくない」ときた。

これで助けた人にフラグが立つ。
ギャルゲーならありふれた展開だな。

さしずめ、俺は助けるべき人のところまで誘導する役柄か。
だったらだったで、ちゃんと役割を果たす必要はあるな。

「……よし」

これから向かうであろう場所――と言っても、
この先にあるのは埠頭くらいで、他に逃げ道は無い。

倉庫が多いことから、隠れる場所は多い。

まずは、そこまで先回りすべきだろう。

「スズ、イレン。埠頭まで先回りできるルートは分かるか？」

『さ、流石に分からないですよ！』

「……次の道、左」

よし、と呟き、俺は更に速度を上げた。

イレンの指示通りに左へ、次の道を直進し、更に左。

そうして、気付けば埠頭にたどり着いていたのだが――。

『はわ、誰もいないですよ……？』

「急ぎ……すぎ」

埠頭に、人の姿は見られなかった。

当然だろう。あちらは、どうにかして追っ手を撒こうとしている道を行ったり来たり、時には横道に逸れたりしてでも、袋小路に陥り、捕まることを避けるだろう。

埠頭にたどり着くまでには時間があると見てもいい。

とはいえ、それもわずかだろうが。

「……疑、問」

「え？」

「何で、無関係……の、人間、を。
助けよう……とする？」

疑問。

確かに、普通なら、それは疑問に思うべきことだった。

何故、無関係の人間を助けようとするのか。

普通なら、面倒事だと言って関わらない。
あるいは、関わる気も起きないだろう。
そうすることが普通だからだ。

普通であり、常識。

他人のことには関わらない。
自分のことだけをしていたい。

無関心の極致、とでも言おうか。

他人にかける時間の方がもったいない――と、
そう思う人もいるかもしれない。

だけど。

「確かに、必要は無い。俺が無駄に迷惑を被るだけかもしれない。
だけど、そうしなきゃいけないんだ」

「……？」

「手を差し出せば届くのに、手を伸ばせなかったら。
手を――差し伸べなかったら、俺は、死んでも後悔する。
それに」

それに――。

「……目の前で、何かが失われるのを、もう二度と見たくないから」

怪訝な表情で俺を見据えるスズ。

対し、イレンはどこか苦々しげな――。

元々、普段の表情が無表情なので分かりづらいが、
どことなく、眉根を寄せた。

「……自分を、殺して……でも？」

「……ああ。そうしないと、俺は俺でいられないから」

もう二度と、あんな思いはしたくない。

そのためなら俺は、自分自身すら――殺してみせる。

「……無駄話は終わりだ。そろそろ、来るぞ」

言いつつ、俺は倉庫の影に隠れ、外の様子を窺った。

走りくる少女、それを追うＳＰ。

あとは、こちらに曲がろうとする少女をかくまうだけだ。

……が。

「……え？」

初めて真正面から見据えたその「お嬢様」は、
俺のよく――は知らないが、少なくとも、
短いなりにも交流を持っている人物だった。

海野幸子。

六条の友人で、俺にとっては後輩にあたる。

前々からお嬢様っぽい口調だと思ってはいたが、
本当にお嬢様だったのか。

いや、そんなことはともかく！

「ちっ……！」

「きゃっ！？」

いずれにしても、追っ手の目から隠す必要はある。
俺は通りかかった海野さんの手を引き、

倉庫の中へと引きこんだ。

「だっ、誰ですの！？　って、御堂せんぱむぐっ！？」

「静かに。気付かれるから」

口を塞ぎ、声を漏らさないようにする。
状況が状況だけに仕方がないけど、
これ、傍目から見ればなんとも犯罪チックだな。

ばたばたと、騒々しいまでの音が、倉庫の外から聞こえてくる。

こういうときに５Ｄ’ｓの時代だと便利だろう。
逃走用に１台のＤ－ホイール。いや、デュエル用だけど。

そうして、何分ほど経っただろうか。
時間の感覚すら麻痺してしまうような中、
ようやく足音が遠ざかっていく。

ふぅ、と俺は軽く息をついた。

「撒いた……か？」

「……恐らく、撒きましたわ。
ところで先輩、そろそろ離してくださらない？」

「っと、ごめん……」

「気安くレディに触れるものではありませんわ。
……それより、何で先輩が本土にいますの？」

「それはこっちのセリフだよ。何で海野さんが本土にいるんだ？」

どうも、互いに互いの事情が理解できていないようだ。
この場合、いろいろと仕方のないことだろうが……。

「俺は、最近カイザーが不調だと聞いたから来ただけだ。
試合のチケットも貰ったし、一つ激励を……と思って」

「奇妙な理由ですのね」

「そういうこともあるってだけだ。
それより、海野さんの方はどういう理由があるんだ？」

「私（わたくし）は――」

と、そこまで言いかけたところで、海野さんは口ごもる。

何かマズいことでもあるのだろうか――とも思うが、
そもそも、その「マズいこと」が無ければ、こんなところにはいない。
SPらしき人たちにも追いかけられてはいないだろう。

「……分かった。話したくないなら無理に言わなくてもいい」

「いえ。話しますわ。とはいえ、少々情けないことなのですけど……。
実を言えば、アカデミアから、転校させられそうですの」

「はぁ!?」

アカデミアから転校させられる――?

いや、ありえない話じゃない。
これまでに、そういった話題が表出していないからこそ、
考えから外されていただけの話だ。

「理由は?」

「……あそこにいると、上流階級としての誇りが失われる……。
——だそうですの。お父様の言い分としては」

父親の言い分としては——か。
となると、海野さんの意思は無視されている、と見るべきか。

しかし——そうまで言うものかね。

確かに、普段の様子を見る限りでは、
海野さんの振る舞い、言動は、奇妙なくらいに洗練されていて、
「それ」らしさが感じられる。

だが、普段の海野さんは、そのようなことなど気にも留めない。
重要なのは自分の意志であると言わんばかりに、
常日頃から、六条たちと交流を持っている。

言うなれば、六条なんかは庶民の代表格だ。
ああまで俗的な人間、そうはいないだろう。

……そういった人間との付き合いを無くさせたい、ということか？

参ったな。他人の家の事情にどうのこうの言える立場じゃないが、
ここまで行くと、流石に疑問に思わざるをえない。

「その話はいつから出ていた？」

「先週……もっと言えば、入学直後から言われてましたわ」

今までは様子を見ていた……というところだろうか。

ただ、いつまで経っても戻ってこないから、痺れを切らした、か。

「……議論は？」

「何度もしましたわ！　でも、お父様は受け入れてくださらないし……。

聞いてくれないのなら、と思って、仕方なく……」

家から逃げ出した、か。

「……埠頭に向かっていた理由は、アカデミア行きの船に乗るため？」

「恥ずかしながら、そういうことですわ」

しかし、その前に船は出てしまった、と。
不運に不運が積み重なった結果、こうなってしまったということか。
どこの漫画の世界だ、というツッコミは無しにしておこう。
目の前にある現状こそが、唯一無二の現実なのだから。

「……海野さん。君の父親は……その、言っちゃなんだけど、
頑固者なのか？」

「頑固者……そうですわね。想像以上に。
かなり凝り固まった考えの持ち主ではありますわ」

「凝り固まった、ねぇ……」

先程言った「上流階級」という言葉に、何かしら関係があるのだろうか。

いや、関係ないわけがない。
自分のことを「上流階級」などと自負するということは、
つまり、他者が凡庸であると――庶民、
あるいは、下級だと見下しているという意味にも取れる。

彼女の親は、俺たちを下級と見下している？

俺たちに関わることそのものが、
彼女の格を下げる――と、そう認識しているのだろうか。
となれば、取るべき道は限られる。

そのうち、最も分かりやすい方法は――。

「海野さん。とりあえず、今は家に帰った方がいい」
「な、何でですの！？」
「重要なのは、海野さん自身を親に『認めさせる』ことだ。
力量、学力、腕前。何でもいい。自分が最も誇れる部分を、
今までと何も変わっていないと。むしろ、成長しているのだと、
親に見せつけるんだ。そのために、準備が必要になる」
「準備――？」

現状、海野さんの得意分野については分からない。
いや、アカデミアに通っているのだから、
最大の得意分野はデュエルである――と、
そう認識するのが、最良だと思える。

「海野さん、今、君が最も誇れるものは……得意なものは、いったい何だ？」

「でゅ……デュエル？」

「まあ、アカデミアにいるんだから、それが一番だと思う。というより、今現在学んでいるんだから、それを見せつけるのが丁度いいだろう。最良は、プロに勝つことだろうが……」

不可能ではなくとも、かなり難しいだろう。

三沢や明日香、吹雪さんのレベルにまで到達すれば、それも「可能」であり、五分五分の域にまで到達できるだろうが……。

「無理だ、とは言わないが、かなり厳しい状況だと思う。だから――ここで、一つ。ちょっとした工作をさせてもらう」

「工作ですの？」

「不可能ではなく、五分五分の状況に持っていくため。少なくとも、そこに勝ちを見出すために」

重要なのは、勝てない勝負をすることではなく、
勝てない勝負にどれだけ勝機を見出すか。

1%でも勝機が無いなどということは、ありえない。
問題になるのは、その確率を、どれだけ引き上げるか。

「今は帰ってデュエルの提案でもしてくれ。
デッキの調整も忘れず。――そこからは、俺の仕事だ」

ここから重要となるのは、俺の行動だ。

俺の人脈、能力。あらゆるものを用いて、
海野さんの勝率を上げなければならない。

レイの周囲の世界を守るためなら、
俺は何だってやる。やってやる。

どんな手を使ってでも――だ。

「決行は明日。それまでに、連絡を頼む。
俺はその場にいないかもしれないが、
……勝ちを祈っている」

そう告げて、俺は倉庫から外に出た。

人脈――そう。一つだけ、俺には武器がある。

ネットで拾って、一度コンタクトは取った。

あとは、あの人が俺のことを覚えているかどうか――。

そう考え、俺は目的地に向かって一歩を踏み出した。

＊　＊　＊

このご時世、何より重要となるのは情報だ。

故に、興信所や探偵……極論を言えば、情報屋と言った、情報を扱う稼業が絶えないのは当然であるとも言える。

そして、俺の知り合いの一人が、今は探偵を営んでいるという話だった。

埠頭からもほど近い場所にある、一軒のビル。

そこに、とある人物が務めている。

「……誰？」

ふと、イレンが呟いた。

確かに、言ったところで分かるはずはないだろう。
あの人と面識があるのは、俺と十代と、
それから、翔と隼人、クロノス教諭くらいのものだ。

ふ、と笑い、俺は扉を叩く。

「どなただろぉうか？」

特徴的な声が響き、俺は思わず噴き出した。

――まさか、こんなことをしているとは。

「……事前に予約を入れていた者ですが」

「おぉ、どうぞ、お入りぃください」

その言葉に応えるようにして、俺は扉を開いた。

そこにいたのは、筋骨隆々の大男――。

若本ヴォイスが似合う男。

つまり――。

「お、おおおぉぉう！？　お前は――」

「久しぶり――と言うべきかな。タイタン」

タイタンが、そこにはいた。

以前のような仮面は外し、サングラスを着けている。

その上で、スーツを着用し――……一言で言うなら、

ボディーガードでもしているのではないかという男。

最高に胡散臭いが、この状況においては頼りになる。

「確かに……久しぶりぃ、だな、御堂ぉ、和真」

「ああ。とは言っても、今日は仕事の話だ。

――少し、調べてほしいことがある」

「ほう？」

タイタンは、罪を償って以来、この場所で探偵業を営んでいる。

とは言っても、決して繁盛しているわけでもなく、

細々とした経営状態と言うべきか。

こうして俺が来訪したのも珍しいことだろう。

しかして、その能力は敏腕。

これまでに解決した物事は少ないものの、

意外に難しい物事を解決していたりする。

「海野、という家のことを知っているか？」

「ああ、あの大ぉ金持ちか。その家についての事柄かぁ？」

「おおむねその通りだ。

具体的には、通話記録とその内容だが……。

必要な事柄は、ここにメモしてある」

と、俺は1枚のメモを手渡した。

そこには、今回必要な事柄を記してある。

これから、俺の行うべき事柄に必要なものを。

「作業は多くなるだろうけど、その分の金は振り込む。

何なら、前金でいくらか振り込んでもいい」

「いぃや。お前の義理ぃ堅さは知っている。

前金は必要ない。私のぉ、できることはすべてやろう」

「……助かる」

この男の義理堅さも相当なものだと思う。

心の底でその事実に感謝し、俺は明日のための準備を始めた――。

＊　＊　＊

そして、翌日。

俺は――正確には、俺の代役として、イレンが、海野家の庭先にい

た。

理由としては、俺の存在を悟られないため。
正確には、俺の知り合いである海野さんの反応を、
極力抑え、この試合が「仕組まれたもの」であることを、
容易には看破させないようにするため。

というか、この試合のために用意した相手がイレンだったりする。

流れとしてはこうだ。

海野家が相手に連絡を取ったその後、
俺がその相手に対し、連絡をかける。

相手側に頼み込み、相手を代わってもらう。
この際、金を積むことになったのは内緒だ。

そうして、海野家側にも連絡が行きわたり――ということだ。

まあ、九割方犯罪なんだが、この際細かいことは抜きにしよう。
バレなければ、犯罪は成立しないのだよ。

だからと言ってこういう場合以外でこんなことをする気は無いが。
何せ、バレれば即ブタ箱だし。

リスクが大きすぎる。今回はリターンに賭けたわけだけど。

しかし――大富豪と言うだけあって、庭も家も相当に大きいな。
流石に、ここまで行くと「凄まじい」以外の感想は浮かばないぞ。

「……始め、る」

どこか緊張した面持ちで、海野さんは頷いた。
自分の進退がかかっているのだから、緊張するのは当然か。

そうして、数秒。

「「決闘（デュエル）！」」

どちらともなく、開始の合図が叫ばれた。

先攻はイレン。

あいつには、事前にデュエルをしてくれ、としか言っていない。

八百長が嫌いだということもあるが、
何より、本当に力を見せつけるのだと言うのなら、
本気同士の勝負でなければ意味が無い。

海野さんの成長にも繋がるだろうし……。

さて、余談はここまでだ。

「……ドロー。

モンスター、セット。

カード、２枚セット。終了」

「……不気味ですわね、動きが無いと……。

私（わたくし）のターン、ドロー！　……まずは、そのセットモンスターを見せてもらいますわ。

《オイスターマイスター》を召喚しますわ！」

【《オイスターマイスター》　攻　１６００　／　守　２００】

「バトル！　オイスターマイスターでセットモンスターを攻撃ですわ！」

「……《マシンナーズ・ディフェンダー》」

【《マシンナーズ・ディフェンダー》　攻　１２００　／　守　１８００】

オイスターマイスターの攻撃力よりも、
マシンナーズ・ディフェンダーの守備力の方が上――。
よって、海野さんに２００のダメージが通る。

「くっ……！」

「マシンナーズ・ディフェンダー……リバース、効果。
デッキから……《督戦官コヴィントン》、を手札、に」

「裏目でしたわ……！　カードを2枚セットし、ターンエンド！」

だが、攻撃しなければ始まらないし、終わりもしない。
加え、仮にこのターン、なんの動きも無いままに終えたとしても、
いずれリバースはされていただろう。

「ドロー……《マシンナーズ・ギアフレーム》、召喚……」

【《マシンナーズ・ギアフレーム》　攻　１８００／守　０】

「マシンナーズ・ギアフレーム、の……召喚成功時……、
デッキ、から。『マシンナーズ』を、１枚……手札、に。
《マシンナーズ・フォートレス》、手札……」

流石に、フォースを出すだけじゃないか。
いや、だとしたら相当に事故の確率は高いんだが……。

「《マシンナーズ・フォートレス》、効果……で、
手札、の、機械族を……レベル、合計８になるよう、捨てて……。
手札か、墓地から……特殊召喚、できる。
《マシンナーズ・スナイパー》と、このカード自身、捨て……。
《マシンナーズ・フォートレス》、特殊召喚……」

【《マシンナーズ・フォートレス》　攻　２５００／守　１６００】

「なっ……どういうことですの！？」

手札コストを支払うことによって、
手札、または墓地から特殊召喚できるモンスターの特徴だ。

これは、相手の特殊召喚に応じて特殊召喚できる《ドラゴン・アイス》と、
似たような効果であるとも言える。

自身を手札コストとして使用しても、「墓地から」特殊召喚される。

……ということらしい。よくは分からないが。

「……バトル。マシンナーズ・フォートレス、で。
オイスターマイスターを……攻撃」

「そう簡単にはやらせませんわ！
伏せカード、《フィッシャーチャージ》を発動！
私の場の魚族を生贄に、場のカードを1枚破壊できますわ！
オイスターマイスターを生贄に、マシンナーズ・フォートレスを破壊！」

「ん……」

「更に、カードを1枚ドローしますわ！」

普通に使っても、1枚破壊と1枚ドローと、
2枚の損失を容易に補うことができるカードだ。
更には、相手の除去にチェーンして発動すれば、
1枚のアドバンテージを取ることができる。

いやあ、何と言うか。

これ――少し使うカードが違えば、元の世界の再現じゃないか？

こう、ガチＶＳガチというか。

例えば、イレンのデッキにガジェットを組み込み、

海野さんのデッキにクェーサーとフォーミュラーを組み込めば、

……鬼畜魚ＶＳマシンガジェという、

公認大会での光景が再現されそうだ。

まあクェーサーはまだ存在しないんだけど。

「更に、オイスターマイスターの効果を発動しますわ！

戦闘破壊以外で墓地へ送られたとき、

《オイスタートークン》を特殊召喚できますわ！

守備表示で《オイスタートークン》を特殊召喚！」

【《オイスタートークン》　攻　０　／　守　０】

「……面倒。マシンナーズ・ギアフレーム、で、

オイスタートークンを……攻撃」

「くっ！」

「……終了」

毎度の如く、素っ気ない言葉でターンエンドを告げるイレン。

毎度毎度、こう無表情なことが多いと、
どうにも別な表情をさせたくなるなと思うのは、
俺が常日頃からイレンと行動を共にしているからだろうか。

「私（わたくし）のターンですわ。ドロー！
手札から魔法（マジック）カード、《浮上》を発動しますわ！
私（わたくし）の墓地の魚・海竜・水族のいずれかの、
レベル３以下のモンスターを守備表示で特殊召喚できますわ！
《オイスターマイスター》を特殊召喚！」

【《オイスターマイスター》　攻　１６００　／　守　２００】

「更にフィールド魔法、《伝説の都　アトランティス》を発動しますわ！
この効果により、手札、場の水属性モンスターのレベルを一つ下げ、
更に、場の水属性モンスターの攻守を２００アップさせますわ！
そして、オイスターマイスターを生贄に――」

――来るか。

あの、魚族最強の切り札が。

「《超古深海王シーラカンス》を召喚しますわ！」

瞬間、場に表示された立体映像（ソリッドビジョン）――。

「海」の映像を映し出したそれが割れ、
巨大な――灰色の魚が姿を現した。

【《超古深海王シーラカンス》　攻　２８００／守　２２００】

ここからが――魚族のデッキの、本領発揮、か。

４０束目：寄道（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「もしも元の世界の大会に御堂と六条が出ていたら」

「……ということを考えたんですけどどうでしょう」

『いきなり電話してきてその話題か』

「だってひーまーなーんーでーすよーぅ。
まあそんなことはともかく、どうなるんでしょうね？」

『さあな。俺は【ＨＥＲＯビート】かごく普通のシンクロで行くだろうな』

「先輩らしいですねー。
まあ、確かにＨＥＲＯビートなら実力も申し分ないですね」

『逆にお前は何を使うつもりなんだ』

「ジャンドですかね。もしくは墓地ＢＦ」

『うん。お前が意外と鬼畜なのはよくわかった。
帰ったら一撃殴らせてくれ』

「何でですか！？」

『こっちの世界でまでその単語を聞きたくなかったわ。
先攻クェーサーは地味にトラウマなんだが』

「先輩はいいじゃないですか！？
超融合ありますし対抗できますでしょ！？」

『知るかい。俺の初手に超融合がある確率は低いぞ。
まして、ＨＥＲＯが手札に存在する確率なんて、さらに低い。
同時なんて奇跡的だ。ちくしょう。帰ったら憂さ晴らししてやる』

「完ッ全に八つ当たりですよね！？　で、でもだとしても、
墓地ＢＦくらいには……」

『てめえもう一度言ってみろ。コラ画像作ってネットに流すぞ』

「何ですかその微妙な脅しは！？」

『もう見たくねえよあの鳥どもは！！　５Ｄ’ｓに入るまで出会ってたまるか！
俺はファンデッキが好きだし工夫してガチに勝つのはもっと大好きだが、
ＢＦにだけはもう会いたくねえ！　勝つのにどれだけ努力しろってんだ！
それこそガチガチの構成にしなきゃならんだろうに！？』

「……先輩のトラウマを垣間見た気がします」

『ガチなんてぶち壊してやるぜフウーハハハハアー！！』

「壊れたー！？」

↓　続かない

＊　＊　＊

というわけで申し訳ありません。
ありゃ嘘でした。正確には本土編です。

そんなわけで、まずは海野さん編です。
みょんなことになってます。あれ、これなんてエロゲ（

ええ、作者の私が言うのもアレなんですが、
御堂ってどうしてこうも素晴らしく嫉妬を誘発させる人間なんでせう（
爆発したまへ。

ちなみに、私はファンデッキ大好きです。
ネタとまでは行きませんが、ガチに勝てれば万々歳です。
一度、風林火山＋ＨＥＲＯという趣味ばかりのデッキで友人のガチを追い詰めたときは、
かなり嬉しかったことを覚えています。やっぱり敗北しましたが（

ちなみに、一発キャラなのはさびしいので彼に再登場していただき

ました。
特に意味はありません。理由はありません。
ただ若本成分が足りなかっただけです（

というわけで、次回以降きっちりとカイザー編です。
次回は今回の完結編。ついでに、ちょっとずつ今回の本土来訪の目的を果たしていきます。

それでは。

４１束目：認可（前書き）

更新遅れました。申し訳ありません；

41束目：認可

場に現れるのは、巨大な魚。
古代魚（シーラカンス）。
遥か古代よりその姿を変えず存在する魚。
それをモチーフとした、魚族最強のカード。
場を一気に制圧するその効果は、相対する側から見れば脅威と言うほかない。

「生贄とした《オイスターマイスター》の効果により、
場に《オイスタートークン》を特殊召喚！」

【《オイスタートークン》　攻　０　／　守　０】

「そして、《超古深海王シーラカンス》の効果を発動しますわ！
手札を1枚捨てることで、デッキから、
レベル4以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚できますわ！

《光鱗のトビウオ》を捨て、デッキから《レインボー・フィッシュ》、
《深海王デビルシャーク》、２枚目の《オイスターマイスター》を特殊召喚しますわ！」

【《レインボー・フィッシュ》　攻　１８００　／　守　８００】
【《深海王デビルシャーク》　攻　１７００　／　守　６００】
【《オイスターマイスター》　攻　１６００　／　守　２００】

海を割って現れる、４匹の魚。
いずれも攻撃力は高く、一見すれば海野さんの優勢に見える。

いや、実際に優勢と言えるだろう。
いずれも、攻撃力は魚族の中でも優秀なものばかり。
その上、デビルシャークは対象を取らない罠を無効とし、
オイスターマイスターは言わずもがな……戦闘以外で墓地に送られれば、
その時点でオイスタートークンを生成する能力を持つ。

また、いずれもアトランティスの効果によって強化されている。
下級モンスターの基準の前後を取ったその攻撃力は、
強いと感じるより圧巻と言えた。

――しかし。

「この効果によって特殊召喚されたモンスターは、
いずれも攻撃できず、効果も無効化されますわ」

そう。
このデメリットが存在するからこそ、
ああまで一方的な展開が可能となるわけだ。

でもなければ、既に制限カードに指定されているか、
もしくは、召喚制限が厳しくなっていることだろう。

「問題ありませんわ。装備魔法、《戦線復活の代償》を発動！
場の通常モンスター……レインボー・フィッシュを墓地へ送り、
自分か相手の墓地からモンスターを特殊召喚できますわ。
私（わたくし）の墓地の《光鱗のトビウオ》を特殊召喚！」

【《光鱗のトビウオ》　攻　１７００　／　守　１０００】

光属性故にアトランティスの効果は受けないものの、その効果は強力だ。

特に、こうして魚族が大量展開されている場面では――。

「光鱗のトビウオの効果を発動！
光鱗のトビウオ以外の魚族モンスターを生贄に捧げることで、
場のカードを1枚破壊できますわ！
まずはオイスタートークンを生贄に、
1枚、伏せカードを破壊させていただきますわ！」

「……《和睦の使者》、発動」

防御用のカードを仕込んでおいたのは、この展開を見越していたからだろうか。
ともあれ、あの2体の攻撃が通れば、間違いなくライフは尽きる。
そういう意味では、選択としては間違ってない。

「次、オイスターマイスターを生贄に、
2枚目の伏せ（リバース）カードを破壊しますわ！」

「チェーン。《停戦協定》。
裏守備の場のモンスター……を、全て、表側……守備表示に、変更。
その後、場の……効果モンスター、1体……に、つき、
５００、相手に……ダメージ」

「くうっ……！」

《停戦協定》――。

２枚が２枚ともフリーチェーン。
流石にそこまでやるとは思わなかったが、
これはこれで一つの才能と言うべきか。

ともあれ、海野さんに向かうダメージは２５００。
残りは１３００、か。

その上、シーラカンスもトビウオも、このターンに召喚したものだ。
表示形式の変更は不可能。手札もゼロ。

「くっ……ですけど、墓地に送られた《オイスターマイスター》の効果により、
場に《オイスタートークン》を特殊召喚！」

【《オイスタートークン》攻０／守０】

「そして、光鱗のトビウオの効果により、
今しがた生成されたオイスタートークンを生贄に、
マシンナーズ・ディフェンダーを。

深海王デビルシャークを生贄に、
マシンナーズ・ギアフレームを――破壊！」

しかし、ここまで到達してしまった以上、海野さんのすべきことは――無い。
脅威が排除されたのも確かだが……。

「ターンエンドですわ」

「……ドロー。手札から……永続、魔法。
《機甲部隊の最前線（マシンナーズ・フロントライン）》、発動。
機械族……戦闘で、破壊、された……とき、
同じ属性、で、攻撃力の、低い……機械族。
デッキ、から。特殊召喚でき、る」

イレンのデッキは【マシンナーズ】。
よって、まず間違いなく――そのデッキのほとんどは、
地属性の機械族によって構成される。
更に。

「手札……レベル8、の《マシンナーズ・カノン》……墓地へ、送

って……。

墓地、の……《マシンナーズ・フォートレス》、特殊召喚……」

【《マシンナーズ・フォートレス》　攻２５００／守１６００】

これだ。

少し油断すれば、まず間違いなくフォートレスが蘇生される。

それも、たった1枚のコストによって。

……本当、面倒なことだ。

「……マシンナーズ・フォートレス……で、

超古深海王シーラカンス、に……攻撃」

「なっ!?」

自ら攻撃力の勝るシーラカンスへと飛び込み、

要塞（フォートレス）は爆散する。

「マシンナーズ・フォートレス……戦闘、で……破壊された、とき。

相手の場の、カードを……破壊、できる。
超古深海王シーラカンス、破壊」

「くっ！」

爆発に巻き込まれ、沈んでいくシーラカンス。

……しかし、こうも簡単に撃破されてもいいものなのだろうか。
仮にも「王」だし……何より、場が海だし。

機械って、普通は錆びつくもんじゃないのか。

それよりも、この自爆特攻によるダメージは５００。
実質的な初ダメージが自爆特攻というのも、
海野さんにとってはある意味で屈辱的だろう。

「機甲部隊の最前線（マシンナーズ・フロントライン）……効果。
マシンナーズ・フォートレス……の、攻撃力、２５００――以下の、
地属性、モンスター……を、デッキ、から。特殊召喚。
《マシンナーズ・スナイパー》……特殊、召喚」

【《マシンナーズ・スナイパー》　攻　１８００　／　守　８００】

まずい、と海野さんは呟いた。

トビウオの属性は光。アトランティスの効果は受け付けない。
よって、攻撃力の上昇も無く、１８００の攻撃力を持つスナイパーには敗北する。

しかし――本当に特化してるのな、あのデッキ。
スナイパー、２枚目だぞ。攻撃力が１８００だと言うのなら、ギアフレームの方がより汎用性も高いだろうに。

「……攻撃」

「くっ！」

撃ち出された弾丸が、トビウオを貫く。

ダメージはたったの１００――とはいえ、
海野さんのライフは既に１３００。

たった１００であっても、これで残りライフは１２００。
１００、ライフが減少したとしてもあまり変わらないのが現状だが、たった１撃で削り取られるライフであることには変わりない。

「……手札、の……《パーフェクト機械王》……墓地。
マシンナーズ・フォートレス……蘇生」

【《マシンナーズ・フォートレス》　攻　２５００　／　守　１６００】

「……終了」

「くっ……私（わたくし）のターン、ドロー！
――！　《素早いマンタ》を守備表示で召喚しますわ！」

【《素早いマンタ》　攻　８００　／　守　１００】

「更にこの召喚時、《激流葬》を発動しますわ！」

激流葬って。

いや、別に悪いわけじゃない。
良いカードだ。うん。《即神仏》を入れるよりは、よっぽどいい。

ただ、何で今まで発動しなかったのだろう――と考えて、
俺はある一つの考えに行きついた。

これまで、イレンはほとんど手札を切らさなかった。
それはつまり、フォートレスの蘇生のためのカードが、
絶えず手札に存在している可能性があった、ということだ。

だが、現在の手札はコヴィントンのみ。
レベルは4だが、もう1枚、レベル4以上の機械族が、
イレンの手札に来なければ、フォートレスは蘇生できない。

また、素早いマンタの効果も発動する。

カード効果によって墓地に送られたとき、
同名カードを任意の枚数、場に特殊召喚する。

場を固めることもでき、現状で使うのが効率がいい……ということだろうか。

仮に次のターンにフォートレスが蘇生したとしても、
壁は2枚も存在している。

ともあれ――。

「《素早いマンタ》の効果を発動！
このカードがカード効果によって墓地へ送られたとき、
デッキから任意の数だけ、《素早いマンタ》を特殊召喚できます

わ！

《素早いマンタ》を2枚、守備表示で特殊召喚！」

【《素早いマンタ》　攻　８００　／　守　１００】

【《素早いマンタ》　攻　８００　／　守　１００】

「……ターン、エンドですわ」

「……ドロー。

……魔法（マジック）カード、《名推理》……発動」

「相手……私（わたくし）がモンスターのレベルを宣言し、

通常召喚が可能なモンスターが出るまで、

デッキからカードをめくるカードですわね。

……確か、宣言したレベルと同じカードであれば、

全て墓地に送られますのよね？」

こくり、と、イレンはわずかに首肯する。

「……でしたら、レベル7を宣言しますわ」

恐らく、海野さんの狙いは、もう1体のフォートレスを召喚させないこと。
しかし――それは、危険だ。

「……1枚。《ブレイク・ドロー》……。
2枚……《機械複製術》……3枚、目……。
……レベル、4。《神機王ウル》」

イレンのデッキは、あくまでも【マシンナーズ】。
よって、そこに投入されているモンスターのレベルは、
7や8といった上級モンスターよりも、
レベル4のモンスターの方が多い。
恐らくは、それを狙っていたのだろうが……。

「くっ……！」

「《神機王ウル》……特殊、召喚」

【《神機王ウル》　攻　1600　／　守　1500】

相手モンスター全てへの攻撃を可能とするモンスター、か。
確か、相手にダメージを与えることができない、といった効果だったはずだ。

「手札……《督戦官コヴィントン》、……召喚」

【《督戦官コヴィントン》　攻　１０００　／　守　６００】

「神機王ウル……で、素早いマンタ……攻撃」

１枚目のマンタが撃ち抜かれ、破壊される。
そして、再度の攻撃も――。

「神機王ウル――相手の、場……全て、の、モンスター。
……１回、ずつ……攻撃、可能。もう、１枚……攻撃」

「なっ！？」

なすすべもなく、破壊されてしまう。

「督戦官コヴィントン……で、直接攻撃（ダイレクトアタック）」

「くぅっ！」

当然、これで場を一掃されてしまえば、
コヴィントンの攻撃は確実にとおってしまう。

残りライフ――２００。

手札は無い。伏せカード（リバース）も無い。
そんな状態で、どう逆転するのか――。

常人であれば、そう考えることだろう。

俺も、恐らくは似たようなことを考える。
無理だ、と思う。

だけど――海野さんの目は死んでない。

ただ、この勝負に勝つことだけを見すえている。

当然――この勝負に決着をつけるカードも、頭に思い描いているだろう。

「終、了」

「私（わたくし）のターン――ドロー！」

引き抜いたカードを視認する。

瞬間――海野さんの口元に、笑みが浮かんだ。

「手札から、《深海の怒り（レイジ・オブ・ディープシー）》を召喚しますわ！」

【《深海の怒り（レイジ・オブ・ディープシー）》　攻　０　／　守　０】

「深海の怒り（レイジ・オブ・ディープシー）のレベルは５。

でも、アトランティスが存在しているので、生贄は必要ありませんの」

だが、だとしても攻撃力は２００。

通常の場合であれは、「ふん、たかが攻撃力ゼロで何ができる！」

なんて言って、相手が死亡フラグを立てることだろう。

だが――。

「深海の怒り（レイジ・オブ・ディープシー）の効果は、
墓地の魚族・海竜族・水族モンスターの数に応じて、
その攻撃力を上昇させることですわ。その上昇値は、１枚につき５００！
現在、墓地に存在する該当モンスターは９枚！
よって、その攻撃力は４５００アップし――４７００！」

墓地へと送られたはずのモンスターが、
魚が集まり、形を成したかのような深海の怒り（レイジ・オブ・ディープシー）の、
その内部へと突入していく。

そうして、その攻撃力も――上がる。

「これで終わりですわ！　深海の怒り（レイジ・オブ・ディープシー）で、
督戦官コヴィントンを攻撃！」

――言葉を発した、その直後。

海の「神」とでも言うべき威容の、
その右腕に、三つ又の槍が現れる。

それを、そのまま――。
突き刺した。

シンプル。故に強烈な一撃。

その攻撃力の差は３７００。当然ながら、元々のライフの殆どを奪い尽くすことになる。

当然、３５００しか残っていないイレンは、それに耐えることは――できない。

デュエルの終了を告げるブザーが、周囲に鳴り響いた。

＊　＊　＊

「……くそっ」

俺は、またも走っていた。

2日連続。こうも立て続けに走り続けていると、
自分が何かやらかしたのではないかと錯覚してしまう。
あるいは、マラソン大会にでも出場するのだろうか。
いや、そんな事実はどこにもないんだが。

海野さんとイレンとのデュエルが終わった直後、
俺はイレンを誘導し、海野さんの家から退散させた。
その理由としてはただ一つ。
カイザーの試合の時間が差し迫っていたからだ。
非情に心苦しいのだが、これも俺の役割なのだから仕方がない。
しかし――間に合うのだろうか。

こんな街中で走っている俺を怪訝に思うような視線はともかく、
時折、俺の方を見て噴き出すような人や、
あるいは目を剥くような人がいるのは、
精霊が見えるということの表れだろうか。
そりゃそうだ。俺の背後を見ればスズがいる。
空飛ぶ幼女を連れて走り回っているんだ。驚くのも無理は無い。

『えっと……あ、あとどのくらいです！？』

「……5分……で、駅にたどり着けるか――」

今はまだ、長距離用の走り方だが――短距離用の走り方、というより、もっとペースを上げれば、あるいは間に合うかもしれない。

いや、事故起こすかもしれんが。

「……携帯、電話」

「え!?」

「……鳴って、る」

言われて携帯を取り出すと、確かに着信音が鳴っていた。

しかし、俺の設定したはずの着信音ではない。

何故マクロスなのだろう。

しかもF。トライアングラーか。いい曲かもしれんが何故このタイミングでこの曲?

……六条だな。

あのお?(バカ)、帰ったら問い詰めてやる。

……しかし、見たことの無い番号だ。
誰だろう？　そう考えて、通話を始める。

「もしもし？」

『もしもし。先輩ですの？』

「……海野さん？」

何故海野さんが俺の携帯の番号を――？
と、一瞬はそう思ったが、よく考えりゃ六条が知ってるな。
あいつに聞けば分かるか。
足を止めず、電話に応対する。

「どうしたんだ？」

『いえ、あの方、先輩の差し金ですわね？』

「ああ、まあそういうことになるのかな。
勝てたのか？」

わざと、知らない風を装って聞いてみる。
俺はあの場にいたから、結末は知っているのだけど。

『ええ。勝てましたわ。……お父様も、認めてくれる、と』

「よかったじゃないか！」

『ええ。これで、まだ皆と会えると思うと……』

くす、という笑い声が、電話口から聞こえてきた。
とりあえずは安心したのだろう。
六条や宇佐美さんと話すような調子で、海野さんは続ける。

『私（わたくし）は、明日から学園に戻りますわ。
先輩はどうするんですの？』

「多分、3日後あたりには帰る。
その旨は皆に話してあるから、気にしないでくれ」

『分かりましたわ。……ですけど、先輩。
一つお聞きしてよろしいですの？』

「何だ？」

『……元々、同郷ということで、先輩と有珠が仲が良いのはいいんですの。
ただ――思うに、少し、仲が良すぎませんの？』

「……はぁ？」

仲が良い？　いやいやいやいや。

「俺とあいつは別段仲は良くないぞ。
むしろ俺はあんまり好きじゃない」

『……本当ですの？』

どことなく疑わしげな声音。
どういうこった？

「……あー、分かった。あいつと接触する場合が多いから、
そういう風に錯覚してしまっただけだろう」

『……だったら、何であんなに無駄に先輩の情報を知ってますの？』

は？

『さっき、電話してみたら……その、電話番号だけじゃなくて、誕生日と血液型、それから身長体重、家族構成とか、実家の住所なんかも知ってるようですのよ？』

「……」

『……』

「……教えた覚え、ねーんだけど」

『ですわよね……』

……なんだあいつは。

だんだん恐ろしくなってきたぞ。

いや、うっかり口走ってる可能性もあるけど。

……ああ、いや、レイが言ったのかな。

ははは。あの子には、今度十分に人の個人情報を漏らすなと言っておこう。

六条のことだし、きっと面白がってるんだろ。
あの程度の情報なら、レイが知っててもおかしくないやな。はっはっは。

『あ、そういえば、先輩の部屋の棚の、
引き出しの底板の裏側におかしなゲームが隠してあるって話でしたわ』

「今すぐに忘れてくれ！？」

あの大馬鹿、何で俺の部屋の事情を知ってるんだ！？
絶対面白がって俺の部屋に突入しただろ！
主にレイか誰か引き連れて！

というかそれを人にバラすな！
一応ちょっと色々と違反しちゃってるんだよ！
主に年齢制限とか！　ただのゲームじゃないのが肝だぜ！！

『……巧妙すぎますわね』

「だから忘れて！　お願い！　俺の心死んじゃう！」

『ただ――少し、驚きましたわ』

「そりゃ驚くでしょうよ！」

俺は一応先輩である。

しかも、一応とはいえ、後輩である海野さんの手助けをした立場である。

そんな人間がエロゲを持っていると知られてみろ。

驚かれるどころか幻滅されるわ！

『いえ、そういう意味じゃなく……今まで、超然とした人間だったのに、

急に近しく感じるようになった、ということですわ』

「は？」

『何の見返りも無く人を助けるなんて、

そんな人間、普通はいませんわ。

でも……人間らしい部分も、あるんですのね』

「……人間らしい、って……。

いや、そんなに俺、人間らしくないのか？」

『はっきり言いますわ。機械的で超人的で、

おおよそ、普遍的な人間とは違うと言えますわ』

はっきり言われてしまった。

……まあ、間違ってはいない――だろうな。

ああ、と俺は胸中で肯定した。

俺は、そういう風に生きていたいと思っている。

「俺」という人間が形成されたその日から。

だからこそ――だからこそ。

俺は、「こう」なのだ。

ヒーローのようでありたい、と願って。

ヒーローのように行動しよう、と思考し。

結局――人間らしい部分は、消えていく。

機械。超人。間違ってはいないだろう。

俺は「そう」あるよう望んだし、「そう」ならなければならないと断じた。

そう、他人に感じてもらうよう、努力していた。

だからこそ、その認識は間違っていない。
間違っていないように、行動しようとしているのだから。

『模範的な解答と、模範的な行動。適度ならともかく、
それが過ぎれば、いくらなんでも異常ですわ』

「……」

『ですけど、少しでも人間らしい部分を見ることができて、
身近に感じた、とでも言うべきかもしれませんわね』

「そっか」

俺はふ、と軽く息をつく。

――ま、どっちでもいいさ。

機械と思われようと、人間と思われようと。
俺は俺であって、行動や思考には何の変わりも無い。
きっと、永遠に、俺は俺のままだから。

『ごめんなさい。少し時間を取ったようですわ』

「いや、気にしなくていい。……それじゃ、また」

『ええ。それでは』

互いに告げ、通話を打ち切った。

久しぶりだったな、と思う。

ああして、俺の性質を看破されたのは、久しぶりだ。

いつまでも、どこまで行っても変わりはしない。

俺はいつまで経っても、あの日のままだ。

いや、「あの日変わったまま」だ、とすべきだろう。

俺の生きてきた道の分岐点。

あの日、あの事件が無ければ、俺は今、ここにいなかっただろう。

いや、今の俺が形作られていなかった、とすべきか。

いずれにせよ、俺が許されざる人間だということには、変わりないけど。

『あ、あの……カズマさん……』

「……？」

どうしたのだろう？

そう考え、スズの方に振り返る。

『時間、が……』

「……え」

時間。

時間。

……あ。

「……乗り過ごした……！！」

電話の応対に精一杯になってしまい、足が止まっていた。

つまり――簡単に言えば、次の電車を待て、ということだった。

＊　＊　＊

都会と言うのは便利なもので、大抵の場合、
電車は分刻みでホームに現れる。

よって、実際には、俺は十分後には電車に乗ることができていた。

しかし、遅れは遅れ。その事実には何一つ変わりないし、
試合の方も――既に、始まってしまっているだろう。

――仕方ない、か。

開始したとしても、入場は可能だ。
よって、チケットは無駄にならないだろうが……それでも、
開始から見ることができないというのは、残念でもある。

くそ、と呟いた。

最初から見ていれば、
あるいはカイザーの精神状態も知ることができるかもしれない。
そう思ってたんだが、この時間帯じゃあ、流石に厳しいか。

「……しかし」

デュエル自体は30分とかからないだろう。
もしかすると、辿り着いた頃には終わっているかもしれない。

「……間に、合う？」

「どうだかな……」

今のカイザーの精神状態を加味すると、
あり得ない話じゃないというのが困る。

流石に、エドの時のようなことは無いだろうとは思うが、
それでも心配であることに変わりない。

あるいは、俺のように凡庸な人間に負けてしまうと考えると――。

「……」

俺は軽く歯噛みした。

エドは優秀な人間だ。天才と言い換えてもいい。
あいつに負けるのならば、まだわかる。

だが、今までずっと、「勝者」としての顔しか見てこなかった俺にとって、
カイザーが負ける姿を見るのは――多少ならず、辛いものがある。

だが、そんな考えではだめだ。

現実を見据えろ。その上で、結論を出せ。
さもなくば、ただの愚か者だ。

『ここです？』

と、スズが俺に問う。

肯定の意味を込め、俺は頷いた。

この場所――先日、エドとデュエルを行ったものとは違い、多少小さなスタジアム。

ここで、カイザーが試合を行っている。

「……行こう」

自分に言い聞かせるようにして呟き、俺は入場口に向かって歩き出した。

係員にチケットを見せ、観客席に入る。

――と。

スタジアム全体を見渡せる場所まで来て、俺は愕然とした。

既にデュエルは始まっている。

しかし、その一方で――既に、終わりかけてしまっている。

圧倒的に――カイザーの、負けの方向で。

相手の場に存在するモンスターは、
《エーリアン・ソルジャー》、《エーリアン・リベンジャー》、
《エーリアン・マザー》の3枚。

カイザーの場のカードは、たった1枚。
《サイバー・ツイン・ドラゴン》のみだ。

既に、カイザーの手元にカードは無い。
つまり――手札は、ゼロ。逆転の見込みは、ほぼ、無い。

対し、相手の手札は3枚。
ここからは見えないが、あれは、恐らく――。

「《シャイニング・アブソーブ》を発動！
お前の場の光属性モンスター、サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃力分、
俺の場のモンスターの攻撃力を上昇させる！」

――メタカード！？

カイザーのデッキの大半が光属性だと分かっていなければ、
絶対に投入してはいないであろうカード。

光属性モンスターの攻撃力を、エンドフェイズまで吸収する――。
それは、少なくとも、
相手のデッキをよく知っていなければできない芸当だった。

「これでとどめだ！　一斉攻撃！」

「ぐあああああっ！！」

聞きなれたブザーが、周囲に響き渡る。

勝利の音。一方では――敗北の音。

自然と舌打ちが漏れる。

成程。カイザーの敗北の原因――単に、精神的な要因だけではなく、
対戦相手による、カイザーへのマーク。メタ。
そういった部分が大きかったのだろう。

光属性に対するメタとして考えるなら、Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブジャスティス）。
あるいは、《閃光を吸い込むマジック・ミラー》や、《ゴーレム》。

機械族メタを考えれば、《システム・ダウン》、《酸の嵐》、《電磁蚊（モスキート・マグネ）》、《エレクトリック・ワーム》……か。

特殊召喚を多用するという性質を考えると、それに対するメタを積んでいてもおかしくはない。

エドに敗北して以来、スポンサーとの契約も打ち切られ、人気も落ち目だ。

そこに他者――特に、カイザーを利用しようとする人間の意思が、多少ならず介在している可能性がある。

地下デュエル場へと連れて行くことになる男がそうであるという可能性も、

無いではない――どころか、この推察の上では、十分にありうる。

そうなると、今後の方針は決まった。

黒幕がいるのであれば、その人物を捜し出し、叩きのめして二度とこんな真似をできないようにする。

その前に、まずは、カイザーのメンタル面だ。

意気消沈したような表情で会場を去るカイザーを見送り、俺は、会場の出口へと向かった。

本土に来た目的を、全て遂行するために。

41束目：認可（後書き）

↓　本日のミニドラマは臨時休業です。

というわけで申し訳ありません。
大会の遠征などで、数日間留守にしておりましたので、
更新が少々遅れてしまいました。
デュエルの続きは早めに上げたかったんですが……；

そんなわけで、本土編も佳境。
次回はどうにかします。どうにかなります（

そんなわけで、今回は短めですがこんなところで。

ミス等あれば、ご指摘の方いただければ助かります。

それでは。

↓色々と修正しました。
正直、もう私は小説書くのやめた方がいいんじゃないかと思ってきました。

自分の馬鹿さ加減に呆れ果てました。
死ね、俺。

プレイングミスの件に関しては触れないでいただけると助かります。
私の頭がいろいろと混乱していますので。
本当に辞めそうです。

などと暴言を吐いている時点で色々とおかしくなっているのは明白ですね。
しばらく謹慎したいと思います。

それでは。

幕間：手記（前書き）

今回はおまけ編です。デュエルシーンはありません。
また、短編「承認欲求」を見ていないと分からない部分が多いため、
ユーザーページなどからそちらを閲覧してからこちらを見ることを
お勧めします。

幕間：手記

２０ＸＸ／７／１３

今日――４回目の誕生日となるこの日、日記帳を両親に購入してもらった。不定期になるだろうと予測はできるが、今後、逐一この日記に、自身の経験した出来事を記述していこうと思う。
まずは、自分自身のことになるだろうか。以前の名前は、検閲がかけられているのか、不思議と思い出せない――考えることを拒否してしまっているのだが、現在の自分の名は「御堂和真」という。
不思議なものだ。以前の名前の名残は未だに頭の中にあるというのに、今はすんなりとこの名前を受け入れている。転生というものの弊害とも言おうか。
ともあれ、今後の生活には支障が無いだろう。
あっても困る。

２０ＸＸ／７／１５

さしたる問題は無いのだが、どうも、この体のスペックは、以前の肉体に比べて高いようだ。
鍛えれば鍛えるだけ、能力が身についていく。筋力も、以前とは比

べ物にならないほどだ。瞬発力。スタミナ。他の部分に関しても、非常に優秀と言える。
そもそも、凡人以下だった以前の肉体が異様なのだろうか。
ともあれ、これから鍛えていけば、一般人以上の能力を発揮することはできそうだ。
成長の阻害とならない程度の筋力トレーニング、その他、運動技能を取り込むことを今後の課題とする。

２０ＸＸ／７／１８

本日、自分でも少しばかり不思議に思うような体験をした。
今の自分の知能は、あくまで大学生当時と同じく２２歳前後のものを保っているはずだ。しかし、どうにも「子供」の「御堂和真」としての意思もちゃんと残っているようだ。ちぐはぐに混ざり合った精神状態とも言うべきか。
あるいは、「山月記」のように、外見に精神が引っ張られていると見るべきか。いずれにしても、興味深い。この事象については調べてみる価値があるかもしれない。肉体的な部分もあるだろう。以前の自分なら、深夜の３時まで起きていることは苦でもなかったが、今では９時になると眠くなって仕方がない。そういった部分も考察に入れることとする。

２０ＸＸ／７／２３

驚くべき発見をした。あの海馬コーポレーションが、この世界には存在しているのだ。

となると、ここは遊戯王の世界と見るべきだろうか。いや、それ以外にはありえない。
まだ海馬瀬人は社長ではないものの、社長に就任するのは時間の問題だろう。

以前から遊戯王に関しては結構な頻度でプレイしてきたが、それが役に立つときが来るとは思わなかった。ただ、問題となるのは、果たして、昔、自分の用いていたカードを使えるかどうかだ。

ある程度、他のカードの勝手を知っているのでなんとかなると思うが、これは少し考えるべきかもしれない。いずれにせよ、原作への介入はほどほどに……極力抑えよう。

２０ＸＸ／７／２５

世間一般的に、俺はいわゆる「天才」であるらしい。
言われてみればその通りだ。そもそも、言葉を明瞭に発し、難しい言葉も平気で使い、あるいは様々な知識を持ち、吸収していく子供など、少なくとも、俺は見たことはない。元々の運動神経はかなり良いのだから、「俺」でなくとも、運動に関しては神童と呼ばれるほどだろう。
しかし、俺が介入してしまったことにより、俺の知識、意識をそのまま移されてしまった。

時折起こる意識の混濁。あれは、元々の「御堂和真」としての意識がそうさせているのだろう。
でなければ、なぜこのような現象が起きているのか皆目見当がつかない。

２０ＸＸ／７／３０

時折考えるのだが、この世界には、俺と同じような境遇の人間はどれだけいるのだろう。
俺だけという可能性も否定はできないが……。そうした場合に必要となるのは、やはり他人との絆、つまりは人脈だ。生前は、そもそも他人と会話すること自体稀だったため、俺がどれだけ望んでも、決して人脈は広がらなかったものだが、こちらでは、可能な限り増やしてみたいと思う。

まずは親の周辺。特に、隣近所からだ。
挨拶に回るのも悪くは無い。あるいは、もっと別なことをするべきか。

いずれにせよ、同じ境遇の人間を捜すというのは悪くない。一つの方針として挙げておこう

２０ＸＸ／８／９

この世界にも、俺の世界と同じような文化はあるようだ。
例えば、テレビ番組。いわゆる「深夜枠」のアニメも数多く存在する。
ライトノベルや漫画、特撮といったサブカルチャーについても発展しているようだ。
インターネットの掲示板などに関しても、元の世界とほぼ変わらな

いような反応が見られた。
しかし、人間の反応に関しては、どことなく不自然にアニメ的で、リアクションもオーバーだ。
そういった点を鑑みれば、やはり、自分が他の世界に来訪したことを強く実感させられる。

２０ＸＸ／８／１０

先日の続きとなるが、そういった事情があることから、この世界の人間は、殆どがアニメのキャラクターのようなものだと言っても相違ないかもしれない。
いや、全てがアニメのキャラクターと言えるだろうか。あるいは漫画か？
いずれにせよ、この世界は全てがアニメと認識すべきかもしれない。
となると、深夜アニメのような展開が、随所で起こっているということだろうか。

普段の俺ならうひょおおおおなどと奇声を上げているところだろうが、しかし、そもそも俺が他人に好かれるはずはない。好かれていいわけがない。
そんな資格は、リオが死んだその瞬間に失われたのだから。
俺が、誰かに好かれることはない。
それでいい。

２０ＸＸ／８／１６

子供であるというのは、存外に辛いものだ。
非力であることがまず一番に挙げられる。また、仕草や口調なども、子供らしくせねばならない。
言うなれば、周囲から「そう」あることを望まれているのだ。
子供なのだから子供らしく……ということだろうか。
自分自身のアイデンティティが崩されていくような感覚がある。
だが、子供なのだから仕方がない。しばらくは、我慢しておくことにしよう。

２０ＸＸ／９／２０

ひと月も間が空いてしまった。ただ、今回に関しては仕方がない。
両親の夏休みということで、海外旅行に行っていたのだから。
俺個人としては、海外にはあまり興味は無かったのだが……まあ、アメリカは良い場所だった。
しかし、この時代でもＩ２社はあるのだという事実に驚いた。
両親は早熟な俺に対し、この時期から少なからず期待をかけているようで、
こういう会社に入ってくれたらいいなあ、などと呟いていたのが印象的だった。
……まあ、どこの親も、言うことは変わらないということだろうか。

２０ＸＸ／９／２９

自分自身の現状を冷静に把握しよう。
さて、自分自身、少々ヲタな部分……サブカルチャーに傾倒してい

る部分は多いものの、こちらの世界に来てまでアニメや漫画にハマってしまうとは、思いもしなかった。
精神的に成熟していても、外見的には子供だ。傍から見れば、４歳前後の子供が深夜アニメを食い入るように見ているという、奇妙、奇怪、かつ奇天烈な光景なのだろうが……好きなものなのだから仕方がない。
そう、俺は決して悪くないのだ。悪いのは面白いアニメを制作する制作会社の方だ。

……この日、俺は、可能な限り、雑学を含めた勉強に努めようと決心した。
これじゃあただのダメ人間じゃないか。

２０ＸＸ／１０／５

元の世界との相違点として、こちらの世界では、想像以上に日本経済が発展していることに気が付いた。

元の世界では、諸外国に後れを取っていたものの、大企業の海馬コーポレーションがあることから、経済的には諸外国と比べ、かなり潤っていると見ても問題はあるまい。とはいえ、Ｉ２擁するアメリカには、かなり劣っていると見ていいのだが……。
万丈目財閥も存在していることもあり、諸外国以上の経済力があるのは確かだろうと思われる。

２０ＸＸ／１０／１２

元々、経済的な面に関しては専門外だったのだが、やはり、この日本の経済力は、元の世界から見ても異常な域にあるようだということを、今日、ようやく理解した。
海馬コーポレーションの躍進と、それに伴う周辺企業の経済成長。言うなれば、平均が底上げされていると見るべきだろうか。
一つの企業の業績だけが伸びているのではなく、全体が伸びている。デュエルディスクの開発にでも乗り出したのだろうか？　だとすれば、この成長具合も納得できるものだ。海馬社長の手腕は見事なものだし、何より、今後のデュエルディスクの発展具合を見れば、下請けの会社の業績が伸びるのも不思議とは思えない。
ただ、やはりカードの開発に関してはＩ２社が特許を握っていることもあってか、やはり、経済的な順位はアメリカがトップに君臨している。

元々の世界の不景気が異常であるというのであれば、こちらの世界の慢性的な好景気も、やはり異常と言うべきだろう。

今後、海馬コーポレーションがカードの開発の権利を握ったとき、どのように経済が変化するのか、少し楽しみに思えてきた。

＊　＊　＊

２０ＸＸ／３／１８

好景気なのは構わないし、そもそもそうあることの方が好ましいの

だが、仕事の時間が増えるというのは億劫なものだろうというのが、俺の正直な感想だ。

不景気でも好景気でも、仕事の量というのは増えていくものらしい。不景気であれば、業績を伸ばすため。好景気であれば、業績を落とさないため。

両親に関しても、そのあたりは適用されているようだ。

労働基準法は守られているようだが、今後、帰ってくる時間が遅くなるとのことだ。

共働きと言うのは、子供を家に残して仕事に行く必要がある。

俺は全く構わないのだが、どうにも子供を一人で残しておくことには不安があるらしい。

当然だろう。俺だってそう思う。ただ、頭脳に関しては子供ではないのだが。

よって、両親不在の間は、隣の家……早乙女さんの家に預けられることが決定した。

早乙女さんの家もそろそろ産休に入るらしく、丁度いいとのこと。

近所付き合いとして考えても、俺にとっては好都合だ。

４月以降、早乙女さんの家に厄介になることにする。

２０ＸＸ／４／８

特に不都合もなく、四月に入って一週間が過ぎた。

早乙女さんちの夫婦は、比較的晩年の夫婦だ。

３０代後半。その年で出産と言うのも、元の世界では珍しくはないのだが、やはり、こちらの世界では少々珍しい、という見方が一般

的だろうか。
俺の感覚としては、そういうこともあるのだろう、と考えるのだが……。

望んでも生むことができなかった体質らしい。これまでに何度か流産を体験したとか。
この年で本当に授かって、安心して産むことができるというのは嬉しいのだろう。
俺が厄介になることも、快く承諾してくれた。

早乙女さんちの両親からは、兄役としてよろしく頼む、と言われた。
兄、か。俺に「兄」がちゃんと務まるのだろうか？
これまでのことを鑑みれば、俺は兄としては最低の人間だった。
だったら、その反省点をよく噛みしめて、改めて「兄」として再出発してみようか？
それとも、兄としての役割は務まらないと考えるべきだろうか。
どちらを問いかけても、答えてくれる人間はいない。
となれば、自分で考えるしかないのだが……。
まだ時間に余裕はある。よく考えて、今後の進退を決めていこう。

２０ＸＸ／５／２

あとひと月で、早乙女さんちの子供が生まれるそうだ。
嬉しいと言えばいいのだろうが、俺はまだ、自分の進退を決めきれていない。
果たして、俺は「兄」としての責務を果たせるのか？

果たせるとしても、これまでと同じように、また嫉妬の感情に支配されないのか？
そういった疑問が渦を巻く。相変わらず、俺は最低の人間だ。

２０ＸＸ／５／１２

過ぎたことは何一つ変わらないということに気が付いた。
確かに、あれは俺が起こしてしまった結果だ。変えようはない。
ならば、これから先は、もう一度俺に与えられたチャンスと思い、心機一転、頑張って「兄」としての役割を果たしていくことにしていこうと思う。
これまで、リオにしてやれなかったことを、「兄」として果たしていく。
多分、俺にはその義務がある。

リオを殺してしまったのは俺だ。だからこそ、その罪を忘れてはならない。
「兄」という役割に就いていれば、きっと、その罪を忘れることなく生きていけるだろう。

……だとしても、俺は今後生まれてくるであろう子供を、リオの代用品としてみなすことになりかねない。

駄目だ、それでは。兄そのものではなく、単に兄代わりなのだと言っても、相手は俺の知らない一個人であり、何より、一つの人格を持った人間だ。
代用品として見るなど、もってのほかだということは言うまでもない。

だから、絶対に、俺は「兄」として早乙女さんちの子供と接する場合には、リオの面影を重ねない。
そうしなければ、本当に俺はクズのような人間に成り果ててしまうから。

２０ＸＸ／６／９

予定日よりも数日速い形ではあるが、早乙女さんちの子供が無事生まれた。
少々早いとは言っても、所詮数日程度だ。何の問題も無く生まれてきた。
正直に言って、ホッとした。何度か流産を経験したという話を聞いていたからだ。
子供は女の子だった。また「妹」だというのは、奇遇というか奇縁というか。
名前は「レイ」と名付けられた。……苗字を聞いて色々と考えていたが、どう考えても、ＧＸのキャラクターである早乙女レイ以外は思い浮かばない。
これもまた奇縁とするべきだろうか。いずれにしても、俺のすべきことは変わらない。
彼女を守り、自分の「兄」としての役割を果たす。それだけだ。

＊　＊　＊

２０ＸＸ／５／１６

これで日記も2冊目に入る。
年齢の都合上、俺は来年には小学校に入ることを余儀なくされる。
個人的なことを言えば、ああいった場所に行くのは少々抵抗がある。
しかし、自分の肉体的な年齢を考えれば、それは仕方のないことだ。
多少の恥は我慢し、行かなければなるまい……とは思う。
前世の復習と思うことにしよう。
そもそも、凡人以下であったあの頃とは違い、今の俺は少々物事の吸収が良い。
以前の勉強をなぞる形でやれば、なんとかなるのではないかと思う。
あまり関係は無いが、この日記が徐々に「早乙女レイ観察日記」と化しているのは留意すべきだろう。
実害は無いとはいえ、これではまるでストーカーだ。

２０ＸＸ／５／２９

この世界でカードが流通し始めていたのは知っているが、ここまで爆発的に普及するとは思いもしなかった。
数日前には、デュエリストキングダムの中継があった。
現役当時の環境を考えれば、凄まじいまでのパワーデフレと言える。
が、しかしながら、ああいった魅せデュエルができるというのは羨ましい。
個人的にも、ああいったデッキを作るのは好きだったのだが、いかんせん、カードは持ってない。
とはいえ、持っていてもいなくても、生活するには支障はないだろ

う。
ただ、いずれ手に入れたときのことを考えるのは悪くないかもしれない。
今後、間違いなくカードが重要となるということを考えれば、そうするのが一番だろう。
両親に頼んで買ってもらうという方針も悪くはない。
ただ、「買ってもらう」という表現だと、かなり情けないような気もするが……。
そのあたりは置いておこう。今の俺は生活能力の無い子供だ。
元々、普段から、さして自分の要望などは口にしなかった。
こういう時のわがままくらいは聞いてくれるだろう。

２０ＸＸ／６／２

両親との交渉の末、ひと月当たり３０００円の小遣いがもらえることとなった。
あまりにこちらからの要求が無かったため、若干心配になっていたらしい。
当然か。まだ幼い子供だというのに、ロクに夢や欲望が無いとなると、心配するに決まっている。

さて、そもそもそうなるとカードを購入する必要があるだろう。
近辺におもちゃ屋などのショップは無いため、次の休日にでも頼んで行ってみることとする。
黎明期故にそこまで強力なカードは無いと思うが……いや、逆か。
いずれにせよ、この時期から始めていて損は無い。
スタート地点が違うということは、それだけで有益なのだから。

２０ＸＸ／６／８

パックをいくつか買いあさってみたところ、驚くべきことが分かった。
元の世界のものと相違点はあり、また、パックの名前や外観はまったくの別物、加え、ストラクチャーデッキもいくつか発売されているが、やはり完成度は低い。

しかし、そうでありながらも、今の時代に存在するはずのないカードまでもが存在している。
これはどういうことだろうか。俺がいることで歴史が変わったのか、それとも――？

いずれにせよ、疑問は山積みだ。今後、どれだけ解消できるかを課題とし、今日はこの疑問を解決することを放棄することとする。

――以下3年間ほど、レイのことに関する記述が続くため割愛――

＊　＊　＊

２０ＸＸ／９／２５

不思議なことも世の中にはあるものだ……と思う。
転生などという奇怪な事象を起こした俺が言うのも問題だが。

つい先日、海馬コーポレーションから俺宛に小包が届いた。
中身は、当然と言えるのかそうでないのか、その殆どがカードだった。
いくつか、デッキケースなども散見されるが――しかし、驚くことに、それらカードは全て、以前俺が所有していたものだった。

手紙の内容を読むに、これらは全て、試供品――というより、モニタ用の試作品であるらしい。
言われてみれば確かに、こちらの世界では見たことのないカードが多い。
ペガサス会長がシンクロの概念を築き上げたのは去年のことだが、シンクロモンスター、ひいてはチューナーが世に普及するまでにはまだまだ時間がかかる。その普及と有用性の実証のため、ひいては試作品のカードの普及のため、データを取りたいという名目のもと、送られてきたものであるようだ。
考えてもみれば、漫画版にのみ登場するＨＥＲＯなど、本来存在するはずのないものもある。
いずれ普及することを考えれば、その整合性を取るためであると言えるだろう。
とはいえ、当然ながら、特別な……ボス級の人間が使っていたり、あるいは世界に1枚しか無いなどの設定を持つカードは、殆どないようだ。

例外となるあの3枚……特に、邪神とスターダストに関しては、今後触れないよう厳重に保管することとする。

前者は、三幻神のカウンターという役割であり、本来世に出回っているはずのないものであるため。後者は、今後、歴史が変容しないための措置だ。使い勝手はともかく、使ってはならないカードもあるということだろうか……？

あの白紙のカードに関しては、今はスターダストや邪神と同様の扱いにすることにする。

２０ＸＸ／１０／２

レイの成長には、目を見張るべきものがある。
まだ４歳という幼い年齢ながら、デュエルモンスターズを教えたところ、そのセオリーや戦術、構築の基本までもを瞬く間に吸収してしまった。
これも天才と言うべきなのだろうか。今後、年上の兄代わりという役割故に、勉強を教えるようなことも多々あるだろうが……そうなった場合、どれだけの知識を吸収するのか。
天才と呼ばれるべき人間を長く見てきたこともあり、今更ながら、少々恐ろしく感じてきた。
しかし、それを除けば、やはりかわいい妹分であることに変わりは無い。

今後もデュエルモンスターズを教えてほしいとのことなので、以降も続けて教授することとする。

２０ＸＸ／１０／７

今日、少々恐ろしい経験をした。
デュエルモンスターズを始めたいと言うレイとその両親と共にカードを購入しに行ったのだが、その際、レイが購入したパックの中に、ライトロード一式が揃っていたのだ。
なんてこった。これではレイにライトロードを組ませる以外に思い浮かばないじゃないか。
いや、それでいいのかもしれない。ライトロード自体、かなり強力なカテゴリだ。
世間では、デッキからカードを墓地に落とすという行為全てをデメリットと取られているが、俺は元の世界でのライトロードの優位性について知っている。
ただ、問題になるのはレイがこれを好むかどうか。
もっと別なカードの方がいいと言うのなら、もう少し考えることとしよう。

２０ＸＸ／１０／８

どうも、レイはライトロードを使うことに決めたようだ。
とりあえず、今日の間はライトロードの回し方について教えた。
デッキを墓地に落とすことは悪いことなのか否か。切り札の存在。
それから、墓地アドバンテージの概念と、場の状況とライフコスト。
基本的な部分は殆ど教えたつもりだが……明日にはどうなっていることやら。

２０ＸＸ／１０／９

ワンターンキルされた。

２０ＸＸ１０／１２

ワンキルされた程度のショックなど、どうということはない。
……が、年下――それも、妹と呼んでも差し支えないような女の子にされればたまったもんじゃない。
平静を装えてはいたものの、多少、怪しまれたかもしれない……とは思う。
しかし、改めてデュエルしてみると、その弱点なども浮き彫りになってくる。
一つ目。裁きの龍の召喚に至らない（あるいは、手札に来ない）場合の制圧力の低さ。
ケルビムの召喚を妨害された場合にも同様のことが言える。つまるところ、リカバリーができないこと。

二つ目。罠への警戒の薄さ。こちらに関しては、場馴れだろう。

三つ目。デッキのバランス。魔法・罠が落ちることを警戒して、必要最低限のもの以外は入れないのが主流の考え方だが、レイは逆……とはいかずとも、入れたいものを際限なく入れているようにも感じる。また、デッキ枚数も多い。

それでも回すことのできる能力は素晴らしい。同年代の人間と競うのであれば、まず負けることは無いだろう。ただ、それも絶妙なところで、相手に勝てるかもしれない、と思わせることができる程度だ。

相手が大人、それもプロを超えるレベルであれば、当たり前のように対策されるだろう。
そういう意味で言うなら、今はこのままの……もう少し改良したデッキでも十分だ。
ともあれ、レイのデッキが決まったというのは喜ばしいことだ。
明日から練習相手になってやろう。

２０ＸＸ／１０／１３

またワンキルされた。

幕間：手記（後書き）

そういうわけで、本編中の時系列を遡って御堂の手記を晒してみました。
色々と考察などを織り交ぜておりますので、とりあえずこちらを復帰2弾として。

ともあれ、ご迷惑をかけて申し訳ありませんでした。
次回以降、ちゃんとデュエルシーンも含め、お届けしたいと思います。

短いですが、今回はこのあたりで。

それでは。

４２束目：復権（前書き）

ようやくデュエル部分書いてみました。

……相変わらず妙にグダグダしてるような……；

42束目：復権

自分が正義の味方だとか、
あるいは誰かを救うべき人間であるとか。
そんなことを言うつもりはないし、そもそも俺にそんな資格は無い。
――だけど。
それがどんな人間であろうとも、
誰かを――何かを救うことは、できるかもしれない。
心。
問題となるのはただ一つ、心の持ちようだ。
心の持ち方一つで、力の使い方も変わる。
救うか。あるいは、殺すか。
俺には大した力は無い。誰かを救う資格も無い。
だけど……手を伸ばすことはできる。

俺は、関係者出入り口の前で、カイザーが出てくるのを待っていた。

中に入るなどと、野暮なことはしない。

するつもりも無いし、そもそも、

そんなことをすればカイザーに迷惑をかけてしまうだけだ。

故に、俺は待つ。

待ち続ける。

「……何、で……仁王立ち……？」

「……いや、意味は無い」

何故ならそうした方がかっこいいから。

……まあ、厨二病の延長線上だ。特に理由は無いし、そうする必要も無い。

しいて理由を挙げるとすれば、自分自身を鼓舞するためだろうか。

それも立派に理由としては機能するだろうか。

いや、ありえないな。やっぱり単なるノリだ。

『来たです……！』

と、スズが俺に呼びかける。

誰が。何が。そんな疑問必要ない。

俺は、この場に訪れるであろう人物のことは、
既に予測しているし――何より、その人物以外の人間が、
この場に現れることなどありえないのだから。

多少ならず意気消沈したような表情で、一人の青年がこちらに向かって歩いてくる。

俺の先輩であり、地獄に落ちかけている男。
少なからず面識もあり、交友関係もある――。
だからこそ、俺はこの人のところに来た。

この人を地獄から引っ張り出すために。

「――カイザー」

口を開き、呼びかける。

と、カイザーは、沈痛な面持ちのままに顔を上げた。

これまでに、１度も見たことの無いような表情だ。
少なくとも、学生生活の中では見たことがない。

この場にいるはずのない人物に呼びかけられたからだろう。
驚愕を浮かべ、カイザーは声を上げた。

「……御堂!?」

「こんばんは。お久しぶりです。
元気そう……ではありませんね」

「何故お前がここにいるんだ……？」

「……順を追って説明しましょうか。
これから、時間は空いていますか？」

「ああ、今晩は何もないが……」

「だったら丁度いい。少し、俺に着いてきてくれませんか」

「……。何がしたいかは分からないが、
場所を移すことについては、了承した」

告げ合い、俺たちはスタジアムから場所を移すべく、歩き出す。

時間はともかく、場所が悪い。
人が多いこの場所で話をするというのも、野暮な話だ。

『あの……どこへ行くです？』

ここに来るまでに見繕っておいた場所だ。
――まあ、特にこれといって意味は無いが。

＊　＊　＊

あれから十数分。
俺たちは、都内駅前の喫茶店に来訪していた。

それなりに客も多く、話の内容も、周囲には聞こえない程度の喧騒。
それぞれ、コーヒーを一杯ずつ注文し、向かい合って座る。

軽く息をつき、これから話すべきことを整理する。
さて、何から言うべきか――。

「……まず、一つ。率直に言わせてもらうと、
あなたの調子は、見た限り、そこまで良くはない。
それどころか、学校にいた時期よりも調子は悪いだろう。
あの相手なら、あなたが勝つことは容易だったはずだ」

「……」

それどころか、あのメタすら逆手に取ることができたはずだ。

《オーバースペック》による効果破壊。
あるいは、攻撃全てをいなし、カウンターで攻撃を行う。

この人であれば、本来そのくらいのことはやりかねない。
いや、やって然るべきなのだ。やらなければ、逆におかしい。

「エドに負けてから、とするのが一般的な見解ですが」

「そう……だな。ああ、確かに。その通りだ」

「そして、ピンポイントメタが横行し始めたのも、同じ時期。
……二つ目の質問はこれです。『そう』なった理由に心当たりは？」

「分からない」

と、カイザーは即答した。
率直でいて、また、当然の応答だろう。

そうなった理由が分からないのだから、答えようも無い。
俺だって分かっていない。

そうなると、カイザーが不調を今の今まで引きずっている理由は、
見たところ、エド戦での敗北だけでなく、それ以降の連敗か。

いずれにせよ、俺の言うべきことは変わらないんだが。

そうしてしばらくの間、質問と応答を続けていくと、
店員が、注文していたコーヒーを持ってきた。

熱いコーヒーを喉に流し込む。
苦みと僅かな酸味が心地よい。

チェーン店であること、決まりきったブレンドであり、
淹れているのも素人であることから、決して美味いというわけではないが、
こうしたチープな味が、何よりも落ち着くのは気のせいだろうか。

さて、と前置きして、俺は最も重要な一言を言い放つ。

「これが最後だ。
……カイザー」

――俺と、デュエルしてほしい、と。

告げて、俺はコーヒーを飲み干した。

＊　＊　＊

デュエル万能説を提唱した偉い人（十代）が言っていた。
デュエルすれば、相手のことが容易に理解できる、と。

生憎ながら俺にそんな特殊能力は無いし、
そもそもデュエル自体、互いに分かりあうためのツールとは思っていない。

ただ、カイザーが不調だと言うのなら、その原因は分かるはずだ。
だったら、やる価値はある――。

そう考え、俺たちは、まだ開店している、
海馬コーポレーション傘下のデュエルスペースに来訪していた。

カイザーは仮にも有名人だ。俺は別にどこでデュエルしようと構わ

ないが、
公園などでデュエルしたとして、後でマネージャーなどに文句を言われるのも困る。

互いにデュエルディスクを展開。

ここから先は、一切予測できない展開だ。
ただ、俺は俺のするべきことをするのみ――。

深呼吸し、息を整える。
そして、一言。

「「――決闘（デュエル）！！」」

宣言と共に、デュエルが始まった。

先攻はカイザー。
サイバー・ドラゴンを扱う関係上、
後攻であることすら優位に変えることもあり、
こういう場面では後攻を取ることができて、
良かったとすべきか、マズいとすべきか……。

「俺のターン、ドロー。
手札から、《サイバー・ラーバァ》を守備表示で召喚」

【《サイバー・ラーバァ》　攻　４００　／　守　６００】

初手からいきなり守りを固めてきた……？
サイバー・フェニックスなんかのカードが無かったのだろうか。
いずれにせよ、サイバー・ラーバァが厄介であることに変わりはない。
同時に、対処法を間違えなければ、処理は容易だということも。

「カードを1枚セットし、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！
……手札から、《簡易融合（インスタントフュージョン）》を発動する。
ライフを１０００支払い、エクストラデッキから、
レベル5以下の融合モンスターを融合召喚扱いで特殊召喚できる。
俺は、《アンデット・ウォーリアー》を特殊召喚する！」

【《アンデット・ウォーリアー》　攻　１２００　／　守　９００】

場に現れる、貧弱な姿の骸骨剣士。
その役割は、攻撃をすることでも壁になることでもなく――。

「簡易融合（インスタントフュージョン）の効果によって特殊召喚されたモンスターは、
攻撃できず、エンドフェイズに破壊される。
……だが、それ以外の制約は無い！
俺は手札から、《ジェネクス・コントローラー》を召喚！」

【《ジェネクス・コントローラー》　攻　１４００　／　守　１２００】

「レベル3、闇属性のアンデット・ウォーリアーに、
レベル3の《ジェネクス・コントローラー》をチューニング！
現れろ、《A（アーリー）・ジェネクス・トライアーム》！」

【《A（アーリー）・ジェネクス・トライアーム》　攻　２４００　／　守　１６００】

場に現れるのは、黒色の……どこか、兵器然とした印象を受ける機械。

その左腕には、回転式拳銃（リボルバー）の機構にも似たシリンダーが装備されて

いる。

「A（アーリー）・ジェネクス・トライアームは、シンクロ素材とした、チューナー以外のモンスターの属性によって効果を得る。闇属性のモンスターを素材としたため、光属性モンスターを破壊し、カードを1枚ドローできる効果を得る！」

シリンダーの1部分が瞬き、紫色の光が噴き出した。闇属性の効果を得たという表れだろう。

「手札を1枚――《ジェネクス・ヒート》を捨て、効果を発動！サイバー・ラーバァを破壊する！」

「むっ……！？」

紫電を帯びた光弾が、サイバー・ラーバァを貫く。

サイバー・ラーバァの効果は、攻撃対象に選択されたときに発動するものだ。

仮に何らかの効果対象になったとしても、このターンに戦闘ダメージを受けないという効果は発揮されない。

「トライアームの効果により、カードを1枚ドロー。
……――バトル！　A（アーリー）・ジェネクス・トライアームで直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「クッ……《和睦の使者》を発動する。
戦闘ダメージを全てゼロとする！」

流石に簡単には通してくれないか。

いや、しかし、だとしても――カイザーがこの選択を採るのは、少々おかしい。
仮にこの攻撃が通ったとしても、残りライフは１６００。
十分に反撃はできるし、そもそも、仮に使うのであれば、もっと、危険な場面で使うのが定石だ。

あるいは、モンスターを守ることを考えるか――。

リミッター解除が手札にあると見込んだのだろうか？

余程場を見ていないか、あるいは防がれることが無いと考えていなければ、
そんなことができるような人間は殆どいないだろう。
場に1枚でも伏せ（リバース）カードがあるなら、防がれることを想定に入れるべきだ。
更に、今は後攻1ターン目。防ぐ手段を手札に握っていても、なん

らおかしいことはない。

やはり、調子を崩していると見るべきか――。

「……カードを2枚セットし、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー……！

よし……。手札から、《プロト・サイバー・ドラゴン》を召喚！」

【《プロト・サイバー・ドラゴン》　攻　１１００　／　守　６００】

「プロト・サイバーは、場に存在する限り《サイバー・ドラゴン》の名を得る。

そして俺は、魔法（マジック）カード、《パワー・ボンド》を発動！

場のプロト・サイバーと、手札のサイバー・ドラゴンを融合！

現れろ、《サイバー・ツイン・ドラゴン》！」

【《サイバー・ツイン・ドラゴン》　攻　２８００　／　守　２１００】

サイバー・ツイン――。

２８００の攻撃力を持ち、二回攻撃が可能と、
サイバー・ドラゴンの派生モンスターの中でも使いやすいであろう
カードだ。

「パワー・ボンドによって特殊召喚されたことにより、
サイバー・ツインの攻撃力は2倍となる。
バトル！　サイバー・ツイン・ドラゴンで、
A（アーリー）・ジェネクス・トライアームを攻撃！
エヴォリューション・ツイン・バーストォ！！」

迫りくる一対の光線。
この攻撃を受ければ、まず間違いなく俺は負ける。
カイザーもスランプから抜け出すかもしれない。

――が、それはあくまで上辺だけの話だ。

いずれまた、誰かに敗北した場合、地獄に堕ちていくことがないと
言い切れるか？

断言できなければ、その選択肢は取れない。

本気でぶつかって、カイザー自身が答えを見つけ出さなければ意味
は無い。

――だからこそ。

「伏せ(リバース)カード、オープン！　《闇の閃光》！
俺の場の攻撃力１５００以上の闇属性モンスターを生贄に捧げることで、
このターンに特殊召喚されたモンスターを、全て破壊する！
Ａ(アーリー)・ジェネクス・トライアームを生贄に捧げる！」

「何っ！？」

一見すれば、単なる自爆のようにも見えるのだろうか。

トライアームの内から放たれる光が、
サイバー・ツイン・ドラゴンを、熔(と)かし、消失に追い込む。

プロト・サイバーはフィールド上でのみ、
サイバー・ドラゴンとして扱われる効果を持つ。

よって、融合解除を使用し、これを防ぐことはできない。
無駄にカードを消費してしまうだけだ。

「クッ……カードを1枚伏せ、ターンエンド……――ッ！！」

瞬間、墓地から強烈な光が差し込む。

パワー・ボンドのデメリット効果だ。

エンドフェイズ、パワー・ボンドの効果で特殊召喚された融合モンスターの、

元々の攻撃力分、ダメージを受ける。

つまり、サイバー・ツインの攻撃力分――２８００のダメージを、カイザーは受けるということだ。

これで、カイザーの残りライフは１２００。

サイバー・エンドを出さなかっただけ、まだ良かったとするべきなのだろうか。

「俺のターン、ドロー！

……伏せカード（リバース）、オープン！　永続罠（トラップ）、《ＤＮＡ移植手術》！

水属性を選択し、場のモンスター全てを水属性として扱う！」

「何をするつもりだ……！？」

意味も無く、ただ使うだけではない。

当然、そこに意味はある。意味が無ければ、こんなことはしない。

「《A（アーリー）・ジェネクス・ソリッド》を召喚！」

【 《A（アーリー）・ジェネクス・ソリッド》 攻 ５００ ／ 守 １２００ 】

「A（アーリー）・ジェネクス・ソリッドの効果を発動！
水属性の『ジェネクス』を生贄に捧げることで、
デッキからカードを2枚ドローできる。
俺は場のA（アーリー）・ジェネクス・ソリッドを生贄に、カードをドローする！」

最近では俺の常套手段となりつつある、
A（アーリー）・ジェネクス・ソリッドによるドロー加速。
いささか強引な気もするが、現状の手札ではこのくらいしかすることが無い。

加え、通常召喚権も失った。
攻撃力の高いモンスターを引きはしたが、
上級モンスター故に、召喚は不可能。

――だけど、同時に引いたこれを使えば――。

「《闇の誘惑》を発動！　デッキからカードを2枚ドローし、その後、手札から闇属性モンスターを除外する。
――《Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（ザ・ビッグ・サターン）》を除外する」

「プラネット……！！　いや、だとしても、何故除外する必要が――！？」

それは、これからの行動次第、ということにしておこう。

「カードを2枚セットし、ターンエンド。
……カイザー。あなたのターンだ」

「俺のターン、ドロー……！
……くっ！　《サイバー・フェニックス》を召喚！」

【《サイバー・フェニックス》　攻　１２００　／　守　１６００】

「……サイバー・フェニックスで、直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

火炎を撒き散らし、迫りくるサイバー・フェニックス。

攻撃方法は単純な突進。いや、それ以外にできないとすべきか。

「悪いが、その攻撃は通さない――伏せカード、オープン！
《闇次元の解放》！　除外されている闇属性モンスターを特殊召喚できる！
俺は、《Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ》を特殊召喚する！」

【《Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ》　攻　２８００　／　守　２２００】

サイバー・フェニックスの眼前に立ちふさがるようにして、
その姿を現すＳＡＴＵＲＮ。

ソリッドビジョン――加え、ダメージが現実になるというわけでもないが、
その威圧感は、本物だ。

……さて、とは言っても、相手はカイザーだ。
油断はできないし、状況によっては、ただの壁にしかならない。

俺の予想では、あの伏せカードは――。
アレによって、破壊しにくるような気がする。
破壊でなくとも、あるいは何らかの除去手段を用いるに違いない。

「悪いが、この攻撃は通させてもらう！
伏せカード（リバース）、《強制脱出装置》を発動！
Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（ザ・ビッグ・サターン）を手札に戻す！」

「くっ！」

そのまま、サイバー・フェニックスの攻撃は、俺に直撃する。

だが、ある意味で予測通りの展開だ。
これで俺のライフは１８００。

サイバー・ドラゴンの直接攻撃（ダイレクトアタック）の一撃で削りきれる程度だ。
しかし、そう都合よく手札にあるとは思えない。
あったとしても、俺の妨害を潜り抜ける必要がある。

とはいえ、それをやってのけるのがカイザーなのだが。

――いや、「本来の」、カイザーか。

「カードをセットし、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！
……伏せカード（リバース）、オープン！　《リミット・リバース》！
墓地に存在する、攻撃力１０００以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚できる！

A（アーリー）・ジェネクス・ソリッドを蘇生する！」

【《A（アーリー）・ジェネクス・ソリッド》　攻　５００　／　守　１２０】

「使い回しを狙ってきたか……！？」

単なる使い回しだと、芸が無い。
最小の消費で最大の効率を得なければ、意味も無い。
故に、これだけで終わるつもりも無い。

「この瞬間、速攻魔法発動！　《地獄の暴走召喚》！
攻撃力１５００以下のモンスターの特殊召喚に成功したとき、同名モンスターをデッキ、手札、墓地から可能な限り特殊召喚する！
このとき、相手は自分の場のモンスターを選択し、デッキ、手札、墓地から可能な限り特殊召喚する。
……デッキから、A（アーリー）・ジェネクス・ソリッドを2体特殊召喚！」

【《A（アーリー）・ジェネクス・ソリッド》　攻　５００　／　守　１２０】
【《A（アーリー）・ジェネクス・ソリッド》　攻　５００　／　守　１２０

０】

「クッ……デッキから《サイバー・フェニックス》を特殊召喚する」

【《サイバー・フェニックス》　攻　１２００／守　１６００】

同名モンスターを特殊召喚し、展開ができるのは暴走召喚の魅力だが、
相手にも特殊召喚を許してしまうというのは、やはり、厳しいものがある。

特に、相手はカイザーだ。
ドロー効果を持つサイバー・フェニックスの特殊召喚を許して、
良かったものやら悪いものやら。

「場のＡ（アーリー）・ジェネクス・ソリッド３体の効果を発動。
水属性の『ジェネクス』を生贄に捧げることで、
デッキからカードを２枚ドローできる。
それぞれ、自身を生贄にし、６枚、カードをドローする！」

「なんだと！？」

これで、手札は合計9枚。
無用に場に残っている3枚の永続罠（トラップ）……。
これをどうしてしまおうかという疑問もあるが、今は放っておこう。
まずは――。

「《ジェネクス・ワーカー》を召喚！」

【《ジェネクス・ワーカー》　攻　１２００　／　守　１２００】

「ジェネクス・ワーカーの効果を発動。
ジェネクス・ワーカーを生贄に捧げることで、
手札から『ジェネクス』モンスターを1体、特殊召喚できる。
《ソーラー・ジェネクス》を特殊召喚する！」

【《ソーラー・ジェネクス》　攻　２５００　／　守　１５００】

「魔法（マジック）カード、《二重召喚（デュアルサモン）》を発動。
このターンの召喚権を一つ増やす。
……そして手札から、《レアル・ジェネクス・コーディネイター》を召喚！」

【《レアル・ジェネクス・コーディネイター》　攻　２００　／　守　１００】

「レアル・ジェネクス・コーディネイターの召喚成功時、手札から、レベル３以下の『ジェネクス』を特殊召喚できる。《ジェネクス・パワー・プランナー》を特殊召喚！」

【《ジェネクス・パワー・プランナー》　攻　３００　／　守　２００】

「レベル７のソーラー・ジェネクスと、レベル１のジェネクス・パワー・プランナーに、レベル２のレアル・ジェネクス・コーディネイターをチューニング！
現れろ、《Ａ・Ｏ・Ｊ　ディサイシブ・アームズ（アーリー・オブジャスティス）》！！」

【《Ａ・Ｏ・Ｊ　ディサイシブ・アームズ（アーリー・オブジャスティス）》　攻　３３００　／　守　３３００】

場に姿を現す、超弩級の要塞。

忌まわしい、と、そう呼ぶ者もいるだろう。

かつての俺――かつての、俺の側面が利用したカードだ。

だけど、それは見方を変えれば、一つの「力」だ。

力であり、それ以上ではない。要は、使い方次第と言える。

「手札から、魔法（マジック）カード、《死者蘇生》を発動！

墓地の《ソーラー・ジェネクス》を蘇生する！」

【《ソーラー・ジェネクス》　攻　２５００／守　１５００】

場に、強力な2体のモンスターが揃う。

手札と伏せカード次第ではあるものの、

このままカイザーの場を制圧することも……あるいは、

このまま、ライフを削りきってしまうこともできる。

だけど、それはできない。

重要なのは、カイザーを追い詰めることだ。

倒してしまっては、そもそも俺がこの場に来た意味が無い。

人間は、追い詰められて初めて本音を露呈させる。

命の危機。アンデンティティの危機。

今回の場合は後者だ。

カイザーの本音を聞こうと思えば、まずは精神的に追い詰める必要がある。

肉体的に窮地に追い込んではならない。そうなれば、本編の二の舞だ。

あれは、双方で同時に追い込んだからこそ、あんな結末に陥ったのだ。

適度。

さじ加減が重要だ。決して、叩き落としてはいけない。

重要なのは、追い詰めること。

追い詰めて、本音を引き出すこと。

そして――その精神を、泥沼から引きずり出すこと。

暗い場所にあって、光明が見える、その瀬戸際。

そこに追い詰めなければ、カイザーが本音をぶちまけることはない。

――賭けるしかない。

チャンスはたった1度。

この瞬間に賭けるしか、無い――！！

「――バトル！　ソーラー・ジェネクスで、

サイバー・フェニックスを攻撃！」

「ま……まだだ！　速攻魔法発動！　《リミッター解除》！
俺の場の機械族モンスターの攻撃力を2倍にする！」

だが、それでも攻撃力は２４００。この2体の攻撃力には及ばない。

ソーラー・ジェネクスの胸部から放たれる光線が、
1体目のサイバー・フェニックスを貫く。

「ぐっ……！　だが、
サイバー・フェニックスの効果により、1枚ドロー……！」

「まだディサイシブアームズの攻撃は残っている！
もう1体のサイバー・フェニックスに攻撃！」

「ぐあああっ！！」

凄絶なまでの砲撃によって破壊されるサイバー・フェニックス。
その効果によって、再度のドローを行えるが――しかし、
カイザーの残りライフは２００。
風前の灯火……と言えるだろうか。

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

これで、俺のすべきことはなくなった。
あとは、カイザーがどうするのかを待つだけだ。

「お……俺のターン、ドロー！」

カイザーの目に、再度、光が宿る。

勝てる。僅かにでもそう思っているからなのだろうか。
いずれにせよ、俺はそれに、なんとかして対応して見せねばならない。

「相手の場にのみモンスターが存在するとき、
《サイバー・ドラゴン》は手札から特殊召喚できる！
《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚！」

【《サイバー・ドラゴン》　攻　２１００　／　守　１６００】

「そして、サイバー・ドラゴンと、場の――――」

「伏せカード、オープン！　《昇天の黒角笛》！

相手モンスター1体の特殊召喚を無効にし、破壊する！」

「なっ！？」

絶望――とは、今のカイザーのような状態を言うのだろうか。

逆転を賭けて召喚したモンスターは封殺。

場には伏せカードも無く、モンスターもいない。

ライフは既に初期値の２０分の１。

相手――つまり、俺の場には、強力な上級モンスターが2体いる。

キメラテック・フォートレス・ドラゴンを用いれば、

この2体を除去しつつ、攻撃を通すことができたのだろうが――。

と。

そんな中で、カイザーの手が震えはじめる。

いや、手だけじゃない。瞳孔も収縮し、唇もわなないている。

「……い」

何が起きたのか――そう思考しているところに、一つ、声が放たれた。

――嫌だ、と。

「……嫌だ……嫌だ、俺は……。
俺は――俺は、負けたくないぃ！！」

「っ……！」

来た。

ギリギリの場面。ギリギリの状況。
完全に封鎖されたこの場面で――ようやく。

「俺は……飢えている！　渇いている！
敗北したくない……勝ちたい！　勝利への渇望に！
そのためなら、俺は鬼にでもなろう！
鬼にならねば見えぬ地平があると言うなら――俺は！！」

心の底の闇をぶちまけるように叫ぶカイザー。

あと、一歩。

あと、一手。

この瞬間に――勝負は、決まる。

「魔法（マジック）カード発動！　《オーバーロード・フュージョン》！！
俺の場、または墓地から融合素材を除外し、
闇属性・機械族の融合モンスターを融合召喚する！
俺は、全ての機械族を除外し――」

「却下だ！！　伏せ（リバース）カード、オープン！　《魔宮の賄賂》！！
相手の魔法（マジック）・罠（トラップ）の発動を無効にし――破壊する！」

「――――ッ！！」

絶句。

激昂でも、絶叫でもなく――カイザーの取った行動は、ただ、それだけだった。

膝から、地面に崩れ落ちる。

最大の切り札と言うべきカードを封殺され。
本音を露呈してまで、禁忌としたカードを使って、それすら封殺され。

打つ手がない、と悟ったのだろうか。
気付けば、カイザーは項垂れていた。

「何故だ……何故、何故、俺は勝てない！？
勝利に執着しても、圧倒的な攻撃力を得ようとしても、
鬼にならんとしているのに、何故――！？」

「……あなたが見てるのが、勝利だけだからだ」

「それのどこが悪い！？」

「今のあなたは、相手を見ていない。
勝利に執着するあまり、コンボを決めようと躍起になるあまり、
相手の姿を見ることができていない。
相手を知ることを怠っていて、何が勝利だ！」

それは、ただの蹂躙であり、一人遊びだ。

相手のことなど知ったことか、と。

独りよがりに自分の不幸ばかりを追及し、
他人のことを知る努力を怠っていた人間を、俺は知っている。
そう。誰よりも――誰よりも、自分自身のことは知っている。

「鬼にならねば、修羅であらねば見えぬ地平があるとしても、
それは『人』でなければ届くことは無い――！
畜生は畜生の道に堕ちていくことになる！
それでいいのか、カイザー！！」

「お、俺、は――！！」

「そうやってあんたが外道に堕ちていけば、
あなたの背負っているものはどうなる！」

何――？　と、呆けたように、カイザーが聞き返す。

「あなたが今まで関わってきた人間はどうでもいいと言うのか！？
十代や、万丈目や、翔や、三沢や明日香、吹雪さん、
これまでに関わってきた人間を全て蔑ろにしてまで得た勝利に価
値は無い！」

「関わってきた、人間を――」

「勝利などという、曖昧な概念に拘泥してるんじゃない！
本当に勝利を掴みたいなら、相手を――現実を見据えろ！」

でなければ、本当に――地獄に堕ちていくことになる。
そうなれば、人間としては終わりだ。

修羅のままに、鬼のままに、ただ、誰かを傷つけていくことになる。
そこには成長も、研鑽も無い。ただの停滞だ。

「……俺は――」

カイザーは、自らの手を見つめた。

自分の目指していたもの。
本来、目指すべきだったもの。
目指して、敗れて、失ってしまったもの。

それを取り戻すことができたのかは、定かではない。

だけど、俺には――どこか、カイザーの表情が、すっきりしているようにも見えた。

「……魔宮の賄賂が、相手のカード効果を無効にした後、
相手は、カードを1枚ドローする。……カイザー。
これが、最後のドローだ」

「――ああ」

そう言うと、一息に、カイザーはカードをドローした。

自身の感情――ひいては、このスランプを乗り切ることができるのか。
全ては、このドローにかかっている。

どこか、狂気じみたその表情は、気付けば普段のものに戻っていた。
だからこそ、分かる。確信できる。
この人なら、この状況を、覆せると。

「俺の場、墓地に存在する光属性・機械族モンスターを全て除外することで、
俺は、《サイバー・エルタニン》を特殊召喚する！」

【《サイバー・エルタニン》　攻　？　／　守　？】

天から降り立つのは、竜の頭（エルタニン）を模した、天体のサイバー。
「過去（墓地）」の積み重ねを力とする、強力なカードだ。

「サイバー・エルタニンの特殊召喚に成功したとき、
このカード以外の全てのモンスターを墓地に送る！
コンステレイション・シージュ！」

複数の顎（あぎと）から放たれる光線。
それが場を薙ぎ払った、次の瞬間には――全てが、消失していた。

「サイバー・エルタニンの攻撃力は、
召喚のために除外したモンスターの数によって決定する。
合計5枚のカードを除外したことにより、攻撃力は――2500！
バトル！　サイバー・エルタニンで直接攻撃（ダイレクトアタック）！
ドラコニス・アセンション！」

ひときわ大きな――本体とも言える顎から放たれる、一条の光線。
音も無く迫りくるそれに身を任せ――瞬間、

俺のライフポイントは、消失した。

デュエルの終了を告げるブザーが鳴り響く。

それは、ある意味で――皇帝亮（カイザー）の、復活の合図とも言えた。

42束目：復権（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「あざとい」

「基本的に有珠はあざといと思いますわ」

「んなっ!?　何で私がやり玉に上がんですか!?」

「性格はともかく外見が良いという部分とか、
コメディだけじゃなくシリアスな部分まで請け負えるところとか、
あざといと思えるような部分は色々ありますわ」

「メタ的なこと言わないでゆっきー！
私（わたし）ゃ何も狙ってませんよ!?」

「あ、でも、六条さん……色々裏で計算してないかなって思います」

「計算してねーですよ！？
何でいつの間にか私がそんなハラグロキャラになってんですか！
そういうのはもっとこう……なんつーか……。
ほら、敬語で大人しい妹キャラの役割でしょう！？」

「それこそメタ的じゃありませんの……？」

「それ言うならゆっきーだって結構あざといじゃないですか！
そのお嬢様口調他色々と！」

「んなっ！？　これは元々ですわ！」

「はいはい乙乙。
……って、地の口調でそれ！？
その方が凄くないですか！？」

「えらく失礼なこと言いますわね有珠ぅぅ！
ほら彰子！　あなたも何か言ってやってくれませんこと！？」

「え！？　え、えっと……二人とも、喧嘩はダメだと……」

「「そういうことじゃなーい！！」」

↓続かない

＊　＊　＊

そんなわけで、カイザー戦でした。

今回の本土訪問の最大の目的ですね。
ただ、今回だけで終わるわけではありません。
これからまた何回か続いてしまいますよー（

原作でヘル化の引き金になったカードって、
オーバーロード・フュージョンとも言えるかもしれないんじゃね？
ということで、最大のキーカードを潰したら防げるんじゃね？
↓その結果がこれだよ！！

いや、展開としては元々考えてたんですけど。
それにしたって結局エルタニンですが。
あちらは漫画版のキーカードですし、漫画カイザーの象徴のようなものなので。

御堂はＡ・Ｏ・Ｊのカードを今も所有しています。
使っていないというだけですね。今回使わせてみました。

カタスなんて使わせたらどうなることやら……（

ともかく、今回はこのあたりで。

それでは。

４３束目：錯綜（前書き）

今回ある人物　（？）が復活します。
とはいえ、チョイ役程度ですが。

ということで、以下本編です。

43束目：錯綜

さて、そもそも俺が本土に来訪した理由は、
主にカイザーを立ち直らせるためだった。

とはいえ、それは「主な」目的であり、
そこに追随する別な目的のためにも、俺は動いている。

あの後、妙に爽やかな表情で自宅――というか、
寮、あるいは借家へと帰って行ったカイザーを見送った俺は、
深夜を回ってなお、繁華街をうろつき回っていた。

大きな理由は二つ。

俺たちの持つカード――シグナー竜のカード。
現状、六条とイレンを含めた俺たちの手元には、
《スターダスト・ドラゴン》、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》、
《ブラック・ローズ・ドラゴン》の3枚のカードが存在している。

それ以外のカード。――シグナー竜。
現状、俺たちの手元には存在していない、
《ブラックフェザー・ドラゴン》、そして、
《エンシェント・フェアリー・ドラゴン》のカード。
それらを探し当てることが、今の俺の目的となる。

《パワー・ツール・ドラゴン》を捜索することも考えられるが、
《ライフ・ストリーム・ドラゴン》が存在していないこと、
あるいは、未来の世界においては普及しているのではという可能性
も考え、
今のところは置いておくことにした。

どちらにせよ、速やかに回収すべき2枚を探し当てるべきだ。
エンシェント・フェアリー・ドラゴンに関しては、
俺たちの持つ3枚と並ぶ重要性があるため。

ブラックフェザー・ドラゴンは……いや、まあ、
考えても仕方あるまい。後付けな感が凄まじいが、
あれも一応はシグナー竜の1枚だ。
回収しなければ大変なことになるという可能性がある。

何故か、未来では一部の人間には知れ渡っているようだが。
あれはおかしくないだろうか。

他のシグナー竜に並ぶほどの希少性――。
世界に1枚しか存在していないという事実。
それを鑑みれば、ああまで知れ渡っているのは異常だ。

となれば、それ以前に何らかの下地があったからこそ、
世間一般――あるいは、世間の裏側に知れ渡っている。
そう認識すべきだと、俺は思うのだが。

「……タイタンの情報網を駆使しても、見当たらないか」

『ええっと……ま、まだ歩くです？』

俺は軽く頷いた。

情報は自分の足で歩いて見つけ出すものだ。

タイタンの情報も信用できるものではあるが、
それだって、自分で歩いて探し、確証を得たものではない。

俺としては、確かな証拠が欲しいのだ。
でなければ、未来に差し障る可能性だってある。

「……しかし」

ブラックフェザー・ドラゴンの在り処が、
世間から隠れた――いわゆる、裏側にあると仮定するのはいい。
恐らくは、そう考えるのが自然だろうからだ。

しかし、その一方で、エンシェント・フェアリー・ドラゴンについては、
推察すらできずにいるというのが現状だ。

あのカードがどこに存在しているのか？

俺たちと同じような転生者が所有しているのか、
あるいは、群体側（レギオン）に握られているのか。

いずれにせよ、その行方を探り、必要とあらば強奪してでも取得する。
それだけの理由と、意味はある。

未来を守る、などと大層なことは言えないが、
予定調和のためなら、俺は何だってしてみせる。

それは、直接的には――間接的にすら、
世界を救うという事実に繋がることは無いだろう。
地位も、名声も与えられない。ただの自己満足で終わる可能性も否めない。
最悪、自分自身の破滅を導いてしまうかもしれない。
だけど、それだけの理由――そして、価値はある。

「情報が行き交ってるな……」

問題となるのは、情報が少ないことだけではない。
情報が「多い」こともまた、重要で――そして、厄介な要素だった。

「ウナギのようなモンスターを見た、

ドラゴンがフィールドを破壊していた。
レベル7の青いドラゴン族シンクロモンスターを見た……」

無数に点在するこの情報、果たして、どこまでが本当で、
どこまでが虚構であるのか。あるいは、勘違いなのか。

ウナギのようなモンスターなんて、探せばいくらでもいるだろう。
そのものずばり、《深海の大ウナギ》や、
《雷ウナギ》といったモンスターまで存在しているのだ。
いかにあのカードがウナギのような外見だからと言って、
その情報だけで判断するには、いささか早い。

ドラゴンがフィールドを破壊するなど、珍しい話だとも思えない。
《スタンピング・クラッシュ》、《巨竜の羽ばたき》の効果。
《ブラック・ブルドラゴ》のモンスター効果もそうだと言える。

レベル7の青いドラゴン族シンクロモンスター……。
グングニールじゃないのか、それは。
アレなら手札コストと引き換えに、フィールド魔法も破壊できる。

《ドラグニティナイト－トライデント》も、見た目だけは青い。
該当しそうなカードは、他にも探せばありそうなものだ。

情報が錯綜している。

誰が所持しているのか、あるいはどこにあるのか。

それが分からない以上、俺に打つ手は無い。

まさか、ギアナ高地の奥深くにあるわけでもなし。
仮にそんな場所にあったとしたらお手上げだ。
それこそ、本当に捜索隊を派遣しなければならん。

５Ｗ１Ｈという言葉がある。

ｗｈｏ（誰が）
ｗｈａｔ（何を）
ｗｈｅｎ（いつ）
ｗｈｅｒｅ（どこで）
ｗｈｙ（なぜ）
ｈｏｗ（どのように）

この、ｗｈａｔ（何を）以外のいずれもが欠けている。

誰が、所有しているのか。
いつから、所有しているのか。
どこで手に入れたのか、あるいはどこに存在しているのか。
どういった理由で、手に入れたのか、そこにあるのか。
なぜ、そうなったのか。
どのようにして、存在しているのか。

あるい精霊界にでも存在しているという可能性も否定はできない。
いや、あのモンスターの特性上、そうであってもおかしくはない。
むしろ自然なことだ。

そうなれば、現状手の打ちようは無い。

精霊界への行き来は自由にできるものではないし、
恐らくはそちらを出身とするスズも、
自由な往来はできないことだろう。

イレンに関しても同様だ。
いくら非常識な存在といえど、
その本体と呼ぶべき存在からは隔絶されている。
超常的な能力を発揮しようと、
別次元への扉を開くようなことはまずできまい。

チッ、と俺は軽く舌打ちした。

一度本土に出れば何かしら分かることはあるだろうと踏んでいたが、
別段、そういうことでもなかったらしい。

むしろ、カードについての情報であれば、
アカデミアにいた時の方がよっぽど情報が入ってきたような気もする。

「……闇、雲」

分かっている。

僅かばかりの手がかりだけで行動している現状、

闇雲に動いていると言われても、何ら反論はできない。
どころか、むしろその言葉は的を射ている。
的を射ているからこそ、何もできない自分が苛立たしい。

いくら俺の過ごしていた現実と違うと言っても、
あそこまで希少価値の高いカードが、大会の景品になっている、
などという突飛なことがあるわけがない。

あったとしても、裏社会の賭けデュエル程度のものだろう。
それにしたって、どんなことが起きるかはわからない。
自分自身の人生を棒に振る結果になるかもしれないし、
誰かの人生を地の底にまで貶めてしまう可能性もある。
結果として、殺してしまうことにもなりかねない。

裏社会――俺たちのような一般人が、
本来踏み込むべきでない場所というのは、
金がなければゴミと同等とみなされる。

賭けデュエルに参加している人間というのは、
得てして、「金が欲しい」人間だ。あるいは狂人か。
前者であれば、元々小金持ちの物好き、
多額の借金を持つ人間などが当てはまる。
後者であれば、ただ駆け引きを楽しみたい人間などか。

命と命のやり取り。
金と金のやり取り。

狂った人間の求めているものは「それ」だ。

ふつう、人間が望むことのないもの。
普通の人間が望むはずがないもの。
望んではならないもの。

誰かが死ぬのがたまらなく面白いとか、
誰かの人生を滅茶苦茶にするのが楽しいとか。
そんな――歪んだ嗜好を持つ者。

彼らの世話になる気はサラサラ無いが、
彼らの情報を得ることができれば、多少は得るものがあるのではないか。

接触は必要ない。
重要なのは、情報を得ることなのだから。

しかし、どうすれば重要な情報を得ることができるものやら――。

「おやおや、我々を嗅ぎ回ることの危険性が分かってない馬鹿が、
まだこの街にいたなんて……いやはや、本当に珍しいこともあるものですねえ」

突如、背後から陰湿な声が聞こえてきた。

隅から隅まで、他人のことを観察し、
沼の底へと引きずり込もうとするかのような、嫌な声。

絶対に関わり合いになりあいたくないような。
それでいて、この場では関わらなければならないような。

「こそこそと嗅ぎ回る犬……くくく、
『犬』とは。おあつらえ向きにも程がありますねぇ。
いずれにしても、このままあなたを帰すわけにはいきません」

「……消すか？」

「いえいえ、まさか、そんな面倒で危険の伴うことなど」

横目でその男を見れば、
そいつは、カイザーを地獄の底へと案内した男――。

シルクハットを被り、いやらしい目つきをした小柄な男。
モンキー猿山、と呼ばれていた男が、そこにはいた。

「それよりも」

そう告げた瞬間、大勢の黒服が、
俺の通り道を塞ぐようにして立ちふさがった。

意地でも逃がさないつもりか。

「私の『商品』を台無しにしてくれたお礼をさせていただこう。
……ついてきていただきましょうかねぇ」

拒否権は無い、か。
いや、与えられなかったとすべきか。

いずれにせよ、この人数に相対して生きていられるような保証はない。
二人以上が飛び道具を所有していた場合、
まず間違いなく俺は殺されることだろう。

オーケー、と、俺は諸手を挙げた。

この状況を打開しなければ、俺は帰ることすらままならない。

＊　＊　＊

「絶対……絶命？」

『です』

その通りだ。

絶体絶命――絶対的に、マズい状況。
常時であればありえないような、最悪の状況。

俺は今、金網に囲まれた闘技場の中にいる。

両手両足には、衝撃増幅装置。
眼前の相手――筋骨隆々の大男、マッドドッグ犬飼も、同様だ。
狂犬（マッドドッグ）。

なるほど、あの男が「おあつらえ向き」と言った理由が理解できた。

「周辺を嗅ぎ回る犬」と、「狂犬」。
この二人が対立する絵面が、楽しそうに思えたから――か。

カイザーを立ち直らせたことは、あくまで理由の一つだろう。

あの男であれば、そうすべきだと考えれば――どんな相手でも、
無理やりにでも、地獄に叩き落とす。
それだけの、悪意がある。

「くっくっく……さあ、準備はできたのかぁ？」

「檻」の外を見やっていた俺に、声がかかる。

アンチデッキ使い、マッドドッグ犬飼――。

原作では、ヘルカイザーの覚醒に一役買っていたか。

その当時は、スライムデッキを用いていたはずだ。

しかし、相手となるのは、カイザーではなく、俺。

複数のデッキを用いる人間に対し、この男はどう戦うつもりなのか。

いずれにしても、勝たなければならないことは間違いない。

デッキをディスクにセットし、互いに口を開いた。

「「――決闘（デュエル）！！」」

先攻は犬飼。

アンチデッキが相手となると、

後攻が相手では多少分が悪いが……この際、仕方がない。

「俺のターン。ドロー！
《王虎ワンフー》を攻撃表示で召喚する！」

【《王虎ワンフー》　攻　１７００　／　守　１０００】

ワンフー……攻撃力１４００以下のモンスターを封殺する、
低攻撃力のモンスターを使う人間にとっては、天敵とも呼べるカード。

実際、メタビートのデッキへの投入率は高く、
最低でもサイドデッキには投入されているという、
相応の強さを誇るカード。

これと戦うとなると、少し骨が折れるか。

「更に手札から永続魔法、《強者の苦痛》を発動！
相手の場のモンスターは、そのレベル×１００ポイント、
攻撃力が下がるぜぇ！」

……苦痛に、ワンフーか。

初手でこの状況を作り出されると、正直に言って厳しいというのが

本音だ。

攻撃力１８００以下のレベル４モンスターは封殺され、
サイバー・ドラゴンを出したとしても攻撃力は届かない。
そもそも、俺は所有していないが。

シンクロをしようにも、攻撃力の高いチューナーは珍しい。

どうやってこの布陣を切り崩すべきか……まずは、それが問題か。

「カードを2枚セットし、ターンエンドだぁ！」

「俺のターン、ドロー！
……モンスターをセット、カードを2枚セットし、
ターンエンドだ」

召喚・および特殊召喚に対応しているとは言っても、
ワンフーは「反転召喚」には対応していない。

反転召喚に成功さえすれば、あるいは逆転の糸口も掴めるかもしれない。
あるいは、リバース効果を発動するかのどちらか。

いずれにしても、重要なのは強者の苦痛かワンフーのいずれかを破壊すること。
先にどちらかを破壊しさえすれば、逆転は容易だろうからだ。

「へへへ……俺のターン。ドロー！
分かってたぜぇ、そうやってモンスターをセットすることは。
魔法（マジック）カード発動！　《抹殺の使徒》！
貴様のセットモンスター、除外させてもらうぜ！」

「チッ……！」

やはりそういう手を使ってきたか。

ありえないことじゃない。
いや、苦痛とワンフーを併用している時点で、
可能性は高かった。

牙を持つ雪だるまが、俺の場から消えていく。

「《スノーマンイーター》か。想像通りだぜぇ。
この手と対する奴は、まず王虎ワンフーの破壊を狙ってきやがる。
まったく、毎度毎度、ワンパターンだよなぁ、
貴様らのような常人は」

「……」

「それだから弱いんだよなぁ！

王虎ワンフーで直接攻撃（ダイレクトアタック）だぁ！」

迫りくる猛獣の爪。

この一撃で決まることは無いだろうが、
それでも、衝撃増幅装置の件もあり、
凄絶なまでの問題があることは間違いない。

となれば――。

「伏せ（リバース）カード、オープン！　《ガード・ブロック》！
1度だけ戦闘ダメージをゼロにし、カードを1枚ドローする！」

「ふん、防ぎやがったか。だがそれだけだなぁ。
カードをセットし、ターンエンドォ！」

奴の場の伏せ（リバース）カードは3枚。
いずれも、メタ的な要素を持ったカードだろうことは間違いない。

予測というよりかは、直感。

この状況下……いや、これまでの相手の出方を考えれば、
恐らくは「そうでなくては」ならない。

猿山（奴）は、俺を引き抜きにかかった。
俺の対策をすると考えると、最適な策は――特殊召喚封じ。

俺の持つデッキは、ＨＥＲＯ、サイキック、
ジェネクス、シンクロ召喚。いずれも特殊召喚に依存したデッキだ。

それをすべて封じられるとなると、
状況としては最悪、かつ最低だ。

可能性としてありうるのは、
《王宮の弾圧》、《神の宣告》、《奈落の落とし穴》といったところか。
それら全てというのも、ありえなくはない。

他のカードを想像してみる。

《昇天の黒角笛（ブラックホーン）》、《スペシャルハリケーン》、
《超古代生物の墓場》、《虚無空間（ヴァニティー・スペース）》、《神の警告》。

いずれのカードも、相応以上の効果を発揮することだろう。
状況とデッキにもよるが、《幻獣の角》も挙げられる。

喜び勇んでワンフーを超えるモンスターを出し、
攻撃を行えば――迎撃され、さらにアドバンテージを稼がれる。

「……チッ」

思考が悪い方向へと傾いていく。

精神的には、大丈夫だ。

肉体的なダメージを受けたとしても、

多少なら耐えられる。プラシドとの対戦は、ここの比ではなかった。

「よくない」

イレンは、そう呟いた。

良くない。よろしくない。

少なくとも、この衝撃増幅装置による衝撃は、

人体にとって良いものであるとは思えない。

また、他者への――スズやイレンへの影響も心配だ。

となれば、極力ダメージを受けないことが、

このデュエルで生きて帰る最低限の条件とも言える。

だが、そうして戦おうとすれば、奴は――。

「……考える……必要、無い」

ああ、確かにその通りだ。
その通りのはずなんだ。

相手はこの裏デュエルにどっぷりとはまり込んだ狂人だ。
俺とは殆ど関係ない人間だし、そもそも関わるはずではなかった。

打ち倒したとしても、まったく関係ない。
その、はずなのだ。

――だけど。

（……できるか？）

俺にできるのだろうか。
奴を倒して――闇の底に、叩き落とせるのか？

倒さなければ。でも、倒せば――俺は、誰かを殺してしまう。

「――……関係、ない」

だとしても。

「……大切、なのは……生き残る、こと。だけ」

――だとしても！！

「……地獄の、底に。落ちたい……？」

「ッ……！！」

驚愕に顔を歪ませる。

と同時、普段以上に饒舌に――イレンは、語り始める。

「ダメ。許さない。許されない。
そんなことがあっていいわけが、ない。
わたしはそんなこと許さない。勝たなきゃ、許さない。
負けるのは、ダメ。勝ちたくない、なら」

――わたしが、やる。

イレンの声からは、普段は感じられない――狂気のようなものが、感じられた。
狂気。いや、あるいは殺気とも言うべきか。

状況としては最悪。

前門の虎、後門の狼とは言わないが……いずれにせよ、このまま奴を倒してしまえば、まず間違いなく、俺は奴を蹴落とす格好になる。

蹴落とし、壊し――最悪、殺す。
ありえない話じゃない。

だけど、そうしなければ――イレンが「代わり」、俺の代わりに奴を地獄の底へと突き落す。

問題となるのは、それに加えて「代わる」瞬間を他人に見られることだ。

俺を含め、超常現象を知る六条やスズであれば、あの現象も受け入れ、ある程度は理解できることだろう。
だが、周囲の人間は何も知らない。

最悪、俺が普通の――普通の人間でないことが、バレてしまう。

そうなれば最悪だ。
まともな人間社会では生きていけないし、
仮に生きていけるとしても、実験動物的な扱いをされるに決まっている。

――どうする。

このまま敗北を待つのか。
あるいは、イレンに代わるのか。
それとも、激情に身を任せ、この男を打ち倒すか。

仲間に危害を加えるような人間であれば、躊躇はしなかった。
誰かを守るためであれば、俺はいくらだって自分の手を汚す。
それだけの覚悟はある。

だけど、これは俺の短慮が招いた結果だ。
誰かが人質になっているわけでもなければ、
この後に、誰かが危害を加えられるわけでもない。

最も影響がありそうなカイザーは、俺が引きずり出した。

どうすればいいんだ。

■■であったときは、ただ感情に任せればよかった。
何も考えずに済んだから、何もしなかった。

だけど、今はそれなりに考えて行動しているつもりなんだ。
考えて、考えて、考えて――。

――そうして、自らの破滅を招くか？

違う。
これが普通のデュエルであれば、俺は迷わずこの男を倒している。

衝撃増幅装置という介在物がある現状、
この場でこいつを倒してしまうと、最悪、
体のどこかしらに障害を残してしまう可能性もあるんだ。

だから、できない。

――だから、私（貴様）は甘いんだ。
――ぬるい。ぬるいんだよ、キリヒト。
――■■（キリヒト）であったときの貴様なら、他人など考えなかった。

……今は違う。

考えなしではいられないんだ。
誰もかれもを敵と認識するには、俺はさまざまなことを経験しすぎた。
確かに、奴は俺を敵と認識し、叩き潰そうとしている。

だけど、だからと言って、俺が潰し返せるか？

そうなれば奴（猿山）の思う壺だ。

いや、どちらにしても。

俺が勝てば、商品としての価値が、俺に付与される。

犬飼が勝てば、このまま闇デュエルは続けられる。

どっちにしても、猿山が勝つようにできている。

引き分けに持ち込むことができれば、あるいは――。

――違うな。間違っている。

――却下だ。その程度では、勝ったとは言えん。

――勝利とはすなわち、相手の「上に立つ」ことだ。

――圧倒し、屈服させ、その精神を「下に置く」。

――それこそが勝利であり、それ以外に我々の勝利はありえん。

――彼女らも含めてな。

くはは、と。

――俺の口から、哄笑が漏れ出る。

『カズマさん！？』

スズの悲鳴が聞こえ――瞬間、
俺の意識は、完全に飛散した。

＊　＊　＊

「面倒なことだ」

――と、「私」は呟いた。

ああ、本当に面倒なことだ。
いつまでも悩みに悩んで、ただ相手を慮り、
自分自身のことを捨て置いてでも相手を救おうとする。

本当に甘い男だ。私（キリヒト）は。

だからこそ、私は裏側なのだろう。
日の当たる場所にいるべき人間なのだろう。

奴は私（心の闇）を乗り越えたと――飲み込み、
取り込んで邪神を制御したと思い込んでいるようだが、
それは過ちであり、偽りだ。

邪神は邪心。

心を殺すことはできない。
制御できたとしても、それは表面的なものだけだ。

心の奥底、深層心理。
それを制御し、統制することなど不可能だ。

代表的なものは、ストレスだ。

自分では抱えていないと認識していても、
ストレッサー……原因がある限り、ストレスは蓄積を続ける。

邪神を所有している限り、「私」は現れ続ける。
邪神という原因が存在する限り、私はこの世に存在し続ける。

亡霊であるが故に。

「……カードを2枚セットし、ターンエンド」

「おおっとぉ？　今度は反応無しか？
まあいいぜ。俺のターン。ドロー！
へっ。いずれにせよ、やるこたぁ変わらねぇ。
王虎ワンフーで直接攻撃（ダイレクトアタック）ぅ！」

当たり前のようにして、攻撃が行われる。

私の場のカードは3枚。

そのいずれをも、警戒せず。

「伏せ(リバース)カード、オープン。《邪神の大災害》。
相手の攻撃宣言時、互いの場の全ての魔法(マジック)・罠(トラップ)を破壊する。
そして、その効果にチェーンする。《和睦の使者》。
このターン、モンスターの戦闘破壊と戦闘ダメージをゼロにする」

「何ぃ!?」

破壊されたカードは、《王宮の弾圧》、
《神の警告》、そして《奈落の落とし穴》の3枚に加え、
《強者の苦痛》の計4枚だ。

私が破壊したのは、もう1枚の伏せ(リバース)カード――。

「……警戒が薄いな。凡庸だ。
いや、凡人でも、これだけ伏せていれば警戒は怠らない。
セットされた《荒野の大竜巻》が破壊され、墓地へ送られたとき、
貴様の場の表側表示のカードを破壊する。
王虎ワンフーを破壊」

「何だと!?」

凡夫もいいところだ。

三沢大地であれば、この程度のことは即座に予測し、対策する。
天上院明日香であれば、私の行動の始点を封じる。
万丈目準ならば、その絶対的なまでの力によって捻じ伏せる。
遊城十代ならば、あの驚異の引きによって、私の行動の先を行く。

大勢のアカデミア生徒であっても、私の行動には、
僅かなりとも違和感を抱くことだろう。

自然、私の喉奥から笑いが漏れる。

弱い、とは言わないが――メタに頼りすぎている。
引きもさほど良くはない。
相手――私の出方によって、その行動の全てが潰されている。

「……それで？　どうするつもりだ？」

「くそッ……カードを2枚セットして、ターンエンド！」

「ふん……ドロー」

この男は、私がこの場で勝利することが不可能であると認識している。
それを覆すことが、私が勝利する最低限の条件だ。

この男を圧倒する。
そして、その後ろにいる猿山を打倒する。

そのためには、まず――。

「次のターンまでに貴様のライフポイントを削りきろう。
こちらのライフは、全て残したままでな」

「「何だとぉ!?」」

猿山と犬飼が、同時に声を上げる。
私にとっては、想像通りの反応だ。

手札は４枚。
十分以上と言えるだろう。

「《トレード・イン》を発動。
レベル８、《Ｔｈｅ　ｂｉｇ（ザ・ビッグ・）　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）》を墓地に送り、
カードを２枚ドローする――」

「プラネット!?　だ、だが分かってるぜ！
貴様のその手札交換のカードが始点だってよォ！
《神の宣告》を発動！　ライフポイントを半分支払い、
貴様のそのカードの発動を無効にする！
ぬ、む、うおおおおおおおおっ！！」

痛みにもがき、苦しむ犬飼。
が、私には関係のない話だ。

それに――これは、そもそも、手札交換が目的ではないのだ。

「分かっているよ。貴様がそうやって妨害してくるのは。
これで貴様のライフポイントは２０００。
……ありがとう。そうやって自ら窮地に落ちてくれて」

「な……何!?」

「言っておくが、こちらの手札には逆転のカードが眠っている。
……このカードなら、貴様のライフを削りきることができることだろう。
忠告しておく。その伏せ（リバース）カード、使いどころを誤るなよ」

「何を……」

さて、これで奴の深層に、ある程度の警戒を植え付けることはできた。
残る手――残りの打つ手は、一つだけだ。

「《ジャンク・ブレーダー》を召喚する」

【《ジャンク・ブレーダー》　攻　１８００　／　守　１０００】

ジャンク・ブレーダーには、自身の攻撃力を上昇させる能力が備わっている。
その上昇値は４００。２０００のライフポイントを、容易に削りきることができる数値であることは間違いない。

「わ……分かったぜぇ！　貴様の目論見！
そのモンスターの攻撃力を上昇させ、俺にとどめを刺すことだ！
だったら、その前に止めさせてもらう！
《奈落の落とし穴》を発動ォ！　召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した、
攻撃力１５００以上のモンスターを破壊し、除外する！」

ぽっかりと、巨大な穴がジャンク・ブレーダーの直下に開き、
次元の狭間へと吸い込まれていく。

ああ。

――ああ。

やはり、こうも私の計画通りに動いてくれると、
最高の気分を味わうことができる。

最高だ。
最良だ。

この瞬間を、私は待っていた。

「……計画通りだよ、狂犬（マッドドッグ）。
私は手札から、《死者蘇生》を発動！
私の墓地に存在する、《Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（ザ・ビッグ・サターン）》を蘇生する！」

【《Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ（ザ・ビッグ・サターン）》　攻　２８００　／　守　２２００】

「なっ……馬鹿な！？」

地獄の底から這い出してくるようにして、
その姿を現すＳＡＴＵＲＮ（サターン）。

狂犬や猿山の目には、アレが地獄の使者のようにも見えているのだろうか。
私は理解しかねるが――いずれにせよ、これが精神的なダメージに繋がるのは、
見れば容易に理解できることだ。

「使いどころを誤るな。私はそう言ったつもりだったのだがな」

だからこそ、私は彼らを打ちのめす。
「私」では、それができないだろうから。

「壊してやる――。
Ｔｈｅ　ｂｉｇ（ザ・ビッグ・）　ＳＡＴＵＲＮ（サターン）で直接攻撃（ダイレクトアタック）！
ＡｎｇｅｒＨＡＭＭＥＲ（アンガーハンマー）！！」

極大の一撃が、狂犬に向けて振り下ろされる。

「う、お、うおおおおおおおおおおおっ！！」

野太い悲鳴が周囲にこだまする。

衝撃増幅装置の弊害だ。

周囲に破壊の余波が広がり、「檻」すらも破壊していく。

直後、ビィ――――ッ！　と。

デュエルの終了と、私が歩くべき道を示す音が、周囲に響き渡った。

ともあれ。

猿山という男は、私にとっても――当然、■■（キリヒト）にとっても、敵であると言う他に形容のしようがない。

であると同時に、この男は裏社会についての造詣が深い。

情報源にはなるだろう。

「さて」

私は、猿山の眼前に出向いて――思い切り、悪辣な笑みを浮かべた。

「確か、猿山とか言ったな。よくもまあ、
ここまで面倒な手法を取ってくれたものだ」

「ひ、ひぃ！？」

「悲鳴を上げてみたところで、私の罪悪感は揺るがんよ」

くく、と喉を鳴らし、私は尋ねる。

「貴様には、いくつか質問に答えてもらう。
どれもこれも、さして難しくはない質問だ。
答えてもらおうか。アレは――」

《ブラックフェザー・ドラゴン》と、

《エンシェント・フェアリー・ドラゴン》。
アレを――知っているのか？

＊　＊　＊

「つまらん」

面白くない。

結局のところ、あの男はあの2枚のカードのことは知らなかった。
情報と言っても、それは断片という程度。
決して、知っているという範疇ではない。

「……」

「おっと」

そういえば、と私は背後に視線を向けた。

イレン・フェアシーデン――。
■■（キリヒト）に憑く少女が、そこにはいた。
私を睨み付けて。

「かえして」

「キリヒトをか？　構わんよ」

私がそう言うと、少女はあっけにとられたような表情で私を見た。
まるで悪鬼や羅刹、あるいは何処かの悪辣な人間を見るような眼差しだ。

「いずれにしても、この肉体の所有者はキリヒトだ。
私は、奴の思考の合間を縫って、しばらく借りているに過ぎない」

「……」

「イレン・フェアシーデン。貴様と同様だ。
私も、キリヒトとは一心同体――　一蓮托生だ。
この体が死ねば、私も死ぬ。酷使する気も、
返さずに悪事に手を染める気も無い」

それほどまでに私が信用できないのか。
いまだ、私を見据えたままに、少女は動かない。

「私はただ、キリヒトの思考の迷いをまとめたに過ぎんよ。
早乙女レイ。貴様や、セームベル・スズ。六条有珠。
そういった者たちのことを考えれば、奴は自ずと、
私と同じ考えに至ることだろう。眼前の敵を倒すべきという考えにな」

「……だとしても……嫌がる」

「キリヒトがか。まあ、その通りだろうな。
自分の与り知らぬところで思考とは別な行動を取っているわけだ。
常人であれば発狂していてもおかしくはない」

ひとえに、奴が転生者であるという、
常識では計り知れない存在であることが原因だろう。

「……まあ、私が出てきたと、キリヒトに説明するのが最も楽だろう。
何よりも、私の存在を奴に刻み付けるのが最適だ」

そう。

貴様の邪心は、まだ消えてはいないぞ、という警告も込めて。

「周到で万能な貴様のことだ。私の存在など、既に感知していただろう？」

否定はせず、少女はただ顔をうつむけた。

彼女が選択を迫ったことが、少なからず私の出現に関わっているのだ。

責任感が強い、という感覚は抱けない。

加え、微細な感情は■■（キリヒト）の方が感知しやすいようだが、

それでも、責任感は強いはずだ。

そうでなくてはならない。

彼女が、多少なりとも沈痛に思えばいい。

「何。貴様と同じく、私もキリヒトの味方だ。

多少、方法は違うにしてもな」

「……信用……できない」

「だろうな。私もそう思うよ。どうにも、私は胡散臭いようだからな。

……まあ、いずれにしても、キリヒトはすぐに返す。

これで満足か？」

多少不服そうにしながらも、少女は私の言葉に了承の意を示した。

しかしながら……ここまで感情を露わにするということは、つまるところ、そこまで私が嫌いだということなのだろうか。

どちらでも構わないが。

43束目：錯綜（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「俺のターン」

「変なこと言うようですけど、
たまに先輩が鋭く『俺のターン！』って言ってるのが好きです私」

『それは光栄だが何でわざわざそんなことを言い始めるんだ。
頭沸いたか？』

「えらい言いぐさですね！？」

『そもそも、何でそんな限定的なことなんだ』

「いやあ、あそこまで真剣に言われると、
ちょっとだけキュンと来るんですよ」

『お前にだけじゃないと嬉しいけどな』

「うーん……とはいえ、未来の世界だと、
『俺のっ……タァァァアーンッ！！』って感じで叫んで、
文字通りターンしてますし、あの程度が最適に感じるんですよ」

『未来のアレは方式が方式だけに仕方ないだろうに』

「それとは殆ど関係ないんですけど、
仮に未来の世界に行ったら、私らもああいうことになるんですかね」

『なりたくはないな』

「補正のおかげでそうなりそうな気もしますが」

『補正って何だ』

「いわゆる転生者補正というやつですよ。
あと世界観補正」

『その理屈だともっと別な世界に飛んだら、
さらに妙な能力を得たりしそうなもんだ』

「例えばどこですか？」

『Ｆａｔｅとか。月姫とか』

「メチャメチャバトル系の世界じゃないですか！？」

『まあ、仮にそんな世界に行ったとしても、
俺なんかは数日で死にそうだけどな』

「えらいネガティブになってないですか！？
ていうか主題が変わってますし！」

↓続かない

＊　＊　＊

ということで厨二病復活でした。

まあ、いずれにしても、
完全に心の闇は吹っ切れてなかったですよ、ということで。

毎度の如く、色々とミスがありそうです；

ともあれ、今回の本土来訪の二番目の目的も明かしてみました。

ずばり、残りのシグナー竜の捜索。

現状、闇雲に探しているだけですが、
この先どうなっていくことやら。

ということで次回に続きます。

嘘予告ではありませんが、次回のあらすじをざっと。

次回。

アカデミアの視点に移ります。
吹雪さん自重してください。
仁義なき兄妹抗争。

以上3本です。
たぶん。

４４束目：偶像（前書き）

何気に今回初デュエルの２人でございます。

待っていらっしゃった方は申し訳ありません。

あと、前回のアレが若干ウソ予告になってしまいました。

テンションは原作よりも少し抑え目でお届けします。

４４束目：偶像

「知ってます？　アイドルって日本語で『偶像』って言うらしいですよ」

「ええ、そうね。だからって何で私に言うのかしら？」

「いや、ゆきのん先輩なら、少しは反応してくれるかもしれないと思いまして」

「確かに反応はできるわね。多少は勉強はしてるつもりよ。あとその呼び方はやめなさい」

「他に反応できる人と言えば、委員長先輩でしょうか。とはいえ、委員長先輩はあんまり関係ないんですが」

「……そうね」

「関係あると言えば、私とゆきのん先輩と、それから――」

――明日香先輩。

雪乃と向き合い、有珠はそんなことを呟いた。

偶像。
アイドル。

別段、アイドルの祭典が近々あるわけではない。
アイドルマスターなる存在がいるわけでもない。

唯一言えることがあるとすれば、
この話題が出た理由は――当の天上院明日香の兄、
天上院吹雪が原因だ、ということだけだ。

事の発端は、御堂和真が島を出たその翌日。
吹雪が発した一言――。

「アイドル学科を設立しよう！」

この一言が、全ての発端であると言えた。

正確に言えば、その裏側――クロノス臨時校長と、
ナポレオン教頭にも、僅か以上に原因があると言えるのだが、
有珠も雪乃も、今はあえて捨て置いた。

明日香も、この会話に加わるべきだろうと、二人は考えていた。
しかし、今は彼女は吹雪への抗議に向かっている。

会話に加わることができないのは仕方がないことだろう。

さて、問題となるのは、選出された人間だ。

まずもって、吹雪の目的とも言える明日香は確定的。
これに関しては仕方がないと言えた。
外見的には申し分ないし、頭も良い。女性としては、一種の理想だ。

また、有珠に関しては、外見は割合良い。
頭脳面に関しては問題がありはすれども、
偶像としての能力は十分だと言えた。

また、雪乃。弁論に長け、多くの男を手玉に取ってきたその手腕、
外見も含め、資質は十分にあると言えた。

それ以外の人間が選出されなかった理由の方は曖昧だ。
別の意味で言えば、明確とも言えるが。

そもそも、委員長――つまり、原麗華は、
そういった事柄には一切興味がない。その上堅物だ。
経理・人事については期待できるものの、本来そういった役割でもない。

また、青葉あげは、宮田ゆまの両名にしても、
芸能関係の仕事には興味がない。薄いだけでなく、皆無と言える。
加え、そもそも、話が出た時点で蹴ったのが二人だった。
片や、やんわりと。片や、かなり辛辣な口調で。

そうしてまた、更に話が出たわけだが、

海野幸子、宇佐美彰子などに関しても、この話は断った。

しかし、何故だか、有珠と雪乃は、絶えず誘いが来るわけで――。

「どーしたらいいんでしょうかね」

「アカデミア（ここ）の理念からすれば、デュエルで決着、かしら。
あと、さっきの呼び方はやめなさい」

「相手が吹雪さんじゃなければ、それも歓迎なんですけどねー」

問題はただ一つ。

相手が、皇帝（カイザー）と呼ばれる男と双璧をなし、
王（キング）とすら呼ばれるほどの実力を持つ男――天上院吹雪が相手だということだ。

キング吹雪。自称――フブキング。

常々間抜けなことを言っているようだが、その実力は本物だ。
自重さえすれば、明日香からも小言を言われはしないだろう。
少なくとも、有珠はそう考えていた。

「誰が挑みます？」

「……明日香が適任じゃないかしら？」

「ただ、兄妹だけに手の内が割れてる可能性も高いですよ」

「それは確かにその通りね。で、
それならあなたが行くのかしら？」

「マジ勘弁ってヤツです。
先輩とデュエルするの考えれば数百倍はマシですが」

「だったらやったらどう？」

「かと言ってあの吹雪さんに挑戦するのはちょっと」

いくら留年していると言っても、
それは単に出席日数が不足しているだけの話だ。
実力は申し分なく、カイザーと双璧をなすだけのことはある。

ダークネスであった頃の彼も、同様にすさまじいものがあった。
しかしながら、その縛りから放たれた今、
その実力がどうなっているのか。
予測はできないし、しようもない。

「こんなときは？」

「困ったときの他力本願――ですね」

呟き、有珠は携帯電話を取り出した。

電話先は、困ったときの――御堂和真。

＊　＊　＊

『学科の設立を食い止めたい、か……。
骨が折れるぞ』

「ええ、まあ。ある程度は承知の上ですが……先輩、
なんだか、雰囲気違いませんか？」

電話先の男の雰囲気――いつもならば、
多少は剣呑なれど、どことなく暢気なものだったはず。

しかし、今の彼の声からは、暢気さなど微塵も感じられない。
どちらかと言えば、冷淡で酷薄な雰囲気の方が勝っていた。

『まあ、方法が無いわけでもない。というより、
本来取るべき方法を取ればいいだけの話だ』

「何です？」

『その学科が有用だからこそ、設立するのだろう？
ならば、その学科が無益なものだと主張すればいい。
主張し、実証することだ。そうすれば、いずれその話も消える』

「……ま、まあ、話はおおむね分かりましたけど、
先輩、そんなにスカした喋り方でしたっけ？」

『気にするな。……ああ、分かっている。
すぐに元に戻っている』

「はい？」

『こちらの話だ。ではいずれ』

告げ、御堂は一方的に通話を打ち切った。

直後、有珠は僅かばかりの違和感を覚えた。
まさか、厨二病が悪化でもしたのだろうか？　とも思える。
いや、かと言って、現実的に考えれば、
ああも短期間に印象や口調が変化するものなのだろうか。

いずれにしても、普段の御堂であれば、ああも難解な言い回しはしないし、

何より、電話がかかってきた時点で悪態をつくだろう。
というのに、何故ああも冷静に言葉を発していたのか。

まあ、いいか。

そう断じて、有珠は携帯電話の電源を切った。

「どうだったのかしら？」

「なんかいつもより対応が柔らかかったというか、
普段と違って、ちょっとカッコつけた言動してましたね」

「何なの、それ？」

「ちょっとよく分かりませんけど。
まあ、方針は決まりました。ちょっと、他力本願ですが――」

告げ、二人は今後の計略を果たすために動き出した。

＊　＊　＊

兄妹対決。

陳腐ではあれど、よくある言い回しだ。
互いによく知る人間であるからこその心理戦。

ただ、それが実際に行われる場合、
相応に準備が必要であり、何よりも、
エンターテインメント的な要素が強くなる。

エンターテインメント。

本人たちからすれば真剣極まりないことだろうが、
見ている側からすれば、それは存外に間抜けに見えたりする。

例えば、明日香の等身大の合成写真を張り付けたパネルを抱えている吹雪と、
それを見て眉根を寄せ、唇をわななかせている明日香を同時に見れば、
どこかの質の悪いコメディを見ているような気分になるのではないか。

ただ――。

「真剣なんですよねぇ……」

真剣。

そう、真剣なのだ。
真剣すぎるほどに。

明日香は、デュエルを続けることを望んでいる。
アイドルになることなど、望んではいない。
そうなれば、彼女の――有珠はそれを知らないが――夢を、
叶えることなど、できようはずもない。

加え、クロノスやナポレオンの思惑通りに進めば、
レッド寮が――それだけではない。
彼らにとって都合の悪い人間を排除するための道具とされてしまう。

クロノスに関しては、それなりに改心してはいるものの、
ナポレオンにそそのかされ、結局元の鞘だ。

とはいえ、それは御堂や有珠のような人間に言わせてみれば、
ごく一時的なものであるのだろうが。

「真剣にやらないと、勝てないのよ」

雪乃が呟く。

その言葉は正しい。

まったく――その通りだった。
カイザーと双璧をなす、強者。
本気でかかっても、勝率は低い。

「一応、もう一度先輩に連絡は取ったんですけどね」
「カズ兄ぃに？」
呟く有珠に、レイが言葉を投げかける。
ええ、と有珠は頷いた。

「『奇策』……らしいですよ」
「奇策？」
「だから一応、先輩の言う通りに策は取ったんですけど」
どれだけ通じるだろうか――？
御堂自身も、そのように呟いていた。

故に、有珠も考える。この「奇策」が、どれだけ通じるか、と。

有珠はそこまで頭は良くない。
よって、誰かに知恵を借りるというのは、
さして珍しいことではないし、何より、
有珠自身が、自分の能力については自覚している。

故に、彼女の知りうる中で最大の知恵者――つまり、
長く生き、多くの経験をしている御堂に訊ねることが、
彼女の知りうる中で、最適の選択だった。

徹頭徹尾、策士。
策謀家。あるいは勝負師。
確立の操作屋。思索家。

故に、頼らざるを得ない。
その彼が、勝率は低い、と断言したのだ。
相手の強さは、いくらでも想像できる。

「明日香先輩が、どれだけ分かってくれるか、ですね」

あとは、明日香に任せるしかない。
そう考え、有珠は部屋の中央へと視線を向けた。

相変わらず、二人はコントのようなやり取りを続けている。

「何でダメなんだい、アスリン！
僕は、君をもっと輝かせようと――」

「アスリンはやめて、兄さん。
それに、私はそんなことは望んでないの！
だから――」

だから。

吹雪がしかめ面をし、明日香が毅然と立つ。
その左腕のデュエルディスクが展開され――二人は、言い放つ。

「「決闘（デュエル）！！」」

先攻を取ったのは吹雪だった。
ふ、と笑い、周囲に自身のターンをアピールする。

「僕のターン、ドロー！
僕は手札から、《聖鳥クレイン》を召喚するよ！」

【《聖鳥クレイン》　攻　１６００　／　守　４００】

「カードを2枚セットして、ターンエンド！」

「私のターン、ドロー！
まずは、永続魔法、《地盤沈下》を発動させてもらうわ。
この効果によって、兄さんのモンスターゾーンを2つ封鎖よ」

「おおっ！？」

吹雪のフィールドの一部が陥没し、
その動きが完全に封じ込められる。

当然、これはソリッドビジョンであることから、
一切、現実への影響はないのだが。

「手札から、《沼地の魔神王》の効果を発動。
デッキから《融合》のカードを手札に加えるわ」

沼地の水によって構成されたかのような魔物が、
明日香の手に《融合》のカードを手渡す。

「《融合》を発動するわ。
手札の《エトワール・サイバー》、
《ブレード・スケーター》を融合し、
《サイバー・ブレイダー》を融合召喚！」

【《サイバー・ブレイダー》　攻　２１００　／　守　８００】

場に飛び出してくるのは、明日香のエースモンスター。
バレエのダンサーのような姿をした、
強力な効果を持ったモンスターだ。

「サイバー・ブレイダーで、聖鳥クレインを攻撃するわ！
グリッサード・スラッシュ！」

「くっ……この容赦無い攻撃！
兄さんは悲しいよ、アスリン！」

「アスリンはやめてって言ってるでしょ！？」

通ったダメージは、僅か５００――。

デュエルの序盤である関係上、
この状況下ではまだ有効なダメージとは言えないだろう。
１度や２度の攻撃によって挽回されてしまうだろうことは、
想像には難くない。

「クッ……カードをセットして、ターンエンドよ！」

顔をしかめる明日香。
対照的に、吹雪は涼しげな顔で、明日香を見据えている。

「……こ、これって、明日香先輩が勝ってる……んですよね？」

「そのはず……ですっ、あう」

表情だけを見れば、まず間違いなく、
明日香が苦戦していると見られることだろう。

しかしながら、現状は明日香が優勢だ。
吹雪のモンスターゾーンは２つ埋まっているし、
明日香の場には攻撃力２１００のモンスターが存在する。
普通なら、多少は危機感を抱くべき場面だろう――が。

「ちょっと待ってほしいなぁ。
僕はエンドフェイズに罠（トラップ）カード、《奇跡の残照》を発動するよ！
このターンに戦闘破壊されたモンスターを1体、
場に蘇生できる！　《聖鳥クレイン》を特殊召喚！」

【《聖鳥クレイン》　攻　１６００　／　守　４００】

「そして、聖鳥クレインの効果を発動。
特殊召喚に成功したとき、デッキからカードをドローする！」

聖鳥クレインの効果は、どの場所からの特殊召喚にも対応している。
蘇生用のカードがあれば、それだけドローすることも可能、ということだ。

「そして、僕のターンだね。ドロー！
うん、まずは……魔法（マジック）カード、《アースクエイク》を発動！
フィールドの全ての表側表示のモンスターを、守備表示に変更する！」

巨大な地震が起きたかのようにモンスターの周囲が揺れ動き、

その体制を守備のそれへと変化させる。

「クレインはまだ表示形式を変更していないから、
このまま攻撃表示に戻させてもらうよ。……そして、
手札から、《トランスフォーム・スフィア》を召喚！」

【《トランスフォーム・スフィア》　攻　１００　／　守　１００】

サイバー・ブレイダーの効果は、相手の場のモンスターの数によって変わる。
１体であれば、戦闘破壊されないこと。
２体であれば、攻撃力が倍になること。
３体ならば、相手の魔法、罠の効果を無効とする。

しかし――。

「トランスフォーム・スフィアの効果を発動するよ。
相手の場に存在する、表側守備表示のモンスターを選択し、
僕の手札を１枚――《火炎鳥（バーニングバード）》を捨てて、
選択したモンスターを装備カード扱いとして装備する！」

「くっ……！」

風が吹き荒れ、サイバー・ブレイダーの姿が消えていく。
瞬間、トランスフォーム・スフィアの中央の球体の形状が、
サイバー・ブレイダーのそれへと転じた。

「トランスフォーム・スフィアの攻撃力は、
装備したモンスターの攻撃力分上昇する。
つまり、攻撃力は２２００！　さて、行くよ明日香！
まずは、聖鳥クレインで直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「させないわ！　伏せ（リバース）カード、《攻撃の無力化》！
攻撃を無効にして、バトルフェイズを終了させる！」

「おっと。流石は明日香。やっぱりこのくらいは防いじゃうか。
僕はこれでターンエンド。このエンドフェイズ、
トランスフォーム・スフィアが装備していたモンスターは、
表側守備表示で相手フィールドに特殊召喚される！」

【《サイバー・ブレイダー》　攻　２１００　／　守　８００】

効果の縛りから解放され、再度、
サイバー・ブレイダーが明日香の場に戻る。

「私のターン、ドロー！
私は、サイバー・ブレイダーの表示形式を変更するわ！」

サイバー・ブレイダーの攻撃力は、
その攻撃力によって、倍にまで高められている。

トランスフォーム・スフィアに攻撃を行ったとすれば、
吹雪へと向かうダメージは４１００。

本来のライフポイント――４０００を超えるダメージ。
これが通れば、まず間違いなく吹雪のライフはゼロとなる。

「行くわよ兄さん！　サイバー・ブレイダーで、
トランスフォーム・スフィアに攻撃！　グリッサード・スラッシュ！」

「残念だけど、それは無しだよ！
伏せカード、《ゴッドバードアタック》！
僕の場のトランスフォーム・スフィアを生贄に捧げ、
明日香の場のサイバー・ブレイダー、地盤沈下の２枚を破壊する！」

「そんなっ！？」

片や、明日香にとってのエースカード。
片や、そのエースカードをサポートするもの。

精神的なショックは大きいことだろう。
そもそも、この一撃で終わると、明日香は考えていたのだ。

それが止められ、切り札は破壊された。
切り返す手段は少ないだろう。

「けど、壁を潰されることはなくなりましたね」

有珠の呟きに、雪乃が頷いた。

トランスフォーム・スフィアは、
表側守備表示のモンスターを吸収する。

裏側守備表示で出すことはできると言っても、
実際のところ、そうして出す者は少ないだろう。
リバース効果を使える状況でなければ出さない、という人間も多い。

あるいは、情報アドバンテージを気にする者もそうか。
いずれにせよ、有効に効果を使用する場合には、
表側守備表示で召喚する方が有用な場合は多い。

よって、トランスフォーム・スフィアが存在しなくなれば、
有用に手が働くようになる。

「《コマンド・ナイト》を守備表示で召喚」

【《コマンド・ナイト》　攻　１２００　／　守　１９００】

「……ターンエンドよ」

「僕のターンだね。ドロー！
僕は手札から、《激昂のミノタウルス》を召喚するよ！」

【《激昂のミノタウルス》　攻　１７００　／　守　１０００】

場に現れるのは、怒りに身を染めた、馬面の獣人。
その効果は、自らの仲間――獣に対し、
貫通効果を付与すること。

「けど、その２枚じゃあ貫通効果は意味無いわ！」

「うん。この2体ならね。だから僕は、
場のモンスターであるミノタウルス、聖鳥クレインの2枚、
僕の墓地のトランスフォーム・スフィアを除外する！」

ゴッ、という轟音と共に、場に突風が吹き荒れる。

大気の乱れ。
つまり――風。

「さあ現れろ、《Ｔｈｅ（ジ）　アトモスフィア》！」

【《Ｔｈｅ（ジ）　アトモスフィア》　攻　１０００　／　守　８００】

その名の通り、大気（アトモスフィア）を司る怪鳥――。
あらゆるものを取り込み、その勢力を増していく、
風としての象徴が、吹雪の場に現れた。

「魔法（マジック）カード、《フォース》を発動。
場のモンスター2体を選択し、選択したモンスターの攻撃力の半分を、

もう一方のモンスターの攻撃力に加算する。
コマンド・ナイトの攻撃力の半分を、アトモスフィアに加算するよ」

《フォース》の効果は、現在の攻撃力を参照するものだ。
コマンド・ナイトの永続効果によって上昇している現在の数値、つまり、１６００の半分、８００の攻撃力が、アトモスフィアに加算される。

「アトモスフィアの効果を発動！
相手の場のモンスターを装備カード扱いとして吸収し、その能力値分、アトモスフィアの攻撃力を上昇させる！」

「くっ……！？」

風が渦巻き、アトモスフィアの抱く球体に、コマンド・ナイトが吸収されていく。
これにより、アトモスフィアの攻撃力は３０００となる。

「行くよ明日香！　アトモスフィアで直接攻撃（ダイレクトアタック）！
テンペスト・サンクションズ！」

「きゃあああっ！」

暴風が明日香に叩き付けられ、
そのライフポイントが大幅に削られていく。

残りは１０００。
エンドフェイズになれば《フォース》の能力は失われるが、
壁となるモンスターが存在しなければ、
次の吹雪のターンには削りきられてしまうだろう。

「ターンエンド」

「くっ……私のターン、ドロー！」

手札に来た1枚のカード。
明日香は、それに反応し、目を見開き――。
同時に、驚愕を露わにした。

「ま……魔法（マジック）カード、《トレード・イン》を発動するわ。

手札のレベル8のモンスターを墓地に送り、
デッキからカードを2枚ドローするわ。
《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》を捨て、
デッキからカードをドロー！」

「ちょ、ちょっと待って明日香！　そのカードは――」

同時、同様に吹雪も目を見開いた。

これが、御堂が有珠に仕込んでいた「奇策」――。
絶対に「あるはずがない」カードを明日香のデッキに投入し、
相手の予測を外し、自身のペースに持ち込んでいくこと。
とはいえ。

「何で私のカードあんなに扱い悪いんですかぁ！？」

「普段の行いのせいだと思いますわ」

「さらっと普段の私が悪いみたいに言わんといてください！？」

「おーほっほ」

「投げやりに高笑い！？」

当然、まったく使いどころが無い場合には、
こうしてコストにする以外にはほとんど方法が無い。
うー、などと恨めしげな声を上げつつ、有珠は中央の場を見据えた。

「《貪欲な壺》を発動するわ。墓地の5枚のモンスター、
全てをデッキに戻し、デッキからカードを2枚ドロー！」

「ＶＥＮＵＳ（ヴィーナス）の使い道あれだけですか！？」

恨めしげに叫ぶ有珠を無視し、明日香は手を進めていく。

「来たわ……！　手札から、《高等儀式術》を発動！
デッキからレベル４の、《ブレード・スケーター》と、
《斬首の美女》を墓地に送ることで、合計レベル８の、
《破滅の女神ルイン》を儀式召喚！」

「なんだって！？」

《破滅の女神ルイン》は、本来雪乃の持つカードだ。

一般に流通していることから、明日香が所有していてもおかしくはないが、
明日香のデッキのコンセプトなども考えると、
あのカードが投入されているとは考えづらい。

故に、想像の外。
故に、奇策。

「だけど、それじゃあ足りないよ！」

「ええ、分かってるわ。だから――速攻魔法、発動！
《ツイスター》！　５００のライフポイントを支払い、
相手の場の、表側表示の魔法（マジック）・罠（トラップ）カード１枚を破壊する！」

たとえそれがモンスターであっても、
装備カードとなっている間は、
そのカードは「装備魔法」として扱われる。

故に、ツイスターのカードは有効となる。

風が吹き抜け、アトモスフィアの中央の球体の中身が消えていく。
それにより、攻撃力は１０００にまで減少した。

「これで不足分は足りるわ！
破滅の女神ルインで、Ｔｈｅ（ジ）　アトモスフィアに攻撃！」

「ぐうっ……！」

ルインの繰り出した一撃が、アトモスフィアを破壊する。
この攻撃によって削られたライフは、１３００。
残るライフポイントは、２２００。

「ルインは、相手モンスターを戦闘で破壊したとき、
もう１度続けて攻撃することができる！」

「なっ……！」

「とどめよ兄さん。
破滅の女神ルインで直接攻撃（ダイレクトアタック）！！」

「くっ……うわあああああっ！！」

攻撃が吹雪自身に叩き込まれると同時、
ブザーが鳴り響き――デュエルも終わった。

わっ、と会場が湧き上がる。

アイドル学科の成立云々以前の問題として――まず、
この学校の人間は、そもそもデュエルが好きである。
これだけ大きなイベントでの勝負だ。
湧き上がらないわけが無いだろう――と、有珠はそう考えた。

これで、一連の騒動に幕は下りた。

アカデミアの組織自体には何ら変化は無く。
ただ――いつも通り。
いつも通りの風景のままだった。

＊　＊　＊

「つーことで、先輩の策は一応役に立ちました」

『そりゃ良かったな。……とはいえ、原作通りの展開なら、
あそこで「サイバー・エンジェル」のカードが出てくると思ったが』

「多少の違いはありそうですね。でも先輩、

プラシドとデュエルしたときは、原作効果の機皇帝だったんですよね？」

『ああ。その辺り、結構に違和感があったんだが……。
……もしかすると、あのプラシドのいる未来と、
今俺たちのいる場所とは、平行世界なのかもしれないな』

ふう、と御堂は軽くため息をついた。

疲れているのか、あるいは何か思うところがあるのか。
有珠としては、その辺りのことを聞いてみたいところだった。

『何にしても、そういった事実が分かっただけでも収穫だ。
お疲れ様、だ。今後の対策にもなるかもしれない。
それと、まだ白の結社は動き出してないんだな？』

「え、あ。そうですね。まだ動き出してはいません。
もしかすると、明日明後日には動き始めるかもしれませんけど」

『すまん。もう少し、監視の方、続けてくれ。
誰がまず最初に結社に引き込まれるかも分からないんだ。
誰かが結社に引き込まれたら、連絡を頼む』

「了解でっす。あ、それはともかく、先輩。
お土産――」

『わざわざ催促するお前にだけはやらん』

即座に電話が切られ、有珠の耳には電話の待機音が延々と流れ続けた。

それを確認した有珠は、即座に彰子のもとへと駆け寄った。

「うさみーん！　先輩がいじめるぅぅ！」

「え、えええっ!?　わ、私に言われても!?」

４４束目：偶像（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「理解できる」

「みんなに土産を買って帰るつもりなんだが」

「……何……」

「ああ。その辺りを今考えているわけだけど……。
……東京土産なんて、某バナナ菓子しか思い浮かばないんだが」

「……お台場……」

「何で知ってるのかとか言いたいところだが、
テレビ局に行っても、そこまで良いものは無いと思うぞ。
俺たちは別に、観光に来てるわけじゃないし」

『でも、お土産って言ってる時点で……』

「気にするな。気にしちゃいけない。
……しかし、基本的に皆が求めてるものって言ったら、
大抵の場合でカードなんだけどな」

「……限定、品」

「いくら都内に来たからって、地方限定のカードなんて無いからな」

「……ちっ」

「欲しがってるのはお前か！？」

『ええと……お菓子じゃなきゃいけないことは、無いと思うですけど……』

「うん、まあ……ストラップも考えたんだけど。
それだと、好みじゃないものだとありがた迷惑だろうしな。
一人一人に聞いてみるのも、やっぱり迷惑だろ」

「……気持ち……」

「気持ちだけで喜ぶ人間なんていないよ。
一応、物だって必要だって」

『あの……別にいいですけど、なんでイレンさんの言ってること、必要最低限以下なのに、カズマさんは理解できるです？』

「……」

「最低限以下のことしか話さないから、推し量る努力をしてるってこと。
一番近くにいる俺が理解できないと、それはそれで問題だろ？」

「……シリアス……？」

「……まあ、少し違和感はあるけど、俺たちだし。
コメディリリーフの六条がいないと、勝手にこんな空気になるんだよ」

「……メタメタ」

『よく分からないです……』

↓本編に続く

＊　＊　＊

作戦やら切り札やらは最後まで取っておきましょうという話でした。

曰く、切り札を出すのならそれ以上の切り札を残しておけとのことです。

とはいえ、現実的ににはかなり面倒なことなのですが。

とりあえず、吹雪さんと明日香のデッキ紹介でも。

吹雪さんは、アニメをベースとしていますが、やはり漫画と融合していて、

結果的に鳥獣族軸の特殊召喚主体ビーストデッキを使用することに

なりました。
アトモスフィアが切り札なのは漫画と同様です。
主にクレインでドロー加速しつつ、コンバットトリックと表示形式の変更を用い、
相手の攻撃をいなしつつ自分のペースに持っていく、といった感覚でしょうか。
鳥獣族単体じゃないのは、アニメを意識しました。
アニメだと、どうにも獣戦士族主体だったようなので、そのあたりを。

……いずれ現実にカード化したらプラネット持たせたいなぁ（

明日香は相変わらずのサイバー・ブレイダーです。
この辺、十代と似通っていると言えるでしょうか。
ただし、サイバー・エンジェルはありません。カード化してませんし。
そんなわけで、今回サイバー・エンジェルの代用扱いとして、
ゆきのんにルインをお借りしてデュエルに臨みました。
六条？　コストにしただけだし……（

漫画版のカードを使用することになる案も当然あるのですが、
それに関してはまたいずれ。メインキャラは、万丈目以外は色々とカードが追加される予定です。

当の万丈目ですが……ほら、ライダー強いじゃないですか。カッコいいじゃないですか。
おジャマもいますし、アームド・ドラゴンもいますし、
なんというかデッキのネタには事欠かないんですよ、本音を言えば。

書きづらいのは、カードがＯＣＧ化されていない面々でしょうか。
また、複数積みができない上に他のカードも入れられないヨハンもかなり厳しくなりそうです。
具体的に名前を挙げてしまうと、明日香とかジムとかダークネスとか……（
ジムはバキケとプレート＋漫画版カードくらいのものですし、ダークネスもネオスフィアのみ。
後者は展開次第でどうとでもなりますが、ジムは……考えてきます；

しかし、３期はカオスなことになりそうな予感がひしひしと……。
いや、まだ２期の中盤なのですが、いずれ書くと思うと。

ともあれ、今回は長くなりましたが、これで。
それでは。

４５束目：確証（前書き）

前回のあらすじ

吹雪さんがＰ（プロデューサー）になろうとした。

45束目：確証

これで、本土に来訪して4日目だ。
明日の間に、アカデミアの本島に帰ることとなる。
だというのに。
未だ、他のシグナー竜のカードの所在に確証が持てない。

《ブラックフェザー・ドラゴン》が、裏社会にあることは知れた。
が、《エンシェント・フェアリー・ドラゴン》に関しては、頑として知れない。

後者に関しては、一旦は保留としておくとしても、
前者だけはこの場で発見し、こちらで所有しておきたい。
焦りばかりが先行し、行動に移しても結果が得られない。

そして何よりも、問題が浮上した。

俺は何も覚えていないものの、
奴――俺の側面とも言うべき存在の復活。
いや、イレンが言うには、そもそも消えてなどいなかったらしいが。

近い場所にいる者の話だとはいえ、
人づてに聞いた話というのは、簡単には信用しづらい。

俺が迷うたびに現れる、か。

迷って、迷って……出てくる前に、決断するしかない、か。
いや、既に答えが出ている事柄に対し、迷うべきではないという教訓とも言えるか。

いずれにせよ、元々山積みだった問題が、
更に一つ増えただけかもしれないが。

それにしても、六条から電話がかかってきたときは、
本筋通りの出来事が起きているとはいえ、少々驚いた。

明日香が吹雪さんに勝つことができるだけの策を用意してほしい。

簡単なこととは言えない。
六条としては、考えに考え抜いた結果だと言えるだろう。

一応とはいえ、策――上手の人間に対する策。
つまりは奇策。１度しか通用しないであろう策だ。

正直に言えば、５Ｄ’ｓの時代で、ユニコーン相手に遊星が行ったことと同じ。

所有しているはずのないカードを使わせること。

例えば、ＶＥＮＵＳ（ヴィーナス）。俺のＳＡＴＵＲＮ（サターン）などもそうと言えるか。
つまるところ、ありえない、と思わせること。

ありえない。
そう考えるからこそ、思考は鈍る。

あるいは、逆転の一手として、ということも考えられるか。

いずれにせよ、運次第だ。
別の場所にいる俺にはどうしようもない。
あとは、六条や明日香、皆に任せるほかない。

こういうとき、十代がいれば――とも思うが、
あまり、任せすぎるのも良くは無い。

こういうとき、役割を果たすのは俺たちだ。
裏方。縁の下の力持ち。誰にも気付かれないで構わない人間。

まあ、俺は賞賛なんて欲しいとは思わないが。

そんな折、俺の携帯電話の着信音が鳴り響いた。
取り出し、着信者を確認すると、タイタンの４文字が表示されていた。

「もしもし。どうしたんだ？」

『おおぅ、御堂ォ。少し、気になる記述が、あってなぁ』

「気になる記述？」

『ああ、そうだ。本日行われる裏デュエルの大会おぉ、少し調べてみたのだが、
どうやらその景品がァ、珍しいカード2枚、らしいのだよぅ』

「珍しいカード……？」

珍しいだけならば、いくらでもあるような気もするが……。

「プラネット？」

『それだけの価値はぁ、あるようだ』

プラネット並みの価値――。
そうなると、シグナー竜や、
あるいはそれに準じる貴重なカードと考えられる。

しかし、そう簡単に見つかるものだろうか？
これまで、どれだけ探しても見つからなかった。
それを、こんな短期間に……？

……いや。

「その情報を回してくれないか？
今は、藁にもすがる思いなんだ」

『了解だ。それではぁ、まずは場所だが……』

場所、時間、その賞品。
重要な情報がタイタンの口から語られていく。
そしてその中にあった、賞品の情報――。

《ブラックフェザー・ドラゴン》。

その名が語られた瞬間、俺は上着を羽織りなおして走り出した。

場所は――。

「海馬ドーム……！」

＊　＊　＊

警備員も大勢いるはずだろう。
それどころか、日中であれば、使用客もいる可能性は高い。
だというのに。
いや――だからこそ、なのか。

警備員は張子の虎。
いや、むしろ、闇デュエルの主催者側の傀儡と言える。
金を掴まされ、「見逃す」よう告げられる。
しかしながら、警備員側はそれを咎めない。言葉通りに見逃す。
見逃せば、参加費の余剰分によって、更に金を得られるからだ。

仮に通報されたとしても、「気付かなかった」とすればいい。
退職の危険はあるにしても、次の仕事を探せばいいだけだ。
何より、金は十分にあるのだから。

そして加えて言うなら、誰も気付かないとも言える。
誰も、こんな場所で、こんな時間帯に秘密裏に大会が行われるなど、思わない――考えすらしないのだから。

俺だって、こんな場所で大会が開かれているなどと思いもしなかった。
絶対的に、「表側」の管轄なのだから。

「灯台下暗し――か」

問題は、どうやってこの大会に潜り込むか。
あるいは、カードを持ち出すのか。

仮にも裏デュエルの大会だ。
参加にも資格は必要だろうし、同様に参加のための資金も必要だ。

表側では一切デュエルできないような危険な人間や、
金目当ての人間などがこぞって集まる。

普段通りの考え方では、通用しないことだろう。
その点に関してはまず間違いない。

とはいえ、荒事に発展させる気は無いし――。

「……どうするかな」

「……わたし……代わる？」

「余計に目立つだろうに。潜入には不向きだろ」

服装だけならともかく、

その白髪と赤い右目はいかがなものか。
いや、俺だって十分目立ちそうなものだが。左目赤いし。

「……出場……」

「……お前が出場するってことか？
いや、一つの手としては、アリかもしれないが……」

口調、外見、どちらを取っても、非常に特徴的だ。
俺も、男にしては相当に髪が長いが、それが霞むくらいには。

とはいえ、戸籍は無い。
データなど存在しない。海野家の映像データ以外には。
そちらにしても、経歴は隠蔽していたわけだし……。

「いや、ダメだ。危険すぎる」

イレンはただの人間じゃないが、多分、荒事には慣れていないだろう。
もしもの場合、相手をねじ伏せるだけの腕力が無ければ危険だ。

ただでさえ、相手は裏側の人間なのだ。細腕の女が乗り込んだとなれば、
興奮し、激昂。最悪、暴徒化する危険性だってある。
もっと嫌なシナリオは、イレンから俺に代わる瞬間を見られることだ。
色々な意味で人生が終わる。

『警察を呼ぶとかは、どうです？』

「逆にマズい。あのカードまで押収される危険性がある」

日本の警察は存外に優秀だ。
保管庫に無理やり押し入ろうものなら、即座に捕まってお縄だろう。
……いや、まあ。未来のことは知らないが。
遊星が保管庫のデッキやら盗み出したことはともかく。

「……くそっ……」

悩む。

考えなしに押し入っても意味は無い。
最悪、罠という可能性だってあるんだ。
対策も無しにとなると、無謀すぎる。

自慢じゃないが、今の俺は何の権力も持ってないただの一市民だ。
両親は少しばかり忙しいだけのただの会社員だし、
俺自身も、アルバイトで少し金を稼いでいるだけのガキだ。
ちょっとばかり異常な部分は腐るほどあるけども。

「時間はまだある……か」

幸いにも、開始まではあと1時間ある。

どういった状況で大会が行われるのか、
正直に言えば、予想もできない。

いや、この状況で予想できていれば、エスパーか何かとしか思えないが。

エスパーか。

……絽場か。

いや、ねーよ。
いくらなんでもそれはないわ。

まあ、そんな無駄な思考はともかくとして。

虎穴に入らずんば虎児を得ずと言う。

この場合、虎穴はこの裏デュエルの大会。
虎児はブラックフェザー・ドラゴンを含めた賞品だ。

いずれにしても、誰かがやらねばならないというなら、迷っている間は無い。

勝たねばならない状況だ。

今俺がいるのはアカデミアではないし、
何より、相手も分からないような状況だが、
スターダストやインティ、クイラを出してでも勝つ意味はある。

あるいは、餌としても機能するだろうか。

元々、あのデッキは幾多もフィニッシャーとなりえるカードを用意している。
先程あげた3枚は言うに及ばず、ドラゴエクィテス、ガイアドレイクもそうだ。

切り札が1枚だと錯覚させておけば、自然、そちらに注意が向く。

あるいは、あえて全ての手を晒すか――だ。

いずれにしても、あいての精神的な動揺を誘うことはできる。

前者は、意表を突く形で。

後者は、深読みさせる形で。

昔なら、ここまで思考は働かなかっただろうが……昔の話だ。

今更持ち出しても仕方がない。

それに、裏デュエルとはいえ、衝撃増幅装置なんかは使われないんだ。

楽しむ……ことはできないだろうが、普段通りにデュエルしても、何ら差し支えないというのは、やはり精神的には随分と楽……。

「あ」

と、ふとした拍子に、イレンが何事か呟いた。

この声のトーンから鑑みるに、何かしら気付いたことがあると見るべきだが……。

「どうした？」

「……気付いた」

「気付いたって、何にだ？」

「……学校、バレる……退学……」

『あ……』

「……そういえば、そうだな」

言われてみれば、その通りだ。

いざと言う時のために、警察を呼ぶ準備はできているものの、
俺が自らこの裏デュエルに関わって行った事実は変わらない。

最悪、何らかの法律に引っ掛かり、退学を食らう可能性もある。

それに、俺の身元が割れないとも限らない。
そうなれば、同様に退学の危険性は上がっていく。

ただでさえ、有名人のカイザーと話の席を設けたその翌日なのだ。
猿山や犬飼が関わっていないとも断じきれないし、
正直なところ、リスクは相当に高いと言えるだろう。

「……また、微妙に重要な問題が発生したもんだ」

「……大丈夫。問題、ない」

「どこで覚えたんだその言葉は。
……で、大丈夫だって言える根拠は？」

こう言っては何だが、イレンはどこか抜けた部分が多い。
六条ほどではないにしても、結構に問題のある発言をしたり、あるいは、妙な行動を起こしたりと、その内容は様々だが。
果たして、この自信はどこから来るのやら。

「……わたし……出る」

「あ、あのなぁ……！？」

先程も同じようなことを言ったばかりだ。
危険過ぎる。
相当な変人か、あるいは犯罪者や……場合によっては、超弩級の変態がいたりしてもおかしくはない。
そんな中に、女の子一人……正確には、特殊な女の子を一人で行か

せるのは、
俺の良心が咎めるということもそうだし、何より人として間違っている。
いくら元が敵だったとはいえ――だ。

「大丈……夫」

「何を根拠に大丈夫だ、って言ってるんだ。
常識で考えてみろ。ああいった場に集まってる連中は、お前みたいな女の子も、簡単に殺すことができるんだ。
躊躇も何もない。自分の利益のためなら、何だってできる。
それに、人買いみたいな連中がいないとも限らない」

イレンがどれだけのことをできるのかは分からないが、銃火器に対抗できるような能力など、流石に持っていないだろう。
拳銃でも持ち出された日には、まず間違いなく撃ち殺される。

元々、裏デュエルの主催者側の人間は、当然ながら、裏社会で働く人間が多く、違法に拳銃を所持していたりする。
物騒な話だが、それが使われないとも限らないのだ。
むしろ、口を封じるためなら、好んで用いる……かもしれない。

あくまで、噂の範疇でしかない……はずなのだが、
警察の上層部は、そっち側の人間と繋がっていることがあるような

のだ。
日本の警察は、捜査に乗り出しさえすれば優秀なれど、
自分たちにとって都合の悪い事件に、本腰を上げて捜査するようなことは少ない。
通報を受けさえしなければ、だが。
事件として成立しさえすれば、捜査に乗り出さざるを得ない。
だからこそ、「通報」という手が保険として成立するわけなのだが。

「大丈、夫……」

と言ったところで、頑なに態度を崩さないイレンを説得するのは難しいようだった。
未だに大丈夫だと言い続けるイレンに軽く嘆息する。

「……分かった。だったら、いくつか条件をのんでもらう。
まず一つに、無理と無茶はするな。これは至極当然だけど……。
次に、負けたら逃げろ。何をされるか分かったもんじゃない。
３つ目、悪目立ちするな。目立たないことは不可能だろうから言っておくけど、
だからと言って、必要以上に目立とうとするな」

勝て、とは言えなかった。
俺だって、勝ちたいとは思うが……絶対など無い。
不可能な事象を強制してはならない。
それ故に、口には出さなかった。

ただ、意気込みだけは伝わったのか、イレンは無表情なままに、軽く頷いた。

あとは、試合まで待つのみだ。

＊　＊　＊

この大会について語るべきことはそう多くは無いが、
対戦方式については、こちらで行われる殆どの大会と相違ない。

１回勝負のトーナメント。

元の世界ならば、マッチ戦というのが妥当なのだろうが、
どうにもこちらではシングル戦が主流であるらしい。

３８人の参加者。うち、６人がシード。
抽選によって決定することとなったのだが、イレンはそこから漏れてしまった。

……はず、なのだが。

「……勝ち」

大会には初参加であり、周囲には屈強な男たちがいて、
なおかつここが裏デュエルの会場であることも意に介さないかの如く、
イレンは快進撃を続けていた。

1回戦。【岩石族】使いの男に対しては、ごく普通にビートして勝利し、
2回戦。シードの【フェンリルハンデス】の使い手に対しても、
さして苦戦せず、力押して勝利して見せた。

3回戦。某一角獣のチームを髣髴とさせるような、
【バブーン】に対しても、堅実に勝利をおさめた。
4回戦は【エーリアン】だったか。以前にカイザーと対戦していた相手と似た構築だった。

5回戦。恐らくは最大の地雷であったはずの【超時空戦闘機】を降した。
これに関しては……相手に対し、同情の念を禁じえなかったほどだった。

そして——今。決勝戦。
ドームの電光掲示板に、対戦相手の名前が表示されようとしていた。

その名前は――。

「キース・ハワード……！？」

盗賊（バンデット）キース。
元全米一の賞金稼ぎ。決闘者の王国（デュエリストキングダム）の事件以降、
一度も表に姿を現さず、行方不明となっていたはずだが……何故、
ここに？
それも今になって？

原作の展開で行けば、ペガサスの罰ゲームによって魂を砕かれたはず。
そうでなくとも、海に転落してグールズに回収された後、行方不明になっていた。

前者であれば、既に復帰の余地は無い。
ペガサスが死亡していない以上、ペガサスミニオンが復讐する理由は無く、
キースを蘇生させる必要は、全くと言っていいほどに無かったのだから。

後者であれば、あるいは復活の余地はあったかもしれない。
行方不明ということは、生死不明であるということだ。
生きているかもしれないし、死んでいるかもしれない。

そうなると――アニメの結末を辿り、生存していた状態のキースが、賞金稼ぎとして復帰したと解釈すべきか。

「……誰？」

相手の素性を知らないのだろう。
わけが分からないとでも言いたげに、イレンが首をかしげた。

「賞金稼ぎ……それも、元全米チャンプだ。
まさか、こんな場所に来るとは思わなかったが……」

奴が行方不明になったのは日本だ。
アメリカに帰るためか、あるいはこちらで生計を立てるため、行方不明になった後も、こうして裏の大会に出場していても、おかしくはない。

「カード・プロフェッサー中最強の実力……だったか。
いずれにしても、警戒するに越したことは……」

「……フードプロセッサー？」

「どこぞのミンチ製造用調理器じゃねえよ！？」

カード・プロフェッサー。賞金稼ぎのことだ。

確かに語感は似ているが、まったく別のものだ。

そもそも、人間と物体だし。

どういった経緯で「教授」を意味するプロフェッサーという単語と組み合わさって、

賞金稼ぎが「カード・プロフェッサー」となったのかは気になるところだが。

「……それ、は。ともかく……デッキ」

「キースのデッキ内容か？　……俺の記憶の限りじゃ、

奴のデッキは機械族を中心としたデッキだった。

闇属性の機械族……ってところか。拳銃モチーフのモンスターが多いはずだ」

「……把握」

いずれもギャンブル性は高いものの、強力なモンスターだ。

特に警戒すべきは、《ブローバック・ドラゴン》だろう。
3分の2の確率で、相手のカード1枚を破壊にかかる。
1ターンに1度の制約はあるが、それでも、毎ターン破壊効果が使えるのは強力だ。

「……警戒」

呟き、イレンはステージへと向かって歩き出……した、その瞬間、背後から、イレンの肩が掴まれた。

「よう、嬢ちゃん。ちょっと顔貸してくんねぇ？」

そちら側に視線を向ければ、視界に入るのは――趣味の悪いアロハを着用し、
両耳に多数のピアスを付けた、どう見てもチャラチャラした男。

確か、2回戦の相手だったか。

フェンリルロックのはずなのに、結局ロックできずに終わってたか。
しかも、試合に集中していなかったこともあり、
まったくと言っていいほどに太刀打ちできなかった男。

果たして、何のようだろうか……と考えたところで、
一つ、思い当たることがあった。

――報復か？

だとすれば、納得はいくが……。

「……」

「そう睨むなってぇ。相手、あのキースだろ？
だったらさぁ、さっさと棄権した方が良くねぇ？
どうせ勝てねえんだし、この後時間使った方が絶対得だって」

……ああ、そういうことか。

ただのナンパ男だったか。

訝しげに俺の方を見るイレンに「構うな」と告げ、
俺は軽く溜息をついた。

「いい場所知ってんだよ。その後は知ら……」

「……蹴り潰す」

「ヒィッ！？」

「おうっ……！？」

……今、軽く前かがみになってしまった。

妙に殺気立ったことも含め、こいつは「言ったらやる」と確信できる。

確信できるし……恐らく、マジで殺る。

いや、あんなものを蹴り潰されたら、普通の男は死ぬ。

死ぬと言うか、ショック死する。真面目な話。

雰囲気に気圧され、そのまま壁に寄り掛かった男を尻目に、

イレンはステージへと向かっていく。

……ある意味、現れたのがこんなナンパ男だけで助かった、とすべきだろうか。

俺含め、多少の恐怖を与えただけで去っていくのだから、その通りだろう。

……まあ、あとは試合に臨むだけだ。

少し漏らしかけたのは秘密だ。

……秘密だ！

＊　＊　＊

「ケッ……対戦相手はガキかよ」

ステージに辿り着いた時、キースはそんなことを呟いた。

そうやって悪態をつくのは仕方がないと言えるだろう。

これまで、奴が辛酸を舐めさせられてきたのは、大抵がその「ガキ」なのだ。

トム然り、城之内然り、あるいは、遊戯然り。

いずれの人物にも敗北したわけだし、そうやって反応するのも仕方がないだろう。

「まあいいか……ケッ、つまんねえ勝負になりそうだがよ」

相手が若年であるからと侮っているのだろう。

その目からは、多少ならず余裕が感じられる。

……一応、相手はガキでも、それどころか人間ですらないが。

ケッ、と、小馬鹿にしたように呟くキースを尻目に、
イレンはデュエルディスクをセットする。

「……始める」

「愛想の無ぇガキだなぁ……まあいい」

そんな前置きの直後、キースも同様にディスクを構える。
そして――この大会の決勝戦が始まる。

「「決闘（デュエル）！」」

イレンの表情を察するに、どうやらキースが先攻のようだ。

「オレのターン、ドロー！
まずは様子見とさせてもらうぜぇ。

モンスターをセット、カードを2枚セットしてターンエンドだ」

攻撃的な性格のキースが、セットモンスター……。
となると、何らかの罠が仕掛けてある可能性は高い。

「……ドロー。……《ギガント・セファロタス》、召喚」

【《ギガント・セファロタス》　攻　１８５０　／　守　７００】

場に現れるのは、その名の通りに食虫植物（セファロタス）を模した外見の、奇怪な植物だ。
攻撃力に関しては植物族でも高い方で、更に、
自身の効果によって攻撃力を上昇できる。

このモンスターを見れば、おおよそ推察できる通り、
イレンが今回使用しているデッキは【植物族】だ。

【魔轟神】といい【マシンナーズ】といい、
どうもこいつの使うデッキは、構築を変えさえすれば、
相当にガチなデッキになるような傾向にあるような……。

気のせいだということにしておこう。

気のせいだ。多分。

「……攻撃」

「ケッ……警戒も何も無しに攻撃たぁ、やっぱ簡単だなぁ！
セット状態の《スフィア・ボム　球体時限爆弾》が攻撃されたとき、
ダメージ計算前に、攻撃してきたモンスターの装備カードになる！」

「……？」

ガッ、と金属の四肢によって、ギガント・セファロタスにしがみ付く爆弾。

一見すれば……いや、普通に奇妙な光景であることは間違いない。

「そいつは次のテメェのターンのスタンバイフェイズ、
装備されたモンスターを巻き添えに自爆する。
そのとき、装備されたモンスターの攻撃力分のダメージを受けてもらうぜぇ」

ライフポイントが４０００しかない状況下、
こういった、大きなダメージを与えることのできるバーンカードは強力だ。

特に、攻撃されるだけで効果を発揮できるスフィア・ボムは優秀と言える。
その分、対策も容易なのだが……。

「……速攻魔法、《偽りの種》。
手札……から、レベル２以下……植物族、特殊召喚。
《ウィード》、特殊召喚」

【《ウィード》　攻　１２００　／　守　４００】

「何ィッ……！？」

「……直接攻撃（ダイレクトアタック）」

「通さねえよクソガキ！　速攻魔法、《終焉の焔》発動！
オレの場に黒焔トークン２体を守備表示で特殊召喚する！」

【《黒焔トークン》　攻　０　／　守　０】
【《黒焔トークン》　攻　０　／　守　０】

黒い火炎が沸き上がり、ウィードの眼前に立ちふさがる。

……俺と似たようなことをッ！！

「……このまま、攻撃」

例によって例のごとく、バトルフェイズ中に特殊召喚されたため、その攻撃を止めることなく、勢いのままにウィードがトークンの片割れを破壊する。

「……レベル４、ギガント・セファロタス、に……、
レベル……２、ウィード。……チューニング。
《ヘル・ブランブル》、シンクロ……召喚」

【《ヘル・ブランブル》　攻　２２００　／　守　１８００】

「チィッ……！」

「……植物族以外……召喚、する、場合……、
１０００、ライフコスト……必要と、なる」

シンクロ素材にでもして墓地に送られれば、
自然、スフィア・ボムの束縛は消える。

不発弾になりました……ってとこだろうか。
いずれにしても、墓地に送られる以上は、結末に変わりは無いが。

「……伏せ……終了」

「ケッ……オレのターンだ。ドロー！
シンクロした程度で浮かれてんじゃねぇぞ。
オレは黒焔トークンを生贄に、《ブローバック・ドラゴン》を召喚するぜぇ！」

【《ブローバック・ドラゴン》　攻　２３００／守　１２００】

随分と早いタイミングだが――来たか。

回転式拳銃（リボルバー）と対を為す自動式拳銃（オートマチック）。

その効果も同様に、

本家とも言える《リボルバー・ドラゴン》と対をなす、破壊。
２分の１の確率で、相手の場のカードを破壊する効果だ。
ただ、こちらの方が効果範囲が広く、
実質的に上位種と見る者もいるが――まあ、そのあたりはさておく。

「ヘル・ブランブル……の、効果」

「ケッ……そういやそうだったなぁ。
１０００のライフくらいくれてやらぁ」

思い出したかのように支払われる１０００のライフポイント。
毎度のことだが、デュエルディスクは何故あんなにも律儀なのだろう。
忘れていたライフコストを後になって支払うとか。

確か、ずいぶん後になるが――デッキに入っていないモンスターを、
ソリッドビジョンで映しだしたなんてこともあったような。

……海馬コーポレーション、凄いな。

「だが、その程度でいい気になってんじゃねえぞ！
テメェの場のその伏せカードを選択し、ブローバック・ドラゴンの効果を発動！
３回のコイントスの内、２回表が出た時、そいつを破壊する！」

「……チェーン。永続……罠（トラップ）、《アイヴィ・シャックル》。
場……モンスター、……全て、植物族」

「それがどうしたぁ！？」

……そういえば、コイントスも自動でやってくれるんだったか。
サイコロも自動だっけ。
海馬コーポレーション凄いな。

「結果は――表、裏、表！　よって、そのカードは破壊するぜ！」

放たれる弾丸が、イレンの場の《アイヴィ・シャックル》を破壊する。
だが、問題はそこではない。もっと重要なのは――。

「表側……アイヴィ・シャックル、破壊、された……とき、１枚、

引く」

「ケッ……追加効果かよ。まあいいぜ。
ブローバック・ドラゴンで攻撃！」

「……」

先程とは質の違う弾丸に撃ち抜かれ、
ヘル・ブランブルがその身を散らす。

たかが１００、されど１００――。
いつだったか、俺自身が言った言葉でもある。

上級モンスターとして見れば、ヘル・ブランブルも、
……加えて言えば、ブローバック・ドラゴンも、基準値である２４００に劣る。

だが、ヘル・ブランブルとブローバック・ドラゴンにも、
明確に「１００」という差が存在している。

植物族のシンクロモンスターは2体しかいないが、
そのいずれもが攻撃力２２００だ。

もう一方の《スプレンディッド・ローズ》ならば、
後出し、かつ墓地に植物族モンスターがいさえすれば、
ブローバック・ドラゴンの攻撃力を半分にして倒せるはずだ。
そうでなくとも、他に方法はいくらでもある。

……特に、イレンのデッキは――。

「カードをセットし、ターンエンド。
……さあ、テメェのターンだぜぇ」

「……ドロー。《ワン・フォー・ワン》、発動。
《スポーア》、墓地……デッキ、《グローアップ・バルブ》、特殊召喚」

【《グローアップ・バルブ》　攻　１００　／　守　１００】

「グローアップ・バルブ…生贄。《ギガプラント》……召喚」

【《ギガプラント》　攻　２４００　／　守　１２００】

「何ィッ……！？」

イレンのデッキは、パワーと展開力によって場を制圧するタイプのデッキだ。
しかも、高い攻撃力を持ったモンスターを出すのには、大した手順は必要無い。

墓地にモンスターを送る。それを特殊召喚する。
あるいは、今のように、直接的に1体生贄の通常召喚を行う。

特にギガプラントの場合、大量展開の起点ともなるため、
通常召喚の権利を使ってでも、場に出す価値はある。
ただ、イレンのデッキにはデュアルモンスターはいない……はずだ。
《スーペルヴィス》は投入されていないだろうことは予測できる。

「……攻撃」

「チィッ……！！」

ガゴッ、という轟音と共に、粉砕される機械の竜。

やはり、その数値の差は１００――。
互いに受けた戦闘ダメージは１００同士だ。
とはいえ、キースは1度、ライフコストとして１０００支払っている。
手札や場の状況を鑑みることが無ければ、イレンが優勢か。

「いい気になってんじゃねぇぞォ！
伏せ(リバース)カード、《時の機械―タイム・マシーン》発動ォ！
モンスターが破壊されて墓地に送られたとき、

そいつを同じ表示形式で場に呼び戻す！」

鉛色の窯の中で巻き戻るようにして、
ブローバック・ドラゴンが、再度、場に姿を現す。

……マズいな。

ブローバック・ドラゴンの強みは、場に残すことができれば、
毎ターン効果が使用できるという点だ。

リボルバー・ドラゴンも似たようなことが言えるが……しかし、
ブローバック・ドラゴンの効果対象は、モンスターだけではない。

伏せ（リバース）カードを破壊され、
更に――あのカードまで出されては、非常に危険なことになる。

「……伏せ。……終了」

「オレのターンだ……ドロー！
ケッ……まずはテメェのその伏せ（リバース）カード、狙わせてもらうぜぇ！
ブローバック・ドラゴンの効果発動ォ！」

カチ、カチ、カチ、と、
ブローバック・ドラゴンの遊底（スライド）が音を発する。
3度。
コイントスの回数分だけ。
そして、その音が鳴りやんだとき――。
「チッ……ハズレかよ。運が良かったなぁ？
だが、まあ構わねえよ。魔法（マジック）カード、《融合》を発動！
手札の《リボルバー・ドラゴン》、そして場のブローバック・ドラゴンを融合！
現れろよォ、《ガトリング・ドラゴン》！！」
【《ガトリング・ドラゴン》　攻　２６００／守　１２００】
二体の機械の竜が分解し、組み替えられ――現れる、超大型の機械竜。
その両腕と呼ぶべき部位と頭部は、
全てガトリング砲に換装されており、凶悪な印象を受ける。

実際、その効果はリスクは大きくも、強力だ。

「ガトリング・ドラゴンは1ターンに1度、3度のコイントスを行い、
その時に出た表の数だけ、場のモンスターを破壊する。
ヒハハハハ……楽しいだろォ、こういうギャンブルはよォ！
さーあ火を噴けガトリング・ドラゴン！」

先程のような、カチ、カチ、カチ、などという生易しい音ではない。
回転――砲塔が回転する轟音が、周囲に響き渡る。

そして、その動きを止めるのは――二つ。

一つは、まだ回り続けている――！

「『表』は一つだけだったようだぜぇ！　ほォらブッ放せぇ！」

「……っ」

連続して射出される弾丸により、「削り取られる」ギガプラント。

現実に、ガトリング砲の威力は相当に凄まじいと聞く。
……ソリッドビジョンでも、ここまでとは。

「喰らえよクソガキィ！　ガトリング・ドラゴンで直接攻撃（ダイレクトアタック）だぁ！」

「……伏せ……《ガード・ブロック》。
……ダメージ、１度、だけ……ゼロに……し、ドロー。」

お前も俺と同じような手を使いおって！

……いや、まあ。別に悪くはないんだけどさ。
一応、半身のようなものだし。

「チッ……まあいい。カードをセットし、ターンエンドだ」

「……ドロー。……《グローアップ・バルブ》、効果……。
デッキ、の……１番上、墓地……送り、特殊召喚」

【《グローアップ・バルブ》　攻　１００　／　守　１００】

墓地に送られたカードは――《イービル・ソーン》か。
現状、特に使い道は無いカードだが……。

「……《フレグランス・ストーム》。場……植物族、破壊。デッキ……から、1枚ドロー。更に、植物族……が、手札……加わった、とき、相手に見せ……もう1枚、ドロー。《薔薇の妖精》」

そうして、カードをキースに見せ、イレンは更に1枚カードをドローする。

「……更に、《薔薇の妖精》……。効果、で……手札、加わった……とき、特殊召喚……できる。守備表示……特殊召喚」

【《薔薇の妖精》　攻　６００　／　守　１２００】

……確か、《ワタポン》と《光神テテュス》と同じようなことができるんだったか。
チェーンブロックを組む形で、公開した後で特殊召喚……だったか？
いや、まあ、正直に言えば、詳しいことは分からないんだが。

「《貪欲な壺》……発動。墓地、モンスター……5枚、デッキ……戻し、……2枚、ドロー」

イレンの選択した5枚は、ギガント・セファロタスに、ウィード、ヘル・ブランブル、グローアップ・バルブ。それに……ギガプラント？

どういうことだろうか。
上級モンスターであるギガプラントは、当然ながら、墓地にあった方が都合がいい。

植物族デッキは蘇生も容易だ。
ティタニアルを優先的に墓地に落とすようなプレイングも、聞いたことがある。

……何故だ？

「《死者蘇生》。……《イービル・ソーン》、蘇生」

【《イービル・ソーン》　攻　１００　／　守　３００】

「あぁ？」

……だから言わんこっちゃない。

ギガプラントを残しておけば、ある程度は戦線の維持も容易だった。
死者蘇生を使えば、ブラックローズ・ドラゴンを使用しての全体破壊もできたはずだ。

こういう、負けられない場では、一応許可してあるんだが……。

「イービル・ソーン、効果。……生贄……で、３００、ダメージ」

「ケッ……」

手榴弾にも似た種子が爆裂し、キースに３００のダメージが向かう。
キースの残りライフは、２６００。

「……その、後……デッキ……２体、まで……、
イービル・ソーン、攻撃、表示……特殊召喚……できる。
２枚、……特殊召喚」

【《イービル・ソーン》　攻　１００　／　守　３００】
【《イービル・ソーン》　攻　１００　／　守　３００】

……だが、攻撃表示だ。

あれじゃあ、壁にもならない。サンドバッグ同然じゃないか。

クソッ、と悪態をつく俺に、イレンが目くばせする。

……何だ？

疑問に思った俺を、突如、違和感が襲った。

通常召喚権を残したままに、３体のモンスターを並べる。
手札は残り２枚。そして、コイツは俺の反転存在――。

――……まさか！？

「……モンスター、３体……生贄」

「3体……生贄だとぉ！？」

「……召喚。《邪神イレイザー》」

【《邪神イレイザー》攻？／守？】

それは、あまりにも衝撃的な光景で。
それは、あまりにも唐突な降臨で。

何よりも――それは、ある意味で当然の結果であると言えた。

45束目：確証（後書き）

そういうわけで今回も超展開でした。

毎度毎度のことなんですけど、何で私はこうも超展開が好きなんでしょう。

厨二病だからか。

毎度毎度のことですが、展開と描写を重視しすぎて、
効果を間違えて覚えていたり、
あるいは枚数を間違えていたりということがあるかもしれません。
そういった場合はご一報いただけると非常に助かります。

まあそれはそれとして、各々のデッキの話です。

今回の話の中でも挙がったように、イレンのデッキは基本的にパワーデッキです。
上級モンスターの能力値で言えば六条の天使族に劣りますが、
実際問題、考えてもみると、

・レイジオンぐるぐる
・門グラファゴルドシルバグラファ（ｒｙ

・ギアフレフォートレスフォース落としてフォートレス（ｒｙ
・ユニオンだから破壊は（１度だけ）無効デース
・安定のフォートレスゲー

・ロンファギガプラスーペギガプラスーペティタ（ｒｙ
・イービルソーン効果で２体展開↓魔天使降臨
・安定のロンファ＋バルブ＋スポーアのセット

と、現環境の最前線……とまではいかずとも、
中堅クラスのカードやギミックが揃っているわけです。

どれもこれも最上級モンスターがポンポン飛んでくるようなデッキですし、
パワーデッキとするのが適切ではないかと思った次第です。

そういえば今回主人公（笑）は、
裏で「海馬コーポレーション凄ぇ」と言いつつ解説に徹していただけでしたね。
ついでに漏らしかけてましたし。

安定の役立たず感（

いや、あれでも一応色々考えているつもりなんですけど、
こういう状況下ではどうにも動かせないというのがありまして。

ともあれ、物語もそろそろ動き出します。

今回アレがアレを出した時点でもうお気づきの方もいらっしゃるでしょうが、
あえて色々と今後の予定は伏せておきます（

次回はキース戦後半以降をお届けしたいと思います。
それと修正分も……；

それでは。

４６束目：超抜（前書き）

前回のあらすじ

主人公なのに漏らしかけた

46束目：超抜

三幻神の1柱、オシリスと対を為す邪神――イレイザー。

抹殺者の名を冠するその威容――そして、異様は、
相手のみならず、この場にいる全ての人間に対し、恐怖と威圧感を与えていた。

驚いているのはキースだけではない。
――横で見ている、俺自身も、同様に驚いていた。

「イレイザー……!?
ばっ……お前、何でこんなところで出した!!
いや、そもそも、何でコイツを持っていることを言わなかった!?」

「……説明……後」

「くっ……！！」

この状況下では、話すことすらままならないのも確かだが……。

クソッ、と悪態をつきつつ、事の動向を見守る。

今の俺には、それしかできることがない――。

「な……んだ、そいつは……！？
邪神だと……！？　ふざけたことを言いやがって……！
何でそんなモンがいんだァ！？」

キースの追及に構わず、イレンは無表情なままに口を開く。

「イレイザー……効果。攻守……相手の場……カード、
枚数で、決定……」

「ケッ……それで攻撃力が決まってねえのかよ。
しかも相手によって左右されるたァ、神にしちゃあ不甲斐ねえなぁ。
さしずめ人頼みの神ってかぁ？　ヒャッハハハ！」

……キースの奴、完全に侮ってやがる。

常識で考えてもみれば、神の名を冠していて、
「それだけ」なんてことが、あるわけがない……！

「……枚数……×１０００」

「ンなっ……ってこたぁ、つまり――」

「攻撃力……守備力、３０００」

ガトリング・ドラゴンを上回るだけの攻撃力――。

本来ならば、《心鎮壷（シン・ツェン・フー）》などとのコンボによって、
その攻撃力を固定、ワンターンキルや、高攻撃力を狙うなどが考えられる。

だからこそ、その攻撃力はまだ「中途半端」だ。

イヤになるくらいに。

となると、本来のこのデッキは、
相手フィールド上に複数のトークンを並べ、

イレイザーで爆発的な攻撃力を得る、ということを目的にしていたわけか。

……見抜けなかったのは、俺の失敗か。

「……攻撃」

「チィッ……！！」

暗い黒色のブレスが、ガトリング・ドラゴンを飲み込んでいく。

通るダメージは４００――残りライフは、２２００。

次のターン、あるいは次の手で、キースが何を仕掛けてくるか。

それによって、このあとの展開は――決定する。

「……終了」

「オレのターン……ドロー！

ケッ……どっちにしてもだ。その不甲斐ねぇモンスターは、

攻撃も受け付けるし、効果も食らう。

ってこたァ、やっぱり穴だらけの神ってやつだなァオイ！」

確かに、現状を言えば穴だらけであり、すぐに対処されるのがオチだろう。
だが、本当にそれだけだと思っているのだろうか？
だとしたら――奴は、イレンを。
そして、イレイザー――邪神を、侮りすぎだ。

「《封印の黄金櫃》を発動するぜぇ。
この効果により、デッキから《デモニック・モーター・Ω（オメガ）》を除外し、
２ターン後にオレの手札に加える。……だが、ンなモン待っちゃいられねえ。
オレァ《闇次元の解放》を発動！　除外された闇属性のモンスター、
《デモニック・モーター・Ω（オメガ）》を特殊召喚する！」

【《デモニック・モーター・Ω（オメガ）》　攻　２８００／守　２０００】

デッキから直接除外して、帰還系のカードで場に出す……か。
何でこう、毎度毎度のように戦法が被るんだ。
《終焉の焔》のトークンを残して上級モンスターを召喚することもそうだし、

イレンにしても、同名モンスターの展開からの邪神召喚……。

……何だろう、このやるせなさ。

「デモニック・モーター・Ω（オメガ）の効果を発動ォ！
エンドフェイズに自壊する代わりに、攻撃力を１０００アップさせるぜぇ……！」

デモニック・モーターの両腕に仕込まれた刃が、その全貌を現す。
頭部。両腕。肘関節の先にまでも。
その姿は、確かに悪魔（デモニック）のようなと呼ぶのが相応しい。

「これでテメェの邪神の攻撃力を超えたぜぇ！
喰らいやがれよクソが！　デモニック・モーター・Ω（オメガ）で、
邪神イレイザーを攻撃ィ！」

伏せカードは存在しない。
イレイザーの攻撃力に、変動はなく――３０００。

つまり、イレイザーは――競り負ける。

切り刻まれ、その首を落とされるイレイザー。

――しかし。

「……邪神イレイザー、効果……発動」

「何ッ……！？」

黒い液体――イレイザーの流す黒い血が、
フィールドの、全てのカードを沈めていく。

「イレイザー……破壊、されたとき。
……場。全てのカード――破壊」

「な……んだとォ！？」

キースの伏せカード――《リビングデッドの呼び声》と、
既に表になっていた《闇次元の解放》の2枚のカードを巻き添えに、
デモニック・モーター・Ω（オメガ）までもが、血の池に沈む。

イレイザーの効果を知らなかったとはいえ――その行動は、
あまりに浅慮、かつ浅薄。

手札の1枚が《封印の黄金櫃》だったことを鑑みても、
リビングデッドの効果で《リボルバー・ドラゴン》か、
あるいは《ブローバック・ドラゴン》を蘇生させ、
まずはイレイザーを破壊していた方が、リスクは少なかったはずだ。

……当然、それはアバターにも適用される事実で、
魔法（マジック）・罠（トラップ）の封印効果を除いて考えれば、
モンスター効果によって破壊した方が安全なはずだ。
手札のロスも少ないし、2ターン後には手札にキーカードが来る。

だが、どちらにしても――これで、終わってしまう。

「ケッ……ターンエンドだ」

「……ドロー」

この状況からイレンが勝利するパターンは、限りなく多い。
攻撃力2200以上のモンスターが出さえすればいいのだから。

植物族デッキの特殊召喚の手段は豊富だ。
《ローンファイア・ブロッサム》は元より、
蘇生手段である《増草剤》、先程の《ギガプラント》、
植物族を手札に戻しただけで特殊召喚できる、《魔天使ローズ・ソーサラー》。
《フェニキシアン・シード》によって特殊召喚できる、
《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》などがそうと言えるか。

だが、それを無視してでも――コイツは、やる。
相手を徹底的に打ちのめすために。

「《ボタニティ・ガール》……召喚」

【《ボタニティ・ガール》　攻　１３００　／　守　１１００】

「墓地……《スポーア》、効果、発動。
植物族……《薔薇の妖精》、除外。
……《スポーア》、特殊召喚」

【《スポーア》　攻　４００　／　守　８００】

墓地から場に現れる、綿毛にも似た「胞子」のモンスター。

《ワタポン》や《ハネワタ》にも似ているような気がするが……まあ、
デザインの問題というだけで、他に共通点は無いだろう。
多分。

「スポーア……効果。除外……した、植物、族……モンスター、
レベル分、レベル、上昇……」

薔薇の妖精を除外したことにより、レベルは４。
この効果はデュエル中に１度しか発動できないものの、
手札を消費せずに使用できる効果だということで、
植物族のデッキには重宝されていることも多い。

実際、手札に何も無くとも、
墓地にこのカードと適当な高レベルの植物族モンスター、
それから、《レベル・スティーラー》があれば、
元となる植物族モンスターのレベル＋１のシンクロモンスターが召喚できる。

例えば、先程挙げた《魔天使ローズ・ソーサラー》を利用すれば、
《ギガンテック・ファイター》のシンクロも容易だ。

――そして、現状。

「レベル……3、ボタニティ・ガール……。
レベル……4、スポーア、……チューニング」

薔薇の蔓が、周囲に伸びていく。

黒い蔓。
薔薇。

――黒い薔薇（ブラックローズ）。

「……シンクロ、召喚。
――《ブラック・ローズ・ドラゴン》」

【《ブラック・ローズ・ドラゴン》　攻　２４００／守　１８００】

薔薇の花弁が、周囲に吹き荒れる。

効果の発現ではなく――ただ、召喚の余波として。

……最悪だ。

最悪という、その言葉だけでは括れない程度には最悪だ。
あれほど悪目立ちするなと言ったのに！

これがせめて、イレイザーだけならなんとかなった。
だが、ここで世界で1枚しかないようなカードを見せつけるとなると――。

くそっ、と悪態をつきながら、次の手を考える。

この勝負が終わるまでに、どうにかして、
ブラックフェザー・ドラゴンを受け取り――その上で、逃げる算段を立てなくては。

「ブラック・ローズ・ドラゴン……で、直接攻撃（ダイレクトアタック）――」

「う、お、おおおおぉぉっ！！？」

口蓋から放たれる黒い息吹が、キースのライフポイントを奪い尽くしていく。

僅差――というほどに差は無く、むしろ、圧倒。
３１００という大差をつけ、イレンが、この勝負に勝利した。

＊　＊　＊

「ひっ捕らえろ！」などという物騒かつ時代錯誤的な声と共に、
大勢の黒服が、俺の眼前を駆け抜けていく。

誰も俺のことには気付かない。
当然だ。俺はこの大会に一切関係していないのだから。

そしてまた、実体を持たず、今は肉体の所有権を俺に譲っているイレンも、
奴らの目に見えることは、絶対にありえない。

三十六計逃げるにしかず。

……とは言うものの、実際のところを考えれば、
延々と追いかけられながら逃げるというのも、
体力面で無理があると言わざるをえない。

ただでさえ、こちらは一人。
相手は、２０を超える大人数だ。
いつの間にか車で追いかけられていたり、
あるいはもっと別な手段を用いられれば、
容易に追い付かれ、組み伏せられて捕縛される。

これは予想通りと言うべきか、
奴らは大方の優勝候補――つまり、キースが負けたこと、
それに対する、賭けの損失を補填するという目的もあり、
優勝賞品を渡された段階で、追走が始まった。

そこで出した策の一つが、これだ。

曲がり角を曲がり、人目が無いことを確認した瞬間に「代わる」。
曲がり角を覗いてみても、そこにいるべき人間はいない。

俺に何か聞かれたとしても、素知らぬ顔していればいい。
何かしら偽って過ごすのは得意だし、嘘を吐くのも、同様に得意だ。
かと言って、平気だとはいいがたいが。

全員がスタジアムの外に出たことを確認し、
俺も同様に、悠々とスタジアムの外に出ていく。

当然の事実だが、周囲には人影は無い。
それを確認し、俺は3枚のカードを取り出した。

《ブラックフェザー・ドラゴン》。

《F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）》。

そして――《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ジ・アース》。

1枚は、最初から狙っていたものだ。
だからこそ、それほど驚きは無い。あって当然だと思う。
ただ、よく手に入れてくれた、という感謝はあった。

もう1枚は、俺には不要なものだ。
モンスターとしては強力だが、俺はドラゴン族を主軸としたデッキを持っていない。

そしてもう1枚。
……プラネットの一つ、ジ・アース。

まさか、こんな場所にあったとは思わなかった。

がしがしと、頭を掻きむしる。

この調子だと、他のプラネットがどこにあることやら。

案外、どこかの誰かがホイホイ持ってたりするんじゃないだろうか。
俺たちのように。

それはそれとして、と、俺はイレンの方へと視線を向ける。
多少の怒気を含ませて。

「……言ったぞ、俺は。悪目立ちするなって」

「……」

「そもそも、イレイザーを出すような必要は無かったはずだ。
……それに、そいつを持っていたことを、何故言わなかった」

「……言う……言え、なかった……」

「言うに、言えなかった？」

そんなはずはない。
これまでにどれだけ時間があったと言うんだ。
言えなかったなどということが、あるわけがない。

「……何で『言えなかった』のか、その理由も言えないってことか？」

訊ねると、イレンは軽く頷いた。

……まあ、別に構わない。

例えば、俺が転生者であるという事実は、
軽々しく世間に公表できるものとは言えない。

また、今後の「予定」――俺の知りうるこの世界の知識も、同様だ。

そういった、世界や人間の根幹に関わる部分。
それが関わってくるようなことでもなければ、
俺(俺たち)とイレンと六条の間で隠し事は無い。

仕方ない、と断じて、俺はそれ以上の追及を諦めた。

「……でも」

「何だ？」

「……一つ、だけ」

「――……邪神は邪心」

一つだけ、と前置きして、イレンは口を開き、

とだけ告げ、俺の前から姿を消した。

イレンの存在は曖昧だ。また、自分自身の能力により、
その存在を完全に隠し、あるいは他者の目に映るようにすることもできる。

話すことがなくなったり、あるいは自分の興味を惹くものがなくなったとき、
よくイレンはこうして自分の姿を見せなくなる。

つまり、これ以上言うことは無いし、
質問も受け付けない――ということなのだろう。

しかし、またその言葉か。

何度聞けばいいのか、俺にはもう分からない。

邪神は邪心。

邪な心が、邪神を生み出す？
あるいは、邪な心が、邪神だとでも？

……あるいは、いずれ真相を知れる時が来るのだろうか。
邪神というカードを俺たちが所有している事実の、真相を。

そうなると気にかかるのは、最後の１枚の所在だ。

《邪神ドレッド・ルート》。

圧倒的なまでの制圧力を有し、
攻撃力８０００以下のモンスターに負けることはない。

戦闘力に関してはアバターに劣るものの、
状況次第ではそのアバターにすら勝てるというカードだ。

邪心がどうのというなら、まずもって六条は除外される。

あいつの場合、ヨコシマな心は腐るほど持っていても、その方向性が明らかに違う。
以前に奴のパソコンのハードディスク、特にDドライブを覗いてみたが、
明らかにアレなゲームや画像のフォルダがあったりした。

というか、画像のフォルダが「ｇａｚｏｕ」で、
アレなゲームのフォルダが「ｅｒｏｇｅ」なのはどういうことだったんだ。

まあそれはそれとして。

あいつのヨコシマな心の方向性は、
主に腐った方面や、あるいは本来向かうべきでない方向へ向けられている。
なんというか、精神的に妙に不安定なのに、妙な部分で安定しているというか。

それはそれとして、あいつはとりあえず除外だ。
そもそも、あんな凶悪な邪神を持っているようには思えない。

「ところでスズ」

『は、はい、なんです？』

「……お前さ、デュエルってできるの？」

『できないこともないですけど……。
ただ、カードには触れないです』

「……実体化も」

『はわ……できないです……』

ですよねー。

というか、スズがデュエルしたら、デッキはどうなるのだろう。
スタンダードに魔法使いだろうか。魔力カウンターもあるか。
レベルに関係しているということで、フォーチュンレディもあるかもしれん。
まあ、いずれにしても、デュエルをすることにはならないだろう。

……実体化できないし。

ともあれ、イレンの言葉は、言うなればヒントのようなものだ。

邪神は、人の手にある。

心が無ければ、邪な感情など持ちようもない。

邪心を持つ者が、邪神を所有している。

悪人とは限るまい。むしろ、善人だからこそ内に溜めこんでいる、という可能性だって、十分にありうる。

俺は俺自身、決して善人であるとは思っていない。むしろ正反対だ。俗人であり凡人で、どうしようもないくらいに打算家だ。善人になりたいだけの凡人だ。

だからこそ、「嫉妬」の象徴として、最初からアバターを所有していたのかもしれない。

――最初から？

そうだ、俺は最初からアバターを所有していた。カードを所有するというプロセスの最初、海馬コーポレーションからカードが送られたきた、そのときから。

イレンは、そもそも所有していることが当然だと言える。それはある意味、「最初から」所持していたということだ。だが、イレイザーを持っている理由は？

あいつはそもそもヒトではない。自然発生的にそこに存在するだけの「現象」に近しい存在だ。言うなれば、災害という概念にも似ている。

本来、人間としての感情を持たないあいつも、邪神を所持している。

あるいは、そこに意味があるのだろうか。

「最後の邪神は、人間側には無い――か？」

いや、あくまで推察だ。
間違っている可能性は大いにある。
ただ、それでも。可能性としては列挙せざるをえない。

亡霊は、その気になりさえすれば、
いつでも俺の肉体の所有権を奪うことができる。
だが、それでも奴がドレッド・ルートを持っているとは思えない。
仮にそうだとしたら、俺も同様に所持していないとおかしいからだ。

こちらでは相応に重要なものだ。
デッキも含め、自分の持っているカードのことくらいは把握している。

それに、仮に持っていたとすれば、奴は俺にそのことは告げてくる。
そういう人間……というか、そういう野郎だ。
邪心だって、それなりに持っている。多分、俺以上に。

何より、本能的に「ありえない」と悟っていた。
あくまでも、俺と奴は合計して一人の人間だ。

一人の人間が、同時に2つの邪神を持っていることは、恐らく、無い。

……イレンは存在はそもそもイレギュラーだから除く。
そもそも俺の手元にイレイザーは無いし。
それに、あいつのカードも、俺の手元には無い。

そういうものらしい。状況はよく分からんが。

しかし、これでまた、捜索対象が増えたことになる。
いや、振り出しか。
《邪神ドレッド・ルート》と、《エンシェント・フェアリー・ドラゴン》。
元々、探すべき対象は2枚だったんだ。
何枚にも増えたわけじゃないのなら、まだ良い方だろう。
プラネットに関しては、本当に単に希少性の高いカードなんだし。

ある意味、俺たちの探すべきカードは明確だ。

だからこそ、その難易度は高い。
カードの総量は膨大だ。分母が大きければ大きいほど、
その中の一つを探すのは非常に困難になる。

仮に1兆のカードが存在していたとする。
その中の1枚。あるいは2枚を探し当てるのに、どれだけ時間がかかるだろう。

まず最初の1兆分の1。
次に、その1枚を除いた9999億9999万9999分の1。

途方もない。

面倒なこととこの上ない作業だ。
しかし、やらなければならない。
それが俺たちに課せられた役割だとするならば。

軽く溜息をつく。

これ以上考えていても仕方がない。
いくら頭の中で考えていたとしても、行動に移せなければ意味は無い。
これ以上考えていても堂々巡りになるのは明らかだ。

ともあれ、明日、アカデミアに帰ることになってはいる。
一旦ここで切り上げて、本土での捜索は置いておくのが上策か。

どうせ、またいずれ来ることになるだろうし。

……と、そこまで考えたところで、携帯電話の着信音が鳴り響いた。

送信者を見れば、六条から……。

「どうした？」

緊急の用件ならば、早めに聞く必要がある。
そう考え、即座に電話に出たのだが――。

『先輩！　努力値稼ぎの良い場所が見つからな』

「寝ろ」

三秒で通話を打ち切った。

この馬鹿は何でこんな時にポ〇モンのことを聞いてくるんだ。
というか、俺がいちいちそんなことを暗記していると思ったのか。

と、そんなことをしているうちに、再度着信があった。

「……何だ」

『先輩！　イビ〇ジョーの宝玉が出ませ』

「故郷（くに）へ帰れ」

通話を打ち切った。

この馬鹿は何でこんな時にモ○ハンのことを聞いてくるんだ。
というか、俺にいちいち物欲センサーのことを聞いてくるのはお門違いだ。
自分でどうにかしろとしか言えん。

と、そんなことを考えているうちに、またも着信が。
苛立ちを溜めこみつつ、俺は携帯を耳に当てる。

「……」

『せ、先輩！　魂必中重ねがけしたのに、１０ダメしか食らいま』

「不屈」

携帯電話を握りつぶしてやろうかと思った。

この馬鹿は何でこんな時にス○ロボのことを聞いてくるんだ。
そこまでやって効かないんなら、不屈かかってるしかありえないだろうが。
いや、そうじゃなくて！

怒りが爆発する直前になって、また着信があった。
……平常心だ、平常心。

『……』

「……」

『いや、そこは先輩、次に電話してきたまったく違う人に当り散らす場面でしょ！』

「お前は俺に何をしたいんだ！？」

そんな展開にはしてやらねぇよ！！
だからこそあえて無言だったんだよ！！

「……何の用だ。ことと次第によっては、
帰ってお前のハードディスクを叩き壊すぞ」

『マジすいませんでしたからそれだけはどうかご勘弁を』

「お前はいちいち本題に入るまでが長いんだよ。
……で、何かあったのか？」

『ええ……それが……その』

「何だ。もったいぶった言い方はしなくていい」

『わ、分かりました。……斎王が、動き出しました』

……そろそろとは思っていたが――もう動き始めたのか。
早い、とは言えないが、それでも予想通り。
こういうときのために、六条をあちらに残してきたんだから。

「誰か結社に取り込まれたのか？」

『え、ええ、そういうことなんですけど……』

言いづらそうに、六条はうめき声を上げる。
どうしたのだろうか。
まさか、本当に万丈目が……？

「言いづらくても仕方がない。だけど、言わなきゃ始まらない。
……そこは、割り切ってくれ」

『わ、分かりました……』

言って、六条はその人物の名を告げた。

意外と言えば意外。
当然と言えば、当然。

くそっ、と悪態をつきつつも、俺は現実を見据えた。

こうなってしまえば仕方がない、と。

「状況次第だが、いずれ切り返すことはできるだろう。
それまで、皆にできるだけ単独行動をしないよう言っておいてくれ」

『了解しました』

「それから、奴らとは可能な限り戦わないこと。
戦いそうになったら逃げろ。逃げられないなら……」

『勝つ、ですか？』

ああ、と俺は頷いた。

勝てなくとも、最悪負けなければいい。
問題は、奴らに負けてしまうこと。

奴らは、デュエルに負けた人間を取り込み、その数を増やしていく。

ねずみ講かと言いたくなってしまうが、

それもあながち間違っていない気がする。
というよりは宗教か。
もっとダメになってしまった。

「……ああ。そうじゃなきゃ、あいつらは爆発的にその数を増やす。
それを防ぐためにも、まず負けることは許されない」

『……ハイ』

「それはそれとして、だけど……十代はどうした？」

『まだ行方不明っぽいです。原作の展開で言うと、
この辺でネオス手に入れてますよね？』

「ああ。そうなると、近々エドとの対戦があるはずだが……」

『見るんですか？』

「時と場合によるな」

それこそ、結社とのデュエルの最中に、ということもありそうだ。
というか、その可能性こそ高そうな気がする。
何故俺はこうも重要な局面のデュエルが見れないんだ。

最初の十代対エドのデュエルとか！

……まあいいんだけどさ、もう俺の役割みたいなモンだし。
俺は縁の下の力持ちの役割でいい。

『ところで先輩』

「何だ？」

『都子ちゃんの破壊力が凄まじすぎてヒロインが実質一択なんですけど』

無言で通話を打ち切った。

何故こいつは電話の最中にと〇メモをやっているのだろう。それも4。
というか男性向けゲームだよな。

ヒロインの名前が出て即座に反応する俺も俺だが、
あいつは本当に何をしているんだ。
というか、この十数分の間に何本ゲームしているんだ。

もしかして、実はあいつブルジョワなのか。
金持ちなのか。複数本ゲームの本体持ってるのか。

羨ましいわド畜生。

それはともかく。

「出港は……10時か」

そうなると、アカデミアへの入港は、おおよそ午後1時。

今日、すぐに結社が動き出すとは限らないまでも、

明日、動き始めてすぐに対応できるかどうか。

「ここまで来ると――ある種の賭けだな」

分の悪い賭けは好きじゃない。

だが、それしかないとなると、やるしかない。

「やるしかない」

時間の制約。
距離の制約。

あらゆるものを振り切るくらいのことをしでかさなければ、
俺たちの勝利は、到底ありえない。

あらゆるものを利用してでも、俺は勝つ。
いや――俺たちは、勝つ。

言うなれば、これは戦争だ。
勝てば官軍。負ければ賊軍。
勝たなければ、明日は無い。

セブンスターズに負けるとも劣らぬ、圧倒的な脅威。
だからこそ、全員の意志を統一するべきだ。

白の結社という明確な敵を前に、空中分裂などしていられない。

俺はリーダーと言う柄ではないが、
それでも、年長者であることは間違いない。

人間を集めるのは俺の役目だ。
そこからは、カリスマ性のある人間に任せればいい。

だからこそ、俺は俺の役割を果たさなければならない。
人間を集めるより先に、集めるべき人間を奪われてはならない。

人は国。数は力。

あとはそこに、一騎当千の実力を持つ人間を加えてやればいい。

十代。万丈目。明日香。そういった、強い人間を。

方針は決まった。

あとは、それを実行に移すだけだ。

――そうして、俺たちは明日の出港を待った。

46束目：超抜（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「もしも転生先が」

「……もし、転生先が違ったらどうなってるんでしょう」

「うん、お前、えらくシリアスな口調だけど、
そのニヤニヤやめてくれたらもっとシリアスになったと思うんだ」

「ぬううううっ……何故先輩はこうも私とシリアスを結び付けてくれないんですかっ！
まあいいですけど。それより、もしそうなってたらどうなってるんでしょう？」

「例題を出してくれ」

「そうですねぇ……モンハンとか？」

「五日以内に死ねる自信がある」

「……まあ、結構にシビアな世界ですしねぇ……。
先輩はどんな世界について考察します？」

「『とある』かな。あるいは月姫、Ｆａｔｅ……」

「流石の厨二……いやすみません黙ってます。
というか、それは前も挙げてましたよね？」

「ああ、まあ一応。ただ、考えはするだろ？」

「まあ剣と魔法の世界くらいは考えますね」

「ただ、お前が嫌にリリカルでマジカルなことをしでかしてそうで困る」

「なんですかその偏見！？」

「……いや、だってなぁ」

「逆に先輩はフィジカルなことになってそうですね。
……魔術師相手に拳銃使って戦うとか」

「物理的すぎねーか」

「最終的に筋骨隆々になって、素手で相手の頭砕くとか！」

「物理的すぎねーか！？」

↓　続かない

＊　＊　＊

魔法（マジカル）ではなく物理（フィジカル）です。
あと最後のネタはゴンさんです。

そういうわけで、明確に結社との対立を表明しました。
ここであえて結社に取り入る、というようなことをしてみれば、
それはそれで面白かったのかもしれないのですが、
私にはそんなことはできませんでした。

厨二病のくせに勧善懲悪が微妙に好きって恐ろしいですね（

今回はＶＳキース後編でした。
チョイ役でした。申し訳ありません（

とりあえず、軽い解説だけでも。

実際にキースのようなデッキを組むとすれば、
オーバーロード・フュージョンは必須になるかと思います。

汎用性の高いサイドラを素材にするキメラテックも出せますし、
ガトリング・ドラゴンも、このカードで特殊召喚できます。
また、素材としたリボルバー・ドラゴンなどは、
異次元からの帰還や闇次元の解放によって帰還できます。
ちなみに、ここでガトリング、ブローバック、リボルバーの攻撃が
通れば、
合計のダメージはは７５００。ほぼワンキル級です。

また、フロントラインと、妥協召喚できるガンナードラゴンを組み
合わせれば、
リボルバー・ドラゴンとブローバック・ドラゴンのどちらもが、
デッキから直接召喚することができます。

加え、セットしておけば、ウィルスカードの媒体にもできるので、
ウィルスデッキを作るのであれば、ガンナードラゴンは欠かせない
かと。

話はそれましたが、そういうデッキですので、
実際には結構な地力と爆発力はあります。

原作の再現も少しだけ目指してみましたが、
結局、できたのはデモニック・モーターのあのシーンのみ。

できれば、リビングデッドを使ってでも、
リボルバー・ドラゴンを蘇生させたかったのですが、
イレイザーの攻撃力が上昇してしまうこともあって、それができな
かったという。

そういえば、よく考えればリボルバー・ドラゴン先に出せば、
普通のモンスターが相手であれば、総攻撃でワンキルでした。

相手が悪かっただけです。私も色々と頭おかしかったんです。眠いです。

毎度毎度のことではありますが、どこかしら間違っている部分などあるかもしれません。
そういった場合には、ご指摘いただけると非常に助かります。

そういうことで、次回に続きます。

次回からようやくアカデミア編。
はてさて、結社に取り込まれた人物とは？

……まあ、既に考えているんですが。

あと、いくら御堂が厨二病でも、
白の結社に対抗して黒の騎士団を作ったりはしません。

しません。

それでは。

47束目：開戦（前書き）

相変わらずの超展開です。
そして私の苦手な三人称視点です。
色々と稚拙ですが今回もお楽しみいただければ。

47束目：開戦

光の結社。

その活動が明白になる、その瞬間。
一般の生徒には、それを感じ取ることはできないだろう。
少なくとも、光の結社という存在自体、知る由も無い。

ただ、唯一――とは言うまいが、
この先の展開を知る者。つまり、六条有珠は、
その「明確な」予兆を感じ取っていた。

つまり、誰か。
優秀な人間が、結社に引き込まれたことだ。

「……まさか」

まさか。
そう、まさかだった。

何故、と問いたくなる。
しかし、その問いに答えてくれるような人間はいない。

何故。

何故――三沢大地が、斎王に取り込まれたのか。

つい先日のことだ。

遊城十代が行方不明となり、彼と親しい者が十代を探しに行った後のことだ。

三沢が戻ってきたときには、
何故か、妙だと思えるほどに白い制服に身を包んでいた。

それを見た時、他の生徒たちからは失笑が。
有珠からは――不安が、漏れていた。

万丈目準は、本来――有珠が知るものとは、性格が大きく違っている。
性格だけではない。デッキ、所有しているカードまでもが、だ。

故に、そこで齟齬が生じたのだろう。

三沢は本来、光の結社に引き込まれる人間としては、
かなり遅く、結社側に引き込まれてしまっていた。

しかし、万丈目は光の結社の誘いには屈しない。
そもそも、十代と決着を付けるのであれば、いつでも、
それこそ、どんなときでも、デュエルを挑めば済む話であるのだから。

故に、恐らくは予定調和のため、
三沢大地が白の結社として選定されてしまったのだろう。

ともかく。

「はっはっは。白とは素晴らしいものだなぁ！」

誰だアンタと、そう言いたくなるような光景が、そこには広がっていた。

何故か白く染めてしまった髪、白い制服。

「つーかマジで誰ですかアンタ」

思わず、有珠は呟いてしまっていた。
外見もそうだが、口調も大分違う。

雰囲気も、まるで別人のようだ。

有珠の呟きが聞こえなかったのは幸いだろう。聞こえていれば、向こう３０分は謎の説教を受けているところだ。

同じ説教を受けるなら、まだ御堂から受けた方が実はあるだろう。

というよりも、今の三沢では、宗教の勧誘じみたことしか言わないというのが現状なのだが。

そもそも、彼がいたのはイエロー寮なのではないのだろうか。何故、レッド寮の食堂にいるのか、有珠には理解できなかった。

そもそも、それを言うのであれば、有珠がこの場にいることも不自然なのだが。

「んー……」

周囲を見渡せば、有珠の知る人間の姿がちらほらと見られた。

ラー・イエローでありながらも、十代が戻ってくるまで、延々と居座り続ける翔とティラノ剣山。

レッド寮の寮生で、本来この場にいるべき万丈目。

何かと理由をつけてはレッド寮に来訪する明日香。

加え、同室故に共に行動することの多いレイ。

有珠を含めれば6名の男女が、この場にいる。

光の結社は、基本的に「強い者」から順に人間を引き込む習性がある。

どこか突き抜けた実力を持つ人間なら、斎王が直接。

それなりに他人と拮抗した実力を持つ人間なら、配下と呼ぶべき人間が。

少なくとも、食堂の中にいる人間に関しては、

引き込んでいく対象者のリストに入っていることだろう。

そうなれば、まずは誰が最初の対象となるのかを考えなければならない。

――が。

「……えーっと」

思考の助けとなるはずの御堂には、何故か連絡がつかない。

携帯電話の電源を切っているのだろうか。

いずれにしても、それはある意味で問題だと言えた。

見張るべき人間は、どれだけ少なく見積もっても6人はいる。
万丈目。翔。剣山。天上院兄妹。レイ。
これだけの人数を同時に、それも一人で監視するのは不可能だ。
また、事情を知るのも御堂と有珠、更に言えばイレンの3人だけだ。

相談することができる人間が実質的に一人だけと言うのも、
有珠にとっては大きな問題と言える。

可能な限り、一人に絞るべきなのだろうが、
その絞るべき一人についても特定できずにいる現状、
むやみやたらに動き回るのは得策とは言えない。

せめて、協力者であるところの御堂の帰還まで待てばいいのだろうが、
そこまで悠長にしている暇も、あるのかどうか。

ともあれ。

「レイちゃん、ちょいといいですかい？」

「どうしたの？」

有珠の手招きに応じ、レイが駆け寄ってくる。
いずれにしても、御堂のことだ。
何が何でも、レイだけは守れと言うことだろう。

「ちょーっと、一旦女子寮まで戻ろうと思うんですけど、
ちょっとついてきてくれません？」

「うん、いいけど……ボクが行く必要ってある？」

「いやぁ、いいんちょ先輩とかと話す用事もありますんで、
ほら、私って基本的にいいんちょ先輩と性格が合わないじゃないですか。
できれば、レイちゃんに口添えの方頼みたいなーと」

「大丈夫だけど……明日香先輩の方が、多分原さんと仲いいよ？」

「明日香先輩は、ほら――なんというか。
分かるでしょ？　十代先輩がいないし……」

「ああ……うん、分かった」

納得したように頷いたレイを連れたって、有珠はレッド寮の食堂の外に出た。

＊　＊　＊

「そういえばレイちゃん、先輩から何か連絡ありました？」

ふと気にかかったのか、道中で有珠がそんなことを尋ねる。

御堂がいない数日間、一度も連絡が無いなどということはないだろう。

が、御堂は御堂で忙しかったはずだ――と考えたからだ。

「連絡だけなら毎日来てたよ」

「……さ、流石というかなんというか……昨日は何か言ってませんでした？」

「今日の昼1時ごろ帰るってくらいだよ。
でも、それくらいしか言ってなかったから、少し気になったけど……」

「普段、そんなに長電話なんですか？」

「うん、いつもなら最低でも5分は話すし……何かあったのかな？」

通話時間が短かったと言うのなら、それは恐らく有珠からの電話が原因だろう。

光の結社が動き出したと知れば、この先の展開を知る者であれば、焦りを露わにしたり、あるいは対策を練ったりするというのが常道だ。

しかし、アカデミアにいない御堂には、それができない。

とにかく、ここに至るまでに思考を続けていたのだろう。

でもなくては、レイとの通話時間が短くなるということは、まずありえない。

「あ、そうだアリスちゃん。ボクも、一つ聞きたいんだけど……」

「はいはい何でござい？　勉強以外なら何でも答えますよ？」

「あ、うん……そっちは期待してないけど」

「ですよねー……」

実際、有珠よりもレイの方が成績は良い。

成績以外の面においても負けている部分が多いと、

そう言えなくもないわけだが。

「アリスちゃんって、確かカズ兄ぃと同郷って言ってたけど……」

「ああ、まあ一応そういうことになってますね」

「……でもボク、アリスちゃんのこと、全然知らないんだけど……。カズ兄ぃも、最初は知らないような反応だったし。何でなんだろ？」

「うっ……！？」

有珠の言う「同郷」と、レイの言う「同郷」は、言葉こそ同じとはいえ、意味には大きな隔絶が存在する。

その上、実際の御堂と有珠の出身地は違う。

関東圏内とはいえ、県境を挟んで向こう側――おおよそ１００キロ超、

距離的な隔たりもあるのだ。

さて、これは困ったぞ――と、そう考えていたところで、

背後から、足音が聞こえてきた。

ジャリ、という砂を踏む音。

先程までは聞こえなかった――いや、聞こえるはずはなかった音だ。

少なくとも、これまで有珠は周囲の警戒を怠らなかった。
警戒を怠らず、それどころか過度に警戒すらしていたほどだ。

唐突な音。

――これは、もしかすると……。

そう考え、有珠は背後を振り返る。

「！」

瞬間、白い影が物陰に隠れていくのが視界に入る。

白い影――見間違えようもない。

三沢だ。

「すみません、レイちゃん。その話はまた後で。
食堂に財布と学生証忘れてきたんで取ってきます！」

「え？」

「先に女子寮行っててください！
用事済ませたら、すぐに向かいますから！」

意味が分からないと言いたげに首を傾げるレイを尻目に、
有珠は全速力で物陰の方へと駆けていく。

この状況で、想像が当たっているとすれば――。

「――三沢先輩！」

「うおっ！？」

――それは間違いなく、三沢が後をつけてきたということに他ならない。

「気付いていたのか、六条君。
いやあ、これあ失礼……」

「ストーカーですかアンタ！？」

「失礼な勘違いを！？」

誰かの、特に異性の後をつけていくというのは、
世間一般的にはストーカーと呼ばれるべき行為である。

それはともかく、と有珠は三沢を睨み付けた。

「つけてきてたんですか」

「つ、つけてきたとは人聞きの悪い。
俺は単に、光の結社の素晴らしさを説くために来たんだ。
言いがかりはよしてくれ！」

「……同じでしょう？
それに、その口ぶりじゃあどっかの新興宗教の勧誘と大差ないですよ」

「そんなものと同一視してほしくはないな！
俺たちはもっと崇高な……」

「はいはい、宗教乙。その台詞が、もう完全に宗教なんですよ」

光の結社に取り込まれた以上、その言動が異質なものとなるのは仕方がないことだ。

とはいえ、その異質さに負けぬ程度に言い負かす有珠も、相当なものであると言えるのだが。

「……言いたいことは分かってますよ。
私に、光の結社に入れ、って言うんでしょう？」

「分かってるなら話は早い。さあ、我々と……」

「だが断るゥッ！！」

「何っ！？」

想像を絶する勢いで拒否され、三沢はあんぐりと口を開いた。

「確かに私はあなたよか非力ですし、力技に訴えられたら負けますよ。
でも、だからって自分の望まないことはしたくない！
それに――先輩からも言われたんですよ。あなたたちから、皆を守ってくれって！」

「ぐっ……！？」

「そんなに私を光の結社に引き込みたいのなら、
デュエルで決着をつけたらどうです？　当然、

私はやられる気なんてこれっぽっちもありませんがね！」

デッキを収めると同時、有珠のデュエルディスクが起動する。

「いいだろう。確かにその方が手っ取り早い！　デュエルだ！」

それに対し気を良くしたのか、三沢も同様にディスクを構える。

――そして。

「「――決闘（デュエル）！！」」

望まない。そもそも――禁じられていたはずのデュエルが始まった。

先攻は三沢のようだ。ニヤ、と唇の端を釣り上げる。

「俺のターン、ドロー。

俺は手札から、《ピラミッド・タートル》を守備表示で召喚」

【　《ピラミッド・タートル》　攻　１２００　／　守　１４００　】

「カードをセットし、ターンエンド」

「私のターンです。ドロー！
……手札から、《ヘカテリス》の効果を発動！
ヘカテリスを手札から墓地へ捨てることにより、
デッキから《神の居城－ヴァルハラ》を手札に加えます。
そして、ヴァルハラを発動！」

瞬間、場に荘厳な雰囲気を纏った石造りの宮殿がそびえ立つ。

「ヴァルハラの効果は、私の場にモンスターが存在しないとき、
手札から天使族モンスターを特殊召喚できること！
この効果により、《天空勇士ネオパーシアス（エンジェルブレイブ）》を特殊召喚！」

【　《天空勇士ネオパーシアス（エンジェルブレイブ）》　攻　２３００　／　守　２０００　】

「ちゃっちゃといきますよ！　ネオパーシアスでピラミッド・ター

トルを攻撃！」

「ぐっ……！」

天空勇士（エンジェルブレイブ）ネオパーシアスは、
天空騎士（エンジェルナイト）パーシアスと同様に貫通効果を有している。
最上級モンスターにしては低い攻撃力と侮る人間もいるが、
有珠のような戦法を取る場合には有用なモンスターとも言える。

更に、その効果はアドバンテージに直結するドロー効果。
ダメージを与えるたびにドローができるというのは、
貫通効果を持つモンスターには有用な効果であることは間違いない。

更に、その効果は《天空の聖域》が存在する場合において、
最大限に発揮されることとなるのだが――今はまだ、その時ではない。

槍による風圧が三沢にまで届き、そのライフポイントを９００削っていく。

「ネオパーシアスが相手に戦闘ダメージを与えた時、デッキからカードをドローします」

――だが、その一方。

「俺はピラミッド・タートルの効果を発動！
戦闘によって破壊されて墓地へ送られたとき、
デッキから守備力２０００以下のアンデット族モンスターを特殊召喚できる。
《真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデットドラゴン）》を特殊召喚！」

【《真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデットドラゴン）》　攻　２４００／守　２０００】

「なっ……！？」

姿を現す、不死の竜。

全身を青い炎に包まれ、
各所が腐り堕ちた《真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）》とでも言おうか。
その異様は、不死の者の中では群を抜いている。

「何であなたがそのカードを……！？」

そして、何よりも、普段三沢の使うカードとは趣が違うことが挙げ

られる。

彼は普段、日本妖怪を模したカードを主軸としたデッキを用いている。

当然、このようなカードはデッキには入っていないはずなのだ。

チッ、と舌打ちし、有珠は思考を切り替えた。

この状況で思考を停止していては、勝てる勝負も勝てなくなる。

「モンスターをセット、
カードを2枚セットして、ターンエンドです……！」

「俺のターン、ドロー。
そのモンスター、裏守備表示であるのを見たところ、
……恐らくは、《マシュマロン》などの戦闘破壊耐性持ちのモンスターだ！」

マズい、と、有珠は感じた。

完全に手の内が割れている。

三沢の指摘する通り、有珠の伏せたモンスターは、《マシュマロン》そのものだ。

当然、そうして看破するからには、何かしらの対策は打ってあるはずだ。

「《シールドクラッシュ》を発動。そのリバースモンスターを破壊する！」

「くっ！」

守備表示であれば、表裏に関わらず破壊できる汎用除去カード。
《抹殺の使徒》に比べれば、除外ではなく破壊という点で劣りはすれど、
それでも、汎用除去故に強力であることには変わりない。

「ふふふ……まずは、この場を作り変えることから始めよう。
フィールド魔法発動！《アンデットワールド》！」

「！」

発動した1枚フィールド魔法によって、周囲の情景が作り変えられていく。

これまで、どこか薄暗いだけだったはずだが、
完全に陽光が遮断され、月夜の薄明かりのみが満ちる。

そして、更には周囲からおどろおどろしい声音が響き渡ってきた。

その光景は、まさにアンデット族の世界と呼ぶに相応しい。

「俺は更に、《馬頭鬼》を召喚だ」

【《馬頭鬼》　攻　１７００／守　８００】

「行くぞ六条君！　まずは、真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデットドラゴン）で、
天空勇士ネオパーシアス（エンジェルブレイブ）を攻撃！」

「そう簡単にはやらせません！　速攻魔法、《神秘の中華なべ》を発動！
ネオパーシアスを生贄に、その攻撃力分、ライフポイントを回復します！」

真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデットドラゴン）は、
アンデット族のモンスターを戦闘で破壊した際に、
そのモンスターを自身のフィールドへ特殊召喚する効果を有する。

アンデットワールドの効果は、場、そして墓地に至るまで、
全てのモンスターの種族を変更することだ。
また、蛇足的にアンデット族以外の生贄召喚を封じることもできるのだが、

元々特殊召喚を主体としている有珠には、あまり関係ない。

問題は、このカードが存在する限り、相手がどのような種族であろうとも関係なく、
真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデッドドラゴン）の効果を安定して使用できる点だ。

天空勇士（エンジェルブレイブ）ネオパーシアスを奪われてしまう。

それだけでも、ネオパーシアスを生贄に捧げる理由にはなりえた。

「ならば、このまま直接攻撃（ダイレクトアタック）を受けてもらおう！」

「くっ、う……」

ひりひりと、焼けつくような感覚が有珠を襲う。

あくまで、ソリッドビジョンの体感効果のせいだ。

闇のゲームや、それに準じたものではないということは分かりきっている。

であるはずなのに。

（――怖い……？）

受けたダメージは２４００。既に２３００を回復している現状、実質的なダメージは１００だと言える。

しかし、この後には馬頭鬼の攻撃も控えているのだ。

そうなれば、受けるダメージは１８００。

残るライフポイントも、２２００となる。

もう１度、直接攻撃（ダイレクトアタック）を受けると危険だ。

「次に行かせてもらおう！　馬頭鬼で直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「うあっ……！」

「これでターンエンドだ」

多少ならずダメージは受けたとはいえ、このターンは凌ぎ切った。

大丈夫だ、と自分自身に言い聞かせ、有珠は目の前の敵を見据えた。

「私のターンです。ドロー！

……《トレード・イン》を発動！　《光神機－轟龍》を墓地へ送り、

カードを２枚ドローします！」

このカードをヴァルハラの効果で特殊召喚しても良かった。
しかし、問題としては、もう1枚のカードが貧弱であった点だ。
仮に真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデットドラゴン）を倒したとしても、
相手は蘇生手段の豊富なアンデット族デッキだ。
すぐに復活させられるのがオチだろう、と踏んだ。
であれば、多少の事故要因となりうる、
このトレード・インを処理してからの方が良い――そう思考したのだ。

「……！　私は墓地の光属性モンスター、
ネオパーシアスと轟龍の2枚を除外することにより、
《神聖なる魂（ホーリーシャイン・ソウル）》を特殊召喚します！」

【《神聖なる魂（ホーリーシャイン・ソウル）》　攻　２０００　／　守　１８００】

「更に手札から、《神秘の代行者　アース》を召喚！」

【《神秘の代行者　アース》　攻　１０００　／　守　８００】

「アースの召喚成功時、デッキから『代行者』を手札に加えること

ができます。
私は《奇跡の代行者　ジュピター》を手札に加えます」

これでおおよその準備は整ったと言えるだろう。

よし、と自身を奮い立たせ、有珠は宣言する。

「レベル６の神聖なる魂（ホーリーシャイン・ソウル）に、
レベル２の神秘の代行者　アースをチューニング！
現れなさい、《神聖騎士（ホーリーナイト）パーシアス》！！」

瞬間、周囲の空間が凍結するようにして、光り輝く騎士が姿を現す。

その肉体のほとんどを結晶によって構成しているかのような姿。

しかし、その姿かたちは、紛れも無くパーシアスのそれだった。

「神聖騎士（ホーリーナイト）パーシアスは、１ターンに１度だけ、
相手の場のモンスターの表示形式を変更することができます。
真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデッドドラゴン）を守備表示に変更！」

「何っ！？」

「ちゃっちゃと正気に戻ってくださいよ！
神聖騎士（ホーリーナイト）パーシアスで、不死竜（アンデッドドラゴン）を攻撃！」

「ぬおおおおっ！！」

神聖騎士（ホーリーナイト）パーシアスも、元となったモンスターと同様に貫通効果を持つ。
表示形式の変更効果と同時に、それはある意味で驚異的なまでの効果と言える。
ただし、元々持っていたドロー効果は失った。

一長一短だと言えるものの、それでも十分に強力なモンスターだと言える。

三沢に通るダメージは６００。
これで、三沢のライフポイントは２５００となった。

「ターンエンドです……！」

「……俺のターン、ドロー！
ほう、成程……俺はまず、《おろかな埋葬》を発動！
デッキから《ゾンビキャリア》を墓地に送る！」

「！！」

ゾンビキャリア。
その言葉を聞いた瞬間、有珠の背筋に緊張が走った。
――まさか、と。
「俺は手札を1枚デッキの1番上に戻し、
《ゾンビキャリア》を特殊召喚する！」
【《ゾンビキャリア》　攻　４００　／　守　２００】
「レベル４の馬頭鬼に、レベル２のゾンビキャリアをチューニング。
現れろ、《デスカイザー・ドラゴン》！」
【《デスカイザー・ドラゴン》　攻　２４００　／　守　１５００】
「――！！」
出た。

いや――出てきてしまった。

そもそも、出ないということがありえなかったのだ。

三沢のデッキの内容がある程度判明した時点で、それは予測しておくべきだっただろう。

蒼い火炎を纏う竜が、有珠の眼前に立ちふさがる。

「デスカイザー・ドラゴンのシンクロ召喚に成功したとき、相手の墓地のアンデット族モンスターを俺の場に特殊召喚できる。六条君、君のヘカテリスはいただくぞ！」

「っ……！」

【《ヘカテリス》　攻　１５００　／　守　１１００】

デスカイザー・ドラゴンと同様のに青い火炎を纏いながら、ヘカテリスが三沢の場に復活する。

「そしてこの瞬間、伏せ（リバース）カードを発動！　《王墓の罠》！　相手の墓地のアンデット族モンスターがこちらの場に特殊召喚さ

れたとき、
相手の場のカード2枚を破壊できる！　ヴァルハラ、
そしてパーシアスの2枚のカードを破壊させてもらおう！」
「っ！！」

かろうじて場に存続していた宮殿が跡形も無く腐食し、
パーシアスまでもが、その身を地の底へと沈めていく。
最低限の反抗の手段すら摘み取る――そんな思考が、
三沢の表情からは見て取ることができた。

「更に墓地の馬頭鬼の効果を発動。馬頭鬼を除外することで、
墓地のアンデット族モンスターを特殊召喚できる。
真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデットドラゴン）を特殊召喚！」

【《真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデットドラゴン）》　攻　２４００／守　２０００】

再度、場に現れる不死の竜。
見れば、その腐食の度合い、あるいは破損の度合いは、
先程有珠が破壊する以前よりも広がっている。

「これでトドメと行こう！
真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデットドラゴン）で直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「そう、簡単には……！　伏せカード（リバース）を発動！　《ドレインシールド》！
相手の攻撃を無効にし、その攻撃力分、ライフポイントを回復します！」

吐き出される青い火炎が、有珠の目の前に現れた透明な壁によって遮られる。

「だが、まだ攻撃は残っているぞ！
ヘカテリス、デスカイザー・ドラゴンで直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「やあああぁぁっ！！」

真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデットドラゴン）の攻撃力と、
デスカイザー・ドラゴンの攻撃力は同等だ。
故に、ドレインシールドでの回復は、完全に帳消しとなる。

それどころか、ヘカテリスの攻撃を受けた時点で、完全にマイナス。
有珠の残りライフは７００となる。

「ターンエンドだ」

勝ち誇ったように、三沢が終了の宣言を行う。

しかしながら、三沢は、あの場面で伏せカードを破壊していれば、
一切の抵抗なしに勝利することができていたはずだ。
洗脳によって思考が鈍っているとすれば、ありえなくはない。

――だが。

（負ける？）

負ける。
敗北する。

その意味を噛みしめ――有珠は、自身の背筋が冷えるのを認識した。

負ける。
それはつまり、光の結社にひきこまれることと同義だ。

現状、結社に取り込まれた人間は三沢一人だ。
しかし、そこに協力者――それも、別性の人間がいればどうなるか？
考えずとも理解できる。
そうなれば、爆発的に光の結社はそのメンバーを増やしていくことだろう、と。

だからこそ、負けられないのだ。
だからこそ、負けられないはずなのだ。

（なのに、負ける？）

手が震える。
視界が曇る。
冷や汗が噴き出す。

自分が自分でなくなるかもしれないという恐れ。
約束を果たせないかもしれないという焦燥。

その二つが絡み合い、有珠の目元から涙が溢れようとした――その、瞬間。

「そこまでだ」

書き換えられた空間の中で、声が響いた。

声。

聞き覚えがある――いや、それどころではない。
待ち望んでいた人間の声だった。

「お、お前、は――――！！」

三沢の驚愕に震える声。

それはある意味で当然と言えるだろう。
この場にいない。いや、この場にいるはずのない人間が、唐突に現れたのだから。

だが、その認識は間違っている。

現在の時刻は、１３時丁度。
つまり、何らおかしいことはないのだ。

有珠と三沢の目線の、ほぼ中間点。

――そこに、御堂和真は立っていた。

４７束目：開戦（後書き）

謝辞

これまでの結社の名称は「白の結社」ではなく「光の結社」でした。私の記憶違いで色々と齟齬が出てきたようで、正直申し訳ありません。

差し替えることができる部分は差し替えてきます；

そういうわけで４７話でした。

毎度毎度のことではありますけど、超展開著しいですね。

まあ書いてる私が言うのもアレではありますが。

そういうわけで今回の六条のデッキは代行天使です。

現環境で大暴れしています。
凄まじいです。どこかのＣＳの上位がこれで埋め尽くされていたようです。

誰だよ代行が弱くなるって言ったの……（

ちなみに答え合わせは「三沢」でした。
というか私の貧弱な脳みそでは他に思い浮かばないという事実（

これでもっと別な人間だったらもう少し面白かったと思うんですけども。

まずは三沢の強化から、ということに相成りました。

ちなみに、これまではデッキの中身は殆どが、
漫画版の三沢の使用したカードだけでした。
今回からシンクロアンデの要素も含む、ということになるのでしょうか。
カミューラの使わなかったモンスターを投入し、
かつ「ゾンビ」系統のモンスターを投入したデッキです。
元々のカードも投入されてます。

そんなこんなで色々と間違っていそうなものですが、
どこかしら間違いがあればご指摘いただけると助かります。

そして爆発することを切に願われている男こと御堂帰還です。

クロックアップしてきました。嘘です。
御堂アクセルフォームです。嘘です。

全く関係ないですけどガガガガールが凄まじい。
具体的に言えばおｐｐ……いえなんでもありません。
というかゴールデンで乳揺れって大丈夫なんでしょうか。
まったくの蛇足ですが

それでは。

48束目：組織（前書き）

シリアスなのかコメディなのかはっきりしたい今日このごろです。

48束目：組織

「御堂……！？」

俺の姿を視認すると同時、驚愕を露わにした三沢が呟く。

俺がこの場にいることが、そんなにも驚くべきことなのか――。

そうも考えるが、よく考えてもみれば、俺はレイと六条にしか、この時間に帰るという旨を伝えていなかったはずだ。

となると、三沢が何も知らないというのも、あながち不自然なことではない、か。

「せ、先輩ぃ……！！」

と、今にも泣きそうになりながら、六条は俺の名前を呼んだ。

フィールドの状況は最悪。

唯一残った手札も、たった2枚だけ。

ターンの開始に間に合ったことを考えると、手札は実質3枚か。

それにしても、いつもはおちゃらけているくせに、
妙なところで怖がりなこいつが、ここまでやるとは思わなかった。

逃げ出してもおかしくはなかったのかもしれない。
それでも、約束を守ってくれたのは、本当に――ありがたい。

――と。

「おっ、おぞ、遅いですよ、先輩ぃぃぃ……！！
わた、わたじ、が、どれだけぇぇえ……！」

「お、おい！　なにも泣くようなことは無いだろ……って、
すがりつくな！　俺の服で涙を拭うな！　鼻をかもうとするな！
ああ、もう……！　ティッシュくらいやるから、鼻かむならこっちにしろ！」

「うえ〝ええ〝ぇぇえ〝えぇ……ぐずっ、うあ、う。
……ブ――――――！！」

こいつは本当に大丈夫なのか。
なんというか、女の子として。

「おい、みど」

「バカぁ！　馬鹿厨二病！　わざわざカッコつけた登場なんていらんのですよ！
え〝ぐっ、ひぐぅ、うえええ〝え〝えぇぇぇぇん！！」

「ちょ、おま、腹を叩くうぶっ！？
コラ、ちょ、入ってる！　急所……ぐえっ！？」

「お、おい、み……」

「わた、わ、わだしの恐怖も、すごしは、味わってみろ〝っでんでずよ！！」

「ああもう、分かったから！　まずは泣くのをやめてくれ！
なんだかとても罪悪感が湧いてくる！」

こいつ、転生者の割に精神年齢は妙に低いし、
本当……なんというか、我が儘な妹を持ったような感覚だ。

分かったから、と言いながら背中を軽く叩く。
――と、そんな折だった。

「御堂！！」

三沢の怒号が響き渡る。

……そういえば、こいつとのデュエルの最中だったな。
実質的に中断してしまったわけだし、申し訳ないと言えば申し訳ないが……。

そうだな、と呟き、俺は三沢へと向き直った。

「デュエルを中断させてしまったことは謝る。
だが、これ以上コイツとデュエルはさせない」

「馬鹿な……サレンダーでもする気か！？」

「それこそ『馬鹿な』だ。サレンダーなんてしない」

隣に立つ六条の手を引き、その腕のデュエルディスクのロックを解除する。
――そして。

「――俺が、代わりにやろう」

「先輩！？」

「何……！？」

告げて、俺は六条のデュエルディスクを装着する。

多少小さいが……まあ、許容範囲内だろう。

いざという時のためにも、他者のデッキ――六条も含め、様々なデッキの回し方は頭に入っている。

プレイングに関しても、多少なら問題は無い。

十分――とは言い難いにせよ、代役くらいは務まるはずだ。

「ふ、ふふふふふ……はぁーっはっはっは！！」

「何かおかしいところがあるのか？」

「いや、目標が自分から出てきてくれるとは、俺の運勢も悪くはないと思ってな！」

ああ、なるほど。

元々、斎王の最初の標的は俺だったはずだ。

しかし、一方で、俺は斎王を退け、その誘惑を振り切った。

俺の能力に対する執着がまだあるとするならば、
俺を狙う手始めとして、周囲の人間を狙うというのも自然なことか。
そして、俺が帰ってきたことにより、俺を直接的に狙うというのも。

「そ、そうですよ先輩！　わざわざ、先輩がやらなくても、私が……」

「いや、ダメだ。お前は下がっててくれ」

「何でなんですか！　そんなに私が信用できないんですか！？」

「いいや、逆だ。信用しているからこそ、下がっててほしい」

「はぁ……？」

訳が分からない、と言いたげに、六条は俺の目を見据える。

「……万が一にでも、俺たちのどちらかが敗北するとする。
そうなった場合、より危険性が高いのは、お前が負けた場合だ」

「……ええ、と」

「構成員が男だけだとして、女子寮に押し入ることができるか？

もしできたとしても、それは犯罪にしかならないだろ。
だけど、お前が光の結社に取り込まれれば、それも容易になる」

「あ……！！」

仮に女子を取り込むと仮定しても、それは容易なものではない。
寮の外にいる女子に声をかけ、デュエルを承諾してもらい、
更に、その上で勝利して見せなければならないのだから。

ある意味、今の六条はカモだ。
あちらから挑んでくるところか、こちらから突っかかっていったのだから。

「だから、今は俺がやる」

「で、でも、それで先輩が結社に取り込まれちゃ、
それこそ意味が無いじゃないですか！」

「……いや」

大丈夫だ。
いざというときのことはイレンに任せてあるし、俺より強い人間も大勢いる。

それに、六条だって――そうなれば、俺を倒すことに躊躇はしないはずだ。
俺なら、どうなっても構わない。
だから。

「任せろ。俺は――大丈夫だ」

自分に言い聞かせるように。
あるいは、六条を説得するように告げた。

「……知りませんよ」

不貞腐れるようにして、六条は唇を尖らせた。

一方で、その手に持っていた2枚の手札を俺に寄越してくる。
ああ、これなら――大丈夫だ。

「……行くぞ、三沢。今度は俺の――」

いや。

「俺たちのターンだ」

勝つ。いや、勝たなくてはならない。

その決意表明のためにも、俺はそう表現し、カードを引いた。

「……さて」

手札のカードは3枚。

内、唯一の天使族のカードが《奇跡の代行者　ジュピター》だ。

このカードの効果は、墓地の『代行者』を除外しての天使族の攻撃力上昇、

そして、《天空の聖域》が存在する場合に、手札の天使族モンスターを捨て、

除外されている光属性・天使族モンスターを特殊召喚すること。

前半の効果は《天空の聖域》が存在せずとも使用できるが、
いかんせん、その効果はエンドフェイズまでしか持続しない。

後者の効果を使用しようと思えば、
実質的に手札を3枚消費する必要がある。

効果発動に必要な《天空の聖域》。
効果のコストとして必要な天使族モンスター。
そして、何よりも《奇跡の代行者　ジュピター》だ。

元より、使用することなどできないわけだが、
現状では、それだけの手札の余裕も無い。

と、なれば――。

「《天空の宝札》を発動。手札の光属性・天使族モンスターを除外し、
デッキからカードを2枚ドローする。《奇跡の代行者　ジュピター》を除外！」

この状況を打破するには、まず三沢の優位性を崩すより他にない。
このターン、特殊召喚できないことを鑑みれば、
モンスターをどうにかする、ということはできないだろうと思える。

となると、アンデット・ワールドを破壊するより他に無い。

ならば――。

「手札から、《天空の使者　ゼラディアス》の効果を発動。
ゼラディアスを捨てることで、《天空の聖域》を手札に加える。
そしてフィールド魔法、《天空の聖域》を発動！」

フィールド魔法を破壊する方法は、なにもカード効果による破壊に限らない。
フィールドの張り替えによっても、それは起こりうる。

魍魎の闊歩する世界が塗り替えられ、周囲に雲海が広がりはじめる。
聖域――その名に違わぬ程度には、神秘的なフィールドだ。
その中央には、神殿とも呼ぶべき建築物がそびえ立つ。

「これで、アンデットワールドによる種族の変更効果は無効だ。
……モンスターをセット、カードをセットしてターンエンド」

「意気込んで参戦した割に消極的だな！　俺のターン、ドロー！
……唯一の壁となりうるマシュマロンは、既に墓地にある。
つまり、そのカードは戦闘破壊耐性を持つモンスターではない！
……はずだ！」

「いや、何で最後自信ないんですか」

「……御堂の普段の言動を見ている限り、
ここで《魂を削る死霊》が来てもおかしくはないからだ！」

どこまでデュエルに関して信用が無いんだ、俺は。
というか、六条のデッキには、その性質上、
天使族以外のモンスターは入っていなかったはずだ。

普段の俺のデッキならともかく、六条のデッキにまでそれを言うな。

「だが、そのモンスターが守備力の高いモンスターでないとは限らない。
そして、既にお前のライフは残り７００！
ここでモンスターを召喚し、罠にはまることは避けたい。
ここは堅実に、お前のモンスターを破壊し、トドメと行こう！」

来るか――！？

「《真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデットドラゴン）》、御堂のそのモンスターを攻撃だ！！」

迫りくる青い火炎弾。
その攻撃により焼き尽くされていくのは――。

「《コーリング・ノヴァ》の効果を発動！」

「何っ……！？」

「戦闘によって破壊されたとき、デッキから攻撃力１５００以下、光属性・天使族のモンスターを特殊召喚できる！
２枚目の《コーリング・ノヴァ》を守備表示で特殊召喚！」

【《コーリング・ノヴァ》　攻　１４００　／　守　８００】

その名が示す通り、新星を呼ぶかの如く、
２体目のコーリング・ノヴァがその姿を現した。

「チィッ……ならば、ヘカテリスで攻撃！」

「戦闘による破壊だ。よって、
３枚目の《コーリング・ノヴァ》を守備表示で特殊召喚する！」

【《コーリング・ノヴァ》　攻　１４００　／　守　８００】

「だが、それで打ち止めだろう！
《デスカイザー・ドラゴン》で、コーリング・ノヴァを攻撃！」

「ああ、打ち止めだ。だが、効果は使える！
俺はコーリング・ノヴァのもう一つの効果を発動する！
天空の聖域が場に存在している場合、本来の効果の代わりとして、
デッキから《天空騎士パーシアス（エンジェルナイト）》を特殊召喚できる！
現れろ、《天空騎士パーシアス（エンジェルナイト）》！」

【《天空騎士パーシアス（エンジェルナイト）》　攻　１９００　／　守　１４００】

神殿の門から導かれるようにして現れるのは、人馬一体の騎士。
ネオパーシアスや神聖騎士（ホーリーナイト）と比べれば、
その能力値はかなり劣るものではあるものの、
効果に関してはほぼ変わらず、その存在感も強い。

「パーシアス……！　その攻撃力では太刀打ちできないぞ！」

「承知の上だ。俺の狙いはパーシアスを出すことだからな」

ハッとしたように、三沢が目を見開く。

今の俺の狙いに気付いたということだろうか？

だがしかし、パーシアスが出てきた時点で、それはもう遅い。

「くっ……お前の狙いは手札補充か！　だが無駄だ！

俺は手札から、《ライトニング・ボルテックス》を発動！

手札の《マンモス・ゾンビ》をコストとして、

お前の場の表側表示のモンスター全てを破壊する！」

突如、現れた閃光の大渦が、パーシアスを飲み込んでいく。

相手の場のモンスターのみ、表側表示のモンスターを限定的に破壊する、

汎用除去――それも、使用したカードの数に見合わないだけの成果を挙げられるカード。

「それを待っていた！」

「！？」

「さっき、お前は手札を1枚しか持っていなかった。

仮にその1枚が、魔法（マジック）・罠（トラップ）のいずれかであれば、

さっさと使うか、あるいは伏せるかしていたはずだ」

六条のディスクを見れば、三沢の前のターンの召喚権は残っていた。
仮に下級モンスターであれば、あの場ですぐに召喚していただろうし、
上級モンスターであっても、ヘカテリスを生贄にしていればそれで良かった。

もし召喚制限があるモンスターなら？
それを考える必要は薄い。

そもそも、三沢はあらゆる相手に対応できるというデッキを組んでいる。
その三沢が、わざわざ召喚条件の厳しいモンスターを、
いつまでも手札に握ったままにしているだろうか？

それは、恐らくはありえない。優位性を築くため、
三沢であれば、早いうちに特殊召喚なりなんなり、条件を整えているはずだからだ。

「だとするなら、その残った手札は、
恐らく手札コストを要求するカードだろうと踏んだ。
仮に罠（トラップ）なら、次のターンの布石のために伏せるだろう。
モンスターであっても、お前なら、特殊召喚の条件に関わらず、
通常召喚可能なモンスターを仕込んでいるはずだ。
よって、これらはあえて除外して考えた」

残る可能性は魔法カードのみ、と仮定する。
そうなれば、三沢がデッキに投入している可能性が高いカードは数枚。
《生者の書－禁断の呪術－》。
《ミイラの呼び声》。
アンデット族のサポートと言うならこのあたりか。
しかし、どちらも既に使っていて、何らおかしいことは無いカードだ。
であるなら、あえてそれを考えずに別のカードを思索する。
つまり――。

「手札コストを用いる魔法カード。
しかし、最初から手札に握っていたと仮定しても、
2対2以上の交換ができない場面では使わないだろう。
仮に使うとしたら、相手を追い詰め、追い込み、完全に詰めの一手を打つ、
――――その瞬間」

例えば、反撃の一手を打った、次の瞬間。
相手の戦意を完全にくじき、完全な「詰み」とするために、使用するだろう。

「知ってるか？　いや、お前のことだから知ってるだろうな。
六条のデッキには上級モンスターが多い。過多、と言ってもいい。
次のドロー、上級モンスターが手札に来て、結果的に終わり、
という可能性も否定できない」

「そ、それが……どうしたんだ！」

「……」

このターン、三沢は既にやることは無い。
いや、一つだけか。ターンエンドを宣言する事だけは可能だ。

「ぐっ……ターン……エンド……！」

「……俺のターン――ドロー！」

大方の予想通り、俺の引いたカードは上級モンスターだった。

《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》。

特殊召喚は容易だが、その手段は今は無い。
だからこそ。

「リバース魔法（マジック）発動！　《貪欲な壺》！
墓地の《神秘の代行者　アース》、《コーリング・ノヴァ》３枚、
《神聖騎士（ホーリーナイト）パーシアス》の５枚をデッキに戻し、２枚ドローする！」

「な……罠（トラップ）じゃないだと！？」

「罠（ブラフ）だよ」

本義的には「はったり」「虚勢」だが、
精神的なものに作用するという意味合いでは罠と言える。

「《激流葬》か《奈落の落とし穴》とでも思ってくれたのなら、
俺の目論見は成功だ。……そして」

「……！？」

「このターンで終わらせる」

ヴァルハラは既に墓地に存在している。
つまり、この状況からでは容易には上級モンスターは展開できない。

――だが！

「奥の手というものは、最後の最後まで隠した方がいい、らしい。
俺は手札の《裁きの代行者　サターン》を除外することにより、
《マスター・ヒュペリオン》を特殊召喚する！」

【《マスター・ヒュペリオン》　攻　２７００　／　守　２１００】

紅の火炎が周囲に巻き上がり、翼を形成していく。

その中央に座するのは、太陽の神。

――マスター・ヒュペリオン。

「マスター・ヒュペリオンの効果を発動！
光属性・天使族モンスターを墓地から除外することで、
場に存在するカード１枚を破壊できる！
《マシュマロン》を除外し、デスカイザー・ドラゴンを破壊！」

「ぬっ……！」

火炎で構成された右翼によって、薙ぎ払われるフィールド。
次の瞬間には、デスカイザー・ドラゴンの姿はそこから消え失せていた。

文字通りの、消失。

「デスカイザー・ドラゴンが場に存在しなくなったとき、
その効果によって蘇生したモンスターは破壊される。
つまり、ヘカテリスはこちらの墓地へ戻ってくる」

「だ――だが、その程度では！
いくら不死竜（アンデッドドラゴン）に勝る攻撃力を持っていようとも、
その攻撃力の差はたったの３００！　ライフポイントを削りきるには至らない！」

「お前は何を勘違いしてるんだ」

「な……に……！？」

「天空の聖域が場に存在している場合、
ヒュペリオンの効果は２度使用することができる」

翼というものは、片側にしか無いわけではない。
そして、一方だけでは機能しない。

聖域が展開しているからこそ、ヒュペリオンはその本来の能力を開

放する。

「最後の効果だ。《ヘカテリス》を除外することにより、不死竜（アンデッドドラゴン）を破壊する！」

「ぬあああああっ！？」

再度、もう一方の翼が振るわれ、青い炎が薙ぎ払われていく。

――これで、三沢の場にはモンスターが存在しなくなった。

「お前が悪だとか、光の結社から解放されてくれ、とか。
そんな青臭いことを言うつもりは無い。ただな」

どうしようもなく許せないことが、いくつもある。
何よりも。

「悪いな三沢。はっきり言ってこれは八つ当たりだ。
どうしても許せないんだよ。俺自身が！

誰かを泣かすような真似だけはしたくないって、
そう思っていたもんでさ！」

いくらアレが安心したことによって出た涙だったとしても、
その原因を作ったのは俺だ。あいつを泣かせたのは俺だ。

……って、これも青臭い考えか。
だけど、それでもいい。

アイツが、それを望むはずはないから。
誰かを泣かせて、それでいいなんて言うはずはないから。

「単なる我が儘で、単純なエゴで、どうしようもない偽善だ。
けど、それでも自分が誰かを泣かせるような真似はしたくなかった！
だからこれは八つ当たりだ！　それ以上の意味は無い！」

それ以上の意味を求めるな。

この場では、まだ――三沢を元に戻すことは、できない！

「これで終わりだ！
マスター・ヒュペリオンで直接攻撃（ダイレクトアタック）！！」

「う、うおおおおおおぉぉぉっ！！？」

その腕を掲げた中央、胸部付近に凝ったエネルギーが噴出し、
三沢のライフポイントを奪い尽くしていく。

その数値は２７００。既に、今の三沢に耐えきることのできる数値
ではない。

次の瞬間に鳴り響く、大音響のブザー。
それは、このデュエルの終了を告げていた。

＊　＊　＊

「ちょちょちょちょ、ちょっ！？　なんでこんな全速力で逃げるんですか！？」

「あの場に留まってたらまたデュエルを挑まれる可能性があるからだよ！
あと別に全速力じゃないぞ！」

あの後。
俺たちは、三沢の追走から逃れるようにして、入り組んだ道を走っていた。
理由はごく単純……というより、言わずもがな。
あと、六条には今の俺の速度が全力に見えるようだ。
別段全力ではないというのに。

「それより六条、委員長と連絡は取ってくれたか？」
「ひぃ、ひ、い、一応、レイちゃんに、うへぇ、任せてありますけど、
だから速いですってぇぇぇー！！」
「なら、一応は安心か」

この話は、委員長がいなければ進まない話だった。
俺が本土にいたから話が進まず……というか進めずに置いておいた。
今更という感覚も無いではないが、ともあれ話は進めるに越したことはない。
それに、元々あちらも乗り気だった話だ。
この場で断られるようなことは……多分、無いはずだ。

というか昨日のうちに連絡つけたし。
よーしこれでフラグブチ折れたぞー。

「おばあちゃんが言っていた。
フラグは認識した瞬間フラグじゃなくなるってな！」

「な、何なんですか、ぜぇ、いきなり！？」

「こっちの話だ。それより、もう撒いたはずだ。歩いてもいいぞ」

「そ、それはもう、助かりまして、うひぃ、げぇ……」

どてっ、とその場に転がり込む六条。

……歩くどころじゃなく止まっちゃってんじゃないか！？

「……って」

そういえば、それも自然なことなのかもしれない。

闇のゲームじゃないとは言っても、
精神的には崖っぷちにまで追い込まれていたデュエルだ。
肉体的にも、どこかした疲れが出ていておかしくはない。

「そりゃそうか……ああ、もう。世話が焼けるな、お前」

「うひっ！？」

俺は投げ出された六条の手を取り、とりあえずその場に立ちあがらせた。

「にゃ、にゃにうぉー、するんでーぇ、ごぜぇ、はふぅ、ましゅかー」

「三沢が追ってこないとも限らないんだし、ここに留まるのは良くない。
……って言っても、お前体力は限界だろ？　おぶっていくから、しばらく体力回復してろ」

「うぇ！？　うぇ、うぇ、うお、おれれえうぇうぇえうぇ！？」

何故だか妙に赤面する六条を背に、俺は再度歩き出した。

しかしコイツ軽いな。レイにも負けないくらいには軽いんじゃないか。

「ああ、もう暴れるなって。どうせすぐそこなんだから。お前軽いから、俺の方は特に問題ないし」

「しょ、しょーゆー問題じゃないんですよぅ！」

「かと言って降りたらブー垂れるだろお前。いいから大人しく背負われててくれ」

俺も疲れていないわけじゃないんだ。あと船に揺られすぎて吐きそう。

「……ああ、そうだ。見つけたぞ、1枚だけ」

「ふぇ？　な、何をですか？」

「……あのなぁ。一応、俺たちの目的の一つだろ。《ブラックフェザー・ドラゴン》だよ」

「ああ、なるほど……他には、何かあったんですか？」

「いや。他は……無かった。探し当てることができなかった、が正

しいか」

「どっちにしても、これで実質的にはあと1枚……ですね」

そうだ。あと1枚――《エンシェント・フェアリー・ドラゴン》だけだ。

《ライフ・ストリーム・ドラゴン》に関しては、
あの時代で作られた……というか、生成されたものだ。
俺たちにどうのこうのできる領分とは言えない。

《パワー・ツール・ドラゴン》に関しては……現時点では何とも言い切れない。

これまでに1度も見たことが無いという点を考慮すれば、
それもあるいは……とは思いはするが。

「……しかし、なぁ」

「ど……どうしたんです？」

「お前、もう少し肉付けたらどうなんだ。
いくらなんでも細すぎるだろ」

「は、はぁ！？　な、ぬぁーんで先輩にンなこと心配されにゃならんのですか！

ええい私だって『当ててんのよ』くらいできるんですよ！」

「絶壁が何言ってんだ」

「はうっ！？」

「お前、貧しいとかそういう問題じゃなくてさ……。
こう、虚しくなってくるんだよ。見てて」

あ、何か更に体重軽くなった気がする。
なんか六条の口から魂抜けたような気がする。
まあいいや。

「にゃ、にゃにおーう……あ、でも確かレイちゃんに負けてたような……。
ふべぇ」

なんかノックダウンしてないかコイツ。

何を呟いてるのかはよく聞こえなかったにせよ、
自分で勝手にノックダウンしてるんだから、多分俺のせいじゃないよな。

……じゃない、よな？

とはいえ、そんなことはともかく。

何故か意気消沈している六条を連れ、俺たちは女子寮の前まで辿り着いた。

見れば、玄関の前には委員長とレイが二人して立ち尽くしている。

六条が来ないことを不審に思ったのだろうか？

「おーい」

軽く手を振って二人を呼ぶと、ギョッとしたような表情で、二人が俺の方を見据えた。

……何か気になることでもあるのだろうか？

などと悠長なことを考えているうちに、

委員長が競歩にも負けぬというような速度で俺たちに接近してきた。

……歩いて。

「み、みみみみみみみみみみっみみみみ、御堂君？

色々と聞きたいことはあるのですけどその背中に背負っている六

条さんは、
いったい何がどういうことになってどういうソレなんですか？」

「すまん委員長。何が何やら分からないんだが」

「あと制服はどうしたんです！
学校の中なんだから、ちゃんと着用していないと！」

「あ、ごめん委員長。ついさっきまで島の外だったし、
着替える時間も無かったんだ。寮に戻ったら着替えるから、
それまでどうにか勘弁してもらえないかな？」

「そ、それはいいんだけどカズ兄ぃ、あ、ああ、あの、
アリスちゃん背負ってるのはどういうワケ？」

いつの間にやらレイもこっちにたどり着いていたらしい。
ひくひくと唇をわななかせつつ、俺に尋ねてくる。

……どうでもいいが、何でそんなに唇が震えてるんだ？

「……い、いやー、ちょっとー、そこで転んでしまったのですよー」

なんだその口調。
それに、「コケた」というか「転がり込んだ」だろうが、アレは。

ともかく、六条を背中から降ろして話を続ける。

「……まあ、そんなところなんだ。それはそうとレイ、委員長を呼びに行ってくれたんだってな。ありがとう」

「え？　あ、うん。どういたしまして」

毒気を抜かれたような表情で、レイが返す。

対し、委員長はどこか釈然としない様子で、俺に問う。

「……それで、本当なら六条さんが私を呼び出したという話だったはずですけど？」

「ああ、うん。ソレ、俺の指示」

「はぁ……？　つまり、間接的に御堂君が呼び出したと、そういう解釈でよろしいんですね？」

解釈も何も、そうとしか言えないのだが。

「つまり、かねてよりの要望を直談判しに行くんですね！？」

「委員長。ヒートアップしすぎだから。もう少し冷静に頼む」

「いいえ、これは御堂君が冷静すぎるんです！
もっと意欲を見せなければ、きっと承認してはくれませんよ！」

……なんというか。

委員長のことだから、そういうことを言い出すのは分かっていた。
しかし、そこまで強烈な熱意を持っていたのか。

ある意味納得だけど。

「え、えっと……カズ兄ぃ。ちょっと聞いていいかな……？」

「どうしたんだ？」

「さっきから言ってる『要望』って、何？」

「そーいやそうですよね。直談判するとかちょっとステキなこと言ってましたけど」

六条の頭の中では直談判＝ステキなのか。
何がどうしてそうなった。

「んー……じゃあ、軽く説明しておくかな。
この学校、デュエルアカデミアだけど、不足しているものは何だと思う？」

「それは！　情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！
そして何よりもぉぉぉぉ――速さがあいたぁ！？」

「ネタを挟むな」

「勉強？」

「それもあるな。ただ、生徒が望みさえすれば、
ある程度は専門的な分野を勉強できるのもこの学校の強みなんだ」

望むような生徒が数えるほどしかいないのが難点だが。

そもそもこの学校、大学と遜色ないレベルの設備が整ってるわ、
性格はともかくとしても、教員の教導のレベルも意外に高いわで、
そこらの大学や専門学校とも比較されるレベルなんだが。

「とりあえず、別解があるということを前提として、
俺の意見としては、『生徒の手による自治』というものが挙げられる」

「はぁ。自治」

果たして六条は「自治」という意味が分かっているのだろうか。
そう感じさせるほどに気の無い返事が返ってくる。

「普通の高校だと、生徒会ってあるだろ？
多分、生徒の手による自治、という意味ではあれが代表的なものかな。
本来、学校の運営というものはああいったものがあるからこそ、
円滑に進むものなんだけど……学校が学校だし」

この学校の人間は、生徒・教師に関わらず、
全ての物事をデュエルで解決しようという傾向がある。

本当に、文字通り「全て」をだ。
それは学内に限った話ではないのかもしれないにしても、
運営すべき人間としては、もう少し憂慮すべき事態だろう。

何故なら、それは言うなれば、
「どんなに無茶な要求であっても、デュエルに勝利すれば通る」

という、理屈に取られかねないからだ。

確かに、クロノス教諭は相当な腕の持ち主だ。
しかし、それでも十代には勝てなかった。
十代だけではない。探せば他にも、クロノス教諭に勝る実力の持ち主はいるだろう。

そういった人間が、実力に物を言わせて無茶な要求を押し通そうとする。
その可能性は高いわけではないにしても、低いとも限らない。

ならばこそ、逆に、要望を際限なく提出することを抑制する組織として、
学校側に近しく、あるいは学校側に対しても意見できる組織が必要だと感じた。

というかこの学校、教員も割と無茶苦茶な人物が多いし。
生徒側から教員に意見できるってのも重要ではないだろうか。
だいいち、普通の学校として見れば欠陥が多いんだよここ。
教員の独裁体制だし、レッドからブルーまで、クラスによる格差も大きいし、
校長はしょっちゅういなくなるし、職員会議でもレッド寮がどうのこうの。

採用したのお前らだろ、と。ドロップアウトでも採用したの君たちでしょ、と。

そんなにエリートが好きならエリート専門の学校にでも行けばいいじゃない！

「カズ兄ぃ、ちょっと変なこと考えてない？」

何故レイは俺の表情を見ただけである程度思考を読めるのか。不思議だ。

……って違う違う。そうじゃなくて。

「ま、まあそういうわけで、学校側に意見できて学校側に近しい組織、
名前は……なんでもいいや。ともかく、その設立を目指してるってことだ」

「はぁ……で、先輩」

「何だ六条」

「アンタＰＴＡですか」

その反応は予想してなかったわ。

しかも若干間違ってないのが腹立つ。

確かに俺、全体的に見ても実年齢は相当なモンだが、

ＰＴＡとまで呼ばれるほどじゃないぞ。

周囲の環境や外見のこともあって精神年齢も落ちてきてるし。

光の結社は強大な組織だ。

それに対抗するには、当然、それに応じた組織が必要となる。

……とはいえ。

俺がこうして一つの「組織」を作ろうと思い立ったのは、

セブンスターズとの戦いが終わってから。

言うなれば、一つの脅威を経験してから、ということになる。

セブンスターズは組織としては優秀とは言い難いが、

個々人の能力はズバ抜けて高い。

逆に言えば、それだけでも一つの組織として機能していたとも言える。

そういった相手に対抗し、かつ打ち勝つためには、

同規模――あるいは、同じだけの能力を持った人間を集める必要がある。

円滑に指示を行きわたらせ、対策を共有するためにも。

結果的に、俺は委員長を騙すような形で、

こうして組織を立ち上げることを提案している。

利己的なのだろうか。いや、間違いないだろう。

行為の真贋はともあれ、俺は嘘吐きで利己的な人間だ。

そういう意味合いで言えば、俺は裏切り者で大嘘吐きで――敵、斎王や影丸理事長なんかと同じようなものなのかもしれない。

あるいは、俺がラスボスにでもなるのかね？

そう考えると、何故だか笑えてきた。

自嘲か、あるいは馬鹿馬鹿しいとでも思ったのか。

いずれにしても、笑っている自分自身が理解できない時点で、それは分からずじまいとなった。

＊　＊　＊

「失礼します」

――あれから、数分。

あーだこーだと議論を重ねていくよりも先に、問題となるのは「直訴」の方だ。

現状、鮫島校長は島にいない。

が、こういった場合には「臨時校長」として、クロノス教諭が祭り上げられ、校長室にいる。

そのため、今現在の目的を達するには、
臨時校長であるクロノス教諭に直接会って話し、許可を得るしかない。
……のだが。

「ええい何を寝ぼけたことを言っているのデアール！
ひとりでに仕事が終わってるなんてことは無いのデアール！」
「終わってるものは終わってるんだから仕方ないノーネ！
……でも実はもうちょっと仕事が残ってたりするノーネ」
「ほーれ見るデアール！　ちゃっちゃか終わらすのデアール！」
「……」

しかし、本当に濃いメンツだ。
クロノス教諭ついては言わずもがな。
ナポレオン教頭は……うん。似非日本語も相まって、
クロノス教諭と一緒にいると非常にカオスだ。

「……クロノス臨時校長」

「ええい、さっきから横でごちゃごちゃとうるさいノーネ！
気が散って仕事をするどころの話じゃないノーネ！」

「子供のワガママじゃないのデアール！
さっさと終わらせれば吾輩も何も言わないのデアール！」

「クロノス教諭！」

「オウッ！？　って、シニョール御堂なノーネ。
どうしたノーネ、こんな時に？　あと今は臨時校長なノーネ」

その訂正は必要なのだろうか。
先程は、臨時校長と呼んで気付いてもらえなかったわけだが。

「むっ。何なのデアールか。
今は大事な話し合いの途中なのデアール。
生徒が立ち入るべきではないのデアール！」

「すみません、ナポレオン教頭。ですが、
本日中に決めていただきたい案件がありまして。
その催促をと思い、臨時校長のところへ伺ったのですが……」

「ならばさっさとするのデアール！」

言われずともそのつもりなのだが。

「で、今日中に決めたい事柄とはなんなノーネ?」

「引き継ぎの際に鮫島校長からの言伝があったと思うのですが。
生徒会の件、と言えば伝わりますか?」

「ああ、あの件なノーネ。
実は鮫島校長からの承認印は捺してあるから、
あとは人数さえ集まればどうにかなるはずなノーネ」

「ありがとうございます。
では、人員を集めて、後にそちらに書類を提出します。
その後、仕事の方はこちらに回していただければ私の方で処理しますので」

「それは助かるノーネ。
それで、シニョール御堂。話はそれだけなノーネ?」

「ええ。忙しい時に出向いてしまって申し訳ありません。
それでは、近いうちに提出の方は行いますので」

告げ、俺は頭を下げて校長室から出て行った。

クロノス教諭は優秀な教師だ。

それこそ、本来は校長が行うような仕事でさえ、時間さえあればこなしていける。

十代たちと関わっていったことで険も取れたのか、最近では俺たちの言うことにも、耳を傾けてくれるようになった。

こうして仕事中だというのに応対してくれたのが、その証拠とも言える。

さて、と俺は考えを切り替えた。

あとは人員だ。

委員長はほぼ確定的としても、他に誰が関わってくれるだろう。

六条……は、保留。レイに関しては、年齢的な問題はあれどそれだけか。

万丈目はこういうことには興味が無さそうだ。

三沢は……今の時点では、どうにもできないな。

となると、まずは自分の足で探していくしかないということになる。

「……まあ、こういうこともあるか」

何もかもが上手くいくことなどない。

だからこそ、上手くいくよう努力しなければならない。

ともあれ、これからが大変だ。

何より早めに、協力してくれる人材を集めないと――。

４８束目：組織（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「引きと場と」

「……というわけでディサイシブアームズの効果だ。
手札全部捨てるからお前の手札の光属性モンスターを全て捨ててくれ」

「のぎゃー!?　ぬぁ、な、なんつーことをしてくれるんですか!?
私の切り札がぁぁぁ!!」

「ＶＥＮＵＳ（ヴィーナス）にヒュペリオンに轟龍にテテュスか。
攻撃力の合計は１０８００。それだけダメージを受けてもらうぞ。
……まあ、俺の勝ちだな」

「……先輩、アンタ何でこの局面でそんなの持ってこれるんですか。
８０００のＯＣＧルールなら勝てると思ったのに、これでもダメなんですか。

というかやっぱり先輩ってチートドロー持ちなんじゃないんですか」

「手札にバルブがあったからお前に戦闘破壊させて、その上で神官を特殊召喚、
ブレイカーを出してシンクロしただけじゃないか。
別にチートじゃないだろ。レベル４モンスターは他にもあったし」

「ぐぬぬぬ……し、しかしですねぇ！　完全にメタな構築じゃないですか！」

「お前のクリスティアのがよっぽどメタだよ。
あと構築がメタなんじゃなく、モンスターがメタなんだ」

「……まあそれはそれなんですけど」

「それ以上に、お前がそんだけ手札に溜めてたのが驚きだよ。
召喚したのはウィクトーリアだったし、手札のもう１枚も……」

「聖域ですしねー。ふと思ったんですけど、カードガンナーの効果、アレとかライコウとかの効果を使って、落ちが良いと嬉しいですよね」

「まあ、墓地アドバンテージに直結するからな。
……とはいえ、俺は殆ど良い落ち方をしたことが無いんだけど」

「ちょっと試してみましょうか。私のはあんま墓地がどうのってのは無いんで、
先輩の……どれかのデッキで」

「ならシンクロデッキ使ってみてくれ。俺はＨＥＲＯを使う」

「了解です。ではシャッフルして５枚ドロー。１枚ドローして、疑似的にカーガン効果発動！　上から３枚墓地へ……」

「……バルブ、スティーラー、神官か。お前、何でこんな落ちが良いんだ？」

「にゃははー。じゃあ先輩もどうぞ」

「……まず初手で５枚ドロー。ドローフェイズでもう１枚。カードガンナーの効果で３枚落と……」

「マスク・チェンジ、ミラフュ、未来融合……って、先輩……」

「……」

「だ、大丈夫ですよ！　こんなことくらいありますって！」

「……ああ、次だ。次こそは……」

ミラクル・フュージョン　ミラクル・フュージョン　ミラクル・フュージョン

「ｍ９（＾∀＾）」

「殴ったぞ」

「ｍ９（；ω；）＜何するんですかいきなり！」

「そう思った時には既に行動は終了してるんだ、という名言があってだな」

「だからっていきなり頭はたかないでください！」

「……俺にはカーガンは合ってないことが判明した。
ただ、それだけの話だ」

↓続かない

※　今回のミニドラマは作者の経験８割で構成されております。
特に、天使族にディサイシブ撃たれてワンキルは本当にありました。
カーガンの落ち方も割とヤバいです。死者蘇生とブラック・ホール、
加えて制限級の魔法・罠が同時に落ちたとか日常茶飯事です。
以上余談でした。

＊　＊　＊

そういうことで、今回対三沢と組織の結成回でした。

アニメ見てる限り、アカデミアって生徒会とかありませんよね？
いや、正直に言ってその辺かなり曖昧で……（

テニス部と卒業アルバム制作委員があるのは知っているんですが、
もしもそういったものがあった場合、ウチだけの設定ということに
してください；

しかし、毎回思うのですが、御堂が出てきた時点で、
「ああ、今回もご都合主義なのか」と思ってしまいます。私が。

その点、ある意味で仕方がないのですが、
絶望感が無いというのは、やはり物語としてはどうなのでしょうか。

そのあたり、最近は少しうーん、と感じてきています。

六条回だったことでふと思い出したのですが、
実は御堂の名前に関しても、ある程度は元ネタがあったりします。
苗字の「御堂」に関しては、少し落ち着いた人間の方がいいか、
ということも考え、「寺」の意味も入るこの文字を使用しました。
まあ、完全な先入観と固定観念なのですが。
本名に関しては完全にあの人です。ぶっちゃけギャレンです。本当
に（ｒｙ

和真という名前に関しては、
六条の元ネタとなるゲームの主人公の声優さんの下の名前、
仮面ライダー剣の主人公、剣崎の下の名前がモデルになっています。
ちなみに「和」に関しては、他人と協調性を持つように、との考え
でした。
本名は、木偏のある漢字ということであなりました。

実妹に引きずられたようなものです。すまんキリヒト。

毎度毎度のことではありますが、
どこかしら間違いなどありましたらご指摘いただけると助かります。

次回のことを大雑把に一言でまとめると、
「厨二病が出るよ！」という部分が主となります。

御堂じゃなくて厨二です（

ということで、今回はこのあたりで。
それでは。

49束目：暗躍

曰く。

露見しないよう料理に隠し味を入れるのは楽しいが、
それを見破ってしまうことは、もっと楽しいと言う。

他者の秘密を暴く。
そう言い換えると多少悪辣な感はあるが、本質的にはさして変わらない。

事実、その行為は世界の様々な場所で行われている。
先程挙げた料理という例に止まらず、男女の仲、
裏社会の事情や政治、マスコミに至るまで、あらゆる「秘密」が存在する。

そういった秘密を一つ一つ暴いていく。
言うなれば、それもある意味では楽しみと言えるものであるかもしれない。

私にとっても、それは娯楽の一つだった。

嘘。虚構。
私にとっては慣れ親しんだものであるそれを見破るのは、
容易であり、また、その上で愉快なものだ。

取り繕っていた仮面が剥がれ、慌て、焦り、
自失としながら現実を噛みしめる。

善人であろうと悪人であろうと、
一切の隠し事を持たない人間というものは存在しえない。
人間は、裏があるからこそ人間と言える。

「――――当然、あなたの秘密を暴くことも、面白い」

私は、椅子に腰かけながらその人物に問いかけた。

「そうは思いませんか……鮫島校長？」

びくっ、と体を震わせ、大柄な人物が私を見据える。

恰幅が良く大柄。立派な髭をたくわえた禿頭。
紛れもなく、その人物はアカデミア本校の校長である、鮫島だった。

――本来、今現在はアカデミアにはいないはずの。

「み、御堂君……？　何故私が帰って来ていることを？」

「正確に言えば、『合間に寄った』というところでは？
見たところ、相当にお疲れの様子ですが」

「う、うむ……その通りだ、が……。
御堂君、君は、私が何故学校を空けているかということも、
まさか知っているということではあるまいね？」

知っているとも。

次世代のデュエリストを発掘するための大会を開催する。
そのために世界各国を巡り、ＶＩＰを集めていることも。

「ええ、知っていますよ。少なくとも、一般人以上には。
……その様子を見る限りでは、本土へ行った帰り、ですか？」

「……ならば、黙っていることも無いだろうね。
そうだ。亮を招待するため、本土へ赴いたところだ。
本日中には、アメリカへ発つ」

「先日、クロノス教諭の仕事を代わりに行ったのはあなたですね？」

「……」

鮫島は何も語らない。

だが、その表情を見る限りでは、それは正答なのだろう。
島に立ち寄るついでに、部下の不始末の面倒も見る。
各々の事件に噛みさえしなければ、上司としては理想の人間と言える。

「まあ、答えは聞かずにおきましょう。
それで、いつ出立の予定ですか？」

「2時間後だよ。アメリカとの時差も考慮しなければならないのでね」

現在の時刻は午前1時。
飛行時間を考慮すれば、到着は夜になるだろう。

「それならば話は早い。鮫島校長。一つよろしいですか？」

「……何かね？」

「私は亡霊です」

ぎく、と鮫島の表情がこわばった。

――と、次の瞬間には、何を馬鹿な、とでも言いたげなものに変わる。

「理解ができないというわけではないでしょう。
セブンスターズ、と言って分からないということは無いはずだ」

「まさか……そんな馬鹿な！」

「『まさか』。『馬鹿な』。そうやって可能性を殺しているから、
柔軟な発想ができずにいるのでは？」

「しかし……それでは、万丈目君の発言と矛盾している！
セブンスターズの亡霊は消えたはずでは……！」

「消えた？　それはあなたが確認してそう言っているのか？
だとしたら見当違いだ。私は御堂和真の一面だ。
それ故に、消失することはありえない」

自由に主導権を握るといった行為ができなくなっただけだ。

多重人格のようなものだろうか。
私の経験したことがキリヒトへ反映されることは無いという特徴はあれど、

似たようなものと解釈するのが自然とも言えるか。

「……さて、では何故わざわざ私がここに赴いたのか。
その理由からお話しましょうか」

「望みは何かね。金か、それとも……」

「経営権など必要ありませんよ。私が欲しいのは、もっと単純なものだ」

金よりも、地位よりももっと分かりやすいもの。
この世界で言えば、それはただ一つ。

「カード。それも、普通のものでは足りない。
……サイバー流の秘奥、裏サイバー流。
それらを構成するカードを、いただきに参りました」

「裏サイバー流……いや、待ってくれ！
何故君がそのようなことを……！？」

「では何故、あなたはサイバー流という存在が露見していないと思える？
ネットが普及し、情報が飛び交うこの社会、少し調査しさえすれば、

望む情報はいくらでも手に入るのですよ。あとは内容を掘り下げればいい」

キリヒトの記憶を辿れば、サイバー流のことも知れる。
いくら隠匿しているとは言っても、門下を持つ一つの「流派」だ。
その情報が漏れないということは無く、実際に調べれば情報は拾える。

裏サイバー流に関しては、あくまでキリヒトの記憶にのみ残る記述だ。
私はそもそも知りえない情報だが、こちらも、断片的ながら情報を拾えた。

「くっ……！」

「もし逃げようと思うのなら、窓から逃げればいい。
命の保障はできませんがね」

「何故だ、何故君はこんなことを……！？」

扉を塞がれ、逃げ場を無くした鮫島が私に問いかける。
陳腐でありきたりな問いだ。だが、そうするしか無いだろう。
私とて、その問いかけを予想していなかったわけではない。

「答えはごく単純（シンプル）なものですよ」

あらゆる者が望み、羨む至高。

「――――力」

力。そう、力だ。
何を行うに際しても、求められるのは力だ。

力が無ければ何もできない。
逆に、力さえあれば何でもできる。
故に、力が必要だ。

「私は、それが欲しい。誰もが羨み、望むほどの力。
手始めとして、必要なのは裏（ソレ）サイバー流だ」

「力に溺れる者は、いずれ身を滅ぼす。
それを分かっていて言っているのでしょうね」

「その言葉、耳障りは良いが、一つ重要なことが欠けている。
溺れる、溺れないという以前に、『力が無ければ何もできない』。
主張は通らず、意見は封殺され、何一つ得ることはできない。
力が無い者は、ただ奪われていくだけだ」

何かを得るために、自分の利を蹴る。

残念だが、私はそういった思考が苦手だ。
何かを得るために、何かを失うのも真っ平ごめんだ。

「力というそれ自体には、何一つとして問題は無い。
要は扱う者の心がけ……違いますか？」

「君は何に対して力を使うつもりだ！」

「愚問ですね。そもそも、力とは持つことに意味があるのですよ。
力があれば全ての物事に対し、選択肢が増える。
時には『選ばない』ことすら、選択肢に取り入れることができる。
それだけで十分でしょう。力を求めるには」

私は軽くため息をつく。
これ以上は議論の余地も無い。

そもそも、私は議論をしに来たのではないのだから。

「既にあなたには逃げ道は無い。選択肢も2つ。
どうにかして私をこの場から退かすか、裏サイバーを渡すか、だ」

「やむを得ないか……いいでしょう。
デュエルで決着を付けましょう」

「おや、存外に物分りがいい。では、始めるとしようか」

鮫島の普段の飄々とした雰囲気は既に無く、
サイバー流師範としての威厳とも言うべきものだけが感じ取れた。

「「――――――決闘（デュエル）！」」

声が重なり、互いに必殺の意気を込めて睨みあう。

「先攻は私が貰おう。ドロー！
まずは《サイバー・ラーバァ》を守備表示で召喚する」

【《サイバー・ラーバァ》　攻　４００　／　守　６００】

「弟子が弟子なら師も師……と言ったところか」

初手でのサイバー・ラーバァの召喚。
様子見にはうってつけだろうが、ワンパターンにも程がある。

「更に私は、《未来融合－フューチャー・フュージョン》を発動。
２ターン後の未来に《サイバー・オーガ・２》の特殊召喚を予言しよう」

サイバー・オーガ２……鮫島のエースカードか。
その効果は、言わば生ける《メタル化・魔法反射装甲》。
戦闘においては脅威の能力を発揮するモンスターか。

「デッキから融合素材の２枚の《サイバー・オーガ》を墓地へ送る。
カードを２枚セットし、ターンエンドだ」

「私のターンだ。ドロー。
私は手札から《成金ゴブリン》を発動する。
相手に１０００ライフポイント与える代わりに、

私はデッキから1枚カードをドローできる」

「ライフポイントと引き換えに手札交換を……？」

「たかが１０００のライフだ。削るのは容易だよ」

たかが１０００程度、一つの連携で崩れ去る。
まして、鮫島はサイバー流の師範だ。
たったこれだけのライフポイントが意味をなさないことは、
奴自身が一番知っていることだろう。

「……さて。まずは《Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブジャスティス）　サウザンド・アームズ》を召喚する」

【《Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブジャスティス）　サウザンド・アームズ》　攻　１７００／守　０】

「そして装備魔法、《ブレイク・ドロー》を発動。
これをサウザンド・アームズへ装備する」

「むっ……？」

「攻撃力の増減は無い。そういうカードではないのだよ。
さて、サウザンド・アームズでサイバー・ラーバァへ攻撃する」

「サイバー・ラーバァの効果を忘れてもらっては困る。
サイバー・ラーバァが攻撃対象に選択されたとき、
そのターン中の戦闘ダメージをゼロにする！」

「おっと。そして、そのモンスターは……」

「その通り。サイバー・ラーバァは戦闘で破壊されたとき、
デッキから同名モンスターを特殊召喚できる！」

【《サイバー・ラーバァ》　攻　４００　／　守　６００】

再度、鮫島の場に現れるサイバー・ラーバァ。
確かにその効果は厄介だが、弱点は多い。

「……せっかちなことだ。ブレイク・ドローの効果を処理させてもらう。
戦闘によって相手モンスターを破壊し、墓地へ送ったとき、
私はデッキからカードを１枚ドローする」

容易にアドバンテージを稼ぐことが出来るカードは少ない。
《強欲な壺》など、１枚の消費で２枚以上利を得ることの出来るカードなど、

それこそ数えるほどしか存在してはいないだろう。
特に、ドロー効果を持つカードに関しては、
その利便性と重要性のため、大きな制約を持つものも少なくない。
代表的なものを挙げるとすれば《終わりの始まり》。
1枚の消費で3枚のドローが可能となるが、
墓地に7枚以上の闇属性モンスターがおり、
更にはその内5枚の闇属性モンスターを除外せねばならない。
だが。

「さて、安心しているところ申し訳ないが、モンスターは残らんよ。
サウザンド・アームズの効果は、相手の場の光属性モンスター全体への攻撃。
新たに現れたそのサイバー・ラーバァへの攻撃も可能だ」

「何……？」

こうした全体攻撃を可能とするモンスターを用い、
攻撃のたびにアドバンテージを取ることのできるカードを用いれば、
そういったカードと同等の働きをすることもできる。

「攻撃を続行する。

サウザンド・アームズ、２体目のサイバー・ラーバァを攻撃」

両側の合計５本の腕に装備された凶器により、サイバー・ラーバァが粉砕されていく。

それと同時、鮫島の場に更なるサイバー・ラーバァが特殊召喚される。

【《サイバー・ラーバァ》　攻　４００／守　６００】

「ブレイク・ドローの効果により、更にカードを１枚ドローする。……さて、これで打ち止めだろう。サウザンド・アームズ。攻撃だ」

再度振り下ろされた凶器が、最後のサイバー・ラーバァを粉砕する。これにより、私は更なるドローを行う。

「……私は３枚のカードをセット。ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！

……うむ。スタンバイフェイズ、未来融合のカウントが進む。

《貪欲な壺》を発動。墓地の5枚のモンスターをデッキに戻し、
カードを2枚ドロー」

鮫島がデッキに戻すカードは、3枚のサイバー・ラーバァ、
そして初めのターンに墓地に送った2枚のサイバー・オーガか。
私は上手い具合にコストを賄ってやってしまった、ということにも
なるか。

「そして《プロト・サイバー・ドラゴン》を召喚する!」

【《プロト・サイバー・ドラゴン》　攻　1100／守　600】

流派が同じだけに、戦法もほぼ変わらん……か。
いずれにしても、これが全開とは思えんが。

プロト・サイバー・ドラゴンは、場に存在する限り、
《サイバー・ドラゴン》として扱われる効果を有する。

攻撃力の勝るモンスターを相手取っているこの状況下、
わざわざプロト・サイバーを出してくる理由はそう多くはあるまい。

「《融合》を発動！　場のプロト・サイバー・ドラゴン、手札の《サイバー・ドラゴン》を融合し、《サイバー・ツイン・ドラゴン》を融合召喚！」

【《サイバー・ツイン・ドラゴン》　攻　２８００　／　守　２１００】

「……ほう」

定石……否、丸藤亮ならば、この場で迷わずサイバー・エンドを出す。

《パワー・ボンド》を使用する関係上、ほぼ必殺の威力を有しているからだ。

しかし、鮫島の場合は通常の《融合》。

二回攻撃と総攻撃力から、こちらを選択したのだろう。

だが。

「悪いが攻撃はさせん。《エレメンタル・アブソーバー》を発動。手札の《バイオファルコン》を除外し、光属性の攻撃宣言を封じる！」

「むうっ……！　ここでロックカード……！

……こうなれば仕方が無い。カードをセットし、ターンを終了する」

『サイバー』のカードは、基本的に光属性を主としている。
部分的に炎属性や地属性なども存在しているものの、
切り札となりうるカード、特にサイバー・ドラゴン関連のカードは、
光属性のモンスターであることが多い。

元々、光属性に対してメタ的な構築となっている私のデッキとしては、
あのカードが手札に来るまでの時間稼ぎともなってくれるだろう。

「私のターン、ドロー。
……では、まずはそのサイバー・ツインを破壊させてもらおう。
魔法（マジック）カード、《ソウルテイカー》を発動。
相手の場の表側表示のモンスター1体を破壊する！」

「なんとっ……くっ！」

宣言と同時、サイバー・ツイン・ドラゴンが、
重力に押し潰されていくようにしてその身を収縮させ、破壊されていく。

「この効果の後、相手プレイヤーは１０００ライフを回復する。
更に私は《成金ゴブリン》を発動。相手のライフを１０００回復させ、
カードを１枚ドロー」

鮫島のライフポイントは７０００。
あと１枚、成金ゴブリンを使用することになれば、
鮫島のライフポイントは初期値の２倍にまで達する。

「……構わん。《闇の誘惑》を発動。
デッキからカードを２枚ドローし、手札から闇属性モンスターを除外。
私は《Ａ・Ｏ・Ｊ　サイクロン・クリエイター（アーリー・オヴジャスティス）》を除外する」

「先程から手札交換ばかり……サイバー流は、
そのような考えでは使いこなせんぞ！」

「私はあなた方のような強運ではないのだよ。故に凡人としての一つの『手』だ。
……《Ａ・Ｏ・Ｊ　サウザンド・アームズ（アーリー・オヴジャスティス）》を生贄に捧げ、
《Ａ・Ｏ・Ｊ　リーサル・ウェポン（アーリー・オヴジャスティス）》を召喚」

【《Ａ・Ｏ・Ｊ　リーサル・ウェポン（アーリー・オヴジャスティス）》　攻　２２００　／　守　８００】

サウザンド・アームズが生贄に捧げられると同時、
装備していたブレイク・ドローも同時に墓地へ送られる。

サイバー・ツインやシンクロモンスターと比べれば、
攻撃力２２００というのは、相当に貧弱だと言える。
また、その効果も限定的で、光属性のモンスターを戦闘で破壊し、
墓地へ送らなければ発動することはできない。

だが、これでいい。
まだ、私は奴に打ち勝つ必要は無いのだ。

「リーサル・ウェポンで直接攻撃（ダイレクトアタック）を行う」

「残念ながら、その攻撃は《攻撃の無力化》によって無効とし、
バトルフェイズも終了させてもらおう！」

元々、それほど期待はしていなかったが……これも防ぐか。
まあいい。いずれにしてもそれほど興味は無い。

「ならば私はカードを2枚セットし、ターンを終了する」

「私のターン、ドロー！　このスタンバイフェイズ、
未来融合－フューチャー・フュージョンの効果を発動し、
《サイバー・オーガ・２》を特殊召喚しよう！」

【《サイバー・オーガ・２》　攻　２６００　／　守　１９００】

――出たか、鮫島のエースが。

その姿は、機械によって構成された、凶悪な「鬼」。

その効果も、外見に違わず凶悪だ。

攻撃対象となるモンスターの攻撃力の半分、攻撃力がアップすること。

仮に攻撃力５０００のモンスターが相手であっても、

サイバー・オーガ・２から攻撃する場合なら、その攻撃力を超えた数値となる。

「更に私は《メタル化・魔法反射装甲》を発動し、
《サイバー・オーガ・２》に装備する。これにより、
サイバー・オーガ・２の攻撃力、守備力は３００ポイント上昇し、
こちらから攻撃した場合、攻撃対象の攻撃力の半分、攻撃力を上昇できる」

つまるところ、上昇分の攻撃力と元々の攻撃力、
合計２９００の攻撃力を直接的に叩き込む、ということか。
半分＋半分。要するに、攻撃力を直接奪うということになる。

「私は手札から《サイバー・エスパー》を召喚！」

【《サイバー・エスパー》　攻　１２００　／　守　１８００】

いよいよもって、危険域となってきたか。
サイバー・オーガ・２の攻撃が決まれば、私に降りかかるダメージは２９００。
そして、サイバー・エスパーの攻撃力は１２００。
合計すれば４１００となり、私のライフは尽きる。

「その前に、まずは攻撃が通るよう、細心の注意を払わせてもらおう。
伏せ（リバース）カード、《砂塵の大竜巻》を発動。
エレメンタル・アブソーバーを破壊する」

「成程。エレメンタル・アブソーバーの破壊に来たか。

先程の状況なら多少は考えはすれど、私を確実に葬れる状況にある今、
出し惜しみする必要も無い……か」

仮に私の伏せ（リバース）カードを打ち抜こうとしても、
その内のどれが《ＤＮＡ移植手術》であるのかは分からない。
もしも別のカードを破壊してしまえば、再度のロックを許してしまう。
そこで、エレメンタル・アブソーバーを破壊したのだろう。

「……最後に訊いておきたい。君は、御堂君にとっては何なんだね？」

「さて、ね。二重人格のようなものとでも認識しておけばいい。
正直に言えば、私もまだ確証が持てていないのでね。
推測で物事を語るような真似は避けたいのだよ」

「……この件は不問ということとする。
代わりに、裏サイバー流のことは忘れなさい。
私は生徒を傷つけたくはない」

「教職としては模範的ないい台詞だ。
今の私でなければ、感動的だと賞賛していることだろう」

クッ、と、喉の奥から笑いが漏れる。
鮫島が善人であることなど、とうに知っている。
その性質ゆえに押しに弱く、何故か妙な厄介ごとを引き寄せる事も。

「だが――――無意味だ」

「ぬっ……！？」

「生徒を傷つけたくない？　それは本心からの言葉なのだろうな。
だが、意志だけで他人を動かせると思ったら大間違いだ。
力を示せ。私にトドメを刺せ。そうすれば、いくらでも要求は聞いてやろう」

「ぐ、むっ……」

「言っただろう。『力が無ければ何もできない』と。
言うことを聞かせたいのならば力を示せ。押し通れ。
それとも、綺麗ごとばかりで何も出来ないのか？」

こういった手合いの反応は想像に難くない。

偽善と言われたことに逆上する。
偽善でもいいと偽善を突き通す。
これまでの自分を否定されたことに愕然とする。
認めたくないがために、力を振りかざす。

妄信的に、自分が正しいと繰り返す。
さて、お前は――どれだ？

「……やむを……得ん……！！」

苦々しげな表情で、鮫島が呟く。
まだ抵抗があるというなら、一言、背中を押してやろう。

「……肉体的には貴様の生徒であっても、
今の私は生徒ではない。……違うか？」

「くっ、ぬっ……サイバー・オーガ・２！
Ａ（アーリー・オブジャスティス）・Ｏ・Ｊ　リーサル・ウェポンに攻撃！」

告げた瞬間に、躊躇なく攻撃を行ってきたか。
それでいい。私と戦うことに躊躇などしてほしくはない。
戦えない人間と戦うのは、私としても心苦しいのだから。
それでも、勝てる勝負は逃さないが。

「リーサル・ウェポンの攻撃力の半分＋半分。
つまり２２００の攻撃力が、サイバー・オーガ・２に加算される、か」

豪腕がリーサル・ウェポンを砕き割るべく迫りくる。

だが、届きはしない。

「伏せ（リバース）カード、オープン！　《悪魔のサイコロ》！
この効果により、相手の場の全てのモンスターの攻撃力を、出た目×１００の数値分ダウンさせる！」

「な……に……！？」

小さな黒い悪魔が現れ、サイコロを振り始める。
止まった目は――１。

つまり、２体のモンスターの攻撃力は、１００ずつダウンする。

「く――くく、くくく、ははははははっ！」

何度も言うようだが、鮫島のモンスターの合計攻撃力は４１００。
つまり――２体のモンスターの攻撃力が、それぞれ１００下降した今、
その総攻撃力は３９００となってしまう。

「最悪の目が出たな。だが、これで十分だ。
さて、サイバー・オーガ・２の攻撃を処理してもらおう。
私に通るダメージは――２８００！」

ソリッドビジョンの攻撃が私に突き刺さると同時、
軽い衝撃が全身を突き抜ける。

「く……む……サイバー・エスパーで直接攻撃（ダイレクトアタック）！
サイバネティック・ショック……！」

「サイバー・エスパーの攻撃力は１１００となった。
よって、そのダメージは１１００――つまり、
私の残るライフポイントは、１００だ」

あと１歩。
あと１手。

私としても、あの場で別なモンスターが現れていれば負けていた。
あるいは《リミッター解除》が存在していれば、
まず間違いなく敗北は逃れられなかったことだろう。

「くっ……あと一押しだったはずが……！
　ターンエンド……！！」

「それでは、私のターンだ。ドロー」

私がデッキからカードを引いた直後、サイバー・エスパーの目が光り輝く。

「……サイバー・エスパーは、相手のドローしたカードを確認できる」

「成程。私がドローしたのは《成金ゴブリン》だ」

デッキに仕込まれた最後の１枚。
この効果を用いれば、鮫島のライフポイントは８０００となる。

「……さて、《ＤＮＡ移植手術》の発動を宣言させていただこう。
当然、選択するのは光属性！」

場の全てのモンスターの属性が光へと変化する。
これで、私のデッキの全力を出せるわけだが……今、
私の狙うべきことはＡ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブジャスティス）の効果補助ではない。

「さて、私は先程手札に加わった《成金ゴブリン》を発動する。
この効果でドローしたカードを、互いに確認する。
……《流星の弓－シール》だ」

そして、鮫島のライフも１０００回復する。

「引導を渡そう。私は伏せ（リバース）カード、《異次元からの帰還》を発動！
ライフの半分をコストに、除外された私のモンスターを、
可能な限り私の場に特殊召喚する！」

【《バイオファルコン》　攻　１７００　／　守　１２００】

【《A・O・J（アーリー・オブジャスティス）サイクロン・クリエイター》　攻　１４００／守　１２００】

「レベル４のバイオファルコンに、レベル３、
光属性となったサイクロン・クリエイターをチューニング！
現れろ、《エンシェント・ホーリー・ワイバーン》！」

【《エンシェント・ホーリー・ワイバーン》　攻　２１００／守　２０００】

空から舞い降りてくるかのように、白い東洋風の竜が現れる。
その姿は見るからに「ドラゴン」であるはずなのに、
その種族は「天使族」に分類されている。
多少の違和感はあるにしても、その効果は優秀だ。

「エンシェント・ホーリー・ワイバーンは、
互いのライフの差分、自身の攻撃力を増減させる。
相手が下なら上昇。私が下なら下降する……という風にな」

現在の私のライフは、コストとして半分を支払ったために５０。
対し鮫島のライフは８０００。
その差は７９５０と、破格の数値であり、また――。

「エンシェント・ホーリー・ワイバーンの攻撃力も、その分下がる。
つまり、７９５０下降し、現在の攻撃力は――ゼロ」

鮫島の表情が、疑念に駆られたように歪む。
ライフの差分アップするのであるならともかく、
その差分ダウンするのであれば、召喚する意味は無い。
……恐らくは、そう考えているのだろう。

「私は《流星の弓－シール》をエンシェント・ホーリー・ワイバーンに装備する」

これにより、下降値は合計８９５０。

攻撃力ゼロのモンスターで直接的に攻撃しようとも、
相手に与えることのできるダメージは精神的なものだけだ。

決して、他の要素は期待できない。

「……流星の弓－シールを装備したモンスターは、相手に直接攻撃（ダイレクトアタック）できる。
エンシェント・ホーリー・ワイバーンで直接攻撃（ダイレクトアタック）！！」

「馬鹿な！？」

「常識に囚われすぎたな。私は伏せ（リバース）カードを発動！
《あまのじゃくの呪い》！」

そして、このカードによって、私の計略は完結する。

「このターンのエンドフェイズまで、
攻撃力・守備力の、上昇効果、下降効果は逆となる」

「なんですと！？　つまり、それは――！！」

「その通りだ。エンシェント・ホーリー・ワイバーンの攻撃力は、
下降分の８９５０上昇し――１１０５０となる！」

エンシェント・ホーリー・ワイバーンの発する光が、爆発的にその輝きを増していく。

「お前たちはいいよなぁ、望んだカードをドローできて。
だが、私は決して望んだものなど引き当てられん。凡人だからな」

強運を持つ人間は、それだけで凡人と言うにはほど遠い。
この世界において、運が強いというのはそれだけで「強者」と言えるのだから。

「だからこそ、私はいくらでも小細工を弄する。
それこそが、貴様のような強者を倒す方法なのだからな！」

強者の言う「正々堂々」がどれほどの意味を持つのかは知らんが、
圧倒的優位にある人間がそれを言ったとしても、
何ら説得力はなく、むしろ虫唾が走るだけだ。

「手段を小細工と侮った時点で貴様の負けだ。
裏サイバー流――貰っていくぞ」

強烈なまでの光が鮫島を包み込み、ライフを削り取っていく。
――その瞬間に、私の勝利は確定した。

＊　＊　＊

「さて、貴様の負けだ。賭け金（アンティ）をいただこうか」

告げながら鮫島に詰め寄る。
それにつれ、奴は徐々に後退していく。

元より、自分の勝利を確信していたのだろう。
つまり、アンティ――裏サイバーのカードを渡すつもりも、
微塵も無かったと見るべきだろうが……。

「知っているぞ。貴様は常に元々のデッキと同時に、
裏サイバー流のデッキをも持ち歩いているということを」

この男の仕事柄、道場を留守にすることが殆どだ。
奴が留守にしている間に空き巣にでも入られれば、

裏サイバー流のカードをも失うことになりかねない。
キリヒトの連日の努力により、裏付けは取れている。
奴もこうして悪用されるなど、考えはしなかっただろうが。

「く……う、裏サイバー流のデッキは、その強力さから反動が大きい！
悪用すれば、間違いなく不幸が――」

「何だ、その陳腐な脅し文句は。常識で考えてもみろ。
カードを使っているというそれだけで不幸になるわけがないだろう」

ましてや心臓病など、ありえるはずもない。

心疾患というものは、基本的に生活習慣を改善しさえすれば、
治療も予防もごく容易なものである――と、キリヒトの記憶にはある。

感染症などの可能性もあるにはあると言うが、
免疫能力の低下、ウィルスが原因になるものが殆どであり、
消毒、殺菌、滅菌などを怠らなければ罹ることはほぼ無いとも。

「三度は言わん。渡せ。

……逃げようなどとは思うな。
身体能力は、私の方が上だ」

鮫島の背後には、既に空間は無い。
窓から外に飛び出すことも考えるだろうが、
当の窓からも、既に遠ざかってしまっている。

故に、と言えるだろうか。
次の瞬間、鮫島は私に向かって突進を敢行した。

「ぬおおおおっ！！」

「隙だらけだ」

「ごっ……！？」

直後、私が放った掌底が、鮫島の顎を打ち抜いた。

衝撃によってぐらりと奴の頭が跳ね、
その勢いも同時に弱まっていく。

「寝ていろ」

言葉と同時、左の掌を奴の腹部に叩き込む。

抉るようにして突き込んだ一撃。
昏倒させることなどできずとも、ダメージを与え、
その場に倒すには十分な威力の一撃だ。

肉体的に衰えの生じていた鮫島では耐えきれず、
体を「く」の字に折って、その場に倒れた。

「ぐ、お、お……おの、れ……」

「……今度こそ、本当に貰って行こう。
取り戻したいのなら――そうだな。それなりの対応を取ればいい」

鮫島の着用していた上着の内ポケット、
その中に仕込まれていたデッキを取り出す。

中身は、キリヒトの記憶の裏サイバー流のカードと同一。
それも――全種類。

いや、そもそも、そうでなければここに赴いた意味が無い。

「そうだな……私を倒してみせろ。
所詮、力によって奪い取ったものだ。力によって奪い返せ。
私を明確に『敵』と認識し、奪い返すべく行動しろ」

キリヒトには、大勢の「敵」を作るべきだ。
敵が存在する限り、奴の感情は揺れ動く。
感情が動けば、その中には暗い感情も存在することだろう。
そうなれば、あとは私の計略通り――。

「いいか。私は敵だ。このアカデミアの人間全員の敵だ。
打ち倒してみせろ。でなければ、永遠に進展は無いぞ」

「くっ……ぬ……」

これで私が「敵」であると、鮫島に印象付けることができた。
仮にこれから私が外に出なくとも、疑いを抱くことだろう。

――御堂和真という人間は、自分たちの敵なのではないか、と。

ああ、間違いなく私は敵だ。人間に対する敵だ。
しかし、一方でキリヒトは敵にはなれない。
どこまでもお人よしで人間の味方であろうとするあの男では無理だ。

故に、疑念を抱かれればストレスが蓄積する。
いずれ感情も爆発していくことだろう。

「――――何、を。している……の」

この少女さえいなければ。

イレン・フェアシーデン。
彼女は、普通の人間とは違う思考形態を持つ。
キリヒトに対し、絶対的に服従の意を示している。
仮に六条有珠がキリヒトに疑念を抱いたとしても、
彼女だけはそうすることはないだろう。

ただ一人でも、キリヒトに疑念を抱くことのない人間がいては、
私の計画は水泡に帰する。それではだめだ。

既に寝付いているはずのこの時間帯を狙って行動に移したのだが、
流石に、これだけの長時間部屋を開けていれば、嫌でも気付くか。

間違いなく、イレンはキリヒトへ報告を行うことだろう。

別段、焦った風も無いように装い、私は返答するべく口を開く。

「なに、私は私で独立して動いているという、それだけの話だ。
この件にキリヒトは一切関与していない」

「……危害、を」

誰かに危害を加えたのではないか？
あるいは、キリヒトへ危害が加わる可能性があるのではないか？

恐らくは、そういったことを聞いてきたのだろう。
とはいえ、私はキリヒトではない。彼女の言葉は、
断片的すぎていまいち分からないのだが。

「身体的にキリヒトに危害は加わらん。
それに、そもそも私の存在は知れ渡っている。
私が外に出ている場合にかかってこい、ということを言ったまでだ」

「……信用……でき、ない」

「信用してもらう必要も無い。私は私の信念に基づいて行動している。
誰かに信用してもらえなかろうとも、興味は無い」

重要な部分を語りさえしなければ、計画に支障はない。

「……」

恐らくは、これ以上会話をしても有益な情報が得られないと解釈したのだろう。
私の言葉を聞いたその直後、少女はその姿を消した。

「ふむ」

やはり、厄介なのはイレン・フェアシーデンだ。
次いで、イレギュラーである六条有珠。
その次にキリヒト本人だが、これに関しては保留としよう。
私がこうして表側に出ている間は、奴の意識は封殺されている。
あとは精霊・スズくらいのものだろう。

懸念となるのは、万丈目準、原麗華などの、学もありどこか感覚の鋭い人物だ。
彼らは、私の敵……障害となりうる。

いずれにせよ、対処すべきだということには変わりない。

――――私が、この肉体の所有権を奪取するためには。

2023

49束目：暗躍（後書き）

そんなわけで厨二病な男が動き始めました。

以前サイダーはオリキャラには持たせないと予告しました。
が、すみません。ありゃ嘘でした。
原作キャラの誰が持ってて安全かつ順当であるかを考えたのですが、
私の微生物並みの脳みそでは思い浮かぶはずもなく、
結局ああなってしまいました。お詫び申し上げます。

さて、毎度のことではありますが、
こいつが動くとどうにも全体的に雰囲気が暗くなっていくと言うか。
全体的に、どうにも暗い場所で戦っている感があります。
実際、今回の舞台も前回の舞台も、深夜での戦いでしたが。

さて、しかしながら、一年の後半から登場しているあの男ですが、

2024

実際にその設定はかなりブレたり曖昧だったりします。そこで、色々とブレブレな厨二病の基本設定から少し話していこうかと思います。

当初は御堂の側面を押し出したキャラという位置づけでした。
今回の話の上でも少し語られていますが、
セブンスターズの決戦の際に消失したと思われていました。
が、実際には深層意識の中で生きてました、ということです。

と、ここで現在の状況につながってくるのですが、
基本的に奴は利己的かつ打算的ですので、
常に自分の利を考えて様々な行動を起こします。
今回の目的は完全にアレです。

戦法も、描写的には少々悪辣です。
心理フェイズに長けており、いくらでも小細工します。
また、劣等感をバネとして、逆にそれを利用する手が得意となっています。
これに関しては、「引きが弱い」部分を手札交換を多用して補ったり、
あるいはドローカードを多用したり、わざと追い詰められたり、
といった行為が当て嵌まるかと思います。

デッキに関しては、基本的に【A・O・J】を。
今回以降は【裏サイバー流】を使用していくこととなります。
デッキ内容に関しては、次回以降と言うことで。
正直に言えば、F・G・Dはこのための伏線でした。

ともあれ、以上余談でした。

あ、次回エドＶＳ十代です。

やっとＤ－ＨＥＲＯ書けます。あとネオス。
十代のデッキが回しやすくなったよー（

毎度のことですが、どこかしら間違いがありそうです；
そういった部分を発見されたらご一報いただけると非常に助かります。

50束目：新鋭

普段通りの時間に目が覚めたはずなのに、
妙に眠気が取れず、疲れがとれていない。

よくある話と言えばその通りだが、
昨日、疲れのためか、俺は9時前には就寝したはずなのだ。
8時に起床したとしても、睡眠時間は11時間。
おかしい。何故こんなにも疲れが取れないのか。

「……」

「どうした？」

訝しげな視線を向けるイレンに、俺はそう問いかける。
が、返事は無い。いつものことと言えばそうだが、
どことなく様子がおかしいようにも感じられる。

『ふあ……おはようございます、カズマさん……』

俺が起きたことに気付いたのか、
ふわふわと中空に浮きながらスズが言う。

「ああ、おはよう」

精霊が見えないような人間から見れば、
何もない空間に話しかけている今の俺は、
非常に「キケン」な人物なのだろうが……まあ、
俺以外に、他の人間がいないのだから、問題は無いだろう。たぶん。
いつものことだし。

さて、今日は何をしようかな――。
そう考えて部屋の扉に手をかけた、その瞬間。

ドバァン！！　という轟音と共に扉が開き、全身に強烈なまでの衝撃が走った。

「ぐあぁぁぁぁッッ！！？」

「大変ッスよ御堂君！！　アレ！？　御堂君が大変だ！！」

「お、おま……俺の部屋に来る度に俺を負傷させる気か……！？」

毎度のように扉を思い切り開くのはやめてくれ。
俺の体がもたないこともそうだが、
いつか扉が粉砕されるんじゃなかろうか。

「何なんだ、突然……どうしたんだ、いきなり大変だなんて」

「あ、そうだ！　そうだった！
大変なんだよ御堂君！　さっき、学校の方から通告があって、
学校とレッド寮のそれぞれの代表者がデュエルして、
僕たちが負けたら、レッド寮が取り壊しだって！」

「え？　え？　え！？　な、なんだって！？」

早口でまくし立てるようにして言っているせいか、
単語の一つ一つを理解しづらい。

……ただ、急を要するということだけは理解できるのだが。

「……ええと――ああ、だいたい分かった。
で、相手は誰だ？」

「それが……相手が、あのエド・フェニックスなんだよ！」

エド・フェニックスが相手。
そして――レッド寮の存続。

やっと頭が回って来たのか、ようやく理解できた。
つまり、ようやくそのタイミングがやってきた、ということか。
3度目のエドと十代との対決の時が。

「十代は？」

「まだ帰ってきてないよ！」

「だと思ったけどな……」

「だったら何で聞いたのさ！？」

「確認だ。それで、今は誰が向かってる？」

「今は、万丈目君が……」

だったら、とりあえずは大丈夫だろうが……。

「十代が戻ってくるまで、絶対にエドとは戦わないでくれ」

「な、何で!?　ていうか、アニキが戻ってくる保証なんて……」

確かに、十代が今すぐに戻ってくるような保障など無い。
だが。いや、だからこそ――。

「お前は十代の弟分なんだろ？
だったら、十代を信じてやれ。戻ってくる、って。
あいつなら、絶対に間に合うって」

「……」

「早くデュエル場に行ってくれ。
俺は、十代が間に合うように手を打っておく」

俺の言葉に対し、翔は、不服そうにしながらも頷いた。

――さて。

軽く息をつき、立ち上がる。

デュエルに関しては、十代に劣る俺は完全にお荷物でしかない。
が、できないことがないというわけではない。

デュエルでお荷物だというなら、
もっと別な方面で行動すればいいだけの話だ。

時間を稼ぐ。今は、ただそれだけしかできない。

＊　＊　＊

デュエル場にたどり着くと、そこには既にいつものメンバーが集まっていた。

中央のステージで対峙するのは、万丈目とエド。
まだデュエルは始まっていないらしく、睨み合うのみにとどまっているようだ。

「お前は――」

俺の姿を認めたのか、エドが呟いた。

エドと会うのは、これで2回目だ。
最初の接触の際には、それほど脅威という認識を与えずにいた。
しかし、エドの視線からは、明確な警戒と敵意が滲みだしている。

斎王に俺の存在の危険性でも示唆されたのだろうか。
いずれにしても、俺のことを知っているのならば都合がいい。

「久しぶりだな、エド。万丈目、デュエルはまだ始めてないな？」

「ああ……だが、俺はいつでも戦える。
十代を倒したエドが相手だ。油断も無い……！」

そのあたりは理解している。
万丈目は時に十代をも凌駕するだけの能力を見せるし、
状況次第ではエドにも勝てるとは思う。

だが――それも、万丈目がエドの、
ひいてはＤ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）の情報を得ていてこそだ。
これまでにエドの使ったものだけでは、情報が少なすぎる。

俺の持つ情報を預けられればそれでいいのだろうが、
この状況では対策を立てるための時間が足りない。

となれば、最も有利なのは――間違いなく、十代だ。

エドが十代の新しいデッキへの対策を立てるには時間がかかる。
となれば、十代の勝率は必然的に上昇する。
情報アドバンテージ、というやつだろうか。
俺や六条であれば知っている情報を、エドは知らない。
付け入る隙は、そこにある。というかそこしかない。
プロ相手に戦術で勝て、など無茶もいいところだ。

「悪い、万丈目。今回は……今回だけは、退いてくれ」
「……何故だ？」

何かしら事情があると踏んだのだろう。
エドに聞こえないようにとの配慮か、小声で万丈目が聞き返す。

「次回以降は任せられる。けど、今回だけは十代がやらなきゃいけないんだ」
「だが、十代はいない。――俺がやるしかないだろう」
「憶測でしかないが……多分、十代はすぐにでも帰ってくる」

「確証があるのか？」

「無い。それに、多分その気になればお前もエドに勝てると思う」

――だけど。

「十代がトラウマを乗り越えるのは、このチャンスしかない」

あいつは、友情に篤いくせに、妙な部分でドライな人間だ。
そのくせ、変なところで神経質で繊細だ。

今回、戻ってきた瞬間は元気なことだろうと思う。
ただ、仮にエドに敗北したらどうなる？

以前の症状がぶり返す可能性だって、無いわけではない。

そもそも、エド以前に「誰かに敗北する」という、
それだけのことで症状がぶり返す危険性もあるんだ。

となれば、この場でどうにかしておかなければならない――と、思う。

「……好きにしろ。だが、間に合わなければ俺がやる」
「順当な判断だな。……ありがとう」
万丈目と入れ替わるようにして、ステージの中央に立つ。
……と、訝しむように、エドが視線を向けた。
「……どういうつもりだ？」
「いいや、いくつか忠告しておこうかと思ってさ。
まず一つ。お前はこの学校にはもう楽しみは無いと、
そう思ってるようだが、実際はどうだろうな？」
「この学校で最も強い人間が十代なんだろう。
だったら、僕がここにいる意味は……一つしかない」
確か、親の仇を見つける――だったっけ。
ただ、こんな場所で見つかるわけはないと思うんだが。
「それは早計だな。確かに十代は強いけど、
あいつに肩を並べる人間が、ここにいる」

と、俺は万丈目を指さす。

何も間違ったことは言ってない。

繰り返すが、何も間違ったことは言ってない。

実際、３年の元双璧が吹雪さんとカイザーだったように、

今のアカデミアの双璧は十代と万丈目の二人だ。

次点で三沢、明日香なんかが入るが、

俺はその二段階下くらいだろうか。完全に余談だが。

「それに――俺はＨＥＲＯ（ヒーロー）を使う」

「……お前もだと……？」

「ああ。十代と同じ、Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）……。

だけじゃないな。まあ、これはいい。

……十代以外にも、お前が潰すべき敵がいるって、それだけの話だ」

「……」

当然、この学校の中で名実ともに最強なのは十代だ。

しかし、相性次第では――もしかすると、俺でもエドに勝てるかも

しれない。

問題となるのは、この「かもしれない」という点だ。
エドはＤ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）が最強だと信じている。
最強であるなら、相性など覆して当然のはずだ。
そう考えるからこそ――戦わねばならない。
戦って、勝って、証明しなければならない。

「……そうじゃなくても、十代はすぐにお前の前に姿を現す」

「何……？　どういう意味だ。
奴は僕が完膚なきまでに叩き潰した。
僕が上だということは、既に証明されたはずだ！」

「プロのくせに、たった一度の勝利で上下を語るな。
本当に自分の方が『明らかに』上だって言うなら、
情報アドバンテージに頼らなくても十分勝てたはずだ」

ちなみに現状、俺と十代との戦績は１０２戦９勝９３敗だ。
きっちり記憶している俺も少々アホらしいが、
それでも、絶対に勝てない――勝ったことが無いわけじゃない。

俺の場合、偶然にも戦法と手札がかみ合った時限定で十代に勝てるのだが、
その確率も殆ど無いというのが現状だ。

閑話休題。

「別に、小細工しろって言ってるんじゃないが、
そこまで自信があるんなら、最初から隠さずに戦えばいいじゃないか。
それとも――奇襲的に使わなきゃ、倒し切る自信が無いのか？」

「そんなわけはない！！
Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）は最強のＨＥＲＯ（ヒーロー）だ！
小手先の技術に頼らなくても、十代ごとき、倒す自信はある！」

「ごとき……ね。その十代に小手先の技術で勝ったのはどこのどいつだ？」

にやにやと、怒りを煽りたてるようにして、
エドに対して次々と疑問を投げかける。

「斎王に聞いたぞ。
お前こそ、似たようなことをしているんじゃないのか！？」

「いや、だって俺弱いもの。
弱けりゃ小手先の技術使うのも普通じゃないの？」

「屁理屈を……！！」

「理屈は理屈だ。それにお前自身、
小手先の技術に頼らなくても――って言っちゃってんじゃねーか」

アレは完全な失言だったのではなかろうか。

「それより――――」

タッ、タッ、タッ、と。
入り口付近から聞こえてくる足音が、徐々にその大きさを増していく。

「――――真打、登場だ」

バァン！　と、大きな音を立て、扉が開く。
そこから姿を現すのは――赤い服を着た、一人の少年。
――主人公（ヒーロー）は、遅れた頃にやってくる。

その言葉を体現するかのように、遊城十代が、その姿を現した。

「……十代……！？」

「ぜぇ、はぁ……へ、へへ……よお、皆！
悪い、遅れちまったな……！」

「アニキ！」

「アニキザウルス！！」

全く関係ないが、
その言い方だと「アニキザウルス」という新種に聞こえてならない。

「今まで何してたのさ、アニキ！」

「じつはさ、海を漂流してたら新しいＨＥＲＯ（ヒーロー）デッキに出会ってさ！」

「新しいＨＥＲＯ（ヒーロー）デッキ……？」

「その前に十代、まず何故海を漂流していたらデッキと出会うんだ。
まるでわけがわからんぞ！」

万丈目の指摘も最もだ。
健常者ならここで精神病棟にブチ込むことを考えることだろう。

「い、いや、流石に俺だってわかんねぇよ！
でも、こいつらのおかげで、俺も立ち直れた……！」

「ってことは、カードも見えるようになったんだね！？」

「ああ！　もうバッチリさ！」

何故バッチリになったのか、その説明も欲しいところだが、
こいつのことだから説明なんてさっさと省くんだろう。きっと。
というか、俺たちでは理解できない説明をするに違いない。

「なあ、スズ、言ってる意味分かるか？」

『……も、申し訳ないんですけど、分からないです……』

そりゃそうだ。俺がわからないのに分かるはずもない。
精霊の話だから、もしかしたら……とは思ったが。

「……ふざけるな！」

――と、直後、エドの怒号が響き渡る。

「新しいＨＥＲＯ（ヒーロー）デッキだと……？
Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）に勝るＨＥＲＯ（ヒーロー）など、地球上には存在しない！」

「だったら、もう一度試してみようぜ、エド！
俺は、もう一回お前と戦いたい！」

「……フッ」

「って、あ……悪い、万丈目。お前の番、だったけ？」

「お前が来れば、交代する。御堂とそんな賭けをしていた。
……構わん。が」

そう言って、万丈目は十代に拳を突きつけ――。

「必ず勝て。でなければ、この俺が降りた理由にはならん」

同じように、十代もその拳に自らの拳を当てた。

「――ああ！」

……なんというか、頼もしいことこの上ないな。

そんなことを考えていると、どこか嬉しげなクロノス教諭の姿が見えた。

「――それでは、これからデュエルを始めるノーネ！」

「ああ！　行くぜ、エド！」

「来い、十代！」

「「決闘（デュエル）！！」」

こうして、二人の――ある意味、因縁とも言えるデュエルが始まった。

「僕のターンからだ。ドロー！
《Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）　ダイヤモンドガイ》を攻撃表示で召喚！」

【《Ｄ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）　ダイヤモンドガイ》　攻　１４００　／　守　１６００】

「ダイヤモンドガイのエフェクト発動！
デッキトップを確認し、通常魔法（マジック）カードだった場合、セメタリーへ送る。
デッキトップは《終わりの始まり》！　よって次のターン、《終わりの始まり》のエフェクトを発動する！」

あんにゃろう1ターン目からあっさりとトンデモ効果予約しやがった。

しかも、全体除去でもなんでもなく、現在の状況に即した3枚ドロー。

ダイヤモンドガイの効果はそもそもコストを必要としないから、実質的にアドバンテージは3つ。

……これだからDドロー持ちは！！

「更に、僕は《幽獄の時計塔》を発動！」

瞬間、場に巨大な時計塔が姿を現した。

十代を敗北に追いやったカード――。

この場で出してくるとは、奴も最初から本気でやる、ということか。

「僕はカードを2枚セットし、ターンエンドだ」

「よっし、俺のターンだ！　ドロー！」

果たして、十代は気付いているだろうか。

Ｄ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）はそもそも戦闘能力が低いカテゴリだが、

ダイヤモンドガイに関しては、あれでも下級モンスターの中では、

最も高い攻撃力を有しているモンスターだ。

しかし、一般的な能力を持つモンスター……、

更には、リクルーターにすら相討ちにされてしまう程度であるとも

言える。

それを攻撃表示で出したということは、

何かしら対策ができている、ということを意味している。
このスタンバイフェイズ、時計塔にカウンターも乗った。
あと3ターン――早ければ次のターンにでも、
エドがドレッドガイを出してくる可能性はある。
まだモンスターが出揃っていない関係上、可能性は低いが。

「うっし……早速行くぜ！　俺の新しい仲間！
来い、《N（ネオスペーシアン）・アクア・ドルフィン》！」

【《N（ネオスペーシアン）・アクア・ドルフィン》　攻　６００／守　８００】

十代の場に現れるのは、四肢をもつ青いイルカ。

……そう。イルカである。

かのイルカだ。

顔はイルカ。筋肉質の肉体。というよりむしろマッチョ。
何故か、そんな外見に似合わず瞳はキラキラと輝いており、
その声も妙な爽やかヴォイス。台詞も爽やか。

各方面から「キモい」と言われ続けるあのカードである。

「N（ネオスペーシアン）……それがお前の新しい力か」

エドの言葉に肯定も否定もせず、十代は笑みを浮かべる。

精霊を仲間と考えている十代としては、
力であることを否定したいが、しかし、力であることに変わりない。
そう認識しているがゆえに、ああいった対応を取らざるを得なかったのだろうか。

「手札の《E（エレメンタル）・HERO　ネクロダークマン》を捨て、
アクア・ドルフィンの効果を発動！」

「……！？」

ちょっと待て。
今の状況でその効果を使うなんて、博打もいいところだ！

確かにD（デステニー）－HEROは、
基本的に攻撃力の低いモンスターが多いものの、
アクア・ドルフィンの攻撃力より以下の攻撃力を持つものは、
禁止級の効果を持つディスクガイを除いても4枚しかない。

使用できないものを除き、１４種類中の４枚。
更に、破壊できるカードが無ければ、無条件で５００ダメージだ。
――いや、あるいは、あのカードがあるのを見越して、か？

「相手の手札を確認し、モンスターカードを選択するぜ。
俺は、《Ｄ－ＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）　ダガーガイ》を選択！」

あったよ。やっぱりあったよ。
つーか十代、エドのカードのことなんて殆ど知らないじゃないか。
それを差し引いてもあれってどういうことだよ。

「選んだカード以上の攻撃力を持つモンスターが俺の場にいるとき、
そのカードを破壊して、相手に５００ポイントダメージを与える！
パルス・バースト！」

「くっ……！？」

迎撃の要とも言えるダガーガイを破壊されたのは、
ある意味で大きな痛手と言えるだろう。

回収手段が多いことを差し引いても、

手札誘発の奇襲効果を持つモンスターを失ったのは痛い。

「カードを2枚セットして、ターンエンドだ！」

「チッ……僕のターン、ドロー！
……十代、今回も僕が勝たせてもらう！
セメタリーに置かれた《終わりの始まり》の効果を発動。
僕はカードを3枚ドローする！」

……実質的にデッキ圧縮＋3枚ドローとか、
Dドローができる人間が使った場合に限り、
ダイヤモンドガイの性能チートにも程があるだろ常識的に考えて。

「あれ……？」

「どうしたんだ、翔？」

「確か、《終わりの始まり》って、
そもそも7枚闇属性モンスターが墓地にいて、
そのうち5枚除外しなきゃ発動できない……じゃなかったっけ？」

「確かにそうなんだが、それは発動するための『コスト』だな。
『～を……して発動する』って形式だ」

「でも、何で3枚ドローできたのさ？
コスト払ってないよ？」

「あれは『効果を発動できる』という形式だから大丈夫だったんだろう。
コストを支払う必要が無いカードはいくつか存在する。
《闇よりの罠》、《ジャンク・コレクター》がその代表例だろう。
これらのカードを用いれば、罠（トラップ）はコストを必要とせず発動できる。
……俺もよくは分からんが」

本当によく分からない。
まあ、ああいったカードがコストを無視できる、
ということだけでも覚えておけばいいだろうか。

正確なことは言えないが、
カードを発動するにはいくつかの段階があり、
まず「コスト」から始まることとなる。

これはカードの「効果を発動」するためのものであり、
この時点ではまだカードが発動しているとは言い難い。
このコストを乗り越え、初めてカードの効果は発動される。

そして、あれらのカードは、
言うなれば「効果」のみを抽出しているとも言えるかもしれない。

「伏せ（リバース）カード、《エターナル・ドレッド》を発動！

フィールドの《幽獄の時計塔》に、時計カウンターを2つ乗せる！」

一気に6時間分もその針を進める時計。
その針が刺す時刻は9時。――あと一つで、エドの準備は整う。

「ダイヤモンドガイのエフェクト発動。
デッキトップは《トレード・イン》！
次のターンに《トレード・イン》の効果発動を予告する！」

またドローカードですか。
アンタどんだけドローするつもりですか。
いや、俺が言うのも少しおかしな話だけど。

それにしたって、せめてキャリアとか鳳凰神の羽根、
天変地異とか魔導書整理とか、デッキトップ操作してください。
なんでごく当たり前のように引き込んでるんですか。

俺なんてちまちまコンボで稼いでるだけなのに。

ちくせう。

「僕は《二重召喚（デュアルサモン）》を発動。このターンの召喚権を一つ増やす。
そして、ダイヤモンドガイを生贄に――カモン！
《Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）　ダッシュガイ》！」

【《Ｄ－ＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）　ダッシュガイ》　攻　２１００／守　１０００】

「更に僕は《Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）　ドレッドサーヴァント》を召喚！」

【《Ｄ－ＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）　ドレッドサーヴァント》　攻　４００／守　７００】

……意外に早期の登場か。
となれば、この後の行動も――。

「ドレッドサーヴァントのエフェクト発動。
召喚に成功したとき、時計塔の針を一つ進める。
これで、僕への戦闘ダメージは全てゼロになる！」

「やべっ……！」

「ドレッドサーヴァント、アクア・ドルフィンに攻撃！」

自らアクア・ドルフィンの眼前に立ちふさがり、
その攻撃によって破壊されるドレッドサーヴァント。

時計塔の効果が発動している今、そのダメージはゼロ。
そもそも、攻撃力の差が２００だったことを鑑みれば、
さして意味が無かったとも取れるが――それはそれ。

重要なのは、ドレッドサーヴァントが戦闘破壊されることだ。

「ドレッドサーヴァントが戦闘で破壊されたとき、
僕のフィールドの魔法・罠（マジック・トラップ）カードを１枚破壊できる。
幽獄の時計塔を破壊！」

「……！」

「時計塔が破壊されたとき、幽閉された罪人が現れる。
カモン！　《Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）　ドレッドガイ》！」

【《Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）　ドレッドガイ》　攻？／守？】

デッキより現れる、屈強な肉体を持った罪人。
エドの――「第一の」切り札だ。

「ドレッドガイが特殊召喚されたターン、
僕のフィールドのＤ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）は戦闘では破壊されず、
戦闘ダメージもゼロになる」

確か、この効果はどんな特殊召喚にも対応していたはずだ。
リビングデッドで出せば、その場しのぎの壁にもなる……はず。

「そして、ドレッドガイのエフェクトはまだ続く。
幽獄の時計塔のエフェクトでの特殊召喚に成功した場合、
セメタリーのＤ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）を2枚まで特殊召喚できる。
カモン！　ダイヤモンドガイ、ドレッドサーヴァント！」

【《Ｄ－ＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）　ダイヤモンドガイ》　攻　１４００　／　守　１６００】
【《Ｄ－ＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）　ドレッドサーヴァント》　攻　４００　／　守　７００】

「ドレッドガイの攻撃力は、僕のフィールドのＤ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）の、
元々の攻撃力の合計によって決まる。よって、
現在の攻撃力は――３９００！」

「やべっ……！」

「ドレッドガイ、アクア・ドルフィンに攻撃！
プレデター・オブ・ドレッドノート！」

「こ、この攻撃が通ったら、アニキの負けドン！」

あ、フラグ立った。

「伏せ（リバース）カード、《和睦の使者》を発動するぜ！
このターンの戦闘ダメージを全てゼロにし、
更に、このターン中は俺のモンスターは破壊されない！」

「ふん……この程度は防ぐか。なら、
僕はダイヤモンドガイのエフェクト発動。
デッキトップは《死者転生》。セメタリーに送り、
次のターンに発動を予告する」

……ねえ、この子積み込んでるの？
それとも単に運が良いだけなの？
ちょっとお兄さん色々と気になるなー。

「僕はこれでターンを終了する」

「俺のターンだな。ドロー！
うっし、来たぜ！　墓地のネクロダークマンの効果を発動！
ネクロダークマンが墓地に存在する限り1度だけ、
『E・HERO（エレメンタルヒーロー）』を生贄無しで召喚できる！」

「ふん……エッジマンか何かか？
だが無駄だ！　その程度のモンスターでは――」

おい、今回どんだけフラグ乱立させるつもりだ。

「俺の仲間を馬鹿にするなよ！　――来い！
《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ネオス》！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ネオス》　攻　2500　／　守　2000】

十代の場に降り立つ、新たなHERO（ヒーロー）――。
基本にして様々な応用の効く、十代の新たなエースモンスターだ。

「な……ネオスだと!?　何だそれは!
僕の知らないＨＥＲＯ（ヒーロー）が、地球上に存在するはずが……」

「だーかーらー！　こいつらは宇宙から来たんだって言ってるだろ!?」

いや、それどう聞いてもデンパです。本当に以下略。

「行くぜ、ネオス！　アクア・ドルフィン！
コンタクト融合！」

「コンタクト……融合!?」

「来い、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　アクア・ネオス》！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　アクア・ネオス》　攻　２５００／守　２０００】

空飛ぶキモイルカ……いや、考えずにおこう。

いずれにしても――役者は揃ったと見るべきだろうか。
ある意味で、ここからが十代の本領だ。

「融合を使わない融合……すごいよアニキ！」
「うおおおっ、カッコイイドン！」

アクア・ネオスはどう見ても……やっぱいいや。
俺のセンスがおかしいものだと思われそうだ。

「アクア・ネオスの効果発動！　手札を1枚捨てることで、
相手の手札をランダムに1枚、破壊する！
エコー・バースト！」

「む……！」

十代の捨てた手札――《N（ネオスペーシアン）・フレア・スカラベ》に呼応するように、
エドの手札――《ダーク・シティ》が墓地へ送られる。

「へへ……アクア・ネオスでダッシュガイに攻撃！
ラピッド・ストーム！」

「くっ……！」

ダイヤモンドガイとドレッドサーヴァントが守備表示の今、
ダメージを与え、ドレッドガイの攻撃力を下げるのには最も適した
選択肢だろう。

次のターン、ダイヤモンドガイの効果を使われないとも限らないが、
それはそれとして置いておくべきか。

「おっし、俺はカードをセットして、ターン……」

直後、アクア・ネオスに異変が生じる。

異変――と言っても、それは当然のことだ。

モンスター効果。

その制約により、コンタクト融合体は1ターンしか場に留まれない。
強力な効果を持つが故の制約なのだろうが……。

「え、お、おい！　どういうことだよ!?
あれぇ!?　おーい、アクア・ネオス!?」

「あ……あの馬鹿、まさか自分のモンスターの効果を把握していなかったのか！？」

……多分、そのまさかなんだろう。
今までずっと歩きっぱなしだったから仕方ないと言えばそうだが、自分のカードを整理する時間くらいはあったはずだ。
その途中で自分のカードの効果くらいは把握しておくべきだろう。

「ふん……意気込んだ割には呆気ないものだな。
僕のターン、ドロー！　僕は前のターンセメタリーに送った、トレード・イン、死者転生のエフェクト発動！
カードを2枚ドロー、墓地のダガーガイを手札に加える！」

十代のターンのとき手札1枚だったのにもう5枚っすか。
なにこれこわい。

「万作尽きたな、十代！
ドレッドガイ！　ダイヤモンドガイ！　ドレッドサーヴァント！
十代へ直接攻撃（ダイレクトアタック）！！」

「うわあぁぁぁぁっ！！」

先程の攻撃でドレッドガイの攻撃力は削れているとはいえ、
ダイヤモンドガイ、ドレッドサーヴァントと合計し、
十代の受けるダメージは３６００――。

こんなにも早期にここまでのダメージを受けるとなると、
流石に厳しいものがあるだろう。

しかし――エドがダイヤモンドガイの効果を使わなかったのは何故だ？

あいつの引きなら、次にトドメを刺すカード、
例えば《ミスフォーチュン》のような直接火力が来てもおかしくはないのに。

「僕はカードを3枚セットし、ターンエンドだ」

いずれにしても、次の十代のターン次第――か。

５０束目：新鋭（後書き）

そういうわけでエドＶＳ十代の前編をお送りしました。

なんというか……原作まんまですね。
流れと言うかなんというか。

今回に関しては、我ながら少々難産でした。

というのも、そもそもこの対戦カードは当初の予定には無かったというのがあります。

この裏であの厨二病が鮫島校長相手にカツアゲしていた、という流れの後、十代ＶＳ御堂というカードを組む、という予定でしたので。

ぶっちゃけアレですね。
殆ど本編そのままやんというツッコミが入りそうです。
実際その通りなのですが。

私が短い期間で物語を組み立てようと思うと、
どうにも物語の部分部分が稚拙になってしまいまして……。
物書きになりたいと思っているのに、これでは……；

話を戻しまして、
この話を書こうと思った理由としましては、
以前某スレのやる夫がＤ－ＨＥＲＯを使っていた、というのがあります。
というかここまで遅れた理由の大半が、色々なとこ巡って、
二次創作系の物語を読んでいたら気付いたら翌日……だったのですが。

とりあえず、次回は十代ＶＳエドの決着編です。
また本編そのままになりやしねーかなーという不安を抱きつつ、
チートドローの本編メンバーに軽い虚しさを覚えて、本日はこのあたりで。

殆ど関係ありませんが、
ミニドラマを書いていたら短編並みの分量になりました。
番外編でもいいんじゃねえかこれ……；

改めまして、それでは。

51束目：紅焔

「俺のターン、ドロー！」

――そして、十代のターンが巡ってくる。
手札は1枚。伏せカード（リバース）は2枚。

対し、エドは4枚の伏せカード（リバース）を用意し、
場の状況も盤石。手札にはダガーガイを握っている。
この状況から巻き返すとなると、かなり骨が折れる――。

「へっ……俺はまだ、新しいデッキの底力をちっとも見せちゃいないぜ！」

ああも簡単に強がりを言ってのけるのは、良いのか悪いのか。
よっぽどの馬鹿か、あるいは大物か、どちらもか。
十代の場合、どちらもというのが当て嵌まりそうだ。

「《凡人の施し》を発動！　デッキからカードを2枚ドローし、手札の通常モンスターを1枚除外するぜ。
俺は《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　スパークマン》を除外！」

圧倒的な汎用性と融合素材としての使いやすさを誇るスパークマンが！
元々の十代のデッキにおいて重要と言えたスパークマンが！！

「俺の場にモンスターがいないとき、このカードを発動できる！
魔法（マジック）カード、《コンバート・コンタクト》を発動！
俺の手札、デッキから1枚ずつNEO（ネオスペーシアン）を墓地に送る。
俺は手札の《N・エア・ハミングバード（ネオスペーシアン）》、
デッキに眠る《N・グラン・モール（ネオスペーシアン）》、
この2枚を墓地に送り、2枚ドロー！」

手札交換＋墓地肥やし――。
場にモンスターがいないという状況でしか使えないが、
この状況でならば、ある程度は役に立つ……か？

「俺は《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　プリズマー》を召喚するぜ！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） プリズマー》 攻 1700 ／ 守 1100】

こいつのことを忘れていた。
そうだった。汎用性という面では、プリズマーは上の上もいいところ。
このカードさえあれば切り抜けることのできる局面すらあるという、色々な意味で奇跡的とも言えるカードだ。

「プリズマーの効果を発動！
エクストラデッキの融合モンスターを公開して、その融合モンスターの素材を墓地に送る。
俺は《E・HERO（エレメンタルヒーロー） アクア・ネオス》を選択！
《E・HERO（エレメンタルヒーロー） ネオス》を墓地に送るぜ」

この場面でネオスを墓地に送れるのは重要だろう。
通常モンスターであるがゆえに、蘇生手段は豊富だ。
手札か、あるいは既に伏せ（リバース）カードとして仕込んであるか――。

しかし、エドの手札にはダガーガイがある。
仮にドレッドガイに攻撃を加えれば、返り討ちで即退場。
他のモンスターに攻撃しようと思っても、４枚の伏せが恐ろしい。

仮にあのカードの中に《Ｄ－チェーン》が存在していたら、
迎撃され、５００の効果ダメージを受け、十代は敗北する。
となると、十代はどう動くのか……。

「よし、行くぜ！　プリズマーでドレッドサーヴァントに攻撃！」

「ふん……《Ｄ－シールド》発動！
『Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）』が攻撃対象にされたとき、
装備カード扱いとしてこのカードを装備。そして、
装備モンスターを守備表示に変更し、戦闘での破壊を防ぐ！」

……ここでＤ－シールド――？

使うならダイヤモンドガイではないのだろうか。
ドレッドガイは、ある程度墓地にあっても問題は無い。
むしろ、リビングデッドの存在を考慮すれば、あった方が都合がいい。

それに、そもそもドレッドサーヴァントの効果は任意効果だ。
破壊されようとされまいと問題は無いし、
１３００程度のダメージなら容易に挽回もできるはず。

「伏せ（リバース）カード、オープン！　《正統なる血統》！

墓地の通常モンスターを攻撃表示で蘇生する！
甦れ――ネオス！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） ネオス》 攻 2500 ／ 守 2000】

「もう一回だ！　ネオスでダイヤモンドガイを攻撃するぜ！」

「伏せ（リバース）カード、《D－カウンター》を発動！
『D－HERO（ディーヒーロー）』に攻撃を加えたモンスターを破壊する！」

出てきたと思ったら即退場か。
今回嫌に不遇だな、ネオスは。

しかし、D－カウンターがあったから、D－シールドを使ったのだろうか。
特に意味は無いような気もする。というより、
あの場面ではダイヤモンドガイを守った方が、
後々の展開のためにはなるはずだろう。

そうなると、何かしら意図があると見えるが……。

「くっ……カードをセット、ターンエンドだ！」

「ふん、これで力の差が分かっただろう……！
僕のターン、ドロー！　ダッシュガイが墓地に存在するとき、
ドローしたモンスターをそのまま特殊召喚できる！
カモン！　《Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）　ドゥームガイ》！」

【《Ｄ－ＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）　ドゥームガイ》　攻　１０００／守　１０００】

俺は今、素晴らしい積み込みの姿を見た。
要するに、次のドローでドゥームガイが手札に来ると、
あるいはデビルガイなんかのモンスターが手札に来ると分かっていたのか。

積み込みとか予見とかいうレベルじゃねーぞ。

「《デステニー・ドロー》を発動。手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）』、
ダガーガイをセメタリーに送り、デッキからカードを2枚ドローする」

誰かこの男を止めてください。

「そして《Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）　ダイハードガイ》を召喚！」

【《Ｄ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）　ダイハードガイ》　攻　８００　／　守　８００】

「伏せ（リバース）カード、《因果切断》を発動。
手札の《オーバー・デスティニー》を墓地に送り、お前の場のモンスター、
プリズマーを除外する！」

突如、背後に現れた時空の裂け目に飲み込まれていくプリズマー。
……除外系統のカードは、やはり強力だ。

「……終わりだ！　とどめを刺せ、ドレッドガイ！
プレデター・オブ・ドレッドノート！！」

「くっ……相棒、頼む！！　《クリボーを呼ぶ笛》を発動！
デッキから《ハネクリボー》を守備表示で特殊召喚する！」

【《ハネクリボー》　攻　３００　／　守　２００】

『クリィ～！！』

「チッ……ドレッドガイ、その雑魚を薙ぎ払え！」

ハネクリボーの守備力は２００。
対し、ドレッドガイの現在の攻撃力は、３４００。
破壊されるのは当然。だが――。

「ハネクリボーの効果を発動！
ハネクリボーが破壊されて墓地へ送られたとき、
このターン、俺の受ける戦闘ダメージは全てゼロになるぜ」

「……ターンエンドだ」

「……俺のターン――ドロー！」

さっきから、十代は異様なほどにピンチなわけだが、
今度は手札も場も完全な空。

……さて、こうなると、もう結果は、なんとはなしに理解できる。

――反撃開始だ。

「俺の手札がこいつ1枚だけのとき、場に特殊召喚できる！
来い、《E・HERO（エレメンタルヒーロー） バブルマン》！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） バブルマン》 攻 800 ／ 守 1200】

守備表示で場に特殊召喚されるバブルマン。
その特殊能力は――。

「更に、バブルマンの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功したとき、
場と手札にこいつ以外のカードが無い場合、カードを2枚ドローできる！」

こういう場面でバブルマンを引き当てるのが、十代の強みだ。
……なんて考えてたら、本当に引き当てやがった。
あいつは何なんだ。化け物か。

「魔法（マジック）カード、《コクーン・パーティ》を発動！
俺の墓地の『N（ネオスペーシアン）』の数だけ、デッキから『C（コクーン）』を特殊召喚できる！
3枚の『C（コクーン）』を特殊召喚するぜ！　来い、
《C（コクーン）・ピニー》、《C（コクーン）・ドルフィーナ》、《C（コクーン）・チッキー》！」

【《C・ピニー（コクーン）》　攻　１００　／　守　７００】
【《C・ドルフィーナ（コクーン）》　攻　４００　／　守　６００】
【《C・チッキー（コクーン）》　攻　６００　／　守　４００】

次々と現れる、繭に身を包まれた小動物。

ご丁寧にも、その守備力は全て、ドレッドサーヴァントと互角かそれ以上。

――つまり、ドレッドサーヴァントを場から外し、その上で上級モンスターなどを召喚しなければ、エドは十代にとどめを刺すことができない。

「カードをセット。……ターンエンドだ！」

「所詮は綱渡りだな。僕のターン、ドロー！」

カードを確認したエドの表情が曇る。

どうやら、狙ったカードを引き当てられなかったようだ。

……とはいえ、ドレッドサーヴァントを攻撃表示にすれば、それだけで十分に十代のライフは尽きる。

それができないのは――あの伏せカードの存在があるからこそだろう。
仮に、アレが全体破壊系の……《聖なるバリア―ミラーフォース―》だったら？
そうやって考えていくと、戦闘破壊耐性を持つドレッドサーヴァントを、
なんとしてでも残しておきたいと思っているのではないか……と思う。
俺はエドではない以上、それは断言できないわけだが。

「ふん……だが、これでお前の場にモンスターはいなくなる！
ダイヤモンドガイ、バブルマンに攻撃しろ！」

「そいつを待っていたぜ！
伏せカード（リバース）、《アルケミー・サイクル》を発動！
エンドフェイズまで、俺の場のモンスターの攻撃力を全てゼロにする！」

「なっ……！」

ダイヤモンドガイの攻撃が、バブルマンを粉砕していく。
だが、その行動は――。

「……そして、この効果を受けたモンスターが破壊されて墓地へ送られるたび、
俺はカードを1枚ドローする！」

「くっ――！！」

破壊された十代のモンスターは1体。
つまり、ドロー枚数はたったの1枚。

だが、十代ならばそれでも十分だ。

故に――これ以上の攻撃はできない。
十分すぎるほどに十分。だからこそ、攻撃は躊躇される。
これ以上のドローを許せば、十代は何をしでかしてくるか分からない。

いや、今の段階でも既に何をしてくるか分からないんだ。
正直、エドと同じ状況に陥ったら俺は泣く。
進んでも戻っても地獄じゃないか。

「ここまで粘るとは、正直思わなかった。
いいだろう。十代！　僕の本当の切り札を見せてやる！
……ドゥームガイ、ダイハードガイ、ドレッドサーヴァントを生贄に、

カモン！　《Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）　ドグマガイ》！！」

【《Ｄ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）　ドグマガイ》　攻　３４００　／　守　２４００】

３体の生贄を要する、Ｄ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）中最大の攻撃力を持つモンスター。

その能力を有用に用いるには、早期に召喚することが最良の条件とはいえ、

この状況で召喚されても、十代の不利は揺るがない。

そして、その攻撃力も問題だ。

３４００。

絶妙と言えばそうなのだろうが、一般的に見れば、相当に高い数値だ。

そして、その攻撃力はドレッドガイに加算され――合計、４８００。

絶望的なまでの。圧倒的なまでの――差。

「ターンエンドだ」

「俺のターンだ、ドロー！」

「ドグマガイのエフェクト発動！
ドグマガイの特殊召喚に成功した場合、
次の相手ターンのスタンバイフェイズ、相手のライフを半分にする！
ライフ・アブソリュート！」
「くっ……！！」

これで、十代のライフは残り２００。

ドグマガイの恐ろしさは、このライフの半減能力にある。
序盤で召喚すれば、まず確実に２０００のライフを奪える。
８０００ルールならば４０００。

ライフアドバンテージは軽視されがちとはいえ、
一度や二度の攻撃でとどめを刺せることを考えれば、
その効果は十分に破格と言えるだろう。

ただ、「破格」なのは、十代も同様だ。

「――《貪欲な壺》を発動するぜ！　ネクロダークマン、フレア・スカラベ、
グラン・モール、ハミング・バード、そしてハネクリボー！
この５枚をデッキに戻し、２枚のカードをドロー！」

都合のいい時に都合のいいカードを引き当てる。
その上、この絶望的な状況にあってさえ、負けるとすら考えない。
本当、根っからの主人公気質だよ、あいつは。

「見せてやるぜ、新たなＨＥＲＯ（ヒーロー）の戦う舞台！
俺はフィールド魔法、《ネオスペース》を発動！」

フィールドカードゾーンにカードを設置したその瞬間、
場の情景が奇怪な――謎の空間へと移り変わる。
ネオスペース。新たな宇宙、あるいは空間と訳すのだろうか。
紫、青、桃、黄、様々な色が入り乱れた空間が形成された。

「俺は更に《Ｃ（コクーン）・ラーバ》を召喚！」

【《Ｃ（コクーン）・ラーバ》　攻　３００　／　守　３００】

「よし、ここで『Ｃ（コクーン）』たちの効果を発動！
ネオスペースが存在しているとき、テキストに記されているＮ（ネオスペーシアン）を、
『Ｃ（コクーン）』を生贄にすることで、デッキ、または手札から特殊召喚できる！」

一気にネオスペーシアン４枚展開か。
なんだこの展開は。二重の意味で。

「全ての『Ｃ（コクーン）』たちを成長させる！
《Ｎ（ネオスペーシアン）・グロー・モス》、
《Ｎ（ネオスペーシアン）・フレア・スカラベ》、
《Ｎ（ネオスペーシアン）・アクア・ドルフィン》、
《Ｎ（ネオスペーシアン）・エア・ハミングバード》、この４体をを特殊召喚！」

【《Ｎ（ネオスペーシアン）・グロー・モス》　攻　３００　／　守　９００】
【《Ｎ（ネオスペーシアン）・フレア・スカラベ》　攻　５００　／　守　５００】
【《Ｎ（ネオスペーシアン）・アクア・ドルフィン》　攻　６００　／　守　８００】
【《Ｎ（ネオスペーシアン）・エア・ハミングバード》　攻　８００　／　守　６００】

どうなってんだこれは。
１ターンで出せる布陣じゃないだろ、常識的に考えて。

「魔法（マジック）カード、《スペーシア・ギフト》発動！
俺の場の『Ｎ（ネオスペーシアン）』１種類につき１枚、デッキからカードをドローす

る。
　４種類場に存在しているから、４枚ドローだ！」
誰かこいつらを止めてください。
いや、止めたらマズいんだけど、頼むから止めてくれ。
Ｄドロー同士の勝負がどこまでのものかと思っていたのは確かだが、
ここまで心が打ちのめされるものとは思わなかった。
「そして手札から、《Ｏ－オーバーソウル》発動！
墓地の通常モンスターのＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）を特殊召喚するぜ！
甦れ、ネオス！！」
【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ネオス》　攻　２５００／守　２０００】
ネオスさんお疲れ様です。
あの言動を知っているだけに同情はしにくいけど。
これでこのデュエル中に召喚された回数は3回か。
これ以上増えるようなら過労死も覚悟しなければならないだろう。

「そして――ネオス！　フレア・スカラベ！　コンタクト融合！
現れろ、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フレア・ネオス》！！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フレア・ネオス》　攻　２５００　／　守　２０００】

瞬間、十代の場に現れるのは、
火炎をその身に纏った、甲殻を有すネオスの進化体。

その能力は、状況次第では凶悪の一言に尽きる。
――そのはずだが。

「フレア・ネオスの攻撃力は、互いの場の魔法（マジック）・罠（トラップ）カード１枚につき、
４００ポイント上昇する。更に、ネオスペースは、
ネオスとその融合体の攻撃力を５００ポイント上昇させる。
つまり、攻撃力は３８００だ！」

ネオスペースとエドの伏せカードの分、攻撃力が上昇。
しかし――問題は、あの伏せカードの存在か。

全体破壊。それも可能性としては十分にありうる。

戦闘補助。同じく。
他の可能性は――はて、どうなることか。

「《アサルト・アーマー》を発動するぜ！
こいつをネオスに装備し、攻撃力を３００ポイントアップさせる。
その前に、俺はもう一つの効果を発動させてもらうぜ！
このカードを墓地に送ることで、フレア・ネオスは２度の攻撃を可能とする！」

戦士族モンスターにのみ装備可能な、連続攻撃を可能とするカード。
……アレ、欲しいんだけど持ってないんだよなぁ。

なまじネオスが描かれているせいか、一般に流通していないとか。
それなら《ネオス・フォース》もそうなんだが、
あちらはあちらでネオス専用だから、どうしようもない。

閑話休題。

「そして――カードをセット」

このセットカードにより、フレア・ネオスの攻撃力は４２００となる。

これで、十代の場はおおよそ揃ったか。
となると――決着をつけに行くつもりだろう。

「……バトル！　フレア・ネオスで、ダイヤモンドガイを攻撃！
バーン・ツー・アッシュ！！」

「ぐうっ……！！」

放たれる火球が、ダイヤモンドガイを打ち砕く。
攻撃力の差は２８００。
よって、エドの残りライフは――７００。

エドは――笑っている。
嬉しそうに、楽しそうに――新たなＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）の登場に、
心踊らされたかのように、笑っていた。

「そして、アサルト・アーマーの効果により、もう一回攻撃だ！
フレア・ネオス！　ドグマガイに攻撃！！」

「く……ッ！！　《スキル・サクセサー》を発動！
このエフェクトにより、ドグマガイの攻撃力を４００ポイントア

ップ！
そして、お前のフレア・ネオスの攻撃力も下がる――！
迎え撃て、ドグマガイ！　デス・クロニクル！！」

紫電を纏う光弾と、フレア・ネオスの放つ火球がぶつかりあう。
攻撃力はまったくの互角。
で、あるからこそ――その攻撃は、互いの身をむしばんでいく。
結果は、相討ち。

そして――ドレッドガイの攻撃力は、ゼロになる。

「行くぜ、エア・ハミングバード！　ドレッドガイに攻撃！
ホバリング・ペック！」

「く……うわああっ！！」

ドレッドガイの破壊の余波が、エドへと向かう。
そのダメージは、残りのライフポイントを超える――８００。

ダメージが確定したその瞬間、ブザーが響き渡り、このデュエルは

終了した。

レッド寮の存続――そして、エドと十代、二人のプライドを賭けた勝負も。

＊　＊　＊

「……僕の負け、か」

どこかさっぱりとした表情で、エドが呟く。

清々しい――あるいは爽やかな。憑き物が落ちたかのような。そんな形容がそっくりそのまま当てはまるような表情だ。

「ああ、だけど、もしかしたら俺が負けてたかもしれねえ。……楽しかったぜ、エド！」

「そうだな。僕も――新たなＨＥＲＯ（ヒーロー）の登場は、楽しませてもらった。

久しぶりに、ワクワクしたよ」

だが、とエドはもう一度十代を見据える。

「負けたのは僕であって『Ｄ－ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）』じゃない。
そこのところを、理解してもらわないと困る」

「……？　そういうのは、どうでもいいんじゃねえのか？」

「どういうことだ？」

「どっちが上とか、どっちが下とか、そんなの関係ないだろ？
楽しいデュエルができたヤツの勝ち！　それでいいじゃねーか！」

「ふ……ふ、はは、あははは！
そうだな、ああ、確かにその通りだ！」

底抜けに明るい――大物なのか馬鹿なのか。
どちらにしても、あいつはそれほど裏表がない性格なのは、目に見えて分かる。
今回は――それが功を奏した、のだろうか。

「それにしても、ついさっきまで対戦してて、
その上エドの方は完全に敵対してたってのに、
もう仲良くなってるドン」

「それもアニキの美点なんじゃない？
基本的に、誰とでも仲良くなれるって」

基本的に……ね。
一部度が過ぎてとんでもないことになってるのもいるが。
具体的には宇宙から戻ってきたアレなんだけど。

「しかし……対照的だな、あの二人は」

ふと、万丈目が呟き、向かい側へと視線をやった。

ナポレオン教頭が悔しがり、クロノス教諭が思い切り体で喜びを表現している。

あ、ナポレオン教頭が殴り掛かった。
クロノス教諭がクロスカウンターを仕掛けた。
同時に頬に拳が突き刺さり、二人ともがその場に崩れ落ちる。

ダブルＫＯォォォ！

「……誰か鮎川先生呼んで来い」

「……了解だドン」

頭の中で実況なんかしているうちに、万丈目が的確な指示を出していた。

いやあ、あいつは有能だなあ。本来そういうの俺の役目なんだけど。

「しかし――」

これで、確実に斎王から目をつけられることになる。

白の結社の勢いも増し、窮地に立たされることもあるだろう。

いや、むしろその可能性は高い。

だったら、どうするか？

既に答えは決まっている。あの案件を進めていくしかない。

始動は、結社が動き出すよりも早く。

目的は――――「敵」を、叩き潰すこと。

「……」

生ぬるいことは言っていられない。
奴らの存在が、俺たちを脅かすというのなら。
――それこそ、全力で。完膚なきまでに叩き潰す。

説得。同情。あるいは疑惑を投げかけること。
それらはすべからく主人公（ヒーロー）のすべきことだ。

俺のような半端者がヒーローの真似事をしても、
中途半端に終わってしまうか、あるいは事態を引っ掻き回してしまうだけだ。

ならば――徹底的に。

悪意に対しては悪意を以て。
目には目を、歯には歯を。
数で学校を制圧しようというなら、同じだけの数を用意して対抗しよう。

どうせ十代はことが起きるまでは動かない。
いや、ことが起きても動かない――静観していることだろう。

あるいは、嫌でも動き出すように仕向けることもできる……かもしれん。

――――いずれにしても、これから、ということか。

51束目：紅焔（後書き）

非常に遅れて申し訳ありませんでした。
それもこれもＴＦ６と乾巧ってやつのせいなんです。
おのれディケイド。

すみません。しかしＴＦ６やってたのは本当です。
何故私は４人同時攻略などという暴挙に出たのでしょう。
未だに一人たりともクリアできてません。

まず何よりデッキを合わせることに時間がかかり、
デッキを合わせようとしたところで他に面白いデッキがあることに気付く。
その後、フリーデュエルでＤＰを稼ぎ、別のデッキを更に作る……。

ええ、泥沼です。間違いありません。
こんなだから私はいつまでもダメなんでしょう。

ＰＳＰやってて声真似で「遊星ぇぇぇぇぇぇ……！！」とか、
「この裏切り者ォォォォォォォォ！！」とか言ってる人間がいたら多分私です。
遊星は本当にどうにかしなければならないと思います。
主に第一戦目やらＣＰＵやら。

ということでエド戦終了です。多分今回もどこかに間違いがあります。
私のことなので多分間違いありません。死ねます。

次回は多分御堂ＶＳ十代になると思います。本筋に絡まない程度のやつで。
そこから本筋に戻るのがいつものパターンでしょうか。

あと、何故か別の二次創作の予告ができたので載せておきます。
嘘予告ですので、掲載予定はありませんが。というかやろうとしたら死にます。

ちなみに、作品的には何故かモンハン。
私はどこへ向かおうとしているのでしょう。

以下嘘予告

←←

――――この世界の真実、見てみたくはないか？

始まりは、そんな言葉からだった。

広大な世界。
怪物の闊歩する――世界。

そこには、人を守る者――怪物を狩る者たちがいた。

「師匠を、助けてほしいっす！」

未熟な、新米と呼ぶべき者。

「――悪いが、私の名に懸けてこの先へは通さん！」

ベテラン。数々の修羅場を潜り抜けてきた者。

「俺ァもう、とっくに看板を下ろしたよ。
……おめぇはどうなんだ？」

自ら、その役目を辞したもの。

――そして。

「……俺は、真実を知るまで死にたくないんでね！」

――世界を。真実を。
全てを知りたいと願い、狩り続ける者。

人間の思惑。怪物の脅威。生物としての意思。
そして――欲望と、渇望。

過去。
――かつて、世界に何が起きたのか。
その真実を求める者たちが、動き出す。

「狩人たちの遺物調査レポート」

永遠に公開未定！

52束目：選択（前書き）

今回の物語では学校の機構、特に退学というものについて取り扱いますが、
どこかしら間違っている箇所があったりする可能性が高いです。
この物語ではこうなんだ、という風に思っていただいて、
現実とは多少違うものなんだと認識していただければ幸いです。

52束目：選択

「……何の用でしょう？」

十代の帰還から数日。
取り立ててイベントなども無く、結社も、目新しい動きは無く。
授業も無いためにやるべきことも無く、あの申請が通ったとも聞かず。

さりとてやることも無いために、調理室で料理など嗜んでいたのだが、
その折のことだ。

「――ナポレオン教頭」

「おや、こんなところにいたのデアールかムッシュ御堂。
少し、話があるのデアール。あとこの匂いは何デアール？」

「鶏のガラと野菜、諸々の調味料を用いてラーメンのダシでもと。
……もう一度聞きますが、一体何の用です？

調理室を使うような人間が、俺以外にはいると思えないんですが」

「別に調理室の引き渡しではないのデアール。
……一つ、頼みたいことがあるのデアール」

「頼みたいこと……ですか？」

常日頃から生徒のことを見下した態度を取るこの人が、
見下すはずの生徒に対して頼みごと――。

まず間違いなくろくでもないことだろう。

しかし、レッド寮に対する態度も強硬化してきているし、
俺のところに顔を出す理由も無いような気がするんだが。

「なぁに、簡単なことなのデアール。
……レッド寮を潰すのを、手伝うのデアール」

「お断りします」

即座にそう回答し、俺は再度鍋に向かった。

「戯言に付き合っている暇はありません。
……お引き取りください」

「ざ……戯言とはなんなのデアール！？
教師を侮辱する気デアール！？」

「教師とは、生徒を導き指導するべきもののはず。
今のあなたの態度は、明らかにそれとは隔絶しています。
教師の役割とは、生徒を見下し蔑むことではない。
……お引き取り下さい。三度は言いません」

ジロ、とナポレオン教頭を睨み付け、俺は軽く溜息をついた。
俺がそう簡単にあいつらを裏切ると思ったら大間違いだ。
ただでさえ一度裏切ってしまったという経歴があるのに、
これ以上あいつらの迷惑にはなれない。

「……遊城十代が疎ましくはないのデアールか？」

「……」

「お？　反応したデアールな？
くひひひひ、分かるデアール。この前のエドとの試合、
遊城十代を見て羨ましがって……いや！
むしろ、イライラしていたのは知っているのデアール！」

「……だとして」

「えん？」

「だとして、あなたに何の関係がある。
俺は既に割り切っている。……お膳立てなんて必要ない。
――それに、勝てない人間を登用するなど、無策・無謀もいいところでは？」

お膳立ての必要は無い。
俺は既にあいつに勝つことを諦めている。

思い切り、皮肉を込めて唇の端を釣り上げる。

万丈目ならいざ知らず、俺じゃあ十代には勝てない。
それは、既に分かりきっていて――その上、
万丈目はそう簡単には寝返ったりはしない。

何故なら、あいつは今、レッド寮の寮生だ。
自分の住処を荒らされるのは、誰だって嫌なものだろう。

現状、ブルーに在籍している俺が組しやすいと思っただけかもしれないが。

「――――言っておきますが、人質を取れば、
その瞬間に教頭の上半身は吹き飛ぶと思ってください」

「わ、分かったのデアール！」

牙突、練習してみようか。

壱式から参式まではできたんだよな。

問題は零式だけで。上半身のバネだけとなると、多少の問題はあるが。

「……オベリスク・ブルーなのに、オシリス・レッドの生徒のことを、

どうとも思っていないのデアールか？」

「ええ。重要なのは場所ではなく『人』ですから。

それに、差別に興味はありませんので」

「差別ではない。区別デアール。腐ったミカンは放逐するのが筋デアール！」

「人は蜜柑ではない。蜜柑も人ではない。

……同じように考えるのはいささか早計です」

ありきたりな反論をし、俺は鍋を見張り続ける。

……と、そんな俺の態度に腹を立てたのか、あるいは、元から考えていたのか。

ナポレオン教頭が呟く。

「……退学を盾にする、と言えばどうデアール？」

「……退学……ですか。それは……まあ、嫌、ですね」

「だったら、我輩の言うことを聞いて、遊城十代を倒すのデアール。負ければ貴様は退学。そして、勝てば――」

「レッド寮を取り潰す、ですか」

困った人だ。

そこまで脅し倒せば、俺がそれに乗ると思うのか。

勝算があって言うならいいが――多分、何も無いのだろう。

あわよくば、レッド寮を潰す。

そうじゃなくても、俺という邪魔者を放逐できる。

悪くはない考え方だ。――いくつか穴があることを除けば。

「……分かりました。お請けしましょう」

「ふふん、生徒は素直なのが一番なのデアール。

では我輩はこれで失礼するのデアール」

そう言い残し、教頭は何処かへと去って行った。

調理室には、俺と――ついでに、イレンが残る。

「……いい、の」

「構わない。どうせ、ああ言ってくることは分かってたんだ。虎穴に入らずんば虎児を得ず。罠でも飛び込んでいく必要はある」

俺の場合、色々と思うところがあっての結論だ。

元々、十代とはデュエルしてみたかったし――いい機会かもしれない。

「……そんな……こと、より……。

……ごはん……」

「食い意地張りすぎだお前は！　少しは自重しろ！」

『わ、わたしもごはん……』

「実体化できないだろうが！？」

「……ゴハンマダー……」

「どこで覚えてきたんだそんな言葉は！？」

御堂です。

最近生活を共にしている同居人が自重しません。

御堂です。

『でも最近は実体化もできそうです！』

「……それはそれで、俺も困るなー」

主に人に見られた場合に。

しかし、これはスズの能力が徐々に上がっているということだろうか。

文化祭の日にはブラック・マジシャン・ガールも実体化していたようだし、

魔術師系統のカードの精霊は、基本的にそういう素養があるのかもしれない。

スズ自身、俺と出会う前後に「生まれた」という話だ。
色々と経験を積むことで、何かしらできるようになったのかもしれない。

味見役が増えるのは歓迎だけども。

「……それはそれとして、お前たち、さっき出てこなかったのは何でだ？」

「……あの人……、嫌い」

『え、えーっと……はわわわわ……』

方や、一切の遠慮なしにばっさりと。
方や、言外にそう匂わせて。

分かりやすいのは結構だが、正直すぎても生きていけんぞ。

『でも、カズマさん。大丈夫ですか？
あの人の言うこと、聞いてたら……』

「構わないさ。それに、そもそも俺は教頭の言いなりになるつもりもない」

ナポレオン教頭は、知略に長けているような名前をしているくせに、どうにも単純な上に短慮だ。ああ言っておけば、俺が言うなりになっていると思っているのだろう。

奴は、内側に時限式の炸薬を抱え込んでいるようなものだ。それも――既に、起爆準備に入ったものを。

「――――小細工抜きの、正当な手段で潰してやるよ」

よくも、他人をああも簡単に利用してくれようとしてくれた。

その無謀で無策で苛立たしいまでに高慢ちきな精神を矯正するために――。

高い授業料を、払ってもらおう。

「……ちゃーはん……ぎょーざ……てんしん……」

「……オーケー。分かった。話の腰を折るほど空腹か。だったら頼むからもう少し待ってくれ。そもそもお前じゃ死ぬことは無いだろうから」

いずれ箸と茶碗でも具現化させてチーン！
などと叩かれるのではないか。
あるいはプロ顔負けの腕のドラムテクニックで叩くのではないか。
そんな予感を胸の内に秘めつつ、俺は延々と調理を続けていった。

＊　＊　＊

「ふっひひーデアール！　今日がこのレッド寮、見納めの日デアール！」

調子に乗っているのか、俺の眼前でナポレオン教頭がそんなことをのたまう。

「敵」の眼前で余裕の表情とは。随分と神経が図太い人間なのだろうか。
あるいは、あの程度の脅しで俺が屈すると思ったのか。
後者であれば、授業料は釣り上げてしまおう。

「随分と調子がいいんですね。
……俺は十代に勝てないと知っているのに」

「何を言っているのデアール？　貴公が退学になると知れば、
あの遊城十代も、そうそう手が出せないのデアール！」

「……」

成程。俺は簡易的な人質というわけか。
俺が負ければ、退学。十代が負ければ、レッド寮を潰す。

どちらを取るべきかは――分からないが、
多分、十代ならレッド寮を取ることだろう。

居場所はどんな人間にも必要なものだ。

俺は――心配はないか。

そもそも、放校されようとも構わないと、心のどこかで思考していたのだが。

――と、そんなことをしているうちに、レッド寮が視界に入ってきた。
集団――数名の寮生と、そこに集う生徒たちの先頭に立つのは、十代。

「うはははは！　待たせたのデアール！
この寮の廃止――その尖兵の用意ができたのデアール！」

と、教頭は一歩引いた位置に下がり、俺を指さす。

「……え、えええええっ!?　み、御堂君ッスか!?」

「ど、どういうことだドン、御堂先輩!?
俺たちを裏切ったザウルス!?」

状況を理解できていない――というより、
理解できている方がおかしいが――翔と剣山が、責めるようにして、
あるいは驚くようにして声を上げる。

「どういうことなの、御堂君」

氷のように冷え切った声で、明日香が問う。
正直に言って、謝ってこの場で退散したいが、それも少し問題だ。

「俺にも色々と事情が……」

「フン、説明の必要は無いのデアール！
遊城十代！　御堂和真とデュエルするのデアール！
貴様が負ければ、レッド寮は廃止！
そして――ムッシュ御堂が負ければ、退学！　デアール！」

「なっ……」

事の成り行きを静観していた万丈目が、ここにきて声を漏らす。
どうやらこちらの事情は悟ってくれたようだ。
譲れない部分があるから――と解釈してくれたのだろう。

「ちょっと待てよカメレオン教頭！
何で和真が退学になんなきゃなんねぇんだよ！」

「ナポレオンデアール！　体色は変化しないデアール！」

「真っ赤にはなりますけど」

「ムッシュ御堂！　茶化すなデアール！」

「真っ青にもなりますけど」

「むがあああああっ！？」

「この際紫色になってみます？」

「……」

僅かばかりかは、俺の怒りを感じ取ったようだ。
額から汗を流し、十代の方へと向き直る。

「……今から貴様とムッシュ御堂にデュエルをしてもらうのデアール。
一回きりの勝負なのデアール。くっくっく……」

意地悪く、十代にそのことを告げ――教頭は、俺の後ろについた。

ふう、と俺は軽く息をついた。
さて、ここから作戦開始だ。

「悪いな、十代。俺にも譲れない理由ができた」

「……和真……ッ……！！」

「分かってるな。選ぶべきものは。
迷うな。躊躇うな。切り捨てろ。俺は――お前の道には邪魔なものだ」

レッド寮に住む人間は、多少少ないにしても、それでも結構な人数いる。
そいつら全員を路頭に迷わせるか、俺だけを放り出すか。
どちらかを選ぶならば――前者だ。
迷う理由など無い。それが分かっているだろう、あいつは。

「あまり甘えたことは言うなよ。――――決闘（デュエル）」

「く、くそっ、デ、決闘（デュエル）！！」

「先攻は俺だ。ドロー。
……《増援》を発動。《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　エアーマン》を手札に加える。
そして、《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　エアーマン》を、攻撃表示で召喚」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　エアーマン》　攻　１８００　／　守　３００】

「エアーマンの効果を発動。デッキから『ＨＥＲＯ』を手札に加える。
俺は《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　オーシャン》を手札に加える。
カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

いつも通り――いつも通り「すぎる」布陣。
十代と相対する場合、殆どの確率でこれに似た布陣を整えることができる。

違いがあるとすれば、フォレストマンが守備表示で出ているか、あるいはオーシャンが攻撃表示で出ているかという程度のものだ。

「お、俺のターン、ドロー！
《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　アナザー・ネオス》を召喚！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　アナザー・ネオス》　攻　１９００　／　守　１３００】

十代の場に現れる、白い――ネオスを小型化したかのような形状のモンスター。

――来たか、アナザー・ネオス。

アタッカークラスの攻撃力を持ち、多くのサポートカードがある。あのカード以上に恵まれたカードというのも、そうは無いだろう。

「アナザー・ネオスで、エアーマンを攻撃！」

ネオスの攻撃――ラス・オブ・ネオスとほぼ同様のチョップが、エアーマンに突き刺さり、破壊される。

ダメージは１００。出だしとしてはこの程度か。

「伏せ（リバース）カード、《ヒーロー・シグナル》を発動。デッキから《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フォレストマン》を守備表示で特殊召喚する！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フォレストマン》　攻　１０００　／　守　２０００】

「くっ……カードをセット、ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー。

スタンバイフェイズにフォレストマンの効果を発動。
デッキから《融合》を手札に加える」

相変わらず、俺のデッキのキモとなるモンスターはよく働いてくれる。
この後でどのくらい場に残るのか、その点が不安だが。

「《戦士の生還》を発動。墓地のエアーマンを手札に加える。
――そして、そのエアーマンを召喚する」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）エアーマン》攻1800／守300】

「エアーマンの第二の効果を発動。
俺の場のエアーマン以外の『HERO』の数だけ、
場の魔法・罠（マジック・トラップ）を破壊できる。
十代の場の伏せカード（リバース）を破壊する」

「なっ……くっそぉ！」

エアーマンの吐き出す風にあおられ、その姿を現す伏せカード（リバース）。
《ヒーロー・ブラスト》――残しておくのは危険だろう。

「……《融合》を発動。炎属性、《E・HERO（エレメンタルヒーロー） レディ・オブ・ファイア》、
『E・HERO（エレメンタルヒーロー）』、エアーマンの2体を融合！
現れろ、《E・HERO（エレメンタルヒーロー） ノヴァマスター》！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） ノヴァマスター》 攻 2600 ／ 守 2100】

場に噴き出す火炎の渦。
その中央にたたずむ、炎のHERO（ヒーロー）――。

このデッキの切り込み隊長であり、最大の功労者であり、俺のエースカードだ。

「――バトル！　ノヴァマスターで、アナザー・ネオスを攻撃！」

基本的に技の名前が無いこのカードだが、
仮に技の名前を付けるとしたら何になるのだろうか。

マグナブレイズとかプロミネンスドロップとか。

大穴でバーニングディバイドとか。
……閑話休題（それはさておき）。

「ノヴァマスターが戦闘でモンスターを破壊した場合、デッキからカードを1枚ドローする。
……カードをセットし、ターンエンドだ」

さあ、十代はどう出る。

俺の場は盤石。そうなるように整えた。
一方で、十代の場を荒らしまわるようにした。

場のカードはゼロ。
この状況からの巻き返しは――難しくないにしても、手間はかかるぞ。

「俺のターン、ドロー！
俺は手札から、《未来融合－フューチャー・フュージョン》を発動！
《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ダーク・ブライトマン》を――」

「――――《サイクロン》！　フューチャー・フュージョンを破壊

する！」

「うわっ……しまった！！」

未来融合への対策は、なにもカウンター罠（トラップ）に限ったものではない。
発動にチェーンする形で《サイクロン》や《砂塵の大竜巻》などを発動すれば、
融合召喚も――モンスターを墓地に送られることも無い。

十代の狙いは予測できる。
いつもの通りであれば、まず間違いなくネクロダークマンを墓地に送り、
その上でネオスを生贄無しで召喚するつもりだ。

その後、《魂の共有－コモンソウル》でも使って、
コンタクト融合からの逆転――だろう。

「悪いな。そう簡単にはやらせんよ」

「だと思ったけどよぉ……だったら、カードを2枚セット。
モンスターをセットして、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー。
スタンバイフェイズにフォレストマンの効果を発動。
デッキから《融合》を手札に加える」

さて、十代の行動パターンを予測しよう。

フューチャー・フュージョンでの目論見が外れた今、
あのリバースモンスターでどうにか次のターンへ繋ぐことを考えているのだろう。

十代の持ち味、最大の武器はその引きにある。
あいつも、自分でそれが理解できていないほど馬鹿じゃないだろう。

となれば――アレの可能性が高いか。

「《融合》を発動。手札のオーシャン、
《E・HERO（エレメンタルヒーロー） アイスエッジ》の2枚を融合する。
現れろ、《E・HERO（エレメンタルヒーロー） アブソルートZero（ゼロ）》！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー） アブソルートZero（ゼロ）》 攻 2500 ／ 守 2000】

場に突如現れる氷柱。
その内より現れる、氷のHERO（ヒーロー）――アブソルートZero（ゼロ）。

「更に、カードを2枚セット」

「ゲッ……！？」

「１００戦以上もデュエルしている以上、傾向は見えている。
ノヴァマスターで、セットモンスター……《メタモルポット》に攻撃！」

宣言と同時、ノヴァマスターの腕から火炎が迸る。

そして――表向きになったモンスターは、当初の予想通りの1枚。
最強の手札補充用モンスター、《メタモルポット》だ。

「くっ……お互いに手札を全て捨てて、
デッキから5枚ドローだ」

俺の手札は既にゼロ。よって、損失無しに5枚ドロー。
一方の十代は――ネオスを捨てたうえで、5枚ドロー。

「メタモルポットを戦闘破壊したことにより、
ノヴァマスターの効果を発動。カードを1枚ドローする。
――Ｚｅｒｏ（ゼロ）で直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「伏せカード（リバース）、オープン！　《正統なる血統》！
《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ネオス》を、墓地から攻撃表示で特殊召喚する！
甦れ、ネオス！」

【《E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ネオス》　攻　２５００　／　守　２０００】

墓地から甦り、場に姿を現すネオス。
――って、なんだか迫力凄いぞ。いつも以上に。
え？　何コレ。ネオス・オブ・ネオスの憤怒？
俺ってネオスを怒らせるようなことしたか？

実を言えば――だが。
俺は原作のネオスがあまり好きじゃない。
カード単体として見れば、いいカードだと思う、が……。

何故だろう。原作の言動が、どことなくヒーローらしくないから。
確か、その程度の些細な理由だったとは思う。

その辺を見通したのだろうか。

『こうも簡単に十代を裏切るとは……見損なったぞ！』

「……」

違っていたようだ。

何だかイラッと来たから、このまま破壊してしまおうか。

いや、しかし、戦況を考えれば、このままＺｅｒｏ（ゼロ）を場に残しておくのが常道。

それに、俺はあくまで俺の考えに基づいて行動しているのであって、裏切ったつもりなど微塵も無い。

「攻撃は中断する。――だが、このターン中にネオスは処理する。伏せ魔法（リバースマジック）、《精神操作》を発動。ネオスのコントロールをいただく」

「あっ！？　ね、ネオス！」

「手札から、《融合回収（フュージョン・リカバリー）》を発動。墓地の《融合》カード、ノヴァマスターの融合に使用したエアーマンを手札に戻す。

――そして、『Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）』、ネオス、闇属性の《幻影の魔術士》を融合。

現れろ、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エスクリダオ》！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エスクリダオ》　攻　２５００／守　２

０００】

闇が寄り集まり、凝り、その形状を「ヒト」のそれへと近づけていく。

それは――黒い。あまりにも、「ＨＥＲＯ（ヒーロー）」と呼ぶには「らしく」ないものだ。

エ闇スクリダオ。その名の通りのモンスターが、俺の場に現れた。

「エスクリダオの攻撃力は、
俺の墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）』の数に応じて上昇する。
その数値は１００――よって、現在の攻撃力は２８００。
俺はこれでターンエンドだ」

こうして俺が優位に立っている場面は、
これまでに――幾度となくあった。

だが、そのことごとくで、十代が逆転している。

いくら盤石の布陣を整えたとしても、
あいつはあっさりとそれを乗り越えてくるのだから。

一度、似たような状況を経験したことがある。
俺の場にいたのは2枚のV・HERO（ヴィジョンヒーロー）、
そして同じくM・HERO（マスクドヒーロー）。計4枚。

そんな中にあっても、あいつは乗り越えた。
融合、ミラクル・フュージョン、バブルマン。その他諸々。

――結果的に敗北したのは、その2ターン後である。

これまでの経験から鑑みるに、十代が場を立て直すのに1ターン、
逆転するのに1ターンかかる。よって、十代→俺→十代で決着がつく。
それが平均的なパターンだ。

大穴で、往復2ターン。……まあ、そんなところだ。
今回に限っては、勝ち筋が無かったわけではない。
――が、それでも、こいつならどうにかすると思う。

そんな……確信が、ある。
俺には絶対に届かない領域にある人間への、確信。
「こいつは、何かやらかす」と。

「俺のターン……ドロー！！」

滑るように、引く。

一目、そのカードを確認し――十代は、カードを差し込む。

「《Ｏ－オーバーソウル》を発動するぜ！
もう一度――甦れ、ネオス！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ネオス》　攻　２５００／守　２０００】

１度――。

１度だけならば、防ぐ手立てはある。
あのカードを用いれば、ダメージは防げる。
このターンに限っては、大丈夫……のはずだ。

「《ラス・オブ・ネオス》を発動！　ネオスをデッキに戻し、
場のカードを全て破壊するぜ！」

うそん。

頭上高くネオスが飛び上がり、急降下――そして、
「地面に向かって」、ラス・オブ・ネオスを放つ。

俺の2枚の伏せカード――《ガード・ブロック》と、
《ハーフ・シャット》の2枚が破壊されていく。
当然、モンスターも全て。

十代の伏せていたカードは――《リバース・オブ・ネオス》。
今のところ、使い道が無いと悟ったのか。

「《ヒーローアライブ》、発動！
俺の場にモンスターが表型表示で存在しないとき、ライフを半分支払い、
デッキからレベル4以下の『E・HERO』を特殊召喚できる！
《E・HERO　プリズマー》を特殊召喚！」

【《E・HERO　プリズマー》　攻　1700　／　守　1100】

「プリズマーの効果発動！　《E・HERO　アクア・ネオス》を公開し、

融合素材となるネオスを墓地へ送るぜ。
そして、《Ｎ・エア・ハミングバード》（ネオスペーシアン）を召喚！」

【《Ｎ・エア・ハミングバード》（ネオスペーシアン）　攻　８００／守　６００】

あ、詰んだ。

「『ネオス』となったプリズマー、
そして、エア・ハミングバードをコンタクト融合！
来い、《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エアー・ネオス》！」

【《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エアー・ネオス》　攻　２５００／守　２０００】

風――。

強風がネオスを模したプリズマーを包み込み、
その肉体をさらなる高みへと押し上げる。

はじめに目についたのは、翼。
そして――強靭さを映しだす、四肢。

赤く染まった全身。

一発逆転を可能とするモンスターが、十代の場に姿を現した。

「エアー・ネオスは、俺のライフが相手より低い場合、
その数値分だけ攻撃力がアップする！
３９００－１６５０……で、ええと……」

「２２５０だ」

「に、２２５０攻撃力がアップするぜ！」

これはマズいぞ。
ええと、何か手札誘発か墓地発動のカードは無いのか？

《クリボー》、持ってない。
《エフェクト・ヴェーラー》、手札に無い。
《速攻のかかし》。デッキに無い。
《バトルフェーダー》。同上。
《ネクロ・ガードナー》。あるわけない。

……あ、こりゃ無理だわ。

「……くっ！　エアー・ネオス、直接攻撃（ダイレクトアタック）……！！

スカイリップ・ウィング！」

そうして。

滑空してきたエアー・ネオスの翼による一撃で、
俺のライフポイントはゼロになった。

＊　＊　＊

重く、苦しげな雰囲気が周囲に流れている。

ある意味で当然……なのだろうか。
一応、俺は皆のことは良い友人だと思っているのだが、
やはり、友人と言って差し支えないような人間が退学に追い込まれれば、
沈痛な面持ちにもなるのだろうか。

ナポレオン教頭は既にいない。
デアールデアールと喚きながら、校舎の方へと向かって行った。

「すまねえ、和真。……俺……」

デュエルに勝利したはずの十代が、苦しげに声を漏らす。
……なんだか、ネタバラシするのが辛いな。

「いや、そのことなんだがな。別に……」

「……い、一番辛いのは御堂君じゃないんッスか？
今は、そんなに無理に明るく振る舞わなくても……」

「いや、俺はそもそもリスクが」

「御堂……いざと言う時は、万丈目グループの方へ口添えしてやる。
お前の頭脳なら、兄たちも文句は言うまい」

万丈目も何を言っているんだ。
就職難の心配をしているんじゃないんだぞ、俺は。

「だからそもそも俺は」

「せ、先輩！　先輩とは数週間程度の付き合いザウルス！
でも、俺は忘れないはずだドン！」

おいちょっと待て剣山。お前俺がいなくなること前提で話してるだろ。
それを言ってしまえば全員そうなのだが。

「いいから！　俺の話を聞けぇ！」

「……ど、どうしたの？」

「お前ら。俺が退学することを前提として話してるが、
俺はまだ退学しない！　というかそうなる確率も限りなく低いんだよ！」

な、なんだってー！！
とでも言いたげな表情のままに固まるいつものメンバー。

……少し講釈が必要だろうか。

「ええい、説教垂れるのは苦手なんだけど……まあこの際だ。
少し学校、ひいては退学というものの仕組みについて話すのも悪くない」

「……なんでそんなこと知ってるの、御堂君」

「それは秘密だ」

何故ならその方がカッコいいから。

「……さて、そもそも、普通退学というものにはいくつかの種類がある。

自主退学と懲戒退学だ。前者は言葉の通り、自分から進んで退学すること。

後者は……受動的なもの。退学させられることを言う」

「御堂の場合は……懲戒退学ということになるのか？」

「そういうことになる。とはいえ――こちらには、色々と制約がある。

代表的なものとして、『懲戒退学は校長が行う』こと」

つまり、「教頭」であるナポレオンには、それを行う権限は無い。

「そして、成績不良であること。出席率が低いこと。

最低でもこれらを満たしていなければ、退学処分にはできない」

「……和真、最近出席してたっけ？」

「４日間を除けば俺は今年は毎日通ってる。
去年のアレは情状酌量の余地があるらしいから除外」

「成績は？」

「定期テストで校内３位」

上位の二人は委員長と三沢である。
あの二人は一体何者なんだ。

「って、『学年』じゃないドン！？」

そこは仕様だ。
そもそも現３年生にメインキャラクターいないし。

「要約すると、『よっぽど成績が悪くて、登校もしていない生徒で、
かつ、校長が直接指示を出さなければ懲戒退学はそうそう無い』
ということ。
……次に、仮に俺が十代に勝った場合。レッド寮の廃止についてて
だ」

「え。そっちも考えてたの？」

「予防線は張っておくべきだしな。……で、こちらの場合、『大勢の生徒を退学させる』という意味合いにも取れる」

「レッド寮を廃止……としか言ってなかったわ」

「その『廃止』という部分が問題なんだ。
あの寮は、ある意味特例的に成績不振者を集めている。
出席日数に関してもとやかく言わないし……まあ、卒業も、できる」

その後のことは……言うに忍びないが。

「だから、あの寮を失うのは、学校側からしてもデメリットが大きい」

「……何で？」

「単純に生徒の数が減るからだ。
生徒の数が減れば、それに応じて金が入らなくなる。
寮の維持費、共益費、教材費に実習費エトセトラエトセトラ。
母体が海馬コーポレーションだという点を差し引いても、
３学年すべての寮生を放逐すれば、懐事情もまた変わってくるだろう」

全学年、全生徒同じように少々割高の学費を取られている。
これは、それほど費用のかからないレッドと、
それなりに金のかかるイエロー、それなり以上に金のかかるブルーと、
三つも寮を持っている学校故の措置だろう。

「金銭面だけじゃない。評判にしてもそうだ。
これは、俺が退学にならない可能性を上げることにも一役買っているが、
……そもそも、仮に俺が退学させられたらどう思う？」

「都合の悪い人間を、無理やり退学にした……かしら」

「そう。そこが問題となるんだ。
学校側にとって問題となる人間を次々と切り捨てる。
そんな学校に入学したいと思うかどうか」

インターネットが発達した現代だ。
口コミ、あるいは雑誌などの媒体でしか情報の入手できなかった昔と違い、
今は即座に望む情報を――望まない情報も、手に入る。
アカデミアの悪い噂が流布したとしても、それを全て消すことは不

可能だろう。

流すのは俺だが。

「他にも色々とリスクはある。言えることがあるとすれば、『人間の人生を潰す行為だからこそ、リスクが伴う』ということだ。

退学はその顕著な例。だから――」

俺は、背後に視線を向けた。

「――――懲戒退学できないとなると、自主退学を勧められる」

「なっ、何の話デアール！？」

そこには、先程校舎へと戻っていったはずのナポレオン教頭の姿があった。

恐らく、少し他の教師と話して、

俺が退学の条件を満たしているかを調べたのだろう。

で、それが無理だと分かったからこそ、こうして出向いて――。

「ほ、ほれほれ、貴様が負けたんだから、さっさと退学届を出すのデアール！」

「ああ、それですか。全力で拒否します」

「デアール！？」

こうした場合、殆どが「自主退学を迫られている」という形になる。

しかし、これについては法的な拘束力は一切なく、

単に「本当に退学してしまうのか」という程度の問題となる。

拒否権は与えられている。それも十全に。

「あと、俺に対して『十代とデュエルしないと退学にする』って言ったの、

あれ立派な恐喝ですよね。となれば脅迫罪が適用されると思いますね。

追及すればまだ余罪は出てくる可能性はありますが……」

「ま、待つのデアール！　それは」

「市民の義務として『犯罪行為』を通報するのは当然でしょう？

それともナンですか。教師自ら犯罪を助長しますか？」

ゾッ、と、教頭の顔が蒼白に染まった。

「……アニキ、アレ、本当に御堂先輩だドン？」

「……た、多分」

俺が俺であるかが疑われてしまった。
何故だ。

「示談と行きませんか？　なに、簡単な話ですよ。
今後一切レッド寮を潰すなどと物騒なことを言わない。
そして――――俺に干渉しないこと。この2点を守っていただきたい。
……簡単なことでしょう？」

「ふ、ふざけるなデアール！　せ、生徒が教師に取引など、
ま、ましてや、レッド寮を潰すなと……」

「簡単なことでしょう？　3度は言いません。
この学校に居続けたくないのならば、それでも構いませんが」

この人は理解すべきだ。

誰を敵に回したか。敵に回した相手が何なのか。

敵のできることを。敵が何をするのかを。

「お……覚えていろ、デアールぅうぅうぅ！！」

――そして、そんな捨て台詞を残して、ナポレオン教頭は去って行った。

戦闘や交渉において重要となるのは、

自分の選択肢を増やし、相手の選択肢を潰すことだ。

今回の場合、そもそもナポレオン教頭には選択肢など無かった。

邪魔なものを排除できるとぬか喜びし、

直後に現実に引き戻されると言う結末しか無かった。

逆に、俺は暢気なものだ。

そもそも教頭の目論見が成功するはずはないと知っていたし、

今回の十代とのデュエルもお遊びのようなものと認識していた。

……まあ、本気でやった部分が無いでもないが。

とはいえ。

「十代」

「何だよ、和真」

「……次は、迷うなよ」

「は？」

分からないならいいと告げ、俺は踵（きびす）を返した。

迷うな。ある意味で、これは自分にも向けた言葉だ。

迷えば判断が鈍る。判断が鈍れば、それだけ敗北に近づく。

そうならないために必要なのは、多くの選択肢だ。

選択肢が多ければ、それだけ「後悔しない」ようなものを採れる。

ただ、そのために必要なのは――やはり、力だ。

とは言っても、それが容易に手に入るはずはなく。

堂々巡りに陥った思考をどうにか立て直しながら、俺は自室へと向かって行った。

52束目：選択（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「ドロー」

「そういえば先輩、何でさっきから怒ってるんだか笑ってるんだか、正直わけ分かんねーような表情してんです？」

「お前はあの場にいなかったから分からんだろうが、十代とエドのドロー対決見せられれば嫌でもこうなるだろ。十代に至っては二日連続だ」

「はあ。まあ分からないでもないですけど。……ンなことより、最近私の出番少なくありません？」

「メタ発言自重しろ」

「いや、私思うんですけどね、やっぱドローが強ければいいと思うんですよ！
ドローが強ければその分出番も増え……ふひひ」

「後半は全く関係ないだろ。
……まあ、実際にはドローが強いから出番が増えると言うより、出番が多いからドローが強くなる、の方が分かりやすいな」

「ははぁ。出番が多いから必然的に勝たされるとかいうやつですか」

「……顕著な例がシャイニングドローだな」

「『ドローカードさえもデュエリストが創造する』ってアレですか。勝てないからってアレはねーですよ」

「しかも変身してたぞ。何だアレは。海老座のゴールドセイントか」

「ゴールドセイントってアレ十二星座じゃありませんっけ？どっちかってーとスーパーゼアル人ですよ」

「どっちもどっちだな。
いずれにしても『結局いつもの遊戯王だった』で済んだけど」

「ああまで台詞とシンクロしたのは初めてですね。
『どういう……ことだ……』って。
つーかなんでプレイヤーがエクシーズしてんですか」

「カイト自体結構なネタキャラだったことがそれに拍車をかけたな。顔芸したり、窓割って侵入したり、口笛吹ながら登場したり、挙句にデュエル中に変身したり、手錠……みたいなもので拘束したり、
かつてのネタを総動員したんじゃないのか、あれ」

「ネタにはネタで対抗ですかね。いや、正直どうしようもないカオ

スですけど」

「実はあの話の中で『カン☆コーン』が鳴ってたらしいぞ」

「５Ｄ’ｓ名物のアレですか」

「……そっちでもセイヴァー・ドラゴン創造したりと、割と無茶苦茶やってたわけだが、あれに関してはどうしようもないな」

「何でもかんでも創造できるんですよね。だったらとんでもないでしょ、それ」

「まあ、戦術とかなんとか言うより先に、このゲーム自体『引き』がかなり重要だからな。どんなに伏せてても、《大嵐》１枚でおじゃんとかあるし」

「まあ、そういう意味じゃ完璧なチートですよね。ＵＭＡ自体、本来はデュエルが弱いそうなので、あまり嫌味は感じませんが」

「俺は良いネタだと思ったんだけどな。具体的には俺のこの手が光って唸るの意味で」

↓オチない。続かない。

＊　＊　＊

ということで、割とあっけない御堂ＶＳ十代でした。
直前に約一名大食い属性が付加された件。

エアーマンを除く御堂の手札４枚は、
ミラフュ、パラレルワールド、ザ・ヒート、スノーマンイーターでした。
つまりどうあがいても防げないということで。
ちなみに、あの場面でミラフュを使っていれば話は変わりました。

ちなみに、話の中で出てきた5枚のカードの内、
ヴェーラーだけはデッキに投入されています。手札に無かっただけで。

後半の学校の退学関連ですが、ぶっちゃけた話、自信がありません。
色々調べはしたのですが……。

また、デュエルでも多分きっと間違いがあります。
私ですから（

ＨＥＲＯのミラーマッチということで、今回は十代に軍配が上がりました。
全体除去強いですよね。

エスクリダオは見た目は厨二っぽくてかっこいいのに、
どうしてあんな効果になってしまったのか……。

闇属性が融合素材であることが効果なんだと言えばその通りですが、
シャイニング・フレアのほぼ下位互換というのが。

今回はこのあたりで失礼します。
それでは。

53束目：宣戦（前書き）

今回はカオス話です。
デュエルはありません。

53束目：宣戦

人間の生活リズムというものは、ちょっとしたことで崩れやすい。
一例を出せば、一度夜更かししてしまうと、
その時間にならなければ眠れない……というものがあるだろうか。

当然、それらは少し気を付ければ矯正できる程度のものだ。
一度や二度の夜更かし程度で、生活のリズムが爆発的に変わるわけではないし、
人間の体は、多少の誤差を気にしない。
とはいえ、寝るのが遅ければ、それに応じて起床時間も遅くなると言うのは当然で。

そのとき、俺は何を思っていたのか。
正直に言えば、単に寝ボケていただけだとは思う。
しかし、現実逃避もしたくはなるだろう。

――朝起きたら、何故か寮の外だったとなれば。

しかも野ざらし。地面。布団などない。
何が起きたのか、理解できなかった。

いや、理解しろと言う方がおかしいだろうか。

ともあれ、俺の思考は単純で、理解できない現実に直面すれば――。

「寝るか」

睡眠を選択した。

安易にも程がある。

今日は休日で、そもそも授業は無い。
そのため、今日の午前中は睡眠に充てることを決めていた。
たまには寝だめしないと、それこそ体が持たない。

のだが。

そんな折にこんなことになってしまっていれば、
誰だって現実から目をそらしたくなるだろう。

が。

「……ころんびあ」

直後、俺の精神は空中に投げ出された。

いつ感じても慣れない感覚――。

これは、間違いない。イレンが勝手に俺と「代わって」いるのだろう。

何故か両手を上に挙げてガッツポーズを取っている。

毎度毎度どこでそんなことを覚えたんだ。

「……おいこらイレン、お前何勝手に代わってるんだ」

「……現実……逃避。ダメ、……」

直後に、再度俺と「代わる」。

どうやらそれが言いたいがためにこんな行動を取ったらしい。

「……何がどうしてこうなった？」

『はう……そ、その……なんだか、白い制服着た人たちが、朝早くに部屋に来て……』

「……そのまま……放り出し、た」

白い制服――。

ふと、俺は周辺を見渡した。

俺の予想が確かならば、少々面倒なことになっているはずだ。

「……ああ、クソ、やっぱりか」

現在の時刻は午前１１時。

ここに至るまでにどれだけの作業を行ったのかは知らないが、

――ブルー寮の外壁が、白く塗りつぶされていた。

もしや、と思わないことも無かったが。

ともあれ、ＰＤＡを取り出して通話を行う。

相手は、とりあえず事情を知っていそうな――十代あたりが適任か。

数秒の待機音の後、何だ！？　と、慌てたような声がした。

「よう、十代。少し聞きたいことがあるんだが。

誰か光の結社に取り込まれたりしたのか？」

『取り込まれたりしたのか……って、

そんないつも通りの調子で言うなよ！？』

「いつも通り……か？　そう聞こえるなら幸いだ。
……それで、誰が取り込まれた？」

『お、おう……それが……』

問えば、十代は事の顛末を語りはじめた。

曰く、三沢に呼び出されるような形で、明日香が結社に挑んだ。
しかし、三沢に敗北し――結果、明日香が光の結社に取り込まれたらしい。
それが数時間前。

その後、複数の生徒を取り込んでいき、一大勢力にまで増加。
ブルー寮を乗っ取り、ホワイト寮に仕立て上げた……か。

立ち上がり、埃を落としながら通話を続ける。

「明日香があっち側に引っ張られていった、か。マズいな」

『そうだよなぁ……それで和真、無事なのか？』

「身体的には無事だな」

ずっと地面に寝そべっていたせいか、妙に体の節々が痛いが。
俺は、元来たであろう道を歩きながら、通話を続ける。

「ただ、荷物が無い。デッキはあるが、一つだけ。
この状態じゃあどうしようもないな」

財布も無い。着替えも無い。
明日のパンツがあれば良いとは言うが、それすら無い。
俺は歩きながら溜息をついた。

『どうするんだよ？』

「どうするもこうするも、取り返すしかないだろ。
元々、荷物は数えるほどしかないし……」

その荷物にしても、まとめてしまえば旅行カバン２つに収まる程度だ。
さっさと回収するに越したことはない。

「ま、殴り込みかな」

『はぁ！？』

驚いたように声を発する十代。

そんなことを意に介さず、俺はＰＤＡの電源を落とした。

さぁて。少しばかり痛い目見てもらいますか。

「ふっ……！」

元ブルー寮、現ホワイト寮の正面玄関。

そこに嵌っている扉を蹴り穿ち、真正面から押し入った。

「な、なんだ！？　何が起こったんだ！？」

「げ、玄関がブチ破られたぞ！？　合金製なのにどうやって！？」

「人間かよそれ！？」

玄関の周辺が恐慌状態に陥る。
誰かが押し入ってくるなど予想もしていなかったのだろう。
少なくとも、今日明日の話ではないと断じていたに違いあるまい。
それこそが付け入る隙だ。

「すいませェ――――ン。忘れ物取りに来たンですけどォ――！」

大声で叫びを上げ、俺は物理的な殴り込みを開始した。

＊　＊　＊

六条有珠が目を覚ましたのは、１２時を回ろうかというような時間帯だった。

一般的な人間から見れば、相当に遅い時間だと解釈するだろう。
昼食を目前として起床するのだ。その思考は当然――必然と言える。

とはいえ、有珠にとっては、この時間帯に起床する方が珍しかった。
珍しい、というよりも極稀。ほぼありえない確率。
故に――異常だ、とレイは感じた。

とはいえ、異常であると言えば、つい先ほどの爆音にしてもそうだ。
というより、有珠自身はその爆音によって起こされたようなものと言える。

「うへぇ……何なんですかね、これ。
つーかブルー寮塗り替えられてるし……」

「何なんだろ……。ボクも分からないけど。
何だか、さっきからカズ兄ぃの部屋あたりから妙な音が聞こえてくるんだよね」

「ああ、そういえば。大丈夫ですかね、先輩は」

「大丈夫なんじゃないかな。何だかんだ言って、妙に強いし。カズ兄ぃ」

「ですよねぇ……」

有珠は以前、御堂と並走したときのことを思い出した。
普通の人間よりも体力的には劣るとはいえ、
有珠がああまで疲れている一方で、御堂は涼しい顔で走っていた。
その上、有珠を背負っていてなお、余裕があったように見受けられた。

素人――と言えるのかは定かではないにせよ、
殆ど運動をしない有珠ですら、御堂が身体能力に長けていることは理解できる。

「随分前、色々な拳法とか習得したって言ってたよ」

「はあ、拳法。空手とかですか？」

「くきりゅー？　って言ってたかなぁ。あとは、やた……なんたらりゅーとか、
しでんしょーっていうのとか、たいてんりゅーとか、
今度はほくとしんけんっていうのを習得したいんだって」

物騒な話だった。

「しゅくちっていうのもできるらしいよ。
あと、ちょっと前に二段ジャンプができるようになったんだって」

「本当に人間ですか！？」

物理法則を完全に無視していた。

「少し前にね、大怪我して戻ってきたんだけど、
その時以来、ずっとトレーニングしてるんだって。
『後悔したくないから』って」

有珠はふと、少し前に御堂が語ったことを思い出した。
プラシドとのデュエル。その際に喧嘩をすることになり、重傷を負ったという。

後悔――とは、誰かを守れないことを言うのだろうか。

誰を、ということは、今の有珠には想像できなかった。
時折見せる、何かを悔いるような表情が、その答えになるのか。

「そういえば、もう少しで斬撃が飛ばせるって頑張ってたよ」

「……」

物理法則とはなんぞや？
ふと、有珠の脳裏にそんなことが浮かんだ。

＊　＊　＊

「荷物の受け取りに来ましたァ――――――！！」

「「「ぎゃあああああああっ！！？」」」

周辺に群がる白服たちを蹴散らしながら、
俺は元の自分の部屋への道を進んでいく。

しかし、妙に鼻がむずむずする。風邪でも引いたのだろうか。
誰かが噂しているんだとしたら、少しばかり困るような困らないような。

「おっ」

見れば、俺の部屋――193号室のナンバープレートが見えた。
さて、後は回収すればそれで万事解決――。

「ま、待ちなさい！？」

どことなく怯えたような声が響く。
声の主――明日香が、俺の部屋の目の前で、仁王立ちしていた。
当然のように、白い制服を着用して。

「ああ、なんだ。明日香か。あー。そりゃそうだよなァ。
あっち側に引っ張られていったってんなら当然だよ。
ああ、クソ。クソ。本当に嫌になる」

駄目だ。どうも駄目だ。
感情が制御できない。沸々と、自分に対する怒りが込み上げてくる。
完全に八つ当たりだと分かっていても、苛立ちが止まらない。

――だが。

友人を。仲間を。そう認識していた人間を奪われ、
それで黙っていられるほど、俺はできた人間じゃない。
むしろ、どうしようもなく不完全で、不安定だ。
だから、イラ立つ。

「どけ。二度は言わない」

「っ……！　デュ、デュエリストならデュエルで勝負しなさい！」

「わざわざ相手の土俵に上がる馬鹿がいるか。それに俺は――」

よし。もうこうなったら歴代で一番悪辣な人間の台詞を真似てやろう。

「――――リアリストだ」

そう告げて、棒立ちの状態にある明日香の隣――元・俺の部屋の扉を蹴破った。

「ぬおおおおおっ！！？」

「ん？　何だ、三沢か。おいこらお前、人を外に放り出しといて、のうのうと本来の家主の部屋に居座ってんじゃないぞ。

鬼いさんちょっと『お話』したくなってしまいますよ」

「部分的に漢字が違うぞ！？」

「いやー。俺も流石にねぇ。勝手に部屋を追い出されて、その上荷物も持ち出せなくて、しかも仲間が一人奪われてるんだぞ？

そりゃあ悪鬼羅刹にもなるさフハハハハハハ」

今の俺のテンションは、

昔レイがいじめられていた時期のそれに限りなく近づいているッ！！

……なーんて。結局はちょっぴり怒りを露わにしてるだけなんだけど。

「やっぱね。『ちょっぴり』怒ったわけだからさ、

制裁は必要だと思うんだよ、俺」

「ちょっと待て！　『ちょっぴり』のレベルを遥かに超えてるぞ！？」

「いいや、『ちょっぴり』だ」

この程度で激怒していたら、今頃俺はこの島にはいないだろう。

というか、この寮が存在しているかどうかも疑わしい。

ここに至るまでに怪我人を出したわけではない。
破壊した備品も、ポケットマネーで修繕しよう。後で。
だが、今はだめだ。眼前のこいつらは「敵」なんだから。

「……さっさと荷物をまとめさせてもらおうか。簡単な要求だろう」

「だが！　それを許せばお前の戦力が」

「黙れ。抉るぞ」

一声かけた瞬間、三沢の血の気が引いていった。
何を抉られると思ったのかは知らないが、両手で顔を覆っている。

視界の端でスズがガタガタと震えている。
何故か妙にデフォルメされてるように見えるのは目の錯覚だろう。

「戦力云々はどうでもいい。人としての常識を問うているんだ、俺は。
強制的に他人を洗脳するような相手だぞ、今のお前ら。
そんな相手に常識的な対応をしろと言う方が間違っているんじゃないのか」

少なくとも、俺はそう思う。

「安心してくれ。荷物をまとめたらすぐに出ていく。
……ただし、邪魔はするな。二度は言わない」

『……カズマさん、そのフレーズ気に入ってるですか？』

ほっといてくれ。

「……くっ」

目の前に敵がいるというのに無力化できずにいることに、
多少ならず悔しさがあるのだろうか。

デッキのカードを確認する。枚数に増減はない。
予備のカード。手を付けられたような形跡も無い。
衣服、ＰＣなども同様……と。

確認し次第、全てを持参のスーツケースに詰め込んでいく。
大きな荷物と言ってもノートＰＣくらいのもので、
それすらも容易に納まったこともあり、片付けに関してはごく短時

間で終わった。

「じゃ、そういうことで。一応言っておくけど、
荷物は一切残さないから痕跡探しても無駄だよ。
それじゃ、アディオス！」

「う、うむ……っておい！？　窓から飛び降りる気か！？」

その方が面倒が無いし。
窓枠に足をかけつつ、三沢の方を振り向いて告げる。

「……またな。――――次は、敵として」

これでも、人並み程度には友人を大事に思っていることに変わりは無い。
次は――きっと、元に戻す。

そんな決意を胸に、俺は地面に向かって飛び降りた。

直後にその場に通りすがった六条に「アンタ本当に人間ですか！？」と、

少々悲しくなるようなことを言われたのは秘密だ。

＊　＊　＊

「先輩、きっとそのまま鍛え続けてたら鬼になれると思いますよ」

「そうやって言われるのは光栄なことだけど、
俺個人としてはメダル３枚使ったり携帯電話使ったり、
ＵＳＢメモリ使ったり最終的にレストラン経営したりする方がいいんだが」

「私としては通りすがってる方が楽しそうですねー」

あの後、悲しくなるようなことを言ってのけた六条と合流し、
レイたちを呼んでレッド寮の食堂へ行こうと相談した……その道中。
特にすべきこともなく、適当に雑談している最中だった。

「あ、カズ兄ぃ」

「ん……レイか。早かったな」

「うん。連絡貰って、すぐに来たから。
でも何でアリスちゃんがいるの？」

「暇になって外出したら鉢合わせました」

それも、一生に1度あるか無いかというシチュエーションで。

「まあ、合流できたのは幸運だったな。
……それで二人とも、少し話があるんだが」

「どうしたの？」

「少し前からどうにかして生徒会を発足しようと活動してるんだが、
そのための人員が……かなり足りないんだ。
こまめに呼びかけているんだけど、やっぱ集まらなくてな」

「それで私らですか。でもぶっちゃけ先輩だけでよくねーですか？」

「お前は俺を何だと思ってるんだ。
書類仕事以外にも色々と仕事があるんだよ」

全部自分一人でできたら、それはそれで化け物じみている。

基本的に必要としている人員であり要職は、

会長、副会長、会計、書記。
暫定的に風紀委員を発足し、庶務を加える。
これで最低でも合計６人。仕事量の多い部署での人数を増やして８～９人が妥当か。

「委員長は風紀委員長。これに関しては半分以上確定。
俺は余った適当なポストに入る。問題なのはそこから」

「へぇ。ところでたまに聞く『庶務』ってどうう役割なんで？」

「ぶっちゃけたこと言えば雑用。ただ、事後処理は主に会長職が行うし、
連絡係や通達、書類のコピーを行うのが主な業務だろうな。
ただ、それ以外はすることがない役職とも言う」

基本的に役割はそれぞれが分担することになるだろうし、
実際には庶務が庶務の役割を果たせないような気もする。

部活動への通達なんて、その気になれば誰でもできる。
書類のコピーにしてもそうだ。

言うなれば、「他の会員が忙しい場合に仕事を行う」役職なのかもしれない。

「何だ、興味あるのか？」
「いえ、めんどくせーです」
だったら何故聞いた。
「で、でも、仕事のときに『生徒会（ジャッジメント）ですの！』って言わせてもらえるなら、
私も考えないことはありませんからねっ！」
「レイはどうだ？　やりたくないならやりたくないで構わないけど」
「無視しやがりましたねこんちくしょう！？」
元々そういう性格でもないのに突然そんな反応をするからじゃないか。
驚いたのもあるが、何よりギャップのせいで気色悪い。
「ボクもやっていいの？　だったら、できれば書記がいいかな。
他の仕事だと、ちょっと……」
「でも、俺は協力してくれるだけで嬉しいよ。

ありがとうな」

「えへへ……あ、そうだ。カズ兄ぃ、他に誰に声かけるの？
知り合いだったら、少し声かけてみるけど……」

「誠意を見せるべきだし、そこは俺が行く。
その辺はちゃんとしないといけないしな」

確かに手間はかからないにしても、それでは何一つ意味が無い。
代理を立てて相対するなど、無礼もいいところだ。

交渉事で相手に対して上手（うわて）に出ていいのは、
自分が相手に対して絶対的に有利な状況か、
悪の組織の大首領かのどっちかだ。

俺はどちらでもないし、下手（したて）に出るしかない。
……後者に興味が無いこともないが。

「で、六条。お前はどうなんだ？」

「ひぅ！？　そ、そこで私にフりますか！？」

「当たり前だろう。何言ってるんだ」

「い、いえ、その……スルーしたからもう私は洋ナシもとい用無しかと……」

「……いや、いつものことだろ、スルーは。
それより、やるのかやらないのかだけ聞きたいんだが」

「やります！　やりますともやらせていただきます！」

「お、おおう……」

何故こんなにも唐突にやる気を出したんだろうか。
何か心変わりがあったのか？

「……どうしたんだ、いきなり」

「別に心変わりがあったわけじゃないですよ。
正直、私デュエル以外何もしてないじゃないですか。
だから、何かしらできることやった方がいいのかな、と」

確かに、六条のデュエルの腕は一級品――というか、
多分、三沢や明日香なんかと比べても劣らない程度には優れているだろう。

ただ、それ以外の部分に関しては色々と杜撰（ずさん）だ。
なんというかこいつは、面倒くさがりな上に妙に要領が悪いんだ。

日常生活ということで言うなら、ともすれば子供と同程度かもしれん。
……まあ、運動ができないのは単に出不精で運動不足なだけなんだろうし、
筋肉がつかないのも、単に食事を採らないからだろう。
運動不足も、当然ながら筋力不足に関わっているだろうが。

ついでに言えば、俺はこいつが勉強しているのを見たことが無い。

「と、いうことで庶務やらせてください。
つーか他の仕事だと責任大きすぎたりでやりたくないですはい」

「……となると、これで二つ分ポスト確保……と。
あとは会長職と会計、副会長か」

とはいえ、庶務が一人だと色々と面倒な場面があるだろう。
また、書記が一人というのも確実性に乏しい。

レイを信用していないわけではないが、
議事録を作るとすれば2人以上が適任か。

となると、あと4名。
どこかに当てが……あるにはあるが、
さて、そうなると本当にどうしたものやら。

「とにかく、レッド寮まで行くべき――かな」

少なくとも、部屋は空いているだろう。

元々の部屋が空いていればそれでもよし、
そうでなければ適当な部屋を見繕ってそこに入るしかあるまい。
今現在、部屋が無いんだから仕方がない。

今現在、適当な人員と言えば――。

「う、む……」

一人、思い浮かんだ。
しかし、承諾してくれるものだろうか。
というか、レッド寮にいるものだろうか。

いたらいたで問題……ではないか。むしろ自然だ。
いや、しかし、問題が無いでもないし……。

「……こんにちは……っと」

「こんちー」

「こんにちはー！」

『お邪魔するですー』

「……」

三者三様。もとい五者五様。
適当な挨拶を投げかけ、各々食堂へ入っていく。

三々五々に、十代を含めたいつものメンバーが席に腰かけている。
やはり、明日香が結社に引き込まれたことは大きいらしく、
皆、一様に意気消沈している。

その中で一際目を引くのは――。

「明日香ぁ～……」

皆と離れ、端の方で項垂れている吹雪さんだった。

この状況、はっきり言って当然のものではあるが……なんというか、
いつもと比べ、暗い。明日香がいない以上、仕方ないことだけど。

「よ、よう、和真。えーっと。ど、どうしたんだ？」
「うろたえてるのバレバレだぞ十代」
入口に一番近い場所にいた十代が反応を示す。
いつもならのんびりと飯でも食べているのだろうが、今日に限ってはそういうわけにもいかないようだ。
さて、ともあれ「どうしたんだ」と問われた以上、それに答えなければなるまい。
「……ブルー寮が光の結社の連中に占拠された。俺の部屋も奪い取られたから、しばらくこっちで世話になりたい」
「奴らめ、とうとう本格的に動き出したということか。それで御堂、お前はそのまま何もしないつもりか？」
「いや、そんなことはない。俺も俺にできることを考えてる」
ただし、効果を発揮するかは――運次第。
苦笑を浮かべながら、万丈目に返答する。

「そこで、力を借りたい。……と思って来たんだけど、
吹雪さんがあの状態だと、流石に話どころじゃないな」

「今朝からずっとあの状態ザウルス。
御堂先輩、どうにかするような作戦は無いドン？」

「無茶言わないでくれ。万能サポートキャラでもあるまいし」

人心掌握術なんて持ってないぞ。
とはいえ、このまま放置していても問題だろう。
説得……できるところまでしておくか。

「吹雪さん」

「……何だい、御堂君？」

意気消沈したそのままの調子で、吹雪さんが問いかけてくる。
……さて、何と言ったものか。
俺ごときが説得などと、大丈夫だろうかという心配はあるが。

「あなたと明日香の関係を、
兄妹というそれ以外に知らない俺が言うのも、
少々……というか、多分におこがましいんですが。
いくつか、言わせてもらえませんか」

これを言うのは、抵抗があるんだが……。
仕方ない。割り切って考えよう。

「明日香に直接暴言を吐かれたのかもしれません。
所詮は予測ですが、もしかすると、拒絶されたかもしれません」

「……」

「おい、和真……」

「いや待て、十代」

俺の言葉が、吹雪さんを責めているように、
あるいは傷を掘り返したように感じたのだろうか。
十代が制止に入ろうとするも、万丈目がそれを引き留める。

「だけど、まだ取り戻せる。手は届く。
……手を伸ばすべき人が、そんな調子でいないでください。
何かを失う羽目になった人間の末路は、よく知ってますから」

……いや、少なくとも、ここで何かを失う――ということは無いか。
余程の事故でも無い限りは、死人も出ない。

だけど、絆――人とのつながりは、容易に失われてしまう。
このまま、吹雪さんと明日香が和解できないままに終わる。
そんなことはありえないのだが、もしかすると、ということもあるかもしれない。

もしも、明日香を助け出すことに貢献できなかった吹雪さんが、以降にそのことを引きずり、明日香と不仲になってしまったら？
そんな、杞憂とも言うべき不安が、俺の胸中に渦巻いていた。

……完全に、自己満足でしかないか。
いいか。それでも。

「それは……もしかして」

「ノーコメント、というやつですよ」

「……ははっ。分かりやすいなぁ、君は。成程ね」

理解されてしまった。

……もしかすると、別な意味に取られている可能性もあるわけだが。

「し……シスコン連合……」

不穏な台詞が聞こえたが、これはスルーすべきなのだろうか。

「それで、御堂君。キミ、誰かに力を借りたい……みたいなことを言っていたね？」

「ええ。結社に対抗しようと思えば、突出した実力を持った人間が必要です。

俺は――情報と搦め手を使って、ようやく勝てる紛い物ですから、だから、十代や万丈目なんかが手伝ってくれれば――とは思っています」

戦闘員レベルの人材なら、あの二人で一掃できるだろう。

俺だと、そのレベルの人間にも苦戦することは必至。
タッグならば、ある程度フォローが効くが――。

「だったら、僕が力を貸そうか？
万丈目君や十代君に比べれば、少し力不足かもしれないけどね」

「いえ！　そんなことは。ありがとうございます、吹雪さん」

「ウラさんあざーっす！！」

「話がこじれるから六条（お前）は黙ってろ」

「しどい！？」

あとそれは元ネタが分かりづらい。

「……ただ、問題が無いでもないんですが」

「どうしたんだい？」

「いえ、我々は今、生徒会を作ろうと画策しています。
そうなると、問題となるのは誰がどのポストに就くかです。
部分的には既に決まっていますが……」

流石に「幹事」というのは無理があるだろう。
確かに吹雪さんは祭り好きで少々お調子者だが、そういうのは良くない。
真面目な時は真面目なんだし。

「可能であれば、監査として入っていただきたい。
殆どのメンバーが同年代ですので、間違ったことを言う可能性があります。
そういった場合にストッパーが必要となりますので。
……副会長、というポストはいかがでしょうか」

「十分さ。それに、学校にも貢献できるんだろう？」

「一応、内申にも影響はします。結果を残せれば」

暫定的に設立しただけであり、このような機関はこれまでに無かったんだ。
結果が残せなければ、内申が落ちても仕方がない。
逆に、結果さえあれば内申も上げようではないか。

今のところ、ウチの生徒会にはそういった判断が下されている。

「だったら拒む理由は無いね！　よろしく、会長さん！」

「……は？」

「……『は？』って、やだなぁ。わざわざ勧誘してるくらいだから、御堂君が会長になるのかと思ったけど……違うのかい？」

「いやいや、そんな傲慢な。俺は余ったところに入る予定なんですが」

「でも先輩、普通は会長なんて責任の重いモンやろうとする人いねーですけど」

あ、マズい。盲点だった。

余った職に就くということはつまり、「誰もやりたがらない職に就く」ということだ。

そして、一番人気の無いもの――それが、最も責任の重い、会長職だ。

脳筋ならまだしも、多少思考能力があり、責任感がある人間には耐えがたいものだろう。

成程。つまり、殆どの確率で、会長職は空席と。

……マズいぞ！？

「……つーか先輩、本気で気付いてなかったんですか」

自慢じゃないが、俺は以前の世界ではただ真面目なだけの劣等生だったんだぞ。

こっちに来てからというもの、肉体的な問題かは分からないが、知識も技能も、筋力でさえ習得できるようになったんだ。

あっちとこっちの肉体の相違に違和感が生じている以上、間違いがあっても仕方あるまい。

……完全に言い訳だが。

「……そ、そうだ。万丈目。できれば、協力してほしいんだが……」

「先輩が露骨な話題転換を!?」

「……やぶさかじゃないが、拘束されるのは性に合わない。悪いが、辞退させてもらう」

この回答を予測していなかったわけでもなし。

まあ仕方ないかと頷き、「どうにか」するべく思考を巡らす。

俺の知り合い。……知り合い。
そんなに大勢いただろうか。

あれ？　実は俺、交友関係狭いんじゃないか？
いつものメンバーの他となると、青葉さんと宮田さんと、
委員長と藤原さんと六条、宇佐美さんに海野さん……。

よく考えたら親しい人間殆ど女の子じゃないか！

閑話休題（それはともかく）。

いやでも、実際女の子に頼んでも悪い事は無いというか、
別段問題はないのではないだろうか。しかし、それでも気まずいというか。

ええい、くそ、さっさと思考を切り替えろ、この腐れ脳味噌！
閑話休題だっつってんだろうが！

「話は聞かせてもらったわ！」

「ぬうおっ！？」

素晴らしいほど唐突に、食堂の玄関を開いて藤原さんが現れる。

いつからそこにいたのか、とか。
あるいは、何故ここに来たのか、とか。
そんなツッコミが頭に浮かぶが、声は出てこない。
普段と比べてえらくテンションが高いが、一体これはどういうことか。

「ふ、藤原さん……？」
「カズマ、私はその仕事、引き受けてもいいわ。
ふふふ……ふふ。面白そうじゃない」

怪しい。もとい、妖(あや)しい。
いや、裏があるとは、今更思いはしないんだけど。

「というか、何でここにいるんだ？」
「……追い出されたのよ」
「はぁ？」
「えー……ゆきのん先輩、少し、言ってる意味が理解できないんで

すけど」

「そのままの意味よ。あとその呼び方はやめなさい」

「……結社？」

訊ねると、藤原さんは憎々しげに頷いた。
こうまで感情をむき出しにするとは、珍しいこともあるものだ。

「既に女子生徒の半分は取り込まれたわね」

「明日香、か……」

女子の中でも有数の実力者である明日香があちら側に行った。
となると、殆どの女子生徒が、結社に引き込まれる可能性があるということになる。

洗脳というのは恐ろしいものだ。
価値観を変容させ、さもそうすることが当然、あるいは至上であるかのように振る舞わせる。

恐らく、今の明日香は、結社に引き込むことを「喜び」とでも感じているのだろう。
故に、躊躇はない。あるはずもない。

「当面の住居の方は、学校と協議して確保しよう」

「助かるわ」

「……って、ちょっと待ってくれません？
女子寮が制圧されたってことは、私らの荷物は……」

……そういえば、そういうことになるな。
俺の時もそうだったし。しかし、相手が女子寮では正面突破も難しい。

そうすると、潜入（スネーク）でもするか？
いやいや、犯罪一歩手前じゃないか。

さっきは頭に血が昇ってたせいで軽率な行動を取ってしまったが、今は少し落ち着きは戻ってきた。

会話でどうにかして取り戻す、というのが最善だろう。
幸い、と言うべきかどうか。先程の示威行為で、
俺が十分に「脅威」であることは相手に認識させたはずだ。
となると、交渉に際してはその点が優位に働く可能性も……。

「あ、じゃあボクの持ち物も……」

「ちょっと殲滅（おはなし）してくる」

「先輩がボケた！？　いや、本気ですか！？」

「やだな六条。俺がそう簡単にボケるわけないじゃないか」

「本気（ガチ）！？」

俺が手緩（てぬる）かった。

叩くとか対抗するとか、そういうレベルじゃだめだ。

これは最早、戦争だ。戦争である以上、そこに容赦は必要無い。

「せ、先輩、顔が怖いです。怖いです。怖いです！
つーか物騒な事考えてやいませんか！？」

「安心しろ、六条。証拠は残さん」

「そういう意味じゃねーですよ！？」

半分は冗談だ。

「とにかく、そっちも何とかしてみよう。
よっぽどのことが無い限りは、返却にも応じるはずだ」

「何か策でも？」

「いや、俺が一度襲撃したことは知られてるだろうから、
それを利用する。『もう一回襲撃するぞ』ってな」

今度も、真正面から。
それも、周囲の損害を一切気にせず――だ。

……とはいえ。

仮にも生徒会長になどなろうとしている人間が傷害など、
冗談でもあってはならないことだ。

あくまで「そういう手もある」という点だけ臭わせて、
交渉でのみ使う……しか無いだろう。

本当に面倒だ。

こういうことを考えるのが面倒だから、
簡単に尻尾切りできる末端構成員の方が良かったんだ。

汚い仕事をするのは、俺の役割だから。

「うわぁきたない流石先輩きたない」

「忍者じゃねえんだぞ」

「忍者より身体能力の高い人が言っても説得力無いですよね」

「その身体能力を使わないためにも会話で治めるんだろう。
……それより藤原さん、皆は大丈夫なのか？」

主な問題は、どちらかと言えばそちらだ。

「アナタのオトモダチなら全員無事。
今は、校舎の方にいるわ」

「そうか。……良かった」

とはいえ、俺が間に合っていれば、どうにかなったかもしれない問題だが。

「ともあれ、これでカードは揃ってきたかな」

「はあ。カードなら無駄に持ってますが」

そっちの意味じゃない。

「重要なのは手だ。奥の手、更に奥の手。秘策。何でもいい。とにかく、『手』は一通り揃った」

反撃。転進。逆襲。

表現は何でもいい。要は、事実が重要なのだから。

さて、と軽く息をつき、呟く。

「反攻開始（オープンコンバット）だ」

＊　＊　＊

「あー、あー。テストテスト。

……オーケー。只今より、緊急放送を行います」

あれから数分後、アカデミア校舎内部の放送室にて、
俺は校内全域に向けての放送を行っていた。

内容は、言うまでもない。
生徒会の設立を、宣言するためのものだ。

「オベリスク・ブルー2年、御堂和真です。
本日は、全校生徒へお知らせがあります。
……本日より、デュエルアカデミア本校にて、
暫定的に生徒会を発足することが決定しました」

外からざわめきが聞こえてくる。
驚きか、あるいは疑問か。

いずれにしても、今の俺には関係ない。
ただ、告げるべき言葉を放つ。

「構成員の詳細は、以後発表を行います。
ですが――この場で、生徒会会長として、宣言します」

ただ一つ。これだけは――言わなければならない。

「デュエルアカデミア本校は、光の結社の存在を認めない。
故に――今後、我々は結社に対して徹底抗戦の構えを取ると」

生徒会、ではなく。アカデミア、でもなく。あくまで――我々。

これならば、いざという時は俺の独断専行ということで済ませられる。

だが、言うなれば、そう。これは――。

「――――宣戦布告だ」

53束目：宣戦（後書き）

そういうわけで、デュエルパート無しのカオス話でした。
我ながらこれはひどい。色々と。
とはいえ、とりえあず話を色々とはしょって進めました。
結社編第二章開始といったところでしょうか。
もう少ししたら修学旅行編に移る予定です。

劇中で色々と言及がありましたが、
御堂の運動能力はそろそろ人間超えそうです。
でもデュエルくらいしか役に立たない世界ですので、あまり意味はありません。
しかし、それでもコブラやアモンガチでリアルファイトして、
それでも普通に勝てるくらいの実力があったりします。蹂躙できます。
リアル「残像だ」ができる男です。既に人間じゃない。

とりあえず、次回は普通にデュエルになると思います。
しかし私のことです。前言撤回する可能性も否めません。
というより、他の事柄に関しても前言撤回する可能性が。
主に精霊関係とか。デッキ関係とか。

でも間違いをしているだけなんで（ｒｙ

とはいえ、実際のところ、色々と考えてる最中だったりします。
ＶＳデッキ破壊といつものシーンの延長、
修学旅行先決定デュエルと、どれがいいでしょう。

個人的には、修学旅行に行ってもいいのでは、と思っているのですが。

ちなみに、今後御堂の主力は増えていきます。
サイダー以外でも。

今回の話のネタですが、色々と分かりづらいものばかりチョイスしました。
何故でしょう。でもあやかしびとは名作だと思います。
あとバルドシリーズも名作だと（ｒｙ

ということで、あとがきまでカオスにして今回はこのあたりで。
それでは。

５４束目：悪鬼（前書き）

調子に乗りすぎました（私が）。
今回もカオス成分増し増しです。

５４束目：悪鬼

ワーカーホリックという言葉がある。

いわゆる仕事中毒という言葉を欧米風に言い換えたものだが、
私生活を犠牲にしてまで仕事に打ち込んでいる状態を指す言葉である。

自身の健康や家族すらも犠牲にするほどにもなると言うが、
原因は、ただ単純に仕事が好きであるとか、そういったことだけではないだろう。

少なくとも、長時間仕事から離れられないことを経験し……というか、
現在進行形で仕事を行っていると、そのことがよく分かる。

仕事が多ければ、当然ながらそこから離れられない。
早く仕事を終わらせようと躍起になる。
そして、仕事を終わらせたと思えば、すぐに次の仕事が入る。
無限ループとも言えるかもしれない。

「……」

生徒会室――と言っても、小さな教室を貸してもらったものだが、
この部屋の中には、俺以外には、誰一人として人間はいない。

……人間がいないだけで、それ以外のものは二人ほどいるが。

さて、他のメンバーがどこへ行ったかという点についてだが、
「基本的に」二人一組で結社への対抗に当たってもらっている。

現状はレイと藤原さん、六条と吹雪さん、委員長は単独という構成だ。
レイと藤原さんはワンターンキルデッキ同士という相性の関係、
吹雪さんと六条に関しては、単純な能力の問題。
委員長は……言うまでもないだろう。
フルバーンで焼き尽くしてしまってくれ、と言ってある。
メタに対するメタも積んでおいたし、大丈夫だろう。

ここまでに倒した結社の構成員は7人。
俺が最初に2人倒し、あとはそれぞれが倒したという報告が入った。
ここまでやって分かったことは三つ。

一つに、ただデュエルで倒しただけではだめだということ。

二つ目に、そのアイデンティティを崩壊させるなど、
精神的に大きなダメージを与えることができさえすれば、、
あるいは、という程度ではあれど、可能性はあるということ。

三つ目に、もしも引き戻した場合にも、斎王の能力によって、再度、光の結社側に戻っていく可能性があるということ。
ただしこの場合、正常な判断力を失うためにデュエルの腕は著しく落ちる。

これらの法則は、予測していないこともなかった。
実証を果たしたのは吹雪さんのペアだ。
何故かイライラしていたらしい六条が相手に暴言をぶつけつつ、デュエルにも勝利してみせて勝ち誇ってみたところ、一瞬ではあれど元に戻ったらしい。

個人的には、何故六条がイラ立っているのかも知りたいところだが、その辺についてはとりあえず置いておこう。

「……ふぅ」

これで、始末書が計４９枚、結社に対するレポートが７３枚。
そろそろ電話が来る頃だろうから、更に始末書が増えて５１枚……だろうか。
物品の破損が２７件、傷害は１４件、セクハラ及びその他が８件。
明日を迎えるまでに俺は生きていられるだろうか。

と、そんな折に、やはり着信アリ。

相手は、なんというか当たり前のように六条だった。

「もしもし？」

『もしもしー。あ〜ー、先輩ですよね。
こっちでまた2人倒しましたんで』

荒んでるな。いや、仕事を依頼した俺が言えることじゃないんだが。

「そうか……状態に変化は？」

『今んとこ無しですが』

「被害状況は？」

『何枚かカードがブチ破られてましたよ。リストの方は……』

「いや、いい。始末書は俺の方で作っておく。
カードの内容までは詳しく触れなくていい」

これまでの話を総合するに、
洗脳された奴らは選民意識を加速させられているようだ。

故に、用済みになったカードや、あるいは使えないカード、
そういったものを破棄するといった行為がうかがえる。
また、相手が頑なな態度に出ると、強引な手段に出ることもある。

「ともあれ、よくやってくれた。
……そろそろ、一回戻ってくるか？」

『いえ、まだまだ倒します。
なんかムカつきますし』

ああもカードに対して軽率……というか、
乱暴な扱いをしていることに、少なからず怒りを感じているのだろう。
イライラも、このせいかもしれない。

「無茶はするなよ。あと……負けないでくれ。頼む」

『そう簡単にこの私が負けるとお思いで？
てか、先輩に心配されるなんて、珍しいこともあるもんですね。
にひひっ』

先程と打って変わって、妙に機嫌を良くしたらしい六条。
何が琴線に触れたのかは分からないが、
精神的に持ち直してくれたのなら万々歳だ。

『ちゅーか先輩も気を付けてくださいよ。
連中、本当に何してくるか分からないんですから』

「そのあたりは理解してる。……理解はしてるんだが」

言いかけたそのとき、部屋の扉が勢いよく開かれる。

「御堂和真、覚悟ぉ！」

「お前も早く光の結社の素晴らしさに気付くがよぉぉぉい！！」

こういうヤカラを相手にしていると、どうしようもないというか。

『カズマさん！』

扉付近で見張っていたスズが声を張り上げる。
書類の山のせいか、この位置からでは扉の方に目を向けられない。
そのため、スズとイレンに入口を注視しておくように言っておいたのだった。
……今回に関しては、あまり意味は無かったようだが。

「スズ、一旦下がってくれ。
……悪いな、六条。こっちも厄介ごとだ」

『せ、先輩！？　何かあったんですか！？』

「襲撃だよ。ある意味意趣返しかね？
どっちにしても、面倒に変わりないが」

これで、俺がここに籠っている間に3度目だ。
しかも今度は二人……ただしメイン格とは到底思えないキャラクター。

確か、名前は……。

「麻川と木島か。……この忙しいときに、よくもまあ来れたものだ」

「お前が忙しかろうとなんだろうと関係あるものか！
さあデュエルだ御堂！　今日こそ、そのいけ好かない態度を崩してやる！」

「くっくっく……どんなにお前でも1対2では勝機は無い！」

……参ったな。さっき、扉が勢いよく開かれたせいか、
扉の一部が破損してしまっている。

また始末書だ。これで何枚だ？　52枚か。

「さあどうする！　どっちから先に――」

「面倒だ。二人まとめて相手になってやる。
変則サバイバルだ。……文句はあるまい？」

2対1。
圧倒的優位に立つ以上は、その申し出を断る理由は無いだろう。

「へ、へへ……なら、それでいいぜ。
最後のプレイヤーから攻撃できるルールでどうだ？」

「いいだろう。……だが」

デュエルディスクを装着し、デッキを収める。
ふたり。だが、それ以上ではない。

三人なら、少し厳しいかもしれないが。

軽く息を吐き、首を回す。
ごき、と骨が鳴った。そろそろ肩が凝りそうだ。

「生徒会長として、宣言する。
お前たちが俺と相対したその瞬間、俺は『敵』だ。
躊躇も遠慮もない。目の前のお前たちを殲滅するだけ。
ただ、俺の持てる全力を以て――――叩き潰してやる」

決意終了。
宣言、終了。

戦闘開始（オープンコンバット）。

「――――決闘（デュエル）！」

「でゅ、決闘（デュエル）！」

「おい、ちょ……決闘（デュエル）！」

先攻は麻川。次に木島。
俺は、順番的には最後、と。

「こっ……後悔させてやらあ！
俺のターン、ドロー！　俺は手札から、《代打バッター》を守備表示で召喚！」

【《代打バッター》　攻　１０００　／　守　１２００】

「カードを2枚セットして、ターンエンドだぜ」

代打バッター……ということは、まず間違いなく【昆虫族】だろう。
その内容にもよるが、パワー偏重の構成だろうと予測はできる。

「けっ……俺のターン、ドロー！
まずは《フォトン・ベール》発動！
手札の《忍者マスター　ＳＡＳＵＫＥ》、《サンライズ・ガードナー》、
《シャインナイト》の３枚をデッキに戻すことにより、
《デイブレーカー》３枚、手札に加える！」

光の結社だからだろうか。
斎王も含め、どうもカイトが使っていたカードが多いような……。

「そして《切り込み隊長》を召喚するぜぇ！」

【《切り込み隊長》　攻　１２００　／　守　４００】

「切り込み隊長の召喚時、手札からレベル４以下のモンスターを特殊召喚できる。
俺ぁ《デイブレーカー》を特殊召喚だ！」

【《デイブレーカー》　攻　１７００　／　守　０】

……そういえば、これでデイブレーカーの効果を生かすことができるのか。

「デイブレーカーの効果発動だオラァ！
特殊召喚成功時、手札から《デイブレーカー》を特殊召喚できる！
もう1枚来やがれ！」

【《デイブレーカー》 攻 1700 ／ 守 0】

「オラ、ついでにもう1枚だ！」

【《デイブレーカー》 攻 1700 ／ 守 0】

これなんてカイト？
……いや、戦術の一つではあるが、これは無い。
何よりディスアドバンテージが半端じゃない。
手札も尽きるし、打つ手もなくなる。

「《連合軍》を発動！ 俺の場の戦士族モンスターは、
俺の場の戦士族・魔法使い族の数×200ポイント攻撃力がアップする！

それぞれ攻撃力８００アップ！」

一族の結束と同等の上昇値――大量展開の目的はコレか。

しかし、既に手札はゼロ。

攻撃力を上昇させただけなのだとしたら、流石に少しアホらしい。

「ターンエンド！」

いいのか、アレは。

まあ、俺が動きやすくなるだけいいとでもしておこう。

「俺のターン――ドロー」

代打バッターは、後続を呼ぶ能力を持つ。

戦闘破壊でもなんでもかまわない。タイミングを逃しさえしなければ。

そして、もう一方は――単純に強化しただけとはいえ、

攻撃力２５００が３体と２０００が１体。

状況が悪い事は言うまでもないだろう。
綻びから、突き崩していくか。

「永続魔法、《アポート》を発動。相手の場にのみモンスターが存在するとき、
８００のライフを支払うことで、手札からサイキック族を特殊召喚できる。
俺は８００ライフを支払い、《スペースタイムポリス》を特殊召喚！」

【《スペースタイムポリス》　攻　２３００／守　１５００】

妨害は――無い。

仮にあの伏せの1枚が《激流葬》だとしても、今使うことはできないだろう。
相方とも言うべきもう一人のプレイヤーの場を、全て流すことになるのだから。

「スペースタイムポリスの特殊召喚に成功したとき、
相手の場に表側表示で存在するカード1枚を除外する。

《切り込み隊長》を除外する」

「しまっ……」

「更に、《緊急テレポート》を発動。手札、またはデッキから、レベル3以下のサイキック族モンスターを1体特殊召喚する。デッキから《サイ・ガール》を特殊召喚！」

【《サイ・ガール》　攻　５００　／　守　３００】

「レベル5、スペースタイムポリスに、レベル2、サイ・ガールをチューニング。――現れろ、《サイコ・ヘルストランサー》！」

【《サイコ・ヘルストランサー》　攻　２４００　／　守　２０００】

これで、最低限の打点は確保完了。

今回のルールの特性上、俺のターンから攻撃は可能だ。

実質的に、相手の場は１０のモンスターゾーンと、１０の魔法・罠ゾーンが存在していると同義だ。

更に召喚権は2度、カードを2枚ドローできるというオマケもついている。

多少厄介だが――それだけだ。

「《ミラクルシンクロフュージョン》を発動。
場のサイコ・ヘルストランサーと、墓地のサイ・ガールを除外。
この2体で融合を行う。現れろ、《アルティメットサイキッカー》！」

【《アルティメットサイキッカー》　攻　２９００／守　１７００】

次元の壁を突破し、超能力の魔獣がその姿を現す。
「破壊」されないという破格の効果を有し、
更には貫通・回復の効果までもを持つ、凶悪なモンスターだ。

「スペースタイムポリスの効果だ。このカードが墓地に送られたとき、
特殊召喚時に除外したモンスターを場に戻す。……セット状態でな」

「え……」

驚愕の表情を見せる木島の態度に、口角が持ち上がる。

どうやら、俺の行動の意図に気付いたらしい。

……今更遅い、というのが、俺の見解だが。

「――――バトル。アルティメットサイキッカーでセットモンスターを攻撃！」

「ぬわあああぁっ！！」

アルティメットサイキッカーの吐き出す黒い炎が、切り込み隊長を焼き尽くし――その上で、ライフポイントにもダメージを与える。

差分は２５００。よって、２５００のダメージが、木島へ向かう。

「アルティメットサイキッカーが戦闘でモンスターを破壊したとき、そのモンスターの攻撃力分、俺のライフを回復する。

よって、俺は１２００、ライフポイントを回復する」

最初のアポートの効果は完全に帳消し。

これで、俺のライフは４４００となる。

「カードを2枚セットし、ターンエンド」

「ぐ……な、ナメてんじゃねえぞ！　俺のターン、ドロー！
そのテメェの切り札、この場でブッ潰してやる！
《一族の結束》を発動！」

結束――となると、昆虫族単体のデッキ、ということか。

しかし、現状は墓地にモンスターは存在しない。
となると、何かしらで２９００を超えるよう、
墓地にモンスターを送りつつ、何か出すと見るべきだが……。

「《トゲトゲ神の殺虫剤》を発動し、昆虫族モンスターを全て破壊
……。
そして、代打バッターの効果を発動！　墓地へ送られたとき、
手札から昆虫族モンスターを特殊召喚できる！
来いよ、《デスサイズ・キラー》！！」

【《デスサイズ・キラー》　攻　２３００　／　守　１６００】

バッタに導かれるようにして、巨大なカマキリが降り立つ。
攻撃力は、結束の効果で強化されて３１００――。
アルティメットサイキッカーよりも、高い。

「更に《リミット・リバース》を発動、墓地の《代打バッター》を特殊召喚！」

【《代打バッター》　攻　１０００／守　１２００】

「そんでもって《即神仏》発動！
代打バッターを墓地に送るぜ！」

少し、マズいか。

あのカードは、正直に言ってしまえば、あまり利用価値を見いだせないカードだ。

と言っても、何一つとして意味が無いわけではない。
しかし、自ら場のモンスターを墓地に送ることにより、
そのモンスターの「墓地へ送られたとき」発動する効果を、
タイミングを逃さずに発動できる。

ただ、その効果の性質上、《デストラクト・ポーション》の方が使

いやすいことは間違いない。
あちらは効果処理を「同時」に行うため、タイミングを逃さない。
……もしかして、《デストラクト・ポーション》を持っていなかったのだろうか。
そんな無駄な思考もわいてくる。

「そして代打バッターの効果により、
手札から《セイバー・ビートル》を特殊召喚！」

【《セイバー・ビートル》　攻　２４００　／　守　６００】

次に飛び立つのは、刃をその身に宿すカブトムシ（ビートル）。
こちらも、やはり攻撃力はアルティメットサイキッカーの上を行く。

「これで終わりだこのクソ野郎ォ！
セイバー・ビートルで、アルティメットサイキッカーをこう――」

「当たり前のように他人を貶めるな。
伏せカード（リバース）、《突進》を発動。　エンドフェイズまで、
俺の場のモンスター１体の攻撃力を７００ポイント上昇させる」

「――げきィ！？」

「高攻撃力に対する対策を怠っているとでも思ったか。
元々の攻撃力が高いモンスターを使っているから使わないと断じたか。
いずれにせよ、それは油断であり過ちだ」

攻撃力が高いモンスターを出すのであれば、まず出すのを妨害させるな。
出てきた後は、まずはそれを維持することを考えろ。
攻撃力を――――超えさせるな。

ハイパーサイコガンナー。
アルティメットサイキッカー。
メンタルオーバーデーモン。

数々の高攻撃力のモンスターを擁するこのデッキの弱点は、
何よりも「攻撃力を超えられること」であろう。

例示すれば、攻撃力３０００の集団を擁するデッキがあったとする。
そして、１ターン目にでも攻撃力３０００のモンスターが５体並んだ。

――が、次の相手のターンに３１００の攻撃力を持つモンスターが出れば？
そして、元の攻撃力に満足し、破壊効果を持つモンスターも、
ましてや攻撃力上昇効果を持つカードさえも投入していなかったら？
次の瞬間には、勝負が決する。

「アルティメットサイキッカーの効果だ。
戦闘で墓地に送ったモンスターの攻撃力分、ライフを回復」

セイバー・ビートルの攻撃力分、２４００。
これで俺のライフは６８００――。

対し、麻川のライフが削られ、残りは３６００。
大した損害は与えられていない。

「クソが……！　ターンエンド！」

「お……俺のターン！
俺は手札から、《ならず者傭兵部隊》を召喚！」

【　《ならず者傭兵部隊》　攻　１０００　／　守　１０００　】

「へ……へへ……攻撃力が高い、だぁ？
関係ねえよ、破壊しちまえば！　直接除去すればァ！
関係ねぇんだよぉ！　傭兵部隊の効果発動ォ！
傭兵部隊を生贄に、相手モンスターを破壊する！」

「ばっ……やめろ！！」

正常な判断を欠いた木島のその行動を、麻川が声で制す。
いや、制すべく動いた。しかして、それは届かなかった。
大挙し押し寄せる軍勢が、アルティメットサイキッカーを埋め尽くす。

――――直後、大群は黒炎に包まれた。

「な……ん……だとぉ！？」

「アルティメットサイキッカーの３つの効果。
貫通。回復。……そして、破壊効果への耐性。
忘れたか。あるいは確認を怠ったのか？」

それとも、あるいは――。

「知り合いだから、互いに知っているからと、この俺が手心を加えると思ったか」

だとすれば、それは侮辱と取るべき態度だった。
だとすれば、それは愚考と取るべき思考だった。

俺はそこまで舐められたか――――――!!

「巫山戯（フザケ）るなよ結社。戯（たわ）けたことをぬかすな。
鬼に逢っては鬼を斬り、仏に逢っては仏を斬る。
俺は立ち塞がる全てを敵と見做す。敵は全て潰し刻む。
――――そこに例外は無い」

義務。
それは、俺の義務だ。

仮にでも人の上に立つと、そう決した瞬間に得た、俺の義務だ。

敵は全て倒す。

表情が歪んだと、そう感じた。
笑みに。否。
――――凶相に。

「――――っ、……ぁ、あ」

声が出ないのか。
あるいは出せないのか。

身体的現象か心理的な問題か。

がくがくと、顎が震えている。かちかちと、木島の歯が鳴る。

この男は、既にターンを進行できない。
そうする理由が無い。

ディスクが、既に終了（ターンエンド）を宣言していた。

次は――俺の番。

「俺のターン――ドロー」

手にもたらされるのは最善の一手。
最早思考の必要性も認められない。

「伏せ（リバース）――――《異次元からの帰還》。
除外された《サイ・ガール》、《サイコ・ヘルストランサー》を、ライフの半分を引き換えに、俺の場に特殊召喚する」

【《サイ・ガール》　攻　５００　／　守　３００】
【《サイコ・ヘルストランサー》　攻　２４００　／　守　２０００】

「サイ・ガールの効果。除外された状態から特殊召喚に成功したとき、
デッキの上から1枚を、裏向きのままに除外する」

サイ・ガールの持つ疑似ドロー効果。
現状においてはほぼ機能しないだろうことは明確。
しかし、状況に華を添えるのもまた確か。

「レベル7、サイコ・ヘルストランサーに、
レベル2、サイ・ガールをチューニング。
――――現れろ、《ハイパーサイコガンナー》！」

【《ハイパーサイコガンナー》　攻　３０００　／　守　２５００】

サイ・ガールの効果によって除外されたカードが手元に渡る。
と同時に、その姿を現す超能力の射手――。
攻撃力は３０００。だが、不足。
この状態では、仕留めきれない。

「《最古式念導》を発動。デスサイズ・キラーを破壊する」
「……ッ！？」

そうして、最古式念導の効果処理を続ける。
俺に１０００のダメージ。３４００残った内の１０００。安いものだ。
そしてこれが――最後の一手。

「永続魔法を発動。――――《フューチャー・グロウ》！
墓地のサイキック族モンスターを除外し、そのレベル×２００、
場のサイキック族モンスターの攻撃力を上昇させる。
レベル７、サイコ・ヘルストランサーを除外する……！」

上昇幅は１４００。
ハイパーサイコガンナーの攻撃力は４４００に。
アルティメットサイキッカーの攻撃力は４３００に、それぞれ転じた。

「終いだ。アルティメットサイキッカーで直接攻撃（ダイレクトアタック）！」

「う、うあ、うあああああっ！！」

黒炎に包まれ、麻川のライフポイントは全損――。
つまり、ひとまずの勝利となる。

まだ――ひとり、残っている。

「――――ハイパーサイコガンナーで、デイブレーカーに攻撃」

攻撃力の差は、２１００。
木島の残るライフは、１５００。つまり、防げるはずも無し。

一筋の光条が、「敵」の姿を吹き飛ばした。

「……――――悪……鬼……！！」

ただ一つの、その言葉を残して。

＊　＊　＊

「今日だけで何枚書かされた。５０枚か。８０枚か。
いや、あるいは１００をとうに超したか」

「先輩、独白漏れてます。つーかそんなに始末書書いたんですか」

「はっはっは。現在進行形だ」

「御堂君、君はどうしてそこまでやれるんだい？」

「生徒会長と呼ばれるからにはそうしないとならないんですよ吹雪さん。
というかそう思うならまず手伝ってください」

あれから数十分、もとい数時間は経過しただろうか。

ともあれ、日も沈みかけてきたころ、生徒会の面々は生徒会室に集合していた。

これまでに書いた始末書は通算７６枚。
そして、レポートも更に増えて１０３枚。
通算１７９枚の４００字詰め原稿用紙を書かされたのだった。
腱鞘炎になっていないのが不思議なくらいだ。
いずれなってもおかしくないが。

「御堂君、そちらの様子はどうでしたか？」

「襲撃はあったけどその程度。全員お帰りいただいた」

ただし、強制的に。

「よく大丈夫だったね」

「三沢や明日香が来たわけじゃないんだ。
そう簡単に後れをとわけにもいかない」

「……相手の方だよ」

義妹　（扱い）に自分の心配でなく相手の心配をされた。

「……そういえば、妙な噂を聞いたのだけれど」

ふと、思い出したように藤原さんが口を開いた。
筆を動かす手を止めず、言葉に耳を傾ける。

「どしたんです？」

「カズマの事。結社からは、妙な名前が付けられていたようよ。『悪鬼』とか、『死刑執行人』とか、『魔王』とか」

「ぶ、物騒な名前……」

「どこの村正ですか。というかこの短時間でどんだけ名前拝領してんですか」

「俺が知るか。挑まれたデュエルに応じてただけだ」

適当に相手をしているうちに、何故かそんなことをのたまっただけだ。
それが広まってしまった以上、俺に手の施しようは無い。

……しかし、後半二つは聞いた覚えがないぞ。

「この先いくつ別名が増えていくんですかねー。
いずれ４７通りの名を持つことになるのか、
あるいは７２通りの名前持ってたりして」

「そういう妄想は後にしろ」

「ええい、この有珠が妄念、断ち切れるとお思いか！」

「１０秒間だけ付き合ってやる。
その妄念を殺して解（バラ）して並べて揃えてブチ晒す」

「装甲悪鬼アクセルフォームｉｎ人間失格ｗｉｔｈ幻想殺しとか本気で殺されますよねそれ」

最初にネタを振ってきたのはお前だろうに。
あと、俺は魔を断つ剣の方が好みだ。
あくまで好みなだけで、優劣は無い。

「……それはそれとして、不可解なことがいくつかある」

ふと思い立ち、皆に対して言葉を向ける。
果たして、この違和感は俺だけが抱いているものかどうか。

「何故奴らは夜に活動しないのか？
そのあたり、多少ならず気になっているんだが」

「そういえばそうだね。彼らは夕方以降は活動を行っていない。
散発的に被害は見られるけどそれだけだし」

俺の言葉に吹雪さんが同意を示す。

「単に出歩く人間が少ないからでは？
私たちを含め、生徒は皆寮に戻っているはずです」

「確かにそれもあると思う。ただ、部活動を行っている人間は、
夕方以降も学校に居残るか、もしくは運動場にでもいるはずだ。
そういった人間が狙われないとも限らない」

「……あいつら宗教っぽいですし、そういう戒律でもあるんじゃないですか」

「その可能性も気にはなるが現実的じゃない。
ありえないと断じきれないのが恐ろしいが」

「光」の結社だから日中に動くなどと、冗談にしては笑えない。

「『準備期間』と取るべきなのかもしれないな。
洗脳を着実なものにするための、あるいは俺たちを攻撃するための」

「どっちも厄介ね」

「突入も不可能だし……な」

虎穴に入らずんば虎児を得ずとは言うが、
その「虎穴」の虎が所狭しとひしめいていては虎児を得る前に死んでしまう。

となると、今できることは各個撃破。
幸い、倒した結社員は全て戦力を削がれている。
これまでと同等の活動は不可能だろうと推察できる。

しかし、それではほとんど効果が無いことは自明。
であれば、元から断つべきだろうこともまた自明。

ただし、その「元」である斎王とは戦えない。
あの場面、俺が勝利したのは一種の奇跡だ。

本来ならば十代以外に勝ちえない相手。

加え、その時が来ていない。

奴と事を構えるのはジェネックス最中。

それが始まってすらいない現状では、どうしようもない。

「こう、『いあ、いあ！』とか言って神を呼び出して収拾を」

「そりゃ邪神だ」

しかも持っているから余計にタチが悪い。

せめて呼び出すならアバターかイレイザーにしろ。持ってるから。

ともあれ。

今は束の間の休息ということで、とにかく結社の襲来に備えよう。

――書類の山に、心が折れるより前に。

否、手首が折れるより前に。

後日。

本当に悪鬼呼ばわりされた瞬間にあの口上を述べてしまって、周囲を戦慄(おのの)かせたのは、完全に黒歴史にしてしまおうと思う。

５４束目：悪鬼（後書き）

邪念編購入してきます（挨拶）

というわけで５４話でした。
村正プレイしながらだったのでこうなってしまいました。
もういいやと妥協したのは先程です。もういいや。

ということで宣誓回です。
御堂が色々決意表明しました。そのうち「塵殺」とか言いそうですが。
というかあちらで「御堂」と連呼されていたので混ざりました。
本職の方々は偉大です。

なんとなく、御堂がサイキックデッキを使っていると、
毎度のように相手に恐怖を与えているような気がします。
アルェー？

とりあえず、御堂の仕事能力は高いはずです。
しかし、人の上に立つ人間は能力が少し低いくらいがいいとか。
他人に任せずに全部自分でやってしまうからとも言います。
今回のことに関しても全部自分が引き受けたという裏設定が。
御堂がこうして苦しんでいるのもある意味で自業自得でしょう。多分。

相手は昆虫族と戦士族デッキ。
両者とも種族統一デッキでした。

当初のプロットでは疑似タッグでデュエルするつもりでしたが、
「これだと勝つのが普通じゃね？」ということになり、
急遽サバイバル（実質２対１）に変更。このようになりました。

ＴＦルールだと一族の結束が使えなくなるんですよね……；
予定ではライフも８０００ＶＳ８０００、フィールド・墓地共有、
御堂はデッキ一つで相手は二人で行う、という疑似ＴＦでした。

そうなると、アルティメットサイキッカーに勝てなくなりますので、
このような形式と相成りました。
本来なら女戦士使えばいいだけですけども。

毎度のことですが、今回のデュエルにも穴がありそうです。
私ですので。

どこかで気付いていないかと思います。
特にライフ変動が激しいと間違いそうです。
どこかしら気付かれた部分がありましたらご一報いただけると幸いです。

55束目：試行（前書き）

今回デュエルは中途で省略します。
あらかじめご了承ください。

55束目：試行

「却下」

この日の俺の仕事は、
まずはじめにこの一言から始まらざるを得なかった。

理由は特にない、などと言うつもりは毛頭なく、
むしろ純然たる理由があるのだが、それはそれ。
世界の成り立ちに関わる部分なのでどうしようもないという。

とりあえず言えること。
もう一声。

「却下だ」

何度言われようとも、そのスタンスは変わらなかった。

元々変えるつもりも無し。というより、変えてはならない。
何故だ？　と、眼前の男――三沢が問いかける。
何故も何もあるものか。

「……『修学旅行先を自分たちで決めさせろ』？
そんな要求が通ると思うのか。俺が通すと思うのか。
鏖（みなごろし）にするぞ」

「瞬時に恐ろしいことを言ったな！？」

「そう思うならそうなんだろう、お前の中ではな。
俺は恐ろしいことを言ったつもりは無い」

ただし後半を除く。
自分でも恐ろしいことを言っていると理解できるのだから恐ろしい。
……実行できそうで。

「……何度でも言ってやる。『却下だ』。
そもそもそうするだけの理由も、意義も無い。
修学旅行先は全校生徒による投票、及び多数決で決定する。
僅かでもその権限があると思うなら大義を示してみろ。
できなければ鏖殺（おうさつ）だ」

「前半はともかく後半から物騒に！？
いや、だが我々は絶対に満足できる場所を」

「あ〝ぁ？　お前らが学校の備品ブッ壊してくれてるせいで、
俺が何百枚と始末書書かなきゃいけないんですけど。
それとも弁償できるのか？　俺の時間を返してくれるのか？」

批難の気を前面に出しつつ、書類に文字を書き連ねていく。

――カリカリカリカリカリカリカリカリ――。

俺の気持ちの苛立ちを現すかのように、ペンの動きが早まる。
実際イラ立っているのだから仕方ない。

「だ、だが、それは奴らが勝手に」

「勝手にやったこと、か？　だったら余計に悪いだろうが。
何故抑えるべき対象を抑えない。勝手にやった？
ンなこたぁどうでもいい。お前らは管理すべきものの管理を怠った。
申し開きがあるならしてみろ」

「……」

「刺殺、絞殺、撲殺、斬殺、圧殺、殴殺、銃殺、惨殺、狂殺。
どれでも選べ。どれかを選べ」

「僅かに間が空いただけで物騒なことを!?」

「弁解に四秒以上の間が開いた時点で、それは既に『言い訳』だ。本当に釈明の理由があるのなら、即座に言い出すことができるはず。

できないということは――つまり、そういうことだろう」

言い訳を考えているからこそ、即座に答えが出ない。

せめて「違う」とだけでも言えば、それでいいのに。

できないということは、批難される謂れがあるということだ。

「帰れ」

「っ……」

「帰れ。三度は――――言わん」

言わせるな。……頼むから。

あともう僅かでも、俺に怒りを抱かせないでくれ。

そんな意思を持ち、三沢を睨み付ける。

「……」

そして、無言のままに、三沢は部屋の外へと退出した。

きりきりと、腹の虫が、頭の中の歯車が暴れまわっている。

苛立(イラ)つ。

厚顔無恥。そう言うのだろうか。

奴らの行動に、あるいはその思想に、

何一つ疑いを抱いていない奴らに、苛立つ。

「……く、……っ……」

ギリギリと、頭が警鐘を鳴らしている。

これ以上は、危険だ。

そろそろ休みたい。しかし、休むわけにもいかない。

三沢だけでない。これまでにも、何人も結社の構成員がこの場に来た。

その度に追い返し、その度に仕事を中断してきた。

四人目からは数えることをやめ、仕事に没頭して言葉を受け流した。

が、ストレスは来訪の度に蓄積されていたようだ。
以前からの寝不足も祟っているようだ。

『だ、大丈夫ですか……？』

「……とは、言い難い部分も、あるが」

「……無理……禁物」

「分かってる……けど、な」

スズとイレンの心配に、しかし、俺は適切な言葉を返せずにいる。
世の中にはどうしようもないものもある。
肉体の内部のことなど、それこそ手術でもしなければどうしようもない。
寝不足なのは間違いないが――それを改善する手段も、今は無し。

『少しでも眠ったら……』

「眠れば、きっと今日は起きられない。……それじゃあ、マズい」

書類仕事を全て他人に任せる羽目になる。
それは――危険だ。

委員長なら事足るだろうとも、六条ならまず不可。
吹雪さんは実力未知数で、レイは圧倒的に経験不足。
藤原さんは……コメントを差し控えよう。決して、悪いとは言えんが。

『……です』

「この程度なら、まだ耐えられる。
……その、はずだ」

「……危険……」

『だと、思います……体がもたないですよ』

「だとしても、会長という任を請け負った責任がある。
責任がある以上、行動でそれを示さなければならない」

仕事において問われるべきは、人格ではなく能力だ。
である以上、俺がどうこう考えようと変わらない。

ふう、と軽く息を吐く。

――俺という個人の意見を出すとすれば、であるが。

可能ならば、北海道に行きたい。
海の幸。広大な大地。温泉。厳寒の気候。
最後は好ましく思う要素ではないのかもしれないにせよ、
いずれもあの場所の持ち味であることは確かではある。

乳製品。海鮮。その他諸々の食品類。

イレンが喜びそうだ。無表情に。

俺としては、ああいった地方毎の美味を味わいつつ、
温泉にでも浸かり、眠って疲れを癒し、かつ周辺の観光を行いたい
ものだ。

ちなみに。
温泉を含め「風呂」というものは、決して疲れが取れるものではな
いという。
むしろ、就寝に備え、疲れさせることが本来の風呂の役割であると
か。

閑話休題。

それはともかくとして、安易に童実野町へ行くのは得策ではない。
あくまで「安易に」行くことがそうではないというだけで、
結果的に物語の進行のためには重要なことであるはずだが。

さて、このまま妨害を続けるのは得策か否か。
得策……と、言い難い部分は、無いでもない。

唐突に空から巨大なロボットが落ちてきて、
無限熱量の右拳で全部有耶無耶に吹っ飛ばしてくれれば、
色々と――俺の躊躇や怒りすら、全て解決してくれるのではないか。

しかし、そんなご都合主義（デウスエクスマキナ）は認められないし、ありえない。
だから、自分たちの力でどうにかするしかないのだ。

力の有無は、別にして。

「……」

『……ふぁ』

ふと、二人に目を向けると、二人は揃って欠伸していた。
無理もない。昨夜から俺に付き合っていたせいで寝不足なのだろう。

「……眠そうだな。先に寝てろ。
俺に付き合うような必要も無い」

「……ん」

そう返し、イレンは姿を消した。
寝姿を確認されたくなかったということか。

『あふぅ……で、でも、そうなると、カズマさん……』

「俺はいい」

『……』

「いいんだ」

心配されるのは、素直にありがたい。
……のだが、今は不要だ。

これまでは見張りを任せていたが、今は襲撃の予兆は無い。
三沢にも強く言い含めておいたし……多少は、落ち着くのではないかと思う。

であれば、今は疲れを取ってもらうべきだ。
俺は、多少は構わない。

「……こういう状況で、仕手の権限を使う理由は無い。
けどな、スズ。寝ろ。俺が言うのもアレだが、酷い顔だ」

『……』

「仮にも女の子だろ。だったら、見栄も張っておけ。
仕手でもなんでもなく、これは妹のいる兄としての意見だ」

いや。
いた――――か。

どのようにして解釈したのかは知れないが、
その言葉に対し、緊張の糸が切れたようにして、スズはソファに寝転んだ。

直後、すぅ、すぅと規則正しい寝息が聞こえてきた。
やはり、疲れていたのだろう。
身体的に子供のようだというのもあるかもしれない。
いずれにせよ、ああまで疲れていたのなら、まあ、寝かせない理由も無い。

「――――っ」

きりきりと、頭の中の歯車が回り廻（まわ）る。

直後に走る疼痛。顔をしかめてみるも、痛みは和らがない。

頭痛薬でも胃に流し込めばいいのかもしれないが、
それで治まらないと、本能がそれを告げている。

ギィィィィ――――――――――……。

錯覚だ。錯覚意外にありえない。
頭の中の歯車。高速回転を続けるソレ。
ぎりぎりと脳味噌をこねくり回し、その根幹にさえ負担がかかっていく。

だめだ。
気を抜くとすぐにでも意識を手放してしまいかねない。

まだ、たかが三日三晩。
その程度で屈するか。

さて、どうだろう。自問自答を行う。

――――ああ、こりゃ無理だわ。

そう結論付けるに3秒と要せず、俺は適当に意識を手放した。

＊　＊　＊

手放された明るい意識の代わりに、昏く熱い鋼鉄が注ぎ込まれてゆく。

影。

影たる吾の顕現が一手。

亡霊としての――私の一手。これで「転換」だ。

「ククッ……」

よくぞ。

よくもまあ。

権威主義というわけでもあるまいが。

権力の探究者という訳でもあるまいが。

よくもまあ、こうも高い位置に自身を置いてくれた。

キリヒトの行動には、いささかばかり感謝しよう。

少なからず、私に行動の自由が与えられるのだから。

ク、と喉が鳴る。

精霊と幽鬼。二つの邪魔者は、現在は動けない。

いや、自ら動けない状況を選んだのだ。

二人して同時に徹夜を敢行したのだから当然だ。

そして、平時のキリヒトならばともかく、私が介在する状況下、奴の疲労・頭痛も膨れ上がることは明白。

そうして、意識の間隙を見計らい――掌握すればいい。

馬鹿奴（ばかめ）。

胸中で軽く毒づく。

バカめ。馬鹿め。莫迦め。

奴の気性はそれなりに記憶している。

記憶違いがあったり、どこかで齟齬が発生していることも無いではないが、

元来奴は真面目な男だ。

真面目で、真面目で――そして、融通が利かない。

何処かで破天荒な部分はあろうが、それはそれ。

人間として元来持ちうる性質の一端に他ならない。

重要なのは前者。

後天的に獲得したであろうその性質は、

キリヒトにとっては不可分であり、捨て去れないものだ。

否――捨て去っては、ならないものだ。

私だけが気付いている。色々と。

キリヒト自身がすら、気付いていない事実に。

優越。だが、まだ足りない。

まだ。

――故に、私は行動を始める。

＊　＊　＊

「てっ……敵しゅぶッ！！」

叫び上げるその声は、間違いなく恐慌状態を語ると同時に、顎が打ち上げられて声を発することができない状況にあることを示していた。

道理、そのようにしたのは私であるのだが。

迅雷が如く、掌底を打ち付ける。脳震盪を起こさせるのは容易い。

心底、この肉体のスペックに恐れ入る。

どうやら、キリヒトは鍛錬を欠かさなかったらしい。

人間の限界を見極めようとでもしているのかとも思う。

無理からぬ話ではあるが。

「ふん……」

大声を出されかけはしたが、その程度。
現状、誰かがこれを聞きつけたということもなく、
私は、ホワイト寮への潜入に成功した。

潜入、と称しようとも、その実態は押し入り。
強盗、と言う方がより理に適っている。

と言っても、結局のところ、本来押し入り強盗と称されるべきは彼ら。
私がすべきことは、何一つとして変わらない。

「返してもらおう……か？」

……ふむ？

あれはそもそも私が奪ったものであり、
それを、巻き込む形で奪い取った彼らは、
強盗に対する強盗とも言えまいか。――に、報復。
さて、この場合の罪状は何なのか。そもそも先程のものは暴行罪だ。

今更考えても詮無いことか。

物陰に身を潜めつつ、元自室へ向かって歩を進める。

厳重な防備の敷かれた要塞でもあるまいが、
時折、通りかかる生徒――特に男を適当に締め落としつつ、進む。

女は素通しさせる。
キリヒトは大分枯れた性格をしてはいるが、
私は別段そうでもない。――奴の場合はいささか珍妙な性癖なのだが。
容貌の良い女性であれば目移りするし、魅力的なら劣情も催す。
ただ、加虐嗜好は無い。そのため、素通りさせておいた。

……ふむ。
この際だ。キリヒトの性癖について、少し見直してみるとするか。
奴の弱みがあれば、それも面白い。

恋愛対象（ストライクゾーン）。
８歳～２０歳。ただし、自身の年齢によって多少前後あり。
趣味（フェチ）＝胸・尻・ふとももも・うなじｅｔｃ。測定不能。
好み＝絶対領域・チラリズム・軍服・メイドｅｔｃ。同上。

加虐嗜好（サディズム）有り。
妹信仰（シスコン）。幼女趣味（ロリコン）。

総合評価――性癖・ダメ人間（ごらんのありさま）。影の変態（ムッツリ）。

最後の三つの要素だけで人間が敷いた条理（ルール）に真っ向から反逆していた。

同性愛者ではない分生産的ではあるが、血の繋がりやら成熟やら、その他諸々の事情や設定（ルール）を、まったくもって無視している。

初めてあの男を恐ろしいと思ってしまった。

奴は真正だ。どちらも。

真の幼女趣味（ロリコン）は、分け隔てない。

中学生以上に対し「ババァ」などと言わない。脳内変換せしめるのだ。

――故に、誰に対しても等価。

唯一の例外は、彼の妹だけである。

それも、「真なる」。

「さて」

遠慮も躊躇も無く、私は元自室の扉を蹴破った。

「ぬおおおおっ！？」

「ふむ……三沢大地か」

先程の来訪から十分と経ってはいまいが、
迅速に部屋に戻ってくるのは大したものだ。

前回の反応とほぼ似通ったものであるのは、どういう訳かは知らんが。

「御堂……だと!?　馬鹿な!」

「御堂……ああ、成程、得心した。勘違いだ」

「っ……まさか、あの時の!」

「おや、気付くのが早いな。だが、」

今にも飛び掛かりかねない三沢の眼前に拳を突きつける。
――それだけで、奴の動きは止まった。

「邪魔立てしてくれるな。私はただ、『忘れ物』を取りに来ただけだ。

貴様に用は無い」

――――いや？

「都合がいい。相手になれ三沢大地。
『試運転』だ。貴様を――贄としてやる」

「っ……お前……！」

舐められた、と感じたのか、
激情を表しながら、三沢はディスクをセットする。

一方、私はベッドの下に貼り付けておいた「木箱」を引っぺがした。

「箱……？」

「安心するがいい。これ自体はただの木箱だ。
この世全ての悪が封じられているわけでも無い。
――――さて」

息を吐き、木箱を破壊する。

中身を取り出し、木箱自体は捨てる。
どうせ木箱自体はどこぞの売店で購入できる程度のものだ。
――接着剤とその他諸々を用い、私意外に開錠できぬように細工しただけの。

「開錠」と言っても、所詮力任せの破壊に過ぎないが。

「始めようか、天才。その歪みを――断つことを」

三沢大地は、そのありようを歪められている。
故に――　一度潰す。

それは言うなれば、「御堂和真」という人間の総意。

この男を叩いて潰す。

その方向性に関してはともかく、事実は変わらない。

事実。――潰して、壊す。

でなければこの男は元に戻らない。
この場で元に戻ることは無い、らしいが。

……少しは、奴に協力するのも悪くない。

「「決闘（デュエル）！」」

＊　＊　＊

「ありゃ？」

生徒会室に戻ってきた六条有珠は、
しかし、そこにいるべき人間がいないことに気が付いた。

御堂和真。彼がいないのはどういうことか。
普段なら、懊悩しつつも真面目に書類に向き合っているはずだが。

「……？」

慮外の事実。しかし、実際に彼はそこにいない。
果たしてこれは何の冗談なのか、と首をかしげる。

始末書はまだ僅かに残っている。
あの男なら、それらを処理するのは容易のはず。
中途半端に終わらせ、微妙に残してどこかへ行くとは考えづらかった。
となれば。

「トイレですかね」

簡単に結論付け、有珠は自分の席についた。
――今日は、割合平和である――。
そんな考えが、有珠の頭に浮かんだ。
その裏側で、有事が起きていることも知らずに。

＊　＊　＊

「――――――――――」

絶句。

この状況を表すのに、その二文字以上に相応しい言葉があるとは思えない。

絶句。

そうしているのは眼前の三沢大地であり、私はただ、嗤っているだけだ。

何故なら、既に戦況は決した。

私にとっては――あまり、意味の無い形で。

「つまらん」

ふと、恨み言がこぼれる。

つまらん。本当につまらん。面白くない。

これでは、テストにすらならんではないか！

「どっ……」

「『どういうことだ』？　その質問に意味は無い。
貴様の油断や優越。全てが私にとって付け入る隙だった。
ただ、それだけの話だろう」

「それだけの話じゃない！
くっ……何故Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブジャスティス）じゃない……！？
あのデッキであれば、いくらでも対処できたはず！」

「そんな無用な『甘え』がある以上、貴様が私に勝てる道理は無い。
Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブジャスティス）じゃない？　愚物か、貴様。
常に同じデッキの相手を想定していたのか」

だとすれば、とんだ見込み違いだ。

こいつでは駄目だ。今のこの男では。
手加減の理由など、本来存在しえなかった。
しかし――そう、してしまったのだ。

してしまった。
手加減――せざるを、得なかった。

「ドラゴン族――――――！！　くそ、そんなことがっ！！」

「……だったら」

嘲りが浮かぶ。
呆れが浮かぶ。
怒りが浮かぶ。

――この男の才能は、今や閉じてしまっている！

「万丈目への対策を応用すればいい。
そんな単純な理論さえ、貴様には無いのか。
だったらもう駄目だ、貴様は。救いようが無い」

「貴……様ッ……！！」

吠えたてる敵を眼前にし、私は彼我の状況を顧みる。

私のライフポイントは残り４０００。
対し、三沢のライフポイントは１１００。

奴の場には《ピラミッド・タートル》が守備表示で存在するのみ。
そして、手札はゼロ。手は殆ど尽きている。

対し――私の場には、《Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）》。
そして、《ハウンド・ドラゴン》、《カイザー・グライダー》。
合計３枚。そして、魔法（マジック）・罠（トラップ）は２枚。

《未来融合―フューチャー・フュージョン》、
もう一枚は《魔のデッキ破壊ウイルス》である。
手札は残り2枚。これならばどうとでもなる。
どうとでもなるからこそ――つまらん。面白くない。

「思考を放棄した、か」

苦言が零れる。
ああ、もういい。最早制約は外そう。
今のこの男に投げかける言葉の制約を。

「――駄目だ貴様は。駄目だ。まったく、論外だ。
相手を『考察』し、進むことを忘れたその時点で、貴様は家畜にも劣る」

「ッ、……、ぁ……」

「今の貴様は何も語るな。腸が煮え返る……！
屠殺場の豚以上に惨たらしく死ね！」

言葉と共に、伏せカードを発動する。

《魔のデッキ破壊ウイルス》。

闇属性のモンスター、《Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）》を生贄とし、相手の場・手札に存在する攻撃力１５００以下のモンスターを破壊する。

当然、攻撃力１２００の《ピラミッド・タートル》も、破壊される道理だ。

「消えろ敗者（ルーザー）！　走狗（いぬ）に喰われて死に晒せッ！」

走狗（いぬ）。

猟犬（いぬ）。

猟犬（ハウンド）。

その名を持つ小竜は、鋭利な牙をもって奴のライフポイントを尽くした。

後には、静寂だけがその場に残る。

「馬鹿……なっ……！？」

「その言葉、聞き飽きた。
才を腐らせ心無く決闘を弄んだ愚物が。
相応の惨めさで朽ち果てろ」

鋭く奴に言い放ち、身を翻して帰路につく。

もはや、語るべき言葉は無い。
あとは、あの阿呆の仕事だ。

なに、躊躇はしないだろう。
そういう覚悟を、既に終わらせているのだから。
ならば、この男を元に戻すのに手段は選ばない。
敵だと認識した相手にはどこまでも冷徹になれる――。
奴がただ甘いだけの人間でないことは、恐らく私が誰より理解している。

悪鬼。そのように呼称されたこともあったが、
実際、その通り。奴の心の内には、黒々と濁った悪意が渦巻いている。

ある意味、異常な人間だとも言える。
同時に、当たり前の人間だ、とも。

表出する善意と対になるような格好で、悪意が存在する。
完全な「対」。１０の善に対する１０の悪。
その「悪」を――無理矢理、押し込めている。

押し込めているからこそ――その内側で腐り、凝り、純度を増す。
黒く、暗く――蠢き続ける。

その色は、実に私の好みで――キリヒトにとっては、忌むべきものだった。

くっく、と喉が鳴る。

まだだ。まだ足りない。
もっと、闇をそのまま抽出したような黒い色を。
もっと暗く、光すら届かないような隔絶した黒を。

私は歩き続ける。
私自身の、目的を遂げるために。

＊　＊　＊

イレン・フェアシーデンにとっては、
御堂和真という少年――その内に秘める別人格は、敵と断ずるべき存在である。
故に、その行動を察知し、対処する役目がある。そう信じて疑わない。

それらは、いつの間にやら入力（インプット）されていたイレンの思考。
否――――ある意味、使命とも言うべきものだ。

いつからそれがあったのか、イレン自身はそれを知らない。
恐らく、誰も知らないのだろう。そんな不思議な確信があった。

守護、というわけでもない。
ただ、御堂（彼）の傍に在るべし。
そんな思考が、「最初」に存在していた。

だからこそ、あの別人格を監視しなくてはならなかったのだ。
だが――しかし。人間の体を間借りしている関係上、
元々人以外のモノだった彼女にも、三大欲求が付いて回ることになった。

特に、彼女は既に食欲魔人と化しているというのは、まったくの余談だが。

当然、睡眠欲もついて回り――結果、徹夜に耐え切れずに自爆した。

（迂闊）

二文字で自分を断じ、イレンは胡乱な頭を叩き起こす。

このタイミングで「奴」が動き出さない理由があろうか。

「彼」は、間違いなく、
もう一人の監視役――本人に自覚は無い――であるスズを眠らせる。

そうすべきだからだ。そうしなければ、辛いと断ずるからだ。
だが、そうしてしまえば「奴」は動き出す。
あの男は機を窺うに長けている。故に――これを見逃すことは無い。
故に。

（迂闊）

再度、イレンは自信に喝を入れた。
最低限度の仮眠は、睡魔を丸ごと吹き飛ばすようなことは無いまでも、
遠ざけ、時間を稼ぐことには成功している。
であれば、まずは様子を見に向かうのが最善手――。

（……？）

しかし、そう思考したところで、彼女の動きは止まる。
机に突っ伏して眠る、御堂和真の姿を見たからだ。

徹夜、という意味合いでは、彼が最も長く起きている。
ともすれば、教師以上に。教師の仕事が回されているのだから、当然か。

――しかし、何故「彼」のままなのか？

僅かな疑問を抱き、しかし、安心を得たことで遠ざけていた睡魔が近づき。
再度、イレン・フェアシーデンは眠りについた。

その場に六条有珠がいたことは、頭に入っていなかった。
正直なところ、単に忘れていただけである。
それを聞けば有珠は泣いてしまいそうだが。

――――目下、イレンにとって六条有珠の優先順位は、結構に低いものだった。

55束目：試行（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「逆転」

「男が女で女が男だったらッ！！」

「唐突に何を言い出す。トチ狂ったか」

「いえ、少し思い立っただけです。
もしも私らの性別が反対だったらどうなっていたんだろう、ってのの」

「気持ち悪い事を考えるんだなお前は。
……で、どうなんだ」

「スゲェことになりました。特に先輩が」

「どういうことだ」

「いや、だってアレですよ。属性多過ぎでしょ。
黒髪ロング、一本結び、オッドアイ、料理、体術、生徒会長、
口調までトレスしたら男口調も付与しますし、優等生属性までも
！」

「……」

「体形の方までは想像できませんけど、先輩って背は高い方ですし。
仮に女の子だったらボンッ、キュッ、ボンッ！　な気がするんで
す」

「……」

「しかも主人公補正付き！　すごいじゃないですか先輩。
きっと女の子だったらモテモテでしたよ！」

「……その場合、お前はデュエル以外は根本的にダメ人間な……」

「……」

「しかも体形は小柄だ。となると、童顔で低身長。
いわゆる男の娘になっていた可能性もあるわけだが」

「……うわぁ。でも先輩も負けず劣らずでしょ。
実は隠れＳですし、ロリコンですしシスコンですし。
あれ？　ってことは、ショタコンでブラコンのドＳ姉ですか？」

「……うわぁ。でも六条には勝てる気がしねえからいいや」

「どういう意味ですかそれェ！！」

↓毎度の如く続かない。

＊　＊　＊

ということで暗躍してみる厨二病のお話でした。
ついに御堂は沈没。実際三日持てばいいほうらしいですが。
とはいえ一応注意を。徹夜は体に良くありません。
年の瀬を除いては極力行わないようにお願いします。

ついでに、三沢脱落です。精神的に。
次に御堂と戦うことになるのはいつになるでしょうか。
正直分かりそうにありません。原作と同じように進めるつもりではありますが……。

さて、作中ではあの亡霊に好き勝手言わせてみましたが、
私は三沢が嫌いだと言うわけではありません。ご了承いただければ幸いです。
いつか面目躍如の機会がある……といいなぁ（

ということで、作中でようやく御堂の性癖暴露。
あの奴がヒくほどのものです。要するにド変態のムッツリです。
まあ、肉体的には十代後半ですし、頭の中はかなり歳食ってますし、
ああなっても仕方がない、というか、ありえないこともないのではと思います。
枯れてるように見せるのも、一つのムッツリということで。

以下は余談ではありますが、第二期のこの時点で言うのも少しアレではあります。
ただ、ＧＸが終わった場合のことは考えている、ということだけ言及させてください。
具体的には５Ｄ'ｓ編です。こちらも改変含め。
それ以外にもリアルファイトな世界のものを書ければな、などと愚考しております。
特に５Ｄ'ｓに関しては、既にプロットまでできつつあるという状態。
私はどこまで先走るつもりなのでしょうか。

ともあれ、今回はこれで。
それでは。

５６束目：行間（前書き）

最近デュエル書けてないです。申し訳ありません。
とりあえず、今回は修学旅行前話です。

56束目：行間

「馬鹿ですか」

いつの間にやら作業の最中に眠ってしまっていた、その翌日。

俺は、当然のように委員長に罵倒されていた。

「いいえ、馬鹿です」

断定されてしまった。どうやら俺は馬鹿のようだ。

馬鹿か。否定はできない。

自分の健康管理にも気を配っていない。

他人に頼ろうともしない。

……馬鹿、というか、愚かか。

「すみません」
「いいえ、許しません」
許されなかった。
自然な流れではあるが、心苦しいのは間違いない。
というか――何故、俺は正座させられているのだろうか。
しかも、外で。
アスファルト舗装された地面が、俺の膝を痛め続ける。
痛いのは膝だけではなく、周囲の視線もだが。
何故俺はわざわざ外で正座をして説教を受けなければならないのだろうか。
説教を受けるのは、俺の自業自得だから仕方がないとしても。
「何で皆を頼らずに倒れるまで仕事をするんですか。
馬鹿でしょう。というか再三言いますが馬鹿でしょう」
「認めよう。馬鹿です。愚者です。
だからせめて生徒会室に戻してくれお願いします。
視線が痛すぎて死にます」

土下座である。威厳も何もあったものではない。
元々威厳なんて僅かも無かったわけだが。

その一方、某ネオグ●ンゾンが来襲したかのような威圧感。
冷や汗が止めどなく流れている。
この脳内に流れているＢＧＭは何だ。処刑されるのか。

もしもこの場に六条がいたらマジ泣きしてそうだ。
俺も泣きたい。というか逃げ出したい。どちらもできないが。

周囲からの視線が痛い。痛いというかイタい。
ともすれば視線に殺されそうだ。せめて室内でやってくれ。

「いいえ、まだダメです。いいですか、御堂君。
他人に迷惑をかけたくないという気持ちは確かに立派ですが、
それは決して他人に何かを頼んではならないということではありません。
そういった言動が他人との不和を招きますし、頼られなかった側も、
この人は自分を信頼していないのか、と少なからず傷つくことになるはずです。
誰にも頼らないということは、誰も信用・信頼していないと言うことと同じです。
だいいち、人間には限界というものがあるのですから、その辺りを――」

くどくどくどくどくどくどくどくどくどくどくどくど。

そうして始まる終わりの見えない説教。

つい話の最中に、わふーなどを呟きたくなってしまう。

絶対にしないが。

そうして、２、３０分は経っただろうか。

当事者の目線からでは分かりづらいものの、目測ではそのくらい経ったように思う。

とうに足の感覚は無い。血が滲んできたようにも見えるが気のせいだろう。

鍛えても神経系に直接作用するものはどうしようもないらしい。

「――――分かりましたか！？」

「分かったんでお願いだから教室に戻してください。

そろそろ俺の羞恥心が火を噴いて心を焼き尽くしそうです」

「……？」

「周囲をご覧ください」

そう促し、俺も同様に周囲を眺める。

ご存知の通り、俺たちは今、道のド真ん中で説教を受け、あるいは行っている。
である以上、注目を浴びるのは当然であり――――。

「……結社とか生徒とかそんなん関係無く皆取り囲んでいます」

「……ッ！？」

見る見るうちに、委員長の頬が紅潮していく。
気付いていなかったのか、あるいは周囲に眼を向ける余裕が無かったのか。
どちらにしても、これだけの衆人環視の中であれだけの演説を行ったんだ。
恥ずかしくない、なんてことはありえない。と思う。

先程まではまだ良かっただろう。
人通りの多い道とはいえ、そこまで人はいなかった。
当然だろう。授業が始まるよりも随分先に生徒会室に向かい、その途中で委員長に捕まり、お叱りを受けていたのだから。
それが、授業開始３０分前。

しかし、授業まであと五、六分となれば、人通りが多くなるのも必然。
まして、そんな中で説教を受けて／している人間がいれば、目を向

けるのは自然なことだ。
不可解に思って足を止める人間も多いだろう。あとは好奇心か。
いずれにせよ、ここまで目立っていて何もないなどということはありえない。
説教受けてる俺が羞恥心で心を擦り減らしかけるんだ。
当の本人がどう思うかは――まあ、本人次第だが。
この様子を見る限りでは、少なからず、恥ずかしがっているんだろうと思う。

「みっ、みみ、みみみみみみみ」

「未来融合？」

「御堂君！　何で言ってくれなかったんですか！？」

スルーされた。少し悲しい。

「あのお叱りの合間に口を挟めるとは思えないんだ」

「だ、だからって、せめて注意くらいはしてくれませんと」

「したよ！？　話の直前に一度言ったよ！？

聞いてくれなかったんじゃないか、委員長が！」

「……！？」

ハッとしたように、委員長は口を押さえる。

委員長、熱入りやすいからな。

講釈に集中しすぎて周囲に目が向いていなかったんだろう。

俺は悪くねえとは言わんが、

このような状況に陥ったことの一因は委員長にあるのではないか。

当然、最大の原因は俺なのだが。

「と、とりあえず戻りましょう！　そちらで話の続きを――――」

「待ってくれ委員長！」

「どうしたんですか！？」

「――――――――」

足が、動かない。

長時間、固い地面の上に正座。

休みなく。体勢も変えず。
痺れを既に通り越していた。
当然の帰結だった。

「……」

その後、5～6分ほどかけてゆっくりと、俺は委員長の手で立ち上がり、
そのまま赤面する委員長と共に生徒会室へと戻っていった。

＊　＊　＊

割と間抜けな状況から引っ張っておいてアレだが、
今から俺たちの行う会議もまた、そこまで重いものではない。
会議、などと銘打ってはいるものの、
結局駄弁っていることには変わりなく。
光の結社＝ホワイト寮への対策を協議しつつ、
今後の生徒会運営を話し合い、適当に話す。それが現状だった。

「ということでですね」

と、六条がスケッチブックを取り出す。
一枚の絵。そこに描かれているのは、若年の女性だ。
黒髪にポニーテール。着崩した女子用ブルー寮の制服を着用している。
全体的に「大きめ」で、実に女性的だと言えた。

制服は前を開き、ジャケットのようにして羽織ったかたちになっている。
その下の服装は黒のインナーで半袖。下半身は、スカートではなくジーンズ。

女性的でありながら、どことなく男性的な――。

「先輩の女体化絵です」

「お前何でそんなもん描いてんだ!?
ていうか絵ェ上手いなオイ!?」

「趣味ですし。つーかエロいですねぐへへ」

「……」

否定はしない。
……が、ツッコみ所はそれだけではない。
むしろ、重要なのはこちら。

「それ神裂さんじゃねぇのか」

「……ま、まあ、イメージしてないこともないですが。
あくまで参考にしただけですよ！　他の黒髪ポニテも混じってますし！」

「どこまで真実なのかは疑わしいがまずそれを仕舞え。
……こっちは放っておいて、本題から。結社への対策について」

光の結社の活動は、相変わらずに活発だ。
しかも、そのデッキの内容は、常に――とまではいかずとも、
俺たちへの対策に向けて投入されたかのようなカードが多い。

「メタられてますよね。意味ないですけど」

六条の発言が、ある意味で全てだった。
奴らは対策を行っているのだ。それも――少し、的外れな。
例えば。

「私を相手に《ハネワタ》を投入していたコもいたわね」

「僕が相手なのに、何故か《ゴーレム》もあったかな。
光属性のカードはあまりないのに」

――――下手な鉄砲数撃ちゃ当たる。

そんな理念を体現したかのような、異様な光景。
メタが機能していない……だけならいいが、下手にデッキスペースを割きすぎて、
仮想敵以外の相手とはまともに戦えなくなっている。

そんな相手が、ここ最近で増え始めた。

それこそ、単に「下手な鉄砲」なのか、
あるいは、明確な目的があって行っているのかは分からない。

後者の場合であれば、何らかのテスト、時間稼ぎなど考えられるが。

「そもそも、そのあたりを想定して二人組にしてるんだけどさ」

「そうだったの？」

「ああ。例えば、レイ相手に《閃光を吸い込むマジック・ミラー》を使うとする。

そうなると、光属性軸の【ライトロード】を使ってるレイは、かなり動きを封じられるよな」

「そうだね……まだそういうカードを使ってる人は見たこと無いけど」

「対して、藤原さんのデッキは、基本的に闇属性を主軸とした【儀式召喚】。

光属性のカードは……《マンジュ・ゴッド》がいるけど、それにしても、

《ソニックバード》で補うこともできる」

あとはデミスを召喚し、場のカードを吹き飛ばせば終了。

そうでなくとも、《裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）》の打点は３０００。

普通にライトロードを落として墓地を肥やし、裁きの龍を並べれば勝てそうだ。

「ライトロード、、儀式召喚、ビースト、バーン。

あとは俺の複数デッキと六条の二つのデッキを合わせて、１０はデッキがある。

可能な限り弱点の重複しない組み合わせも、相応の数ある」

「でも、被る弱点もありません？
つーか、みんな同じような弱点抱えてると思うんですけど」

言われるまでもなく、その事実は頭の中に叩き込んである。

――特殊召喚封じ。

《虚無魔人（ヴァニティー・デビル）》がその代表格と言えるだろうか。
全てのプレイヤーの特殊召喚を封じる厄介なモンスター。
その攻撃力も２４００と上級モンスターとしてのラインは備わっており、
生贄召喚を主体とするデッキ以外であれば、相当に「刺さる」モンスターだ。

特に、俺たちの場合は致命的。
俺はシンクロと融合主体だし、吹雪さんは切り札のアトモスフィアが封じられる。
藤原さんは儀式召喚自体が封印され、レイも裁きの龍を出せない。
委員長と六条に関しては例外だろう。片やバーン、
片や、《ジェルエンディオ》を使えば通常召喚も対応できるのだから。

とはいえ、特●野郎Ａチームばりに無茶苦茶なこのメンバーは止まりそうにないが。

ただ、無茶苦茶なだけではどうしようもないのが勝負の世界という

ので、
最終的に必要となるのは推定と計算、思索だ。

「特殊召喚封じのカードは憂慮すべきだな。例を挙げれば、《虚無魔人（ヴァニティー・デビル）》、《昇霊術師　ジョウゲン》、《ライオウ》、各種『結界像』、《虚無の統括者（ヴァニティー・ルーラー）》、といったところだろう」

「あれ？　全部モンスターカードだけど……」

「魔法・罠に関しては、さほど多くない。《スペシャルハリケーン》、《超古代生物の墓場》、《昇天の黒角笛（ブラックホーン）》が仮想敵と言えるだろうけど……」

《王宮の弾圧》が禁止カードとなった今、最も警戒すべきカードはモンスターカードに絞られる。魔法・罠に関しては、いずれもコストが大きかったり、あるいは抜け道が多かったりするため、この場では除外とする。

特に、《神の警告》は、ライフの半分を削られるカードだ。二度は使えないだろう。相当数のライフを工面しない限りは。

「【苦痛ワンフー】が最大の敵になると思うんですけど」

「《強者の苦痛》なら、《サイクロン》――」
「切り札（ジョーカー）！」
「……を、フル投入すれば対策にはなる」
「いきなり頭どつかないでくださいよ先輩！
ちょっとふざけただけじゃないですか！」

脳内再生してしまうから嫌なんだよ。
この先、《サイクロン》を使うたびにマダオボイスが頭に流れたらどうしてくれる。

「《王虎ワンフー》はどうするのかしら？」

「事前に除去するのが一番手っ取り早いかな。
ただ、それができない状況なら、まずは強者の苦痛の破壊を優先する。
攻撃力１８００以上のモンスターが手札にあれば、
それでワンフーは除去できることになる」

「一番単純だけど妥当なところだろうね。
そう何度も二枚のカードが同時に手札にあることも無いだろうし」

「どちらも無制限なので確率はそう低くはありませんが。
……《サイクロン》自体はつい最近無制限に戻りましたし、

さほど警戒するほどではないのでは？」

加え、その派生として《ダブル・サイクロン》、《砂塵の大竜巻》なども存在している。

実際に使ってくる構成員がそう何人もいるとは思えないし、今のところは、そういった方針だけでも決定して終わりでいいだろう。

「……対策の件についてはこのくらいでいいだろう。じゃあ次に、修学旅行の行先について」

これについては、先日、事前にアンケートを取っていた。皆で手分けして結果も集計した――のだが。

「……圧倒的大差で、童実野町に決定した」

「当然でしょうね。この学校に通っている以上、一種の聖地とも呼べるあの場所を無視することはできません」

「他の投票は……東京が３９票、大阪は２８票。北海道が１２票。沖縄は１０票。あと……ああ、海外か。これが５１票。他は……。

……おい、誰だ群馬を選択肢に入れた奴。1票入ってるぞ」

周囲を軽く見渡してみると、六条が目を逸らした。

お前か。

いや、表記が「グンマー」だった時点で予想はついたが。

「そもそも、そういう格好で準備していたわけだし、取り立てて問題は無い、と言えば無いんだが……」

「そういえば、宿泊先はどうなるんだい？今は、少し面倒くさいことになってるけど」

「ソレなんですよね、問題は。ホワイト寮はあくまで光の結社に占領された結果。

正式に認められたわけでも、ましてや認められるはずもなし。

現状、生徒は各寮に所属している状態、ということは変わりませんが」

「下手にそのままにしておいたら、ホテルが占拠される可能性もあります。

そういった部分も考察に加えては？」

「そうだな……となると、現在残っている生徒は別の場所で宿泊しよう。

流石に、修学旅行でキャンプはマズいだろうし。

六条、検索を頼む」

「フィ●ップですか私は。いえ、やりますけど」

意識していなかったこともない。

というより、無意識のうちにこの台詞が飛び出したと言うべきか。

「クロノス教諭に依頼して、レッド、イエロー寮の宿のキャンセルを頼む。

そうすれば相応の予算は捻出できるだろうし……ただ、残った生徒の数を考えると、安宿になるだろうな。

童実野町近郊の宿で、団体歓迎のホテル・民宿は無いか？」

「ちょっと待ってください……」

言いつつ、六条の指が高速でキーボードを叩く。

キーボードだけでＰＣを操作できる人間は、そうはいない。

アニメなどの演出ではよく見る光景だが、マウスを使った方が実際には速いからだ。

しかし、六条はどういう訳か、マウスを使用しない。

それほどまでに卓越した技能を持っているということか。

「……ありましたよ。ええと、５軒ですね。
プリントアウトします？」

「頼んだ。……じゃあ、宿の件に関しては、後で再検討しよう。
可能なら、クロノス教諭や鮎川先生も呼んで、話をつけたい。
先生たちに関しては、俺から連絡を入れておく」

修学旅行まで、そう時間は無い。
光の結社のせいと言えばそれまでではあるものの、
こうまで突貫作業じみた計画の修学旅行など、そうは無いだろう。

……俺は中高と修学旅行は経験していないが。
いや、こちらの中学では経験したけれども。

「じゃあ次の議題行っていいかな？」

「吹雪さん？　……ええ、構いませんが」

「よし、じゃあ許しも出たことだし……今年の学園祭について！」

学園祭――と言われ、思い出す。

そういえば、一年目以降は学園祭の描写は一切なかった。
ジェネックスがそうだと言われればそこまでではあるが、
あのときは、実際に見てきて違和感を覚えたものだ。

「こんなハプニングもあったことだし、皆の気持ちも滅入ってると思うんだ。
今年から生徒主導の学園祭になるらしいから丁度いい機会だ。
派手に文化祭を盛り上げないかな？　新しい企画も作ったりして」

「悪くないと思います。
元々、各寮の模擬店くらいしかありませんでしたし……。
何かしらイベントを催せば、例年以上に盛り上がるでしょうし」

明確にこれと言えるイベントなんて、
毎年のレッド寮のコスプレデュエルくらいのものだ。
他は殆ど「凝った」模擬店を行うことに躍起になっているせいか、
目立ったイベントも無いようだった。
野良デュエルに関しては、最早日常と言うべきだし。

「あ、言っときますけど先輩、魔剣・兜割りとか無しの方向で」

「……流石にやらんぞ。ネタ振りなのか何なのかは知らんが」

「先輩なら妹愛でできそうな気がして怖いんですよ。
原作再現的な意味で」

「妹」のベクトルが多少違うが。
あれは義妹だし、俺の場合は本来実妹の方だ。
そういう前提でも、設定的には色々間違っているが。

「……で、吹雪さん。実際、イベントの内容はどうするんですか？」

「そうだね。楽器の演奏ができる人たちでライブとか、
催し物としては、来場者参加のデュエル大会もいいかもしれないね」

「プロにもパイプは繋がっていますし、エキシビションでも組みましょうか。
カイザーも、言えば来てくれるでしょうし……そうですね。
アカデミアの双璧、カイザー亮ＶＳキング吹雪なんてどうでしょう」

「悪くはないね。けど僕はあまり亮とはデュエルしたくないんだよ。
疲れるし。余裕持ってデュエルできないんだよね！」

……そりゃ誰でも同じだよ！
というか、誰が相手でも、余裕を持ってデュエルして勝てるわけがないだろう。

特に俺たちの周辺はレベルが高いこともあり、
最早その考えは不可能に近い域にあるのではないか。
それでも普通に言ってのけるのが吹雪さんなのだが。

……自重しているときは本当にスムーズに話が進むな。

「御堂君がやったら面白いんじゃないかい？
十代君は卒業デュエルの時にデュエルしてるし」

「俺も一度デュエルしました。……コテンパンにノされましたが」

思い出したくないわけではないが、
負けの記憶というのは、総じて苦いか酸っぱいかのどちらかで。

正直、相手がカイザーで、しかもあんな状態じゃなければ、
あそこまで善戦……善戦？　は、できなかったかもしれない。

である以上、二度も戦うのは勘弁してほしいところだ。

「それはそれですが、他にも企画は必要では？
今のままでは、例年とあまり変わりませんが」

「あら。委員長さんはイベントがお好き……ね」

「……違います。関わると決めたからには徹底的にというだけです」

「またまたそんなこと言って……女は正直になるべきよ」

「それを言うのでしたら『人間』として括ってください。
それと、あなたに言われるまでもなく承知しています」

……どうしてこう、この二人はここまで険悪なのだろう。

いや、本当に嫌いあっているのなら、無視し合うのが当然だ。
本来はそこまで仲が悪くない、と見えるのだが……。

「い、イベントなら、アカデミアだということを活かしたものがいいな！」

「そ、そうだよねカズ兄ぃ！　だったら何があるのかなあはははは！」

「先輩方誤魔化し方下手ですね」

急激に話題を転換するならこうするしかないだろうに！

「ふっ……そんなときのために、この僕を雇用したんじゃないのかい？」

――と。

徐々に混沌を窮めていくこの状況下、吹雪さんが口を開いた。

吹雪さんの状態は、今は自重モード。

となれば、この場を治める妙案が――！！

「ミスコンとフィーリングカップルという案を提出するよ！」

「……」

前言撤回。

自重していなかった。

「更に、フィーリングカップルによってできたペアでのデュエル大会！
　これは意外に盛り上がるんじゃないかな！？」
「吹雪先輩！　女装ミスコンなんてどうでしょう！」
「オーケー、六条君のそのネタいただきだ！」

六条まで悪ノリを重ねている。
どうすればいいんだ、この状況。
混沌以上に混沌だぞ。誰か這い寄る混沌でも呼び寄せたのか。

わーわーきゃーきゃーばたばたドワォ。

恐ろしいことに、この混沌が生徒会にとっての日常だと言うのだから恐ろしい。
これで更にメンバーが増えたらと考えると……想像もできない。

とはいえ。
こういう、奇妙で奇抜で、どこか抜けてる空気というのは悪くない。
悪くない。……が。

「みんなー。少し落ち着いて話に戻らないか……」

「女装ミスコンと普通のミスコンの優勝者同士のデュエルはどうでしょう？
いろんな意味で釘付けになりますよ、皆の視線！」

「どちらにしても審査内容が問題だね。水着審査は設けよう！
これに関しては確実に明確に絶対に行わないと！」

「こ、公共の場で水着になるなんて……！
自重してください！」

「お堅いのね、委員長ちゃんは。私は構わないわよ？
それとも……貧しい部分を見せるのが嫌なのかしら？」

「脳に栄養の行っていない人が言うとやはり違いますね……！」

混迷を極める、とは、こういう状況のことを言うのだろうか。
そんな錯覚すら湧くほど、この状況は凄まじかった。

委員長でさえ、空気に流されていた。

「あのー……少し、ほらさ。落ち着いて」

「アリスちゃん、フィーリングカップルって何？」

「説明しましょう！　フィーリングカップルとは、
その場の勢いとノリと相手の第一印象だけで人を選び、
互いに第一印象が良かったという人同士がペアを組むというゲームです！
まあぶっちゃけ戯けたカップル製造装置ですけど」

「機械で決めたカップルなんて長続きするわけがありません！」

「７０年代から８０年代までは人気だったのよ。
今でもエンターテインメントとしてある程度人気があるからいいじゃないの」

「見学者も当事者も楽しむ、これこそ真のエンターテインメント！」

誰も聞いてくれやしねえ。

俺は泣けばいいのだろうか。いや、泣くことも許されないだろうか。
何にしても、話を聞いてくれないのは少なからず寂しいものだ。

……教員のところにでも行って、修学旅行の件について話し合うか。

そう考え、俺は――割と堂々と、この部屋から出て行った。

誰も引き止めてくれないって悲しくね？

＊　＊　＊

「……ということですので、宿泊先の変更の方、ご検討よろしくお願いします」

「分かったノーネ。と言ってーモ、どうなるかは今のところ未定なノーネ」

あの後、普通に校長室まで向かった俺は、
先程の懸案事項について、クロノス臨時校長と話し合っていた。

と言っても、内容はそう多くない。
一つ二つ協議するだけで、内容は底をついた。

実際、それ以上話すようなことも無かったから、特に問題は無いが。

「職員会議でもその議題を出していただけると助かります。
宿の方はこちらの方でピックアップしておきますので」

「生徒にそこまでさせるわけにはいかない……と言いたいところだケード、
実際、修学旅行はもう間近に差し迫ってるノーネ。

だから、その方針で頼むノーネ」

「了解しました。……それでは、失礼しました」

言い残し、校長室から出ていく。

この学校、元々かなり立地条件が悪い――というか、異質なこともあり、
修学旅行は3年に一度、それも全校生徒で行うということになっている。

そもそも、それだと「修学」旅行とは言い難いのだが……。
それはともかく。

今の皆の興奮状態が治まるまでは、しばらく外で時間を潰すべきだろう。
あの中に戻って行ったとして、無事でいられる保証が無い。
精神的にも、肉体的にも。

というか、よくよく考えると凄まじい状況だな。
一応、生徒会長なんて役職に就いてるはずなのに、
当の生徒会室では、司会進行以外は蚊帳の外。

俺、実は皆から嫌われてるんじゃないかなあははは。

「……ふぅ」

さて、落ち着け俺。少し思考が暴走してきてるぞ。
もし仮にそうだとしても何の問題があろう。否。断じて否。
俺は俺として仕事を片付ければ済むだけの話。それ以外は必要無い！
まったく、人間関係ってのは本当に魔境じみてるぜフゥーハハハー！
……自分で考えてて虚しくなる場合はどうすればいいんだろう。

「ッ……！？　み、御堂……！？」

ふと。

そんな折に、何者かの声が耳に飛び込む。
誰だ――と、そちらに目を向ければ、白い制服と無理矢理に白く染めた髪。

「三沢……？」

何故そうまで、俺が現れたことに驚いて――いや、

むしろ、恐怖しているという段階にまで至っているのか。
俺は――先日の生徒会室での対応以外に、何かしたのか？

「御堂の方か。奴ではない……」

「おい、三沢……」

「くっ……失態だ！　くそっ……！」

歯が軋むほどに食いしばり、俺の言葉も聞かず、
三沢は、当然のように俺の目の前を通り過ぎて行った。

しかし――御堂の方？

つまり、俺があいつに何かしたわけじゃない、か？
いや、俺が三沢に対して辛辣な言葉を吐きかけたのは疑いようのない事実。
あの件に関しては、委員長の叱咤のおかげで顧みることはできた。
しかし、あの件だけで三沢があまで憔悴するなどと――。

……？

「イレン」

「……？」

ふと、思い立ってふよふよ浮かんでいる娘を呼び出す。
唐突に、靄が晴れるように現れるこの登場方法は、いつになっても慣れない。

「この前……俺が居眠りしてしまった時、
――――奴が、出たりしたか？」

「……多分」

「……そうか」

あのとき、イレンも同様に眠ってしまっていた。
となると、その件に関しては不明だと――しかし、予測としては現れたのだろうと推察できる、ということか。

しかし、毎度毎度の問いだが、奴の目的は（ｒｙ

実際、奴の行動はよく分からない。
イレンの話だと、唐突に夜中にいなくなったり、俺のピンチに唐突に現れて状況を打開したり、今回に関しては、何故か三沢を叩きのめした？　り。

目的が見えなくて落ち着かないというか、なんというか。
最終目標が見えてこないことで、腑に落ちないというか。

「――――……」

最終目標、か。

そういえば、俺の目標ってなんだっけ？

この世界で生き抜くこと？
あるいは、徹底的に原作に関わり抜くこと？
原作を崩壊させないように働きかけること？

そういえば、転生したっていうのに、確固とした目的なんて、これまではあまり意識していなかったような気がする。

その場その場で適当な事ばかり言っていたような。

誰かに勝つ。
ただ、生きる。
成功を手にする。
世界征服。

どれもこれも、しっくりとはこない。

最後のアレはネタのために無理矢理詰め込んだ感があるが、
それも、一つの目的としては、ありえないものではない。

思う。

明確な目的を持つ悪人と、何の信念も持たぬ善人。
彼らはどちらが優れ、どちらが劣るのか？

人間に明確な優劣など存在しない。
だが――俺と、奴。

明確な目的を持って行動する「奴」。
その場の流れによってその行動を決める「俺」。

果たして――存在すべきは、どちらなのか。
ふと、そんなことを考えた。

多分、奴は確固たる信念を持って行動している。
何事かを為すために、己の全てを賭けてでも。

じゃあ、俺は。

俺は――何をしようとしているんだろう。
何を目的として、何を為そうとしているのだろう。

何をしたいのだろう。

こんなとき、お前ならなんて答えを出すだろうな――？

そんな、誰にも答えようのない問いが浮かんだ。

俺は、それを振り切るようにして、歩き出した。

５６束目：行間（後書き）

ということで行間・修学旅行前話でした。
２分の１がカオス。４分の１がシリアス（笑）。
あとの４分の１はギャグ（？）でした。何これェ。

とりあえず吹雪さん自重しない回ということで。
今まであんまりにも自重していたから糸が切れました。
やったね吹雪さん！　イベントが増えるよ！（

次回はそろそろデュエルできるといいなぁ……↑
って前回も言っていたような気がします。何なんだ自分。

ちなみに次回から修学旅行編です。
少し原作と違います。色々と。

ということで、今回は以上です。

以下余談。というか余談の方が明らかに長いわけですが。
見苦しければスルーお願いします。

私の書くロボットモノって需要あるのかな？（
などと言ってみるテスト。

以前にどこぞの新人賞に応募しようとして友人にボツを食らった原案を、
適度に手直ししつつエンターテインメント性も加えたものになります。
ちなみに設定は半分が境ホラ、半分がマクロスというキメラっぷり。
そこに一割程度私のオリジナルが……ってボツは普通ですね↑

ところで、前回出た男⇔女などと言ってみたことから、
なんとはなしに「二次元女体化してやったー」という診断ソフトを使ってみました。

結果。

桐型枠を二次元女体化！
『服はブレザーの制服で、ジト目で紫髪のロングのツインテールで、
　ド貧乳でヤンデレな感じ』のようだ

わけがわかりません。
どういうテンプレキャラでしょうか。

ついでに本名でやってみたところ、

●●●●を二次元女体化！
『服は忍装束で、ジト目＋厨二病で緑髪のロングのウェーブで、
　ロリで姫カットで臆病な感じ』のようだ

もっとわかりません。
どちらにしても「ちいさい」ということだけは理解できましたが。

ちなみにうちの子らの場合は、

御堂和真
『服はドレスで、ジト目で金髪のロングで、
　ロリで姫カットで真面目な感じ』のようだ

六条有珠

『服はセーラー制服で、ジト目で黒髪のロングのウェーブで、悪魔翼＋尾＋八重歯でいじっぱりな感じ』のようだ

部分部分で合っているから恐ろしいものです。
御堂↓真面目とか、六条↓いじっぱりとか。
でも六条人間じゃなくなってるという。
見た目に互換性はありません。

ともあれ、今回はこのあたりで。
それでは。

57束目：旅行

お気づきの方もいるだろうが、と、あらかじめ注釈を入れておく。

童実野町近郊には、驚くほどレジャー施設が少ない。

あってせいぜいが海馬ランド（嫁テーマパーク）。

大型ショッピングモールやそれに類する場所も無く、動物園や植物園といったものも無く、名産品も無く。

ここでバトルシティが行われた――そんな実績のみが、ただ残り続けている。

要するに、アレだ。

アニメの聖地巡りと同様の意味がある。

それを好む人間にとってはこれ以上ないほどに価値があり、

それを好まないか興味の無い人間には、何一つ価値が無い。

……童実野町とは、結局のところそういう場所なのだ。

例えば、俺はできることなら温泉にでものんびりと浸かっていたいし、
美味いものを食べて休みたいと考える。

加え、どうせ東京の近郊に来訪しているのだから、
千葉の某ネズミーランドにレイを連れて行ってみたい。
あの場所には前々から興味を持っていたはずだし。

確か、六条は秋葉原に行きたいなどと言っていた気がする。
最近は少し頑張ってくれているし、検討してもいいかもしれない。

ああ、イレンに関しては、横浜中華街に行きたいとも言っていたか。
最近、食通度が徐々に上がりつつある気がする。多分気のせいじゃない。

ちなみに。

光の結社の人数が増えすぎ、勝手な行動を取っているせいか、
童実野町に到着して３０分経った現在、既に自由時間となっている。

午後６時までに指定された場所に到着しさえすればいいとか。
場所は六条が取った民宿である。

場所に関しては、口頭でのみ伝えられている。
これに関しては、光の結社への対策と言えるか。

「さて」

まだ、三十分である。
三十分という時間が経って――しかし、俺は既に飽き始めていた。
景観は、どこにでもあるような普通の街並み。
点々とある店舗も同様。都会でなくともあるだろうチェーン店ばかり。
もっと、こう……寺院とか。なんとかタワーとか。
そういった観光名所があれば、まだ話も違ったのではないかと思うが。

ついでに、現状。

……デパートの衣料品売り場へ行ったレイと六条を待っている。
なんというか、妙な状況ではある。
二人と行動を共にするのは別段、問題無い。
というより、保護者という観点ではこの二人を見ておくのが最適かもしれない。

しかし――よりにもよってデパート。
しかも、女性服売り場って。

なんなんだこの状況は。

デートか。だとしたら相手はどっちだ。
どういう戯けた考えだ。いやいや待て待て。何を混乱しているんだ俺は。

先程からどうにも調子がおかしい。
というのも、体調の問題ということではなく、
何か、腑に落ちないような……不自然さ、というか。落ち着かなさ、というか。

かと言って原因のようなものは思い当たらず。
奇妙な気持ちの悪さだけが、胸の奥にこびりついて離れない。

女の子二人と一緒にデパートに来ているから……ではないだろう。

ともあれ。

「スズ」

『は、はい！？』

唐突に呼びかけられたからだろう。
びく、と体を震わせ、スズが姿を現す。

この反応を見ていると、やはり――と言うべきか、
俺とスズとの間には、確固たる信頼関係というものはまだ無いように感じられる。

精霊とその仕手とはいえ、「この」関係になってから、まだ一年と経っていない。
信頼が生まれるにはまだ短く、協力関係を結ぶには長すぎるほど。
心を開いてきてくれているのは、嬉しいことだ、が。

なんというか、いささか距離感が計り切れていないというか。

決して、互いのことを嫌い合っているわけではない。
問題があるとすれば――付き合いの短さだ。

例えば、スズは俺のことをどれだけ知っているだろうか。
レイには及ばないだろう。六条にも及ばないだろう。
この学校で付き合いのある二年の知り合いにも、及ばないかもしれない。
言えないこと、言ってないこと。それらは数多くある。

逆に、俺はスズのことは、あまり知らない。
《召喚師セームベル》の精霊である。最近生まれた。あと少しで実体化できる。
魔術師としての能力は高いわけではない、らしい。これについては、自分からそのように主張していた点だ。本当にその通りなのかは分からない。
ついでに、召喚魔術の成功確率は7割前後とのこと。

……どれだけ多く見積もってもこれくらいだ。

これから長い付き合いになるのだから、
可能な限り、互いのことは話しておくべきだろうと思う。
その時間を取れず……いや、取らずに放置しておいた俺も俺だ。
そろそろ、清算すべきなのだろう。

そうは、思う。――――が。

どこから話せばいいんだ。

混じりっ気なし、正真正銘の本音だ。

実際、どこから何を話せばいいのやら、分かる気がしない。
実に悩ましい。範囲の見極めもそうだが、
俺の勝手な裁量で、その範囲を決めていいのかという点についても。

それに――元々、他人に話すようなことでもないような話もある。
そのあたり、「誰にも話すことは無い」と決めているから考えようもないが。

選定が難しい。

原作のキャラに対し、話していいこととそうでないことの区別はあるだろう。
少なくとも、その辺は六条と協議してある程度は決めてある。

各々の良識と判断に任せるとも言ってはあるが、概ね守られているようだ。

……とはいえ。

それは原作キャラ相手に適用される事態だ。
この世界に住む人間に対して適用される事項だ。

スズは、どうなのか。

生まれたのはつい最近。
俺と行動を共にすることが多い。
というより、メインキャラクターたちとはそう絡まない。
会話をする機会が無い、というのが正しいか。
十代以外だと、万丈目くらいしか精霊が見える人間がいないことも一因だ。

話してもいいのではないかと思う反面、
精霊世界に行った場合のことを考えると、足踏みしてしまう。

これまでに話したことは、恐らく……という前置きはあれど、全て、差し支えの無いことだ。

俺は特別なカードを欲している。だから、それを探している。
そのカードは何かと入用である。精霊のカード並みに希少性が高い等々。

逆に言えば、それ以外のことは無い。

決して、スズのことを信用していないわけではない。

ない、のだが――。

「……へ、変調は無い、か？」

『え？　あ、え。あ、はい。な、何もない、ですよ？』

「そうか……」

会話が途切れた。

何もこんな場面で生前に培ったコミュ障スキルを発揮しなくてもいいのに。

俺のヘタレ。

「服……」

『え？』

「いや、なんでもない」

服、か。

ふと思い出す。
そういえば、俺も「妹」も、あまり衣服や装飾品には頓着しなかった。
全体的に、モノトーンの色調のものが多く、予備の服は少ない。
これに関しては俺がそうだったから、ある意味、影響と呼べるが。

ふと、この場に姿を現さないイレンのことを思い出す。
あいつも、全体的に衣服は暗い色調のものだったか。
それも、全て白か黒。

――――ああまでファンタスティックな格好ではなかったが。

あんな絶対領域は無かった。
ニーソックスも穿いてなかった。いや、正確に言えば、普通のソックスだった。
膝上は５ｃｍが限界だったと見える。上着にしても、
外側のものと比べ、それほど季節的に違和感の無いものが多かったはず。
何より、あいつは白い方が好みだったわけだし。

『あの……』

「ん？」

『えと……その、昔のこと、思い出したり、とか……？』

「ああ……うん、まあ。似たようなもの、かな」

唐突に口を開いたように見えたが、
どうも俺の表情を窺う中でその疑問に行き着いたらしい。
洞察力は高いらしい。

まあ――頑なに口を閉ざすようなことも無い、だろう。
差し障りの無い範囲で話してみるのも、悪くはない。

「昔、妹がいたんだ」

『妹……です？　レイさんじゃなくて？』

「ああ。……昔、な。それを思い出してた」

『……あの、「いた」……って』

「気にしなくていい。お前が認識している事実、そのままだ。
……けど、俺は、もう割り切っているから」

引きずってはいるかもしれないが。

「誰かと重ねあわせるような真似だけはしない」

というよりは、したくない。
あくまで努力目標、というだけの話だ。
絶対にしない、できないということは無いのだから。

だけど、何よりも――俺の勝手に、他人を付きあわせたくは無い、が本音か。
我が儘を言うのは、俺だ。それに付き合わされるのは、他人だ。
戸惑うスズに、なるたけ穏やかな声で語りかける。

『……え、と』

「……秘密にしててくれ。あまり愉快な話でもない。
ただ――話しておくべきことだと思ったから、さ」

『そう……です、か？』

「ああ。相棒（スズ）には、できるだけ話しておこうと思った」

『……』

「……勿論、迷惑ならもう話さない。
俺の自己満足で迷惑をかけるわけには、いかないから」

『そ、そんなことないですっ！』

途端、スズはちぎれんばかりの勢いで首を振った。

『今までは、目的のこととかしか、聞いてなかったです。
だから、こうやっていろんなことを聞けて、良かったです』

「……あ、その。いや、俺も話さなかったわけだし、
そのあたり、責められるモンかな、と」

『誰だって、話したいこととそうじゃないことがあるって思うです。
でも、それでも、少しは話してくれたから、うれしいですよ』

にこ、と。そう言って、スズは柔らかく微笑んだ。

……あれ、なんだこれ。すごく甘酸っぱいぞ。
妙に心の琴線に触れるんだが。なんかこう、キュンと来た。

アレだ。○○マジ××とかそんな感じ。

スズちゃんマジ魔法少女。

……何か間違えたか？
まあいいや。大した誤差も無し。

むしろ天使族でもないのに天使と形容されるよりはいいだろう。

「ありがとう、スズ」

『えっ？　え、あ、いや、あ、その。
ど……どういたしまして、です』

赤面しながらそう返してくるスズの表情は、
どことなく嬉しげで――それは、俺にとっても、少なからず嬉しいものだった。

直後。

「そりゃーっ！！」

俺の頭に何故かカチューシャが装着された。
あと、縛っていたはずの髪もほどけていた。

「……？」

「先輩先輩、今の先輩ほむほむっぽいですよ！！」

「……」

「えっ……と。先輩？　怒ってます？」

「今度余計な事をするとまずはその口を縫い合わすぞ」

「ひっ！？　す、すみません、ジョークなんです！
あと先輩なら似合うと思ってただけなんです！」

「面白いことを言うな、お前。最後に殺すと約束しておいて裏切ってやろう。
具体的なことを言ってやる。首から宙吊りだ」

「死亡フラグおっ立ててしまいました私！？」

六条はさやかちゃんだと思う。
髪色的に考えて。

閑話休題。

＊　＊　＊

デパートでの珍事が終わって十数分後。

適当に街中をブラついてみようという話になり、
結果として俺たちは3人……正確には＋2人で行動している。

なんとも緊張感の無い話だが、まだ、この状況ではどうしようもない。
さて、と軽く息を吐き、俺は軽く周囲を見渡した。

天候に崩れは無い。
スズにも変調が無いということは、まだ結界は張られていないということだ。

猶予がどれほどあるかはまだ分からないまでも、
そこまで悠長にしていられないというのも事実。

……だが、しかし。
子供……と、子供並みの体力の女の子一名を置いて、
自分だけが適当に動き回るというわけにもいかない。

そういうわけで、今も適当にブラついているわけだが……。

「暇だ……」

一つだけ言えることがあるとすれば——心底、暇だった。

レイに関しては、そこまで伝説のデュエリストというものに興味は無く、
六条に関しては、「聖地巡礼に興味はありませんよ」とのことだ。
確かにそう間違った言葉ではないが、その表現は少し違う気がする。

「状況的にはしゃーなしですよ。あ、すき屋行きます？」

「何でそこですき屋の発想が出てくるのか分からねえよ」

「ボク、なか卯がいいな」

「ボケを重ねるんじゃありません」

いずれにしても、既に日は高く上り、時計はそろそろ１２時を指そうとしている。
昼食を取るのもやぶさかではなく、むしろ、二人のことを考えれば、早めに店に入って休むべきだと言えた。

……この際、某伝説のデュエリストＪさんが、
デュエルディスク付けたまま入った牛丼屋でも良さそうだが。
ゲン担ぎの意味で。

『カズマさんの知ってるお店でいいんじゃないです？』

「この周辺にはあまり来たことが無いから、店って言ってもな……」

「適当なところに入ればいいんじゃないですかね」

「それで『ハズレ』だったときは目も当てられんだろ。……何か、ある程度でも要望があればいいんだが」

「……中華」

それはイレンが横浜中華街に行きたいという欲望の表れではないのか。

「洋食がいいでっす！」

「ボク、和食かなー。カズ兄ぃは？」

「食べることができるものなら何でも」

そうなると、ファミレスが一番の折衷案だろうか。

最近のファミレスは、廉価化の割に味も良いとは言うが、しかしながら、たまに「ハズレ」があることも事実。

……全国チェーンじゃなくても、大丈夫かね。

「六条、今携帯を使えるか？」

「使えますけど。どうすんです？」

「検索を頼む。近日中にＴＶで放映された、
童実野町近郊のレストランを探してくれ。
可能なら和洋両方のメニューがあるもので」

「はぁ。んじゃ、２分ほど時間をいただければ」

相変わらず、機械関係には優秀な後輩である。

レイ曰く、「無茶苦茶成績悪いんだけど」とのことだが、
こういう面に関しては造詣が深いということだろうか。

「近くに２件ありますけど」

「なら、近い方に向かおう。地図は出せるか？」

「もうメールで送りました」

「早いな。助かる」

見れば、さほど距離は離れていないようだった。
値段も……手頃とは言い難いが、これなら俺でも出せるだろう。

『――――！！』

「ん……」

途端、立ち止まって空を見上げるスズ。
どうした、と呼びかけようと思い、同時に立ち止まる――と。

「……っ」

「どうしたんですか、先輩……って、うおっ！？
なんじゃありゃ！？」

瞬間、空が厚い雲に閉ざされる。
同時に、四つの方位に現れる――四つの影。

四帝。

《雷帝ザボルグ》、《氷帝メビウス》、
《炎帝テスタロス》、《地帝グランマーグ》。

こちらにおいては、これら４枚のカードを指す。
その他４枚の残りも存在しはするだろうが――扱いがどうなっているのかは分からない。

生贄召喚できれば確実に相手に損害をもたらうという性質から、
「あちら」での使用率も高かった。

こちらでは、これまで一度も見かけたことはない。

――やはり、「特別」と見るべきだろう。

「え、えーっと……天変地異？」

精霊が見えておらず、事態を理解できていないレイが首をかしげる。

さて、この場合、俺はどうするべきなのか。
ある意味で答えが出ているような、そうでないような。

この状況、原作通りの展開なら、すぐにでも十代たちが解決してくれるだろう。
しかし、だからと言って傍観していては、自体の解決は遠ざかる。
仮に十代たちの手の届かない場所で何かされたとき、
すぐに対応できる人間がいないと――――。

「六条、『雨が降りそうだな』」

「え？　あー、そういやそうですね。『傘買いに行きます？』」

「その方がいいだろうな。『ちょっと行ってくる』」

何のことは無い。
ただ、少し表現を婉曲にしただけの、単純な合図。

こういう場面でそれと悟らせないだけの言葉を繋ぐのは難しかっただろうが、
ここで反応してくれたのは僥倖と言えよう。

「……問題は……」

相手が誰か、という点か。
氷。雷。岩。炎。
四人の帝使いがこの町にいたはずだが、
原作通りに行けば、その内の氷丸と雷丸が、翔と剣山と対戦するはず。

一方、炎丸と岩丸は、十代と戦うことになる、予定だ。
こちらに関しては、炎丸が原作で即退場だったため、よく分からな

い。
どころか、あいつらはしばらく後まで姿を見せなかったはず。
理由に関しては、「十代の人相が分からなかった」から、だが――。
こちらの世界と俺の認識の相違。
加え、俺たちのようなイレギュラーな存在の干渉で、
どこまで変化が加わっていることやら分からない。
せめて、ある程度ことの推移を見守ることができるところへ行かなければ。
そう考えていた矢先のことだった。
「ようやく一人になってくれたなぁ、御堂和真ァ……」
放たれた言葉に反応し、視線をそちらに向ける――それと同時、
一本の氷柱が、顔面をめがけて飛来する。
「ッ！！」
寸でのところで、掌を用いてそれを受け流す。

――殺す気か！

そんな罵声をどうにか飲み込み、周囲を見渡す。
見える限りでは2人。いや、物陰にもう2人。
4人の人間が、今、この場にいる。

――4人。そして、この「氷」。

まさか、と考え、しかし、とも思う。
俺たちの存在によって多少でも原作が歪んでしまったのならば、
こういう場面も、決してありえないわけではない。

いや、むしろ予想して然るべきだと言えた。

――この場に、4帝全員が集結することも！

「貴様が一人になるのを待っていたが……。
……羨ましいぞ、貴様ぁ――――――！！」

「何の話だ！？」

「両手に花などとォ！　ふざけるな！　ふざけるな！！」

二回言いやがった。というかバリバリ私怨かよ！？

……しかし、人相を見るに、こんなことをのたまっているのは、ニット帽と雷眉毛――氷丸と雷丸、か。

ならば、今隠れているのは岩丸と炎丸。

遠慮がち――というか、苦笑いしているのは、見間違いではないだろう。

「岩丸、炎丸！　貴様らも来い！
美寿知様に命ぜられたこの男の力試しというなら丁度いい！」

「おいおい、俺たちはただ見に来ただけだぞ！？」

「まだ出番も来ていないのに、デュエルすることも無いだろう！？」

「付いてきた貴様らが悪い！　デュエルだ、御堂和真！」

「……！！」

相手は超常の能力を行使する超能力者。

一方、俺は普通の人間。いや、確かに身体面では恵まれているが。

リアルファイトで勝てる要素は薄い――わけでもないが、

何をしてくるか予想できない以上、下手に拳を向けるわけにはいか

ない。

「くそっ……。……！！？」

――――――――。

キリ、キリ、キリ――と。

瞬間、頭が痛みはじめる。

いつもの比ではない――鉈で抉られたような、強烈な痛み。

何だ。これは。

普通の頭痛ではない。いや、それ以上に、これは。

――面白い。

――――面白いじゃあないか！

意識が沈んでいく。

意識が――どこかに、沈んでいく。

痛みまでもが、胡乱な思考の中に消えていく――――。

＊　＊　＊

「いや――いいね」

いや、良い。いい。実にイイ。
最高の余興だ。

こんな舞台に私を呼ばないなどと――そんなこと、許されてなるものか。
何より、試行（テスト）にはうってつけだ。

「――――！！」

監視役が驚いているようだが、既に奴にはどうしようもない。
今の「私」に、奴は干渉のしようがないからだ。

「やろうじゃないか。私はそれでも構わない」

「こいつ、急に雰囲気が――？」

「おい、岩丸！　貴様も構えろ！
この男から遊城十代たちの居場所を聞き出す！」

成程、こういう裏があったか。
キリヒトの記憶している限り、この男たちは唐突に遊城十代たちのところに訪れた。
そのあたり、裏付けとして私の手引きが存在することになれば――。
まあ、おおよそ齟齬は無いだろう。

「４人というハンデだ。貴様にはそれだけの分、ライフポイントをやろう。
……だが、この人数差ならばどうしようもない！」

「そうか。ならば私はその半分でいい」

「は……？」

呆けたような表情で、氷丸が私を見据える。

「半分でいい、と言ったんだ。一人頭２０００。それで十分だ。
複数ドローや召喚権の増加、複数デッキも必要ない。

ライフポイント８０００。デッキは一つ。
……これで相対してやろう」

我ながら、えらく自信の込められた言い草である。
だが――これだけ煽れば、彼らも本気で来ることだろう。

圧倒的な状況で勝利して、何が試行（テスト）か。
圧倒的に不利な状況を構築し、その上で勝利してはじめて、
私は遊城十代や万丈目準と戦うに値するだけの力があると証明できる。

「……くっ。ああまで言われると、我々も本気でやらなければならないな」

「そうだ。それに、この男に勝たなければ、
多分、俺たちは遊城十代には勝てない」

何かしら決意したように、岩丸と炎丸の二人が呟く。

いずれにしても、この状況で戦うにリスクは無い。
私にしても、彼らにしても。

私もある程度はキリヒトと同じ、物語の運航を妨げないことを目的としているのだから。

「さあ、始めようか。――決闘（デュエル）だ」

「「「「決闘（デュエル）！！」」」」

閃光を取ったのはニット帽を被った顎髭の男――氷丸。

「先攻は俺だ。ドロー！　……まずは、《シーザリオン》を召喚！」

【《シーザリオン》　攻　１８００　／　守　８００】

「カードを2枚セットし、ターンエンド」

まずは、アタッカーを立てて終了と。
堅実な手を打ってくるものだ。

本来ならば《ペンギン・ナイトメア》でもセットするのだろうが、
今は手札に無いものと見える。

ならば――ということで、召喚してきたのだろう。

下手に守備表示で召喚しては、破壊されかねない。
おおよそ、予測が外れることは無いだろうが――さて、次。
稲妻眉毛の男――雷丸か。

「俺のターン。ドロー！　《ＲＡＩ（ライ）－ＭＥＩ（メイ）》を守備表示で召喚する！」

【《ＲＡＩ（ライ）－ＭＥＩ（メイ）》　攻　１４００　／　守　１２００】

「カードをセットし、ターンエンドだ」

続いて、サーチャーを召喚。
こちらもなかなかに堅実だ。
――私が攻撃するかは別としても。

「俺のターン、ドロー！」

赤髪のサングラス――――炎丸がカードを引く。
さて、これまでの氷丸、雷丸は、いずれもそのイメージと同様、

水族と雷族のモンスターを召喚している。
では、この男なら――。

「《ＵＦＯタートル》を守備表示で召喚！」

【《ＵＦＯタートル》　攻　１４００／守　１２００】

やはり。
炎属性専用のリクルーター。

まず間違いない。
この男たちは、各々の持つ「帝」に対応したデッキ構成をしている。
炎丸は【炎属性】。氷丸は見たところ【水族】か。
雷丸は――短慮は禁物だが、【雷族】か【光属性】といったところか。

場持ちのいい《ＵＦＯタートル》を召喚したのは、
次のターン、奴が「帝」を召喚する布石のためか。

「カードを3枚セットし、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドローだ！」

そして、最後。岩のような大男――岩丸がカードを引く。

「俺は《伝説の柔術家》を守備表示で召喚！」

【《伝説の柔術家》　攻　１３００　／　守　１８００】

ふむ。現状では把握しづらくはあるが、
これなら【岩石族】の可能性が高いか。

攻撃をためらわせるには、あのモンスターは非常に有用だ。
ただし、躊躇わせるのはあくまで「攻撃」であるという点は、忘れてはならない。

「カードを2枚セット。これでターンエンドだ」

さて、次はようやく私のターンが回ってくるわけか。
では――――動き出すとするか。

57束目：旅行（後書き）

えーしーミニドラマ　／　「いつだったかのこと」

「そーいえば、先輩の昔の話って聞いたこと無いんですけど」

「奇遇だな。そりゃお前もだ。お前、頑なに自分のこと言わないだろう」

「うっ……それはそうなんですけど！
ほら、大学生のときに死んじゃったって言ってたじゃないですか。
そのころ何してたんですか。結構勉強できてますけど。」

「本気で勉強を始めたのは18からだな。
それまでずっと外国にいたし」

「外国暮らしだったんですか！？」

「諸事情でな。お前は何してたんだ？」

「特に面白くもないですよ。父親が買ってきたエロゲを無断でプレイするくらいで」

「お前の父親はなんなんだ」

「へぇ……ていうか、先輩ってそのころから外国語できたんですね」

「いや、あっちで覚えた。必要に駆られると、人間なんでもできるもんだ。

……とはいえ、日用語程度だけどな」

「はあ。つーか勉強できない私にゃ羨ましい話ですよ」

「お前な……電子機器の知識については凄まじいレベルなんだから、少しは情熱を勉強にも向けたらどうだ」

「だってやる気出ないんですもの！

興味もそれほどありませんしね。追試ででも受かればいいですよ」

「そういう考えだといつか留年するぞ。

……いずれ委員長たちを呼んで勉強会でも開催するか」

「うわぁ、その光景嫌ですよ本当」

「一応言っておくけどな、レイはお前より成績良いんだぞ」

「……レイちゃんって今いくつでしたっけ？」

「（本来）小６で１１歳だな」

「とんでもねえ！」

「……まあ、俺もきっかけが無いと勉強しなかったんだろうけど」

「はぁ。で、そのきっかけってなんだったんですか」

「……傷心旅行？」

「失恋したんですか」

「似たようなもの……か？」

↓ｇｄｇｄなまま続かない

＊　＊

ｅｌｏｎａ面白いです↑

ということで今回も引いて終了です。
４対１という素晴らしいアイディアを出していただいた読者の一人様、ありがとうございます。
今回、ＶＳ奴ということで採用させていただきました（
とりあえずスズにフォロー入れてみるテスト。
そのうち活躍の機会もできますよ、ということで。
でも多分五、六回後になるんでしょうけど……↑

↓訂正

今週中にお知らせを掲示します。
少し重要なものになるかと思いますので、
お目を通していただければと思います。

それでは。

お知らせ　１１／１０版（前書き）

内容を変更しました。

お知らせ　１１／１０版

しばらくの間放置してしまって申し訳ありません。反応の無かった間、感想を熟読させていただくと同時に、しばらく考えを整理させていただきました。
感想に返信できずにいたのは申し訳ありません。可能な限り返信をと考えているのですが、どうしてもそちらに手が回らず……。

この場で感想の返信という訳にもいきませんが、本当にありがとうございます。

これまでに寄せられた感想を見ると、再開してほしいとのお声が多く、励まされたのも事実です。ただ、それで納得いくかと言われれば、多少疑問の含まれる部分も。
私自身が感じていた問題ですので、ある意味で仕方のないこととは思いますが……。

それに加え、そもそもプロットを組み立て始めていた以上、それを廃棄するのもはばかられる……という体たらくでして。本当に申し訳ありません。

そういうことですので、この際ですからそちらのプロットで組み立て、再構成した話も同時に皆様にお届けできれば、と思っております。

これまで続けてきた話も完結まで執筆していくつもりです。
執筆などと、おこがましいことだとも思いますが……。

再開時期は１１／１９日かその前後とします。

近いうちに「お試し」として、再構成した話を一部公開したいと考えています。

その際の反応を見て、この話を書いていくかも検討、ということでお願いします。

ただ、これまでの話とは相当に毛色が違い、設定も複雑化、かつ某ＢＡＬＤＲの設定を多く用いておりますので、多少人を選ぶ傾向にあるかとも思います。

これまで以上に地の文の量も増え、読みづらくなる部分もあると予測されます。

加え、以前からの話ともリンクしている部分はありますが、主人公を含むキャラクターにはいくつかの変更点を設けております。

時代は「５Ｄ＇ｓ」のものを選択しておりますが、原作キャラクターの出番は少なくなります。

以上のことを踏まえた上で、よろしくお願いします。

あくまで別の話ではありますが、主人公最強系統の物語ではありませんので。

少々余談ともなりますが、タイトルを変更しました。
再構成した側の話が受け入れられなければ、戻すことになりますが。
意味合い的には「変化和音」及び「不対の円環」ということになります。
厨二病全開です。毎度のことですが私のせいです。

現在、再構成した話を執筆途中です。
5割ほど執筆できたところで公開する予定です。

また、こちらの話に関しては、別の章として分離しておきます。

それでは。

お試し版（前書き）

とりあえず暫定的に設置。
別ルートお試し版です。
元のキャラとブレているのはご了承ください。

こちらのルートでは戯画様のＢＡＬＤＲシリーズの用語が頻出します。
可能な限り説明は行う予定ですが、これがわからない、という方はご一報ください。
また、設定クロスに抵抗がある方はブラウザ・携帯の「戻る」機能で戻ることをお勧めします。

以上の事項を踏まえたうえで、それでもいいという方は本編（お試し版）をお楽しみただければと思います。

お試し版

夢を見ていた。

長い夢だ。長い――自分自身の夢。
それは本当に自分自身なのか、それとも自分自身とは違うモノなのか、それすらも判然としない、奇妙な夢。

良い夢――最高の悪夢だった。

悪夢。

俺の望むものがあり。
悲しみは少なく。
だからこそ――胸糞悪い、幻影。

俺の望んだ多くが存在する、最悪の夢。
見るに堪えない、低俗な娯楽のような幻想。
考えうる限りで、最悪のｉｆ（もしも）。

それは、もしかするとありえたかもしれない俺自身の幻想だった。

気分が悪い。

「俺」は、多くの人間と共に在った。
「俺」は、多くの感情と共に在った。
「俺」は、正しい行為と共に在った。

そんなものに――何の意味があるのか。
俺は「俺」ではない。俺は俺だ。
ただ一人の――橘樹桐人（タチバナキリヒト）だ。

故に、歪んだ感情を発露する。

「糞喰らえ」

悪態をつき、唇の端を吊り上げる。
口元だけの笑み。狂相。癖となりつつあるこの表情を見るような者はどこにもいない。

共に歩む者はいない。
共に歩む者は既に亡い。

故に、俺は求め続ける。ただ一人、俺の存在理由を探して。
存在の証明を。ただ一人の――妹を。

さて、まずはそうなるに至った経緯から語るべきだろう。

物事は、何事も順序立てて説明しなければ、理解できぬ。
故に語ろう。橘樹桐人という人間の概要を。

＋　＋　＋

ことの発端は１９年前、俺がこの世界に生まれたその日まで遡る。
非常識的かつ非論理的な現象ではあるが――どうやら、俺は一度死に、「生まれ変わった」らしいことだけは、その瞬間に理解できた。
何故か？
――直前まで有していた痛みの何もかもが、消えて失せていたからだ。

俺はその日――その直前、事故に遭った。
大型トラックとの正面衝突。助かるはずも無い。
瞬間的に走った激痛は、しかし、気付かぬ内に消えた。
肉体は、恐らくミンチにでもなっていることだろう。
そして、精神は――ここに飛ばされた。
まったく、わけがわからない。
人間の理解を超えた現象と言えよう。

その現象を観測する人間がいるのなら、それは恐らく――「転生」などと呼称されるはずだ。

ともあれ。

俺は１９年前に二度目の生を受けた。

いささか――いや。非常に不愉快、かつ絶対的に承服不可能な事象だが。

さて、ここでこの「世界」について説明すべきだろう。

この世界は、いわゆる「遊戯王」とやらの世界である、らしい。

らしい、というのはつまるとこ、俺は、その世界について何も知らないという意味でもある。

あの悪夢の中の「俺」が、どうだったかは記憶に無い。

興味も無い。だが、問題はそこではない。

今、この世界・この場にいる俺が知っているかどうかが問題なのだ。

ルール、カード、世界観。その全てが未知である。

そもそも、興味の無かった事象が既知であるはずもない。

優位性（アドバンテージ）は存在しない。情報も、知識も、何もかもが存在しない。

だからこそ、まずは「知る」ことから始めた。

幸いにして、普通の人間と比べて知識量だけは豊富で、時間は多くあった。

まず、世界のことを知るには7年の月日を要した。

理解したことを、いくつか羅列しようと思う。

まず一つ、この世界の多くは、カードゲームによって成り立っていること。

経済、科学技術、あるいは未知の――認めたくはないが、非科学的な事物でさえ。

例えるならば、この機械を動かすには、このカードを認識させてください、という風に。

一枚のカードから世界が創世されたなどという与太話までもがあるくらいだ。

殆ど全ての情報を電脳空間（ネット）から拾ってきている以上、その信憑性には疑問があるが。

次に、いくつか。

こちらの世界でのカードは「遊戯王」ではなく、デュエルモンスターズと呼称されている。

そして、俺の誕生の2年後、ゼロ・リバースと呼ばれる大災害が、ネオ童実野シティと呼ばれる大都市にて発生した。幸いにして巻き込まれることは無かったものの、その事件によって数万人単位の人間が死亡している。

その災害の発端となったのは、「モーメント」と呼ばれる永久機関であること。

その「モーメント」の構成因子までは公開されていなかったものの、それが永久機関であるという事実、様々な事物に用いられているこ

とだけは把握できた。

その他、様々な雑多な知識を得たが――取り立てて問題とすることはないだろう。

デュエルモンスターズのプレイヤーは、デュエリストと呼ばれているという程度か。

それ以外の、俺の知りうる範囲での元の世界との相違点と言えば、科学技術の異常発展というものが挙げられるだろう。

異常――そう、異常だ。

たかが数十年という単位での異常発展。

元の世界の産業革命、情報革命もかくやという状況である。

他に移り変わったものは多いが、それ故に、この場で語りつくすことはできないだろう。

ともあれ、そういう世界で暮らすことになったことには、変わりない。

結局のところ、この世界において重要なのはデュエルモンスターズの実力だ。

故に、世界の情報を蒐集した後は、このカードゲームについて研究することとなった。

デュエルが強い事はすなわち、行動の幅が広がることを意味するからだ。

まったくもって、面倒な世界だ。

移り変わるカードプールは、常に戦略・戦術の変移を促す。
故に、思考に終わりが無い。

面倒だ。

本当に、面倒だ。

俺はただ、妹（梨桜）の所在を突き止めたいだけなのに。

それ以外の事物に興味は無い。意味が無い。
故に――思考の必要も無い。

俺がこうして生まれ変わっているということは、すなわち梨桜の転生の可能性も示唆している。
ならば、探さなければならない。捜さなければならない。
それが、ただ一つ。俺の存在理由（レゾンデートル）だ。

――故に、俺は「アレ」の存在を許さない。
――アレが俺だなどということがあってはならない。

あんな、梨桜のことを忘れ、のうのうと生きているような甘い男の存在を、許さない。

＋　＋　＋

さて。

この世界で生きていく上で、もう一つ重要な情報が存在する。

現実（リアル）と、仮想（バーチャル）だ。

通常、人間が生活を営んでいく場――現実（リアル）。

そして、第二の生活の場とも言うべき――仮想（バーチャル）。

あるいは、電脳空間（ネット）とも呼称しようか。

その精神＝情報を、0と1のデータに変換し、ネットへと没入（ダイブ）できる。

恐らくはそれが、元の世界との最大の相違だ。

「没入（ダイブ）」

コマンドを呟き、浮遊感に身を任せる。

この一連の流れにより、ネットへの没入が可能となる。

この時代に生まれた人間は、その殆どが脳髄に脳チップ（ブレイン）と呼ばれる有機ナノチップを埋め込まれている。これが存在することでネットと常時接続している状態となり、コマンドによって、各種の機能を扱うことができる。

ネットへの没入も、その機能の内の一つだ。

目の前に広がる景色が移り変わる。

魂の存在を容認するわけではないが――まるで、魂が０と１に分解されるかのような感覚。この世界で生まれた人間ならば慣れていて当然の工程（プロセス）。

１９年のうちに、俺も随分と慣れたものだった。

ネオ童実野シティの構造体に降り立つ。

本当にこれは電脳空間（ネット）なのか――そんな違和感を覚えるほどに、その感覚は現実と相違無い。

そもそも、人間の脳は電気信号・化学反応によって、世界を認識する。

その方向を変えてしまえば――いくらでも、人間の認識は変わる。

脳チップ（ブレイン）は、その方向性を変化させるものとも言えよう。

ネオ童実野シティに限らず、ほぼ全ての構造体は現実（リアル）と同期した時間を有する。朝ならば朝、夜ならば夜。黄昏時ならば、斜陽が見える。

現在の時刻は１９時。

故に、既に構造体の内部では月が昇っていた。現実との光景の差異が無ければ、そのままここが現実だと信じてしまいそうでもある。

現実（リアル）に戻りたくないなどとのたまう人間もいるという。昔でいうなら、ネット中毒――今もそれなりにそう呼称しはするが、どちらかと言えば、中毒者（ジャンキー）という呼び名が一般的だ。他の中毒患者と混ざっ

て分かりにくくはあるが。

さて、ネットに没入したからには、それ相応の理由がある。

単純な話、情報収集だ。

「転送（ムーブ）」

視界に現れる操作窓（ホロ・ウィンドウ）に指を乗せ、アドレスを打ち込む。

そして、コマンド。位置転送――転送（ムーブ）の機能だ。

没入と似た感覚を覚える。簡易没入と言ったところだろうか。データ化した精神を移動させるという意味合いで言うなら、似ているかもしれない。

ともあれ、転送機能は数秒も必要としない。これまでの都市的な構造体から、どこか退廃的な――寂れた裏路地へと、瞬時に景色が移り変わる。

「サテライト」構造体。

最悪の治安を誇ると言われる、ネオ童実野シティ最下層の人間の住む地をモデルとした構造体だ。現実の治安がそのまま持ち込まれるということは無いが、しかし、その独特の雰囲気はサテライトそのもの――と、そのように噂されている。アンダーグラウンド。あるいは深部。そんな呼称をされることもある。

リミッター制御下であることから、殺人が起きることは無いものの、軽犯罪程度はほぼ毎時間のように起きているとも言われる。

ともあれ、であるからこそ、そこに存在する情報は非常に多い。

選別には時間がかかるが――そこは、自分の足で確かめればいいだけだ。

あの男ならば、無駄に情報も持っている。

故に、わざわざサテライトの構造体まで出向いたわけだ、が――。

「……想像以上に早く見つかったか」

「げぇっ!?　た、タチバナ……」

どことなく軽薄な印象を受ける、アロハ&サングラスの男。

年齢は不詳。職業は――俺は、奴の「弱み」として握っているが、基本的には不詳。

唐沢杉郎（カラサワスギオ）。サテライト構造体で情報屋の真似事をしている男だ。

真似事とは言っても、その情報の精度は高く、評価も相応に高い。

俺も普段、この男に頼ることが多い、のだが――。

「何が『げぇっ』だ、唐沢。そろそろ情報を寄越せ。あれから四日

経ったんだ。何かしら情報はあるはずだろう」

「いやいやいやいや！　そんな無茶言っちゃいけねぇよ、旦那。たった四日だぞ！　無理難題にも程がある！」

「嘘を吐くな。お前なら二日でも十分だろう」

「おいおい、無茶苦茶言ってんねお前さん。それに、そもそも明確な依頼も無いのに情報を探せなんて……」

「何のためにお前に投資してやっていると思ってるんだ。御託はいいからさっさと情報を寄越せ」

この男との付き合いは存外に長い。出会ってから二年。それ以来、先行投資の名目で、この男へは金を渡している。元々の情報収集能力もさることながら、頼まれたことを断りきれないなど、善人気質である点、何より――金に正直な点が、組しやすいと考えたからだ。

金さえ積まれれば、ある程度の無茶でも請け負う。

そういう人間でないと、最低限信用には値しない。

の、だが。

「へ、へへ……流石に、今は持ってねえよ。どうしてもって言うんなら、もう少し上乗せして……」

強欲の度が過ぎれば、怒りも相応に増していくことを理解していないフシが、無いでもない。

「そうか」

操作窓（ホロ・ウィンドウ）を高速で操作、道具箱（ツールボックス）からデータの拳銃を取り出し、唐沢の額に突きつける。

――この世界の銃刀法は、元の世界のものよりも随分と緩い。

その点に関しては、サテライトの存在……あるいは、「マーカー付き」の人間の存在が大きい。

マーカー……犯罪者に捺される烙印のようなものだ。

再犯の危険性があるということで、特殊な発信機を体に装着された人間。

彼らは気性の荒い人間が多い。そういった人間からの「自己防衛のため」ということで、現実（リアル）であればショックガン――衝撃によって、相手を吹き飛ばす拳銃を。電脳空間（ネット）ならば、リミッター範囲内限定で実銃が、それぞれ使用許可されている。

当然、リミッターによって生命の危機が存在しない現状、その用途は主にセクハラなどのマナーに反する行為への戒めが主、だが――。

「おいいいいいい！！　ちょっ、おま、冗談でも人に拳銃向けてんじゃねえよ！！」

「死なないんだから問題あるまい。……出し惜しみをするな。さっさと言え、この不良警官」

「おまっ……ログ残るかもしれねぇんだぞ！？　って何で俺ァこんなこと心配してんの！？」

「自分で自分にツッコむな」

「脅されてる相手にツッコまれたよ俺ぇ！」

こいつはふざけているのか。いや、別段ふざけているわけではないのだろう。
これが唐沢のスタンスだ。妙なものだが。

「……で、リミッター影響下で俺死なないのに、何でお前さん拳銃出したの？」

「分からないのか？」

「分からないね」

「ハラスメント規定のせいで、弾丸を相手に叩き込めば痛みを感じる。そもそもリミッター影響下だろうとも、死にはしないだけで痛みはあるんだ。……死にはしないまでも、死ぬほど弾丸を叩き込む」

「やめてくださいすみませんお願いします実は情報隠してましたァァァァ！！」

やっぱり隠していたのか。
それはそれとしても、こういう手法は色々と手っ取り早いな。
脅しも今後の手段の一つに数えてみるか。

拳銃を道具箱へと戻し、データに還元する。

そのついでに、弾倉を見せつける。――空の弾倉を。
やれやれ、と唐沢は両手を挙げて見せた。どうやらまんまと騙されてくれたらしい。

「で、何だ」

「……俺、お前と出会ったことが今生の最悪の出来事だと思うんだが、実際どうよ？」

「観測している人間次第だろうよ」

「へいへい……で、だ。まぁた小っせぇ情報なんだけどな、お前さ

んを訪ねて来た人間がいるんだってことだ」

「俺を？」

そんな類稀な人間がいるものか。

仮に俺に対して何かしら用があるなら、ショートメールか何かで直接呼び出せばいいだけの話だ。そうでなくとも、わざわざサテライトの唐沢のところに訪問する意味が分からない。シティ構造体なら、最低限の安全は保障されているはずだ。

「人相は……まあ、なんつーか個性的だわ。ぶっちゃけた話、１０歳前後の女の子だしよ。お前さん、あんなのとどこで知り合ったんだ？」

「……俺の記憶が確かなら、そもそもそんな奴は知らん」

「おいおいマジかよ。見ず知らずの幼女に捜されてるってどんな幸運だ。俺にも分けろ！」

「分けることができたとしても分けてたまるか。それに、間違いなく厄介ごとが絡んでるぞ」

「あ、だったらいいわ。苦労なんざしたくねえし」

こいつの頭の中は一体どうなっているんだ。

「んで、それが何か重要なワケ？」

「知らん。他に何か聞いていないか？」

「断言しやがった。いや、別にいいんだけどよ……あ、そういやテキストデータ貰ってたわ」

「転送してくれ」

あいよ、と気の抜けたような返事を返し、唐沢からデータが送られてくる。

そこには簡潔に一文、「B.（バッド）A.D.エリア構造体」と記述されていた。

その後に続くいくつかのコードは、指定された位置のアドレスだろう。

幸いにして、俺の知る場所に近い。――が。

「……リミッター圏外じゃないか」

「え？　マジ？　何で幼女がンなとこ行くんだよ。何それ怖ぇーよ

幼女」

とにかく、これはB・A・D（バッド）エリア構造体に来い、という指示なのだろう。

リミッター圏外――要するに、生命保持のためのリミッターの効かないアンダーグラウンド、ということである。

サテライト住人でも、そう簡単には向かわない、それどころか、心の底から忌避し、踏み込むことをためらうほどのエリアだ。

「ああ、もしかして外見データだけ偽造・改造して、そう見せてるだけかもしんねーぜ？　そういうデータが販売されてるんなら密林で即ポチるけど」

「販売されてるわけがないだろ。犯罪だぞ」

「だったらチーターかよ？　うわぁ、あんな幼女が違法改造。うわぁ」

「見た目と中身が違うかもしれないと言ったのはお前じゃないのか。もしかすると男かもしれないんだぞ」

「それもそれで幻想が崩されたようで嫌じゃァ――――――！」

心底思う。唐沢は、心の赴くままに生きているのだろうと。
欲望がダダ漏れだ。

「ともかく、B.（バッド）A.D.エリアに行かないと何も始まらないだろうな」

「大丈夫かよ、お前さん。結構恨み買ってるだろ？」

「だとしても、わざわざB.（バッド）A.D.エリアまで来るような連中はいないだろ。ああいう連中は精々、リミッター範囲内でちまちまと嫌がらせをする程度だ」

「だとしても、なぁ……人間の恨みってやつぁ、意外と怖いぜ」

「それで殺されるようならその程度だったってことだろ」

「いのちをだいじに！」

ついさっきまで自分の身が危なかったというのに、今は他人の心配か。

まあ、それだけ善人気質だということなのかもしれない。
あるいは、取引相手がいなくなると、稼ぐべき時に稼げないと判断したのか。

「……そういや、何かうまい情報持ってねえ？」

「持ってないこともないが……何だ、お前ですら不足があるのか？」

「そういうこった。最近どうもシケててよぉ。聞いても聞いても有益なモンがねえっての。今回の不調もそれが原因だっつーの。アレ、誰だっけ、雑賀？　奴が出張ってくることもあるし、もう正直うんざりだわ」

雑賀――確か、裏社会の何でも屋、だったか。

セキュリティのシステムすらも容易にハッキング、あるいはクラックできると聞いたが。

「まあ、それはそれだ。で、どんなの知ってんだよ？」

「ああ……確か、現職の国会議員――乃木と田崎、だったか。奴らの汚職の証拠だ。違法献金、収賄……ある程度なら何でも揃ってる」

「うおっ……こりゃまた大物を引き上げたな、お前さん。特に、乃木って次期総理だろ？」

「だとしても、事実は事実だ。案外、その立場も金で買ったんじゃないか？」

話を進めつつ、唐沢へとデータを転送する。
画像、映像、テキストデータ。全てを転送し終わったところで、うおっ、と唐沢が呟きを漏らした。

「あーあーあー。こりゃ酷ぇ。……お前さん、流石はトップス――」

「それ以上余計なことを言おうとするなよ、唐沢。お前を地方に飛ばすことくらいは簡単だ」

「……オーケー、オーケー。今後とも良い付き合い方をしていこうじゃないか。これでさっきのお前さんの発言とチャラってことでどうだ？」

「……ああ、そうだな」

互いに、行動に制限が出やすい立場だということは、十分に知っていた。
だからこそ、それなりに境界線というものを敷く必要がある。
互いの身辺、立場を口に出さない――これが、自然と設けられていたルールだった。

「あー……そういえば知ってるか？」

「何をだ」

「最近、B.A.D.（バッド）エリア構造体の周辺で、不審な脳死（フラットライン）が頻出してる」

――――脳死（フラットライン）。

電脳世界における「死」。リミッター圏外で電子体――ネットにおける肉体が死亡することにより、
リアルの肉体までもが死亡するという現象を言う。
B.A.D.（バッド）エリア周辺なら何かあってもおかしくはないが、
頻出とまで言えるものとなると――。

「……不審？」

「ああ、そうだ。ここまでに十七件。これが、ここ一か月で起きた全ての事件――全て、不審死だ。殴られたわけでも、撃たれたわけでも、ましてや斬られても、刺されてもいない。絞められたわけでもないらしい。外傷が一切ないんだ。不思議だろ？」

「それだけなら、何か別の理由がありそうなものだが。リアルで異常、とかな」

「ところがそうもいかねえ。本来、リアルの肉体に異常があれば、まず脳チップ（ブレイン）がそれを判断して強制離脱（アボート）させる。ショック死なんてのはそもそも、血圧低下によって引き起こされる事態だ。だったら、まず電子体が強制離脱（アボート）されて死体は残らない」

「事実上不可能な犯行……か」

電子体＝精神が「死」んだとしても、その死体はその空間に残り続ける。

これを消去するには、回線を切断し、誰かが外部から強制離脱（アボート）させなければならない。

しかし、現実（リアル）での肉体に異常が発生した場合、電子体は強制的に離脱（ログアウト）させられる。

外傷が一切存在せず、その場に残り続ける電子体――ホラーと言えばホラーだ。

「そういうわけだから気ぃつけてくれや。お得意様がいなくなるのは俺も困る」

「そうだな、気を付けよう。……しかし、唐沢。何故この情報を流した？」

「あン？　んーなの当然よ。さっきも言ったろ、お得意様がいなくなるのが困るってよ。ついでに、情報のお釣りってやつさね。釣り

合わねえだろ、あれだと」

「どっちにしても感謝する。何かあれば、改めて連絡させてもらおう」

「おうよ、それじゃあまたな」

お試し版（後書き）

そういうことで、お試し版でした。

恐らく「おい、デュエルしろよ」と言われること覚悟で書いていました。
後悔はありませんが色々と反省はしています。ただしもう戻らない。
もう何も怖くない（

この時点で、1話のだいたい4割といったところです。
色々と超展開があった後でデュエルします。もちろんデュエルです。
いつものことです。

今作ではエクシーズが登場しますが、アカデミア編では一切登場予定はありません。その辺は時代の差と認識してください。
ちなみに、デュエルはリアルとネットでそれぞれ制約を設けております。
そのあたりは一種のギャグと思っていただければ。

主人公は相変わらずのあの男です。ただし別ルートなので性格は変わっています。
本編のｉｆとも言えますが、そのあたりは皆様次第です。
観測する人間がどう思うかといいますか。その辺はこちらでも触れ

ることになるかもしれません。

ちなみに、アカデミア編が終われば、アカデミア編のキャラがこちらに登場する可能性があります。
そのあたりは色々と後にご説明の方させていただきますが。

ともあれ、お試し版ですのでこのあたりで失礼させていただきます。
それでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6445r/

遊戯王AltererChord/AzygousCircle

2011年11月14日21時59分発行